

追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書

第145集

二〇一五・一二

高知県教育委員会・高知市教育委員会  
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

OO TE SUJI  
追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書



2015.12

高知県教育委員会・高知市教育委員会  
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

# 追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書

2015.12

高知県教育委員会・高知市教育委員会  
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





## 序

追手筋遺跡は高知城跡を望む高知城下町の遺跡で、上中級武士の居住地に当たります。調査地は高知城跡の追手門より東に伸びる追手筋に面し、著名な家老の屋敷が並ぶ場所であり、江戸時代には城下町の中心を担っていました。また、明治時代から今日までは百年以上もの長い間、小学校として機能しており、多くの卒業生の思い出の地でもあります。

今回の調査は高知県と高知市の合同による新図書館等複合施設の建設に伴うもので、新たな地域を支える情報拠点として期待されています。また、調査では江戸時代の上水施設や全国的にも数少ない武家屋敷に伴う池跡などが確認され、高知城下町の歴史を解明していく上で非常に重要な資料が得られています。この成果により多くの方が埋蔵文化財に関心を持たれ、文化振興と共に地域の発展の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事してくださった作業員の皆様、また、調査にあたって多大にご協力頂きました地域の皆様方、関係者の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成27年12月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 松田 直則



## 例言

1. 本書は高知県高知市追手筋二丁目に所在する追手筋遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は高知県と高知市が共同で実施する新図書館等複合施設建設に伴うもので、高知県教育委員会より公益財団法人高知県文化財団が委託を受け実施した。
3. 調査面積は3,600㎡（延べ面積9,119㎡）で、調査期間は平成25年8月5日から平成26年2月6日までであった。
4. 調査地は高知市の所有地である。
5. 発掘調査・整理作業の体制は以下の通りである。

平成25年度

- 総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長：森田尚宏
- 総務：同次長：宮田謙輔，同総務課長：野田美智子
- 調査総括：同調査課長：廣田佳久
- 調査担当：同調査第1班主任調査員：徳平涼子，同調査第1班調査員：菊池直樹，畠中宏文，同調査補助員：大賀幸子，大原直美，矢野雅子
- 事務補助員：小八木美佐子，渡辺佳奈

平成26年度

- 総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長：森田尚宏
- 総務：同次長兼調査課長：松田直則，同総務課長：野田美智子
- 調査総括：同次長兼調査課長：松田直則
- 調査担当：同調査第1班主任調査員：徳平涼子 同調査補助員：大原直美
- 事務補助員：谷幸絵

平成27年度

- 総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長：松田直則
- 総務：同次長兼総務課長：東勝彦，同総務係長：吉森和子
- 調査総括：同調査課長兼調査第1班長：吉成承三
- 調査担当：同調査第3班主任調査員：徳平涼子
- 事務補助員：奥宮千恵子

6. 整理作業には以下の諸氏が従事した。

平成25年度

澤田美弥，島田寧子，西内恵子，渡辺佳奈

平成26年度

岩貞泰代，岡宗真紀，黒石和加，松田克純，横山めぐみ，若江紗映

平成27年度

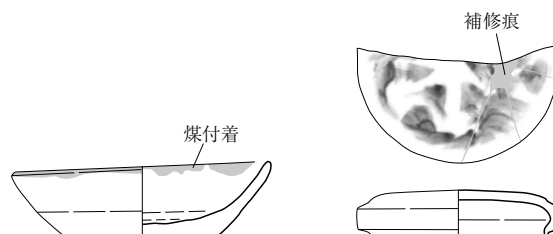
岡宗真紀

7. 本書の執筆は徳平涼子，パリノ・サーヴェイ株式会社，土佐市教育委員会池田研，編集は徳平涼子が行った。

8. 本書に掲載した現場写真は徳平，菊池，畠中，遺物写真は徳平が撮影した。
9. 調査にあたっては高知県，高知県教育委員会，高知市，高知市教育委員会をはじめとする関係機関の方々のご協力とご指導，助言を得た。また，地元住民の方々からは遺跡に対するご理解・ご協力を賜った。
10. 報告書を作成するにあたり，下記の方々からご教示を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略)  
池田研，岡本桂典，韓盛旭，古賀康士，高橋史朗，徳永貞紹，浜田恵子，横山和弘，高知県埋蔵文化財センター諸氏
11. 木製品の保存処理を(公財)大阪市博物館協会大阪文化財協会，自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社，貝・動物遺体分析を土佐市教育委員会池田研氏，近世陶磁器の鑑定を九州陶磁文化館，木簡解読を山内家宝物資料館に実施して頂いた。
12. 出土遺物には「13-2KO」と注記している。

#### 凡例

1. 遺構についてはSB(掘立柱建物跡)，SA(柵・塀跡)，SK(土坑)，SD(溝跡)，SE(井戸跡)，SG(池跡)，SX(性格不詳大型土坑)，P(ピット)等の略号を使用した。
2. 遺構番号については1面の遺構を101から，2面の遺構を201から，3面の遺構を301から，4面の遺構を401から，5面の遺構を501からとし，A-1区，A-2区，B-1区，B-2区の順で各面ごとに通し番号としており，調査時の番号とは異なっている。
3. 遺構挿図の縮尺はそれぞれに掲載しており，方位Nは世界測地系によるGNである。
4. 遺物番号については遺構外出土遺物を1~211，A-1区・A-2区出土遺物を1001~1507，B-1区・B-2区出土遺物を2001~3161とした。
5. 遺物挿図の縮尺は1/3を基本とし，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。
6. 遺物実測図のグレーの塗りは煤の付着範囲または補修痕を示している。



# 本文目次

第I章 序章	
1. 調査の経緯と経過	1
2. 確認調査	1
3. 調査の概要	2
4. 調査の方法	3
5. 調査日誌抄	4
第II章 追手筋遺跡の環境	
1. 地理的環境	9
2. 歴史的環境	9
3. 文献からみた追手筋遺跡	11
4. 江戸時代以降の追手筋遺跡	13
第III章 調査の成果	
1. 層序	15
2. 堆積層出土遺物	18
3. 遺構と遺物	44
(1) A-1区	44
(2) A-2区	114
(3) B-1区	120
(4) B-2区	294
第IV章 まとめ	
1. 居住者について	313
2. 遺構について	316
3. 池跡について	319
4. 陶磁器について	320
5. 木簡について	322
付編1 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析(バリノ・サーヴェイ株式会社)	325
付編2 追手筋遺跡出土の動物遺存体(池田 研)	341
付編3 追手筋遺跡における樹種同定(古環境研究所・環境考古研究会 一部改変)	351
遺物観察表	359
写真図版	447

## 挿図目次

図 1	高知城下町位置図	1	図30	B区・B-1区第Ⅲ-3・4層出土遺物実図	40
図 2	確認調査位置図(S=1/1,500)	2	図31	B-2区第Ⅲ-1層出土遺物実測図	41
図 3	確認調査出土遺物	2	図32	B-2区第Ⅲ-2層出土遺物実測図	42
図 4	追手筋遺跡位置図(S=1/25,000)	3	図33	B-2区第Ⅲ-3・4層, 第Ⅳ層出土遺物 実測図	43
図 5	グリッド及び調査区設定図(S=1/1,000)	3	図34	A-1区位置図	44
図 6	周辺の遺跡位置図(S=1/50,000)	10	図35	SB-201	44
図 7	絵図にみえる追手筋遺跡	12	図36	SA-201	45
図 8	第三尋常小学校	13	図37	SA-202	45
図 9	調査区位置図	15	図38	SA-203	45
図10	A区セクション図(S=1/80)	16	図39	SA-201出土遺物実測図	45
図11	B区セクション図(S=1/80)	17	図40	SD-201・301	46
図12	第Ⅰ層出土遺物実測図	19	図41	SD-201上層出土遺物実測図1	48
図13	第Ⅱ層出土遺物実測図1	20	図42	SD-201上層出土遺物実測図2	49
図14	第Ⅱ層出土遺物実測図2	21	図43	SD-201上層出土遺物実測図3	51
図15	第Ⅱ層出土遺物実測図3	22	図44	SD-201上層出土遺物実測図4	52
図16	第Ⅱ層出土遺物実測図4	24	図45	SD-201上層出土遺物実測図5	53
図17	第Ⅱ層出土遺物実測図5	25	図46	SD-201上層出土遺物実測図6	54
図18	第Ⅱ層出土遺物実測図6	26	図47	SD-201上層出土遺物実測図7	56
図19	第Ⅱ層出土遺物実測図7	27	図48	SD-201下層出土遺物実測図1	57
図20	A-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測図1	28	図49	SD-201下層出土遺物実測図2	58
図21	A-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測図2	29	図50	SD-201下層出土遺物実測図3	59
図22	A-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測図	30	図51	SD-202~204出土遺物実測図	60
図23	A-1区第Ⅲ-2層・A-2区第Ⅲ-3層 出土遺物実測図	31	図52	SD-205出土遺物実測図	61
図24	B区・B-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測 図1	32	図53	SG-201	62
図25	B区・B-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測 図2	33	図54	SG-201出土遺物実測図	63
図26	B-1区第Ⅲ-1-1層出土遺物実測図	35	図55	SX-201	64
図27	B区・B-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測 図1	37	図56	SX-201上層出土遺物実測図	65
図28	B区・B-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測 図2	38	図57	SX-201中・下層出土遺物実測図	66
図29	B区・B-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測 図3	39	図58	SX-201下層出土遺物実測図1	67
			図59	SX-201下層出土遺物実測図2	68
			図60	SX-202出土遺物実測図	69
			図61	SX-203出土遺物実測図	70
			図62	SX-206, P-201~204出土遺物実測図	72

図63	SK - 301 ~ 303出土遺物実測図	73	図97	SK - 505出土遺物実測図4	102
図64	SD - 301出土遺物実測図1	74	図98	SD - 501・503出土遺物実測図	104
図65	SD - 301出土遺物実測図2	75	図99	SX - 501	106
図66	SX - 301	76	図100	SX - 501出土遺物実測図1	107
図67	SX - 301出土遺物実測図1	77	図101	SX - 501出土遺物実測図2	108
図68	SX - 301出土遺物実測図2	78	図102	SX - 501出土遺物実測図3	109
図69	SX - 301出土遺物実測図3	79	図103	SX - 502・503出土遺物実測図	109
図70	SX - 302セクション図及び出土遺物実測図	80	図104	SX - 504	110
図71	SK - 401	80	図105	SX - 504出土遺物実測図1	111
図72	SK - 401・403出土遺物実測図	81	図106	SX - 504出土遺物実測図2	112
図73	SK - 407・408	81	図107	SX - 504出土遺物実測図3	113
図74	SK - 405 ~ 407・409・410出土遺物実測図	82	図108	P - 501出土遺物実測図	113
図75	SK - 411・412・414・415出土遺物実測図	83	図109	A - 2区位置図	114
図76	SK - 416	84	図110	P - 101出土遺物実測図	114
図77	SK - 416・417・420出土遺物実測図	85	図111	SG - 202	115
図78	SD - 401	85	図112	SG - 202出土遺物実測図	116
図79	SD - 401出土遺物実測図	86	図113	SK - 305	117
図80	SD - 402・403出土遺物実測図	87	図114	P - 301出土遺物実測図	117
図81	SE - 401	88	図115	SB - 401	118
図82	SX - 401・402出土遺物実測図	88	図116	SB - 401出土遺物実測図	118
図83	SX - 403出土遺物実測図	89	図117	SB - 402	118
図84	SX - 404・405出土遺物実測図	91	図118	SG - 401出土遺物実測図	119
図85	SX - 405出土遺物実測図	92	図119	P - 405出土遺物実測図	120
図86	SX - 406	93	図120	B - 1区位置図	120
図87	SX - 406出土遺物実測図	94	図121	SB - 202	120
図88	P - 401 ~ 404出土遺物実測図	94	図122	SB - 203	121
図89	SB - 501	95	図123	SB - 204	121
図90	SB - 502, SD - 501	95	図124	SK - 203 ~ 205出土遺物実測図	122
図91	SB - 501・502, SK - 501・502出土遺物実測図	96	図125	SK - 211	123
図92	SK - 503・504出土遺物実測図	97	図126	SK - 212	123
図93	SK - 505	98	図127	SK - 211・212出土遺物実測図	124
図94	SK - 505出土遺物実測図1	99	図128	SK - 215	125
図95	SK - 505出土遺物実測図2	100	図129	SK - 215・216・218 ~ 220出土遺物実測図	126
図96	SK - 505出土遺物実測図3	101	図130	SK - 221	127
			図131	SK - 222	127
			図132	SK - 221・222出土遺物実測図	128
			図133	SK - 223 ~ 225出土遺物実測図	129



図134	SK - 227・228出土遺物実測図	130	図169	SK - 309, SD - 303	159
図135	SK - 230	131	図170	SK - 309出土遺物実測図	160
図136	SK - 232	131	図171	SK - 311・312出土遺物実測図	161
図137	SK - 231・232出土遺物実測図	132	図172	SK - 313～316出土遺物実測図	162
図138	SK - 236, SD - 315	134	図173	SK - 317	162
図139	SK - 235・236・238・239出土遺物 実測図	134	図174	SK - 317・318出土遺物実測図	163
図140	SD - 208	135	図175	SK - 321出土遺物実測図	164
図141	SD - 210, SX - 323	135	図176	SK - 322～324出土遺物実測図	165
図142	SD - 208・212出土遺物実測図	136	図177	SK - 325・326出土遺物実測図	166
図143	SD - 211	136	図178	SK - 327出土遺物実測図	167
図144	SD - 213・214	136	図179	SK - 328・329出土遺物実測図	168
図145	SD - 213平面・立面図	137	図180	SK - 329	169
図146	SD - 213・214出土遺物実測図	137	図181	SK - 330	169
図147	SD - 215	138	図182	SK - 330出土遺物実測図	170
図148	SD - 215上層出土遺物実測図1	139	図183	SK - 331	171
図149	SD - 215上層出土遺物実測図2	140	図184	SK - 333	171
図150	SD - 215上層出土遺物実測図3	142	図185	SK - 331・332出土遺物実測図	172
図151	SD - 215中層出土遺物実測図1	143	図186	SK - 333出土遺物実測図	173
図152	SD - 215中層出土遺物実測図2	144	図187	SK - 334	174
図153	SD - 215中層出土遺物実測図3	145	図188	SK - 335, P - 324	174
図154	SD - 215下層出土遺物実測図1	146	図189	SK - 334・335出土遺物実測図	175
図155	SD - 215下層出土遺物実測図2	147	図190	SK - 336～339出土遺物実測図	176
図156	SE - 201	149	図191	SK - 340～342出土遺物実測図	178
図157	SE - 202	149	図192	SD - 302～304・306・310出土 遺物実測図	179
図158	SX - 209・210	149	図193	SD - 305	180
図159	SE - 202, SX - 207・208, P - 205 ～207出土遺物実測図	150	図194	SD - 306	180
図160	SX - 211	151	図195	SD - 307	180
図161	SX - 212	151	図196	SD - 310	181
図162	SX - 213	152	図197	SD - 311	181
図163	P - 208～217出土遺物実測図	153	図198	SD - 312	181
図164	P - 218～223出土遺物実測図	155	図199	SE - 301	181
図165	P - 224～227出土遺物実測図	156	図200	SE - 302	182
図166	SB - 301	157	図201	SE - 303	182
図167	SA - 301	158	図202	SG - 301, SX - 310	182
図168	SA - 301, SK - 306～308出土遺物 実測図	159	図203	SE - 303, SG - 301出土遺物実測図	183
			図204	SX - 304	184

図205	SX - 304出土遺物実測図1	185	図242	SK - 454	220
図206	SX - 304出土遺物実測図2	186	図243	SK - 454出土遺物実測図1	221
図207	SX - 305・306出土遺物実測図	187	図244	SK - 454出土遺物実測図2	222
図208	SX - 307	188	図245	SK - 455	222
図209	SX - 307・308出土遺物実測図	189	図246	SK - 455～461出土遺物実測図	223
図210	SX - 309	190	図247	SD - 404出土遺物実測図	224
図211	SX - 309出土遺物実測図1	191	図248	SD - 406	225
図212	SX - 309出土遺物実測図2	192	図249	SD - 406出土遺物実測図	226
図213	SX - 310・311出土遺物実測図	193	図250	SD - 410	227
図214	SX - 312出土遺物実測図	194	図251	SD - 409～411出土遺物実測図	228
図215	SX - 314	195	図252	SD - 412	229
図216	SX - 314出土遺物実測図	196	図253	SD - 412出土遺物実測図	230
図217	SX - 315出土遺物実測図	197	図254	SD - 413出土遺物実測図	231
図218	SX - 316～319出土遺物実測図	198	図255	SD - 414・504	232
図219	SX - 323出土遺物実測図	199	図256	SD - 414出土遺物実測図	232
図220	SX - 324出土遺物実測図	200	図257	SD - 416, SX - 319・320	233
図221	P - 302～311出土遺物実測図	201	図258	SD - 417	233
図222	P - 312～319出土遺物実測図	203	図259	SD - 420	233
図223	P - 320・321出土遺物実測図	204	図260	SD - 417・422出土遺物実測図	234
図224	P - 322～324出土遺物実測図	205	図261	SD - 423	234
図225	SB - 403	206	図262	SD - 423出土遺物実測図1	235
図226	SB - 403, SK - 425・426出土遺物 実測図	207	図263	SD - 423出土遺物実測図2	236
図227	SK - 427・428出土遺物実測図	208	図264	SD - 424	237
図228	SK - 429	209	図265	SD - 425	237
図229	SK - 430	209	図266	SD - 424・425出土遺物実測図	238
図230	SK - 429出土遺物実測図	210	図267	SG - 402出土遺物実測図1	241
図231	SK - 430～432出土遺物実測図	211	図268	SG - 402出土遺物実測図2	242
図232	SK - 433	212	図269	SG - 402出土遺物実測図3	244
図233	SK - 434	213	図270	SG - 402出土遺物実測図4	245
図234	SK - 435	213	図271	SG - 402出土遺物実測図5	246
図235	SK - 433～436出土遺物実測図	214	図272	SG - 402出土遺物実測図6	247
図236	SK - 437～439出土遺物実測図	215	図273	SG - 402出土遺物実測図7	248
図237	SK - 445	217	図274	SG - 402出土遺物実測図8	250
図238	SK - 444～446出土遺物実測図	217	図275	SG - 402出土遺物実測図9	251
図239	SK - 447・448出土遺物実測図	218	図276	SG - 402出土遺物実測図10	252
図240	SK - 449・450出土遺物実測図	219	図277	SG - 402出土遺物実測図11	253
図241	SK - 452出土遺物実測図	219	図278	SG - 402出土遺物実測図12	254
			図279	SX - 408	255

図280	SX - 408出土遺物実測図	256	図313	SE - 501	289
図281	SX - 409	257	図314	P - 502～505出土遺物実測図	290
図282	SX - 409出土遺物実測図	257	図315	P - 506～508出土遺物実測図	292
図283	SX - 410出土遺物実測図	258	図316	その他近代遺構出土遺物実測図	293
図284	SX - 411	258	図317	B - 2区位置図	294
図285	SX - 411出土遺物実測図	259	図318	SK - 346～348出土遺物実測図	294
図286	SX - 412出土遺物実測図	260	図319	SK - 347	295
図287	SX - 414出土遺物実測図1	262	図320	SD - 315	296
図288	SX - 414出土遺物実測図2	263	図321	SD - 315～317	296
図289	SX - 414出土遺物実測図3	264	図322	SD - 315出土遺物実測図	297
図290	SX - 415	264	図323	SD - 315～317出土遺物実測図	298
図291	SX - 415出土遺物実測図1	265	図324	SX - 325出土遺物実測図	299
図292	SX - 415出土遺物実測図2	266	図325	SX - 326	299
図293	SX - 415出土遺物実測図3	267	図326	SX - 326出土遺物実測図	300
図294	SX - 416	267	図327	SX - 327・328, P - 325出土遺物 実測図	301
図295	SX - 416出土遺物実測図	268	図328	SK - 462	302
図296	SX - 417出土遺物実測図	269	図329	SK - 462・463出土遺物実測図	302
図297	SX - 418	270	図330	SD - 426・427	303
図298	SX - 418出土遺物実測図	271	図331	SD - 426・427出土遺物実測図	303
図299	P - 406～408出土遺物実測図	272	図332	SD - 428	304
図300	P - 409～412出土遺物実測図	273	図333	SD - 428～431出土遺物実測図	305
図301	P - 413～417出土遺物実測図	274	図334	SD - 432出土遺物実測図	306
図302	P - 418～423出土遺物実測図	276	図335	SD - 433・434出土遺物実測図	307
図303	P - 424～426出土遺物実測図	277	図336	SD - 435遺物出土状態	307
図304	SK - 506～508出土遺物実測図	279	図337	SD - 435出土遺物実測図	308
図305	SK - 509出土遺物実測図	280	図338	SD - 436	308
図306	SK - 510出土遺物実測図1	281	図339	SD - 436・437出土遺物実測図	309
図307	SK - 510出土遺物実測図2	282	図340	SX - 419・421・422出土遺物実測図	310
図308	SK - 511～513出土遺物実測図	283			
図309	SK - 514・515出土遺物実測図	284	図341	P - 427～432出土遺物実測図	312
図310	SK - 516出土遺物実測図	285	図342	集水桶位置図	318
図311	SD - 504・505・507出土遺物実測図	287	図343	集水桶復元図	319
図312	SD - 507	288			

## 写真図版目次

- 図版 1 調査前全景(東より), B区中央部南壁セクション(北より)
- 図版 2 B-1区北壁セクション(南より), B-1区中央部北壁セクション(南東より)
- 図版 3 A-1区中央部セクション(南より), A-1区南壁セクション(北より)
- 図版 4 A-1区西壁セクション(東より), A-2区北壁セクション(南より)
- 図版 5 A-1・B区2面遺構完掘状態(南西より), A-1区2面南西部遺構完掘状態(南西より)
- 図版 6 A-1区SB-201完掘状態(南より), A-1区SB-201, SA-201~203完掘状態(北より)
- 図版 7 A-1区SD-201セクション(南より), A-1区SD-205完掘状態(西上空より)
- 図版 8 A-1区SD-205完掘状態(北より), A-1区SG-201完掘状態(西上空より)
- 図版 9 A-1区SG-201完掘状態(北西より), A-1区SG-201完掘状態(北東上空より)
- 図版10 A-1区SG-201完掘状態(南西より), A-1区SG-201西部完掘状態(北西より)
- 図版11 A-1区SG-201州浜検出状態(南より), A-1区SG-201南部石積検出状態(北より)
- 図版12 A-1区SG-201セクション(西より), A-1区SX-201中央セクション(北西より)
- 図版13 A-1区SX-201遺物出土状態(北東より), A-1区SX-301遺物出土状態(北東より)
- 図版14 A-1区4面遺構検出状態(南より), A-1区SD-401石列検出状態(南より)
- 図版15 A-1区SE-401半裁状態(南より), A-1区SB-501検出状態(西より)
- 図版16 A-1区SB-501検出状態(東より), A-1区SD-501完掘状態(北より)
- 図版17 A-1区SD-501基礎検出状態(北より), A-1区SD-501セクション(南より)
- 図版18 A-2区2面遺構完掘状態(東より), A-2区SG-202西部石積検出状態(東より)
- 図版19 A-2区SG-202石積改修部検出状態(南より), A-2区4面遺構完掘状態(東より)
- 図版20 A-2区SB-401完掘状態(東より), B-1区2面南東部遺構完掘状態(西より)
- 図版21 B-1区SK-222集水桶完掘状態(西より), B-1区SK-222集水桶と竹樋検出状態(南西より)
- 図版22 B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(東より), B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(東より)
- 図版23 B-1区SK-232完掘状態(南西より), B-1区SK-232集水桶継手(2036)検出状態(南より)
- 図版24 B-1区SK-232集水桶継手(2037)完掘状態(南より), B-1区SK-232桶側出土状態(南より)
- 図版25 B-1区SD-213~215完掘状態(西より), B-1区SD-213・214セクション(西より)
- 図版26 B-1区SD-215完掘状態(東より), B-1区SD-215完掘状態(東より)
- 図版27 B-1区SD-215完掘状態(西より), B-1区SD-215東部セクション(西より)
- 図版28 B-1区SD-215西部セクション(東より), B-1区SD-215杭列検出状態(北東より)
- 図版29 B-1区SE-201桶検出状態(北西より), B-1区SE-202完掘状態(西より)
- 図版30 B区SX-213検出状態(北より), B-1区3面北部遺構検出状態(西より)
- 図版31 B-1区3面北部遺構完掘状態(西より), B-1区3面北部遺構完掘状態(南東より)
- 図版32 B区3面南東部遺構検出状態(北西より), B区3面南東部遺構完掘状態(西より)
- 図版33 B-1区3面遺構検出状態(東より), B区3面遺構完掘状態(東より)
- 図版34 B-1区SB-403完掘状態(南より), B-1区SE-301半裁状態(南より)
- 図版35 B-1区SE-302石組検出状態(南東より), B-1区SE-302半裁状態(南より)

- 図版36 B-1区SE-303石組検出状態(北より), B-1区SG-301完掘状態(南より)
- 図版37 B-1区SG-301完掘状態(北より), B-1区SX-307・308完掘状態(西より)
- 図版38 B-1区SX-307・308完掘状態(南より), B区4面中央部遺構検出状態(南より)
- 図版39 B区4面東部遺構検出状態(東より), B区4面南東部遺構完掘状態(西より)
- 図版40 B-1区4面北部遺構検出状態(西より), B-1区4面南東部遺構検出状態(西より)
- 図版41 B-1区4面北部遺構検出状態(南東より), B-1区4面北部遺構完掘状態(南東より)
- 図版42 B-1区SD-406完掘状態(南西より), B-1区SD-410, SG-402完掘状態(西上空より)
- 図版43 B-1区SD-410完掘状態(北より), B-1区SD-410石積検出状態(南西より)
- 図版44 B-1区SD-410, SG-402結合部完掘状態(東より), B-1区SD-412完掘状態(西上空より)
- 図版45 B-1区SG-402完掘状態(東より), B-1区SG-402完掘状態(南東より)
- 図版46 B-1区SG-402西部石積検出状態(西上空より), B-1区SG-402西部石積検出状態(南より)
- 図版47 B-1区SG-402西部石積検出状態(南東より), B-1区SG-402北西部石積検出状態(南東より)
- 図版48 B-1区SG-402北西部石積検出状態(南より), B-1区SG-402北西部石積検出状態(東より)
- 図版49 B-1区SG-402北東部石積検出状態(西より), B-1区SG-402杭跡検出状態(南西より)
- 図版50 B-1区SD-412, SG-402結合部検出状態(西より), B-1区SD-412, SG-402結合部完掘状態(南西より)
- 図版51 B-1区SG-402南部石積検出状態(北より), B-1区SG-402南部石積検出状態(東より)
- 図版52 B-1区SX-409完掘状態(東より), B-1区SX-414・415木材出土状態(東より)
- 図版53 B-1区SX-414木堀出土状態(南より), B区SD-506完掘状態(北東より)
- 図版54 B-2区SD-315~317・507完掘状態(東より), B-2区SD-315・436・507完掘状態(北西より)
- 図版55 A-1区木製品漆器椀(78)出土状態(第Ⅱ層より), A-1区磁器皿(94)出土状態(第Ⅲ-2層より), A-1区SA-201石製品石幢(1001)出土状態, A-1区SD-201磁器大皿(1063)と下駄出土状態, A-1区SD-201木製品漆器椀(1087)出土状態, A-1区SD-201木製品漆器蓋(1089)出土状態, A-1区SD-201木製品木筒(1133)出土状態, A-1区SD-201木製品漆器椀出土状態
- 図版56 A-1区SD-201土師質土器皿出土状態, A-1区SD-204木製品調度品(1148)出土状態, A-1区SD-205 セクション(北より), A-1区SX-201東部セクション(西より), A-1区SX-201西部セクション(西より), A-1区SX-201陶器皿(1190), 下駄出土状態, A-1区SX-201陶器播鉢(1196)出土状態, A-1区SX-201木製品漆器椀(1208)出土状態
- 図版57 A-1区SK-301磁器碗(1235)・猪口(1236)出土状態, A-1区SD-301木製品曲物出土状態, A-1区SX-301 セクション(南より), A-1区SX-301木製品蓋(1275)出土状態, A-1区SX-301土師質土器皿出土状態, A-1区SX-301木製品籠出土状態, A-1区SK-407・408セクション(東より), A-1区SK-416セクション(東より)
- 図版58 A-1区SK-416遺物(1300・1301・1303)出土状態, A-1区SD-401北部セクション(南より), A-1区SE-401桶側出土状態(北より), A-1区SX-403木製品木筒(1343)出土状態, A-1区SX-403木製品曲物出土状態, A-1区SX-405漆器椀(1371)出土状態, A-1区SX-406木製品枡出土状態, A-1区SX-504遺物出土状態(北より)
- 図版59 A-1区SK-505磁器大皿(1410)ほか出土状態, A-1区近代ピット石出土状態(南より), A

- 2区SG-401完掘状態(南より), A-2区SG-401セクション(北より), A-2区SG-401陶器皿(1503)出土状態, A-2区ピット土師質土器皿出土状態, B-1区SK-210柱根・礎板検出状態(南東より), B-1区SK-210柱根検出状態(南より)
- 図版60 B-1区SK-211セクション(東より), B-1区SK-212セクション(南より), B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(南より), B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(南より), B-1区SK-222陶器皿(2022)出土状態, B-1区SK-222継手(2023)出土状態(南西より), B-1区SK-227~229, SX-212完掘状態(北より), B-1区SK-227陶器皿(2030)出土状態
- 図版61 B-1区SK-232掘方完掘状態(西より), B-1区SK-232桶出土状態(南西より), B-1区SK-232桶側出土状態(南より), B-1区SK-232継手(2038)出土状態(南より), B-1区SK-232継手(2036)出土状態(南より), B-1区SD-208セクション(西より), B-1区SD-210セクション(南より), B-1区SD-210継手出土状態(南より)
- 図版62 B-1区SD-213土師質土器小皿出土状態, B-1区SD-215木製品木簡(2111)出土状態, B-1区SD-215木製品木簡(2113)出土状態, B-1区SD-215磁器大皿(2129)出土状態, B-1区SD-215木製品木簡(2139)出土状態, B-1区SD-215陶器甕(2070)出土状態, B-1区SD-215木製品曲物出土状態, B-1区SD-215漆器椀出土状態
- 図版63 B-1区SD-215木製品漆器椀出土状態, B-1区SD-215木製品籠出土状態, B-1区SD-215縄出土状態, B-1区SX-209・210セクション(南より), B-1区SX-213木製品下駄(2146)出土状態, B-1区P-206土師質土器皿(2152・2153)出土状態, B-1区P-211継手と竹樋検出状態(南東より), B-1区P-211継手(2158)出土状態
- 図版64 B-1区P-216木製品櫛(2163)出土状態, B-1区P-223陶器皿(2170・2171)出土状態, B-1区P-223土師質土器皿(2172・2173)出土状態, B-1区SK-309セクション(南より), B-1区SK-327セクション(西より), B-1区SK-330完掘状態(東より), B-1区SK-330セクション(西より), B-1区SK-330陶器碗, 曲物蓋(2259)出土状態
- 図版65 B-1区SK-330木製品曲物出土状態, B-1区SK-331セクション(東より), B-1区SK-332陶器大皿(2270)出土状態, B-1区SK-339木製品木簡(2310)出土状態, B-1区SK-341完掘状態(北より), B-1区SD-304セクション(南より), B-1区SD-305セクション(南より), B-1区SD-307蓆出土状態
- 図版66 B-1区SD-309セクション(南より), B-1区SD-310セクション(南より), B-1区SG-301セクション(東より), B-1区SG-301, SX-310セクション(西より), B-1区SX-304セクション(東より), B-1区SE-301桶側検出状態(北より), B-1区SX-309セクション(西より), B-1区SX-309木製品木簡(2389)出土状態
- 図版67 B-1区SX-314セクション(西より), B-1区SX-314陶器甕(2402)出土状態, B-1区SX-317土師質土器皿出土状態, B-1区SX-317木製品曲物出土状態, B-1区SX-320木製品御敷出土状態, B-1区SB-403南東隅柱穴検出状態(北より), B-1区SB-403南東隅柱根検出状態(西より), B-1区SB-403東側柱礎板検出状態(東より)
- 図版68 B-1区SB-403南妻柱礎板検出状態(南より), B-1区SB-403西側柱礎板検出状態(東より), B-1区SB-403西側柱礎板検出状態(南東より), B-1区SK-427磁器蓋(2472)出土状態, B-1区SK-429木製品木簡(2481)出土状態, B-1区SK-429木製品(2482~2484)出土状態,

- B-1区SK-431木製品木簡・柄杓出土状態, B-1区SK-433木製品木簡(2501)出土状態
- 図版69 B-1区SK-454 セクション(西より), B-1区SK-455 セクション(南より), B-1区SD-405木製品継手出土状態(南より), B-1区SD-406セクション(南より), B-1区SD-408杭痕検出状態(東より), B-1区SD-410東部石積検出状態(南より), B-1区SD-410杭痕検出状態(北より), B-1区SD-410セクション(南より)
- 図版70 B-1区SD-412完掘状態(北東より), B-1区SD-413完掘状態(北より), B-1区SD-414板出土状態(西より), B-1区SD-423遺物(2624・2631)出土状態, B-1区SD-425完掘状態(北より), B-1区SD-425セクション(南より), B-1区SG-402掘方セクション(西より), B-1区SG-402土師質土器小皿(2719)出土状態
- 図版71 B-1区SG-402木製品漆器蓋(2786)出土状態, B-1区SX-408セクション(南より), B-1区SX-408木材出土状態(南より), B-1区SX-411セクション(南より), B-1区SX-414ソダ出土状態(北より), B-1区SX-415セクション(東より), B-1区SX-414木製品漆器蓋(2844)出土状態, B-1区P-407磁器皿(2896)出土状態
- 図版72 B-1区P-409陶器壺(2900)出土状態, B-1区P-412土師質土器(2903~2905)出土状態, B-1区P-424遺物出土状態, B-1区P-426遺物出土状態, B-1区SB-502, SD-501石列出土状態(南西より), B-1区SD-505石列検出状態(西より), B-1区SK-515セクション(北より), B-1区SD-501基礎検出状態(西より)
- 図版73 B-1区SD-501焼夷弾出土状態, B-1区SD-505石列検出状態(北より), B-1区SD-505石列完掘状態(北西より), B-1区SD-507西部南面石列検出状態(北東より), B-1区SD-508完掘状態(北より), B-1区SE-501木蓋検出状態(北より), B-1区SE-501木筒検出状態(北より), B-1区P-506柱根出土状態(南より)
- 図版74 B-1区P-506陶器火鉢(3008)出土状態, B-2区SX-326完掘状態(東より), B-2区SX-326木製品漆器椀(3085)出土状態, B-2区SX-327セクション(西より), B-2区ピット埋桶検出状態(西より), B-2区SK-462完掘状態(東より), B-2区SK-462セクション(西より), B-2区SD-426石列検出状態(南東より)
- 図版75 B-2区SD-428石検出状態(東より), B-2区SD-432磁器(3132)出土状態, B-2区SD-435遺物出土状態, B-2区SD-436石検出状態(西より), B-2区SD-436完掘状態(南より), B-2区SD-436石列出土状態(西より), B-2区SX-420炭化米出土状態, B-2区P-430陶器輪花皿(3159)出土状態
- 図版76 軟質施釉陶器(色絵皿), 陶器(枕)
- 図版77 磁器(鉢)
- 図版78 磁器(鉢), 瓦(軒丸瓦)
- 図版79 木製品(木簡), 陶器・磁器・土製品(ミニチュア)
- 図版80 土師器(焜炉), 土製品(泥面子)
- 図版81 陶器(枕・花瓶), 石製品(石幢), 木製品(集水桶継手)
- 図版82 陶器(壺), 磁器染付(輪花皿・大皿・文鎮), 陶胎染付(瓶)
- 図版83 陶器(皿), 磁器(色絵小皿・染付中皿・染付輪花大皿), 土師器(焜炉)
- 図版84 陶器(皿・四耳壺・甕), 磁器(染付瓶), 五彩(大皿), 木製品(箱物)

- 図版 85 陶器(蓋物蓋), 磁器染付(皿・稜花大皿), 西洋陶器(稜花皿), 土師器(焜炉)
- 図版 86 陶器(人形), 磁器染付(皿・中皿・三足香炉・植木鉢), 瓦質土器(焜炉)
- 図版 87 陶器(碗・皿・波縁皿・甕), 磁器(三足香炉), 木製品(桶蓋)
- 図版 88 陶器(小皿), 磁器染付(うがい茶碗・六角皿), 土師器(焙烙), 瓦質土器(焜炉), 木製品(木簡)
- 図版 89 陶器(中皿・火鉢), 磁器(染付油壺), 土師質土器(皿), 木製品(木簡・漆器蓋物)
- 図版 90 陶器(中皿・水注・秉燭), 土師質土器(皿), 木製品(木簡)
- 図版 91 陶器(壺), 磁器(染付壺), 陶胎染付(瓶), 土師質土器(皿), 木製品(漆器椀蓋・木簡)
- 図版 92 陶器(台付灯明皿・火鉢), 磁器(染付皿・色絵皿), 青花(瓶・鉢)
- 図版 93 陶器(丸碗・壺), 磁器染付(皿・碗蓋・仏飯器), 青磁(香炉または蓋物)
- 図版 94 陶器(丸碗・蓋), 磁器(染付小丸碗・染付角皿・色絵輪花皿・染付輪花杯・色絵猪口)
- 図版 95 陶器(小丸碗・鉢), 磁器染付(輪花皿・大皿), 青花(皿), 軟質施釉陶器(向付)
- 図版 96 陶器(天目碗), 磁器(染付碗・染付大皿・色絵皿・三足大皿), 青花(碗), 五彩(大皿)
- 図版 97 陶器(向付), 磁器(染付碗), 白磁(小壺), 土師器(焼塩壺), 木製品漆器(椀・蓋)
- 図版 98 陶器(碗), 磁器染付(碗・小丸碗・猪口), 土師質土器(皿), 石製品(硯)
- 図版 99 陶器(碗・蓋物・花生・土瓶), 土師器(焼塩壺), 土製品(人形), 木製品(漆器椀)
- 図版100 陶器(天目形碗・波縁皿・皿・播鉢), 磁器(染付中皿), 木製品(継手)
- 図版101 陶器(碗・皿), 磁器(染付皿・色絵大皿), 青花(皿), 青磁(碗), 土師質土器(皿), 土師器(焼塩壺)
- 図版102 陶器(色絵半球形碗・皿・大皿・向付・合子蓋), 陶胎染付(碗), 土製品(人形), 木製品(継手)
- 図版103 陶器(筒形碗・人形), 磁器(中皿), 青磁(鉢), 土師器(火入), 木製品(漆器柄杓・桶蓋)
- 図版104 陶器(碗・丸碗・色絵小碗・皿・皿または蓋物・播鉢・火鉢・カンテラ)
- 図版105 陶器(碗・鉢・色絵鉢), 磁器染付(朝顔形碗・小広東碗・皿・碗蓋), 土製品(人形)
- 図版106 陶器(色絵鉢), 磁器(染付杯・色絵仏飯器・染付灯芯押え), 西洋陶器(皿), 土師器(火鉢・鋳型)
- 図版107 陶器(耳壺・色絵人形), 磁器(染付丸碗), 西洋陶器(稜花小皿), 土製品(人形), 貝製品(杓子)
- 図版108 陶器(丸碗・半球形碗), 磁器(染付広東碗・色絵蓋物), 軟質施釉陶器(稜花鉢), 土製品(ミニチュア)など
- 図版109 陶器(丸碗・半球形碗・皿・大皿・漚瓶), 磁器(染付丸碗), 金属製品(銭貨)
- 図版110 陶器(丸碗・鉢・台), 磁器(染付小碗・色絵合子蓋・染付猪口), 土製品(人形)
- 図版111 陶器(碗・丸碗), 磁器(染付小碗・変形皿), 土製品(鳩笛)
- 図版112 陶器(鉢), 磁器色絵(小碗), 青花(中皿), 土製品(人形), 木製品(椀), 骨角製品(篋), 金属製品(匙)など
- 図版113 陶器(色絵碗), 磁器(色絵小杯), 青花(大皿), 須恵器(杯), 瓦(軒平瓦), 土製品(人形), 金属製品(簪)など
- 図版114 陶器(波縁皿・向付), 磁器(染付辰砂碗), 青花(碗・皿・大皿), 白磁(小皿), 木製品漆器(椀・蓋)
- 図版115 陶器(大皿・向付), 磁器染付(皿・小皿・大皿), 木製品(漆器椀・匙・剝物・櫛・将棋駒)
- 図版116 陶器(向付), 磁器染付(皿), 青花(碗), 五彩(皿), 土師器(焼塩壺蓋), 木製品漆器(椀), 金属製品(刀子)など
- 図版117 陶器(秉燭), 磁器(色絵碗), 青花(皿), 軟質施釉陶器(皿), 土師質土器(皿), 木製品(蓋), 骨角製品など



- 図版118 陶器(菊皿・灯明受皿), 磁器(色絵紅猪口), 五彩(皿), 土製品(人形), 石製品(基石), 木製品(漆器椀)など
- 図版119 陶器(向付・蓋物), 磁器(染付皿・色絵稜花皿), 土師器(焙烙), 土製品(面型・ミニチュア)など
- 図版120 陶器(皿・溝縁皿・菊皿・向付), 磁器(染付皿・大皿), 木製品漆器(椀・折敷・匙), 金属製品(小柄)
- 図版121 陶器(色絵碗・色絵半球形碗・皿), 青花(皿), 土師質土器(皿), 石製品(鋳型), 木製品(曲物蓋・漆器刷毛)
- 図版122 磁器(色絵大皿・色絵碗蓋・根付), 青花(碗・小碗), 軟質施釉陶器(碗・角皿), 土製品(人形), 木製品(不明)
- 図版123 陶器(色絵皿), 磁器(色絵猪口), 青磁(皿), 石製品(茶臼・鋳型), 木製品(漆器栓), 金属製品(蓋)など
- 図版124 陶器(色絵碗), 磁器(色絵碗蓋), 青花(大皿), 土製品(人形), 石製品(数珠玉), 木製品(漆器櫛)など
- 図版125 陶器(碗・碗蓋・油壺), 磁器(色絵丸碗・染付碗蓋・色絵段重), 土製品(人形・泥面子・芥子面)
- 図版126 陶器(色絵蓋物蓋・鉢・灯明受皿・ミニチュア), 磁器(染付碗蓋・染付皿・染付合子蓋), 青磁(大皿)など
- 図版127 陶器(色絵碗), 磁器(色絵皿), 青花(碗), 土製品(人形), 骨角製品(櫛払), 金属製品(鉢)など
- 図版128 陶器(色絵碗・水盤), 磁器(色絵小碗・染付皿), 陶胎染付(釜形), 青花(碗), 土製品(人形)など
- 図版129 陶器(輪花皿), 磁器(染付合子), 青花(皿), 瓦質土器(焙烙), 土製品(ミニチュア・型)など
- 図版130 陶器(色絵火入または灰吹), 磁器(皿), 青花(皿), 軟質施釉陶器(乗燭), 土師質土器(小皿), 土製品(鈴・型)など
- 図版131 木製品(木筒)
- 図版132 木製品(木筒)
- 図版133 木製品(木筒)
- 図版134 木製品(木筒)
- 図版135 木製品(木筒)
- 図版136 木製品(木筒)
- 図版137 木製品(木筒)
- 図版138 木製品(木筒)

## 付図目次

- 付図1 追手筋遺跡1・2面遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 追手筋遺跡3面遺構平面図(S=1/200)
- 付図3 追手筋遺跡4面遺構平面図(S=1/200)
- 付図4 追手筋遺跡5面遺構平面図(S=1/200)
- 付図5 追手筋遺跡B-1区4面SG-402平面図(S=1/80)

# 第 I 章 序章

## 1. 調査の経緯と経過

今回の調査地は高知市追手筋二丁目に位置し、調査以前は追手前小学校であり、小学校として141年の歴史がある。また、この地は史跡高知城跡の追手門から東に延びる追手筋の南に面しており、江戸時代の高知城下町が残る可能性の高い高知郭中参考地域に当たる。この場所が高知県と高知市が計画している新図書館等複合施設建設の予定地となったことを受け、高知県教育委員会及び高知市教育委員会によって埋蔵文化財の有無及び包蔵地の範囲を確認するため調査が行われた。その結果、すべてのトレンチから近世の遺構・遺物が確認され、高知城下町関連の遺跡が存在することが明らかとなった。これらの結果を受けて、今回の調査地は新たに追手筋遺跡として登録され、建物が建設される3,600㎡について本発掘調査が行われることとなった。

調査は高知県教育委員会より委託を受け、高知県文化財団埋蔵文化財センターが行うこととなった。また、調査期間が限られていたため準備工として解体工事が終了した約500㎡について本発掘調査に先駆けて表土層の掘削を行った。準備工の期間は平成25年6月10日から7月16日までであった。本発掘調査は平成25年8月5日から平成26年2月6日まで行い、実働日は111日、延べ作業員数2,577人であった。調査面積は3,600㎡で、箇所により2～5面の遺構面が確認されたため延べ面積は9,119㎡となった。

なお、今回の発掘調査対象地の北西部に位置する旧追手前小学校の校舎が建設されていた部分については、高知市教育委員会が平成25年5月から6月にかけて本発掘調査を行っており平成27年度に報告書が刊行される予定となっている。



図1 高知城下町位置図

## 2. 確認調査(図2・3)

平成23年12月に高知県教育委員会によって調査対象地の北部について埋蔵文化財の有無及び包蔵地の範囲を確認するため調査が行われた。調査では小学校運動場の周辺に4箇所のトレンチを設定して行った(T1～T4)。調査区北東部のT1では2層の遺物包含層または整地層を確認しており、下層では近世の河道から陶磁器や木製品が出土している。T2は調査区東部に設定したトレンチで、3層の遺物包含層または整地層が確認されている。また、火災を受けた遺構面や柱穴等の近世の遺構も検出されている。T3は調査区北西部に設定されたトレンチで、近世後期の遺物包含層または整地層と杭列が確認されている。T4は調査区西部に設定されたトレンチで、4層の遺物包含層または整地層と溝跡等の遺構が確認されており、陶磁器片や木製品も出土している。第13～15層からは図示した志野焼向付(1)や中国漳州窯系とみられる青花皿(2)が出土している。

調査の結果、すべてのトレンチから近世の遺構・遺物が確認され、高知城下町関連の遺跡が存在することが明らかとなり、追手前小学校構内で新たに発見された遺跡について追手筋遺跡と命名された。

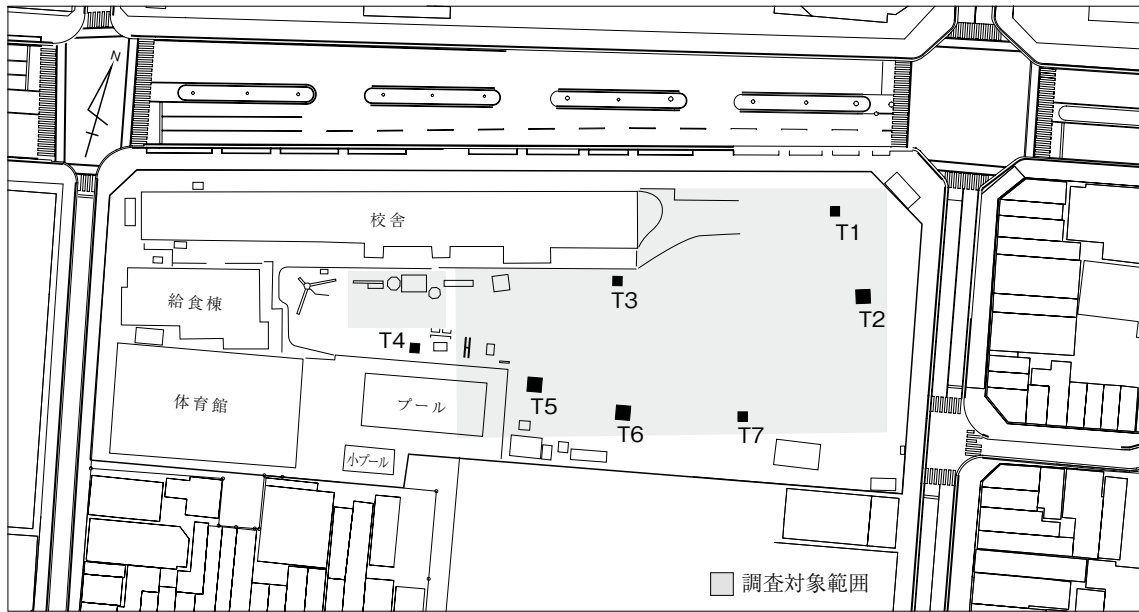


図2 確認調査位置図(S=1/1,500)

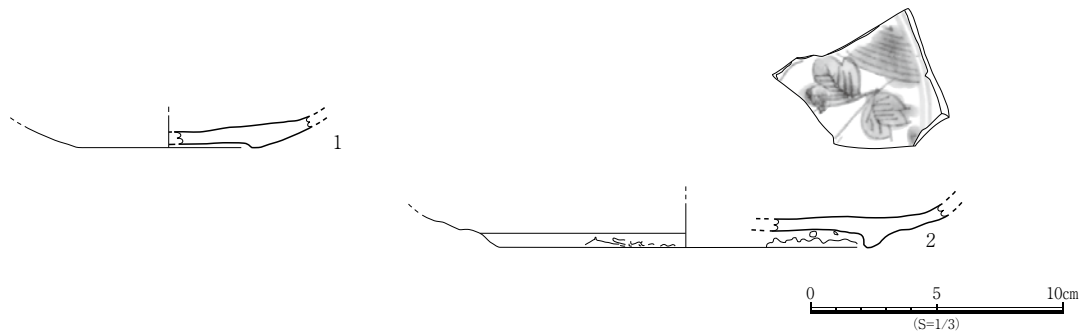


図3 確認調査出土遺物

さらに平成24年8月には高知市教育委員会によって調査対象地の南側についても確認調査が行われた。調査区南部の3箇所にてトレンチを設定して行った(T5～T7)。調査区南西部に位置するT5では近世後期の遺物包含層または整地層が2層確認されている。調査区南部に設定されたT6では木製品が出土する遺物包含層が確認されている。調査区南東部に設定されたT7は地表下80cmまでの調査が行われたが、コンクリートの基礎が深部にまで及んでいると予想されたため下層の確認には至っていない。これらの結果より、近世の遺物包含層が確認され、遺跡の範囲が南にも広がっていることが判明し、調査対象地について調査が必要であると判断された。

### 3. 調査の概要

追手筋遺跡は史跡高知城跡の追手門から東に延びる追手筋の南に面しており、高知城より約200m東に位置する。江戸時代の絵図によると概ね二つの屋敷が存在し、家老である山内家や百々家、藩医である村田家が居住していたとされる。山内家は藩主山内家の分家であり、百々家は築城惣奉行として高知城築城に関わっており、土佐では著名な家老である。

今回の調査以前は郭中参考地とされていた場所であったが、確認調査によって江戸時代の遺構が

確認され、発掘調査を行うこととなった。また、高知城下町の調査事例は極めて少ないが、今回の調査面積は3,600㎡を測り、高知城下町で最大の面積となっている。

調査では江戸時代初頭から幕末までの多量の陶磁器や木製品が出土しており、中でも約200点を数える木簡の出土は県内最多である。木簡の多くは荷札木簡であり、その中には「百々出雲」「山内蔵人」「村田」といった絵図に記載されていた名前が書かれた木簡もあり、絵図に書かれていた人物が実際に居住

していたことも判明している。さらに、桶や竹樋を用いた江戸時代の上水施設が確認されたほか、全国的にも類例が少ない武家屋敷に伴う池跡が確認されるなど非常に貴重な成果が上がっている。



図4 追手筋遺跡位置図(S=1/25,000)

#### 4. 調査の方法

旧追手前小学校跡地内に基準点を4点設置し、世界測地系の国土座標と標高を測量に用いた。また、調査区北西部のX=62,244, Y=3,384を原点としてA1と呼称し、A1より東に算用数字、南にアルファベットを配し、調査区内に4mグリッドを設定した。遺構の測量は全て人力で行った。

調査は、基本的に表土層と近代の遺物包含層を重機で掘削し、江戸時代の遺物包含層は遺物の出土状況により適宜重機と人力で行い、遺構の調査は人力で行った。また、解体工事と併行して調査を行った期間もあり土置き場を確保するため調査区をI～IV区として4箇所に分け、I区から順に調査を行った。廃土は敷地内の調査対象地でない箇所または調査が終了した箇所に4tダンプで運び調査を行った。

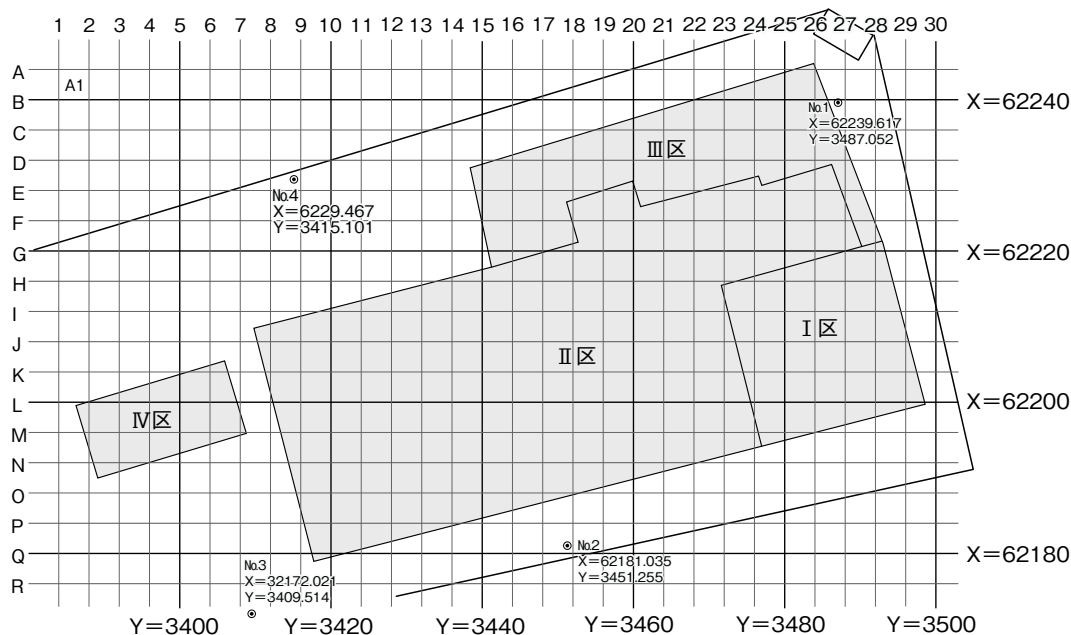


図5 グリッド及び調査区設定図(S=1/1,000)

## 5. 調査日誌抄

調査は2013年8月5日から2014年2月6日まで行い、実働日111日、延べ作業員数2,577人であった。

2013年

- |            |   |            |  |
|------------|---|------------|--|
| 8月5日(月) 晴  | I区南端より遺構検出を開始する。  | 8月30日(金) 晴 | 北部の遺構調査を行う。現場事務所に電気を配備する。  |
| 8月6日(火) 晴  | 引き続き1面の遺構検出を行う。任意グリッドを設定し、グリッド杭を設置する。                           | 9月2日(月) 雨  | 雨天のため作業中止。   |
| 8月7日(水) 晴  | 引き続き遺構検出とグリッド杭の設置を行う。遺構配置図の作成を行う。                               | 9月3日(火) 晴  | 前日の雨のため水汲みを行い、遺構の調査を行う。重機で廃土の移動を行う。  |
| 8月8日(木) 晴  | 遺構検出と遺構配置図の作成を完了し、1面の遺構検出状態の写真撮影を行う。南より遺構検出を開始する。               | 9月4日(水) 雨  | 重機で台風対策を行う。  |
| 8月9日(金) 晴  | よさこい祭開催のため作業中止。   | 9月5日(木) 晴  | I区は引き続き遺構の調査を行う。II区の表土掘削を開始する。   |
| 8月12日(月) 晴 | よさこい祭開催のため作業中止。   | 9月6日(金) 晴  | I区は3面の遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。II区は引き続き表土掘削を行う。                                    |
| 8月13日(火) 晴 | 中央部の遺構の調査を行う。   | 9月9日(月) 晴  | I区は人力による遺物包含層の掘削、II区は引き続き表土掘削を行う。  |
| 8月14日(水) 晴 | 遺構の調査を終了し、調査区の精査を行う。1面の遺構完掘状態の写真撮影・平面測量・レベル測量を終了する。             | 9月10日(火) 晴 | I区は重機及び人力による遺物包含層の掘削及び遺構検出、II区は重機による表土掘削及び南部1面の遺構検出及び遺構の調査を開始する。                   |
| 8月15日(木) 晴 | 南部より遺物包含層の人力掘削を開始する。  | 9月11日(水) 晴 | I区は遺構検出を終了し、4面の遺構検出状態の写真を撮影する。南部より遺構の調査を開始する。II区は引き続き重機による表土掘削及び南部の遺構検出及び遺構の調査を行う。 |
| 8月16日(金) 晴 | 現場中止。   | 9月12日(木) 晴 | I区は南部の遺構の調査を行う。II区は引き続き重機による表土掘削及び南部の遺構検出及び遺構の調査を行う。                               |
| 8月19日(月) 晴 | 現場中止。   | 9月13日(金) 晴 | I区は南部及び中央部の遺構の調査を行う。II区は引き続き重機による表土掘削及び南部の遺構検出及び遺構の調査を行う。                          |
| 8月20日(火) 晴 | 中央部の遺物包含層の人力掘削を行う。  | 9月14日(土) 晴 | II区の表土掘削を行う。   |
| 8月21日(水) 晴 | 重機による遺物包含層掘削、人力による遺構検出を終了し、2面の遺構検出状態の写真撮影を行う。南部より2面の遺構の調査を開始する。 | 9月17日(火) 晴 | I区は中央部の遺構の調査を行う。II区は重機による表土掘削及び北部1面の遺構の調査を行う。                                      |
| 8月22日(木) 晴 | 中央部の遺構の調査を行う。   | 9月18日(水) 晴 | I区は引き続き中央部の遺構の調査を行う。II区は引き続き重機による表土掘削及び北部1面の遺構の調査を行う。                              |
| 8月23日(金) 晴 | 2面の遺構の調査・精査を終了し、2面の遺構完掘状態の写真撮影・平面測量・レベル測量を行う。                   | 9月19日(木) 晴 | I区は北部の遺構の調査を行う。II  |
| 8月26日(月) 雨 | 雨天のため作業中止。  |            |  |
| 8月27日(火) 晴 | 南部より重機による遺物包含層掘削及び人力による遺構検出を行う。                                 |            |  |
| 8月28日(水) 晴 | 3面の遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。南部より遺構の調査を開始する。                      |            |  |
| 8月29日(木) 晴 | 中央部の遺構の調査を行う。現場事務所・トイレを設置する。                                    |            |  |



- 区は引き続き重機による表土掘削及び北部1面の遺構の調査を行う。
- 9月20日(金) 晴 I区は北部の遺構の調査を行う。II区は重機による表土掘削及び東部1面の遺構調査を行う。
- 9月24日(火) 晴 I区は遺構の調査を終了し、4面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。II区は重機による表土掘削及び東部・南部1面の遺構の調査を行う。
- 9月25日(水) 晴 I区は遺物包含層の掘削・遺構検出を終了し、5面の遺構検出写真を撮影する。II区は引き続き重機による表土掘削及び南部2面の遺構の調査を行う。
- 9月26日(木) 晴 I区は南部より遺構の調査を行う。II区は重機による表土掘削及び東部1面の遺構調査を行う。
- 9月27日(金) 晴 I区は引き続き南部の遺構の調査を行う。II区は引き続き重機による表土掘削及び東部1面の遺構調査を行う。
- 9月30日(月) 晴 I区は5面の遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真の撮影を行う。II区は重機による表土掘削及び中央部1面の遺構調査を行う。
- 10月1日(火) 晴 I区は測量を終了し、I区の調査をすべて完了する。II区は引き続き重機による表土掘削及び中央部1面の遺構の調査を行う。
- 10月2日(水) 晴 II区北西部2面の遺構検出及び遺構の調査を開始する。
- 10月3日(木) 晴 I区は埋め戻しを開始する。II区は引き続き北西部の遺構の調査を行う。
- 10月4日(金) 晴 I区は埋め戻しを行う。II区は引き続き北西部の遺構の調査を行う。
- 10月7日(月) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月8日(火) 曇 前日の雨のため水汲み及び北東部の機械掘削を行う。
- 10月9日(水) 晴 前日の雨のため水汲みを行う。引き続き北西部の遺構調査及び北東部の遺構検出を行う。
- 10月10日(木) 晴 II区北西部の遺構調査及び北東部の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 10月11日(金) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月15日(火) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月16日(水) 晴 引き続き北西部の遺構調査を行う。北東部の遺構配置図の作成を行う。
- 10月17日(木) 晴 引き続き北西部の遺構調査及び北東部の遺構配置図の作成を行う。
- 10月18日(金) 晴 北西部の遺構調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。北東部の遺構の調査を始める。
- 10月21日(月) 晴 引き続き北東部2面の遺構の調査を行う。中央部の機械掘削及び遺構検出を行う。
- 10月22日(火) 晴 西部の遺構調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 10月23日(水) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月24日(木) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月25日(金) 雨 雨天のため作業中止。
- 10月28日(月) 晴 東部と中央部の遺構調査を行う。西部は3面の重機による遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。
- 10月29日(火) 晴 東部は引き続き2面の遺構の調査を行う。中央部2面の遺構の調査を終了する。西部は3面の遺構検出・グリット杭の設置・遺構配置図の作成を行う。
- 10月30日(水) 晴 東部は引き続き2面の遺構の調査を行う。中央部3面の遺物包含層掘削を始める。西部は3面の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 10月31日(木) 晴 東部は引き続き2面の遺構の調査を行う。中央部3面の遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。西部は3面の遺構の調査を開始する。
- 11月1日(金) 晴 東部は2面の遺構の調査を終了し、



写真1 作業風景

5. 調査日誌抄

- 遺構完掘状態の写真撮影を行う。中央部は3面の遺構検出状態の写真撮影を行う。西部は引き続き3面の遺構の調査を行う。
- 11月5日(火) 晴 東部は2面の平面測量及び池跡の調査を終了する。西部は引き続き3面の遺構の調査を行う。
- 11月6日(水) 晴 東部は3面の遺物包含層の掘削及び遺構検出を行う。西部は引き続き3面の遺構の調査を行う。
- 11月7日(木) 晴 引き続き東部は3面の遺物包含層の掘削及び遺構検出、西部は3面の遺構の調査を行う。
- 11月8日(金) 晴 引き続き東部は3面の遺物包含層の掘削及び遺構検出、西部は3面の遺構の調査を行う。
- 11月11日(月) 晴 東部は3面の遺構検出状態の写真撮影、配置図の作成を行い、遺構の調査を開始する。西部は引き続き3面の遺構の調査を行う。
- 11月12日(火) 晴 東部・西部3面の遺構の調査を行う。はりまや橋小学校5・6年生と保護者が見学。
- 11月13日(水) 晴 引き続き東部・西部3面の遺構の調査を行う。はりまや橋小学校1・2年生が見学。
- 11月14日(木) 晴 引き続き東部・西部3面の遺構の調査を行う。はりまや橋小学校3・4年生が見学。
- 11月15日(金) 雨 水汲み及び重機による廃土処理を行う。
- 11月18日(月) 晴 南部3面の遺構の調査を行う。
- 11月19日(火) 晴 引き続き南部3面の遺構の調査を行う。
- 11月20日(水) 晴 現場作業中止。
- 11月21日(木) 晴 引き続き南部3面の遺構の調査を行う。県文化財保護連絡協議会が来訪。
- 11月22日(金) 晴 平面測量を行う。琴ノ浦温山荘園理事長高瀬要一氏に池跡の指導を受ける。
- 11月25日(月) 雨 雨天のため作業中止。
- 11月26日(火) 晴 水汲み及び重機による廃土の移動を行う。
- 11月27日(水) 晴 引き続き南部3面の遺構の調査を行う。地元商店街の方々が見学。
- 11月28日(木) 晴 引き続き南部3面の遺構の調査を行う。高知市教育委員会が見学。
- 11月29日(金) 晴 南部3面の遺構の調査を終了し、Ⅱ区3面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。県立図書館職員が見学。
- 11月30日(土) 晴 追手前小学校閉校記念実行委員会と卒業生約110名が見学。
- 12月2日(月) 晴 Ⅱ区北東部及び南西部3面の補足調査及び平面測量を行う。
- 12月3日(火) 晴 Ⅱ区南東部の遺物包含層掘削及び4面の遺構検出を行う。Ⅲ区の東より重機で表土掘削を始める。観光ボランティアの方々が見学。
- 12月4日(水) 晴 Ⅱ区南東部4面の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を開始する。追手前高校の生徒が見学。
- 12月5日(木) 晴 Ⅱ区は南東部4面の遺構の調査を行う。Ⅲ区は引き続き重機による表土掘削及び調査区東部の遺構検出を開始する。土佐女子高校の生徒及び高知県教育委員会と事務局が見学。
- 12月6日(金) 晴 Ⅱ区は南東部4面の遺構の調査及び南西部4面の遺構検出を行う。Ⅲ区は引き続き重機による表土掘削及び調査区中央部の遺構検出を行う。午後に県議及び市議が来訪。
- 12月9日(月) 晴 Ⅱ区は南東部4面の遺構の調査、南西部は4面の遺構の調査を開始する。Ⅲ区は引き続き重機による表土掘削及び調査区西部の遺構検出を開始する。



写真2 はりまや橋小学校見学風景



写真3 現地説明会風景1



写真4 現地説明会風景2

- 12月10日(火) 晴 II区は水汲みを行う。III区は重機による表土掘削が終了する。高知市長が来訪。
- 12月11日(水) 晴 II区は南部4面の遺構の調査を行う。III区は西部の遺構検出を行う。
- 12月12日(木) 晴 記者発表を行う。III区は2面の遺構検出状態の写真撮影を行う。丸の内高校の生徒が見学。
- 12月13日(金) 晴 II区は引き続き南部4面の遺構の調査を行う。III区は東部より遺構の調査を開始する。県議が来訪。
- 12月14日(土) 晴 現地説明会を行う。約240名の参加があった。
- 12月16日(月) 晴 II区は南東部4面の遺構完掘状態の写真撮影及び補足調査を行う。III区は引き続き東部の遺構の調査を行う。
- 12月17日(火) 晴 II区は補足調査を終了し、4面の遺構完掘状態の写真撮影を行い、II区の調査をすべて完了する。III区は引き続き東部・中央部の遺構の調査を行う。
- 12月18日(水) 雨 水汲みを行う。
- 12月19日(木) 雨 水汲みを行う。
- 12月20日(金) 晴 III区は2面中央部の遺構の調査を行う。
- 12月24日(火) 晴 III区は2面西部の遺構の調査を行う。産廃の搬出を始める。
- 12月25日(水) 晴 III区は引き続き2面西部の遺構の調査を行う。産廃の搬出を行う。高知市副市長と高知市議会議員が来訪。
- 12月26日(木) 雨 産廃の搬出を行う。
- 12月27日(金) 晴 III区は引き続き2面西部の遺構の調

査を行う。産廃の搬出を行う。

2014年

- 1月6日(月) 晴 III区は2面西部の遺構の調査及び池跡の精査を行う。II区は埋め戻しを行う。
- 1月7日(火) 晴 III区は2面の遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。高所作業車より池跡の写真撮影を行う。
- 1月8日(水) 雨 雨天のため作業中止。
- 1月9日(木) 晴 III区は東部より遺物包含層掘削及び3面の遺構検出を行う。
- 1月10日(金) 晴 III区は3面の遺構検出状態の写真撮影を行う。II区は埋め戻しを行う。
- 1月14日(火) 晴 III区は3面の遺構の調査を開始する。II区は埋め戻しを行う。IV区は表土掘削を始める。
- 1月15日(水) 晴 III区は東部3面の遺構の調査を行う。II区は埋め戻しを行う。IV区は2面の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 1月16日(木) 晴 引き続きIII区は東部3面の遺構の調査、II区は埋め戻し、IV区は2面の遺構の調査を行う。
- 1月17日(金) 晴 引き続きIII区は東部3面の遺構の調査、II区は埋め戻し、IV区は2面の遺構の調査を行う。
- 1月20日(月) 晴 引き続きIII区は東部3面の遺構の調査、II区は埋め戻し、IV区は2面の遺構の調査を行う。SG-402の3D撮影を始める。
- 1月21日(火) 晴 III区は中央部3面の遺構の調査を行う。II区は引き続き埋め戻し、IV



## 5. 調査日誌抄

- 区は2面の遺構の調査を行う。SG-402の3D撮影を終了する。
- 1月22日(水) 晴 Ⅲ区は引き続き中央部3面の遺構の調査を行う。SG-402は石に番号を付けて取り上げる。Ⅳ区は2面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 1月23日(木) 晴 Ⅲ区は西部3面の遺構の調査を行う。Ⅱ区は引き続き埋め戻しとSG-402の石の番号を付けて取り上げる。Ⅳ区は平面測量及びレベル測量、遺物包含層を掘削し、遺構検出状態の写真の撮影を行う。
- 1月24日(金) 晴 Ⅲ区は引き続き西部3面の遺構の調査を行う。Ⅱ区は引き続き埋め戻しと池跡の下層遺構の調査を行う。Ⅳ区は3面の遺構の調査を開始する。
- 1月27日(月) 晴 Ⅲ区は引き続き西部3面の遺構の調査を行う。Ⅱ区は引き続き埋め戻しと池跡の下層遺構の調査を行う。Ⅳ区は3面の遺構完掘状態の写真撮影及び平面測量を行う。
- 1月28日(火) 晴 Ⅲ区は3面の遺構の調査を終了し、
- 遺構完掘状態の写真撮影をする。Ⅱ区は東の池跡の下層の遺構調査を終了する。Ⅳ区はレベル測量を終了し、埋め戻しを始める。撤収作業を行う。
- 1月29日(水) 晴 Ⅲ区は平面測量及びレベル測量と併行して埋め戻しを行う。Ⅳ区は埋め戻しを終了し、すべて完了する。
- 1月30日(木) 晴 引き続き平面測量及びレベル測量と併行して埋め戻しを行う。電気及び水道の撤去を行う。
- 1月31日(金) 晴 引き続き平面測量及びレベル測量と併行して埋め戻しを行う。
- 2月3日(月) 晴 引き続き平面測量及びレベル測量と併行して埋め戻しを行う。Ⅲ区の平面測量、レベル測量を終了し、調査をすべて完了する。
- 2月4日(火) 晴 Ⅲ区の埋め戻しを行う。
- 2月5日(水) 晴 引き続きⅢ区の埋め戻しを行う。
- 2月6日(木) 晴 Ⅲ区の埋め戻しを終了し、産廃を搬出する。引き渡しを行い、すべて完了する。

## 第Ⅱ章 追手筋遺跡の環境

### 1. 地理的環境

追手筋遺跡が所在する高知市は高知県中央部に位置し、東を南国市、北を土佐町、西をいの町に接し、南は太平洋に面する。面積309km<sup>2</sup>、人口約33万人を有し、高知県の政治・経済・文化の中心である。高知県は北部に1,500～2,000m級の急峻な四国山地が控え、県面積の約89%を山林が占め、高知市においても北部に標高400から600mの山々が連なる山国である。鏡川や物部川などの河川が太平洋に流れ込み、沖積平野である高知平野をつくり出し、南は太平洋に面して扇状に張り出す地形を成している。また、鏡川・久万川・国分川・舟入川・江ノ口川・下田川などの各河川が市の南側に位置する浦戸湾に注いでいるため、古来より交通の要衝でもあった。

高知平野周辺の基盤地質には、砂岩・泥岩がみられ、特にチャートなどが豊富に含まれる。追手筋遺跡が所在する追手筋付近は鏡川によって運ばれた礫層により段丘状の洪積層が形成されていたと考えられている。また、追手筋面と呼ばれる沖積層の基底面となる大高坂山から東に突堤状にのびる段丘面上に位置する。

高知城下町は激しい河川氾濫を治めて江戸時代に成立したと一般には思われてきたが、最近の高知城下町における発掘調査では、小丘陵や中州、低地等が複雑に入り組んでおり、城下町においても弥生時代から古墳時代・古代・中世の遺物や遺構が確認される事例が多くみられ、地形の高い箇所では古くから集落が営まれていたことが判明してきている。

### 2. 歴史的環境

高知城下町の江戸時代以前の様相は近年の発掘調査によって少しずつ明らかになってきており、弥生時代や古墳時代の遺物の出土も散見されるようになってきている。弥生時代の遺物としては尾戸窯跡で前期の大型蛤刃石斧が出土しているほか、弘人屋敷跡で後期の遺物がみられる。高知城下町で最も古い遺構は古墳時代で、高知城跡伝下屋敷跡や高知城跡北曲輪地区で確認された土坑から土師器が出土している。律令期の遺物も高知城跡伝下屋敷跡や高知城跡北曲輪地区などで出土しており、高知城跡北曲輪地区の土坑から土師器や須恵器等が多数出土している。また、弘人屋敷跡では11～12世紀の瓦が出土しているほか、流路や土坑も確認されている。これらの調査より大高坂山裾部では古墳時代や律令期頃の集落が営まれていたことがわかってきている。また、中世になると南北朝時代には大高坂山城が築城されたのを始め、大高坂山の裾部や微高地では中世の遺構が確認される事例が増えている。弘人屋敷跡では14～16世紀の備前焼大甕の埋葬遺構を含む中世墓が6基検出されており、現代の区画の起源となる15～16世紀の溝跡なども確認されている。

江戸時代の遺跡は山内一豊が来高し築城した高知城跡に象徴され、現在では追手門や天守閣、本丸御殿は国の重要文化財に指定されている。高知城築城と併行して城下町の建設も行われたが、城下町は度々水害に悩まされており、築造当初「河中山」と呼ばれていた城山は慶長15(1610)年に「高智山」と改められた。高知城下町の郭中は北を江ノ口川、南を鏡川とし、東側は現在の堀詰、西側は金子橋付近に新たに堀を設けて、これらの範囲に上級・中級武士が居住した。

2. 歴史的環境



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	追手筋遺跡	中世～近世	28	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	55	宇津野2号古墳	古墳
2	中の谷遺跡	弥生	29	シルタニ遺跡	弥生・中世	56	宇津野1号古墳	古墳
3	横内遺跡	弥生	30	神田南遺跡	中世	57	宇津野遺跡	縄文
4	福井別城跡	中世	31	ゲシカ端遺跡	弥生	58	秦泉寺新屋敷古墳	古墳
5	福井古墳	古墳	32	高神遺跡	古墳・古代	59	吉弘古墳	古墳
6	高知学園裏遺跡	中世	33	神田遺跡	弥生～中世	60	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
7	かろーと口遺跡	中世	34	高座古墳	古墳	61	吉弘遺跡	古代
8	鹿持雅澄邸跡	近世	35	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	62	日の岡古墳	古墳
9	福井遺跡	縄文～中世	36	尾戸遺跡	弥生	63	松葉谷遺跡	古代～中世
10	嘉式保宇城跡	中世	37	尾戸窯跡	近世	64	秦泉寺廃寺跡	古代
11	万々城跡	中世	38	西弘小路遺跡	古代～近世	65	秦泉寺別城跡	中世
12	初月遺跡	弥生	39	高知城伝下屋敷跡	近世	66	秦小学校校庭古墳	古墳
13	福井西城跡	中世	40	高知城跡(大高坂城跡)	中世～近世	67	愛宕神社裏古墳	古墳
14	福井中城跡	中世	41	弘人屋敷跡	古代～近世	68	愛宕不動堂前古墳	古墳
15	福井元尾城跡	中世	42	帯屋町遺跡	古墳・中世～近世	69	北秦泉寺遺跡	弥生
16	井口城跡	中世	43	本町遺跡	近世	70	淋谷古墳	古墳
17	杓田遺跡	弥生	44	金子橋遺跡	近世	71	秦泉寺城跡	中世
18	加治屋敷跡	古代～中世	45	南御屋敷跡	近世	72	土居の前古墳	古墳
19	鴨部城跡	中世	46	中島町遺跡	古墳	73	前里城跡	中世
20	柳田遺跡	縄文～古墳	47	国沢城跡	中世	74	薊野城跡	中世
21	鷺泊橋付近遺跡	弥生・中世	48	小石木山古墳	古墳	75	薊野遺跡	古代
22	船岡山遺跡	弥生	49	小石木町遺跡	弥生	76	一宮別城跡	中世
23	船岡山古墳	古墳	50	潮江城跡	中世	77	一宮2号古墳	古墳
24	能茶山窯跡	近世	51	開成館跡	近世	78	一宮城跡	中世
25	神田旧城跡	中世	52	安楽寺山城跡	中世	79	吸江庵跡	中世～近世
26	鴨部遺跡	縄文～近世	53	東久万池田遺跡	古代～中世	80	五台山法華経塔	中世
27	石立城跡	中世	54	西秦泉寺遺跡	古代	81	竹林寺	古代

図6 周辺の遺跡位置図(S = 1/50,000)

高知城下町関連の遺跡も調査事例が近年増加している。2001年には高知地家簡裁庁舎建替に伴い高知城伝下屋敷跡の調査が行われている。高知城跡内堀内の南西部に位置し、寛文年間の郭中図には「御下屋敷」と描かれている場所である。調査では山内家の家紋である三ツ葉柏文の軒丸瓦や「松平土佐守」と書かれた木簡が出土しており、藩あるいは藩主関連の施設の存在を示唆する遺物が見られるほか、漆器をはじめ上手の土器が多数出土している。

西弘小路遺跡は高知城跡内堀の西側に位置し、西の搦手門と藩主の下屋敷に近接するという重要な位置にあり、高い禄を賜った家臣や重臣の縁戚など上級武士の屋敷地であり周囲には藩の重要な施設もみられる。西弘小路遺跡では二度の調査が行われている。2007年に行われた総合あんしんセンター建設に伴う調査では、多量の遺物が出土し、中でも茶道具や高級品の出土量は城下町の調査の中でも多く、饗応の器や調度品など豊富な種類のものがみられる。2009年に行われた高知法務総合庁舎建設に伴う調査では絵図に描かれていた溝跡が確認されているほか、多様な木製品が出土している。漆器の出土量は県内では最多であり、螺鈿や蒔絵の出土は県内唯一である。また藩重臣名や知行地を記した木簡も出土している。

弘人屋敷跡は高知城跡内堀の東側に所在する遺跡で、追手筋遺跡の西方約200mに位置する。2011・2012年度に高知県立高知城歴史博物館建設に伴い調査が行われた。調査では17～19世紀にかけての区画溝や井戸跡・廃棄土坑など上級・中級武士の屋敷跡を確認すると共に、良好な一括資料が出土している。

窯跡では高知城跡の北西に尾戸窯跡がある。承応2(1653)年に二代藩主忠義の命により藩窯として現在の高知市小津に開窯し陶器製作を行った。2003年には民間開発に伴う調査が高知市教育委員会によって行われ、尾戸窯跡関連の近世陶磁器や窯道具が出土している。文政3(1820)年には現在の高知市鴨部に土佐藩の藩窯であった能茶山窯が開窯し磁器と陶器の製作を行った。天保7(1836)年以降は日用品を大量生産し、県内で多く出土している。

### 3. 文献からみた追手筋遺跡

絵図において追手筋遺跡に最初に名前が見えるのは、寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』である。この図は藩内用に藩が作成したと推測され内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されているが、作者や年時を示す奥書は欠落している。この図によると今回の調査区の西側は「百々伊織」、東側は「山内左衛門佐」と描かれている。百々家は慶長5(1600)年、初代越前安行の時に山内家に召し抱えられ、築城惣奉行として7,000石が与えられている。百々伊織は第4代で明暦5(1668)年に相続し、知行3,700石を与えられた家老である。山内左衛門佐は藩主山内家の分家で、初代から第3代までが名乗っている。元は安藤氏であったが、天正13(1587)年、山内一豊が長浜城主となった時に召し抱えられ山内氏と称した。慶長6(1601)年には初代山内左衛門佐が宿毛城主となり6,000石が与えられている。元和元(1615)年には一国一城制により宿毛城を取り壊し、同年の大阪夏の陣の際には藩主忠義出陣のため留守居役を務めている。

その後、元禄4(1691)年以前の『元禄二、三年間之図』では調査区西側は「百々采女屋敷」となっているが、元禄4(1691)年以降の『元禄十一年以前図』では「稽古屋敷」となっている。百々家は第5代采女安英で断絶しており、采女安英が亡くなった元禄4(1691)年以後に調査区西側は「稽古屋敷」となったものとみられる。また、調査区東側は「山内半左衛門」と記載されており、第4代とみられ在職期間



3. 文献からみた追手筋遺跡



1. 寛永五～万治二年図



2. 寛文己酉高知絵図



3. 元禄十一年以前図



4. 高知城郭図絵



5. 御家中御侍屋敷附



6. 弘化年間旧廓中絵図

図7 絵図にみえる追手筋遺跡

は1698～1709年である。

18世紀前半の絵図は元文から延享期(1740～1746年)の『高知城郭図絵』, 寛延前後(1750年頃)『高知廓中図』, 延享3(1746)年『延享三年之図』(吉松靖峯氏所蔵), 寛延年間(1748～1751年)『寛延年間頃高知城下郭中之図』(吉松靖峯氏所蔵)などがある。17世紀の絵図では追手筋から帯屋町までが一つの屋敷地であったが, この時期には調査区南東部は三つの屋敷に分かれており, 調査区西側は「山内源藏」, 調査区北東部は「村田」, 南東部は「御用ヤシキ」「松下」「高屋」といった名前がみられる。山内源藏は『寛文己酉高知絵図』で調査区東側に書かれていた山内左衛門佐の第7代とみられ, 元文から延享期(1740～1746年)までに山内家は調査区東側から西側へ移ったことがわかる。また, 村田家は代々

表1 絵図にみえる居住者

絵図(番号は図7と対応)	時期	A区	B区	B-2区	追手筋北側
1 寛永五年～万治二年図	不明 (1659～1793年か)	百々出雲 (2代)	山内左衛門佐	—	村田白庵
2 寛文己酉高知絵図	寛文9年 (1669年)	百々伊織 (4代)	山内左衛門佐	—	村田康庵
3 元禄十一年以前図	元禄4年以降 (1691年以降)	稽古屋敷	山内半左衛門	—	村田康庵
4 高知城郭図絵	元文～延享 (1740～1746年)	山内源蔵か (7代)	村田玄□	御人□ 松下左次兵衛 高屋平蔵□	—
5 御家中御侍屋敷附	天明4年 (1784年)	山内源蔵 (7代)	村田玄端 (5代)	引合場 松下庄左衛門 尾崎熊太郎	—
6 弘化年間旧郭中絵図	弘化年間 (1844～1847年)	山内太郎左衛門 (10代)	村田玄朔 (7代か)	引合場 澤流館 尾崎彦四郎	—

藩医として仕えた中級武士で、『寛文己酉高知絵図』では追手筋北側に村田家第2代である「村田康庵」という記載がみられ、村田家は元文から延享期(1740～1746年)までには追手筋北側から南に移ったことがわかる。村田家は周防国出身の医者で、初代白庵玄怡は寛永元(1624)年に藩主忠義に江戸で召し抱えられ300石が与えられている。村田白庵は医学で最も高位な法眼の位を有する医者であり、第2代の村田康庵から第7代玄明まで藩主お抱えの医者である御側医にも就任している。

19世紀の絵図では享和元(1801)年の『高知御家中等屋敷図』や天保5(1835)年の『天保元年高知之図』、弘化年間(1844～1847)の『弘化年間旧郭中絵図』、幕末頃の『高知郭中図』などがみられる。これらによると調査区西側は「山内源蔵」「山内太郎左衛門」「山内主馬」、調査区東側は「村田三兵衛」「村田玄明」といった名前がみられ、幕末頃まで調査区西側は山内家、調査区東側は村田家が居住していたことがわかる。また、村田家の南側の屋敷には「引合場」「医学館」「尾崎彦四郎」といった名前がみられる。『弘化年間旧郭中絵図』には「澤流館」の記載がみられ、村田玄明が頭取を勤めた藩の医学校とみられる。

#### 4. 江戸時代以降の追手筋遺跡

江戸時代以降、調査前まで追手筋遺跡は小学校として機能している。明治政府は明治5(1872)年の学制に示された初等教育についての基本方針に基づいて急速に小学校の設置に着手した。追手筋遺跡には明治5(1872)年5月私学成章学舎を母校として高知街連合公立小学校が創立され、明治9(1876)年4月には追手筋小学校と改称された。村田家第9代成正



図8 第三尋常小学校(『百四十一の歩み』より転載)  
「大正15年3月」「昭和3年3月」卒業記念写真

## 2. 歴史的環境

は明治15(1882)年に高知県土族として追手筋小学校を卒業している。その後、明治24(1891)年4月には高知市第三尋常小学校と改称され、調査では「追手筋尋常小学校」と書かれた木製の名札が多数出土している。昭和16(1941)年4月には高知市第三国民学校と改称され、昭和19(1944)年にはプールが完成したが、昭和20(1945)年7月に戦災にあい校舎が全焼している。調査ではこの時に投下されたとみられる焼夷弾も出土している。昭和22(1947)年4月高知市立追手前小学校と改称され、翌年には木造二階建の北舎が完成、昭和25(1950)年には南舎も完成している。さらに昭和55(1980)年には鉄筋コンクリートの新校舎が完成した。しかしながら児童数の減少や学校耐震化等の施設整備に絡む財政事情から新堀小学校と統合することとなり、141年の歴史を誇る追手前小学校は平成25(2013)年3月閉校となった。

### 参考文献

- 日本の地質 1991 『四国地方』編集委員会編『日本の地質8 四国地方』  
高知市教育委員会 2007 『尾戸窯跡』高知市文化財調査報告書第30集  
高知市教育委員会 2010 『西弘小路遺跡』高知市文化財調査報告書第34集  
高知市教育委員会 2011 『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市文化財調査報告書第35集  
高知市教育委員会 2013 『史跡高知城跡・高知城跡』高知市文化財報告書第37集  
(助)高知県埋蔵文化財センター 2002 『高知城跡伝下屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集  
(助)高知県埋蔵文化財センター 2012 『西弘小路遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第123集  
(公財)高知県埋蔵文化財センター 2014 『弘人屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第140集  
宿毛市 1977 『宿毛市史』  
土佐史談会編 2004 『高知城下町読本』  
高知市史編さん委員会絵図地区図部会編 2012 『描かれた高知市－高知市史 絵図地区図編』  
高知市立追手前小学校「創立141年の歩み・閉校記念」事業実行委員会 2013 『百四十一年の歩み－高知市立追手前小学校閉校記念誌』  
寺石正路 1976 『土佐名家系譜』  
平尾道雄 1977 『土佐医学史考』  
高知県立図書館編 2014 『土佐國群書類従拾遺 傳記部 第3巻』

### 絵図所蔵

1. 高知県立図書館
2. 高知市民図書館
3. 高知県立図書館
4. 高知県立図書館
5. 高知市自由民権記念館 徳弘家資料
6. 高知市民図書館



## 第三章 調査の成果

調査時は解体工事と併行して調査を行った期間もあり、土置き場を確保するため調査区をI～IV区として4箇所に分けて調査を行ったが、絵図に描かれている屋敷境とみられる溝跡が確認されたことから、屋敷境より西をA区、屋敷境より東をB区として報告する。屋敷境とみられる溝跡または区画溝は江戸時代初頭から昭和期まで幅や位置などを若干変えながら存続するため、時期により各区の面積は異なるが、A区とB区の境については付図に記している。また、A区の屋敷境に面する調査区をA-1区、北西の調査区をA-2区とした。B区については18世紀初頭頃から幕末まで北部と南部で異なる屋敷が存在したとみられることから、村田家が居住していたとされる北部をB-1区、それ以南をB-2区とし、その前後の時期はB-1区として一括で報告する。なお調査区中央部で確認されたA区とB区の境界となる南北方向の屋敷境あるいは区画溝等の遺構はA-1区、B-1区とB-2区の屋敷境あるいは区画溝等の遺構はB-2区として報告する。

検出面については1～5面に分けて報告する。1面は江戸時代以前、2面は概ね17世紀代、3面は18世紀初頭から後葉頃、4面は18世紀後葉から幕末頃、5面は近代から現代とし、下面より若い数字を付し報告する。調査後の整理作業において出土遺物の詳細な検討を行った結果、検出された面を修正して報告している遺構もある。また、遺物が出土していない遺構については、他の遺構との切り合いや埋土・検出面の時期分を考慮して報告している。

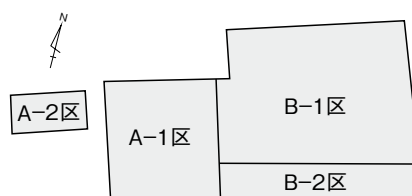


図9 調査区位置図

### 1. 層序

追手筋遺跡の地形は、追手筋がある北側の標高が高く、南に向かって傾斜しており基盤層の標高差は20cmを測る。基本層序は大きく4層に分け、第I層～第IV層とした。各層の細分については枝番をつけて第Ⅲ-1層など記しているが、掲載した土層図の地点により同じ第Ⅲ-1層でも若干の差異があり、同一時期に堆積した層ではない。

第I層は現代層で、旧追手前小学校の整地層である。調査区全面でみられ、4～6層程度確認できる箇所もあり、厚さは50～70cmを測る。明黄褐色土とにぶい黄褐色土の互層で非常に固く締められている。また、攪乱を受けコンクリートの基礎やヒューム管が埋設されている部分もあった。

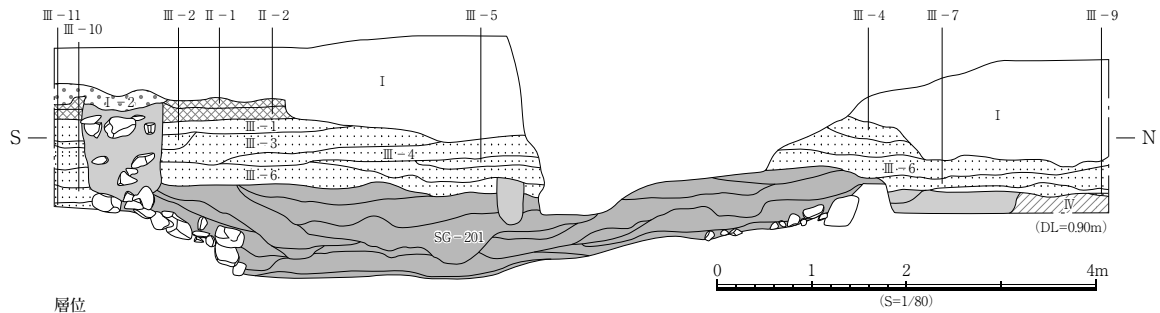
第I-2層または第I-3層も現代層で、昭和20年の高知大空襲に伴うとみられる火災層である。調査区のほぼ全面で確認された。厚さは20～40cmを測り、赤褐色を呈し、コンクリート、レンガ、ハンダ、瓦、ガラス等を多量に含んでいた。

第II層は近代層である。2～3層に分かれ、厚さは20～60cmを測る。調査区全面で確認され、主に褐灰色を呈し、コンクリート、レンガ、ハンダ、瓦、ガラス等を多く含んでいた。

第III層は江戸時代の整地層で、2～6層程度が確認できた。基盤層の地形は北が高く、南に大きく傾斜しているため、調査区北部では2層、調査区南部では少なくとも4層の整地層を確認した。厚さは調査区北部で約50cm、調査区南部で約100cmを測る。主ににぶい黄褐色を呈し、江戸時代の土師質

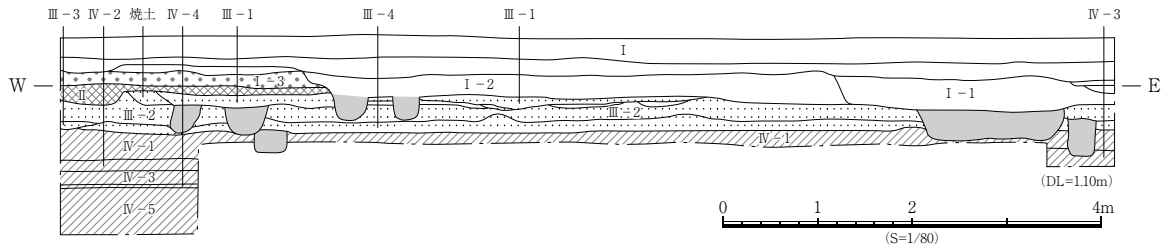


1. 層序



- 層位
- |   |  |
|---|--|
| 第 I 層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂質シルト層 (現代)          | 第 III-5 層 におい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂質シルト層 (近世)         |
| 第 I-2 層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂質シルト層 (昭和期・空襲火災層) | 第 III-6 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂質シルト層 (近世)           |
| 第 II-1 層 褐色 (10YR4/4) 細粒砂質シルト層 (近代)         | 第 III-7 層 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂～粗粒砂質シルト層 (近世)        |
| 第 II-2 層 褐色 (10YR4/4) 細粒砂質シルト層 (近代)         | 第 III-8 層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土層 (近世)                |
| 第 III-1 層 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト層 (近世)         | 第 III-9 層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土シルト層                  |
| 第 III-2 層 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト層 (近世)        | 第 III-10 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂質シルト層 (近世前期)        |
| 第 III-3 層 におい黄褐色 (10YR5/3) シルト層 (近世)        | 第 III-11 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒質シルト～細粒砂層 (近世前期洪水層か) |
| 第 III-4 層 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト層 (近世)        | 第 IV 層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト層 (基盤層)                 |

A-1区西壁セクション



- 層位
- |   |                                       |
|---|---------------------------------------|
| 第 I 層 明褐色 (7.5YR7/1) 砂礫層 (現代・小学校整地土)      | 第 III-3 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂層 (近世)     |
| 第 I-1 層 におい黄褐色 (10YR7/3) 砂礫層 (現代)         | 第 III-4 層 褐色 (10YR5/1) シルト層 (中世・水田土壌) |
| 第 I-2 層 明黄褐色 (10YR6/6) シルト層 (現代)          | 第 IV-1 層 黄褐色 (10YR5/6) シルト層 (基盤層)     |
| 第 I-3 層 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト層 (昭和期・空襲火災層) | 第 IV-2 層 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂層 (基盤層)     |
| 第 II 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫層 (近代)            | 第 IV-3 層 褐色 (7.5YR4/1) 砂礫層 (基盤層)      |
| 第 III-1 層 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト層 (近世・火災層)  | 第 IV-4 層 灰色 (5Y5/1) 細粒砂～シルト層 (基盤層)    |
| 第 III-2 層 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト層 (近世)      | 第 IV-5 層 灰白色 (N7/0) 礫質砂層 (基盤層)        |

A-2区北壁セクション

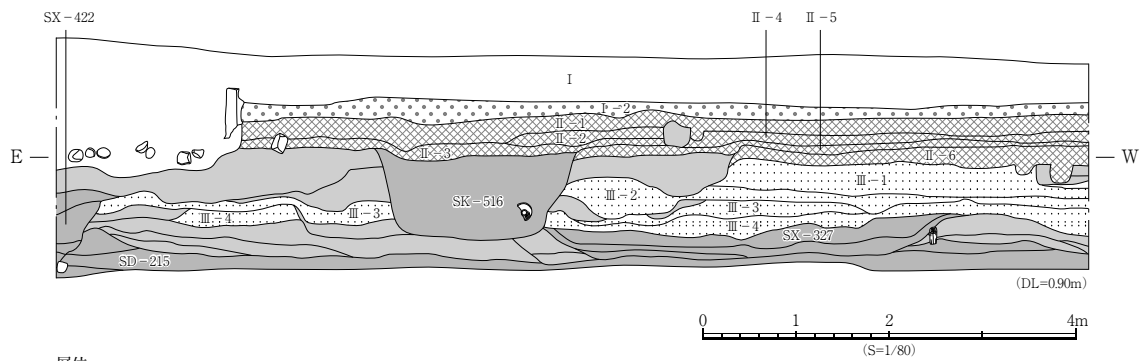
- 現代 (空襲火災層)
  近代
  中・近世
  基盤層
  報告遺構
  未報告遺構

図10 A区セクション図(S=1/80)

土器, 陶器, 磁器, 木製品などが多量に出土している。その他にも部分的に認められる整地層や焼土層も複数層が確認されており, その多くは厚さ約5cm程度である。また, 地形の低い調査区南部では近世の遺物に混ざって古墳時代や古代の遺物が出土しており, 江戸時代に地形の高い調査区北部に存在した古墳時代や古代の遺物包含層や遺構を削平し, 調査区南部を整地した可能性がある。

第IV層は基盤層である。黄褐色シルト質砂層及び砂礫層で, 調査区全面でみられた。調査区北部では地表下約150cm, 調査区南部では地表下約170cm (標高0.10m) で確認された。また, 調査区南部では黄褐色シルト質砂層の下層に厚い粘土の堆積が確認された。箇所により異なるが, 地表下約280cm (標高-1.00m) で湧水がみられた。第IV層の上面ではA-2区で中世の遺構が確認されているほか, A-1区とB-2区の南部でも僅かではあるが, 中世とみられる遺構が確認されている。

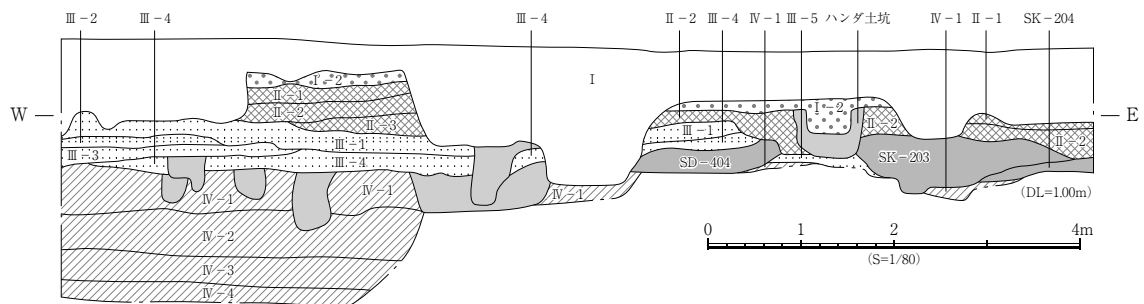
A-1区は近現代の攪乱の影響を大きく受けており, 江戸時代の遺物包含層や整地層が削平されて



層位

- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 第Ⅰ層 明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩礫土とにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂～中粒砂の互層(現代・小学校整地土) | 第Ⅱ-5層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂質シルト層(近代) |
| 第Ⅰ-2層 黒褐色(10YR3/2)シルト層(昭和期・空襲火災層)                            | 第Ⅱ-6層 にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト層(近代)     |
| 第Ⅱ-1層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂～中粒砂質シルト層(近代)                          | 第Ⅲ-1層 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂～中粒砂質シルト層(近世)   |
| 第Ⅱ-2層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂～中粒砂質シルト層(近代)                          | 第Ⅲ-2層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂質シルト層(近世) |
| 第Ⅱ-3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂質シルト層(近代)                        | 第Ⅲ-3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂～粗粒砂質シルト層(近世)   |
| 第Ⅱ-4層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂質シルト層(近代)                        | 第Ⅲ-4層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層(近世)        |

B区南壁セクション



層位

- |                                    |                                   |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 第Ⅰ層 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト層(現代)      | 第Ⅲ-3層 黄灰色(2.5Y5/1)シルト層(近世)        |
| 第Ⅰ-2層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト層(昭和期・空襲火災層) | 第Ⅲ-4層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト層(近世) |
| 第Ⅱ-1層 褐灰色(10YR4/1)粗粒砂質細礫層(近代)      | 第Ⅲ-5層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層(近世)       |
| 第Ⅱ-2層 黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルト層(近代)     | 第Ⅳ-1層 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土層(基盤層)    |
| 第Ⅱ-3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト層(近代)  | 第Ⅳ-2層 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～中粒砂層(基盤層)   |
| 第Ⅲ-1層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層(近世)      | 第Ⅳ-3層 灰褐色(7.5YR4/2)粗粒砂質細礫層(基盤層)   |
| 第Ⅲ-2層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層(近世)      | 第Ⅳ-4層 灰褐色(7.5YR4/2)細礫質粗粒砂層(基盤層)   |

B-1区北壁セクション

- |             |      |      |       |        |         |
|-------------|------|------|-------|--------|---------|
| ■ 現代(空襲火災層) | ■ 近代 | ■ 近世 | ■ 基盤層 | ■ 報告遺構 | ■ 未報告遺構 |
|-------------|------|------|-------|--------|---------|

図11 B区セクション図(S=1/80)

いた箇所も多く、検出された遺構の密度もB区に比べ少なかった。また、B区でも同様だが北部では整地層は少なく、地形の低い南部では整地層が多く厚くなっていた。近代層である第Ⅱ層は褐色砂質シルトで、1～5cm大の礫を多く含み、厚さは約25cmを測る。江戸時代の整地層は概ねにぶい黄褐色を呈し、砂質シルトから粘土質シルトでやや粘性があり、1cm以下の小礫を含んでいた。厚さは南部では94cmを測る。基盤層である第Ⅳ層は暗灰黄色シルト層で、細粒から中粒砂と炭化物を含み斑鉄がみられた。

A-2区は今回の調査地で最も標高が高く、地表面から基盤層までの厚さは95cmを測り、第Ⅱ・Ⅲ層は他の調査区に比べ非常に薄くなっている。近代層である第Ⅱ層は一部でみられ、灰黄褐色砂礫

## 2. 堆積層出土遺物

層で厚さは約10cmを測る。江戸時代及びそれ以前の整地層である第Ⅲ層はにぶい黄褐色シルト層で、厚さは約40cmを測る。第Ⅲ-1層は火災層で、第Ⅲ-4層は水田土壌とみられ、畦畔と考えられる高まりが確認されている。また、下部には床土とみられる明黄褐色を呈する酸化鉄の堆積が確認された。第Ⅲ-4層は出土遺物より14～15世紀の堆積層とみられる。基盤層である第Ⅳ層は遺構検出面となった第Ⅳ-1層がシルトで、それ以下は概ね砂または礫の堆積であった。

B-1区北部では昭和期にプール等の建物があつたこともあり攪乱の影響を受けており、近現代の堆積層が厚く、江戸時代の整地層は薄くなつてゐる。江戸時代の整地層である第Ⅲ層はにぶい黄褐色シルト層で、1cm大の礫を少し含み、厚さは約50cmと調査区南部に比べ薄くなつてゐる。基盤層である第Ⅳ層は遺構検出面となった第Ⅳ-1層がシルト質粘土で、それ以下は砂または礫の堆積であつた。

B区南部では戦災層である第Ⅰ-2層が厚く20cm以上を測る箇所もみられる。近代層である第Ⅱ層はにぶい黄褐色細粒砂から中粒砂質シルトで、3cm以下の円礫を多く含み、厚さは約55cmを測る。江戸時代の整地層である第Ⅲ層は灰黄褐色を呈し、砂質シルトから粘土質シルトでやや粘性があり、1cm以下の小礫を含んでゐた。厚さは85cmを測る。基盤層である第Ⅳ層は箇所により異なり、黄灰色粘土質シルトまたは黄灰色粗粒砂層で3cm以下の円礫を含んでゐた。

## 2. 堆積層出土遺物

### (1) 第Ⅰ層出土遺物(図12)

図示した遺物は3～12である。3は陶器焜炉で、円筒形を呈する。二重構造で、前方には窓を有し、底部には五角形の脚を貼付する。回転ナデ調整を施し、底部外面はナデ調整で「清山」の刻印がみられる。胴部外面には緑釉を施す。4は陶器サナである。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは静止糸切り調整である。体部の2箇所には円孔が残存する。5は肥前産の磁器染付端反碗で、外面には区面に波・兎文と圏線、内面には濃地に墨弾きの雷文、見込には山・雲文と圏線の染付がみられる。6は肥前産の磁器染付皿で、全面に透明釉を施し、暈付を釉ハギ、見込は蛇ノ目釉ハギする。内面に唐草文、見込には五弁花文の染付がみられる。7は肥前産の磁器染付碗蓋で、外面に桜文と圏線、口縁部内面に四方櫛文と圏線の染付、天井部内面にコンニャク印判による五弁花文がみられる。8は肥前系の磁器染付蓋物蓋で、円形の摘がつく。全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。外面には宝文・草花文と圏線の染付がみられる。9は関西系とみられる磁器染付筆筒で、上部に透かし、胴部外面には濃地に梅文の染付がみられる。10は中国景德鎮窯系の青花皿で、見込に宝文の染付がみられる。11は瓦質土器焜炉で、箱形を呈する。二重構造で、内部構造は円形を呈する。たたら成形で、内面にはナデ調整を施す。上面角部に円孔が貫通し、側面には菊花文の印刻がみられる。12は土製品泥面子である。型成形で、上面は菊水文で、下面はナデ調整を施す。

### (2) 第Ⅱ層出土遺物(図13～19)

図示した遺物は13～81である。13は京都産の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による注連縄文がみられる。14は陶器碗で、全面に灰釉を施し、暈付は釉ハギする。15は淡路珉平焼とみられる陶器碗で、内外面に光沢のある檸檬色の釉を施す。16は京都産とみられる陶器蓋で、摘の4箇所に切り込みを入れる。外面には褐釉を施し、天井部内面は無釉で京都五代清水六兵衛銘とみられる六角「清」の刻印が残る。17は瀬戸・美濃産の陶器折縁皿で、口縁部内面には丸彫

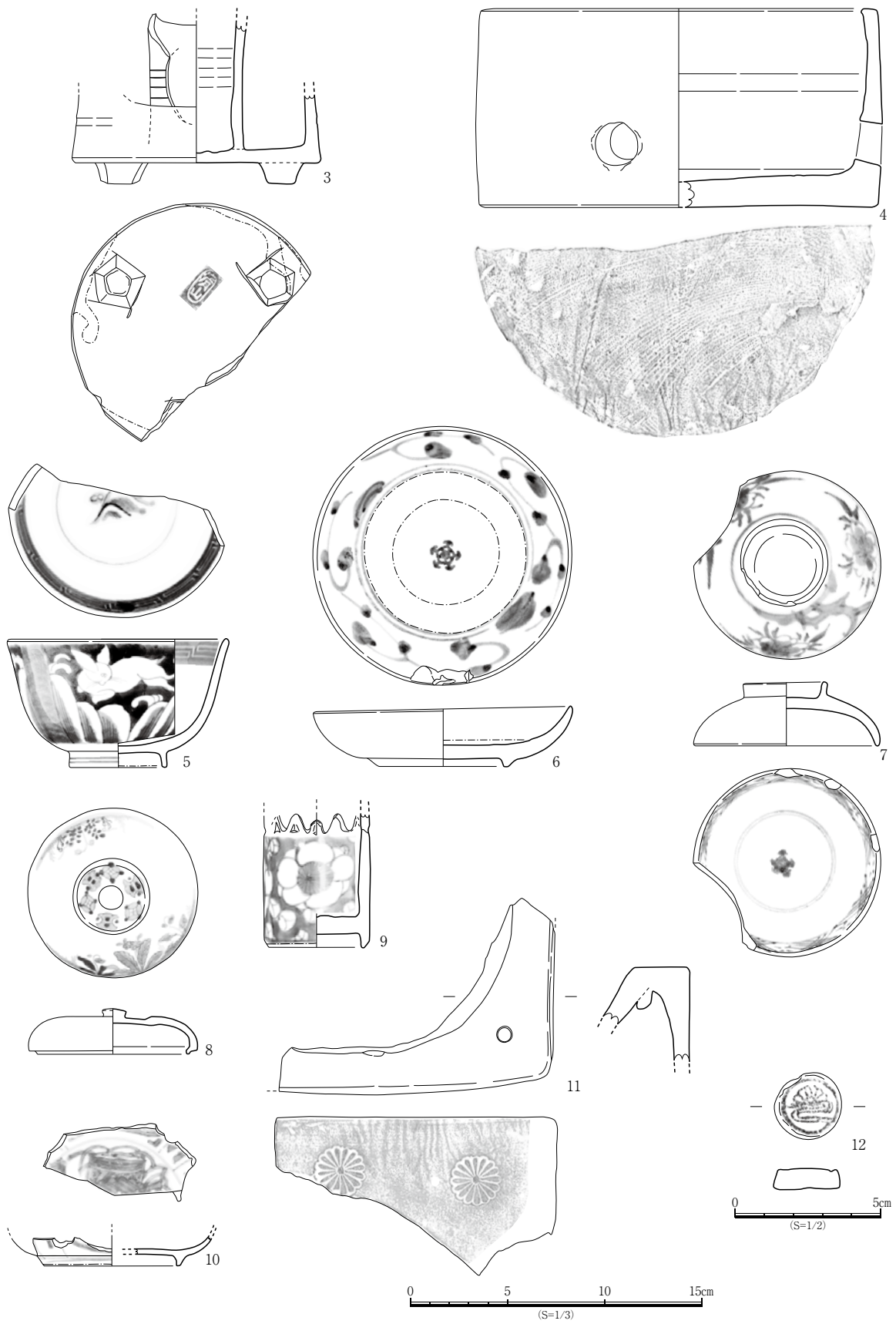


図12 第Ⅰ層出土遺物実測図

2. 堆積層出土遺物

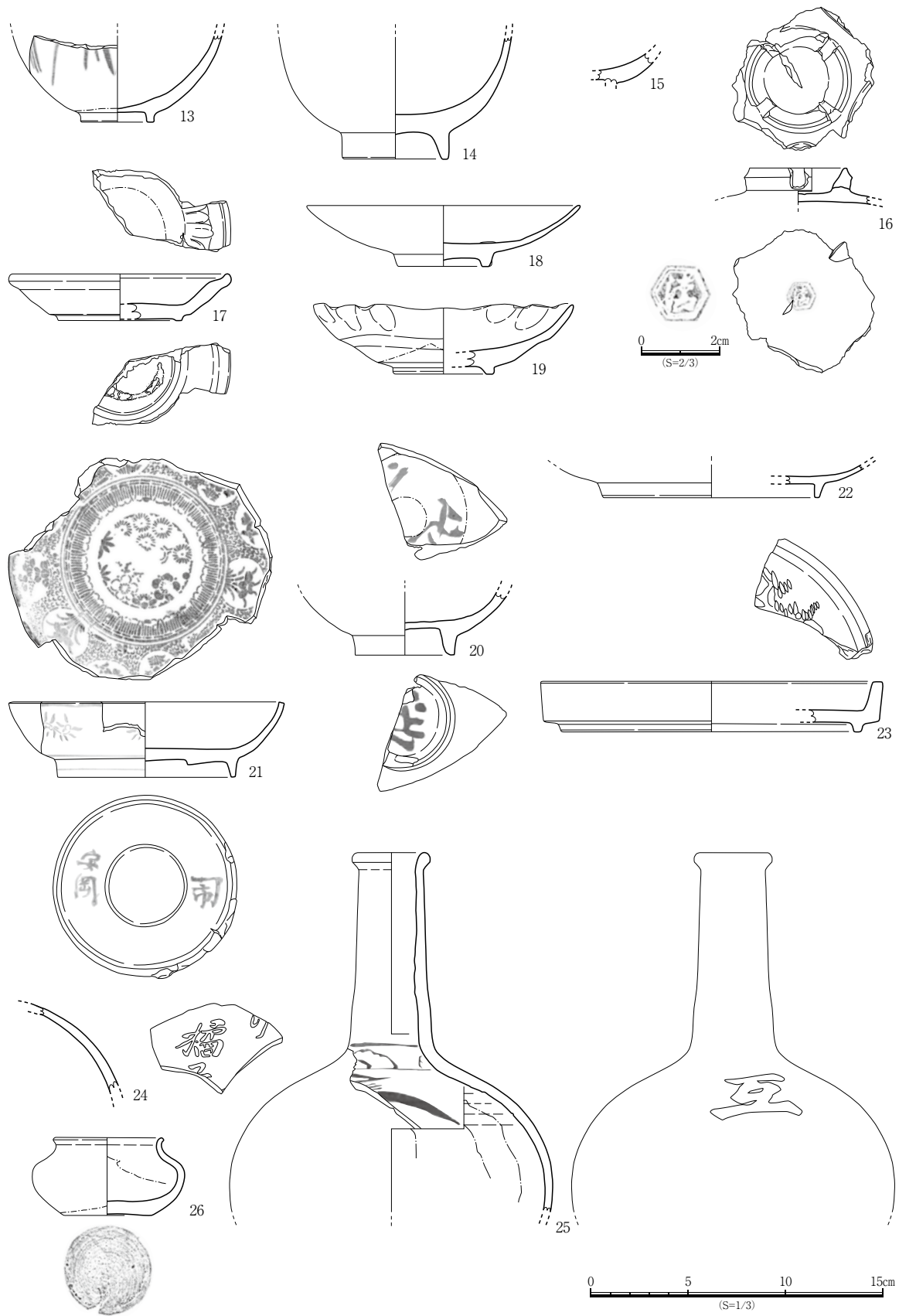


图13 第II層出土遺物実測图1



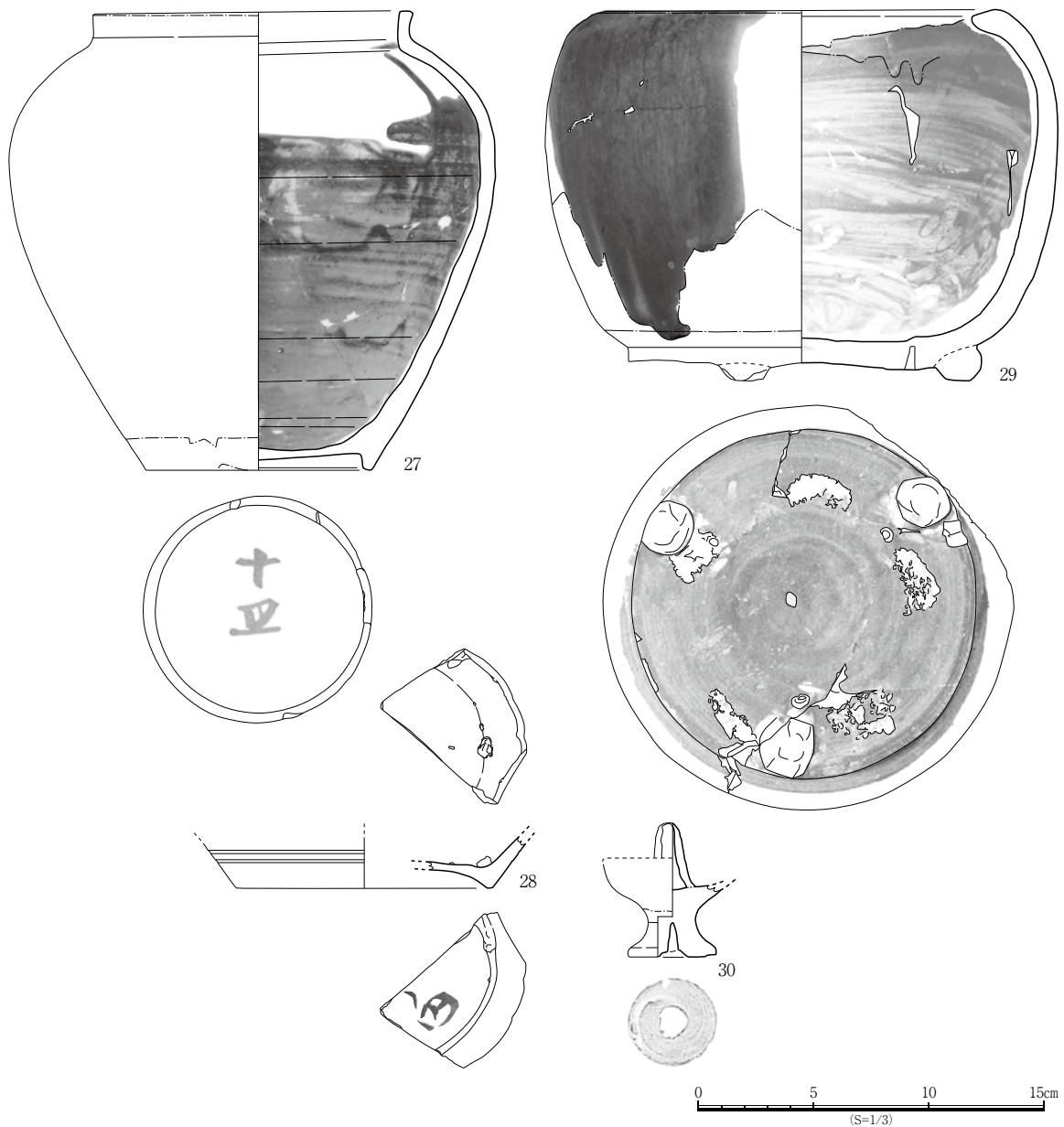


図14 第Ⅱ層出土遺物実測図2

による縞文がみられる。全面に緑釉を施し、見込は釉ハギする。18は肥前内野山窯の陶器皿で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。見込と畳付には砂目痕が4箇所に残る。19は唐津系灰釉陶器波縁皿で、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には胎土目痕が残る。20は能茶山窯の陶器皿で、内面から体部外面まで鉄釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。見込と高台内には墨書がみられる。21は陶器輪花皿で、蛇ノ目凹形高台を呈し、全面に透明釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギする。文様は型紙摺によるもので、外面には草花文と圏線、内面には花文と松竹梅文がみられる。高台内には「安岡」の墨書が残る。22は陶器皿で、全面に光沢のある黄色釉を施す。23は志野焼とみられる向付で、全面に長石釉を施し、畳付は釉ハギする。見込には上絵付の痕跡が残る。24は陶器瓶で、外面には灰釉を施し、釘彫による「り」「橋」字がみられる。25は陶胎染付瓶で、口縁部内面から外面に灰釉を施す。外面には半花文の染付と釘彫による「互」字がみられる。26は陶器小壺で、回転ナデ調

2. 堆積層出土遺物

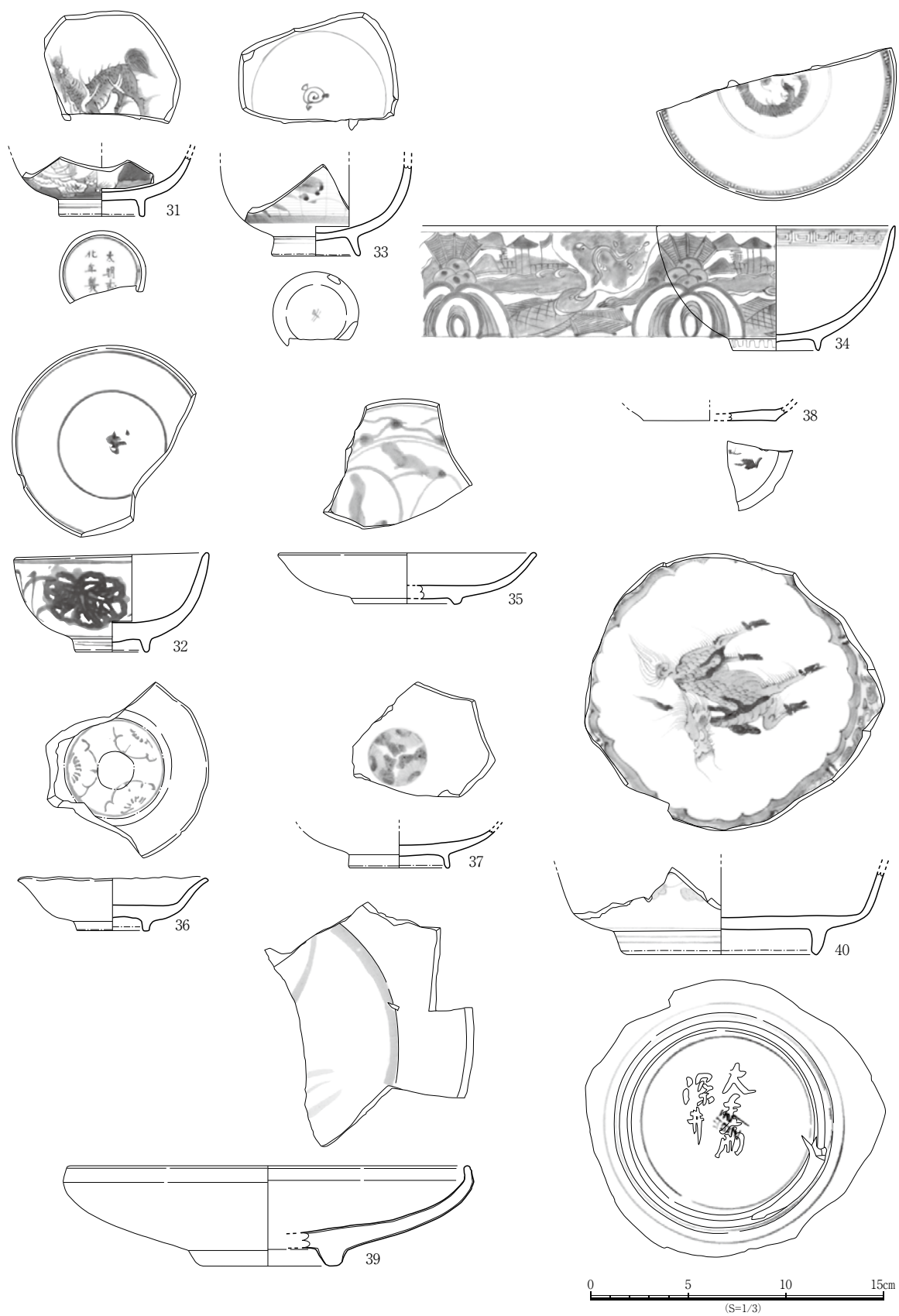


圖15 第Ⅱ層出土遺物實測圖3

整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。体部内面から体部外面まで鉄釉を施し、その後口縁部に灰釉を施す。27は陶器壺で、内面の体部から底部と外面の口縁部から体部に鉄釉を施し、口縁端部は釉ハギする。高台内には墨書が残る。28は陶器鍋で、内面は灰釉を施し、外面は回転削り調整で、底部には墨書がみられる。29は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で、円筒形を呈し、底部には円形の脚を3箇所に貼付する。内面と底部外面は鉄釉を刷毛塗りし、口縁部内面から体部外面は灰釉のち緑釉と白色釉を流し掛けする。脚の内側には刺突痕、見込と底部には砂目痕が残る。30は陶器乗燭で、台付たんころ形である。芯立は馬蹄形を呈し、脚部には軸孔がみられる。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部から杯部外面には鉄釉を施す。31は肥前有田産の磁器染付丸碗で、外面は濃地に象文、内面は麒麟文の染付、高台内には「太明成化年製」の銘がみられる。32は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面にはコンニャク印判による花文と松葉文、圏線の染付、見込には鷲文と圏線の染付がみられる。33は能茶山窯の磁器染付碗で、外面には簾に草花文、見込には宝文と圏線の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。34は肥前産の磁器染付丸碗で、外面は山水文と魚文・櫛歯文、内面は雷文、見込は龍文と圏線の染付がみられる。35は肥前産の磁器染付皿で、内面に染付の一部がみられる。36は肥前産の磁器色絵輪花皿で、全面に透明釉を施し、暈付は釉ハギ、見込を蛇ノ目釉ハギする。見込の蛇ノ目釉ハギ部分には墨色の梅文の上絵付がみられる。37は磁器鉄釉染付皿で、外面には鉄釉、内面は透明釉を施す。見込には丸に半菊文の染付がみられる。38は磁器皿で、内面には白磁釉を施す。外面は無釉で底部には墨書がみられる。39は肥前産の青磁中皿で、見込には陰刻による文様がみられる。40は肥前産の磁器染付皿で、外面は草花文と圏線、見込は麒麟文の染付、高台内は圏線と銘、白玉描による「大手筋 深井」の文字がみられる。41は肥前有田産の磁器染付輪花大皿で、外面は宝文・鳥文・花文、口縁部内面は紗綾文、見込は花に窓絵で窓内に風景・人物・馬・鯉・鳥文の染付がみられる。42・43は磁器色絵小皿で、見込には松文と「村田」字の上絵付の痕跡が残る。44は磁器色絵稜花皿である。口鏝で、外面は木と鳥文の染付と朱・緑色の上絵付による草花文、内面は桜花文の染付と朱・金・緑色の上絵付による草花文がみられる。45は磁器染付合子蓋で、全面に透明釉を施し、口縁端部は釉ハギする。外面には斜格子文と花文・圏線の染付がみられる。46は肥前系の磁器染付蓋物蓋で、全面に透明釉を施し、かえり部は釉ハギする。天井部外面には丸文と蝶文、口縁部外面には雷文の染付がみられる。47は磁器色絵小杯で、外面に朱色の草花文と扇文・圏線、銘の上絵付がみられる。48は肥前系の磁器色絵紅猪口で、外面には朱色の上絵付がみられる。49は肥前有田産の磁器色絵猪口で、蛇ノ目凹形高台を呈する。外面には蓮弁文の染付と朱・緑・墨色の上絵付による風景文、口縁部内面には四方禰文、見込には圏線の染付がみられる。50は肥前産の白磁紅皿である。型打成形で、菊花形を呈する。内面から体部外面まで白磁釉を施す。51も肥前産の白磁紅皿である。型打成形で、外面に型押による陽刻の蛸唐草文がみられる。内面から口縁部外面まで白磁釉を施す。52は肥前産の磁器染付瓶で、口縁部内面から外面に透明釉を施す。肩部外面には宝文の染付がみられる。53は肥前産の磁器染付小瓶で、口縁部内面から外面に透明釉を施し、暈付は釉ハギする。外面には草花文と土坡に草文の染付がみられる。54は肥前系の磁器染付角鉢で、口縁部は輪花形をなす。型打成形で、外面に宝文または瓔珞文、内面には区画に鳥文と山水文、見込には宝文の染付がみられる。55も肥前系の磁器染付角鉢で、型打成形である。外面は区画に雲龍文と樹木文・斜格子に卍、高台外面に櫛歯文、口縁部内面は雷文、見込は牡丹文の染付がみられる。56は肥前産の磁器染付杯台で、杯部は多角形を呈するものとみられる。杯部



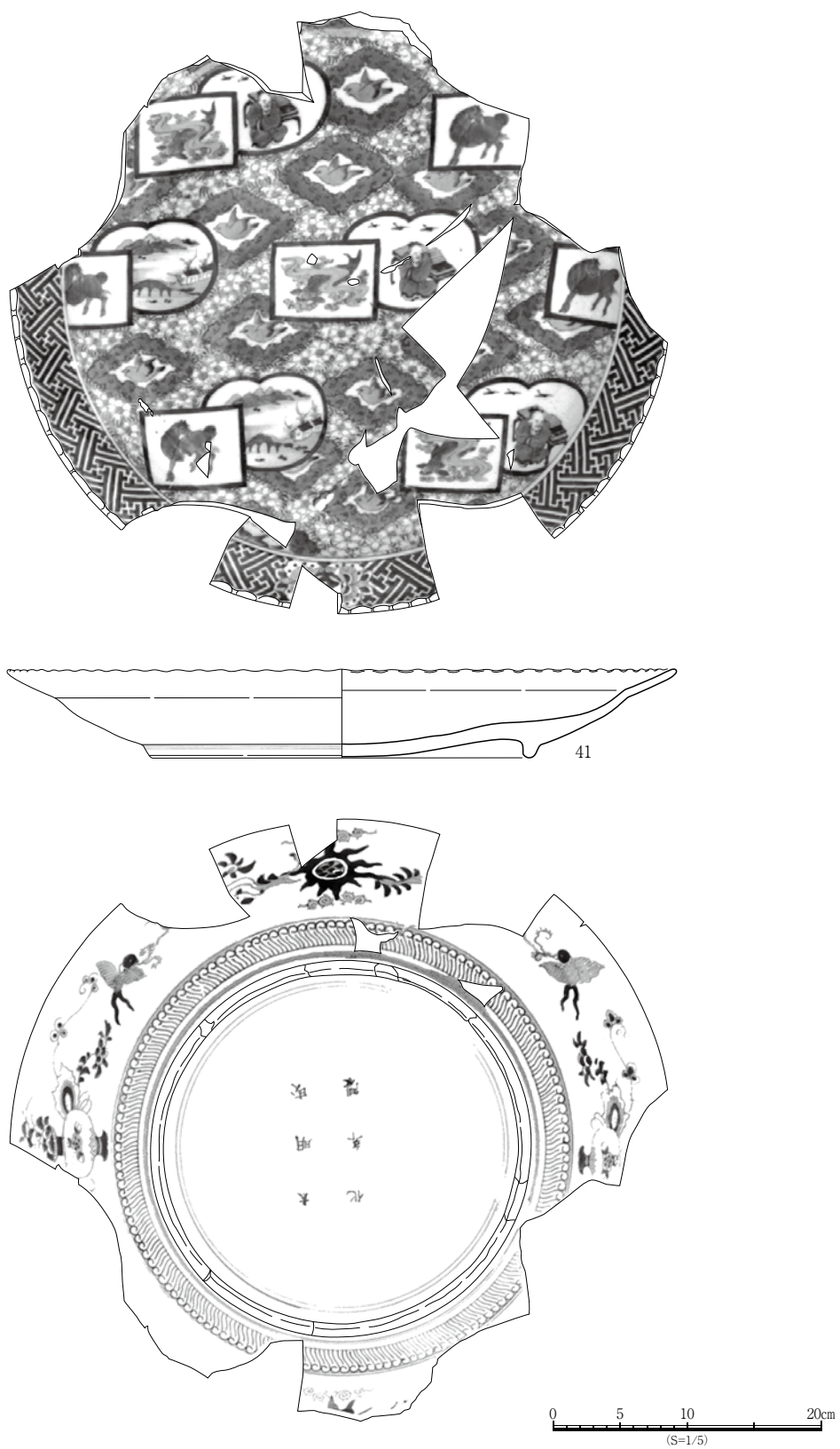


图16 第Ⅱ層出土遺物实测图4

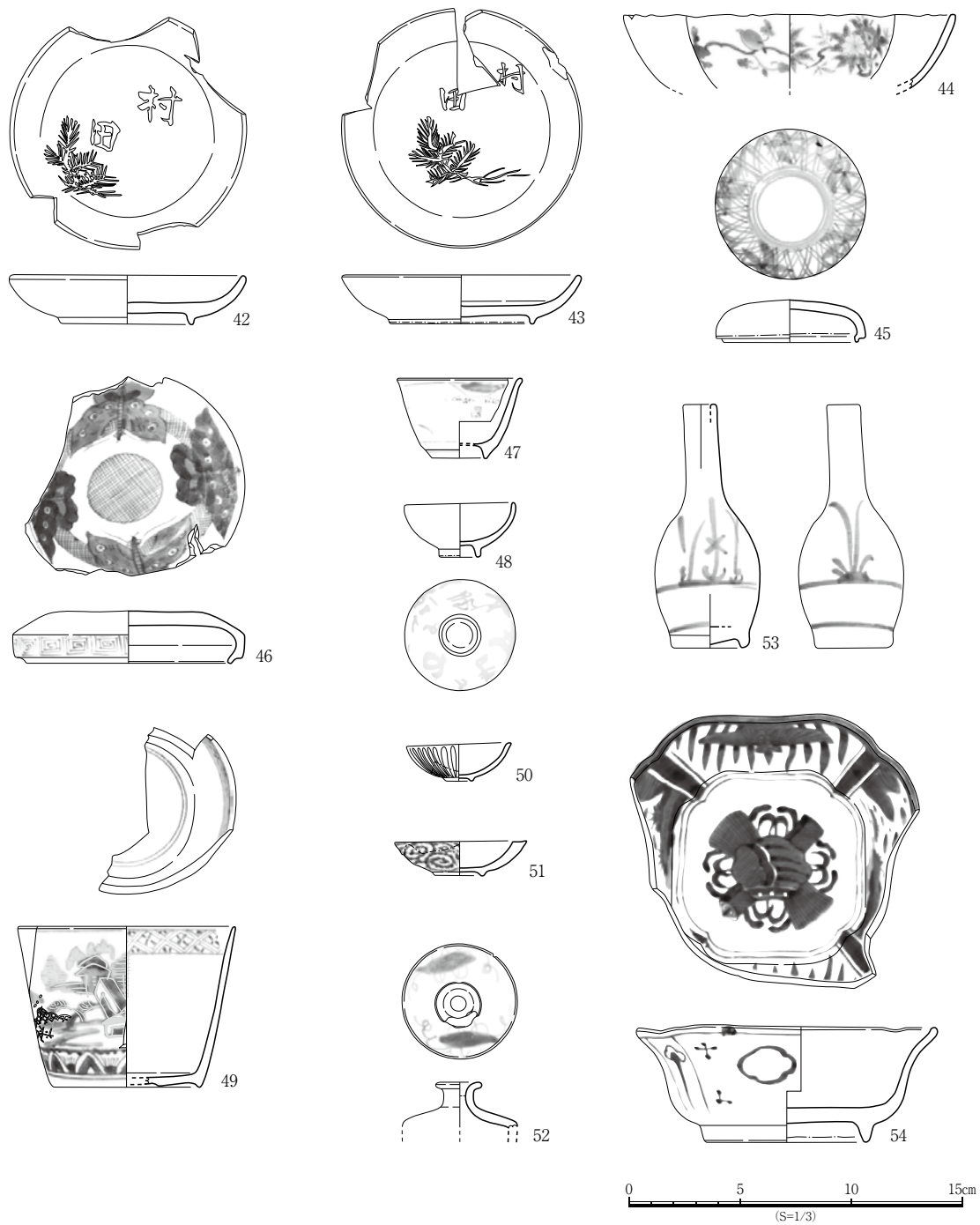


図17 第Ⅱ層出土遺物実測図5

外面には風景文，杯部内面には丸文と雷文，脚部外面に宝文と櫛歯文・圈線の染付がみられる。57は磁器ミニチュアで，鉢形を呈する。型打成形で，外面に型押による菊弁状の文様がみられる。内面から口縁部外面に白磁釉を施す。58も磁器ミニチュアで，囲炉裏形を呈する。型打成形で，中空である。外面には鉄釉を施す。59は磁器筆筒で，箱形を呈し，上部に亀甲形の透かしがみられる。外面は銅板転写による文様で，口縁部は菊・牡丹文，胴部には草花文と風景文・人物文などがみられる。60は関西系とみられる磁器染付文鎮で，全面に透明釉を施し，底部は釉ハギする。外面には花唐草

2. 堆積層出土遺物

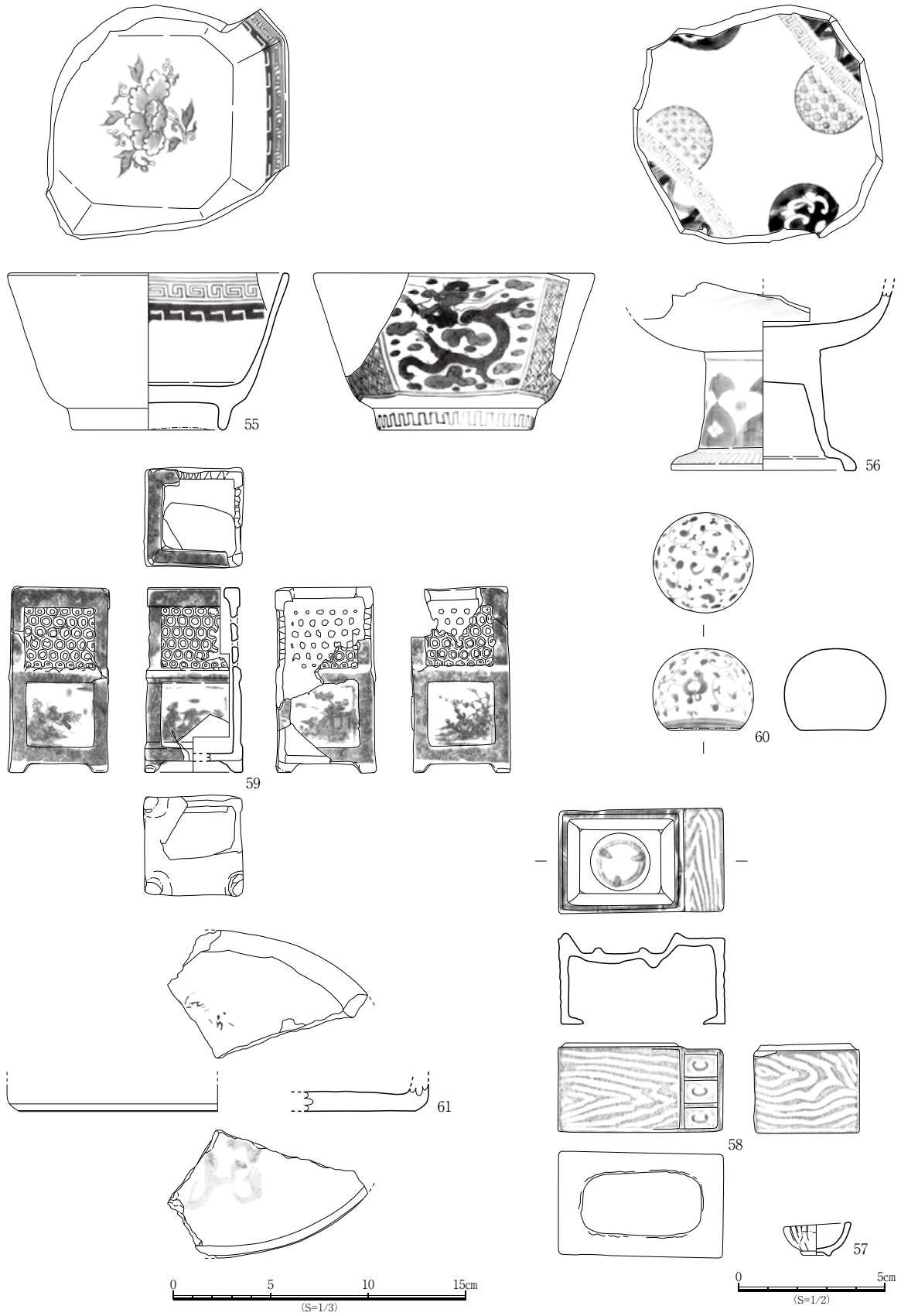


图18 第II層出土遺物実測图6

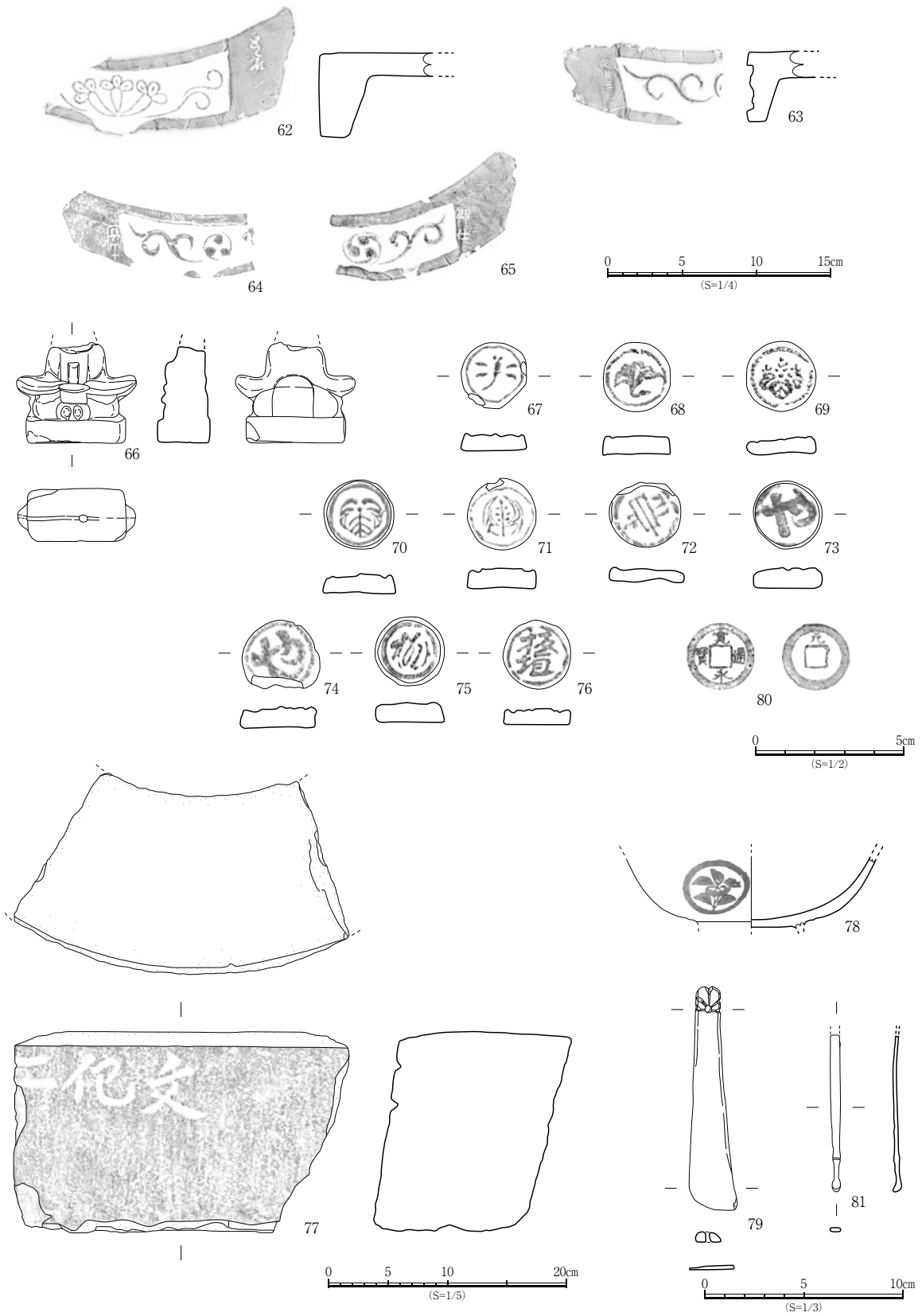


図19 第II層出土遺物実測図7

## 2. 堆積層出土遺物

文の染付がみられる。61は土師器焜炉で、円筒形を呈する。回転ナデ調整を施し、底部外面は回転削り調整を加える。底部外面には墨書がみられる。62は軒平瓦で、中心飾りは三花文である。瓦当右側に「とく□」の刻印がみられる。63も軒平瓦で、中心飾りは三巴文とみられる。瓦当左側に「夜須三」の刻印がみられる。64は軒椽瓦で、中心飾りは三巴文である。瓦当左側に「中山竹」の刻印がみられる。65も軒椽瓦で、中心飾りは三巴文である。瓦当右側に「御仕」の刻印がみられる。66は土製品人形で、天神様である。型成形で、中実である。台座は方形で、下面には径3mmの円孔がみられ、頸部まで貫通する。67～76は土製品泥面子である。型成形で、下面はナデ調整である。67は蜻蛉文、68は鶴文か、69は桐文、70は蔦文か、71は文様不明、72は扇子文、73・74は「や」字、75は「仇」字か、76は「板垣」字である。77は石製品で、輪状を呈する。上面と外側は丁寧な加工を施し平滑で、内側と下面は粗い加工痕が残る。側面には「文□□」の刻書がみられる。78は漆器椀で、外面は黒塗で朱の丸に橘文か、内面は赤塗である。79は骨角製品篋で、上端は断面半円形を呈し厚く、円孔がみられる。先端は幅が広く、特に片端を薄く加工する。上部の片面には放射状の陰刻文様がみられる。裏面には円孔の上部に縦方向の凹みがみられ、円孔に紐を通していた可能性がある。80は銭貨で、寛永通寶である。81は金属製品で、匙または耳搔とみられる。柄は扁平で、沈線が1条入る。先端は柄より若干屈曲し、厚く丸くなる。

### (3) 第Ⅲ層出土遺物

第Ⅲ-1層出土遺物は4面より上層で出土した遺物、第Ⅲ-2層出土遺物は3面より上層で出土した遺物、第Ⅲ-3・4層出土遺物は2面より上層で出土した遺物である。第Ⅲ層出土遺物は地区ごとに報

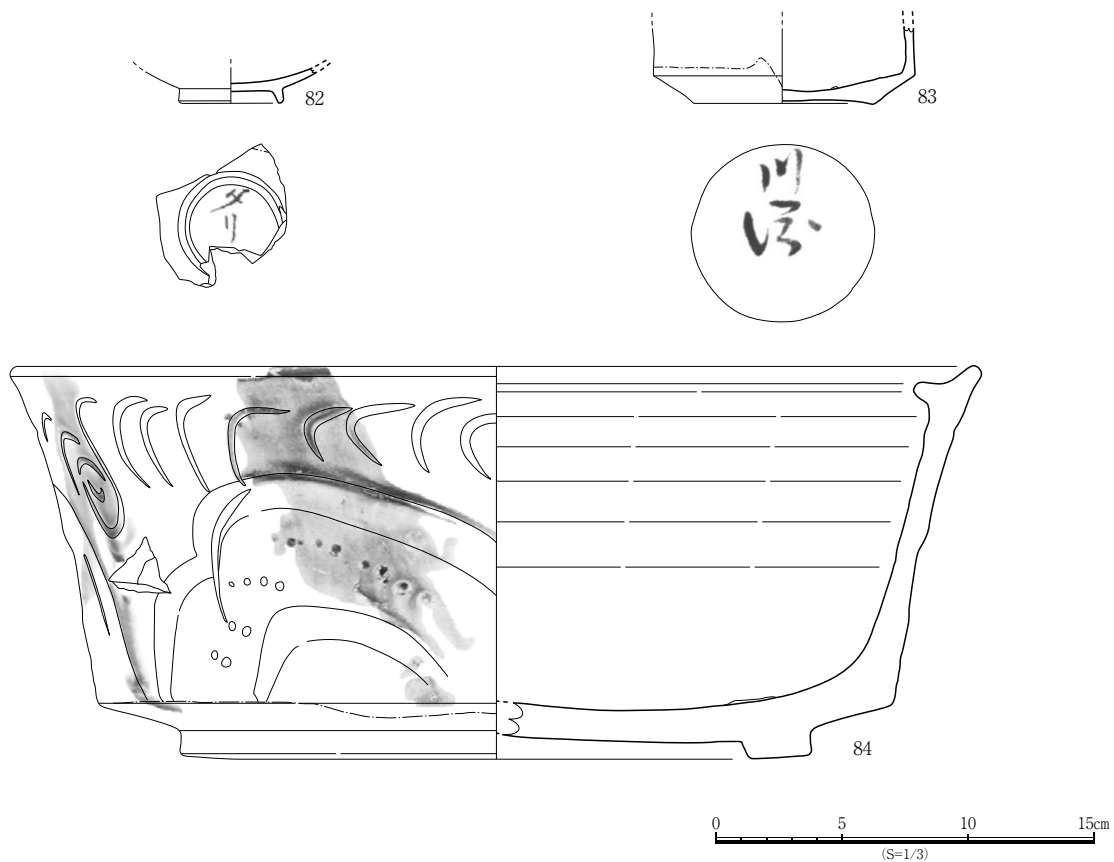


図20 A-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測図1



告する。

① A-1区第Ⅲ-1層出土遺物(図20・21)

図示した遺物は82～92である。82は陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「父母」の墨書がみられる。83は京都系の陶器蓋物で、内面から体部外面まで灰釉を施す。底部には「川添」の墨書がみられる。84は瀬戸・美濃産の陶器鉢で、内面から底部付近まで灰釉を施したのち外面の一部に緑釉と鉄釉を掛け流す。外面には陰刻による文様、見込には砂目痕がみられる。85は肥前産の磁器染付小碗である。口鏝で、見込には虫文の染付がみられる。86は肥前有田産の磁器色絵小碗で、外面に朱色の丸に草花文で区画間は朱色地に白抜き唐草文、口縁部内面は朱色の蓮弁文が

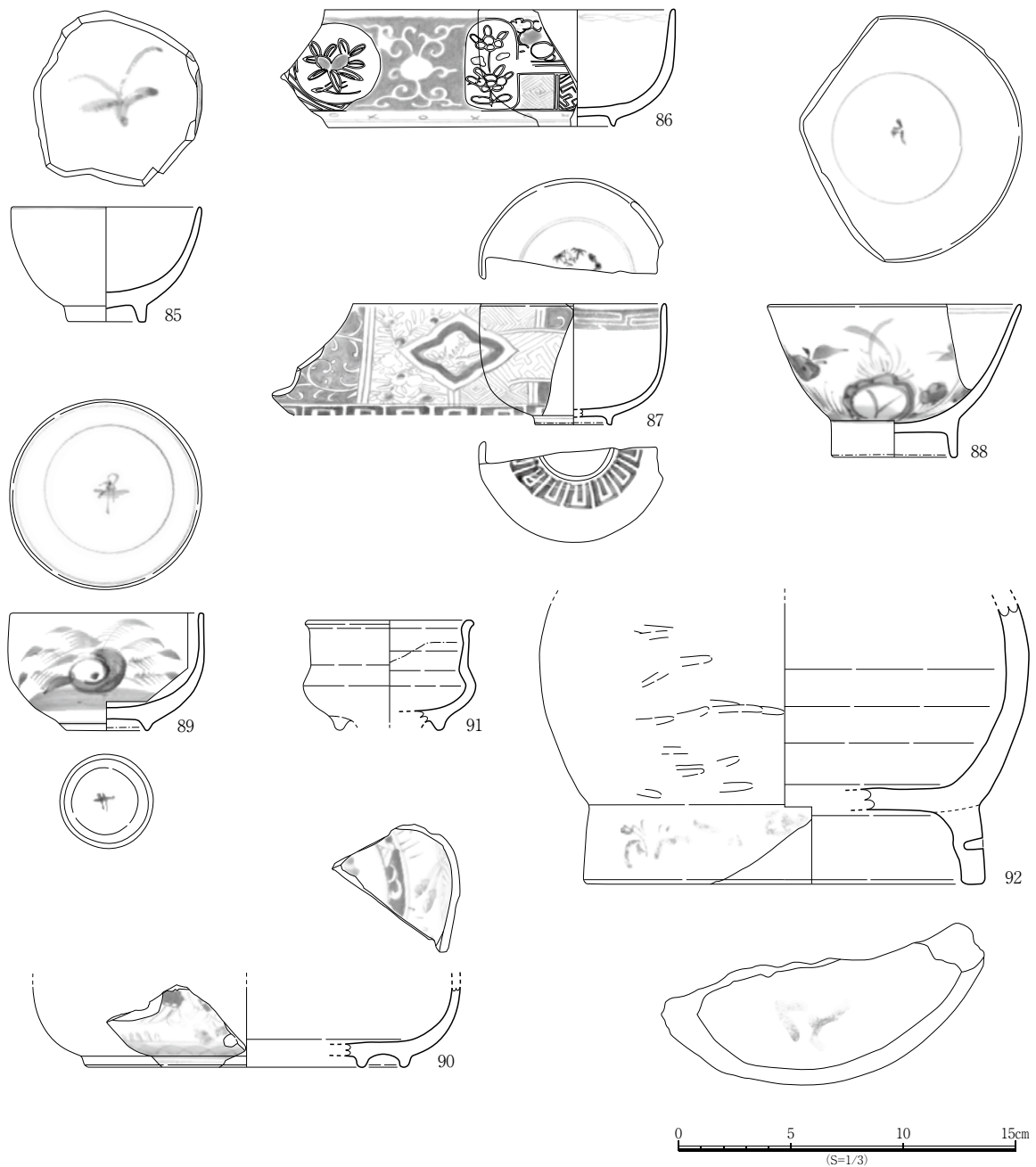


図21 A-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測図2

## 2. 堆積層出土遺物

みられる。87も肥前有田産の磁器色絵小碗で、外面には蓮弁文の染付と朱・緑色の区画に草文と唐草文の上絵付、口縁部内面に墨弾きの雷文、見込に松竹梅文と圏線の染付がみられる。88は肥前系の磁器染付広東碗で、外面には雪輪文、内面に圏線、見込に圏線と不明文様の染付がみられる。89は能茶山窯の磁器染付小碗で、外面には葦に鳥文と圏線、内面に圏線、見込に圏線と鷺文の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。90は肥前産の磁器色絵鉢で、二重高台を呈する。内外面に染付と朱・墨色の上絵付による文様がみられる。91は磁器香炉で、口縁部内面から外面に青磁釉を施す。底部には円錐形の脚が付く。92は土師器焼炉で、円筒形を呈し、輪状の脚を貼付する。調整は内面が回転ナデ、胴部外面は横方向の磨き、脚部は横ナデ、底部外面はナデである。脚部外側の1箇所に円孔、脚部外面と底部に墨書がみられる。見込の中央部に煤が付着する。

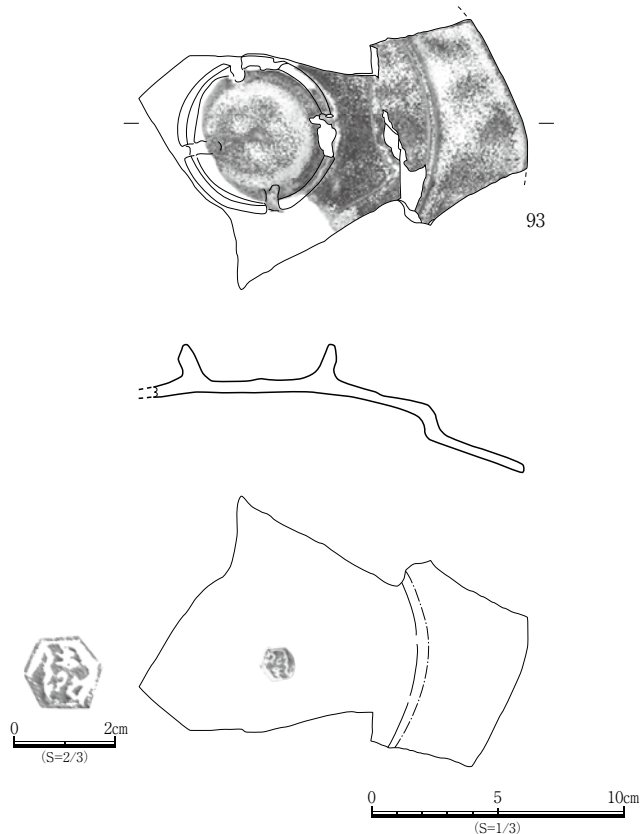


図22 A-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測図

### ② A-1区第Ⅲ-2層出土遺物(図22・23)

図示した遺物は93～97である。93は京都産とみられる陶器変形蓋で、口縁部は多角形を呈し、摘は4箇所に切り込みがみられる。天井部内面は灰釉を施し、口縁部内面は無釉、外面は銅緑釉と白色釉の掛け分けである。天井部内面には京都五代清水六兵衛の六角「清」の印刻がみられる。94・95は肥前有田産の磁器染付輪花皿で、口縁部内面には型押とみられる陽刻の文字または文様が施される。外面には圏線と染付の一部がみられ、見込には竹に鳥文と圏線の染付、高台内には圏線と銘、3箇所に目痕が残る。96は須恵器杯で、底部には扁平な高台を貼付する。内面から体部外面は回転ナデ調整、底部外面はナデ調整である。97は骨角製品篋で、上端は細く薄く加工し円孔をあける。先端は幅が広く厚くなる。表面には「正」、裏面には「慶応元丑七月□ 正」の刻書がみられる。

### ③ A-2区第Ⅲ-3層出土遺物(図23)

図示した遺物は98で、土師質土器杯である。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

### ④ B区およびB-1区第Ⅲ-1層出土遺物(図24・25)

図示した遺物は99～128である。99は尾戸窯の陶器丸碗で、内面から高台まで灰釉を施し、口縁部内外面の釉溜りは白く濁る。外面には鉄錆による笹文がみられる。100は瀬戸・美濃産の陶器皿で、全面に緑釉を施し、見込と底部は輪状に釉が禿げる。101は陶器急須蓋で、外面には鉄錆による文様と圏線がみられ、透明釉と3箇所に緑釉を施す。内面は回転ナデ調整で、底部は回転糸切り調整であ

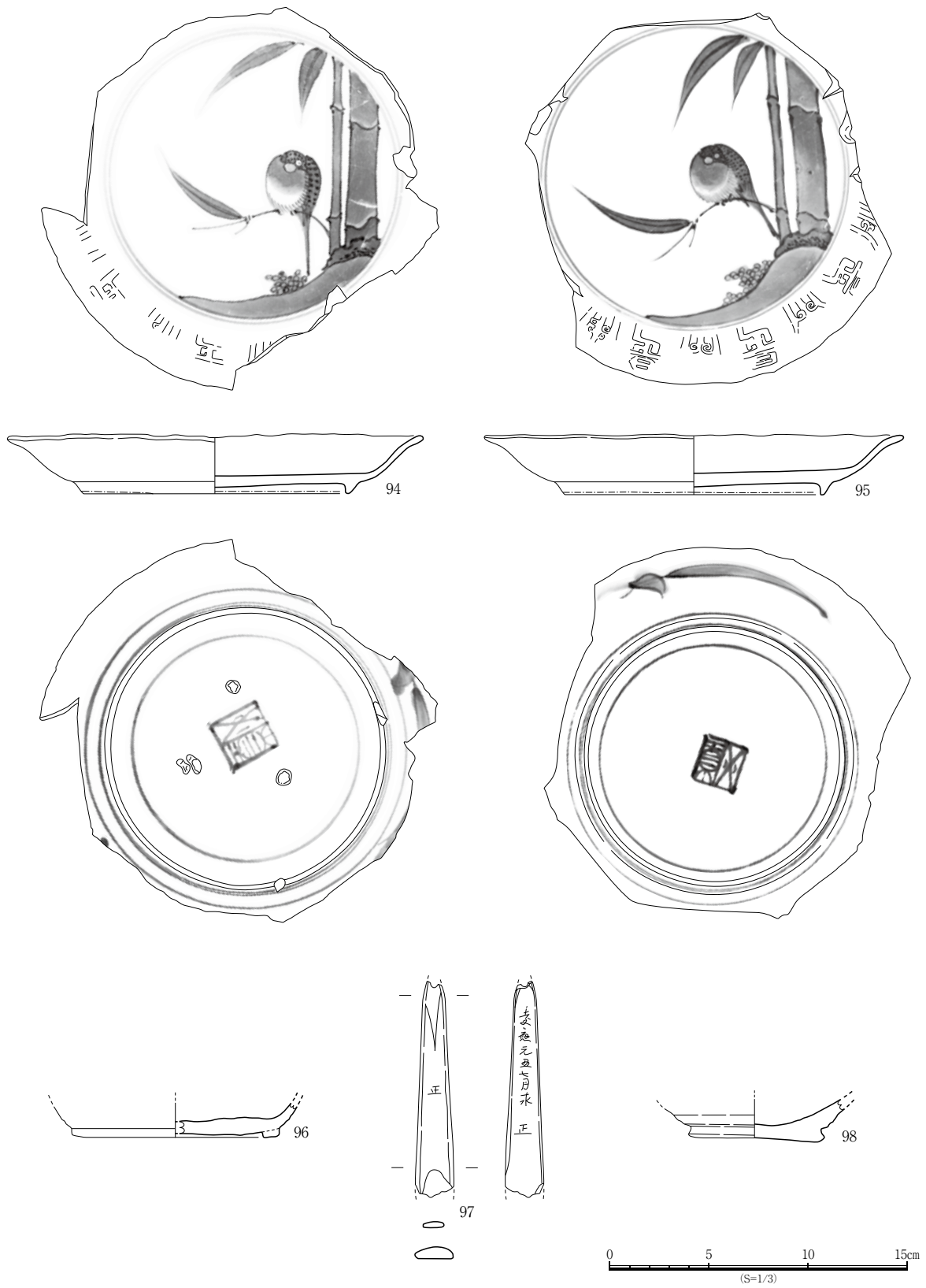


図23 A-1区第Ⅲ-2層・A-2区第Ⅲ-3層出土遺物実測図



2. 堆積層出土遺物

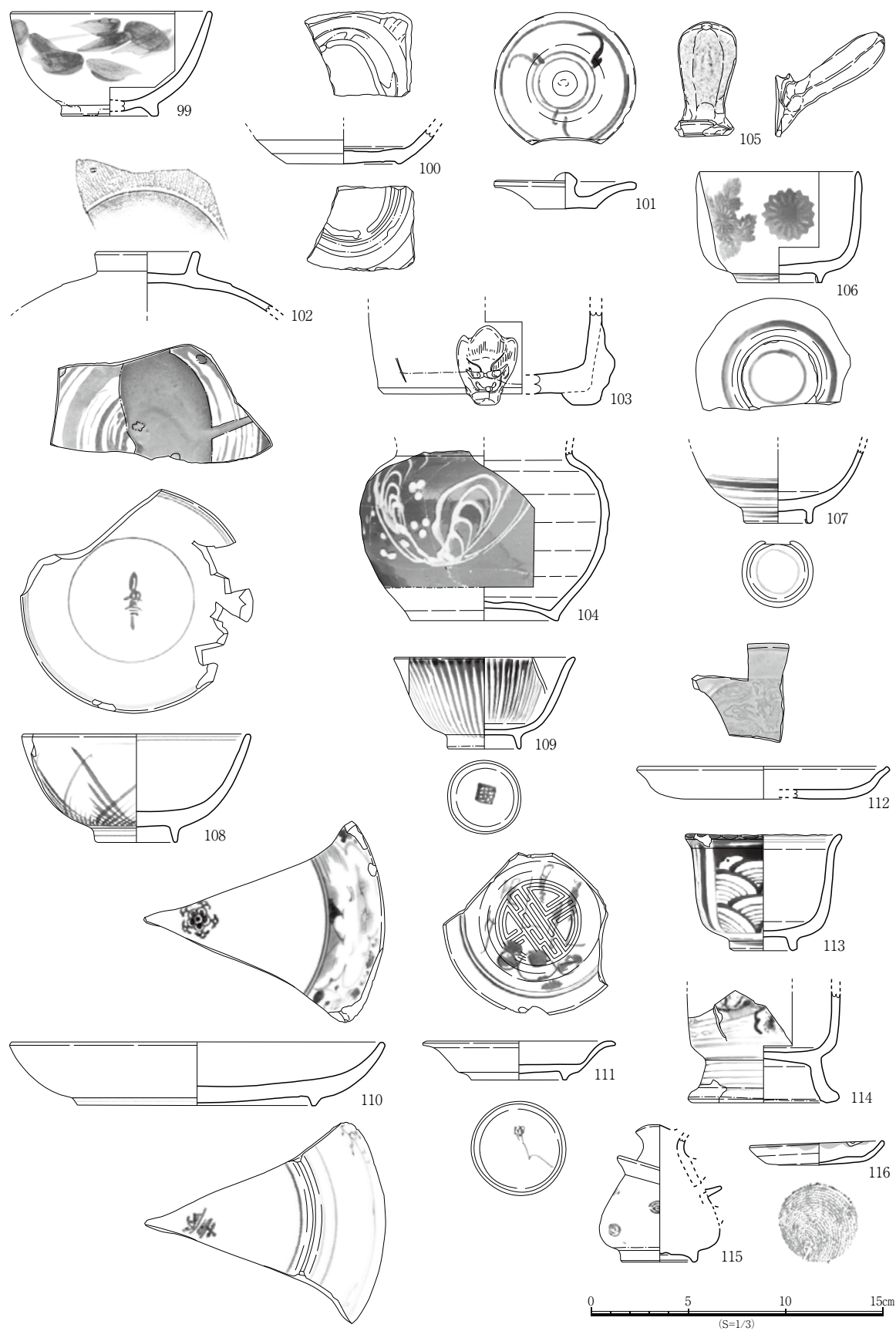


图24 B区·B-1区第Ⅲ-1层出土遗物实测图1

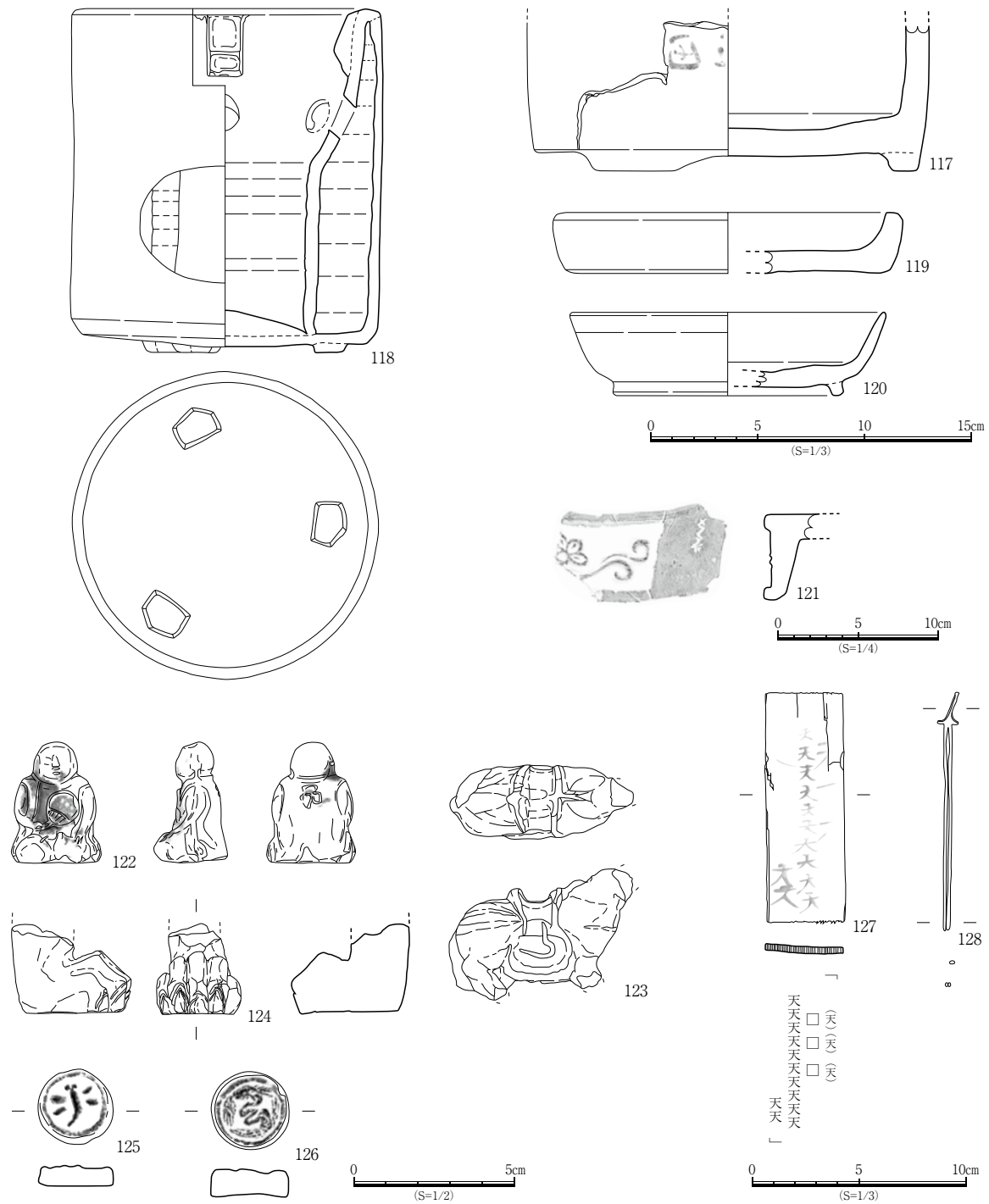


図25 B区・B-1区第Ⅲ-1層出土遺物実測図2

る。102は陶器行平鍋蓋で、内面は鉄釉を刷毛塗り後、一部に灰釉を掛ける。外面は飛鉤文である。103は陶器鉢で、底部には獣面の脚を貼付する。回転ナデ調整で、胴部外面には暗褐色の釉を施す。底部外面は回転削り調整である。104は陶器土瓶である。回転ナデ調整で、底部外面には回転削り調整を加える。胴部外面には緑釉を施したのち、文様をイッチン描きし、その後透明釉を施す。内面と底部外面は無釉である。105は陶器鍋の把手で、口縁部が一部残る。全面に灰釉を施し、口縁端部は釉ハギする。把手上面には型押による文様が見られる。106は肥前産の磁器染付碗で、外面にはコン

## 2. 堆積層出土遺物

ニャク印判による菊花文と圏線の染付がみられる。107は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面には圏線が9条、高台内には圏線が1条みられる。高台内には砂が付着する。108は肥前系の磁器染付碗で、外面には草文と圏線、口縁部内面に2条の圏線、見込に圏線と水に岩文とみられる染付を描く。109は瀬戸・美濃産の磁器染付端反碗で、内外面に木賊文の染付、高台内に銘がみられる。110は肥前産の磁器染付中皿で、外面は唐草文と圏線、口縁部内面は山水文、見込は五弁花文の染付、高台内には圏線の染付と「寿」の銘がみられる。111は瀬戸・美濃産の磁器色絵小皿である。木型打込成形で、見込に型押による陰刻の寿字文と朱色の俳句と墨・金色による文様の上絵付がみられる。高台内には朱色で「仲人」の上絵付がみられる。2693と2950と組になるものと考えられる。112は淡路珉平焼の磁器小判形皿で、全面に黄色釉を施す。型打成形で、見込には型押による陰刻の雲龍文、底部には目痕がみられる。113は肥前産の磁器染付輪花杯で、外面に青海波文と竹文とみられる染付、内面に圏線3条を描く。114は肥前系とみられる磁器染付高杯で、外面には舟文と圏線の染付がみられる。見込は粗雑なナデ調整で、凹凸が残る。115は磁器染付油徳利で、受部と把手を貼付する。口縁部は片口状をなし、受部は大きく傾斜し、受部の上には1箇所円孔を穿つ。内面から高台付近まで透明釉を施し、胴部外面には渦巻文の染付がみられる。116は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着する。117は土師器焜炉とみられる。円筒形を呈し、底部には脚を貼付する。内面はハケ調整、外面は丁寧なナデ調整、底部外面はナデ調整である。胴部外面には墨書がみられる。118は京都系の白色系土師器焜炉で、円筒形を呈する。前方には楕円形の窓を有し、口縁部内面には台形の突起、底部には五角形の脚を3箇所に貼付する。内部構造は上部に円孔、下部には方形の窓がみられる。調整は回転ナデで、外部構造の底部外面は無調整で一部にナデ調整を加える。119は関西系の土師器焙烙である。回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。120は須恵器杯で、底部に高台を貼付する。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切り調整とみられる。121は軒平瓦で、中心飾りは三花文とみられる。瓦当右側に「とく平」とみられる刻印が残る。122は土製品人形で、団扇を持つ人物形である。型成形で、中実である。外面には透明釉と一部に緑釉が掛かる。123も土製品人形で、馬形である。型成形で、中実である。124は土製品人形または火鉢脚部とみられ、獣足形である。手捻り成形で、中実である。下面を除き緑釉を施す。125・126は土製品泥面子である。型成形で、下面はナデ調整を施す。125は蜻蛉文、126は鶴文である。127は木簡で、短冊形を呈する。表面は「天天天天天天天天 天天」の墨書が残る。128は金属製品簪である。上端は薄く扁平で、先端は細く丸く加工する。

### ⑤ B-1区第Ⅲ-1-1層出土遺物(図26)

第Ⅲ-1-1層はB-1区南東部の一部で確認された火災層で、図示した遺物は129～147である。129は陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による文様の一部が残存する。130は陶器丸碗で、内面から高台付近まで藁灰釉を施す。131は焼締陶器小皿である。回転ナデ調整を施し、体部外面には回転削り調整を加える。口縁部には煤が付着する。内面から口縁部外面までは鉄釉を施す。132は陶器鉢である。回転ナデ調整で、体部内面から外面底部付近まで鉄釉を施す。133は陶器足付ハマで、中央には円孔があく。上面と下面は回転糸切り調整で、側面と足はナデ調整である。下面には2箇所に足が残存する。134は肥前産の磁器染付丸碗で、高台内と外面に圏線と花文とみられる染付の一部が残る。135は瀬戸・美濃系の磁器染付碗で、外面には扇文と圏線、内面には圏線、見込には松葉文の染付がみられる。136は肥前産の磁器染付皿で、外面は唐草文と圏線、

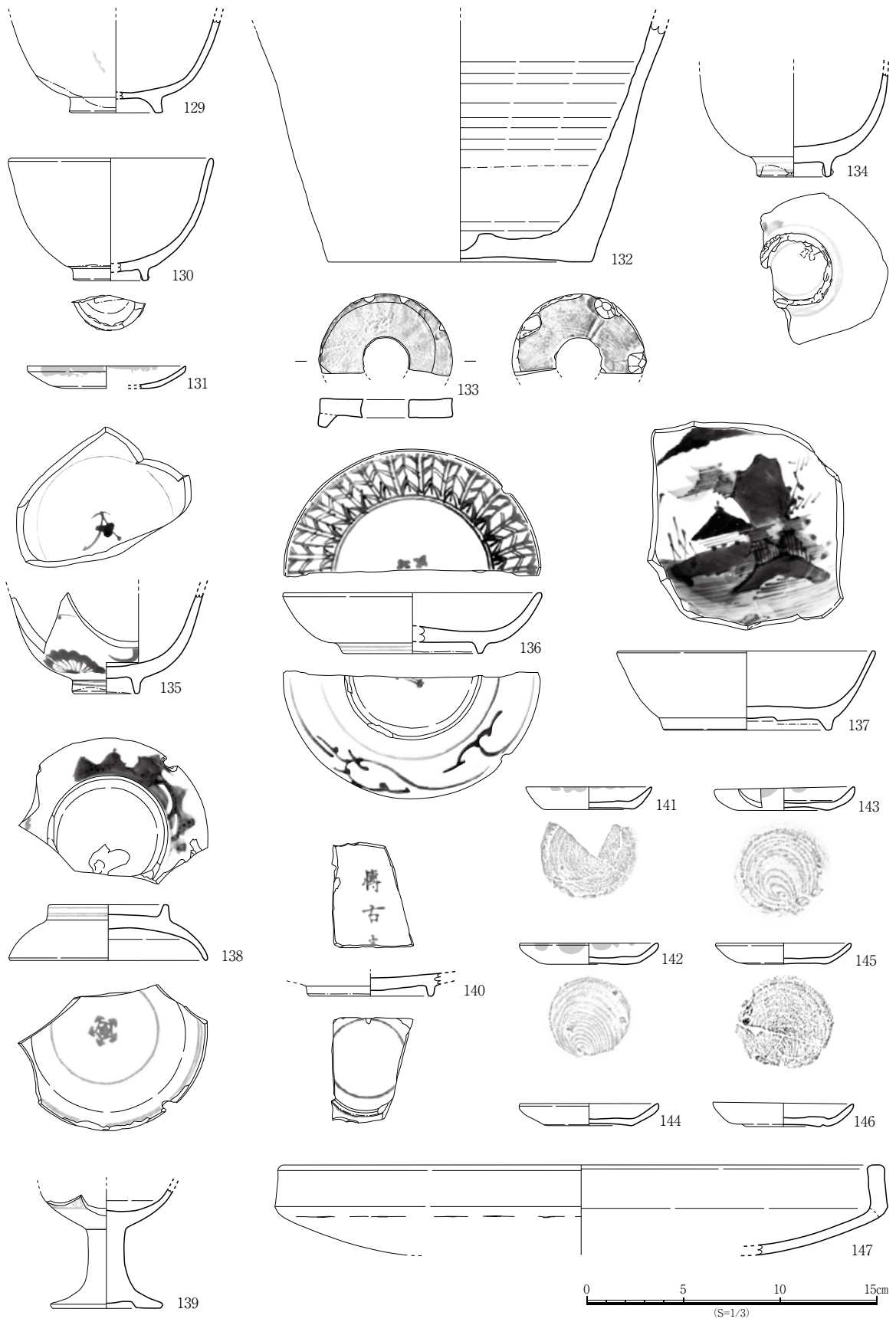


図26 B-1区第Ⅲ-1-1層出土遺物実測図

## 2. 堆積層出土遺物

口縁部内面は矢羽文の染付，見込はコンニャク印判による五弁花文とみられる。高台内には「大(明年製)」とみられる銘が残る。137は磁器染付輪花皿で，蛇ノ目凹形高台を呈し，高台内は蛇ノ目釉ハギする。口鏝で，見込には山水家屋文の染付がみられる。138は肥前産の磁器染付碗蓋で，外面には不明文様の染付，口縁部内面には圏線の染付，天井部内面にはコンニャク印判による五弁花文がみられる。139は肥前産とみられる磁器染付仏飯器で，杯部外面に染付の一部が残る。140は中国景德鎮窯系の青花皿で，見込には「博古□」の染付，外面と高台内に1条の圏線の染付がみられる。141～146は土師質土器小皿で，回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切り調整である。141～143は口縁部に煤が付着する。147は関西系の土師器焙烙で，内面は回転ナデ調整とみられ，口縁部は横ナデ調整，底部外面はナデ調整である。

### ⑥ B区およびB-1区第Ⅲ-2層出土遺物(図27～29)

図示した遺物は148～174である。148は肥前系の陶胎染付碗で，外面に松文と圏線の染付がみられる。149は京都系の陶器筒形碗で，内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には鉄鏝による蕨文がみられる。150は尾戸窯とみられる陶器碗で，内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には鉄鏝による注連縄文，見込には目痕がみられる。151は絵唐津の皿で，内面から高台付近まで灰釉を施す。見込には鉄鏝による鳥文がみられる。152は陶器皿で，内面から高台付近まで灰釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。高台の1箇所には円孔があく。153は陶器灰吹である。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切り調整である。体部内面から外面までは灰釉を施し，体部には指圧による凹みが見られる。154は陶器小壺である。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切り調整である。外面には鉄釉を施し，肩部には沈線が2条巡る。155は陶器足付ハマで，下面には3箇所に足が付く。上面と下面は回転糸切り調整で，側面と足はナデ調整である。156は肥前産の磁器染付小丸碗で，外面には梅文と圏線，高台内には不明の染付がみられる。157は肥前産の磁器染付丸碗で，外面には斜格子文と圏線の染付，コンニャク印判による文様がみられる。158は肥前産とみられる磁器染付小碗で，外面は圏線と草花文とみられる染付を描き，口縁部内面には僅かに染付が残る。159は磁器染付皿で，外面は圏線と竹文とみられる染付，見込は海浜風景文と圏線の染付を描く。160は肥前志田窯の磁器染付輪花大皿で，外面に七宝文，内面に雲龍文の染付がみられる。高台内には6箇所に目痕が残る。161は肥前産の磁器色絵小杯で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギ，見込は蛇ノ目釉ハギする。見込の釉ハギ部分には墨・緑色の青海波文の上絵付，内面は朱色の蝶文の上絵付がみられる。162は肥前産の磁器染付小瓶で，口縁部内面から底部には透明釉を施す。胴部外面には梅文と笹文の染付がみられる。163は磁器ミニチュアで，鉢形を呈する。全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。164は中国景德鎮窯系の青花皿で，内外面に染付がみられる。高台内には放射状の鉋痕が残る。165は朝鮮産の白磁小壺で，外面に白磁釉を施し，畳付には2箇所に砂目痕が残る。166は初期京焼または関西系の軟質施釉陶器向付で，方形または多角形を呈するものとみられる。全面に淡黄色の釉を薄く施し，内面の一部には濃緑釉が掛かる。167は土師質土器皿で，回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切り調整である。168は尾戸窯の白土器皿で，ナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の高砂文がみられる。169は関西系とみられる土師器焙烙である。底部は型成形とみられ，底部外面は無調整で，口縁部は横ナデ調整である。口縁部の1箇所には粘土を貼付し円孔をあける。外面には煤が付着する。170は須恵器杯で，底部には断面台形を呈する高台を貼付する。器面は摩耗するため調整は不明である。171は讃岐御厩系の瓦質土器焙烙で，粘土紐巻き上げ成形である。口縁部は横ナ

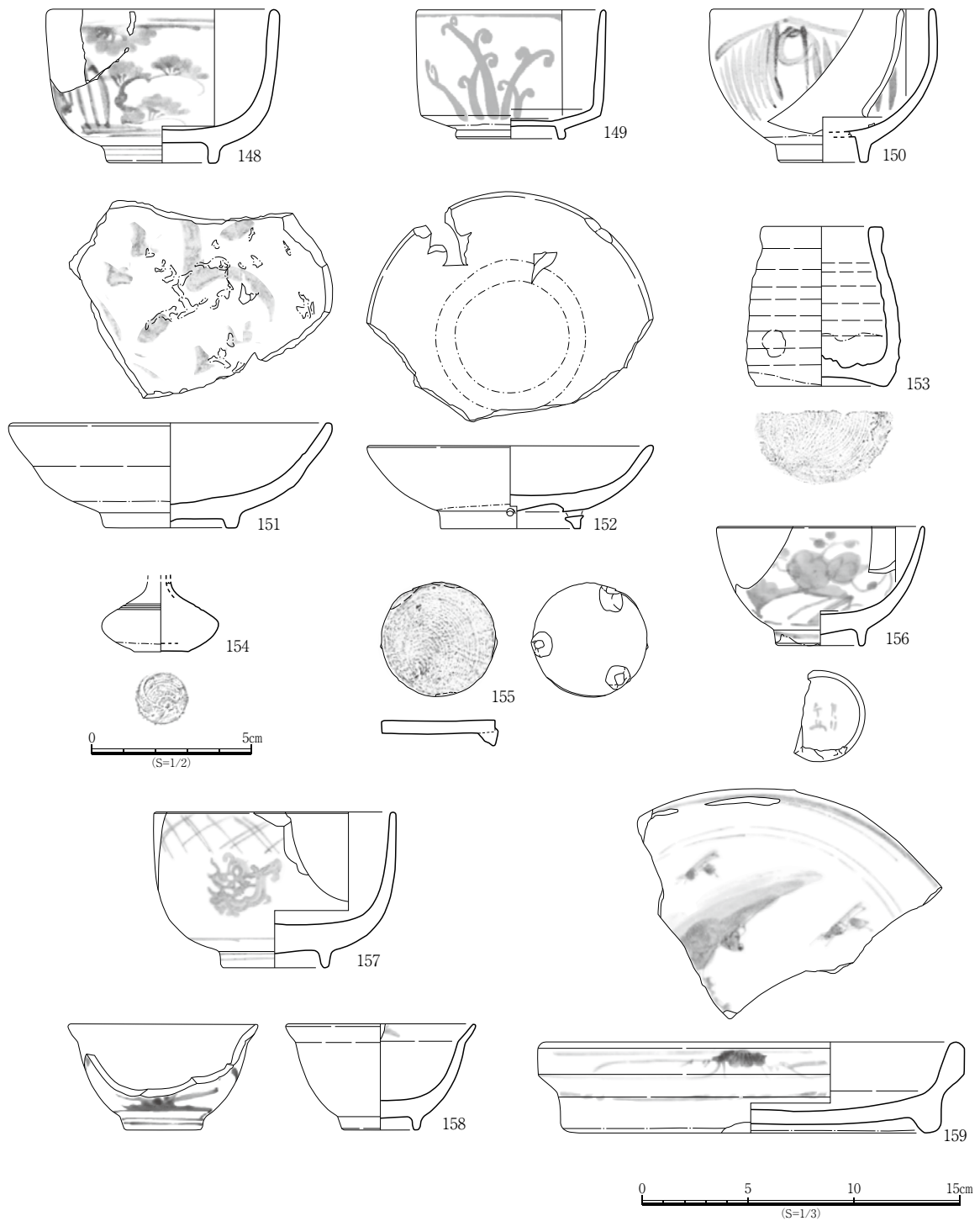


図27 B区・B-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測図1

デ調整，内外面にナデ調整を施し，外面には指頭圧痕が残る。172は土製品人形で，天神様である。型成形で，中実である。台座は隅丸方形を呈し，下面には円孔がみられる。173は土製品泥面子である。型成形で，下面はナデ調整である。上面は「大日本」の文字，側面には刻目がみられる。174は石製品で，砥石とみられる。上面を除く5面に研磨痕がみられ，上面には鳥文の刻書，下面には直線状の使用痕が残る。



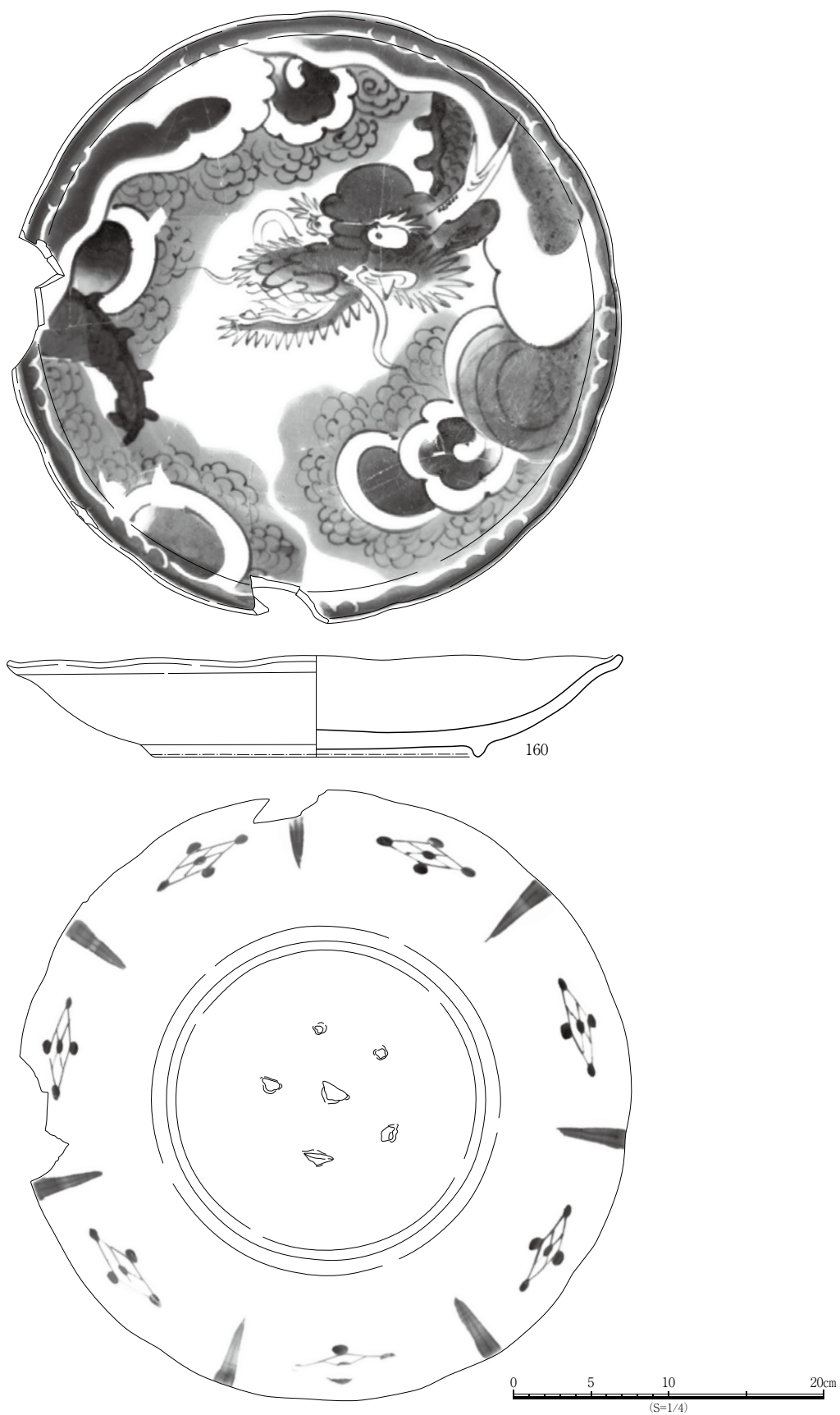


图28 B区·B-1区第Ⅲ-2层出土遗物实测图2





図29 B区・B-1区第Ⅲ-2層出土遺物実測図3

⑦ B区およびB-1区第Ⅲ-3層出土遺物(図30)

図示した遺物は175～178である。175は肥前産の磁器染付碗で、内面から高台まで透明釉を施し、外面には網目文と圏線の染付がみられる。176は肥前有田産の磁器染付中皿で、外面と高台内に圏線、口縁部内面は濃地に区画文、見込は菊花文の染付がみられる。高台内には目痕が残る。177は中国産の青磁碗で、畳付を除き青磁釉を施す。178は銭貨で、寛永通寶である。背面には「文」字がみられる。

⑧ B区およびB-1区第Ⅲ-4層出土遺物(図30)

図示した遺物は179・180である。179は唐津系灰釉陶器波縁皿で、全面に灰釉を施す。180は絵唐津の中皿で、内面に灰釉を施す。内面には鉄錆による老松文とみられる文様の一部が残る。

2. 堆積層出土遺物

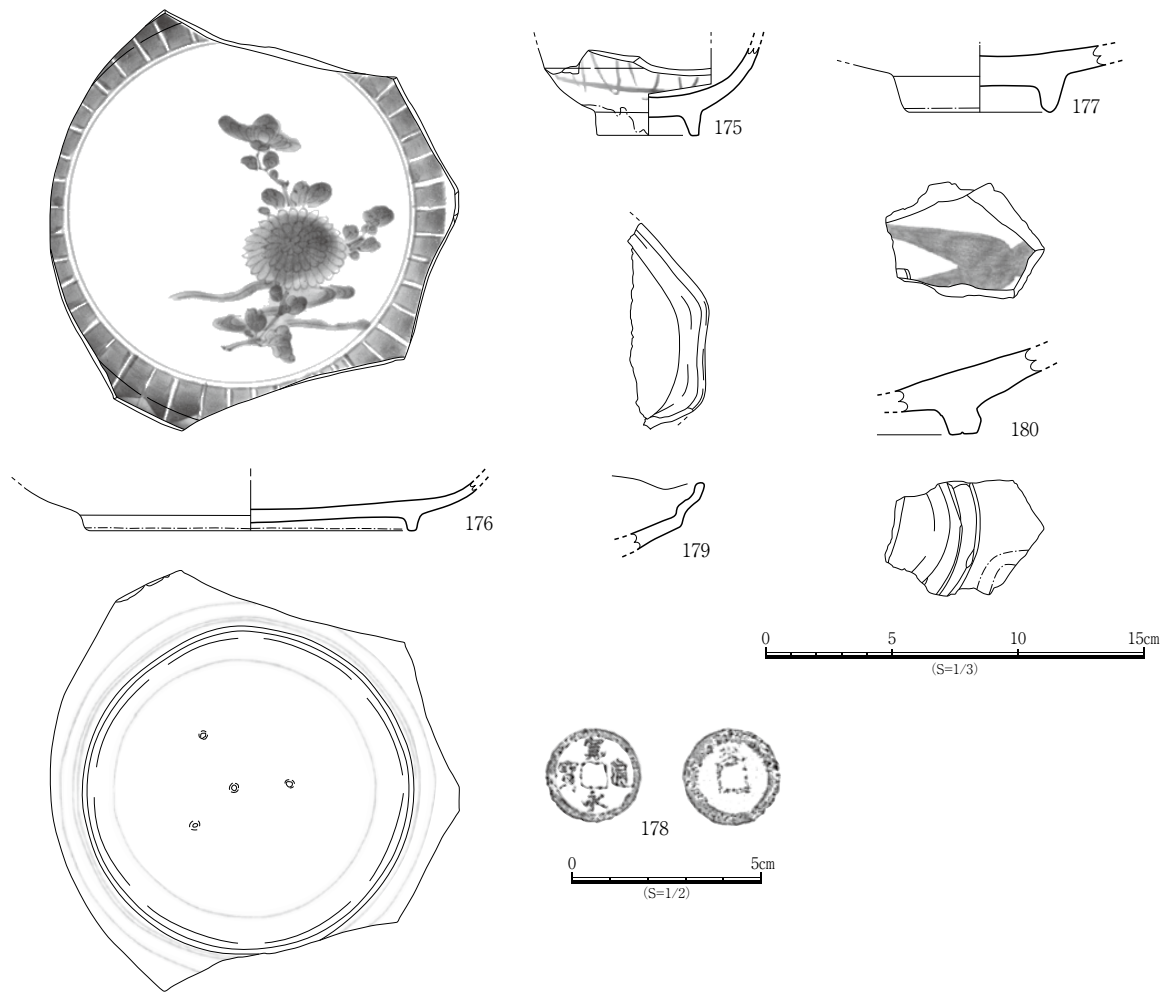


図30 B区・B-1区第Ⅲ-3・4層出土遺物実測図

⑨ B-2区第Ⅲ-1層出土遺物(図31)

図示した遺物は181～190である。181は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、全面に灰釉を施す。外面には朱・緑色の笹文の上絵付がみられる。182は瀬戸・美濃産の陶胎染付広東碗で、白化粧土のち透明釉を施す。外面には螺子文、見込には五弁花文と圏線の染付がみられる。183は陶器丸碗で、内面から底部外面付近まで灰釉を施す。底部外面は回転削り調整で無釉である。184は焼締陶器小皿で、回転ナデ調整で体部外面には回転削り調整を加える。口縁部外面の一部に煤が付着する。185は陶器行平鍋の把手である。中空で、断面は三角形を呈する。把手は全面に鉄釉を施し、身部は鉄釉を刷毛塗りする。186は肥前系の磁器染付猪口で、外面には笹文の染付がみられる。187は肥前産の青磁鉢とみられ、蛇ノ目凹形高台を有する。全面に青磁釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギし、錆釉を施す。内面には陰刻による文様、見込には印花文を施す。188は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。内面には煤が付着する。189は金属製品で、一部を欠損する。短冊形を呈し、上部には径3mmの円孔を有する。190は金属製品で飾り金具とみられる。板状で隅丸方形を呈する。表面には文様の一部がみえるが、錆化するため不明瞭である。

⑩ B-2区第Ⅲ-2層出土遺物(図32)

図示した遺物は191～201である。191は尾戸窯の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。

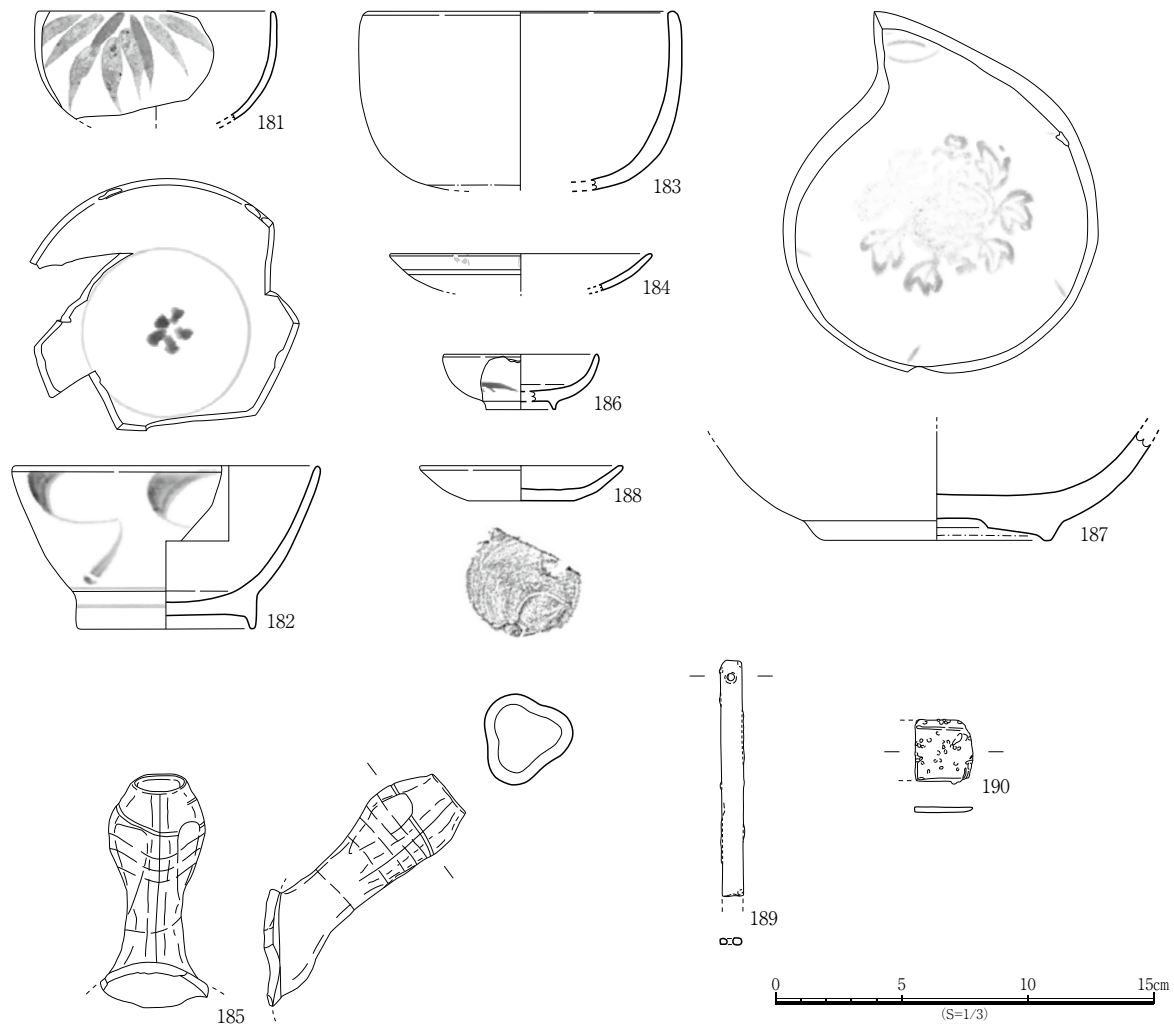


図31 B-2区第Ⅲ-1層出土遺物実測図

高台内には墨書がみられる。192は絵唐津皿で、全面に灰釉を施し、高台付近には砂目痕が残る。内面には鉄錆による花文がみられる。193は絵唐津大皿で、内面には灰釉を施し、見込には鉄錆による文様と胎土目痕がみられる。外面は回転削り調整で無釉である。194は陶器蓋で、円形の摘が付く。回転ナデ調整で、底部は回転糸切り調整である。195は陶器鉢で、底部には脚を貼付する。内面から口縁部外面は回転ナデ調整、体部外面から底部外面には回転削り調整を施す。底部外面には「三文」の墨書がみられる。196は陶器火鉢で、円筒形を呈する。底部には楕円形の脚を貼付し、脚の内側には銅釘が残る。体部は回転ナデ調整で、外面には陰刻による草文と沈線がみられる。体部内面には鉄釉を刷毛塗りし、口縁端部から外面底部付近まで黄褐色の釉、底部外面には鉄釉を施す。197は陶器搗鉢で、口縁部外面には沈線が2条、内面には搗目がみられる。198は肥前産の白磁紅皿である。型打成形で、菊花形を呈する。内面から体部外面まで白磁釉を施す。199は肥前産の磁器染付段重で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と畳付は釉ハギする。外面には扇文と松葉文・圏線の染付がみられる。焼継痕が残る。200は中国景德鎮窯系の青花大皿で、畳付を除き透明釉を施し、高台には粗い砂が付着する。外面には圏線、見込には草花文と圏線の染付がみられる。201は軒平瓦で、中心飾りは三巴文である。瓦当左側には「□作」の刻印がみられる。

2. 堆積層出土遺物

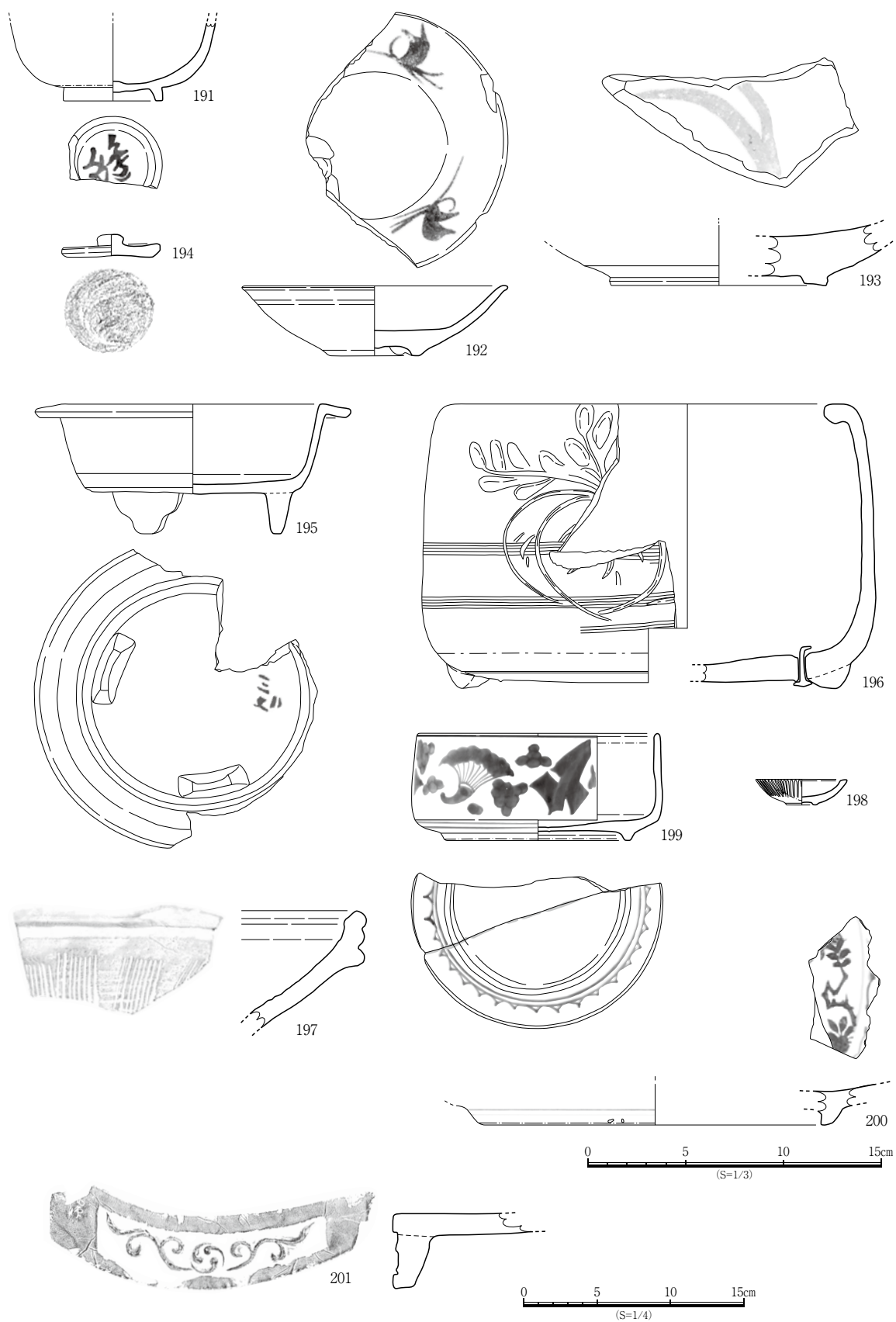


图32 B-2区第Ⅲ-2层出土遗物实测图

⑪ B-2区第Ⅲ-3層出土遺物(図33)

図示した遺物は202～208である。202は絵唐津皿で、内面から体部外面まで灰釉を施す。内面に鉄錆による草文がみられる。203は唐津系灰釉陶器皿で、内面には灰釉を施す。見込には胎土目痕が残る。204は唐津系灰釉陶器皿で、内面から体部外面に灰釉を施す。釉は灰オリーブ色に発色する。見込には砂目痕と重ね焼の痕跡が残る。205は肥前産の磁器染付皿で、見込には舟文と笹文の染付がみられる。206は肥前有田産の磁器染付輪花皿で、外面に唐草文と圏線、内面に牡丹文、見込に環状の松竹梅文、高台内には圏線の染付がみられる。207は磁器染付大皿で、外面には波線、内面には草花文と圏線の染付がみられる。208は中国景德鎮窯系の青花皿である。外面には青磁釉を施し、陰刻または型押しとみられる文様が残る。内面には透明釉を施し、染付を描く。

⑫ B-2区第Ⅲ-4層出土遺物(図33)

図示した遺物は209で、焼締陶器小皿である。回転ナデ調整で、底部外面には回転削り調整を加える。内面から口縁部外面には鉄釉を施す。

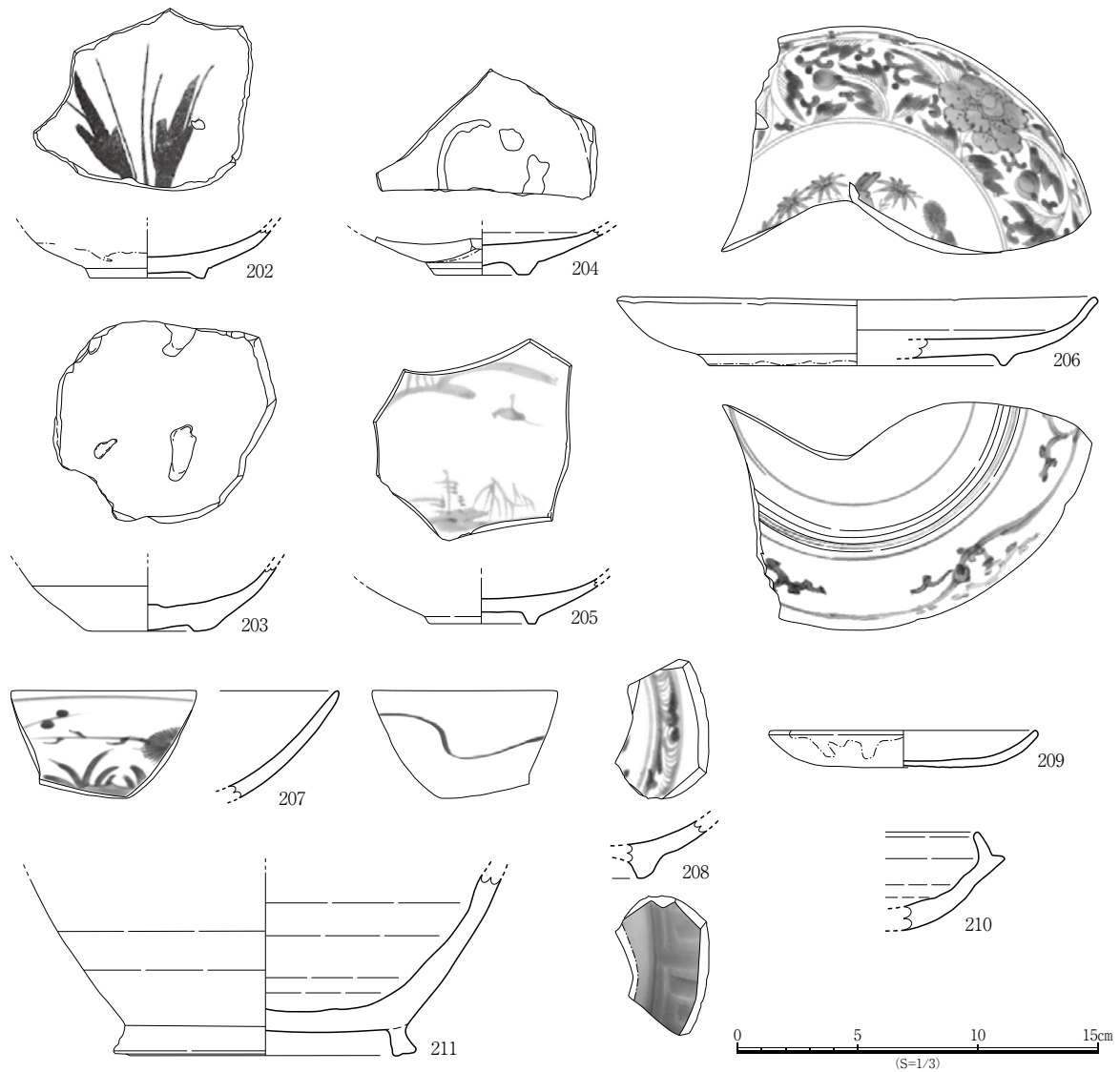


図33 B-2区第Ⅲ-3・4層, 第Ⅳ層出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

⑬ 第IV層出土遺物(図33)

図示した遺物は210・211で、須恵器である。210は須恵器杯で、回転ナデ調整を施し、底部外面には回転削り調整を加える。211は須恵器壺で、底部には高台を貼付する。回転ナデ調整で、底部内面と高台内にはナデ調整を加える。

3. 遺構と遺物

(1) A-1区

絵図によるとA区は17世紀には百々家、それ以降は山内家が居住していたとされる調査区である。絵図に描かれているA区とB区の境となる江戸時代から昭和期までの屋敷境あるいは区画溝はA-1区として報告している。A-1区は近現代に小学校の校舎が建設されていたこともあり、近現代の遺構の影響を多く受けており、江戸時代の遺構が削平された可能性が高く、B区に比べて江戸時代の遺構が少ない。特に地形の高い北部では江戸時代前期の遺構が確認されておらず、江戸時代中・後期に地形の高い北部を削平し、整地した可能性がある。

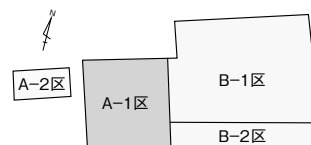


図34 A-1区位置図

① 1面

1面は江戸時代以前の遺構で、地形の低い調査区南部でピット数基と土坑1基を確認した。ピットからは土師質土器や瓦質土器が出土しており、14～15世紀の遺構とみられる。

SK-101

A-1区南東部で検出した土坑で、東は江戸時代の溝跡であるSD-201に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長1.77m、短径1.18m、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には古代の須恵器甕1点、瓦質土器釜の脚部1点であった。

② 2面

2面の遺構は南部及び東部で多く確認されており、遺構の密度も比較的高い。それに対し、北西部は遺構が確認されておらず、江戸時代後期や近代に遺構が削平された可能性が高い。

SB-201 (遺構: 図35)

A-1区南東部で確認した南北棟建物跡である。屋敷境の溝跡であるSD-201と並行する。梁間1間(3.00m)、桁行9間(16.00m)で、柱間寸法は1.60mと1.80m、2.20mであった。柱穴は径45～70cmの円形または楕円形で、埋土は灰

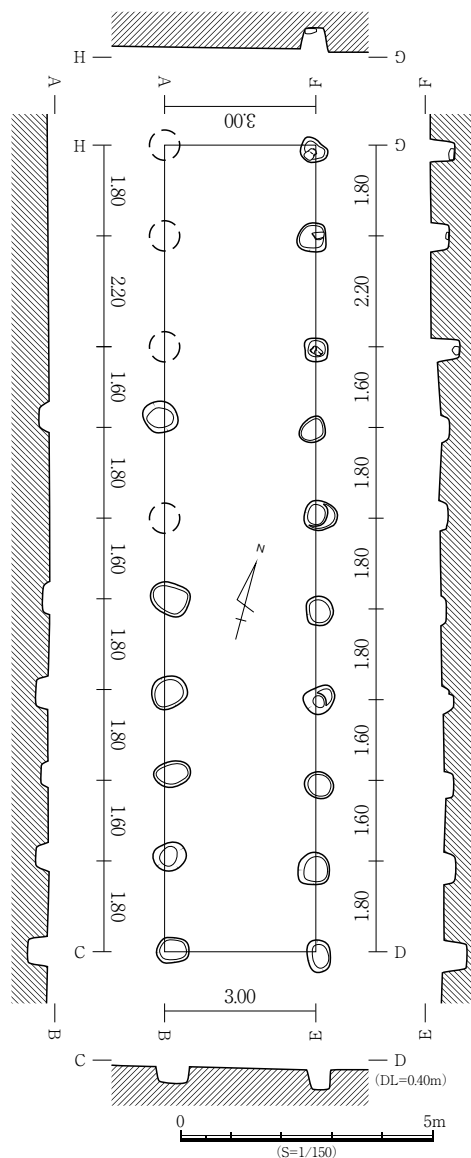


図35 SB-201



黄褐色シルトまたは褐灰色砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。柱穴の底面には礎板がみられるものもあった。出土遺物には陶器片2点、磁器皿1点、土師質土器14点(小皿1, 細片13), 瓦19点(軒丸瓦1, 平瓦1, 細片17)がみられた。

SA-201(遺構:図36 遺物:図39)

A-1区東部で確認した南北塀跡で、SB-201と屋敷境の溝跡SD-201の間に位置する。全長11.10mを検出し、柱間寸法は1.80mまたは2.10mであった。柱穴は径45~90cmの円形または楕円形で、埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。底面には礎板がみられるものもあった。出土遺物には陶器碗1点、磁器2点(皿1, 小杯1), 土師質土器片1点、石製品石幢1点であった。図示した遺物は1001で石幢である。南から1間目の柱穴より出土した。断面は六角形を呈し、上面と下面は平らである。六側に地蔵が陽刻される。

SA-202(遺構:図37)

SA-201の東で確認した南北塀跡で、SA-201に並行する。全長11.10mを検出し、柱間寸法は1.50mと1.80m, 2.40mであった。柱穴は径30~60cmの円形または楕円形で、埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。底面には礎板がみられるものもあった。柱穴はすべてSD-202の埋土上で検出されており、布掘りをしていたものとみられる。出土遺物は磁器片1点、白磁皿1点、土師質土器片3点、土師器甕1点であった。

SA-203(遺構:図38)

SA-202の東で確認した南北塀跡で、SA-202に並行する。全長11.70mを検出し、柱間寸法は1.50mと1.80m, 2.10mであった。柱穴は径30~70cmの円形または楕円形で、埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は陶器碗1点、白磁皿1点、土師質土器片4点(皿1, 細片3), 土師器片1点であった。白磁皿はSA-202で出土した白

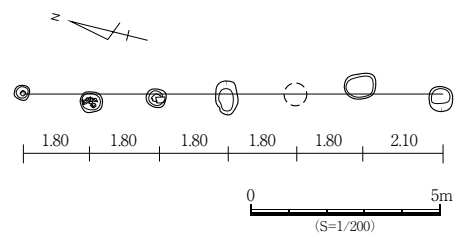


図36 SA-201

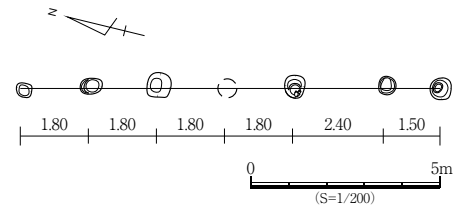


図37 SA-202

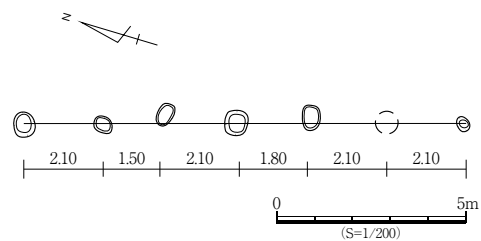


図38 SA-203

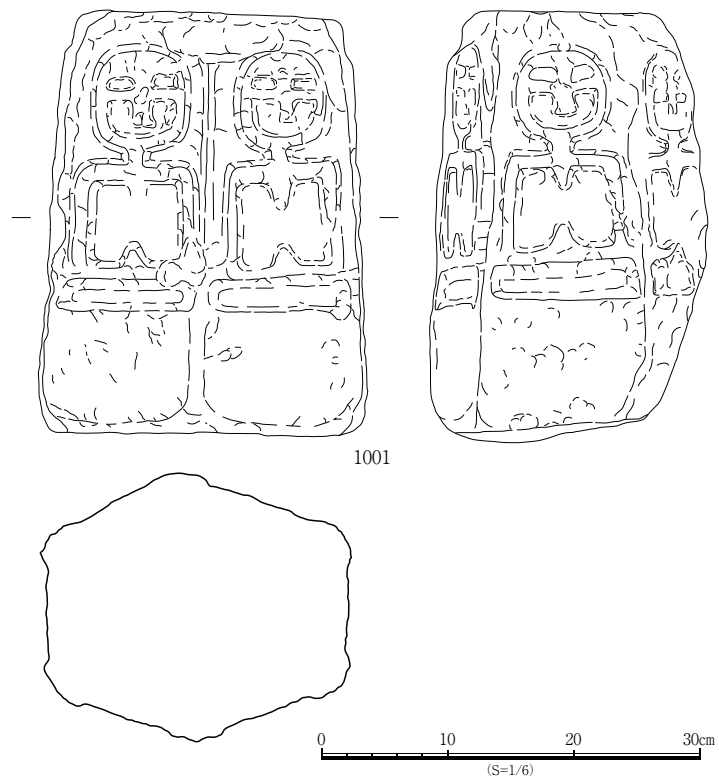


図39 SA-201出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

磁と接合した。

SK-201

A-1区南東部で検出した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径1.66m、短径1.39m、深さ15cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫と淡黄色礫を含んでいた。出土遺物には磁器片1点、土師質土器3点(皿1, 細片2)がみられた。

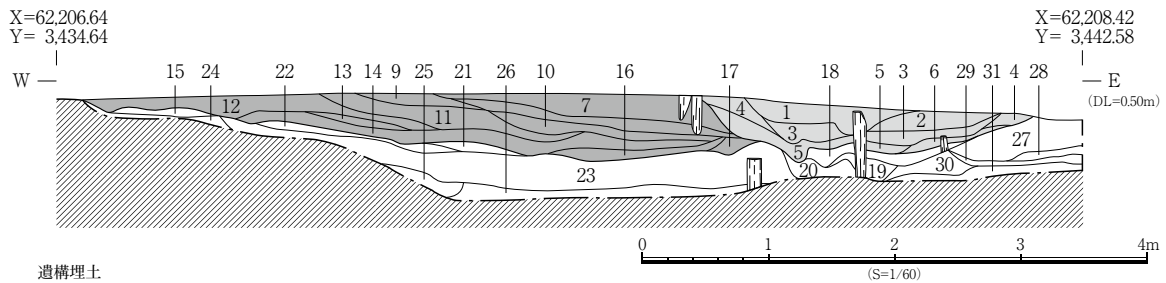
SK-202

A-1区南東隅で検出した土坑である。不整楕円形を呈し、長径1.53m、短径1.50m、深さ47cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、細粒砂と1cm大の礫・炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片4点、磁器碗1点、土師質土器17点(皿2, 細片15), 瓦9点(丸瓦2, 平瓦7)がみられた。

SD-201 (遺構: 図40 遺物: 図41～50)

A区とB区の境となる屋敷境の南北溝跡で、SX-205に切られる。両端は調査区外へ続き、検出長31.85m、全幅7.78m、深さ1.13mを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は11層に分かれ、上層は砂質シルト、下層は粘土で木製品が多く出土した。出土遺物には陶器399点(碗68, 皿96, 瓶5, 鉢23, 播鉢43, 壺1, 甕1など), 磁器451点(碗76, 皿72, 小杯11, 猪口4, 瓶6など), 青花13点(碗7, 皿4, 細片2), 土師質土器492点(杯1, 皿84, 小皿40, 細片367), 土師器40点(火鉢7, 焙烙1, 釜1, 焼塩壺4, 焼塩壺蓋1, 細片26), 須恵器8点(杯2, 蓋1, 壺1, 細片4), 瓦質土器19点(鍋1, 釜1, 火鉢1, 細片16), 瓦56点(軒丸瓦3, 軒平瓦4, 丸瓦20, 平瓦29), 石製品砥石1点, 木製品167点(木簡8, 漆器碗31, 漆器蓋10, その他漆器10, 下駄29, 箸11, 切匙9, 曲物及び底板・蓋36, 剝物2, 櫛1, 将棋駒1, 調度品5など), 金属製品7点(古銭3, 煙管1, 杓子1, 鉄釘2)がみられた。

図示した遺物は1002～1141で、1002～1099は上層から出土した。1002～1009は陶器碗である。



遺構埋土

SD-301

1. 褐灰色(10YR4/1)砂質シルトで、2cm大の円礫を多く含む
2. 褐灰色(10YR4/1)シルトで、1cm大の円礫を多く含む
3. 灰色(5Y4/1)粘土で、木製品を多く含む
4. 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルトで、3cm大の円礫を多く含む
5. 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルト
6. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトで、1～3cm大の円礫・木製品と植物片を多く含む

SD-201

7. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、多量の1cm大の円礫と炭化物を含む
8. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、1cm大の円礫を特に多く含む
9. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、1cm大の砂岩風化礫と1cm大の円礫を少し含む
10. 灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂質シルトで、0.5cm大の砂岩風化礫と炭化物を少し含む
11. 灰黄褐色(10YR5/2)シルトで、多量の1cm大の砂岩風化礫と少量の炭化物を含む
12. 褐灰色(10YR4/1)粘土で、3cm大の円礫・木製品を少し含む
13. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、2cm大の角・円礫と木製品を少し含む
14. 褐灰色(10YR4/1)粘土で、1cm大の粗粒砂ブロックと2cm大の円礫が多く、木製品と瓦片を含む

15. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、2cm大の砂岩風化礫を特に多く含む
16. 褐灰色(10YR4/1)粗粒砂質粘土で、1cm大の円礫が多く木製品を含む
17. 褐灰色(10YR4/1)粗粒砂質粘土で、1cm大の円礫を少し含む

自然堆積層

18. 褐灰色(10YR4/1)粘土層 炭化物小片を多く含む
19. 褐灰色(10YR4/1)粘土層 0.5cm大の円礫を含む
20. 灰色(5Y5/1)粘土質シルト層 3cm大の角・円礫、木製品を多く含む
21. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土層 木製品を含む
22. 褐灰色(10YR4/1)粘土層 1cm大の円礫を少し含む
23. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土層 木製品・植物片を多く含む
24. 褐灰色(10YR4/1)粘土層 砂岩風化礫を多くと3cm大の円礫・木製品を少し含む
25. 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂層 1cm大の円礫を少し含む
26. 灰色(5Y5/1)粘土層 木製品を多く含む
27. におい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂細礫層
28. 灰色(5Y5/1)粘土層 木製品と植物を多く含む、ラミナがみられる
29. 木製品を少し含む灰色(5Y5/1)細粒砂質粘土層 少量の木製品と多量の植物を多く含む、ラミナがみられる
30. におい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質細礫層
31. 褐色(10YR4/4)中粒砂層 細礫の薄層を挟み、弱いラミナがみられる

図40 SD-201-301

1002は唐津系の鉄釉碗, 1003は肥前産の灰釉碗である。1004・1005は灰釉丸碗で, 全面に施釉し畳付を釉ハギする。1006は京焼風の丸碗で, 高台付近まで灰釉を施釉する。1007は丸碗で, 外面に白化粧土による刷毛目文, 内面には渦巻文が施される。肥前産とみられる。1008は灰釉天目形碗で, 高台付近まで灰釉を施釉する。底部は無釉で, 高台内には兜巾がみられ, 畳付には砂目痕が残る。肥前内野山窯の製品か。1009は鉄釉天目碗で, 内面から外面体部下半まで鉄釉を施釉する。瀬戸・美濃産である。1010～1025は陶器皿である。1010は絵唐津皿で, 口縁部は体部から屈曲して外反する。灰釉を内面から高台付近まで施す。見込には鉄錆による花文がみられる。1011～1014は唐津系灰釉皿で, 1011にはおい黄褐色を呈する釉を内面から高台付近まで施釉する。1012は灰オリーブ色を呈する釉を施し, 見込には胎土目痕が4箇所に残る。外面の体部から底部にかけては無釉である。1013の釉は灰オリーブ色を呈し, 見込には砂目痕が残る。1014は底径が大きく, 高台の幅が広い。釉は灰白色を呈し, 見込には砂目痕が残る。1015は志野焼菊花皿である。1016は平底を呈する皿である。口縁部内面には鉄錆による多重圏線がみられる。内面から体部外面まで透明釉を施し, 底部外面は回転削り調整で無釉である。美濃産とみられる。1017・1018は二彩手大皿とみられ, 口縁部は体部から屈曲して伸びる。1017は口縁部に白化粧土による刷毛目文と波文, 1018は内面に白化粧土による刷毛目文と鉄錆による文様が施される。いずれも肥前武雄産の製品とみられる。1019は三島手大皿で, 内面に印刻による白象嵌の蓮弁文がみられる。肥前武雄産の製品である。1020は肥前産の灰釉大皿で, 釉は黄灰色を呈し, 体部下半は無釉である。1021も肥前産の灰釉大皿で, 釉は黄灰色を呈する。1022は肥前産の灰釉皿とみられ, 見込に砂目痕が残る。高台の1箇所に切り込みがみられる。1023は肥前武雄産の二彩手皿で, 見込に砂目痕が残り, 畳付にも砂が付着する。見込には白化粧土を刷毛塗り後, 鉄絵緑彩による蝦藻文がみられ, 全面に透明釉を施したのち畳付を釉ハギする。1024は肥前武雄産の二彩手大皿とみられ, 内面は褐彩刷毛目文で, 見込に1箇所の砂目痕が残る。外面は口縁部に灰釉, 体部下半は回転ナデ調整, 底部は削り出しで無釉である。1025は唐津系灰釉陶器の向付または波縁皿とみられる。体部の一部は大きく内湾する。内面から外面体部下半まで灰釉を施し, 高台付近から底部は削り出しで無釉である。1026は肥前産の陶器大皿または鉢とみられる。内面は白化粧土を渦巻状に刷毛塗り後透明釉, 外面は鉄釉を刷毛塗りする。1027は陶器蓋物で, 口縁部を釉ハギする。外面には鉄錆による草花文がみられ, 灰釉を施す。1028は陶器小瓶で, 体部外面に藁灰釉を施し, 底部外面と内面は無釉である。福岡産とみられる。1029は焼締陶器の瓶または徳利で, 口縁部は片口状を呈する。備前焼とみられる。1030は陶器鉢で, 外面は白化粧土を刷毛塗り後に藁灰釉, 内面は鉄釉を施す。1031は肥前武雄産の陶器鉢または片口である。口縁部内面から外面に灰釉を施した後, 口縁部外面は白化粧土を刷毛塗りし透明釉と一部に緑彩を施す。内面は無釉で, 体部は回転ナデ調整, 底部は櫛状工具による回転ナデ調整を行う。口縁部内面の一部には剥離や釉禿げ, 摩耗, 煤の付着がみられ, 灰吹として使用した可能性がある。1032は肥前産の陶器播鉢で, 口縁部内外面に鉄釉を施す。内面には11条の播目が残る。1033は備前焼播鉢で, 内面に6本単位の斜め方向の播目が残る。播目は摩耗する。1034は丹波焼播鉢で, 内面に6条単位の粗い播目が残る。1035は焼締陶器の匣鉢である。回転ナデ調整で, 見込は刷毛状工具による同心円状の回転ナデ調整, 底部は一部ハケ調整を加える。1036は焼締陶器の壺で, 口縁部は受け口状を呈し, 全面に回転ナデ調整を施す。備前焼とみられる。1037は陶器で, 煙管の吸口状の形態を呈する。中空で, 一端が細くなる。外面には鉄釉を施す。

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

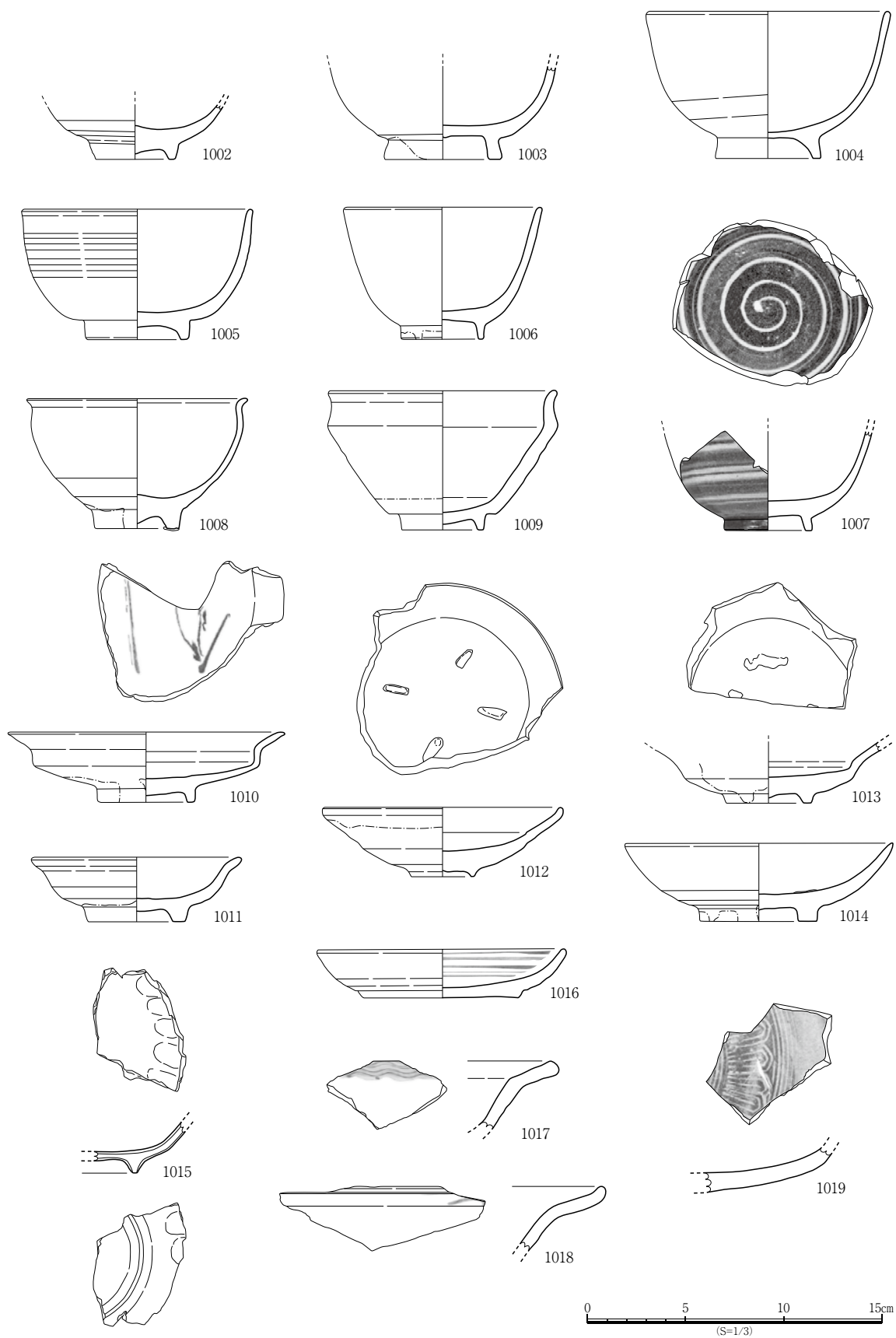


図41 SD-201上層出土遺物実測図1

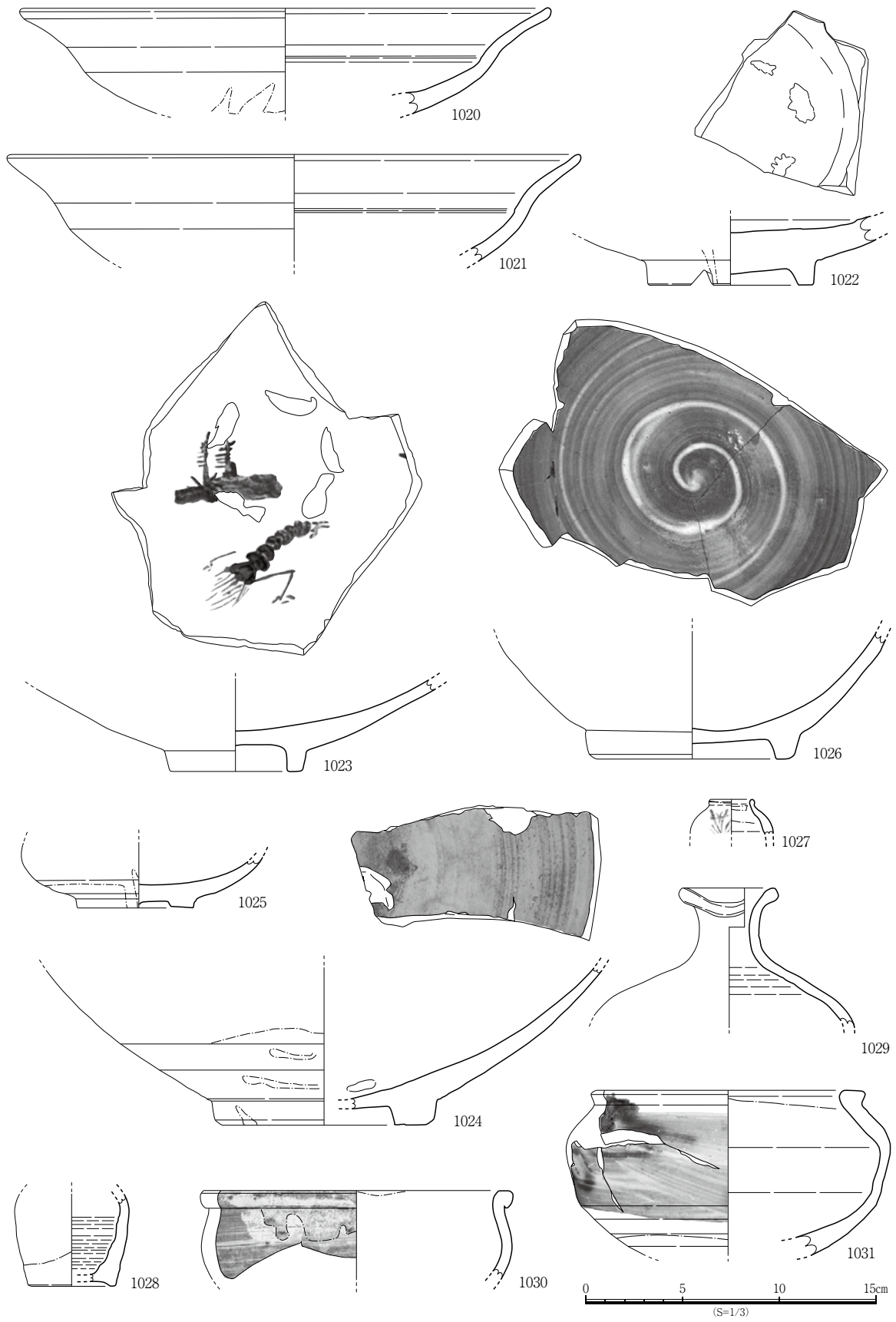


図42 SD-201上層出土遺物実測図2

1038～1068は磁器である。1038～1040は肥前産の染付丸碗である。1038は外面に鳥文と草文の染付，口縁部内面は圏線とみられるが滲んで帯線状になる。1039は外面に花唐草と圏線の染付，内面にも一部染付を描く。1040は外面に土坡に薄文と圏線の染付を描く。1041は肥前産の白磁碗で，口鏝を施す。1042は肥前産の丸碗で，内面に透明釉，口縁部内面から外面に鉄釉を施す。1043は肥前産の青磁丸碗で，全面に青磁釉を施し，畳付を釉ハギする。高台内には小礫が付着する。1044は肥前産の染付丸碗で，外面に笹文の染付がみられる。1045は肥前産の染付碗で，内面に圏線の染付がみられる。1046は肥前産の染付丸碗で，外面に花文と圏線の染付がみられる。1047は肥前産の青磁丸碗で，外面に陰刻による花文がみられる。1048・1049は肥前産の青磁染付天目形碗で，内面は透明釉，外面に青磁釉を施す。1048は内面に櫛文とみられる染付と圏線，見込に櫛文の染付がみられる。1049は見込には圏線に草花文の染付がみられる。1050は肥前産の染付碗で，外面に網目文の染付がみられる。1051は肥前産の染付筒形碗で，外面に草花文とみられる染付がみられる。漆継の痕跡が残る。1052～1063は磁器皿で，すべて肥前産である。1052は白磁皿で，見込と高台に砂目痕が残る。1053は染付皿で，見込に花文の染付がみられる。1054も染付皿とみられ，内外面に圏線の染付がみられる。1055は青磁大皿で，口縁部は波縁状を呈し，内面には陰刻による文様がみられる。1056は白磁皿とみられる。見込は蛇ノ目釉ハギを行い，釉ハギ部分は鉄釉を施し波状文の陰刻がみられる。有田の製品の可能性がある。1057は白磁中皿で，高台内の2箇所目痕が残る。1058は色絵中皿で，内外面に上絵付による文様がみられる。見込は朱・墨色の上絵付による雲・草花文・圏線がみられる。肥前有田の製品である。1059は折縁形の染付大皿で，内面に染付がみられる。1060～1062は折縁形の染付大皿で，有田の製品である。1060は外面に圏線，内面に青海波文と風景文の染付がみられる。1061は内面に唐草文とみられる文様と圏線の染付がみられる。1062は口縁部内面に雪輪文と圏線，見込にも染付の一部がみられる。1063は肥前産の青磁三足大皿で，菊花の陰刻のある脚を貼付する。口鏝で，口縁部内面に丸彫による菊花文，見込は陰刻による菊花文と薄文がみられる。畳付は釉ハギを行い，「□次良□午七月□」の墨書が残る。1064は肥前産の染付蓋で，天井部に円形の摘がみられる。外面には松文の染付を描く。1065は肥前系の蓋物で，口縁部内面と畳付を釉ハギする。外面に染付がみられる。1066は肥前産の白磁小杯で，外面に丸彫による縞文がみられる。1067は染付猪口で，内面に捻子文，高台内に圏線と「青雅」の銘がみられる。1068は筒形を呈する台で，白磁釉を施し，底面を釉ハギする。体部には2箇所透かしを有する。

1069～1079は中国産磁器である。1069は景德鎮窯系の染付辰砂碗で，口縁端部には虫喰いがみられる。外面には草花文と圏線の染付と釉裏紅の花文，内面には圏線の染付がみられる。1070は景德鎮窯系の青花碗で，高台内に放射状の鉋痕が残る。外面に圏線，見込に草花文とみられる染付がみられる。1071は漳州窯系とみられる青花碗で，見込に圏線と卸目状の染付がみられる。1072は青花碗で，外面は草花文とみられる文様と圏線，内面には圏線の染付がみられる。1073は青花皿で，外面に圏線，見込に虫文とみられる染付がみられる。高台内に輪状の釉が禿げた痕跡が残る。1074は景德鎮窯系の青花皿で，見込に染付がみられる。高台内に放射状の鉋痕が残る。1075も景德鎮窯系の青花皿で，碁笥底を呈する，外底には2条の圏線の染付，見込には陽刻による文様がみられる。1076は漳州窯系の青花大皿で，内外面に染付がみられる。1077・1078は漳州窯系の五彩大皿である。1077は内面と高台内の一部に透明釉を施す。内面には朱色の格子文と草花文，緑色の丸文と草文の上絵付がみられる。1078は内面に朱色の圏線と墨・緑色の草花文の上絵付がみられる。1079は中国

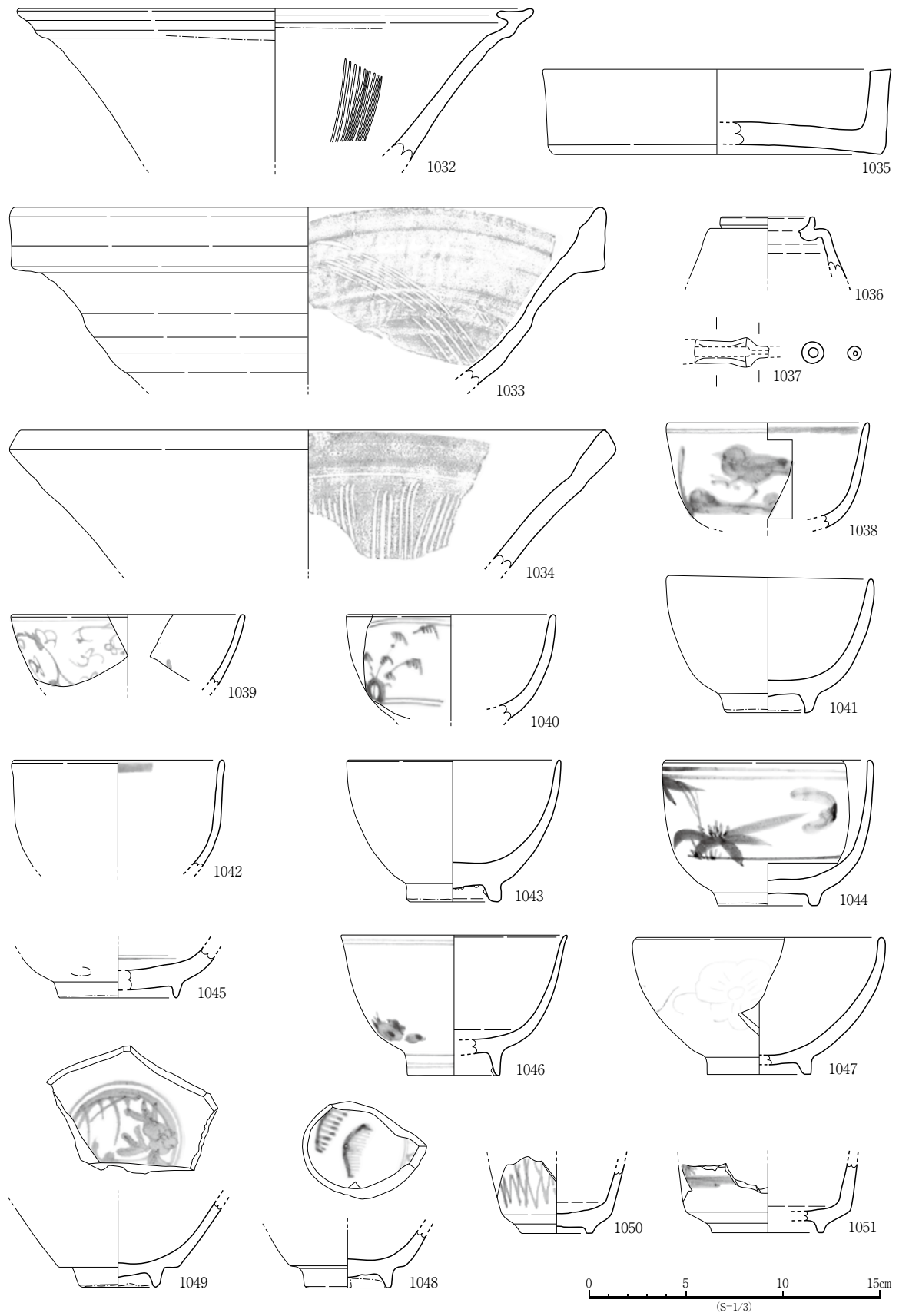


図43 SD-201上層出土遺物実測図3



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

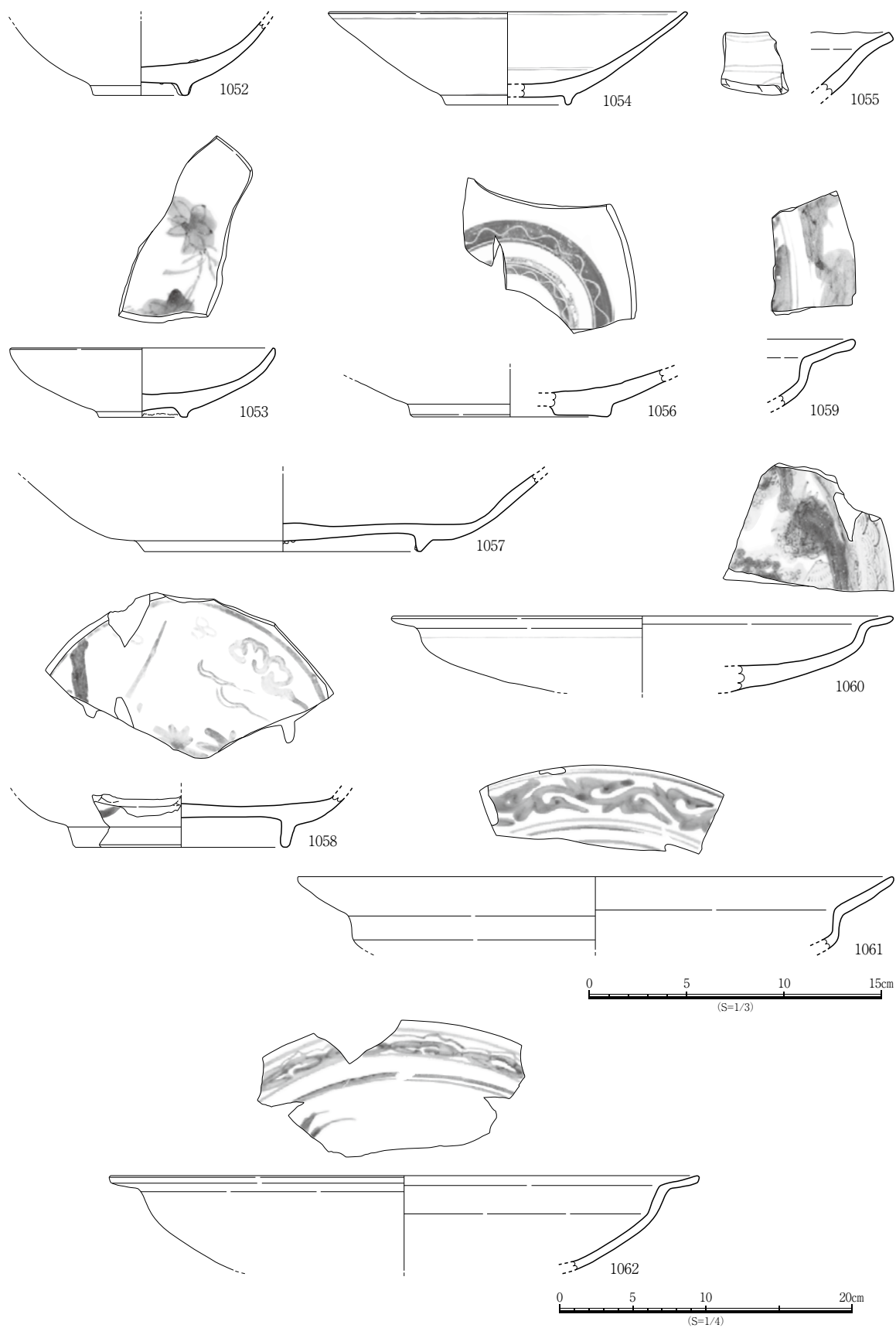


図44 SD-201上層出土遺物実測図4

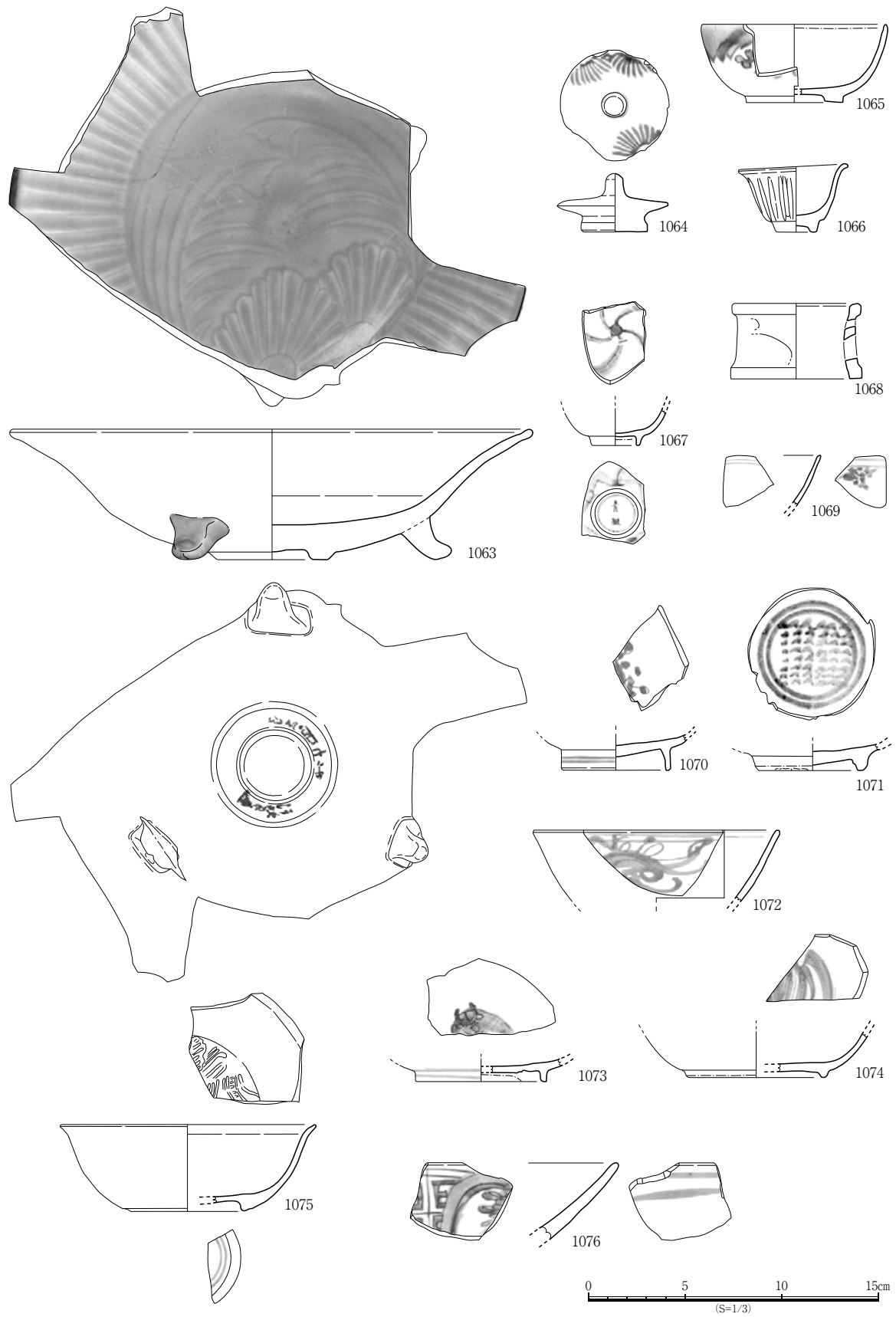


図45 SD-201上層出土遺物実測図5

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

産の白磁小皿で、外面と口縁部内面に丸彫による文様、見込にはスタンプによる花文がみられる。1080は朝鮮産の軟質白磁小壺である。全面に白磁釉を施し、豊付には5箇所に砂目痕が残る。

1081～1084は土師器である。1081は火鉢で、口縁部は体部より屈曲して内側に水平に伸び、口縁部外面には格子状の叩目または型押の痕跡が残る。口縁部内面は横ナデ調整で、内面はナデ調整で指頭圧痕が残り、端部に煤が付着する。外面は粗い斜め方向の削り調整である。1082は茶釜で、ナデ

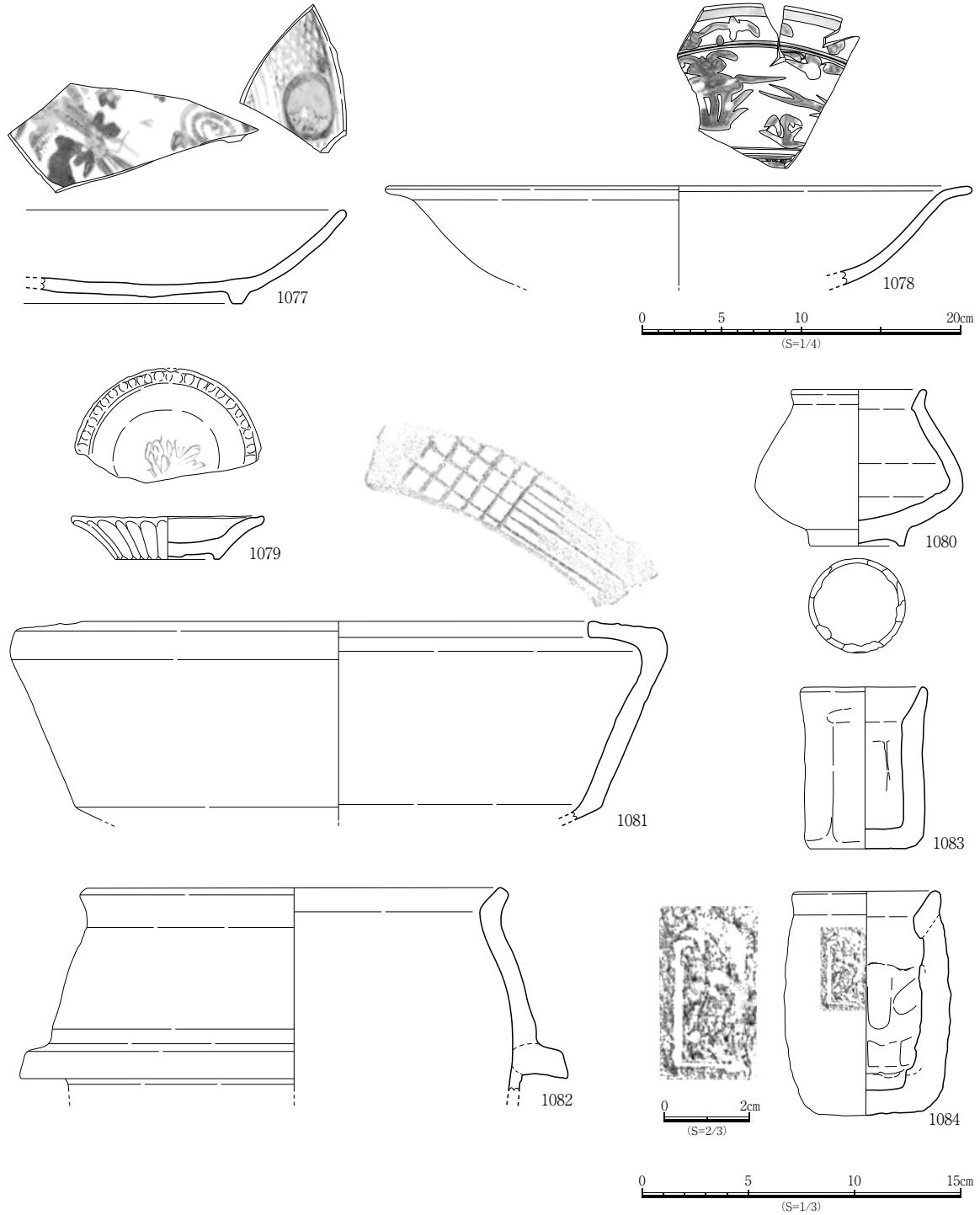


図46 SD-201上層出土遺物実測図6

または横ナデ調整を施す。1083・1084は焼塩壺である。いずれも輪積成形で、内面は粗雑なナデ調整を施す。1083は内面に布目圧痕が残り、外面には一部平坦な面を有する。1084は外面に方形枠の刻印が僅かに残る。1085～1098は木製品である。1085は漆器椀で、外面は黒塗で朱の萩と扇文がみられ、内面は赤塗である。1086は漆器椀で、外面は黒塗、内面は赤塗で無文である。1087は漆器椀で、外面は黒塗で朱の桐と萩文を施し、内面は赤塗である。1088は漆器蓋で、外面は黒塗で朱の草花文を施し、摘内にも朱の文様がみられる。内面は赤塗である。1089は漆器蓋で、内外面とも赤塗で無文である。1090は漆器蓋で、外面は黒塗で朱の文様を施し、内面は赤塗である。1091は漆器蓋で、外面は黒塗で朱の萩と車輪とみられる文様を施し、内面は赤塗である。1092は木筒で、上端の隅を切り、側面の両側に切り込みを入れ、下部は尖る。片面に「壺斗(カ)」とみられる墨書が残る。1093は木筒または切匙とみられ、上端は丸く薄く加工する。両面に墨書が残る。1094は差歯下駄である。露卯タイプで、2箇所に方形の孔がみられる。平面は長方形を呈し、歯は台形を呈する。摩耗の状況より右足とみられる。1095は桶蓋で、中央部が欠損する。一部に皮の持ち手とみられる部分が残る。片面に「納豆 □(真カ)如寺」の墨書が残る。1096は切匙で、刃部は面取りし、若干薄くなる。1097・1098は栓で、下端を細く加工し、上端と下端は平らである。1099は銭貨で、永樂通寶とみられる。

1100～1141は下層から出土した。1100は陶器小碗で、内面から体部外面まで藁灰釉を施す。福岡または肥前産とみられる。1101は志野焼碗で、内面から外面体部下半まで長石釉を施す。1102～1103は肥前産の陶器皿である。1102は絵唐津の波縁皿で、内面に鉄錆による文様がみられる。1103は内面から外面体部下半まで灰釉を施し、見込には胎土目痕が1箇所に残る。1104は肥前武雄産の二彩手中皿で、内面は白化粧土を刷毛塗り後灰釉と一部緑釉、外面は体部まで鉄釉を施す。1105～1107は志野焼向付で、口縁部は体部より屈曲して真っすぐ外上方に伸び、口縁端部は波縁状を成す。底部には帯状の粘土を湾曲させて貼付した脚と、砂目痕が1～2箇所にみられる。内面には鉄錆による文様を施す。1105は2箇所に透かしの一部が残り、漆継の痕跡がみられる。1107は底部を欠損し、口縁部にはハート形の透かしが残る。1108は陶器向付で、角形を呈し底部には円形の脚を貼付する。脚中位まで長石釉を施す。志野織部か。1109は焼締陶器の小鉢で、口縁部は肥厚し、一部は片口状を呈する。外面体部下端は回転ナデ調整である。1110は肥前産の磁器染付碗で、外面に花文と圏線の染付、高台内には方形枠に銘がみられる。1111は肥前産の磁器染付皿で、内面に扇文の染付がみられる。1112は肥前産の白磁小杯で、外面に丸彫による縞文がみられる。1113～1116は土師質土器皿で、口縁部は直線的に外上方へ伸びる。いずれも体部は回転ナデ調整で、見込はその後ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切り調整で、1114と1115は回転糸切り調整後の板状圧痕が残る。また、いずれも煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。1117も土師質土器皿で、回転ナデ調整を施す。底部中央には径6mmの円孔が貫通する。内面には部分的に金箔が残る。1118は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。1119～1141は木製品である。1119～1129は漆器椀である。1119は外面が黒塗で朱の丸に花文が5箇所にみられ、内面は赤塗である。1120は外面が黒塗、内面は赤塗である。1121は内外面とも黒塗の上に赤塗を行っている。見込には黒色の付着物がみられる。1122は外面が黒塗で朱の花文を施し、内面は赤塗である。高台内には星形の刻書がみられる。1123は外面が黒塗、内面は赤塗、高台内に「×」の刻書がみられる。1124は外面が黒塗で朱の花文を施し、内面は赤塗である。1125は外面が黒塗で朱の紅葉文を施し、内面は赤塗である。1126は外面が黒塗、内面は赤塗で大きく歪む。1127は外面が黒塗で朱の紅

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

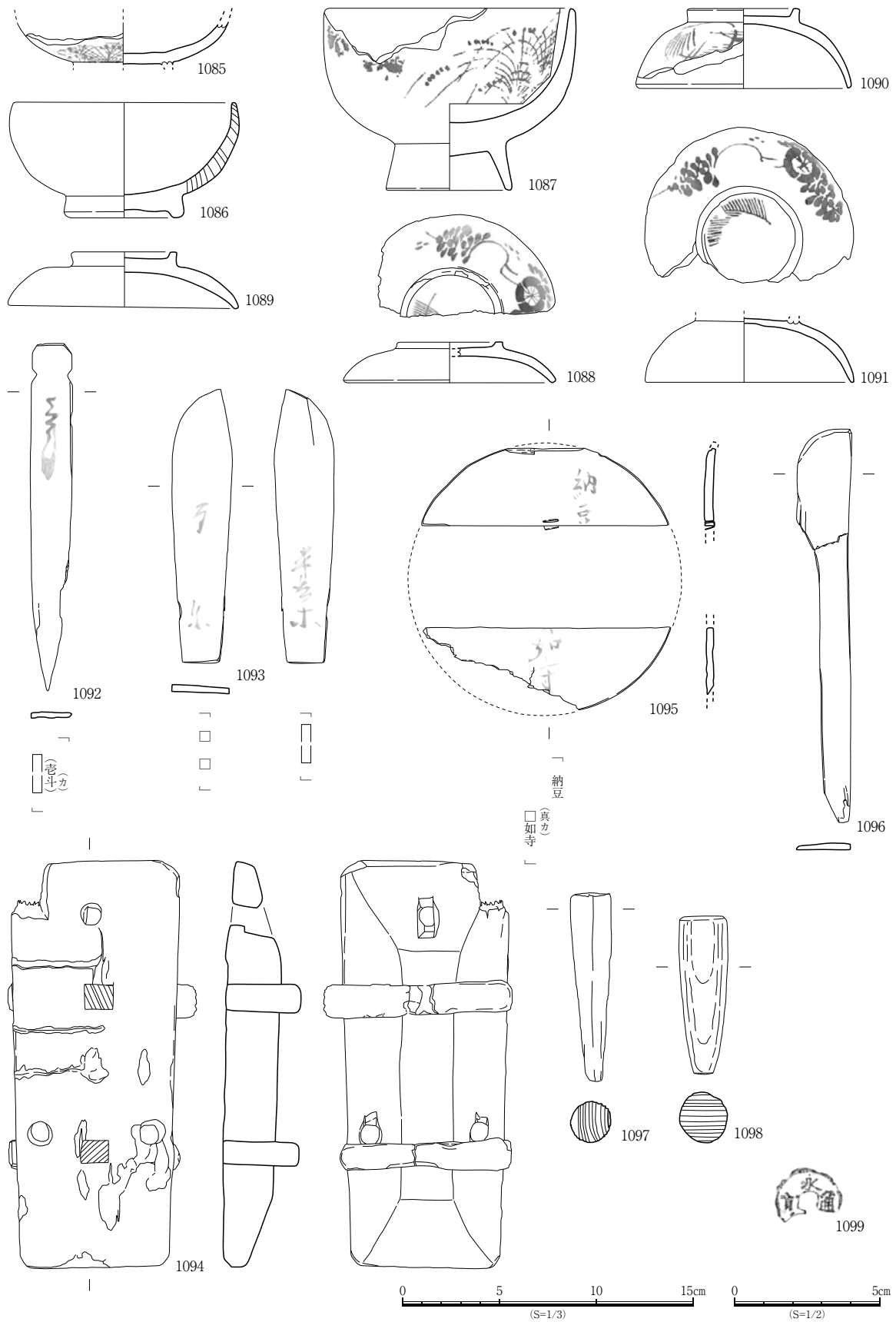


図47 SD-201上層出土遺物実測図7

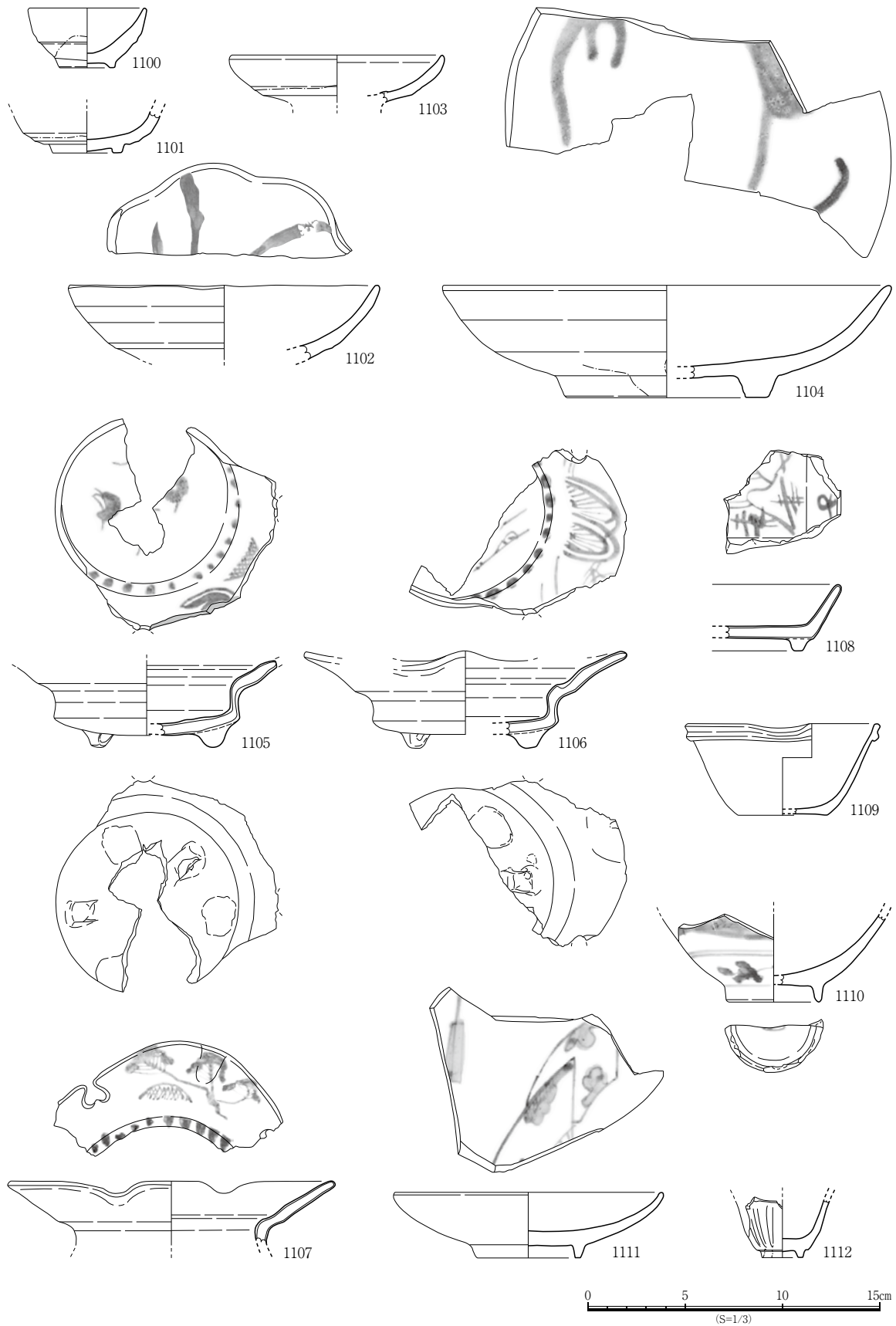


図48 SD-201下層出土遺物実測図1



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

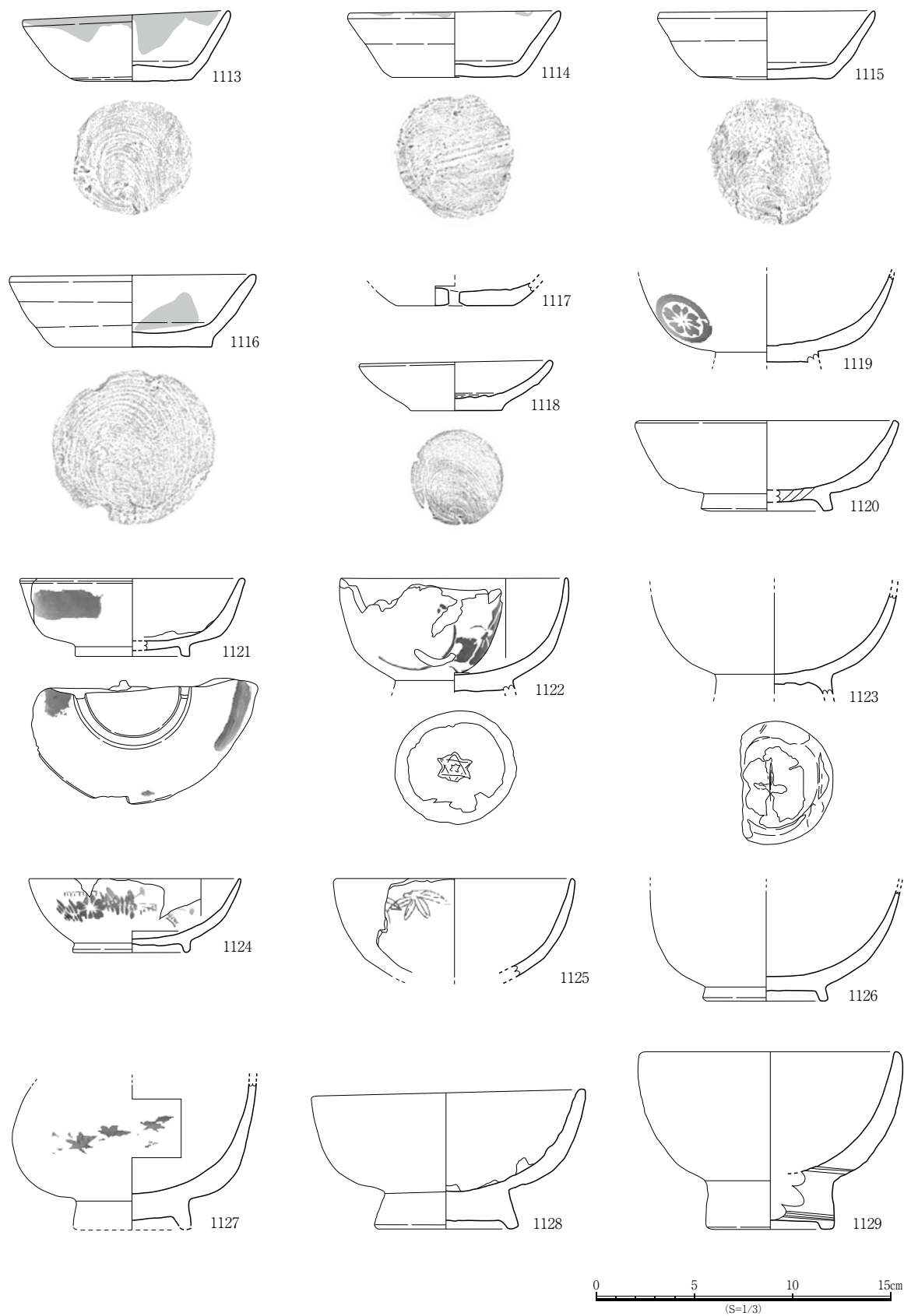


図49 SD-201下層出土遺物実測図2

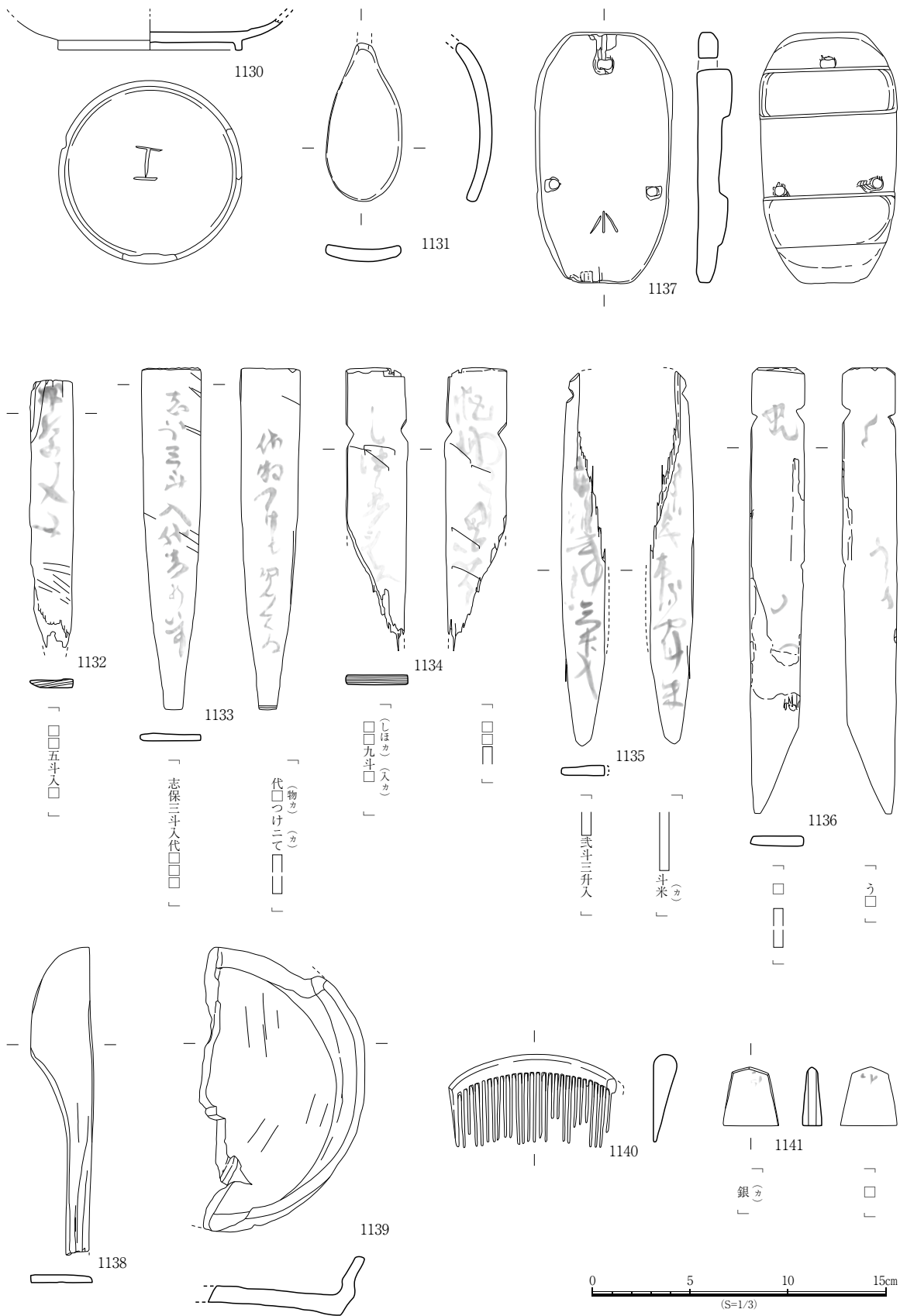


図50 SD-201下層出土遺物実測図3

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

葉文を施し、内面は赤塗で大きく歪む。1128は内外面とも黒塗で、見込に黒色の付着物がみられる。1129は内外面とも黒塗で、厚みがあり、特に底部が厚い。大振りで高台が高く、高台内の挟りが浅い。1130は漆器で皿形を呈し、内面と体部外面は赤塗、高台内は黒塗である。高台内に「I」の刻書がみられる。1131は匙で、匙部は浅い。1132～1136は木簡である。1132と1133は片端のみを細く尖らす。1132には片面に「□□五斗入□」の墨書がみられる。1133は表面に墨書がみられ、裏面には「志保三斗入代□□□」の墨書が残る。1134は上部側面に切り込みがみられる。両面に墨書がみられ、表面は不明、裏面は「しほ(カ)九斗□(入カ)」の墨書がみられる。1135は上部側面に切り込みがみられ、上端と下部を細く尖らす。両面に墨書がみられ、表面は「…斗米(カ)」, 裏面は「式斗三升入」の墨書が残る。1136は上部側面に切り込みがみられ、上端は隅を切り、下部は細く尖らす。両面に墨書がみられ、表面は「う□」の墨書が残る。1137は連歯下駄で、楕円形を呈し、上面に「小」の刻書が残る。小型で歯は低く、子供用とみられる。1138は切匙で、刃部は薄く加工していない。1139は剝物で、皿形を呈する。底は反り、上げ底状となる。1140は漆器櫛で、黒塗である。蒲鉾形を呈し、先端を細く加工する。歯間が粗く解櫛とみられる。1141は将棋駒である。両面に墨書がみられるが、薄く不明瞭である。表面は「銀」か。木材はカヤである。図示した遺物のほかに備前焼や信楽焼播鉢などが出土している。

SD-202(遺物: 図51)

A-1区西部で確認した南北溝跡で、SA-202に伴うものとみられる。北端はSX-206に切られる。検出長11.68m, 全幅0.60m, 深さ32cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、細粒砂と1cm大の礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿4, 細片2), 磁器10点(皿3, 瓶1, 細片6), 青花片1点, 土師質土器25点(皿4, 小皿4, 細片17), 土師器焼塩壺1点がみられた。図示した遺物は1142・1143である。1142は唐津系灰釉陶器皿で、見込に胎土目痕が残る。1143は土師器

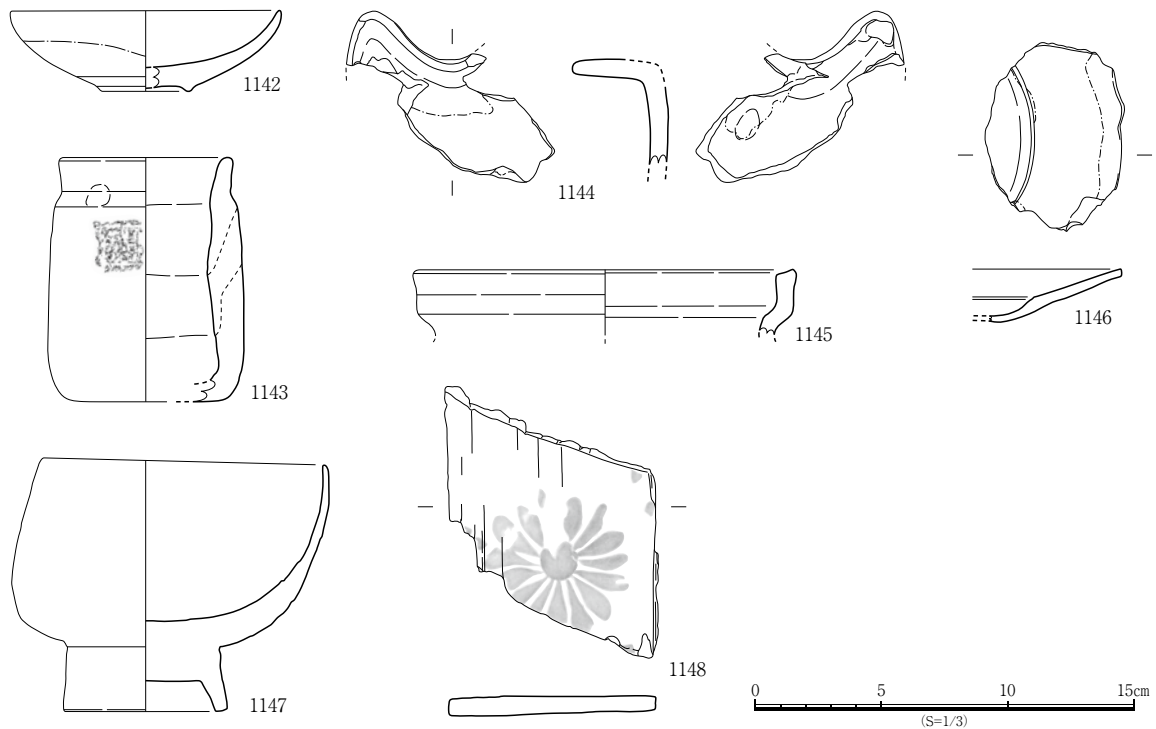


図51 SD-202～204出土遺物実測図

焼塩壺である。輪積成形で、内面は粗雑なナデ調整を施す。外面は著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが、方形枠内に文字の刻印が僅かに残る。

SD-203(遺物:図51)

A-1区北東部で確認した南北溝跡で、北端は調査区外へ続き、南端はSD-204に繋がるものとみられる。検出長7.03m、全幅1.87m、深さ32cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、細粒砂と1cm大の礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿1, 向付1, 壺1), 土師質土器9点(皿2, 細片7), 瓦質土器片1点がみられた。図示した遺物は1144~1146である。1144は青織部向付で、口縁部内面から外面は美濃釉を施す。底部外面には脚が剥離した痕跡が残る。1145は備前焼壺で、受口状を呈する。1146は軟質施釉陶器稜花皿で、口縁端部は緑釉、内面と口縁部外面は透明釉を施す。口縁部には円形とみられる透かしの一部が残る。

SD-204(遺物:図51)

A-1区南東部で確認した南北溝跡で、南端は調査区外へ続き、北端はSD-203に繋がるものとみられる。SX-201を切り、SB-201に切られる。検出長6.55m、全幅0.95m、深さ37cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器3点(播鉢1, 細片2), 土師質土器4点(小皿2, 細片2), 丸瓦1点, 漆器角材1点がみられた。図示した遺物は1147・1148の木製品である。1147は漆器椀で、外面が黒塗, 内面は赤塗である。1148は漆器調度品とみられ、外面が赤塗で黒の菊花文を施し、内面は黒塗である。

SD-205(遺構:図53 遺物:図52)

A-1区南西部で確認した南北溝跡で、南端は調査区外へ続き、北端は池跡であるSG-201に繋がる。SX-201に切られる。検出長5.99m、全幅1.66m、深さ50cmを測り、断面は舟底形を呈する。SG-201と同様に側面には3段の石積がみられ、SG-201から緩やかに湾曲して繋がっている。石積はやや傾斜があり、その角度は58度を測る。石材は主にチャートと砂岩を用いていた。最下段の石は40cm大、2段目と3段目は15~30cm大のやや小振りの石材を用いており、若干の裏込も確認された。SG-201との接合部は最下段に50~60cm大の石材を用い、底面には2~3cm大の玉砂利が僅かにみられた。また、溝跡の南端部では最上段の石積の下に、ほぼ水平に丸太材が置かれており、橋が設置されていた可能性もある。埋土は2層に分かれ、上層は暗灰黄色砂、下層は灰黄褐色細粒砂質シルトであった。基底面の標高は南(-0.127m)からSG-201の基底面(-0.322m)へ傾斜しており、池への導水路とみられる。出土遺物には陶器2点(皿1, 細片1), 磁器5点(小杯1, 瓶1, 細片3), 須恵器蓋1点, 土師質土器6点(皿1, 小皿1, 細片4)がみられた。図示した遺物は1149・1150である。1149は裏込より出土した絵唐津皿である。見込には鉄錆による文様と胎土目痕がみられる。1150は埋土上層より出土した肥前産の白磁杯で、SG-201裏込より出土した破片と接合できた。型打成形で、内面には型押による陽刻の亀と宝文を施す。

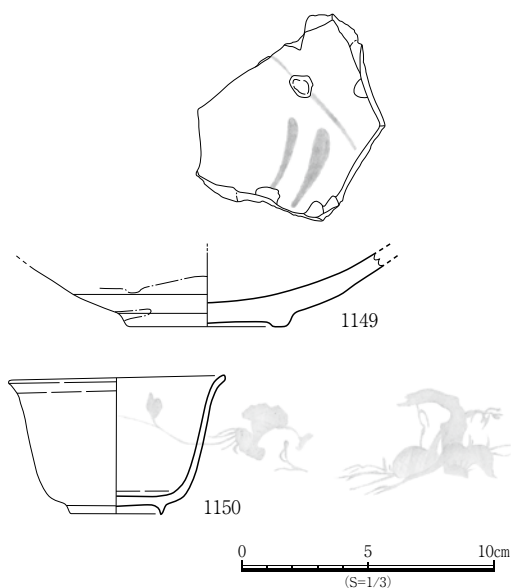


図52 SD-205出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

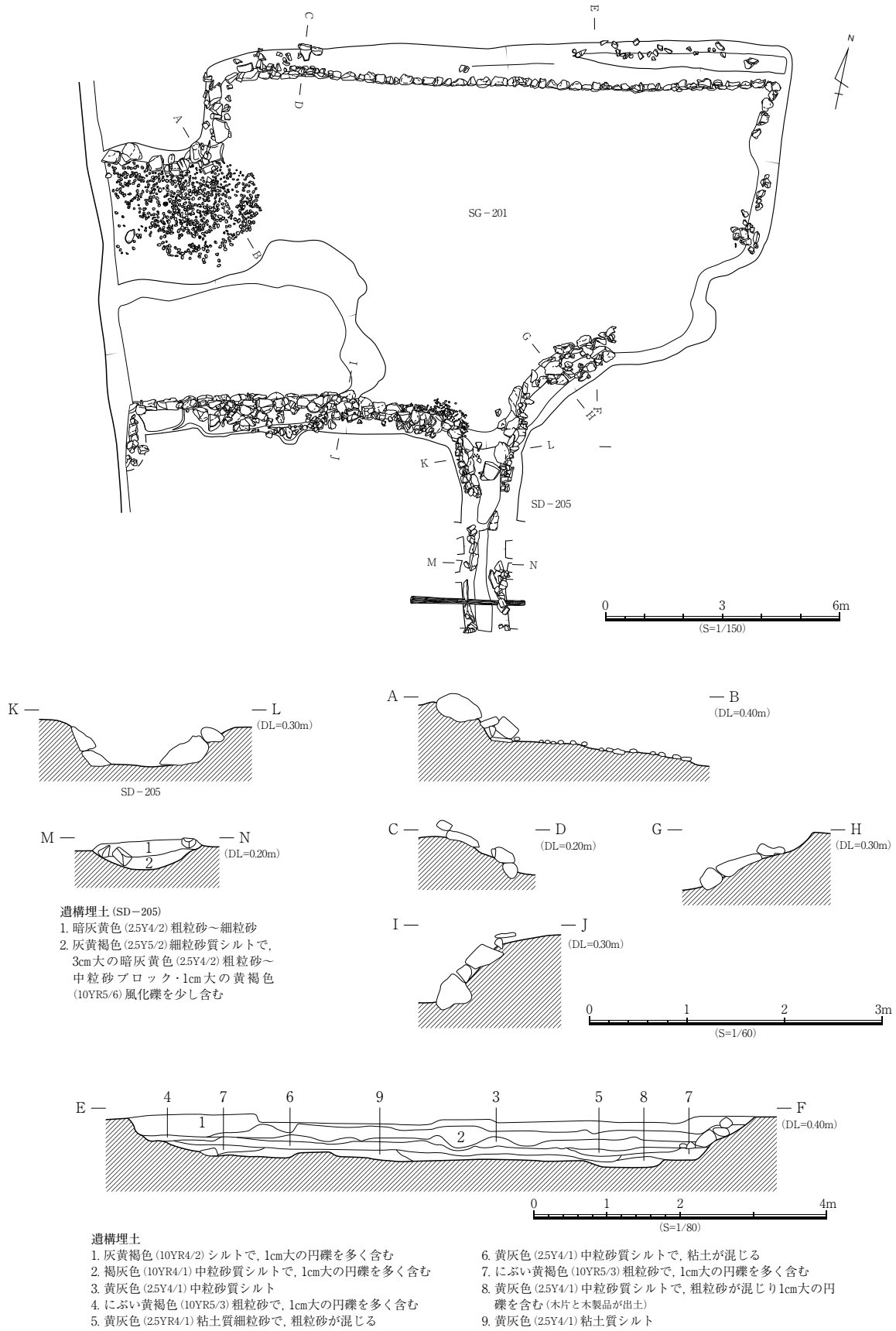


図53 SG-201

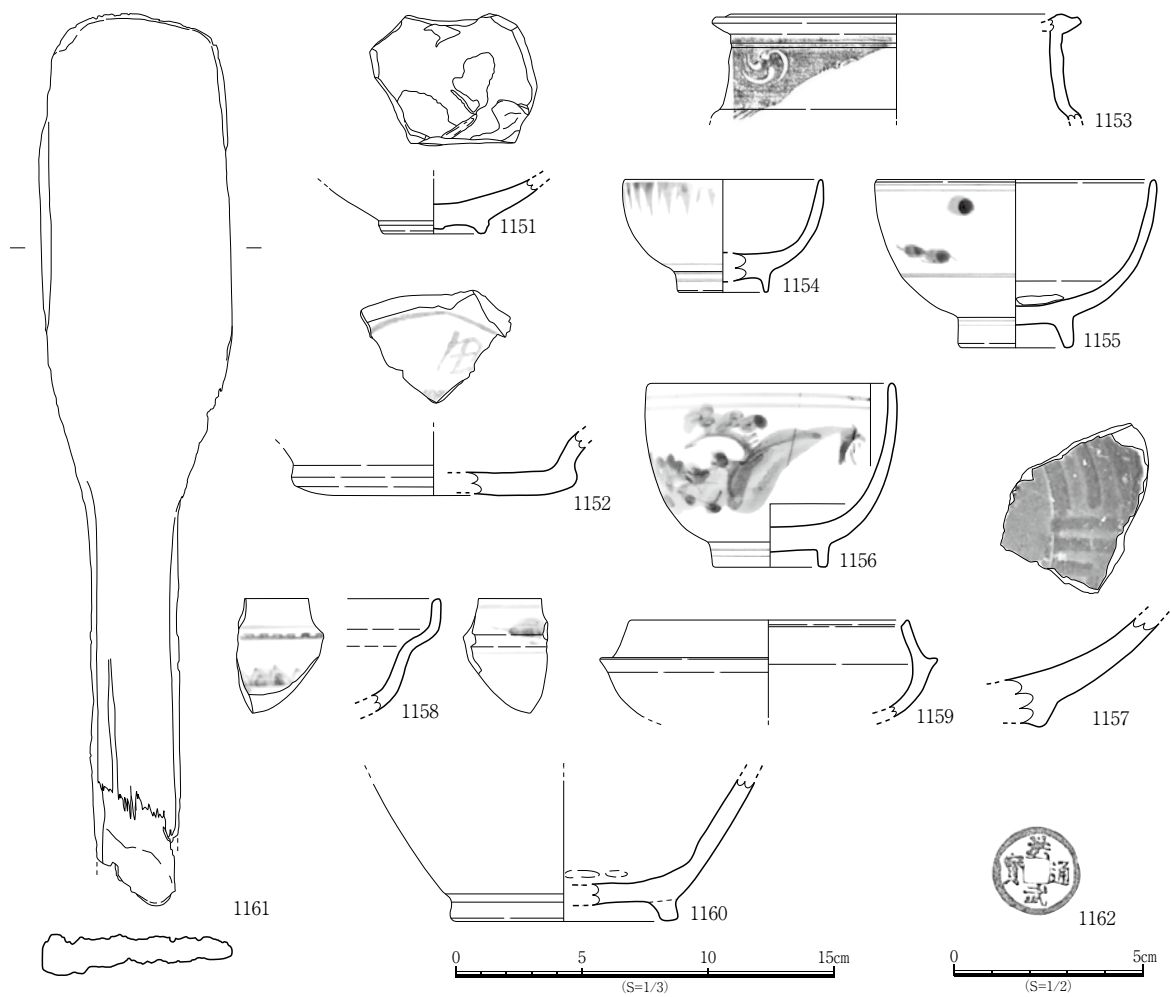


図54 SG-201出土遺物実測図

SG-201 (遺構：図53 遺物：図54)

A-1区南西部で確認した池跡で、西端は調査区外へ続く。南東部には溝跡であるSD-205が繋がる。平面形態は不正方形を呈し、検出長(東西)16.99m、検出幅(南北)9.91m、深さ96cmを測る。北側の石積は一部2段残存しており、直線的に並んでいることからSG-201の北側に建物跡が存在した可能性がある。最下段の石積は20～50cm大で、内側に面を有する。西側はほぼ直角に南に折れ、コーナー部には60cm大の砂岩を用いていた。また、西端には州浜が形成されており、検出長(東西)3.94m、全幅(南北)2.40mの範囲に5～10cm大の扁平な円礫を敷き詰めていた。南側もやや直線的に石積が配されている。石積の残存状況は比較的良好で約4段の石積が確認された。最下段の石積は20～50cm大、2段目からは15～40cm大で、石材はチャートと砂岩を用いていた。最下段は内側に面を持たせ、2段目と3段面は面を持たせずやや傾斜を持たせて積んでおり、その角度は50度を測る。裏込には10～15cm大の角礫を使用していた。埋土は9層に分かれ、概ね砂質シルトまたは砂で、下層の一部は粘土質シルトであった。

出土遺物には陶器128点(碗13, 皿13, 瓶1, 鉢3, 播鉢11, 甕4など)、磁器72点(碗23, 皿32, 小杯5, 猪口3, 瓶3など)、青花2点(皿1, 大皿1)、土師質土器84点(杯7, 皿16, 小皿6, 細片55)、土師器14点(焼塩壺2, 焼塩壺蓋2, 細片10)、須恵器7点(杯1, 蓋1, 壺2, 細片3)、瓦質土器10点(鍋1, 釜2, 火鉢1, 細片6)、瓦15点(軒丸瓦1,

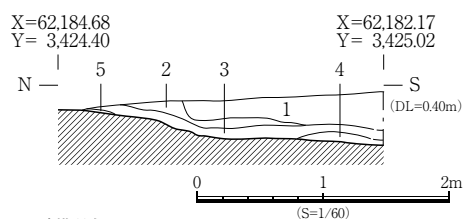


### 3. 遺構と遺物 (1) A-1区

丸瓦11, 平瓦3, 木製品13点(漆器椀1, 下駄5, 曲物蓋4, 切匙2など), 金属製品8点(古銭1, 煙管1, 鉄釘6)がみられた。図示した遺物は1151～1162である。1151は唐津系灰釉陶器皿で, 内面に灰釉を施し, 見込に砂目痕が残る。1152は志野焼向付で, 全面に長石釉を施し, 見込には鉄錆による文様がみられる。1153は焼締陶器甕で, 口縁部はT字状を呈するものとみられる。頸部外面に印刻による三巴文, 肩部に陰刻による斜線状の文様がみられる。1154は肥前産の磁器染付小丸碗で, 外面に雨降文と圏線がみられる。1155は肥前産の磁器染付丸碗で, 見込に付着物がみられる。1156は肥前産の磁器染付丸碗で, 外面に風景文, 松文, 蝶文, 圏線の染付がみられる。1157は肥前産の青磁大皿とみられ, 高台内は蛇ノ目釉ハギ後錆釉を施す。内面には陰刻による算木文がみられる。1158は中国景德鎮窯系の青花皿とみられる。受口状を呈し, 口縁端部には口錆を施す。外面には不明文様の染付, 内面には櫛歯文, 蓮弁文, 圏線の染付がみられる。1159は古墳時代の須恵器杯で, 回転ナデ調整を施し, 底部外面には回転削り調整を加える。1160は古代の須恵器壺で, 底部には高台を貼付する。回転ナデ調整後, 外面体部下半は回転削り調整, 底部内面には指頭圧痕が残り, 自然釉が掛かる。1161は木製品鋏とみられる。扁平で先端は隅丸方形を呈する。1162は銭貨で, 洪武通寶である。

#### SX-201 (遺構: 図55 遺物: 図56～59)

A-1区南西部で確認した遺構で, 南と西は調査区外へ続く。SD-205とSX-204を切り, SD-204に切られる。溝状を呈し, 検出長15.11m, 検出幅2.68m, 深さ51cmを測る。埋土は5層に分かれ, 上層は砂質シルト, 中層はシルト, 下層はシルト質粘土であった。出土遺物には陶器100点(碗9, 皿39, 向付5, 鉢4, 播鉢6, 壺1, 甕2, 水注1, 水差1など), 磁器99点(碗24, 皿20, 小杯2, 猪口3, 瓶2など), 青花14点(碗3, 皿7, 大皿1, 細片3), 土師質土器251点(杯1, 皿90, 小皿10, 細片150), 土師器16点(釜2, 焼塩壺7, 焼塩壺蓋1, 細片6), 須恵器杯1点, 瓦質土器6点(釜2, 細片4), 瓦95点(軒平瓦1, 丸瓦35, 平瓦59), 木製品99点(漆器椀6, その他漆器7, 下駄4, 曲物3, 曲物底板または蓋6, 箸65など), 金属製品7点(古銭1, 刀子1, 毛抜き1, 釣針1, 鉄釘1など)がみられ, 青花や絵唐津, 色絵, 向付など高級品とされるものが多く出土している。



#### 遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルトで, 1cm大の褐色砂岩風化礫と3cm大の円礫を多く含む
2. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
3. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土で, 陶磁器・木製品・動物遺存体を含む
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルトで, 2cm大の礫を含む
5. 灰黄褐色 (10YR2/1) シルトで, 1cm大の褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土のブロックを含む

図55 SX-201

図示した遺物は1163～1221で, 1163～1179は上層, 1180は中層, 1181～1221は下層から出土した。1163は肥前武雄系の二彩手皿で, 内面は白化粧土と緑釉を刷毛塗り後に透明釉を施す。1164は肥前産の銅緑釉大皿で, 折縁形である。1165は志野焼向付で, 口縁部は大きく歪み方形を呈するものとみられる。全面に長石釉を施し, 口縁端部に鉄錆による直線文, 外面には格子文を施す。1166は肥前産の陶器鉢で, 内面と外面の一部に鉄釉が流れる。1167・1168は備前焼播鉢である。1168は内面に13条単位の播目, 口縁部外面には刻印がみられる。1169・1170は肥前産の磁器染付碗で, 1169には外面に圏線と二重方形枠に「福」字の染付, 1170は外面に丸彫による縞文と口縁部外面に染付, 内面に2条の圏線の染付がみられる。漆継の痕跡が残る。1171～1174は肥前産の磁器染付皿で, 1171は蛇ノ目高台で, 見込に蝶文の染付がみられる。1172は小皿で, 型打成形とみられ, 内面には縞文, 口縁部内面には渦巻文, 見込には草花文の染付がみられる。1173は外面には1条の圏線, 内面には圏線と葡萄文とみられる染付を描く。1174は大皿で, 内面に草花文の染付がみられる。1175は中国景

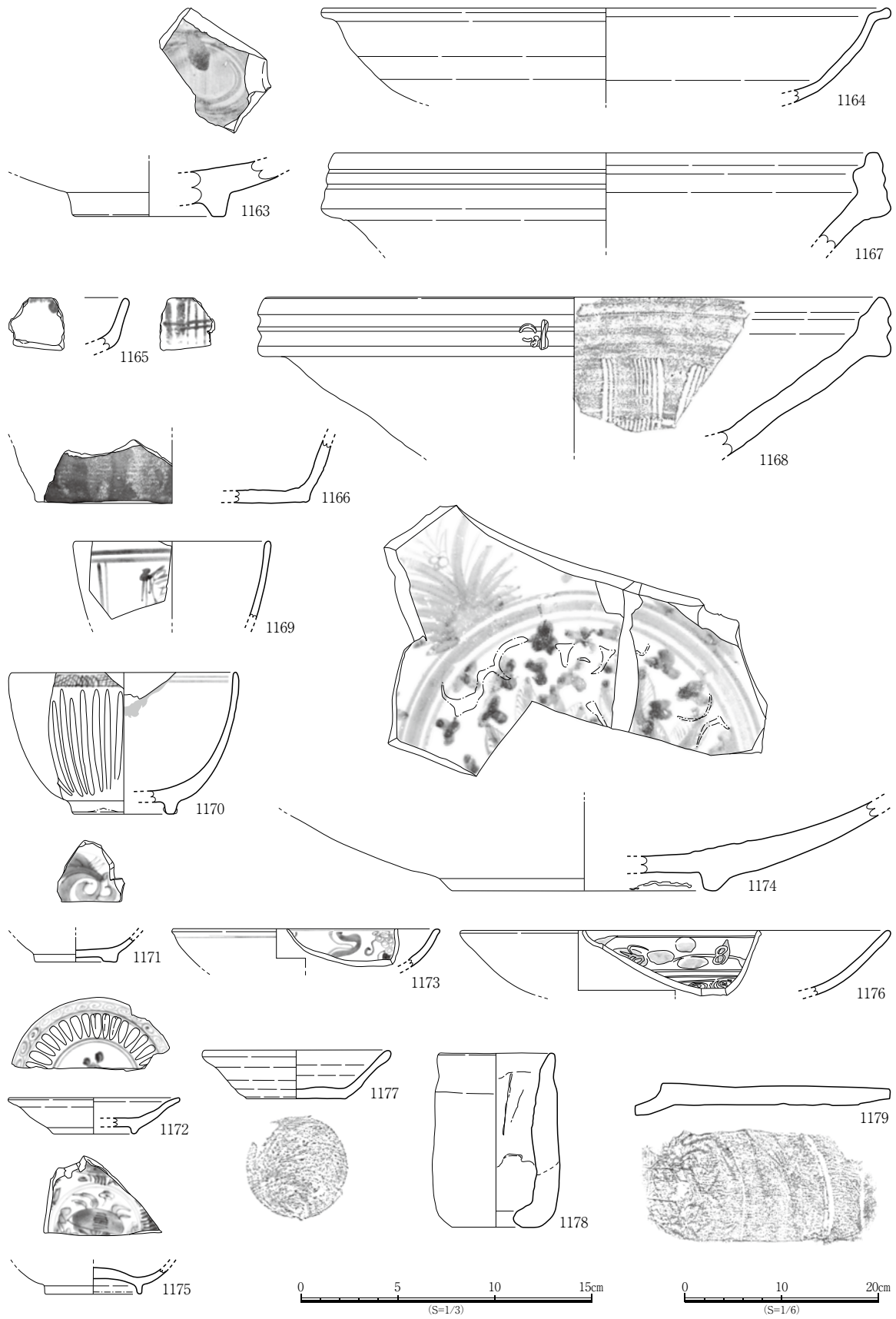


図56 SX-201上層出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

徳鎮窯系の青花碗で、底部は饅頭心となる。見込には染付がみられ、高台内には放射状の鈷痕が残る。1176は中国漳州窯系とみられる五彩皿で、内面に朱・緑色の草花文の上絵付がみられる。1177は土師質土器杯で、全面に回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。1178は土師器焼塩壺で、輪積成形である。内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整、外面は横方向のナデ調整を施す。底部は焼成後に穿孔し、使用後に転用したものとみられる。1179は丸瓦で、凸面はナデ

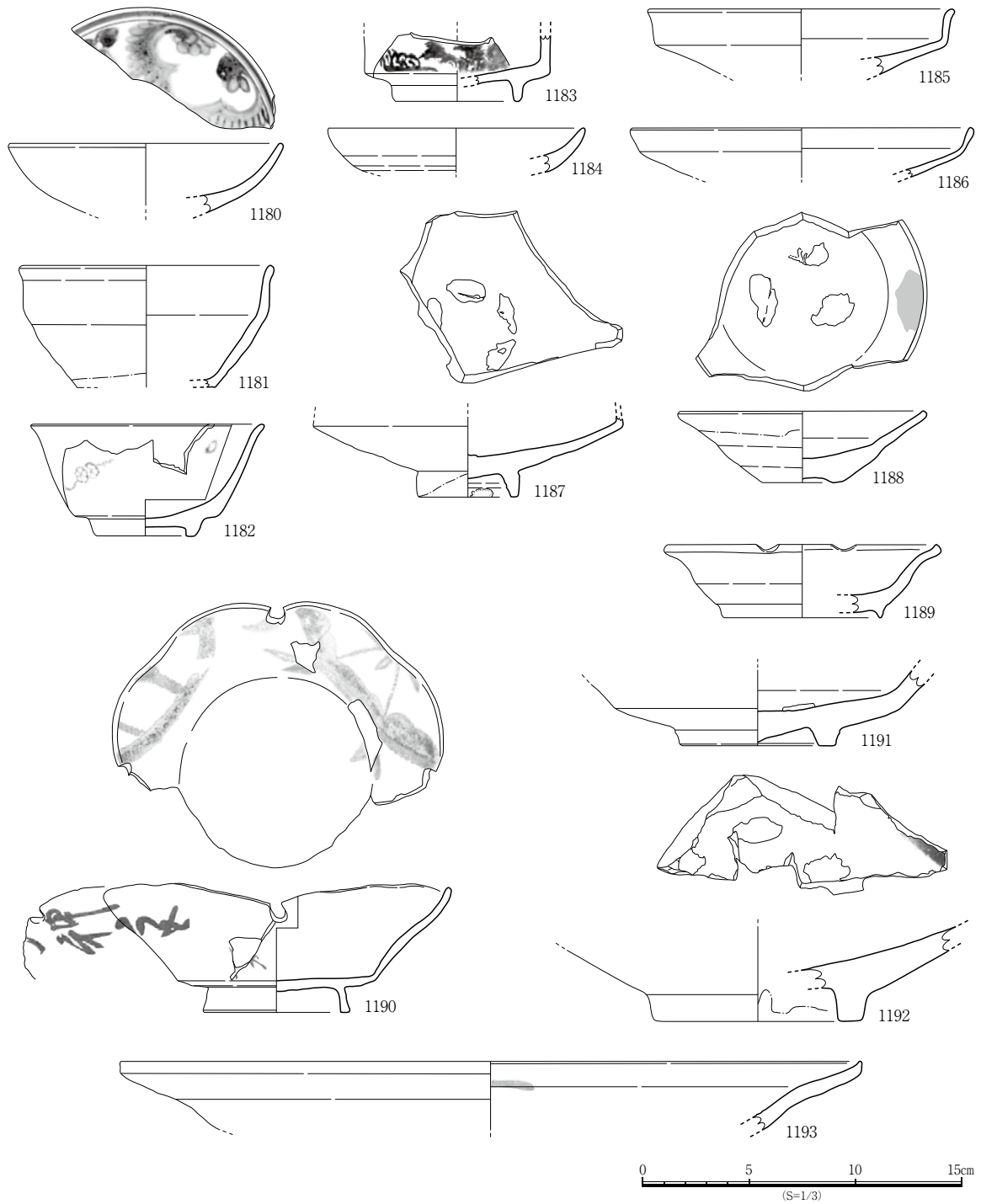


図57 SX-201中・下層出土遺物実測図

調整、凹面はコビキBの痕跡がみられる。1180は肥前産の磁器染付皿で、内面には不明文様と圏線、帯線の染付がみられ、漆継の痕跡が残る。1181は美濃産の陶器天目碗で、高台付近まで鉄釉を施す。1182は陶胎染付碗で、外面に梅文の染付がみられる。1183は肥前産の陶胎染付筒形碗で、外面に山水文の染付がみられる。外面には煤が付着する。1184は志野焼とみられる丸皿で、全面に長石釉を施す。1185は肥前産の灰釉陶器皿で、口縁部が直立する。1186は陶器皿で、全面に鉄釉を施す。器壁が薄く、口縁部は体部より屈曲して直立する。1187は肥前産の灰釉陶器皿で、見込に砂目痕が残る。1188は唐津系灰釉陶器皿で、見込に砂目痕が残る。1189は瀬戸・美濃産とみられる輪花皿風の陶器皿で、高台の断面は三角形を呈し、全面に灰釉を施す。1190は初期京焼の色絵皿で、口縁部は輪花状を呈し、3箇所半円形の孔が残る。全面に透明釉を施し、著しく貫入が入る。外面には朱色の文様と「□神□」の上絵付による文字、見込から内面には朱色の笹文と緑・黄色の円弧状の上絵付がみられる。1191は肥前産の鉄釉皿で、見込に砂目痕、高台内には兜巾が残る。1192は肥前武雄系

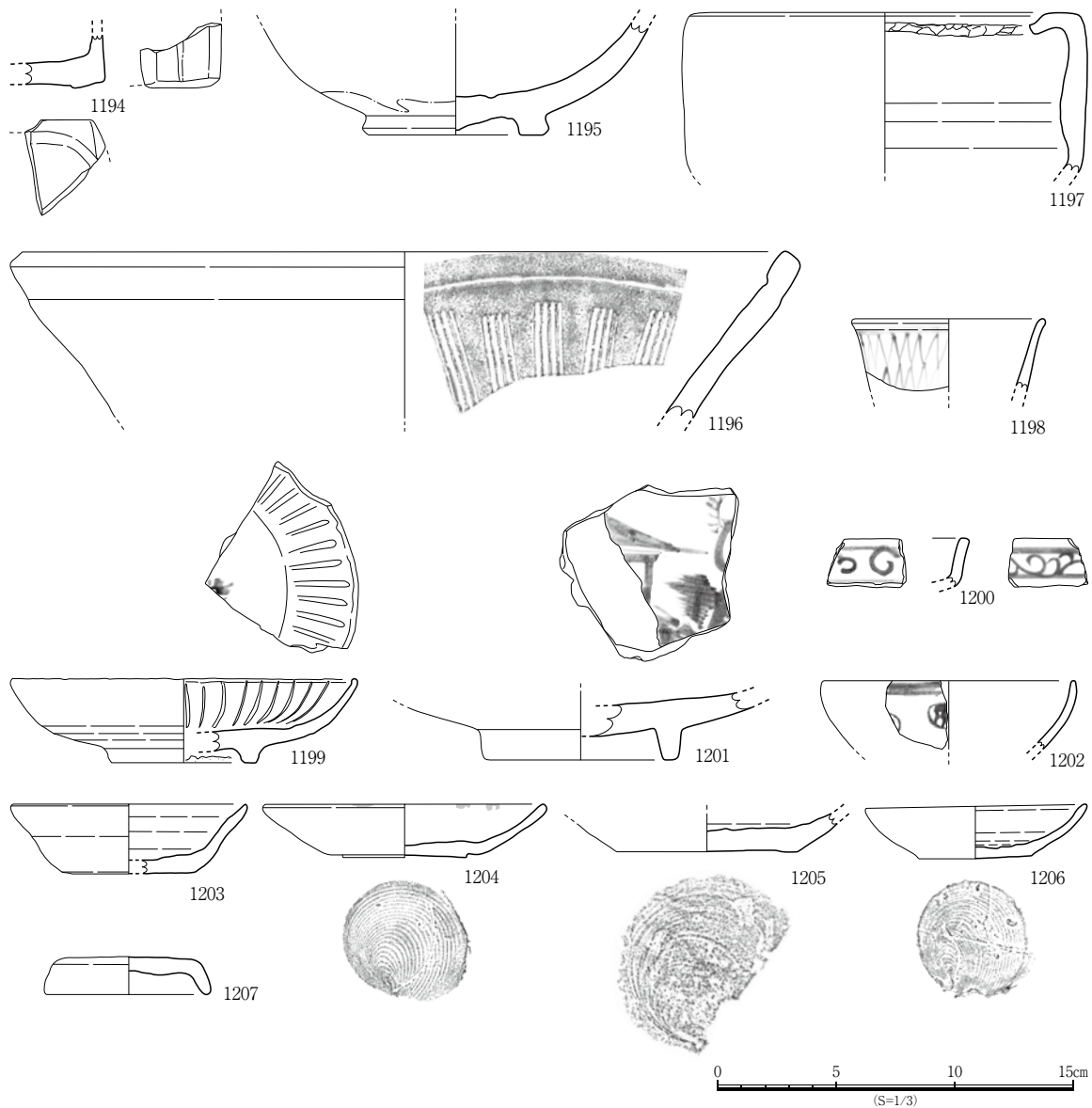


図58 SX-201下層出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

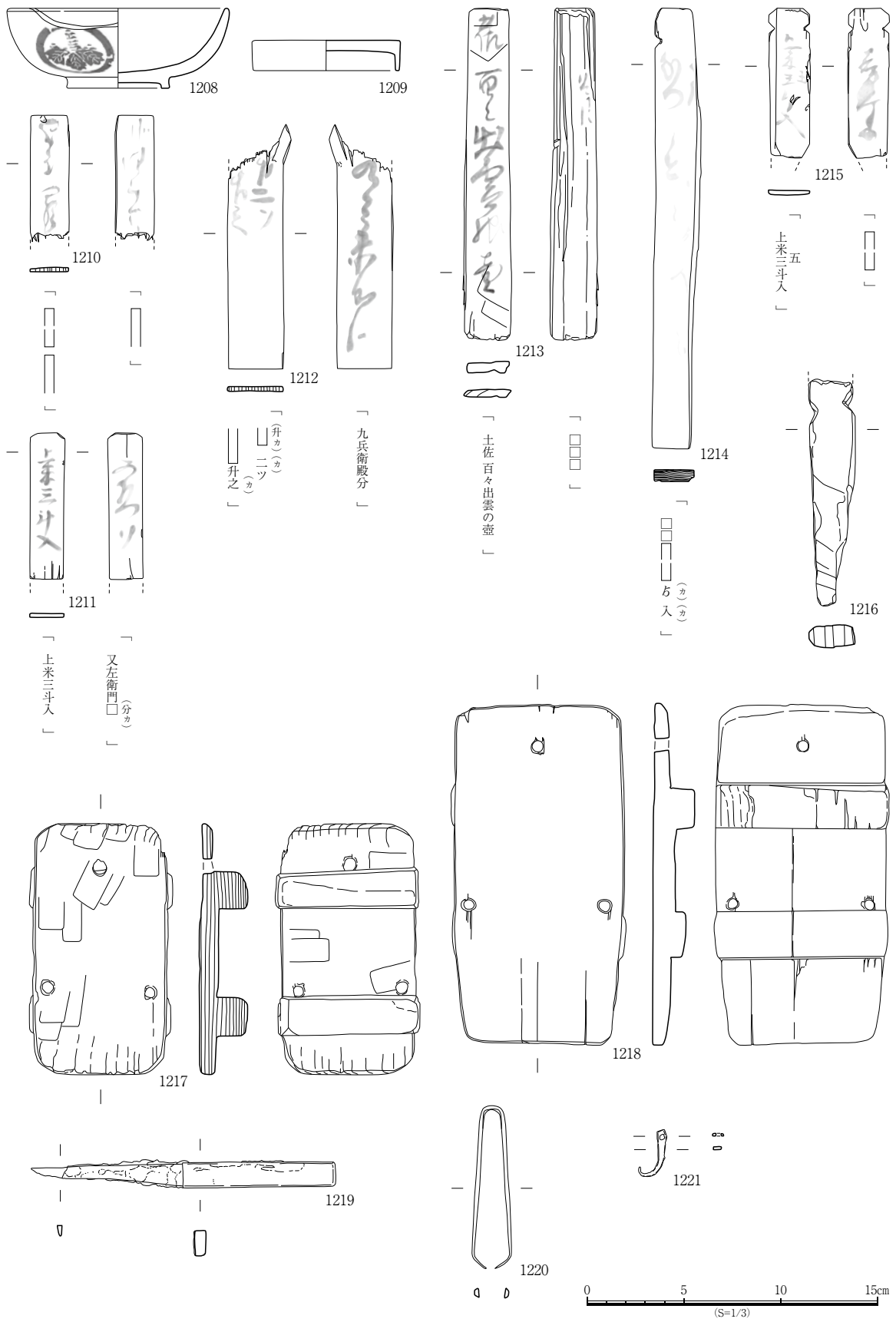


図59 SX-201下層出土遺物実測図2

の二彩手大皿で、見込に銅緑釉による文様がみられる。被熱するため釉は白色を呈する。1193は絵唐津大皿で、内面に鉄錆による文様の一部がみられる。1194は織部焼向付とみられる。型成形で口縁部は方形、高台は円形を呈する。外面に鉄錆と白化粧土による文様がみられる。1195は唐津系灰釉陶器鉢で、内面から高台付近まで灰釉を施す。1196は丹波焼播鉢とみられ、内面に4条単位の播目が残る。1197は焼締陶器灰吹で、口縁端部には焼成後の細かい割れが多数みられる。1198は肥前産の磁器染付小碗で、外面に圏線と網目文の染付がみられる。1199は肥前産の磁器染付菊皿で、型打成形である。口縁部内面には型による陰刻の縞文、見込に染付の一部が残る。1200は肥前産の磁器染付皿で、内外面に圏線と唐草文の染付がみられる。1201は肥前産の磁器染付中皿で、見込に風景文の染付がみられる。1202は中国産の青花碗とみられ、外面に圏線と不明の文様が施される。1203は土師質土器杯で、回転ナデ調整を施す。全面に煤が付着し灯明皿として使用したものとみられる。1204～1206は土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。1204は口径が大きく、口縁部と見込に煤が付着する。1205は底径が大きく、器壁が厚い。1206は小型で器壁が薄い。1207は土師器焼塩壺蓋で、ナデまたは横ナデ調整を施す。1208～1218は木製品である。1208は漆器椀で、外面は黒塗で朱の丸に桐文を施し、内面は赤塗である。1209は漆器合子蓋で、円筒形を呈する。外面は赤塗、内面は黒塗で、樹種はヒサカキ属である。1210～1215は木簡で、1210～1214は短冊形を呈する。1210は小型で、両面に墨書がみられるが、墨書は薄く解読は不可であった。1211も小型で、上端両隅を切る。両面に墨書がみられ、表面は「又左衛門□(分カ)」、裏面は「上米三斗入」の文字がみえる。1212は、両面に墨書がみられ、表面は「九兵衛殿分」、裏面は「(升カ)ニ(カ)ツ」の墨書が残る。1213は表面に「土佐百々出雲の壺」、裏面にも墨書がみられる。1214は上部側面に切り込みがみられる。片面に墨書が残るが、解読は不可であった。1215は上端両隅を切り、上部側面に切り込みを入れ、下部は細く加工する。両面に墨書がみられ、表面は墨書が薄く解読不可、裏面は「上米三斗入」の文字が残る。1216は上部側面に切り込みを入れ、下部は細く加工する。厚く粗雑な作りで、墨書はなく、木簡の未成品とみられる。1217は連歯下駄で、長方形を呈し、3箇所径6mmの円孔が残る。小型で歯は低く、子供用とみられる。1218も連歯下駄で、長方形を呈し、3箇所径5mmの円孔が残る。歯は著しく擦り減る。1219は鉄製品刀子で、柄部は木製で完存する。1220は銅製品とみられる毛抜きで完存する。柄部は内側が平らで外側は3面を有する。先端部は平らで幅1.1cmを測る。1221は銅製品で釣針とみられる。上部は平たく、径3mmの円孔があり、先端は細く鉤状に曲がる。

SX-202(遺物:図60)

SX-201の北で確認した遺構で、南は調査区外へ続く。SD-204を切り、SX-201・204に切られる。溝状を呈し、検出長2.23m、検出幅1.42m、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器皿2点、磁器鉢1点、土師質土器11点(小皿1、細片10)

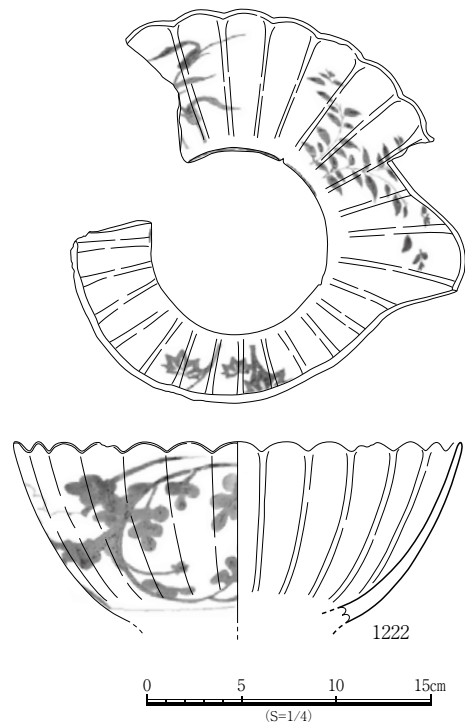


図60 SX-202出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

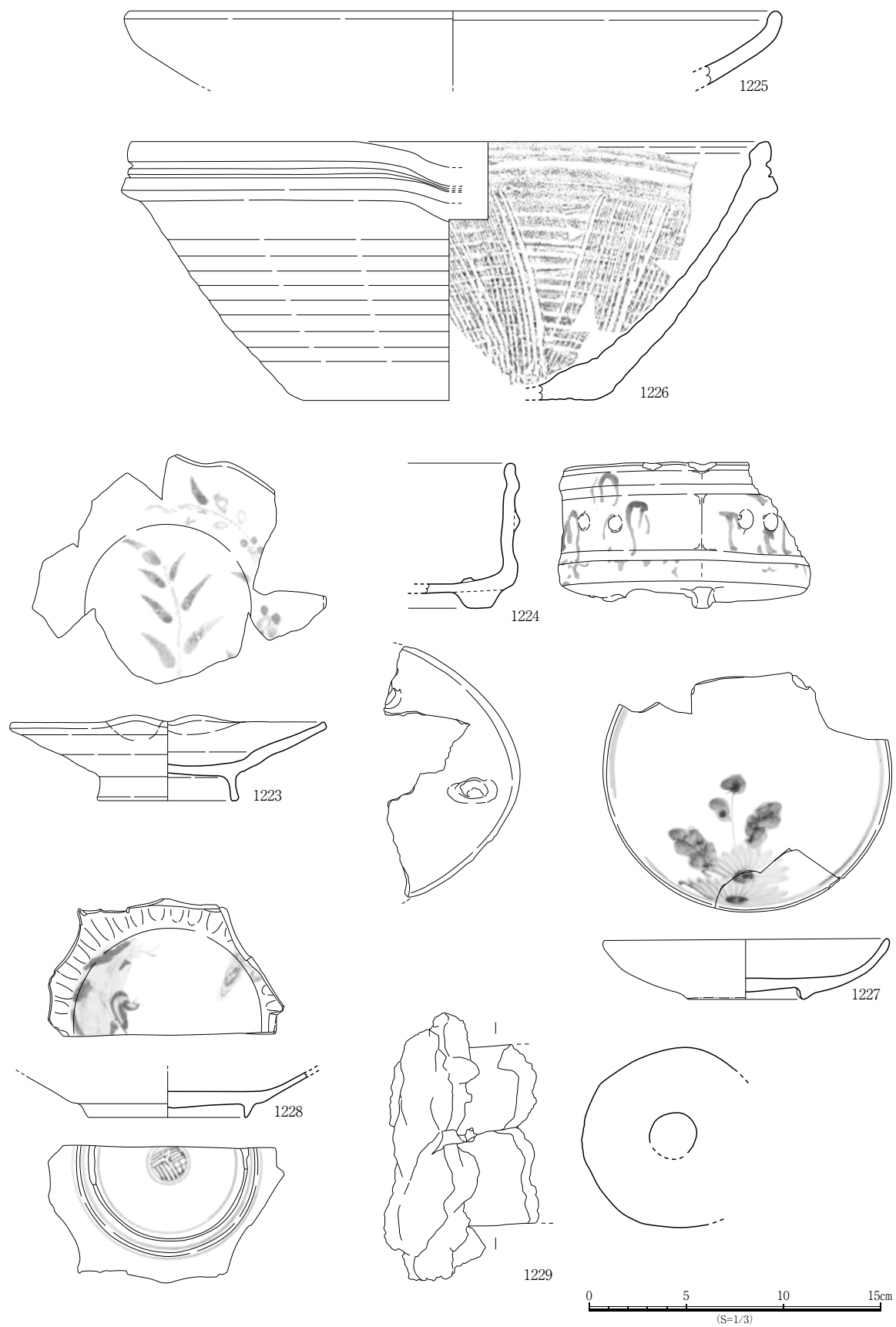


図61 SX-203出土遺物実測図

がみられた。図示した遺物は1222で肥前有田産の磁器染付鉢である。菊花形を呈し、外面には草花文と雲文・圏線、内面には草花文と圏線の染付がみられる。

#### SX-203(遺物：図61)

A-1区南東部で確認した遺構で、SD-204とSG-201に切られ、SX-202を切る。平面形態は不整形を呈し、検出長4.87m、検出幅3.11m、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫と多量の3cm大の円礫を含んでいた。出土遺物には陶器70点(碗6, 皿8, 向付1, 瓶1, 播鉢1, 灯明受皿1, 細片26など)、磁器35点(碗3, 皿13, 火入1, 瓶1, 細片17)、土師質土器56点(皿13, 小皿4, 細片39)、土師器5点(焼塩壺3, 焼塩壺蓋1, フイゴ羽口1)、丸瓦1点、木製品碗1点、鉄滓がみられた。図示した遺物は1223～1229である。1223は初期京焼波縁皿で、内面に緑釉と褐釉と鉄錆による草花文を描き、全面に透明釉を施し、暈付は釉ハギを行う。1224は志野焼向付で隅丸方形を呈する。側面には鉄錆による文様が施され、円形浮文を2個ずつ貼付する。底部には楕円形の脚を4箇所貼付するものとみられる。1225は備前焼建水で、全面に回転ナデ調整を施す。1226は備前焼播鉢で、内面には10条単位の播目がみられる。1227は肥前産の磁器染付皿で、内面に菊花と圏線の染付がみられる。1228は肥前有田産の染付菊皿で、内面には土坡に鳥と雲文、高台内には圏線と二重丸に「福」字の染付がみられる。1229は土師器フイゴの羽口である。円筒形を呈し、外面にナデ調整を施す。先端には鉄滓が付着する。

#### SX-204

SX-203の南東で確認した遺構で、SX-201に切られ、南は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈し、検出長6.13m、検出幅1.02m、深さ42cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫と多量の3cm大の円礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1)、磁器2点(皿1, 瓶1)、瓦3点(丸瓦1, 平瓦2)がみられた。

#### SX-205

SX-204の北東で確認した遺構で、SD-201を切る。平面形態は不整形を呈し、検出長7.60m、検出幅4.22m、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで細粒砂と0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗1, 皿1, 細片7)、磁器5点(碗2, 皿1, 細片2)、土師質土器15点(皿3, 細片12)、瓦3点(丸瓦2, 平瓦1)がみられた。

#### SX-206(遺物：図62)

A-1区北東部で確認した遺構で、北は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈し、検出長5.16m、全幅5.00m、深さ47cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、砂粒と1cm大の礫、少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器24点(碗1, 皿1, 鉢3, 播鉢3, 鍋1, 細片15)、磁器5点(碗1, 皿2, 細片2)、土師質土器27点(皿2, 細片25)、瓦4点(丸瓦2, 平瓦2)がみられた。図示した遺物は1230で中国景德鎮窯系の五彩小碗である。外面には朱色の圏線、見込には朱色の圏線と朱・緑色とみられる草花文の上絵付が施される。高台内には輪状に釉が禿げており重ね焼痕とみられる。

#### P-201(遺物：図62)

A-1区北東部で確認したピットで、一部攪乱に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長は長径76cm、短径64cm、深さ31cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(杯2, 細片6)、土師器焼塩壺1点がみられた。図示した遺物は1231で土師器焼塩壺である。輪積成形で、内面は粗いナデ調整、口縁部は横ナデ調

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

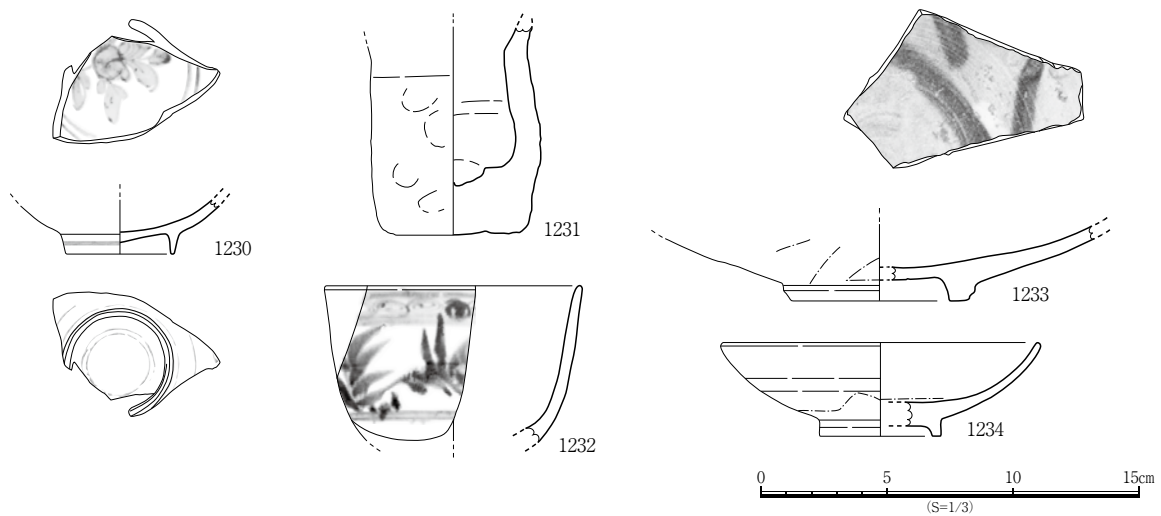


図62 SX-206, P-201～204出土遺物実測図

整, 外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。

P-202(遺物: 図62)

A-1区北東部で確認したピットで, SD-202を切る。平面形態は円形を呈し, 径39cm, 深さ11cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5～1cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器碗1点, 土師質土器小皿1点がみられた。図示した遺物は1232で肥前産の磁器染付碗である。外面に渦文と草文の染付がみられる。

P-203(遺物: 図62)

P-202の南で確認したピットで, SD-202を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺55cm, 短辺53cm, 深さ10cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点, 土師質土器2点(杯1, 細片1), 平瓦2点がみられた。図示した遺物は1233で肥前武雄産の二彩手皿である。内面は白化粧土を刷毛塗り後, 透明釉と一部緑釉を施す。見込に砂目痕が残る。

P-204(遺物: 図62)

A-1区南東部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し, 長径48cm, 短径26cm, 深さ6cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には図示した陶器小皿1点がみられた。1234は肥前内野山窯の陶器小皿で, 内面は銅緑釉, 外面は透明釉を施す。見込は蛇ノ目釉ハギし, 砂目が付着する。

③ 3面

18世紀前葉から後葉にかけての遺構で, 17世紀代にB区に居住していた山内家がA区に移ってきて居住していたとされる時期である。この時期のA区の遺構は非常に少なく, 江戸後期または近代に削平されたものとみられる。

SK-301(遺物: 図63)

A-1区中央部で確認した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し, 長径1.16m, 短径0.96m, 深さ38cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5～1cm大の礫と淡黄色礫を含んでいた。出土遺物には陶器4点(皿3, 細片1), 磁器6点(碗1, 皿1, 小杯1, 蕎麦猪口1, 細片2)がみられた。図示した遺物は1235・1236である。1235は肥前産の磁器染付小碗で, 口縁部外面に雨降文の染付がみられる。1236は肥前

産の磁器染付猪口で、外面にコンニャク印判による鶴・松文がみられる。

**SK-302**(遺物:図63)

SK-301の東で確認した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、長径1.27m、短径1.09m、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器5点(碗3, 小杯1, 細片1), 土師質

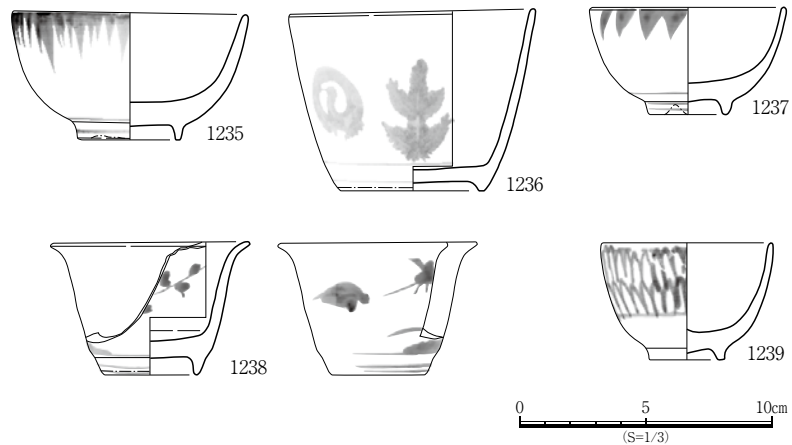


図63 SK-301~303出土遺物実測図

土器片1点がみられた。図示した遺物は1237・1238である。1237は肥前産の磁器染付小丸碗で、口縁部外面に雨降文の染付がみられる。1238は肥前産の磁器染付杯で、外面に梅文と圏線の染付がみられる。

**SK-303**(遺物:図63)

A-1区東部で確認した土坑で、SK-304に切られる。平面形態は不整形を呈し、検出長78cm、検出幅43cm、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫と淡黄色礫を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、磁器碗1点、土師質土器4点(皿1, 細片3)がみられた。図示した遺物は1239で肥前産の磁器染付小碗である。外面に菊弁状の染付がみられる。

**SK-304**

A-1区東部で確認した土坑で、SK-303を切る。平面形態は不整楕円形を呈するものとみられ、長径1.61m、短径1.06m、深さ26cmを測る。出土遺物には陶器2点(皿1, 鉢1), 磁器4点(碗1, 小杯1, 細片2), 土師質土器2点(皿1, 細片1)がみられた。

**SD-301**(遺構:図40 遺物:図64・65)

A区とB区を分ける屋敷境の南北溝跡で、両端は調査区外へ続く。検出長30.48m、全幅2.86m、深さ58cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は6層に分かれ、上層は砂質シルトまたはシルト、下層は砂質シルトまたは粘土質シルトであった。出土遺物には陶器70点(碗5, 皿16, 鉢1, 播鉢6, 壺2, 甕1, 細片39), 磁器44点(碗12, 皿7, 小杯1, 猪口1, 瓶1, 細片22), 土師質土器32点(皿12, 小皿7, 細片13), 土師器2点(火鉢1, 細片1), 須恵器2点(蓋1, 甕1), 瓦質土器5点(火鉢1, 鍋1, 細片3), 瓦8点(軒平瓦2, 丸瓦2, 平瓦4), 木製品5点(箸4, 下駄1)がみられた。

図示した遺物は1240~1255である。1240は唐津系灰釉陶器皿で、見込に胎土目痕が残る。1241は肥前産の灰釉陶器皿で、見込に陰刻による文様がみられる。1242は肥前産の内野山窯とみられる灰釉陶器中皿で、見込の5箇所目痕が残る。1243は肥前産の灰釉陶器鉢で、外面体部下半まで灰釉を施す。1244は肥前武雄産の二彩手鉢で、折縁形を呈する。内面は白化粧土による波状の刷毛目文で、褐釉と銅緑釉を流し掛けする。外面は口縁部から外面体部中位まで鉄釉を施す。1245は備前焼播鉢とみられ、内面に10条単位の播目がみられる。1246は陶器四耳壺で、口縁部は玉縁状を呈し、肩部には2条の凹線が巡り、紐状の耳を貼付する。口縁部内面と外面体部下半には光沢のある鉄釉を

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

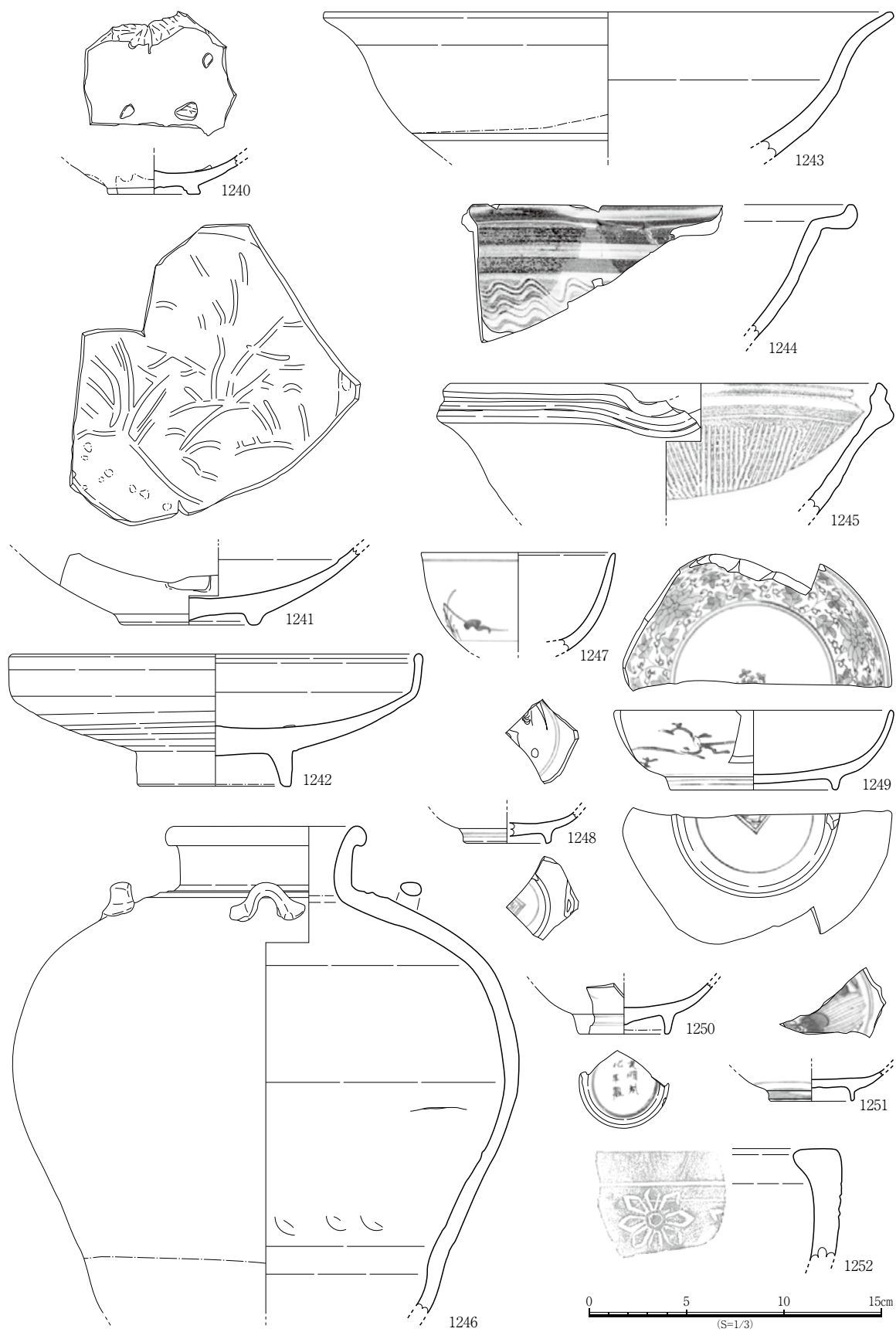


図64 SD-301出土遺物実測図1

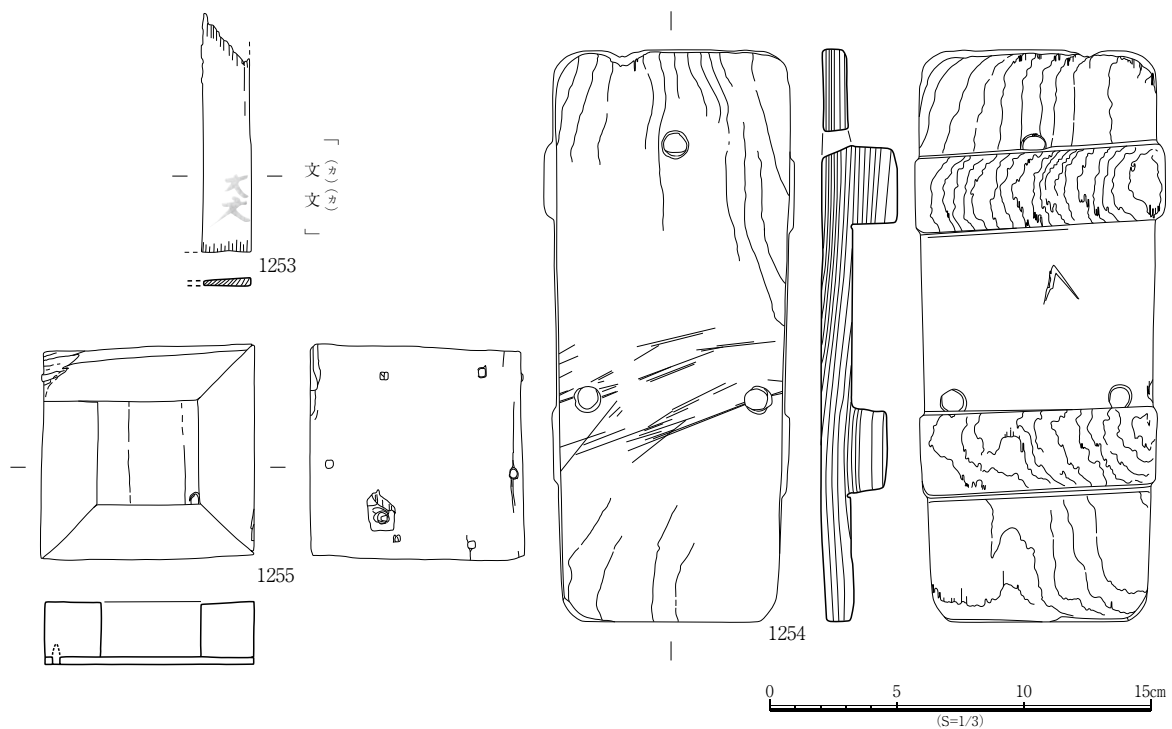


図65 SD-301出土遺物実測図2

施す。1247は肥前産の染付小丸碗で、外面に草花文と圏線の染付がみられる。1248は肥前有田産の色絵小碗で、内外面に緑色の上絵付と圏線の染付、高台内に圏線と銘の染付がみられる。1249は肥前有田産の染付皿で、口鏝を施す。外面に唐草文と圏線、内面に花唐草文、見込に五弁花文の染付、高台内に圏線と二重方形枠内に渦「福」の銘がみられる。1250は青花碗で、外面に圏線と不明文様の染付、高台内に圏線と「大明成化年製」の銘がみられる。1251は中国景德鎮窯系の青花皿で、外面には圏線、見込には団龍文の染付がみられる。1252は土師器火鉢とみられ、口縁部は直立し端部は内側に肥厚する。回転ナデ調整で、外面には沈線と印花文がみられる。1253～1255は木製品である。1253は木筒で、短冊形を呈するものとみられ、片面に「文(カ)文(カ)」の墨書が残る。1254は長方形を呈する連歯下駄である。径1cmの孔が3箇所を穿ち、裏面に「へ」の刻印がみられる。指の部分の部分が摩耗する。1255は箱物で、浅い枳状を呈する。底板に木釘で側板を留める。

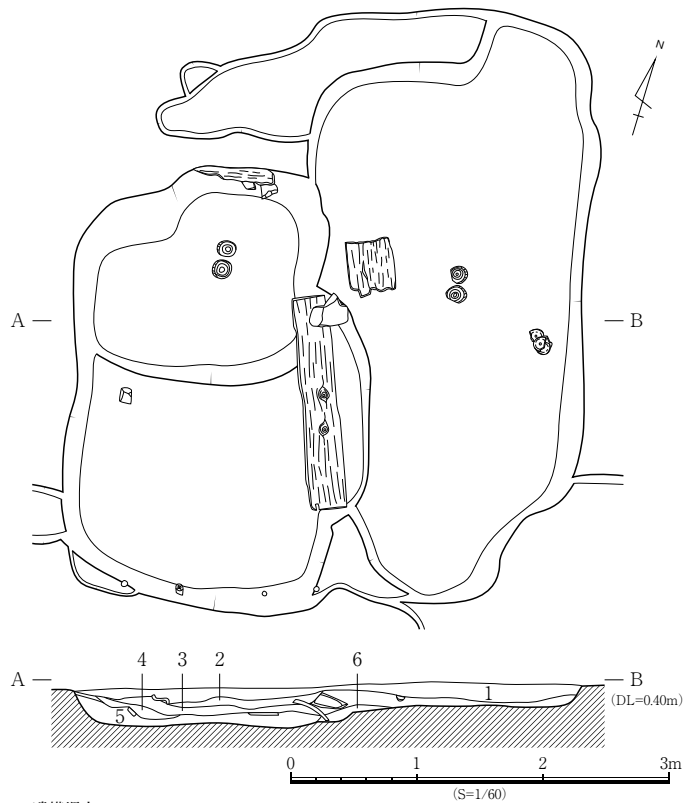
SX-301(遺構：図66 遺物：図67～69)

調査区南東部で確認した遺構で、平面形態は不整形を呈し、全長4.07m、全幅4.03m、深さ34cmを測る。埋土は6層に分かれ、中層から下層からは木製品が多く出土した。出土遺物には陶器104点(碗13、皿7、火入2、瓶1、鉢2、播鉢6、甕1、灯明受皿3、細片67など)、磁器76点(碗10、皿3、小杯3、蕎麦猪口6、瓶1、細片53)、土師質土器91点(皿10、小皿5、白土器1、細片75)、土師器焼塩壺2点、瓦質土器火鉢1点、瓦9点(丸瓦4、平瓦5)、木製品40点(漆器碗2、箸3、木筒19、下駄2、曲物2、曲物底板または蓋9、柄杓1など)がみられた。図示した遺物は1256～1278である。1256は肥前産の陶器火入で、外面は白化粧土を刷毛塗り後に透明釉を施す。内面と底部外面は無釉である。1257は肥前武雄産の二彩手鉢で、内面には放射状の櫛描文の後、白化粧土による文様を施し、口縁部内面には緑釉と褐釉を掛ける。体部外面は回転ナデ調整で、下部には回転削り調整を加えて鉄釉を施す。1258は肥前産の陶器甕で、口縁部は直立し端部はT字状をなす。回転ナデ調整で、内面には格子状の叩目が残り、外面には鉄釉を施



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

す。口縁端部には浅い沈線が2条、体部外面には沈線と波状文がみられる。1259は土師器焼塩壺蓋である。著しく摩耗するため調整は不明である。1260～1275は木製品木筒である。1260は一部を欠損するため形状は不明で、片面に「衣笠村弥右衛門カタ(殿カ)」の墨書が残る。1261は短冊形を呈するものとみられ、表面は「秋沢(カ)太□(郎カ)殿…」、裏面は「小豆…」の墨書が残る。1262も短冊形を呈するものとみられ、両面に墨書が残るが解読は不可であった。1263も短冊形を呈するものとみられ、上部に径2mmの円孔が残る。表面は「□(岩カ楠カ)目六左衛門殿竹…」、裏面は「大豆(カ)三斗」の墨書が残る。1264は上部側面に切り込みを有する。両面に墨書が残る。1265は上端の隅を切り、上部側面に切り込みを有する。表面は「□(岩カ楠カ)目六左衛門殿…」、裏面は「かき七十□入」の墨書がみられる。



遺構埋土

1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトで、2cm大の円礫を特に多く含む
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘土質シルトで、植物片と木製品を多く含む
3. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘土質シルトで、木製品を特に多く含む
4. 灰白色 (5Y7/2) シルトで、灰が堆積する
5. 黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂質シルトで、植物片と木製品を多く含む
6. 褐灰色 (10YR4/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の円礫を少し含む

図66 SX-301

表面は1263と同じ可能性がある。1266は短冊形で、上端隅を丸く仕上げ、上部には径3mmの円孔と側面に切り込みがみられる。表面には「山内蔵人内 倉田□(寿カ)□(勇カ)」、裏面にも墨書が残る。1267は上部側面に切り込みを入れ、下部を尖らせたもので、両面に墨書がみられるが薄いため解読は不可能であった。1268も1267と同様の形態を呈し、表面は「布師田村」、裏面は「武左衛門」の墨書が残る。1269は上端を丸く加工し、上部側面に切り込みを入れ、下部を尖らせたもので、片面に墨書が見られ「□□村出」の墨書が残る。1270は上部側面に切り込みを入れ、下部を尖らせたもので、表面は「□□村十助」、裏面は「□(大カ)豆四斗入」の墨書が残る。1271は下部を尖らせたもので、片面に墨書がみられるが薄いため解読は不可能であった。1272は短冊形を呈し、両面に墨書が残る。表面には「大原権(カ)左(カ)衛門」の他、人名とみられるの墨書が残る。1273は短冊形を呈し、上部に径3mmの円孔が残る。片面に墨書がみられるが薄いため解読は不可能であった。1274は短冊形を呈し、「蔵人様壺通 書状壺通 宝永四年 亥四月廿九日」の墨書が残る。1275は短冊形を呈し、周囲の10箇所に木釘が打たれており箱物の上面とみられる。表面には「かみそ里入 今□ □ふ □(花押カ) □(花押カ)」の墨書、裏面には花押とみられる墨書が2箇所に残る。1276は木製品で中折下駄とみられる。隅丸方形を呈し、6箇所に2個単位の円孔が残る。つま先と踵部分、中央部後方は裏面と側面の二方向に貫通する孔があり、中央部上方の孔は貫通していない。また上方と下方の接合部には横方向に貫通する孔が残る。1277は木製品

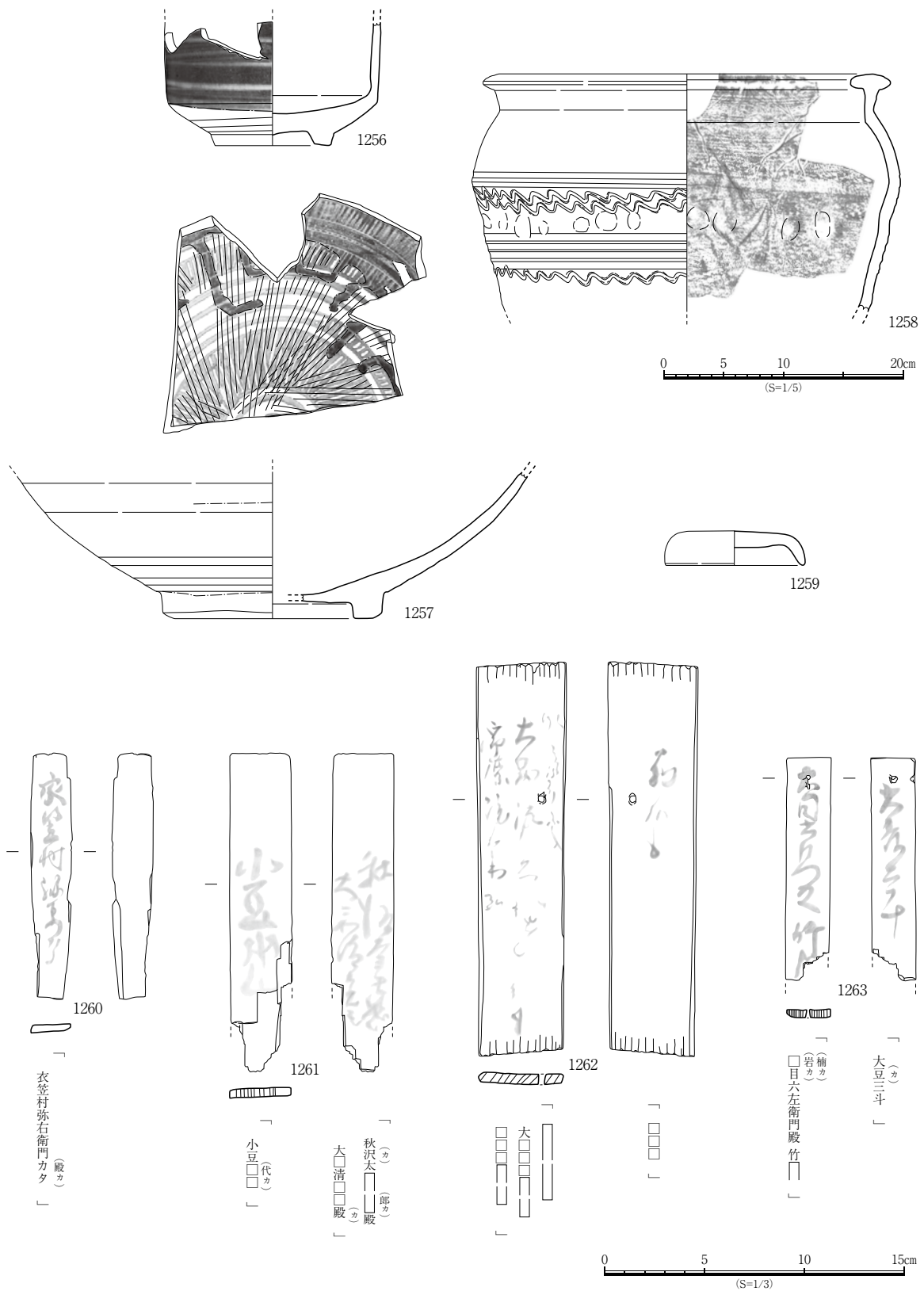


図67 SX-301出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

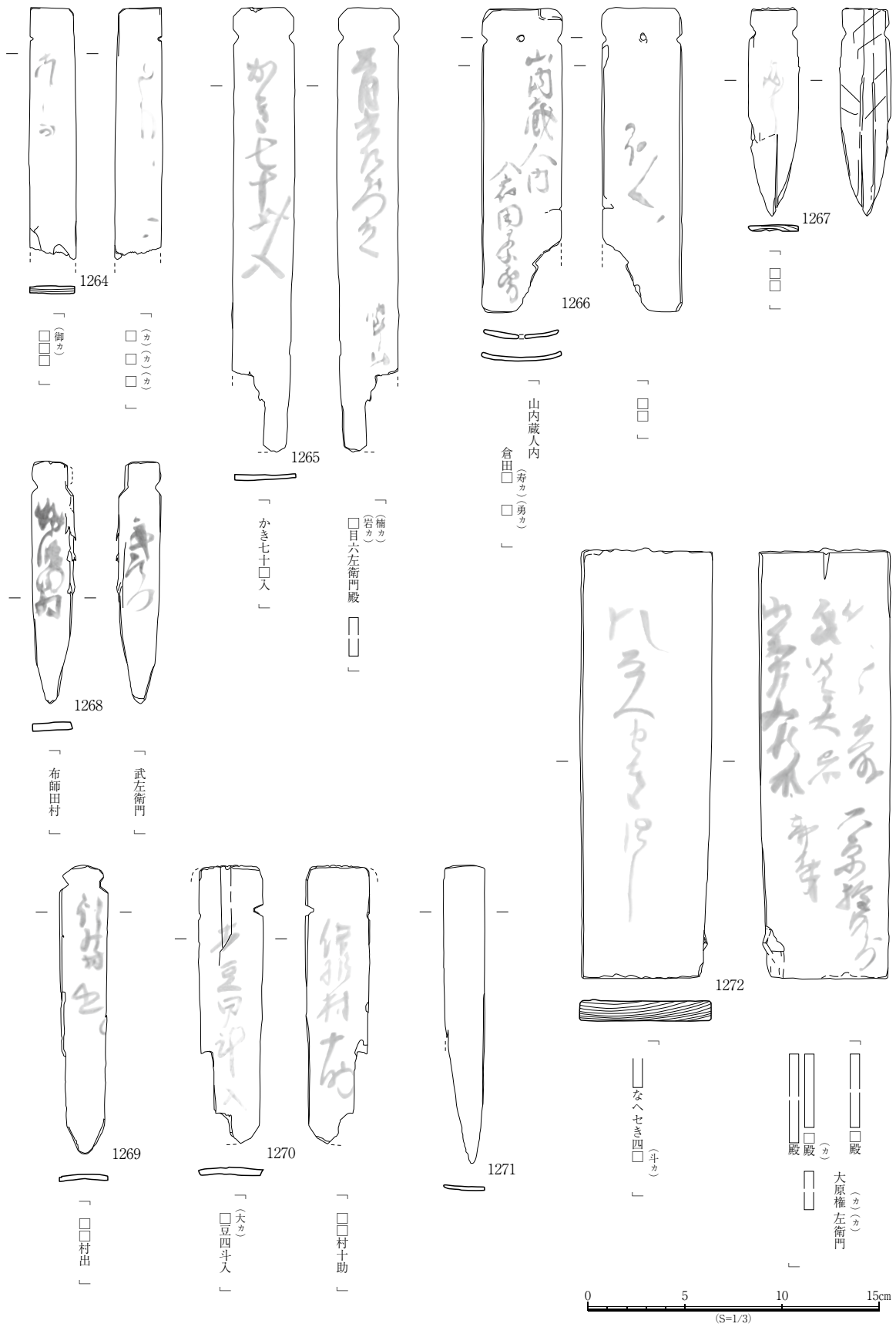


図68 SX-301出土遺物実測図2

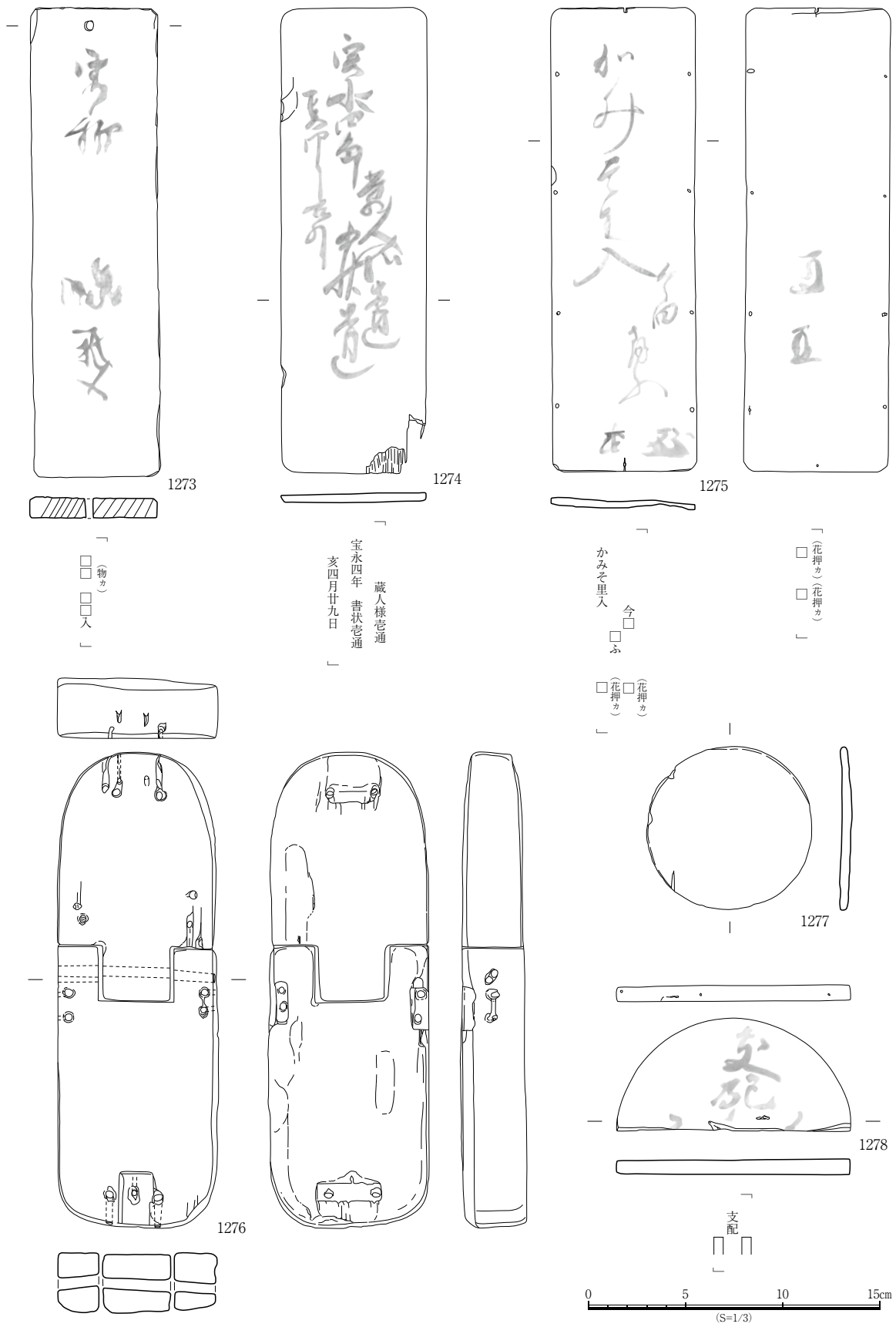


図69 SX-301出土遺物実測図3

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

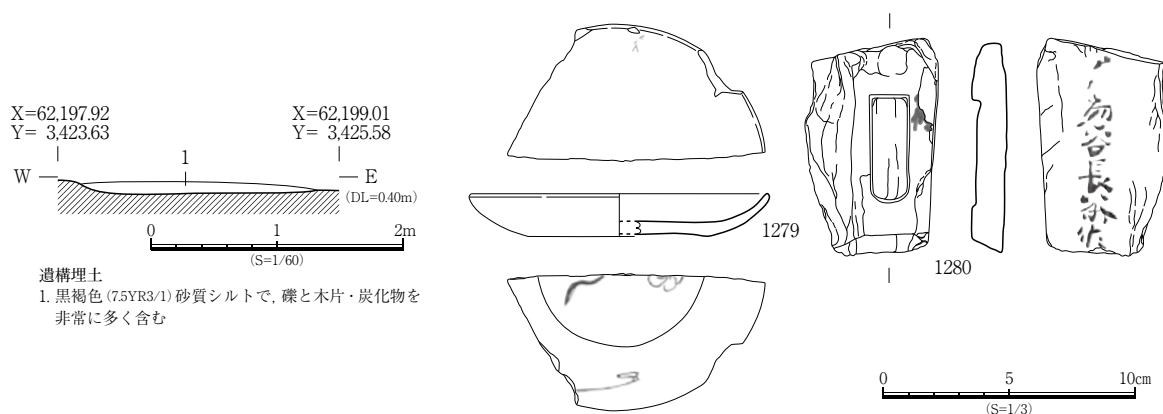


図70 SX-302セクション図及び出土遺物実測図

蓋で、表面の一部は剥離する。1278は木製品蓋または桶底板とみられ、側面に径0.5mmの円孔が3箇所に残る。表面には「支配」の墨書が残る。

SX-302(遺構・遺物：図70)

A-1区中央部で確認した遺構で、平面形態は不整楕円形を呈し、長径4.21m、短径1.88m、深さ21cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、極細粒砂と0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器23点(碗1, 皿4, 灯明受皿2, 細片16), 磁器6点(碗1, 皿1, 細片4), 土師質土器12点(皿2, 小皿1, 白土器1, 細片8), 軒丸瓦1点, 石製品硯1点がみられた。図示した遺物は1279・1280である。1279は白色系の土師質土器皿で、尾戸窯の製品とみられる。口縁部は横ナデ調整, 底部内外面はナデ調整を施す。外面には墨書による梅文がみられる。1280は小型の石製品硯で、表面を研磨, 側面を加工, 裏面は無調整である。表面には不明の墨書, 裏面には「□□谷長茶佐」とみられる墨書が残る。

SX-303

A-1区南東部で確認した遺構で、一部は他の遺構に切られる。平面形態は長方形を呈し、検出長2.67m、検出幅1.35m、深さ33cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器9点(播鉢1, 細片8), 磁器8点(碗3, 皿1, 段重1, 細片3), 土師質土器6点(皿2, 小皿1, 細片3), 土師器2点(火鉢1, 焼塩壺1), 瓦質土器片1点, 古銭1点がみられ、磁器片には色絵製品も含まれていた。

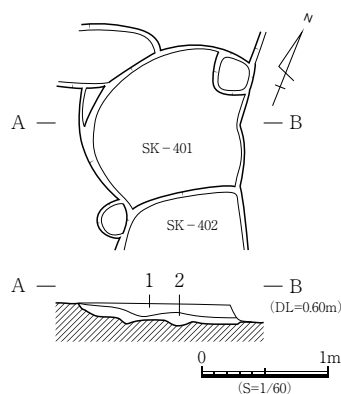
④ 4面

18世紀後葉から幕末にかけての遺構で、3面に引き続き山内家が居住していたとされる時期である。この時期のA区の遺構は比較的多いが、建物跡はA-2区のみで確認されている。

SK-401(遺構：図71 遺物：図72)

A-1区西東部で確認した土坑で、南はSK-402に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長1.35m、全幅1.30m、深さ9cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色シルト質砂, 下層は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物は図示した1281の銅製品杓子のみで、柄部は欠損する。

SK-402



遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR5/1)シルト質砂で、少量の礫を含む  
2. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトで、少量の礫と炭化物を含む

図71 SK-401

SK-401の南で検出した土坑で、SK-401を切る、平面形態は長方形を呈し、長辺3.04m、短辺1.31m、深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1, 播鉢1, 甕1), 磁器片2点, 土師質土器小皿1点がみられた。

SK-403(遺物: 図72)

SK-402の南東で確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し、全長2.27m、全幅0.76m、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿3, 細片3), 磁器8点(碗2, 小杯2, 細片4), 土師質土器片4点, 石製品砥石1点がみられた。図示した遺物は1282で磁器碗である。全面に青磁釉を施し、外面には型押による籠状文様がみられる。

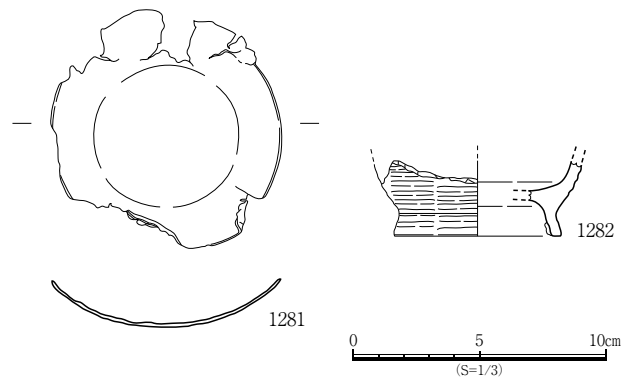


図72 SK-401・403出土遺物実測図

SK-404

SK-403の南で確認した土坑で、SX-404を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径1.62m、短径1.17m、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫と淡黄色礫を含んでいた。出土遺物には陶器11点(碗2, 皿1, 細片8), 磁器7点(碗2, 皿1, 蓋2, 細片2), 土師質土器6点(小皿2, 細片4)がみられ、唐津系灰釉陶器皿や磁器色絵製品なども含まれていた。

SK-405(遺物: 図74)

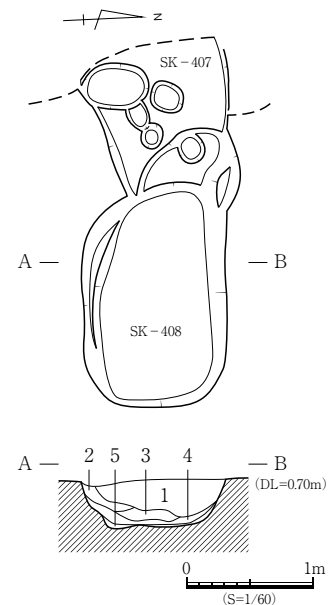
SK-404の南西で確認した土坑で、SX-404に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径1.47m、短径0.70m、深さ23cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器13点(碗2, 皿3, 細片8), 磁器4点(碗1, 細片3)がみられた。図示した遺物は1283・1284である。1283は尾戸窯の灰釉陶器碗で、見込に目痕が残る。1284は灰釉陶器碗で、畳付は釉ハギする。

SK-406(遺物: 図74)

SK-405の北東で確認した土坑で、SX-404を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.42m、短辺1.18m、深さ19cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器4点(鉢1, 細片3), 磁器2点(碗1, 瓶1), 土師質土器2点(皿1, 細片1), 土師器片1点, 平瓦片12点, 焼土塊がみられた。図示した遺物は1285で白色系の土師質土器小皿である。口縁部は横ナデ調整、底部内外面はナデ調整で、口縁部には煤が付着する。尾戸窯の製品とみられる。

SK-407(遺構: 図73 遺物: 図74)

SK-406の北で確認した土坑で、SK-408を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、検出長1.11m、検出幅0.67m、深さ30cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器



- 遺構埋土
1. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質シルトで、やや粘性が強い(SK-407)
  2. 黄灰色(2.5YR5/1)シルトで、礫を多く含む(SK-408)
  3. 明黄褐色(10YR7/6)シルト(SK-408)
  4. 黒褐色(10YR3/1)シルトで、少量の礫を含む(SK-408)
  5. 褐灰色(10YR6/1)シルト(SK-408)

図73 SK-407・408



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

8点(碗1, 蓋2, 皿1, 鉢1, 細片3), 磁器5点(小杯2, 細片3), 土師質土器皿2点, 平瓦3点, 古銭1点がみられた。図示した遺物は1286で陶器鉢である。筒形を呈し, 内面は回転ナデ調整で, 外面には灰釉を施す。

SK-408(遺構: 図73)

SK-406の北東で確認した土坑で, SK-407に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長1.24m, 全幅1.15m, 深さ40cmを測る。埋土は4層に分かれる。出土遺物には陶器5点(皿2, 細片3), 磁器片1点, 平瓦4点がみられた。

SK-409(遺物: 図74)

A-1区中央部で確認した土坑で, SK-410~412とSX-403を切る。平面形態は長方形を呈し, 検出長5.05m, 全幅2.69m, 深さ16cmを測り, 断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器37点(碗3, 皿2, 鉢2, 香炉1, 播鉢3, 灯明受皿1, 細片25), 磁器24点(碗8, 皿2, 蕎麦猪口1, 細片13), 土師質土器14点(白土器3, 細片11), 土師器片2点, 瓦質土器片2点, 平瓦4点, 土製品人形1点, 石製品硯1点がみられた。図示した遺物は1287~1289である。1287は陶器香炉である。回転ナデ調整を施し, 内面は無釉, 口縁部内面から体部外面は灰釉を施す。底部外面は回転削り調整で露呈し, 紐状の脚を貼付する。1288は磁器染付杯で, 外面に不明文様と圏線, 高台内に鷲文とみられる染付が残る。1289は肥前産の磁器染付猪口である。筒形を呈し, 器壁は薄く, 口縁部は大きく歪む。外面には草花文と蛸唐草文, 見込には五弁花文と圏線の染付, 高台内には二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。

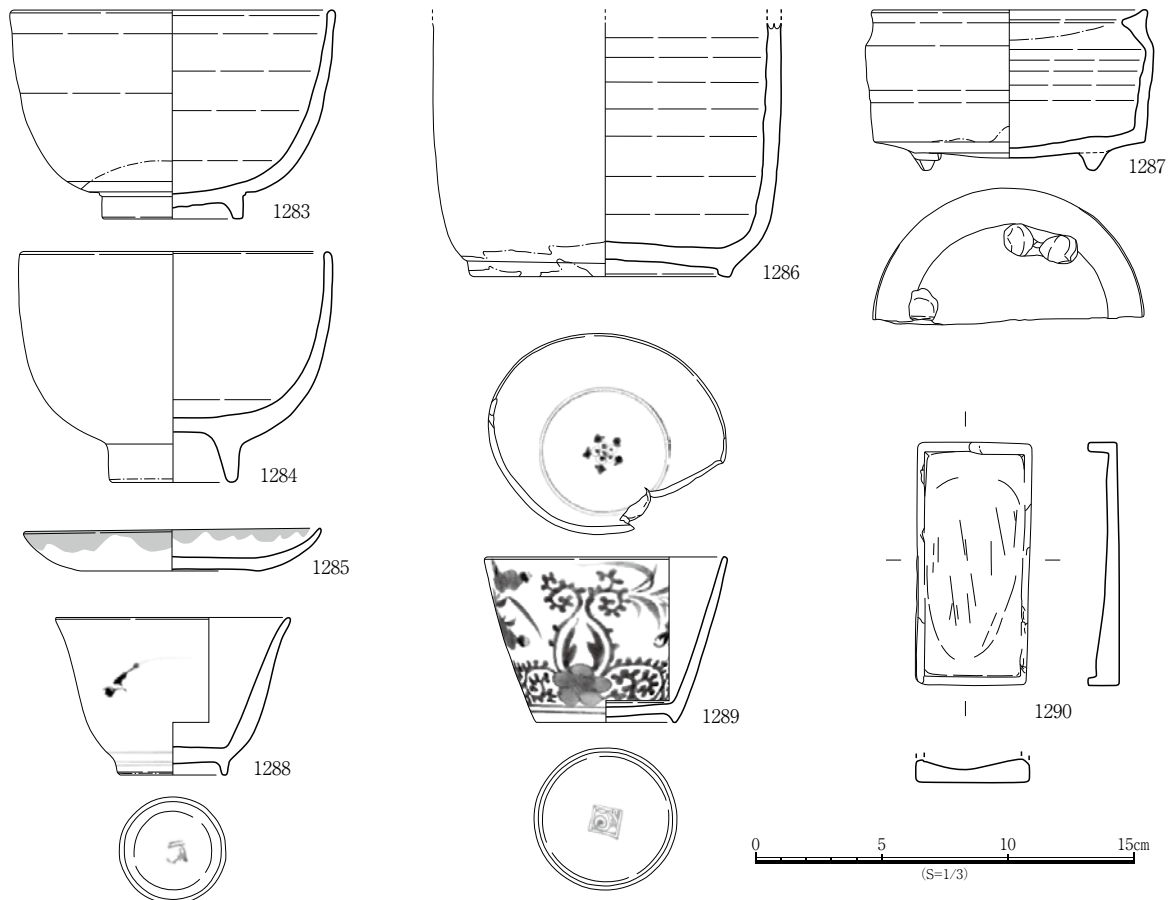


図74 SK-405~407・409・410出土遺物実測図

SK-410(遺物:図74)

SK-409の南で確認した土坑で、SX-403とP-403を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.69m、全4辺1.36m、深さ16cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には磁器片1点、土師質土器11点(皿4、細片7)、土師器片2点、石製品硯1点がみられた。図示した遺物は1290で石製品硯である。中央部は著しく摩耗する。

SK-411(遺物:図75)

SK-410の東で確認した土坑で、SK-409に切られ、SK-410を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径88cm、短径74cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器9点(鉢1、細片8)、磁器10点(碗6、猪口1、細片3)がみられた。図示した遺物は1291~1293である。1291は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面に松竹梅文と圏線、高台内には方形枠に「福」の染付がみられる。1292も肥前産の磁器染付小丸碗で、外面にコンニャク印判による鶴・松文と圏線の染付がみられる。1293は肥前産とみられる磁器染付猪口で、外面に山水文と圏線の染付がみられる。

SK-412(遺物:図75)

SK-411の北で確認した土坑で、SK-409と攪乱に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長2.72m、全幅1.50m、深さ30cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は図示した1294の土師質土器皿のみで、水挽成形とみられ、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

SK-413

A-1区東部で確認した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径1.31m、短径0.97m、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、1cm大の円礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片5点、磁器5点(皿1、小杯1、水滴1、細片2)、土師質土器片2点、平瓦8点、銅製品煙管1点がみられた。

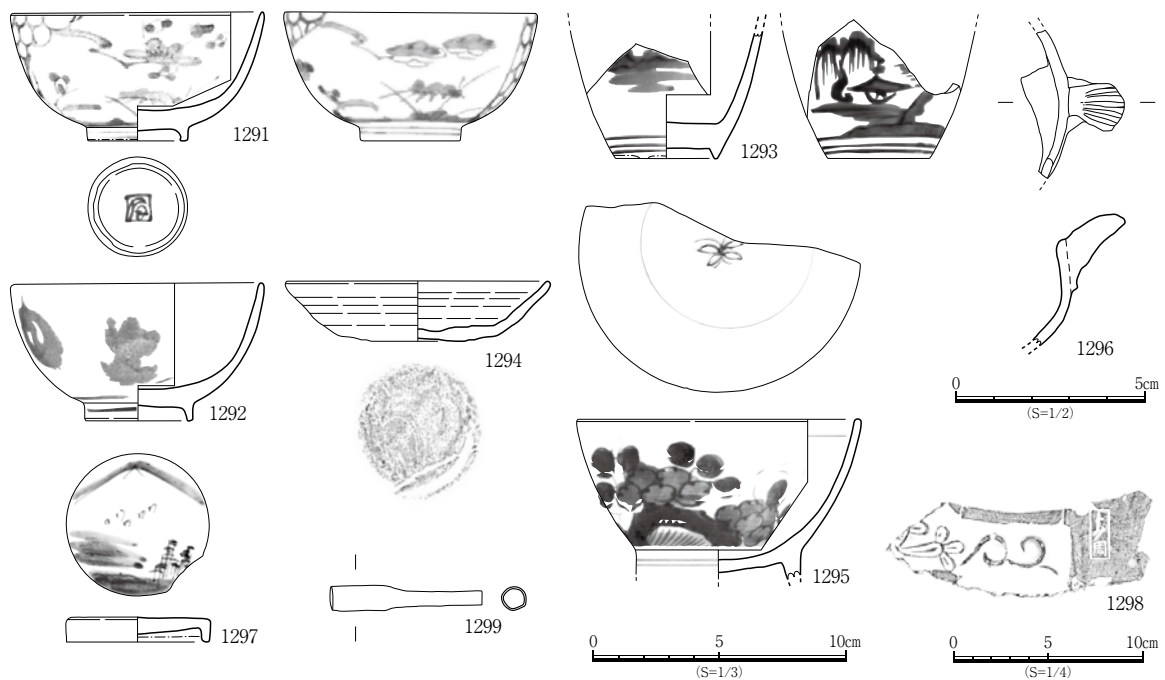


図75 SK-411・412・414・415出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (1) A-1区

#### SK-414(遺物: 図75)

SK-413の南で確認した土坑で、SX-405を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径1.91m、短径1.05m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、2cm大の円礫と焼土を含んでいた。出土遺物には陶器片3点、磁器4点(碗2, 猪口1, 細片1)がみられた。図示した遺物は1295で肥前系の磁器染付広東碗である。外面は草花文とみられる文様と圏線, 内面に圏線, 見込に蝶文の染付を描く。

#### SK-415(遺物: 図75)

SK-414の東で確認した土坑で、SD-402とSX-405を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径2.65m、短径0.98m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、多量の3cm大の円礫とハンダを含んでいた。出土遺物には陶器71点(碗4, 皿1, 蓋1, 鉢7, 播鉢4, 甕1, 鍋9, 土瓶1, 急須1, 火鉢1, ミニチュア1, 細片40), 磁器17点(碗4, 皿3, 瓶2, 合子蓋1, 細片7), 土師質土器4点(皿2, 細片2), 土師器片3点, 瓦質土器3点(火鉢2, 釜1), 軒平瓦1点, 金属製品2点(煙管1など)がみられた。図示した遺物は1296~1299である。1296は鍋形の陶器ミニチュアである。上面に刻目状の文様を有する把手を貼付する。底部外面を除き鉄釉を施す。1297は肥前系の磁器染付合子蓋である。円筒形を呈し、口縁端部は釉ハギする。天井部外面には山水風景文の染付がみられる。1298は軒平瓦である。中心飾りは三花文で、瓦当右側に「トク周」の刻印がみられる。1299は真鍮製とみられる煙管吸口で、内部に僅かに木質が残る。

#### SK-416(遺構: 図76 遺物: 図77)

A-1区南西部で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.64m、短辺0.77m、深さ27cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色細粒砂質シルト、下層が黒褐色粘土であった。出土遺物には陶器21点(碗6, 皿3, 鉢1, 播鉢2, 甕1, 細片8), 磁器5点(碗1, 鉢1, 細片3), 土師質土器10点(皿1, 小皿3, 細片6), 平瓦1点, 鉄釘13点がみられた。図示した遺物は1300~1303である。1300は肥前産の灰釉陶器碗で、口縁部は内湾して大きく開く。坊主町窯跡出土資料に酷似する。1301は陶器輪花皿で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。1302は陶器甕で、口縁端部は水平な面を有する。外面の一部を除き灰釉を施す。1303は肥前産の青磁鉢とみられ、全面に青磁釉を施し、畳付は釉ハギする。内面には陰刻による文様が僅かに残る。

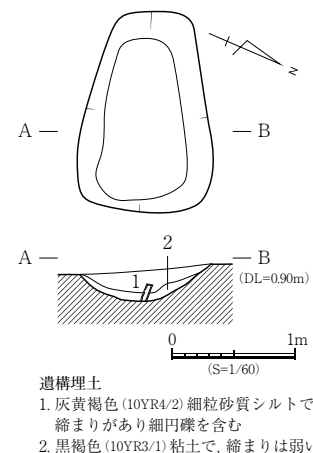


図76 SK-416

#### SK-417(遺物: 図77)

SK-416の北東で確認した土坑で、SX-405を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.28m、短辺1.07m、深さ32cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、3cm大の円礫と漆喰、ハンダ、焼土、被熱瓦を含んでいた。出土遺物には陶器41点(皿1, 蓋1, 鉢4, 播鉢1, 鍋3, 土瓶1, 細片30), 磁器8点(碗3, 大皿1, 小杯1, 細片3), 土師質土器2点(白土器1, 細片1), 土師器2点(焜炉1, 細片1), 瓦質土器片1点, 平瓦2点, 土製品人形1点, 木製品漆器椀1点, 鉄釘10点, ガラス片8点がみられた。図示した遺物は1304で平瓦である。側面に「アキ榮」の刻印がみられる。

#### SK-418

SK-417の南東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.00m、短辺0.96m、深さ5cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器皿

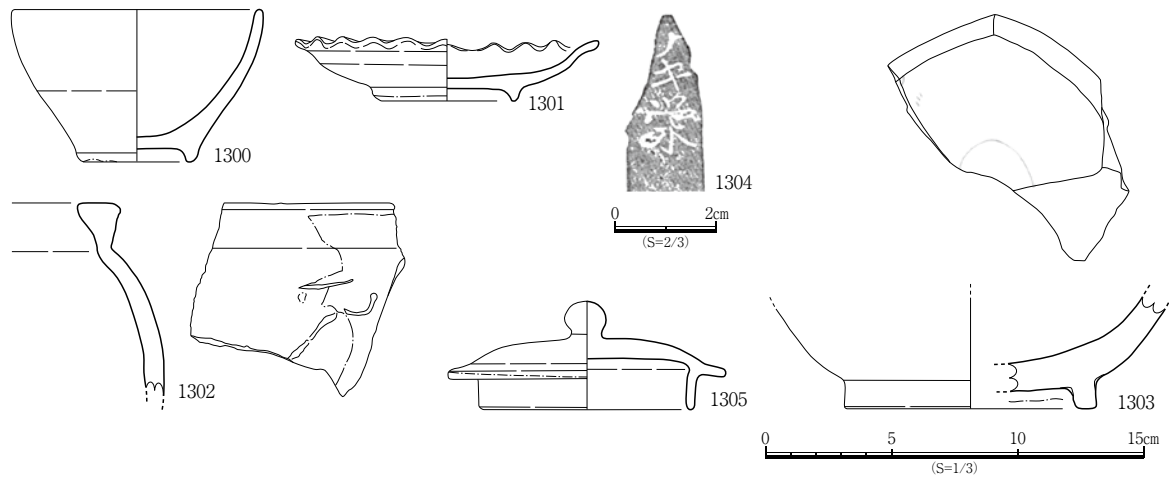


図77 SK-416・417・420出土遺物実測図

1点と関西系の土師器焙烙1点がみられた。

**SK-419**

A-1区南東部で確認した土坑で、南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.32m、検出幅0.83m、深さ17cmを測る。埋土は黄灰色シルト質粘土で、1cm大の円礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器18点(碗1, 皿1, 播鉢1, 鍋1, 細片14), 磁器18点(碗4, 皿1, 大皿1, 小杯1, 細片11), 土師質土器皿1点, 関西系の土師器焙烙1点, 瓦質土器片1点, 銅製品1点がみられ、幕末の遺物が出土している。

**SK-420**(遺物：図77)

A-1区南東部で確認した土坑で、SD-402を切る。平面形態は溝状を呈し、全長6.04m、検出幅1.66m、深さ17cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、多量の0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器178点(碗1, 蓋4, 鉢4, 播鉢2, 片口鉢2, 甕1, 灯明皿1, 灯明受皿1, 鍋7, 土瓶4, 火鉢1, 細片150), 磁器26点(碗4, 皿2, 小杯1, 細片19), 土師質土器片8点, 土師器7点(焜炉1, サナ1, 焙烙1, 細片4), 須恵器片1点, 瓦質土器11点(火鉢1, 釜8, 細片2), 鉄釘1点がみられ、能茶山窯の製品など幕末の遺物が出土している。図示した遺物は1305で陶器土瓶蓋である。笠部外面に青緑色の釉を施す。

**SD-401**(遺構：図78 遺物：図79)

A区とB区を分ける屋敷境の南北溝跡で、両端は調査区外へ続く。検出長29.71m、全幅1.90m、深さ23cmを測り、断面は逆台形を呈する。北部は後世の削平を受けたものとみられ浅くなっていたものの、南部の側面には石列が残存していた。石列は30～40cm大の石灰岩を使用しており、石列の内側には木杭が多数打ち込まれており、石を固定していたものとみられる。一部では桐木として使用していた可能性もある丸太材も出土している。埋土は褐灰色砂質シルトで、礫と炭化物を

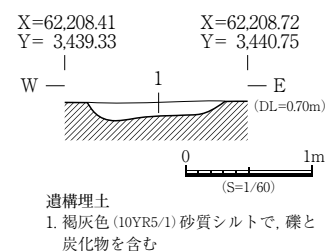


図78 SD-401

含んでいた。出土遺物には陶器416点(碗30, 皿5, 蓋7, 猪口1, 合子蓋1, 火入1, 鉢10, 播鉢14, 壺1, 甕11, 花生1, 灯明受皿2, 鍋7, 土瓶5, 乗燭1, 細片310など), 磁器195点(碗27, 皿17, 大皿1, 小杯10, 蕎麦猪口3, 紅皿1, 合子1, 段重3, 香炉1, 火入2, 瓶2, 壺1, 細片123など), 土師質土器26点(皿2, 白土器1, 小皿5, 鉢1, 細片17), 土師器30点(火鉢6, 焜炉2, サナ2, 焙烙4, 細片16), 須恵器甕1点, 瓦質土器11点(火鉢7, 細片4), 土製品人形1点, 木製品曲物蓋1点, 古銭1点がみられた。掘方から出土した遺物に能茶山窯の製品な

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

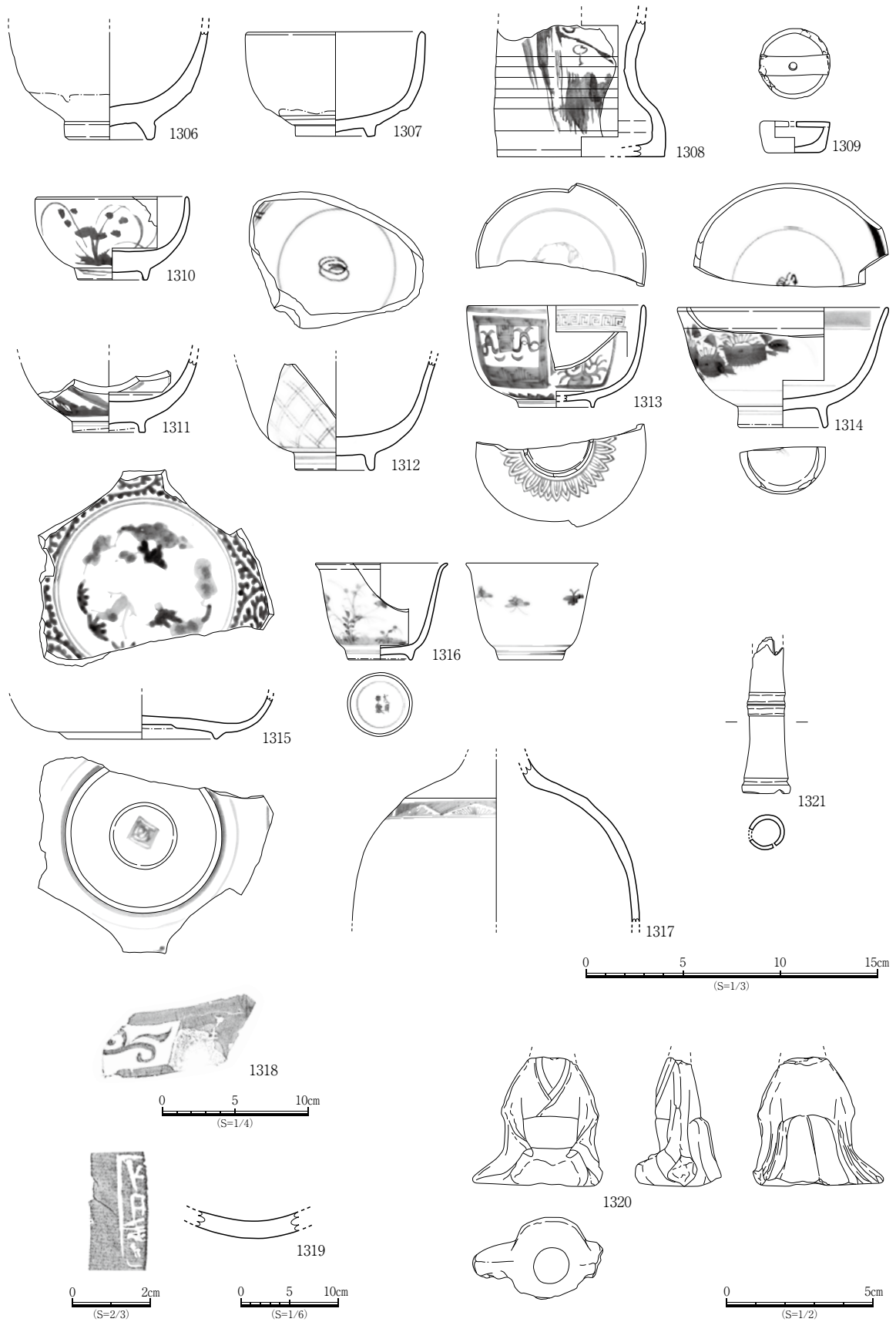


図79 SD-401出土遺物実測図



ど幕末の遺物がみられ、19世紀の溝跡と考えられる。図示した遺物は1306～1321である。1306は肥前産の陶器碗で、内面から外面体部下半まで鉄釉を施す。1307は陶器碗で、内面から外面体部下半まで灰釉を施す。灰釉は光沢があり、やや緑色を帯び貫入が入る。1308は陶器花生である。回転ナデ調整で、体部の一部をヘラと指で押しして変形させている。内面から体部外面まで透明釉を施し、外面には鉄錆による文様と染付がみられる。1309は陶器乗燭で、杯形を呈し、口縁部には径4mmの円孔が開いた板状の粘土を貼付する。全面に透明釉を施したとみられるが、外面は摩耗するため調整は不明瞭である。1310・1311は肥前産とみられる磁器染付小丸碗で、外面には草花文の染付を描く。1310は肥前波佐見の製品とみられる。1312は磁器染付碗で、外面に斜格子文、口縁部内面に格子文、見込に渦文の染付がみられる。1313は肥前産の磁器染付丸碗で、外面に雷文帯の枠内に宝文、蓮弁文、口縁部内面に雷文帯、見込に環状の松竹梅文と圏線の染付がみられる。1314は能茶山窯の磁器染付端反碗で、外面に草花文、口縁部内面に帯線、見込に不明文様の染付を描く。高台内には「サ」の銘がみられる。1315は肥前系の磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台を呈し、高台内を蛇ノ目釉ハギする。外面に圏線、口縁部内面に蛸唐草文、見込に環状の松竹梅文の染付、高台内は方形枠に渦「福」の銘がみられる。1316は肥前有田産の磁器染付小杯で、外面に草花文・蝶文と圏線の染付、高台内に「太明年□」の銘がみられる。1317は肥前系の磁器染付瓶で、全面に透明釉を施し、肩部外面には扇文とみられる染付がみられる。1318は軒棧瓦で、瓦当右側に「アキ□」の刻印がみられる。1319は平瓦で、側面には枠内に不明の刻印がみられる。1320は土製品人形で、着物を着た女性とみられる。型成形で、底部に円孔が残る。1321は骨角製品柄とみられ、中空で上部に陽刻による帯状の突帯がみられ、先端に沈線状の文様を施す。端部は肥厚する。図示した遺物のほかに志野焼片、唐津系灰釉陶器皿、信楽系陶器碗、白色系の焜炉、金太郎と布袋様形の陶器人形などが出土している。

SD-402(遺物:図80)

SD-401の西で確認した南北溝跡で、SD-401に並行する。SK-415・420に切られ、SX-405を切る。両端は他の遺構に切られ、検出長24.50m、全幅0.99m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色中粒砂質シルトで、少量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器23点(碗1, 鉢2, 播鉢1, 鍋2, 土瓶1, 細片16), 磁器18点(碗5, 皿2, 段重1, 瓶1, 鉢4, 細片5), 土師質土器3点(皿1, 細片2), 土師器5点(火鉢1, サナ1, 焼塩壺1, 細片2), 瓦質土器片1点, 木製品栓1点, 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は1322・1323である。1322は肥前産の京焼風陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「富」の刻印がみられる。1323は土師器焼塩壺蓋で、口縁部内面に浅い段を有する。ナデ調整で、内面には布目痕が残る。

SD-403(遺物:図80)

A-1区南東部で確認した南北溝跡で、南端を近代の遺構に切られ、SD-401を切る。検出長6.76m、全幅0.81m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、3cm大の円礫とハンダを含んでいた。出土遺物には陶器78点(蓋1, 鉢3, 播鉢2, 瓶1, 植木鉢1, 甕1, 鍋7, 土瓶1, 細片60など), 磁器34点(碗7, 皿2, 蓋2, 猪口1, 瓶1, 鉢1,

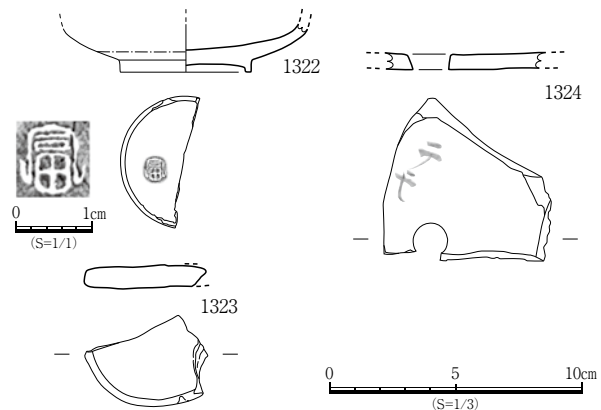


図80 SD-402・403出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

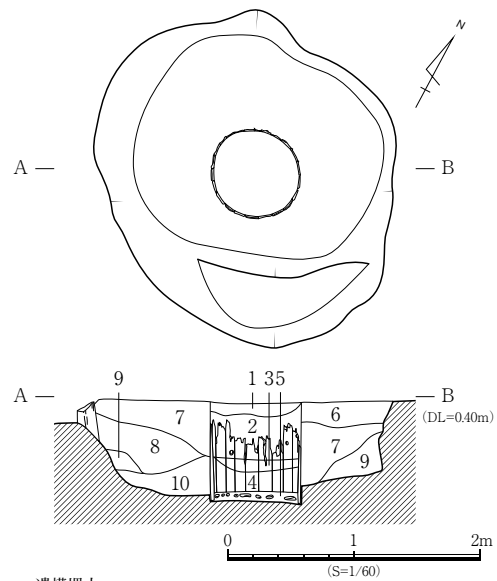
細片16など), 土師質土器片3点, 土師器11点(火鉢3, 焙烙1, 細片7), 瓦質土器3点(火鉢2, 細片1), 金属製品1点がみられた。図示した遺物は1324で陶器植木鉢である。内面は回転ナデ調整, 外面は回転削り調整で墨書がみられる。

SE-401 (遺構: 図81)

A-1区中央部で確認した井戸跡である。掘方は不整楕円形を呈し, 長径2.75m, 短径2.50m, 深さ92cmを測る。掘方の埋土は5層に分かれ, 5cm大の円礫を多く含んでいた。掘方のほぼ中央には径79cmを測る桶側が埋設されていた。桶側は著しく腐朽しており上部とタガは損失していた。桶側内の埋土は5層に分かれ, 底面には径5~8cm大の扁平な円礫が敷かれていた。底面の標高は-1.20mである。掘方の出土遺物には磁器片2点, 土師質土器片1点, 埋土の出土遺物には土師質土器片2点, 鉄釘1点がみられたが, 明確な時期は不明である。

SX-401 (遺物: 図82)

A-1区北西隅で確認した遺構で, SX-501の底で検出した。北と西は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ, 検出長5.49m, 検出幅4.24m, 深さ20cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで, 5~8cm大の円礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器74点(碗3, 皿5, 蓋1, 鉢4, 播鉢2, 瓶1, 鍋1, 土瓶4, 火鉢3, 細片50), 磁器16点(碗4, 皿1, 鉢1, 細片10), 土師質土器12点(小皿2, 細片10), 瓦質土器5点(火鉢1, 鍋1, 細片3), 軒丸瓦1点, 銅製品2点(煙管1, 古銭1)がみられ, 幕末の遺物が出土している。図示した遺物は1325~1327である。1325は能茶山窯の磁器染付碗である。外面には窓絵に海浜文と福寿字・圏線, 見込には丸に家屋と馬文の染付, 高台内には枠に「茶山」の銘がみられる。1326は菊丸瓦とみられ, 型成形で, 瓦当に釘抜文がみられる。1327は銅製の煙管雁首で, 側面に接合部がみられる。



- 遺構埋土
1. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトで, 中粗粒砂~粗粒砂が混じり1cm大の円礫を多く含む
  2. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトで, 1cm大の円礫を特に多く含む
  3. 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質粘土で, 植物腐植を含む
  4. 灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質粘土
  5. 明褐色(7.5YR5/6)粗粒砂で, 6cm大の玉砂利を敷いている
  6. 灰黄褐色(10YR5/2)シルトで, 粗粒砂が混じり3cm大の円礫が多く1cm大の砂岩風化礫と木製品を少し含む
  7. 黄灰色(2.5Y5/1)シルトで, 粗粒砂が混じり5cm大の円礫を含む
  8. 灰色(5Y5/1)粗粒砂~中粒砂質シルトで, 5cm大の円礫を少し含む
  9. 黄灰色(2.5Y5/1)シルトで, 粗粒砂が混じり4cm大の円礫を多く含む
  10. 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトで, 灰色(5Y5/1)粗粒砂~中粒砂が混じる

図81 SE-401

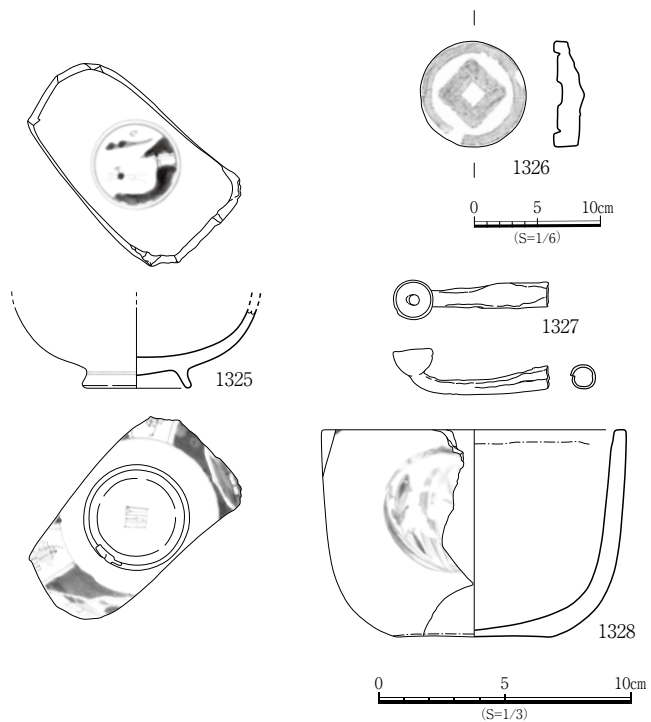


図82 SX-401・402出土遺物実測図

SX-402(遺物：図82)

SX-401の東で確認した遺構で、SX-501の底で検出した。北は調査区外へ続き、一部攪乱に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、全長5.31m、検出幅4.59m、深さ45cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで、5～8cm大の円礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器43点(碗1, 皿1, 蓋3, 火入1, 播鉢2, 瓶2, 甕1, 鍋1, 土瓶1, 細片30), 磁器16点(碗4, 皿1, 鉢1, 細片10), 土師質土器17点(小皿2, 細片15), 石製品1点, 漆器片1点, 鉄釘1点がみられ、幕末の遺物が出土している。図示した遺物は1328で磁器染付蓋物である。透明釉を施し、口縁端部と底部外面は釉ハギする。外面には丸に花文の染付がみられる。

SX-403(遺物：図83)

A-1区中央部で確認した遺構で、SX-404を切る。平面形態は不整形を呈し、全長7.23m、全幅3.08m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物、多量の木製品

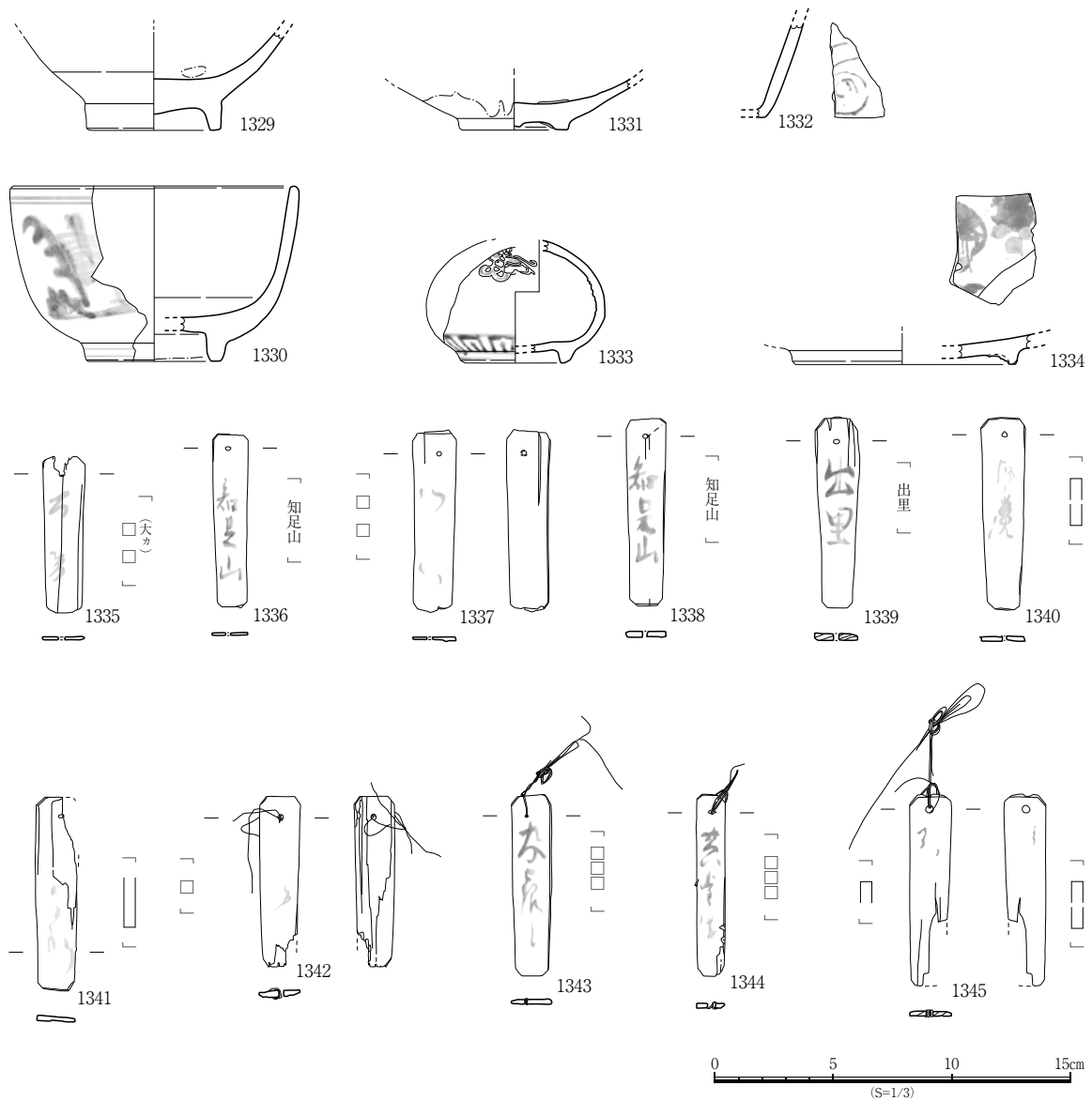


図83 SX-403出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (1) A-1区

を含んでいた。埋土の状況から湿地や滞水地の様な状況が考えられ、池跡の可能性もある。出土遺物には陶器81点(碗7, 皿18, 蓋1, 向付1, 鉢3, 播鉢7, 瓶1, 細片43), 磁器44点(碗6, 皿6, 蓋1, 瓶2, 細片29), 土師質土器50点(杯1, 皿8, 細片41), 土師器7点(焼塩壺2, 細片5), 須恵器3点(皿2, 細片1), 瓦質土器4点(釜1, 細片3), 瓦4点(丸瓦3, 平瓦1), 木製品13点(木筒11, 下駄1, 曲物蓋1), 銅製品1点がみられた。図示した遺物は1329～1345である。1329は肥前産の陶器碗で、灰釉を施し、見込と畳付には砂目痕が残る。1330は陶胎染付碗で、白化粧土のち全面に透明釉を施す。外面には風景文と圏線の染付がみられる。1331は唐津系灰釉陶器皿で、内面から外面体部下半まで灰釉を施す。見込には砂目痕、畳付には回転糸切り痕が残る。1332は織部焼とみられる向付で、方形を呈するものと考えられる。全面に透明釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。1333は肥前有田産の磁器色絵油壺で、外面に蓮弁文、圏線の染付と、朱色の蝶文の上絵付がみられる。1334は中国漳州窯系の五彩皿で、見込に朱・黄・緑色の上絵付による文様がみられる。1335～1345は木製品木筒で短冊形を呈し、四隅を切る。上部には円孔を穿ち、1342～1345は紐が残存している。片面に墨書がみられるものが多く、1336は「知足山」、1338も「知足山」、1339が「出里」の墨書がみられた。その他は墨書が薄く、解読不可であった。

#### SX-404(遺物: 図84)

SX-403の西で確認した遺構で、SX-403・406に切られる。平面形態は不整形を呈し、全長10.93m、全幅6.13m、深さ39cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器14点(碗1, 皿2, 火入1, 鉢1, 播鉢1, 細片8), 磁器16点(皿3, 小杯1, 細片12), 青磁碗1点, 土師質土器71点(小皿12, 細片59), 東播系須恵器片口鉢1点, 瓦質土器片2点, 平瓦4点がみられた。図示した遺物は1346で、肥前産の陶器火入である。体部外面は白化粧土による波状の刷毛目文で透明釉を施す。内面と底部外面は無釉で、底部外面には墨書がみられる。

#### SX-405(遺物: 図84・85)

SX-404の南で確認した遺構で、SK-414・415, SD-402に切られる。平面形態は不整形を呈し、全長22.81m、全幅6.32m、深さ24cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色砂質シルトで、細粒砂と1～5cm大の礫、炭化物、ハンダ、漆喰、陶磁器、瓦を多く含んでいた。下層は黒色粘土質シルトで、陶磁器と木片を非常に多く含んでいた。SX-403と同様に埋土の状況から湿地や滞水地の様な状況が考えられ、池跡の可能性が高い。出土遺物には陶器878点(碗75, 皿31, 蓋22, 火入3, 瓶7, 鉢31, 播鉢29, 壺1, 甕16, 水注2, 灯明皿3, 灯明受皿19, 鍋26, 土瓶26, 急須2, 火鉢2, 提子1, 油德利1, 餌鉢1など), 磁器390点(碗74, 皿34, 蓋16, 小杯2, 猪口11, 蕎麦猪口6, 紅皿9, 合子蓋2, 段重2, 香炉2, 瓶15, 鉢7, 仏飯器3など), 土師質土器87点(杯1, 皿10, 白土器5, 小皿22など), 土師器95点(火鉢12, 焜炉3, 七輪7, サナ3, 焙烙9, 焼塩壺1など), 須恵器甕1点, 瓦器小皿1点, 瓦質土器64点(火鉢17, 焜炉1, 釜5, 焙烙2など), 瓦43点(軒平瓦6, 丸瓦15, 平瓦12, 棧瓦4など), 木製品16点(漆器碗3, 漆器蓋3, 漆器製品5, 下駄1, 曲物蓋3, 羽子板1), 金属製品16点(古銭2, 煙管3, 鉄釘8など)がみられた。図示した遺物は1347～1373である。1347は瀬戸・美濃産の陶胎染付広東碗で、白化粧土のち透明釉を施す。外面に螺子文、口縁部内面に圏線、見込には五弁花文の染付がみられる。1348は陶器碗で、高台付近まで灰釉を施す。外面には鉄錆による注連縄文がみられる。見込には目痕が残る。1349は尾戸窯の灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には墨書がみられる。1350は鼠志野の菊皿で、鉄釉のち長石釉を施し、口縁部内面には2条の直線文がみられる。1351は陶器中皿で、高台を除き灰釉を施す。見込は蛇ノ目軸ハギのち鉄釉を施す。内面には鉄錆による蔦文、見込には鉄錆による松文がみられる。1352は陶器油德利で、把

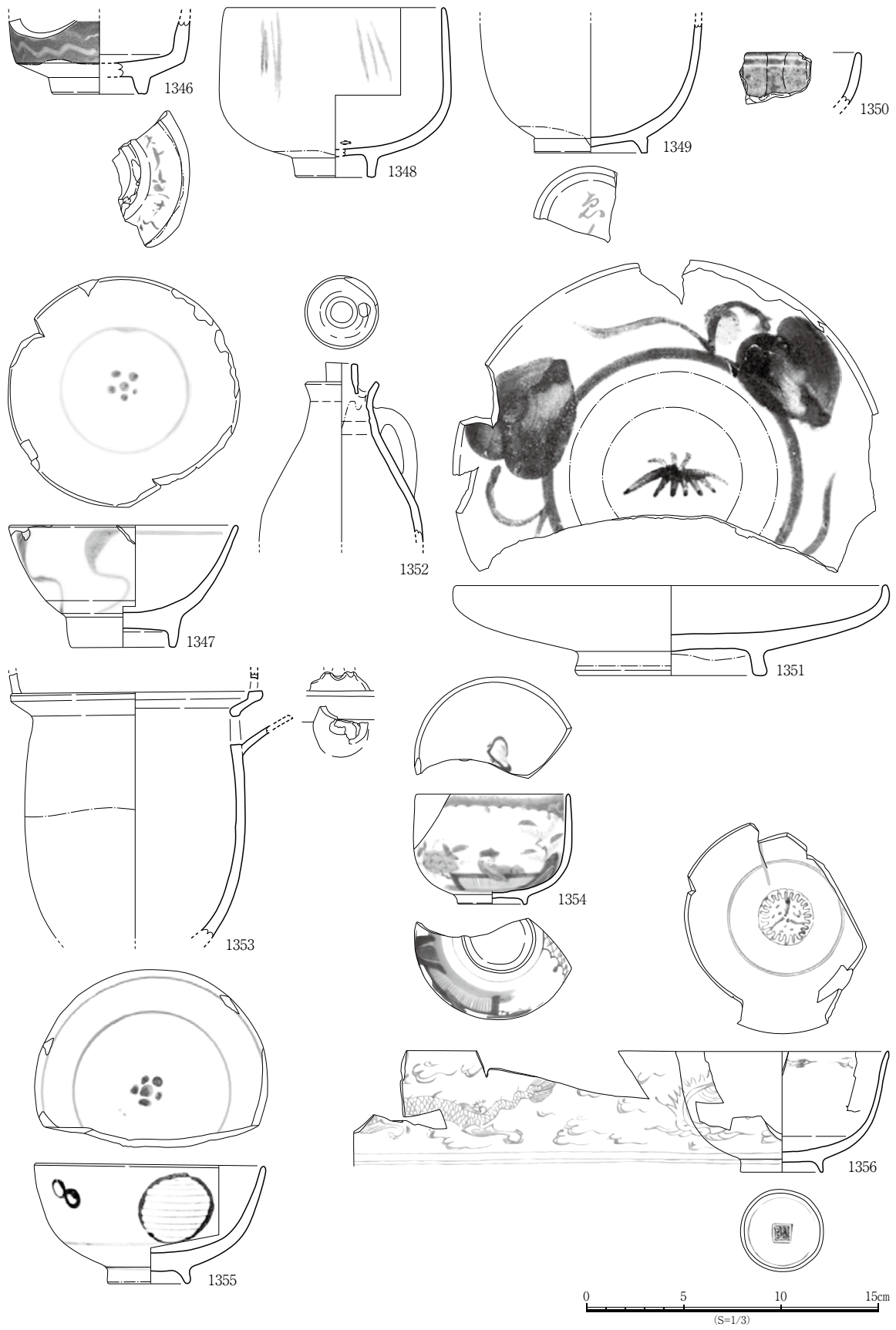


図84 SX-404・405出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

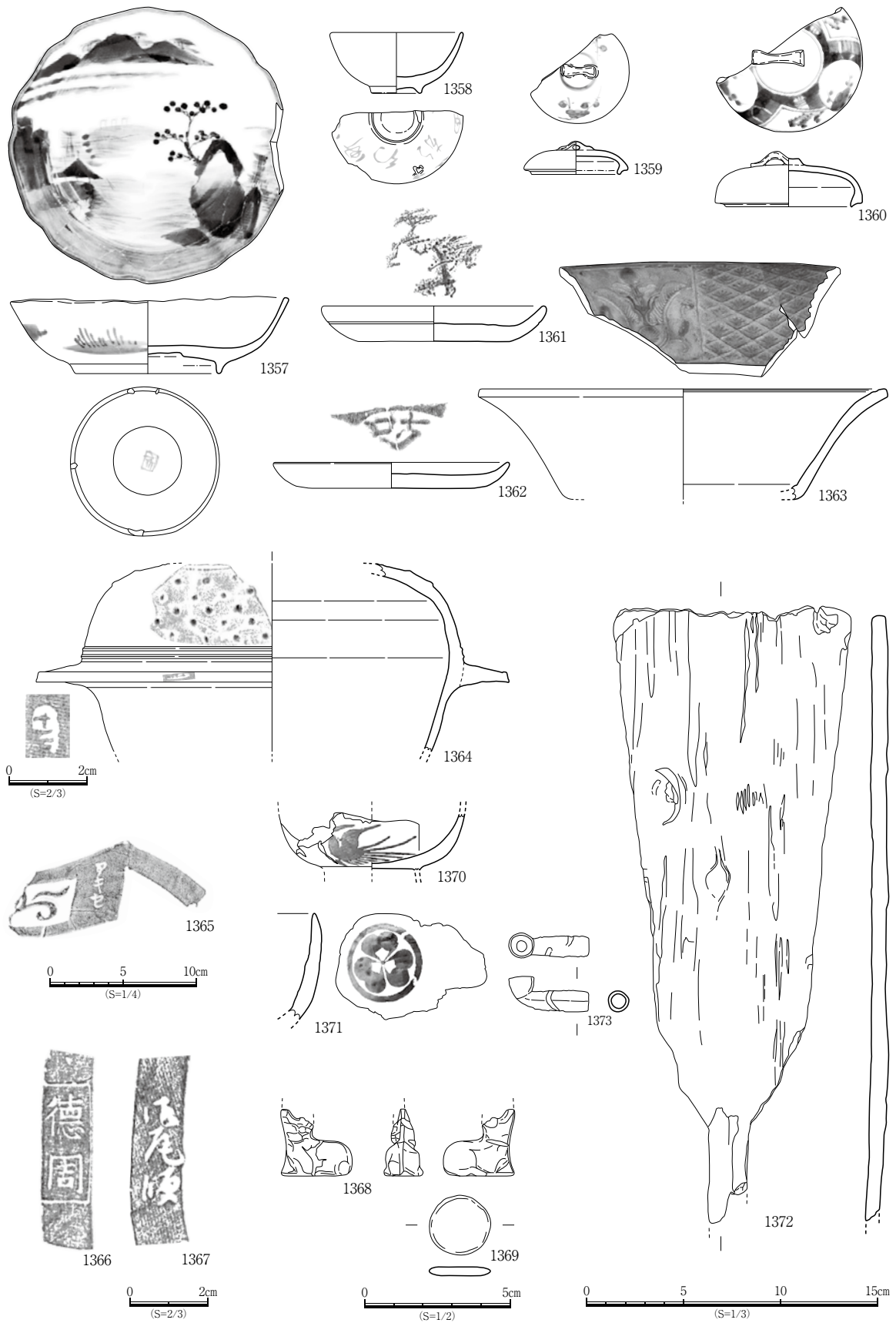
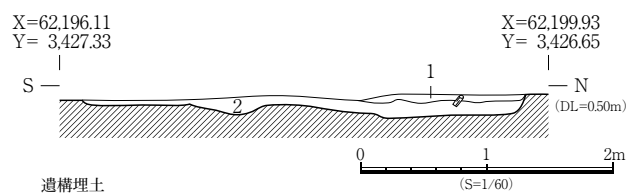


図85 SX-405出土遺物実測図

手を貼付し、受部には径7mmの円孔がみられる。口縁部内面から外面には鉄釉を施す。1353は能茶山窯の陶器提子とみられ、断面が半円形の注口と釣手を貼付する。内面から体部外面まで鉄釉を施し、受部は釉ハギする。1354は肥前有田産の磁器色絵丸碗で、外面には人物・牡丹・樹文の染付と朱・緑色の窓絵に草花文、圏線の上絵付がみられる。1355は肥前波佐見産の磁器染付丸碗で、外面に丸文と圏線、内面に圏線、見込に五弁花文の染付がみられる。1356は肥前系の磁器染付端反碗で、内外面に雲龍文と圏線、見込に圏線と火焰とみられる染付、高台内には二重方形枠に銘がみられる。1357は能茶山窯の磁器染付輪花皿である。型打成形で、蛇ノ目凹形高台を有する。外面には土坡に草文、内面には海浜風景文の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。1358は肥前有田産とみられる磁器色絵紅猪口である。外面に鳥文とみられる染付と、朱色で「京」「小町紅」の上絵付が施される。1359は肥前系の磁器染付合子蓋で、天井部に紐状の摘を貼付する。外面には梅文の染付がみられる。1360は肥前産の磁器染付蓋物蓋で、天井部に紐状の摘を貼付する。外面には丸に梅文と短冊に菘文の染付がみられる。1361は尾戸窯の白土器皿で、回転ナデ調整のち底部外面にナデ調整を加える。見込には型押による陽刻の高砂文がみられる。1362も尾戸窯の白土器皿で、回転ナデ調整のち底部内外面にナデ調整を加える。見込には型押による陽刻の寿字文がみられる。1363は軟質施釉陶器鉢で、源内焼とみられる。型成形で、内面には型押による陽刻文が施され、外面は緑釉、内面には緑釉と褐釉を施す。1364は瓦質土器茶釜で、肩部には突帯文と型押による陽刻の文様がみられる。また、鏝の1箇所刻印が残る。1365は軒棧瓦で、瓦当右側に「アキセ」とみられる刻印が残る。1366は平瓦で、側面に「徳周」の刻印が残る。1367は棧瓦で、側面に「□尾□」の刻印が残る。1368は土製品人形で、犬形を呈する。型成形で、表面にはキラ粉が付着し、側面には型の痕跡が残る。1369は石製品基石で、黒色を呈し、全面を研磨する。1370は木製品漆器碗で、外面は黒塗で金色の水鳥文を施し、内面は赤塗である。1371も木製品漆器碗で、外面は黒塗で金色の丸に片喰文を施し、内面は赤塗である。1372は木製品羽子板で、僅かに朱色の彩色が残る。1373は銅製の煙管雁首である。

SX-406(遺構:図86 遺物:図87)

SX-405の北で確認した遺構で、SX-404を切る。平面形態は不整形を呈し、全長5.64m、全幅5.14m、深さ31cmを測る。埋土は2層に分かれ、いずれも褐灰色シルトで、下層は礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器49点(碗8、皿9、鉢5、播鉢4、甕1、灯明皿1、灯明受皿3、鍋1など)、磁器35



遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR6/1)シルト  
2. 褐灰色(10YR4/1)シルトで、0.3cm大の礫が非常に多く、3cm大の礫と多量の木片を含む

図86 SX-406

点(碗5、皿2、大皿1、蓋1、小杯1、猪口1、蕎麦猪口1、鉢1、土瓶1など)、土師質土器68点(皿3、小皿6、細片59)、瓦質土器火鉢1点、平瓦4点がみられた。図示した遺物は1374～1377である。1374は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、内面から外面高台付近まで灰釉を施す。外面には緑色の笹文の上絵付、高台内には墨書がみられる。1375は尾戸窯の灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「り」とみられる墨書が残る。1376は焼締陶器灯明受皿で、受部の3箇所半円形の切り込みがみられる。調整は回転ナデのち底部外面に回転ヘラ削りを加える。口縁部内外面には著しく煤が付着する。1377は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面が二重網目文、内面に菊花文の染付、高台内には方形枠に崩れた渦「福」の染付がみられる。



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

SX-407

A-1区の東部で確認した遺構で、一部は近代の遺構に切られる。平面形態は溝状を呈し、検出長3.88m、短辺0.80m、深さ9cmを呈する。出土遺物には陶器片24点、磁器5点(小杯1、合子蓋1、細片3)、土師質土器片2点、瓦質土器片1点、平瓦1点がみられた。

P-401(遺物:図88)

A-1区の西端で確認したピットである。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。また埋土中には30cm大の礫もみられた。平面形態は楕円形を呈し、長径98cm、短径67cm、深さ5cmを呈する。出土遺物には陶器5点(碗1、皿1、細片3)、磁器6点(碗1、皿1、小杯1、細片3)がみられた。図示した遺物は1378で、唐津系灰釉陶器皿である。内面から高台付近まで灰釉を施す。

P-402(遺物:図88)

A-1区中央部で確認したピットで、SX-403を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径54cm、短径47cm、深さ13cmを呈する。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1、皿2)、磁器片2点がみられた。図示した遺物は1379で、焼締陶器小皿である。回転ナデ調整のち底部外面に回転削り調整を加える。口縁部内外面には著しく煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。

P-403(遺物:図88)

P-402の東で確認したピットで、SK-410に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径29cm、短径25cm、深さ11cmを呈する。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片2点、磁器4点(碗1、小杯1、細片2)、土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は1380で肥前産の磁器染付丸碗である。外面に網目文の染付がみられる。

P-404(遺物:図88)

A-1区南東部で確認したピットで、SD-401を切り、SD-403に切られる。平面形態は円形を呈し、径31cm、深さ12cmを呈する。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、1cm大の円礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器21点(鉢2、鍋2、土瓶2、細片15)、磁器6点(碗1、瓶3、細片2)、土師質土器皿1点、土師器火鉢2点、瓦質土器火鉢1点、軒平瓦2点がみられた。図示した遺物は1381で軒平瓦である。中心飾りは三花文で、瓦当右側に「片一力」の刻印がみられる。

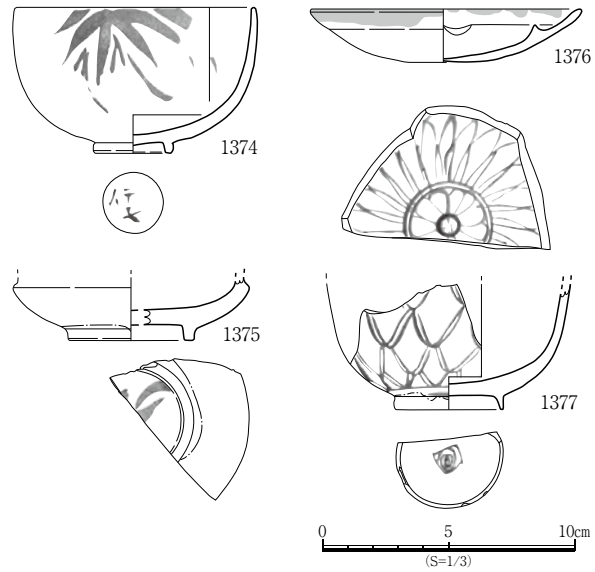


図87 SX-406出土遺物実測図

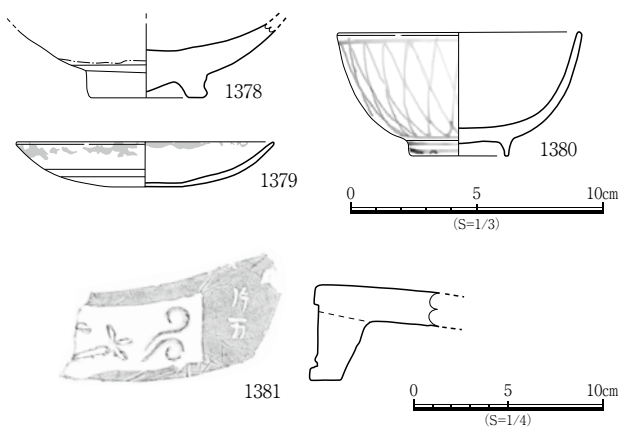


図88 P-401~404出土遺物実測図

⑤ 5面

5面は近代から現代にかけての遺構で、遺跡を特徴付ける重要な遺構を抽出して報告する。時間的な制約があったため幕末の遺構と同じ面で検出した遺構のみであり、記載した遺構がすべてではなく、攪乱として扱った遺構も含まれており埋土や出土遺物の記載がないものも含まれる。調査以前は旧追手前小学校であり、明治5年から小学校として約141年間利用されていた土地であり、確認した遺構は小学校に関連するものとみられる。

SB-501(遺構:図89, 遺物:図91)

A-1区南西部に位置する東西棟建物である。区画溝であるSD-501に直行する。梁間5間(9.40m)、桁行9間(17.00m)、柱間寸法は1.80mまたは2.00mを測る。柱穴は昭和期の空襲火災層の下面から掘り込まれており、昭和20年以前の建物跡とみられる。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺約80cm、深さ約80cmを測る。埋土は褐色細粒砂質シルトで、3cm以下の円礫を多く含んでいた。また、底や埋土中には10~40cm大の割石を非常に多量に含んでいた。

出土遺物には陶器151点(碗7, 皿7, 蓋2, 火入3, 挿鉢9, 鍋8, 土瓶2など)、磁器49点(碗9, 皿46, 蓋2, 小杯1, 紅皿1, 段重1など)、近代磁器片1点、土師質土器13点(白土器皿2, 小皿1など)、土師器22点(火鉢2, 焙烙2, 焼塩壺1, 焼塩壺蓋1など)、瓦質土器7点(火鉢3点など)、瓦6点(丸瓦2, 平瓦4)などがみられた。図示した遺物は1382~1385である。1382は陶器灯明受皿で、北側柱の東から7番目の柱穴より出土した。受部の2箇所半月形の切り込みが残る。調整は回転ナデで、底部外面は回転ヘラ削りを加える。1383は磁器染付段重で、東妻柱の北側から3番目の柱穴より出土した。全面に透明釉を施し、口縁端部と体部下端、畳付は釉ハギする。小型で、外面に蜻唐草文の染付がみられる。1384・1385は土師器焼塩壺と蓋で、東妻柱の北側から4番目の柱穴より出土した。1384は輪積成形で、内面は粗雑なナデ調整で一部に布目痕が残り、口縁部は横ナデ調整、外面はナデ調整、底部外面は無調整である。1385は内面がナデ調整、口縁部は横ナデ調整、天井部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。

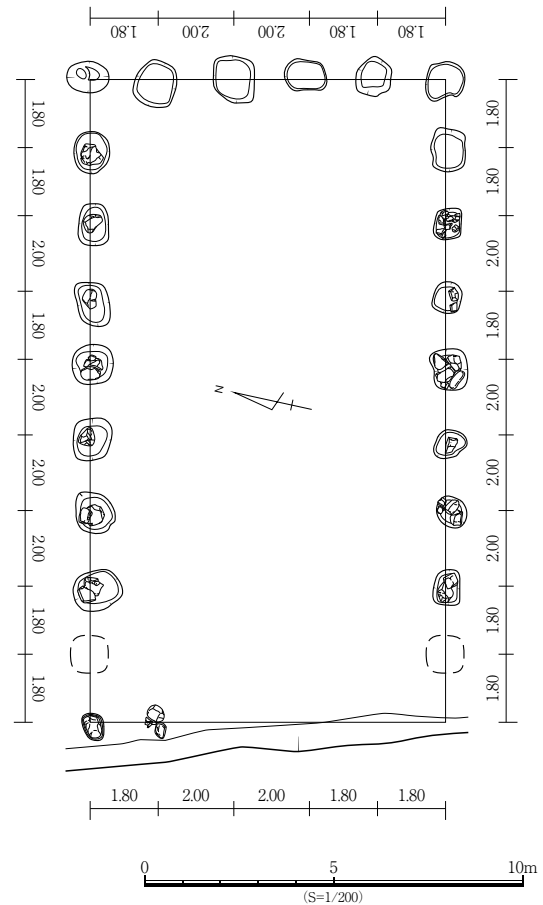
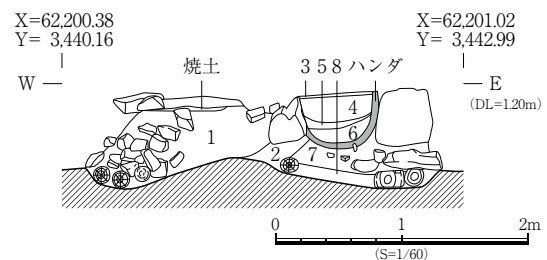


図89 SB-501



遺構埋土

1. 褐灰色(10YR5/1)砂質礫で、粗粒砂が混じり1~3cm大の玉石を多く含む(SB-502)
2. 灰色(5Y4/1)砂質礫で、粗粒砂と5cm大の角礫、ハンダを含む(SB-502)
3. 赤褐色(10YR4/2)シルト(SD-501)
4. 明赤褐色(2.5YR5/8)シルト質砂で、粘性弱く焼土・炭化物・瓦片を含む(SD-501)
5. 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質砂で、ガラスを含む(SD-501)
6. 灰色(5Y5/1)砂で、細粒砂が混じる(SD-501)
7. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質礫で、粗粒砂と玉石を多く含む(SD-501)
8. 灰色(N5/0)シルト質砂(SD-501)

図90 SB-502, SD-501

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

SB-502(遺構：図90, 遺物：図91)

A-1区北東部に位置する南北棟建物である。区画溝であるSD-501の西側に位置し、SD-501に並行し、SB-501に切られる。建物の基礎とみられ、梁間9.39m、桁行14.27mを測る。建物の基礎は丸太状の木材を3本並行に置いた上に10～20cm大のチャート割石を幅95cm、高さ40cm程度積み、最上段には40cm大の石灰岩を積んでいた。北側と南側、西側は残存状態が悪く最上段の石灰岩は確認できておらず、また建物跡に伴うとみられる柱穴は確認されなかった。出土遺物には陶器294点(碗9, 皿4, 蓋14, 鉢7, 鍋9, 土瓶12など), 磁器113点(碗34, 皿10, 大皿1, 蓋14, 段重1, 瓶6など), 近代磁器73点(碗9, 皿8, 蓋3, 盃5, 鉢子1など), 土師器10点(釜1, 火鉢4, 焜炉1, 焙烙1など), 瓦質土器5点(釜1, 火鉢3, 焙烙1), 瓦4点(軒平瓦3, 平瓦1), 石製品石筆3点, タイルなどがあり, 明治～大正期の遺構とみられる。図示した遺物は1386と1387でいずれも東側より出土している。1386は陶器皿で, 回転ナデ調整で内面は鉄釉を施す。外面には墨書が残る。1387は絵唐津皿で, 口縁部内面に鉄錆による文様がみられる。

SK-501(遺物：図91)

A-1区北西部に位置する土坑で, SX-501の底で検出された。隅丸方形を呈し, 長辺1.96m, 短辺1.00m, 深さ13cmを測る。出土遺物には陶器108点(碗1, 皿3, 播鉢5, 甕5, 火鉢1など), 磁器32点(碗7, 猪口2, 瓶2など), 土師器28点(火鉢3, 焜炉2, 涼炉2, 五徳1など), 瓦質土器11点(釜4, 火鉢3, 風炉1など), 瓦5点(軒丸瓦4, 棧瓦1)のほか白土器片1点がみられる。図示した遺物は1388～1391である。1388は磁器染付瓶で, 外面には透明釉を施し, 頸部に圏線と風景文, 胴部には笹文の染付と釘彫による文字がみられる。1389は土師器焜炉とみられ, 回転ナデ調整で, 外面体部下端は回転削り調整を加える。

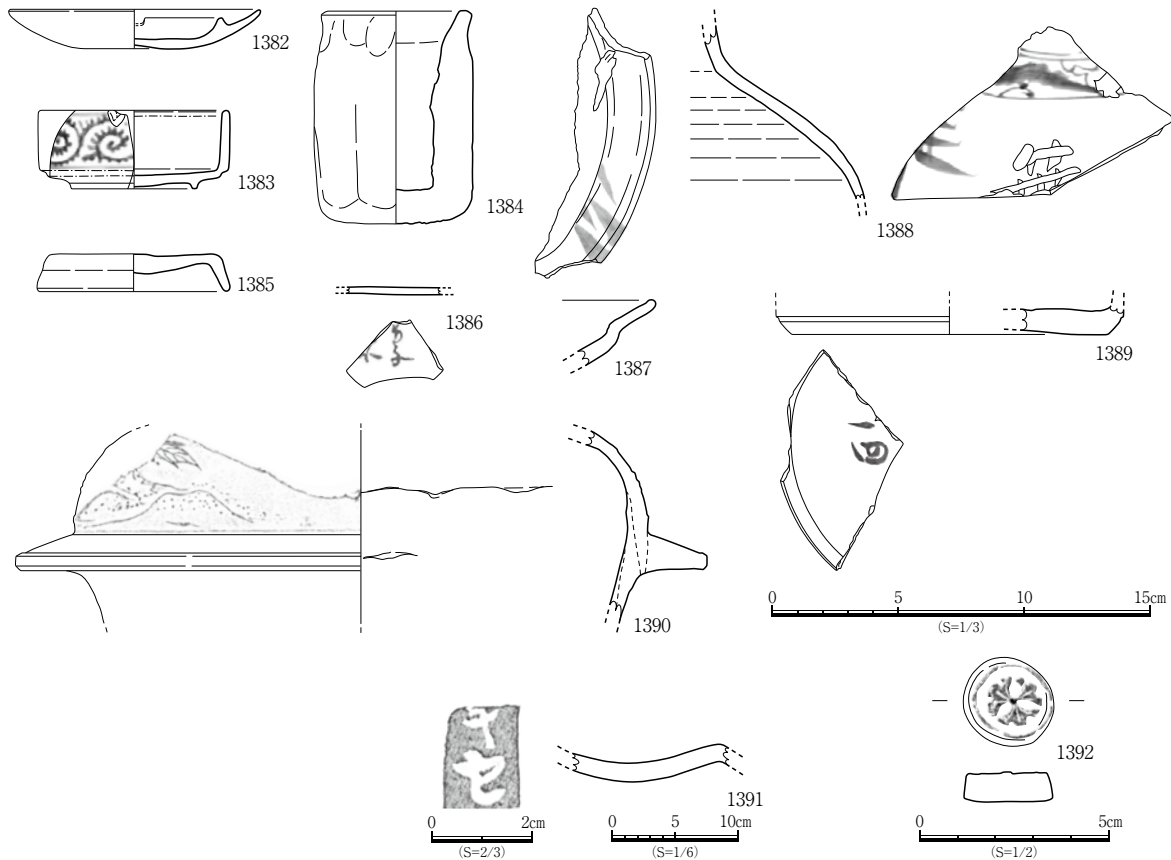


図91 SB-501・502, SK-501・502出土遺物実測図

底部外面はナデ調整で、「一四」の墨書が残る。1390は瓦質土器釜で、肩部は型成形で、草文などの陽刻文様が一部残る。調整はナデで、鏝の下と胴部には煤が付着する。1391は椀瓦で、側面に「キセ」とみられる刻印が残る。

SK-502(遺物:図91)

A-1区北部に位置する土坑で、溝状を呈し、東端は他の遺構に切られる。検出長1.89m、全幅1.06m、深さ17cmを測る。出土遺物には陶器12点(鉢1, 行平鍋5など), 磁器3点(碗1, 猪口1, 餌鉢1), 近代磁器12点(色絵碗1など), 土製品泥面子1点, 石製品2点(石板1, 石筆1)がみられた。図示した遺物は1392で、土製品泥面子である。型成形で、花文がみられる。

SK-503(遺物:図92)

SK-502の北東で検出した土坑である。楕円形を呈し、検出長1.89m、全幅1.06m、深さ17cmを測る。出土遺物には陶器388点(碗3, 皿6, 蓋25, 鉢11, 甕14, 鍋10, 土瓶17など), 磁器103点(碗8, 皿3, 蓋3, 小杯1, 紅皿1, 合子蓋1, 瓶5など), 近代磁器35点, 土師器119点(杯1, 皿1, 鉢3, 火鉢4, 焙烙3など), 瓦質土器16点(火鉢6など), 瓦片3点, 土製品2点(ミニチュア1, 泥面子1), 銅製品3点, 石製品硯1点, 革製品靴底2点などがあり、大正～昭和期の遺構とみられる。図示した遺物は1393～1397である。1393は能茶山窯の陶

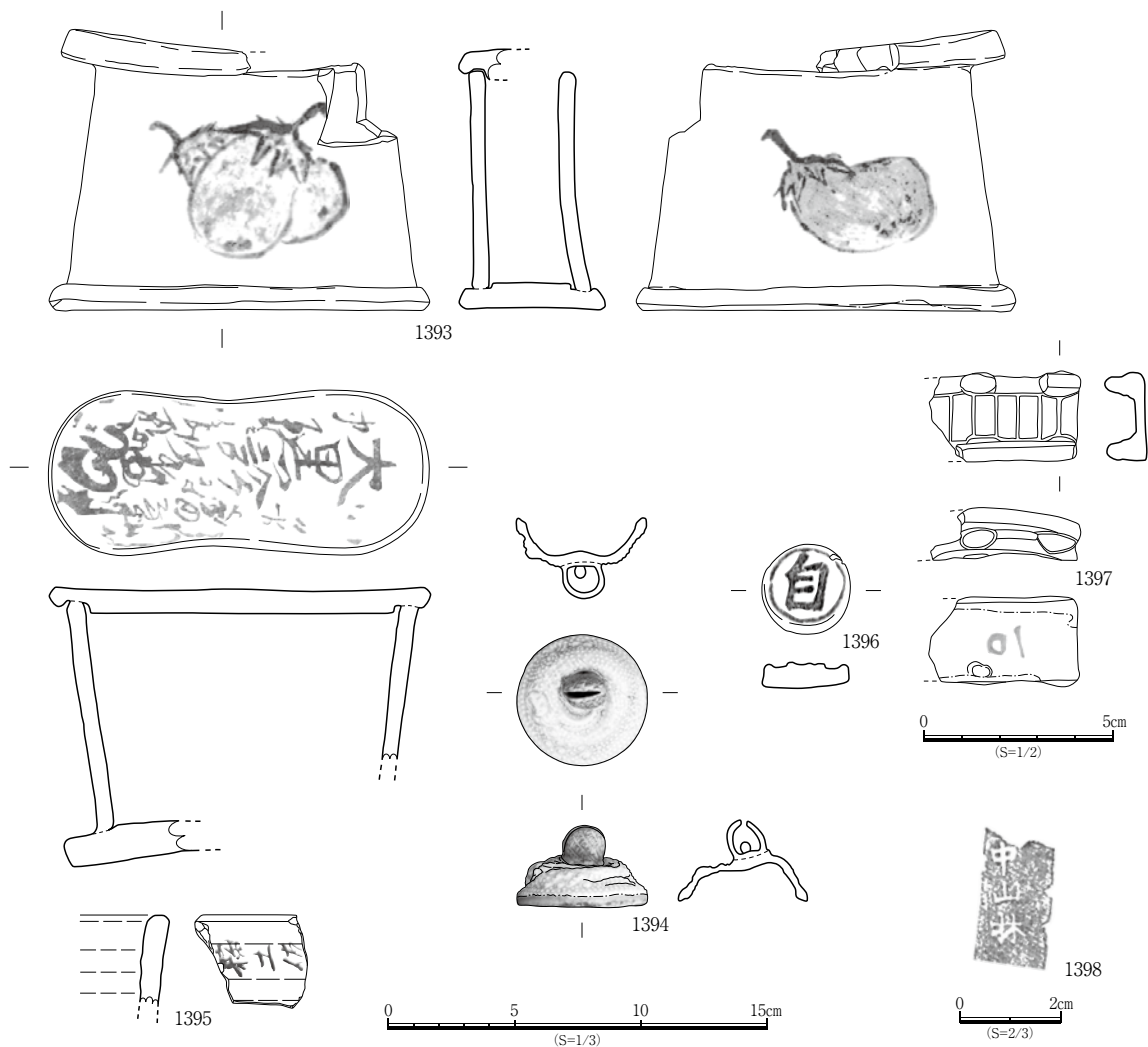


図92 SK-503・504出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

器枕で、やや小型である。上部と側面、下部は別作りで接合する。両側面には鉄錆による茄子文がみられる。外面の上面と側面、内面の上部と一部側面には灰釉を施す。底部外面には「大黒」の墨書がみられる。1394は磁器合子蓋で、全面に白磁釉を施し口縁端部は釉ハギする。外面には型による陽刻の蟹文と海浜風景文がみられ、天井部には貝形の摘を貼付し灰釉を施す。1395は土師器鉢で、全面に回転ナデ調整を施す。外面には「□土佐」の墨書が残る。1396は土製品泥面子である。型成形で「自」の陽刻文が施される。1397は土製品ミニチュアで、橋形を呈する箱庭道具とみられる。ナデ調整で上面には緑釉を施し、背面には「一〇」の墨書が残る。

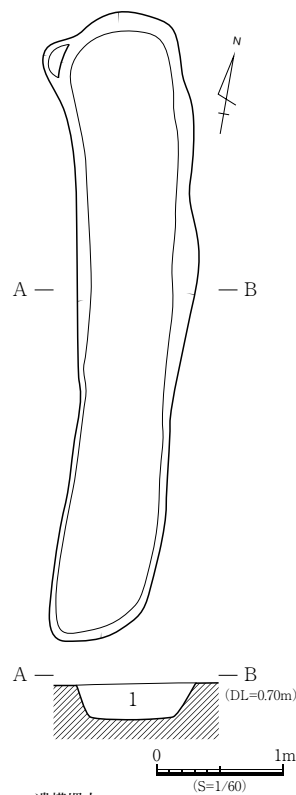
SK-504(遺物: 図92)

SK-503の南で検出した溝状の土坑である。検出長3.15m、全幅0.59m、深さ19cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器23点(皿2, 瓶1, 鉢1, 鍋3, 土瓶1など), 磁器9点(碗5, 皿1, 瓶1, 灯明受皿1など), 近代磁器片10点, 土師質土器6点(皿1など), 平瓦2点がみられた。図示した遺物は1398の平瓦で、側面に「中山林」の刻印がみられる。

SK-505(遺構: 図93 遺物: 図94~97)

SK-504の東で検出した溝状の土坑で、SB-502の中央部に位置する。全長5.00m、全幅0.74m、深さ20cmを測る。埋土は黒色シルトで、3cm大の円礫と焼土、炭化物、陶磁器片を多量に含んでいた。出土遺物には陶器1027点(碗14, 皿16, 蓋45, 鍋蓋32, 鉢47, 播鉢33, 甕15, 灯明受皿14, 鍋92, 土瓶38など), 磁器194点(碗40, 皿28, 大皿1, 猪口3, 紅皿4, 段重17, 瓶15, 色絵水滴1など), 近代陶器24点, 近代磁器924点(碗78, 皿58, 蓋166, 盃55, 瓶5, 銚子30など), 土師器100点(白色系皿5, 火鉢13, 焜炉4, 七輪1, 五徳1, サナ3, 焙烙1など), 瓦質土器36点(火鉢12, 焜炉1, 壺1など), 瓦25点(軒丸瓦1, 軒平瓦5, 平瓦7, 棧瓦2など), 金属製品8点, 石製品22点(硯1, 砥石2, 石板1, 石筆18), 骨角製品1点, ガラス製品16点, 貝, タイルなどがあり、大正期の遺構とみられる。

図示した遺物は1399~1429である。1399は珉平焼皿である。型打成形で、見込には型による陰刻の龍文がみられ、内外面に濃緑釉を施す。1400は陶器卸皿で、内面から口縁部外面には灰釉を施し、見込には卸目がみられる。1401は陶器土瓶蓋で、内面から口縁部外面には灰釉を施し、天井部にリボン状の摘を貼付する。1402は陶器蓋物蓋で、方形を呈する。型打成形で内面には布目痕が残る。外面は鉄釉のち唐草文と花文の陰刻を施し、透明釉を施釉する。外面には目痕が残る。内面には花文の染付を描き、透明釉を施す。1403は陶器鉢で、内面から体部外面まで鉄釉を施し、口縁端部は釉ハギする。1404は陶器土瓶で、注口と釣手を貼付し、口縁部内面から体部外面まで灰釉を施す。外面体部上半には飛鉋文がみられる。1405は肥前産の磁器染付端反碗で、外面に龍・宝・花文、口縁部内面に雷文帯、見込には環状の松竹梅文と圏線の染付がみられる。1406は能茶山窯の磁器染付端反碗で、内外面に染付の一部が残り、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。1407は肥前有田産の磁器色絵稜花皿で、外面に唐草文の染付、口縁部内面に朱色の四方襷文と墨色の七宝繫文と斜格子文の上絵付、見込に環状の松竹梅文と圏線



遺構埋土  
1. 黒色(10YR2/1)シルトで、3cm大の  
円礫・炭化物が多く焼土を含む

図93 SK-505



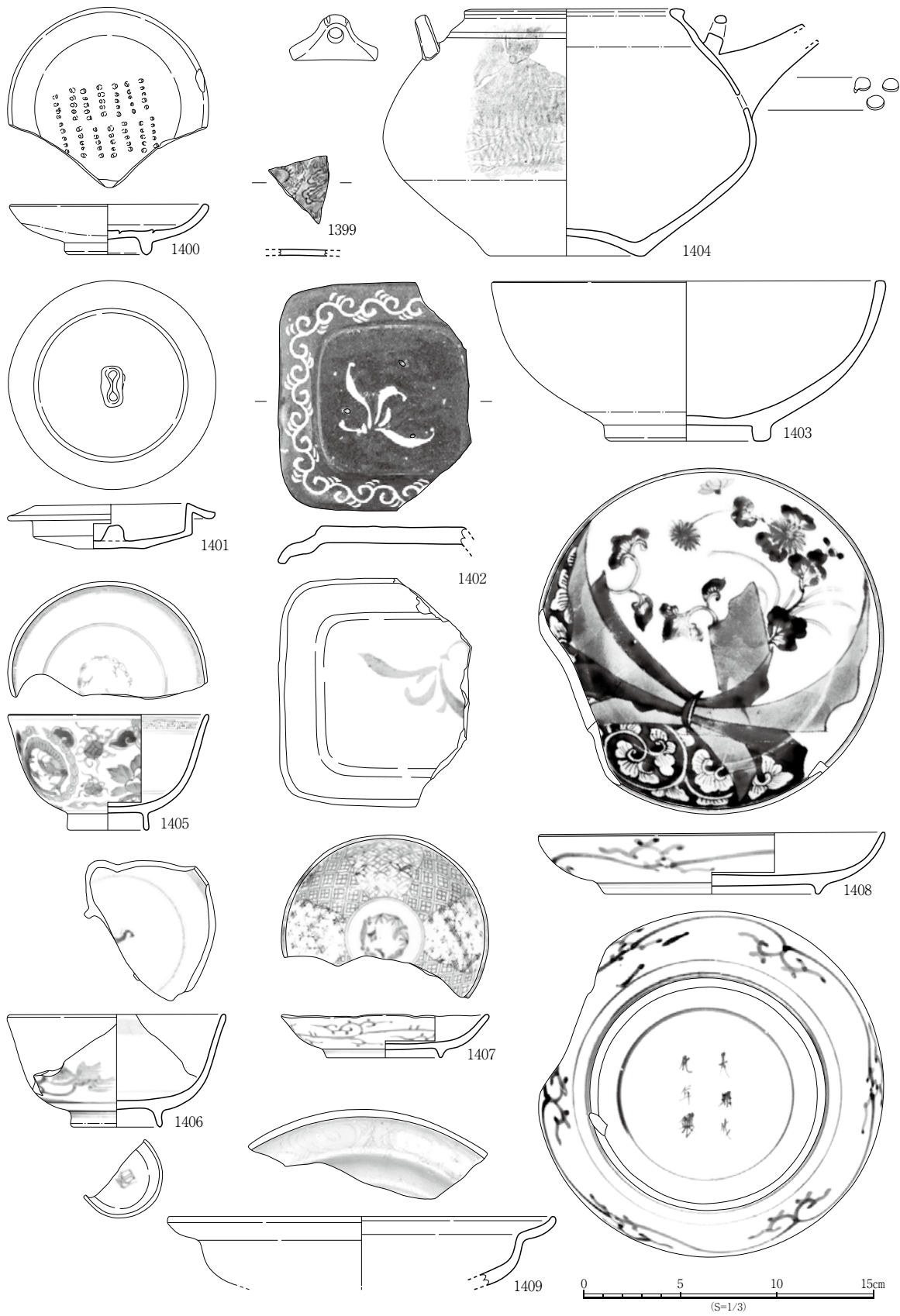


図94 SK-505出土遺物実測図1



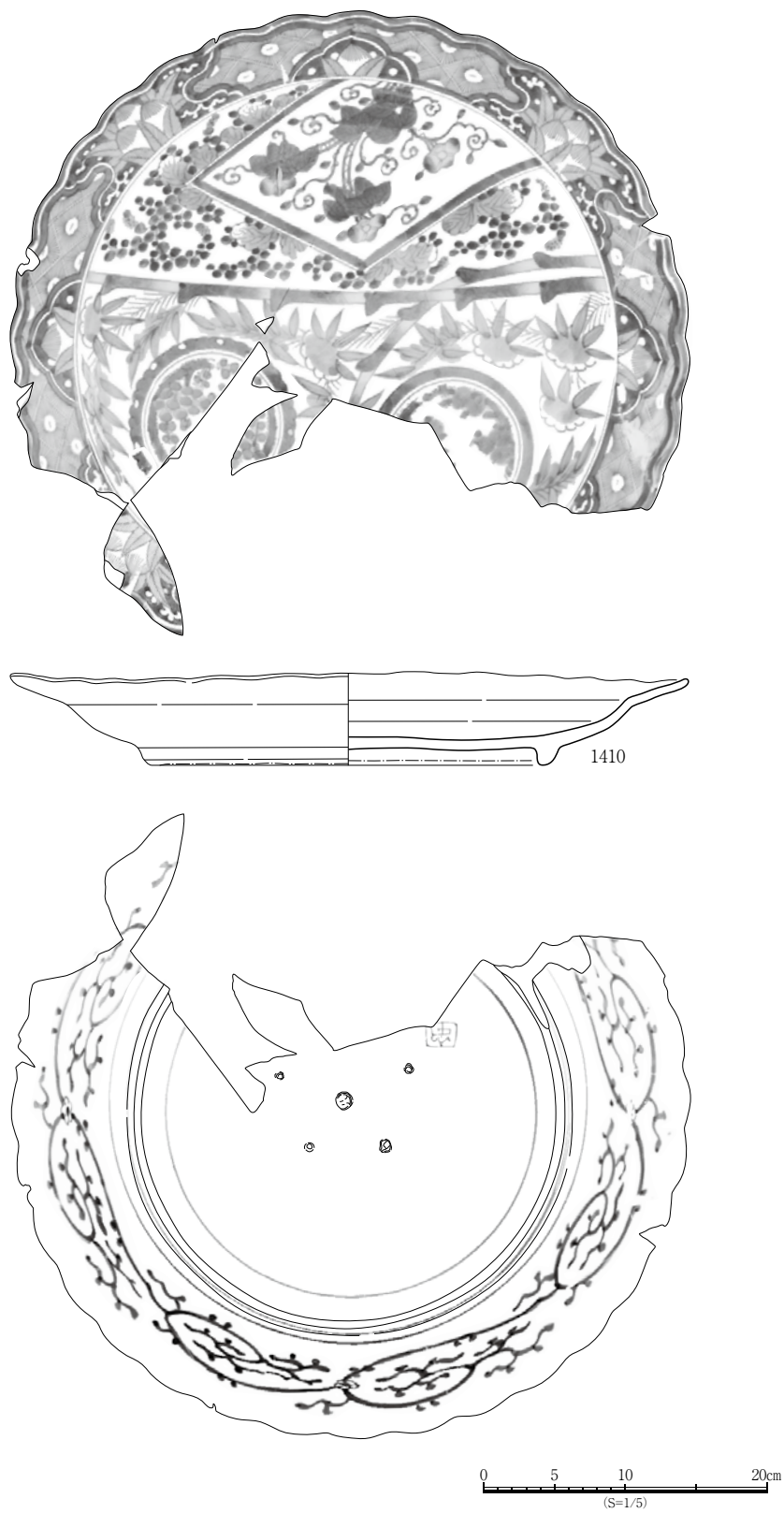


図95 SK-505出土遺物実測図2

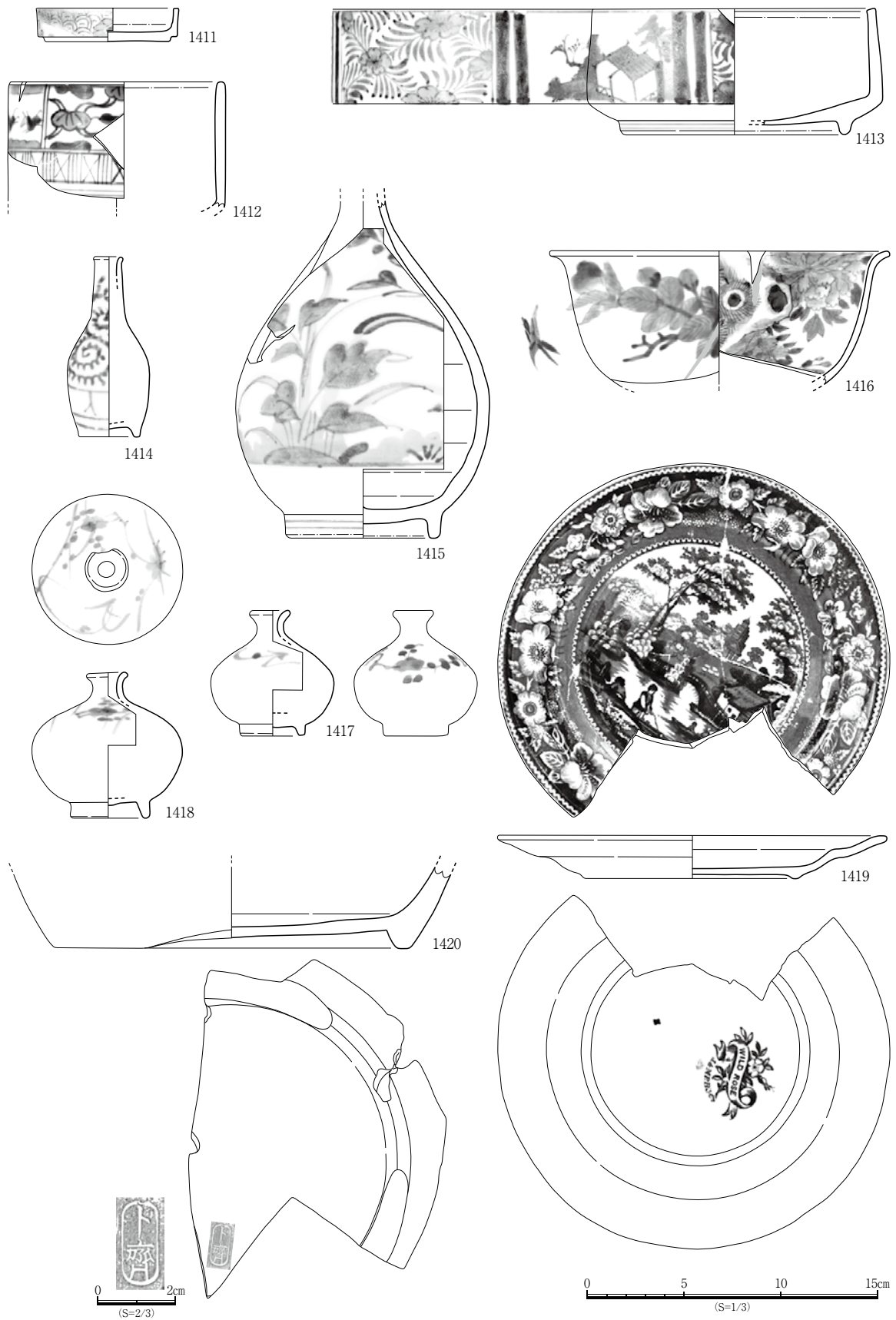


図96 SK-505出土遺物実測図3

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

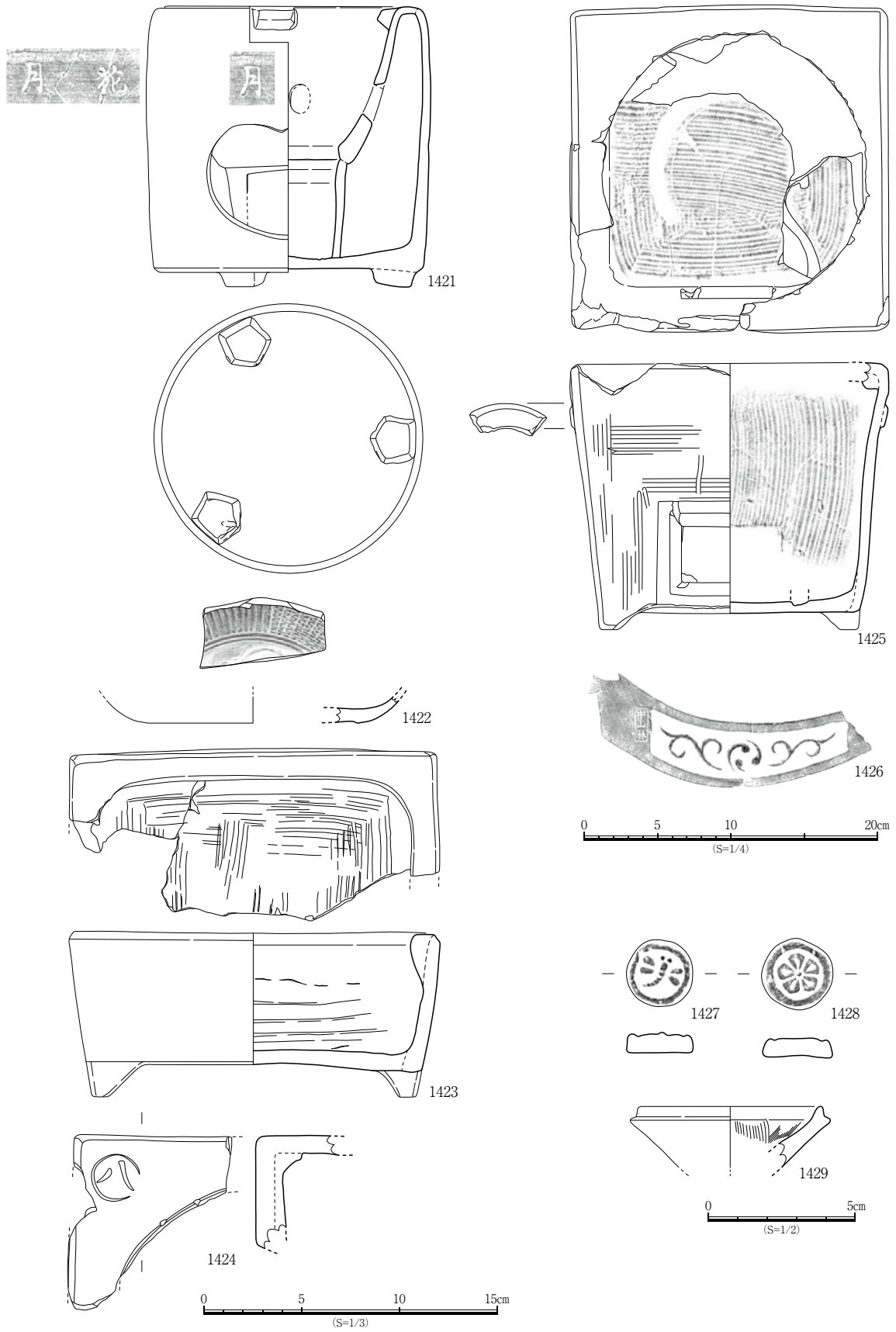


図97 SK-505出土遺物実測図4

の染付がみられる。1408は肥前産の磁器染付皿である。外面には唐草文と圏線の染付、口縁端部には口鏝、内面には草花文などの染付、高台内には圏線と「大明成化年製」の銘がみられる。1409は肥前産の青磁皿で、折縁形を呈する。口縁部内面には花文、見込には圏線の陰刻がみられる。1410は肥前産の磁器染付稜花大皿で、外面に花唐草文と圏線、内面には松竹梅文と丸文・窓に朝顔文の染付、高台内には圏線の染付と方形枠に「忠」の銘と目痕が5箇所に残る。1411は肥前有田産の磁器色絵段重で、全面に透明釉を施し口縁部内面と外面体部下端を釉ハギする。外面には朱・黄色による菊文と茶・緑色による波文の上絵付がみられる。1412は肥前系の磁器染付段重で、口縁端部は釉ハギする。外面には区画内に花文と馬文の染付がみられる。1413も肥前系の磁器染付段重で、口縁端部と畳付を釉ハギし、見込には目痕が残る。外面には区画内に風景文と草花文の染付がみられる。1414は肥前産の磁器染付小瓶で、外面に蛸唐草文と松葉文がみられる。1415は肥前産の磁器染付瓶で、外面には草花文と圏線の染付がみられる。1416は磁器染付鉢で、2箇所に焼継痕が残る。外面には鳥文と樹木文、内面には孔雀・牡丹・桜文の染付がみられる。1417・1418は肥前系の磁器染付油壺で、1417は肩部に梅文と松葉文、1418は肩部に松竹梅文の染付がみられる。1419は西洋陶器稜花皿で、コバルトによる銅板転写で、見込にはイギリス庭園図、口縁部内面はワイルドローズパターンである。高台内には「WILD ROSE J.&MP. B&Co」の銘が残る。イギリス産とみられる。1420は土師器火鉢で、円筒形を呈する。調整は内面が回転ナデ、外面が丁寧な磨き、底部外面がナデで、高台の数箇所に抉りを入れ脚としている。底部外面には丸に「卜齊」の刻印がみられる。1421は京都系の白色系土師器焜炉で、円筒形を呈する。二重構造で、内部構造は回転ナデ調整を施し、上部には5箇所に円孔を穿ち、3箇所に台形の突起を貼付、前方下部に方形の窓を有する。外部構造は回転ナデ調整で、前方にハート形の窓を有し、窓上部に「□花□月」(春花秋月か)の印刻がみられ、底部には五角形を呈する脚を3箇所に貼付する。口縁部内外面には煤が付着する。1422は軟質施釉陶器皿で、型打成形である。内面は型による籠状の陽刻文様がみられる。1423は瓦質土器火鉢である。箱形を呈し、口縁部を肥厚させ、底部には四隅に三角形を呈する脚を貼付する。調整は底部内面が粗雑な板ナデ、体部内面がナデ、口縁部が横ナデ、外面が丁寧な磨き、脚内側は削りである。1424は瓦質土器焜炉で、箱形を呈する。調整は内面が粗い縦ハケまたはナデ、外面が丁寧な磨きである。上面には丸に八の刻印がみられる。1425も瓦質土器焜炉で、板作りで箱形を呈する。内部構造は欠損し、前方に方形の窓を持つ。底部には三角形の脚を四隅に、側面には扇形の把手を貼付する。調整は底部内面が粗い縦または横方向のハケ、体部内面が縦方向の粗いハケ、外面が縦または横方向の丁寧な磨き、底部外面は型押とみられ無調整である。1426は軒棧瓦である。中心飾りは三巴文で、瓦当左側に「中山林」の刻印がみられる。1427・1428は土製品泥面子で、いずれも型成形で、1427は蜻蛉文、1428は花文がみられる。1429は土製品ミニチュアで、播鉢形を呈する。調整はナデまたは横ナデで、内面には播目がみられる。

#### SD-501 (遺構：図90, 遺物：図98)

A区とB区の境となる南北方向の区画溝である。南端は調査区外へ続き、北端は東へと方向を変えSD-505へ続く。検出長19.84m、全幅1.46m、深さ45cmを測る。基礎に木材を敷き、その上に石を積み、その間をコンクリートで断面U字形に固めている。埋土は6層に分かれ、上層からは昭和20年の空襲時の焼土と焼夷弾が出土しており、昭和期に埋没した溝跡とみられる。東側と西側では構造が異なり時期差があるものとみられる。西側はSB-502と同様に丸太を並べた上にチャート等の割

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

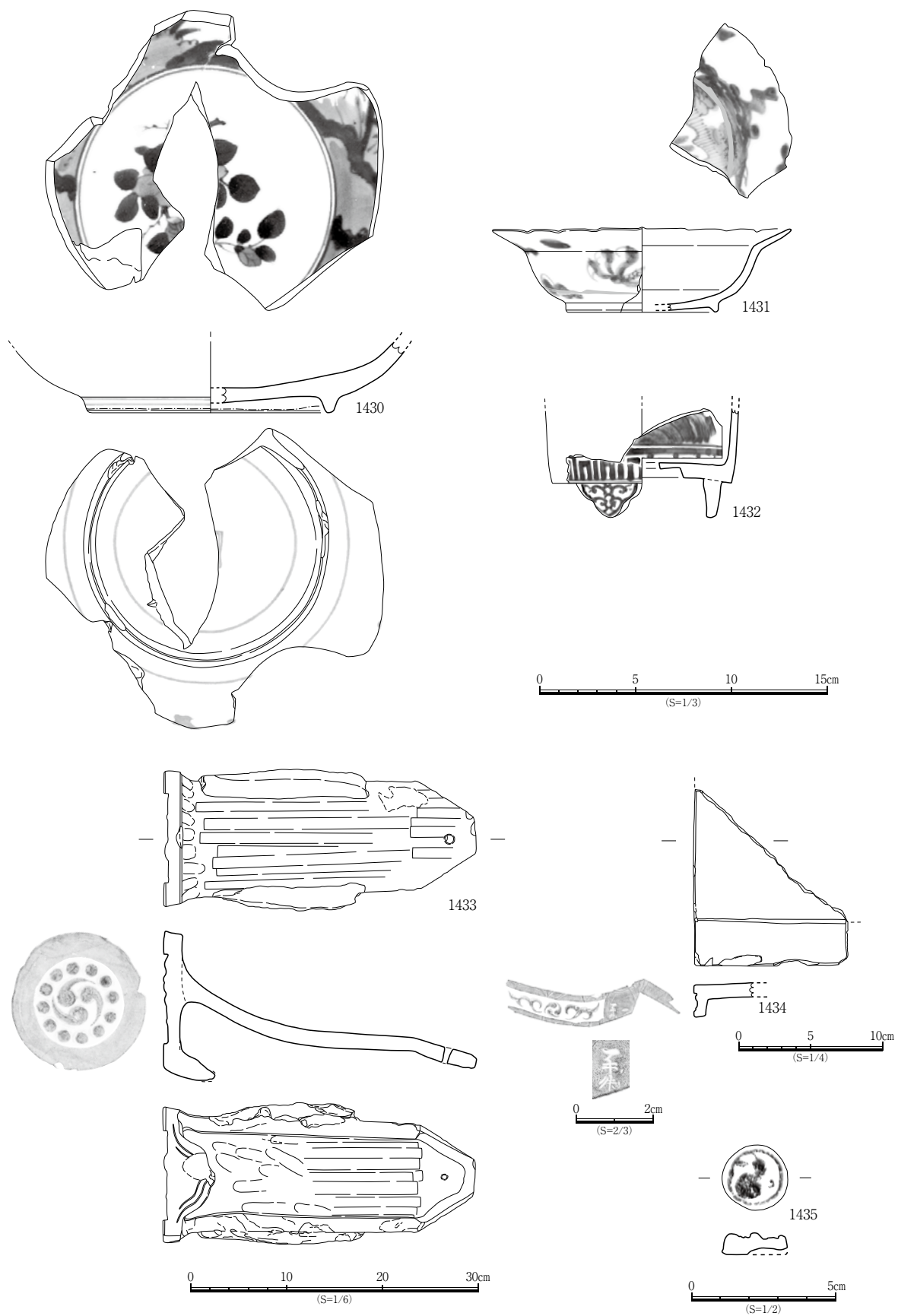


図98 SD-501・503出土遺物実測図

石を積み、上段には20～30cm大の石灰岩の割石を乗せている。東側は断面方形の建築材を再利用し、その上にチャート等の割石を積み、最上段には40～60cm大の石灰岩の切石を乗せ、内側に面を持たせている。出土遺物より大正期に使われた溝跡を昭和期に再構築し、昭和20年頃まで使用されたとみられる。埋土からの出土遺物は陶器73点、磁器27点、近代磁器21点、土師器7点、瓦質土器2点などで、「岐396」銘の統制陶器瓶、「岐872」銘の統制陶器壺など昭和期の遺物がみられる。基礎からの出土遺物は多く、陶器245点(碗13, 皿5, 蓋9, 鉢13, 播鉢6, 灯明受皿4, 鍋21, 土瓶13など)、磁器135点(碗35, 皿26, 大皿2, 猪口8, 段重2, 瓶7など)、近代磁器42点(碗3, 皿20, 蓋2など)、土師器38点(火鉢12, 焜炉1, 焙烙1など)、瓦質土器9点(火鉢6など)、瓦14点(軒丸瓦4, 軒平瓦8, 軒棧瓦1, 平瓦1)、その他古銭、金属製品、石製品硯、ガラス製品など大正期の遺物がみられた。

図示した遺物は1430～1434である。1430は磁器染付中皿で、外面には圏線と染付の一部が残り、見込に花文の染付、高台内は圏線と銘の一部がみられる。1431は肥前産の磁器染付稜花皿で、2箇所焼継痕が残る。外面に龍文、内面に不明文様の染付がみられる。1432は磁器染付植木鉢で、脚を貼付する。外面には透明釉を施し、内面と底部外面は無釉である。外面には蓮弁文と風景文、脚には唐草文の染付がみられる。1433は鳥衾瓦で、三巴文で漆喰が付着する。1434は軒棧瓦で、中心飾りは三巴文で、瓦当右側に「アキ□」の刻印がみられる。

#### SD-502

SD-501の北側に位置し、A区とB区の境となる遺構である。明確な掘方はなく、南北方向に直線的に集石が配されている。SD-502の東肩の基礎部分に繋がっていたとみられ、区画あるいは境界であった可能性が高い。石は15～40cm大の割石で、石材は砂岩と石灰岩に少量のチャートが混じる。集石間からの出土遺物は陶器7点(鍋1, 細片6)、磁器6点(碗2, 小杯1, 細片3)、土師器片4点、19世紀の遺構とみられる。

#### SD-503(遺物:図98)

調査区北西部で検出した遺構で、SX-501を切る。SD-502と同様に明確な掘方はなく、直線的に集石が配されている。石は20～50cm大の石灰岩の割石と、20～30cm大のチャートと砂岩である。建物の基礎の一部あるいは区画であったとみられる。集石間及び集石下からの出土遺物は陶器213点(碗3, 皿3, 蓋6, 鉢4, 播鉢3, 灯明受皿2, 鍋17, 土瓶9など)、磁器77点(碗6, 皿4, 蓋2, 猪口3, 瓶2, 灰吹1など)、近代磁器59点(碗7, 皿28, 蓋1など)、土師器火鉢2点、土製品泥面子1点、石製品石筆1点、木製品下駄1点などで、明治期から大正期の遺構とみられる。図示した遺物は1435で土製品泥面子である。型成形で瓢箪文がみられる。

#### SX-501(遺構:図99, 遺物:図100～102)

A-1区北西部に位置する遺構で、北端は調査区外へ続く。SD-503に切られ、SK-501を切る。隅丸方形を呈し、検出長11.83m、全幅11.12m、深さ43cmを測り、床面はほぼ平らである。埋土は2層に分かれ、埋土中からは多量の遺物が出土した。出土した遺物は陶器1,532点(碗44, 皿22, 蓋52, 瓶13, 鉢55, 播鉢32, 甕96, 灯明受皿20, 鍋44, 土瓶33など)、磁器627点(碗68, 皿31, 蓋34, 猪口12, 合子3, 段重4, 瓶16, 鉢8など)、近代磁器45点、土師器119点(火鉢13, 焜炉3, 焙烙1など)、瓦質土器33点(火鉢9など)、瓦21点(軒丸瓦7, 軒平瓦10, 丸瓦1, 平瓦1など)、金属製品13点(煙管2, 古銭2など)、石製品11点(硯1, 石板7, 石筆3)などで、大正期の遺物がみられた。

図示した遺物は1436～1461である。1436は京都・信楽系の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

を施す。見込に上絵付の痕跡がみられ、高台内には墨書が残る。1437・1438は灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで施釉する。高台内には墨書がみられる。1439は陶器碗とみられ、内面から体部外面まで鉄釉を施す。高台内には墨書がみられる。1440は能茶山窯の陶器皿で、内面から高台付近まで鉄釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。高台内には「十皿」の墨書がみられる。1441は尾戸窯の陶器皿で、内面から高台付近まで灰釉または透明釉を施す。見込には鉄錆による文様と目痕、高台内には屋号とみられる墨書が残る。1442は陶器蓋物蓋で方形を呈する。内面は透明釉、外面には褐色釉を施し唐草文の象嵌がみられる。1402と同じタイプである。1443は志野焼蓋物で、口縁部内面を除き長石釉を施す。外面には鉄錆による文様がみられ、金継の痕跡が残る。1444は陶器蓋物で、内面から体部外面まで灰釉を施し、口縁端部は釉ハギする。見込には目痕、高台内には墨書がみられる。1445は陶器瓶で、内面から高台付近まで鉄釉を施す。底部には墨書がみられる。1446は陶器鉢である。調整は回転ナデで、底部外面は回転削り調整とみられる。体部外面には鉄釉を施し、底部外面には「御酒」の墨書がみられる。1447は肥前有田産の陶器植木鉢で、底部に径1.1cmの円孔を穿つ。調整は回転ナデで、底部付近は削り出しである。脚は高台の3箇所アーチ状の抉りを入れて作っている。体部外面は飛鉋文がみられ鉄釉を施す。内面と底部外面は無釉である。1448は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で、外面に緑釉を施す。高台内には墨書がみられる。1449は陶器ミニチュアで、屋根形を呈する。型成形とみられ、外面には型による陰刻文様が施され、屋根に白色釉を施釉したモチーフ不明のものを貼付し、1箇所庇とみられるものが付く。外面には透明釉を施し、内面は無釉でナデ調整を施す。1450は能茶山窯の磁器染付端反碗で、外面に草花文、口縁部内面に多重圏線、見込に鷺文の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。1451は磁器染付小皿で、全面に透明釉を施し、見込を蛇ノ目釉ハギする。口縁部内面に草文とみられる染付、見込は丸に十字文の染付を描く。1452は能茶山窯の磁器染付小皿で、内面に山水家屋文の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。1453は肥前有田産の磁器染付皿で、外面に圏線、内面に花文の染付、高台内には圏線と方形枠に「福」の銘がみられる。1454は磁器染付角皿で、外面に稲穂文と圏線、口縁部内面には斜格子内に花文と雲文、見込に海浜文の染付、高台内には圏線と「玩」の銘がみられる。1455は磁器鉢で、内面は透明釉、外面は鉄釉を施し、暈付は釉ハギする。内面には陽刻による算木文と「震」「巽」の文字がみられる。1456は関西系の磁器染付植木鉢で、底部には径1.9cmの円孔を穿ち、獣足形の脚を3箇所に貼付する。体部外面には陽刻の鶴文と雲文の染付、口縁部内面に雲文の染付がみられ、底部内外面を除き透明釉を施す。1457・1458は土師器火鉢とみられ、回転ナデ調整のち外面にナデ調整を加える。外面には墨書がみられる。1458は「天保」の墨書が残る。1459は土師器焜炉とみられ、円筒形を呈する。胴

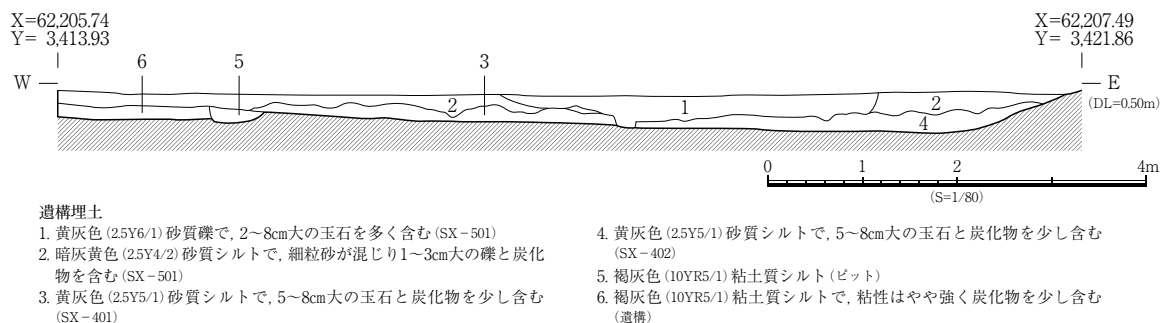


図99 SX-501

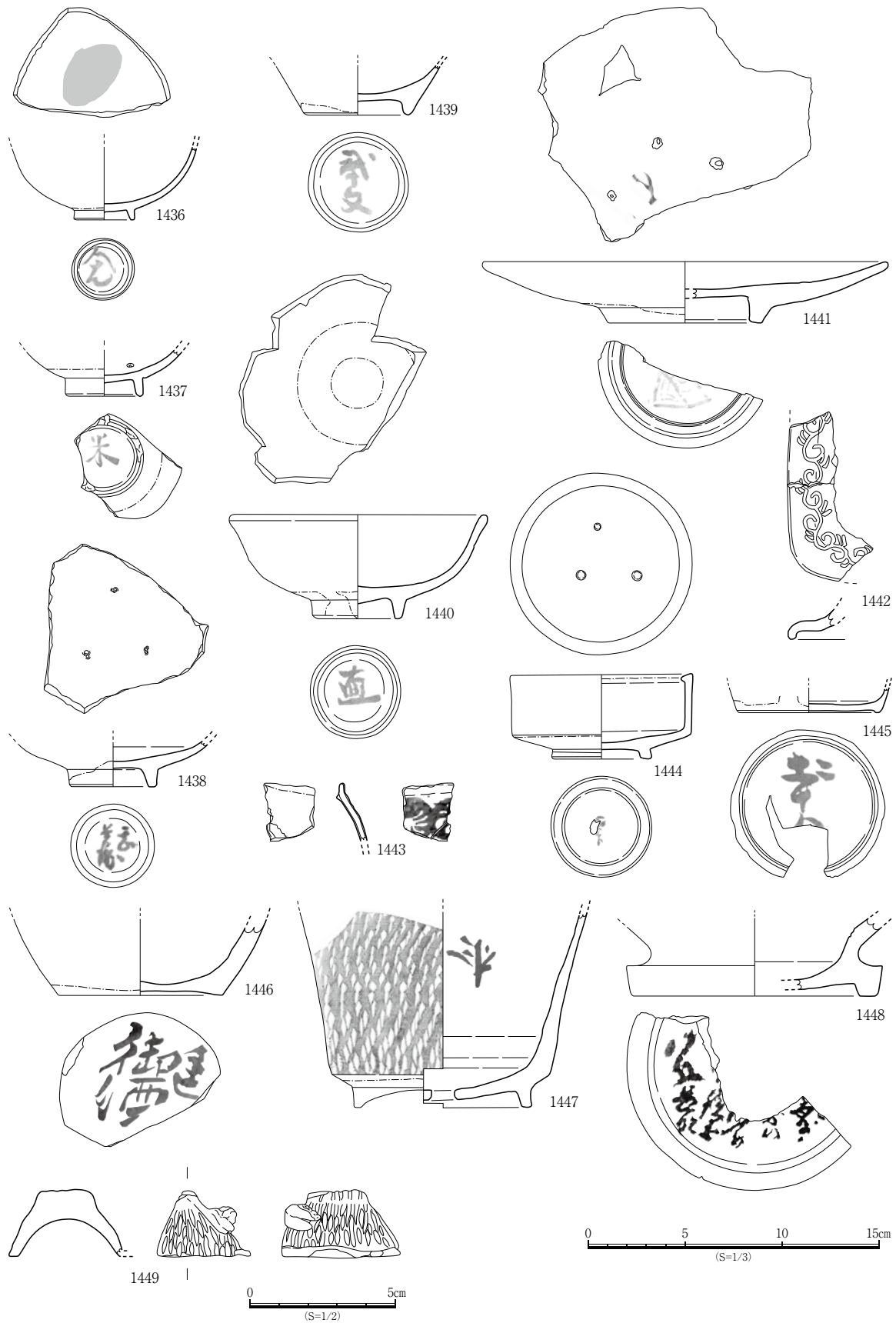


図100 SX-501出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

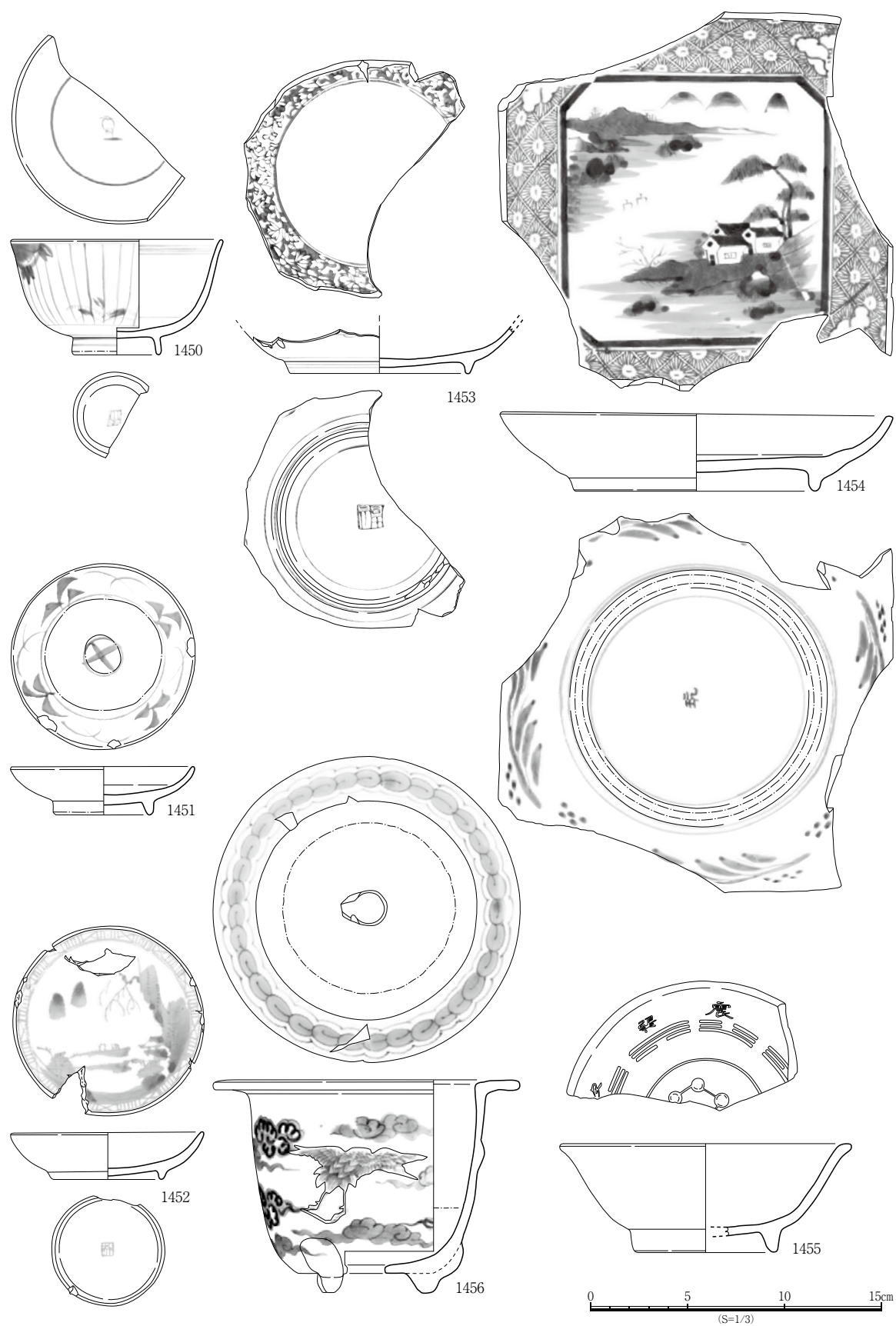


図101 SX-501出土遺物実測図2

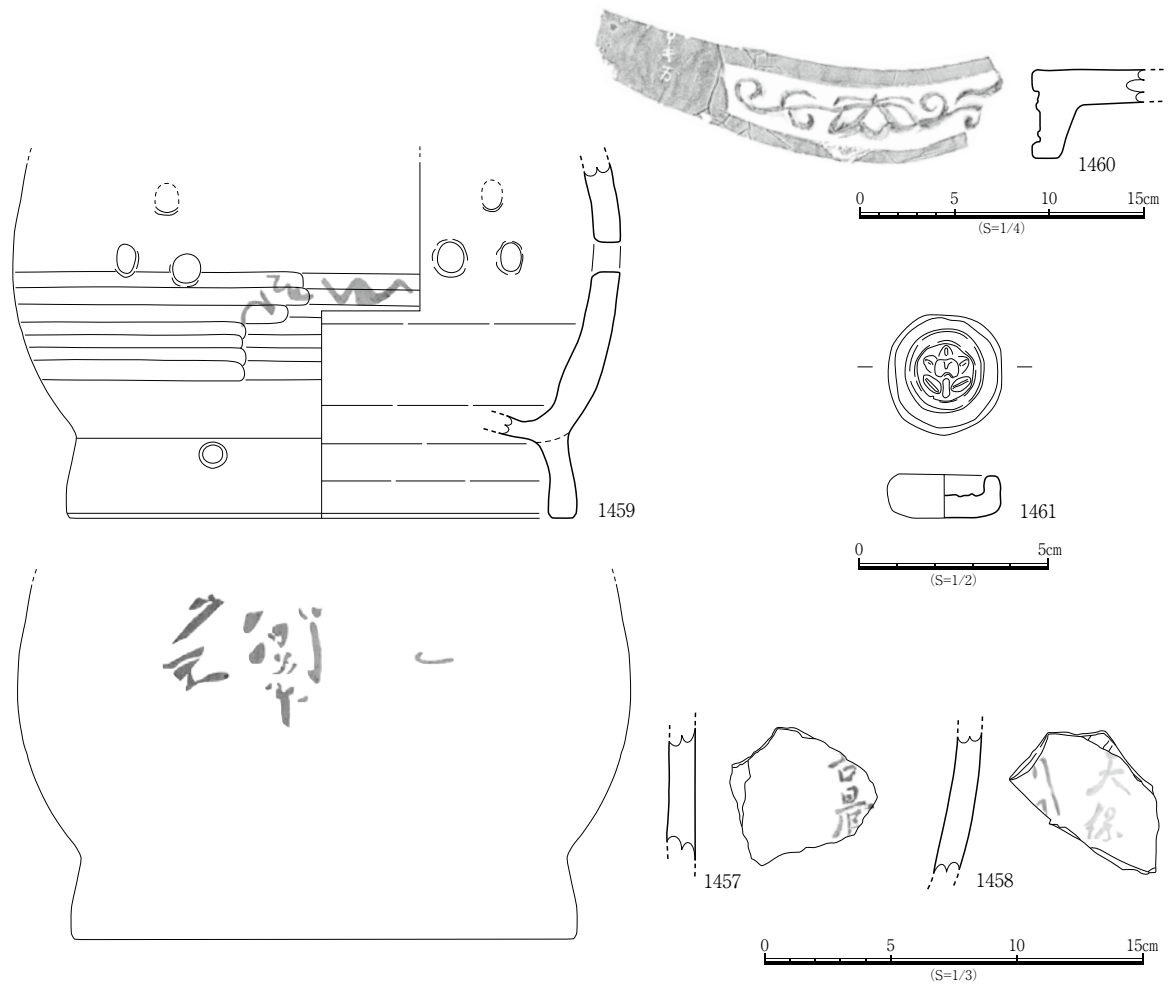


図102 SX-501出土遺物実測図3

部には2箇所3個単位の円孔を穿ち、円孔のない2箇所には墨書がみられる。調整はナデで、外面の下半には横方向のヘラ磨きを施す。脚部は貼付で、1箇所「○」の刻印がみられる。1460は軒平瓦で、瓦当には葛文とみられる文様と瓦当左側に「アキー力」の刻印がみられる。1461は土製品面型で、外面はナデ調整、内面には陰刻による橋文がみられる。

SX-502(遺物：図103)

SX-501の南西で検出した遺構で、西は調査区外へ続く。不整形を呈し、検出長7.22m、検出幅4.20m、深さ15cmを測る。出土遺物には陶器2点(火入1、灯明受皿1)、磁器5点(碗2、細片3)、近代磁器片1点、土師質土器杯1点がみられた。図示した遺物は1462で肥前産の磁器小丸碗である。外面にはコンニャク

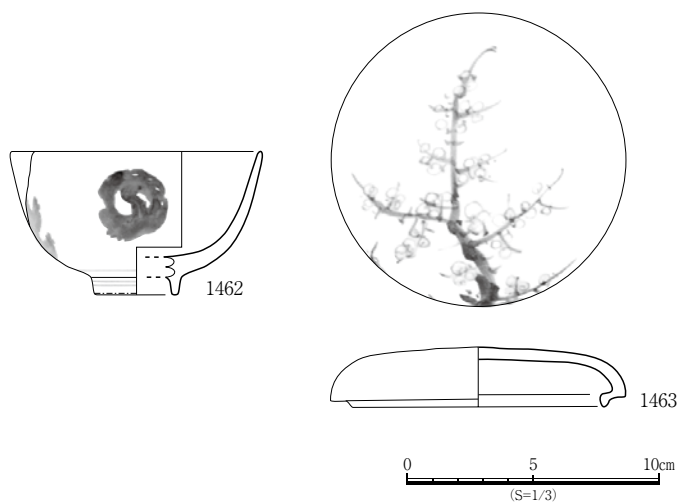


図103 SX-502・503出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (1) A-1区

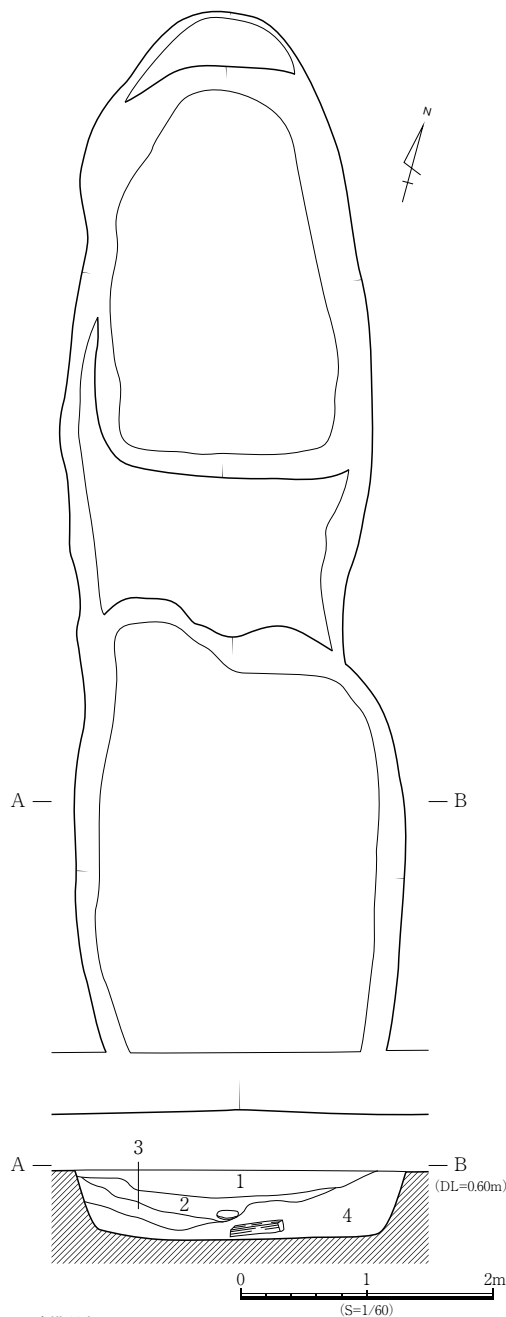
印判による鶴文がみられる。

**SX-503**(遺物: 図103)

SB-502内で確認された長方形を呈する遺構で、一部他の遺構に切られる。検出長は3.33m、全幅1.88m、深さ29cmを測る。出土遺物には陶器121点(碗2, 皿1, 蓋32, 鉢55, 播鉢3, 台付灯明受皿2など), 磁器121点(碗9, 皿1, 蓋1, 合子3, 瓶2, 鉢3など), 近代磁器212点(碗16, 皿11, 盃33, 銚子4, 色絵鉢1など), 土師器5点(火鉢1, 焜炉1など), 瓦質土器火鉢1点, 瓦3点(平瓦1, 棧瓦2), 金属製品7点(包丁1, 釘4など), 石製品2点(砥石1, 石板1)など大正期の遺物がみられた。図示した遺物は1463で磁器染付蓋物蓋である。外面には染付と白化粧土による梅樹文がみられる。

**SX-504**(遺構: 図104, 遺物: 図105~107)

A-1区南東部で検出した遺構で、区画溝であるSD-501に並行する。溝状を呈し、南端は調査区外へ続く。検出長7.61m、全幅2.63m、深さ56cmを測る。埋土は4層に分かれ、粘土質シルトまたは砂質シルトで木製品が多くみられた。出土遺物には陶器324点(碗25, 皿6, 蓋1, 鉢12, 播鉢11, 土瓶5, 火鉢5など), 磁器69点(碗12, 皿8, 蓋2, 段重2など), 近代磁器128点(碗19, 皿16, 小杯4, 猪口5, 銚子9, 水滴7など), 土師器16点(火鉢4, 焜炉1, 焼塩壺1など), 瓦質土器9点(火鉢7など), 瓦14点(軒平瓦5, 丸瓦3, 平瓦6), 木製品76点(木簡26, 下駄18, 羽子板1, 刷毛2など), 石製品76点(硯5, 石板24, 石筆47), 金属製品4点など明治期から昭和初期の遺物がみられた。木簡の多くは方形を呈し、上部に円孔を有する名前札で、表面に「追手筋尋常小学校」、裏面には名前が書かれていた。当地には高知市第三尋常小学校が明治24年から昭和16年まで存続しており、その時期の遺物とみられる。図示した遺物は1464~1482である。1464は陶器急須蓋で、天井部に円形の摘がみられる。外面は銅緑釉による文様のち透明釉を施す。内面は無釉で、全面を墨で塗られ、天井部には「五藤」の墨書もみえる。1465は陶器火鉢で、底部には焼成後の穿孔がみられる。内面は鉄釉を刷毛塗りし、底部内面の3箇所に砂目痕がみられる。外面は口縁部に銅緑釉、胴部には陰刻による幾何学文がみられ、灰釉を施し、底部は無釉で3箇所に貫通しない円孔がみられ、輪状に砂が付着する。1466は肥前産の磁器染付大皿で、内面に花唐草文がみられる。1467・1468は瓦質土器の火鉢である。



- 遺構埋土
1. 黄灰色 (25Y4/1) 粗粒砂質シルトで、4cm大の円礫を含む
  2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルトで、4cm大の礫と瓦片を多く含む
  3. 暗灰黄色 (25Y4/2) 粘土質シルトで、1cm大の円礫を少し含む
  4. 黒褐色 (25Y3/2) 中粒砂質シルトで、腐植と木製品を多く含む

図104 SX-504

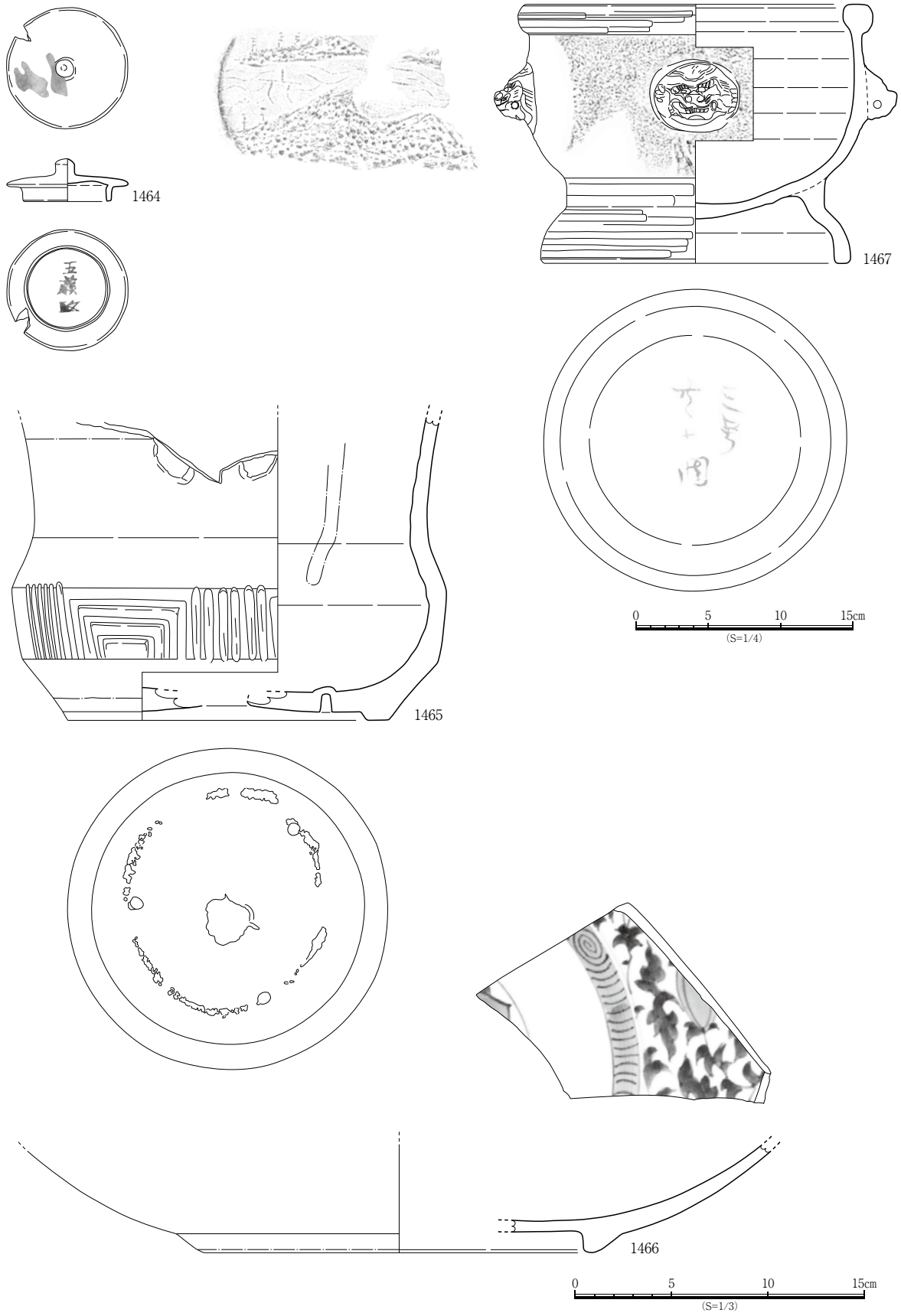


図105 SX-504出土遺物実測図1



3. 遺構と遺物 (1) A-1区

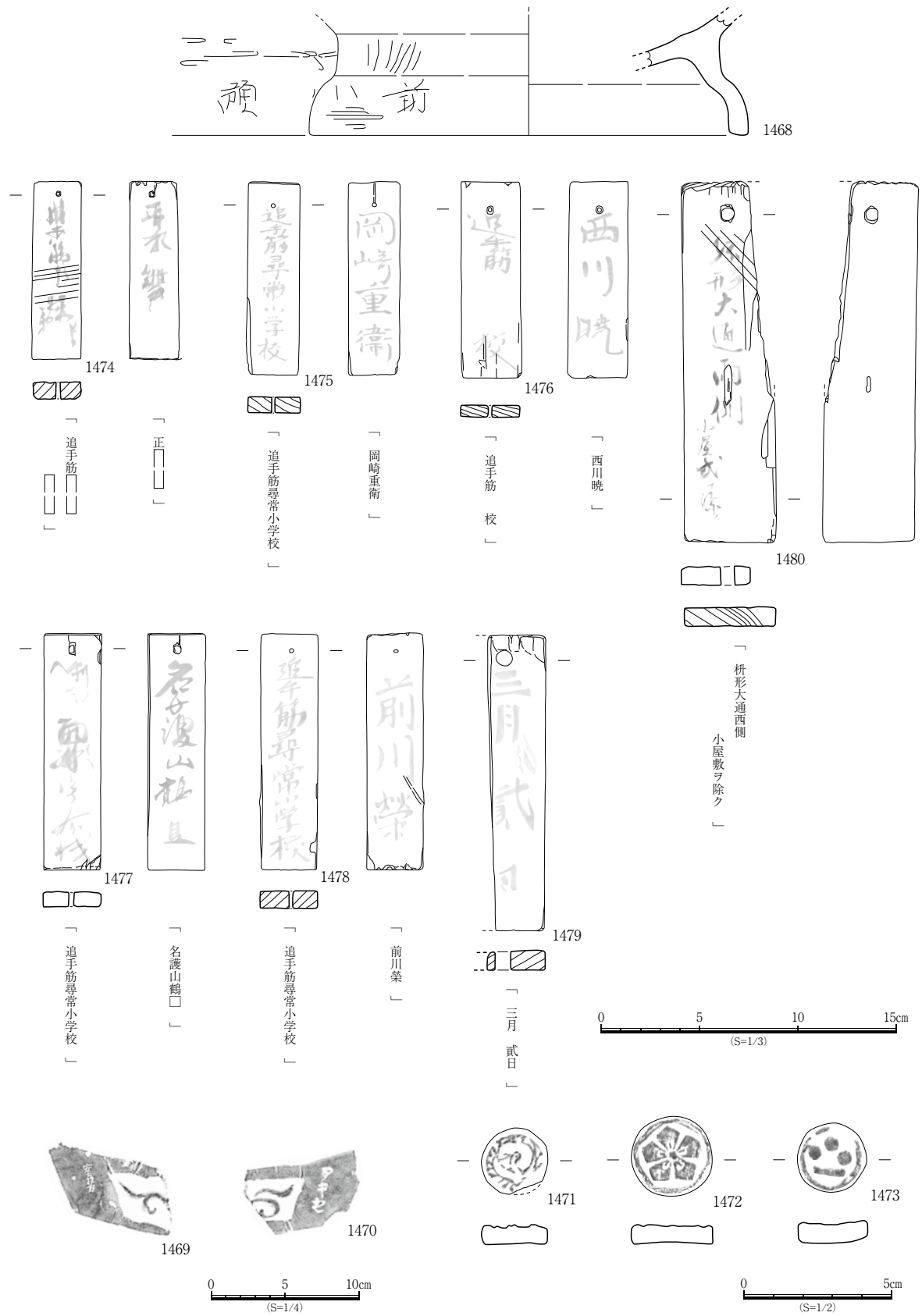


図106 SX-504出土遺物実測図2

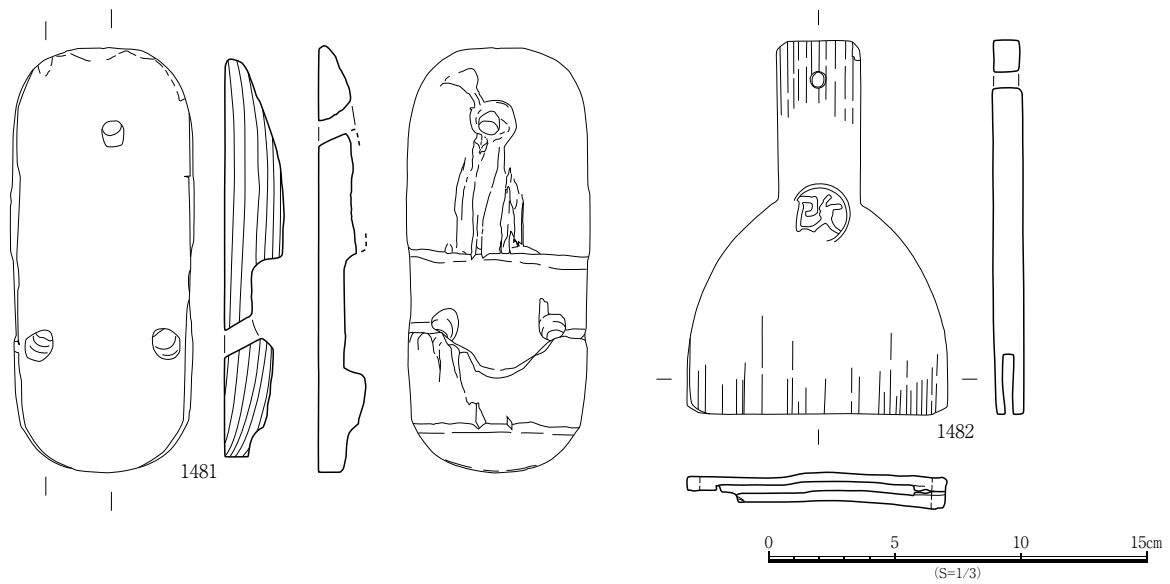


図107 SX-504出土遺物実測図3

1467は円筒形を呈し、胴部には2箇所にて獸面の把手を貼付する。調整は内面が横方向の板ナデ、口縁部が横方向の磨き、胴部外面が型押による陽刻の海浜風景文、脚部外面が横方向の磨き、脚部内面が回転ナデである。高台内には朱色の墨書で「三号□十団」の文字がみえる。1468は円筒形を呈し、ナデ調整または横ナデ調整で、脚部外面は横方向の磨き調整を施す。脚部外面には「前小」の刻書が残る。1469・1470は軒椽瓦である。1469は瓦当左側に「安□□」の刻印がみられる。1470は瓦当右側に「アキセ」の刻印がみられる。1471～1473は土製品泥面子である。いずれも型成形で、下面はナデ調整を施す。1471は鶴文、1472は桔梗文、1473は渡辺家の家紋とみられる。1474～1480は木製品木簡で、1474～1478は小学校の名前札である。いずれも短冊形を呈し、上部に円孔と両面に墨書がみられる。表面には「追手筋尋常小学校」、裏面には名前がみられる。1479は片面に、「三月 貳日」の墨書が残る。1480も短冊形を呈し、上部に円孔がみられる。片面に墨書が残り、「枅形大通西側 小屋敷ヲ除ク」の文字がみられる。1481は木製品連齒下駄で、隅丸方形を呈する。円孔が3箇所みられ、径1.1cmの孔を斜めに穿つ。後齒の前側は半円形を抜く。1482は木製品刷毛で、柄には径6mmの円孔、先端には幅7.8cmで奥行2.4cmを測る方形の孔がみられる。二枚の板の先端を加工した後に接合している。片面に丸に「改」の焼印がみられる。

P-501 (遺物：図108)

SB-501内で検出したピットである。SB-501と同様に埋土には多量の石が含まれており、SB-501の柱穴である可能性がある。平面形態は楕円形を呈し、長径78cm、短径69cm、深さ57cmを測る。出土遺物には陶器20点(碗1、蓋1、灯明受皿1、鍋1など)、磁器37点(碗2、蓋1、紅皿1など)、土師器2点(火鉢1など)、軒平瓦1点があり、幕末の遺物がみられた。図示した遺物は1483と1484である。1483は能茶山窯の灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施

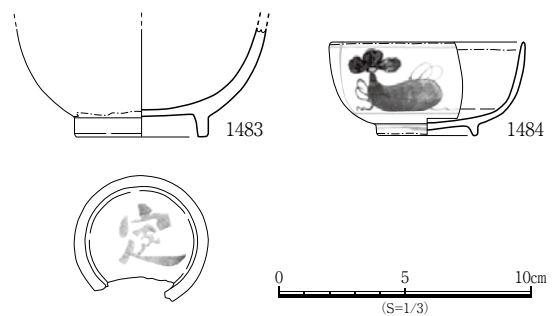


図108 P-501出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (2) A-2区

す。見込には目痕、高台内には「定」の墨書がみられる。1484は肥前産の磁器染付蓋物で、全面に透明釉を施し、口縁端部と畳付は釉ハギする。外面には宝文の染付がみられる。口縁部から底部に焼継痕が残る。

#### (2) A-2区

A-1区の北西部に位置する調査区である。A-1区と同様に17世紀には百々家、それ以降は山内家が居住していたとされ、近現代には小学校として機能した場所である。今回の調査で最も地形が高い調査区であり、江戸時代の整地層は約40cmを測る。近代の遺構は確認されおらず、江戸時代の遺構は調査面積が202㎡と小さいながら、前期から幕末までの遺構が検出されている。また、本調査区では中世の遺構が比較的纏まって検出されている。

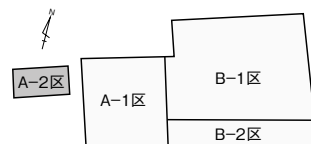


図109 A-2区位置図

#### ① 1面

Ⅲ-4層の下で検出した遺構で、江戸時代以前の遺構である。Ⅲ-4層は中世の水田土壌とみられ、畦畔と考えられる高まりや下部には床土とみられる明黄褐色を呈する酸化鉄の堆積も確認されている。検出した遺構はピット約30基で、遺構からは土師質土器や瓦質土器と少量の瓦器が出土しており、14～15世紀の遺構群とみられる。

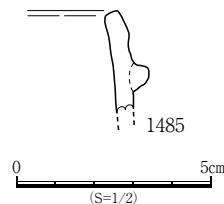


図110 P-101  
出土遺物実測図

#### P-101 (遺物: 図110)

A-2区中央部で確認したピットである。平面形態は円形を呈し、径21cm、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトで、基盤層のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦質土器釜1点がみられた。図示した遺物は1485で瓦質土器釜である。小型で断面半円形の小さな鏝を貼付し、調整は横ナデである。

#### ② 2面

江戸時代前期の遺構で、百々家が居住していたとされる時期である。検出された遺構はピットと池跡である。

#### SG-202 (遺構: 図111 遺物: 図112)

A-2区の南端で確認した池跡で、南は調査区外へ続く。西側は石積が二重になっており、一部は江戸時代後期に改修され若干規模を縮小している。平面形態は当初は隅丸方形、改修後は楕円形を呈するものとみられ、検出長11.48m、検出幅3.31m、深さ89cmを測る。側面には石を3段やや傾斜を持たせて積んでおり、石積は内側に面を向け、若干の裏込も確認している。外側の当初の石積は主に砂岩を用いており、40～60cm大である。内側の改修時の石積は砂岩とチャートを用いており、30～50cmを測る。裏込は幅約20cmで10cm大の割石を用い、砂岩とチャート・石灰岩がみられた。埋土は5層に分かれ、上層はシルトまたは砂質シルト、下層は礫が多くみられた。出土遺物には陶器146点(碗14、皿25、向付3、瓶1、鉢4、播鉢16、壺1、甕1、灯明受皿1など)、磁器167点(碗12、皿16、小杯12、瓶3、鉢1、壺1、仏飯器1など)、白磁皿1点、土師質土器56点(杯1、皿9、小皿2など)、土師器4点(火鉢2、細片2)、東播系須恵器片口鉢1点、瓦質土器2点(釜1、細片1)、瓦20点(軒平瓦1、丸瓦15、平瓦4)、金属製品1点、石製品3点(砥石1、硯1、石臼1)がみられ、埋土からの出土遺物は江戸時代後期、掘方や裏込からの出土遺物は17世紀代とみられ、当初の石積はA-1区のSG-201と同時期に存在した可能性がある。図示した遺

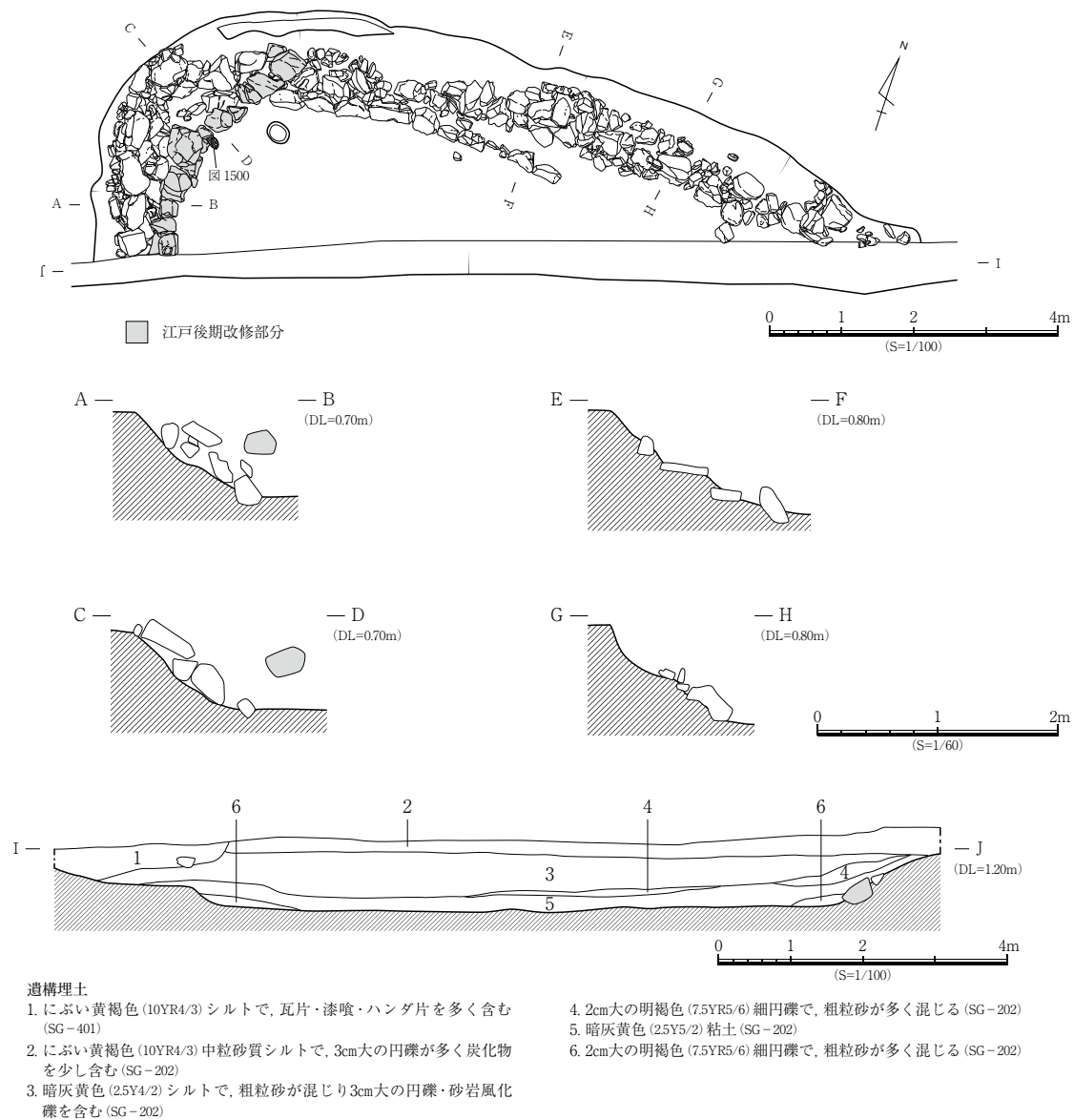


図111 SG-202

物は1486～1500で、1486～1495は埋土からの出土である。1486は陶器皿で、口縁部は隅切方形、高台は円形を呈する。口縁部内面には鉄錆による文様がみられ、内面から高台付近まで透明釉を施す。1487は美濃産の陶器皿である。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切り調整である。内面には鉄釉を施し、外面にも流れる。1488は絵唐津波縁皿で、内面から外面体部下半まで灰釉を施す。見込には鉄錆による文様がみられる。1489は尾戸窯の陶器中皿で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。見込には鉄錆による文様がみられる。1490は肥前産の陶器大皿で、内面に白化粧土のち全面に灰釉を施す。内面には白象嵌による圏線と蓮弁文・縞文がみられる。1491は志野焼向付で、底部外面を除き長石釉を施す。外面には鉄錆による文様がみられる。1492も志野焼向付で、紐状の脚を貼付し、全面に長石釉を施す。見込には鉄錆による樹木文がみられる。1493は肥前産の磁器染付小碗で、外面に圏線の染付がみられる。1494は肥前産とみられる白磁折縁皿で、全面に白磁釉を施す。1495は肥前有田産の磁器色絵瓶で、口縁部内面から外面に白磁釉を施す。外面には朱色の上絵

3. 遺構と遺物 (2) A-2区

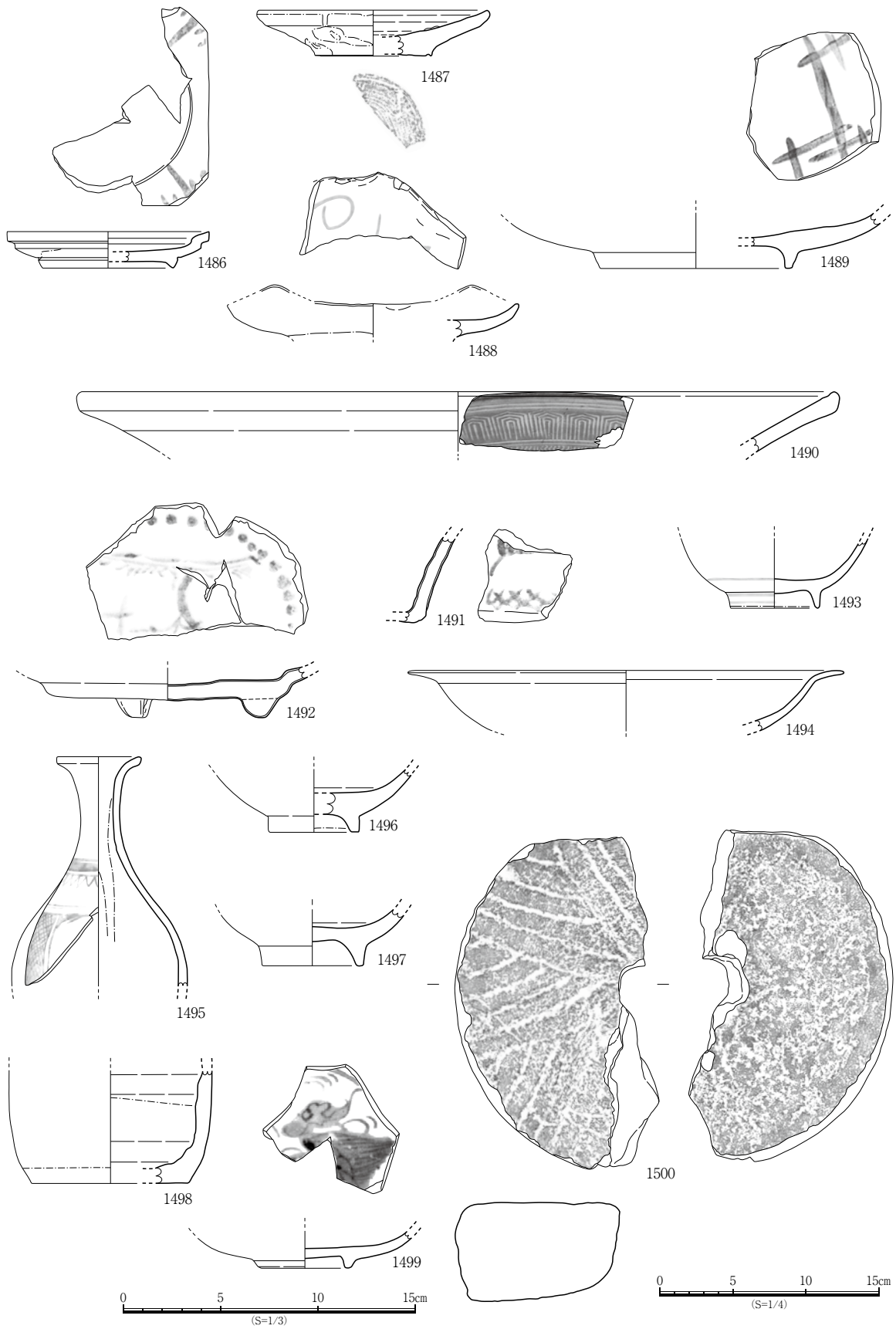


图112 SG-202出土遺物実測図

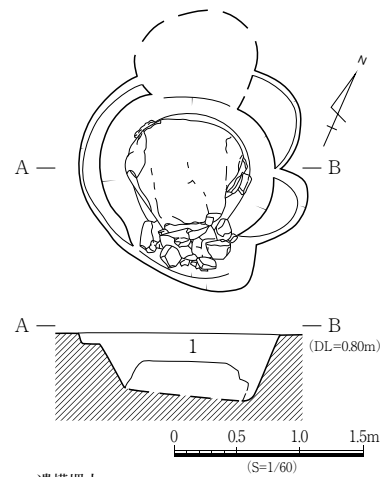
付による文様がみられる。1496～1499は当初の石積の裏込から出土した遺物である。1496・1497は陶器碗で、全面に灰釉を施し、豊付は釉ハギする。1498は陶器火入とみられ、体部内面から体部外面まで鉄釉を施す。1499は肥前産の磁器染付皿で、見込に染付がみられる。1500は石製品石臼で、改修時の石組に伴って出土した。下臼で、上面には播目、中央には深さ1.7cmを測る円孔がみられる。

③ 3面

18世紀前葉から後葉にかけての遺構で、17世紀代にB区に居住していた山内家がA区に移ってきて居住していたとされる時期である。この時期のA区の遺構は非常に少ないものの、A-2区ではピット約90基と土坑2基が確認された。

SK-305(遺構：図113)

A-2区東部で確認された土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.68m、短径1.77m、深さ12cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、明褐色シルトのブロックと円礫を多く含んでいた。土坑の中央には径95cmを測る扁平な花崗岩が設置されていた。花崗岩は厚さ30cmを測り、下に10cm大の石を数個置き上面が水平になるように設置されていた。出土遺物は皆無であった。



遺構埋土  
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで、5cm大の明褐色(7.5YR5/6)シルトのブロックと円礫を多く含む

図113 SK-305

P-301(遺物：図114)

A-2区中央部で確認されたピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径54cm、短径41cm、深さ33cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器鉢1点と鬼瓦1点がみられた。図示した遺物は1501で鬼瓦である。前面と下面は型成形で、下面には焼成後の穿孔がみられる。

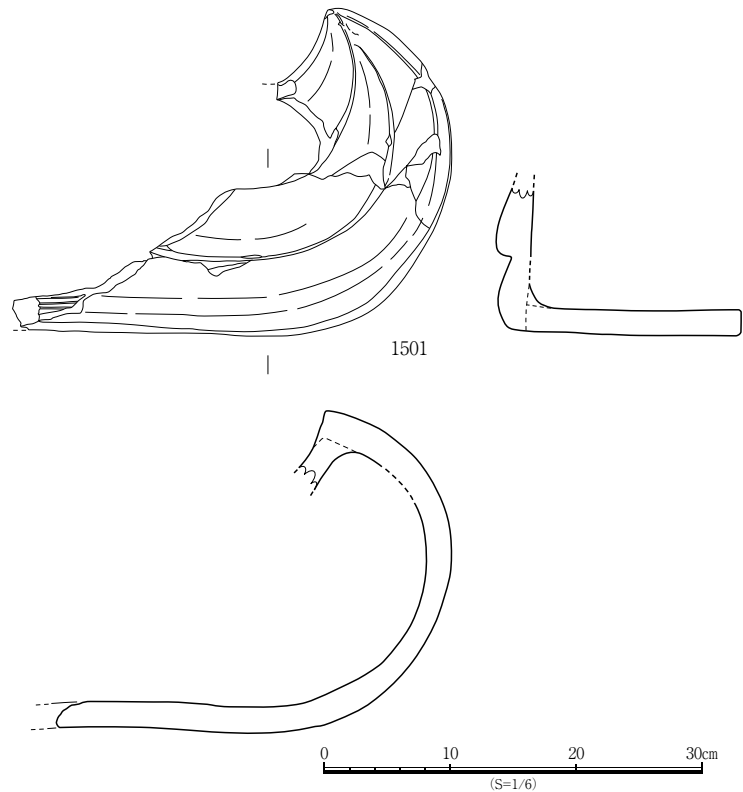


図114 P-301出土遺物実測図

④ 4面

18世紀後葉から幕末までの時期で、3面と同様に山内家が居住していた時期である。この時期の遺構は全調査区とも多く確認されている。

SB-401(遺構：図115 遺物：図116)

A-2区北部で確認した東西棟建物跡である。梁間2間(4.40m)、桁行9間(16.80m)で、柱間寸法は1.50～2.40mであった。柱穴は径40～80cmの円形または楕円形で、埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。柱



3. 遺構と遺物 (2) A-2区

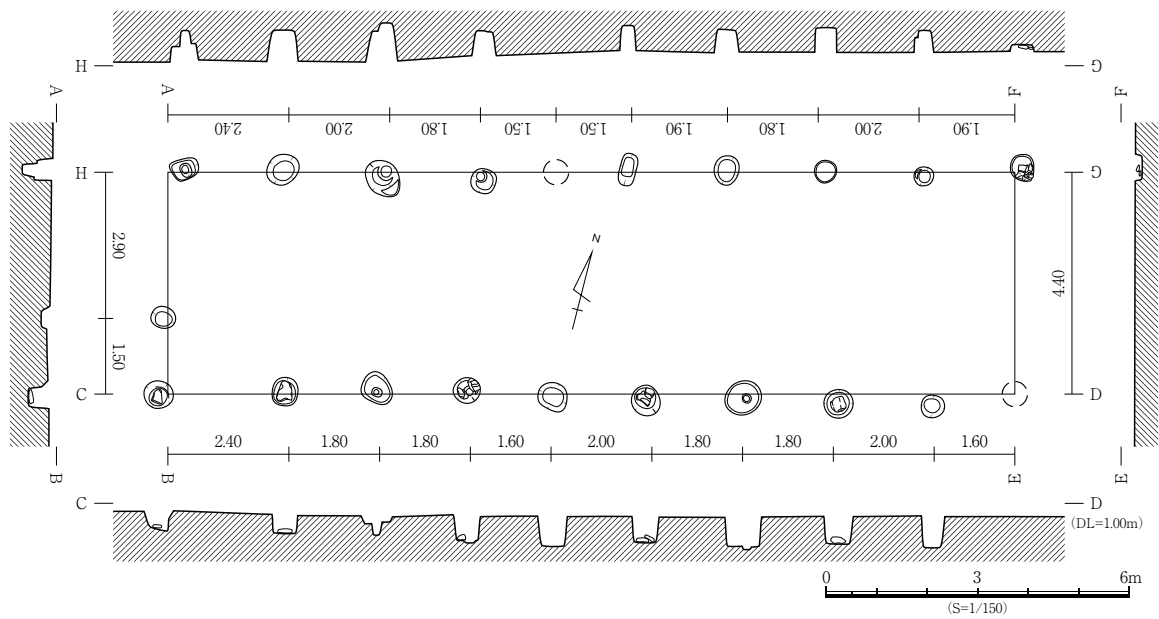


図115 SB-401

穴の底面には礎板がみられるものもあった。出土遺物には陶器播鉢1点、磁器2点(小杯1, 細片1), 土師質土器19点(杯1, 皿1, 細片17), 須恵器片1点, 瓦器椀1点, 瓦質土器片2点, 平瓦5点がみられた。図示した遺物は1502で, 南妻柱の西から3間目の柱穴より出土した。1502は瓦器椀で, 底部には扁平な高台を貼付する。調整は口縁部が横ナデ, 体部外面はナデで指頭圧痕が残る。内面はナデ調整のち渦巻状とみられる暗文を施す。

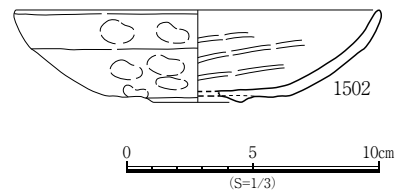


図116 SB-401出土遺物実測図

SB-402(遺構: 図117)

A-2区南西部で確認した東西棟建物跡で, 西は調査区外へ続く。梁間2間(3.80m), 桁行2間(3.70~3.90m)を検出した。柱間寸法は1.60~2.10mであった。柱穴は径30~95cmの円形または楕円形で, 埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を多く含んでいた。柱穴の底面には礎板がみられるものもあった。出土遺物は平瓦1点と鉄製品1点であった。

SK-421

A-2区南西部で確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し, 全長2.16m, 全幅2.10m, 深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで, 3cm大の黄褐色風化砂岩と5

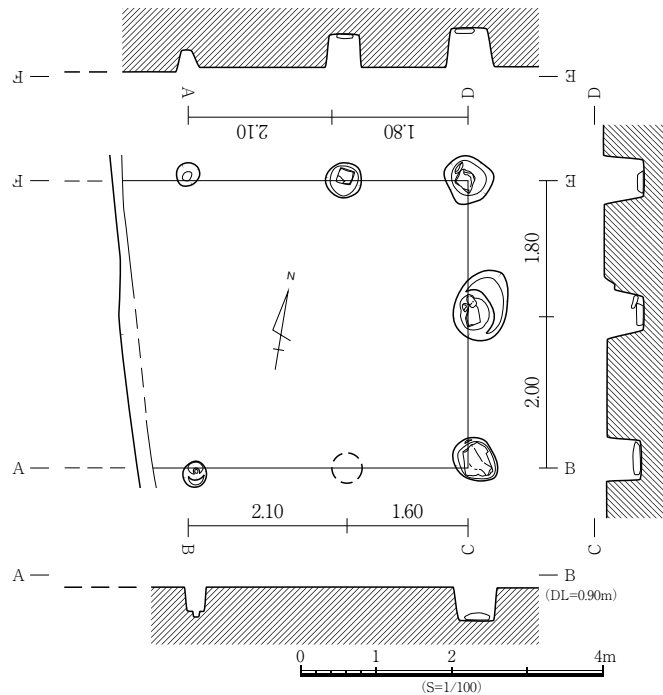


図117 SB-402

cm大の円礫を少し含んでいた。出土遺物には陶器3点(甕1, 細片2), 磁器4点(小杯1, 細片3), 土師質土器片6点, 土師器片1点, 瓦5点(丸瓦3, 平瓦2)がみられた。

SK-422

A-2区北部で確認した土坑で, 一部調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ, 全長1.52m, 検出幅0.66m, 深さ31cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 細片4), 平瓦1点がみられた。

SK-423

A-2区東部で確認した土坑で, SG-401を切る。平面形態は不整形を呈し, 全長2.03m, 全幅1.35m, 深さ12cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで, 橙色シルトブロックと多量の3cm大の円礫を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点, 平瓦1点がみられた。

SG-401 (遺物: 図118)

A-2区東部で確認した池跡の一部で, SK-423に切られる。北, 南, 東は調査区外へ続き, 検出長10.88m, 検出幅2.70m, 深さ46cmを測る。側面には石積があったとみられるが, 一部にのみ残存していた。石積は1段程度を確認し, 15~30cm大の砂岩と少量のチャートと石灰岩を用いていた。埋土は2層に分かれ, 上層が灰黄褐色中粒砂質シルトで, 多量の10cm大の漆喰片と少量の焼土・炭化物を含み, 下層は暗灰黄色中粒砂質シルトで多量の焼土と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器125点(碗11, 皿8, 蓋4, 猪口1, 火入1, 瓶2, 鉢10, 播鉢12, 壺1, 甕1, 灯明受皿4, 鍋2, 土瓶2, 急須1, 細片65点),

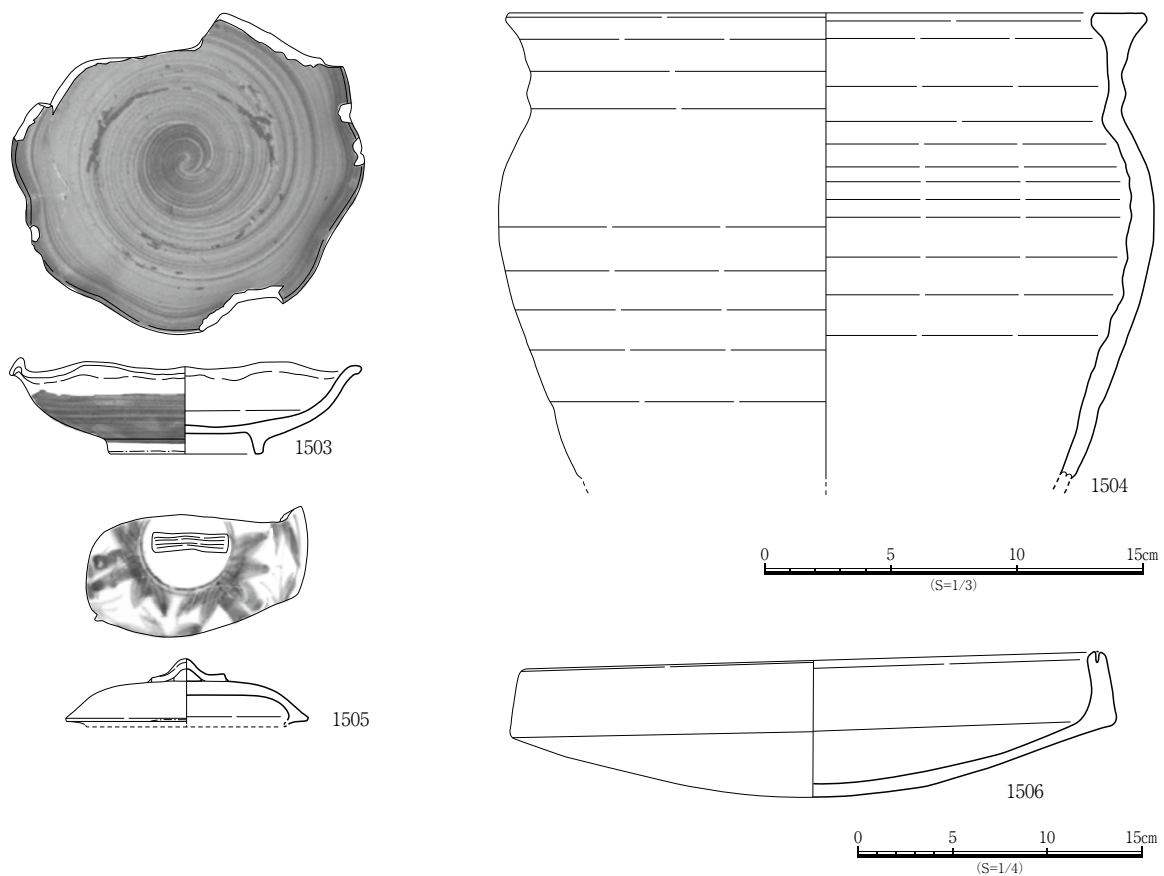


図118 SG-401出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

磁器75点(碗6, 皿6, 蓋4, 猪口1, 蕎麦猪口2, 紅皿1, 火入1, 瓶6, ミニチュア1, 細片47点), 土師質土器28点(皿10, 小皿3, 細片15), 土師器11点(火鉢2, 焜炉1, 焙烙2, 細片6), 瓦質土器釜1点, 瓦17点(丸瓦4, 平瓦9, 棧瓦4), 鉄釘5点がみられ, 幕末に埋没したものと考えられる。図示した遺物は1503~1506である。1503は肥前産の陶器輪花皿で, 内外面に白化粧土による刷毛目文を施したのち透明釉を施釉する。1504は陶器甕で, 回転ナデ調整のち全面に鉄釉を施す。1505は北部の石積間から出土した磁器染付蓋物蓋である。天井部には紐状の摘を貼付する。外面には笹文と圏線の染付がみられる。1506は関西系の土師器焙烙で, 口縁端部の2箇所に刺突による径2mmの円孔がみられる。内面は横方向のナデ調整, 口縁部は横ナデ調整, 底部外面は型成形とみられ無調整である。

#### P-405(遺物: 図119)

A-2区北西部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し, 長径46cm, 短径42cm, 深さ35cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は陶器4点(皿2, 播鉢1, 鍋1), 土師器竈1点, 平瓦3

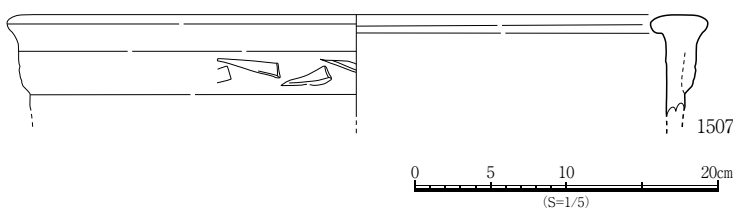


図119 P-405出土遺物実測図

点であった。図示した遺物は1507で土師器竈である。外面には幅の広い突帯を貼付し, 刺突による文様を施す。

### (3) B-1区

B区は調査地の東側に位置し, 17世紀には山内家, それ以降は村田家が居住していたとされる。17世紀の絵図には追手筋から帯屋町までが一つの屋敷地として描かれているが, 18世紀の絵図には北と南が別の屋敷地となり, 南の屋敷地はさらに南北に長い三つの屋敷地に分かれている。この北側の屋敷地が村田家の屋敷とみられB-1区として, 南の屋敷地はB-2区として報告する。但し, 屋敷地が細分される前後の時期である, 1・2・5面の遺構についてはすべてB-1区として報告し, B-1区とB-2区の屋敷境の溝跡はB-2区として報告する。

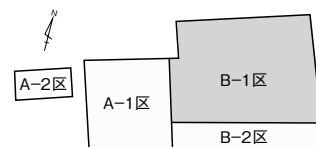


図120 B-1区位置図

B区はA区よりも調査面積が広いいため遺構数や遺物の出土数も多くなっている。江戸時代初期から幕末までの遺構が調査区全面で検出されている。

#### ① 1面

中世の遺構は地形の低い調査区南部でピットが僅かに確認されている。A区と同様に江戸時代に地形の高い北部を削平し整地したものとみられ, 北部では中世の遺構が削平された可能性が高い。

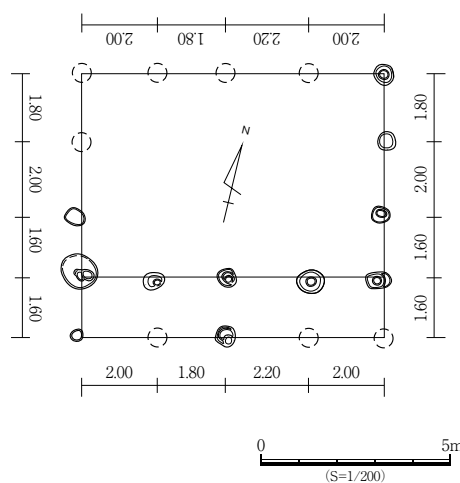


図121 SB-202

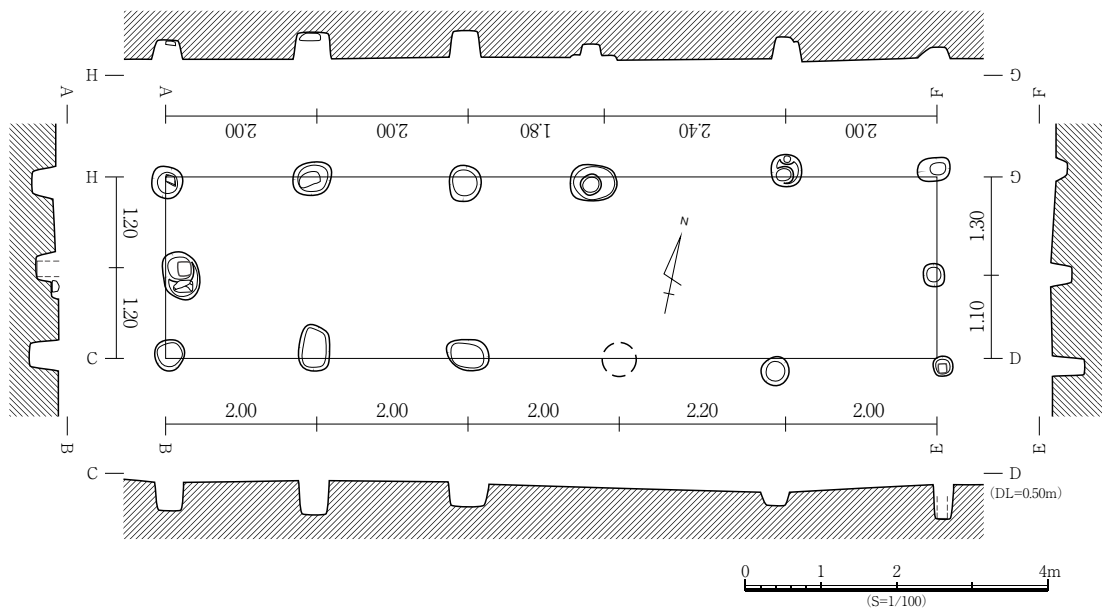


図122 SB-203

② 2面

山内家が居住したとされる時期で、山内家の屋敷地は追手筋から帯屋町まであったとみられ、調査区は山内家屋敷の一部である。この時期の遺構はほぼ全面で確認された。

SB-202(遺構：図121)

B-1区南西部で確認された建物跡で、SD-215に切られる。梁間3間(5.40m)、桁行4間(8.00m)の身舎の南側に下屋が付き、南北4間(7.00m)、東西桁行4間(8.00m)の東西棟建物跡である。柱間寸法は梁間が1.60m・1.80m・2.00m、桁行が1.80m・2.00m・2.20m、下屋幅は1.60mを測る。柱穴は径40～95cmの円形または楕円形を呈し、底面には礎板がみられるものが多い。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 細片1)、磁器片1点、鉄製品1点がみられた。

SB-203(遺構：図122)

B-1区南東部で確認された東西棟建物跡で、SD-213～215に並行する。梁間2間(2.40m)、桁行5間(10.20m)で、柱間寸法は梁間が1.10～1.30m、桁行が1.80m～2.40mを測る。柱穴は径35～60cmの円形または楕円形を呈し、底面には礎板がみられるものや一辺13cmを測る角柱が残存している柱穴も多くあった。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、0.5～2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点、磁器3点(小杯1, 細片2)、土師質土器片2点がみられた。

SB-204(遺構：図123)

B-1区南西部で確認された東西棟建物跡で、SD-215を切る。梁

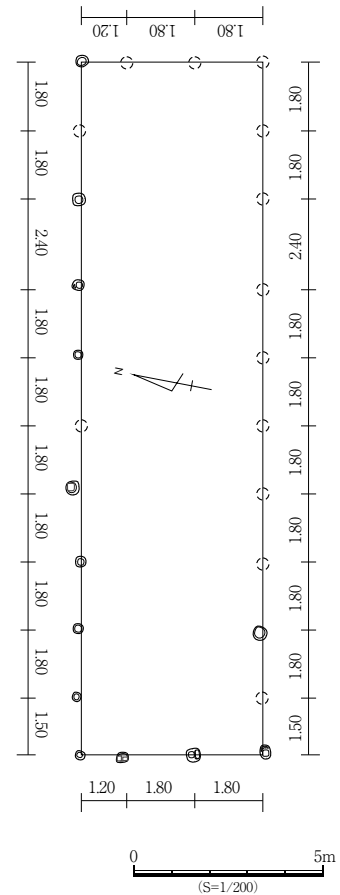


図123 SB-204

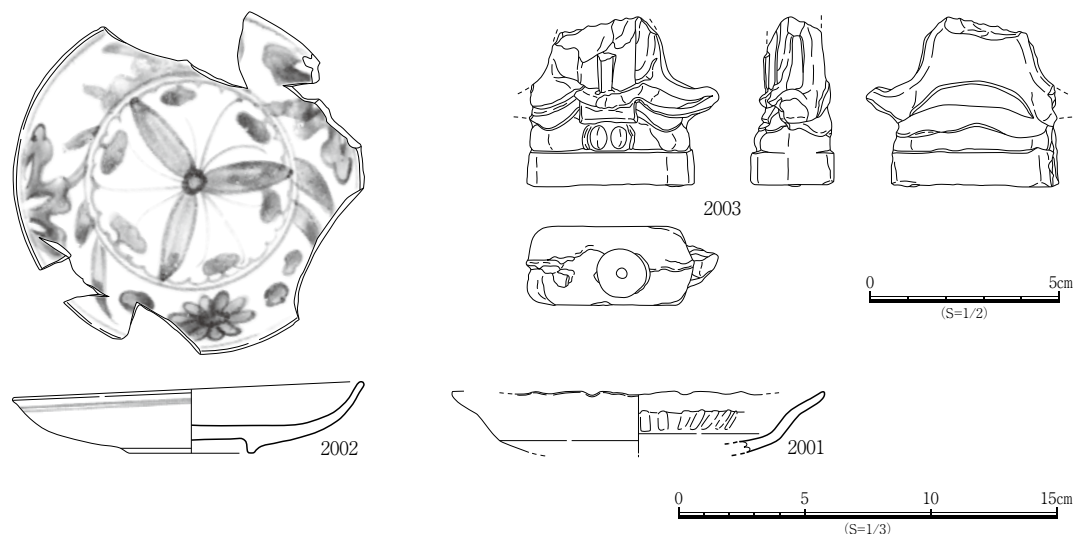


図124 SK-203～205出土遺物実測図

間3間(4.80m), 桁行10間(18.30m), 柱間寸法は梁間が1.20mと1.80m, 桁行が1.50m・1.80m・2.40mを測る。柱穴は径約30cmの円形または楕円形を呈し, 一辺13cmを測る角柱が残存している柱穴もみられた。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(鉢1, 細片2), 磁器3点(碗2, 細片1), 土師器片2点, 土師質土器小皿1点がみられた。

SK-203(遺物: 図124)

B-1区北西部で確認した土坑で, 一部他の遺構に切られ, SK-204を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長1.84m, 検出幅1.46m, 深さ2cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1), 磁器2点(皿1, 瓶1), 土師質土器2点(皿1, 小皿1)がみられた。図示した遺物は2001で, 肥前産の白磁輪花皿である。内面には丸彫による縞文がみられる。図示した遺物以外に漆継を施した磁器瓶が出土している。

SK-204(遺物: 図124)

SK-203の北で確認した土坑で, SK-203に切られ, 北は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.77m, 全幅1.48m, 深さ36cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器片2点, 磁器2点(皿1, 小杯1), 土師質土器5点(皿1, 細片4), 銅製品煙管1点がみられた。図示した遺物は2002で, 肥前産の磁器染付皿である。外面に圈線, 内面に草花文, 見込に花卉文の染付がみられる。図示した遺物以外に木質が残る煙管雁首が出土している。

SK-205(遺物: 図124)

SK-204の南西で確認した土坑で, 平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ, 検出長1.55m, 全幅1.53m, 深さ16cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 皿1, 壺1, 細片2), 磁器3点(猪口1, 細片2), 土師質土器2点(鉢1, 小皿1), 須恵器片1点, 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2003で, 土製品人形である。天神様で, 型成形である。底面には円錐形の孔がみられる。

SK-206

SK-205の南東で確認した土坑で, SK-207とSD-206に切られる。一部を検出し, 検出長2.80m, 検出幅0.55m, 深さ23cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺

物には陶器挿鉢1点、磁器皿1点がみられた。

### SK-207

SK-206の南で確認した土坑で、SK-206とSD-206を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺3.15m、短辺2.33m、深さ40cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿2、細片1)、磁器10点(皿1、蓋1、猪口1、蓋物1、細片6)、土師質土器9点(皿4、細片5)、須恵器片1点がみられ、絵唐津皿や陶器色絵製品、陽刻のある磁器色絵皿などが含まれていた。

### SK-208

SK-206の東で確認した土坑で、一部他の遺構に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長1.81m、検出幅1.31m、深さ13cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1、挿鉢1、甕1)、磁器皿3点、土師質土器片2点、土師器片1点、瓦12点(丸瓦3、平瓦9)がみられ、丹波焼甕や初期伊万里が出土している。

### SK-209

B-1区北東部で確認した土坑で、P-209を切る。平面形態は不整形を呈し、全長2.27m、全幅1.90m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿2、細片1)、磁器10点(皿1、大皿1、細片8)、土師質土器26点(皿6、細片20)、鉄釘5点、鉄滓がみられた。

### SK-210

SK-209の南東で確認した土坑で、SX-208を切る。平面形態は不整形を呈し、全長1.33m、全幅1.11m、深さ93cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。土坑内には径40cmを測る柱根が直立し、埋土中には径20～30cm大の角礫が多くみられた。出土遺物は皆無であった。

### SK-211 (遺構：図125 遺物：図127)

B-1区北東部で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径2.39m、短径1.04m、深さ80cmを測る。断面は箱形を呈し、埋土は13層に分かれ、下層は黒褐色または灰色粘土質シルトで腐植

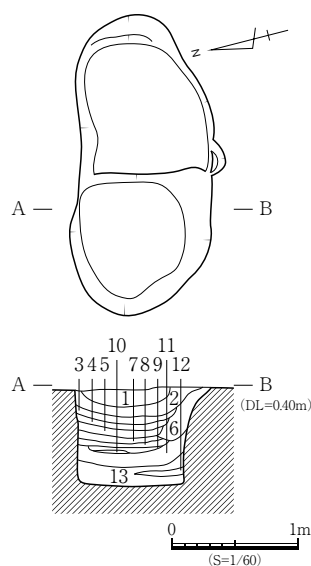
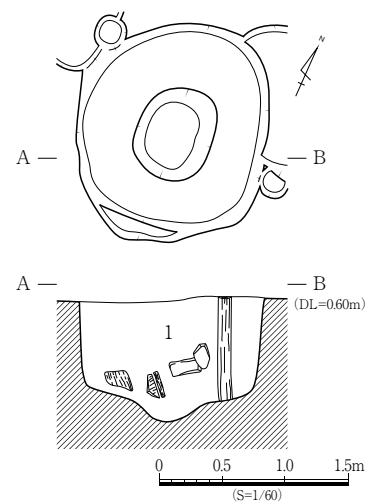


図125 SK-211

#### 遺構埋土

1. 黄灰色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂で、3cm大の礫を少し含む
2. 褐灰色(10YR4/1)砂質シルトで、3cm大の礫が少しと炭化物を含む
3. 褐灰色(10YR6/1)細粒砂質シルトで、炭化物を少し含む
4. 褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を少し含む
5. 褐灰色(10YR5/1)粗粒砂質シルトで、粗粒砂を多く含む
6. 黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルトで、粗粒砂を多く含む
7. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで、粗粒砂を含む
8. 黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルトで、腐植を多く含む
9. 灰黄色(2.5Y7/2)砂質シルトで、粗粒砂を含む
10. 黒褐色(10YR3/1)粗粒砂質シルトで、腐植を多く含む
11. 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルトで、少量の粗粒砂と炭化物・木片を含む
12. 黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルトで、少量の粗粒砂と腐植を非常に多く含む
13. 灰色(N7/0)粘土質シルトで、粗粒砂をブロック状に含む



#### 遺構埋土

1. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂で、焼土・炭化物・瓦・焼けた木材を多く含む

図126 SK-212



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

を多く含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗2, 皿5, 細片2), 土師質土器片16点, 土師器片1点, 木製品漆器碗1点がみられ, 唐津系灰釉陶器や志野焼が出土している。図示した遺物は2004~2006である。2004は4層から出土した唐津系灰釉陶器碗で, 口鏝を施す。2005は11層から出土した肥前産の絵唐津波縁皿で, 見込に鉄錆による鳥文がみられる。2006は12層から出土した木製品漆器碗で, 外面は黒塗, 内面は赤塗で, 高台内には「N」形の刻書がみられる。

SK-212(遺構: 図126 遺物: 図127)

SK-211の東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.75m, 短径1.53m, 深さ95

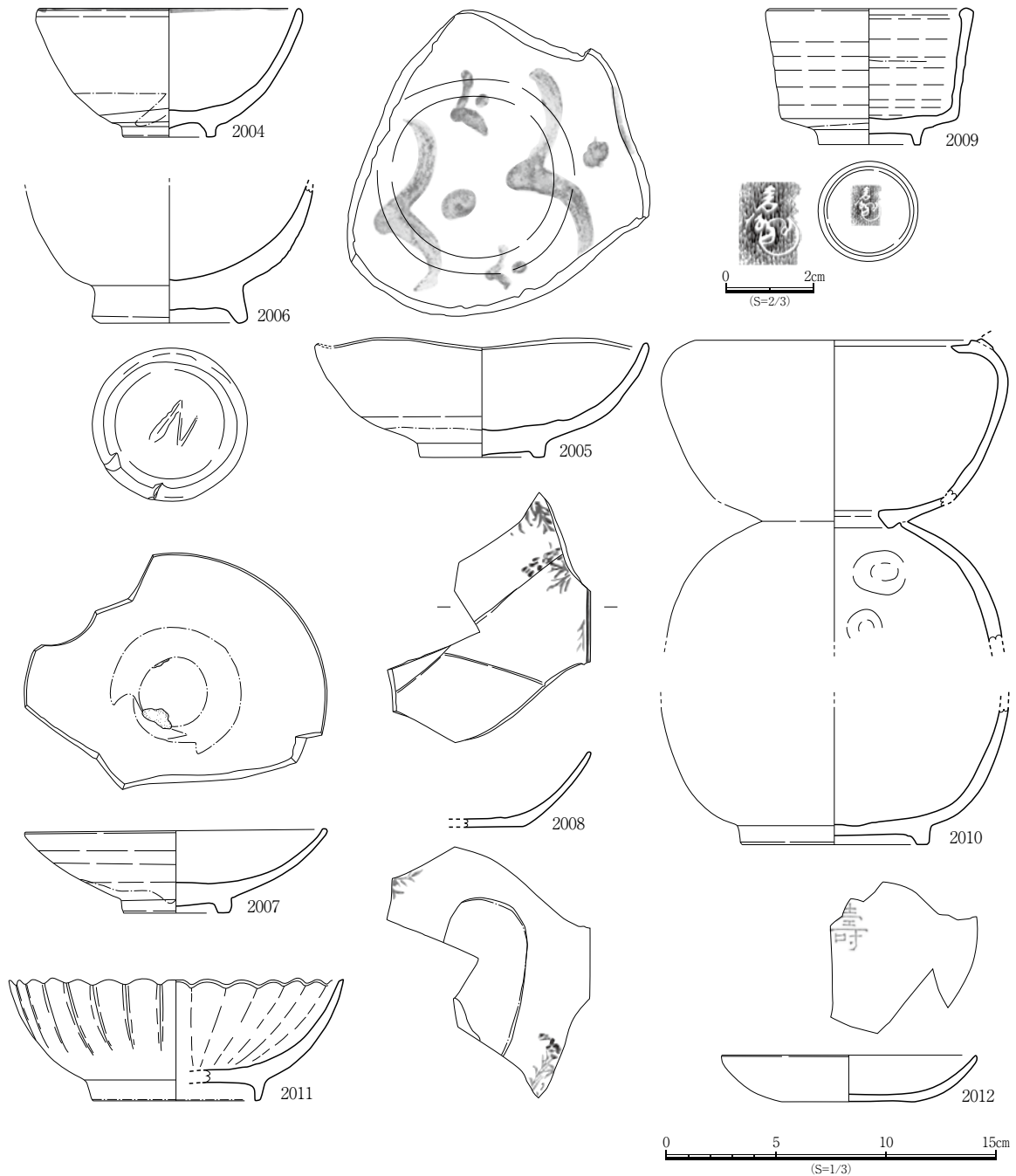


図127 SK-211・212出土遺物実測図

cmを測る。断面は箱形を呈し中央がやや深くなる。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で、焼土を多く含み、下層の一部は粘土化していた。また、埋土中の土坑縁辺部には径10cmを測る丸材が直立していた。出土遺物には陶器67点(碗1, 皿6, 蓋2, 匣鉢1, 壺2, 甕2, 水注1, 灯明受皿2, 細片50), 磁器36点(碗1, 皿5, 小杯1, 猪口2, 合子蓋1, 餌鉢1, 細片25), 尾戸窯の白土器皿1点, 土師器6点(火消し壺1, 細片5), 瓦3点(軒丸瓦1, 丸瓦2), 石製品石臼1点, 金属製品2点がみられた。図示した遺物は2007～2012である。2007は肥前内野山窯の緑釉皿で、内面は銅緑釉, 外面は透明釉を施す。見込は蛇ノ目釉ハギを行い、釉ハギ部分には砂目痕が残る。2008は陶器変形皿である。型打成形で、底部は楕円形, 口縁部は楕円形または方形を呈するものとみられる。全面に透明釉を施し、底部外面は釉ハギする。口鑄で内外面に呉須と鉄錆による植物文がみられる。京都または京都系とみられる。2009は陶器香炉または火入で、口縁部内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「清水」の刻印がみられる。2010は陶器水注とみられ、瓢形を呈する。蓋と注口・把手が付くものとみられる。全面に光沢のある灰釉を施し、壘付は釉ハギする。2011は磁器菊皿で、型打成形である。全面に光沢のある白磁釉を施し、壘付は釉ハギする。2012は白色系の土師質土器皿で、内面から体部外面に横方向のナデ調整、底部外面に回転削り調整を施す。見込には型押による陽刻の「寿」字がみられる。

#### SK-213

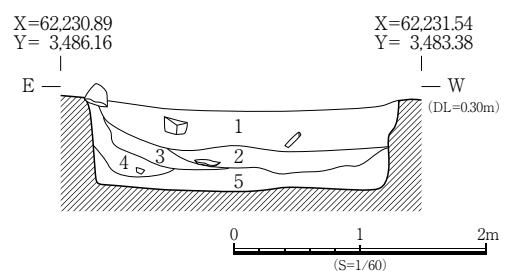
SK-212の南で確認した土坑で、SD-207に切られ、底で竹樋継手が出土したP-211を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径2.00m, 短径1.44m, 深さ10cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には磁器皿1点, 土師質土器小皿1点がみられた。

#### SK-214

SK-213の南で確認した土坑で、P-211を切り、東は調査区外へ続く。平面形態は溝状を呈し、検出長2.75m, 全幅0.63m, 深さ26cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器6点(碗1, 皿2, 細片3), 磁器5点(皿1, 細片4), 土師質土器36点(小皿6, 細片30), 土師器焙烙1点がみられた。

#### SK-215(遺構: 図128 遺物: 図129)

SK-214の南で確認した土坑で、平面形態は長方形を呈し、長辺2.27m, 短辺1.60m, 深さ56cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と多量の腐植を含んでいた。出土遺物には陶器29点(碗1, 皿6, 向付4, 播鉢2, 植木鉢1, 匣鉢1, 細片14), 磁器10点(高杯1, 細片9), 土師質土器31点(皿5, 小皿6, 細片20), 瓦3点(丸瓦1, 平瓦2), 石製品砥石1点, 焼土塊がみられた。図示した遺物は2013～2015である。2013は最下層より出土した絵唐津大皿である。内面から体部外面まで灰釉を施し、内面には鉄錆による文様, 見込には砂目痕がみられる。2014・2015は上層より出土した志野焼向付である。底部には紐状の脚を貼付し、全面に長石釉を施す。内面には鉄錆による文様がみられる。



##### 遺構埋土

1. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土質シルトで、多量の1cm大の礫と少量の10cm大の礫を含む
2. 灰色 (N5/0) 粘土質シルトで、極粗粒砂を多く含む
3. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質砂で、中粒砂と多量の腐植を含む
4. 明緑灰色 (10G7/1) 粘土質シルト
5. 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質シルトで、木片と腐植を非常に多く含む

図128 SK-215

#### SK-216(遺物: 図129)

SK-215の南で確認した土坑で、SD-208に切られる。平面形態は不整形を呈し、長辺2.76m,

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

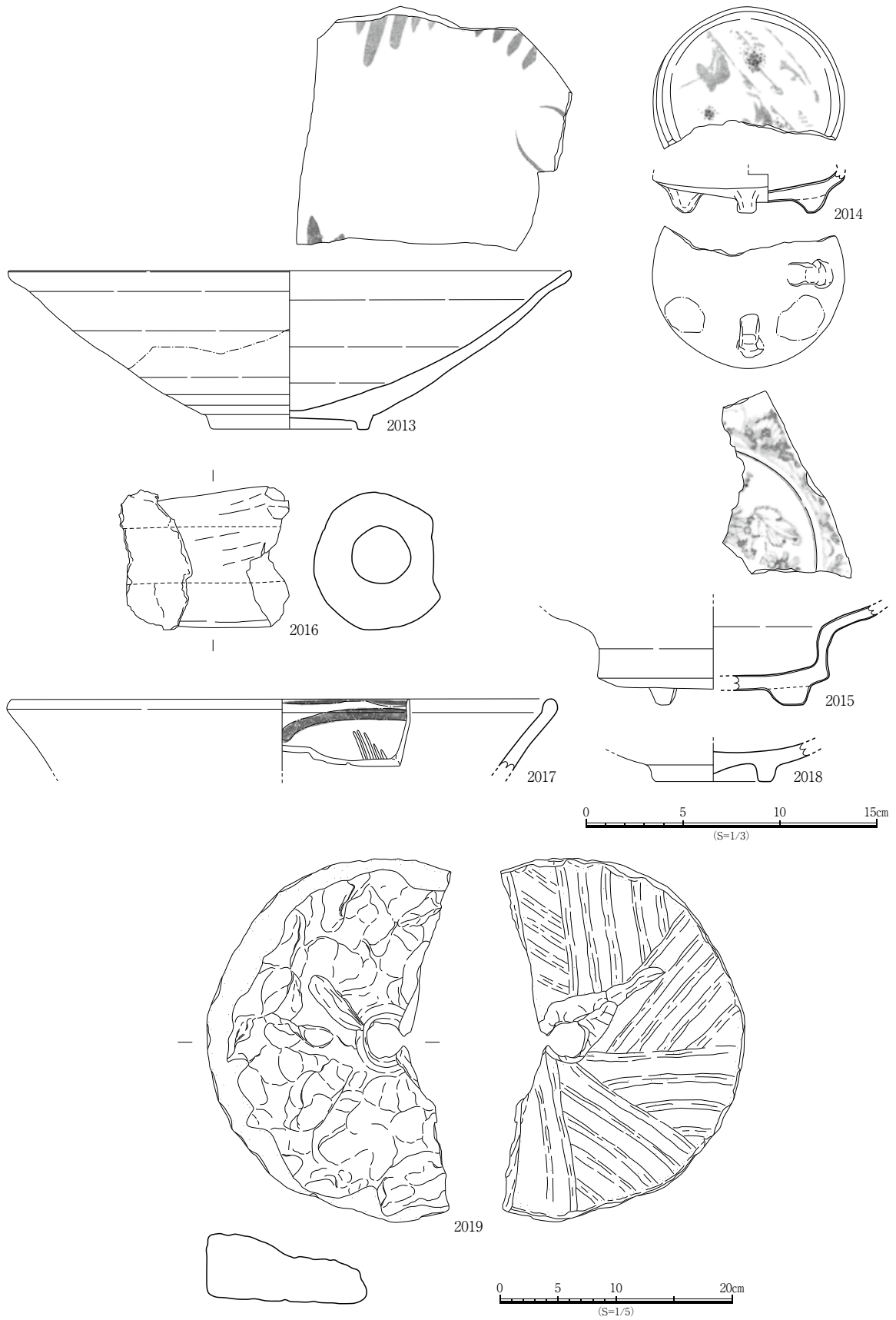


図129 SK-215・216・218～220出土遺物実測図

短辺2.47m, 深さ21cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器5点(皿2, 細片3), 土師質土器10点(杯1, 皿1, 細片8), 土師品フイゴの羽口1点, 平瓦1点がみられた。図示した遺物は2016で, 土師器フイゴの羽口である。外面は板ナデ調整で, 先端には鉄滓が付着する。図示した遺物の他に絵唐津皿が出土している。

**SK-217**

SK-216の東で確認した土坑で, SD-208を切り, 一部は他の遺構に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長2.75m, 全幅1.82m, 深さ24cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器7点(碗1, 皿2, 播鉢1, 壺1, 細片2), 土師質土器2点(皿1, 細片1), 銅製品煙管1点がみられ, 唐津系灰釉陶器碗や絵唐津皿, 備前焼小壺, 志野焼片が出土している。

**SK-218(遺物: 図129)**

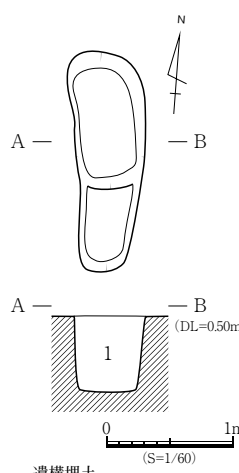
SK-217の南西で確認した土坑で, 平面形態は溝状を呈し, 全長4.41m, 全幅0.55m, 深さ8cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点(播鉢1, 細片1), 土師質土器片3点がみられた。図示した遺物は2017で, 肥前産の鉄釉播鉢である。回転ナデ調整で, 内面には播目, 口縁部内面から外面には鉄釉を施す。

**SK-219(遺物: 図129)**

B-1区南西部で確認した土坑で, 平面形態は隅丸方形を呈し, 全長3.11m, 検出幅1.18m, 深さ8cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器7点(碗2, 皿3, 細片2), 磁器片1点が出土している。図示した遺物は2018で, 唐津系灰釉陶器皿である。全面に灰釉を施したのち畳付を釉ハギしたものとみられる。見込には砂目痕が残る。図示した遺物の他に絵唐津片, 志野焼片も出土している。

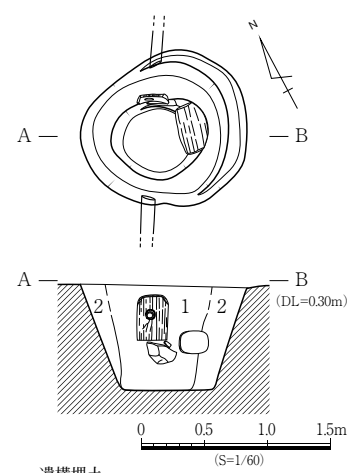
**SK-220(遺物: 図129)**

B-1区南部で確認した土坑で, 南は他の遺構に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.40m, 検出幅0.85m, 深さ30cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 播鉢1), 磁器皿1点, 土師質土器2点(小皿1, 細片1), 石製品石臼1点, 木製品曲物蓋1点が出土している。図示した遺物は2019で, 石製品石臼である。下臼で上面には八分画の播目, 中央には径約2.9cmの円孔が貫通する。下面は粗雑な加工痕が残る。図示した遺物の他に唐津系灰釉陶器碗も出土している。



遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と炭化物を多く含む

図130 SK-221



遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで, 1cm大の礫を多く含む  
2. 褐灰色(10YR6/1)砂質シルトで, 多量の1cm大の礫と少量の5~10cm大の礫を含む

図131 SK-222

**SK-221(遺構: 図130 遺物: 図132)**

SK-220の南で確認した土坑で, SD-215を切る。平面形態は楕円形を呈するものとみられ, 全長1.90m, 全幅0.65m, 深さ62cmを測る。断面は箱形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 多量の0.5~2cm大の

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1), 磁器2点(鉢1, 細片1), 土師質土器片2点が見られる。図示した遺物は2020・2021である。2020は唐津系灰釉陶器碗で, 内面から体部外面まで灰釉を施す。2021は肥前産の青磁鉢で, 全面に青磁釉を施し, 高台内を蛇ノ目釉ハギしたのち錆釉を施す。外面には陽刻の算木文, 口縁部内面は陽刻の唐草文, 見込にはスタンプによる花文と陰刻の花文が見られる。

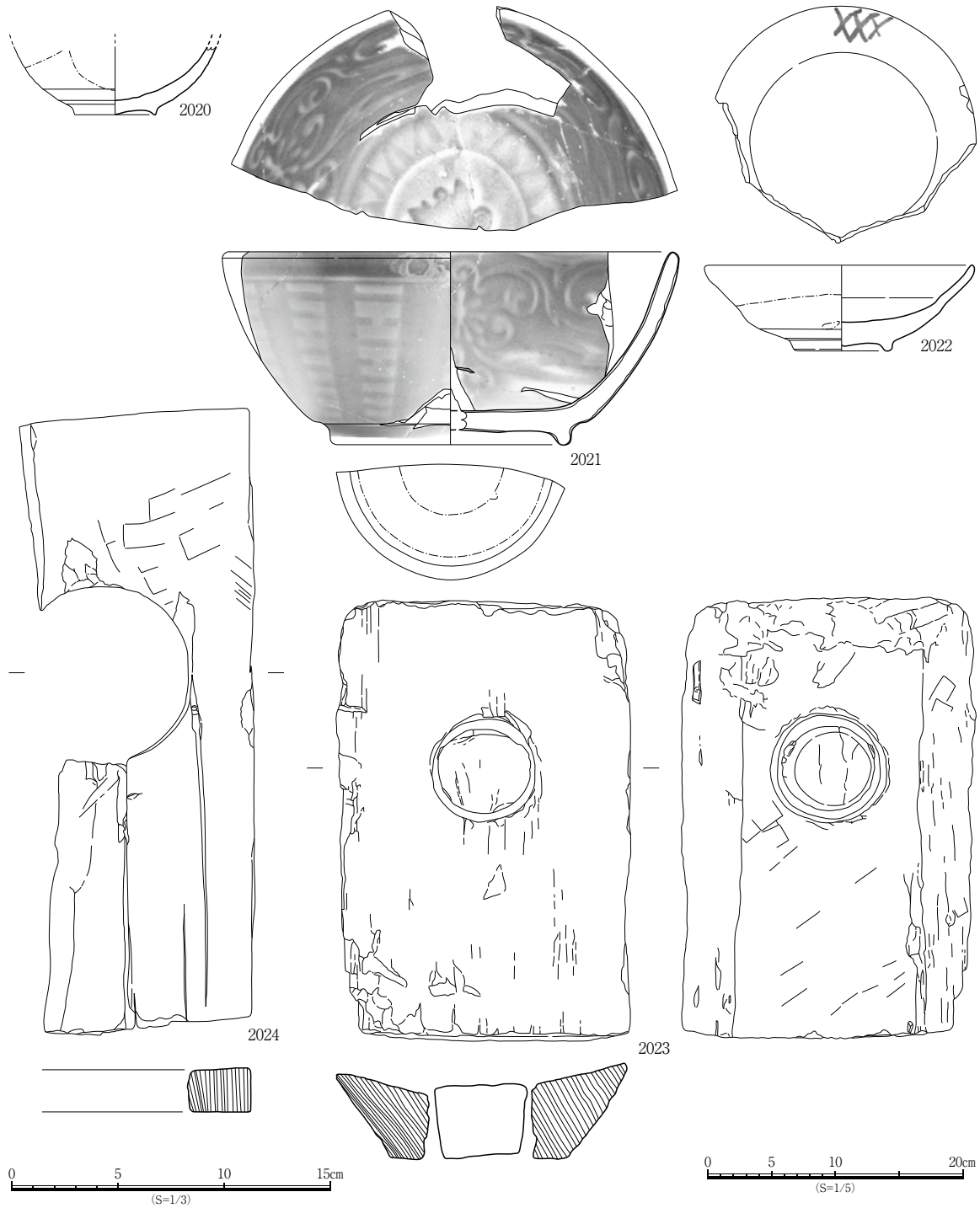


図132 SK-221・222出土遺物実測図

SK-222(遺構：図131 遺物：図132)

B-1区南東部で確認した土坑で、集水桶を設置したとみられる上水施設である。掘方の平面形態は円形を呈し、径1.22m、深さ95cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色砂質シルトで、多量の1cm大の礫と少量の5～10cm大の礫を含んでいた。掘方のほぼ中央には桶が埋設されていたとみられるが損失し残存していなかったものの、桶の外側に存在したと考えられる板状を呈する竹樋との継手と止水栓を確認した。桶が存在したとみられる部分は楕円形を呈し、長径77cm、短径66cmを測り、埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫を多く含んでいた。板状の継手は遺構の北東部に位置し、25cm大の石の上に直立するように設置されていた。継手には円形の孔があり、木製の栓が残存していた。栓の奥には竹樋が繋がっており、北東方向(N-32°-E)へ1.90m伸び、竹樋は一部消失して空洞となっており、竹樋の痕跡が残る部分を含め検出長は2.68mを測り、北端は攪乱を受けていた。竹樋は径5cmを測り、桶側(0.100m)から北端(0.068m)へ傾斜している。またこの竹樋のほぼ対角になる位置にも南西方向(N-31°-E)へ伸びる竹樋を確認しており、7.57m伸びた先には竹樋と竹樋を繋ぐ継手があり、さらに南方向(N-2°-E)へ方向を変え竹樋が7.47m伸び、調査区外へと続いていた。竹樋の標高は集水桶(0.094m)から継手(0.102m)、南端部(0.046m)へと僅かに傾斜しており、北から南へと水を流していたとみられる。竹樋は径6cmを測り、掘方は他の遺構では確認できている部分もあるが、本遺構では確認できておらず、竹と竹を繋いだ痕跡も確認できていない。南へ伸びる竹樋はSD-215の埋土上で確認しており、18世紀前葉頃に機能していたとみられる。出土遺物には陶器16点(碗3、皿6、甕1、細片6)、磁器29点(碗6、皿2、瓶1、細片20)、土師質土器4点(小皿1、細片3)、土師器片1点、瓦2点(丸瓦1、平瓦1)、木製品継手2点がみられた。南の竹樋の下からは2021の磁器鉢の破片が出土している。図示した遺物は2022～2024である。2022は掘方より出土した絵唐津皿である。内面から体部外面に灰釉を施し、口縁部内面には鉄錆による文様がみられる。2023・2024は木製品で、集水桶と竹樋を繋ぐ板状の継手とみられる。2023は板状を呈し、上部に径8.3cmの円孔がみられる。円孔には径7.2cmを測る栓が入っていた。断面は台形を呈し、僅かに湾曲する。外面には加工痕と背面から釘を打った痕跡が残る。2024は板状を呈し、上部に径8.3cmの円孔がみられる。断面は台形を呈し、僅

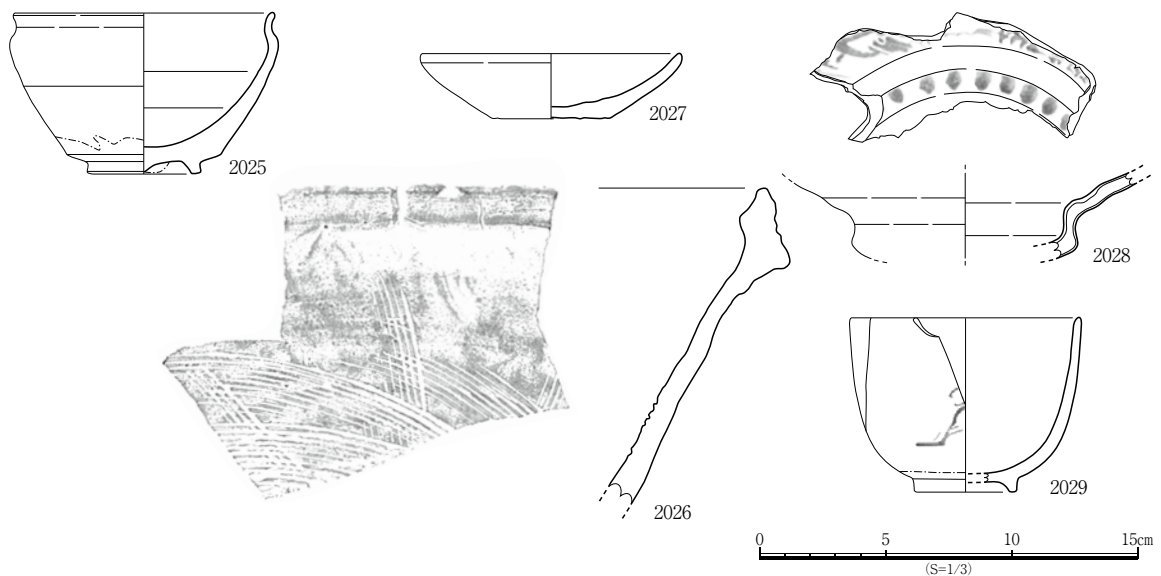


図133 SK-223～225出土遺物実測図



かに湾曲する。円孔右下の2箇所に釘孔がみられる。

**SK-223**(遺物: 図133)

SK-222の南で確認した土坑で、P-223に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径1.98m、短径1.90m、深さ52cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、多量の0.5~2cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗2, 播鉢1), 磁器碗1点, 土師質土器4点(皿2, 小皿1, 細片1)がみられる。図示した遺物は2025~2027である。2025は唐津系灰釉陶器天目形碗で、P-215から出土した破片と接合した。天目形で、内面から高台付近まで灰釉を施す。2026は備前焼播鉢で、回転ナデ調整のち内面に縦方向のち斜方向の播目を施す。2027は土師質土器皿である。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

**SK-224**(遺物: 図133)

SK-223の東で確認した土坑で、SD-213に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.78m、短辺0.89m、深さ53cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 皿1, 向付1, 細片2), 磁器2点(皿1, 鉢1), 土師質土器7点(小皿2, 細片5)がみられる。図示した遺物は2028で志野焼向付である。全面に長石釉を施し、内面には鉄錆による文様がみられる。

**SK-225**(遺物: 図133)

SK-224の北で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.95m、深さ35cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5~5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗2, 鉢1, 細片2), 磁器2点(壺1, 仏飯器1)がみられた。図示した遺物は2029で尾戸窯の陶器丸碗である。内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による梅文がみられる。

**SK-226**

SK-224の北東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径2.07m、短径1.52m、深さ52cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、多量の1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿1, 鉢1, 細片4), 磁器片1点, 土師質土器片2点がみられ、唐津系灰釉陶器も出土している。

**SK-227**(遺物: 図134)

SK-226の北東で確認した土坑で、SK-228に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径2.26m、短径1.25m、深さ39cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物と多量の木片を含ん

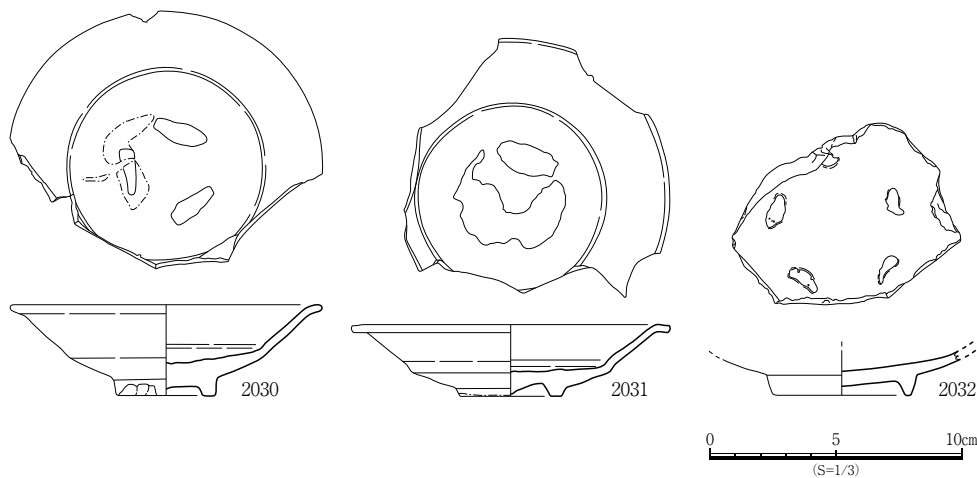


図134 SK-227・228出土遺物実測図

でいた。出土遺物には陶器皿3点、土師質土器皿1点、木製品2点(曲物蓋1, 建築材1), 貝がみられた。図示した遺物は2030で唐津系灰釉陶器皿である。高台まで灰釉を施し, 見込には砂目痕が残る。

SK-228(遺物: 図134)

SK-227の東で確認した土坑で, SK-227を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径3.00m, 短径1.50m, 深さ22cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(皿3, 細片1), 磁器片1点がみられた。図示した遺物は2031・2032である。2031は唐津系灰釉陶器溝縁皿で, 畳付と高台内の一部にも灰釉が掛かる。見込と畳付に砂目痕が残る。2032は肥前内野山窯の陶器皿で, 全面に透明釉を施し, 見込には砂目痕が残る。

SK-229

SK-227の南で確認した土坑で, SX-212を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺4.74m, 短辺1.82m, 深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器11点(碗1, 皿3, 播鉢1, 細片6), 磁器12点(碗2, 細片10), 土師質土器片8点, 平瓦4点がみられ, 唐津系灰釉陶器が出土している。

SK-230(遺構: 図135)

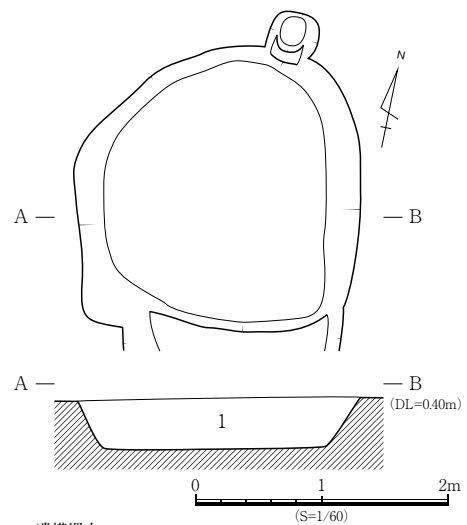
SK-229の南で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し, 長径2.32m, 短径2.28m, 深さ44cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(鉢1, 細片2), 磁器片1点, 骨片がみられた。

SK-231(遺物: 図137)

SK-230の北東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し, 長径2.58m, 短径1.36m, 深さ37cmを測り, 埋土は黄灰色シルト質砂で, 0.5~5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器17点(皿7, 細片10), 磁器14点(碗1, 猪口1, 段重1, 鉢1, 細片10), 土師質土器5点(皿1, 小皿1, 細片3), 土師器焼塩壺1点, 丸瓦1点, 石製品石臼1点, 鉄滓がみられた。図示した遺物は2033・2034である。2033は土師器焼塩壺で, 輪積成形である。調整はナデで, 内面には指頭圧痕が残る。2034は砂岩製の石臼で, 上臼である。中央に円孔, 下面には播目がみられる。

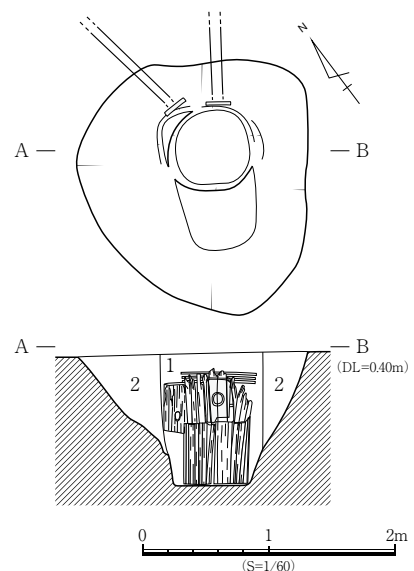
SK-232(遺構: 図136 遺物: 図137)

B-1区南東部で確認した土坑で, 集水桶を設置した上水施設である。掘方の平面形態は不整楕円形を呈し, 長径1.98m, 短径1.84m, 深さ1.20mを測る。掘方の埋土は黄灰色砂質シルトで粘性は弱く, 1~8cm大の礫を非常に多く含んでいた。掘方のやや北寄りには桶が埋設されており, 桶は2段重ねて使用



遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂で, 橙色(5Y6/8)シルト質砂のブロックと0.5~2cmの礫と炭化物を多く含む

図135 SK-230



遺構埋土  
1. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト  
2. 黄灰色(2.5Y3/1)砂質シルトで, 粘性は弱く1~8cm大の礫を非常に多く含む

図136 SK-232

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

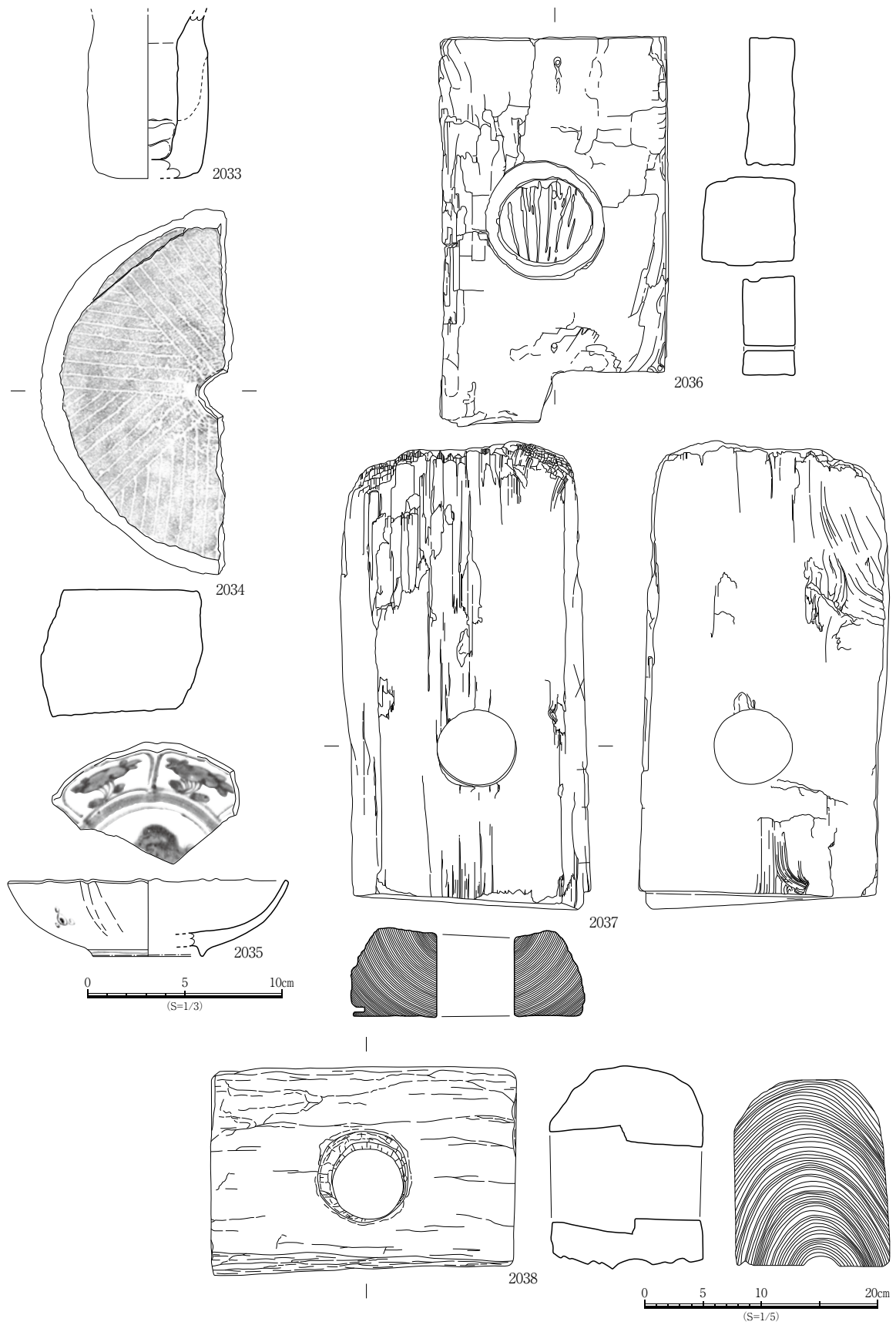


図137 SK-231・232出土遺物実測図

し上の桶はタガの痕跡も残存していた。桶は円形を呈し、径58cmを測り、埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫を多く含んでいた。桶内の埋土は黒褐色シルトで、埋土中からは径約20cmを測る小型の曲物も出土している。桶の外側からは板状を呈する桶と竹樋を繋ぐ継手を2枚確認した。板状の継手は遺構の北部と北東部に位置し、直立するように設置されており、北東部の継手は上の桶に接するように設置され、上の桶のやや高い部分に位置していた。継手には円形の孔があり、北東部の継手には木製の栓が残存していた。栓の奥には竹樋が設置されていたとみられる空洞が北東方向(N-34°-E)へ3.30m伸びていた。竹樋の径は不明であるが径8cmの空洞が残存していた。この空洞の標高は北東端(0.050m)から桶側(-0.055m)へ傾斜しており、取水に用いた竹樋とみられる。北側の継手は桶より25cm外側に位置し、北東部の継手の円孔の標高(-0.055m)に比べ15cm低く(-0.202m)設置されていた。この継手には栓が残存していなかったが、継手の奥には径6cmを測る竹樋が北西方向(N-11°-W)へ伸びており、SD-210へと繋がり検出長は14.19mを測る。桶からは5.65m伸びた後、竹樋と竹樋を繋ぐ継手があり、さらに竹樋が8.15m伸びた先には継手があり、さらに竹樋を22cm検出し、調査区外へと続いていた。この竹樋の標高は集水桶(-0.202m)から継手(-0.218m)、SD-210の継手(-0.273m)へと傾斜しており、南から北へと水を流していたとみられる。

出土遺物には陶器10点(碗5, 皿2, 播鉢1, 細片2), 磁器9点(碗1, 皿1, 小杯1, 瓶2, 細片4), 土師質土器片2点, 平瓦3点, 木製品継手3点がみられた。図示した遺物は2035～2038である。2035は桶埋土から出土した肥前有田産の磁器染付輪花皿である。外面には宝文と圏線, 内面には区画内に花卉文の染付がみられる。2036・2037は木製品集水桶と竹樋を繋ぐ板状の継手である。2036は北東部へ伸びる竹樋に繋がっていた。下部の右隅を切り取る。中央に径10.3cmの円孔があき、円孔には径7.6cmを測る栓が入っていた。断面は台形を呈し、僅かに湾曲する。円孔の上下には釘孔がみられ、集水桶に打ち付けていたものとみられる。2037は北へ伸びる竹樋に伴っていた。中央よりやや下方に径6.5cmの円孔があく。断面は台形を呈し、片面は僅かに湾曲する。側面に「×」の刻書が残る。2038は桶より北へ5.65mの地点で出土した継手である。平面形態は方形で、断面は半楕円形を呈する。側面中央には両面より穿孔した円孔がみられ、径6.3～9.2cmを測る。側面は切断面で、下面は割れた様な痕跡がみられ凸凹な面をなす。上端は表皮に近い部分とみられ未加工である。

#### SK-233

SK-232の南で確認した土坑で、SK-232を切る。一部は他の遺構に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、一辺70cm、深さ21cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器播鉢1点、磁器小杯1点、土師質土器3点(皿2, 小皿1)がみられた。

#### SK-234

SK-233の南西で確認した土坑で、SK-235に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、検出長2.31m、検出幅0.95m、深さ18cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器8点(皿1, 細片7)がみられ、絵唐津片が出土している。

#### SK-235(遺物:図139)

SK-234の東で確認した土坑で、SK-234を切り、平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長1.78m、短径1.44m、深さ24cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器7点(碗1, 皿1, 蓋1, 瓶1, 鉢1, 細片2), 磁器6点(碗1, 細片5), 土師質土器14点(皿3, 小皿6, 細片5)がみられた。図示した遺物は2039で唐津系灰釉陶器溝縁皿である。内面

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

から口縁部外面まで灰釉を施し、見込には砂目痕が残る。

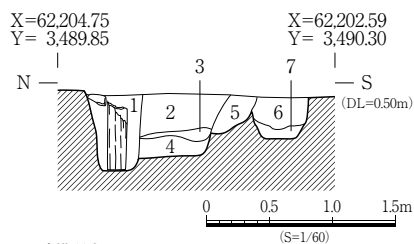
SK-236(遺構：図138 遺物：図139)

SK-235の南で確認した土坑で、東はSK-237に切られる。平面形態は溝状を呈し、検出長2.29m、検出幅0.60m、深さ32cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層が褐灰色シルト質砂、下層が黄灰色シルトであった。出土遺物には陶器片3点、土師質土器片1点、軒丸瓦1点がみられた。図示した遺物は2040で軒丸瓦である。瓦当には三ツ葉柏文がみられ、凸面は縦方向のナデ調整、凹面はコビキBとナデ調整で布目痕が僅かに残る。

SK-237

SK-236の東で確認した土坑で、SK-236とSD-215を切る。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長2.73m、検出幅1.82m、深さ33cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、多量の0.5～2cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1、細片4)、土師質土器片1点がみられ、唐津系灰釉陶器が出土している。

SK-238(遺物：図139)



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂で、礫と多量の炭化物を含む(ピット)
  2. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土で、礫と少量の炭化物を含む(SD-315)
  3. にぶい黄橙色(10YR6/3)中粒砂(SD-315)
  4. 黄灰色(2.5Y6/1)粘土質シルトで、中粒砂と礫・炭化物を含む(SD-315)
  5. 褐灰色(10YR6/1)シルト質砂で、多量の礫と炭化物を含む(溝跡)
  6. 褐灰色(10YR5/1)シルト質砂で、淡赤橙色(2.5YR7/4)砂質シルトがブロック状に多く混じり、少量の礫を含む(SK-236)
  7. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト(SK-236)

図138 SK-236, SD-315

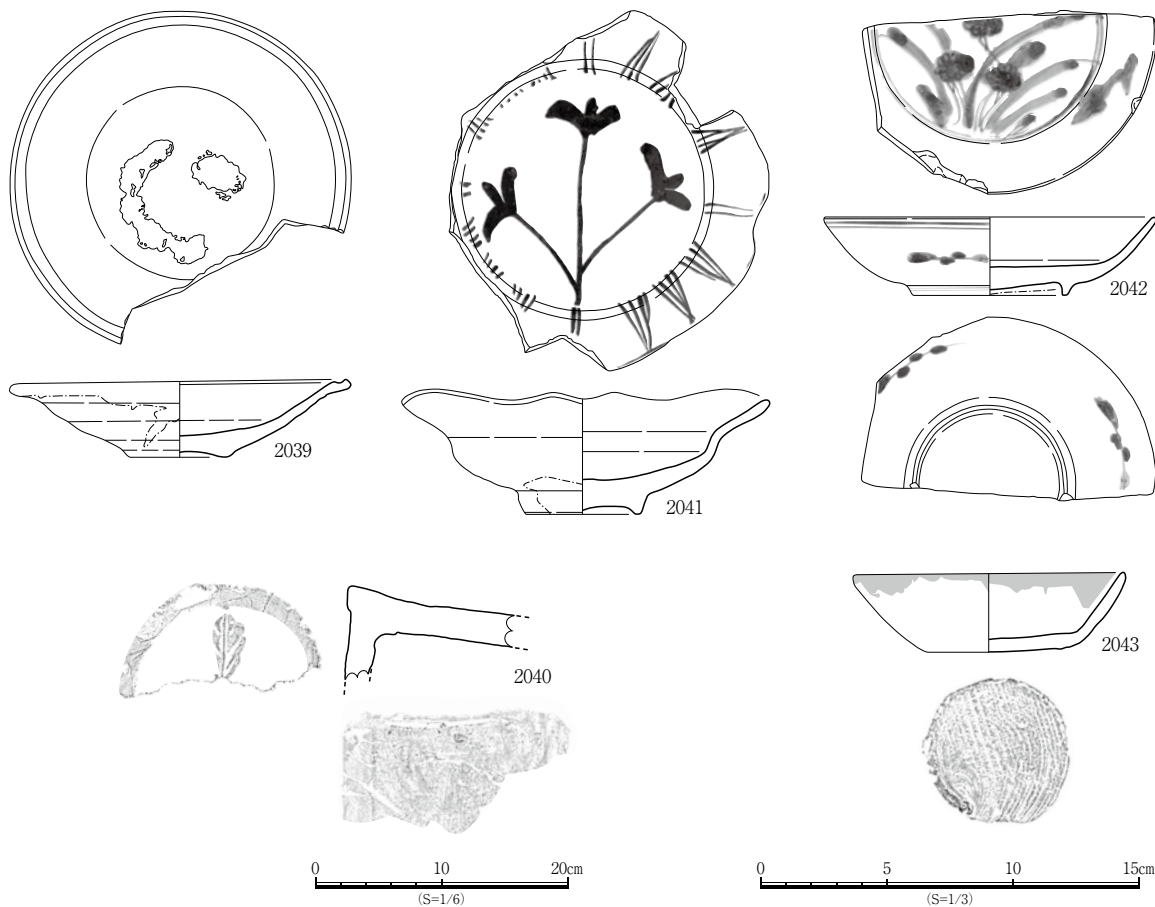


図139 SK-235・236・238・239出土遺物実測図

SD-215の埋土上で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し、全長2.57m、幅0.33～0.54m、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器24点(碗4, 皿5, 播鉢5, 細片10), 磁器15点(皿3, 蓋1, 瓶1, 細片10), 土師質土器11点(杯3, 細片8), 土師器片2点, 銅製品煙管1点がみられた。図示した遺物は2041・2042である。2041は絵唐津波縁皿で、内面から高台付近まで灰釉を施す。釉は灰オリーブ色に発色する。内面には鉄錆による草花文がみられる。2042は肥前産の磁器染付皿で、外面には梅文と圏線, 内面は草花文の染付がみられる。

SK-239(遺物: 図139)

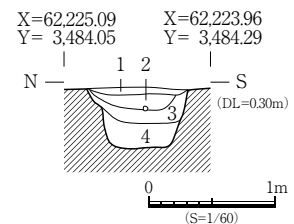
SK-238の東で確認した土坑で、SD-215を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径は1.70m、短径1.14m、深さ45cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の黄色礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点, 磁器片1点, 土師質土器5点(杯1, 皿1, 細片3)がみられた。図示した遺物は2043で土師質土器皿である。回転ナデ調整のち底部内面にナデ調整を加え、底部の切り離しは回転糸切り調整で板状圧痕が残る。口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用したものとみられる。

SD-206

B-1区北西部で確認した東西溝跡で、SK-207に切られる。検出長5.65m、全幅0.45m、深さ7cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿1, 細片2), 磁器2点(皿1, 杯1), 土師質土器片5点がみられ、唐津系灰釉陶器が出土している。

SD-207

B-1区北東部で確認した東西溝跡で、竹樋が埋設されていた。SK-213を切る。竹樋はP-211に埋設された継手と繋がり、東端は調査区外へ続く。掘方は検出長1.76m、全幅0.27m、深さ11cmを測る。竹樋は南東方向(N-69°-W)へ伸び、底面の標高は継手(0.269m)と東端(0.268m)がほぼ水平であった。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。



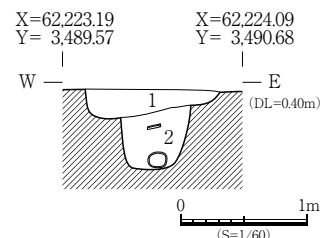
遺構埋土

1. 黄灰色(25Y5/1)シルト質中粒砂で、0.5cm大の礫を少し含む
2. 灰色(N6/0)砂質シルトで、少量の1cm大の礫と炭化物を含む
3. 黄灰色(25Y6/1)粘土質シルト
4. 灰色(5Y5/1)粘土質シルトで、少量の0.5cm大の礫と木片を含む

図140 SD-208

SD-208(遺構: 図140 遺物: 図142)

B-1区東部で確認した東西溝跡で、竹樋が埋設された溝跡であるSD-210とP-213に切られる。検出長10.65m、全幅0.80m、深さ48cmを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は4層に分かれる。出土遺物には陶器10点(皿4, 向付1, 播鉢2, 壺1, 甕1, 細片1), 青花碗1点, 白磁皿1点, 土師質土器11点(杯2, 皿2, 細片7), 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2044～2046で、いずれも上層から出土した。2044は絵唐津で、向付または沓茶碗とみられる。全面に灰釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。2045は中国景德鎮窯系の青花碗で、畳付を除き透明釉を施す。見込に染付, 高台内外面には圏線の染付を描く。高台内に鈷痕がみられる。2046は土製品人形で、馬形を呈する。型成形で、下面には円孔がみられる。



遺構埋土

1. 灰色(N6/0)粘土質シルトで、1cm大の礫と焼土を少し含む(SX-323)
2. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粗粒砂で、1cm大の礫と炭化物・焼土を多く含む(SD-210)

図141 SD-210, SX-323

SD-209

SD-208の南で確認した南北溝跡で、他の遺構に切られる。検出長3.08m、全幅0.92m、深さ14cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで、1cm



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

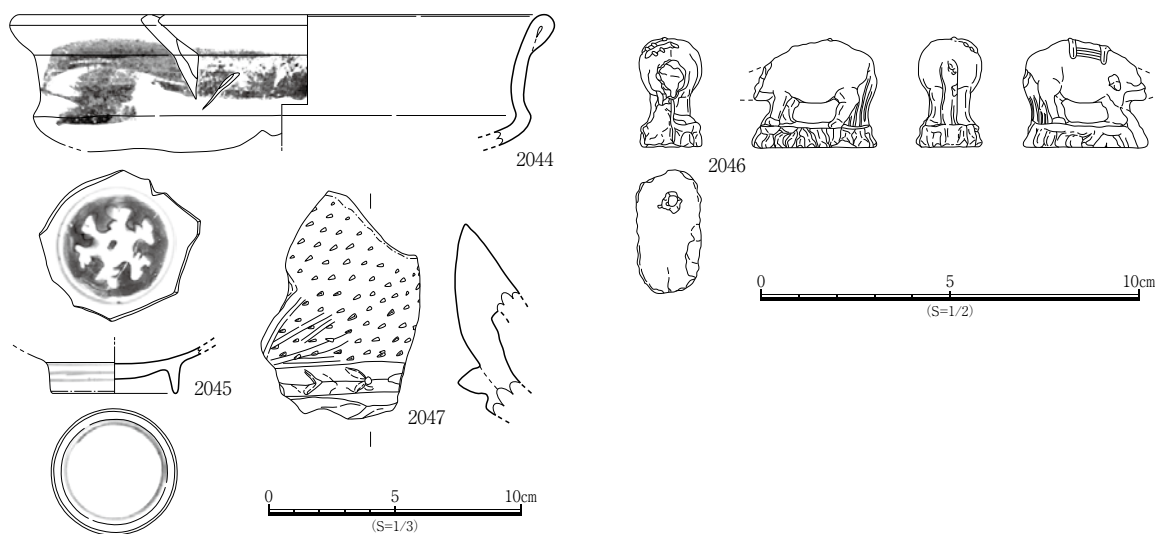


図142 SD-208・212出土遺物実測図

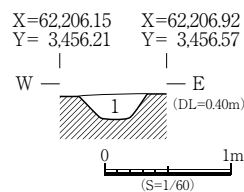
大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器8点(皿2, 灯明受皿1, 細片5), 磁器片2点, 土師質土器7点(小皿5, 細片2)がみられ, 唐津系灰釉陶器が出土している。

SD-210(遺構: 図141)

SD-209の東で確認した南北溝跡で, SD-208を切る。竹樋が埋設されていた溝跡で, 集水桶が埋設されたSK-232に繋がるが, 南部は掘方が不明瞭であった。検出された竹樋は14.19mを測り, 2箇所継手が設置され, 南の継手で竹樋の方向を若干変えている。掘方は全幅54cm, 深さ67cmを測り, 断面は箱形を呈し, 底面に竹樋が埋設されていた。埋土は灰黄褐色シルト質粗粒砂であった。出土遺物には陶器3点(皿1, 細片2), 磁器2点(碗1, 皿1), 土師質土器片1点, 鉄釘1点がみられ, 初期伊万里の皿が出土している。

SD-211(遺構: 図143)

B-1区西部で確認された南北溝跡で, 北は攪乱に切られる。屋敷境の溝跡とは方向が大きく異なり, 北西から南東方向(N-66°-W)へ伸びる。検出長は15.91m, 全幅0.45m, 深さ13cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を少量含んでいた。出土遺物には陶器5点(壺1, 細片4), 土師質土器5点(皿2, 細片3), 瓦質土器片1点がみられた。

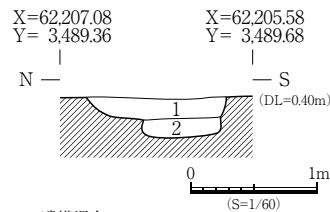


遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで, 粘性は強く1cm大の礫と炭化物を少し含む

図143 SD-211

SD-212(遺物: 図142)

B-1区南東部で確認された南北溝跡で, 南はSD-214に切られる。検出長は8.15m, 全幅0.50m, 深さ16cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで, 多量の1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿1, 搗鉢1, 人形1, 細片3), 磁器6点(碗2, 皿1, 細片3), 土師器片1点, 平瓦1点, 骨片がみられた。図示した遺物は2047で尾戸窯の陶器人形とみられる。鳥形とみられ中空で, 外面は強いヘラナデと工具の刺突により羽を表現しているものとみられ, 内面は無釉で粗雑なナデ調整の痕が顕著に残る。外面には灰釉を施す。



遺構埋土  
1. 黄灰色(25Y5/1)シルト質細粒砂で, 礫と炭化物を含む(SD-213)  
2. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂で, 黄色礫と炭化物を含む(SD-214)

図144 SD-213・214

SD-213(遺構: 図144・145 遺物: 図146)

B-1区南東部で確認した東西溝跡で、SD-507の底で検出した。検出長19.77m、幅1.29~1.99m、深さ19~40cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、礫と炭化物を含んでいた。また、両肩には石積が確認されている。南肩の石積は丸太材3本並べた内側を木杭で固定した上に石を2段積んでいた。北肩は胴木がみられず、残存状況が良好な箇所では石を4段積み、木杭も僅かにみられた。石は30~50cm大の石灰岩が多く、僅かにチャートと砂岩もみられた。石積高は74cm、裏込幅は50cmを測る。SD-213の上には近代にSD-507が作られ、昭和期には碎石とヒューム管が埋設されており、上部が

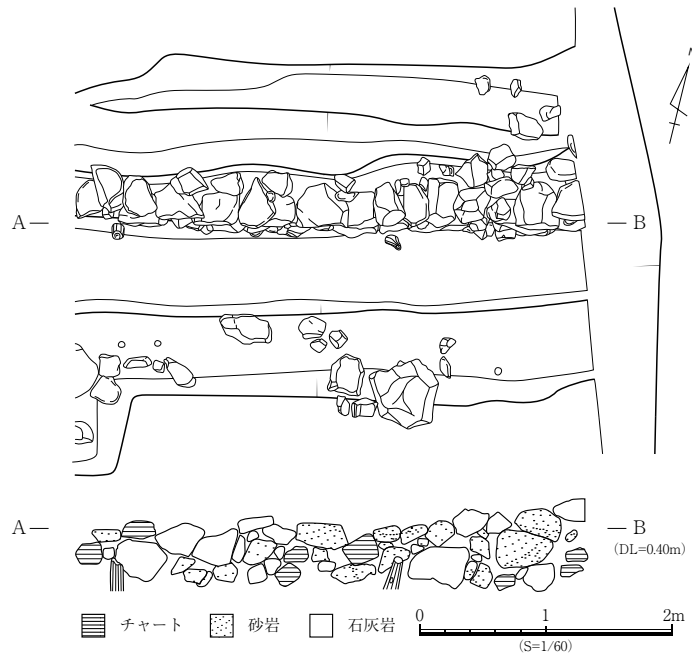


図145 SD-213平面・立面図

削平された可能性もあり、SD-213の石積が4段以上存在したものとみられる。出土遺物には陶器22点(碗2, 皿1, 播鉢1, 人形1, 細片17), 磁器32点(碗1, 皿1, 蓋2, 小杯1, 鉢1, 細片26), 青磁壺1点, 土師質土器419点(小皿119, 細片300), 土製品土錘1点, 石製品石臼1点, 平瓦1点, 骨がみられた。土師質土器の

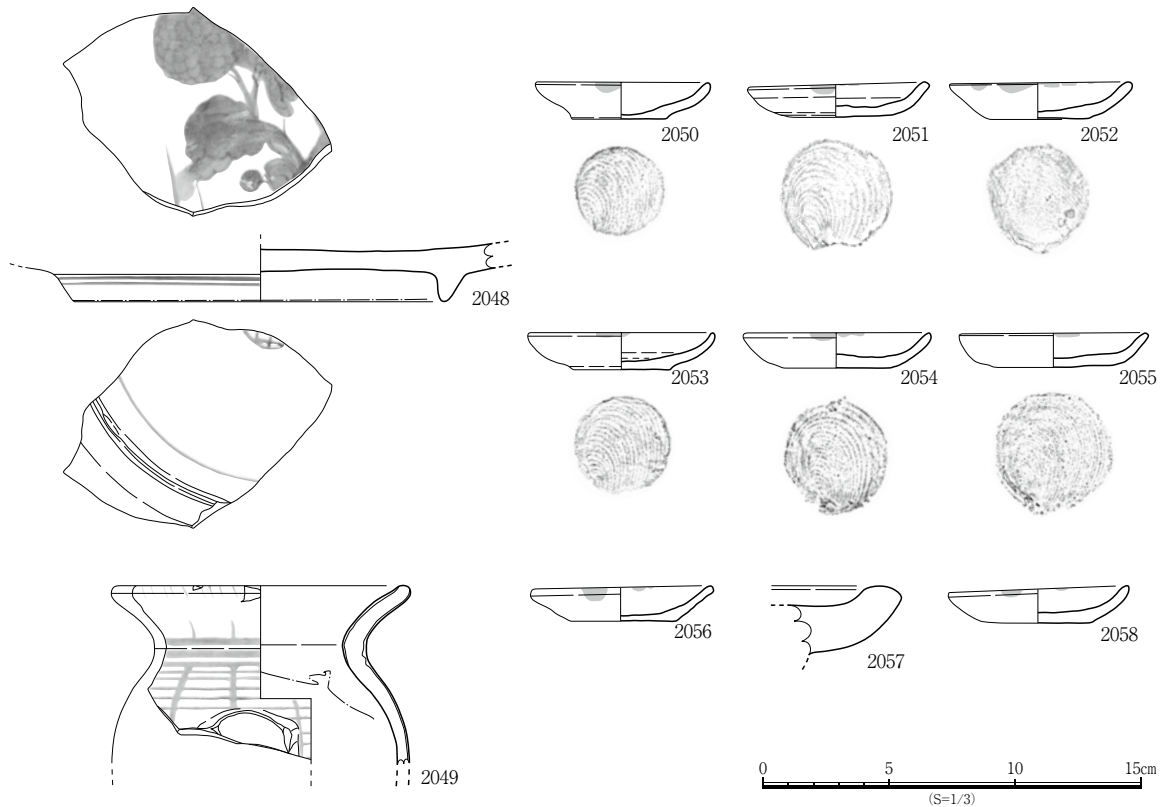


図146 SD-213・214出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

小皿が纏まって出土している。図示した遺物は2048～2057で、いずれも埋土中から出土した。2048は肥前有田産の磁器染付中皿で、外面には圈線、見込には菊文の染付がみられる。2049は肥前産の青磁香炉とみられ、胴部外面に把手の剥離痕が残る。頸部内面から外面には青磁釉を施し、口縁端部には刻目状、胴部外面には格子状の陰刻による文様がみられる。2050～2056は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用したものとみられる。2057は石製品茶臼の下臼とみられ、浅い皿状を呈する。全面を研磨し、端部は細く仕上げる。図示した遺物の他に備前焼播鉢などが出土している。

SD-214(遺構：図144 遺物：図146)

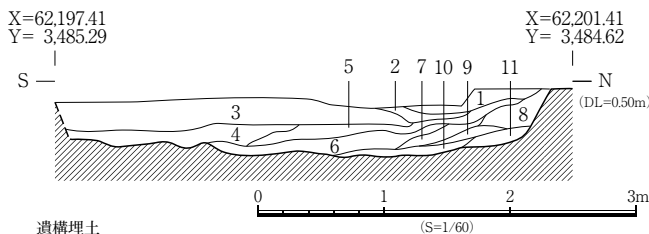
SD-213の底で確認した東西溝跡で、東は調査区外へ続く。検出長20.92m、幅0.42～0.60m、深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、黄色礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器18点(碗1, 鉢2, 播鉢1, 細片14), 磁器43点(碗2, 皿8, 鉢1, 細片32), 土師質土器小皿3点, 瓦9点(丸瓦5, 平瓦4), 鹿角がみられた。図示した遺物は2058

で土師質土器小皿である。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用したものとみられる。図示した遺物の他に唐津系灰釉陶器碗や備前焼播鉢が出土している。

SD-215

(遺構：図147 遺物：図148～155)

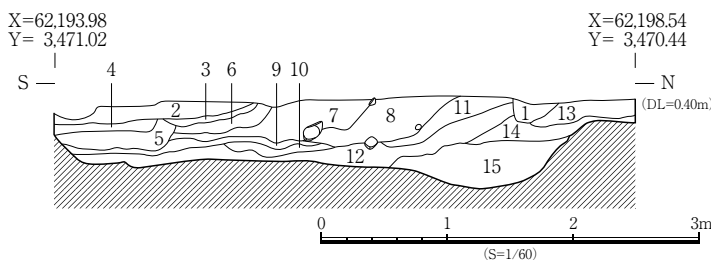
B区南端で確認した東西方向の大溝で、西は屋敷境の溝跡であるSD-201に繋がり、東は調査区外へ続く。SD-201との切り合い関係はなく、同時に存在していた時期があるとみられる。検出長は46.41m、検出幅5.25m、深さ47.2mを測る。底面の標高は東(-0.082m)と西(-0.072m)がほぼ水平になっている。埋土は多層に分かれ、シルト質砂または砂質シルトが多く、礫と木片を多量に含んでおり、また北側から埋没していった様子が伺える。陶磁器や木製品などの出土遺物が非常に多く、また他の遺構よりも古墳時代から中世にかけての遺物が目立つ。古墳時代から中世にかけての遺物は溝底



遺構埋土

1. 灰白色(10YR7/1)シルト質細粒砂
2. 褐色(10YR6/1)礫質砂で、極粗粒砂と多量の礫を含む
3. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、粘性はやや強く少量の礫と炭化物を含む
4. 褐色(10YR5/1)シルト質極細粒砂で、粘性は弱く炭化物を含む
5. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、炭化物を含む
6. 灰色(5Y5/1)微粒砂質シルトで、炭化物を多く含む
7. 褐色(10YR5/1)粘土質シルトで、多量の細粒砂と炭化物を含む
8. 褐色(7.5YR6/1)粘土質シルト
9. 褐色(7.5YR6/1)細粒砂質シルト
10. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質細粒砂で、少量の礫と炭化物を含む
11. 灰白色(10YR7/1)粘土質シルトで、炭化物を少し含む

SD-215 東部セクション図



遺構埋土

1. 褐色(10YR6/1)シルト質中粒砂で、5mm大の礫を非常に多く含む
2. 褐色(2.5Y6/1)シルト質細粒砂で、黄色土を含む
3. 褐色(10YR6/1)細粒砂質シルトで、木片を多く含む
4. 灰色(N6/0)シルト質細粒砂で、黄色土を少し含む
5. 褐色(10YR6/1)シルト質中粒砂で、木片と炭化物を少し含む
6. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質中粒砂で、木片と炭化物を少し含む
7. 褐色(10YR6/1)中粒砂質シルトで、5mm大の礫と炭を少し含む
8. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂で、黄色の礫と3cm大の礫を少し含む
9. 褐色(10YR6/1)粗粒砂質シルトで、木片を非常に多く含む
10. 褐色(10YR6/1)シルト質粗粒砂で、5mm大と2～8cm大の礫を多く含む
11. 褐色(10YR5/1)シルト質中粒砂で、5mm大の礫を少し含む
12. 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルト
13. 褐色(10YR6/1)シルト質粗粒砂で、5mm大と2～8cm大の礫を多く含む
14. 黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂質シルト
15. 灰色(N5/1)シルト質細粒砂で、1cm大の礫を少し含む

SD-215 中央部セクション図

図147 SD-215

面の基盤層上で出土したものもあり、SD-215は古墳時代または古代・中世の溝跡または自然流路を整備して作られた可能性もある。特にSD-215西端の北肩部分の出土遺物は須恵器4点(蓋1, 甕3), 土師器7点(甕1, 釜1, 細片5), 土師質土器13点(杯4, 皿2, 小皿1, 細片6), 瓦器小皿1点, 瓦質土器片1点, 青磁碗1点, 陶器9点(皿3, 細片6), 木製品106点(漆器椀23, 漆器蓋8, 漆器折敷1, 漆器匙1, 漆器片8, 木簡20, 下駄11, 桶18, 蓋3, 栓2, 箸9, 櫛1, 調度品1)で江戸時代以前の遺物が大半を占めている。また, 地形の高い調査区北部にあった古墳時代または古代・中世の遺構を削平してSD-215を埋めた可能性も考えられる。

出土遺物には陶器274点(碗37, 皿80, 蓋5, 向付2, 瓶1, 鉢5, 播鉢25, 匣鉢2, 壺2, 甕10など), 磁器152点(碗33, 皿17, 蓋2, 小杯6, 合子1, 合子蓋1, 段重蓋1, 瓶4, 鉢1, 植木鉢2など), 青花片1点, 青磁碗1点, 土師質土器164点(杯16, 皿26, 小皿16, 白土器1, 細片105), 土師器22点(椀1, 甕1, 釜1, 細片19), 須恵器17点(皿1, 蓋1, 壺1, 甕3, 細片11), 緑釉陶器皿1点, 瓦器1点, 瓦質土器4点(火鉢2, 細片2), 瓦13点(軒丸瓦5, 丸瓦3, 平瓦5), 土製品ミニチュア1点, 石製品砥石2点, 木製品91点(漆器椀20, 漆器蓋8, 漆器片6, 漆器匙1, 漆器折敷1, 箸9, 木簡19, 下駄11, 曲物3, 曲物蓋13, 栓1, 櫛1など), 金属製品5点(煙管1, 古銭1, 鉄釘2など)が

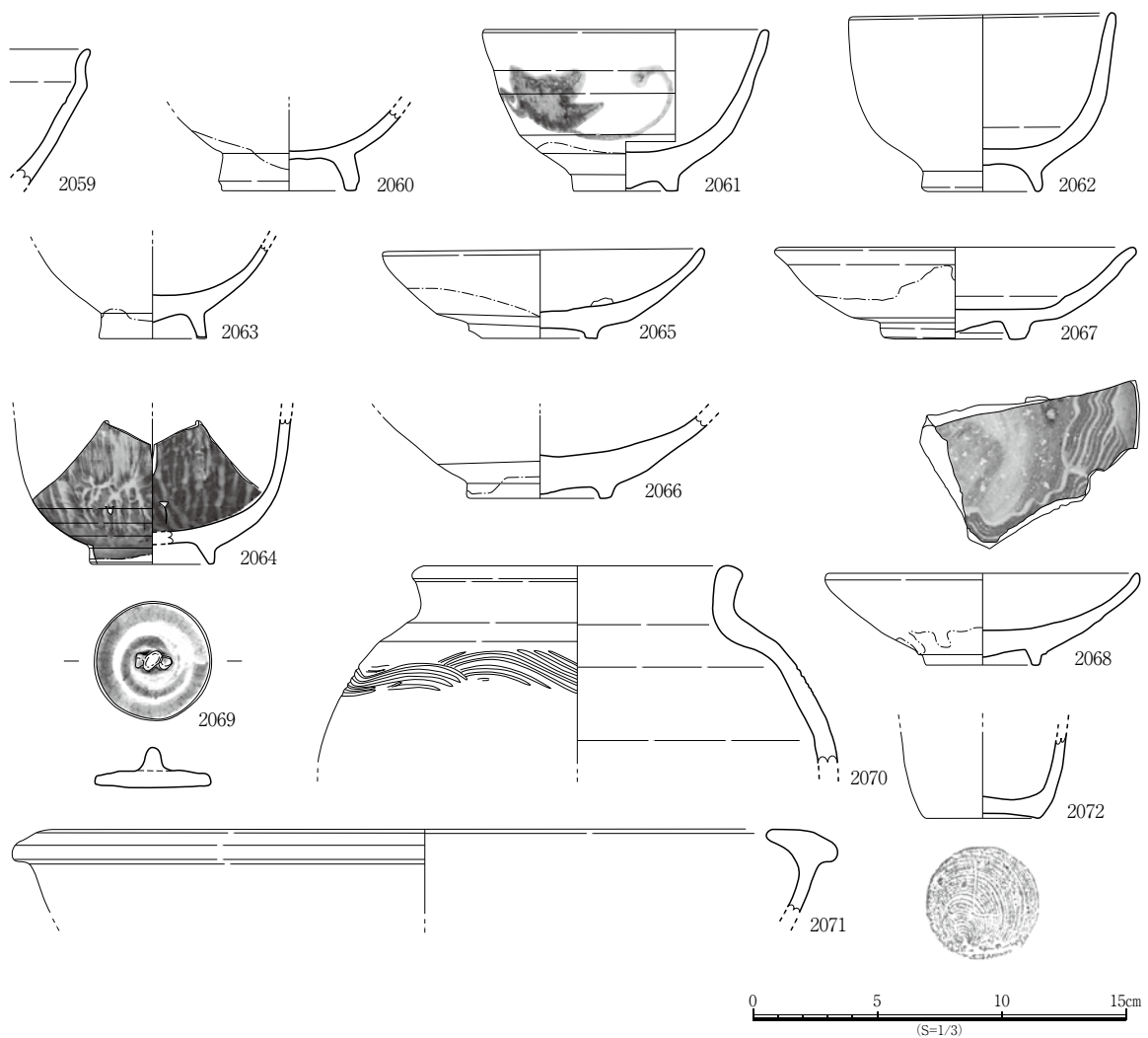


図148 SD-215上層出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

みられた。出土遺物には肥前産の陶磁器が多く含まれ、図示した遺物の他に志野焼、丹波焼などが僅かにみられる。出土遺物から18世紀前葉頃に埋没したものとみられる。

図示した遺物の2059～2094は上層出土、2095～2115は中層出土、2116～2144は下層出土である。2059は瀬戸・美濃産の陶器天目碗で、全面に鉄釉を施す。2060は灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。2061は肥前産とみられる灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には鉄錆による植物文がみられる。2062は肥前産の灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を

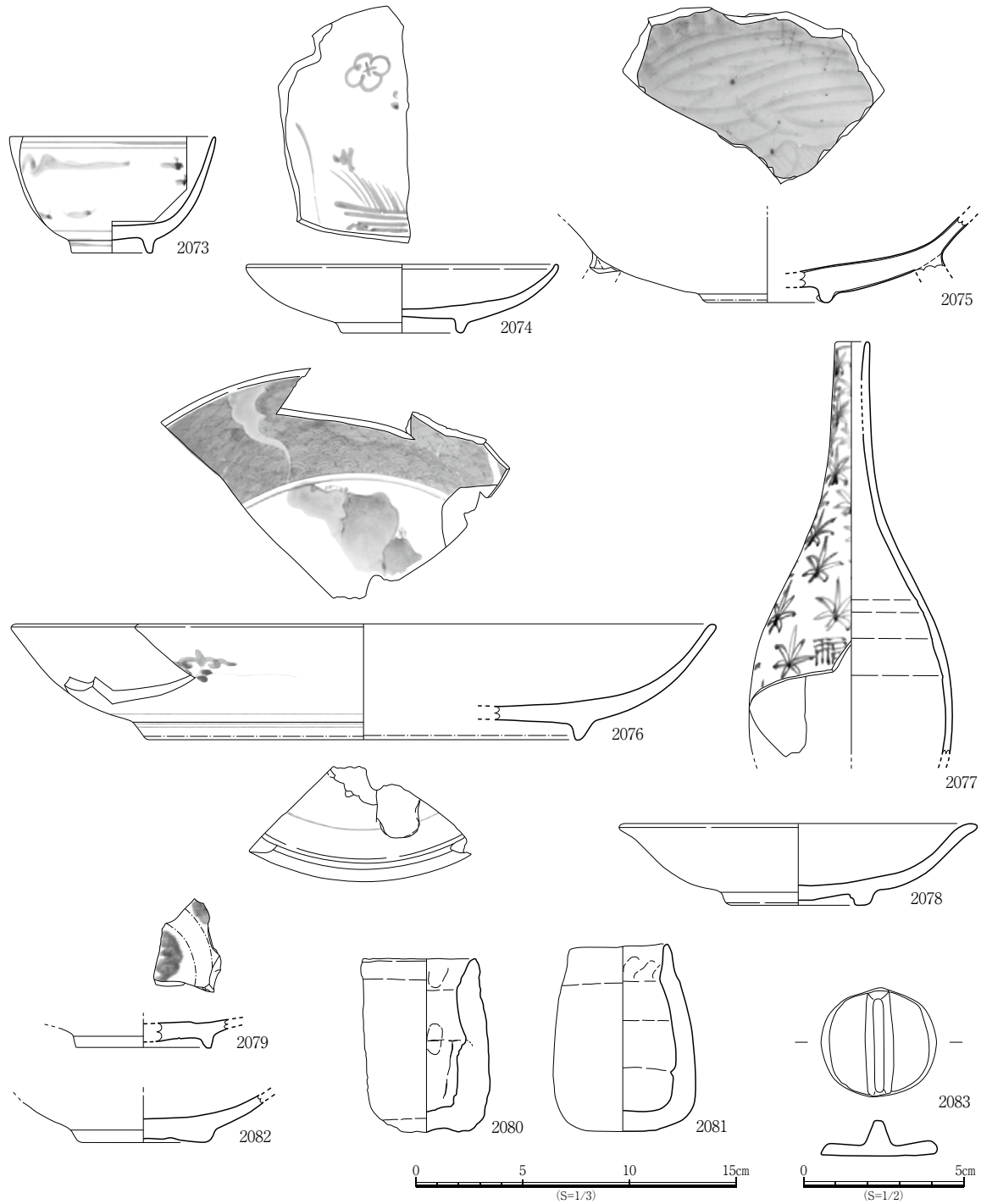


図149 SD-215上層出土遺物実測図2

施す。2063は肥前産の陶器碗で、内面から高台付近まで鉄釉を施す。2064は肥前産の陶器碗で、内外面に白化粧土による打刷毛目文がみられる。2065～2067は唐津系灰釉陶器皿で、内面から外面体部下半まで灰釉を施す。2065は見込に胎土目痕、2066・2067は見込に砂目痕が残る。2068は肥前武雄産の陶器皿で、内面に白化粧土による刷毛目文がみられる。2069は陶器蓋物蓋で、天井部に紐状の摘を貼付する。外面には銅緑釉を施す。2070は備前焼壺で、肩部に櫛描の波状文がみられる。2071は肥前産の陶器甕で、鉄釉を施し、口縁端部は釉ハギする。調整は回転ナデである。2072は備前焼の茶入で、調整は回転ナデで、底部付近には削りを加える。底部外面は回転糸切り調整で、ヘラ記号がみられる。2073は肥前産の磁器染付小碗で、外面に山水文とみられる文様と圏線の染付がみられる。2074は肥前産の磁器染付皿で、見込に草花文の染付がみられる。2075は肥前産の青磁三足大皿とみられ、体部外面に陰刻文様のある脚を貼付する。内面は陰刻による文様がみられる。2076は肥前有田産の染付大皿で、外面には花唐草と圏線、内面には青海波文と山水文の染付がみられる。2077は肥前産の磁器染付瓶で、鶴首形を呈する。外面には紅葉文と「福」字の染付がみられる。2078は中国産の白磁皿である。内面から高台外面まで白磁釉を施す。2079は中国漳州窯系の青花皿で、内面から高台外面まで透明釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。見込と高台に僅かに染付がみられる。2080・2081は土師器焼塩壺で、輪積成形である。2080は内面がナデ調整で、指頭圧痕と絞り目が残る。2081は内面がナデ調整で指頭圧痕が残り、口縁部内面は横ナデ調整である。2082は古代の緑釉陶器皿である。軟質で、底部は蛇ノ目高台を呈する。2083は土製品ミニチュアで、鍋蓋形を呈する。上面はナデ調整、下面は型成形または無調整である。2084～2094は木製品である。2084は漆器椀で、外面は黒塗、内面は赤塗で、高台内には「×」の刻書がみられる。2085は漆器蓋で、外面は黒塗、内面は赤塗で、摘内には「×」の刻書がみられる。2086～2094は木簡である。2086は短冊形を呈し、片面に「□□入」の墨書がみられる。2087も短冊形を呈し、両面に墨書がみられる。表面は「野地久(右衛門様カ)」の墨書、裏面は墨書が薄く解読不可であった。2088は短冊形を呈し、下部は隅を切り、両面を面取りする。片面に墨書がみられるが解読不可であった。2089は下部を丸く加工する。表面は「野地久右衛門」の墨書がみられ、2087と同様の名前が書かれていた可能性がある。裏面は解読不可であった。2090は上部を丸く加工し、両側面に切り込みがみられる。表面は「十市村(彦四郎カ)」、裏面は「吉米四斗」の墨書がみられる。2091は上部の両側面に切り込みがみられる。表面は「横山五□(郎衛門様カ)…」、裏面は「堺屋十郎兵衛□□」の墨書がみられる。「横山五郎衛門」の文字は2310と2747にもみられる。2092は上部と下部を細く加工し、上部側面に切り込みを入れる。両面に墨書がみられるが解読不可であった。2093は下部を細く加工し、上部両側面に切り込みを入れる。表面は「さいケ(在家)与七郎」、裏面は「四斗入」の墨書がみられる。2094は上部両側面に切り込みを入れ、下部を細く加工する。表面は「川清(カ)右(カ)エ門殿送」、裏面は「大豆式斗三升入□(松カ)(崙カ)□□」の墨書がみられる。「川清右エ門」は2140にみられる「河清□右エ門」と同じ人物の可能性が有る。

2095～2115は中層から出土した遺物である。2095は肥前産の陶器碗で、全面に灰釉を施したのち畳付を釉ハギする。2096は絵唐津皿で、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には鉄錆による草花文がみられる。2097は陶器蓋で、回転ナデ調整で、底部は回転糸切り調整である。外面には鉄釉を施す。2098は肥前産の磁器蓋物蓋で、外面には型紙摺による桐文がみられる。2099は肥前産の青磁大皿で、全面に青磁釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギし錆釉を施す。内面には陰刻による雷文と草花文がみられる。2100と同一個体の可能性がある。2100は土師質土器皿で、調整は回転



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

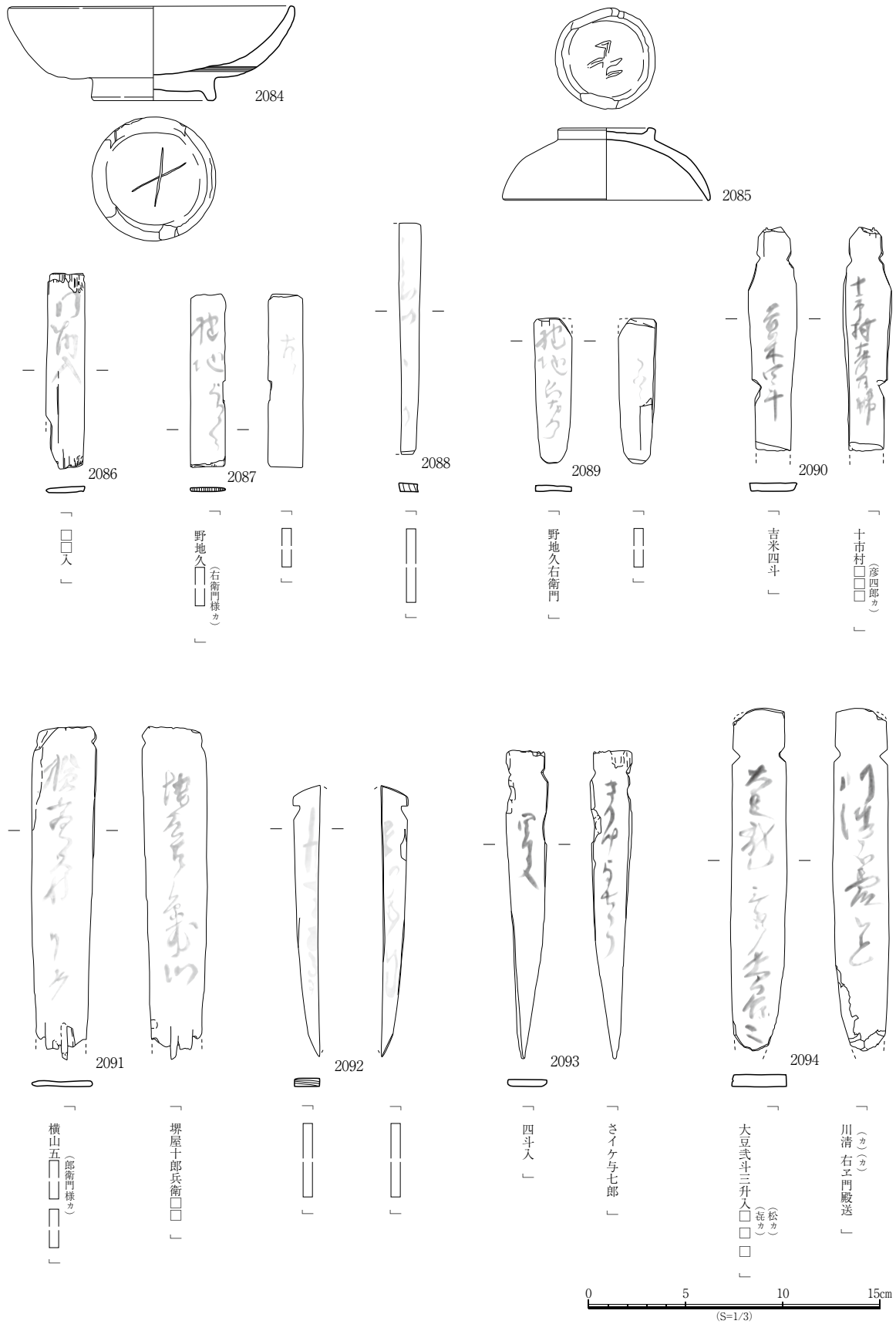


図150 SD-215上層出土遺物実測図3

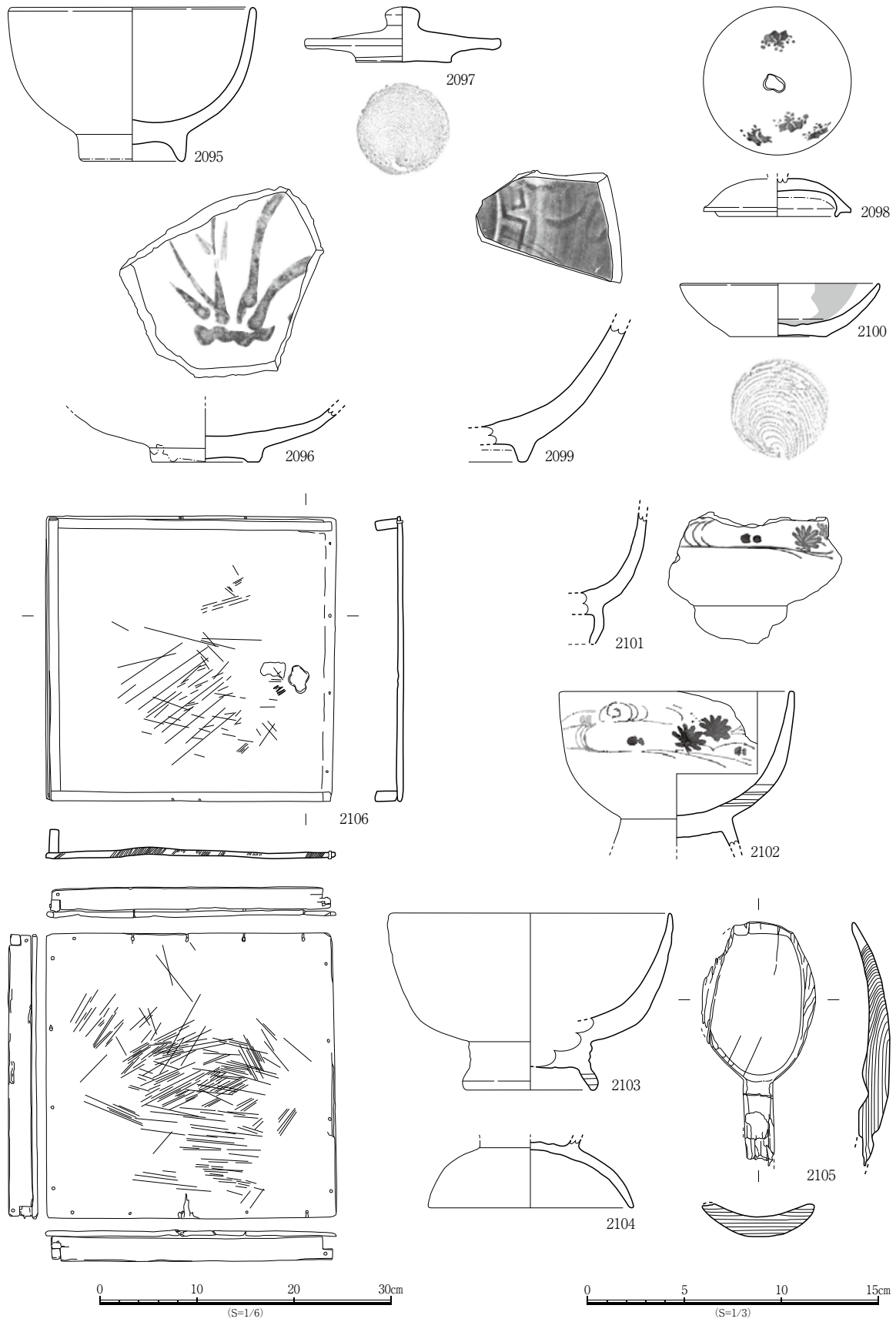


図151 SD-215中層出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

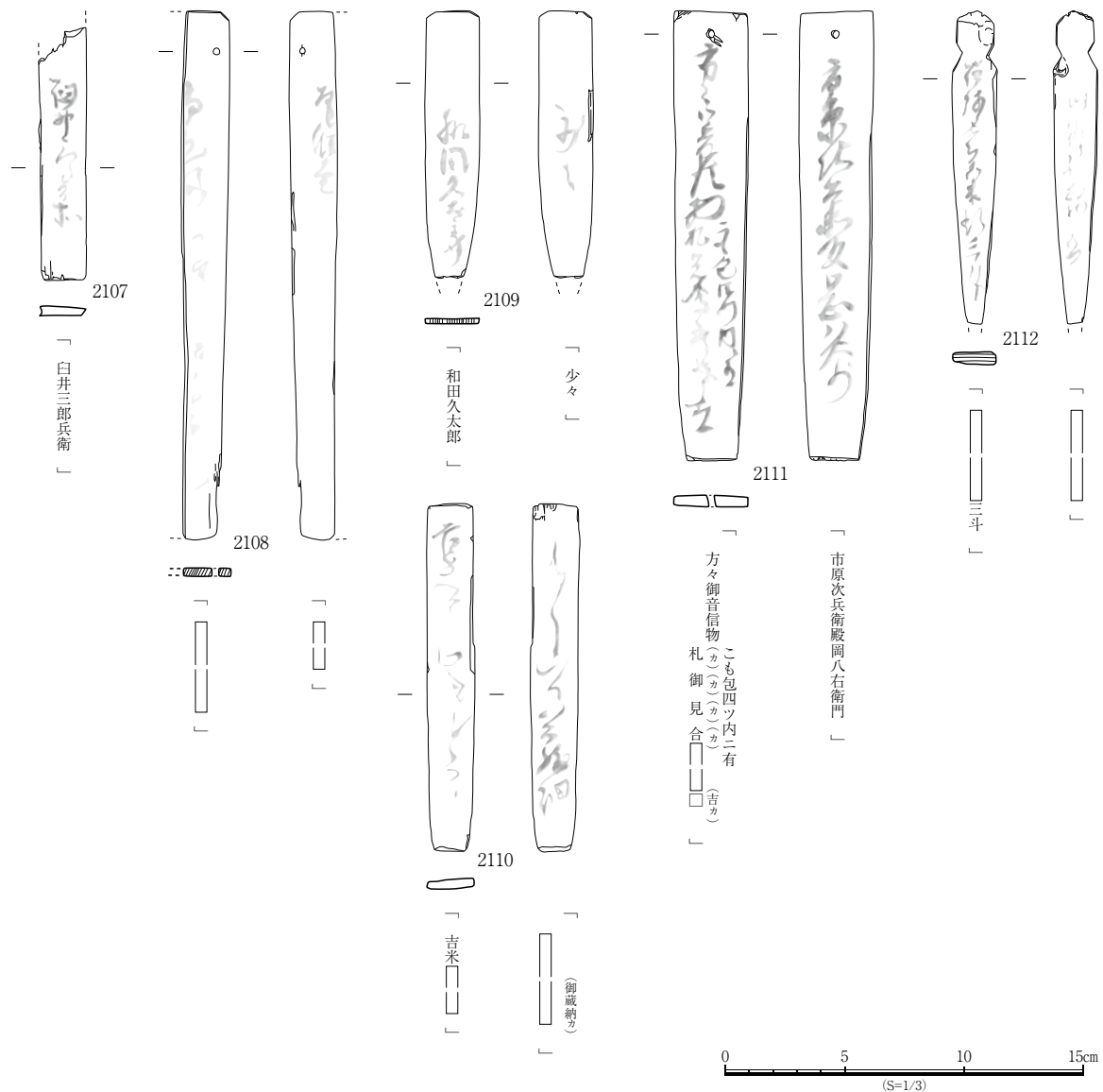
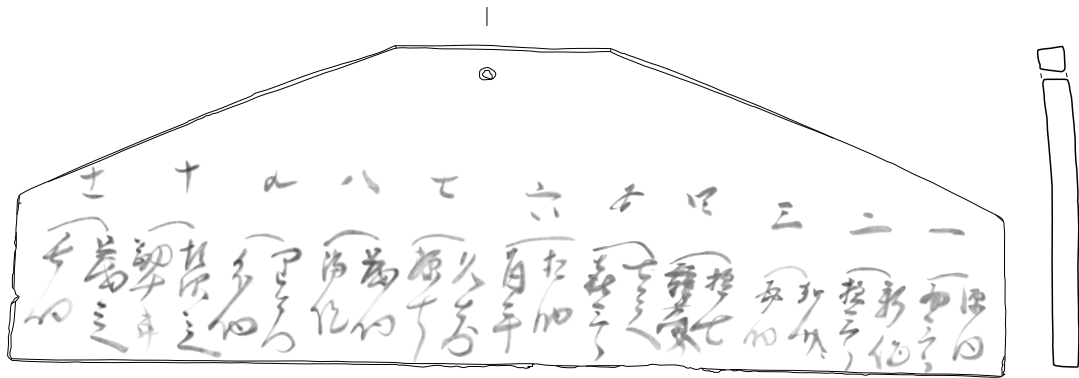
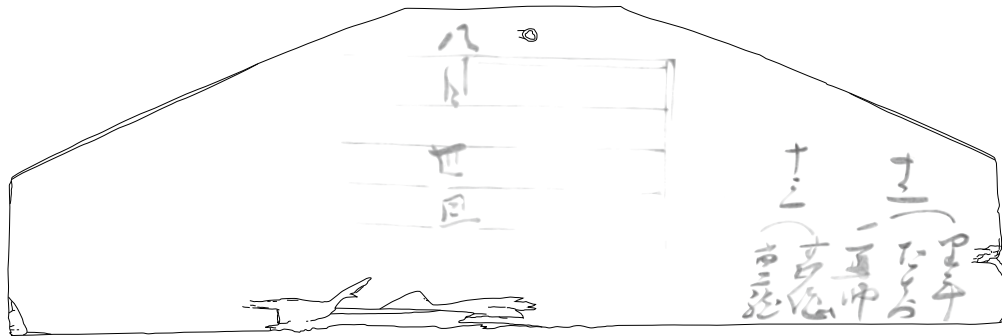


図152 SD-215中層出土遺物実測図2

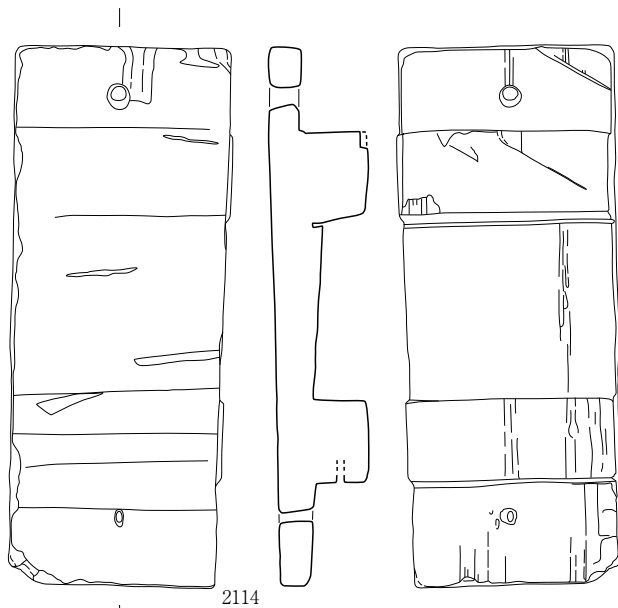
ナデで、底部の切り離しは回転糸切り調整である。内面には煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。2101～2115は木製品である。2101は漆器椀で、外面は黒塗で朱の紅葉流水文を施し、内面は赤塗である。2102も漆器椀で、外面は黒塗で朱の紅葉流水文を施し、内面は赤塗である。2103も漆器椀で、内外面とも赤塗で無文である。2104は漆器蓋で、内外面とも赤塗で無文である。2105は漆器匙で、上面は匙部が赤塗、柄部が黒塗、下面は一部に黒塗が残る。2106は漆器折敷で、一側面は欠損する。黒塗で、底板と側板を木釘で固定する。底板裏面の周囲は僅かに面取りする。2107～2113は木簡である。2107は短冊形を呈し、片面に「白井三郎兵衛」の墨書がみられる。2108は短冊形を呈し、上端隅を切り上部に円孔がみられる。両面に墨書がみられるが、解読不可であった。2109は上端隅を切り、下端を細く加工する。表面は「和田久太郎」、裏面は「少々」の墨書がみられる。2110は下部をやや細く加工する。表面は「□(御蔵納カ)」、裏面は「吉米□」の墨書がみられる。2111は上部に円孔を穿ち、下部を細く加工する。表面は「市原次兵衛殿岡八右衛門」、裏面は「方々御音信物 とも包四ツ内ニ有 札(カ)御(カ)見(カ)合(カ)□□(吉カ)」の墨書がみられる。2112は上端を丸



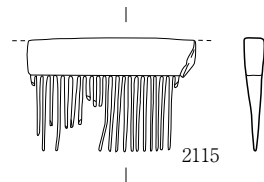
2113



- |    |     |    |     |    |    |    |     |     |    |    |      |
|----|-----|----|-----|----|----|----|-----|-----|----|----|------|
| 十二 | 十一  | 十  | 九   | 八  | 七  | 六  | 五   | 四   | 三  | 二  | 一    |
| 源助 | 九三郎 | 新作 | 猛三郎 | 加介 | 五助 | 権介 | 七兵衛 | 喜三郎 | 大助 | 百平 | 久右衛門 |
| 源助 | 九三郎 | 新作 | 猛三郎 | 加介 | 五助 | 権介 | 七兵衛 | 喜三郎 | 大助 | 百平 | 久右衛門 |
| 源助 | 九三郎 | 新作 | 猛三郎 | 加介 | 五助 | 権介 | 七兵衛 | 喜三郎 | 大助 | 百平 | 久右衛門 |
- 八月廿日
- |    |      |
|----|------|
| 十三 | 十二   |
| 甚作 | 里平   |
| 市蔵 | 太右衛門 |
|    | 万助   |



2114



2115

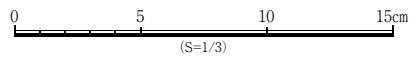


図153 SD-215中層出土遺物実測図3

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

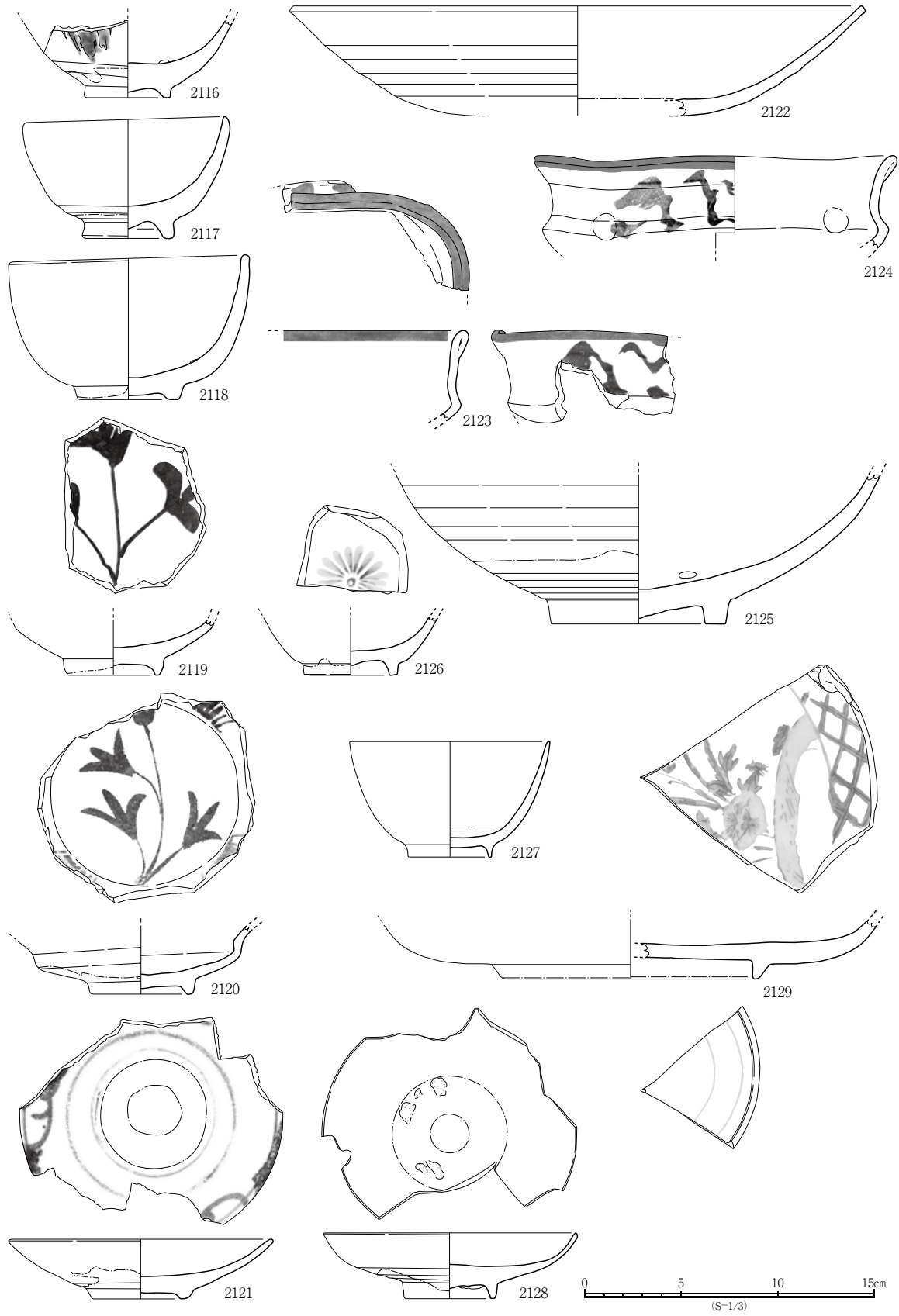


図154 SD-215下層出土遺物実測図1

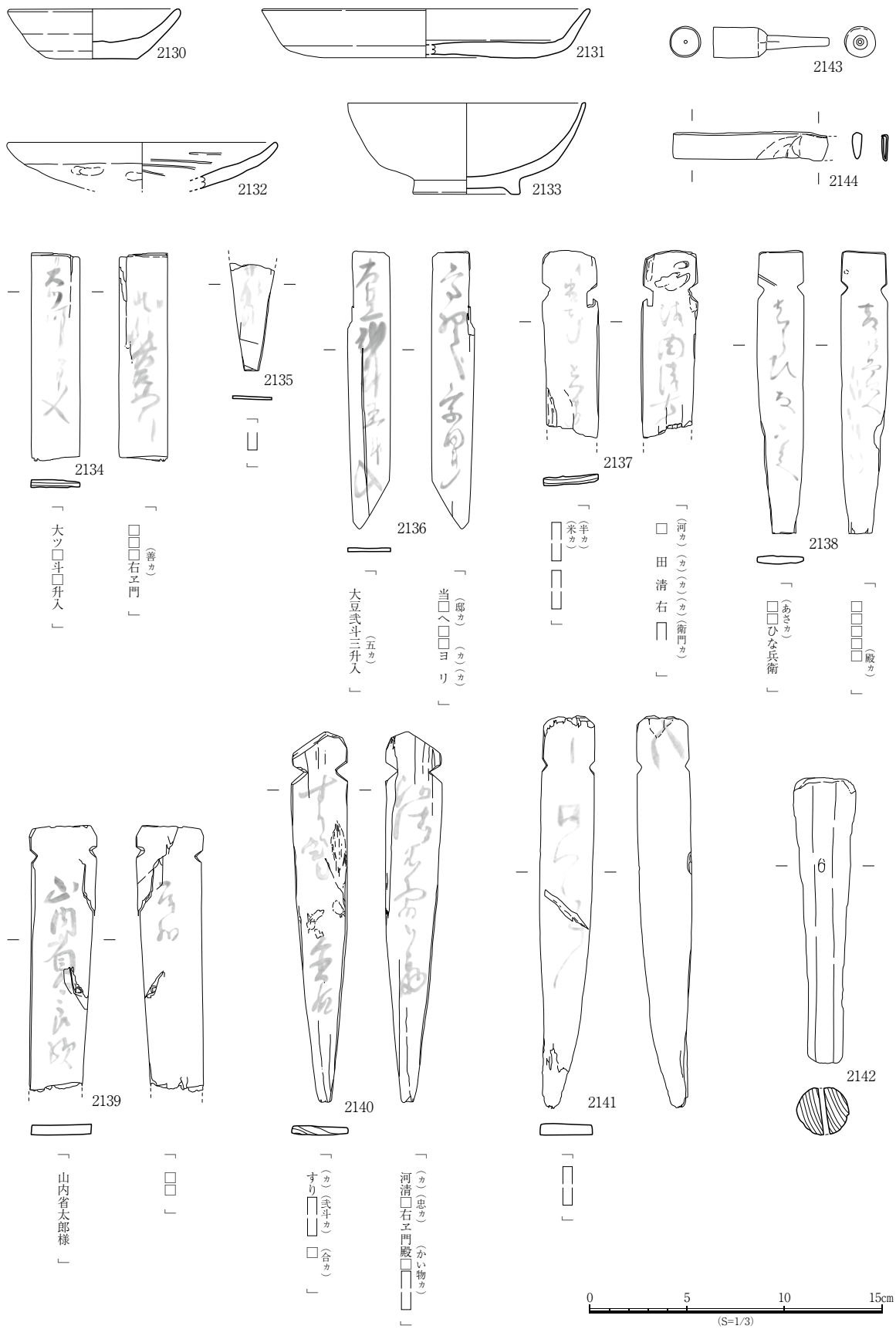


図155 SD-215下層出土遺物実測図2



く加工し、上部側面に切り込み、下部を細く加工する。表面は解読不可で、裏面は「□三斗」の墨書がみられる。2113は木簡で、絵馬状の形態を呈し上部に円孔を穿ち、両面に名前の墨書が多数記載される。裏面には「八月廿日」の墨書もみられる。2114は木製品下駄である。連歯下駄で長方形を呈する。爪先と踵の2箇所にも円孔がみられる。2115は櫛で、先端は細く加工し、断面は三角形を呈する。

2116～2144は下層から出土した遺物である。2116は絵唐津、2117は唐津系灰釉陶器碗で、どちらも内面から外面体部下半まで灰釉を施す。2116は外面に鉄錆による文様がみられ、見込には胎土目痕が残る。2118は瀬戸・美濃系の陶器碗で、内面から高台付近まで長石釉を施す。見込には3箇所にも目痕が残る。2119・2120は絵唐津皿で、内面から高台付近まで透明釉を施す。2119の内面には鉄錆による草花文、2120は花文がみられる。2121は肥前産の陶器皿で、内面から体部外面まで灰釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。口縁部内面には鉄錆による文様がみられる。口縁部には煤が付着する。2122は肥前内野山窯とみられる陶器大皿で、内面は銅緑釉、外面には透明釉を施す。2123・2124は絵唐津向付で、口縁端部は折り曲がる。口縁端部と外面には鉄錆による文様がみられる。2123は不整形を呈し、2124は体部の2箇所を外側から押し凹ませている。2125は唐津系灰釉陶器鉢で、内面から外面体部下半まで灰釉を施し、見込には胎土目痕が残る。2126は肥前産の鉄釉染付碗で、内面は透明釉で見込に菊花の染付がみられ、外面には高台付近まで鉄釉を施す。畳付には回転糸切り痕が残る。2127は肥前産の白磁碗で、全面に白磁釉を施し、畳付は釉ハギする。2128も肥前産の白磁皿で、内面から高台付近まで白磁釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。見込と高台内には砂目痕が残る。2129は肥前有田産の磁器色絵大皿で、内面には緑・黒色の斜格子文と土坡に草花文の上絵付、高台内には圏線の染付がみられる。2130は土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2131は古代の須恵器皿である。回転ナデ調整のち底部内面にナデ調整を加え、底部の切り離しは回転ヘラ切り調整のちナデ調整を加える。2132は混入とみられる瓦器碗である。体部内面はナデ調整のち横方向の暗文、口縁部は横ナデ調整、外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。2133～2142は木製品である。2133は漆器碗である。内外面とも赤塗で、無文である。2134～2141は木簡である。2134は短冊形を呈し、表面は「□□ □(善カ)右エ門」、裏面は「大ツ□ □斗 □升入」の墨書がみられる。2135は下端を細く加工し、片面に墨書がみられるが解読不可であった。2136は上端片隅を切り、下部は斜めに加工する。表面は「当□(邸カ)へ □□ヨ(カ)リ(カ)」, 裏面は「大豆式斗三(五カ)升入」の墨書がみられる。2137は上端を丸く加工し、上部側面に切り込みを入れる。表面には「□(河カ)田(カ)清(カ)右(カ)…(衛門カ)」, 裏面は「□(米カ)(半カ)□」の墨書がみられる。2138は上部側面に切り込みを入れ、下部を細く加工する。表面は「□□□□□(殿カ)」, 裏面は「□□(あさカ)ひな兵衛」の墨書がみられる。2139は上部側面に切り込みを入れ、下部を細く加工する。表面は「山内省太郎様」、裏面は「□□」の墨書がみられる。2140は上端を丸く加工し、上部側面に切り込みを入れ、下部は細く加工する。表面は「河(カ)清□(忠カ)右エ門殿 □□(かい物カ)」, 裏面は「す(カ)り□(式斗カ)□(合カ)」の墨書がみられる。「河清□右エ門」は2094の「川清右エ門」と同じ人物の可能性ある。2141は上端を丸く加工し、上部側面に切り込みを入れ、下部は細く加工する。両面に墨書がみられるが解読不可であった。頸部には幅3mmの変色した線が2本あり、紐状の物を巻いていた痕跡とみられる。2142は栓とみられ、下端は細く加工し、上面と下面は平らである。上部には径2mmの円孔が貫通する。2143は銅製とみられる煙管吸口で、片部が大きく膨らむ。全面に金鍍金を施す。2144は銅製とみられる小柄で、中空で断面は三角形を呈し、2枚の板状の金属を接合している。

外面には金鍍金を施す。

SE-201(遺構:図156)

B-1区北東部で確認した井戸跡である。掘方は円形を呈し、径1.89mを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。検出面より20cm下で全面に焼土を確認し、さらに30cm下で桶側が埋設されていた径48cmを測る土坑を確認した。桶側部分の埋土は灰色砂質シルトで、1cm大の礫を多く含んでいた。桶側の高さは84cmを測り、検出面からの深さは1.28m、底面の標高は-0.898mで砂礫層であった。出土遺物は絵唐津皿1点と土師質土器皿2点であった。

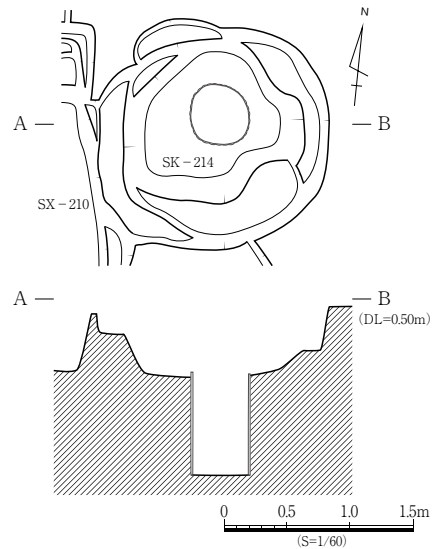


図156 SE-201

SE-202(遺構:図157 遺物:図159)

B-1区南東部で確認した石組の井戸跡である。掘方は楕円形を呈し、長辺1.54m、短辺1.22m、深さ73cmを測り、埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5~5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。また、検出面より43cm下で石組を確認した。確認された石組は2段で主にチャートの角礫などが使用されており、石組の内径は68cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで、埋土からは青磁碗1点と土師器細片1点が出土している。図示した遺物は2145で青磁碗である。内面から高台まで青磁釉を施し、見込にはスタンプによる人物文がみられる。

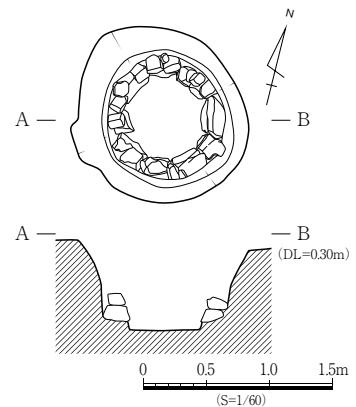
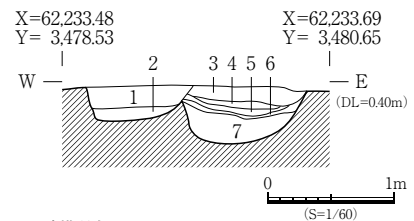


図157 SE-202

SX-207(遺物:図159)

B-1区北東部で確認した遺構である。平面形態は溝状を呈し、検出長7.45m、検出幅0.89~2.06m、深さ28cmを測り、埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5~1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿4, 向付1, 細片1), 磁器皿1点, 土師質土器37点(皿7, 細片30), 須恵器片1点, 木製品下駄1点がみられ、唐津系灰釉陶器皿や絵唐津皿, 志野焼向付が出土している。図示した遺物は2146で木製品下駄である。前歯は差歯で木釘で2箇所を留め、後歯は連歯とみられ、著しく摩耗する。長方形を呈し、左足とみられる。



遺構埋土

1. 灰色(N5/0)粗粒砂質シルトで、1cm大の礫を含む(SX-209)
2. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂で、腐植を非常に多く含む(SX-209)
3. 灰色(N6/0)粘土質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含む(SX-210)
4. 黒色(10YR2/1)シルト質砂で、木片と腐植を多く含む(SX-210)
5. 灰色(N5/0)砂質シルトで、1cm大の礫を含む(SX-210)
6. 黒色(10YR2/1)砂質シルト(SX-210)
7. 灰色(N6/0)粘土質シルトで、木片と腐植との互層(SX-210)

図158 SX-209・210

SX-208(遺物:図159)

SX-207の南で確認した遺構で、東はSK-210に切られ、底面でSX-209・210を検出した。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ、検出長5.82m、検出幅3.18m、深さ11.3cmを測り、埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器46点(碗2, 皿21, 向付1, 搦鉢6, 人形1, 細片15), 磁器27点(碗1, 皿3, 蓋1, 小杯2, 細片20), 土師質土器51点(皿11, 細片40), 土師器4点(焙烙1, 焼塩壺1, 焼塩壺蓋2),

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

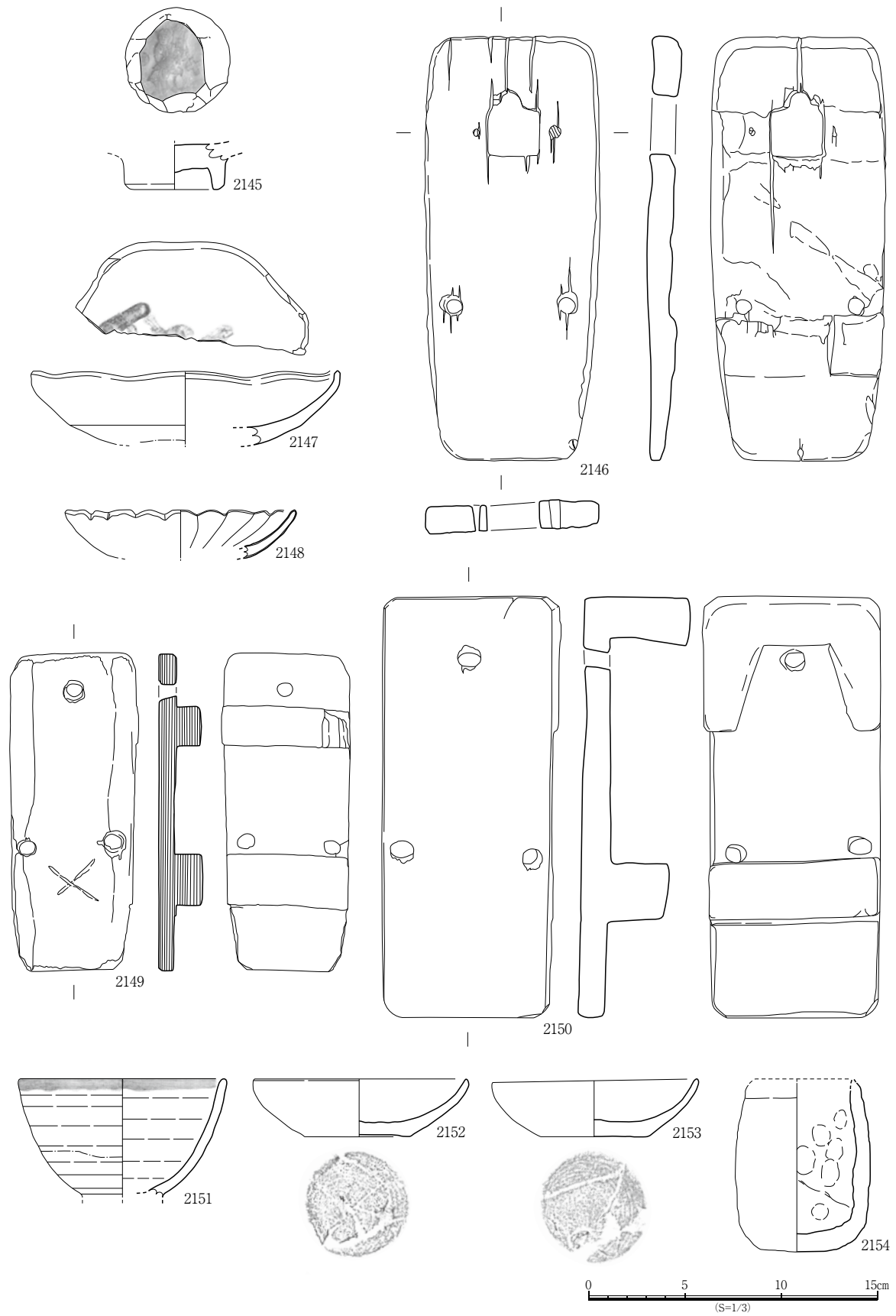


図159 SE-202, SX-207・208, P-205～207出土遺物実測図

平瓦2点, 石製品砥石2点, 木製品下駄2点, 金属製品3点がみられ, 図示した遺物の他に, 唐津系灰釉陶器皿や絵唐津皿, 志野焼向付, 備前焼播鉢, 信楽焼播鉢が出土している。図示した遺物は2147~2150である。2147は絵唐津波縁皿で, 内面から外面体部下半まで灰釉を施し, 見込には鉄錆による文様がみられる。2148は志野焼菊皿で, 全面に長石釉を施す。2149は木製品下駄で, 連歯下駄である。長方形を呈し, 径8mmの孔を3箇所に通す。表面の踵部分に「×」の刻書がみられる。小型で歯が低く子供用とみられる。2150も木製品下駄で, 長方形を呈する削り下駄である。爪先はコの字状, 踵には直線状の歯が付く。

SX-209(遺構: 図158)

SX-208の底で確認した遺構で, SX-210を切る。平面形態は溝状を呈し, 全長5.61m, 全幅1.28m, 深さ61cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれる。出土遺物は上層から磁器小杯が1点出土している。

SX-210(遺構: 図158)

SX-208の底で確認した遺構で, SX-209に切られる。平面形態は溝状を呈し, 全長8.08m, 全幅1.15m, 深さ79cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土は5層に分かれる。出土遺物には唐津系灰釉陶器皿1点, 初期伊万里の磁器皿1点, 土師質土器2点(杯1, 細片1)がみられた。

SX-211(遺構: 図160)

B-1区南東部で確認した遺構である。平面形態は円形を呈し, 径3.30m, 深さ99cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色礫質砂であった。出土遺物には陶器7点(鉢1, 播鉢1, 細片5), 磁器13点(蓋2, 鉢1, 細片10), 土師質土器15点(杯1, 小皿3, 細片11), 土師器片3点, 須恵器片3点, 瓦4点(丸瓦2, 平瓦2), 金属製品2点, 骨片があり, 古墳時代と古代の遺物片や唐津系灰釉陶器がみられた。

SX-212(遺構: 図161)

SX-211の東で確認した遺構で, SK-229に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長4.14m, 短辺1.47m, 深さ34cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と炭化物を多く

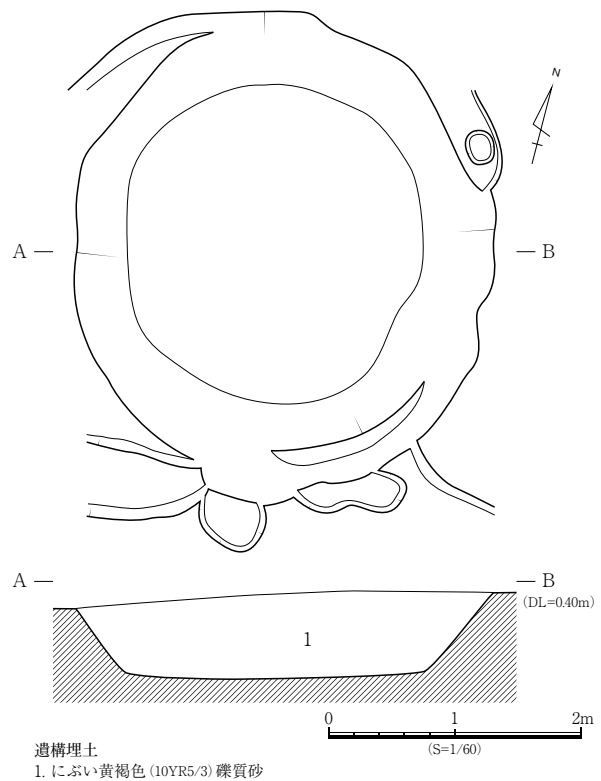


図160 SX-211

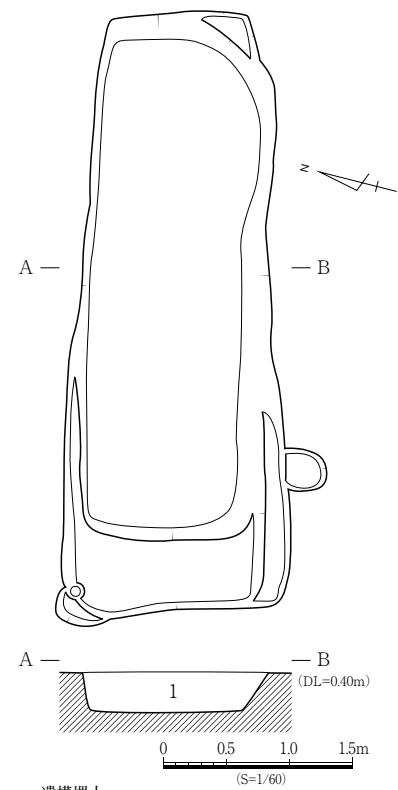


図161 SX-212

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

含んでいた。出土遺物には土師質土器杯1点、木製品下駄1点がみられた。

SX-213(遺構：図162)

SD-215内で確認した土橋状の遺構で、SD-215に直行し、南は調査区外へ続く。SD-215と同時期に存在したものとみられる。検出長5.33m、上端幅1.12m、下端幅1.72m、検出高33cmを測る。埋土は褐灰色シルトで、上層は多量の3cm大の礫と炭化物を含み、下層は粗粒砂と多量の木片を含んでいた。出土遺物には陶器7点(皿1, 鉢1, 播鉢1, 匣鉢1, 細片3), 磁器7点(碗1, 細片6), 土師質土器皿1点, 土師器碗1点, 瓦質土器片1点, 平瓦1点がみられた。

P-205(遺物：図159)

B-1区北西部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径36cm、短径29cm、深さ5cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は図示した2151の唐津系灰釉陶器碗のみで、口縁端部には錆釉を施す。

P-206(遺物：図159)

B-1区北部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径43cm、深さ10cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した2152・2153の土師質土器皿2点と土師質土器片120点がみられた。2152・2153とも調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

P-207(遺物：図159)

P-206の東で確認したピットである。平面形態は円形を呈し、径37cm、深さ17cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、細粒砂と1cm大の礫、少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は陶器2点(皿1, 細片1), 土師器焼塩壺1点がみられた。図示した遺物は2154で土師器焼塩壺である。輪積成形で、内面には指頭圧痕が残るが、著しく摩耗するため調整は不明である。

P-208(遺物：図163)

P-207の東で確認したピットで、柱穴とみられる。平面形態は円形を呈し、径35cm、柱径13cm、深さ15cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2155の土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。

P-209(遺物：図163)

P-208の北で確認したピットで、SK-209に切られる。平面形態は不整形を呈するものとみられ、検出長84cm、検出幅61cm、深さ35cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 向付1)がみられた。図示した遺物は2156で、志野焼向付で

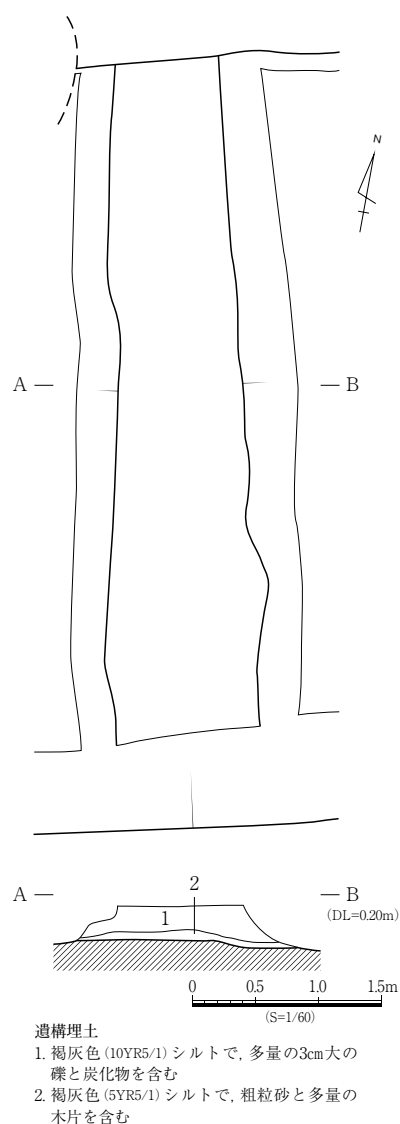


図162 SX-213

ある。口縁部は波縁状で透かしがあり、内面は鉄錆による文様がみられる。

P-210(遺物: 図163)

P-209の南東で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径52cm、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物は図示した2157の唐津系灰釉陶器皿のみで、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には砂目痕が残る。

P-211(遺物: 図163)

B-1区北東部で確認したピットで、SK-213の底で確認した。平面形態は楕円形を呈し、長径78cm、

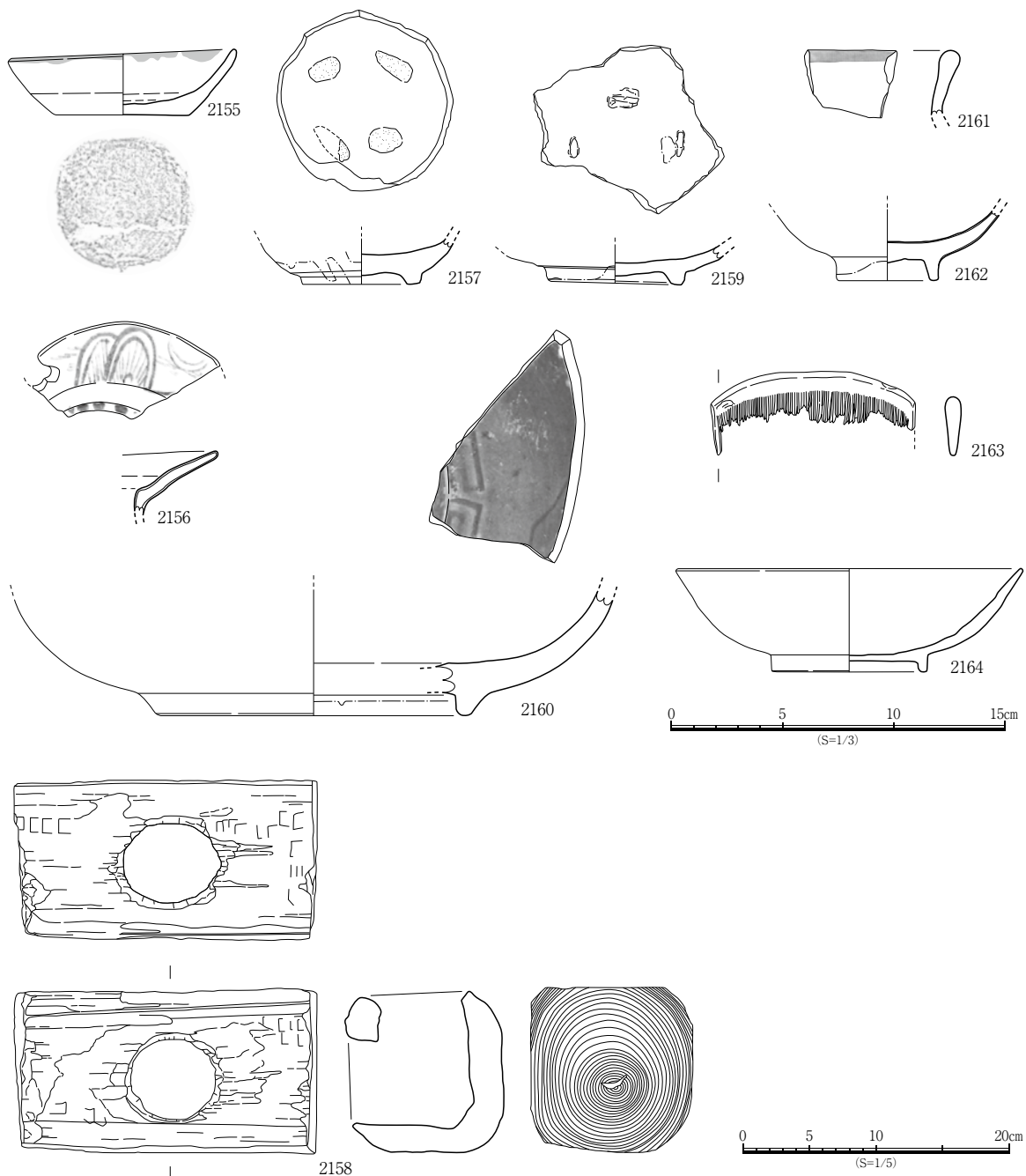


図163 P-208～217出土遺物実測図



### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

短径61cm, 深さ17cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。底面には竹樋の継手が埋設されており, SD-207に埋設されていた竹樋と繋がっていた。出土遺物は図示した2158の木製品継手のみで, 直方形を呈し, 側面から上面にL字状の孔がみられる。側面の円孔には竹樋が繋がり調査区外へ続く。上面の円孔も竹樋が存在した可能性が高い。小口は切断面, 長側面は横方向の加工痕が残り, 角部は表皮に近い部分とみられ加工痕はみられない。

#### P-212(遺物: 図163)

P-211の南で確認したピットで, SK-214に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し, 検出長85cm, 検出幅53cm, 深さ15cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には図示した陶器皿1点と土師質土器片1点がみられた。2159は唐津系灰釉陶器皿で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 見込には胎土目痕が残る。

#### P-213(遺物: 図163)

SD-208の南で確認したピットで, SD-208を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.36m, 短径0.93m, 深さ13cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫と炭化物・焼土を含んでいた。出土遺物は図示した2160の肥前産の青磁大皿のみで, 全面に青磁釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギし錆釉を塗る。内面には陰刻による雷文がみられる。2099と同一個体の可能性がある。

#### P-214(遺物: 図163)

B-1区西部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し, 長径43cm, 短径40cm, 深さ26cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物は図示した2161の肥前産とみられる陶器向付のみで, 口縁端部に錆釉を施したのち全面に透明釉を掛ける。

#### P-215(遺物: 図163)

P-214の南西で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し, 長径56cm, 短径50cm, 深さ7cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2162の肥前産とみられる陶器碗のみで, 内面から高台まで鉄釉を施す。

#### P-216(遺物: 図163)

B-1区南西部で確認したピットで, SD-215を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径60cm, 短径47cm, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 0.5~1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点, 磁器2点(皿1, 小杯1), 瓦質土器片1点, 木製品櫛1点がみられた。図示した遺物は2163で木製品櫛である。蒲鉾形を呈し, 歯間が狭く密である。梳櫛とみられる。

#### P-217(遺物: 図163)

B-1区南西部で確認したピットで, SD-215の底で検出した。平面形態は楕円形を呈し, 検出長72cm, 検出幅37cm, 深さ13cmを測る。埋土は青灰色中粒砂質シルトであった。出土遺物には木製品2点(漆器碗1, 木筒1)がみられた。図示した遺物は2164で木製品漆器碗である。内外面とも赤塗である。

#### P-218(遺物: 図164)

P-217の南東で確認したピットで, SD-215の底で検出した。平面形態は楕円形を呈し, 長径93cm, 短径73cm, 深さ9cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cmの礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点, 磁器2点(皿1, 小杯1), 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2165で肥前産の磁器染付中皿である。見込には草花文と圏線の染付がみられる。

P-219(遺物: 図164)

B-1区中央部で確認したピットで、土坑の底で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径44cm, 短径38cm, 深さ7cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2166の黒色土器碗のみで、大振りで器壁が薄く、底部には断面三角形を呈する高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため炭素の吸着はみられず、調整は不明である。

P-220(遺物: 図164)

P-219の南東で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径48cm, 短径44cm, 深さ47cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 向付1), 土師質土器片1点, 瓦質土器片1点がみられた。図示した遺物は2167で志野焼向付である。口縁は波縁状で透かしがあり、底部には帯状の粘土を湾曲させた脚を貼付する。全面に長石釉を施し、内面には鉄錆による文様がみられる。底部外面には砂目痕が残る。

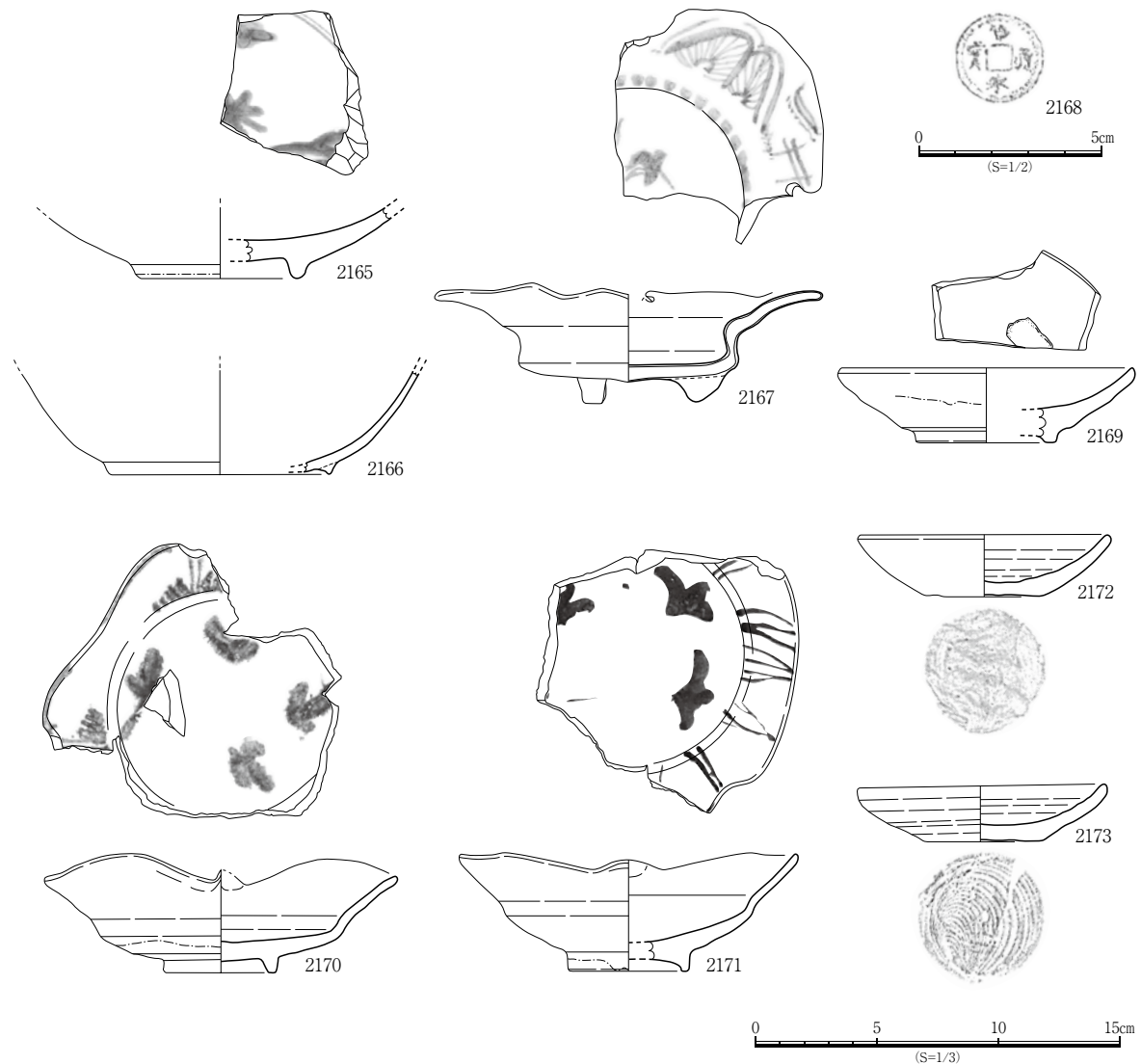


図164 P-218~223出土遺物実測図

P-221 (遺物: 図164)

P-220の東で確認されたピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径33cm, 短径23cm, 深さ4cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1cm大の礫と多量の5~10cm大の礫を含んでいた。出土遺物は図示した銭貨のみで、2168は寛永通寶で、新寛永とみられる。

P-222 (遺物: 図164)

P-221の南で確認したピットで、SK-223を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径53cm, 短径48cm, 深さ16cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 鉢1), 土師質土器3点(皿1, 細片2)がみられた。図示した遺物は2169の唐津系灰釉陶器丸皿で、内面から口縁部外面まで灰釉を施す。見込には砂目痕が残る。

P-223 (遺物: 図164)

P-222の南東で確認した柱穴で、P-224を切る。平面形態は円形を呈し、径46cm, 深さ29cmを測り、柱径は10cmとみられる。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿3点, 土師質土器32点(皿7, 細片25)がみられた。図示した遺物は2170~2173である。2170・2171は絵唐津波縁皿である。内面から体部外面まで灰釉を施し、口縁端部に錆釉, 見込には鉄錆による花文がみられる。2171はP-215から出土した破片と接合した。2172・2173は土師質土器皿で、調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

P-224 (遺物: 図165)

P-223の北で確認した柱穴で、P-223に切られる。平面形態は円形を呈し、径64cm, 深さ46cmを測り、柱径は20cmとみられる。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器8点(碗2, 皿2, 播鉢2, 細片2), 磁器2点(皿1, 細片1), 青花碗1点, 土師質土

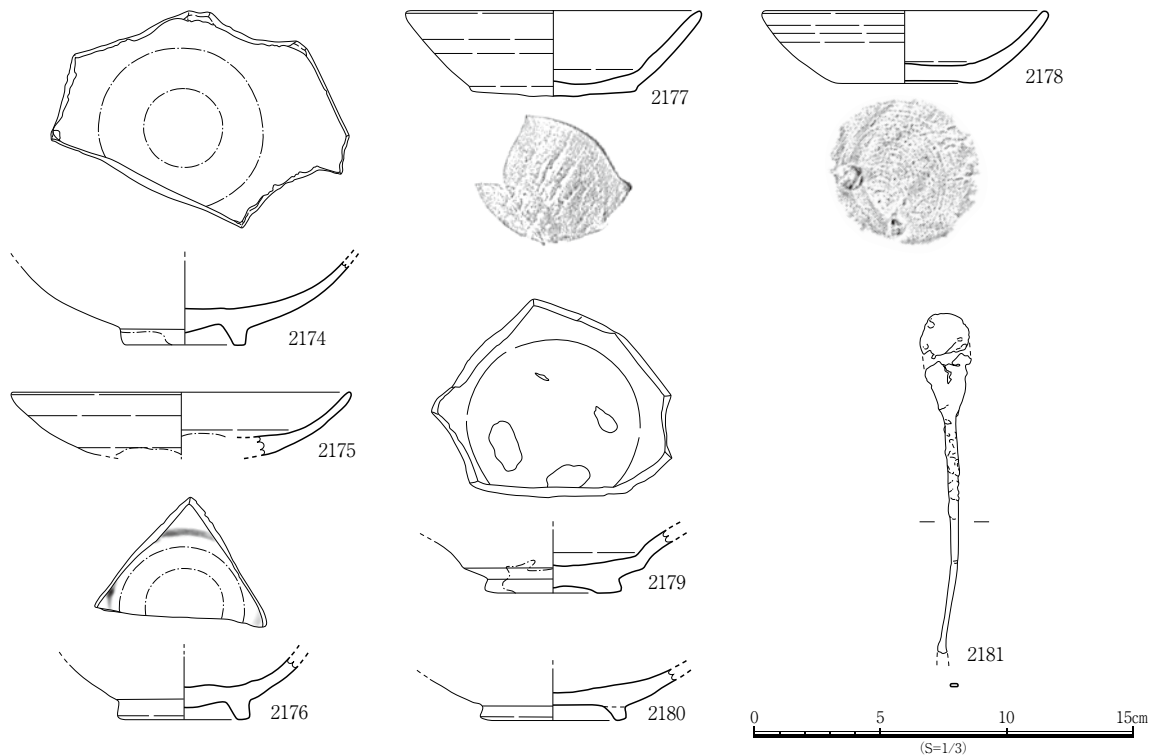


図165 P-224~227出土遺物実測図

器25点(皿4, 小皿1, 細片20), 土師器焼塩壺2点, 丸瓦片2点がみられた。図示した遺物は2174~2178である。2174は肥前内野山窯の陶器皿で, 内面は銅緑釉で見込を蛇ノ目釉ハギし, 外面には透明釉を施す。2175は肥前産の白磁皿で, 全面に白磁釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。2176は中国漳州窯系の青花碗で, 見込は蛇ノ目釉ハギし, 圏線の染付がみられる。2177は土師質土器杯である。回転ナデ調整のち見込にナデ調整を加え, 底部の切り離しは回転糸切り調整で板状圧痕が残る。内外面に煤が付着する。2178は土師質土器皿である。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。

P-225(遺物: 図165)

B-1区南東部で確認したピットで, SD-213に切られ, 東は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ, 検出長1.15m, 検出幅0.37m, 深さ31cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 播鉢1), 土師質土器3点(小皿2, 細片1)がみられた。図示した遺物は2179の唐津系灰釉陶器皿で, 内面から外面体部下半まで灰釉を施し, 見込には砂目痕が残る。図示した遺物の他に備前焼播鉢が出土している。

P-226(遺物: 図165)

B-1区南東部で確認したピットで, SD-215の埋土上で検出した。平面形態は溝状を呈し, 全長1.36m, 全幅0.30m, 深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1, 皿1, 播鉢1), 磁器片1点, 土師器碗1点がみられた。図示した遺物は2180で土師器碗である。底部には高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。

P-227(遺物: 図165)

B-1区南東隅で確認したピットで, SD-215を切る。検出長1.88m, 検出幅0.68m, 深さ21cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 0.5~2cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2181の銅製の匙のみで, 扁平で, 両端が広がる。

③ 3面

18世紀前葉から後葉にかけての遺構で, 追手筋北側に居住していた村田家がB区に移ってきて居住していたとされる時期である。また, この時期に調査区南部は南北に細長い三つの屋敷地に分かれていたとみられ, これらの屋敷地はB-2区として報告す

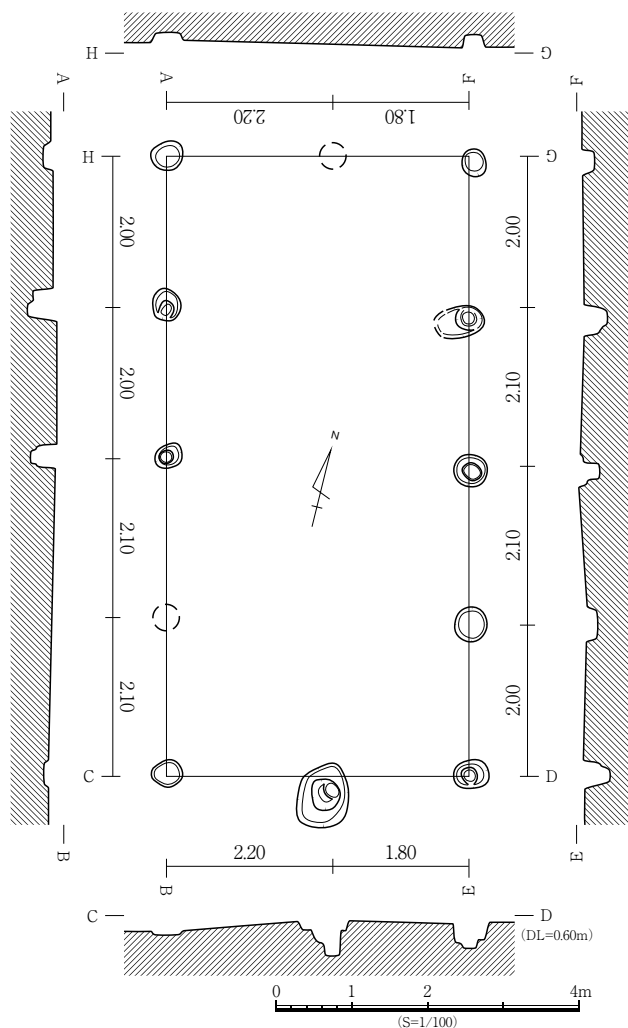


図166 SB-301

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

る。この時期のB区の遺構は全面で多くみられた。

#### SB-301 (遺構：図166)

B-1区北西部で確認された南北棟建物跡である。梁間2間(4.00m)、桁行4間(8.20m)、柱間寸法は梁間が1.80mと2.20m、桁行が2.00mと2.10mを測る。柱穴は径約30～85cmの円形または楕円形を呈し、柱径は約20cmとみられる。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器片1点、磁器碗1点がみられた。

#### SA-301 (遺構：図167 遺物：図168)

B-1区北東部で確認した南北塀跡である。3間分を検出し、全長5.70m、柱間寸法は1.80mまたは2.10mであった。柱穴は径0.65～1.40mの楕円形を呈し、埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。すべての底面には40cm大の礎板がみられた。出土遺物には陶器5点(皿1, 猪口1, 鉢1, 細片2), 磁器3点(皿2, 細片1), 土師質土器3点(皿2, 細片1),

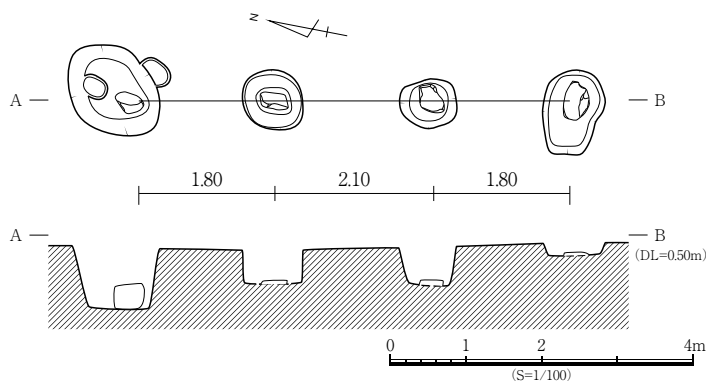


図167 SA-301

須恵器片1点、平瓦2点がみられた。図示した遺物は2182で北から1間目の柱穴より出土した。2182は陶器猪口で、内面から高台付近まで透明釉を施す。漆継の痕跡がみられる。

#### SK-306 (遺物：図168)

B-1区北西部で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.07m、短辺1.53m、深さ35cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器72点(碗8, 皿3, 播鉢1, 細片60), 磁器15点(碗4, 猪口1, 細片10), 土師質土器20点(皿2, 小皿3, 細片15), 土師器焙烙1点, 土製品人形1点, 石製品1点が出土している。図示した遺物は2183～2187である。2183は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面は二重網目文, 内面は菊花文の染付, 高台内には方形枠に渦「福」の銘がみられる。2184は肥前産の磁器染付猪口で、外面には雨降文の染付がみられる。2185は土師質土器皿で、調整は回転ナデ, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用したものとみられる。2186は白色系の土製品人形で、座る人物である。全面にナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。2187は石製品で鋳型とみられる。全面を研磨し、上面には円形と台形、弧状の凹みがみられる。2429と組とみられる。図示した遺物の他に唐津系灰釉陶器皿や陶器色絵碗、関西系焙烙も出土している。

#### SK-307 (遺物：図168)

SK-306の東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、検出長1.57m、全幅1.15m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器皿1点と土師質土器2点(皿1, 細片1)がみられた。図示した遺物は2188で、肥前武雄系の陶器鉢である。口縁部外面に白化粧土による刷毛目文を施したのち内面から口縁部外面に灰釉, 外面体部下半から高台まで鉄釉を施す。口縁端部は釉ハギする。

#### SK-308 (遺物：図168)

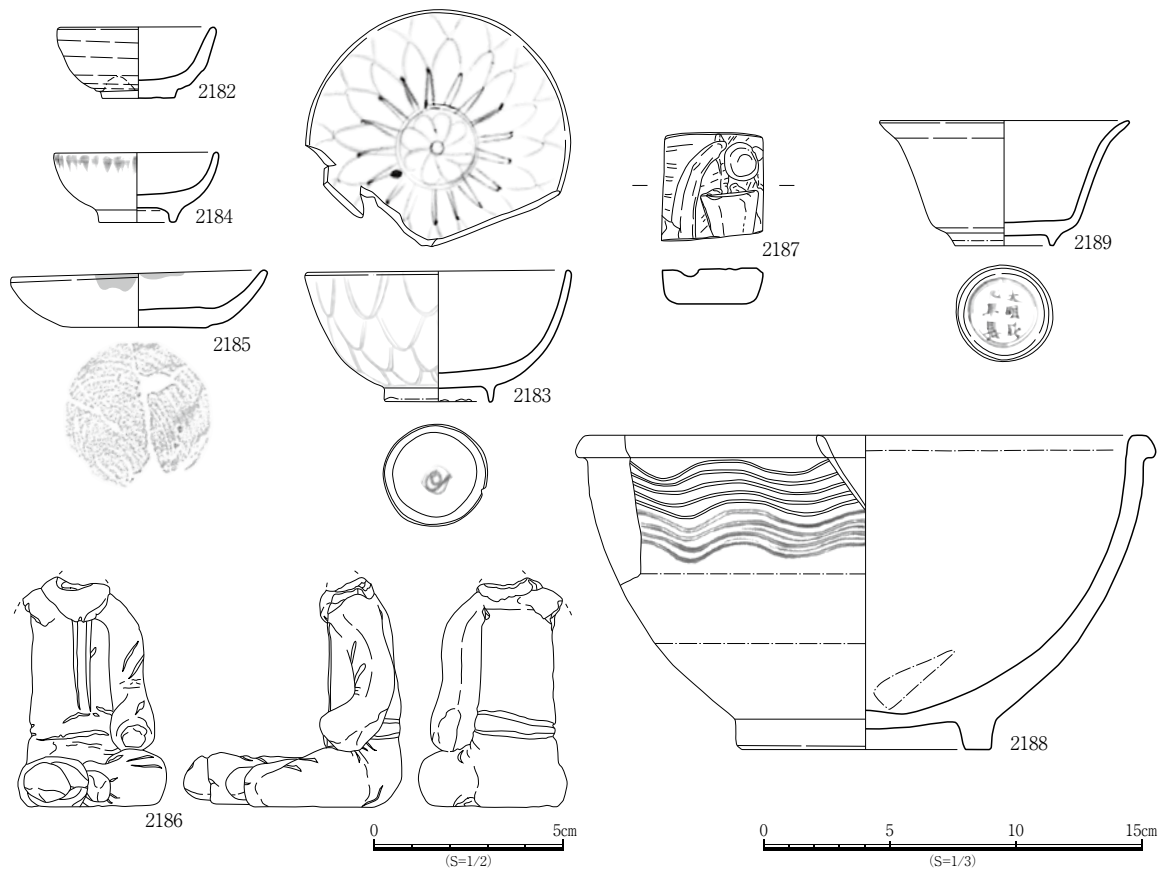
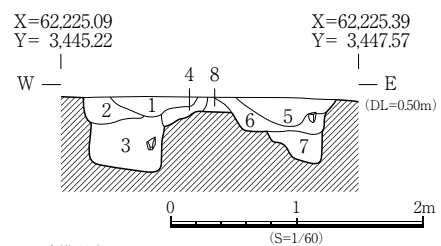


図168 SA-301, SK-306~308出土遺物実測図

SK-306の南で確認した土坑で、SX-317に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.83m、短辺1.73m、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5~3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器3点(播鉢1, 細片2), 磁器5点(小杯2, 段重1, 細片2)がみられた。図示した遺物は2189で、肥前産の青磁染付杯である。外面は青磁釉, 内面と高台内は透明釉で、高台内には圏線の染付と「大明成化年製」の銘がみられる。

SK-309(遺構: 図169 遺物: 図170)

SK-308の東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.92m、短辺0.67m、深さ39cmを測る。埋土は2層に分かれ、木片と腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器60点(碗13, 皿2, 瓶3, 細片42), 磁器23点(小杯2, 猪口1, 瓶1, 細片19), 土師質土器6点(小皿3, 細片3), 瓦質土器6点(火鉢1, 細片5), 木製品木簡5点がみられた。図示した遺物は2190~2196である。2190は下層より出土した陶器瓶で、外面は鉄釉, 内面の一部には灰釉が掛かる。外面には多条の沈線がみられ、一部を凹ませ人形を貼付する。2191は上層より出土した肥前産の磁器染付瓶で、外面に「御神前」銘がみられる。2192~2196は木製品である。2192は漆器蓋で、外面は黒塗, 内面は赤塗である。2193は上層より出土した木簡で、短冊



遺構埋土

1. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質細粒砂で、1~2cm大の礫と炭を含む(遺構)
2. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質中粒砂で、木片を非常に多く含む(SK-309)
3. 黒褐色 (10YR3/1) 中粒砂質シルトで、木片と腐植を非常に多く含む(SK-309)
4. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含む(遺構)
5. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質中粒砂で、中1~2cm大の礫が多く、木片を含む(SD-303)
6. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質中粒砂で、1cm大の礫と木片を多く含む(SD-303)
7. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂質シルトで、木片と腐植を非常に多く含む(遺構)
8. 灰色 (5Y5/1) シルト質細粒砂で、0.5cm大の礫を含む(遺構)

図169 SK-309, SD-303



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

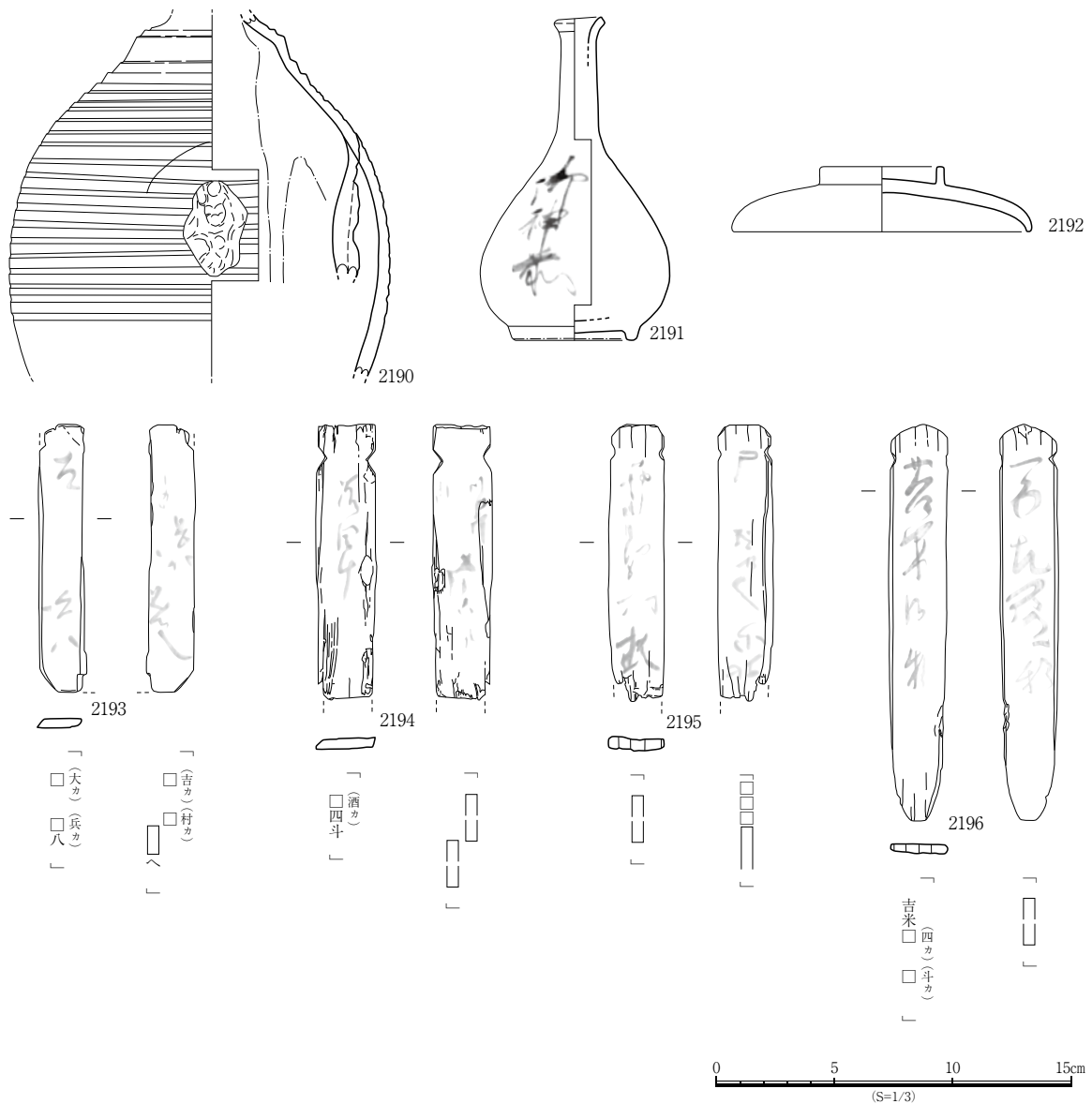


図170 SK-309出土遺物実測図

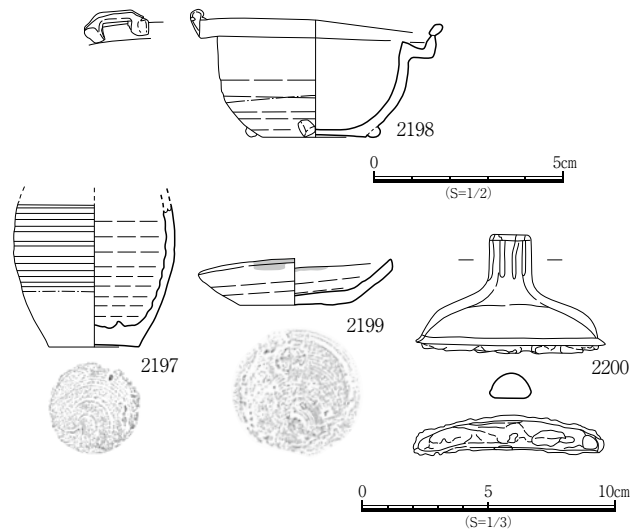
形を呈し、下端の片隅を切る。表面には「□(吉カ)□(村カ) □へ」、裏面には「□(大カ)□(兵カ)八」の墨書がみられる。2194は下層より出土した木簡で、上部側面に切り込みを入れる。表面は解読不可で、裏面は「□(酒カ)四斗」の墨書がみられる。2195も下層より出土した木簡で、上端両隅を切り、上部側面に切り込みを入れる。両面に墨書がみられるが解読不可であった。2196は上層より出土した木簡で、上端を尖らせ、上部側面に切り込みを入れ、下部は細く加工する。裏面は「吉米□(四カ)□(斗カ)」, 表面は解読不可であった。

SK-310

SK-306の南東で確認した土坑で、SK-311, SX-305, SD-302に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径1.77m, 短径1.34m, 深さ49cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、粗粒砂と1cm大の礫、木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器7点(碗1, 皿2, 瓶1, 細片3), 磁器6点(碗2, 猪口1, 細片3), 土師質土器片4点, 石製品砥石1点がみられた。

SK-311(遺物:図171)

SK-310の東で確認した土坑で, SK-310を切る。平面形態は不整形を呈し, 検出長2.28m, 検出幅2.18m, 深さ7cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1, 皿1, 茶入1), 磁器片1点がみられた。図示した遺物は2197で, 陶器茶入とみられる。回転ナデ調整で, 底部外面は回転糸切り調整である。外面は胴部下半まで鉄釉を施す。



SK-312(遺物:図171)

SK-310の南で確認した土坑で, SD-302を切り, SD-303に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.64m, 短辺0.57m, 深さ63cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く, 0.5~1cm大の礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗7, 皿1, ミニチュア1, 細片10), 磁器7点(紅皿2, 細片5), 土師質土器7点(皿1, 小皿1, 細片5), 木製品刷毛1点がみられた。図示した遺物は2198~2200である。2198は陶器ミニチュアである。鍋形を呈し, 把手と脚を貼付する。内面から体部外面まで鉄釉を施す。2199は土師質土器小皿で, 調整は回転ナデ, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し, 灯明皿として使用されたものとみられる。2200は木製品漆器刷毛である。柄は短く, 断面は半円形を呈し, 表面には丸彫による縞文がみられる。表面は赤塗, 裏面は黒塗で, 先端は湾曲し, 接着剤らしき付着物がみられる。

図171 SK-311・312出土遺物実測図

SK-313(遺物:図172)

SK-310の東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.11m, 短辺0.67m, 深さ40cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでおり, 底には木片が多くみられた。出土遺物には陶器片3点, 磁器片1点, 木製品羽子板1点がみられた。図示した遺物は2201で, 木製品羽子板である。

SK-314(遺物:図172)

B-1区北部で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.54m, 短径0.79m, 深さ62cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で, 円礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器片5点, 磁器5点(碗2, 紅皿1, 細片2), 土師質土器片2点, 瓦質土器片1点, 鉄釘2点がみられた。図示した遺物は2202で, 肥前産の磁器染付小碗である。外面に網目文と圏線, 見込には植物文の染付がみられる。

SK-315(遺物:図172)

B-1区北東部で確認した土坑で, 他の遺構に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.33m, 全幅1.11m, 深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く, 多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器碗1点, 土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2203で, 尾戸窯の陶器丸碗である。内面から高台付近まで灰釉を施し, 見込には4箇所目痕が残る。

SK-316(遺物:図172)

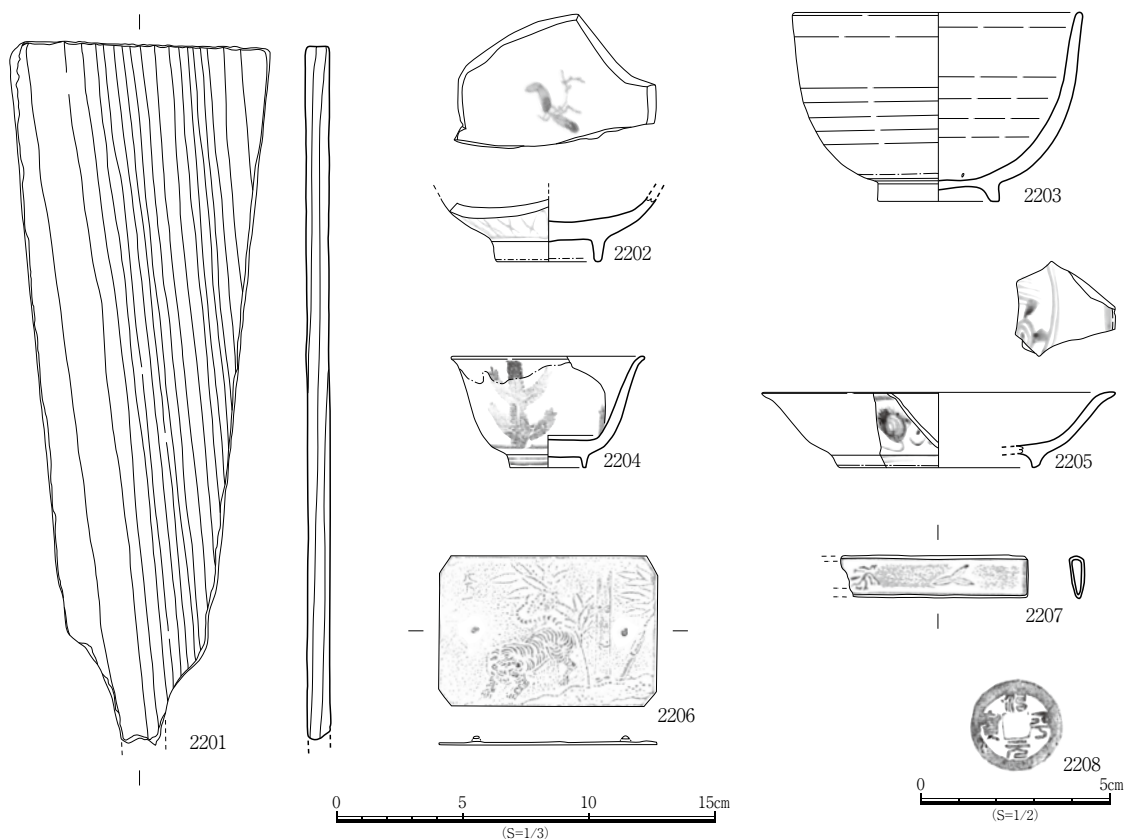
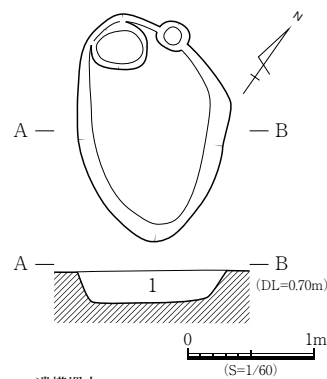


図172 SK-313～316出土遺物実測図

SK-315の南で確認した土坑で、SD-306を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径2.20m、短径1.70m、深さ70cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で、多量の0.5～1cm大の礫と炭化物、焼土を含んでいた。出土遺物には陶器44点(碗4, 皿4, 小杯2, 瓶1, 甕1, 灯明受皿1, 鍋1, 細片30), 磁器40点(碗2, 蓋1, 皿4, 小杯6, 香炉1, 細片26), 青花皿1点, 土師質土器17点(杯1, 皿1, 細片15), 金属製品3点がみられた。図示した遺物は2204～2208である。2204は肥前産の磁器染付小杯で、外面には鉄錆による圏線とコンニャク印判による松文がみられる。2205は中国景德鎮窯系の青花皿で、内外面に染付がみられる。2206は銅製の鏡で、隅切方形を呈する。背面には鈕が2箇所と、竹と虎文、「天下一」の陽刻文様がみられる。2207は銅製の小柄で、中空で断面は三角形を呈する。外面の片面に打ち出しの笹文がみられる。2208は銭貨で、篆書の治平元寶とみられる。

SK-317(遺構:図173 遺物:図174)

SK-316の北東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.84m、短径1.22m、深さ26cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器10点(皿1, 瓶3, 挿鉢1, 細片5), 磁器9点(皿1, 盃1, 蕎麦猪口1, 火入1, 細片5), 土師質土器6点(皿1, 小皿1, 細片4), 木製品漆器椀1点がみられた。図示した遺物は2209～2213である。2209・2210は焼締陶器瓶で、外面は回転ナデ調整、底部外面は回転削り調整である。底部外面には2209が「◇」形



遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を含む

図173 SK-317

の刻印, 2210は刻書がみられる。2211も焼締陶器瓶で, 胴部は回転ナデ調整, 底部外面はナデ調整である。胴部外面には鉄釉を施す。2212は肥前系の磁器染付猪口で, 桶形を呈する。外面には雨降文と土坡に草花文・圏線, 高台内には方形枠に渦「福」の銘と圏線の染付がみられる。2213は磁器火入で, 口縁部内面から外面に白磁釉を施し, 畳付は釉ハギする。見込には輪状に砂が付着する。

SK-318(遺物: 図174)

SK-317の東で確認した土坑で, SX-315の底で検出した。SX-314に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長78cm, 検出幅71cm, 深さ41cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点, 磁器3点(小杯1, 蕎麦猪口1, 紅皿1), 土師質土器皿1点がみられた。図示した遺物は2214で, 肥前内野山窯の陶器皿である。内面は銅緑釉を施し, 見込を蛇ノ目釉ハギし, 外面は高台付近まで透明釉を施す。

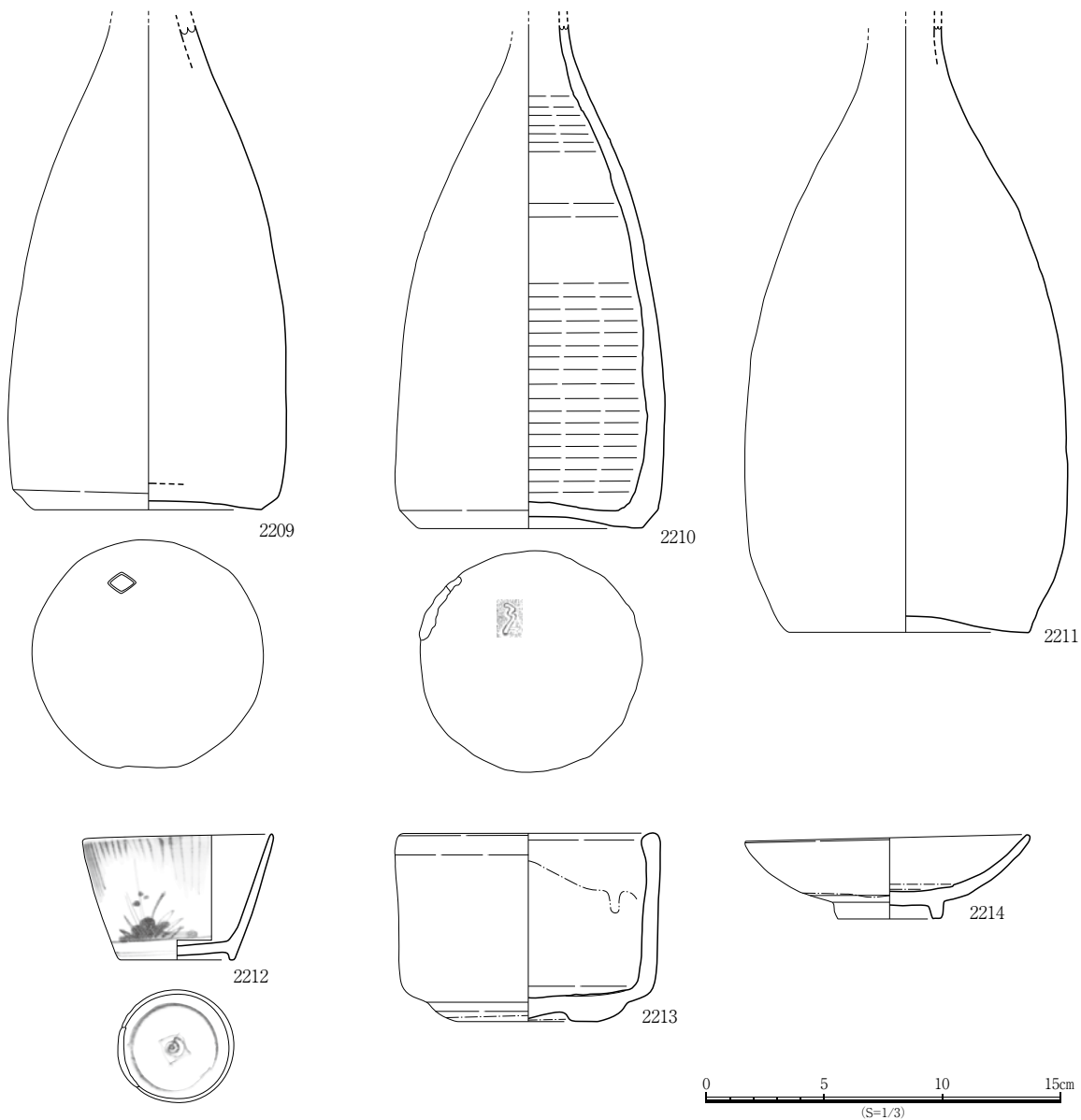


図174 SK-317・318出土遺物実測図

SK-319

中央部で確認した土坑で、SG-301の底で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、長径2.14m、短径1.32m、深さ42cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物、焼土を含んでいた。出土遺物には陶器10点(皿1, 播鉢1, 灯明受皿1, 細片7), 磁器11点(碗2, 皿2, 蓋1, 猪口1, 瓶1, 水滴1, 細片3), 丸瓦1点がみられ、磁器色絵碗なども出土している。

SK-320

SK-319の北東で確認した土坑で、SG-402の底で検出した。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.81m、短辺1.94m、深さ19cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、3cm大の礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には陶器7点(火入1, 細片6), 磁器3点(皿1, 杯1, 細片1), 土師質土器片2点がみられた。

SK-321 (遺物: 図175)

SK-320の東で確認した土坑で、SE-301を切る。平面形態は不整円形を呈し、径1.48m、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く、0.5~1cm大の礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗3, 皿10, 播鉢1, 餌鉢1, 細片4), 磁器14点(碗1, 蓋2, 灯明受皿1, 細片10), 土師質土器6点(皿1, 細片5), 木製品1点がみられた。図示した遺物は2215~2218である。2215は京都または京都系の陶器筒形碗である。口鏝で、内面から高台付近まで灰釉を施す。2216は唐津系灰釉陶器皿で、内面から口縁部外面まで灰釉を施し、見込には胎土目痕が残る。2217は備前焼播鉢で、回転ナデ調整のち内面に播目を付ける。播目は体部が垂直方向と斜め方向、見込は「×」状に施される。2218は木製品切匙で、先端は薄く加工する。

SK-322 (遺物: 図176)

SK-321の南東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.07m、短辺0.77m、深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿2点, 磁器2点(小杯1, 火入1), 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2219~2221である。2219は唐津系灰釉陶器皿で、内面から体部外面まで灰釉を施す。見込には砂目痕が

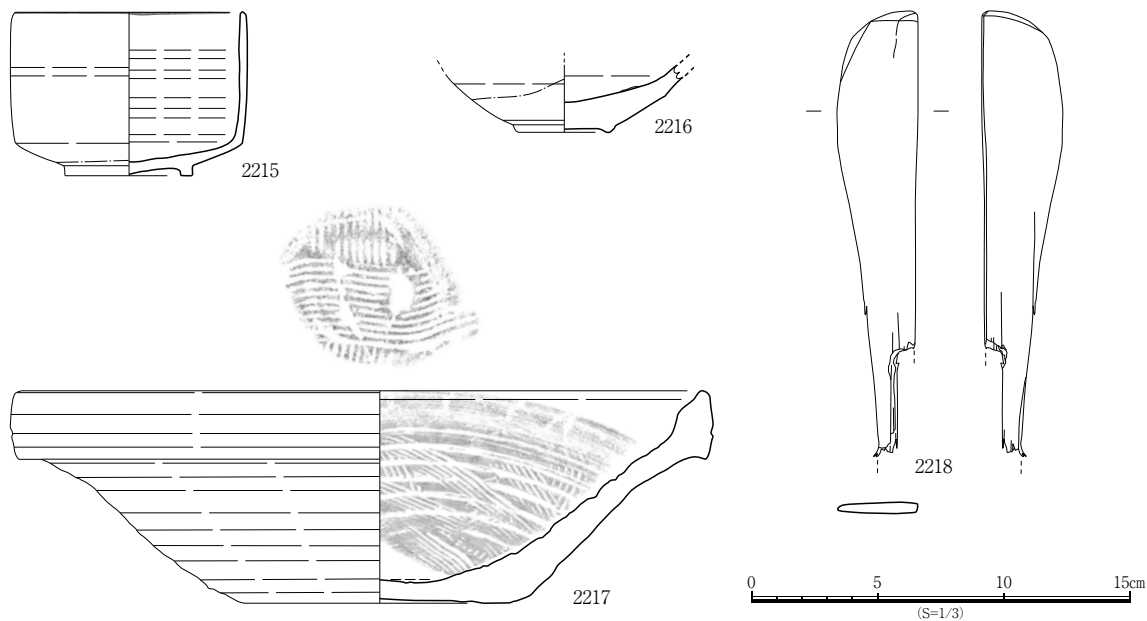


図175 SK-321出土遺物実測図

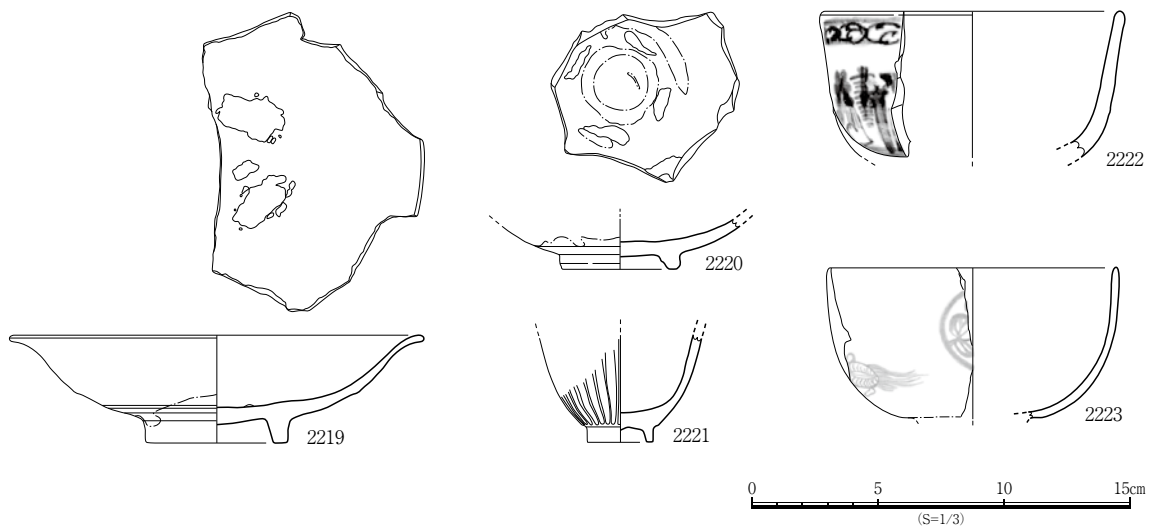


図176 SK-322～324出土遺物実測図

みられる。2220は肥前内野山窯の陶器皿で、内面は銅緑釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギし、砂目痕が残る。外面には透明釉を施す。2221は肥前産の白磁小杯で、外面に丸彫による縞文がみられる。

SK-323(遺物：図176)

B-1区西部で確認した土坑で、SX-317を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径1.82m、短径1.14m、深さ9cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗3、甕1、細片1)、磁器2点(碗1、小杯1)がみられた。図示した遺物は2222で肥前産の陶胎染付碗である。外面に山水文の染付がみられる。

SK-324(遺物：図176)

SK-323の北で確認した土坑で、SK-325、SX-317・318を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径2.93m、短径1.50m、深さ28cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器8点(碗3、瓶1、鉢1、細片3)、磁器2点(碗1、猪口1)、土師質土器片3点、須恵器片1点、軒丸瓦1点がみられた。図示した遺物は2223で、陶胎染付碗である。外面には丸文と亀文の染付がみられる。

SK-325(遺物：図177)

SK-324の北で確認した土坑で、SX-317を切り、SK-324に切られる。平面形態は不整形を呈し、検出長1.55m、全幅1.43m、深さ9cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には磁器2点(碗1、瓶1)がみられた。図示した遺物は2224で、磁器瓶である。回転ナデ調整で、外面の体部下半には回転削り調整を加え、底部外面は回転糸切り調整である。胴部外面には鉄釉を施す。

SK-326(遺物：図177)

SK-325の南東で確認した土坑で、SK-327に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.86m、短辺1.73m、深さ34cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器23点(碗4、皿4、蓋1、猪口1、鉢1、水盤1、灯明受皿1、土瓶1、細片9)、磁器14点(碗3、蓋2、皿2、小杯1、猪口1、紅皿1、火入1、瓶1、細片2)、土師質土器24点(皿6、小皿5、細片13)、須恵器片1点、瓦4点(丸瓦1、平瓦1、細片2)、木製品漆器碗1点がみられた。図示した遺物は2225～2231である。2225



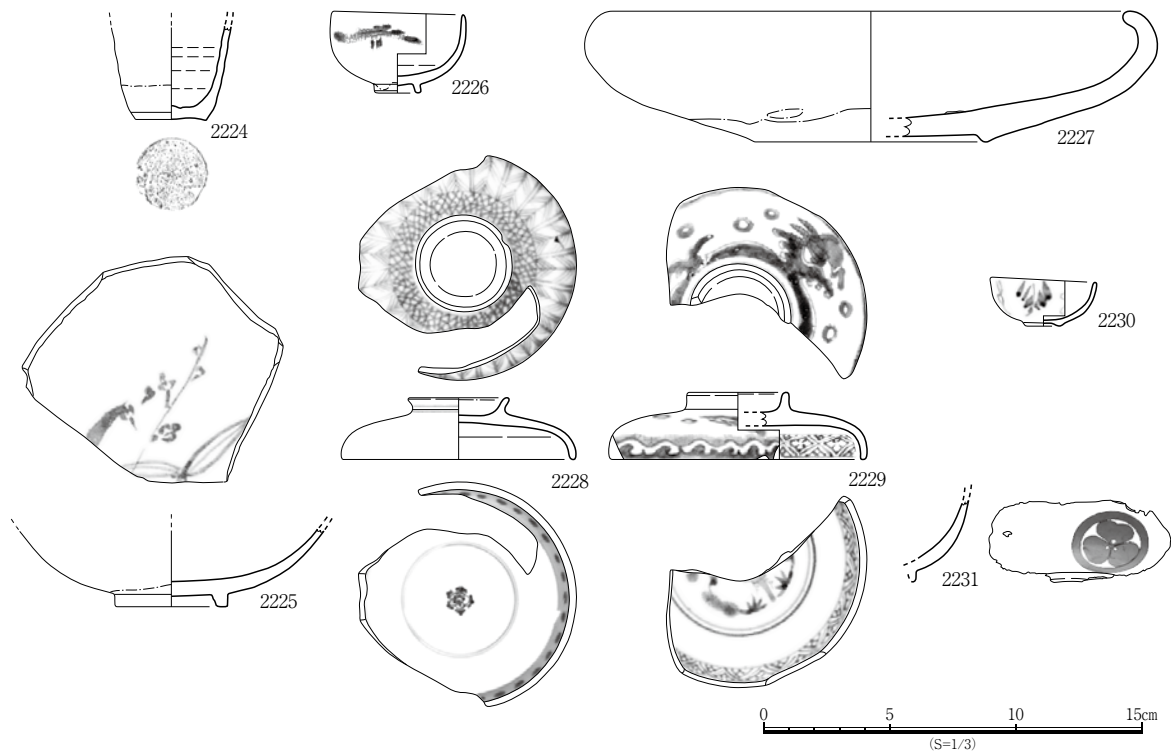


図177 SK-325・326出土遺物実測図

は京都系の陶器皿で、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には鉄錆による草花文がみられる。2226は陶器猪口で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による笹文がみられる。2227は陶器水盤で、内面から体部外面まで灰釉を施す。見込には1箇所目痕が残る。2228・2229は肥前産の磁器染付碗蓋で、望料形である。2228は外面に氷裂文と矢羽根文・圏線、天井部内面に五弁花文と圏線、口縁部内面には帯線に丸文の染付がみられる。2229は外面には波に兔文・圏線、天井部内面に環状の松竹梅文、口縁部内面には四方櫛文の染付がみられる。2230は磁器染付猪口である。型打成形で、外面に柳文とみられる染付を描く。2231は木製品漆器碗で、外面は黒塗で金の丸文に片喰文、内面は赤塗である。

SK-327(遺物: 図178)

SK-326の東で確認した土坑で、SK-326を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.89m、短辺1.41m、深さ19cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器37点(碗5, 皿4, 猪口2, 鉢4, 水盤1, 灯明受皿1, 土瓶1, 細片19), 磁器35点(碗9, 皿1, 蓋2, 小杯1, 香炉1, 瓶6, 細片15), 土師質土器12点(杯2, 小皿5, 細片5), 須恵器片1点, 瓦片2点, 木製品箸1点がみられた。図示した遺物は2232~2238である。2232は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、全面に灰釉を施し、外面には朱・緑色の片喰文がみられる。2233は瀬戸・美濃産とみられる灰釉陶器波縁皿で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。2234は肥前産の磁器染付丸碗で、外面には梅文、内面には四方櫛文と圏線の染付がみられる。2235は肥前系の磁器染付碗蓋とみられ、外面には天地逆の梅樹と松文の染付を描く。2236も肥前系の磁器染付碗蓋とみられ、外面には天地逆の松竹梅文と波文、内面には天井部に文字、口縁部に四方櫛文の染付を描く。2237は肥前産の磁器染付瓶で、胴部外面に「御神□(前カ)」の銘がみられる。2238は土師器火鉢で、円筒形を呈する。器面は著しく摩耗

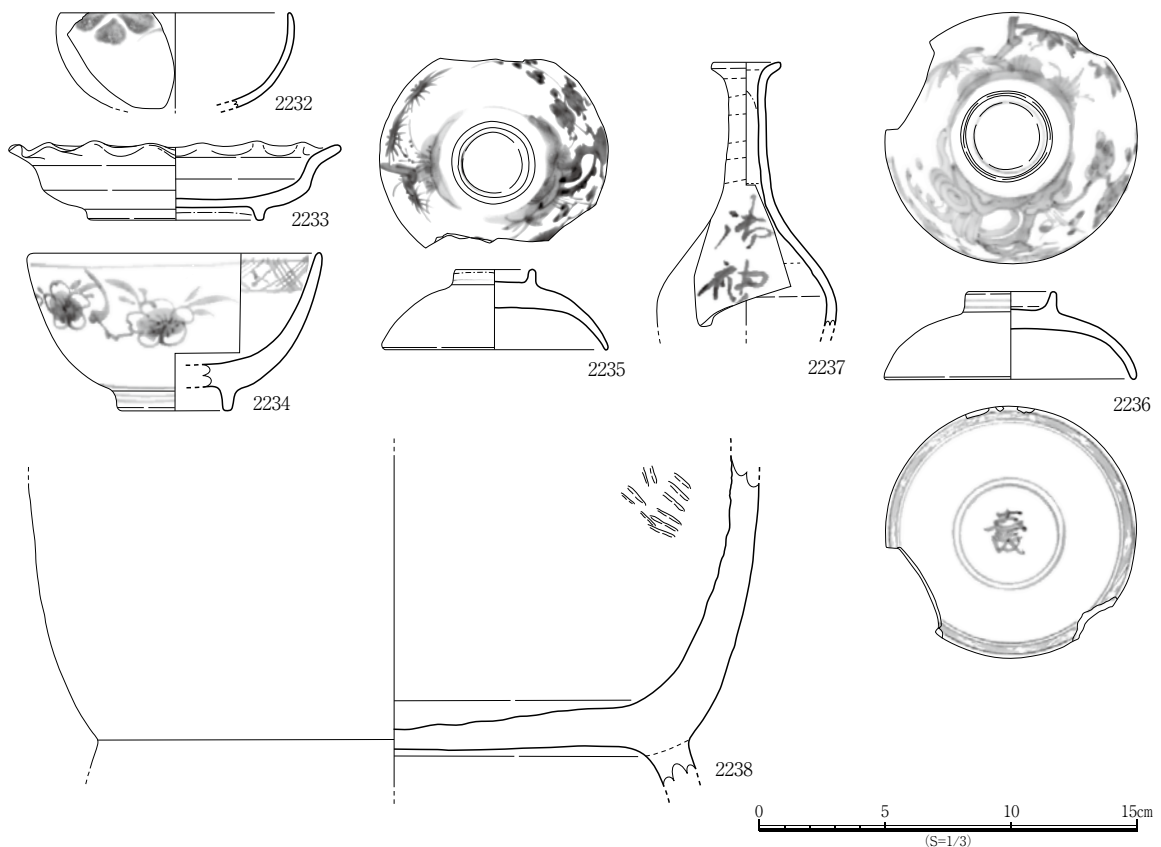


図178 SK-327出土遺物実測図

するため調整は不明で、胴部内面には叩目が僅かに残る。脚部は接合面に刻目を入れて貼付する。

SK-328(遺物：図179)

SK-327の東で確認した土坑で、SK-327に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.35m、短辺0.86m、深さ32cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く、0.5～1cm大の礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器30点(碗7, 皿4, 蓋2, 猪口1, 播鉢2, 鍋1, 餌鉢1, 細片12), 磁器23点(碗8, 皿1, 蓋2, 猪口1, 紅皿2, 火入1, 瓶1, 細片7), 土師質土器3点(皿1, 小皿1, 細片1), 土師器焜炉1点, 瓦質土器片1点がみられた。図示した遺物は2239～2247である。2239は陶器碗で、全面に灰釉を施す。2240は肥前産の磁器染付小碗で、外面には笹文と圏線の染付がみられる。2241は肥前産による磁器染付丸碗で、外面には帯線と圏線、口縁部内面に帯線と圏線、見込に圏線の染付とコンニャク印判による五弁花文がみられる。2242は肥前産の磁器染付小皿で、外面と高台内には松葉文と圏線、内面に菊唐草文と圏線の染付、見込にコンニャク印判による五弁花文がみられる。2243・2244は肥前産の磁器染付碗蓋で、望料形である。2243は外面には桜文、天井部内面に桜文と圏線、口縁部内面に四方嚮文の染付がみられる。2244は外面と天井部内面には草花文と圏線、口縁部内面に四方嚮文の染付がみられる。2245は磁器染付猪口で、外面に鋸歯文の染付がみられる。2246は肥前産の青磁火入で、外面に青磁釉を施し、暈付は釉ハギする。内面は体部の一部に青磁釉が流れ、見込は無釉で輪状に砂が付着する。2247は土師器焜炉で、円筒形を呈する。前方には切り込みの窓を持ち、口縁部には角状突起と円孔、底部には弧状の抉りを持つ脚が付く。内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整、胴部外面は横方向の磨き調整、底部外面は無調整、脚部は横ナデ調整である。脚部には刻

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

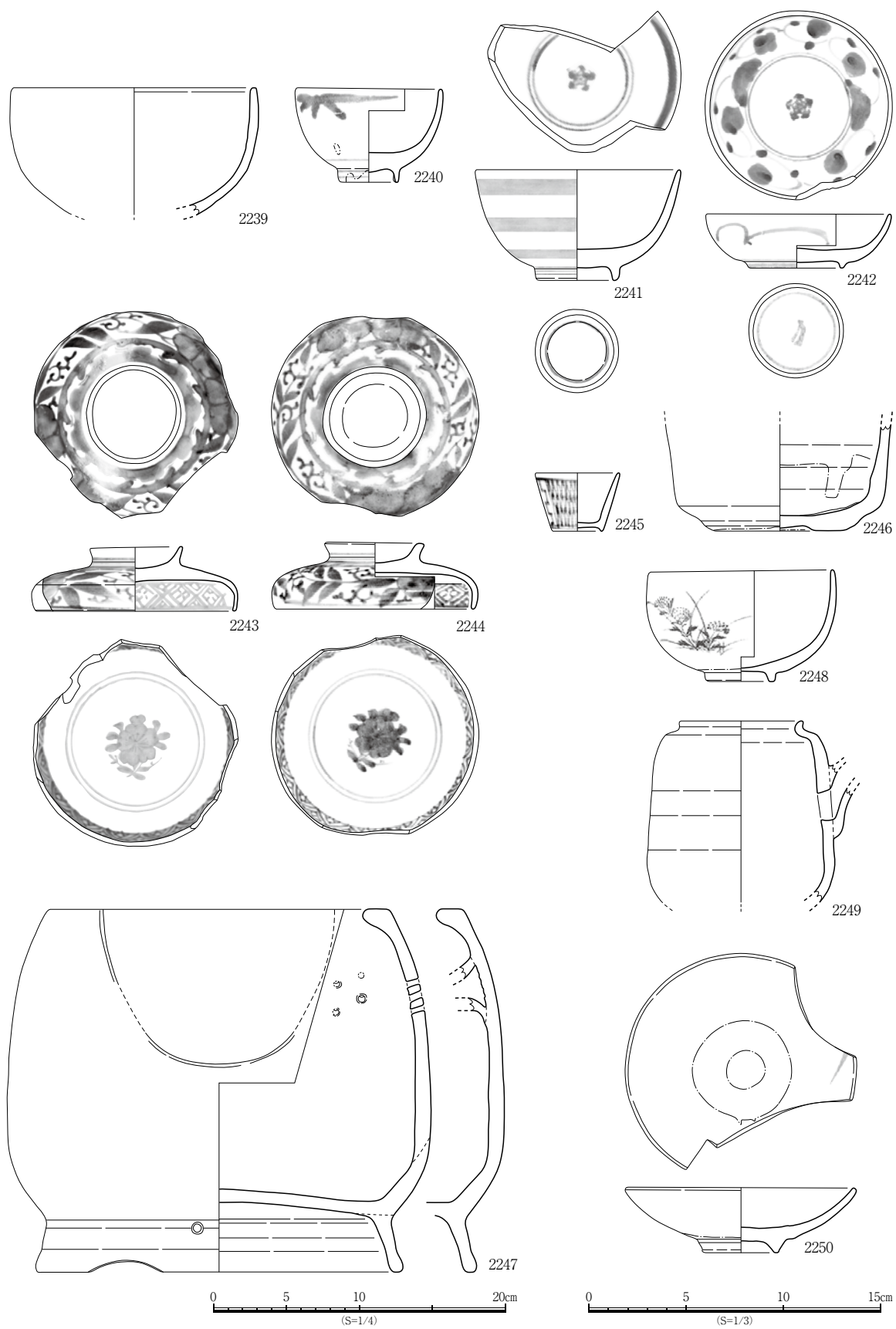
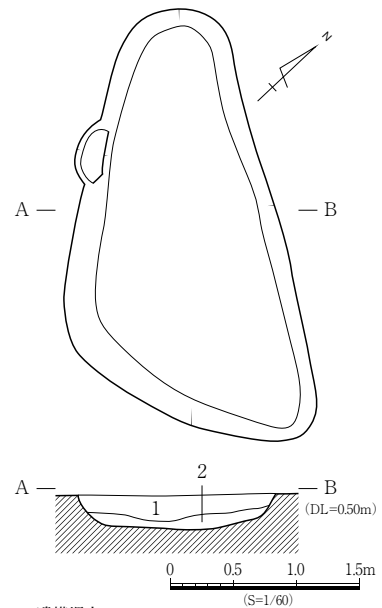


図179 SK-328・329出土遺物実測図

印がみられる。

SK-329(遺構：図180 遺物：図179)

SK-328の北東で確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し、全長3.31m、全幅1.52m、深さ30cmを測る。埋土は2層に分かれ、下層には腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器7点(碗3, 鉢1, 水注1, 台1, 細片1), 磁器9点(皿1, 蓋1, 猪口1, 細片6), 土師質土器8点(皿1, 小皿3, 細片4), 木製品漆器片2点がみられた。図示した遺物は2248~2250である。2248は下層より出土した京都系の陶器半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による萩文がみられる。2249は上層より出土した陶器水注で、外面には鉄釉を施す。2250は上層より出土した肥前産の磁器皿で、内面から高台付近まで透明釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギし、内面の一部に鉄錆による文様がみられる。

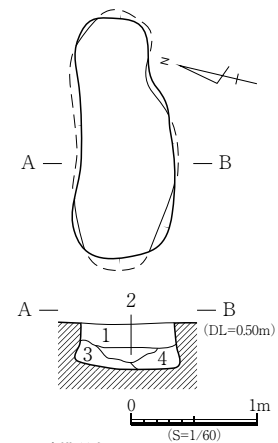


遺構埋土  
 1. 黄灰色(25Y5/1)中粒砂質シルトで、1~2cm  
 大の礫と炭化物を多く含む  
 2. 灰褐色(5YR5/2)中粒砂質シルトで、1~2cm  
 大の礫と炭化物・腐植を多く含む

図180 SK-329

SK-330(遺構：図181 遺物：図182)

SK-329の南で確認した土坑で、P-318を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.91m、短辺0.81m、深さ40cmを測る。断面は袋状を呈し、側面は上部が窄まる。埋土は4層に分かれ、下層には腐植や木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器30点(碗6, 皿1, 蓋2, 鉢1, 甕2, 細片18), 磁器11点(碗3, 皿1, 紅皿3, 細片4), 土師質土器13点(皿3, 小皿4, 細片6), 木製品11点(漆器蓋1, 漆器片1, 木筒2, 箸5, 曲物蓋2), 麻紐1点がみられた。図示した遺物は2251~2259である。2251は埋土2より出土した京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、内面から高台付近まで透明釉または灰釉を施す。外面には朱・緑色の上絵付による文様がみられる。2252は呉器手の灰釉陶器碗で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。2253は尾戸窯の陶器輪花皿で、全面に透明釉を施し、見込には鉄錆と白化粧土による草花文がみられる。2254は肥前産の磁器染付丸碗で、外面に草花文と梅文・圏線、高台内には圏線の染付がみられる。2255は埋土1より出土した肥前産の磁器染付丸碗で、外面には笹文、内面には四方禰文と圏線の染付がみられる。2256は埋土2より出土した肥前産の磁器染付碗で、望料形を呈する。外面に花唐草文と圏線、口縁部内面に四方禰文、見込には草花文と圏線の染付がみられる。2257は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2258は木製品木筒で、短冊形を呈し、側面は丸く加工する。表面には「渡辺」の墨書がみられる。2259は埋土2より出土した木製品曲物蓋である。楕円形を呈し、曲物は皮綴で天井部と曲物部分は6箇所を木釘で留めている。接合箇所は黒色化しており、漆で接着している可能性もある。天井部外面には「邑」または「色」とみられる墨書が残る。



遺構埋土  
 1. 褐灰色(10YR6/1)シルト質細粒砂で、1cm大の円礫を多く含む  
 2. 灰黄色(25Y6/2)中粒砂質シルト  
 3. 黒褐色(25Y3/1)シルト質砂で、腐植を非常に多く含む  
 4. 灰白色(10YR7/1)シルトで、細粒砂と炭化物・木片を含む

図181 SK-330

SK-331(遺構：図183 遺物：図185)

SK-330の東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.92m、短辺0.63m、深さ32

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

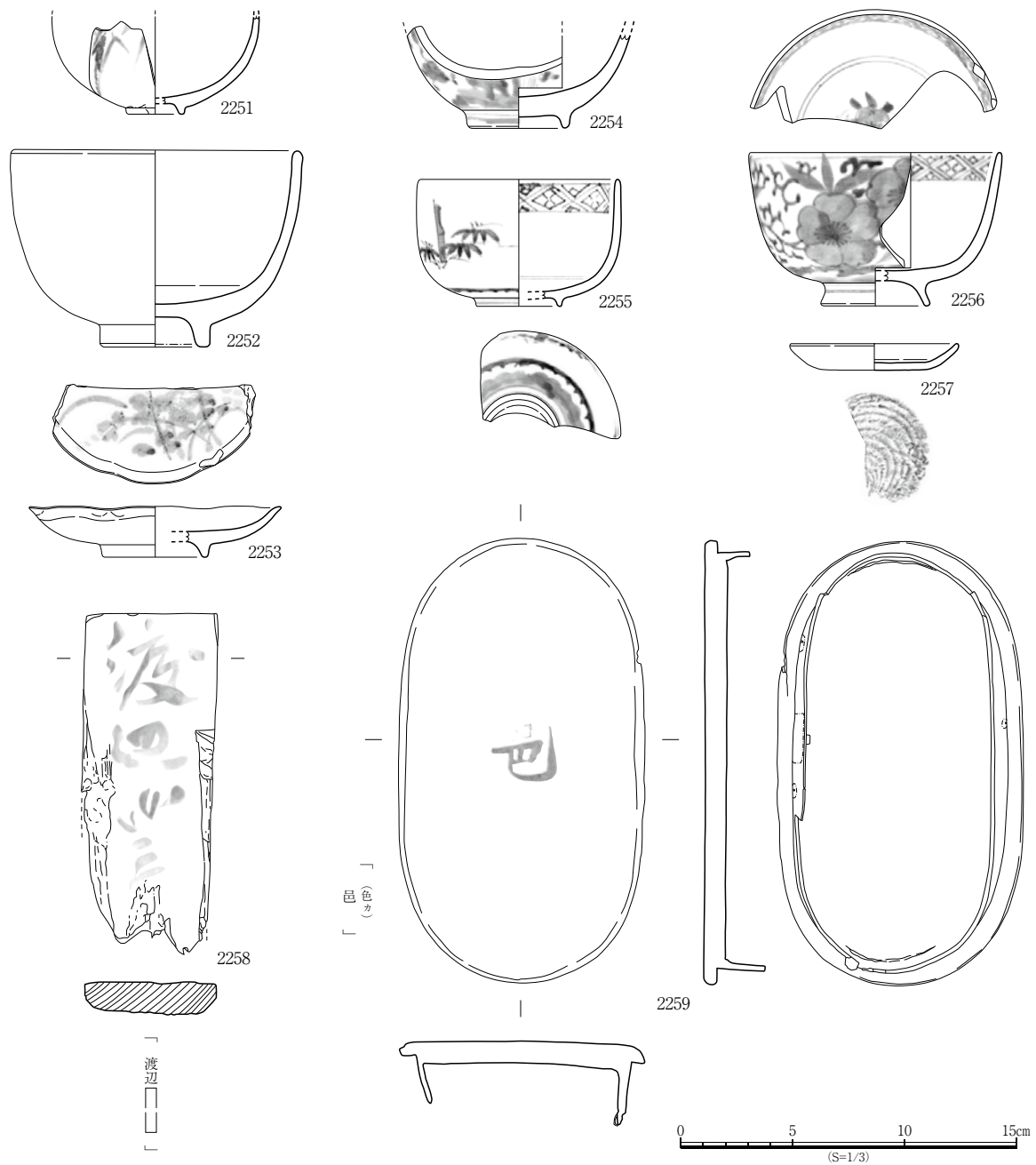


図182 SK-330出土遺物実測図

cmを測る。断面は箱形を呈し、埋土は3層に分かれる。出土遺物には陶器45点(碗12, 皿3, 猪口3, 鉢4, 灯明受皿2, 餌鉢1, 細片20), 磁器24点(碗8, 蓋3, 瓶3, 仏飯器1, 細片9), 土師質土器16点(皿1, 小皿5, 白土器2, 細片8), 土師器2点(焙烙1, 細片1), 瓦質土器火鉢1点, 土製品人形2点, 木製品7点(漆器片1, 木筒1, 箸4, 曲物蓋1), 麻紐1点がみられた。図示した遺物は2260~2269である。2260は埋土2より出土した肥前産の磁器染付小丸碗で, 外面には「福」字と花文・圏線, 内面には圏線の染付がみられる。2261は肥前産の青磁染付丸碗で, 内面と高台内に透明釉, 外面に青磁釉を施す。口縁部内面には四方襷文の染付, 見込にコンニャク印判による五弁花文と圏線の染付, 高台内には二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。2262は肥前産の青磁染付碗蓋で, 内面と摘内に透明釉, 外面に青磁釉を施す。天井部内

面はコンニャク印判による五弁花文と圏線の染付、口縁部内面に四方禰文、摘内には二重方形枠に渦「福」の染付がみられる。2263は肥前産の磁器染付瓶で、外面に「御神前」銘の染付がみられる。2264は尾戸窯の白土器皿である。ナデ調整で、口縁部は横ナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の「寿」字文がみられる。2265は関西系の土師器焙烙である。底部は型成形で、内面から口縁部外面はナデまたは横ナデ調整である。口縁端部には円孔がみられ、口縁部外面には煤が付着する。2266は瓦質土器火鉢で、円筒形を呈する。底部には円柱形の脚を貼付する。内面から体部外面は回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。2267は土製品人形で、僧侶とみられる。型成形で、中空とみられ、内面はナデ調整である。2268は上層より出土した土製品人形で、人物形である。型成形で、中空とみられ、内面はナデ調整である。下面には径約6mmの円孔がみられる。2269は銅製品である。棒状の金具と輪状の金具は別作りで、棒状の金具の上端が湾曲して輪状の金具と連結している。

SK-332(遺物:図185)

SK-331の東で確認した土坑で、SD-310を切る。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ、全長1.36m、検出幅0.74m、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く、0.5~1cm大の礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器8点(碗1, 皿4, 灯明受皿1, 細片2), 磁器13点(碗2, 皿1, 小杯1, 紅皿1, 細片8), 土師質土器皿1点, 平瓦1点がみられ、京・信楽系の色絵碗も出土している。図示した遺物は2270で、絵唐津大皿である。口縁端部は口鏝, 内面には鉄鏝による文様がみられる。

SK-333(遺構:図184 遺物:図186)

SK-332の南で確認した土坑で、SD-310に切られる。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ、検出長1.37m、検出幅1.32m、深さ54cmを測る。埋土は2層に分かれ、下層は腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器27点(碗8, 皿2, 播鉢1, 甕1, 細片15), 磁器21点(碗9, 皿1, 猪口1, 蕎麦猪口1, 細片9), 土師質土器12点(小皿6, 細片6), 土師器17点(蓋6, 鉢3, 支脚1, 細片7), 瓦片1点, 木製品5点(漆器桶蓋または底板2, 漆器片1, その他2)がみられた。図示した遺物は2271~2282である。2271・2272は肥前産の陶器丸碗で、京焼風である。内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には山水文の染付がみられる。高台内には2271が「小松吉」、2272が「清水」の刻印がみられる。2273は京都系の杉形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には呉須と鉄鏝による松文がみられる。2274は丹波焼甕で、口縁部は水平に肥厚し、上端には3条の沈線がみられる。2275・2276は肥前産の磁器染付小丸碗である。2275は外面にコンニャク印判による五弁花文と染付による松葉文と圏線、高台内に圏線の染付がみられる。2276は外面にコンニャク印判による松文と鶴文、染付による鳥文と圏線、内面に圏線の染付、高台内に「大川□木」の銘がみられる。2277は肥前有田産

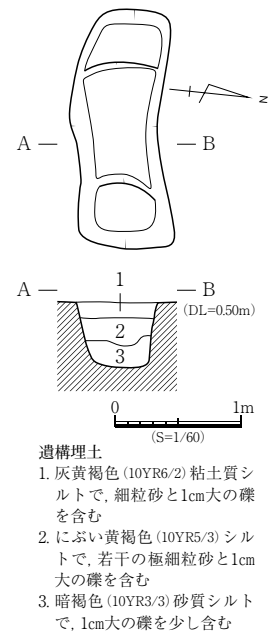


図183 SK-331

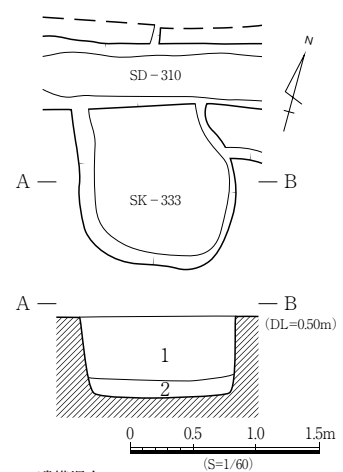


図184 SK-333



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

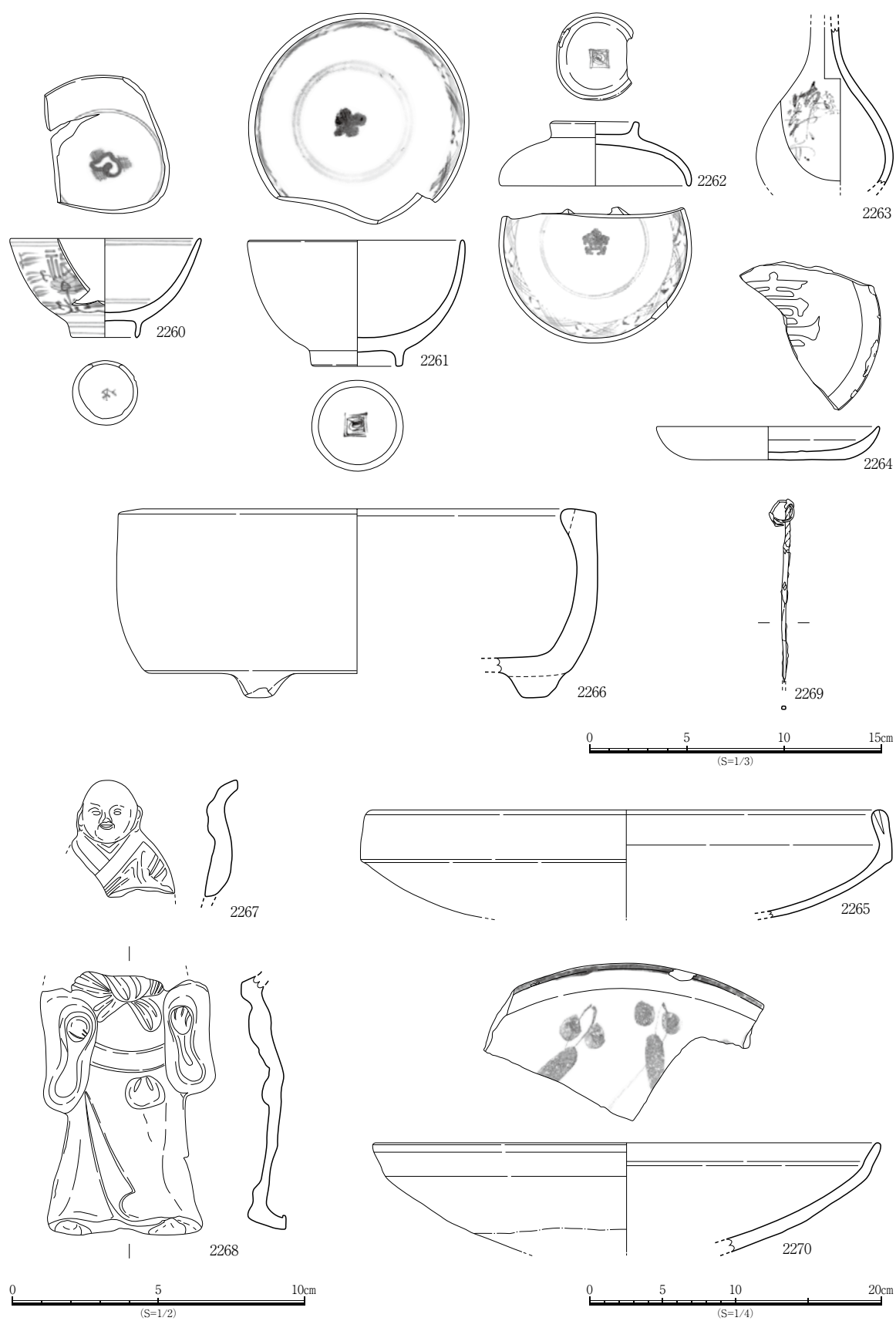


図185 SK-331・332出土遺物実測図

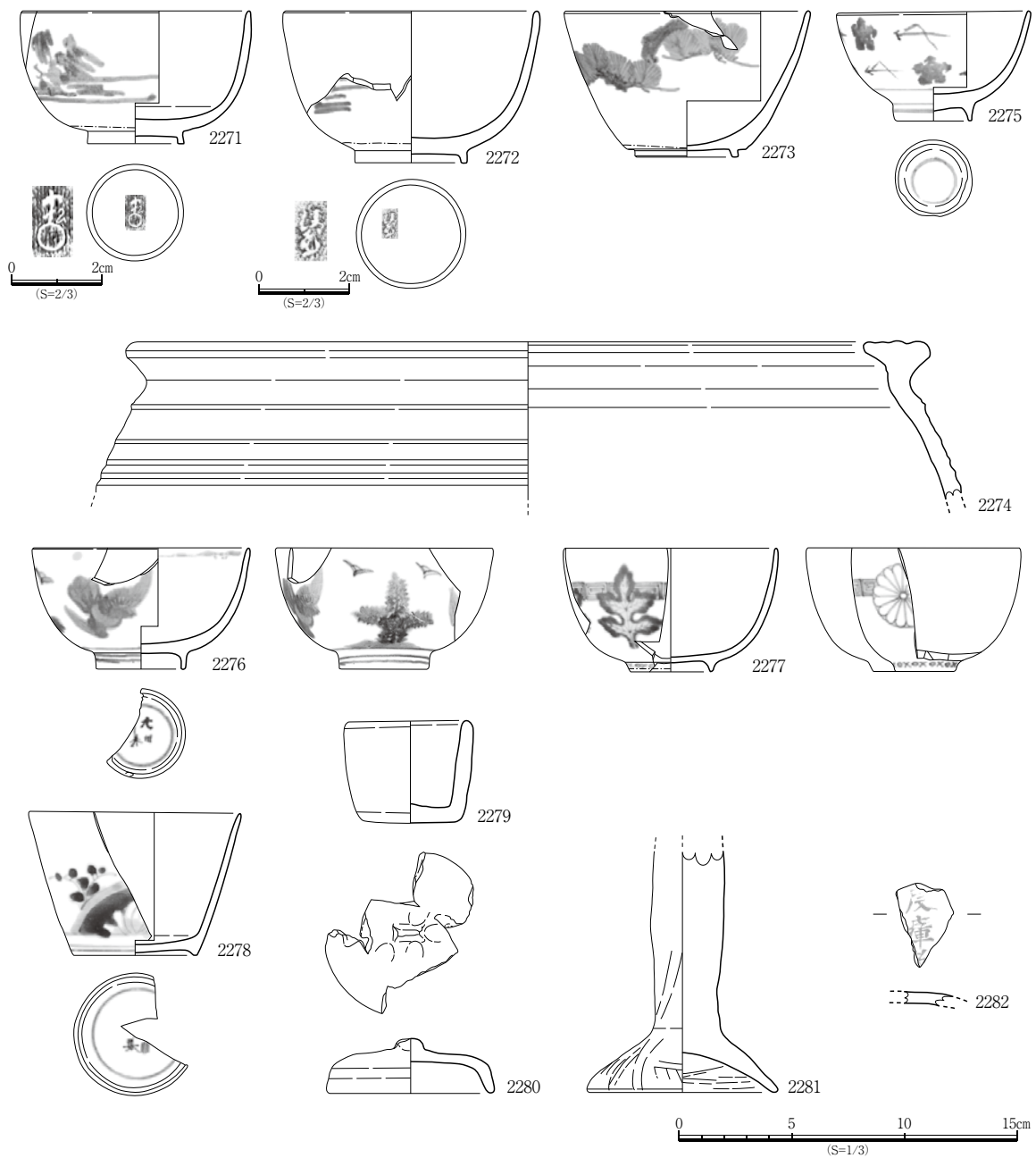


図186 SK-333出土遺物実測図

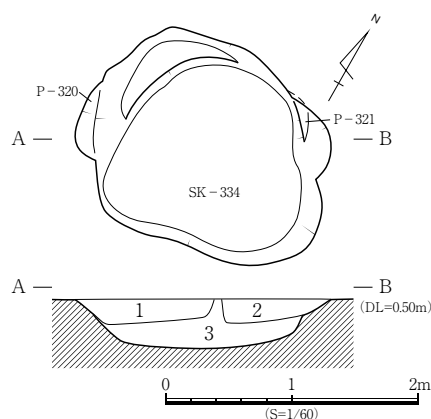
とみられる磁器染付丸碗で、外面に雷文帯と十六弁八重菊文・菊葉文、高台に○×文の染付を描く。2278は肥前産の磁器染付猪口で、外面には草花文とみられる染付、高台内には圈線と「大明年製」とみられる銘を描く。2279は土師器杯で、手捏成形とみられ、調整はナデで、口縁部は横ナデ調整である。2280は土師器蓋で、天井部には棒状の摘がみられる。調整はナデと横ナデとみられるが、器面は摩耗するため不明瞭である。2281は土製品支脚とみられ、脚部は中実で直立し、裾部はハの字状に開く。全面にナデ調整を施す。2282は土師器で、内外面にナデ調整を施し、片面には墨書がみられる。

SK-334(遺構：図187 遺物：図189)

SK-333の南西で確認した土坑で、P-321～323に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径1.97m、

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

検出幅1.60m, 深さ33cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く, 0.5~1cm大の礫と木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器15点(碗2, 皿3, 合子蓋1, 鉢2, 播鉢3, 細片4), 磁器47点(碗3, 皿21, 蕎麦猪口1, 合子蓋1, 瓶1, 鉢1, 細片19), 土師質土器片1点, 瓦4点(軒丸瓦1, 軒平瓦1, 鬼瓦か1, 細片1), 鉄製品1点がみられた。図示した遺物は2283~2289である。2283は京都系の陶器色絵合子蓋で, 全面に灰釉を施し, 口縁部内面は釉ハギする。天井部外面に朱・緑・白色の菖蒲文の上絵付がみられる。2284は肥前有田産の磁器色絵碗で, 外面に朱色の上絵付による文様, 内面に四方禪文の染付がみられる。2285・2286は中国景德鎮窯系の青花皿で, 高台内に鈎痕が残る。2285は見込に宝文とみられる文様, 2286は内面に濃地に白抜文様と草花文の染付を描く。2287は肥前有田産の磁器変形皿で, 扇形を呈するものとみられる。型打成形で, 型紙摺による文様が施され, 外面に雷文帯, 口縁部内面に唐草文, 見込に風景文がみられる。高台内には「(奇玉宝)鼎之珍」の銘がみられる。2302, 2303などと揃いとみられる。2288は鬼瓦の一部とみられ, 型成形で, 接合面で剥離している。凸面は型による隆起線状の文様, 凹面は粗雑なナデ調整で, ヘラ状工具による刻目が残る。2289は鉄製品で, 先端が二股に分かれる。基部は扁平で幅が太く, 先端は肥厚し内側が更に二股に分かれる。



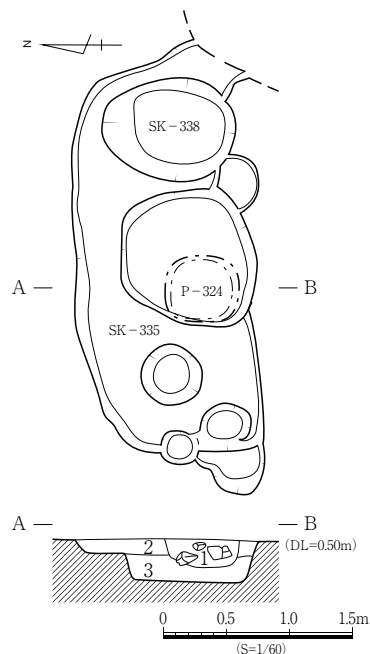
遺構埋土

1. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで, 粘性は強く1cm大の礫と炭化物を少し含む(P-320)
2. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで, 粘性は強く1cm大の礫と炭化物を少し含む(P-321)
3. 黒褐色(10YR3/2)シルト質粗粒砂で, 粘性は弱く0.5~1cm大の礫と木片を多く含む(SK-334)

図187 SK-334

SK-335(遺構:図188 遺物:図189)

SK-334の東で確認した土坑で, SK-338を切り, P-324・328に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長3.04m, 短辺1.41m, 深さ17cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで粘性はやや強く, 3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器12点(碗1, 皿1, 合子蓋1, 播鉢1, 土瓶1, 細片7), 磁器27点(碗1, 皿5, 小杯1, 細片20), 土師質土器9点(小皿4, 細片5), 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2290~2292である。2290は陶器合子蓋で, 全面に灰釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。天井部外面には鉄錆による松文がみられる。2291は肥前産の磁器染付腰折碗で, 外面に松葉文と圏線, 見込に2条の圏線の染付がみられる。2292は土師質土器小皿で, 底部には径3mmの円孔がみられる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。



遺構埋土

1. 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂質シルトで, 縮まりがなく, 多量の10~15cm大の角礫と炭化物を含む(P-324)
2. 褐灰色(10YR6/1)砂質シルトで, 粘性はやや強く, 3cm大の円礫と角礫を含む(SK-335)
3. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質細粒砂で, 1cm大の礫を少し含む(ピット)

図188 SK-335, P-324

SK-336(遺物:図190)

SK-335の南で確認した土坑で, SK-337に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.12m, 短辺0.90m, 深さ34cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗2, 火入1, 細片1), 磁器7点(碗3, 小杯1, 猪口1, 細片2), 土師質土器18点(皿3, 小皿7, 細片8)がみられた。図

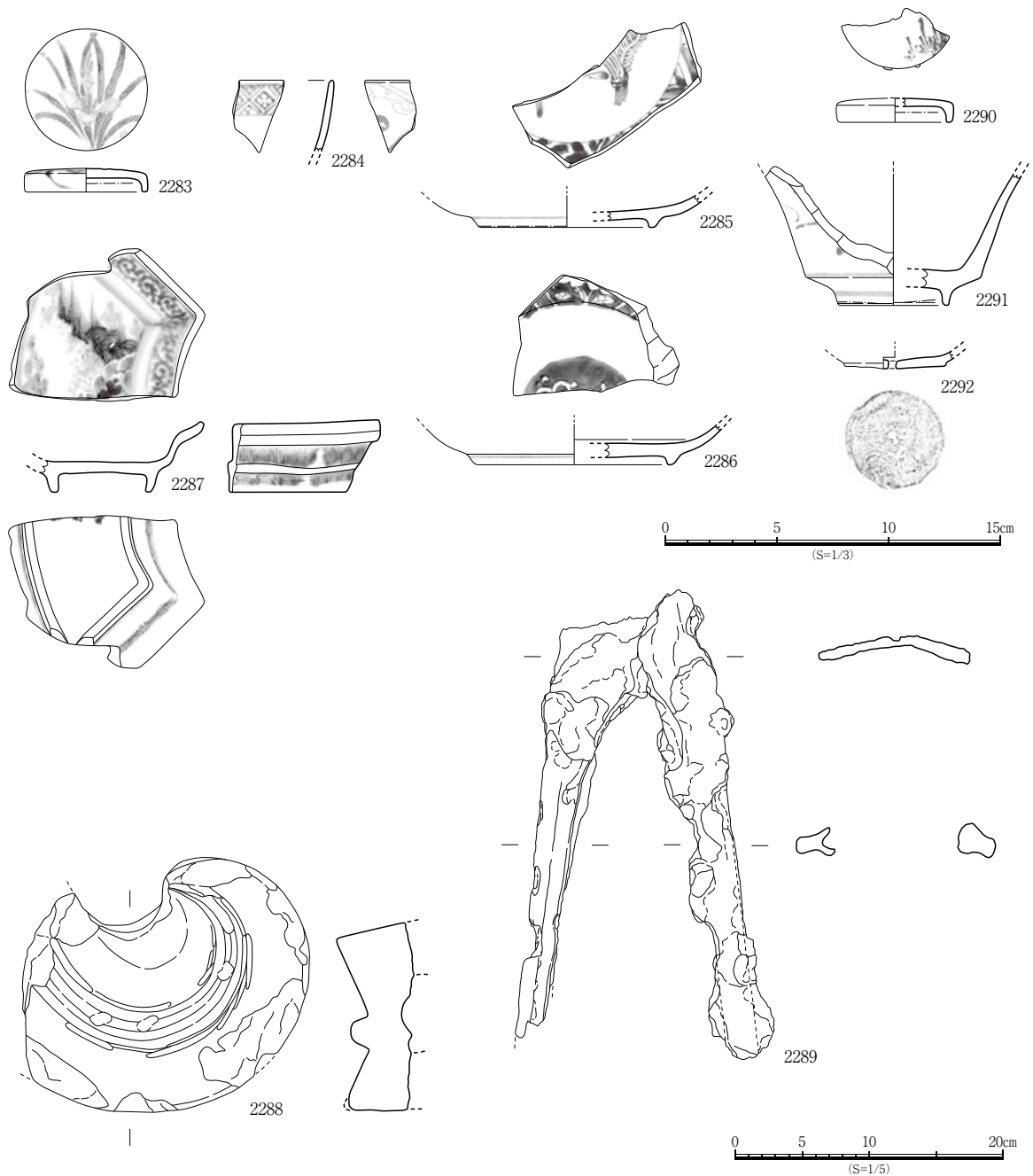


図189 SK-334・335出土遺物実測図

示した遺物は2293～2295である。2293は肥前系とみられる白磁小杯で、全面に光沢のある白磁釉を施し、畳付を釉ハギする。2294・2295は土師質土器小皿で、全面に回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着する。

SK-337(遺物：図190)

SK-336の南で確認した土坑で、SK-336を切る。平面形態は楕円形を呈し、検出長1.24m、全幅1.14m、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器7点(皿1、細片6)、磁器25点(皿1、蓋2、猪口1、蕎麦猪口1、瓶1、人形2、細片17)、土師質土器片5点、土師器片2点、平瓦1点がみられた。図示した遺物は2296で、瀬戸・美濃系とみられる陶器

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

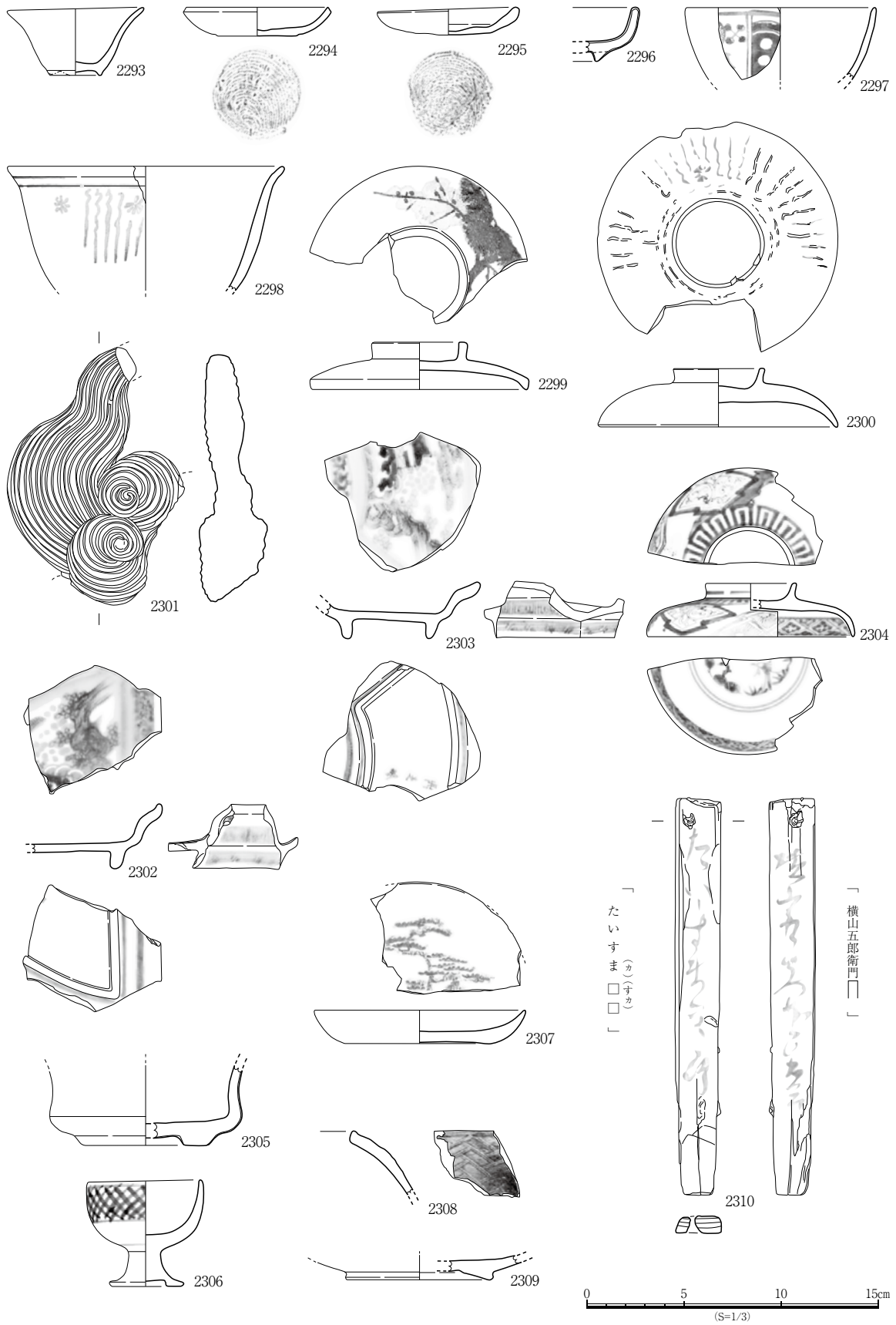


図190 SK-336～339出土遺物実測図

角皿である。全面に長石釉を施し、暈付は釉ハギする。

**SK-338**(遺物:図190)

SK-337の北東で確認した土坑で、SK-335に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長1.05m、全幅0.83m、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂で粘性は弱く、0.5～1cm大の礫と木片、焼土を多く含んでいた。出土遺物には陶器96点(碗7、皿2、蓋10、向付2、火入1、鉢4、播鉢3、甕1、水注1、土瓶2、急須1、人形1、把手1、細片60)、磁器195点(碗8、皿27、蓋3、蕎麦猪口1、紅皿1、段重1、香炉1、瓶1、鉢1、仏飯器1、細片150)、土師質土器16点(杯7、小皿2、白土器4、細片3)、土師器2点(火鉢1、細片1)、軟質施釉陶器皿1点、緑釉陶器皿1点、軒平瓦1点、石製品硯1点、木製品漆器1点がみられた。図示した遺物は2297～2309である。2297は京都系とみられる陶器色絵碗で、全面に透明釉を施し、外面には黄・緑・朱・青色または金彩による区画文の上絵付がみられる。2298は尾戸窯の灰釉陶器端反碗で、外面に白象嵌による暦文と印花文・圏線がみられる。2299は陶器碗蓋で、外面に鉄錆による梅樹文と白化粧土による上絵付の梅花文がみられる。2300は尾戸窯の灰釉陶器碗蓋で、外面に白象嵌による暦文と印花文がみられる。2301は焼締陶器の人形とみられる。表面と裏面に渦巻状の沈線を描き、外面に鉄釉が施される。2302・2303は肥前有田産の磁器変形皿で、型打成形で、扇形を呈するものとみられる。文様は型紙摺によるもので、外面は雷文帯、口縁部内面は唐草文、見込は風景文がみられる。2303の高台内には「(奇玉宝)鼎之珍」の銘がみられる。2287などと揃いとみられる。2304は肥前有田産の磁器色絵望料形碗蓋で、外面に蓮弁文と圏線の染付と、金彩・墨色の窓に唐草と扇文とみられる上絵付、天井部内面に圏線と環状の松竹梅文の染付、口縁部内面に四方禳文の染付が施される。2305は肥前産の青磁香炉または火入である。内面は無釉で、回転ナデ調整を施す。見込には砂が付着する。外面は青磁釉を施し、暈付は釉ハギする。2306は磁器染付仏飯器で、杯部外面に斜格子文と圏線の染付がみられる。2307は尾戸窯の白土器皿で、ナデ調整及び横ナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の高砂文がみられる。2308は軟質施釉陶器の角皿とみられ、全面に黄色釉を施す。内面には型押による網目文がみられる。2309は硬質の緑釉陶器皿で、蛇ノ目高台を呈する。高台内を除き緑釉を施し、暈付は釉ハギする。

**SK-339**(遺物:図190)

SK-338の南東で確認した土坑で、SD-312を切る。平面形態は楕円形を呈し、検出長2.24m、検出幅1.05m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には図示した2310の木製品木筒がみられた。上部には円孔がみられ、下部は若干細く加工する。表面には「横山五郎衛門」、裏面には「たいすま(カ)□(すカ)□」の墨書がみられる。「横山五郎衛門」の墨書は2091と2747にもみられる。

**SK-340**(遺物:図191)

SK-339の北東で確認した土坑で、SK-341を切る。平面形態は溝状を呈し、検出長は長径1.52m、全幅0.46m、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、多量の0.5～2cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(碗1、細片5)、磁器9点(碗2、合子1、細片6)、土師質土器皿1点がみられた。図示した遺物は2311で、土師質土器皿である。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

**SK-341**(遺物:図191)

SK-340の東で確認した土坑で、SK-340に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、長径2.08m、



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

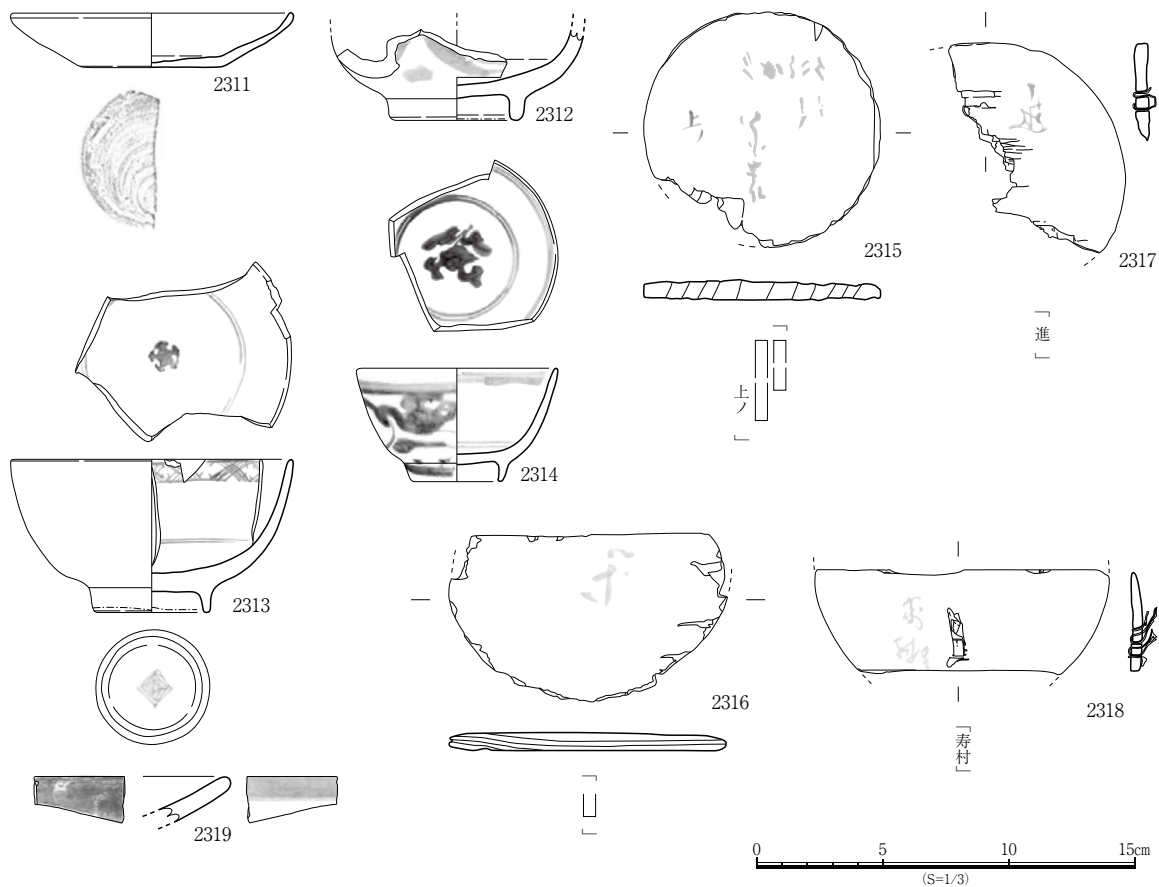


図191 SK-340～342出土遺物実測図

短径2.00m、深さ48cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器20点(碗2, 小皿1, 蓋1, 瓶2, 甕1, 鍋3, 土瓶2, 細片8), 磁器25点(碗6, 皿4, 蓋1, 猪口1, 紅皿1, 鉢2, 細片10), 青花碗1点, 土師器焜炉1点, 軒丸瓦1点, 木製品曲物蓋5点がみられた。図示した遺物は2312～2318である。2312は肥前産の陶胎染付碗で、白化粧土を施したのち外面に染付を描く。2313は肥前産の青磁染付小丸碗で、内面は透明釉, 外面と高台内には青磁釉を施す。口縁部内面には四方櫛文の染付, 見込には圏線とコンニャク印判による五弁花文, 高台内には二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。2314は中国景德鎮窯系とみられる青花小碗で、外面に草花文と圏線, 内面に圏線, 見込には花文の染付がみられる。2315～2318は木製品桶蓋とみられ, 2315は「上ノ」の墨書がみられる。2317と2318は皮紐の一部が残り, 2317は「進」, 2318は「寿村」の墨書がみられる。

SK-342(遺物: 図191)

B-1区東端で確認した土坑で、東は調査区外へ続く。SX-324を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径1.33m、検出幅0.74m、深さ22cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で粘性は弱く、1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器3点(播鉢2, 細片1), 磁器7点(碗2, 大皿1, 小杯1, 鉢1, 細片2), 土師質土器4点(小皿2, 細片2), 土師器片2点, 丸瓦1点がみられた。図示した遺物は2319で、肥前有田産の磁器色絵大皿とみられる。口鑄で、内面には鉄錆による唐草文と墨・緑色の上絵付がみられる。

SD-302(遺物: 図192)

B-1区北西部で確認した南北溝跡で、SK-310を切り、SK-312・SD-303に切られる。検出長

12.34m, 全幅0.90m, 深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器46点(碗5, 皿1, 猪口1, 火入1, 甕2, 細片36), 磁器37点(碗4, 蓋1, 猪口1, 紅皿1, 瓶1, 仏飯器1, 細片28), 土師質土器26点(小皿4, 白土器2, 細片20), 瓦質土器2点(火鉢1, 細片1), 瓦4点(丸瓦1, 平瓦2, 細片1), 土製品人形2点がみられた。図示した遺物は2320・2321である。2320は丹波焼甕で、回転ナデ調整のち内面にナデ調整を加える。外面には鉄釉, 内面には鉄釉を刷毛塗りする。口縁端部に沈線が3条, 外面に多条の沈線, 肩部に焼成後の穿孔がみられる。2321は土製品人形で、天神様である。型成形で、全面にキラ粉が付着し、底部には円孔がみられる。

SD-303(遺構:図169 遺物:図192)

SD-302と並行する南北溝跡で、SD-302とSK-312を切る。検出長3.97m, 全幅0.43m, 深さ7cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黄灰色シルト質中粒砂, 下層は褐灰色シルト質中粒砂で、いずれも多量の1~2cm大の礫と木片を含んでいた。出土遺物には陶器100点(碗7, 皿3, 鉢4, 挿鉢4, 灯明受

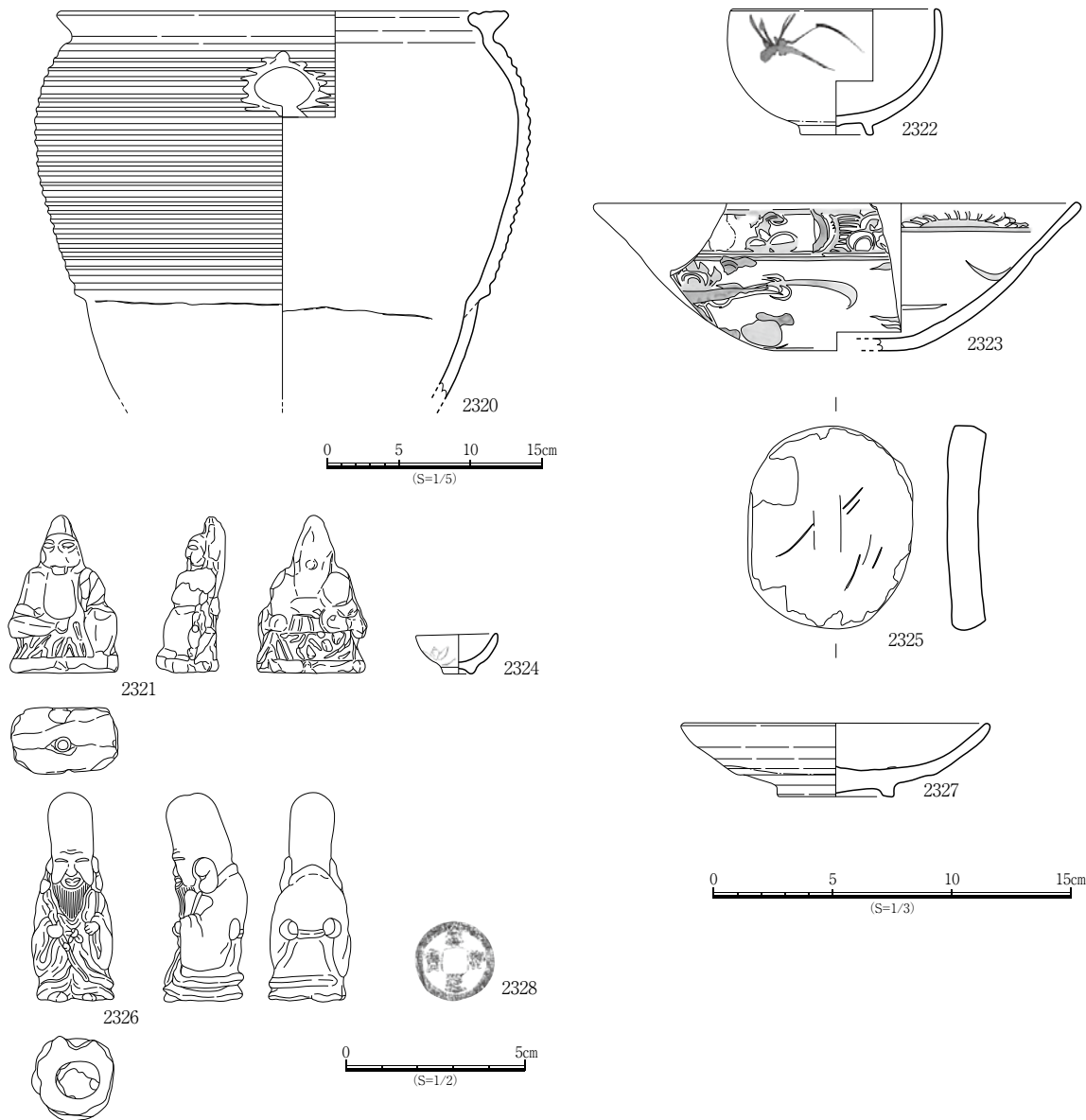


図192 SD-302～304・306・310出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

皿7, 甕1, 鍋3, 土瓶2, 細片69), 磁器82点(碗7, 皿3, 蓋3, 小杯2, 猪口1, 水注1, 仏飯器1, 餌鉢1, 細片63), 土師質土器24点(皿7, 細片17), 瓦2点(丸瓦1, 再加工品1), 銅製品2点(煙管1, 針金1)がみられた。図示した遺物は2322～2325である。2322は京都・信楽系の陶器半球形小碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には鉄錆による文様がみられる。2323は中国漳州窯系とみられる色絵鉢で, 内外面に朱・緑色の草花文と圏線の上絵付を描く。2324は磁器色絵ミニチュアで, 鉢形を呈する。外面には朱色の上絵付による文様がみられる。2325は瓦の再加工品で, 楕円形を呈し, 側面は摩耗する。

#### SD-304(遺物: 図192)

B-1区北部で確認した南北溝跡で, 北は調査区外へ続き, P-306を切り, 南はSX-307に切られる。SD-305とSX-308を切る。検出長8.47m, 全幅0.61m, 深さ24cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器碗1点, 磁器4点(人形1, 細片3)がみられた。図示した遺物は2326で, 磁器根付とみられる。白磁の寿老人で, 型成形とみられる。中空で, 背面には円孔が残る。

#### SD-305(遺構: 図193)

SD-304の東で確認した南北溝跡で, SD-304とSX-307に切られる。検出長3.97m, 全幅0.43m, 深さ7cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層はにぶい黄褐色礫質極粗粒砂, 下層は青灰色中粒砂質シルトであった。出土遺物には陶器3点(皿1, 細片2), 土師質土器片1点, 土師器焔炉1点, 土製品人形1点がみられた。

#### SD-306(遺構: 図194 遺物: 図192)

B-1区北東部で確認した東西溝跡で, SK-316とSX-310に切られる。検出長6.61m, 全幅0.88m, 深さ17cmを測る。断面は皿状を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層が黄灰色中粒砂質シルト, 下層が褐灰色シルト質粗粒砂であった。出土遺物には陶器12点(碗1, 皿2, 播鉢1, 甕1, 細片7), 磁器16点(皿2, 紅皿1, 瓶1, 細片12), 土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2327で唐津系灰釉陶器皿である。内面から高台付近まで灰釉を施し, 見込には胎土目痕が残る。

#### SD-307(遺構: 図195)

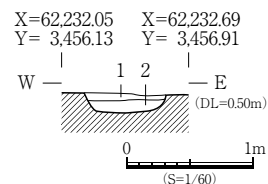
B-1区北東隅で確認した東西溝跡である。検出長6.28m, 全幅1.21m, 深さ41cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土は褐灰色粘土質シルトで, 下部には腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器7点(瓶1, 土瓶1, 細片5), 磁器3点(皿2, 細片1), 土師質土器6点(皿4, 細片2)がみられた。

#### SD-308

B-1区西部で確認した南北溝跡で, SX-317に切られる。全長12.66m, 全幅1.58m, 深さ7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 播鉢1, 細片3), 磁器片1点, 土師質土器小皿1点, 瓦片1点がみられた。

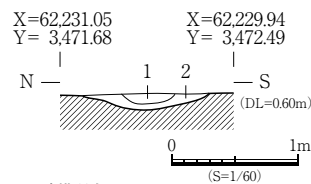
#### SD-309

B-1区中央部で確認した南北溝跡で, SD-310に切られる。検出



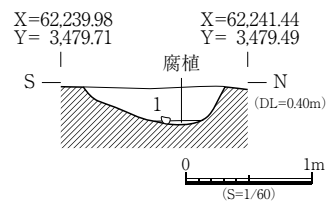
遺構埋土  
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質極粗粒砂で, 1cm大の礫が多く含む  
2. 青灰色(5B5/1)中粒砂質シルトで, 粘性は弱い

図193 SD-305



遺構埋土  
1. 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト  
2. 褐灰色(10YR6/1)シルト質粗粒砂

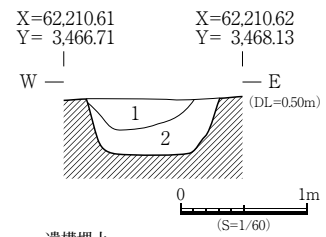
図194 SD-306



遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルトで, 1～3cm大の礫が多く下部に腐植を多く含む

図195 SD-307

長5.70m, 全幅0.24m, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗2, 壺1), 磁器4点(碗1, 皿1, 小杯1, 細片1), 土師質土器2点(小皿1, 細片1)がみられた。

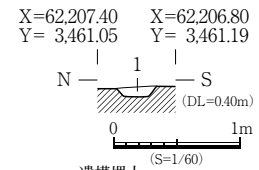


遺構埋土  
1. 灰白色(10YR7/1)砂質シルトで, 黄色礫と炭化物を含む  
2. 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルトで, 3cm大の礫と炭化物を含む

SD-310(遺構: 図196 遺物: 図192)

SD-309の南西で確認した溝跡で, L字状を呈する。SK-333とSD-309を切り, SK-332とP-319に切られる。検出長9.62m, 全幅1.08m, 深さ62cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層は灰白色砂質シルト, 下層は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物には陶器5点(皿2, 鉢1, 細片2), 磁器碗1点, 土師質土器5点(皿1, 細片4), 土師器碗1点, 古銭8点がみられた。図示した遺物は2328で, 銭貨である。寛永通寶ではないとみられるが, 摩耗するため判読は不可であった。出土した他の古銭7点はすべて寛永通寶であった。

図196 SD-310

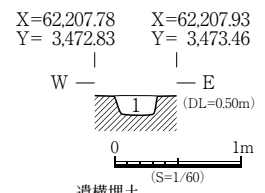


遺構埋土  
1. 灰黄色(2.5YR6/2)シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含む

SD-311(遺構: 図197)

SD-310の南で確認した東西溝跡で, SE-303を切り, 西は攪乱に切られる。検出長15.29m, 全幅0.42m, 深さ18cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は木製品漆器箱物1点であった。

図197 SD-311

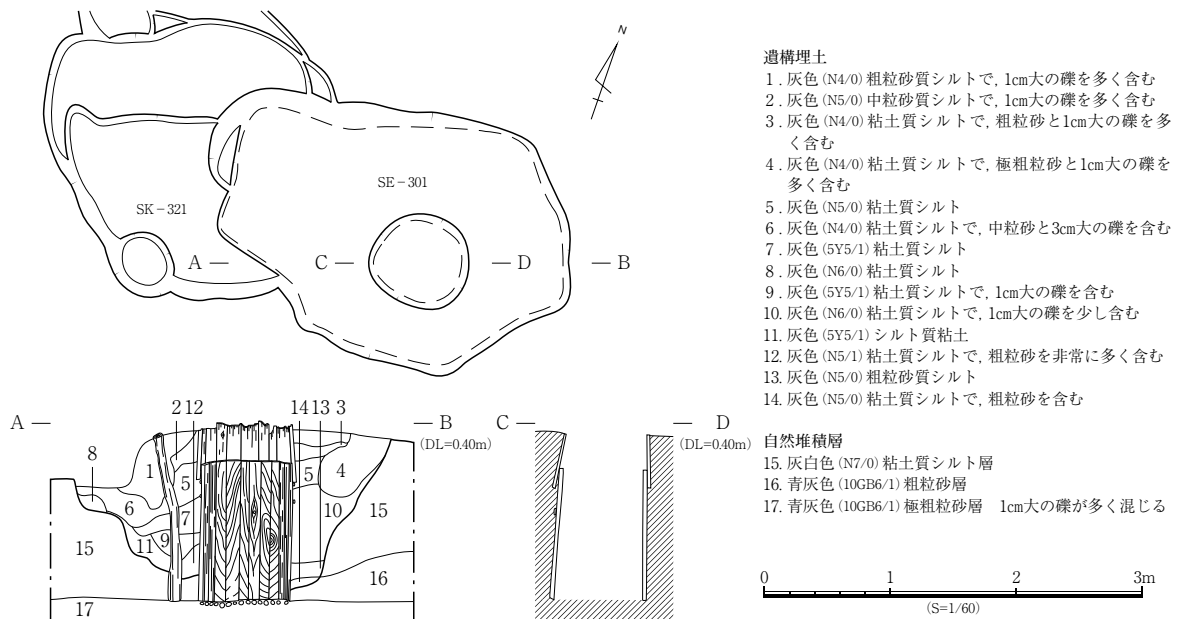


遺構埋土  
1. 褐灰色(5YR4/1)極細粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を非常に多く含む

SD-312(遺構: 図198)

SD-311の東で確認した南北溝跡で, SK-339とSE-303に切られる。検出長5.19m, 全幅0.44m, 深さ11cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器皿2点, 土師質土器2点(白土器1, 細片1), 丸瓦1点がみられた。

図198 SD-312



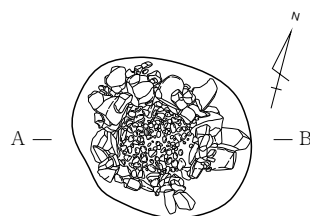
遺構埋土  
1. 灰色(N4/0)粗粒砂質シルトで, 1cm大の礫を多く含む  
2. 灰色(N5/0)中粒砂質シルトで, 1cm大の礫を多く含む  
3. 灰色(N4/0)粘土質シルトで, 粗粒砂と1cm大の礫を多く含む  
4. 灰色(N4/0)粘土質シルトで, 極粗粒砂と1cm大の礫を多く含む  
5. 灰色(N5/0)粘土質シルト  
6. 灰色(N4/0)粘土質シルトで, 中粒砂と3cm大の礫を含む  
7. 灰色(5Y5/1)粘土質シルト  
8. 灰色(N6/0)粘土質シルト  
9. 灰色(5Y5/1)粘土質シルトで, 1cm大の礫を含む  
10. 灰色(N6/0)粘土質シルトで, 1cm大の礫を少し含む  
11. 灰色(5Y5/1)シルト質粘土  
12. 灰色(N5/1)粘土質シルトで, 粗粒砂を非常に多く含む  
13. 灰色(N5/0)粗粒砂質シルト  
14. 灰色(N5/0)粘土質シルトで, 粗粒砂を含む  
自然堆積層  
15. 灰白色(N7/0)粘土質シルト層  
16. 青灰色(10GB6/1)粗粒砂層  
17. 青灰色(10GB6/1)極粗粒砂層 1cm大の礫が多く混じる

図199 SE-301

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

SE-301 (遺構: 図199)

B-1区北東部で確認した井戸跡で、SK-321に切られる。掘方は不整楕円形を呈し、長径3.02m、短径2.05m、深さ1.45mを測る。掘方の埋土は14層に分かれすべてグライ化していた。掘方のやや東寄りに径0.72mを測る桶側が確認された。桶側は2段を重ねており、桶側の底面には玉砂利が敷かれていた。底面の標高は-0.80mを測り、玉砂利の下は砂層であった。出土遺物は掘方、埋土共に皆無であった。



SE-302 (遺構: 図200)

SE-301の東で確認した石組井戸跡である。掘方は楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.22m、深さ90cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5~3cm大の礫を非常に多く含んでいた。掘方のほぼ中央に石組井戸がみられ、石組の内径は62cmを測る。石材は10~30cm大の砂岩またはチャートで約4段積み、底面には5cm大の扁平な円礫が敷かれており、底面の標高は-0.59mを測る。玉砂利の下は砂層であった。出土遺物は埋土より陶器皿2点、土師質土器4点(皿2、細片2)がみられ、内野山窯の銅緑釉皿片や絵唐津皿片が出土しており、17世紀に遡る可能性もある。

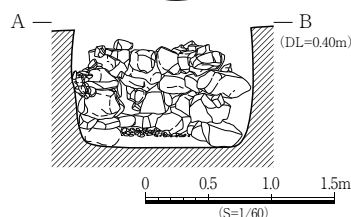


図200 SE-302

SE-303 (遺構: 図201 遺物: 図203)

B-1区中央部で確認した石組井戸跡で、SD-311に切られ、SD-312を切る。掘方は楕円形を呈し、長径3.12m、短径2.88m、深さ1.19mを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトで、3~5cm大の円礫を非常に多く含んでいた。石組は一部損失する箇所もみられたが、石材は25~55cm大の砂岩またはチャートで、西側がほぼ垂直方向に積んでいるのに対し、東側は階段状に積まれていた。掘方の西寄りには桶側が残存しており、桶側の内径は65~74cm、桶残存高20cm、底面の標高は-0.78mを測る。底面には僅かに円礫がみられた。出土遺物には陶器28点(碗5、皿1、細片22)、磁器39点(碗12、皿4、

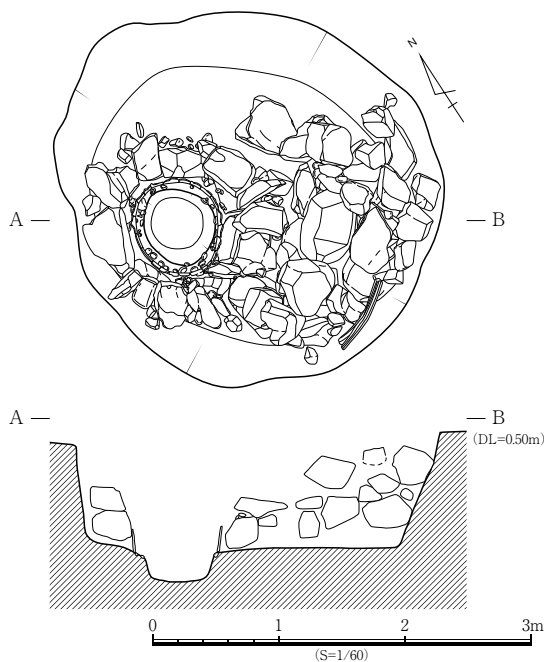
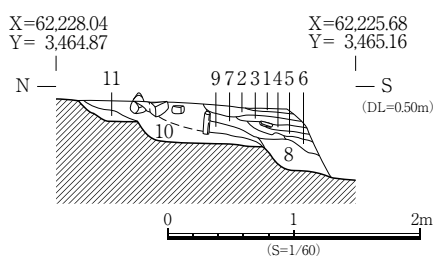


図201 SE-303



遺構埋土

1. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 礫質極粗粒砂で、1~5cm大の礫を含む (SG-301)
2. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質細粒砂 (SG-301)
3. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質極粗粒砂 (SG-301)
4. 灰色 (N5/0) 粘土質シルト (SG-301)
5. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 極粗粒砂 (SG-301)
6. 褐灰色 (10YR5/1) 粗粒砂 (SG-301)
7. 灰色 (N5/0) 粘土質シルト (SG-301)
8. 灰色 (N4/0) 極粗粒砂で、0.5~1cm大の礫を多く含む (SG-301)
9. 橙色 (7.5YR6/6) シルト質極粗粒砂 (SX-310)
10. 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト (SX-310)
11. にぶい灰褐色 (7.5YR5/2) 礫質極粗粒砂で、1cm大の礫を非常に多く含む (SX-310)

図202 SG-301, SX-310

小杯4, 猪口1, 蕎麦猪口1, 段重1, 瓶1, 細片15), 青花碗1点, 青磁碗1点, 土師質土器34点(皿2, 小皿9, 細片23), 土師器片3点, 須恵器2点(甕1, 細片1)がみられた。図示した遺物は2329・2330で, いずれも埋土上層より出土している。2329は陶器皿で, 灯明皿とみられる。底部に円錐形の脚を3箇所に貼付し, 鉄釉を施す。内外面に煤が付着する。2330は中国景德鎮窯系の青花碗で, 高台内には鈷痕が残る。

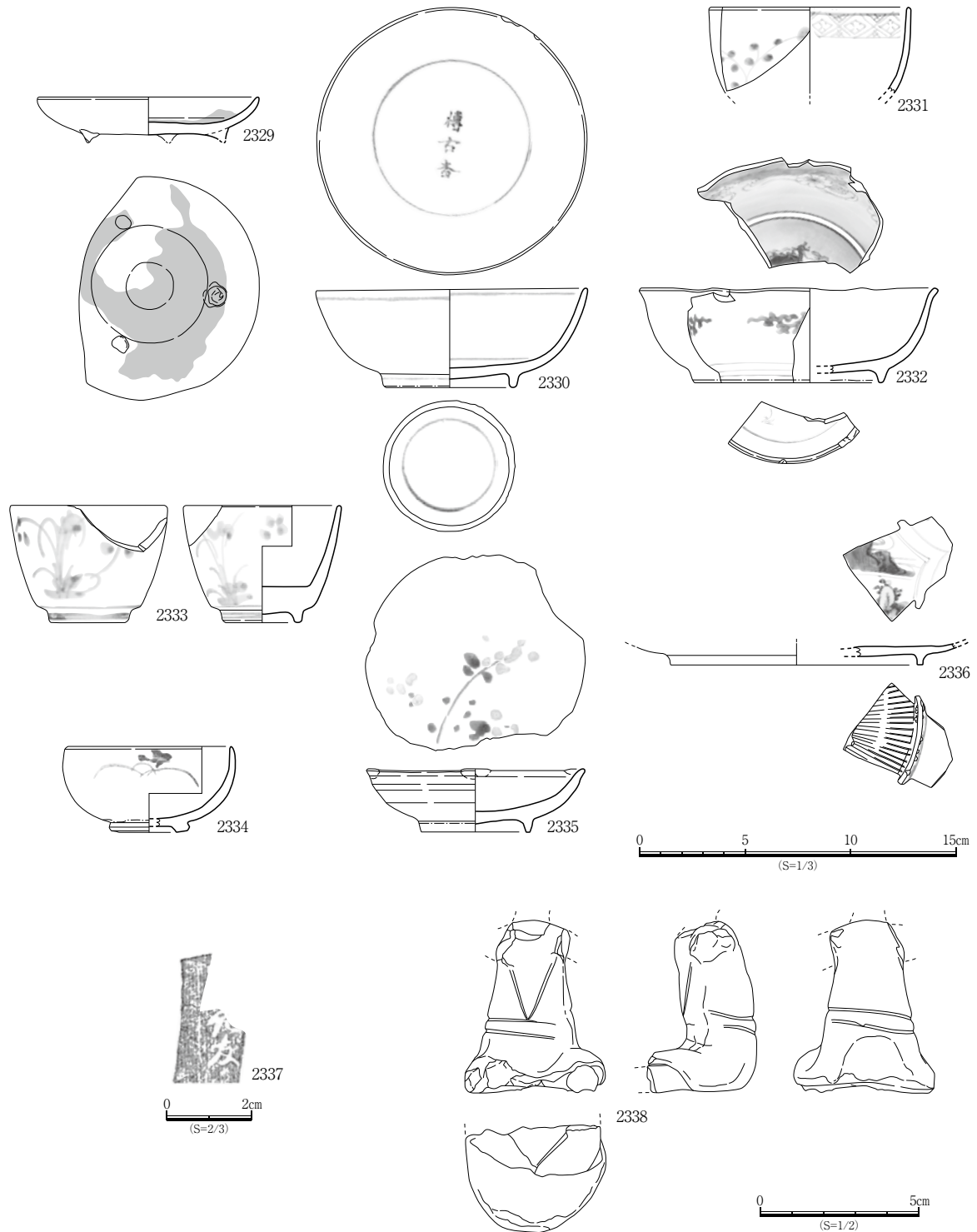


図203 SE-303, SG-301出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

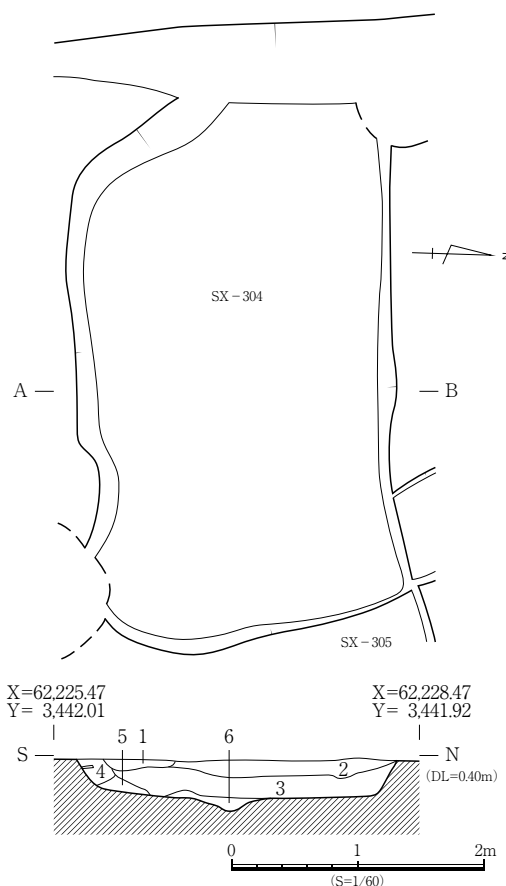
外面・内面・高台内に圈線, 見込に圈線と文字の染付がみられる。

SG-301 (遺構: 図202 遺物: 図203)

B-1区中央部で確認した池跡で, SG-402の底で検出され大きく削平を受けているものとみられる。SX-307・310・311を切り, 底でSK-319を検出する。一部で杭列は確認できたものの, 石列はSG-402に再利用されたものとみられ確認できなかった。また, 北側で確認したSX-310はSG-301の裏込の可能性もあり, 北西部には溝状に凹んだ部分があり, 杭列も溝に沿って確認されていることから, SX-308からSD-304またはSD-305へ導水路が繋がっていた可能性が高い。さらに, SX-307~311はSG-301の一部もしくは付帯施設の可能性が高い。検出された平面形態は不整形を呈し, 全長10.07m, 全幅6.56m, 深さ49cmを測る。埋土は8層に分かれる。出土遺物には陶器251点(碗23, 皿7, 蓋1, 猪口2, 瓶1, 鉢7, 播鉢10, 匣鉢1, 植木鉢1, 甕5, 灯明受皿7, 鍋2, 土瓶1, 餌鉢1, 細片182), 磁器227点(碗23, 皿22, 大皿1, 蓋9, 小杯5, 猪口2, 蕎麦猪口3, 紅皿1, 合子蓋1, 香炉1, 火入2, 瓶18, 仏飯器2, 灯明受皿1, 水滴1, 細片135), 土師質土器31点(皿4, 小皿11, 白土器2, 細片14), 土師器4点(火鉢2, 細片2), 須恵器片1点, 瓦質土器3点(火鉢1, 細片2), 瓦19点(軒平瓦1, 丸瓦4, 平瓦14), 金属製品4点(古銭1, 煙管1, 釘1, 把手1)がみられた。図示した遺物は2331~2338である。2331は裏込とみられる地点より出土した肥前系の磁器染付小碗で, 外面に花文, 内面に四方禪文の染付がみられる。2332は肥前系の磁器染付輪花皿で, 中層より出土した。外面に唐草文と圈線, 内面には濃地に波文と桜文, 見込には濃地に龍文と圈線の染付, 高台内には圈線と「化」の銘の一部が残る。2333は肥前産の磁器染付小杯で, 中層より出土した。外面には草花文と圈線の染付がみられる。2334~2338は下層より出土した。2334は京都系の陶器半球形小碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には鉄錆による草花文がみられる。2335は尾戸窯の陶器稜花小皿で, 見込に白化粧土と鉄錆による花文がみられる。2336は中国景德鎮窯系の青花皿で, 高台内に放射状の鉋痕が残る。外面には圈線, 見込には窓に風景文とみられる染付を描く。2337は平瓦で, 側面に「安□友」の銘がみられる。2338は土製品人形で, 白色系の座る人物である。全面にナデ調整を施す。

SX-304 (遺構: 図204 遺物: 図205・206)

B-1区北西隅で確認した遺構で, 西は調査区外へ続く。SX-305を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長4.22m, 全幅2.33m, 深さ37cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は6層に分かれ, 下層からは木製品が多く出土した。出土遺物には陶器125点(碗32, 皿6, 火入1, 瓶1, 鉢1, 播鉢6, 壺2, 灯明皿1, 灯明受皿2, 餌鉢1, 茶入1, ハマ1, 人形3, 細片67), 磁器97点(碗15, 皿8, 蓋2,



- 遺構埋土
1. 青灰色(5B6/1)シルト質砂で, 粘性は弱い
  2. 褐灰色(10YR6/1)シルト質中粒砂で, 1~3cm大の礫と木片を多く含む
  3. 褐灰色(5YR4/1)シルト質中粒砂で, 木片を非常に多く含む
  4. 青灰色(5B6/1)中粒砂質シルトで, 5cm大の礫と木片を少し含む
  5. 褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルトで, 1~2cm大の礫を多く含む
  6. 褐灰色(10YR6/1)シルト質中粒砂で, 木片を少し含む

図204 SX-304

小杯6, 杯1, 猪口4, 蕎麦猪口1, 紅皿2, 蓋物2, 瓶1, 壺1, 細片54), 青花皿1点, 土師質土器76点(杯1, 皿10, 小皿5, 白土器1, 細片59), 土師器7点(杯1, 鉢1, 焙烙3, 細片2), 瓦質土器片1点, 木製品9点(漆器碗4, 漆器蓋1, 木筒2, その他2), 金属製品5点(古銭1, 釘2など), ガラス製品小杯1点がみられた。図示した遺物は2339～2357である。2339は肥前産の京焼風陶器碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 高台内には「清水」の刻印がみられる。2340は肥前産の陶器碗で, 外面には白化粧土による刷毛目文, 内面に白化粧土による巻刷毛目文がみられる。2341は尾戸窯の陶器碗で, 外面には鉄錆による印刻のクルス文がみられる。2342は陶器火入で, 口縁端部から口縁部外面に鉄釉, 体部外面から高台内に透明釉を施す。2343は陶胎染付火入で, 筒形を呈する。口縁端部から外面体部下半に白化粧土を施し花

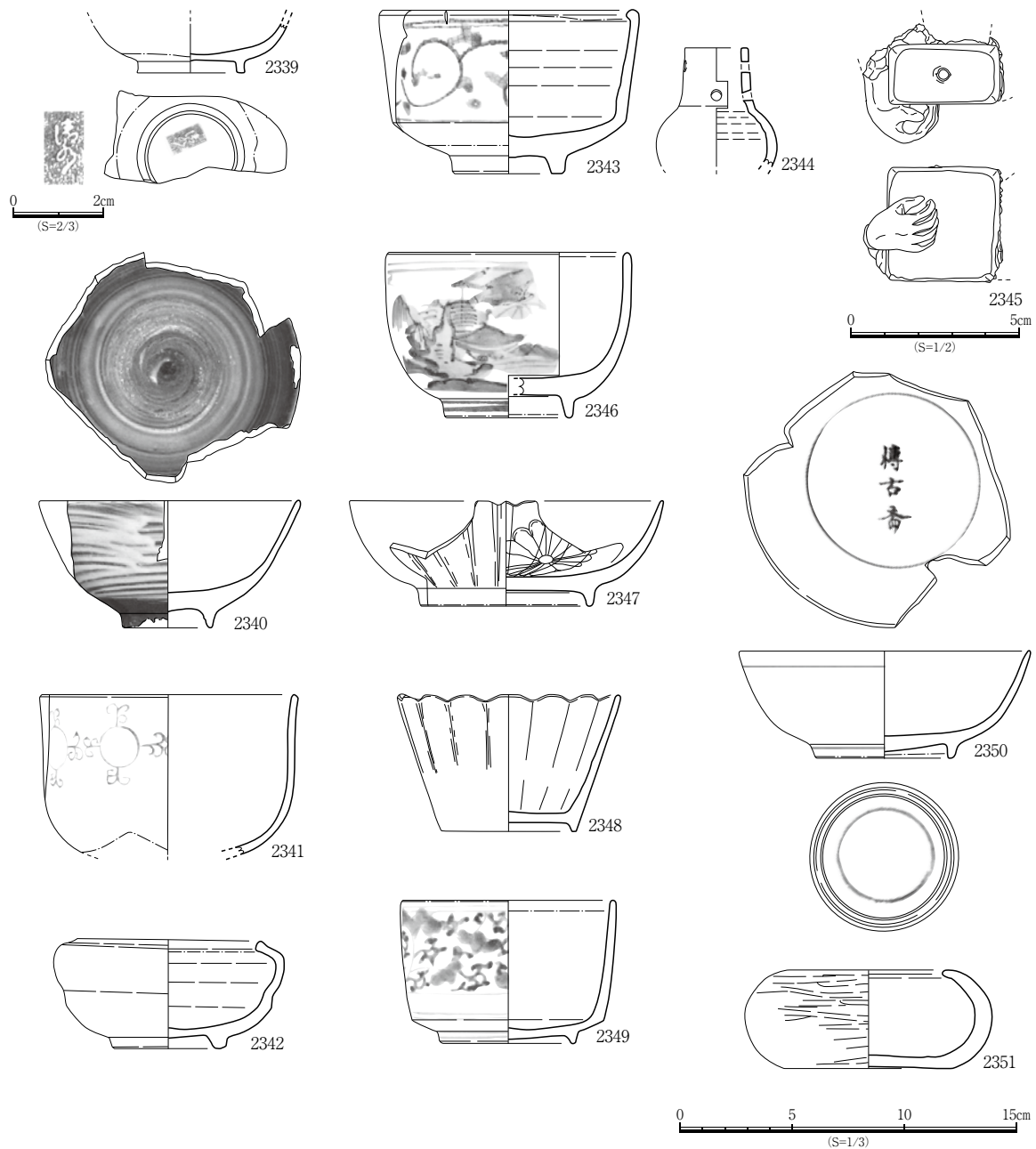


図205 SX-304出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

文の染付を描く。2344は焼締陶器小壺で、口縁部には上下2段で対角に径4mmの円孔が4箇所に見られる。2345は陶器人形の一部で、箱を持つ人物とみられる。両手で箱を抱えていたとみられるが、片手は剥離し、箱には縦方向に径4mmの円孔が貫通する。全面に灰釉を施す。尾戸窯の製品とみられる。2346は肥前産の磁器染付碗で、外面に風景文と圏線の染付がみられる。2347は肥前産の白磁菊花形皿で、型打成形である。内面に型押による陽刻の菊花文がみられる。2348は肥前産の白磁菊花形猪口で、型打成形である。2349は肥前産の磁器染付蓋物で、透明釉を施し口縁端部から口縁部内面を釉ハギする。外面には花唐草文と圏線の染付がみられる。2350は中国景德鎮窯系の青花皿で、高台内には放射状の鈎痕が残る。外面・内面・高台内に圏線の染付、見込に圏線と文字の染付がみられる。2351は土師器鉢で、内面は口縁部は内湾する。回転ナデ調整で、外面には磨き調整を加える。2352～2357は木製品で、2352～2354は漆器椀である。2352は外面が黒塗で、朱の丸に柘文が3箇所

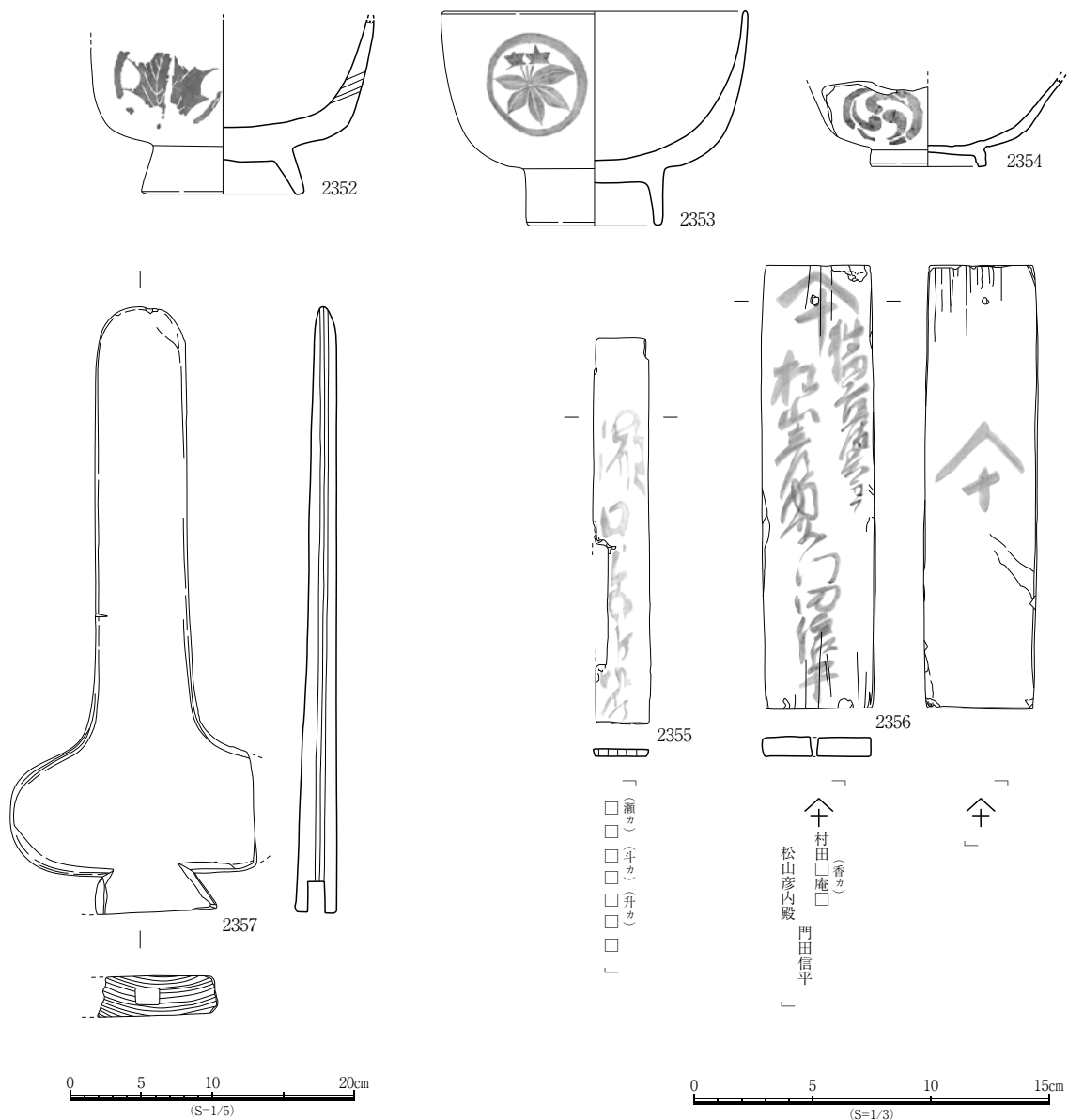


図206 SX-304出土遺物実測図2

にみられ、内面は赤塗である。2353は外面が黒塗で、金の丸に龍胆文がみられ、内面は赤塗である。2354は外面が黒塗で、金の丸に巴文がみられ、内面は赤塗である。2355・2356は木簡である。2355は短冊形を呈し、片面に墨書がみられるが解読不可であった。2356は短冊形で、上部に円孔がみられる。表面には屋号とみられる記号と、「村田□(香カ)庵□ 松山彦内殿 門田信平」の墨書、裏面には表面と同じ屋号の墨書がみられる。2357は剣の様な形態を呈し、下端を除き側面を丸く加工し面取りする。基部には1.7×1.1cmで深さ2.2cmの方形の孔がみられる。

SX-305(遺物：図207)

SX-304の東で確認した遺構で、SX-304・317に切られ、西は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈し、検出長3.46m、検出幅2.23m、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器94点(碗8、皿4、蓋2、鉢3、挿鉢1、甕1、仏飯器1、水指1、火鉢1、餌鉢2、細片70)、磁器66点(碗10、皿7、蓋2、小杯1、猪口3、蕎麦猪口1、紅皿3、段重1、火入1、瓶7、壺1、仏飯器1、餌鉢1、細片27)、土師質土器9点(皿1、細片8)、土師器7点(火鉢2、焙烙1、火入1、細片3)、土製品人形1点、瓦再加工品1点、鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2358・2359である。2358は瀬戸・美濃産の挙骨茶碗で、漆黒釉を施し、外面には長石釉を散らし、体部の数箇所を凹ます。畳付には刻印がみられる。2359は土製品人形で、犬形である。型成形で、底部には円孔がみられる。

SX-306(遺物：図207)

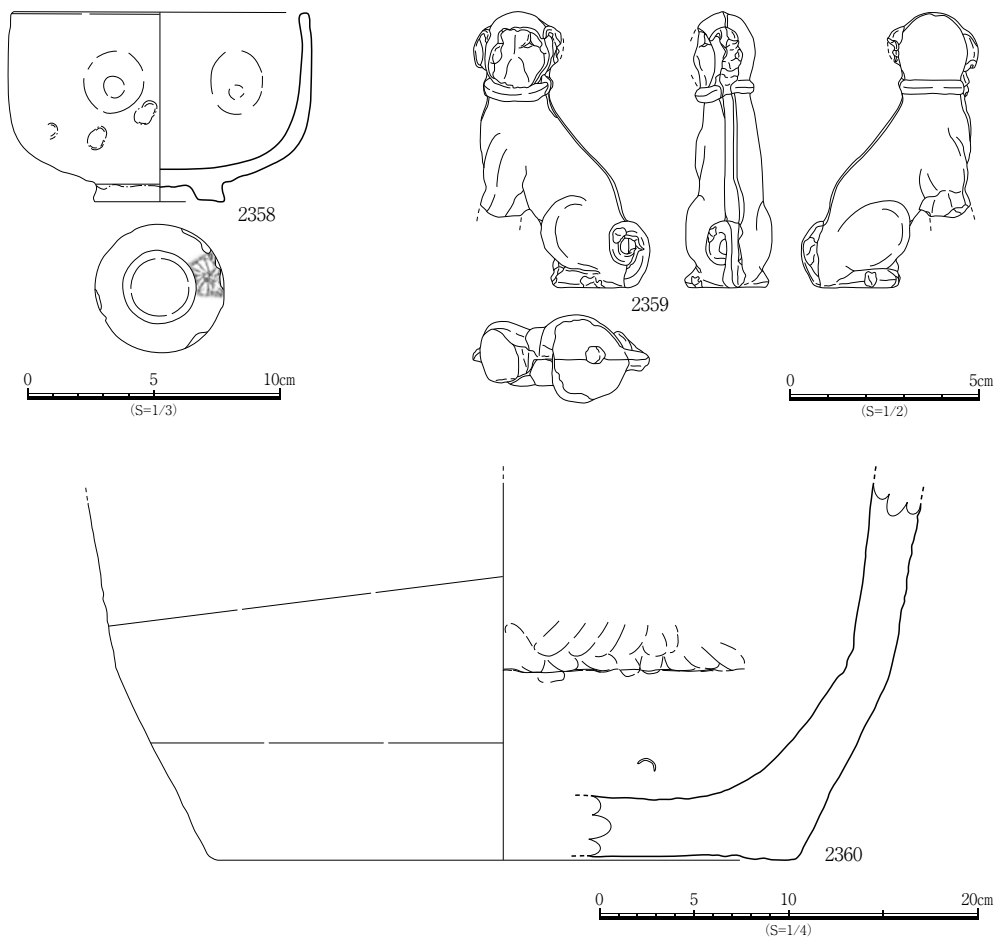


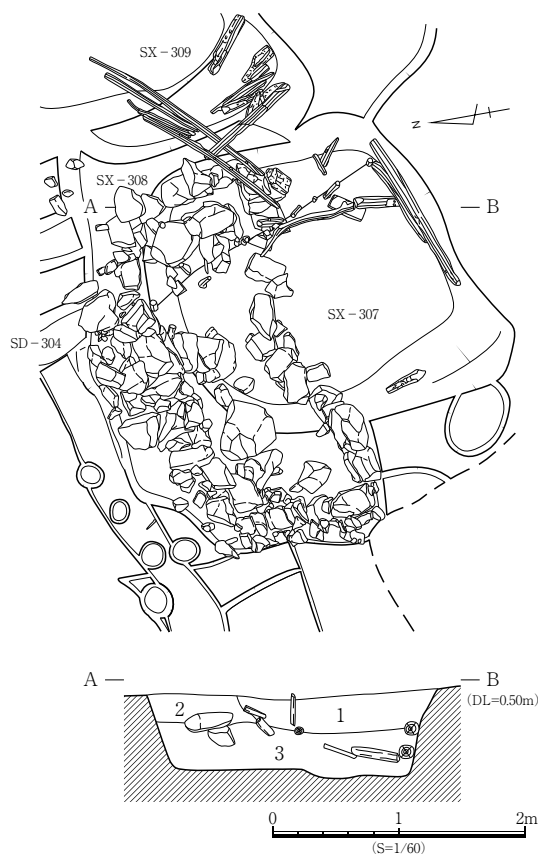
図207 SX-305・306出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

SB-301の東で確認した遺構で、他の遺構に切れ一部を検出した。平面形態は不明で、検出長2.68m、検出幅1.01m、深さ11cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 播鉢1, 匣鉢1, 大甕1, 細片1), 磁器蓋1点, 土師質土器片1点, 石製品砥石1点がみられた。図示した遺物は2360で備前焼大甕である。外面は横方向のナデ調整, 底部外面は無調整, 内面はナデ調整である。見込には半円形の刻印が2箇所のみられる。

SX-307(遺構: 図208 遺物: 図209)

SG-301の北西で確認した遺構で、SD-304, SX-308を切る。池跡であるSG-301の導水路とみられるSD-304・305を繋ぐ遺構で、水利施設とみられる。平面形態は隅丸方形を呈し、全長2.39m、検出幅2.34m、深さ74cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれる。南肩には丸太材を横方向に貼り木杭で止めており、それと直行するように南北方向の杭列に横木を置き、護岸をして一時的に水を貯めていた可能性がある。また、東に隣接するSX-309に股がるように丸太材が出土しており、SX-309と一連の施設であるものとみられる。出土遺物には陶器88点(碗14, 皿6, 瓶2, 鉢3, 播鉢3, 植木鉢1, 鍋2, 土瓶2, 火鉢2, 人形1, 細片52), 磁器71点(碗12, 皿9, 蓋2, 小杯3, 猪口8, 蕎麦猪口1, 瓶9, 水滴1, 細片26), 土師質土器片5点, 土師器4点(火鉢1, 細片3), 木製品漆器栓1点, 石製品砥石1点, 金属製品2点(火箸1, 不明1)がみられた。図示した遺物は2361～2370である。2361～2363は肥前産の磁器染付小丸碗である。2361は外面には草花文と圏線の染付とコンニャク印判による菊花文, 高台内には渦「福」の銘がみられる。2362は外面に丸文の染付, 2363は外面に圏線の染付とコンニャク印判による鶴文と松文がみられる。2364・2365は肥前産の青磁染付碗である。2364は望料碗で、外面に青磁釉, 内面と高台内に透明釉を施す。口縁部内面に四方禳文, 見込には丸に草花文と圏線の染付がみられる。2365は内面から高台まで青磁釉, 高台内に透明釉を施す。口縁部内面に四方禳文の染付, 見込には圏線の染付とコンニャク印判による五弁花文, 高台内には二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。2366は肥前系の磁器染付広東碗で、見込に花文と樹文・圏線の染付, 高台内には圏線と銘がみられる。2367は肥前有田産の磁器色絵中皿で、外面には緑色の唐草文の上絵付, 見込には陽刻による緑色の唐草文の上絵付がみられる。2368は肥前系の磁器染付猪口で、外面に松文とみられる染付を描く。2369は、木製品漆器栓で、下端面を除き赤塗である。側面は多角形に面取りし、上端面には丸に「谷吉」の刻書がみられる。2370は銅製とみられる火箸で、2本が出土している。断面は円形を呈し、先端は細く加工し、上端は肥厚し上面は平らである。



- 遺構埋土
1. 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂質シルト
  2. 明青灰色 (5B7/1) 粘土質シルトで、0.5cm大の礫を少し含む
  3. 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルトで、粗粒砂と多量の1～5cm大の礫を含む

図208 SX-307

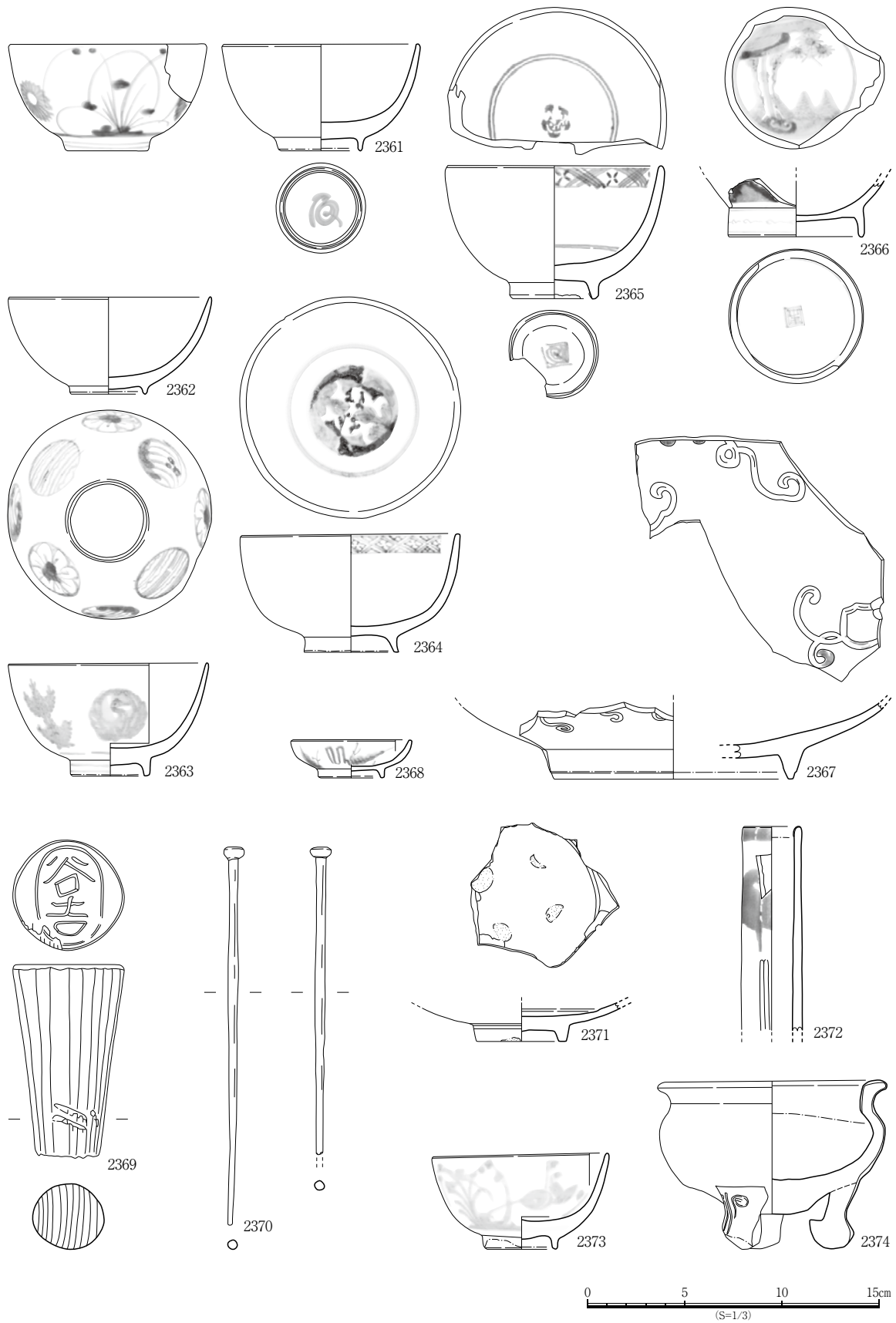


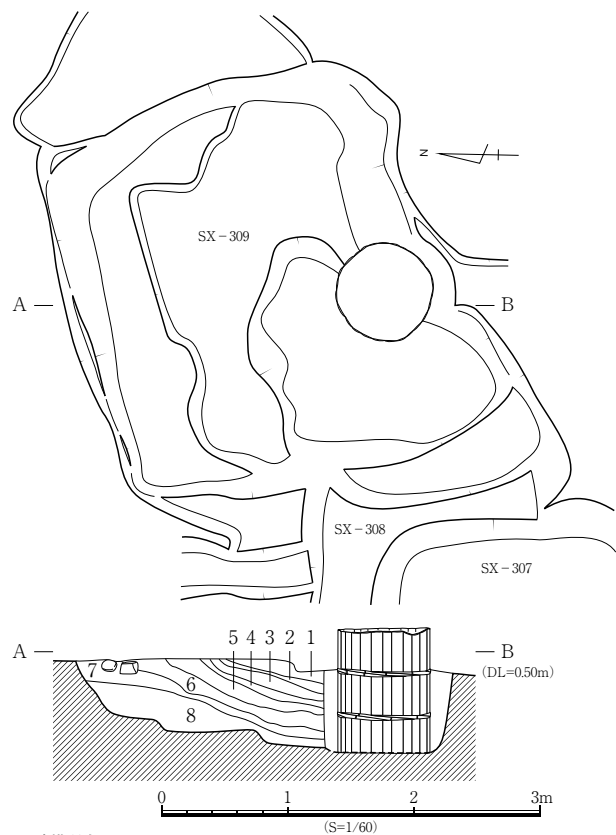
図209 SX-307・308出土遺物実測図

**SX-308**(遺物: 図209)

SX-307の北で確認した遺構で, SD-304, SX-307・309に切られる。SX-307と同様に水利施設とみられる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長3.77m, 検出幅1.60m, 深さ72cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。北肩と東肩には10~45cm大の石を貼り付け護岸をしている。石材は石灰岩が多く, 砂岩とチャートが僅かにみられる。出土遺物には陶器24点(碗2, 皿3, 猪口1, 線香筒1, 細片17), 磁器22点(碗4, 皿1, 小杯2, 猪口2, 紅皿1, 香炉1, 仏飯器1, 細片10), 平瓦1点, 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2371~2374である。2371は肥前内野山窯の陶器皿で, 内面から高台まで透明釉を施す。見込と高台の4箇所に砂目痕が残る。2372は陶器線香筒で, 体部の一部には丸彫による文様がみられる。口縁部内面から外面には透明釉を施し, 一部に緑釉を流し掛けする。2373は肥前産の磁器染付小丸碗で, 外面に草花文と圏線の染付がみられる。2374は磁器三足香炉で, 底部には3箇所に脚を貼付し, 脚部外面には陽刻による文様がみられる。口縁部内面から外面に青磁釉を施し, 脚接地面は釉ハギする。

**SX-309**(遺構: 図210 遺物: 図211・212)

SX-308の東で確認した遺構で, SX-308を切り, 南側には近代の桶が埋設されている。平面形態は隅丸方形を呈し, 全長3.39m, 全幅2.91m, 深さ74cmを測る。埋土は8層に分かれ, 最下層には木片が多く含まれていた。出土遺物には陶器184点(碗25, 皿15, 蓋2, 猪口1, 火入1, 瓶1, 鉢6, 播鉢17, 植木鉢1, 甕5, 花生1, 油德利1, 灰吹1, 灯明皿1, 灯明受皿1, 鍋4, 餌鉢1, 茶入1, ミニチュア1, 細片98), 磁器127点(碗17, 皿11, 蓋8, 小杯2, 猪口3, 蕎麦猪口2, 紅皿5, 合子蓋1, 蓋物1, 火入3, 瓶6, 水指1, 水滴1, 細片66), 土師質土器25点(杯1, 小皿5, 白土器4, 細片15), 土師器8点(火鉢3, 火入1, 火消し壺1, 細片3), 須恵器3点(甕1, 細片2), 瓦3点(丸瓦1, 再加工品2), 石製品2点(砥石1, 石臼1), 木製品5点(漆器椀1, 木筒1, 曲物蓋3), 金属製品9点(煙管1, 蓋1, 釘4など)がみられた。図示した遺物は2375~2394である。2375は陶器碗で, 内面から高台付近まで光沢のある透明釉を施す。内面には白化粧土による打刷毛目文がみられる。2376は京都・信楽系の色絵半球形碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施す。外面に墨・朱・緑色の花文と朱色の銘の上絵付がみられる。2377は福岡産とみられる陶器皿で, 内面から口縁部外面に鉄釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。口縁部内面には白化粧土による波状の刷



- 遺構埋土
1. 褐灰色 (N4/0) シルト質砂で, 1cm大の礫を多く含む
  2. 青灰色 (5B6/1) 砂質シルト
  3. 灰色 (10YR3/1) シルト質粗粒砂で, 1cm大の礫と木片を多く含む
  4. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質中粒砂で, 多量の3cm大の礫と木片を含む
  5. 褐灰色 (10YR6/1) シルト質粗粒砂で, 0.5cm大の礫を含む
  6. 黒色 (7.5YR2/1) 粗粒砂質シルトで, 1~3cm大の円礫と木片を多く含む
  7. 褐灰色 (10YR6/1) 砂質シルトで, 5cm大の礫を含む
  8. 黒褐色 (10YR3/1) 極粗粒砂質シルトで, 1cm大の礫が多く, 木片・木の皮を非常に多く含む

図210 SX-309



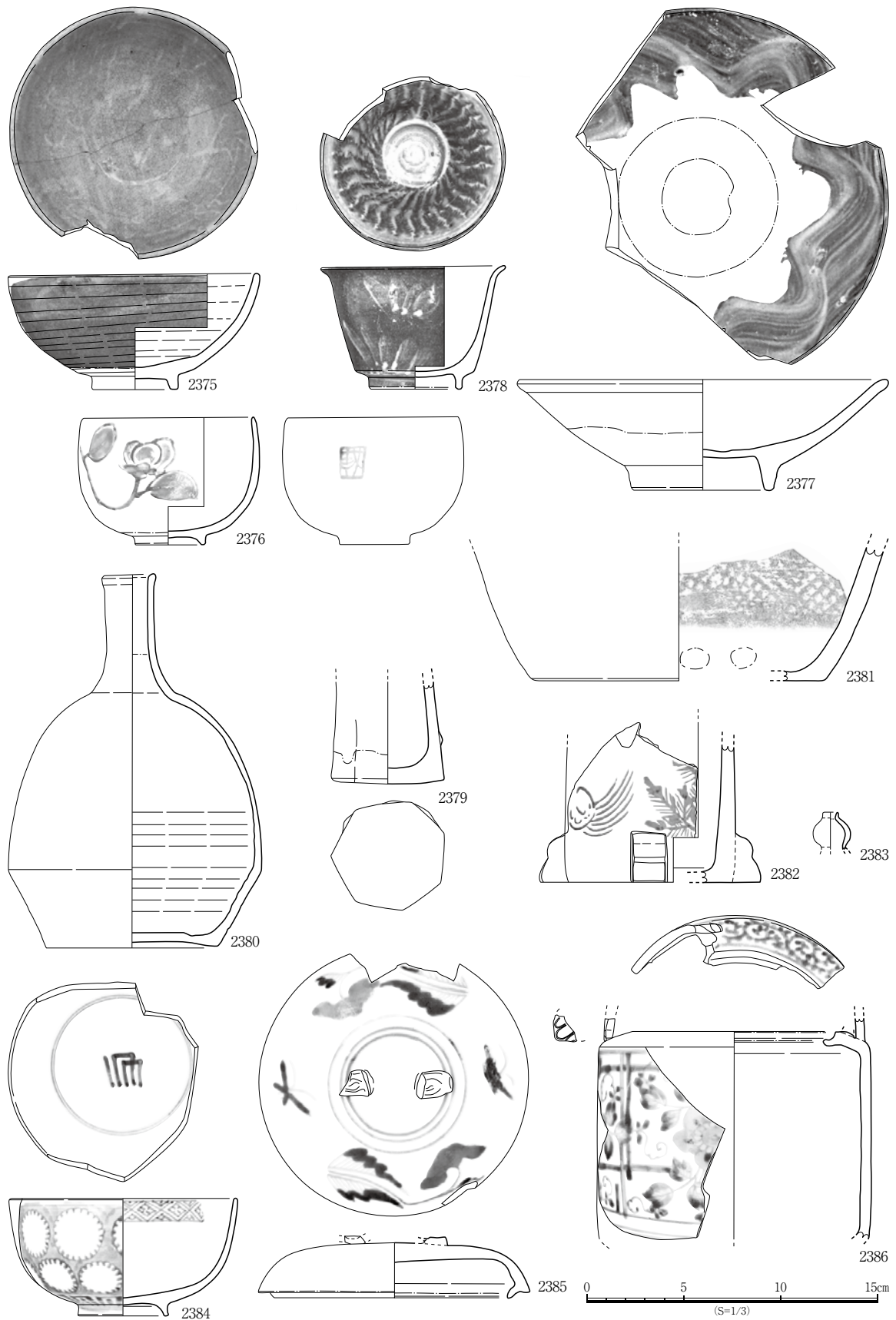


図211 SX-309出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

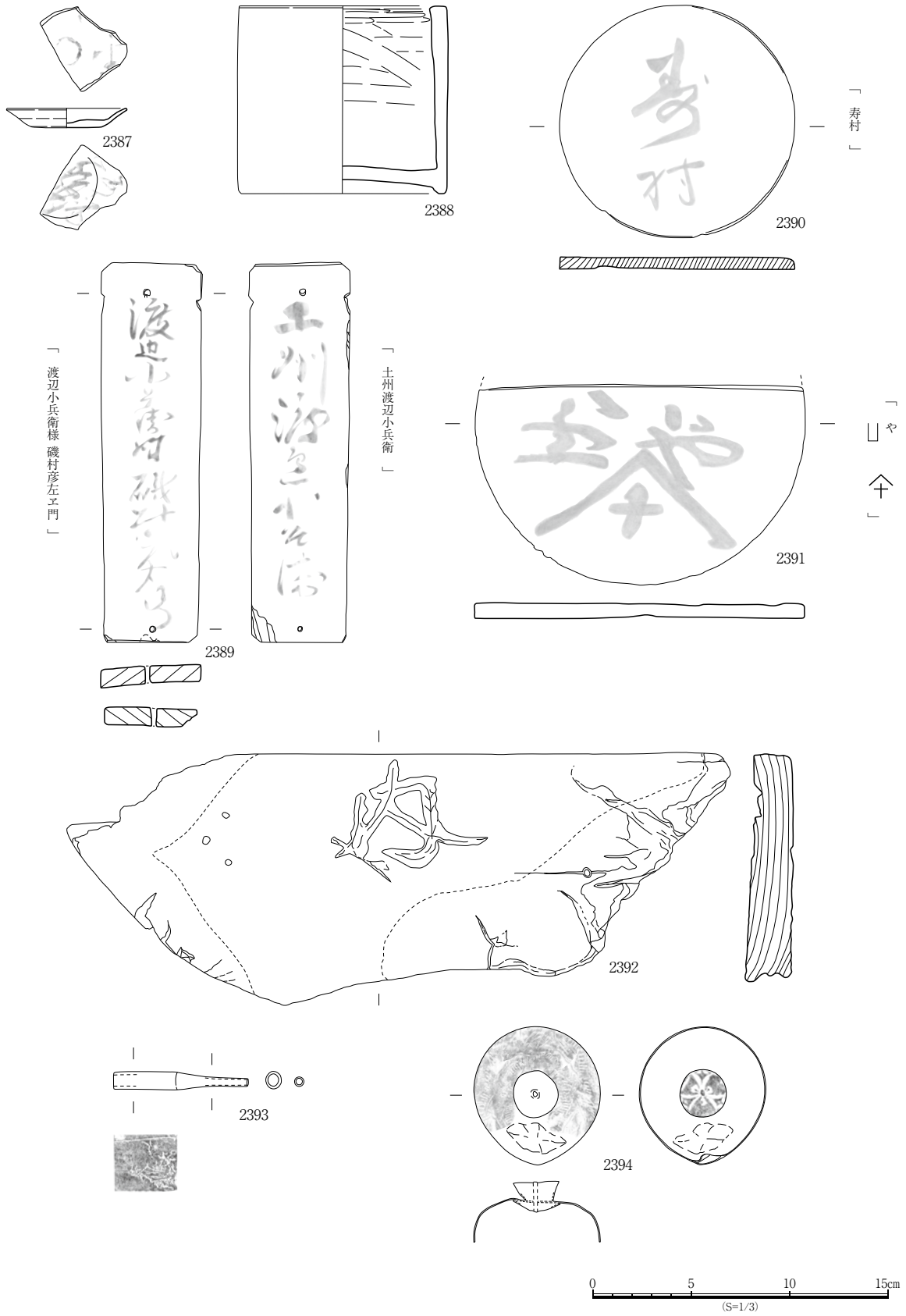


図212 SX-309出土遺物実測図2

毛目文を描いたのち透明釉を施す。見込には重ね焼痕が残る。2378は肥前産の陶器杯で、外面に白化粧土による花文、内面に白化粧土による打刷毛目文、見込に白化粧土による巻刷毛目文がみられる。2379は陶器灰吹とみられ、回転ナデ調整のち体部外面は縦方向の削りにより七角形に仕上げる。内面から外面底部付近まで鉄釉を施す。2380は陶器瓶で、口縁部内面から外面は鉄釉、底部外面は鉄釉を刷毛塗りする。2381は肥前産の陶器甕で、内面は格子状の叩きのちナデ調整、外面は回転ナデ調整、底部外面は無調整である。2382は陶器花生とみられ、4箇所脚を貼付する。底部外面を除き灰釉を施し、外面には鉄錆と呉須による松文と亀文とみられる文様を描く。2383は陶器ミニチュアで、瓢箪形の小瓶である。口縁部内面から外面には鉄釉を施す。2384は肥前産の磁器染付望料碗で、外面には濃地に雪輪文と蓮弁文・圏線、口縁部内面に四方禳文、見込に源氏香文と圏線の染付がみられる。2385は肥前産の磁器染付蓋物蓋で、天井部に陽刻による文様のある摘を貼付する。外面には蝶文と草花文・圏線の染付がみられる。2386は肥前有田産の磁器染付銚子で、肩部に菊花形の釣手を貼付する。外面には蛸唐草文と竹垣鉄線文の染付がみられる。2387は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。内外面に墨書がみられる。2388は練込手の土師器火入で、回転ナデ調整のち内面はナデ調整、口縁部内面から外面は横方向の磨き調整、底部外面は回転削り調整を加える。2389は木製品木筒で、四隅を切り上部両端に切り込みを入れ、上部と下部に径2mmの円孔を穿つ。表面は「渡辺小兵衛様 磯村彦左エ門」、裏面には「土州渡辺小兵衛」の墨書がみられる。2390～2392は木製品桶蓋で、2390は「寿村」の墨書、2391は屋号とみられる墨書、2392は「内」の刻書と5箇所に木釘がみられ、一部は炭化する。2393は銅製品とみられる煙管吸口で、外面は金鍍金が施され、型による陰刻の文様がみられる。2394は銅製蓋とみられ、笠部と摘は別作りである。外面は金鍍金が施され、陰刻による文様がみられる。内面の摘の留金具は型押による花文である。

SX-310(遺構:図202 遺物:図213)

SG-301の北で確認した遺構で、SD-306を切り、SG-301に切られる。杭列と石が出土しており、SG-310の裏込またはそれ以前の池跡の可能性はある。検出長8.30m、検出幅1.63m、深さ44cmを測る。埋土は3層に分かれ、底面は段を有しSG-301のある南が低くなっている。また、杭列がみられ、杭列の北側で10cm大の石灰岩が多数出土している。陶器30点(碗2, 皿3, 瓶1, 搦鉢1, 甕2, 鍋1, 細片20), 磁器28点(碗2, 皿2, 蓋2, 向付1, 蕎麦猪口1, 細片20), 土師質土器6点(皿1, 小皿1, 細片4), 土師器片1点, 須恵器片

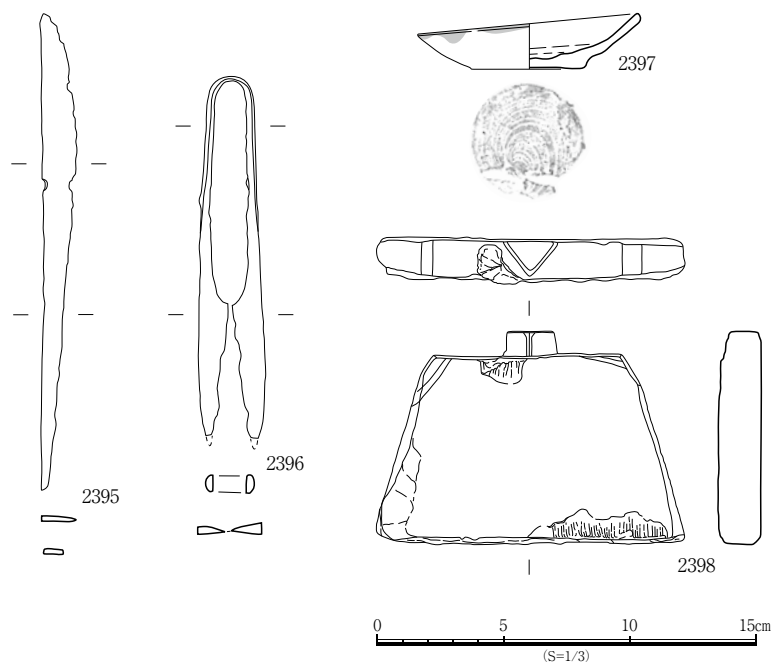


図213 SX-310・311出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

1点, 丸瓦1点, 金属製品3点(刀子1, 鋏1, 釘1)がみられた。図示した遺物は2395・2396である。2395は鉄製刀子で, 柄は欠損する。2396は鉄製鋏で, 先端は欠損する。断面は柄が半円形, 刃部は三角形を呈する。

SX-311(遺物: 図213)

SG-301の西で確認した遺構で, SG-301に切られる。SG-301の杭列がSX-311まで続いているためSG-301の一部である可能性もある。平面形態は不整形を呈し, 検出長5.34m, 検出幅2.30m, 深さ23cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を多く含んでいた。陶器11点(碗1, 細片10), 磁器12点(小杯1, 瓶1, 細片10), 土師質土器皿1点, 土師器片2点, 木製品2点(漆器碗1, 下駄1), 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2397・2398である。2397は土師質土器小皿で, 回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し, 灯明皿として使用されたものとみられる。2398は木製品下駄の差歯である。台形を呈し, 上部には断面三角形を呈する突起が付く。下端部には小礫が押圧されて多く入り込む。

SX-312(遺物: 図214)

B-1区北東部で確認した遺構である。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺3.68m, 短辺3.00m, 深さ48cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫とハンダ・炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器24点(碗4, 皿2, 鉢2, 播鉢2, 甕1, 細片13), 磁器15点(皿6, 小杯4, 細片5), 土師質土器8点(皿2, 小皿3, 細片3)がみられた。図示した遺物は2399~2401である。2399は肥前産の京焼風陶器碗で, 内面から高台付近まで透明釉を施す。外面には松樹文の染付がみられる。高台内には墨が付着する。2400は肥前産の陶器皿で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。内面には白化粧土による刷毛目文, 高台内には墨書がみられる。2401は石製品茶臼で, 下臼である。上面に

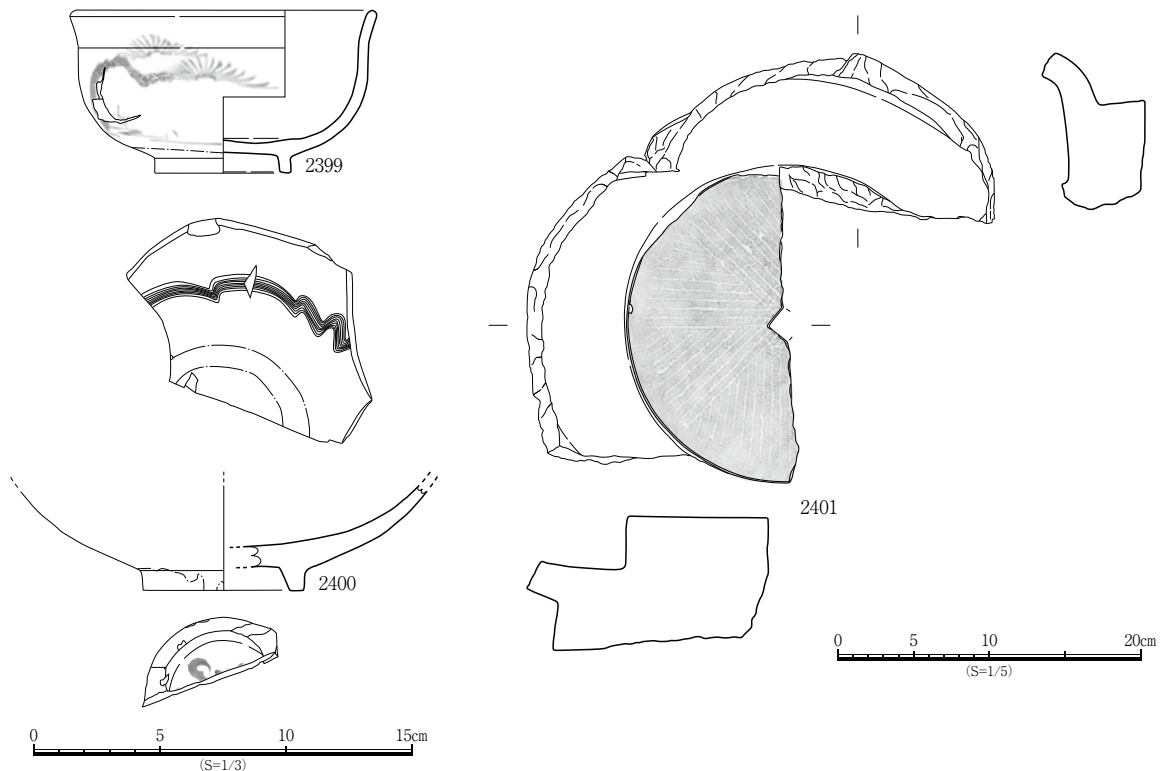


図214 SX-312出土遺物実測図

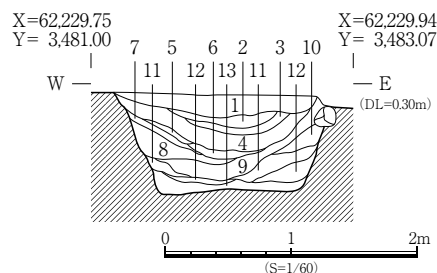
は八分画の播目がみられ、側面には皿状の受部が付く。中央の孔は上面が方形で、下面は円形である。側面と受部は研磨し、下面には加工痕が残る。

**SX-313**

SX-312の東で確認した遺構である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺4.13m、短辺1.74m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、多量の1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 皿2, 細片2), 磁器4点(碗3, 細片1), 土師質土器杯1点, 土製品人形1点がみられた。

**SX-314(遺構:図215 遺物:図216)**

SX-313の南で確認した遺構で、SX-315の底で検出した。SK-318を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、検出長7.46m、検出幅1.90m、深さ1.13mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は13層に分かれレンズ状に堆積する。SX-209・210と並行し同様の規模であり、これらの遺構とあまり時期差はないものとみられる。出土遺物には陶器27点(碗5, 皿5, 播鉢1, 甕1, 鍋1, 細片14), 磁器29点(碗8, 皿6, 猪口1, 細片14), 土師質土器13点(杯5, 皿1, 小皿1, 細片6), 土師器火鉢1点, 瓦6点(丸瓦2, 平瓦4), 土製品人形1点, 石製品2点(砥石1, 五輪塔1), 木製品木筒3点, 古銭2点, 珊瑚がみられた。図示した遺物は2402~2408である。2402は中層より出土した丹波焼甕で、口縁端部に4条の沈線、肩部には多条の沈線がみられ、1箇所不遊環を貼付する。内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整、外面体部下半は回転ナデ調整、底部外面は無調整である。2403は大型の石製品砥石で、一面のみ使用する。側面は未加工である。2404は石製品五輪塔で、水輪とみられる。外面は細かい加工痕、底面は粗い加工痕が残る、他の面より風化していない。2405~2407は木製品木筒で、上部側面に切り込みがみられ、下部は細く加工する。2405は表面上部に「○○○」、裏面には「×」の墨書がみられる。2406は上端隅を切り、下部は斜めに加工する。表面は「□(河カ)□(田カ)□(清カ)□大□式□(右カ)」, 裏面は「□十三年(カ)大豆□□□(宇カ)右衛門□」の墨書がみられる。2407は2406と同様の形態を呈し、表面は「○○ 小川村三良(郎)兵衛分」, 裏面は「× 大豆式斗三升入」の墨書がみられる。2408は銭貨で、正隆元寶である。



- 遺構埋土
1. 青灰色(5PB5/1)粘土質シルトで、粗粒砂と1cm大の礫、炭化物を含む
  2. 灰褐色(7.5YR5/2)粘土質シルトで、極粗粒砂が非常に多く混じる
  3. 灰白色(N7/0)粘土質シルト
  4. 褐灰色(7.5YR4/1)中粒砂質シルトで、木片と腐植を多く含む
  5. 黒褐色(7.5YR3/1)砂質シルトで、腐植を非常に多く含む
  6. 黒色(10YR2/1)シルト質極粗粒砂で、木片を多く含む
  7. 青灰色(5B6/1)粘土質シルトで、極粗粒砂を多く含む
  8. 黄灰色(2.5Y7/2)極粗粒砂質シルトで、木片を含む
  9. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト
  10. 灰色(N5/0)粘土質シルトで、細粒砂と木片を含む
  11. 青灰色(5B6/1)粘土質シルト
  12. 青灰色(5B6/1)粘土質シルトで、木片と腐植を多く含む
  13. 灰色(N6/0)粘土質シルト

図215 SX-314

**SX-315(遺物:図217)**

B-1区東部で確認した遺構で、底でSK-318とSX-314を検出した。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ、検出長7.40m、検出幅5.75m、深さ42cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層が褐灰色シルトで粗粒砂と1cm大の礫を含み、下層は灰色粘土質シルトで1cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には陶器15点(碗2, 皿2, 猪口1, 火入1, 鉢1, 植木鉢1, 壺1, 細片6), 磁器8点(碗1, 皿2, 細片5), 白磁皿1点, 土師質土器97点(杯5, 皿3, 小皿11, 白土器3, 細片75), 瓦8点(丸瓦3, 平瓦5), 石製品砥石2点, 金属製品2点がみられた。図示した遺物は2409~2414である。2409は尾戸窯の灰釉陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。2410は唐津系灰釉陶器中皿で、内面から外面体部下半まで灰釉を施す。2411は陶器鉢で、回転ナデ調整を施す。体部外面には鉄釉

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

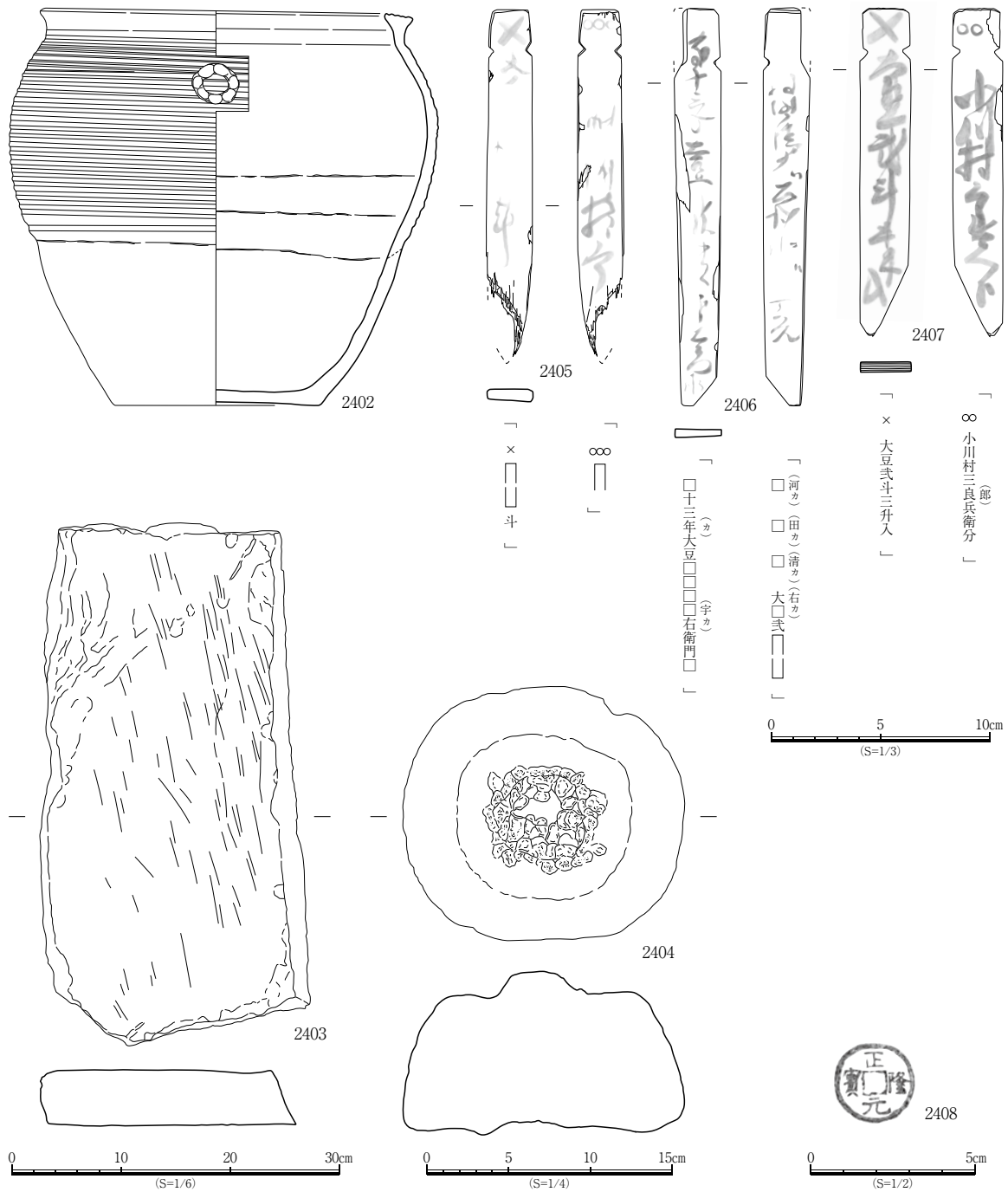


図216 SX-314出土遺物実測図

を施し、体部内面には赤色の付着物、底部にも全面に付着物がみられる。2412は肥前産の磁器染付小碗で、内外面に網目文、見込には丸に菊花文の染付がみられる。2413は中国景德鎮窯系の青磁皿で、基筒底を呈する。内面から体部外面まで青磁釉を施す。2414は土師質土器杯で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

SX-316(遺物: 図218)

SX-315の東で確認した遺構で、両端は他の遺構に切られる。平面形態は溝状を呈し、検出長7.90m, 検出幅2.14m, 深さ14cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5~3cm大の礫を多く含ん



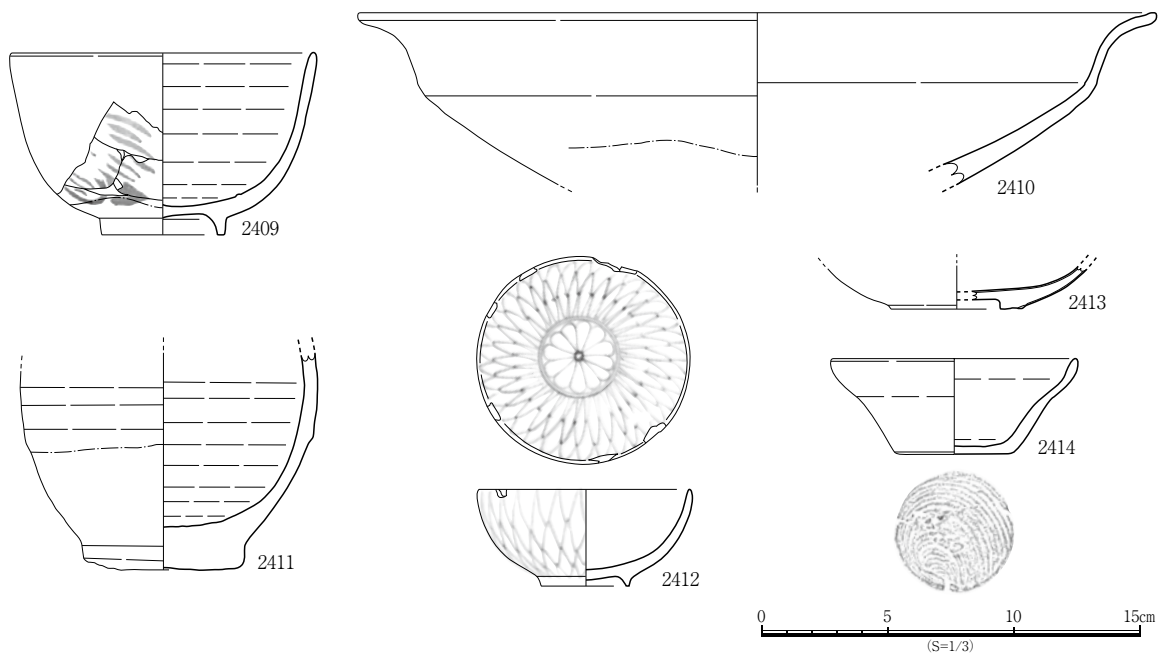


図217 SX-315出土遺物実測図

でいた。出土遺物には陶器13点(碗2, 皿3, 細片8), 磁器10点(碗2, 細片8), 土師質土器12点(皿1, 小皿1, 細片10), 石製品基石1点がみられた。図示した遺物は2415の石製品基石で, 黒色を呈する。

**SX-317**(遺物: 図218)

B-1区北西部で確認した大型の遺構で, SK-308, SX-305を切り, SK-323~325, SX-318・320, P-314・315に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 全長16.80m, 検出幅6.00m, 深さ33.2cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器43点(碗10, 皿6, 向付1, 鉢2, 播鉢4, 甕1, 灯明受皿1, 台1, 細片17), 磁器53点(碗7, 皿13, 蓋2, 杯1, 小杯3, 猪口2, 段重1, 香炉1, 瓶1, 細片22), 白磁皿1点, 土師質土器136点(杯1, 皿12, 小皿1, 細片122), 土師器フイゴ羽口1点, 須恵器片1点, 瓦3点(軒丸瓦1, 丸瓦2), 木製品14点(漆器椀3, 漆器蓋2, 箸1, 木筒1, 曲物1, 曲物蓋4, 切匙1, 不明1), 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2416~2422である。2416は京都産の陶器丸碗で, 内面から高台付近まで透明釉を施し, 外面には鉄錆と呉須による草花文がみられる。2417は肥前有田産の青磁中皿で, 全面に青磁釉を施し, 高台内は蛇ノ目釉ハギのち錆釉を施す。見込には陽刻による雲龍文がみられる。2418は中国産の白磁中皿で, 内面から高台付近まで白磁釉を施し, 高台内中央部は無釉である。高台付近に粗い砂が付着する。2419~2422は木製品である。2419・2420は漆器椀で, 内外面とも赤塗である。2420の高台内には「×」の刻書がみられる。2421は漆器蓋で, 内外面とも赤塗である。2422は木筒で, 短冊形を呈し, 上部に円孔を穿つ。両面とも「當番 田中文□進」の墨書がみられる。図示した遺物の他に絵唐津皿, 志野焼向付, 磁器色絵皿なども出土している。また, 土師質土器皿が纏まって出土しており一括廃棄されたものとみられる。土師質土器皿の内少なくとも7点は灯明皿として使用されており, 灯明皿片も約100点が出土している。

**SX-318**(遺物: 図218)

SX-317の埋土上で確認した遺構で, SK-324に切られる。平面形態は不整形を呈し, 検出長2.08m, 検出幅1.15m, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで, 0.5~3cm大の礫を非常に多く含む



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

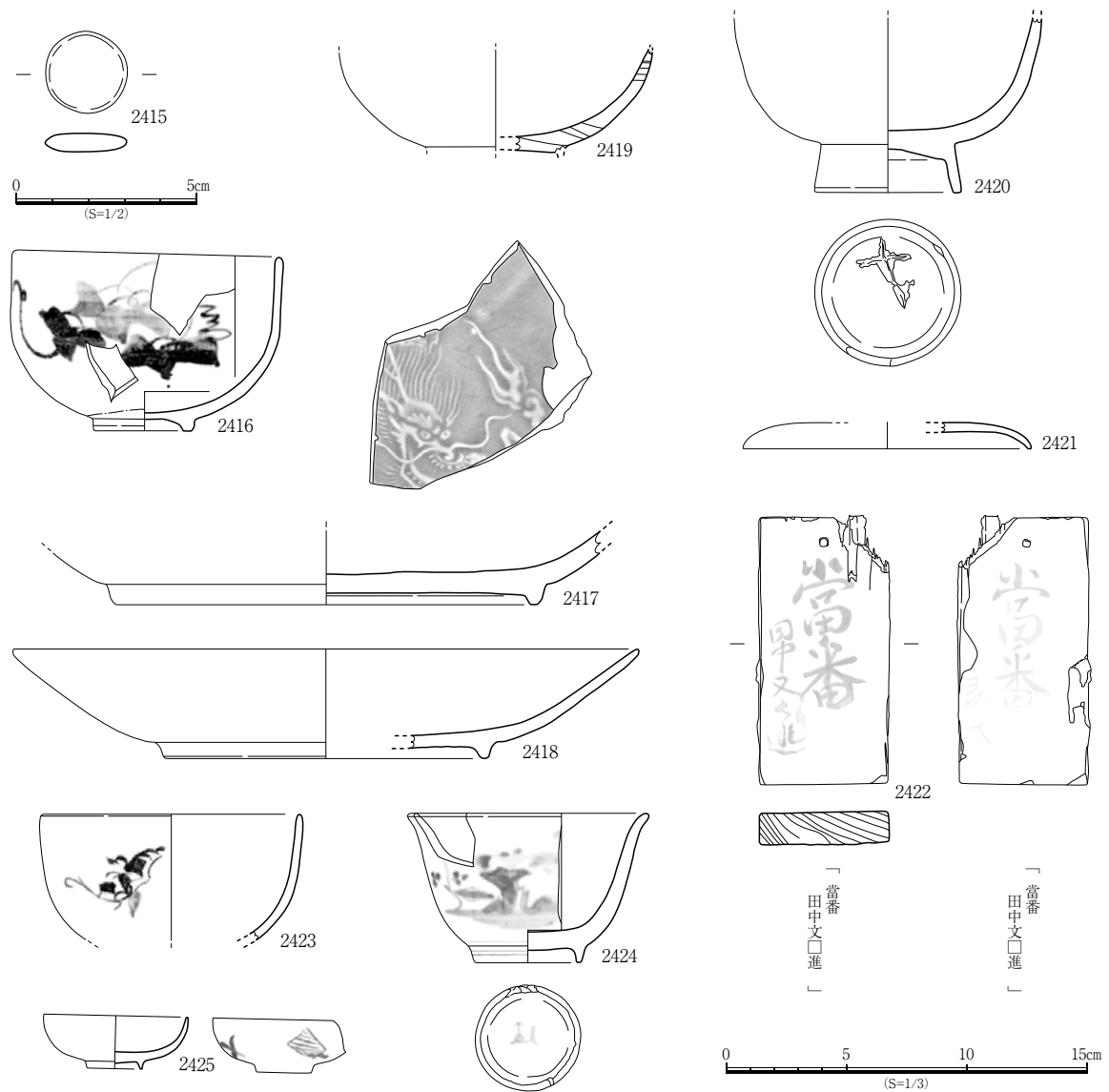


図218 SX-316～319出土遺物実測図

でいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1), 磁器6点(皿2, 細片4)がみられた。図示した遺物は2423で、京都・信楽系の陶器丸碗である。全面に透明釉を施し、外面には鉄錆と呉須による草花文がみられる。

SX-319(遺構：図257 遺物：図218)

SX-318の南東で確認した遺構で、SX-320を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径4.41m、短径2.23m、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色シルト質砂で、炭化物と腐植を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1, 甕1, 細片1), 磁器17点(碗1, 小杯3, 猪口2, 瓶1, 細片10), 土師質土器皿1点, 平瓦1点がみられた。図示した遺物は2424・2425である。2424は肥前産の磁器染付端反碗である。外面には風景文と圏線の染付、高台内には「大明年製」の銘がみられる。2425は肥前有田産の磁器色絵猪口で、外面には朱色の羽子板文と羽文の上絵付がみられる。

SX-320(遺構：図257)

SX-319の南で確認した遺構で、SX-319, P-316に切られる。平面形態は長方形を呈し、長辺7.50m、短辺3.16m、深さ23cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで、5～10cm大の礫を含んでいた。出土遺

物には陶器13点(碗3, 皿1, 鉢1, 播鉢1, 細片7), 磁器8点(碗1, 皿3, 小杯1, 細片3), 土師質土器3点(皿1, 小皿1, 白土器1), 軒丸瓦1点, 木製品曲物蓋1点, 金属製品2点(刀子1, 燭台か1)がみられ, 絵唐津皿や京・信楽系色絵碗なども出土している。

**SX-321**

SX-320の南で確認した遺構である。平面形態は長方形を呈し, 長辺4.50m, 短辺3.28m, 深さ21cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿2, 甕1, 細片3), 磁器2点(皿1, 細片1), 土師質土器3点(皿2, 細片1)がみられた。

**SX-322**

SX-321の東で確認した遺構で, P-320に切られる。平面形態は不整形を呈し, 全長2.61m, 検出幅2.42m, 深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗1, 甕1, 細片2), 磁器2点(瓶1, 細片1), 土師質土器3点(皿1, 細片2)がみられた。

**SX-323(遺構: 図141 遺物: 図219)**

B-1区東部で確認した遺構である。平面形態は溝状を呈し, 東は調査区外へ続く。検出長7.29m, 全幅1.39m, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器18点(皿2, 鉢1, 細片15), 磁器6点(碗1, 皿2, 細片3), 土師質土器片2点, 平瓦片4点, 石製品石臼1点がみられた。図示した遺物は2426で, 石製品茶臼である。上臼で, 上部中央には円孔が貫通し, 側面には陽刻の二重菱形内に方形の孔を穿ち, 下面には八分画の播目がみられる。上面くぼみには加工痕が残り, 上端と側面の一部は研磨する。播目は著しく摩耗する。

**SX-324(遺物: 図220)**

SX-323の南で確認した遺構で, 東は調査区外へ続く。SK-342に切られる。一部を検出し, 検出

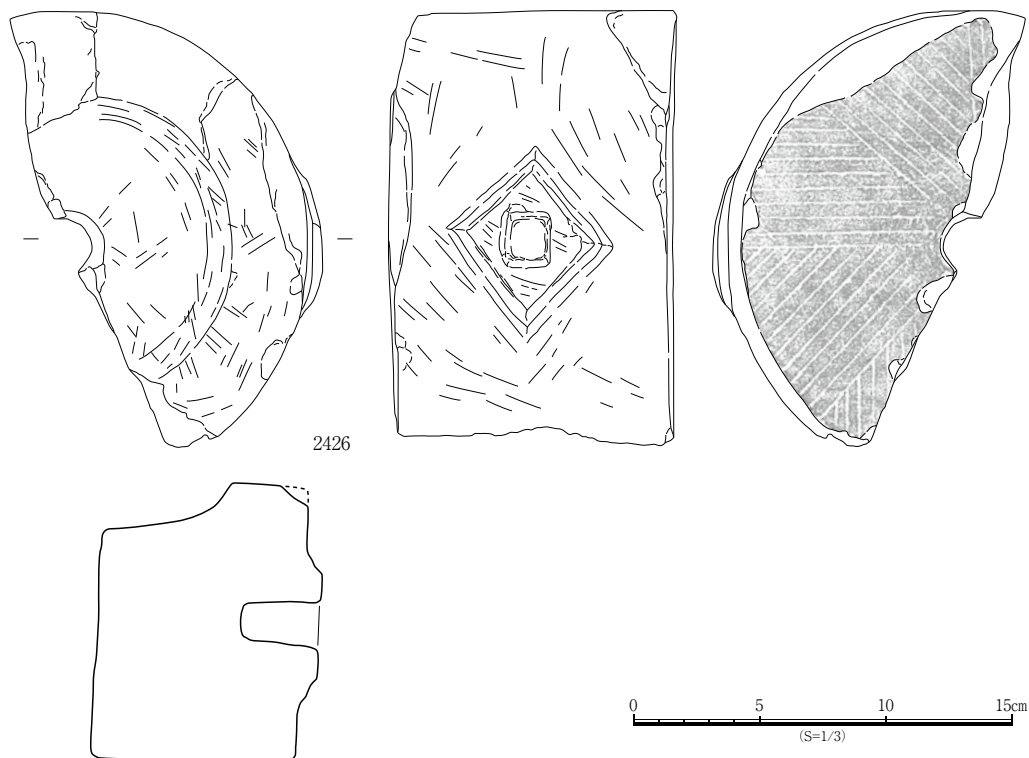


図219 SX-323出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

長6.38m, 検出幅1.27m, 深さ9cmを測る。埋土は灰白色砂質シルトで、多量の10cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿1, 細片2), 磁器24点(碗1, 皿7, 小杯1, 鉢2, 水滴1, 細片12), 丸瓦片1点, 鉄滓, 桃または梅の種がみられた。図示した遺物は2427・2428である。

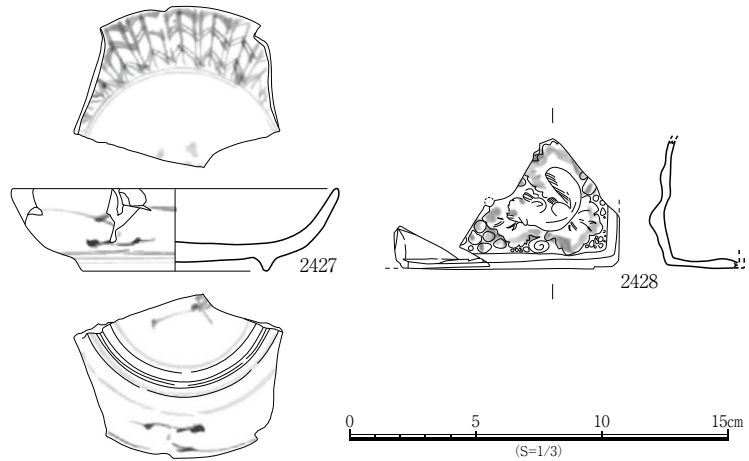


図220 SX-324出土遺物実測図

2427は肥前産の磁器染付皿で、外面が唐草文と圈線、口縁部内面に矢羽根文の染付と、見込にコンヤク印判による五弁花文とみられる文様、高台内に圈線と銘の一部が描かれる。2428は肥前産とみられる磁器水滴である。型打成形で、外面には型による陽刻の栗鼠と葡萄文がみられ、呉須と鉄釉で彩色する。

P-302(遺物: 図221)

B-1区北西隅で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径46cm, 短径31cm, 深さ7cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器皿1点と図示した石製品がみられた。2429は石製品鋳型とみられ、2187と組になるものとみられる。上面は平らで円形と台形、弧状の凹みがみられ、円形の凹みの底には径2mmの円孔が貫通する。側面と下面は角を持たず丸く研磨する。

P-303(遺物: 図221)

P-302の南東で確認したピットで、SX-305を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径81cm, 短径62cm, 深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片3点, 磁器碗1点, 土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2430で、肥前産の磁器染付小丸碗である。外面には二重網目文の染付, 高台内には銘がみられる。

P-304(遺物: 図221)

P-303の南東で確認したピットで、SX-305を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径36cm, 短径31cm, 深さ5cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2431の陶器色絵筒形碗のみで、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には上絵付の一部が残る。

P-305(遺物: 図221)

B-1区北端で確認したピットで、北は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し、全長1.05m, 検出幅0.57m, 深さ49cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器13点(碗2, 蓋1, 瓶1, 鉢1, 挿鉢1, 餌鉢1, 細片6), 磁器2点(皿1, 紅皿1), 石製品砥石1点がみられた。図示した遺物は2432で、陶器蓋物蓋である。天井部には玉状の摘を貼付し、天井部外面には白化粧土と鉄錆による草花文がみられる。

P-306(遺物: 図221)

P-305の東で確認したピットで、P-308を切る。平面形態は楕円形を呈し、検出長70cm, 検出幅28

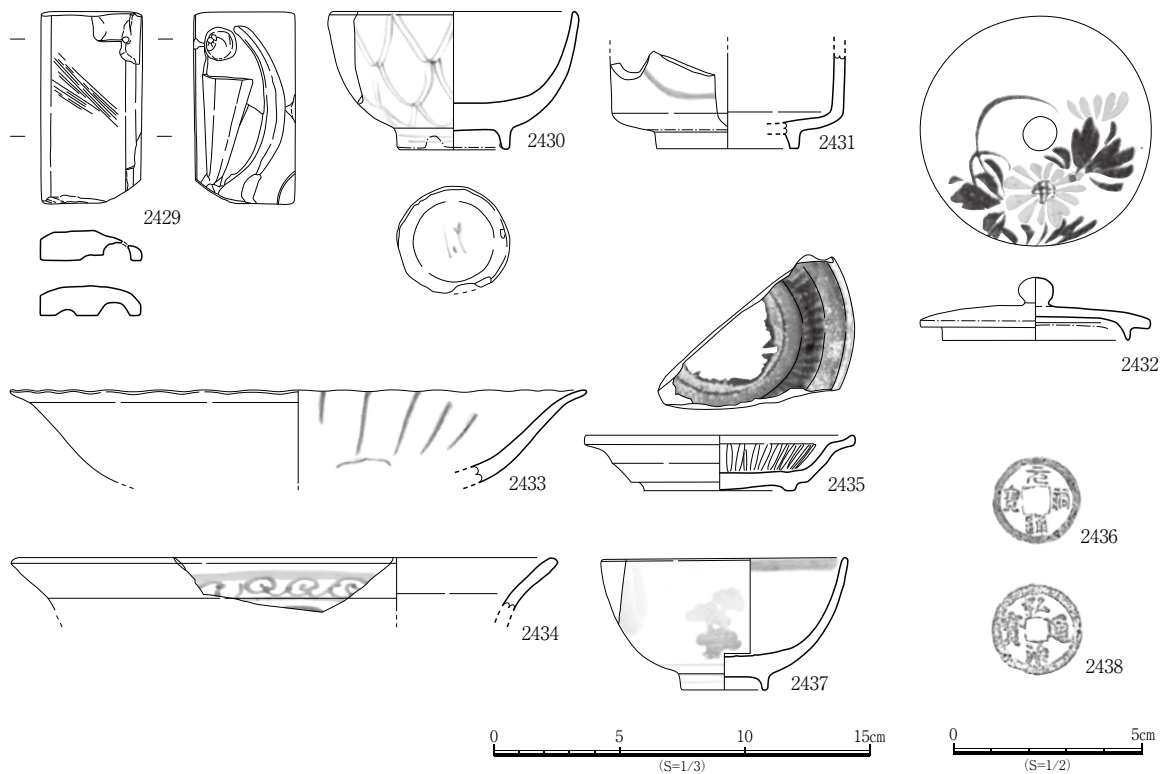


図221 P-302～311出土遺物実測図

cm, 深さ3cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器2点(皿1, 細片1)がみられた。図示した遺物は2433で、肥前産の青磁輪花皿である。全面に青磁釉を施し、内面には陰刻による縞文がみられる。

P-307(遺物: 図221)

B-1区北東部で確認したピットで、P-308を切る。平面形態は円形を呈するとみられ、径45cm, 深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器片1点と青花皿1点がみられた。図示した遺物は2434で、中国産の青花皿である。全面に透明釉を施し、内面に染付がみられる。

P-308(遺物: 図221)

P-307の北で確認したピットで、P-307に切られる。平面形態は楕円形を呈するとみられ、検出長73cm, 検出幅39cm, 深さ3cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器皿1点と土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2435で、瀬戸・美濃産の陶器折縁皿である。全面に緑釉を施し、見込は釉ハギし、内面には丸彫による縞文がみられる。

P-309(遺物: 図221)

P-308の北東で確認したピットで、一部は他の遺構に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長32cm, 検出幅11cm, 深さ18cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には磁器皿1点と土師質土器片1点, 古銭1点がみられた。図示した遺物は2436の銭貸で、元祐通寶である。

P-310(遺物: 図221)

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

B-1区北東部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径30cm、短径27cm、深さ7cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片4点と磁器碗1点、土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2437で肥前産の磁器染付小丸碗である。外面に圏線の染付とコンニャク印判による松文がみられる。

#### P-311(遺物: 図221)

P-310の北東で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径35cm、短径30cm、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2438の銭貨のみで、弘治通寶である。

#### P-312(遺物: 図222)

P-311の南西で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径27cm、短径22cm、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(皿1, 細片3), 磁器皿2点がみられた。図示した遺物は2439で肥前産の磁器染付六角皿である。ロクロ挽き後に型打成形をしており、口縁部は六角形で輪花形を呈し、高台は円形を呈する。外面に宝文とみられる染付、内面に人物文と風景文・四方襷地に丸に算木文、高台内には「大明」の銘がみられる。

#### P-313(遺物: 図222)

B-1区西部で確認したピットで、SD-301を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径59cm、短径47cm、深さ23cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器3点(皿1, 鉢1, 火入1)と磁器2点(碗1, 細片1), 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2440で京都・信楽系の陶器色絵皿である。内面から高台付近まで灰釉を施し、内面には朱・緑色の笹文の上絵付がみられ、見込には目痕が2箇所に残る。

#### P-314(遺物: 図222)

P-313の北東で確認したピットで、SX-317を切る。平面形態は不整形円形を呈し、径68cm、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗3, 猪口1, 細片15), 磁器12点(碗1, 紅皿1, 細片10), 土師質土器9点(杯1, 細片8)がみられた。図示した遺物は2441～2443である。2441は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には笹文と草花文の上絵付の痕跡が残る。2442は陶器猪口で、内面から高台付近まで透明釉を施し、外面には鉄錆による渦文がみられる。2443は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面には桜文と圏線、内面には四方襷文と圏線の染付がみられる。

#### P-315(遺物: 図222)

P-314の東で確認したピットで、SX-317を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径64cm、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器碗1点、磁器蓋物1点、土師質土器小皿1点がみられた。図示した遺物は2444で肥前産の磁器染付蓋物である。全面に透明釉を施し、口縁部内面と暈付を釉ハギする。外面には格子に雷文・圏線の染付がみられる。

#### P-316(遺物: 図222)

P-315の南東で確認したピットで、SX-320を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径59cm、短径33cm、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。



出土遺物には陶器2点(皿1, 細片1)がみられた。図示した遺物は2445で唐津系灰釉陶器皿である。内面から体部外面まで灰釉を施し, 見込には胎土目痕が2箇所に残る。

P-317(遺物: 図222)

P-316の南東で確認したピットで, 他の遺構に切られる。平面形態は溝状を呈し, 検出長86cm, 全幅24cm, 深さ7cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 甕1), 磁器3点(皿2, 鉢1)がみられた。図示した遺物は2446で磁器染付皿である。高台はなく, 全面に透明釉を施し, 底部外面は釉ハギする。外面と見込には宝文とみられる染付, 口縁部内面に唐草文とみられる染付を描く。

P-318(遺物: 図222)

B-1区中央部で確認したピットで, SK-330に切られる。平面形態は円形を呈するとみられ, 径

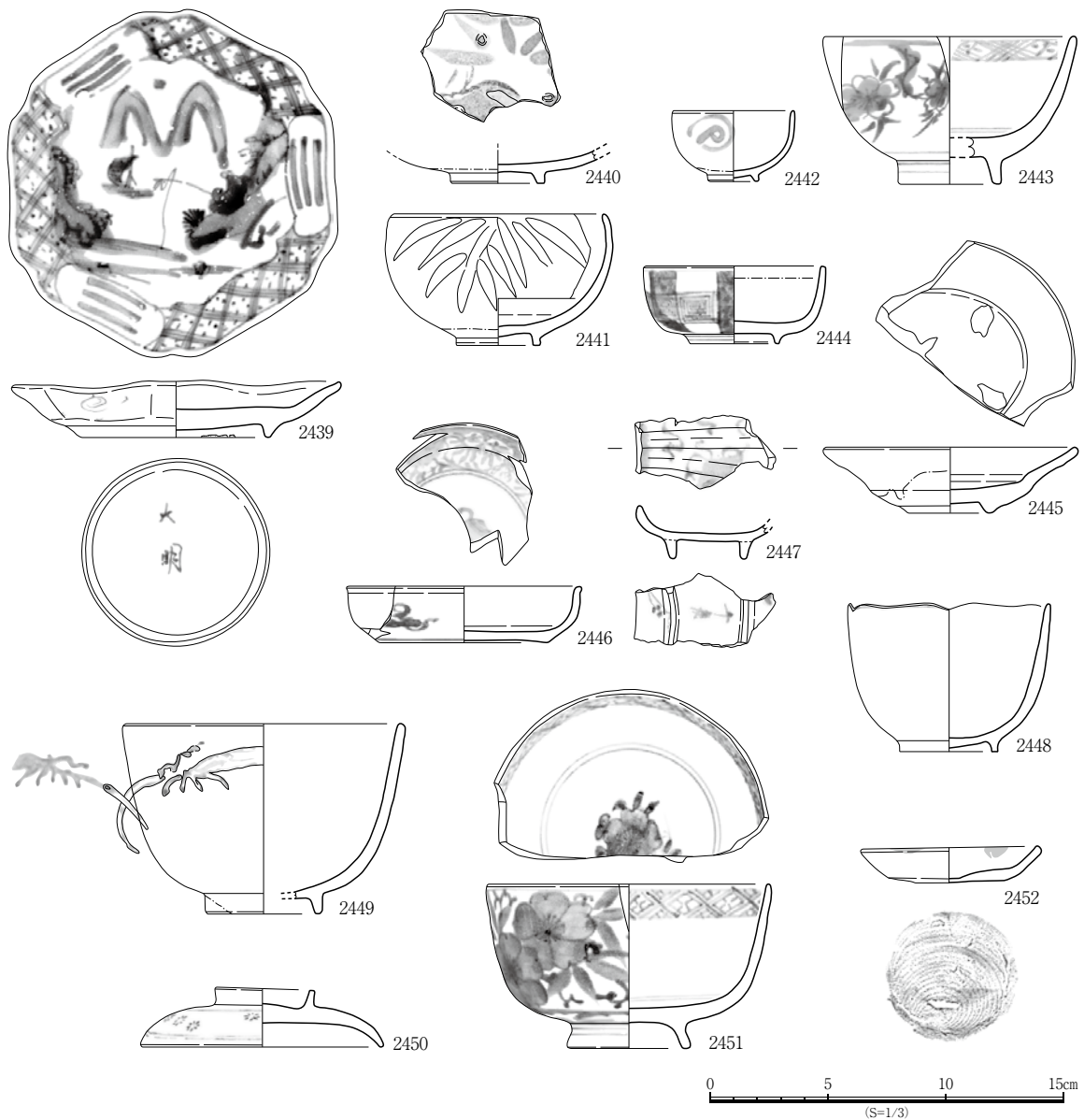


図222 P-312~319出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

29cm, 深さ24cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器皿1点と平瓦1点がみられた。図示した遺物は2447の肥前有田産の磁器染付変形皿で, 内面は菊皿風になる。型打成形とみられ, 高台は貼付する。外面に花文とみられる染付, 内面には宝文とみられる染付, 高台内には「年製」とみられる銘の一部が残る。

P-319(遺物: 図222)

B-1区中央部で確認したピットで, SD-310を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.05m, 短辺0.51m, 深さ72cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。陶器7点(碗3, 蓋1, 灯明受皿1, 餌鉢1, 水滴1), 磁器7点(碗4, 瓶1, 細片2), 土師質土器4点(小皿1, 白土器1, 細片2)がみられた。図示した遺物は2448~2452である。2448・2449は尾戸窯の陶器碗である。2448は小碗で, 口縁部は稜花形を呈し, 口鏝である。2449は内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には鉄錆による松文がみられる。2450は尾戸窯の陶器碗蓋で, 外面に鉄錆による印花文と圏線がみられる。2451は肥前産の磁器染付望料碗で外面に圏線と桜文と唐草文とみられる染付, 内面に四方禳文, 見込に桜文と圏線の染付を描く。2452は土師質土器小皿で, 回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着し, 灯明皿として使用されたものとみられる。

P-320(遺物: 図223)

B-1区南西部で確認したピットで, SX-322を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.32m, 短径1.25m, 深さ46cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで, 細粒砂と1cm大の礫と炭を少し含んでい

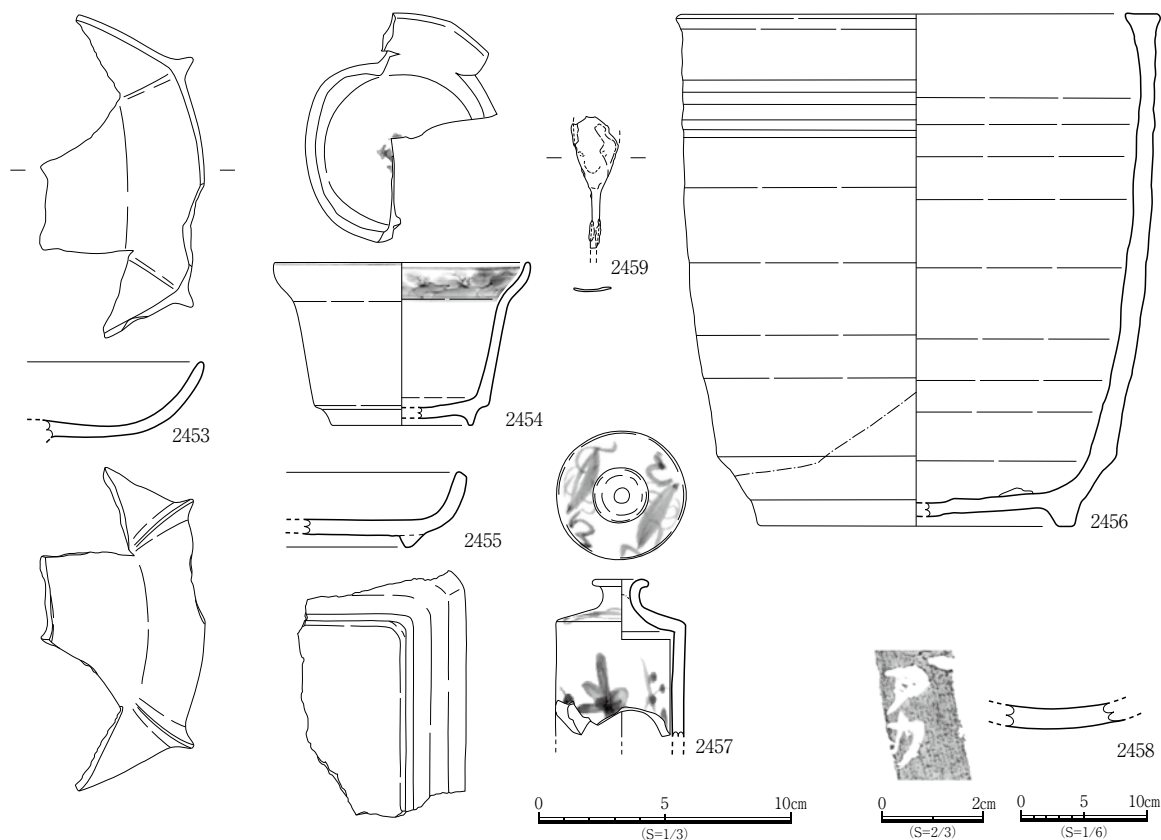


図223 P-320・321出土遺物実測図

た。出土遺物には陶器20点(碗2, 皿1, 鉢3, 瓶1, 壺1, 甕1, 細片11), 磁器7点(碗1, 皿3, 蕎麦猪口1, 鉢1, 細片1), 土師器4点(焙烙1, 細片3), 瓦質土器片1点がみられた。図示した遺物は2453・2454である。2453は陶器多角形皿で, 全面に光沢のある透明釉を施す。外面の2箇所断面三角形の突起が付く。2454は肥前有田産の磁器染付小鉢である。内面は透明釉, 外面は青磁釉で, 口鏝である。口縁部内面に山文と樹文, 見込には五弁花文とみられる染付を描く。

P-321(遺物: 図223)

P-319の南で確認したピットで, SK-334を切る。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.02m, 全幅0.88m, 深さ28cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器17点(碗1, 皿2, 蓋1, 合子蓋1, 鉢3, 灯明受皿1, 七輪2, 人形1, 細片5), 磁器57点(皿20, 蕎麦猪口2, 段重1, 瓶1, 鉢3, 細片30), 土師質土器5点(小皿2, 細片3), 土師器火鉢1点, 瓦2点(丸瓦1, 平瓦1), 金属製品匙1点, 軽石がみられた。図示した遺物は2455~2459である。2455は志野焼とみられる陶器角皿である。高台を貼付し, 暈付を除き長石釉を施す。2456は陶器鉢で, 内面から体部外面まで鉄釉を施し, 見込には砂目痕, 口縁部外面には沈線が3条みられる。2457は肥前産の磁器染付瓶で, 筒形を呈する。口縁部内面から外面に透明釉を施し, 肩部上面に宝文, 胴部外面に梅文の染付がみられる。2458は平瓦で, 側面に「アカ」とみられる刻印が残る。2459は銅製匙で, 匙部は扁平で, 柄部は断面方形を呈する。

P-322(遺物: 図224)

P-321の東で確認したピットで, SK-334を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径82cm, 短径78cm, 深さ30cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗2, 皿1, 水注1, 急須1, 細片4), 磁器53点(碗6, 皿13, 蓋1, 猪口1, 段重1, 鉢1, 細片30), 土師質土器片4点, 金属製品2点がみられた。図示した遺物は2460~2462である。2460は陶器柄杓で, 内面から高台付近まで鉄釉を施す。柄との接合部は断面半円形を呈し, 上面には径3mmの円孔がみられ

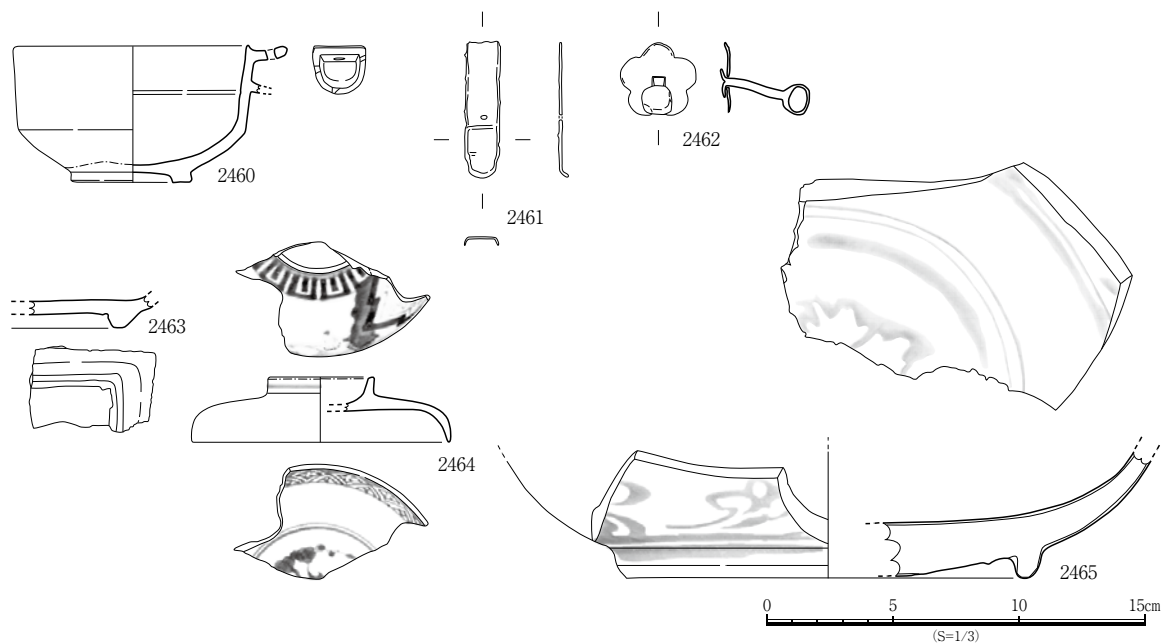


図224 P-322~324出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

る。2461は銅製飾り金具で、先端は丸く、断面はコの字状を呈し、1箇所にも円孔がみられる。表面には打ち込みによる文様の一部が残る。2462は銅製座金で、薄い板状で梅形を呈する。表面がやや凸になり、中央には棒状の金具を折り曲げたものが接合される。

P-323(遺構：図188 遺物：図224)

P-322の南で確認したピットで、SK-334を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、検出長1.76m、検出幅1.03m、深さ21cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 皿1, 鉢2, 細片1), 磁器22点(皿10, 大皿1, 蓋1, 紅皿1, 合子1, 段重1, 細片7), 土師器火鉢1点, 軒平瓦1点がみられた。図示した遺物は2463・2464である。2463は瀬戸・美濃系とみられる陶器角皿で、全面に光沢のある透明釉を施し、畳付は釉ハギする。2464は肥前有田産の磁器色絵望料碗蓋である。外面には蓮弁文の染付と墨・金彩による上絵付, 天井部内面には環状の松竹梅文の染付, 口縁部内面に四方櫛文の染付がみられる。

P-324(遺物：図224)

P-323の東で確認したピットで、SK-335を切る。平面形態は円形を呈し、径56cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色極細粒砂質シルトで締まりはなく、10～15cm大の角礫と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には陶器片1点, 青磁鉢1点がみられた。図示した遺物は2465で青磁鉢とみられる。全面に青磁釉を施し、高台内を蛇ノ目釉ハギする。内外面には陰刻による文様がみられる。

④ 4面

18世紀後葉から幕末にかけての遺構で、引き続き村田家が居住していたとされる時期である。また、この時期に調査区南部は3面と同様に三つの屋敷地に分かれたとみられ、これらの屋敷地はB-2区として報告する。この時期のB区の遺構は残存状態が良好で、全面で非常に多くみられた。

SB-403(遺構：図225 遺物：図226)

B-1区北部で確認された南北棟掘立柱建物跡で、北は調査区外へ続く。梁間2間(4.80m)、桁行2間(3.80m)を検出し、柱間寸法は梁間が2.00mと2.80m、桁行が1.80mと2.00mを測る。大型の柱穴を有し、径約0.77～1.50mの楕円形または隅丸方形を呈し、すべての柱穴に40cm大の礎板が確認された。南東隅の柱穴は特に規

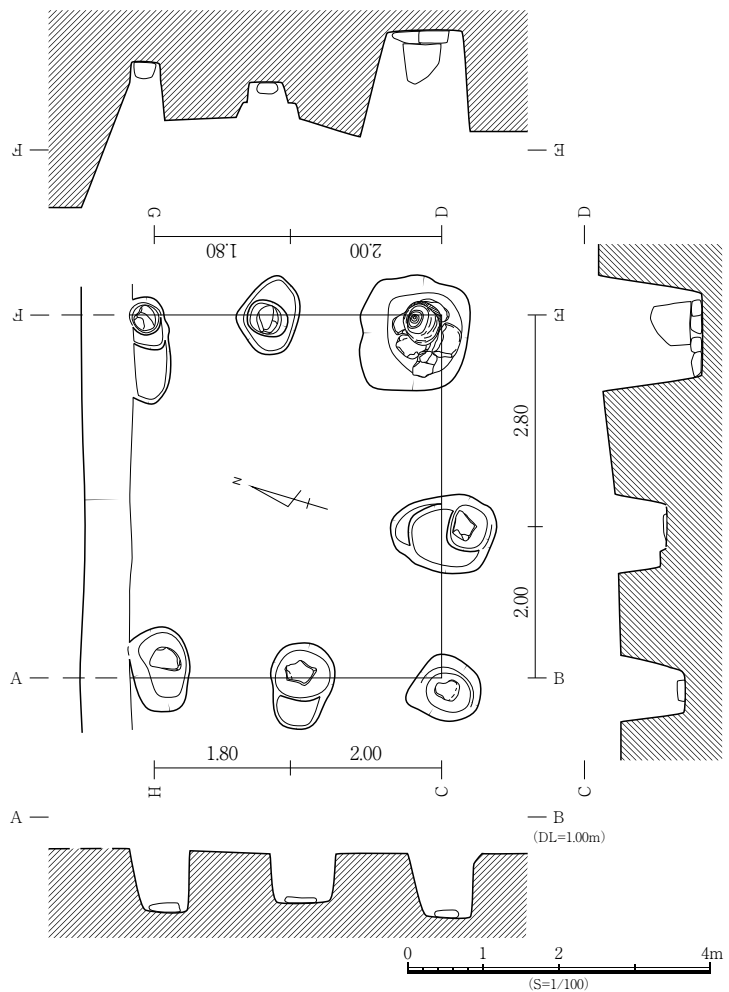


図225 SB-403

模が大きく、径51cmを測る柱根が残存していた。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器10点(皿4, 播鉢1, 甕1, 細片4), 磁器11点(碗3, 皿1, 小杯1, 細片6), 土師質土器片5点, 土師器2点(鉢1, 高杯1), 須恵器片1点, 土製品人形1点, 石製品砥石1点がみられた。図示した遺物は2466で南東隅の柱穴から出土した瀬戸・美濃産の陶器折縁皿である。全面に緑釉を施し、見込を釉ハギする。内面には丸彫による縞文がみられる。底部外面には輪状の重ね焼痕が残る。図示した遺物の他に磁器端反碗も出土している。

SK-424

B-1区北西部で確認した土坑で、SK-425・426を切り、SK-427に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.20m, 短辺1.02m, 深さ19cmを測る。ハンダ土坑で、埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物, 漆喰を含んでいた。出土遺物には陶器10点(皿1, 播鉢2, 土瓶2, 細片5), 磁器5点(碗2, 皿2, 細片1), 土師質土器片1点, 土師器片1点, 須恵器片1点, 瓦質土器片1点がみられた。

SK-425(遺物: 図226)

SK-424の北で確認した土坑で、SK-424に切られる。平面形態は長方形を呈し、検出長2.15m, 検出幅1.56m, 深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物, シジミ貝を含んでいた。出土遺物には陶器73点(碗3, 瓶2, 鉢1, 播鉢3, 壺1, 甕2, 灯明皿1, 鍋6, 土瓶1, 細片53), 磁器38点(碗7, 皿4, 蓋1, 小杯1, 猪口1, 紅皿2, 段重1, 瓶1, 壺1, 細片19), 土師質土器4点(白土器片2, 細片2), 土師器7点(焙烙1, 細片6), 施釉土器2点(高杯1, 細片1), 瓦質土器3点(火鉢2, 細片1), 平瓦2点がみられた。図示した遺物は2467・2468である。2467は肥前産の磁器合子蓋で、摘は欠損する。全面に透明釉を施し、口縁部は釉ハギする。外面にはコンニャク印判による文様がみられる。2468は肥前産の磁器染付小壺とみられ、透明釉を施し、口縁部内面は釉ハギする。外面には雲形の窓に風景文の染付, 肩

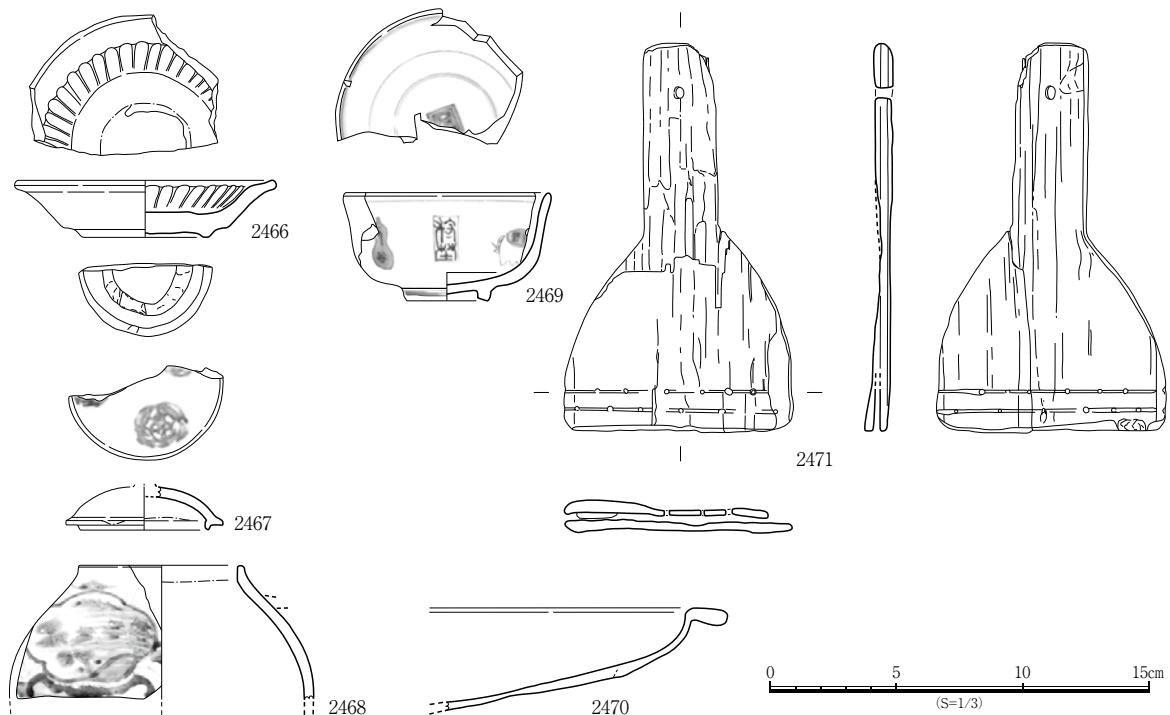


図226 SB-403, SK-425・426出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

部には把手の剥離痕がみられる。

SK-426(遺物: 図226)

SK-425の南で確認した土坑で, SK-424・427に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長2.24m, 検出幅1.40m, 深さ14cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器28点(皿1, 鍋1, 土瓶1, 細片25), 磁器19点(碗3, 蓋3, 小杯1, 杯1, 合子1, 細片10), 土師器焙烙2点, 瓦質土器焙烙1点, 丸瓦1, 木製品刷毛1点, 銅製品箸1点がみられた。図示した遺物は2469~2471である。2469は磁器染付小碗で, 端反形である。外面には圏線と方形枠に「狩埜」, 動物に「□野」, 瓢箪に「□谷」の染付, 内面に圏線, 見込には方形枠に銘がみられる。2470は讃岐御厩系の土師器焙烙で, 粘土紐成形である。底部内面は横方向のハケ調整, 口縁部が横ナデ調整, 外面はナデ調整で指頭圧痕と藁状圧痕が残る。見込には豆を煎ったとみられる円形の焦げ痕が多数みられる。2471は木製品刷毛である。外面は赤塗で, 二枚の板を糸で綴じて接合している。柄には円孔がみられ, 先端には糸で綴じた部分が溝状に2条みられ, 内側には刷毛の毛または接着剤の様な黒色のものが炭化して付着する。

SK-427(遺物: 図227)

SK-426の南で確認した土坑で, SK-424・426を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長2.64m, 検出幅1.20m, 深さ15cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器40点(碗3, 皿2, 蓋1, 火入1, 播鉢3, 台付灯明受皿1, 鍋3, 火鉢1, 細片25), 磁器16点(碗2, 蓋1, 猪口1, 段重1, 瓶1, 細片10), 土師器9点(焙烙1, 細片8), 瓦質土器2点(焙烙1, 細片1), 軒平瓦1点がみられた。図示した遺物は2472・2473である。2472は肥前系の磁器染付蓋物蓋で, 天井部外面には紐

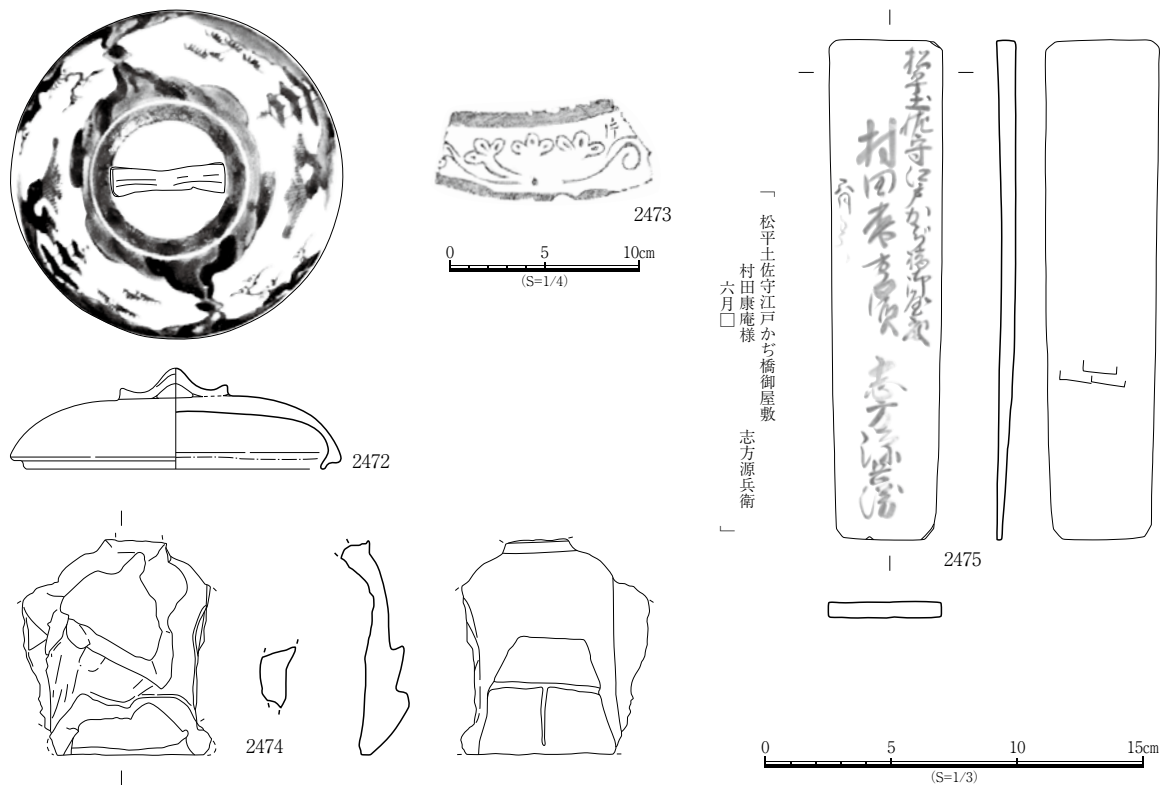


図227 SK-427・428出土遺物実測図

状の摘を貼付する。外面には楼閣文と風景文の染付がみられる。2473は軒平瓦である。中心飾りは三花文で、文様区内に「片」の陽刻がみられる。

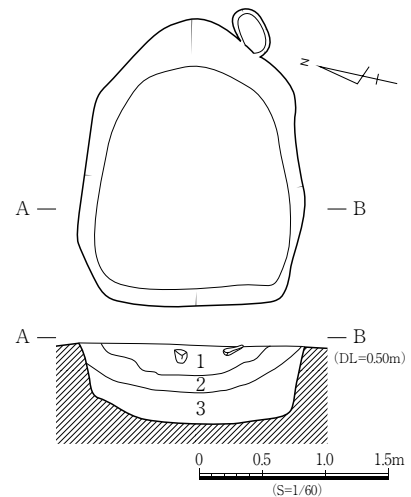
SK-428(遺物:図227)

SK-426の東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.45m、短径0.96m、深さ61cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗1, 皿1, 鉢1, 人形1), 磁器3点(猪口1, 細片2), 土師質土器4点(皿2, 細片2), 木製品木簡1点がみられた。図示した遺物は2474・2475である。2474は尾戸窯の陶器人形で、袴を着た人物の上半身である。中空で、全面に灰釉を施し接地面は釉ハギする。2475は木製品木簡で、短冊形を呈し、四隅を切る。表面に「松平土佐守江戸かち橋御屋敷 村田康庵様 六月□ 志方源兵衛」の墨書がみられる。

SK-429(遺構:図228 遺物:図230)

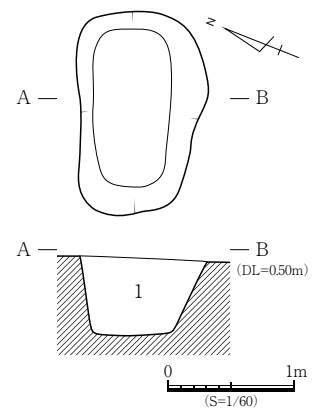
SK-428の南東で確認した土坑で、P-407を切り、SD-404,P-408に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、長径2.28m、短径1.78m、深さ62cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれレンズ状に堆積していた。

出土遺物には陶器60点(碗19, 皿2, 瓶1, 鍋1, 土瓶1, 餌鉢1, 細片35), 磁器47点(碗8, 皿1, 小杯5, 猪口13, 蕎麦猪口1, 香炉1, 瓶2, 細片16), 土師質土器皿1点, 土師器11点(壺1, 鉢2, 焙烙2, 火消し壺蓋1, 細片5), 瓦質土器火鉢1点, 平瓦2点, 土製品人形1点, 木製品8点(漆器椀2, 漆器蓋2, 木簡2, 漆器櫛1, 漆器柄杓1), 金属製品把手1点, シジミ貝がみられた。図示した遺物は2476~2487である。2476は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には墨・緑色で梅文と笹文の上絵付がみられる。2477は陶器筒形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、口鏝で外面には鉄鏝による「若青□□」の文字がみられる。2478は肥前産の磁器染付杯で、端反形である。外面には鬩斗文の染付がみられる。2479は土師器小壺で、外面は回転ナデ調整、底部外面は横方向の削り調整を施す。2480~2487は木製品である。2480は漆器蓋で、外面は黒塗、内面は赤塗で、外面には朱の丸に片喰文とみられる。2481は木簡で、上下片隅を丸く加工し、片側面には切り込み、上部に径3mmの円孔がみられる。裏面には格子状の浅い刀子傷のような痕跡がみられる。表面に「寛保元年 稲毛友之(カ)兵進内」、裏面に「御さめ」の墨書がみられる。2482~2485も木簡で、短冊形を呈し四隅を切る。いずれも片面に丸に「宮」の墨印が2箇所を押される。2486は漆器櫛で、両面黒塗で、両面に朱の萩とみられる草花文が施される。木材はヤブツバキである。2487は漆器柄杓で、底部は欠損する。杯部側面は皮綴の曲物で、全面に薄く黒塗がみられる。側面の2箇所孔をあげ柄を通して皮で留め、内側に全長1.8cmで幅5mmの木釘を差して固定している。柄の断面は8mmの四角、先端は径5mmの円形である。木材はヒノキである。



遺構埋土  
1. 褐灰色 (10YR5/1) 中粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を多く含む  
2. 青灰色 (5B6/1) 粗粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を多く含む  
3. 灰色 (N5/0) 粗粒砂質シルトで、木片を多く含む

図228 SK-429



遺構埋土  
1. 褐灰色 (7.5YR6/1) 細粒砂質シルトで、炭化物を含む

図229 SK-430



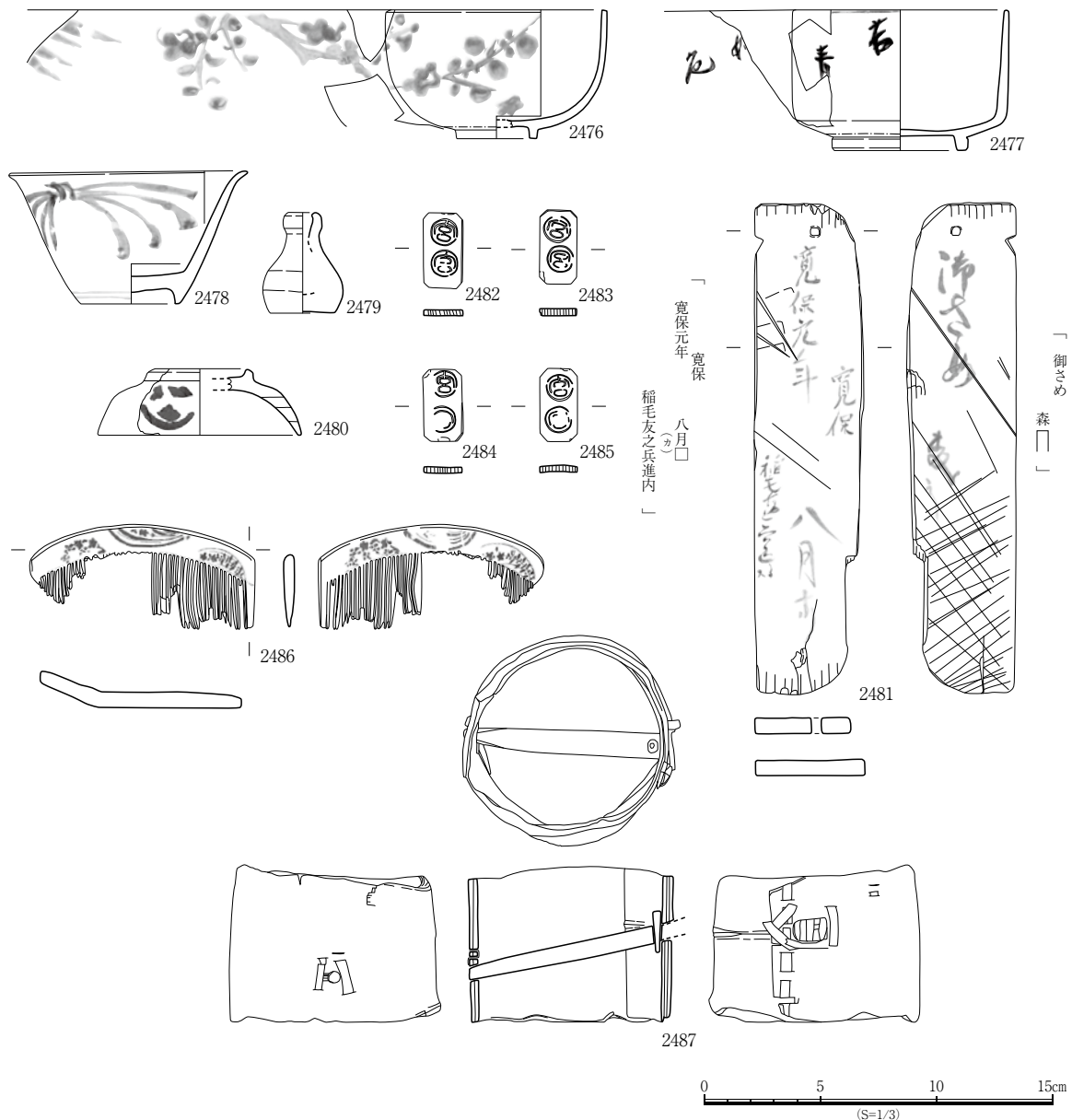


図230 SK-429出土遺物実測図

SK-430(遺構：図229 遺物：図231)

SK-429の南東で確認した土坑で、池跡の導水路であるSD-410を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.69m、短辺0.88m、深さ68cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色細粒砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器25点(碗3、皿1、蓋2、火入1、鉢3、挿鉢2、甕1、土瓶1、餌鉢1、細片10)、磁器36点(碗4、皿3、蓋3、小杯2、猪口1、蕎麦猪口1、紅皿3、瓶1、細片18)、土師質土器杯1点、土師器焙烙1点、平瓦1点、木製品3点(漆器片1、木筒2)がみられた。図示した遺物は2488～2490である。2488は肥前有田産の磁器色絵小丸碗で、外面に朱色の蓮弁文と朱色と金彩の斜格子文の上絵付がみられる。2箇所には焼継痕が残る。2489・2490は木製品木筒である。2489は方形を呈し、片面に墨書がみられるが解読不可であった。2490も方形を呈し、両面に墨書がみられる。表面は水暈文と蛙文・虫文とみられる墨書、裏面は不明である。

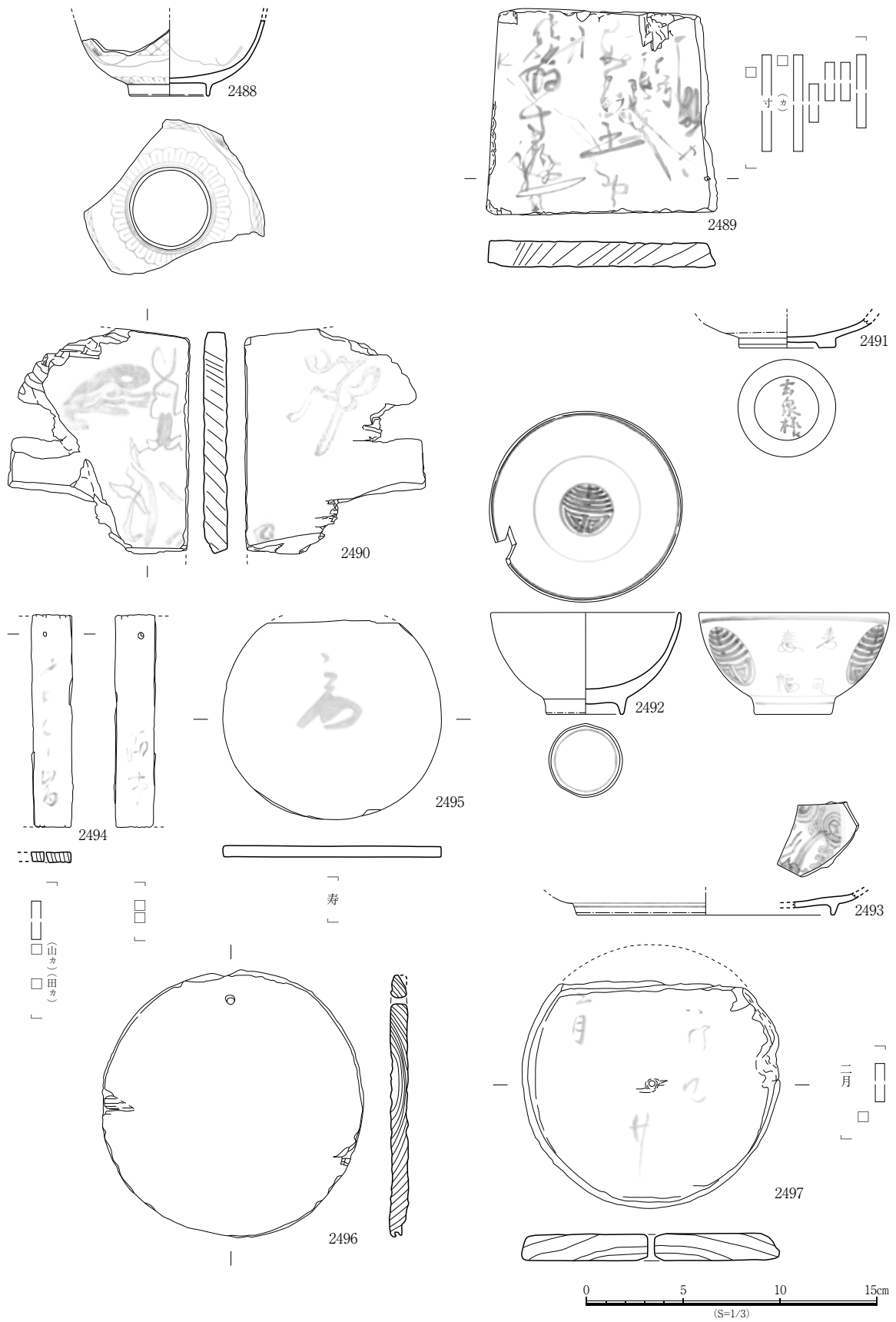


図231 SK-430～432出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

SK-431 (遺物: 図231)

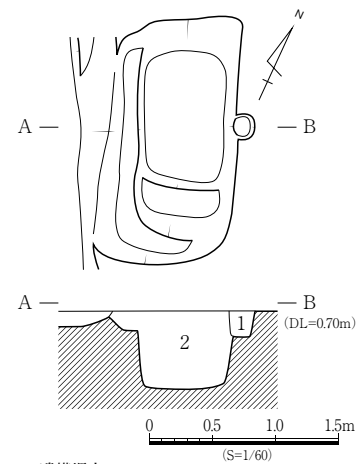
SK-430の北東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.40m、短辺1.08m、深さ62cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器40点(碗3, 皿4, 猪口1, 鉢2, 播鉢2, 甕1, 灯明皿1, 灯明受皿1, 土瓶1, 細片24), 磁器50点(碗4, 皿3, 蓋1, 蕎麦猪口1, 紅皿2, 瓶4, 細片35), 青花皿1点, 土師質土器7点(皿2, 小皿1, 白土器1, 細片3), 土師器片5点, 瓦2点(軒丸瓦1, 丸瓦1), 土製品人形1点, 石製品砥石1点, 木製品2点(木筒1, 曲物蓋1), 金属製品3点(釣針1など)がみられた。図示した遺物は2491~2495である。2491は京都系の陶器蓋物または皿で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「玄泉様江」の墨書がみられる。2492は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面に丸に「寿」字と「春風寿福」の文字と圏線, 内面に圏線, 見込には丸に「寿」字と圏線の染付がみられる。2493は中国産の青花皿で、外面に圏線, 見込は不明文様と圏線の染付がみられる。2494は木製品木筒で、一部は欠損する。短冊形を呈し、上部に円孔がみられる。両面に墨書がみられるが解読不可であった。2495は木製品桶蓋で、「寿」の墨書がみられる。

SK-432 (遺物: 図231)

SK-431の南で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径95cm、短径90cm、深さ75cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿1, 鉢1, 甕1, 細片3), 磁器片2点, 丸瓦1点, 木製品蓋2点がみられた。図示した遺物は2496・2497である。2496は木製品桶底板とみられ、側面は上部が凹む。1箇所に径5mmの円孔がみられる。2497は木製品桶蓋で、中央部に径3mmの円孔がみられる。「二月」の墨書が僅かに残る。

SK-433 (遺構: 図232 遺物: 図235)

SK-431の東で確認した土坑で、SD-406に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.95m、短辺1.00m、深さ65cmを測る。断面は箱形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器16点(碗6, 鉢1, 播鉢1, 灯明受皿1, 細片7), 磁器26点(碗2, 皿3, 猪口4, 瓶2, 細片15), 土師質土器皿1点, 土師器片2点, 瓦3点(棧瓦2, 細片1), 木製品木筒1点がみられた。図示した遺物は2498~2501である。2498は瀬戸・美濃系の陶器鉢で、内面から高台付近まで灰釉を施し、口縁部に緑釉を流し掛ける。見込の楕円形に釉を掻き取った部分に砂目痕がみられる。2499は肥前産の磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台である。外面は唐草文と圏線の染付, 内面には丸文と雪輪に梅文, 見込には花卉文とみられる染付, 高台内には二重方形枠に渦「福」銘がみられる。2500は尾戸窯の白土器皿で、底部内外面はナデ調整, 口縁部は横ナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の鶴亀文がみられる。2501は木製品木筒で、短冊形を呈し、上部に径2mmの円孔がみられる。両面に墨書がみられ、表面は「なるこ」、裏面は墨書が薄いため不明瞭だが、表面と同じ「なるこ」の墨書とみられる。表面の墨書の「な」には縁取りしている箇所がある。



遺構埋土  
1. 灰黄褐色 (10YR5/1) シルト質細粒砂で、粘性は弱く、多量の0.5cm大の礫と炭化物を少し含む(ピット)  
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を少し含む (SK-433)

図232 SK-433

SK-434 (遺構: 図233 遺物: 図235)

SK-433の南東で確認した土坑で、SX-409を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.58m、短

辺1.23m, 深さ91cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器19点(碗5, 皿3, 鉢1, 灯明受皿1, 鍋1, 細片8), 磁器28点(碗2, 皿4, 小杯2, 猪口1, 紅皿3, 段重1, 火入1, 細片14), 土師質土器17点(皿2, 小皿3, 白土器片2, 細片10), 土製品人形1点, 瓦2点(棧瓦1, 平瓦1), 棕櫚紐1点がみられた。図示した遺物は埋土1から出土した2502~2504, 埋土2から出土した2505である。2502は肥前産の磁器染付小碗で, 外面は牡丹唐草文, 見込は五弁花文, 高台内は圏線の染付と「大明成化年製」の銘がみられる。2503は磁器染付火入で, 蛇ノ目凹形高台である。口縁部内面から外面に透明釉を施し, 高台内は蛇ノ目釉ハギする。体部外面には桐文と圏線の染付がみられる。2504は土製品人形で, 着物を着た親子形である。型成形で, 中空である。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。2505は陶器色絵小碗で, 外面には朱・緑色の雲文と草花文などの上絵付, 内面には朱色の丸文, 見込には朱色の花文がみられる。高台内には刻印がみられる。

SK-435(遺構: 図234 遺物: 図235)

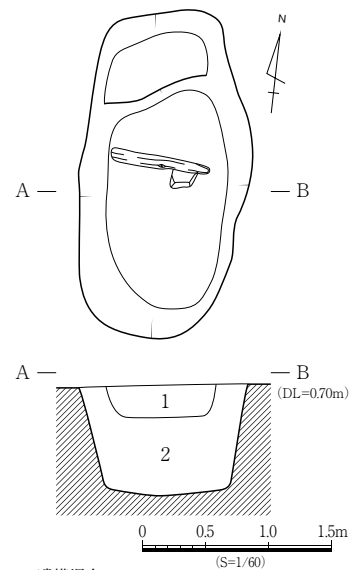
SK-434の北東で確認した土坑で, 攪乱に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺3.19m, 短辺1.74m, 深さ1.17mを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器84点(碗6, 皿6, 蓋4, 向付1, 鉢1, 播鉢2, 水注2, 灯明皿5, 灯明受皿6, 鍋4, 土瓶1, 人形1, 細片45), 磁器43点(碗6, 皿6, 蓋4, 向付1, 小杯1, 猪口1, 蕎麦猪口1, 瓶4, 灯明皿3, ミニチュア1, 細片15), 土師質土器7点(小皿3, 白土器片1, 細片3), 土師器2点(火鉢1, 焙烙1), 施釉土器蓋物1点, 平瓦1点, 土製品人形1点, 木製品1点(木刀か), 金属製品2点(煙管1, 裝飾金具1)がみられた。図示した遺物は2506で磁器ミニチュアである。鉢形を呈し, 全面に白磁釉を施し, 畳付は釉ハギする。図示した遺物の他に, 唐津系灰釉陶器皿, 陶器色絵人形, 磁器広東碗, 岡本系焙烙なども出土している。

SK-436(遺物: 図235)

B-1区北東部で確認した土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し, 長径1.52m, 短径1.32m, 深さ27cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1~5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した2507の永樂通寶である。

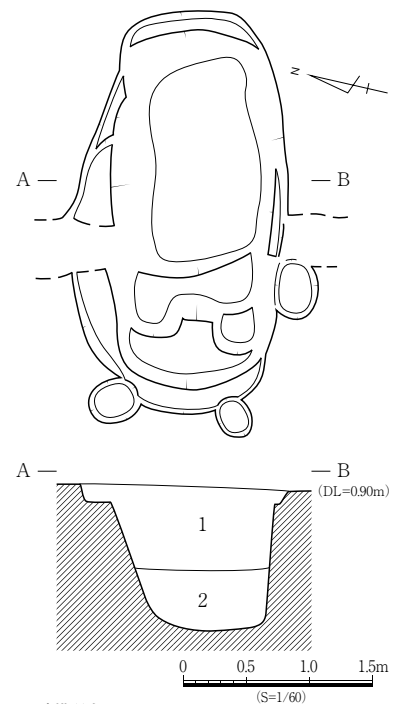
SK-437(遺物: 図236)

SK-436の東で確認した土坑である。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.13m, 短径0.83m, 深さ26cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で, 円礫と炭化物, 焼土塊を少し含んでいた。出土遺物には陶器6点(碗2, 細片4), 磁器9点(碗2, 小杯1, 細片6), 土師質土器19点(皿1, 小皿4, 細片14), 土師器片5点, 平瓦2点, 土製品人形1点,



遺構埋土  
1. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質中粒砂で, 0.5cm大の礫を含む  
2. 褐灰色 (10YR5/1) 粗粒砂質シルトで, 1cm大の礫を少し含む

図233 SK-434



遺構埋土  
1. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質粗粒砂で, 0.5~3cm大の礫を多く含む  
2. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質細粒砂で, 粘性は弱く多量の5mm大の礫と炭化物を少し含む

図234 SK-435

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

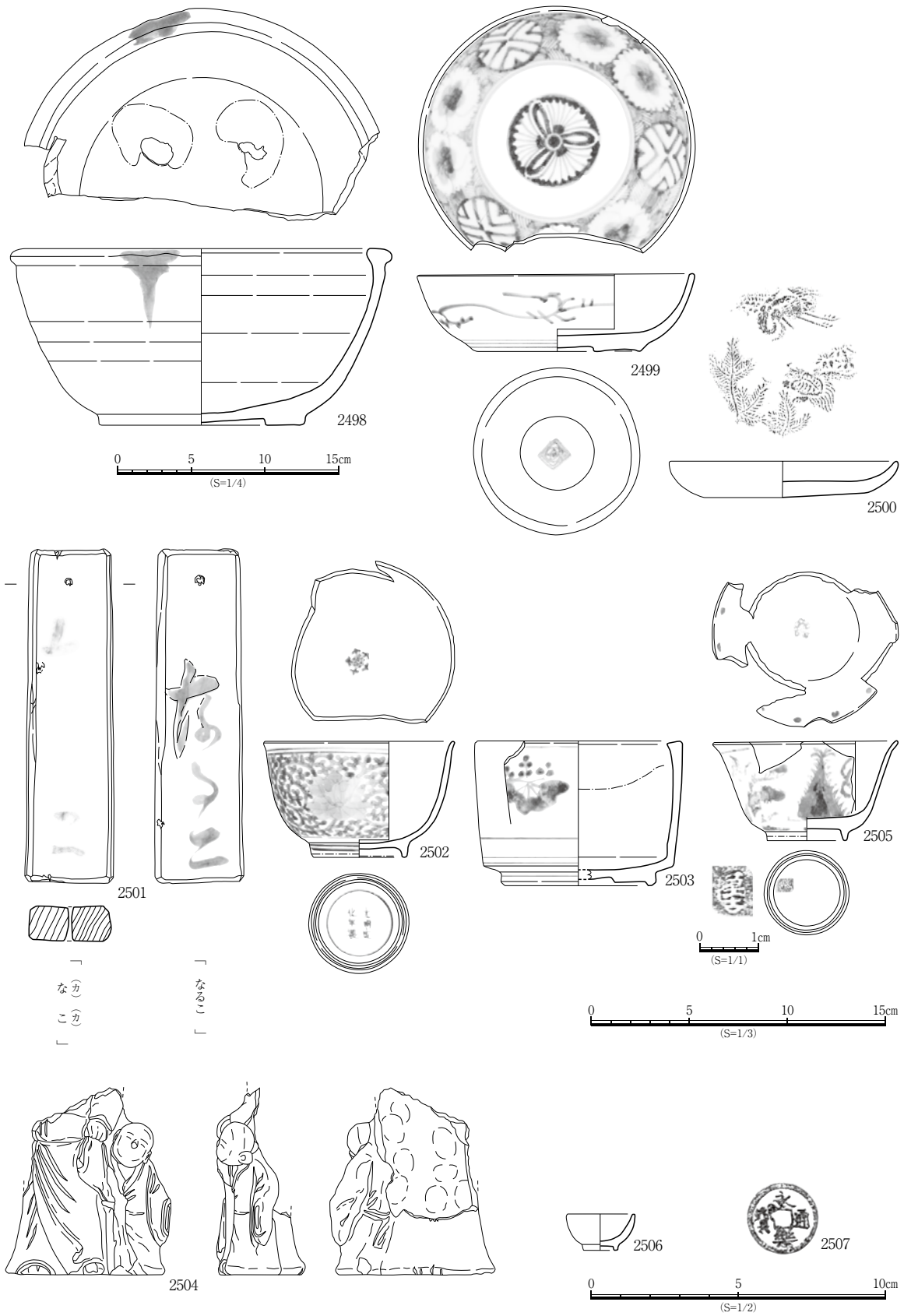


図235 SK-433～436出土遺物実測図

石製品数珠玉1点、鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2508～2510である。2508は京都系の陶器せんじ碗で、全面に透明釉を施し、外面には白化粧土と鉄錆による笹文がみられる。2509は土製品人形で、仏像である。仏像は非常に緻密に表現されている。型成形の貼り合わせで、中実である。台座は六角形を呈し、下面には円孔がみられる。2510は石製品数珠玉で、径4mmの円孔が貫通する。石材は瑪瑙か。

SK-438(遺物：図236)

SK-437の北で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、全長2.61m、検出幅1.54m、深さ24cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器

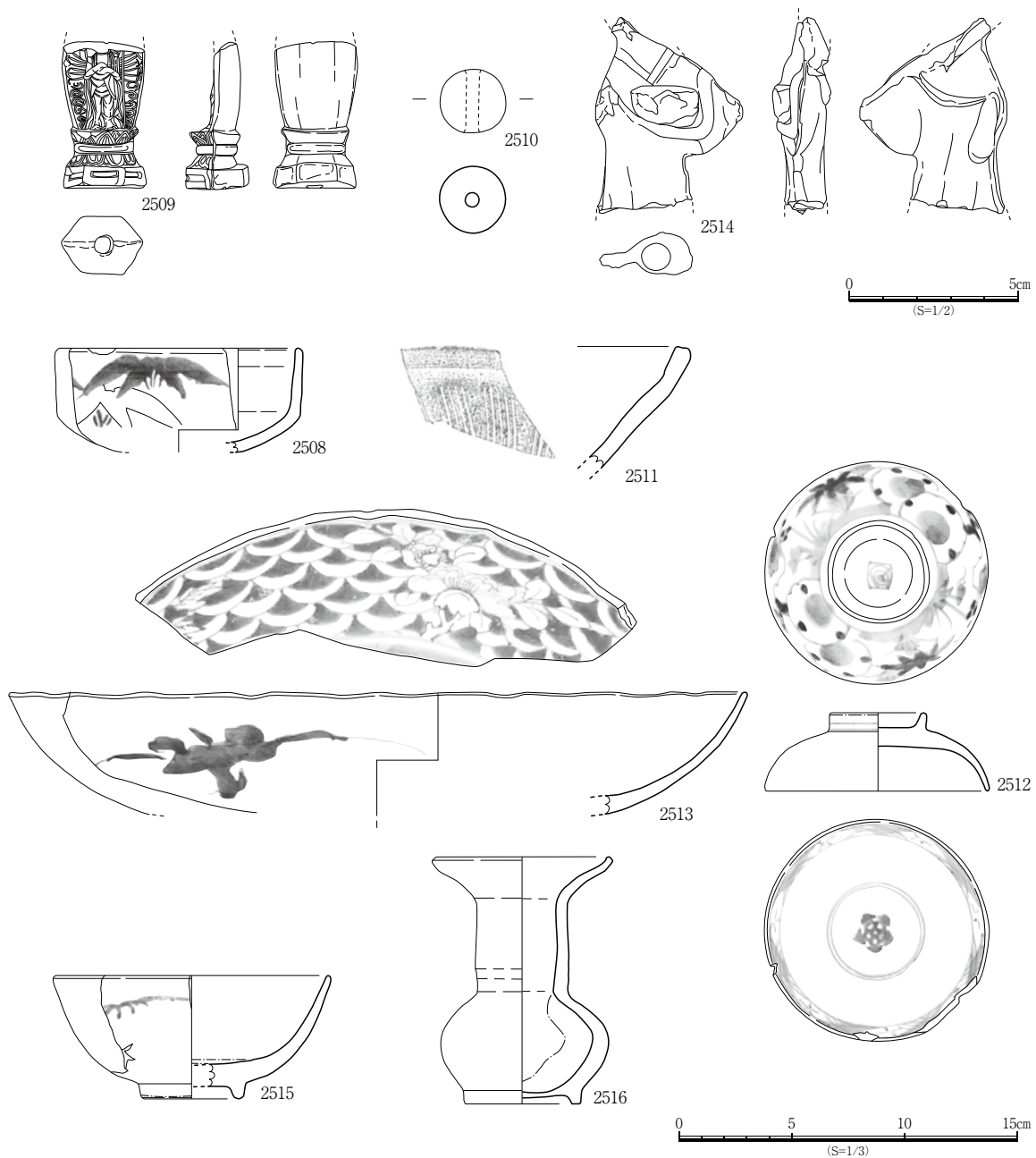


図236 SK-437～439出土遺物実測図



### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

16点(碗3, 皿1, 播鉢1, 灯明皿1, 細片10), 磁器18点(碗1, 皿2, 蓋2, 小杯1, 猪口1, 瓶1, 細片10), 土師質土器5点(小皿2, 細片3), 土師器片1点, 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2511～2514である。2511は丹波焼播鉢で, 全面に回転ナデ調整を施し, 内面には6条単位の播目がみられる。2512は肥前産の磁器染付碗蓋で, 外面は草花文と雪輪文と圏線の染付, 摘内には方形枠に渦「福」銘, 内面はコンニャク印判による五弁花文と四方禪文・圏線の染付がみられる。2513は中国産の青花とみられる大皿で, 稜花皿である。外面には花文, 内面には青海波文と牡丹文の染付がみられる。2514は土製品人形で, 着物を着た人物形である。型成形で, 中実である。底面には円錐形の孔がみられる。

#### SK-439(遺物: 図236)

B-1区北東隅で確認した土坑で, 池跡の排水路であるSD-412に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.83m, 短辺1.24m, 深さ16cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで, 0.5～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器5点(皿3, 壺1, 鍋1), 磁器8点(碗2, 皿1, 灯明皿1, 水滴2, 細片2), 金属製品2点(釘1など)がみられた。図示した遺物は2515・2516である。2515は陶胎染付碗で, 見込は蛇ノ目釉ハギし, 外面には松文の染付がみられる。2516は陶器瓶で, 花生とみられる。口縁部内面から外面に鉄釉を施し, 畳付は釉ハギする。

#### SK-440

SK-439の南で確認した土坑で, SD-412とSK-441・442に切られる。平面形態は溝状を呈し, 全長2.07m, 全幅1.24m, 深さ30cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器11点(播鉢2, 土瓶1, 細片8), 磁器5点(蓋1, 細片4), 尾戸窯の白土器皿1点がみられた。

#### SK-441

SK-440の南で確認した土坑で, SK-440を切り, SD-412に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.42m, 短辺1.14m, 深さ30cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で, 多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(皿2, 細片4), 磁器片1点, 土師質土器片1点がみられ, 絵唐津皿も出土している。

#### SK-442

SD-412の東で確認した土坑で, SK-440を切り, SD-412に切られる。東は調査区外へ続き, 一部を検出し, 検出長3.66m, 検出幅0.83m, 深さ14cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 1～5cm大の礫と炭化物, 多量の焼土を含んでいた。出土遺物には陶器25点(灰吹1, 鉢1, 播鉢1, 植木鉢1, 土瓶1, 細片20), 磁器9点(皿1, 猪口1, 灯明受皿1, 細片6), 尾戸窯の白土器片3点, 土師器片1点がみられた。

#### SK-443

SK-442の南で確認した土坑で, 東は調査区外へ続く。SD-412を切る。平面形態は溝状を呈し, 検出長2.12m, 全幅0.68m, 深さ26cmを測る。ハンダ土坑で, 埋土は褐灰色砂質シルトで, 1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器5点(碗1, 鉢1, 細片3), 磁器3点(皿1, 段重1, 瓶1), 土師質土器26点(皿6, 細片20), 鉄釘5点, 鉄滓がみられた。

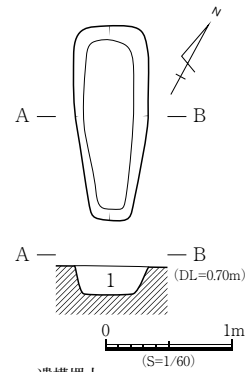
#### SK-444(遺物: 図238)

B-1区東部で確認した土坑で, SD-412を切り, 東は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.12m, 検出幅0.82m, 深さ36cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で, 円礫と炭化物, ハンダを少し含んでいた。出土遺物には陶器31点(碗2, 猪口1, 鉢1, 植木鉢1, 甕2, 鍋3, 土瓶1, 細片20), 磁

器13点(碗4, 皿3, 蓋1, 小杯1, 鉢1, 細片3), 土師質土器片1点, 瓦質土器片4点, 丸瓦1点がみられた。図示した遺物は2517・2518である。2517は陶胎染付端反碗で, 内面から高台付近まで白化粧土のち透明釉を施す。外面には圏線と宝尽くし文の染付がみられる。2518は陶器碗とみられ, 全面に鉄釉を施す。外面には丸に「樂」の刻印がみられる。

SK-445(遺構: 図237 遺物: 図238)

B-1区西部で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.54m, 全幅0.59m, 深さ22cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器16点(碗3, 蓋1, 瓶3, 播鉢1, 甕1, 灯明受皿1, 細片6), 磁器11点(皿1, 大皿1, 猪口1, 瓶2, 細片6), 土師質土器6点(小皿1, 白土器1, 細片4), 土師器2点(火鉢1, 焙烙1), 軟質施釉陶器1点, 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2519~2522である。2519は陶器碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 見込には目痕, 高台内には墨書がみられる。2520も陶器碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には鉄錆による松文がみられる。2521は関西系の土師器焙烙で, 底部は型成形とみられる。内面から口縁部外面は回転ナデ調整, 底部外面は無調整である。口縁部外面には煤が付着する。2522は軟質施釉陶器ミニチュアで, 皿形を呈する。内面と外面の一部に銅緑釉を施す。型成形で, 外面には型による蓮弁文がみられる。



遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を少し含む

図237 SK-445

SK-446(遺物: 図238)

SK-445の北で確認した土坑で, 一部は攪乱に切られる。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ, 検出長1.38m, 全幅0.72m, 深さ21cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで, 4cm以下の円

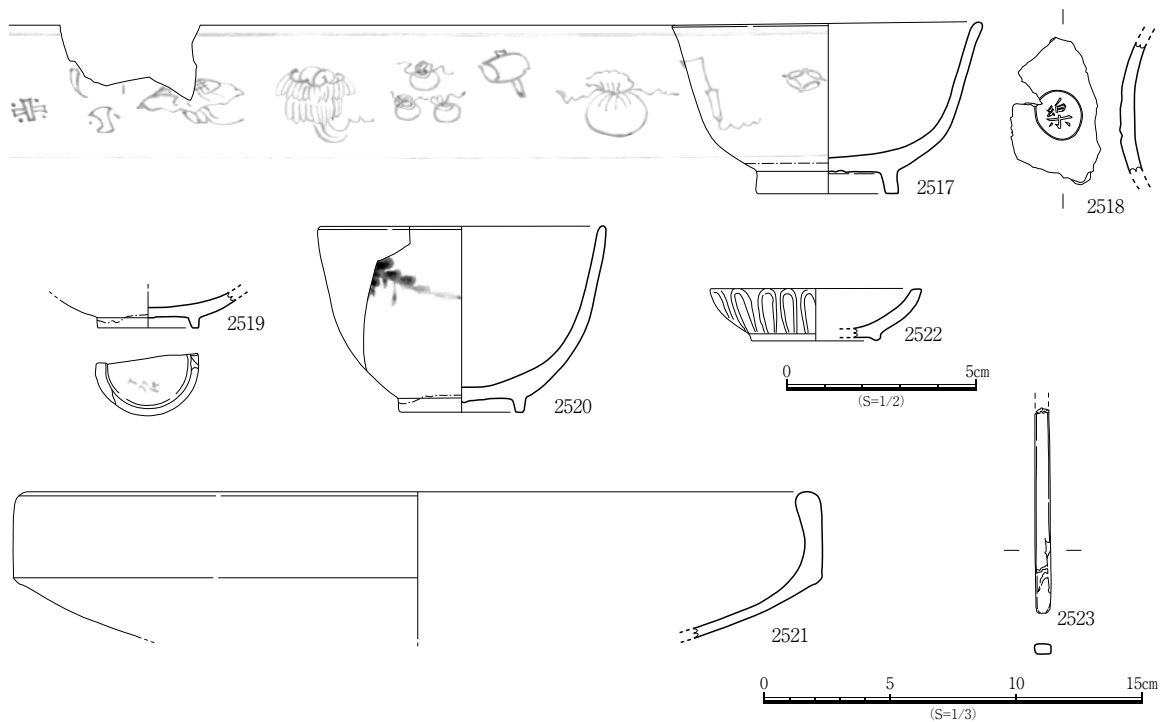


図238 SK-444~446出土遺物実測図

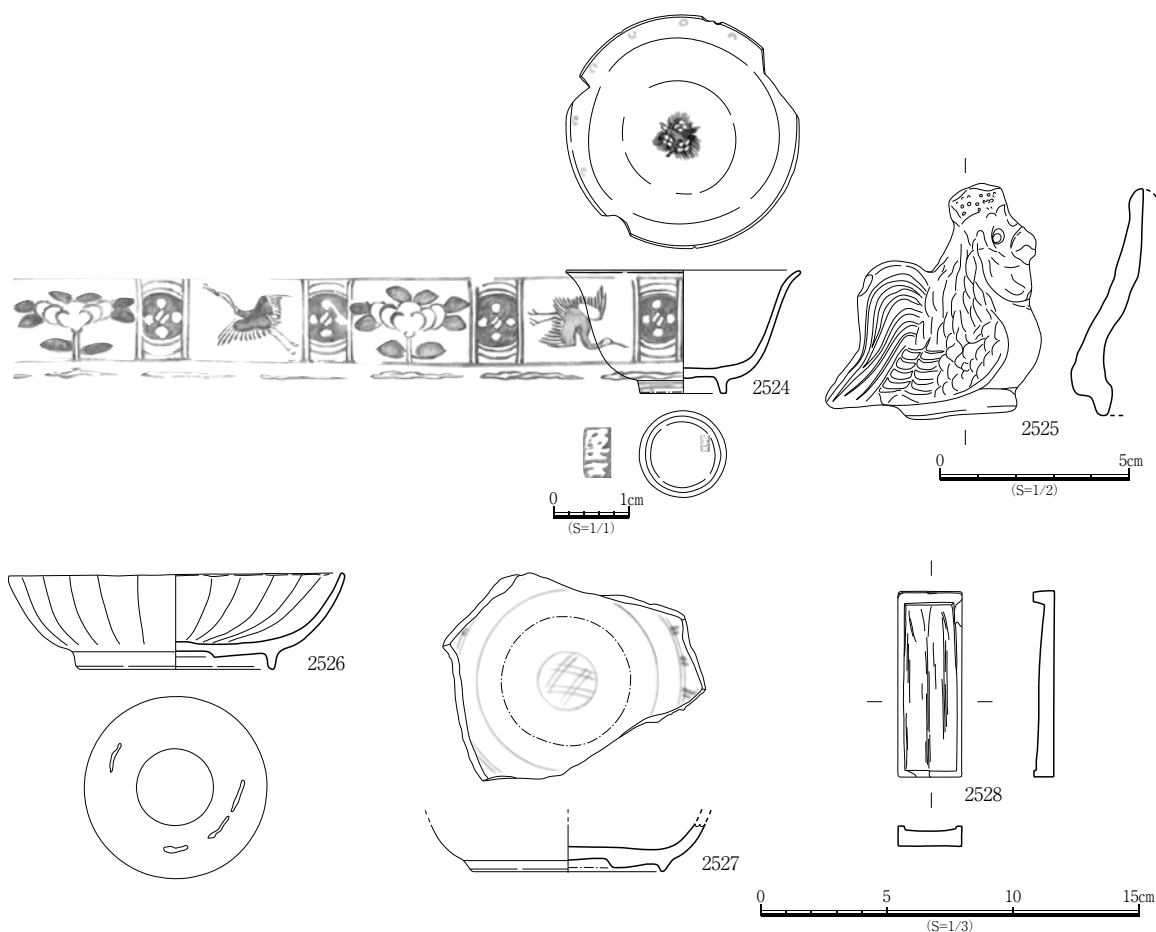


図239 SK-447・448出土遺物実測図

礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗1, 猪口1, 播鉢1, 鍋2, 細片14), 磁器4点(碗1, 蓋1, 瓶1, 細片1), 土師器片1点, 瓦質土器片1点, 骨角製品1点がみられた。図示した遺物は2523である。2523は骨角製品の柄とみられ, 棒状を呈し断面は矩形を呈する。表面には光沢がみられる。

**SK-447**(遺物: 図239)

SK-446の北東で確認した土坑で, 一部を検出した。平面形態は楕円形を呈するものとみられ, 検出長2.25m, 全幅1.26m, 深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂で粘性は弱く, 多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器26点(碗4, 皿1, 鉢1, 細片20), 磁器5点(碗1, 杯1, 細片3), 土師質土器片2点, 土師器片1点, 土製品2点(人形1, 不明1)がみられた。図示した遺物は2524・2525である。2524は陶器色絵小碗で端反形を呈する。見込には墨色による宝文, 内面には墨色による丸文, 外面には墨・緑色で区画内に鶴文と花文・雲文の上絵付がみられる。2525は土製品人形で, 鶏形を呈する。型成形の貼り合わせで, 中空である。下面には円孔がみられる。

**SK-448**(遺物: 図239)

SK-447の南で確認した土坑である。平面形態は方形を呈し, 長辺1.46m, 短辺1.20m, 深さ17cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで, 多量の1cm大の円礫と木片を含んでいた。出土遺物には陶器35点(碗1, 皿2, 蓋1, 鉢1, 瓶1, 播鉢12, 甕1, 鍋1, 土瓶1, 火鉢1, 餌鉢1, 細片12), 磁器34点(碗6, 皿6, 猪口3, 瓶3, 細片16), 土師器片1点, 石製品硯1点, 瓦3点(丸瓦1, 平瓦2)がみられた。図示した遺物は2526～2528で

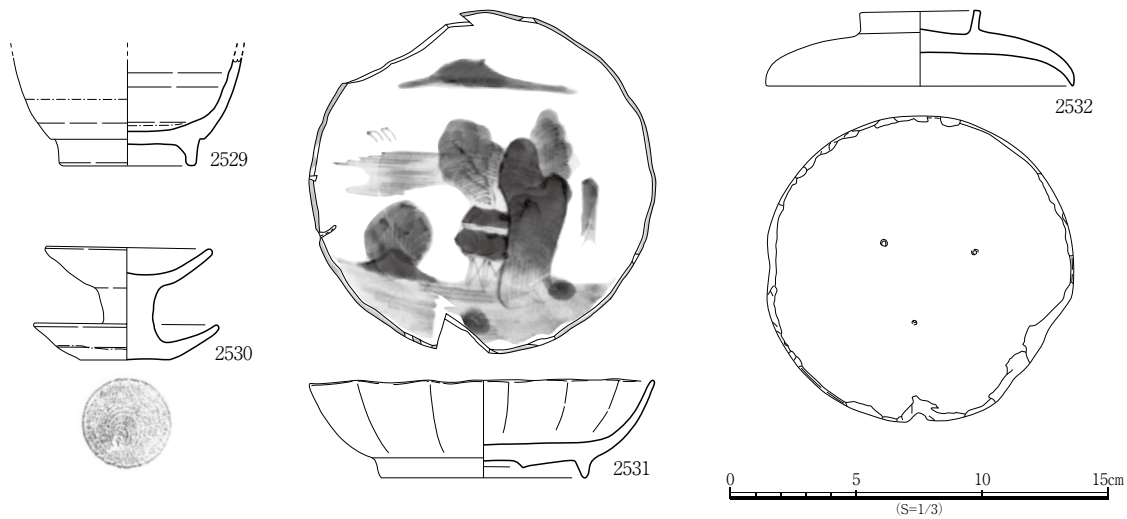


図240 SK-449・450出土遺物実測図

ある。2526は磁器菊皿で、蛇ノ目凹形高台を呈する。全面に白磁釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。釉ハギ部分には輪状の砂目痕が残る。型打成形で、口鑄である。2527は磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台を呈する。見込と高台内は蛇ノ目釉ハギし、口縁部内面と見込に二重格子文の染付がみられる。2528は石製品硯である。小型で、上面には使用痕が残る。

SK-449(遺物：図240)

SK-448の南西で確認した土坑で、SD-414を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.62m、短辺1.94m、深さ21cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、細粒砂と1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器60点(碗2、火入2、灯明受皿2、鍋2、火鉢1、餌鉢1、細片50)、磁器34点(碗10、皿4、蓋1、猪口3、紅皿1、細片15)、土師質土器片2点、土師器3点(火鉢1、焙烙1、細片1)、瓦質土器2点(火鉢1、釜1)、軒丸瓦1点のみられた。図示した遺物は2529～2531である。2529は陶器碗で、内面から体部外面まで灰釉を施し、見込は釉ハギする。2530は陶器台付灯明受皿で、内面から底部外面付近まで鉄釉を施す。底部は回転糸切り調整である。2531は肥前系の磁器染付輪花皿である。型打成形で蛇ノ目凹形高台を呈する。全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギし、口鑄を施す。内面には楼閣山水文の染付がみられる。

SK-450(遺物：図240)

B-1区中央部で確認した土坑で、一部を攪乱に切られる。平面形態は溝状を呈するものとみられ、検出長1.05m、検出幅0.31m、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(蓋1、細片2)、磁器碗1点のみられた。図示した遺物は2532で尾戸窯の陶器碗蓋である。全面に灰釉を施し、摘端部は釉ハギする。天井部内面には目痕が残る。

SK-451

SK-450の北で確認した土坑で、SK-452とSD-407を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径1.58m、短径1.15m、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗2、細片2)、磁器碗2点(碗1、細片1)のみられた。

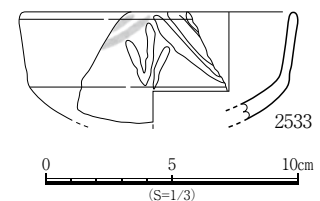


図241 SK-452  
出土遺物実測図

SK-452(遺物:図241)

SK-451の北東で確認した土坑で、SK-451とSD-407に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長1.17m、検出幅0.82m、深さ5cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1), 磁器碗1点, 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2533で京都・信楽系の陶器色絵せんじ碗である。全面に灰釉を施し, 外面には朱・白・緑色の草花文とみられる上絵付がみられる。

SK-453

SD-410の南で確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し, 全長2.44m, 全幅1.40m, 深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで, 1cm大の礫と焼土塊を含んでいた。出土遺物には陶器9点(播鉢1, 細片8), 磁器20点(碗2, 小杯1, 猪口1, 瓶1, 細片15), 瓦8点(丸瓦1, 平瓦4, 細片3)がみられた。

SK-454(遺構:図242 遺物:図243・244)

SK-453の東で確認した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺3.85m, 短辺1.27m, 深さ61cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 2cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器81点(碗19, 皿9, 鉢4, 瓶2, 播鉢3, 植木鉢1, 壺1, 甕2, 灯明受皿1, 土瓶1, 餌鉢2, 人形1, 細片35), 磁器72点(碗15, 皿14, 蓋6, 小杯3, 紅皿2, 瓶8, 細片24), 土師質土器28点(皿9, 小皿2, 白土器1, 壺1, 細片15), 土師器10点(火鉢1, 十能1, 把手1, 細片7), 軟質施釉陶器蓋1点, 瓦質土器火鉢1点, 瓦片1点, 古銭1点, 棕櫚紐1点がみられた。図示した遺物は2534~2549である。2534は尾戸窯の陶器小碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施す。2535は瀬戸・美濃産の陶器碗で, 内面が灰釉, 外面が錆釉で長石釉を散らす。畳付は釉ハギし, 刻印がみられる。2536は陶器瓶で, 回転ナデ調整のち口縁部内面から外面に鉄釉を施す。2537は陶胎染付鉢で, 全面に透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。口鑄で, 見込と外面には草花文の染付がみられる。2538は陶器播鉢で, 口縁部は片口状に僅かに歪む。回転ナデ調整で, 口縁部外面の顎下は回転削り調整を加える。見込には櫛描の「×」文, 口縁部外面には3条の凹線, 底部外面には板状圧痕がみられる。2539は肥前有田産の磁器色絵丸碗で, 外面には朱・緑・黄色の花文の上絵付がみられる。2540は肥前産の磁器染付丸碗で, 見込は五弁花文と圏線, 内面は四方禰文, 外面は松文と幾何学文の染付がみられる。2541は肥前産の磁器染付丸碗で, 見込は草花文と圏線, 口縁部内面は四方禰文, 外面は草花文の染付, 高台内は二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。2542・2543は肥前系の磁器染付広東碗である。2542は内面に圏線と帯線, 外面に植物文と圏線の染付がみられる。2543は見込に水に鷺文, 外面に草花文の染付, 高台内は二重方形枠内に銘がみられる。2544・2545は肥前産の磁器染付広東碗である。2544は見込に火焰宝珠文, 内面に圏線, 外面に風景文と圏線の染付, 高台内に「大明年智」の銘がみられる。2545は見込に不明文様の染付, 内面に圏線, 外面に草花文と樹文の染付, 高台内に「太明年成」の銘がみられる。2546は肥前系の鉄釉染付碗で, 内面と高台内に透明釉, 外面に鉄釉を施す。見込には蕪文の染付がみられる。2547は肥前産の磁器染付皿で,

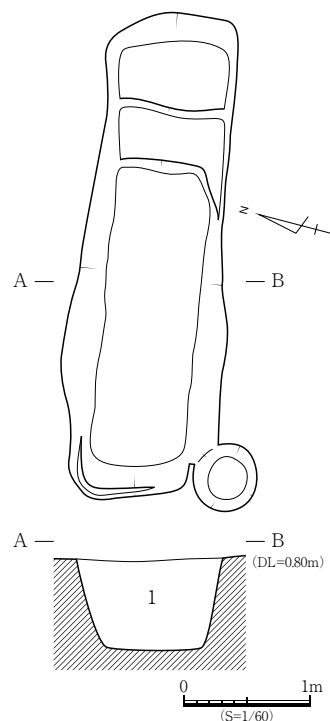


図242 SK-454

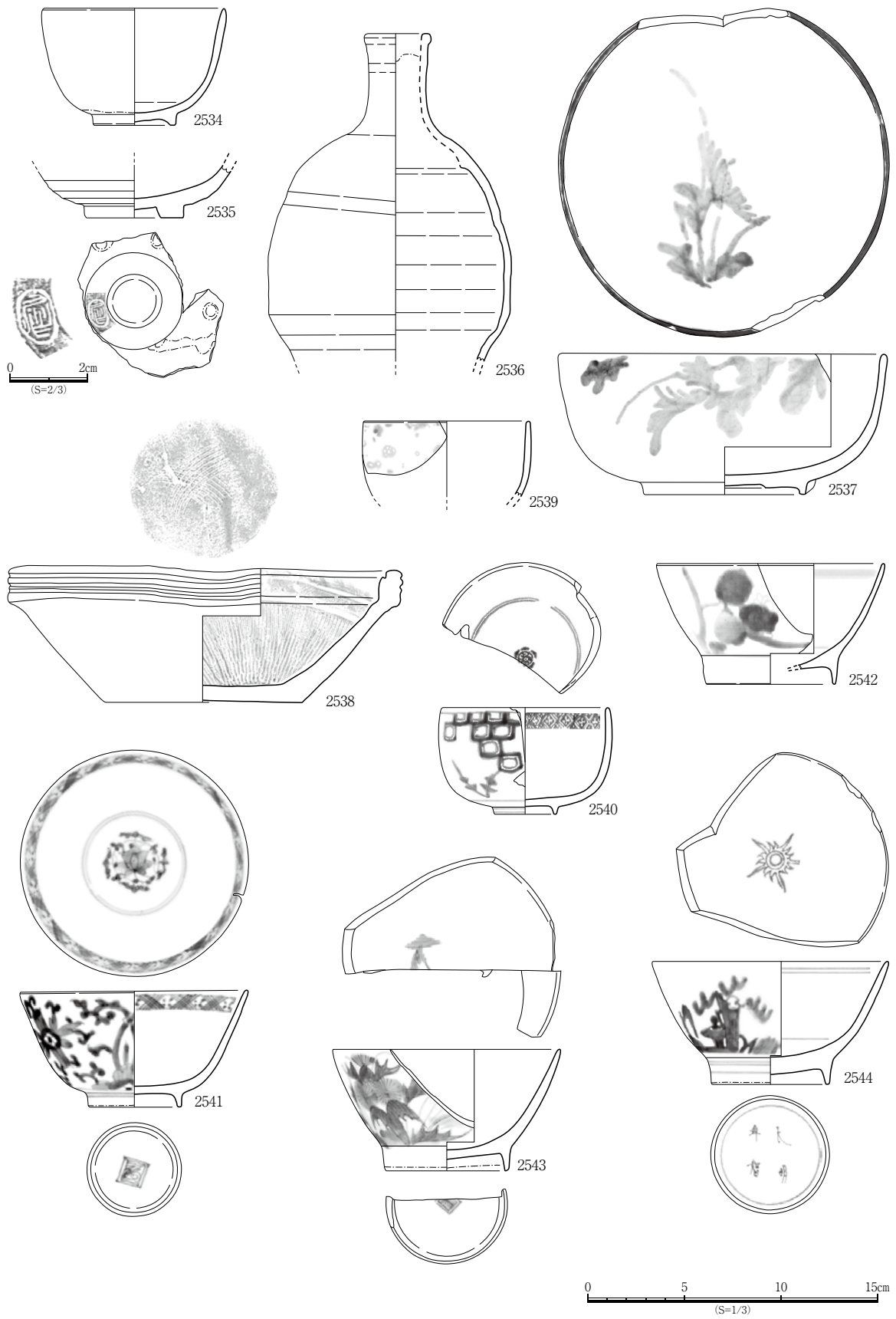


図243 SK-454出土遺物実測図1



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

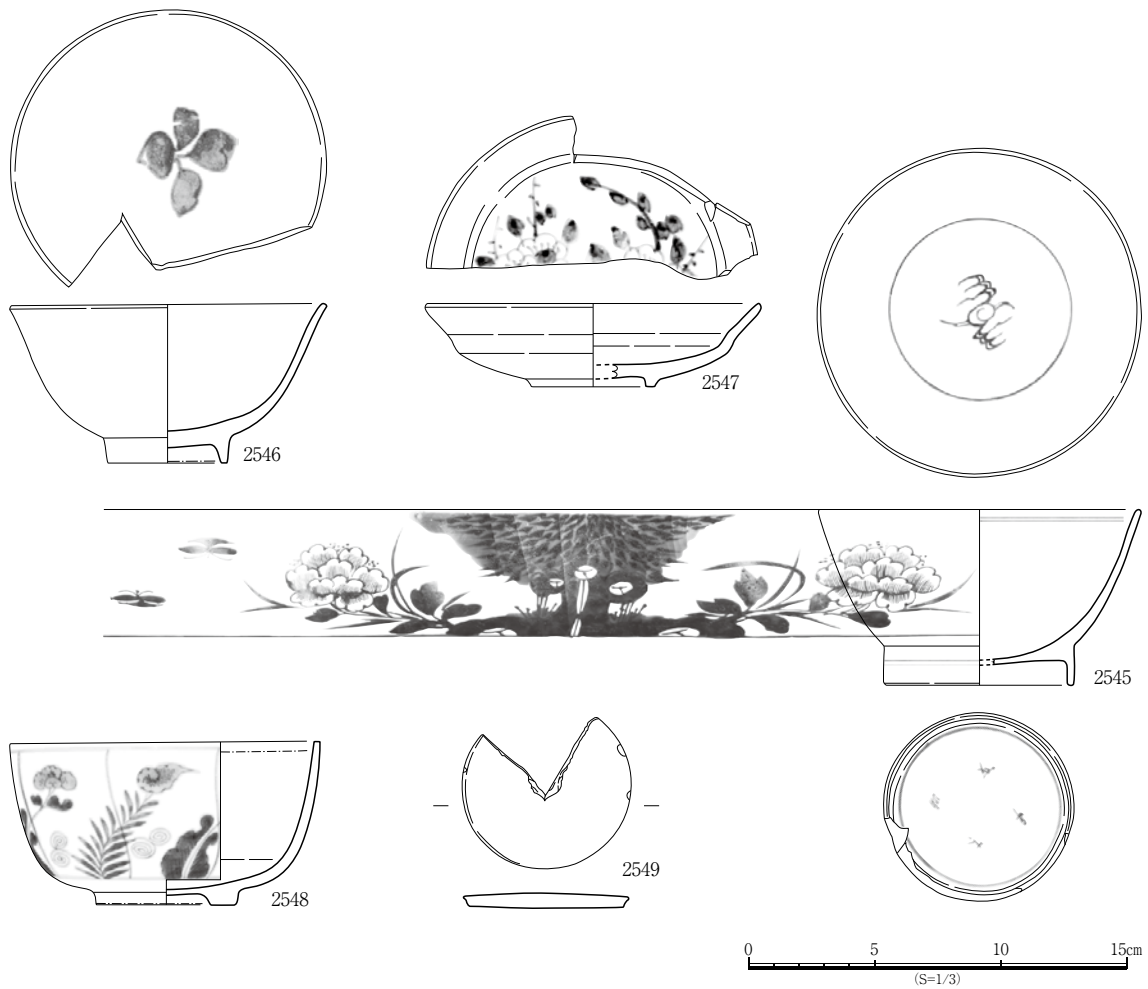


図244 SK-454出土遺物実測図2

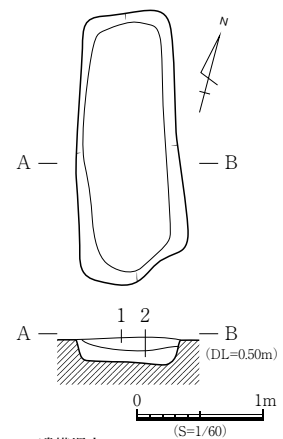
見込に梅文の染付がみられる。2548は磁器染付蓋物で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と畳付は釉ハギする。外面には区画内に草花文の染付がみられる。2549は軟質施釉陶器蓋で、摘は欠損したものとみられる。外面は緑釉、内面は透明釉を施す。

SK-455(遺構：図245 遺物：図246)

B-1区南西部で確認した土坑で、SX-414に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、全長2.13m、全幅0.78m、深さ21cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、下層は腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器片10点、磁器21点(碗3、皿5、小杯1、猪口2、細片10)、土師質土器片1点、土師器2点(焼塩壺1、細片1)、石製品砥石1点、金属製釣金具1点がみられた。図示した遺物は2550で銅製釣金具である。上部は鉤状で先端は細く尖る。

SK-456(遺物：図246)

SK-455の東で確認した土坑で、SX-415を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.28m、短辺1.11m、深さ13cmを測る。埋土は灰黄褐色粘



遺構埋土

1. 褐灰色(10YR4/1)砂質シルトで、礫と瓦を含む
2. 黒褐色(10YR3/2)粘性シルトで、腐植を多く含む

図245 SK-455

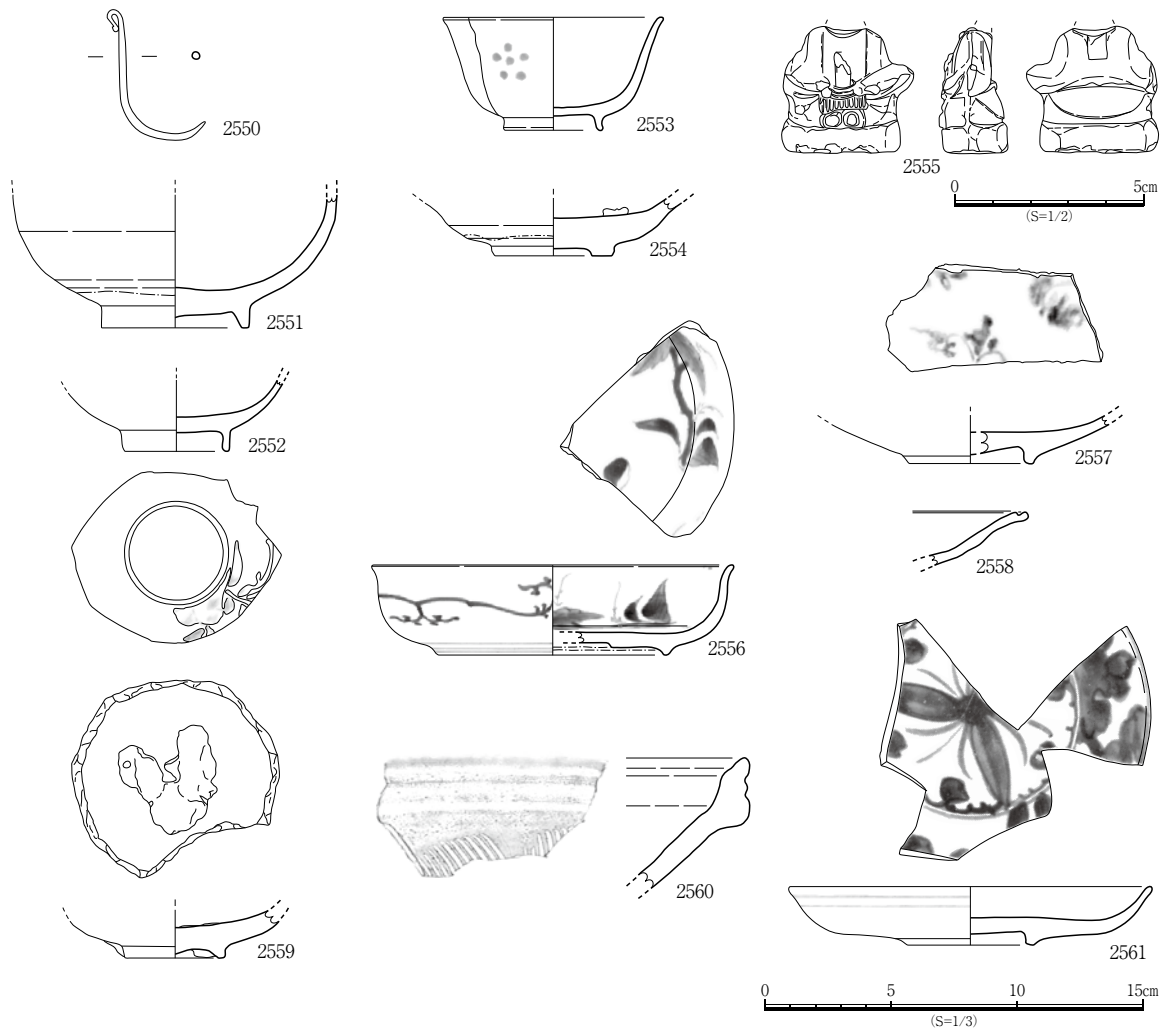


図246 SK-455～461出土遺物実測図

土質シルトで締まりはなく、3～5cm大の円礫と陶磁器片を多く含んでいた。出土遺物には陶器27点(碗4, 蓋1, 鉢5, 播鉢2, 灯明受皿1, 鍋2, 細片12), 磁器37点(碗13, 皿5, 小杯4, 火入1, 瓶3, 細片11), 土師器焙烙1点, 平瓦1点, 木製品2点(漆器蓋1, 漆器製品1)がみられた。図示した遺物は2551～2553である。2551は陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には目痕が残る。2552は肥前有田産とみられる磁器色絵小碗で、外面に墨と緑色の草花文の上絵付がみられる。2553は瀬戸・美濃産とみられる白磁蛸手端反形小碗で、全面に白磁釉を施し畳付は釉ハギする。

**SK-457**(遺物:図246)

SK-456の北東で確認した土坑で、SD-421に切られる。平面形態は不整形を呈し、全長1.69m, 検出幅1.36m, 深さ21cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 細片1), 細蓮弁文青磁碗1点がみられた。図示した遺物は2554で唐津系灰釉陶器皿である。内面から体部外面まで灰釉を施し、見込には胎土目痕が残る。

**SK-458**(遺物:図246)

SK-457の南で確認した土坑で、SD-423に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長2.05m, 検出幅0.48m, 深さ8cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗1, 細片3), 磁器5点(碗1, 皿3, 細片1), 軒丸瓦1点, 土製品人形がみられた。図示した遺物は2555で土製品人形である。天神様で, 型成形である。図示した遺物の他に陶器色絵碗や磁器変形皿などが出土している。

SK-459(遺物: 図246)

SK-458の東で確認した土坑で, SD-422を切り, SD-423に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.97m, 短径0.80m, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗1, 皿1, 鉢2, 瓶1, 細片14), 磁器90点(碗9, 皿13, 蓋1, 猪口2, 合子1, 鉢1, 壺2, 水滴1, 細片60), 土師質土器小皿1点, 土師器3点(火鉢1, 細片2), 平瓦1点がみられた。図示した遺物は2556で磁器染付皿である。蛇ノ目凹形高台で, 全面に透明釉を施し, 高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面には草花文, 外面には唐草文と圏線の染付がみられる。図示した遺物の他に志野焼片や肥前産陽刻青磁片などが出土している。

SK-460(遺物: 図246)

SK-459の南で確認した土坑で, SD-423に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 長径1.07m, 短径1.05m, 深さ17cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には磁器片1点と図示した2557の肥前産の磁器染付皿がみられた。内面に染付がみられ, 全面に透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。高台内面は粗い砂が付着する。

SK-461(遺物: 図246)

B-1区南東部で確認した土坑で, P-424に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.64m, 検出幅1.58m, 深さ11cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で, 0.5~5cm大の礫と多量の黄色ブロックと炭化物を含んでいた。床面には炭化物の堆積がみられた。出土遺物には陶器8点(皿2, 火鉢1, 細片5), 磁器4点(皿2, 細片2)がみられた。図示した遺物は2558~2561である。2558・2559は唐津系灰釉陶器皿である。2558は溝縁皿で, 内面から体部外面まで灰釉を施す。2559は内面から高台外面まで灰釉を施し, 見込には砂目痕が残る。2560は備前焼とみられる陶器播鉢で, 全面に回転ナデ調整を施す。内面には10条以上の播目, 口縁部外面には凹線が2条みられる。2561は肥前産の磁器染付皿で, 内面

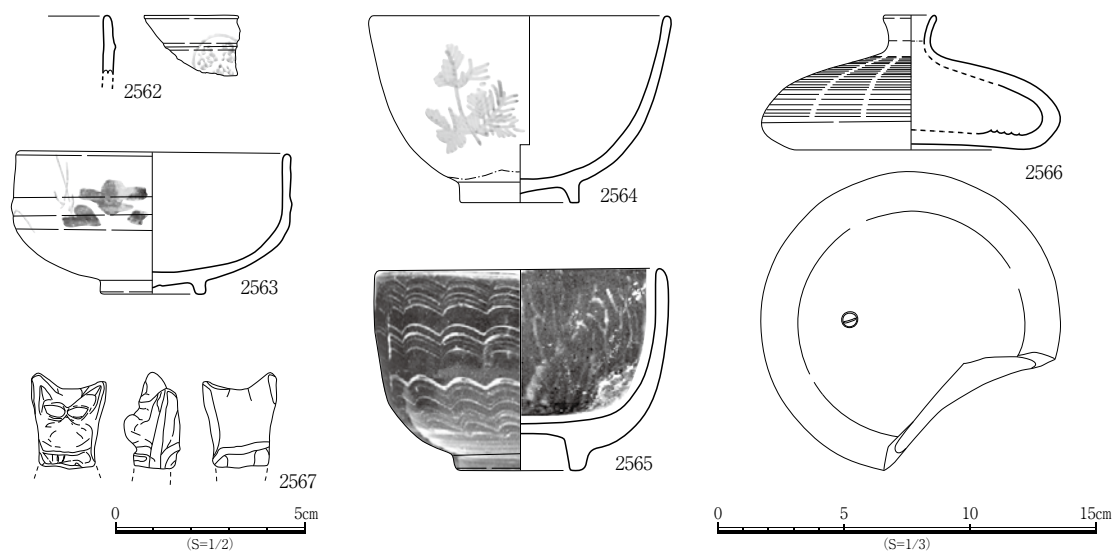


図247 SD-404出土遺物実測図

は花卉文と圏線、外面には圏線の染付がみられる。

SD-404(遺物:図247)

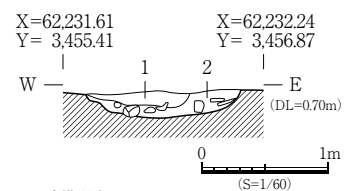
B-1区北部で確認した南北溝跡で、SK-429を切る。北は調査区外へ続き、検出長6.77m、検出幅1.28m、深さ36cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器49点(碗19, 皿2, 播鉢1, 壺1, 土瓶1, 細片25), 磁器41点(碗11, 皿1, 小杯1, 杯1, 猪口1, 蕎麦猪口1, 細片25), 土師質土器5点(小皿3, 細片2), 土師器12点(焙烙1, 火消し壺1, 細片10), 瓦9点(丸瓦3, 平瓦6), 土製品人形2点, 石製品砥石1点, 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2562~2567である。2562は陶器碗で、全面に透明釉を施す。外面には型紙摺による鉄錆の丸に葵文がみられる。2563は京都産の陶器半筒形碗で、透明釉を施し、外面には沈線が2条と鉄錆による草花文がみられる。2564は尾戸窯の陶器丸碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には鉄錆による松文がみられる。2565は肥前産の陶器丸碗で、外面には白化粧土による波状の刷毛目文、内面は打刷毛目文がみられる。2566は陶器油壺で、扁平形を呈する。口縁部内面から外面に鉄釉を施す、外面体部下半から底部にかけては鉄釉を刷毛塗りする。肩部には多条の沈線、底部外面には丸に「一」の刻印がみられる。2567は土製品人形で、狐形である。型成形である。

SD-405

SD-404の東で確認した南北溝跡で、北は調査区外へ続く。検出長9.90m、全幅0.52m、深さ15cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、多量の3cm大の円礫と炭化物を含んでいた。埋土中で竹樋と継手が出土している。底面の標高は北(0.628m)から南(0.540m)へ緩やかに傾斜している。出土遺物には陶器98点(碗9, 皿1, 蓋1, 向付1, 瓶3, 鉢1, 播鉢6, 壺1, 鍋4, 火鉢1, 細片70), 磁器34点(碗4, 皿2, 猪口1, 紅皿2, 香炉2, 瓶3, 細片20), 土師質土器4点(皿1, 白土器片1, 細片2), 土師器6点(焙烙3, 七輪2, 細片1), 瓦質土器2点(火鉢1, 焙烙1), 土製品人形1点, 金属製品1点がみられ、志野焼向付や岡本系焙烙、関西系焙烙が出土している。

SD-406(遺構:図248 遺物:図249)

SD-405の東で確認した南北溝跡で、SK-433を切り、北は調査区外へ続く。検出長7.80m、検出幅1.27m、深さ33cmを測る。断面は舟底状を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色シルト質中粒砂、下層が褐灰色中粒砂質シルトであった。一部の肩では板材を立て木杭を打って固定していた。出土遺物には陶器72点(碗1, 皿2, 蓋1, 鉢1, 播鉢5, 甕2, 灯明皿1, 台付灯明受皿2, 鍋3, 鍋蓋1, 土瓶1, 把手1, トチン1, 細片50), 磁器37点(碗6, 皿4, 蓋3, 小杯2, 猪口2, 蕎麦猪口1, 紅皿2, 蓋物1, 瓶3, 餌猪口1, 人形1, 細片11), 土師質土器10点(皿2, 小皿2, 細片6), 土師器25点(焙烙2, 鉢1, 細片22), 瓦質土器七輪1点, 石製品砥石1点, 古銭1点がみられた。図示した遺物は2568~2572である。2568は焼締陶器トチンで、胴部は横方向のハケ調整、脚裾部はナデ調整で指頭圧痕が残り、底部は横方向の削り調整を施す。底部外面には「村」の墨書がみられる。2569は肥前系の磁器染付端反小碗で、見込は圏線と「成化年□」銘、内面は丸繫ぎ文と圏線、外面は宝文と蝶文・鹿文・草花文・圏線の染付がみられる。焼継痕がみられる。2570は肥前系の磁器染付蓋物で、底部外面を除き透明釉を施し、口縁部内面は釉ハギする。底部には脚を貼付し、外面には梅文と波文とみられる染付を描く。2571は磁器餌猪口で、口縁部外面に輪状の把手を貼付する。内面から底部外面



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質中粒砂で、粘性は弱く1~10cm大の礫を多く含む
  2. 褐灰色 (10YR6/1) 中粒砂質シルトで、炭化物を少し含む

図248 SD-406

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

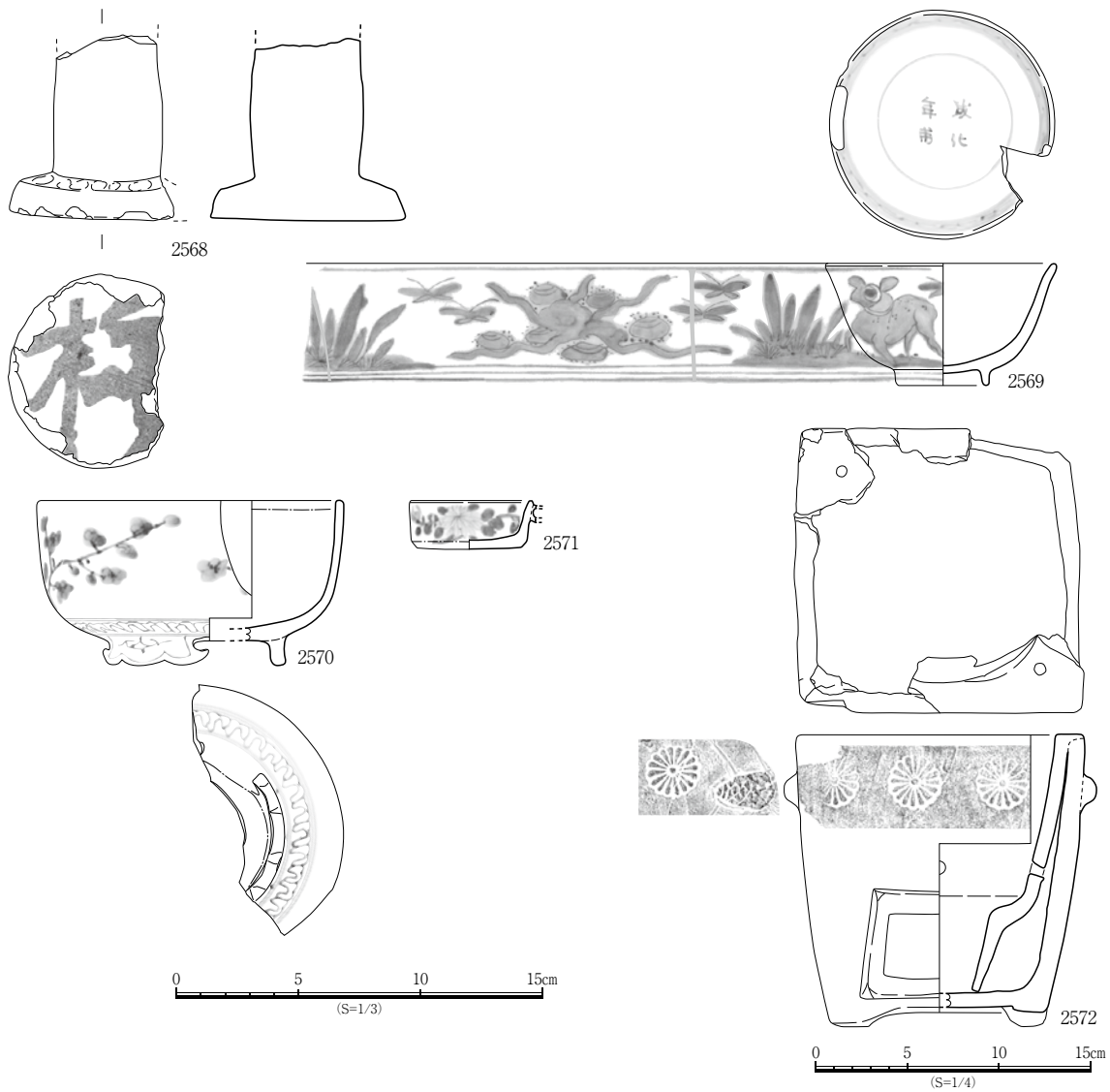


図249 SD-406出土遺物実測図

付近まで透明釉を施し、体部外面には菊花文の染付がみられる。2572は瓦質土器焜炉で、箱形を呈し、二重構造である。外部構造はたたら整形で、前方に方形の窓を有し、両側面に松毬形の双耳を貼付し、脚は削り出して4箇所につく。外面にはキラ粉が付着し、上部に菊花の印花文がみられ、上面の角部には円孔があき、内面はナデ調整である。内部構造は円形で、前方には方形の窓、中位に円孔があく。調整はナデで、外面には指頭圧痕が顕著に残る。

SD-407

SD-406の南で確認した南北溝跡で、SK-452とSD-408を切り、SK-451とSD-410、SX-408に切られる。検出長3.45m、検出幅0.96m、深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器19点(碗3、皿1、小杯2、鉢1、甕1、鍋1、細片10)、磁器23点(碗2、皿2、蓋1、小杯2、蕎麦猪口1、仏飯器1、細片14)、土師質土器片3点、土師器片1点、瓦質土器鉢1点、石製品砥石1点、古銭1点がみられた。

SD-408

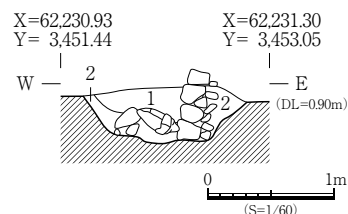
SD-407の東で確認した東西溝跡で、SD-407・409とSX-408に切られる。検出長4.08m、検出幅0.70m、深さ23cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(急須1, 細片3), 磁器6点(碗1, 火入1, 瓶2, 細片2), 土師器片1点, 丸瓦1点がみられた。

SD-409(遺物: 図251)

SD-408の南で確認した南北溝跡で、SD-408を切り、SD-410に切られる。検出長2.69m、検出幅1.10m、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器55点(碗3, 皿2, 蓋2, 鉢2, 片口鉢1, 甕1, 灯明受皿1, 鍋4, 細片39), 磁器42点(碗10, 皿5, 蓋4, 小杯1, 猪口3, 紅皿1, 段重1, 火入1, 細片16), 土師質土器3点(小皿1, 細片2), 土師器片4点, 瓦2点(軒平瓦1, 丸瓦1)がみられた。図示した遺物は2573で肥前産の磁器染付碗蓋で、望料形である。天井部内面には五弁花文、口縁部内面に多条圈線、外面に菊花文と蝶文の染付がみられる。口縁部には煤が付着する。

SD-410(遺構: 図250 遺物: 図251)

SG-402の西で確認した溝跡で、池跡であるSG-402の導水路である。SD-407を切る。SG-402からやや湾曲しながら西へ約7m伸びた後、追手筋のある北へ方向を変え真っすぐ17m伸び、北端は調査区外へ続く。溝跡の両肩には多い箇所では4段の石積が残存しており、上段は若干開き幅45cm、底面は幅20cmを測る。石は15~20cm大のチャートで、わずかに裏込もみられた。最下段は径5cmの木杭で固定しており、木杭は池跡に近い部分の南肩は5cm間隔で密に打たれており、その他は約40cm間隔である。また、池跡に近い部分のみ石積の下に胴木も確認された。断面は逆台形を呈し、掘方幅1.20m、



- 遺構埋土
1. 褐灰色(10YR6/1)シルト質砂で、3~5cm大の礫が多く瓦を含む
  2. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトで、少量の0.5cm大の礫と炭を含む

図250 SD-410

東端掘方幅1.40m、深さ63cmを測る。底面の標高は北(0.505m)からコーナー部(0.378m)、東(0.390m)へ下がっていた。埋土は褐灰色シルト質砂、掘方埋土は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物は非常に多く、陶器418点(碗11, 皿5, 蓋20, 火入6, 鉢18, 播鉢11, 植木鉢5, 壺1, 甕7, 灯明受皿1, 鍋28, 土瓶11, 急須1, 柄杓1, ハマ2, ミニチュア1, 細片289), 磁器150点(碗28, 皿13, 蓋6, 猪口10, 蕎麦猪口3, 紅皿3, 合子蓋1, 段重4, 瓶2, 火入1, 銚子5, 細片74), 近代陶器3点, 近代磁器69点, 青花碗1点, 土師質土器13点(皿1, 小皿5, 白土器3, 細片4), 土師器74点(火鉢17, 焜炉4, 五徳1, 火入1, 細片51), 瓦質土器18点(火鉢7, サナ2, 細片9), 瓦11点(軒丸瓦4, 軒平瓦2, 平瓦5), 土製品5点(人形4, 泥面子1), 金属製品17点(釘12, その他5), ガラス製品7点(瓶2, 薬瓶2, 眼鏡レンズ2, 細片1)がみられた。出土遺物より築造時期は19世紀前葉、埋没は大正期とみられる。また、SG-402との結合部は集石により埋められており、SG-402よりも早い時期に埋没したものとみられる。

図示した遺物は2574~2586である。2574は掘方より出土した尾戸窯の陶器碗である。内面から高台付近まで灰釉を施し、見込には目痕が残る。2575は陶器瓶で、口縁部内面から外面底部付近まで鉄釉を施す。底部外面には「二分」の墨書が残る。2576は掘方より出土した陶器火鉢で、円筒形を呈する。体部外面は濃緑釉を施し、内面は鉄釉の刷毛塗りである。高台には雷文の印刻文、内面には3箇所砂目痕、底部外面には輪状の砂目痕と2箇所に円孔がみられる。2577は陶器植木鉢で、底部には円孔、高台には弧状の抉りを入れる。回転ナゲ調整で、体部外面には飛鉋文がみられ、口縁部内



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

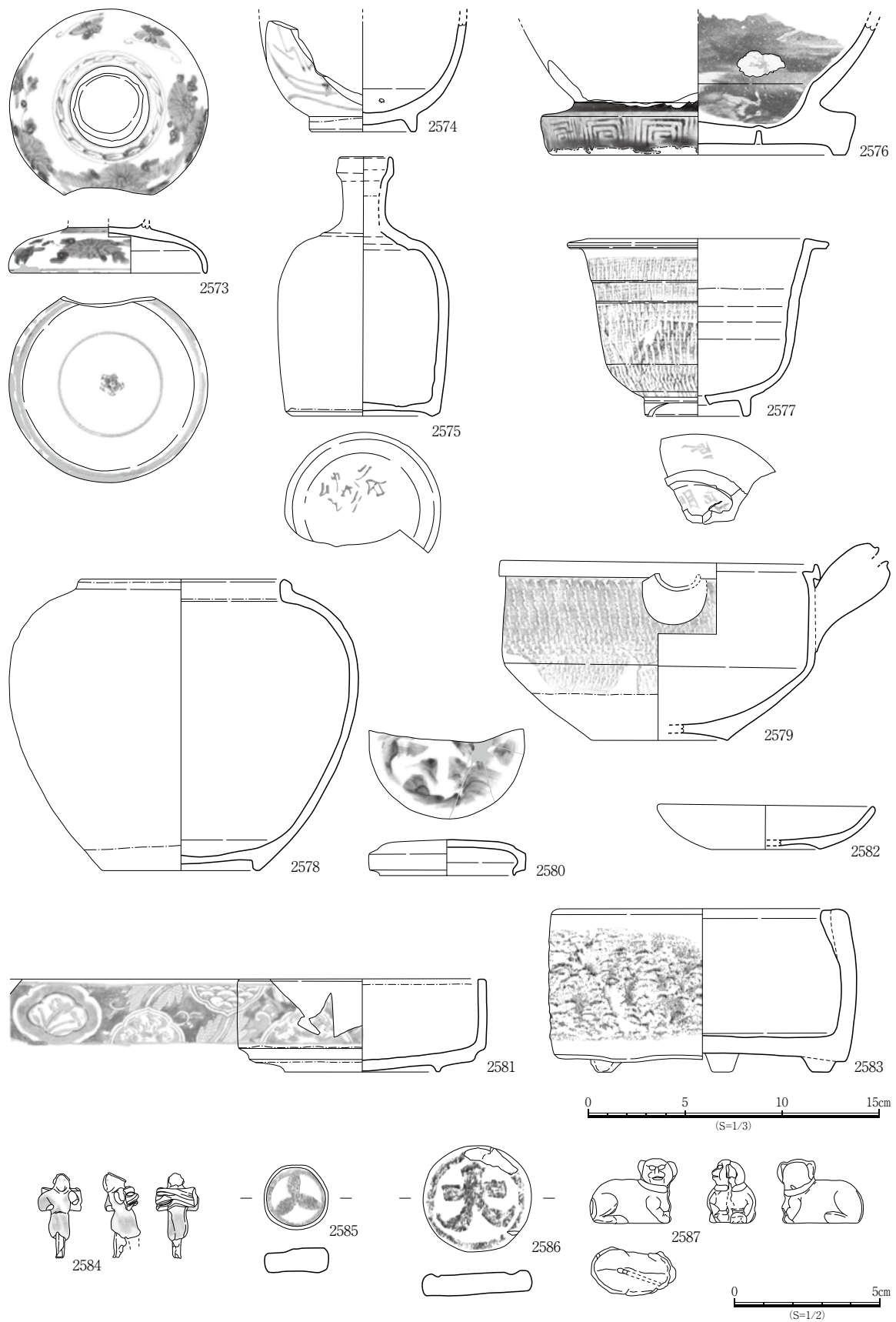


図251 SD-409～411出土遺物実測図

面から体部外面まで鉄釉を施す。体部外面に「辰」、高台内に「明□」の墨書がみられる。2578は陶器壺で、内面から体部外面まで鉄釉を施し、口縁部は釉ハギする。2579は陶器行平鍋で、片口と把手は貼付する。内面は鉄釉を施し、外面は体部まで鉄釉を刷毛塗りし、飛鉋文がみられる。2580は磁器染付蓋物蓋で、全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。天井部外面には山水文の染付と、焼継痕がみられる。2581は肥前産の磁器色絵段重で、全面に透明釉を施し、口縁部と外面体部下と畳付は釉ハギする。外面には窓と圏線の染付、朱・緑・黄色の窓絵と草花文などの上絵付がみられる。2582は白色系の土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部は回転削り調整である。2583は土師器火鉢で、円筒形を呈し、底部には3箇所脚を貼付する。内面から体部外面は回転ナデ調整で、体部外面には型押による松文がみられる。底部外面は無調整である。2584は土製品人形で、二宮金次郎とみられる。顔と脚は透明釉、目は黒色、着物は白と青色で着色する。2585・2586は土製品泥面子で、型成形である。2585は三ツ葉柏文、2586は大型で「大」字文がみられる。

SD-411(遺物:図251)

B-1区北部で確認された南北溝跡で、南は攪乱に切られ、北は調査区外へ続く。検出長5.43m、全幅0.68m、深さ15cmを測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、粗粒砂と多量の0.5～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器13点(碗2, 蓋1, 細片10), 磁器猪口1点, 瓦2点(軒丸瓦1, 平瓦1), 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2587で土製品人形である。型成形で、犬形である。下面から後頭部にかけて孔が貫通する。

SD-412(遺構:図252 遺物:図253)

B-1区北東部で確認された南北溝跡で、SK-439～442とSX-410を切り、SK-443に切られる。南端は池跡であるSG-402に繋がり、SG-402の底面とはほぼ同じ標高であることからSG-402の排水路とみられる。近代に大半部分を改修しているものとみられ、SG-402から北東へ約4m伸びた後、追手筋のある北へ方向を変え真っすぐ16m伸び、北端は調査区外へ続く。溝跡の両肩に角材または丸太材の胴木を敷いて木杭で固定し、石積を施したものとみられるが大半は損失している。元位置を動いていないとみられる石は30～40cm大のチャートで、裏込とみられる10cm以下の割石が多数出土している。断面は逆台形を呈し、掘方幅1.90m、胴木幅60～85cm、深さ41cmを測る。残存状態が良好なSG-402との結合部は胴木の上に、60cm大のチャートを用い、石積間は約40cm、深さ36cmを測る。底面の標高は北(0.371m)からコーナー部(0.346m)、南(0.208m)へ下がっており、池側が低くなっている。埋土は褐灰色砂質シルトで、ハンダも多く含まれていた。SD-410と同様、SG-402との結合部は集石により埋められており、SG-402よりも早い時期に埋没したものとみられる。出土遺物は非常に多く、陶器273点(碗36, 皿11, 蓋17, 向付2, 猪口2, 火入4, 瓶1, 鉢14, 播鉢14, 植木鉢1, 壺1, 甕6, 水注1, 灯明皿2, 灯明受皿2, 台付灯明受皿2, 鍋15, 土瓶11, 餌鉢1, 高杯1, ハマ1, 細片128), 磁器387点(碗56, 皿29, 蓋15, 小杯8, 猪口12, 蕎麦猪口2, 紅皿4, 合子2, 段重2, 香炉1, 瓶26, 灯明皿1, 水滴1, 筆筒1, 細片227), 近代陶器2点, 近代磁器31点, 土師質土器25点(杯1, 皿6, 小皿3, 白土器3, 細片12), 土師器48点(火鉢3, 七輪4, 焙烙3, 細片38), 瓦質土器15点(火鉢3, 焙烙2, 細片10), 瓦7点(軒丸瓦3, 軒平瓦1, 丸瓦2, 細片1), 土製品5点(人形3,

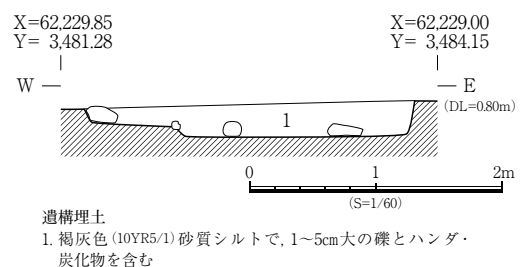


図252 SD-412

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

泥面子2), 金属製品13点(刀子1, 煙管1, 釘4, その他7)がみられた。溝跡南部の掘方の遺物は19世紀前葉とみられるが, 溝跡北部の掘方には近代の遺物が多く含まれており, 北部は近代に改修されたものとみられる。図示した遺物は2588~2595である。2588は陶器中皿で, 全面に透明釉を施し, 見込には鉄鏝による菊花文がみられる。2589は陶器皿で, 底部外面が凹む。全面に緑釉を施し, 外面には「霞晴山」の刻印がみられる。行灯皿とみられる。2590は陶器色絵蓋物蓋で, 摘は欠損する。内面は無釉で回転ナデ調整, 外面は全面に色絵がみられ, 黄・緑・墨・紫色の花文と圏線が描かれる。2591は肥前産の磁器染付碗蓋で, 内面には雷文と圏線, 外面には人物文の染付がみられる。2592は肥前系の磁器染付合子で, 全面に透明釉を施し, 口縁部外面と畳付は釉ハギする。外面には草花文と櫛歯文の染付がみられる。2593は肥前系の磁器染付合子蓋で, 全面に透明釉を施し, 口縁部内面と端部と

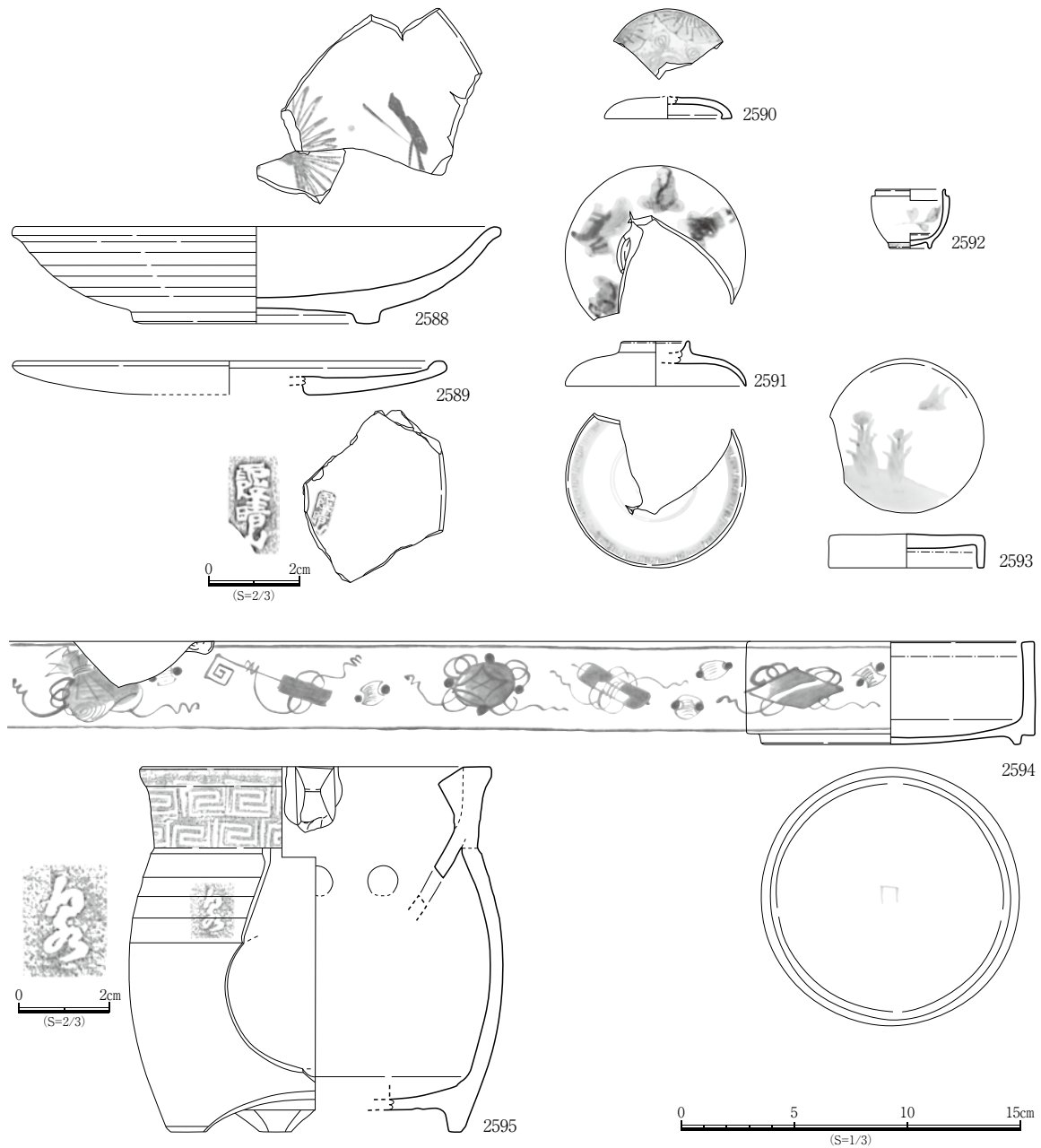


図253 SD-412出土遺物実測図

は釉ハギする。天井部外面には福寿草と鳥文の染付がみられる。2594は肥前産の磁器染付段重で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と高台外面は釉ハギする。外面には圏線と宝尽くし文、高台内にも染付がみられる。2595は土師器焜炉で、白色系で円筒形を呈する。前方には楕円形の窓、口縁部内面には3箇所四角錐形の突起がみられる。口縁部は回転ナデ調整で外面に雷文帯の印刻、体部外面は回転削り調整で、上部に刻印がみられる。高台は弧状の抉りを入れ3脚を作っている。内部構造は回転ナデ調整で、上部に円孔がみられる。口縁内部に煤付着が付着する。

SD-413(遺物: 図254)

SG-402の南東部で確認した東西溝跡で、西端はSG-402に繋がり、東は調査区外へ続く。検出長9.52m、検出幅1.43m、深さ38cmを測る。石組の溝跡で50cm大の石灰岩とチャートを用い、残存状態の良好な箇所3段の石積を確認した。また、この溝跡の西の延長上であるSG-402内には杭列が残存しており、この溝跡がさらに西へ伸びていた可能性がある。底面の標高は東(0.457m)から西(0.410m)へ傾斜し、池側が低くなっている。埋土はにぶい黄橙色砂質シルトで、多量の1~5cm大の礫と炭化物、土器細片を含んでいた。出土遺物には磁器12点(碗2、蓋2、小杯1、段重1、瓶2、鉢1、細片3)、近代磁器10点、土師器5点(焙烙1、細片4)、瓦質土器火鉢1点、瓦4点(軒丸瓦1、軒平瓦2、棧瓦1)、土製品泥面子1点、石製品5点(砥石3、播粉木1、基石1)がみられ、昭和期に埋没したものとみられる。図示した遺物は2596~2604である。2596は陶器火鉢で、隅丸方形または多角形を呈する。内面は無釉で横方向のナデ調

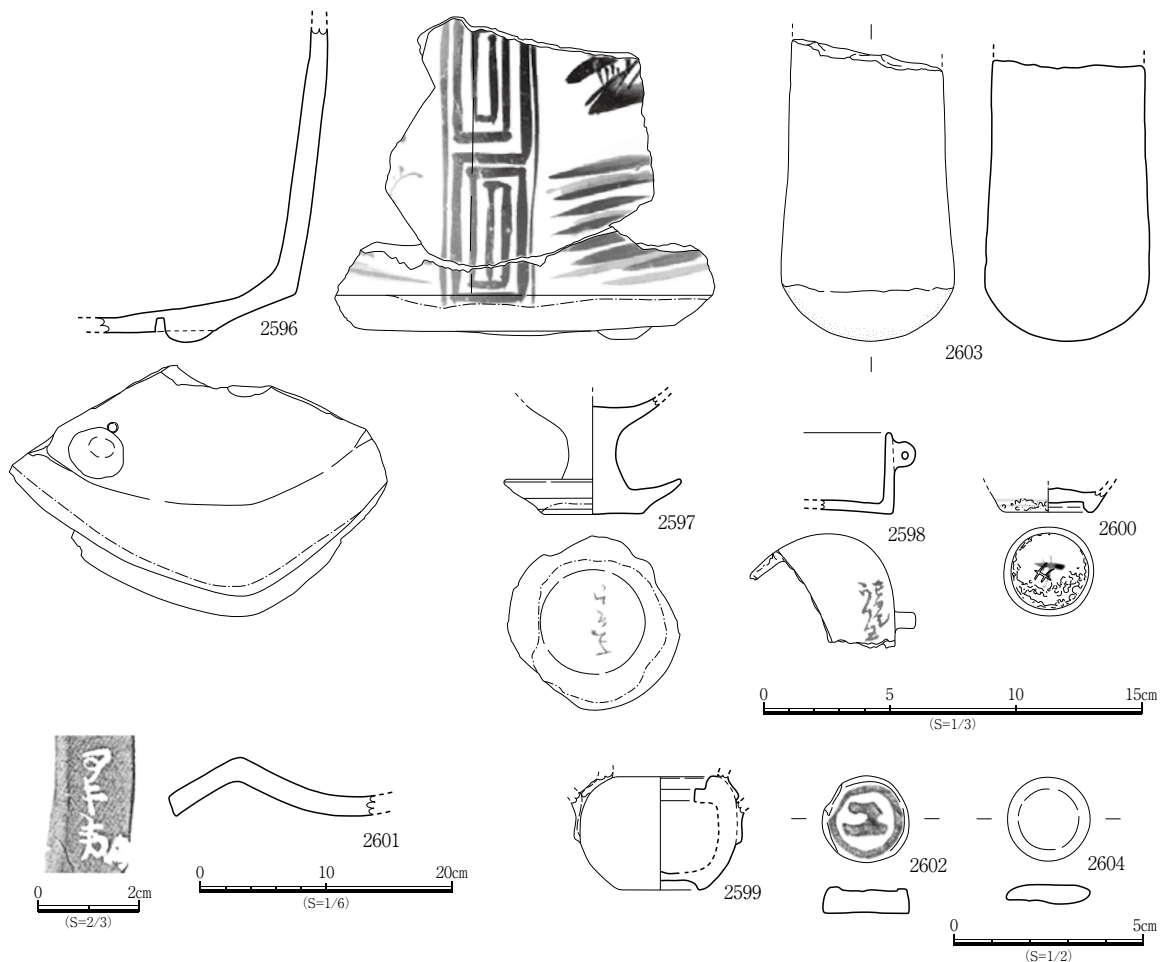


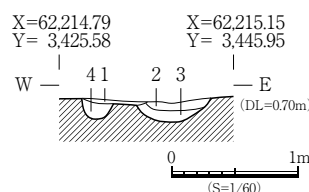
図254 SD-413出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

整を施し、内面角部は縦方向のナデ調整で指頭圧痕が顕著に残る。外面は透明釉を施し、鉄錆による文様がみられる。底部は無釉でナデ調整を施し、脚を貼付し、焼成前の穿孔が1箇所のみみられる。2597は陶器台付灯明受皿で、内面から外面底部付近まで鉄釉を施す。底部外面は回転糸切り調整で、墨書がみられる。2598は陶器餌鉢で、不整楕円形を呈する。口縁部外面には輪状の把手を貼付する。内面から体部外面には灰釉を施し、底部外面はヘラ切りとみられ無釉で墨書がみられる。2599は陶器ミニチュアで壺形を呈し、把手の剥離痕が残る。全面に緑釉を施し、蓋受部は釉ハギする。2600は能茶山窯の磁器染付小杯で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。外面には2条の圏線の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。2601は椀瓦で、側面に「アキ□」の刻印がみられる。2602は土製品泥面子で、型成形である。上面には「ユ」の字がみられる。2603は石製品播石とみられ、円柱形を呈し上部は細くなる。先端は丸く、敲打痕が残る。2604は石製品基石で、黒色を呈し、円形に加工し研磨する。

SD-414(遺構：図255 遺物：図256)

B-1区西部で確認した南北溝跡で、SD-416を切り、SK-449に切られる。検出長18.33m、全幅0.62m、深さ24cmを測る。断面は半円形を呈し、埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器171点(碗10, 皿5, 蓋3, 瓶1, 鉢6, 播鉢6, 甕1, 灯明受皿7, 鍋3, 土瓶3, 餌鉢1, ハマ1, 細片124), 磁器119点(碗16, 皿5, 蓋5, 小杯2, 猪口1, 瓶4, 鉢1, 仏飯器1, 水注1, 餌鉢1, 細片82), 土師質土器9点(小皿3, 皿1, 細片5), 土師器52点(火鉢2, 焜炉1, 焙烙9, 甑1, 細片39), 瓦質土器4点(火鉢2, 焜炉2), 瓦4点(軒平瓦1, 丸瓦1, 平瓦1, 瓦片1), 金属製品2点がみられた。図示した遺物は2605～2611である。2605は京都産の陶器半球形碗で、内面から高台付近まで透明釉を施し、外面には鉄錆と呉須による文様の一部が残る。高台内には「ヨツ」の墨書がみられる。2606は陶器小皿で、内面から高台まで灰釉



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、縮まりがあり円礫を含む(SD-504)
  2. 灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、縮まりがあり、円礫と風化礫を非常に多く含む(SD-414)
  3. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、縮まりがあり、少量の円礫と炭化物を含む(SD-414)
  4. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、縮まりがあり、円礫を少し含む(溝跡)

図255 SD-414・504

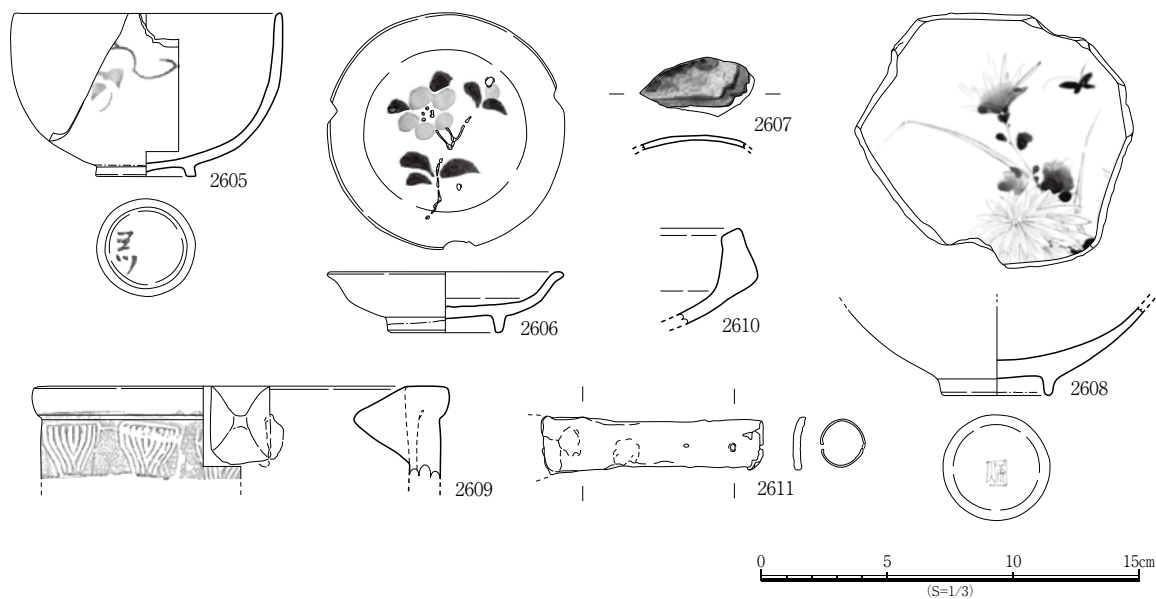


図256 SD-414出土遺物実測図

を施す。見込には花文がみられ、花は白化粧土、葉は染付、茎はイッチン描である。見込には目痕が残る。2607は陶器色絵蓋物蓋で、外面は鉄錆による花文に黄・緑・紫色で彩色する。内面は回転ナデ調整で無釉である。2608は能茶山窯の磁器染付うがい茶碗とみられ、内面に菊と蝶の染付、高台内には方形枠に「茶山」の銘がみられる。2609は白色系の土師器焜炉で、円筒形を呈し、口縁部内面には四角錐形の突起を貼付する。回転ナデ調整で、口縁部外面には幾何学文様の印刻がみられる。口縁部内面には煤が付着する。2610は土師器焙烙で、口縁部は横ナデ調整、体部外面はナデ調整である。2611は銅製柄で、基部は中空で2孔みられ、先端は平らで厚くなる。

SD-415

SD-414の東で確認した溝跡で、東はSX-411に切られ、北は攪乱に切られる。大きく湾曲し、東西方向に伸びた後、北に方向を変える。検出長5.36m、全幅0.76m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器8点(甕1, 灯明受皿1, 餌鉢1, 細片5), 磁器10点(碗3, 皿1, 蓋1, 細片5), 土師質土器片5点, 土師器6点(焙烙1, 細片5)がみられた。

SD-416(遺構: 図257)

SD-415の南で確認した東西溝跡で、SD-414に切られる。全長3.67m、全幅0.44m、深さ19cmを測る。埋土は褐灰色シルト質細粒砂で、炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗2, 鉢1), 土師質土器片1点, 瓦質土器片1点, 丸瓦1点がみられ、瀬戸・美濃産の水鉢も出土している。

SD-417(遺構: 図258 遺物: 図260)

SK-454の東で確認した南北溝跡で、一部攪乱に切られる。検出長2.34m、全幅0.95m、深さ24cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層にはぶい黄褐色シルト質砂、下層は褐灰色シルト質砂であった。出土遺物には陶器8点(鉢1, 細片7), 磁器10点(碗1, 蓋1, 紅皿1, 瓶1, 細片6), 土師質土器小皿1点がみられた。図示した遺物は2612・2613である。2612は陶器鉢で、全面に灰釉を施し、外面には水鳥の足形の粘土を貼付する。2613は肥前産の磁器染付瓶で、口縁部内面から外面に透明釉を施す。外面には蛸唐草文の染付がみられる。

SD-418

SD-417の南西で確認した東西溝跡で、他の遺構に切られる。検出長10.54m、全幅0.40m、深さ9cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には唐津系灰釉陶器皿1点がみられた。

SD-419

SD-418の南で確認した東西溝跡で、SD-420に切られる。検出長4.82m、全幅0.32m、深さ9cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少

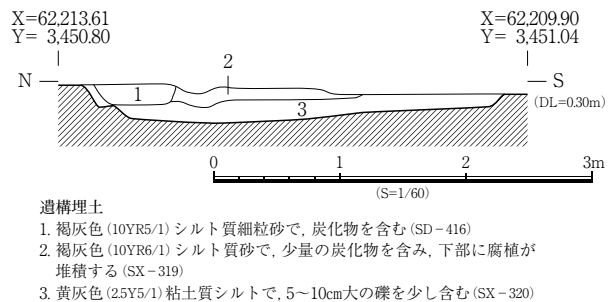


図257 SD-416, SX-319・320

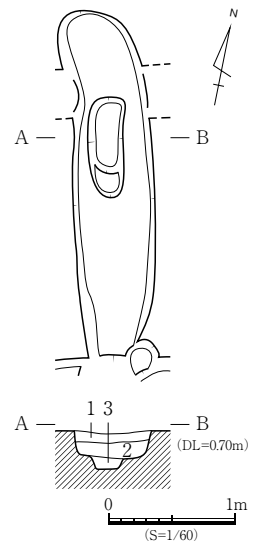


図258 SD-417

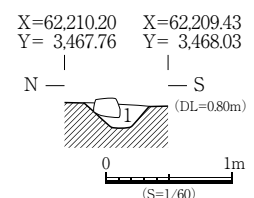


図259 SD-420



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

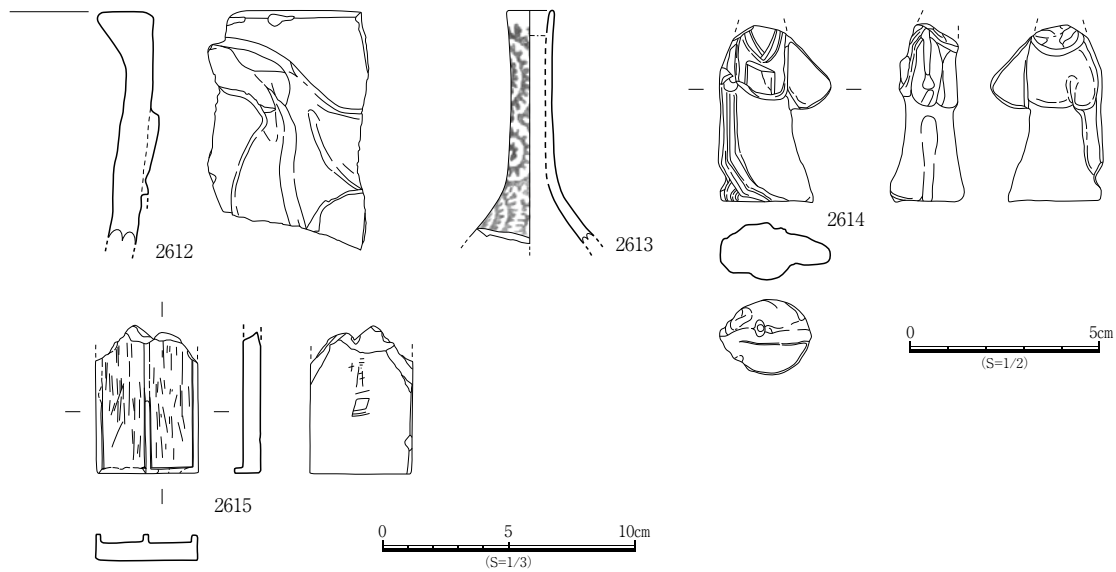


図260 SD-417・422出土遺物実測図

量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器碗1点がみられた。

SD-420(遺構：図259)

SD-419の東で確認した東西溝跡で、屋敷境の溝跡にほぼ直行する。SD-419を切り、東は攪乱に切られる。検出長9.14m、全幅0.78m、深さ27cmを測る。断面は逆台形を呈し、溝内には石列がみられた。石材は20～30cm大のチャートを用いており、石列は南に面を持っている箇所もみられた。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器32点(碗3、皿2、蓋2、鉢1、灯明受皿1、鍋6、細片17)、磁器8点(碗2、細片6)、土師器9点(鉢2、火鉢7)、須恵器片1点、瓦質土器片1点がみられた。

SD-421

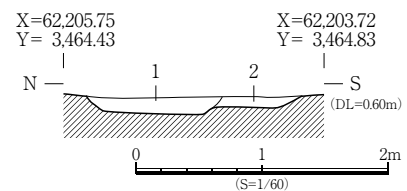
SD-419の南で確認した東西溝跡である。SK-457・SX-413を切る。検出長7.00m、全幅0.45m、深さ23cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点、丸瓦1点がみられた。

SD-422(遺物：図260)

SD-421の南東で確認した東西溝跡で、SD-423とP-420を切り、SK-459に切られる。検出長3.98m、全幅0.40m、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、磁器19点(碗1、皿6、猪口1、紅皿1、細片10)、土師質土器片1点、瓦質土器鉢1点、土製品人形1点、石製品硯1点、瓦片1点がみられた。図示した遺物は2614・2615である。2614は土製品人形で、僧形とみられる。型成形で、下面には円孔がみられる。2615は石製品硯である。小型で、二連になっており、上面には使用痕が残る。下面には「三月一日」とみられる刻書が残る。

SD-423(遺構：図261 遺物：図262・263)

SD-422の南で確認した東西溝跡で、SK-458～460を切り、SD-422とSX-417・418に切られる。全長13.34m、全幅1.64m、



遺構埋土

1. 褐灰色(10YR6/1)シルト質細砂で、粘性は弱く、少量の極粗粒砂と炭化物を含む(ピット)
2. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト質砂で、0.5cm大の礫を含む(SD-423)

図261 SD-423

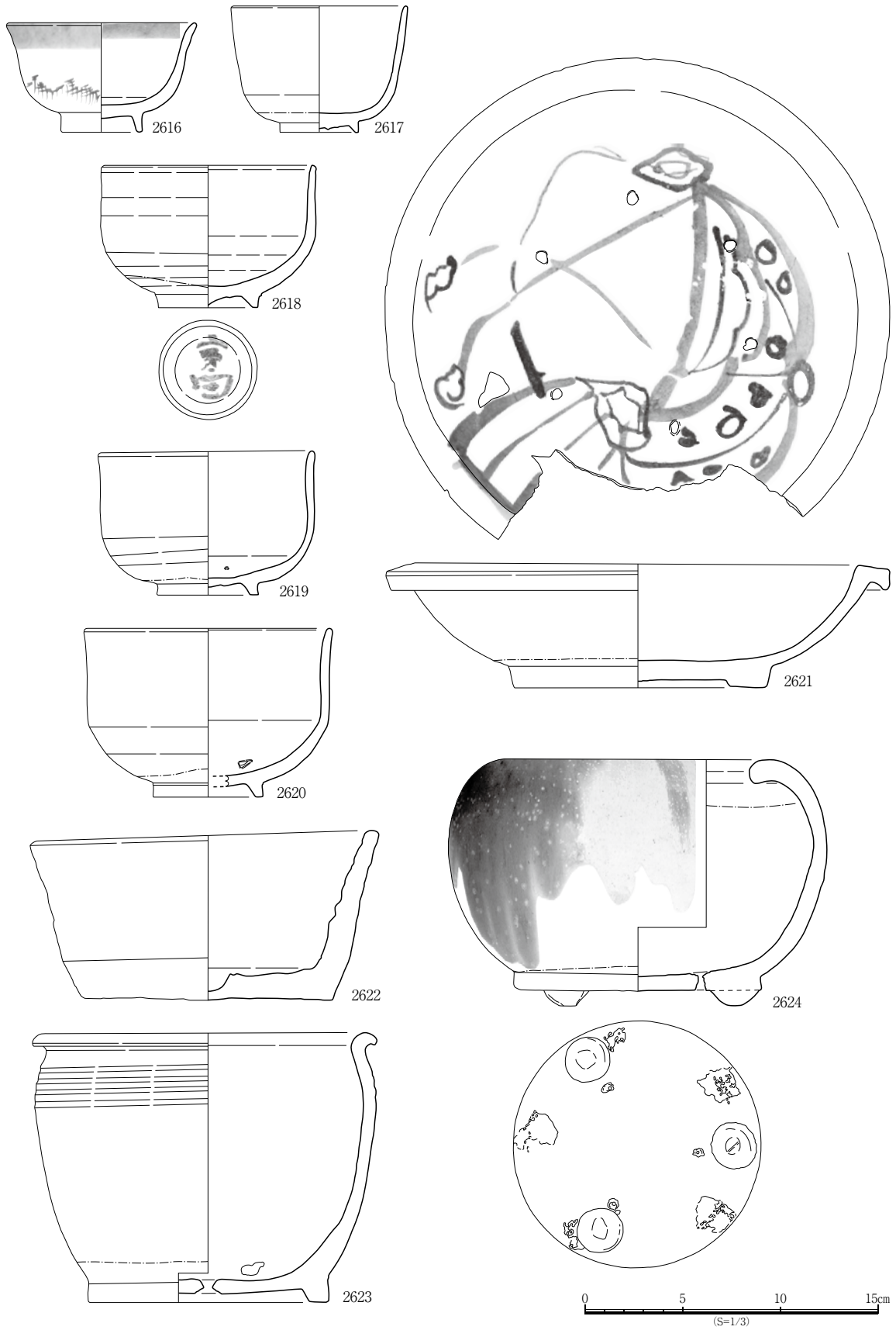


図262 SD-423出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

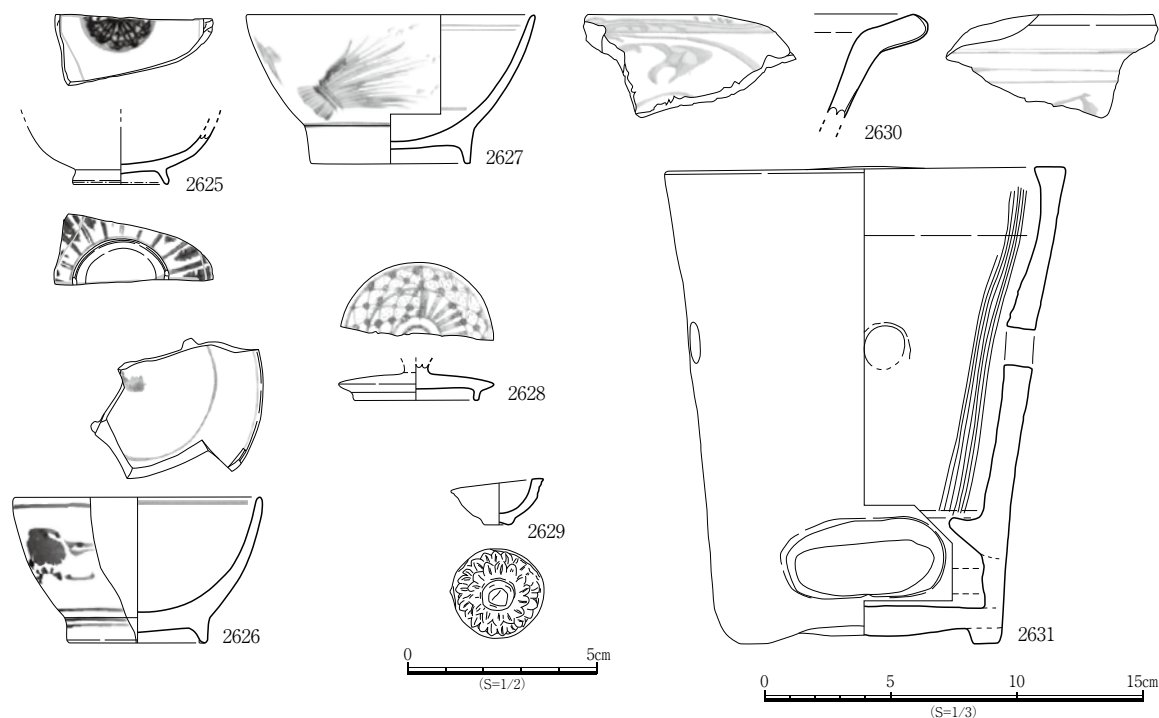


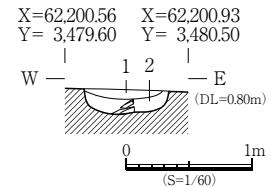
図263 SD-423出土遺物実測図2

深さ29cmを測る。北肩の一部には板材を立て木杭で固定していた。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器131点(碗16, 皿7, 蓋2, 合子蓋1, 火入1, 瓶5, 鉢8, 搦鉢1, 壺2, 甕2, 灯明皿1, 灯明受皿1, 台付灯明受皿1, 鍋7, 火鉢1, 七輪2, 匣蓋1, 人形1, 細片71), 磁器107点(碗20, 皿27, 蓋3, 小杯3, 猪口2, 蕎麦猪口1, 香炉1, 瓶4, 鉢4, 灯明受皿1, ミニチュア1, 細片40), 青磁盤1点, 土師質土器21点(皿1, 小皿7, 細片13), 土師器7点(火鉢5, 細片2), 瓦質土器火鉢3点, 瓦2点(軒丸瓦1, 丸瓦1), 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2616～2631で、2624の中に2625と2631が入った状態で、2618と2622が隣接した位置で出土している。2616は陶器小碗で、全面に透明釉を施したのち口縁部には緑釉を掛ける。外面には松文とみられる鉄錆による文様がみられる。2617～2620は尾戸窯の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。2617は小碗である。2618～2620は丸碗で、2618・2619は見込に目痕、2620は重ね焼痕が残る。2621は瀬戸・美濃産の陶器中皿で、内面から高台付近まで透明釉を施す。見込には鉄錆と呉須による文様と目痕がみられる。2622は陶器鉢である。回転ナデ調整で、外面体部下半は回転削り調整を加え、底部外面は無調整である。2623は瀬戸・美濃系とみられる陶器甕で、口縁部外面には4条の沈線がみられる。内面から高台付近まで鉄釉を施し、見込には砂目痕が残る。底部には焼成後の穿孔がみられる。2624は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で、底部には3箇所に半球形の脚を貼付する。内面と底部外面は鉄釉を刷毛塗り、口縁部内面から高台付近まで灰釉を施し緑釉を流し掛ける。底部には3箇所に円孔がみられ、底部と見込には砂目痕が残る。2625は肥前産の磁器染付小碗で、見込に丸文の染付、外面に二重区画線内に樹文とみられる染付を描く。3箇所に焼継痕がみられる。2626・2627は肥前産の磁器染付小広東碗である。2626は見込に不明文様の染付、外面にコンニャク印判による菊花文と圏線などの染付がみられる。2627は内面に圏線、外面に稲束文と雀文・圏線の染付がみられる。2628は肥前有田産の磁器色絵灰吹蓋とみられ、天井部に摘が付く。全面に透明釉を施し、口縁部内面は釉ハギする。外面には点繋ぎ文の染

付に朱色の四方襷文の上絵付がみられる。2919と揃いとみられる。2629は磁器ミニチュアで鉢形を呈する。型成形で、外面には型押による花文の陰刻がみられる。2630は中国産の青磁大皿とみられ、折縁形を呈する。全面に青磁釉を厚く施し、内外面に陰刻による草花文と圏線がみられる。2631は土師器焜炉で、円筒形を呈する。前方に楕円形の窓を持ち、内面の窓付近には突起が側面に巡り、体部には円孔が3箇所のみられる。調整は回転ナデで、底部外面は回転削りを加え、高台には3箇所に弧状の抉りを入れる。内面には7箇所に縦方向の櫛目文がみられる。口縁部内面には煤が付着する。

SD-424(遺構：図264 遺物：図266)

B-1区南東部で確認した南北溝跡で、SD-425を切り、南端はSD-507に切られる。検出長3.32m、全幅0.65m、深さ20cmを測る。断面は舟底状を呈し、埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器5点(皿1, 鉢1, 土瓶1, 細片2)、磁器23点(鉢3, 細片20)、瓦質土器火鉢1点、石製品石臼1点のみられた。図示した遺物は2632の陶器で器形は不明である。非常に硬質で、瓦に近い焼成である。端部は肥厚し方形をなし、受口状になる。型成形で、外面には型による陽刻の葛文がみられ、内面はナデ調整である。

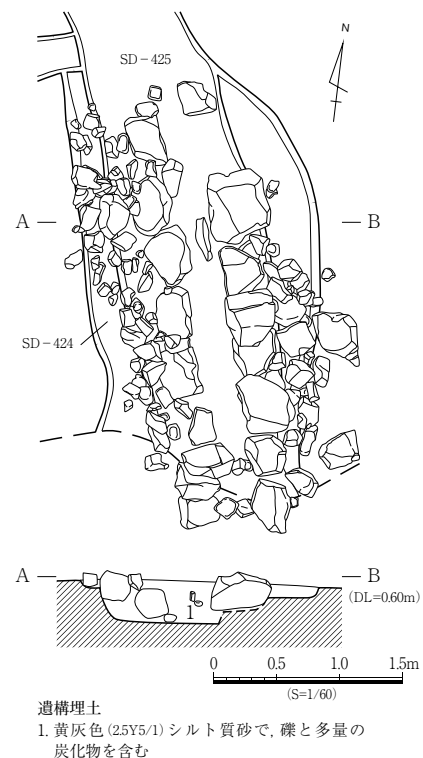


遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、黄色礫と炭化物を含む  
2. 褐灰色(10YR5/1)砂質シルトで、粘性はやや強く炭化物を含む

図264 SD-424

SD-425(遺構：図265 遺物：図266)

SD-424の東で確認した溝跡で、SD-424に切られる。S字状に大きく湾曲し、北はSG-402の方向へ伸び、南はSD-507に切られる。検出長12.94m、検出幅1.35m、深さ27cmを測る。南端は石組がみられ、北部の一部では杭列を確認した。石組は約2.7mを検出し、1段で、石は40~50cm大で東肩は石灰岩が多く、西肩はチャートと砂岩を使用していた。石組間は39cmを測る。北部の東肩では約2.5mの範囲に木杭が密に打たれていた。断面は箱形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、礫と多量の炭化物を含んでいた。底面の標高は北(0.451m)からコーナー部(0.457m)、南(0.178m)と傾斜する。出土遺物には陶器122点(碗14点, 皿6, 蓋3, 瓶2, 鉢5, 播鉢15, 植木鉢2, 壺1, 甕1, 灯明受皿1, 台付灯明受皿3, 鍋6, 土瓶9, 火鉢1, 水注1, 餌鉢1, 不明1, 細片50)、磁器153点(碗26, 皿5, 蓋9, 小杯4, 猪口4, 蕎麦猪口3, 紅皿2, 合子蓋1, 瓶10, 鉢3, 仏飯器3, 水滴1, 人形1, 細片81)、土師質土器6点(白土器3, 小皿1, 細片2)、土師器17点(焙烙7, 細片10)、瓦質土器片2点、瓦10点(軒丸瓦1, 軒平瓦1, 丸瓦1, 平瓦7)がみられた。図示した遺物は2633~2644である。2633は尾戸窯の陶器丸碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面体部下半にはロクロ目が顕著に残る。2634は肥前武雄産の陶器瓶で、口縁部内面から外面には灰釉を施し、外面には白化粧土による刷毛目文と鉄錆による文様がみられる。2635は京都・信楽系の陶器灯明受皿で、受部の1箇所に半円形の切り込みがみられる。内面から口縁部外面には灰釉を施す。2636は陶器カンテラで、側面には断面隅丸方形の口が付く。内面から高台付近まで灰釉を施し、口縁端部は釉ハギする。2637は陶器鉢とみられる。2632と同様の焼成で、硬質で瓦に近い。型成形で、外



遺構埋土  
1. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂で、礫と多量の炭化物を含む

図265 SD-425

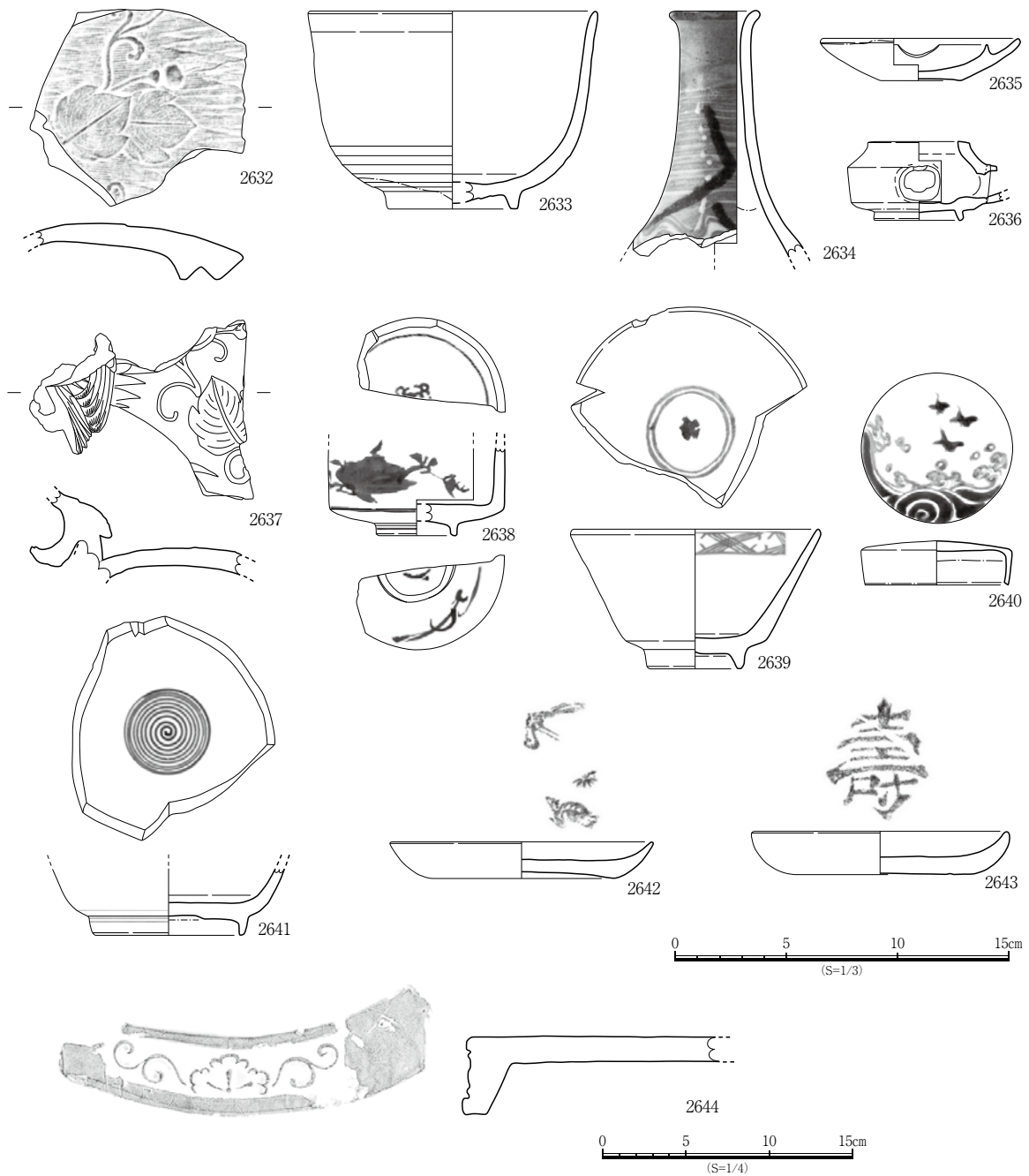


図266 SD-424・425出土遺物実測図

面には型による横方向の櫛目地に鶯の陽刻文がみられ、型成形の鳥の装飾品を貼付する。2638は肥前産の磁器染付筒形碗で、見込にはコンニャク印判の五弁花文と圏線の染付、外面には花文と松葉文の染付、高台内にも僅かに染付がみられる。2639は肥前産の青磁染付朝顔形碗で、見込にコンニャク印判の五弁花文と圏線の染付、口縁部に四方襷文の染付がみられる。2640は肥前系の磁器染付合子蓋で、外面と天井部内面に透明釉を施し、口縁端部は釉ハギする。天井部外面には波千鳥文の染付がみられる。2641は肥前系の磁器染付鉢で、蛇ノ目凹形高台を呈する。全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。見込は渦巻文、外面には圏線の染付がみられる。2642・2643は尾戸窯の白土器皿で、口縁部は横ナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。2642は見込には型押による鶴亀文、

2643は「寿」字文がみられる。2644は軒平瓦で、中心飾りは三子葉文とみられ、瓦当右側に刻印がみられる。

SG-402(遺構：付図5 遺物：図267～278)

B-1区北東部で確認した池跡である。平面形態は不整形を呈し、東西18.84m、南北18.00m、深さ50～81cmを測る。SD-410・412・413と繋がり、SD-425とも繋がっていた可能性がある。石材は自然石で、チャートが最も多く、その他に蛇紋岩と石灰岩・砂岩が用いられていた。池の築造については、肩部は整地層を削平し、底面は地山まで削平していた。埋土は概ね3層に分かれ、上層は褐灰色中粒砂質シルトでハンダを含み、中層は褐灰色シルト質粗粒砂で炭化物を含み、下層は西部が灰色粘土質シルトで細粒砂と少量の炭化物を含み、東部はにぶい黄褐色極粗粒砂で1cm大の礫を非常に多く含んでいた。埋土中からは多量の遺物が出土しており、近代の遺物も多く含まれていた。石積の下にハンダを敷いている箇所もあり、19世紀初頭頃に築造され、何度も改修を行い、規模を縮小しながら大正期に埋没したものとみられる。特徴的な石には石1～8まで番号を付けて呼称し、池跡の地点についてはセクションの位置(A～P)を用いる。

この池跡の最も特徴的な地点は北西部(A～D)である。北西隅は約20cm大のチャートを直角に配し、石の稜を上にしてラインを作っている。裾部は11cm角の建築材を胴木として、胴木を杭で固定した上に石を弧状に配している。裾部の石は30～40cm大のチャートであるが、この池跡の最も特徴的な石である石1は蛇紋岩で、幅70cm、高さ28cmを測り、緑色を呈する。石1は他の石よりも大きく、水に濡れると一層色が際立つためこの石を池の最も重要な位置に据えたものとみられる。石1と北西隅の間は30cm大のチャートと10cm大の蛇紋岩を斜面上に貼り付けており、深さ71cm、傾斜角は29度を測る。蛇紋岩は緑色や赤褐色などを呈し、色鮮やかに仕上げている。Dの東側は胴木がなく、最下段の石を杭で固定している。最下段の石は30cm大で、その上に20cm大の石を約4段積んでいる。また、更に東部分には杭で固定した胴木の上にハンダを敷いて石を乗せている箇所や、胴木はみられず最下段の石を杭で固定している箇所など地点により構造が異なっている。Eの東には大型の石材である石2・3がある。石2は幅約70cmを測る砂岩で、他の石より極めて大きい。石2の下に石を置き杭で固定しており、上面が平らになるように据えている。石3は幅70cmを測るチャートで、上面は平らで他の石よりも高くなっている。石2・3間の池跡内には杭がみられることや中島に近いことから、水上の施設への踏石であった可能性や中島に渡る橋の踏石であった可能性もある。

池跡の北東部はSD-412と繋がる。GからIにかけては石積が湾曲して繋がっており、同時期に築造されたものとみられる。JからKにかけてはきれいに湾曲して繋がる石積と、SD-412から真っすぐ伸びる50～70cm大の大型の石材を用いた石列の二つに分かれている。湾曲する石積の方が古く、SD-412から伸びる大きい石材を用いた石列が後に改修したものとみられる。さらに近代にはこの石列の入口を封鎖して使用していた時期もあったとみられる。この石列の南には板を杭で留めて立てた遺構が確認されており水分けの板とみられる。どの時期に使用されたのかは不明であるが、板の北側に杭を打っており南側を水が流れた可能性が高い。JからKに繋がる石積は残存状況が良好な箇所では3段がみられ、高さ55cm、傾斜角は78度を測る。胴木を用いている箇所と用いていない箇所があるが、胴木または最下段の石を杭で固定している。石材は他の箇所より石灰岩が多く用いられており改修された部分である可能性もある。また、この石積の内側には石積と並行するように杭列が並んでいる。この杭列は南のSD-413の延長上に位置し、SD-413が北まで伸びていた可能性



### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

があり、あるいは石積が改修され東へ拡張したものとみられる。

K～Lについては攪乱を受けており、石積が消失している部分が多く不明瞭であるが、杭列が僅かにみられ、主にチャートが並んでいた。石積は2段程度で、深さは55cmを測る。L～Aについても攪乱を受けているが、この箇所は深さ81cmを測り、この池跡の最も深さがある部分である。石積は多くを消失しており不明瞭であるが、杭列が多く検出されている。肩部にはテラスが設けられ、テラスに石を配し杭を3cm間隔で密に打ち、石を固定していたものとみられる。箇所によっては杭列が上下2段に残っていた。池跡の西端はSD-410と繋がり、基底面はSD-410(0.403m)からSG-402(0.132m)へ大きく傾斜しており、SD-410はSG-402の導水路と考えられる。SD-410の東端は近代に封鎖して使用していた時期もあったとみられる。

池跡内の西部には石6～8の石列がみられる。石列6・7はチャート、石列8は石灰岩で、いずれも床面より高い位置で検出しており、改修時に配置されたものとみられる。これらの石列の下からは幕末の遺物が出土している。石7の西側にはほぼ床面で丸太材を杭で固定している。丸太材は2本が並行に並んでおり、いずれも北側を杭で固定している。SD-410との結合部で確認されているため、SD-412との結合部で確認されている板材と同様に水分けの役割を果たしたのか、あるいは北側に杭が打たれているので改修時に土留として構築されたものとみられる。

池跡内の中央には中島が確認されている。中島上の構築物は多くが消失しているものとみられるが、中島南側では杭が密に打たれており土留をしていたものとみられる。中島内の北側には石4がみられる。石4は幅1.10m、高さ0.46mを測るチャートで、下に10～20cm大の石を置き意図的に据えている。石4の西側では石が確認されておらず、その北側の池の肩部でも石が確認されていない箇所がみられ、その間に橋が存在した可能性もある。

池跡の主となるA～D地点の北側は標高が高く、東側と北側でも石積が確認されており、付帯施設であると考えられる。石5はチャートの石列で、上面を平らになるように据えられており飛石とみられる。石5の北側の空間には東屋が存在した可能性がある。また、石5の北側に位置するP-409には陶器壺が天地逆の状態で埋設されており、体部中位を漆喰で固定されていた。この壺も付帯施設に関連するものとみられる。

図示した遺物は2645～2789で、2645～2663は裏込より出土した遺物である。2645は唐津系灰釉陶器皿で、内面から体部外面まで灰釉を施す。見込には胎土目痕が残る。2646は京都・信楽系とみられる陶器小皿で、内面から高台付近まで透明釉を施し、見込には染付と白化粧土による花文がみられ、目痕が残る。2647は肥前系の磁器染付蓋物蓋で、全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。外面には格子地に鳥文とみられる染付を描く。2648は肥前産の磁器染付猪口で、桶形を呈する。蛇ノ目凹形高台で、全面に透明釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギする。見込には不明の染付、内面には圏線と雷文、外面には風景文の染付を描く。2649は尾戸窯の白土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部外面に回転削り調整を加える。見込には型押による陽刻の鶴亀文、内外面に墨書がみられる。2650は土師器甌またはサナとみられ、側面と底部に円孔がみられる。調整は回転ナデ調整で、一部にナデ調整を加える。2651は算盤玉形の陶器土瓶で、注口と釣手・三足を貼付する。注口内には径8mm円孔が3個みられ、釣手は花形を呈する。調整は回転ナデで、外面の体部下半と底部は回転削りを加える。口縁部内面から体部外面まで鉄釉を施し、口縁端部は釉ハギする。底部付近には煤が付着する。2652は肥前産の磁器染付小広東碗で、見込は鷺文とみられ、内面は圏線、外面は風景文の染

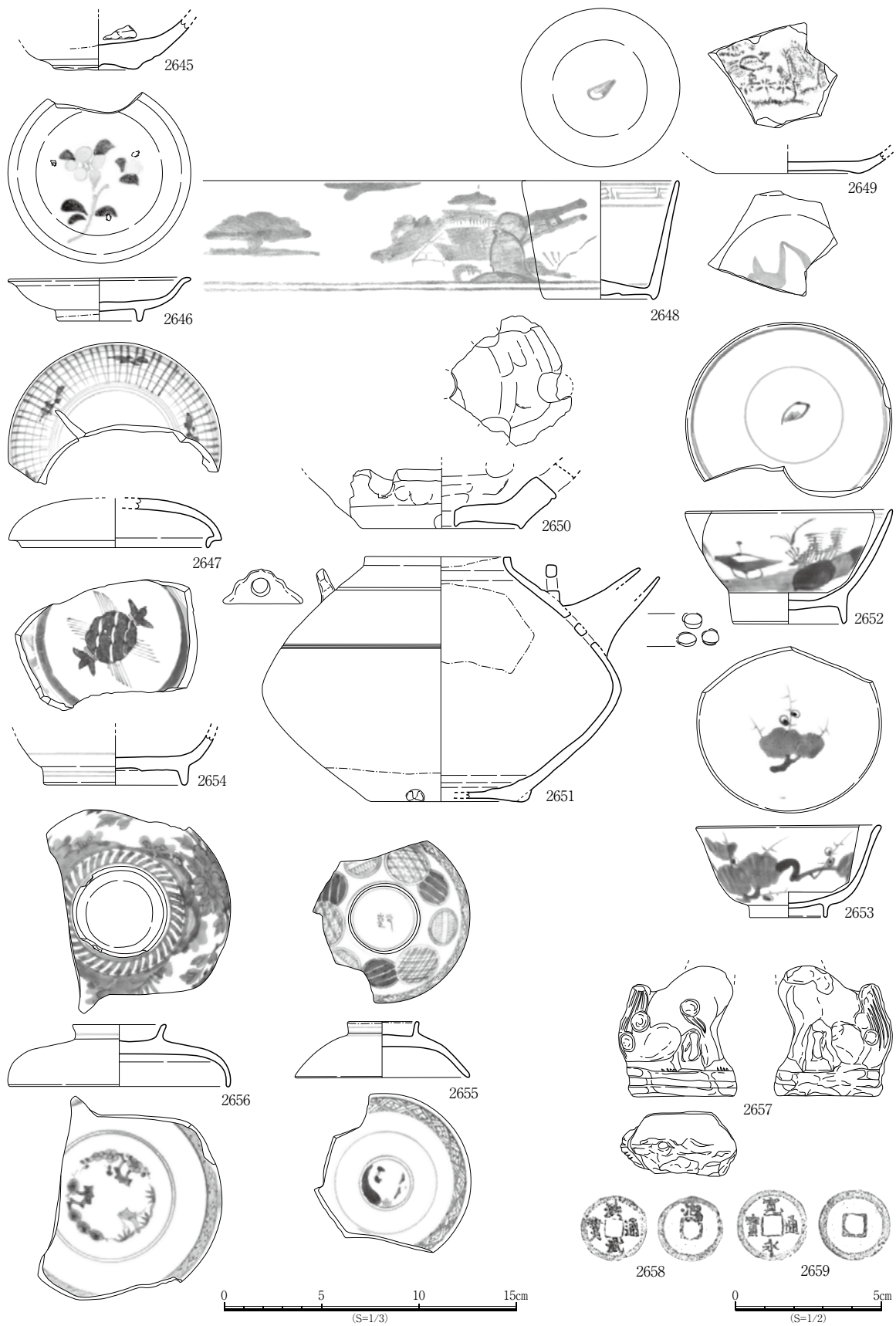


図267 SG-402出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

付がみられる。2653は瀬戸・美濃系または関西系とみられる磁器染付小端反碗で、外面と見込に陰刻と染付による梅樹文がみられる。2654は肥前産の磁器染付皿である。蛇ノ目凹形高台で、全面に透明釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギする。見込には宝文、内面は区画内に染付、外面には圏線の染付がみられる。焼継痕が残る。2655は肥前有田産の磁器染付碗蓋で、天井部内面は二重圏線内に風景文、口縁部内面に四方禪文、外面は四方禪文と窓絵の染付、摘内には銘がみられる。2656は肥前産の磁器染付望料碗蓋で、天井部内面は環状の松竹梅文、口縁部内面に四方禪文、外面は牡丹文の染付がみられる。2657は土製品人形で、台座に座る獅子形である。型成形で貼り合わせによるもので、下面には円形の孔がみられる。2658・2659は銭貨である。2658は洪武通寶で、裏文字は背面上に「浙」か。2659は寛永通寶で新寛永である。2660・2661は石5の下より出土した。2260は土師器火鉢で、方形を呈する。底部には扁平な脚を貼付する。口縁端部はナデ調整、外面は型押による格子

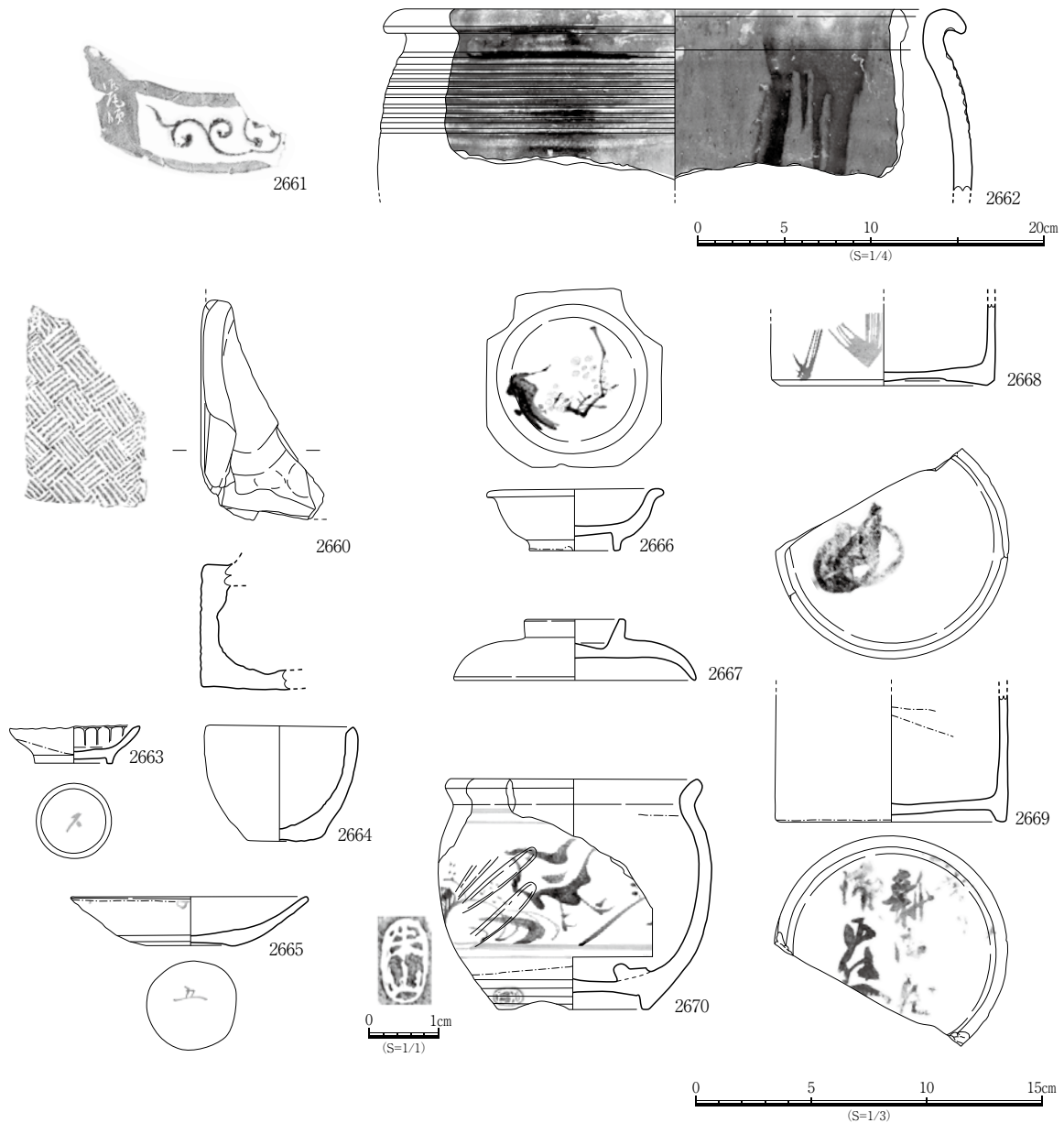


図268 SG-402出土遺物実測図2

目状の文様、底部外面はナデ調整、内面は粗雑なナデ調整である。2661は軒棧瓦で、中心飾りは三巴文で、瓦当左側に刻印がみられる。2662は陶器甕で、外面肩部には多条の沈線がみられる。全面に鉄釉を施し、その後一部に透明釉を施す。2663は肥前産の白磁紅皿とみられ、内面から口縁部外面まで白磁釉を施す。内面は型による菊花状の文様、高台内には「ス」の墨書がみられる。

2664～2764は上層から出土した遺物である。2664は陶器碗で全面に金属が溶けたものが付着する。外面は鉄釉とみられる。2665は京都・信楽系の陶器小皿とみられ、内面から口縁端部まで灰釉を施す。調整は回転ナデで、底部付近には回転削り調整を加える。口縁部外面には煤が付着し、底部外面には「五」とみられる墨書が残る。2666は陶器小皿で、内面から高台付近まで灰釉を施す。口縁部は方形で隅を切り、見込には鉄錆と白化粧土による梅樹文がみられる。2667は尾戸窯の陶器蓋で、全面に灰釉を施し、摘端部は釉ハギする。部分的に橙色に発色する。2668は陶器火入で、回転ナデ調整のち外面に回転削り調整を加える。施釉はみられず、外面には墨による文様がみられる。2669も陶器火入で、回転ナデ調整のち底部外面に回転削り調整を加える。体部内面には白化粧土、体部外面には白化粧土のち透明釉を施す。見込と底部外面には墨書がみられ、底部外面には「新」の文字が残る。2670は陶胎染付火入で、回転ナデ調整のち底部外面に回転削り調整を加える。見込には輪状に粘土紐を貼付し、高台には3箇所弧状の抉りを入れる。口縁部内面から体部外面に白化粧土のち透明釉を施し、外面には丸彫による菊花文と波千鳥文の染付がみられる。外面底部付近には丸に「朱山」の刻印がみられる。2671は陶器鉢で、底部が非常に厚い。回転ナデ調整で、底部外面は回転糸切り調整である。内面から体部外面まで鉄釉を施す。2672は尾戸窯の陶器鉢で、輪花形である。内面から高台付近まで灰釉を施し、内面には鉄錆による笹文がみられる。2673は陶器色絵鉢で、輪花形である。全面に白色釉を施し、内外面に色絵がみられる。見込は墨・黄色の丸に果実文、口縁部内面には緑色の帯線に墨色の四方襷文と朱色の波線、外面は朱・黄・墨色の梅文の上絵付がみられる。2674は関西系の陶器鉢である。体部は型成形で底部外面には布目痕が残り、体部には4箇所を指圧により凹ませ、底部には高台を貼付する。口縁部には葉形と虫形の粘土を貼付し、虫には鉄釉が掛けられる。内面から高台付近まで灰釉を施し、緑釉と白色釉を掛け流す。2675は陶器鉢で、内面から高台付近まで鉄釉を施し、口縁部は釉ハギする。2676は陶器播鉢で、回転ナデ調整のち内面に密に播目を入れる。体部外面には横書きの墨書がみられる。2677は焼締陶器の小壺で、回転ナデ調整を施し、底部外面は回転削り調整である。底部外面には墨書が残る。2678・2679は陶器壺で、内面から高台付近まで鉄釉を施す。2678は見込に砂が付着し、2679は内面に付着物、高台内には墨書がみられる。2680は陶器水注で、把手と注口は欠損する。内面から体部外面まで鉄釉を施し、口縁部は釉ハギする。2681は京都・信楽系の陶器灯明受皿で、受部の1箇所に半円形の切り込みがみられる。内面から口縁端部まで灰釉を施す。底部外面には砂を多く含んだ粘土が付着する。2682は陶器台付灯明受皿とみられ、中空である。回転ナデ調整で、底部外面は回転糸切り調整である。脚部外面には鉄釉を施す。2683は陶器七輪の引戸とみられ、外面には把手が付き鉄釉を施し、側面と下面はナデ調整である。下面には「イニ」の刻書がみられる。2684は陶器ミニチュアで、壺形を呈する。底部には径4mmの円孔がみられる。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2685は能茶山窯の磁器染付丸碗で、見込は宝文、内面は圏線、外面は格子状文の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。2686は能茶山窯の磁器染付端反碗で、見込には亀文とみられる染付、内面は圏線、外面は縞文と丸に花文・圏線の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。2687は肥前

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

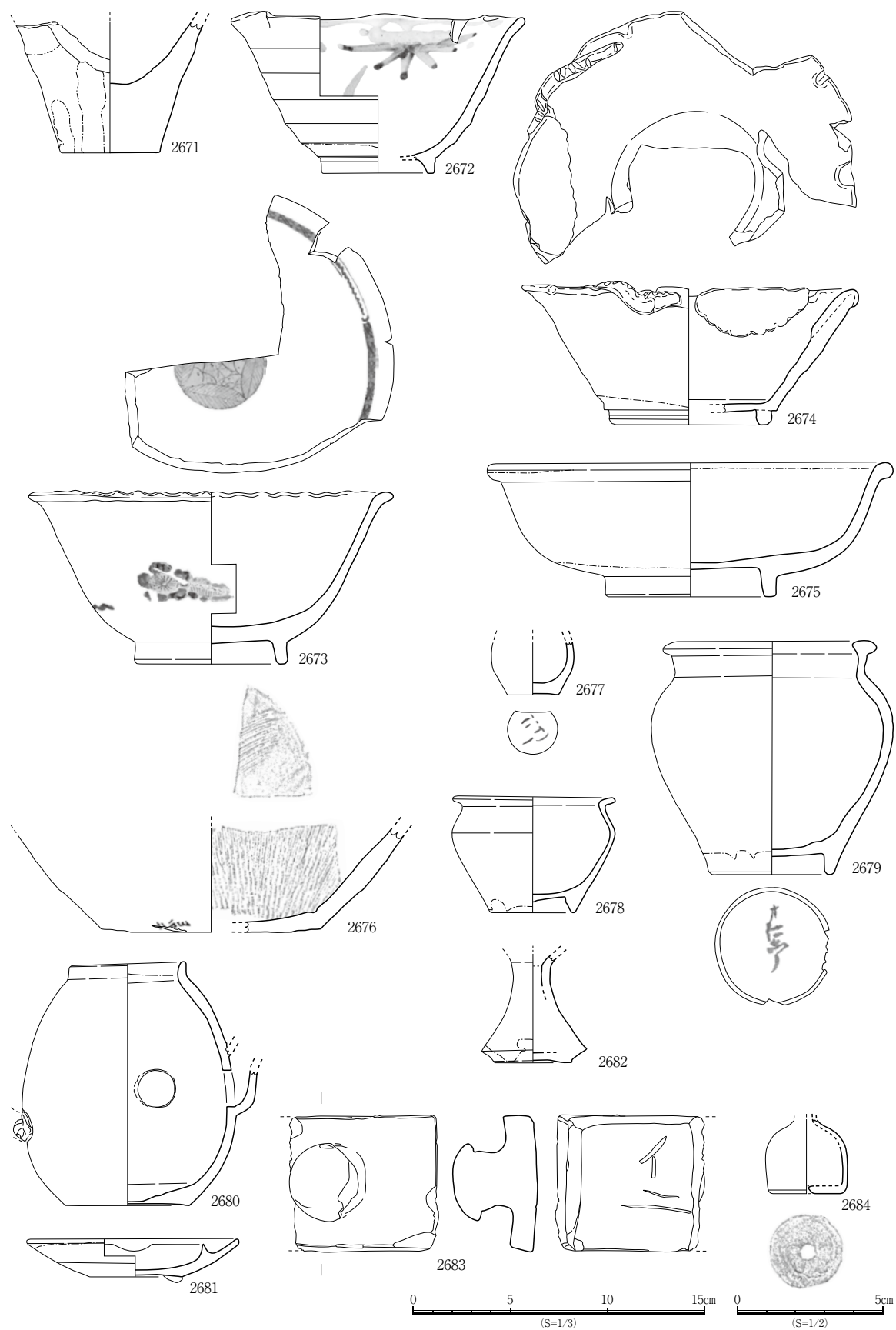


図269 SG-402出土遺物実測図3

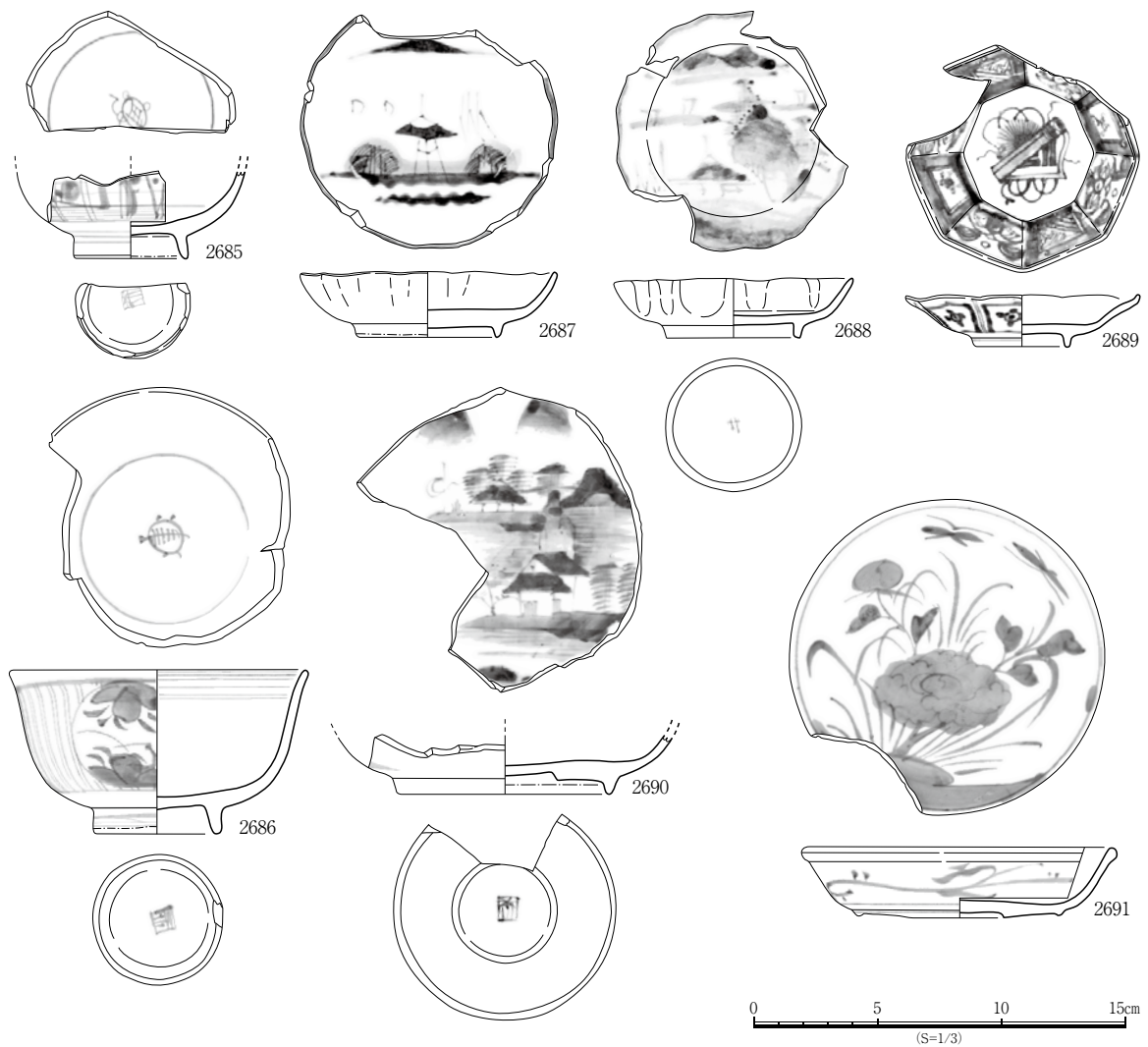


図270 SG-402出土遺物実測図4

系の磁器染付輪花皿で、型打成形である。口鏝で、見込には楼閣山水文がみられる。2688は能茶山窯の磁器染付輪花皿で、型打成形である。見込には海浜風景文の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。2689は肥前系の磁器染付八角皿で、型打成形である。見込は宝文、内面は区画内に染付、外面は区画内に花文の染付がみられる。2690は能茶山窯の磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台を呈し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面には風景文の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。2691は磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台を呈し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面は草花文と蝶文、外面は唐草文の染付がみられる。2692は肥前産の磁器染付稜花中皿で、内面は松樹文と雲文・虹文とみられる染付、外面は雲文と圈線の染付、高台内は「富貴長春」の銘と圈線の染付がみられる。高台内には3箇所目痕が残る。2693・2694は瀬戸・美濃産の磁器色絵小皿である。木型打込成形で、見込には型押による陰刻の「寿」字文がみられる。2693は見込に朱・墨・黄・緑色で俳句と鯰文、高台内には朱色で「ウバ」銘の上絵付がみられる。2694は見込に朱・緑色で俳句と鯉文、高台内には朱色で「かん女」銘の上絵付がみられる。2695は磁器菊皿で、蛇ノ目凹形高台である。型打成形で、内面から高台外面まで白磁釉を施す。高台内は無釉で、「安岡」などの墨書がみられる。2696は磁器染付大皿で、内



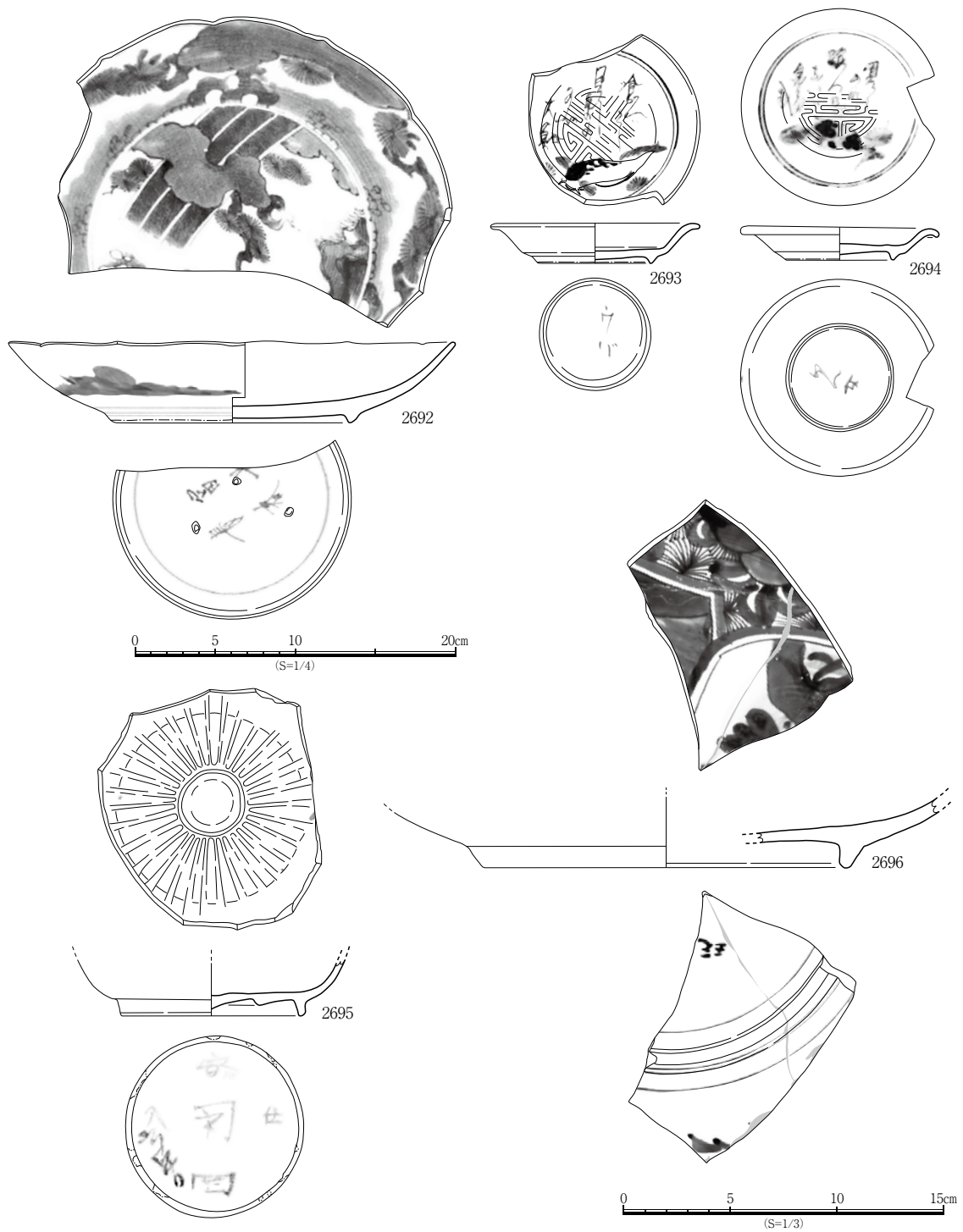


図271 SG-402出土遺物実測図5

外面にコバルトによる染付がみられ、高台内は「玩」の銘がみられる。2箇所に褐色の焼継痕が残る。2697は陶器蓋物蓋で、外面には灰釉を施す。2698は磁器染付合子蓋で、全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。天井部外面には紅葉文の染付がみられる。2699は磁器染付段重蓋で、全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。外面には海浜山水文の染付がみられる。2700は磁器染付蓋物蓋で、小さな摘が付く。天井部外面は墨弾きの宝文、外面は草花文の染付がみられる。2701は肥前産の磁

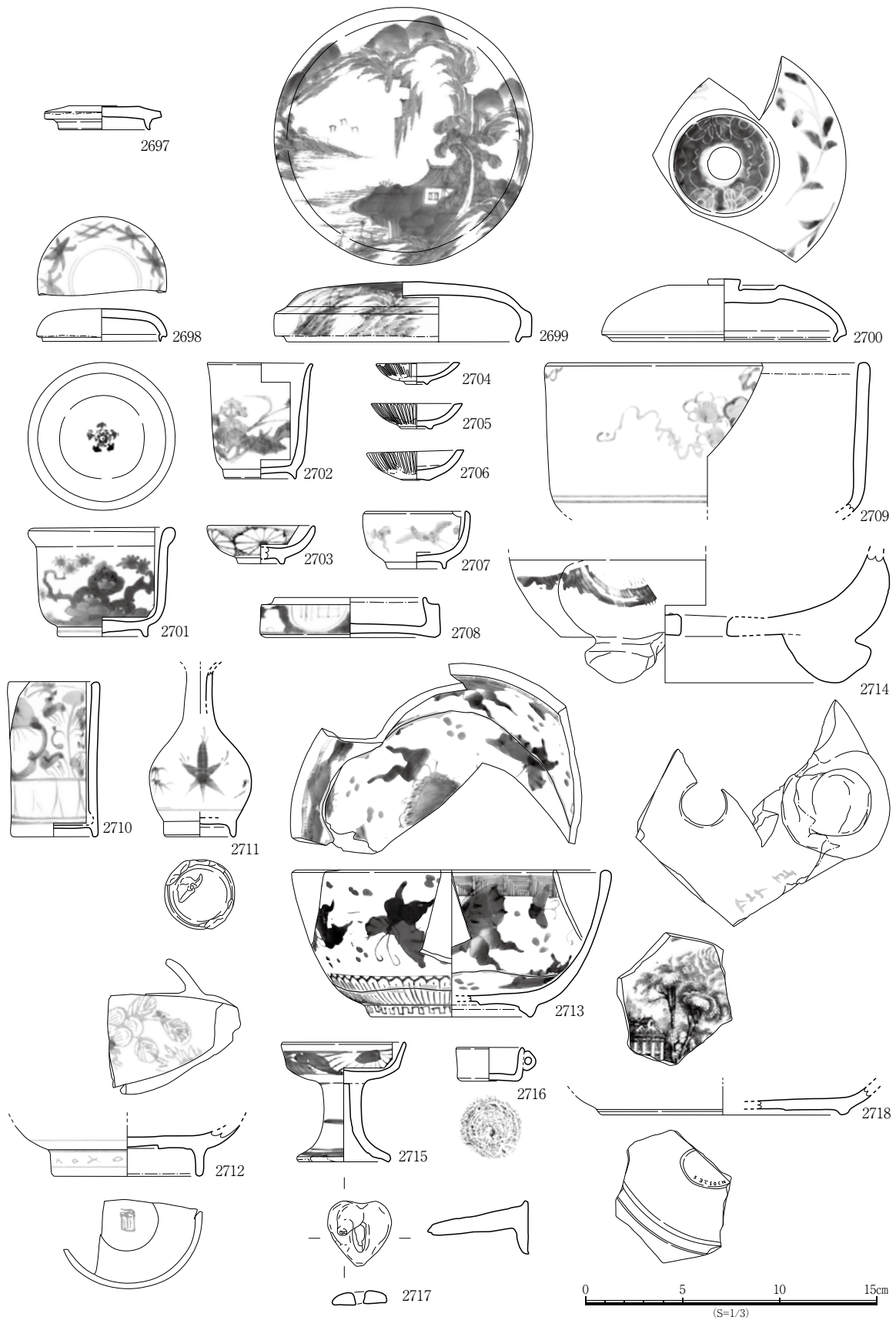


図272 SG-402出土遺物実測図6

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

器染付杯で、見込は五弁花文、外面は松樹文・草花文と圏線の染付がみられる。2702は磁器染付杯で、外面に花文の染付がみられる。2703は磁器染付猪口で、外面には氷裂地に菊花文の染付がみられる。2704～2706は肥前産の白磁紅皿で、内面から体部外面まで白磁釉を施す。外面には型押による陰刻の菊弁文がみられる。2707は肥前系の磁器染付蓋物で、全面に透明釉を施し口縁端部は釉ハギする。外面に鶴文と亀甲文の染付がみられる。2708は磁器染付蓋物で、内面から体部外面まで透明釉を施し、口縁端部は釉ハギする。外面には濃地に丸文で「福」の染付がみられる。底部外面は無釉である。2709も磁器染付蓋物で、全面に透明釉を施し口縁端部は釉ハギする。外面は梅文と圏線の染付がみられる。2710は肥前系の磁器染付灰吹とみられ、外面には透明釉を施し、体部には草花文と松葉文の染付がみられる。内面は回転ナデ調整で、無釉である。2711は磁器染付瓶で、外面には透明釉を施し、胴部には笹文と梅文・紅葉文・圏線の染付がみられる。底部には焼成後の穿孔がみ

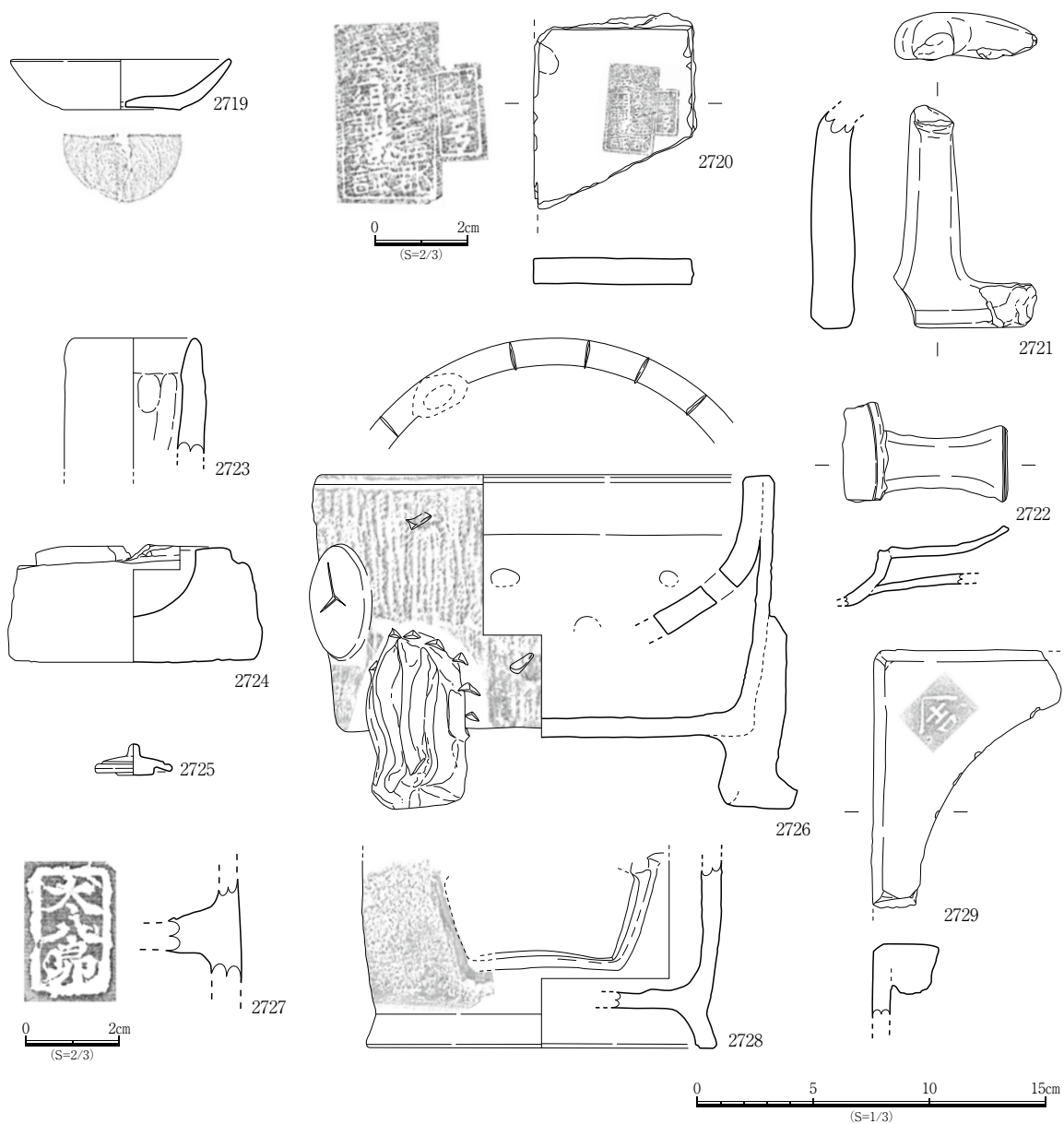


図273 SG-402出土遺物実測図7

られる。2712は能茶山窯の磁器染付鉢である。蛇ノ目凹形高台で、全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。見込は草花文、高台外面は○×文と圏線の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。2713は肥前産の磁器染付鉢である。蛇ノ目凹形高台で、全面に透明釉を施し、高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面は蝶文と雷文、外面は蝶文と蓮弁文・櫛歯文の染付、高台内には銘の一部が残る。褐色の焼継痕がみられる。2714は関西系とみられる磁器染付植木鉢で、底部には径2.3cmの円孔と獣足形の脚が付く。体部外面から脚内側まで透明釉を施し、体部には染付がみられる。内面と底部外面は無釉で、底部外面には墨書が残る。2715は肥前有田産の磁器色絵仏飯器で、内面から外面脚裾部まで透明釉を施し、外面には朱色の草花文と青・緑・茶色の花文と圏線の上絵付がみられる。2716は磁器餌猪口で、口縁部外面には輪状の把手が付く。内面から体部外面には灰釉を施し、底部外面は回転糸切り調整で無釉である。2717は磁器染付灯芯押えで、器台部はハート形で菊花状の陰刻と染付がみられ、楕円形の孔があく。上部は斜方向に立ち上がり先端が細くなる。底部外面を除き透明釉を施す。2718は西洋陶器皿で、全面に透明釉を施す。内面には銅板転写による紫色の西洋風景文、高台内には刻印がみられる。2719は土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。底部中央には径4mmの焼成前の穿孔がみられる。2720は土師器焜炉で引戸の後ろ側の部分である。前面には刻印がみられ、「才四十一号 □□縣青海郡 □□組製造証」の文字が残る。また、横方向の擦痕がみられる。2721は大型の土師器五徳で、白色系である。2722は土師器十能で、身と把手は別作りで、回転ナデ調整のち接合する。把手は中空で、下面には煤が付着する。2723は土師器焼塩壺である。内面は粗雑なナデ調整、口縁部は横ナデ調整、外面は横方向のナデ調整である。2724は土師器鑄型とみられ、胎土にはスサを多く含む。内面は半球形を呈し、丁寧なナデ調整を施し非常に平滑となり、キラ粉が付着する。外面から底部はナデ調整である。口縁部の1箇所に「V」字状の切り込みがみられる。2725は施釉土器蓋で、円形の摘が付く。ナデ調整で外面には黄色釉を施す。2726は瓦質土器火鉢で、円筒形を呈し、内部構造を持つ。内部構造はナデ調整で、上下二段に円孔が穿たれる。外部構造は底部内面が横方向のナデ調整、体部内面は粗い横方向のハケ調整、口縁端部には沈線状の文様と2箇所に楕円形の剥離痕が残る。体部外面は型押しとみられる網目状文様に浮文や刺突文などを施し、底部には獣足形とみられる脚を3箇所に貼付する。2727～2729は瓦質土器焜炉である。2727は円筒形を呈する。内面はナデ調整で、外面は磨き調整とみられ、方形枠に「太八昂」の刻印がみられる。2728は円筒形を呈し、前方に扇形の窓を持つ。内面は回転ナデ調整、胴部外面は型押しによる文様、脚部外面は横方向の磨き調整、脚部内面は横ナデ調整、底部外面はナデ調整である。2729は箱形を呈し、二重構造である。内面はナデ及びハケ調整、外面は磨き調整で、上面には刻印がみられる。2730～2732は軒平瓦である。2730は中心飾りが橋状文で、瓦当右側に「アキ」の刻印がみられる。2731は中心飾りが二巴文で、瓦当左側に「布源」の刻印がみられる。2732は中心飾りが三花文で、瓦当左側に「とく」とみられる刻印が残る。漆喰が付着する。2733は土製品鳩笛で、完形である。外面には線刻による羽の表現がみられる。2734～2744は泥面子である。いずれも型成形で、下面はナデ調整である。2734は花文、2735は鶴文、2736は蝙蝠文、2737は三ツ葉柏文、2738は「鱒」字文か、2739は「金」字文、2740は「自」字文、2741は「相原」字文、2742・2743は摩耗するため文様は不明、2744は大型で三巴文である。2745～2752は木製品である。2745は漆器椀で、内外面とも黒塗である。高台内には刻書がみられる。2746は木筒で、先端は細く加工する。両面に墨書がみられるが解読は不可であった。2747も木筒で、先端は薄くやや細く加工

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

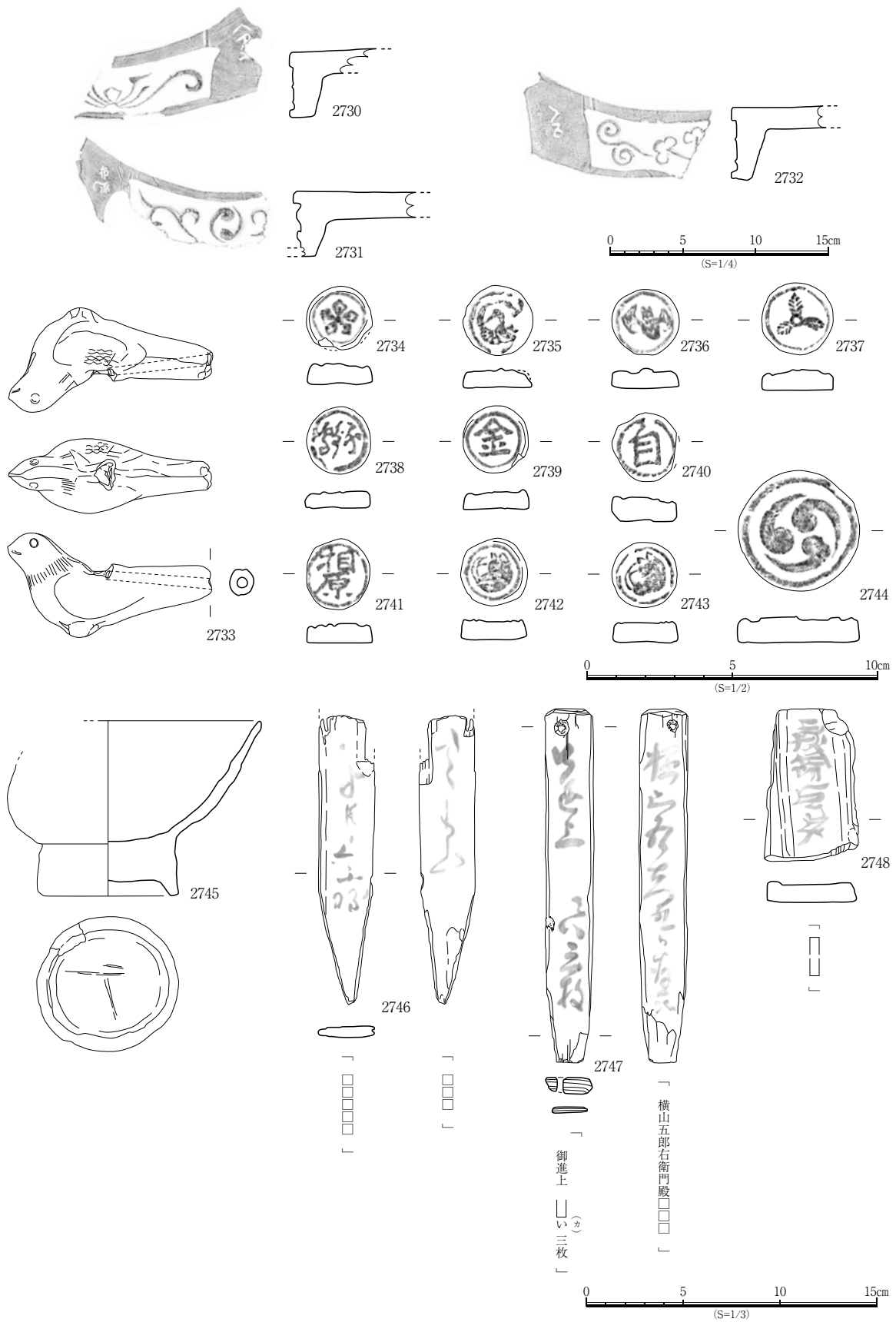


図274 SG-402出土遺物実測図8

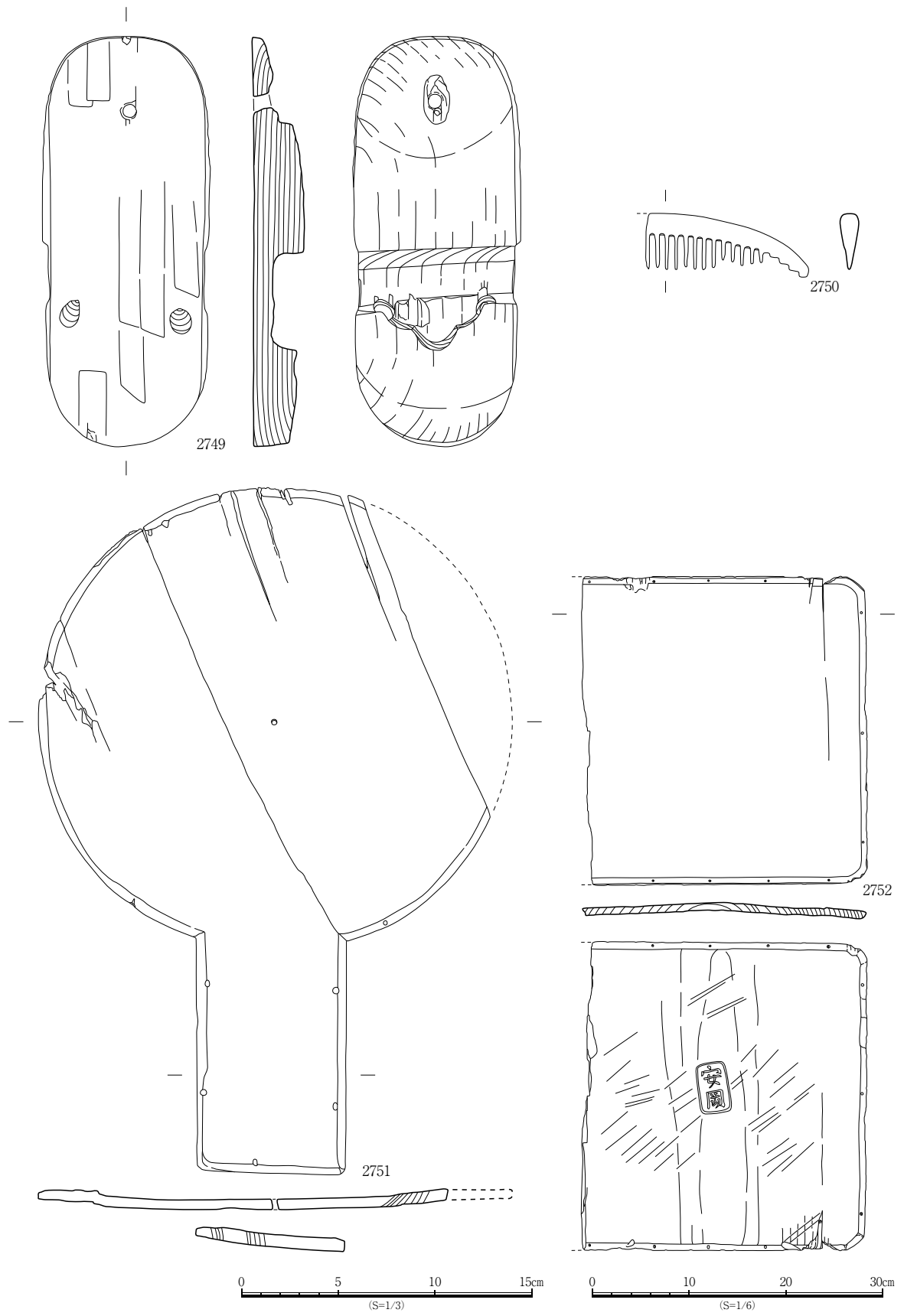


図275 SG-402出土遺物実測図9



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

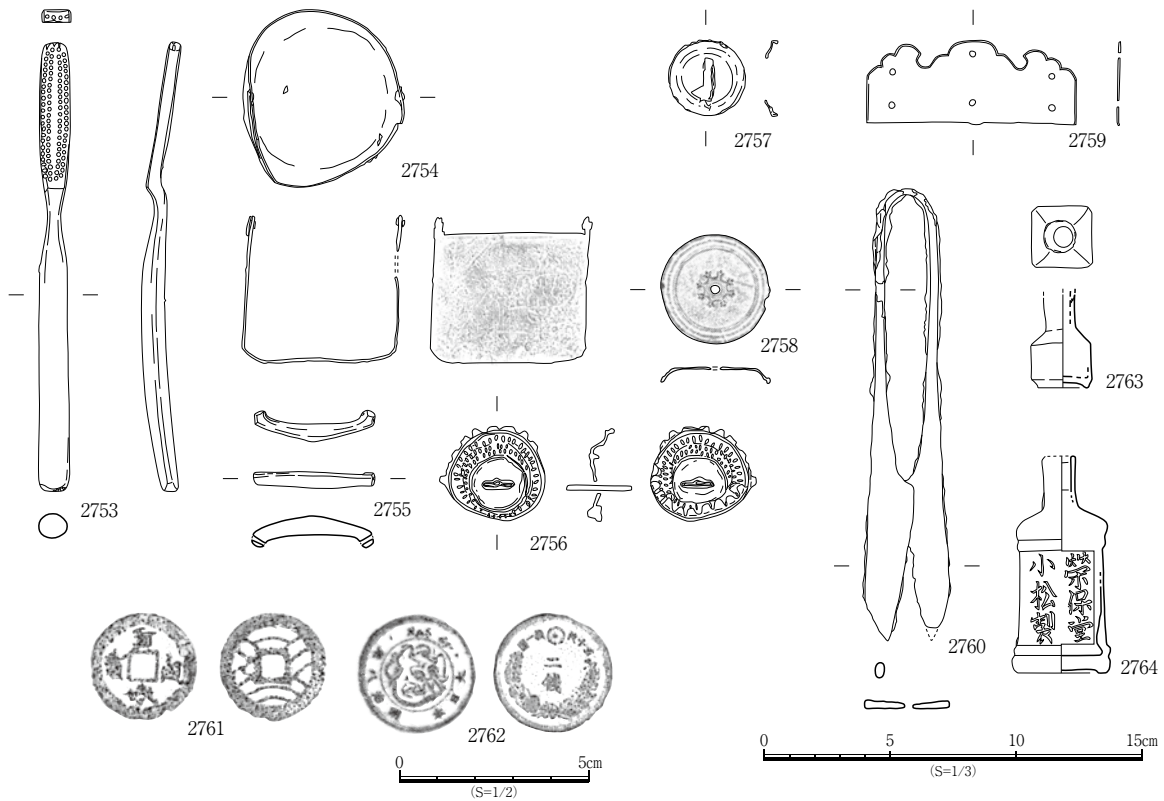


図276 SG-402出土遺物実測図10

し、上部には円孔を穿つ。両面に墨書がみられ、表面は「横山五郎右衛門殿」、裏面は「御進上」の墨書が残る。「横山五郎右衛門」の名は2091と2310にもみられる。2748も木簡で、方形を呈し上面の側面はやや高く加工する。上面には墨書がみられるが解読不可であった。2749は漆器下駄で、連歯下駄である。側面は黒塗である。楕円形を呈し、踵部分の側面には垂直方向の加工痕が残る。前歯は幅が広く前側は斜になり、後歯は踵部と繋がり前側は花形に削り抜く。2750は櫛で、半円形を呈し、断面は三角形である。歯は太く歯間は広い。2751は漆器箱物の底版で、鏡箱の底版とみられる。前方後円形を呈し、端部は斜に加工し側板の痕跡と9箇所にも木釘が残る。円形部の中央には径2mmの円孔が貫通する。外面には僅かに黒塗が残る。2752も漆器箱物の底版で、隅丸方形を呈し、内外面とも黒塗である。周囲には木釘が残る。裏面には「安岡」の焼印がみられる。2753は骨角製品櫛扱で、断面は先端が方形、柄は楕円形を呈する。植毛孔は4列で、22または23個あり貫通しない。2754は銅製の杯形容器で、口縁部の2箇所にも釘状金具で把手を留めている。杯部外面には打ち込みの鳥文と花文がみられる。2755は鉛製の把手とみられ、コの字状を呈する。両端に円孔が貫通し、側面の二方向に型を合わせた痕跡が残る。2756は銅製の座金とみられ、透かしが多数あり凸面は金鍍金を施す。把手は扁平である。2757も銅製座金とみられ、中央に方形の孔があく。2758は真鍮製座金とみられ、中央に径4mmの円孔があき、口縁端部の2箇所にも僅かに突起が付く。凸面には型による陽刻の花文などの文様がみられる。凹面中央の円孔の周囲には一辺7mmを測る方形の圧痕が残る。2759は銅製飾り金具で、上部は波形で6箇所にも釘孔があく。2760は鉄製鋏で、断面は柄部が楕円形、刃部は三角形である。2761・2762は銭貨である。2761は寛永通寶で、波銭である。2762は二銭で、明治8年鑄造である。2763はガラス製品瓶で、若干の気泡が入る。体部は箱形で、口縁部は筒状である。2764もガラス製

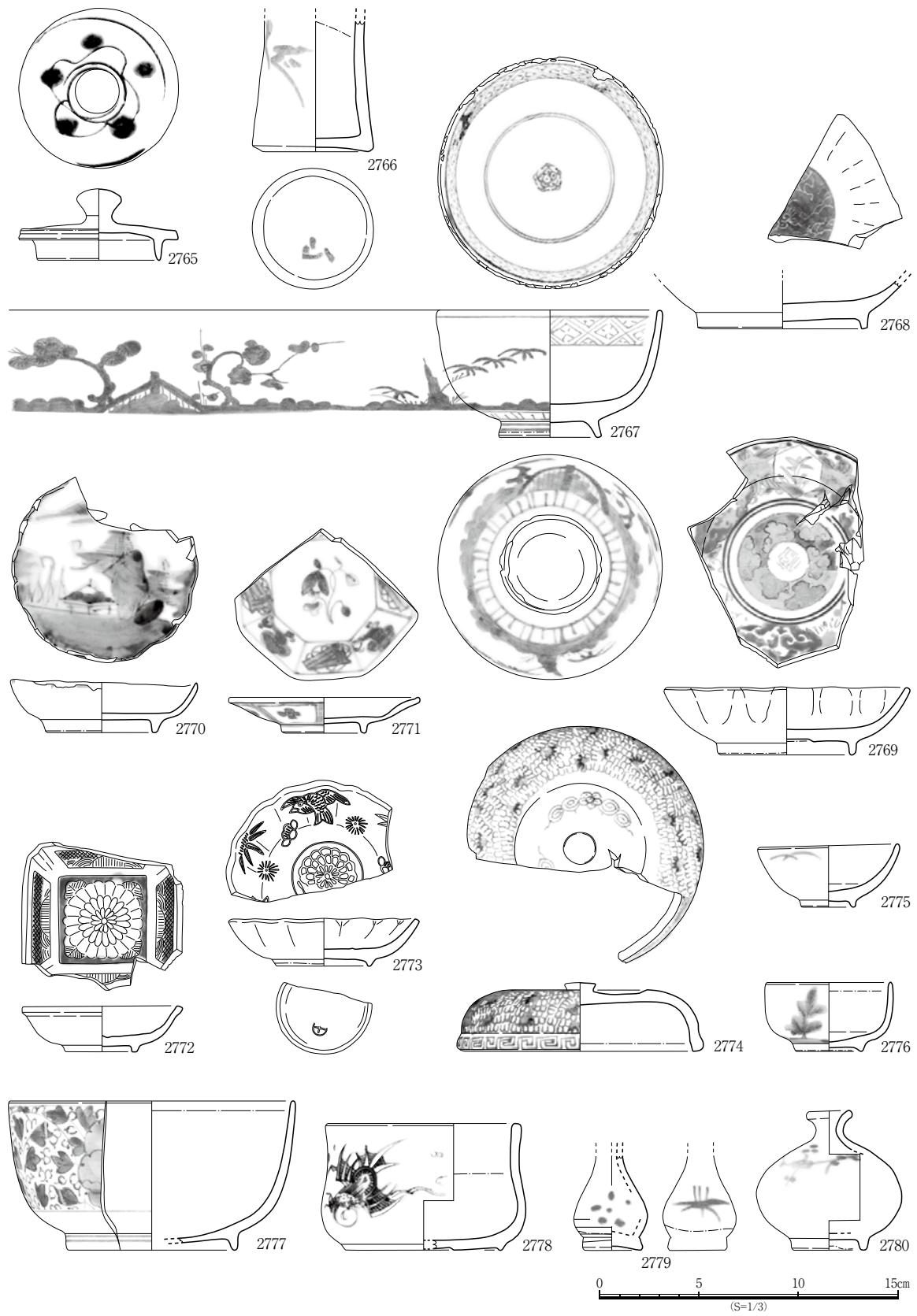


図277 SG-402出土遺物実測図11

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

品瓶で、胴部断面は楕円形、口縁部は円形である。胴部前面には「榮保堂小松製」の陽刻、両側面に型成形の痕跡が残る。口縁部内面にコルク、中には透明の液体が残存する。

2765～2789は下層から出土した遺物である。2765は陶器土瓶蓋で、外面には透明釉を施し、鉄錆による花文と濃緑釉の丸文がみられる。2766は陶器灰吹とみられ、口縁部内面から体部外面に灰釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。底部外面は削り出しで無釉であり、「山」の墨書がみられる。2767は肥前産の磁器染付望料碗で、見込に圏線と五弁花文、内面に四方禪文、外面には松竹梅文と蓮弁文・圏線の染付がみられる。2768は磁器染付菊皿で、見込には丸文で墨弾きの雲文がみられる。2769は肥前産の磁器色絵輪花皿である。蛇ノ目凹形高台で、見込と高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面は圏線の染付と朱・緑・黄・紫色の草花文と雲文の上絵付、外面は圏線と唐草文の染付がみられる。2770は肥前系の磁器染付稜花皿で、型打成形である。内面には海浜風景文の染付がみられる。2771は肥前系の磁器染付八角皿で、見込と外面は枠内に花文、内面は枠内に宝文の染付がみられる。2772は瀬戸・美濃産の磁器染付角皿で、木型打込成形である。内面は型による陽刻の菊花文で一部を呉須で彩色する。2773は磁器輪花皿である。型打成形で、見込には型による陽刻の菊花文、口縁部内面には陽刻の鳥文と松竹梅文がみられる。高台には陽刻で丸に十の刻印が残る。2774は磁器染付蓋物蓋で、扁平な摘が付く。全面に透明釉を施し、口縁部内面は釉ハギする。天井部外面には花文、口縁部外面には雷文帯の染付がみられる。2775は磁器染付猪口で、外面に笹文の

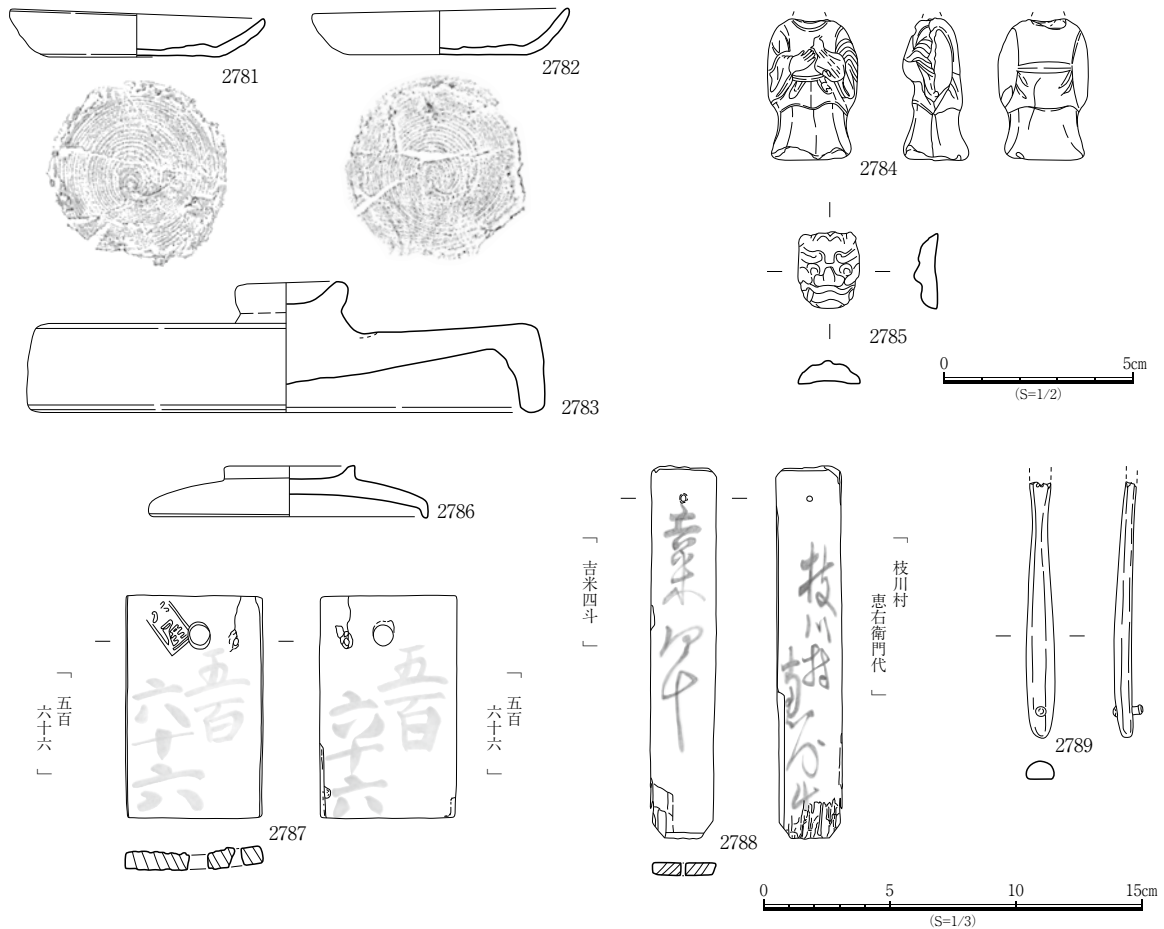
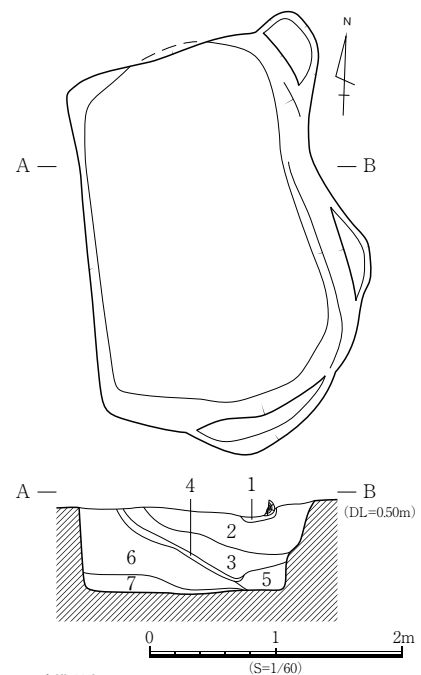


図278 SG-402出土遺物実測図12

染付がみられる。2776は肥前産の磁器染付合子で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と畳付は釉ハギする。外面には鶴文と松文の染付がみられる。2777は肥前有田産の磁器染付蓋物で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と畳付は釉ハギする。外面には花唐草文と圏線の染付がみられる。焼継痕が残る。2778は肥前産の磁器染付火入である。蛇ノ目凹形高台で、口縁部内面から外面に透明釉を施し高台内を蛇ノ目釉ハギする。外面には素描きの龍文の染付がみられ、2箇所焼継痕が残る。2779は瀬戸・美濃産とみられる磁器染付小瓶で、外面体部下半まで透明釉を施し、外面には笹文と梅文の染付がみられる。2780は肥前産の磁器染付油壺で、口縁部内面から外面に透明釉を施し畳付は釉ハギする。胴部には松文と梅文の染付がみられる。2781・2782は土師質土器皿である。回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2783は土師器蓋で、口縁部から内面は回転ナデ調整、天井部外面は無調整とみられ、摘を貼付しナデ調整を行う。2784は土製品人形で、鳥を持つ人物形である。型成形で、中実である。一部には緑釉が掛かる。2785は土製品芥子面で、鬼形である。上面は型成形、下面はナデ調整である。2786～2788は木製品である。2786は漆器蓋で、内外面とも黒塗である。2787は木筒で、短冊形を呈し、上部に径8mmの円孔を穿つ。両面に「五百六十六」の墨書がみられ、片面には方形枠に「升屋」とみられる焼印が押される。2788は木筒で、短冊形を呈し、四隅を切り、上部には径2mmの円孔を穿つ。表面には「枝川村 恵右衛門代」、裏面には「吉米四斗」の墨書がみられる。2789は骨角製品櫛払とみられる。

SX-408(遺構：図279 遺物：図280)

SG-402の北西で確認した遺構で、SD-407・408を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺3.16m、短辺1.86m、深さ77cmを測る。断面は箱形を呈し、埋土は7層に分かれ腐植を多く含んでいた。埋土上には木材が木杭で固定されていた。出土遺物には陶器244点(碗36, 皿3, 蓋3, 猪口1, 火入2, 瓶3, 鉢9, 水盤1, 播鉢10, 甕1, 仏花器1, 水注3, 灯明受皿9, 鍋3, 土瓶5, 火鉢1, 餌鉢2, 細片151), 磁器237点(碗37, 皿17, 蓋9, 小杯9, 猪口2, 蕎麦猪口2, 紅皿9, 香炉1, 灰吹1, 瓶20, 仏飯器3, 水注1, 人形1, ミニチュア1, 細片124), 土師質土器61点(杯1, 皿4, 小皿25, 白土器1, 細片30), 土師器11点(火鉢5, 焙烙2, 火消し壺1, 細片3), 瓦質土器9点(火鉢1, 細片8), 丸瓦4点, 土製品人形1点, 石製品5点(砥石3, 石臼2), 木製品6点(漆器蓋1, 曲物蓋1, その他4), 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2790～2802である。2790は陶胎染付小碗で、外面に笹文の染付がみられる。2791は京都・信楽系の陶器色絵半球形小碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には緑色の笹文の上絵付がみられる。2792は陶器丸碗で、内面から高台付近まで透明釉を施し、外面には鉄錆による梅文、見込には目痕がみられる。2793は陶器火入で、体部は多角形、高台は円形を呈する。回転ナデ調整で、口縁部内面から体部外面まで鉄釉を施し、外面の底部付近は無釉で、削り調整により面取りをする。2794は陶器水注で、把手と注口を貼付する。



遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土質シルトで、細粒砂と1cm大の礫を少し含む
2. 褐灰色 (10YR4/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物・木片を含む
3. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質中粒砂で、1～2cm大の礫と木片・腐植を多く含む
4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 中粒砂質シルト
5. 褐灰色 (10YR5/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含む
6. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質粗粒砂で、1cm大の礫が非常に多く、炭化物・木片・腐植を含む
7. 黄灰色 (2.5Y5/1) 中粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物・腐植を少し含む

図279 SX-408

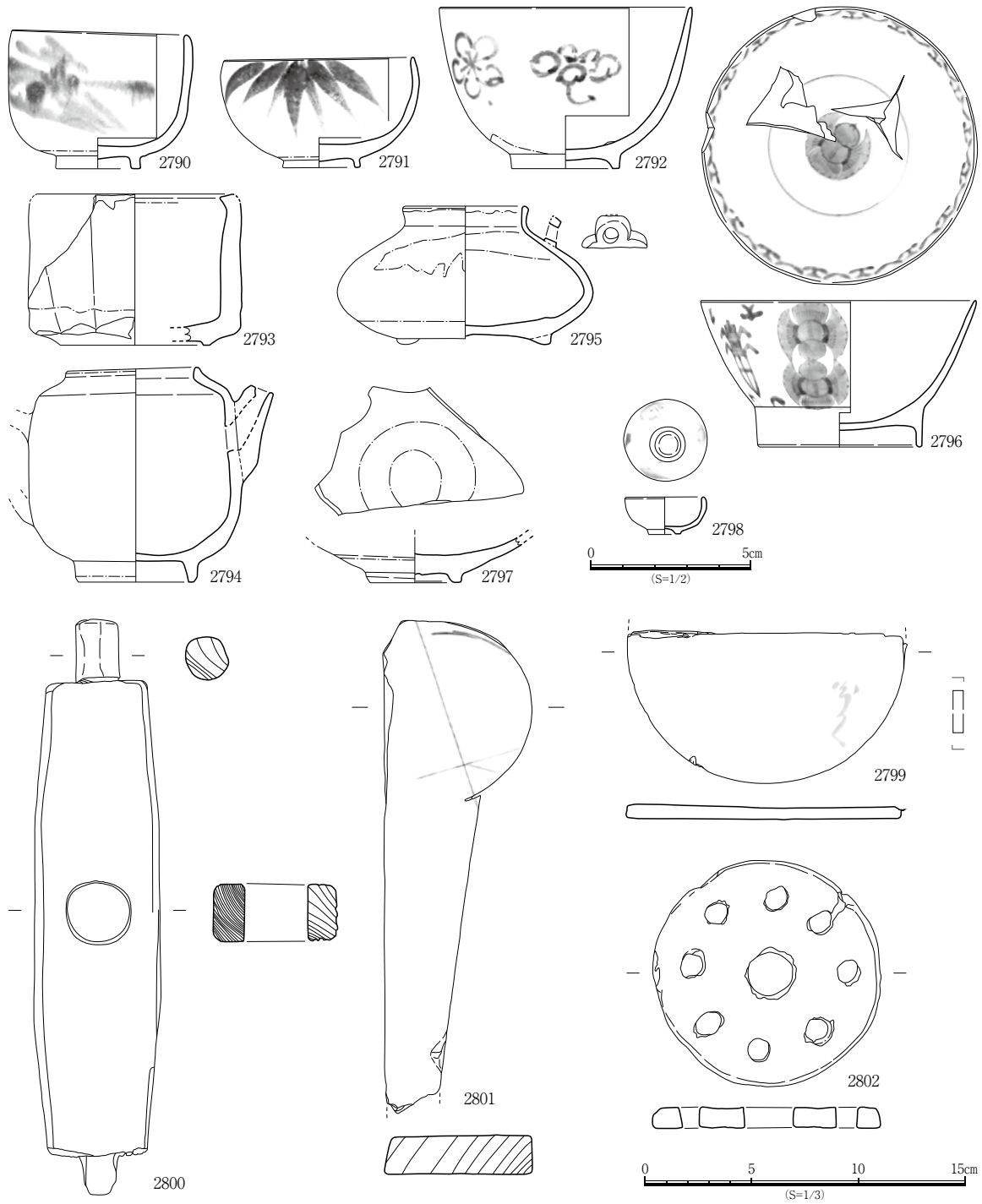


図280 SX-408出土遺物実測図

内面は回転ナデ調整で外面には鉄釉を施し、畳付は釉ハギする。内面の上半には赤色の付着物がみられる。2795は陶器土瓶で、肩部に山形の釣手、底部に円形の脚を貼付する。内面から体部外面まで鉄釉を施した後、肩部外面の一部には灰釉を掛ける。2796は肥前系の磁器染付広東碗で、見込には鳥文と圏線、内面は不明文様、外面に鳥文と宝文の染付がみられる。2797は肥前産の白磁皿で、内面から体部外面まで白磁釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。2798は磁器色絵ミニチュアで、鉢形を呈する。外面には朱色で鞠文とみられる上絵付が残る。2799は木製品桶蓋で、片面に僅かに墨



書が残るが解読は不可であった。2800は木製品釣瓶で、体部は方形を呈し中央に径3cmの円孔を穿つ。端部は断面円形で、下端は著しく摩耗する。2801は木製品で板状を呈する。半円形の部分に十字の墨書が残る。2802も木製品で板状を呈する。円形で、中央に径2cmの孔、その周囲に径8mmの孔が8箇所穿たれる。

SX-409(遺構：図281 遺物：図282)

SG-402の北で確認した遺構で、SG-402に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長9.47m、検出幅3.87m、深さ52cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質細粒砂で、礫を多く含んでいた。肩から34cm内側には弧状に木杭が打たれ、東端には一部石列が残存しており、池跡であった可能性がある。石列は25cm大の石灰岩で、木杭は約10cm間隔で打たれ、木杭の抜き取り痕跡のみ残存する箇所もあった。出土遺物には陶器462点(碗17, 皿26, 蓋5, 小杯1, 火入3, 鉢17, 播鉢20, 植木鉢1, 片口鉢1, 壺2, 甕6, 灯明皿6, 灯明

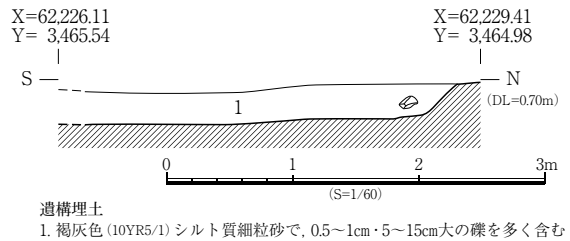


図281 SX-409

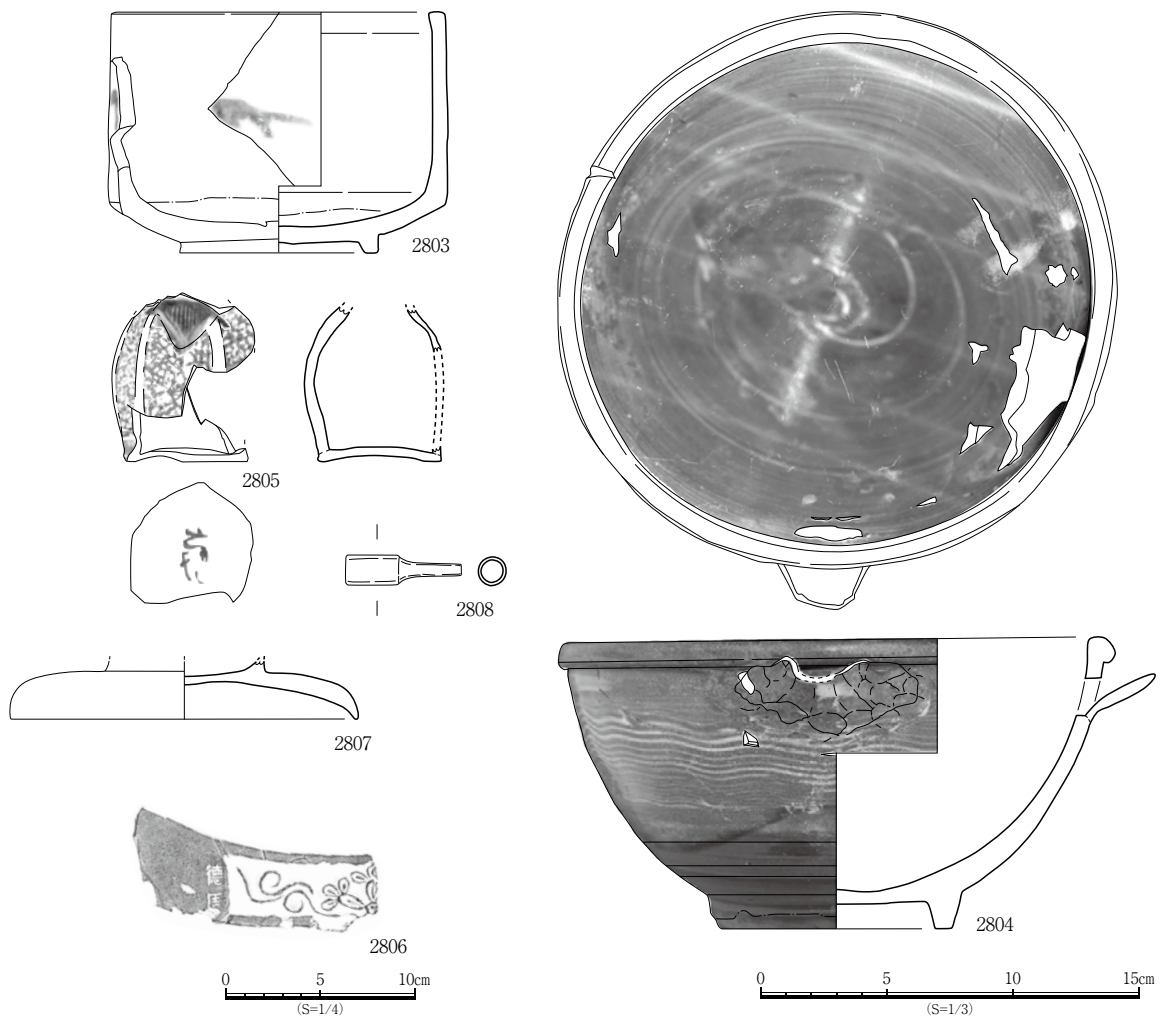


図282 SX-409出土遺物実測図



3. 遺構と遺物 (3) B-1区

受皿6, 鍋17, 鍋蓋2, 土瓶蓋2, 急須1, 水滴1, 餌鉢1, 茶入1, 細片326), 磁器280点(碗39, 皿16, 蓋11, 小杯1, 猪口4, 蕎麦猪口1, 紅皿11, 合子1, 合子蓋1, 段重2, 火入2, 瓶12, 鉢4, 壺2, 仏飯器1, 水滴1, 人形1, 細片170), 土師質土器33点(皿2, 小皿7, 白土器2, 細片22), 土師器60点(火鉢6, 七輪3, 釜1, 焙烙4, 火入1, 火消し壺1, 細片44), 施釉土器片1点, 瓦25点(軒丸瓦1, 軒平瓦6, 丸瓦4, 平瓦13, 棧瓦1), 土製品人形1点, 木製品漆器蓋1点, 金属製品8点(古銭1, 煙管1, 釘1, その他5)がみられた。図示した遺物は2803~2808である。2803は陶胎染付火入で, 体部内面から体部外面まで透明釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。外面には笹文の染付がみられ, 見込は無釉で, 輪状の重ね焼痕が残る。2804は肥前武雄系の陶器片口鉢で, 口縁部に片口を貼付する。内面から体部外面は白化粧土による刷毛目文のち透明釉, 外面体部下半には鉄釉を施す。2805は肥前有田産の磁器水滴または置物で, 多角形を呈し茄子形とみられる。型打成形で, 外面は型押による文様と上部には呉須による彩色がみられる。底部外面は無釉で布目痕が残り, 墨書がみられる。内面の体部はナデ調整で底部には布目痕が残る。2806は軒棧瓦で, 中心飾りは三花文, 瓦当左側に「徳周」の刻印がみられる。2807は木製品漆器蓋で, 内外面とも黒塗である。2808は銅製煙管吸口で, 一部に金鍍金が残る。

SX-410(遺物: 図283)

B-1区北東隅で確認した遺構で, 攪乱とSD-412に大半を切られる。平面形態は不整形を呈し, 検出長2.64m, 検出幅1.30m, 深さ9cmを測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で, 粗粒砂と多量の0.5~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器小壺1点, 磁器片1点, 西洋陶器皿1点, 土師器七輪1点, 土師質土器片2点がみられた。図示した遺物は2809・2810である。2809は陶器小壺で, 肩部に輪状の把手を貼付する。回転ナデ調整で, 内面には一部に鉄釉が掛かる。口縁部内面から体部外面には灰釉を施したのち一部に緑釉を掛け, 口縁端部は釉ハギする。2810はオランダレゴー社の西洋陶器稜花小皿である。内面にはコバルトの銅板転写による文様がみられ, 口縁部に星文と草文, 見込は風景文である。高台内にはフットボール形の枠内に「RETRS□S

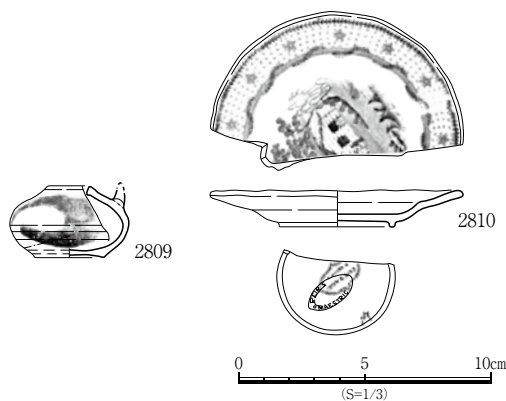
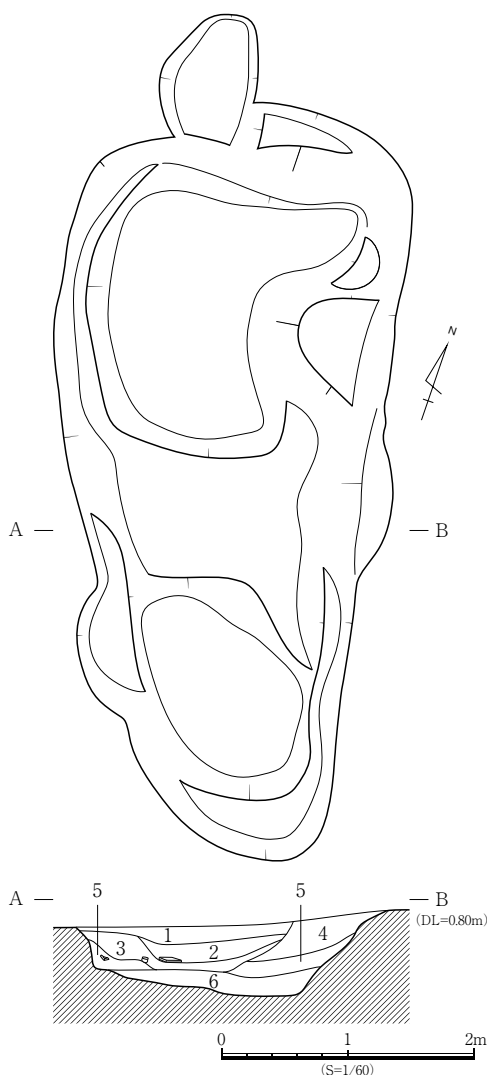


図283 SX-410出土遺物実測図



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトで, 多量の細礫と炭化物を含む
  2. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトで, 細礫と炭化物を含む
  3. 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトで, 植物片と木製品を多く含む
  4. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトで, 細礫を多く含む
  5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルトで, 1cm大の細礫層を挟む
  6. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトで, にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂質シルトブロックと中粒砂が混じる

図284 SX-411

RET DU□ MAESTRIC □□□」の刻印がみられる。刻印の上にはコバルトによる銘がみられ、草輪の中に「P.REGOU」などの文字が残る。

SX-411(遺構：図284 遺物：図285)

B-1区北西部で確認した遺構で，SD-415とP-415を切る。平面形態は不整楕円形を呈し，長径2.71m，短径2.06m，深さ80cmを測る。埋土は6層に分かれる。出土遺物には陶器285点(碗32，皿12，蓋6，



図285 SX-411出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

蓋物1, 瓶3, 鉢9, 播鉢11, 植木鉢1, 壺1, 甕6, 水注2, 灯明受皿2, 台付灯明受皿1, 鍋1, 土瓶9, 餌鉢1, 銚子1, 人形1, ミニチュア1, 細片184), 磁器270点(碗26, 皿19, 蓋13, 猪口7, 蕎麦猪口2, 紅皿10, 段重1, 香炉2, 瓶31, 鉢2, 水滴1, 細片156), 土師質土器53点(杯2, 皿5, 小皿19, 白土器2, 細片25), 土師器23点(火鉢5, 焙烙4, 火入2, 細片12), 瓦質土器火鉢2点, 瓦6点(軒丸瓦1, 軒平瓦1, 平瓦4), 土製品鈴1点, 木製品8点(漆器碗2, 漆器片4, 曲物蓋2), 石製品2点(砥石1, 硯1), 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2811～2825である。2811・2812は尾戸窯の丸碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には鉄錆による文様, 見込には目痕がみられる。2813は瀬戸・美濃系とみられる陶器碗蓋で, 望料形である。胎土は粗く, 全面に透明釉を施し, 外面には鉄錆による草花文がみられる。口縁部には煤が付着する。2814は陶器小壺である。回転ナデ調整で, 口縁部内面から体部外面には鉄釉を施す。2815は陶器水注で, 把手と注口を貼付する。回転ナデ調整で, 外面には鉄釉を施し, 高台は釉ハギする。内面は注口より下部には鉄釉が掛かる。2816は肥前系の磁器染付丸碗で, 見込は雀文, 外面には稲束文と雀文の染付がみられる。2817は肥前産の青磁染付朝顔形碗で, 内面と高台内は透明釉, 外面には青磁釉を施す。内面には花卉文の染付, 高台内には二重方形枠の銘がみられる。2818は肥前産とみられる磁器染付碗蓋で, 望料形である。天井部内面には草花文と圏線, 口縁部内面は四方襷文, 外面には花文の染付がみられる。2819は磁器染付蓋物蓋で, 天井部には紐状の摘を貼付する。全面に透明釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。外面には草花文と蝶文の染付がみられる。2820は肥前産の磁器染付小瓶で, 胴部に梅文と笹文の染付を描く。2821は肥前産とみられる磁器染付小瓶で, 胴部に蛸唐草文と松葉文の染付を描く。2822は中国漳州窯系の青花大皿で, 見込には草花文と圏線, 外面には圏線の染付がみられる。2823は尾戸窯の白土器皿で, 全面にナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の「寿」字文がみられる。2824は京都産とみられる土師器火鉢である。練込手で, 回転ナデ調整のち外面には丁寧な磨き調整を施す。底部外面には方形枠に「深草」の刻印がみられる。2825は関西系の土師器焙烙で, 底部は外型成形とみられる。内面は回転ナデ調整, 口縁部は横ナデ調整, 底部外面は無調整である。

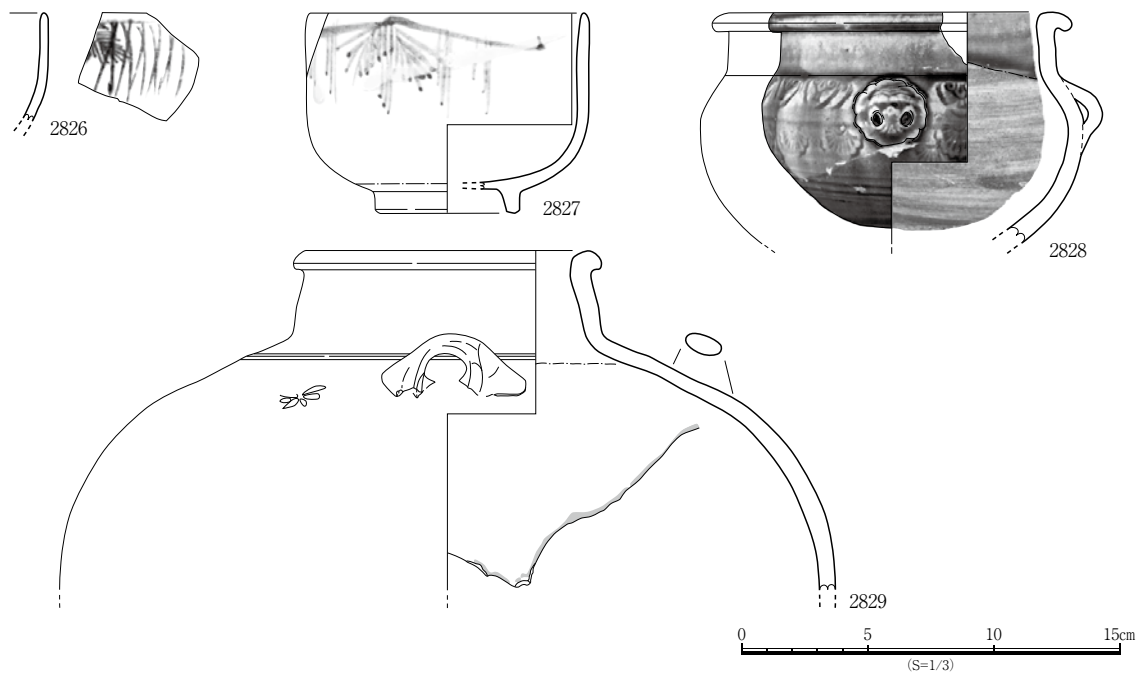


図286 SX-412出土遺物実測図

## SX-412(遺物:図286)

SX-411の南西で確認した遺構である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺3.67m、短辺1.17m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、多量の1cm大の円礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器92点(碗11, 皿3, 蓋2, 火入1, 播鉢7, 甕1, 灯明受皿1, 鍋2, 土瓶3, 火鉢1, 細片60), 磁器50点(碗11, 皿3, 蓋1, 紅皿2, 瓶6, 鉢1, 細片26), 土師質土器9点(小皿5, サナ1, 細片3), 土師器12点(釜1, 焙烙2, 鉢1, 細片8), 瓦質土器片1点, 瓦6点(丸瓦1, 平瓦3, 棧瓦1, 細片1), 土製品1点がみられた。図示した遺物は2826～2829である。2826は陶胎染付碗で、全面に透明釉を施し、外面には注連縄文の染付がみられる。2827は尾戸窯の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には注連縄文の染付がみられる。2828は瀬戸・美濃系の陶器火鉢で、外面には獣面の把手を貼付する。体部内面は鉄釉を刷毛塗り、口縁部内面から外面には緑釉を施し、外面には印刻による菊花文と雲文がみられる。2829は中国産の陶器褐釉耳壺で、口縁部内面から外面に褐釉を施す。肩部外面に低い突帯が巡り、2箇所にはスタンプによる蓮華王印が残る。漆継痕がみられる。図示した遺物の他に磁器広東碗などが出土している。

## SX-413

SX-412の南で確認した遺構で、SD-421に切られる。平面形態は不整形を呈し、長辺4.90m、短辺2.70m、深さ27cmを測る。埋土は褐灰色極細粒砂質シルトで、0.5～3cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器14点(碗3, 鉢1, 瓶1, 甕1, 細片8), 磁器4点(皿1, 細片3), 土師質土器5点(皿3, 細片2), 瓦質土器片1点がみられた。

## SX-414(遺物:図287～289)

SX-413の南で確認した遺構で、SK-455とSX-415を切る。村田家屋敷地の南西隅に位置する廃棄土坑とみられる。平面形態は不整形を呈し、長辺6.70m、短辺4.53m、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色粘土で、植物片と木製品を非常に多く含んでいた。木製品は木屑や板材などが多量に出土している。出土遺物には陶器243点(碗44, 皿19, 蓋13, 猪口5, 火入7, 鉢46, 播鉢9, 植木鉢1, 匣鉢1, 壺1, 甕1, 油德利1, 灯明受皿2, 台付灯明受皿1, 鍋8, 土瓶3, 急須1, 火鉢3, 焜炉2, 乗燭1, 胡麻煎1, 餌鉢1, 人形1, ハマ1, 細片70), 磁器287点(碗42, 皿38, 蓋23, 猪口13, 蕎麦猪口8, 紅皿8, 合子3, 段重2, 蓋物1, 香炉1, 瓶11, 鉢2, ミニチュア1, 細片134), 土師質土器40点(杯2, 皿1, 小皿13, 白土器2, 細片22), 土師器51点(火鉢8, 焜炉1, 十能2, 焙烙1, 火消し壺4, 蓋2, サナ1, 細片32), 瓦質土器12点(火鉢7, 焙烙2, 細片3), 瓦12点(軒丸瓦1, 軒平瓦1, 丸瓦2, 平瓦5, 棧瓦1, 細片2), 土製品2点(人形1, 基石1), 木製品34点(漆器椀2, 漆器蓋1, その他漆器製品3, 箸1, 下駄1, 曲物蓋15, 桶1, 鏡箱1, 紐2, その他7), 石製品2点(砥石1, 硯1), 貝杓子1点, 金属製品5点(古銭2, 釘1, 柄1, その他1)がみられた。図示した遺物は2830～2846である。2830は信楽系の陶器小碗で、内面から高台付近まで透明釉を施し、外面には鉄錆による小杉文がみられる。2831は瀬戸・美濃産の陶器中皿で、内面から体部外面まで透明釉を施す。見込には呉須と鉄錆による文様と5箇所に目痕、釘彫による屋号がみられる。畳付と高台内には屋号や「魚」などの墨書がみられる。2832は陶器乗燭である。雀形を呈し、蓋が付く構造で、天井部は鍵穴形に開口する。柄部は直立し、型成形で前面には型押による花文がみられ、背面はナデ調整、上部には円孔があく。身部は上部と下部のそれぞれを型成形して接合する。外面は型押で上面には花文がみられ、内面はナデ調整である。前方に注口があり、内側には径3mmの円孔があく。柄の背面を除き透明釉を施す。2833は陶器乗燭で、把手付き瓶形である。胴部には把手を貼付し、口縁部は片口状をなし、1箇所に切り込みをいれ、杯部内面は回転ナデで一部は無釉である。受部上には2箇所に円孔をあけ、胴部は中空である。外面



図287 SX-414出土遺物実測図1

には鉄釉を施し、畳付は釉ハギする。2834は陶器色絵人形で、巻物をみる二人の人物形である。型成形で、中空であり、内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は透明釉で、朱・緑色の上絵付で彩色する。2835は肥前系の磁器染付端反碗で、外面と見込は風景文の染付、内面は墨弾きの雷文がみられる。2836は肥前系の磁器染付中皿で、内外面と見込に宝文と圏線の染付、高台内の1箇所に目痕がみられる。2837は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、天井部内面に野菜文、口縁部内面に雲文、外面に雲龍文の染付、摘内に「成化年製」の銘がみられる。焼継痕が残る。2838は肥前産の磁器染付鉢である。蛇ノ目凹形高台を呈し、全面に透明釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギし砂が付着する。見込に海浜風景文、口縁部内面に花文と雪輪文の染付、高台内に二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。焼継痕が残る。2839は肥前系の磁器染付油壺で、胴部外面に松竹梅文の染付がみられる。2840は肥前産の白磁ミニチュアで、菊花形の鉢形を呈する。全面に白磁釉を施し、高台は釉ハギする。底部外



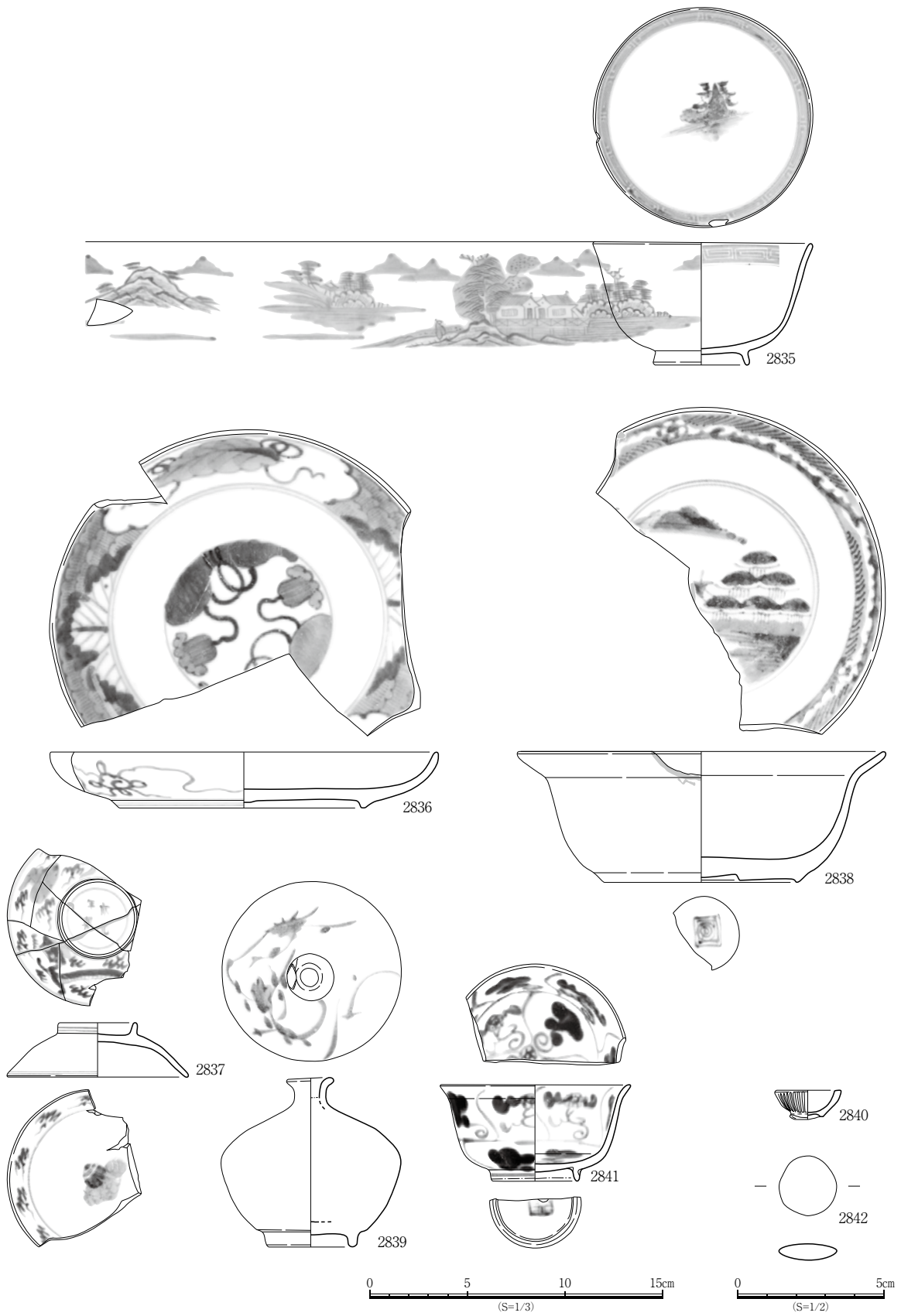


図288 SX-414出土遺物実測図2



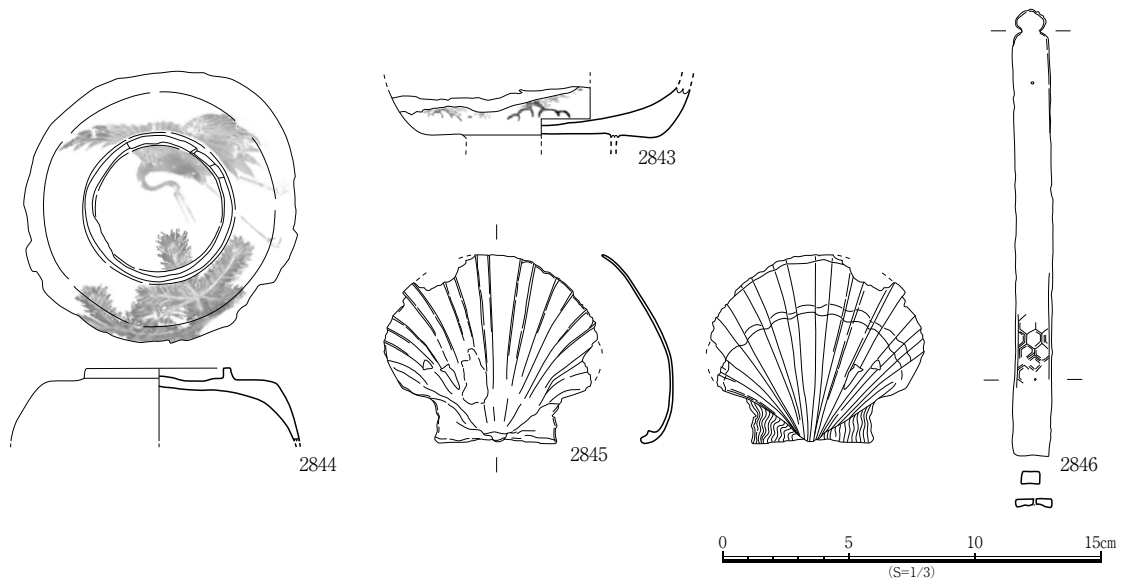


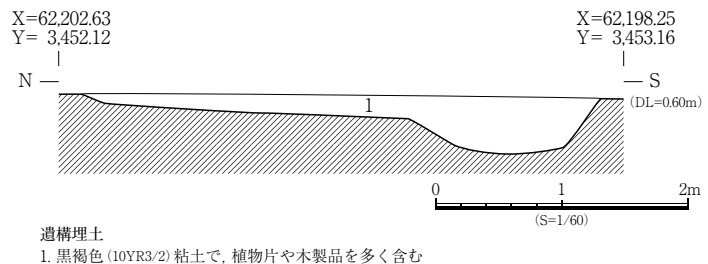
図289 SX-414出土遺物実測図3

面には砂と粘土が付着する。2841は磁器碗で、透明釉を施し、内外面と見込には霊芝文の染付、高台内には方形枠に銘がみられる。2842は基石形土製品で、全面にナデ調整を施す。2843は木製品漆器碗で、外面は黒塗で金で松文とみられる文様を描き、内面は赤塗である。2844は木製品漆器蓋で、外面は黒塗で金の鶴松文、内面は赤塗である。2845は貝製品杓子である。イタヤガイの右殻を用い、2孔をあける。2846は銅製飾り金具で、上端は宝珠形を呈する。表面には陰刻の亀甲文がみられ、裏面は両端が肥厚する。上下2箇所径1mmの円孔がみられる。

SX-415(遺構：図290 遺物：図291～293)

SX-414の東で確認した遺構で、SK-456、SX-414に切られる。SX-414と同様に廃棄土坑とみられ、一連の遺構の可能性がある。平面形態は長方形を呈し、長辺8.07m、短辺4.10m、深さ46cmを測る。埋土は黒褐色粘土で、植物片と木製品を非常に多く含んでいた。木製品は木堀や板材などが多量に出土している。出土遺物には陶器197点(碗23、皿6、蓋7、猪口3、火入3、瓶1、鉢13、播鉢11、植木鉢1、匣鉢1、甕6、水注1、灯明皿1、灯明受皿3、台付灯明受皿1、鍋5、土瓶4、火鉢3、焜炉1、七輪1、柄杓1、餌鉢1、細片100)、磁器115点(碗37、皿17、蓋2、猪口5、蕎麦猪口4、紅皿5、火入1、瓶9、水滴3、細片32)、土師質土器13点(杯1、皿6、白土器1、細片5)、土師器28点(火鉢6、焙烙3、細片19)、須恵器片1点、瓦質土器2点(火鉢1、十能1)、瓦8点(軒丸瓦2、軒平瓦2、丸瓦1、平瓦2、棧瓦1)、土製品3点(人形2、基石1)、木製品24点(漆器蓋4、その他漆器製品5、木筒2、下駄1、曲物蓋9、紐1、その他2)、石製品4点(砥石3、硯1)、貝杓子1点、金属製品5点(玉杓子2、釘1、その他2)がみられた。図示

した遺物は2847～2865である。2847は京都系の陶器丸碗で、内面から体部外面まで灰釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。2848は尾戸窯の陶器輪花鉢で、内面から高台付近まで灰釉を施す。見込には目痕が2箇所に残る。2849は陶器播鉢で、



遺構埋土  
1. 黒褐色(10YR3/2)粘土で、植物片や木製品を多く含む

図290 SX-415

回転ナデ調整を施し外面は回転削り調整を加える。口縁部外面には沈線が2条みられ、2箇所を指圧して片口風にする。見込と内面には放射状の播目がみられる。底部は無調整で、板状圧痕が残る。2850は肥前武雄産の陶器二彩手甕である。内面の底部から体部下半は鉄釉、体部上半は灰釉、口縁部内面から体部外面は白化粧土を刷毛塗り後透明釉を施し、その後錆絵、底部外面付近には鉄釉を施す。2851は陶器甕で、内面から口縁端部は灰釉、外面には鉄釉のち黒褐色の釉を流し掛けする。

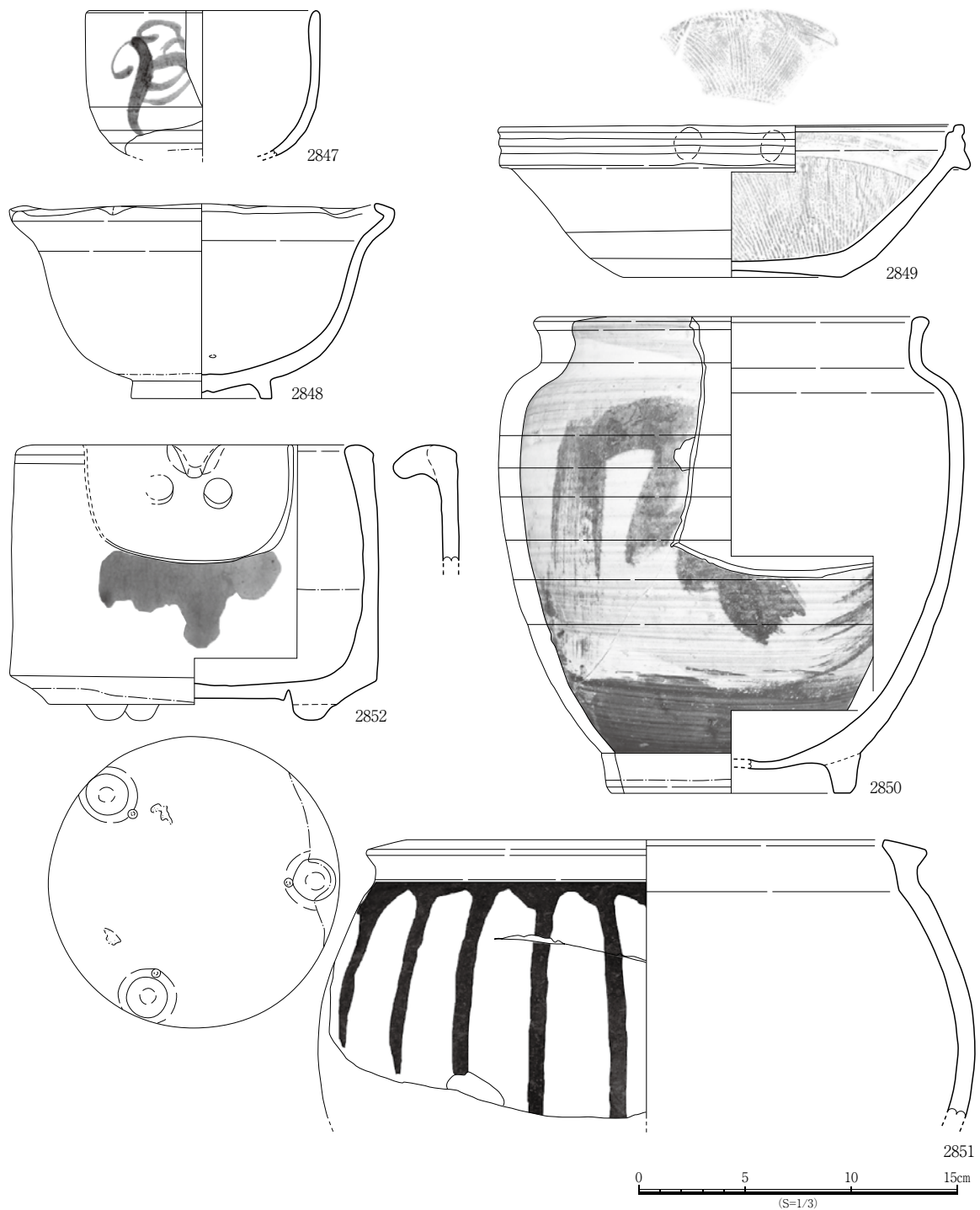


図291 SX-415出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

2852は陶器焜炉で、円筒形を呈し、前方には口縁部から切り込みの窓を持つ。口縁部内面には2箇所  
に角状の突起が残り、窓の対角位置には円孔がみられる。底部外面には半球形脚を3箇所に貼付し、  
脚内側には円孔がみられる。回転ナデ調整で、体部内面から外面底部付近まで灰釉を施し、緑釉を  
流し掛けする。底部外面は回転削り調整で無釉である。2853は肥前系の磁器染付小広東碗で、見込  
は小判文か、内面は圏線、外面には宝文と魚文の染付がみられる。2箇所に焼継痕が残る。2854は肥

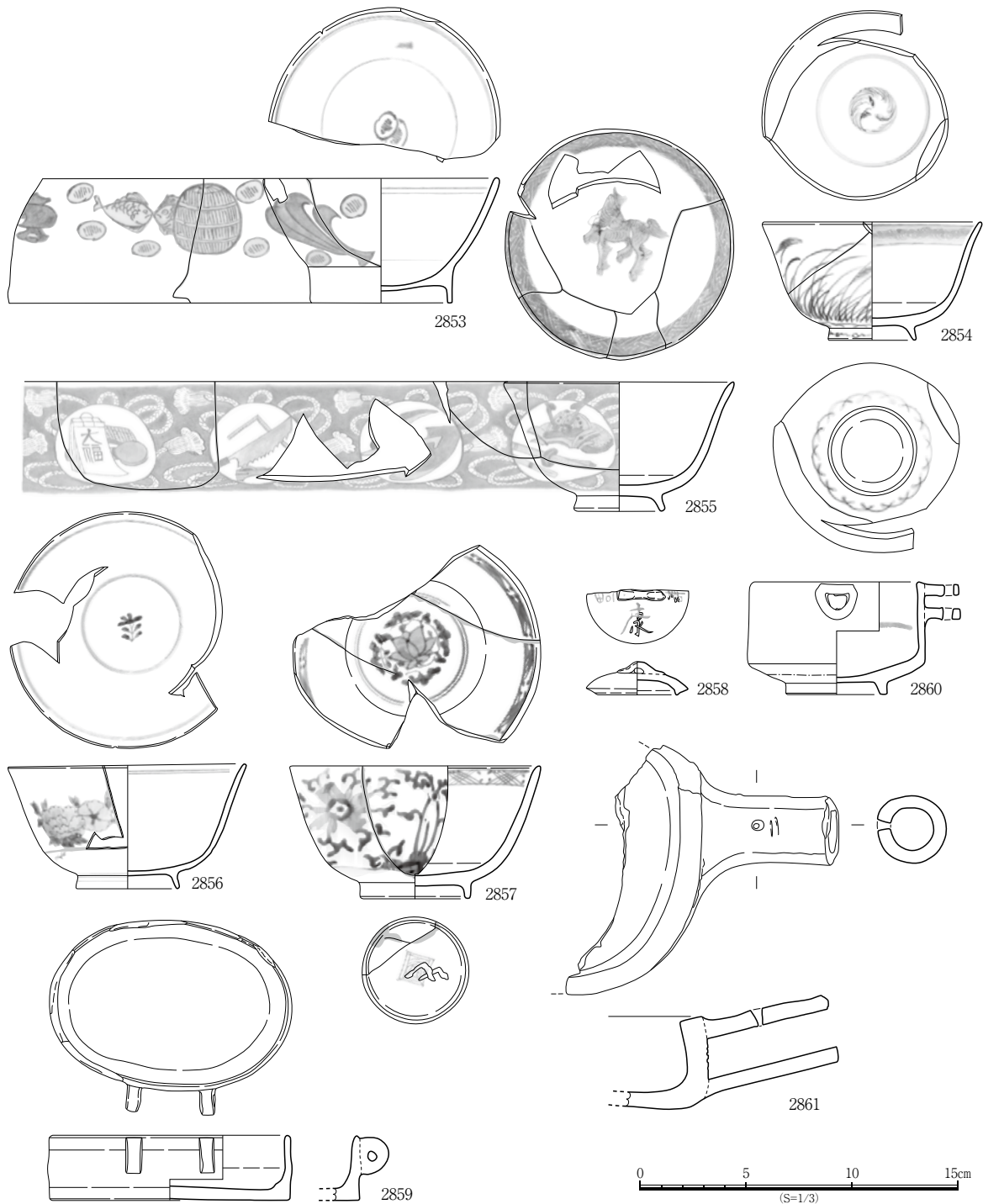


図292 SX-415出土遺物実測図2

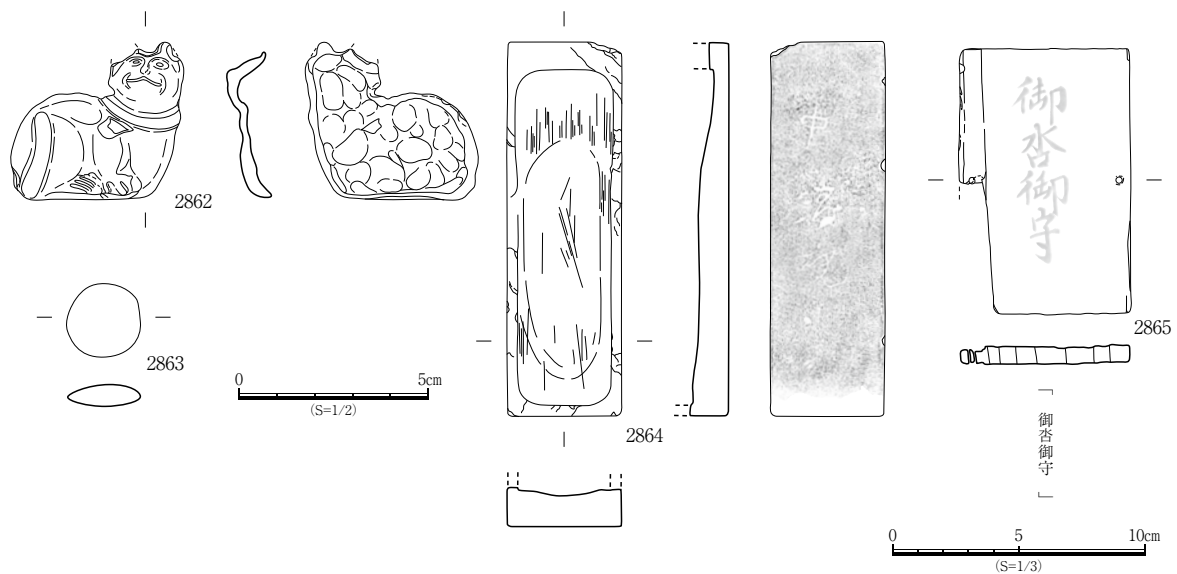
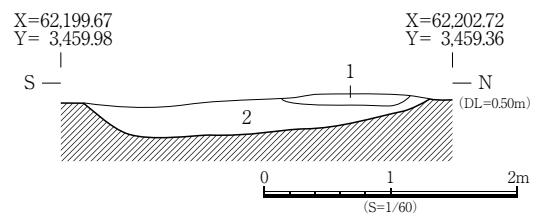


図293 SX-415出土遺物実測図3

前産の磁器染付端反小碗で、見込は薄文と圏線、内面は墨弾きの雲文、外面は薄文の染付がみられる。焼継痕が残る。2855は肥前有田産の磁器染付端反小碗で、外面は濃地に紐と丸に土農工商の図柄の染付、内面は墨弾きの紗綾文、見込は麒麟文の染付がみられる。焼継痕が残る。2856は肥前系の磁器染付端反小碗で、見込は圏線と花文、内面は圏線、外面は圏線と牡丹文の染付がみられる。焼継痕が残る。2857は肥前産の磁器染付丸碗で、見込は花文、内面は四方禳文、外面は宝文の染付、高台内には二重方形枠に渦「福」の銘がみられる。焼継痕と高台内には白玉描きがみられる。2858は磁器色絵蓋物蓋で、天井部に摘を貼付する。全面に透明釉を施し、かえりは釉ハギする。天井部外面には朱色の「康」、金色の「福寿」字の上絵付がみられる。2859は磁器餌鉢で、楕円形を呈する。口縁部外面に輪状の把手を2箇所に貼付し、内面から体部外面に灰釉を施す。底部外面は無調整で板状圧痕が残る、無釉である。2860は磁器柄杓で、口縁部外面に断面が半円形の把手を貼付する。把手には垂直方向に円孔が貫通する。内面から高台付近まで灰釉を施し、口縁部内面には鉄錆による圏線がみられる。2861は瓦質土器十能で、筒状の把手を貼付する。把手上面には径5mmの円孔がみられ、円孔の周囲には方形に錆が付着する。底部外面を除きナデ調整でキラ粉が付着する。底部外面は無調整である。2862は土製品人形で、猫形を呈する。型成形貼り合わせで中空である。内面はナデ調整で指頭圧痕が顕著に残り、外面にはキラ粉が付着する。2863は基石形土製品で、全面にナデ調整を施す。2864は石製品硯で、矩形を呈する。上面の中央部は著しく摩耗する。背面には「中宮□」の刻書が残る。2865は木製品木簡で、短冊形を呈し、中央部両端に円形の釘孔と木釘が残る。表面には「御杏御守」の墨書がみられる。

**SX-416**(遺構：図294 遺物：図295)

SX-415の東で確認した遺構で、SD-426を切る。平面形態は不整形を呈し、長辺3.85m、短辺2.86m、深さ35cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は2層に分かれ、下層には木片を多く含んでいた。出土遺物



遺構埋土  
 1. 褐灰色 (10YR5/1) シルト質細粒砂で、礫を多く含む  
 2. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルトで、礫と非常に多くの木片を含む

図294 SX-416

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

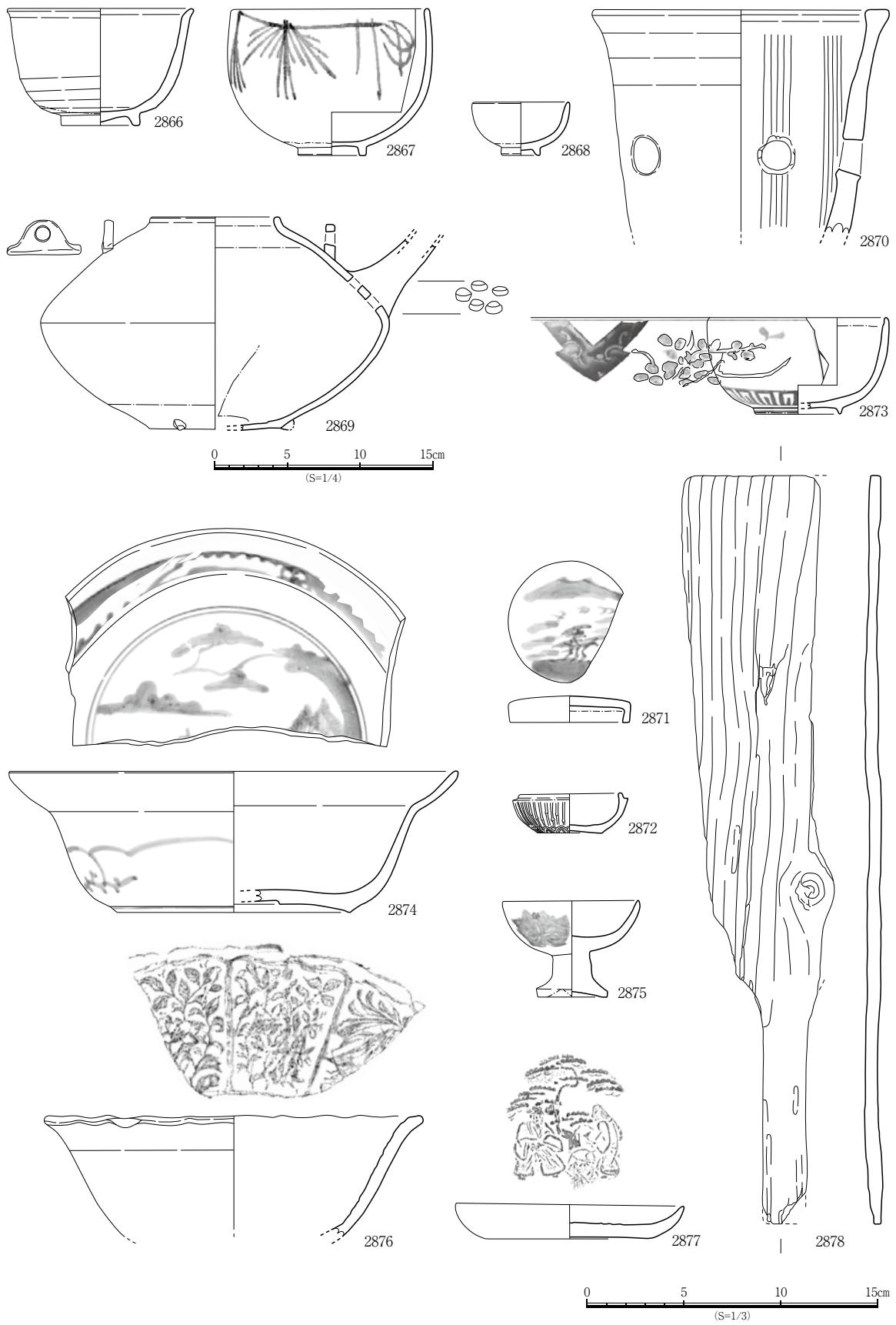


図295 SX-416出土遺物実測図



には陶器116点(碗14, 皿5, 蓋4, 猪口2, 火入1, 瓶1, 鉢2, 播鉢16, 灯明受皿4, 鍋2, 土瓶3, 火鉢1, 七輪1, 銚子1, 細片59), 磁器116点(碗24, 皿15, 蓋7, 小杯2, 猪口3, 蕎麦猪口2, 紅皿7, 合子1, 瓶2, 鉢2, 仏飯器2, 急須2, 水滴1, 細片46), 土師質土器21点(皿3, 小皿8, 白土器1, 細片9), 土師器片1点, 軟質施釉陶器鉢1点, 瓦2点(丸瓦1, 平瓦1), 土製品人形8点, 木製品11点(漆器製品3, 下駄2, 曲物蓋または底板4, 羽子板1, その他1)がみられた。図示した遺物は2866～2878である。2866は尾戸窯の陶器小碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施す。2867は京都・信楽系の陶器半球形碗で, 内面から高台付近まで光沢のある灰釉を施し, 口縁部外面には鉄錆による注連縄文がみられる。2868は京都・信楽系の陶器猪口で, 内面から高台付近まで透明釉を施す。2869は陶器土瓶で, 算盤玉形を呈する。注口と半円形の釣手・脚を貼付する。回転ナデ調整で, 口縁部内面から体部外面まで灰釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。底部外面には煤が付着する。2870は陶器焜炉で, 体部に径1.8cmの円孔が2箇所に残る。全面に回転ナデ調整を施し, 内面には5本単位の縦方向の櫛描による文様が4条みられる。口縁部内面に煤が付着する。2871は肥前系の磁器染付合子蓋で, 全面に透明釉を施し, 口縁部内面は釉ハギする。天井部外面には風景文の染付がみられる。2872は肥前産の白磁合子で, 内面から体部外面まで白磁釉を施し, 受部は釉ハギする。型打成形で, 外面には型押による陽刻の蓮弁文と菊花文がみられる。2873は肥前有田産の磁器色絵蓋物で, 全面に透明釉を施し, 口縁部内面と畳付は釉ハギする。外面には蓮弁文と圏線の染付と墨・緑・朱色の草花文の上絵付がみられる。2874は肥前系の磁器染付鉢である。蛇ノ目凹形高台を呈し, 全面に透明釉を施し, 高台内は蛇ノ目釉ハギする。見込には風景文と松文, 口縁部内面には花文と雪輪文か, 外面に唐草文と圏線の染付がみられる。2875は肥前産の磁器仏飯器で, 内面から外面脚裾部まで透明釉を施す。杯部外面にコンニャク印判による花文がみられる。2876は軟質施釉陶器稜花鉢で, 全面に濃緑釉を施す。内面には型押による文様で区画内に草花文がみられる。2877は尾戸窯の白土器皿で, 全面に横方向のナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の高砂文がみられる。2878は木製品羽子板で, 両面に朱色の彩色が僅かに残る。

SX-417(遺物:図296)

SX-416の北東で確認した遺構で, SD-423を切り, P-421に切られる。平面形態は溝状を呈し,

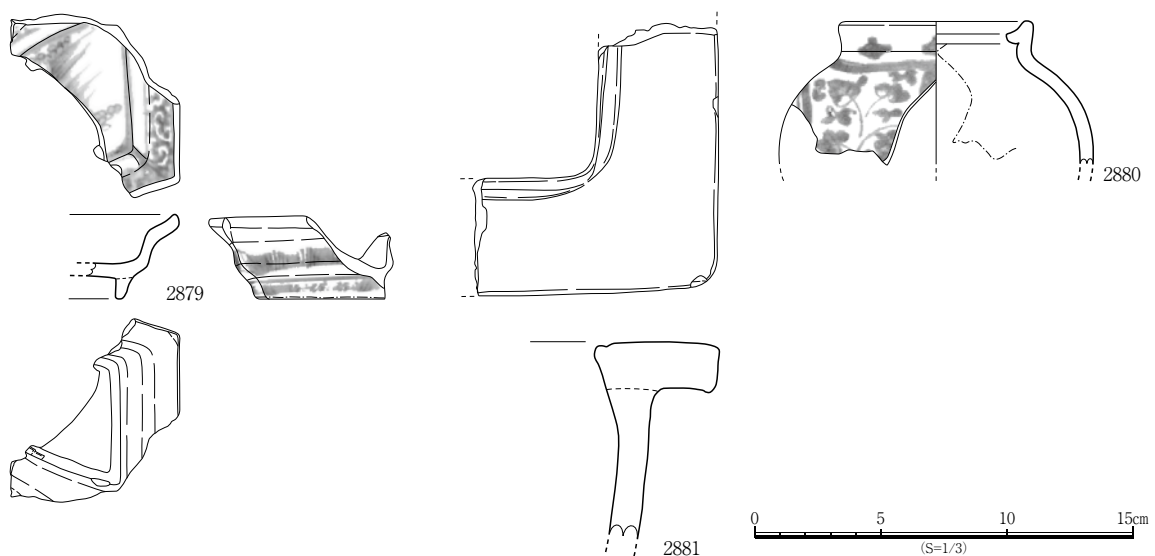


図296 SX-417出土遺物実測図

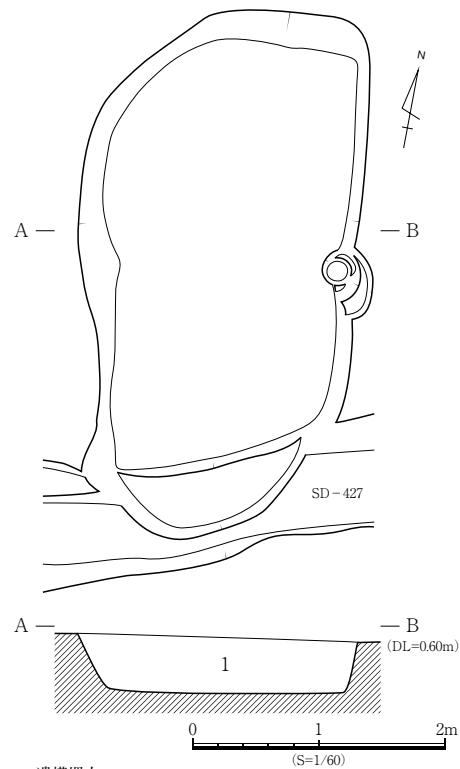


3. 遺構と遺物 (3) B-1区

全長3.74m, 全幅0.52m, 深さ7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器30点(碗1, 皿1, 蓋1, 瓶1, 鉢2, 播鉢1, 甕1, 花生1, 鍋1, 細片20), 磁器55点(碗2, 皿19, 大皿1, 猪口1, 蕎麦猪口2, 紅皿1, 瓶2, 鉢2, 壺1, 細片24), 土師器10点(火鉢1, 鉢1, 細片8), 瓦質土器2点(火鉢1, 細片1), 瓦5点(軒丸瓦1, 軒平瓦1, 平瓦3), 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2879~2881である。2879は肥前有田産の磁器変形皿で, 扇形を呈するものとみられる。型打成形で, 型紙摺による文様がみられ, 外面は雷文帯, 口縁部内面は唐草文, 見込は海浜風景文である。2287・2302・2303などと揃いとみられる。2880は肥前産の磁器染付壺で, 蓋物とみられる。口縁部内面から外面には透明釉を施し, 外面には区画内に草花文の染付がみられる。回転ナデ調整で, 体部内面は一部に釉が掛かる。2881は土師器火鉢で, 箱形を呈する。粘土板を接合して成形しており, 内面と口縁部は横方向のナデ調整, 外面はナデ調整または無調整である。

SX-418(遺構: 図297 遺物: 図298)

SX-417の南で確認した遺構で, SD-423・426・427を切る。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺4.24m, 短辺2.01m, 深さ46cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器61点(碗19, 皿4, 蓋2, 猪口5, 瓶1, 鉢8, 播鉢5, 灯明皿2, 灯明受皿1, 鍋3, 土瓶3, 火鉢3, 焜炉1, 水滴2, 細片2), 磁器130点(碗18, 皿14, 蓋3, 猪口1, 蕎麦猪口3, 紅皿2, 段重1, 瓶4, 壺1, 細片83), 土師器サナ1点, 瓦質土器火鉢3点, 瓦4点(丸瓦1, 平瓦3), 土製品7点(人形6, 基石1), 木製品11点(漆器曲物蓋1, 箸7, 下駄1, 曲物蓋2), 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は2882~2894である。2882は肥前産の京焼風陶器碗で, 内面から高台付近まで灰釉を施し, 高台内には「清水」の刻印がみられる。2883は陶器筒形碗で, 内面から高台付近まで透明釉を施し, 外面には鉄錆による梅文がみられる。2884は志野焼とみられる陶器皿で, 全面に長石釉を施し, 畳付は釉ハギする。2885は京都・信楽系の陶器火入で, 口縁部内面から外面に灰釉を施し, 外面には赤銅色の上絵付で笹文がみられる。2886は陶器瓶で, 全面に灰釉を施し, 畳付は釉ハギする。外面には鉄錆による文様がみられる。2887は陶器水滴で, 馬形である。型成形で, 上端に径5mmの円孔がみられる。下面を除き鉄釉を施す。底面はナデ調整で, 墨書がみられる。2888は肥前有田産の磁器色絵蓋付小鉢とみられ, 全面に透明釉を施し, 畳付を釉ハギ, 見込を蛇ノ目釉ハギする。外面には圏線などの染付と金・緑・朱色の櫛歯文などの上絵付がみられる。2889は肥前有田産の磁器色絵小碗で, 口縁部内面から外面に透明釉を施し, 畳付を釉ハギする。見込は無釉で, 見込から内面には墨・朱色の目出鯛文とみられる上絵付, 外面は朱色の上絵付による文字がみられる。2890は磁器染付碗で, 内外面に染付の一部が残る。焼継痕が残る。2891は肥前産の磁器染付皿で, 見込は蛇ノ目釉ハギし, コンニャク印判による五弁花文, 口縁部内面は菊唐草文の染付がみられる。2892は肥前有



遺構埋土  
1. 褐灰色(10YR6/1)粘土質シルトで, 1cm大の礫と炭化物を少し含む

図297 SX-418

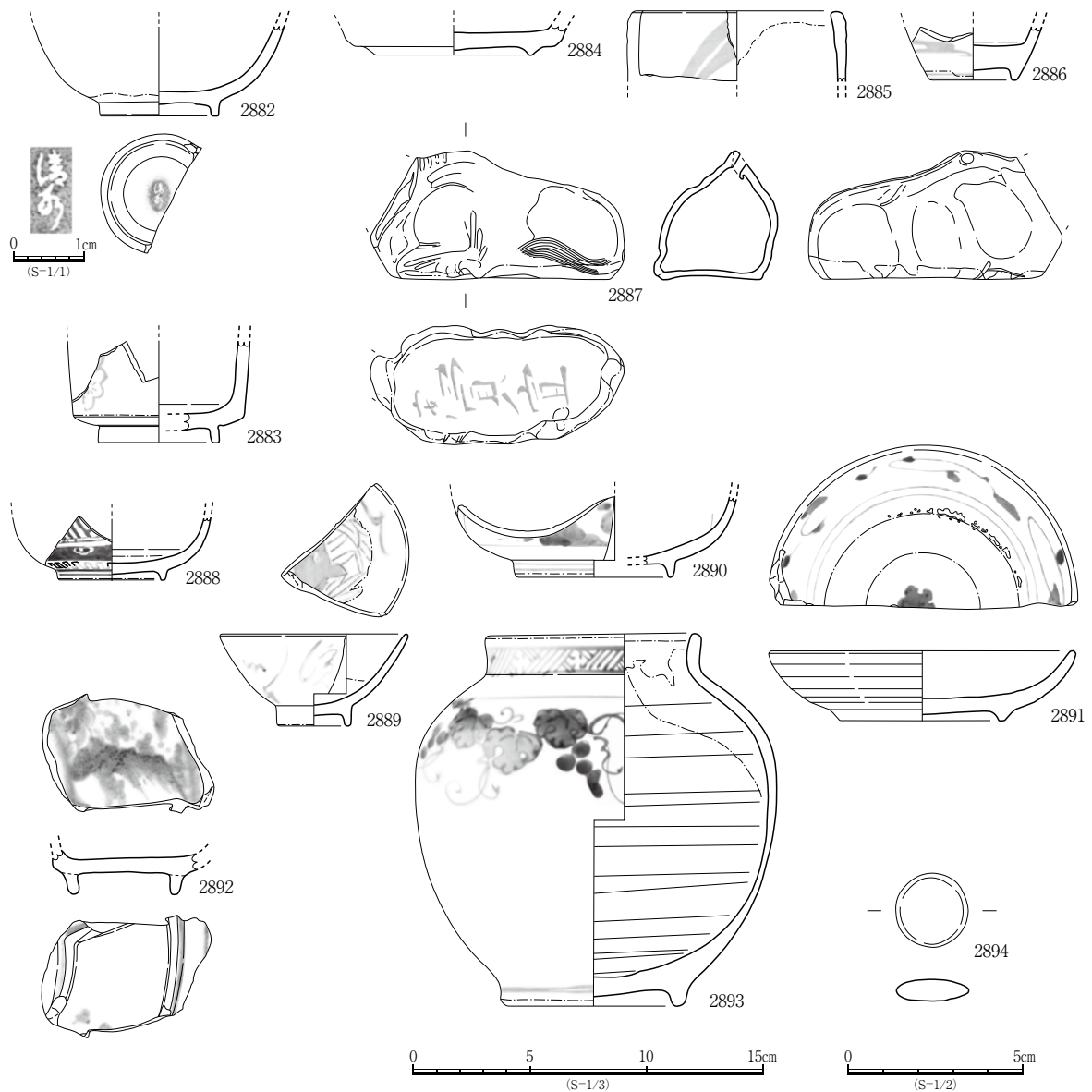


図298 SX-418出土遺物実測図

田産の磁器変形皿で、扇形を呈するものとみられる。型打成形で、型紙摺による文様がみられ、見込は海浜風景文とみられる文様、外面は雷文帯で、高台内には銘の一部が残る。2302・2303などと揃いとみられる。2893は肥前有田産の磁器染付壺で、ほぼ全面に透明釉を施し、口縁部は釉ハギする。口縁部外面には四方禳文、外面には葡萄文の染付がみられる。2894は基石形土製品で、全面にナデ調整を施す。

P-406(遺物：図299)

B-1区北西部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径45cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質中粒砂で、円礫と炭化物を少し含んでいた。出土遺物には陶器皿1点、土師質土器片3点、瓦質土器火鉢1点、平瓦1点、土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2895で土製品人形である。天神様で、型成形貼り合わせである。中実で、台座は多角形を呈し、下面には円孔がみられる。

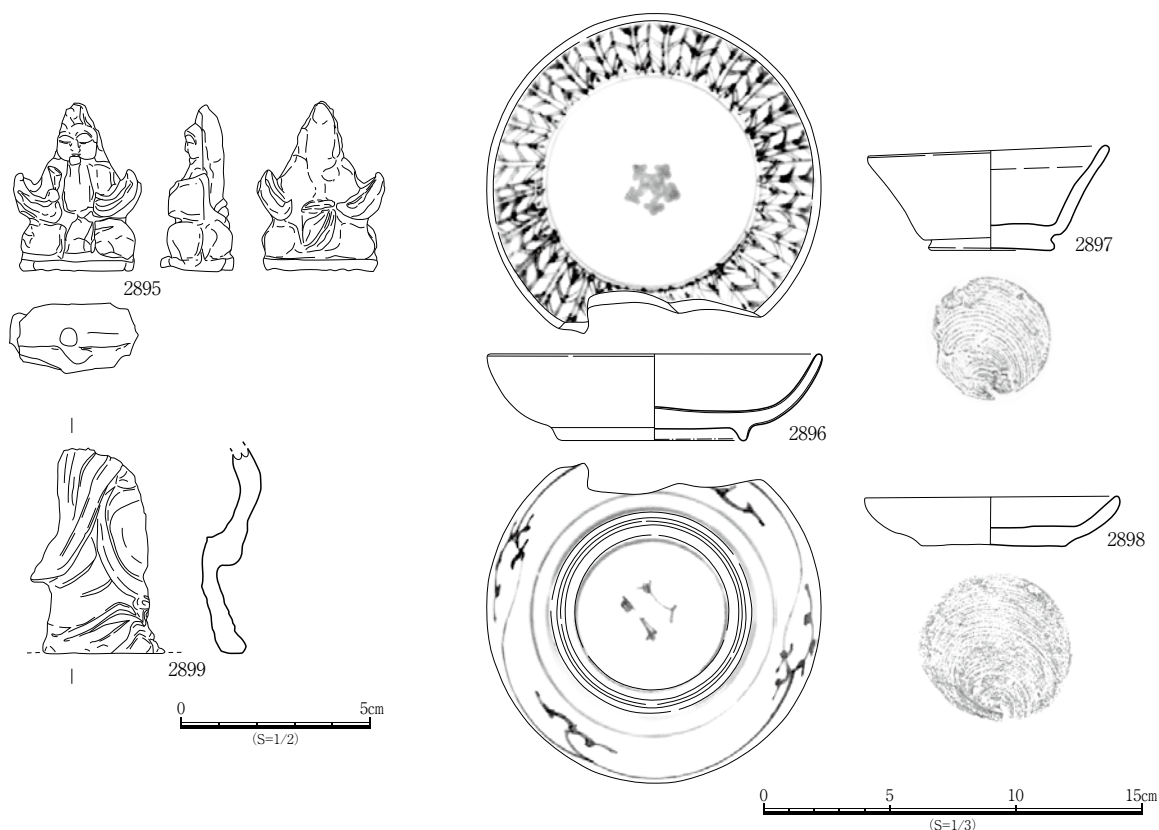


図299 P-406～408出土遺物実測図

P-407(遺物：図299)

SK-429の北東で確認したピットで、SK-429に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径74cm、短径54cm、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、粗粒砂と多量の0.5～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、磁器9点(皿2, 猪口1, 細片6), 土師質土器4点(小皿1, 細片3)がみられた。図示した遺物は2896で肥前系の磁器染付皿である。見込はコンニャク印判による五弁花文、口縁部内面は矢羽根文、外面は唐草文と圏線、高台内には圏線の染付と銘がみられる。

P-408(遺物：図299)

SK-429の東で確認したピットで、SK-429を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径37cm、短径25cm、深さ5cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、土師質土器3点(杯2, 皿1), 土製品人形1点がみられた。図示した遺物は2897～2899である。2897は土師質土器杯で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。外面は全面に煤が付着する。2898は土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2899は土製品人形で、布袋様とみられる。型成形貼り合わせで、中空である。内面はナデ調整で、外面にはキラ粉が付着する。

P-409(遺物：図300)

SG-402北側の付帯施設で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径41cm、短径32cm、深さ26cmを測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、粗砂と多量の0.5～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器壺1点、土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2900で陶器壺である。この陶

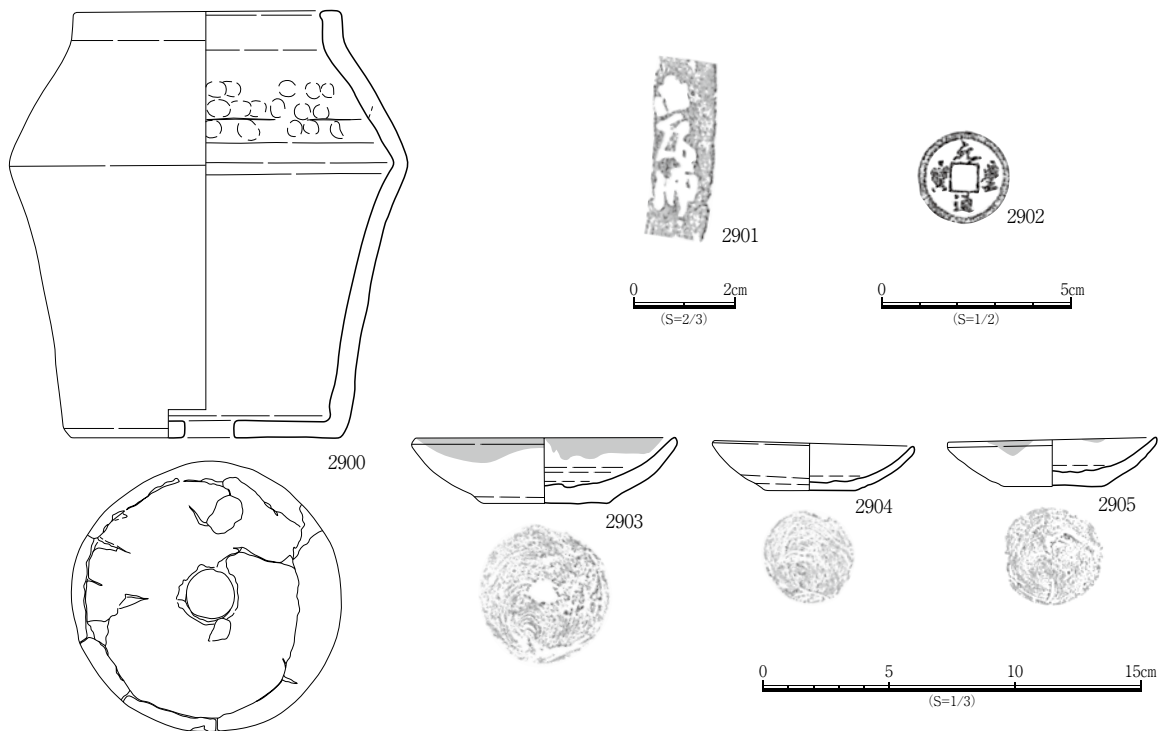


図300 P-409～412出土遺物実測図

器壺はピットに天地逆の状態では埋設されており、体部中位を漆喰で固定されていた。底部には径2.6cmを測る焼成前の穿孔がみられる。内面はナデ調整で、肩部には指頭圧痕が残り、口縁部内面から外面の肩部は回転ナデ調整とみられ、体部外面は横方向のナデ調整で下部には削りを加える。体部内面から底部には煤が付着する。

P-410(遺物：図300)

B-1区北東部で確認したピットで、SK-436に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長24cm、検出幅23cm、深さ28cmを測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、粗粒砂と多量の0.5～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、平瓦1点がみられた。図示した遺物は2901で平瓦である。側面には「御瓦師」とみられる銘が残る。

P-411(遺物：図300)

P-410の南西で確認したピットで、他のピットに切られる。平面形態は溝状を呈し、全長1.52m、全幅0.33m、深さ17cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(皿1、細片3)、磁器片1点、土師質土器片10点、古銭1点がみられた。図示した遺物は2902の銭貨で、元豊通寶である。

P-412(遺物：図300)

B-1区北端で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、検出長43cm、検出幅40cm、深さ48cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点、土師質土器8点(皿1、小皿4、細片3)がみられた。図示した遺物は2903～2905である。2903は土師質土器皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。2904・2905は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

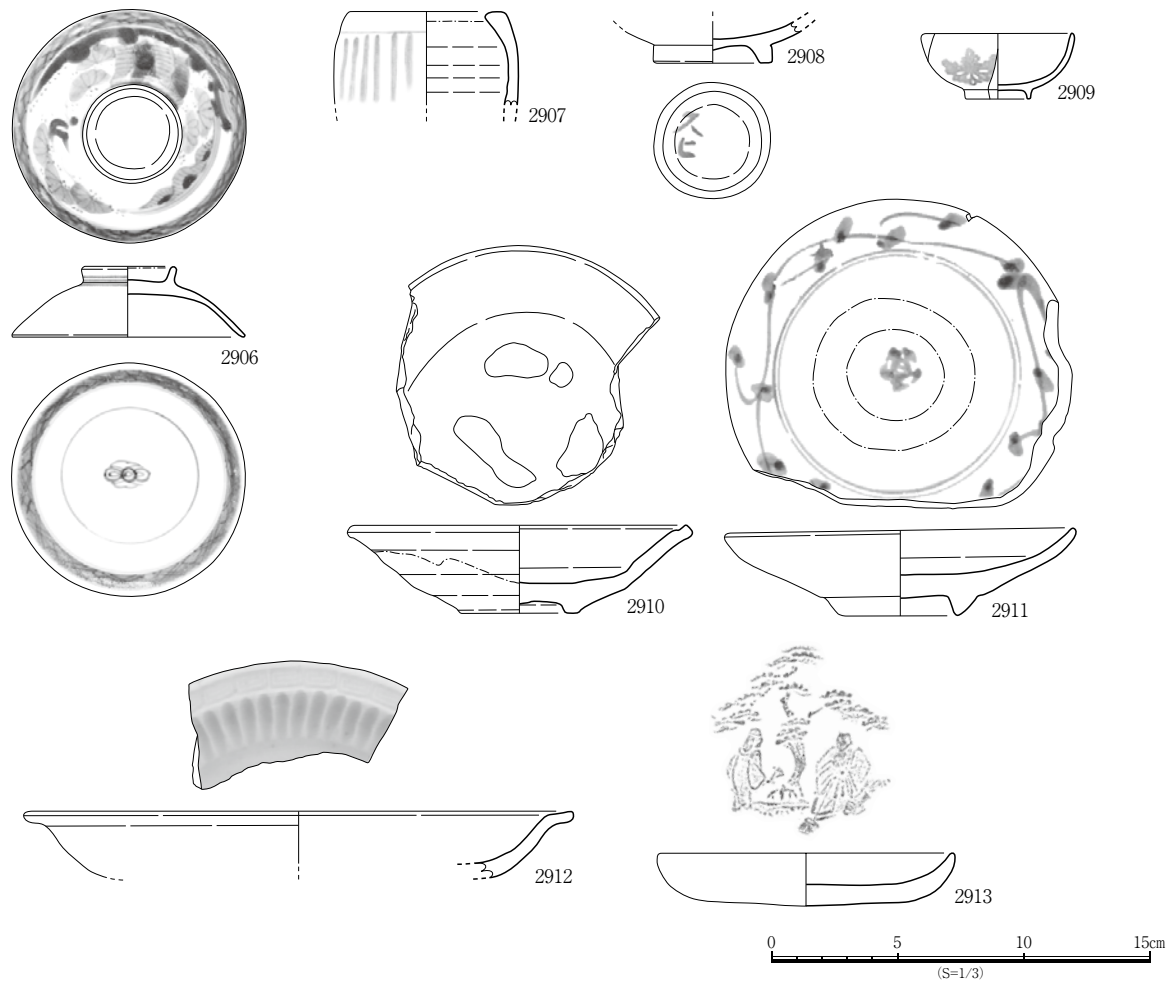


図301 P-413～417出土遺物実測図

底部の切り離しは回転糸切り調整である。煤が付着する。

P-413(遺物：図301)

B-1区北東隅で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、長径26cm、短径23cm、深さ20cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器皿1点、磁器4点(碗1、蓋2、細片1)、土師質土器片1点がみられた。図示した遺物は2906で肥前系の磁器染付碗蓋で、端反形である。天井部内面には宝文と圏線、口縁部内面には濃地に四方禳文、外面には濃地に四方禳文と風景文・草花文の染付がみられる。

P-414(遺物：図301)

P-413の南で確認したピットで、他のピットに切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長65cm、全幅65cm、深さ3cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片3点、磁器2点(小杯1、灰吹1)、土師質土器6点(小皿2、細片4)がみられた。図示した遺物は2907で肥前産の青磁灰吹である。口縁部内面から外面には青磁釉を施し、外面には丸彫による縞文がみられる。

P-415(遺物：図301)

B-1区北西部で確認したピットで、SX-411に切られる。平面形態は楕円形を呈し、検出長42cm、

全幅44cm, 深さ17cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 細片1), 磁器片1点, 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2908で陶器碗である。内面から高台付近まで灰釉を施し, 高台内には「スヒ」とみられる墨書が残る。

**P-416**(遺物: 図301)

B-1区中央部で確認したピットで, SD-418を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径37cm, 短径34cm, 深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物は図示した2909の肥前産磁器染付猪口のみで, 外面にはコンニャク印判による桐文がみられる。

**P-417**(遺物: 図301)

P-416の東で確認したピットで, SK-454を切り, P-418に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し, 長辺1.12m, 短辺0.54m, 深さ48cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗1, 皿1, 土瓶1, 把手1, 細片5), 磁器16点(碗2, 皿3, 蓋1, 瓶1, 水滴1, 細片8), 土師質土器皿1点(白土器), 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2910~2913である。2910は唐津系灰釉陶器溝縁皿で, 内面から口縁部外面まで灰釉を施し, 見込には砂目痕が残る。2911は肥前産の磁器染付皿で, 全面に透明釉を施し, 見込を蛇ノ目釉ハギ, 畳付を釉ハギする。見込にはコンニャク印判による五弁花文, 口縁部内面には唐草文の染付がみられる。2912は肥前産の青磁皿で, 全面に青磁釉を施す。内面には陰刻の雷文帯と丸彫による菊弁文がみられる。2913は尾戸窯の白土器皿で, 底部はナデ調整, 口縁部は横ナデ調整を施し, 見込には型押による陽刻の高砂文がみられる。

**P-418**(遺物: 図302)

P-417の東で確認したピットで, SK-454とP-417を切る。平面形態は円形を呈し, 径37cm, 深さ30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器2点(瓶1, 細片1), 磁器片1点, 土師質土器片1点, 土師器片1点がみられた。図示した遺物は2914で陶胎染付瓶である。口縁部内面から高台付近まで白化粧土のち透明釉を施し, 外面には松文の染付がみられる。

**P-419**(遺物: 図302)

P-418の東で確認したピットで, SK-454を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径53cm, 短径43cm, 深さ43cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 多量の1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗1, 皿1, 灯明皿1, 灯明受皿1, 餌鉢1, 細片4), 磁器16点(碗3, 皿2, 蓋1, 紅皿1, 瓶1, 細片8), 土師質土器5点(小皿2, 細片3), 土師器6点(焙烙1, 細片5), 鉄釘1点がみられた。磁器碗1点はSK-454から出土した2545と接合した。図示した遺物は2915で土師質土器小皿である。回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部内外面に煤が付着する。

**P-420**(遺物: 図302)

P-419の南西で確認したピットで, SD-422に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 長径46cm, 短径34cm, 深さ7cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した磁器皿1点がみられ, 破片はSX-417から出土している。2916は肥前有田産の磁器染付角皿で, 外面は飛雲文と宝文・雷文帯, 口縁部内面は宝文, 見込は牡丹文の染付がみられる。

**P-421**(遺物: 図302)

P-420の東で確認したピットで, SX-417を切る。平面形態は楕円形を呈し, 長径36cm, 短径33cm,



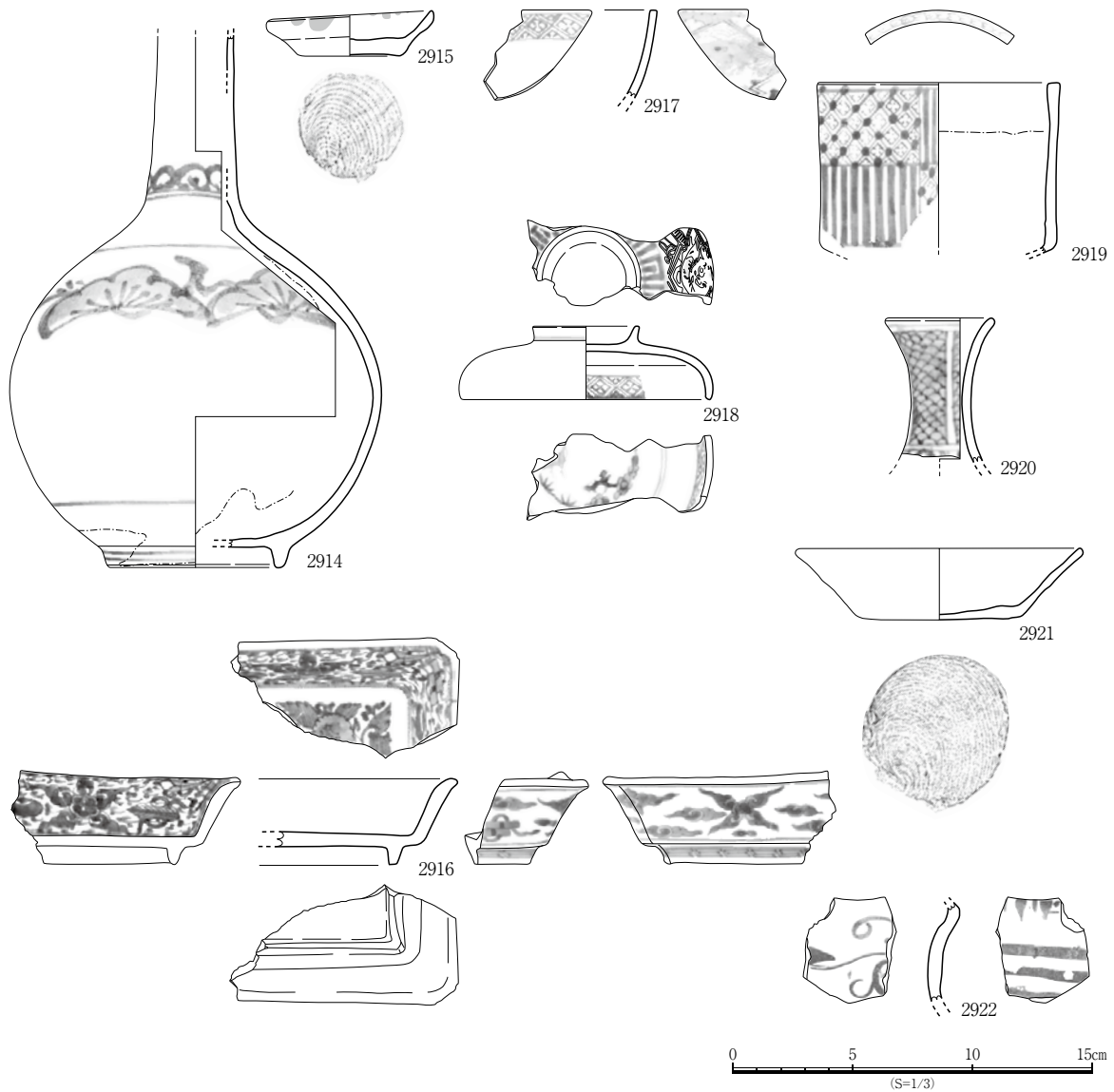


図302 P-418～423出土遺物実測図

深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器11点(皿3, 鉢1, 細片7), 磁器44点(碗4, 皿15, 蓋2, 瓶2, 鉢6, 細片15), 土師質土器小皿2点, 土師器焜炉1点, 金属製品1点がみられた。図示した遺物は2917～2920である。2917は肥前有田産の磁器色絵碗で、外面は圈線の染付と朱・墨色とみられる窓絵などの上絵付, 内面は四方禳文の染付を描く。2918は肥前有田産の磁器色絵碗蓋で、望料形である。天井部外面は蓮弁文の染付と朱・緑・墨・金色の窓絵などの上絵付, 天井部内面は環状の松竹梅文の染付, 口縁部内面は四方禳文の染付がみられる。2919は肥前有田産の磁器色絵火入とみられ, 口縁部内面から外面に透明釉を施す。外面は区画文の染付に朱色の上絵付による四方禳文, 口縁端部には朱色の上絵付による蓮文とみられる文様が残る。2628の蓋と揃いとみられる。2920は中国産とみられる青花瓶で, 全面に透明釉を施し, 外面には区画内に波文とみられる染付を描く。

P-422(遺物: 図302)

P-421の東で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径53cm、短径38cm、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器片1点、土師質土器杯1点がみられた。図示した遺物は2921で土師質土器杯である。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。

P-423(遺物: 図302)

B-1区南東部で確認したピットで、SD-507に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、検出幅41cm、深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、多量の0.5~2cm大の礫と炭化物、焼土を含んでいた。出土遺物は図示した2922の志野織部とみられる向付のみで、全面に透明釉を施し内外面に鉄錆による文様がみられる。

P-424(遺物: 図303)

P-423の北東で確認したピットで、SK-461を切り、P-425に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、検出長は1.13m、全幅0.63m、深さ26cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と炭化物・土器片を含んでいた。出土遺物には陶器21点(皿1、大皿1、蓋1、鉢3、台付灯明受皿2、鍋2、土瓶1、細片10)、磁器33点(碗11、皿1、蓋1、紅皿1、瓶2、鉢1、仏飯器1、細片15)、土師器焙烙1点、土師質土器15点(小皿5、細片10)、土製品人形1点、瓦片1点がみられた。図示した遺物は2923~2926である。2923が阿波大谷焼の陶器台付灯明皿である。脚部は中空で、裾部には三角形の孔があく。内面から底部付近まで鉄釉を施す。底部外面は回転削り調整で、無釉である。2924は肥前系の磁器染付広東碗で、外面には草花文などの染付、見込は火焰文と圏線の染付がみられる。2925は肥前系の磁器染付仏飯器で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。杯部外面には蛸唐草文と圏線の染

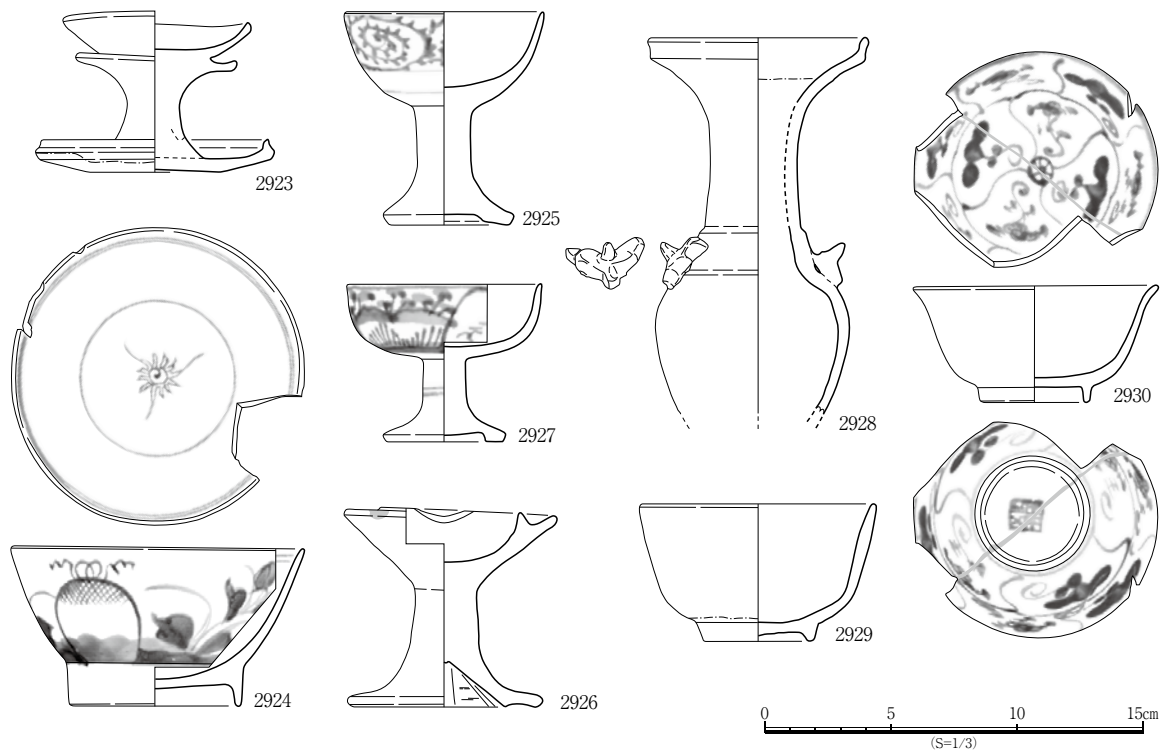


図303 P-424~426出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

付がみられる。2926は軟質施釉陶器の台付灯明受皿で、受部の1箇所に半円形の切り込みを入れる。調整は回転ナデで、脚部内面は横方向のヘラ削りである。杯部内面から脚部裾部には透明釉を施す。

#### P-425(遺物: 図303)

P-424の西で確認したピットで、P-424・426を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径44cm、短径39cm、深さ16cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と炭化物・土器片を含んでいた。出土遺物には陶器13点(皿1, 瓶1, 灯明皿1, 鍋2, 土瓶3, 細片5), 磁器26点(碗7, 小杯2, 紅皿4, 瓶1, 仏飯器1, 仏花器1, 細片10), 土師器2点(焙烙1, 細片1), 牡蠣1点がみられた。図示した遺物は2927・2928である。2927は肥前系の磁器染付仏飯器で、全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。杯部外面には風景文、脚部には圈線の染付がみられる。2928は肥前産の青磁染付仏花瓶で、2箇所に鳥形の双耳を貼付する。口縁部内面から外面に青磁釉を施す。

#### P-426(遺物: 図303)

P-425の西で確認したピットで、P-425に切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径45cm、短径37cm、深さ21cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器11点(碗5, 皿1, 播鉢1, 火鉢1, 細片3), 磁器14点(碗5, 皿2, 蓋1, 小杯1, 猪口1, 蕎麦猪口1, 鉢1, 細片2), 土師質土器小皿1点, 瓦5点(平瓦2, 丸瓦3)がみられた。図示した遺物は2929・2930である。2929は尾戸窯の陶器小碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。2930は瀬戸・美濃産の磁器染付小碗で、内外面に霊芝文の染付、高台内に銘がみられる。焼継痕が残る。

#### ⑤ 5面

#### SK-506(遺物: 図304)

B区北西部で検出した土坑で、北側は調査区外へ続き、SK-507とP-503に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、断面は舟底形を呈する。検出長1.19m、全幅1.28m、深さ34cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で粘性はやや弱く、細粒砂と多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器14点(碗3, 灯明皿2, 鉢1, 播鉢1, 鍋蓋1など), 磁器12点(碗4, 蕎麦猪口3など), 近代陶器片3点, 近代磁器片3点, 土師器7点(サナ1など), 土師質土器8点(皿1, 小皿3など), 瓦質土器22点(火鉢1, 釜1など), 瓦2点(丸瓦1, 平瓦1)がみられ、大正期の遺物が出土している。図示した遺物は2931・2932である。2931は京都・信楽系の陶器色絵半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には朱色の上絵付による笹文と花文がみられる。2932は京都産の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。外面には呉須と鉄錆による草花文と丸彫による蓮弁状の文様がみられる。

#### SK-507(遺物: 図304)

SK-506の南で検出した土坑で、SK-506とP-503を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.33m、短辺1.03m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色シルト質砂で、粗粒砂と0.5cm大の礫、1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器36点(碗6, 皿1, 播鉢2, 鍋3, 鍋蓋3など), 磁器14点(碗2, 皿1, 蕎麦猪口2, 急須1など), 近代陶器3点, 近代磁器4点, 土師器8点(火鉢2, 焜炉1, 焙烙1, サナ1など), 土師質土器皿1点(白土器), 瓦質土器4点(火鉢2, 釜1など), 瓦4点(軒平瓦1, 平瓦3), 鉄製品短刀1点など大正期の遺物が見られた。図示した遺物は2933～2935である。2933は瀬戸・美濃産の陶器碗で、内面から口縁部外面に灰釉、外面の体部から底部には鉄釉を施し、長石釉を散らす。体部外面には3条の沈線がみられ、数カ所を凹ます。2934は瀬戸・美濃産とみられる陶器碗で、内面から外面体部下半まで灰釉を施し、内外面に鉄釉を掛け流す。体部には2段の沈線状の凹みがみられる。2935は肥前有田産の磁器

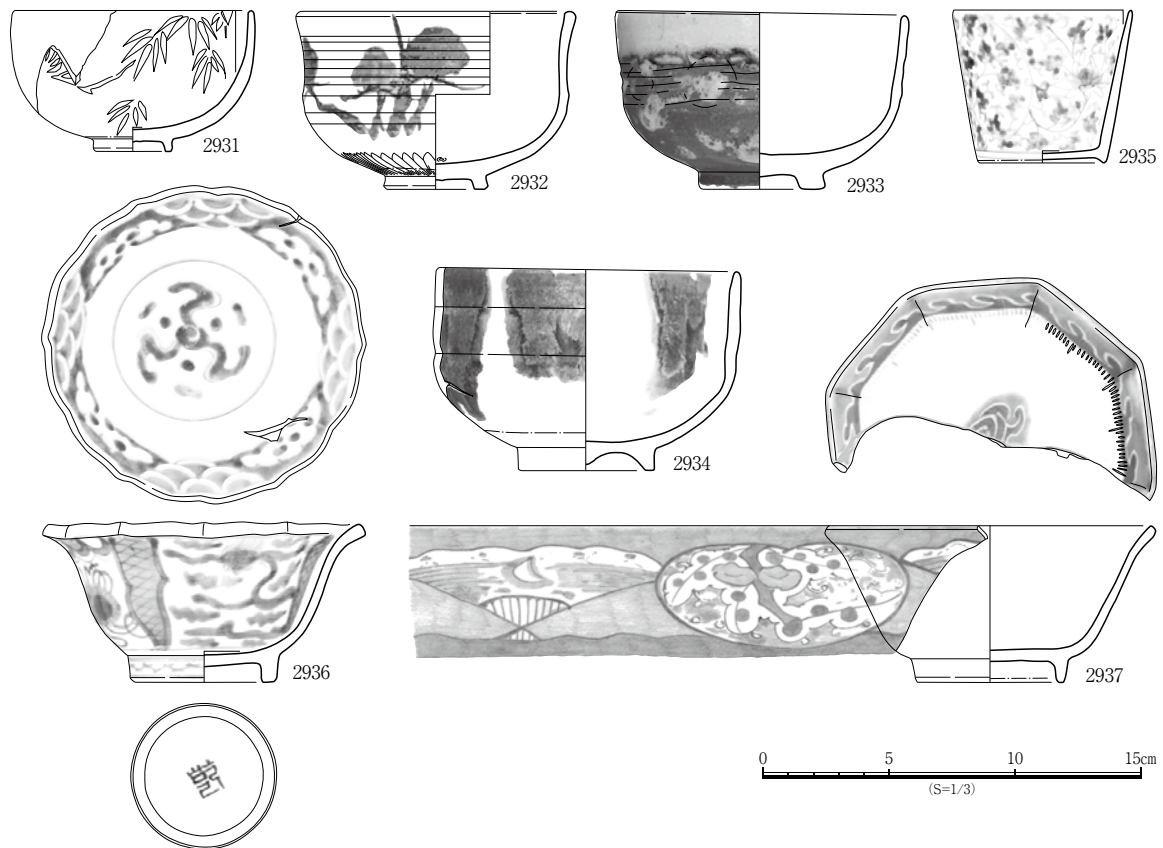


図304 SK-506～508出土遺物実測図

染付猪口で、外面に花唐草文の染付がみられる。

**SK-508**(遺物：図304)

SK-507の南西で検出した土坑で、平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.77m、短辺1.22m、深さ52cmを測る。出土遺物には陶器7点(碗1、挿鉢1、植木鉢1、鍋1、鍋蓋2など)、磁器8点(皿2、鉢2、蓋物1、蕎麦猪口2、餌猪口1)、近代陶器1点、近代磁器4点、軟質施釉陶器色絵皿1、土師器七輪1点、瓦質土器七輪1点など明治期の遺物がみられた。図示した遺物は2936・2937である。2936は磁器染付稜花鉢で、見込には宝文と圏線、内面には雲文とみられる文様、外面には区画内に雲龍文と宝文の染付、高台内には銘がみられる。2937は肥前有田産の磁器色絵八角鉢で、見込は濃地に雲文の染付、口縁部内面は濃地に波文の染付と朱色の直線文の上絵付、外面は濃地に窓絵の染付で窓内に朱・緑・墨色で月と海と梅樹文の上絵付がみられる。焼継痕が残る。

**SK-509**(遺物：図305)

B区北東部で検出した土坑で、東側は他の遺構に切られる。平面形態は不整形を呈するとみられ、検出長1.65m、検出幅0.96m、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で粘性は弱く、細粒砂と多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器8点(皿1、瓶1、挿鉢1など)、磁器21点(碗6、皿1、蓋1、猪口1など)、青花大皿1点、近代陶器1点、近代磁器3点、土師質土器小皿1点、瓦質土器火鉢1点、丸瓦2点がみられた。図示した遺物は2938で、中国景德鎮窯系の青花鉢である。折縁形で、高台内には放射状の鉋痕が残る。内面は花鳥と岩文の染付、外面は花文と樹木文の染付、高台内には圏線と「大明成化年製」の銘がみられる。

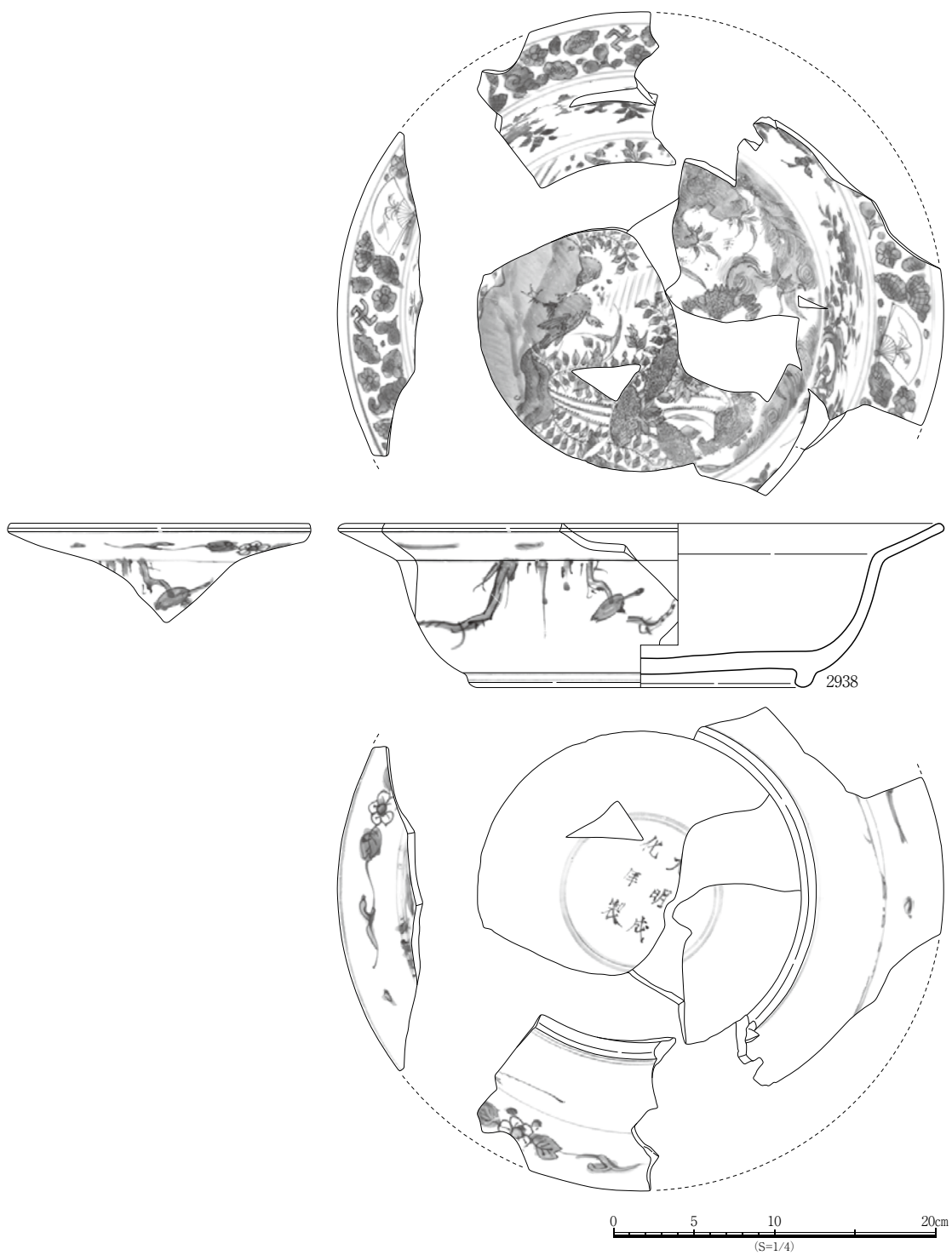


図305 SK-509出土遺物実測図



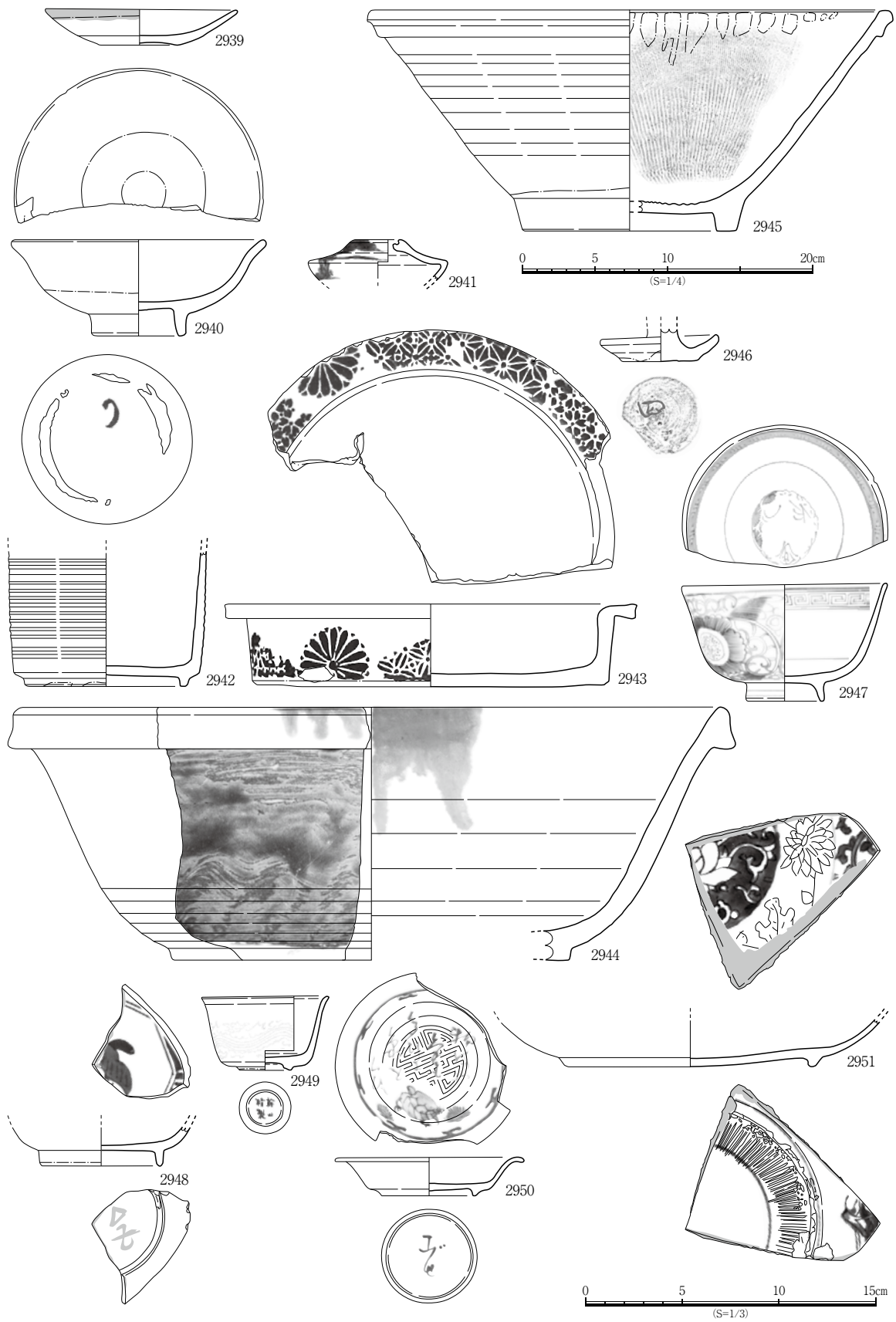


図306 SK-510出土遺物実測図1



SK-510(遺物: 図306・307)

B区西部で検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、一辺2.10m、深さ52cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルト質砂で3~10cm大の礫を非常に多く含み、下層は黄灰色砂質シルトで中粒砂を含んでいた。出土遺物には陶器347点(碗1, 蓋16, 皿11, 鉢18, 播鉢7, 台付灯明受皿6, 鍋26など)、磁器95点(碗20, 皿11, 大皿2, 蕎麦猪口2, 瓶7, 紅皿1など)、近代磁器68点, 土師器

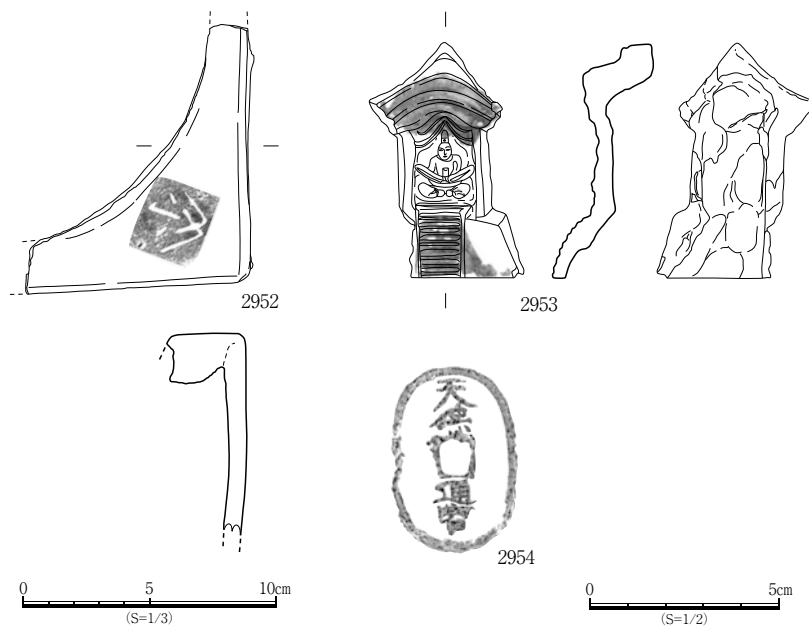


図307 SK-510出土遺物実測図2

35点(火鉢6, 焜炉2, 焙烙1など), 瓦質土器9点(火鉢4, 焜炉1など), 丸瓦2点, 土製品ミニチュア1点, 石製品3点(石板1, 石筆2), 骨角製品1点, 古銭1点, ガラス製品がみられた。図示した遺物は2939~2954である。2939は京都・信楽系の陶器皿である。内面から口縁部外面に灰釉を施し, 見込には3箇所目痕が残り, 口縁部外面には煤が付着する。2940は能茶山窯の陶器皿で, 内面から体部外面まで鉄釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。2941は肥前系の陶胎染付釜形とみられ, 外面に白化粧土を施したのち全面に透明釉を施し, 口縁端部は釉ハギする。外面には松文の染付がみられる。2942は陶器火入で, 回転ナデ調整のち, 体部外面に鉄釉を施す。内面は無釉で, 見込には重ね焼痕と墨書がみられる。2943は瀬戸・美濃産の御深井焼陶器水盤で, 内面から体部外面に御深井釉を施し, 口縁部内面と体部外面には型紙摺による鉄錆の花文と菊花文の上絵付がみられる。底部外面は無釉で, 回転削り調整で楕円形の脚が剥離した痕跡が残る。2944は瀬戸・美濃系とみられる陶器鉢で, 内面から口縁部外面は灰釉で銅緑釉を流し掛け, 体部外面は鉄釉を刷毛塗りする。見込には目痕が1箇所に残る。2945は陶器播鉢で, 口縁端部から高台付近まで鉄釉を施す。内面から見込には播目がみられる。2946は陶器台付灯明受皿で, 体部外面には鉄釉を施す。底部外面は回転糸切り調整を施し, 無釉で, 墨書がみられる。2947は肥前産の磁器染付碗で, 外面は草花文と圏線, 口縁部内面は雷文, 見込は松竹梅文の染付がみられる。2948は肥前産とみられる磁器染付輪花皿で, 内面と見込に染付の一部が残る。体部から底部に焼継痕, 高台内には白玉描がみられる。2949は関西系とみられる磁器染付小杯で, 型打成形である。外面には型押による陽刻の鳥文と雲文, 高台内には「幹山精製」の銘がみられる。「幹山精製」は京都の加藤幹山の銘とみられる。2950は瀬戸・美濃産の磁器色絵皿で, 木型打込成形である。見込には型押による陰刻の寿文とコバルト・茶・金色の亀文と朱色の俳句の上絵付, 高台内は朱色の文字の上絵付がみられる。2951は中国景德鎮窯系の青花皿で, 高台内には放射状の匏痕が残る。外面は圏線, 内面は唐草文の染付, 見込は菊文・葉文の陰刻文と花文の染付がみられる。2952は瓦質土器焜炉で, 箱形を呈し二重構造である。体部内面は粗い縦方向のハケ調整, 口縁部内面はナデ調整, 外面は丁寧な磨き調整である。上面には刻印がみられる。2953は土製品ミ

ニチュアで、天神様の祠形である。型成形で中空である。外面は型押、内面はナデ調整で、外面には透明釉を施し、一部緑釉を掛け流す。2954は銭貨で、天保通寶である。

SK-511(遺物:図308)

SK-510の東で検出したハンダ土坑である。平面形態は不整円形を呈し、径1.25m、深さ33cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器209点(碗1, 皿3, 播鉢4, 甕6, 鍋11, 土瓶8, 火鉢2, 餌鉢1など), 磁器28点(碗2, 皿5, 蓋3, 瓶2, 紅皿1など), 近代陶器5点, 近代磁器24点, 土師器19点(火鉢3, 焜炉1, 七輪2など), 瓦質土器83点(火鉢3, 焜炉1, 七輪5, 釜1など), 軒平瓦2点, 土師質土器片2点, 石製品硯1点がみられた。図示した遺物は2955~2957である。2955は肥前産の磁器染付蓋物蓋で、全面に透明釉を施し、口縁部は釉ハギする。天井部に紐状の摘を貼付し、外面には宝文と圏線の染付がみられる。2956は磁器染付瓶で、全面に透明釉を施し、底部外面は釉ハギする。外面には山水風景文と四方擗崩れとみられる染付、底部外面には墨書が残る。

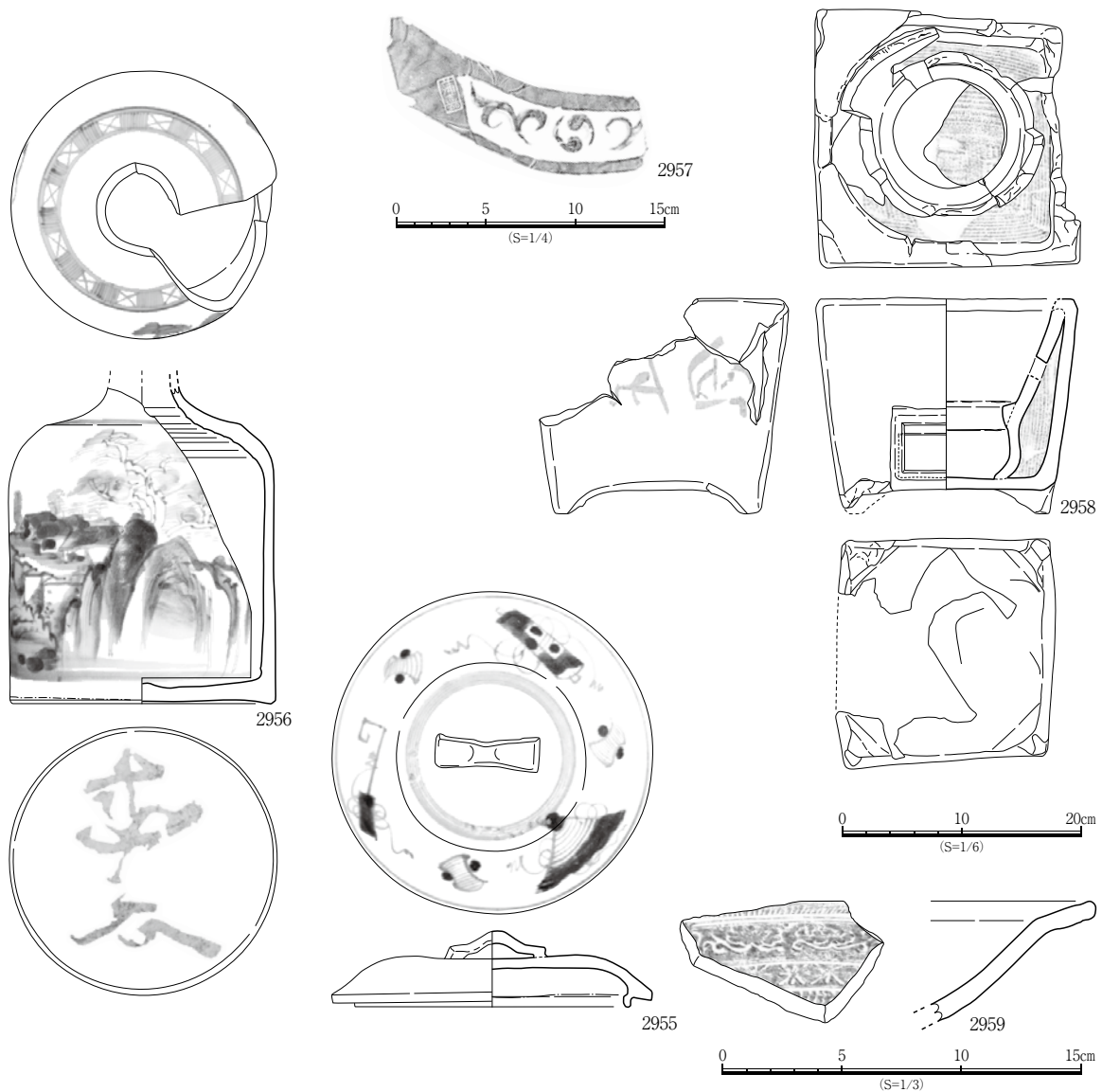


図308 SK-511～513出土遺物実測図

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

2957は軒棧瓦である。中心飾りは二巴文で、瓦当左側に「蒲嘉」の刻印がみられる。

SK-512(遺物: 図308)

B区中央部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.37m、短径1.08m、深さ62cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、極細粒砂と多量の0.5～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器59点(碗2, 蓋2, 皿2, 鉢2, 播鉢1, 鍋8など), 磁器9点(皿4, 水滴1など), 近代磁器18点, 土師器5点(焜炉1, 七輪4), 瓦質土器4点(火鉢3, 焙烙1), 平瓦2点, 古銭1点, ガラス製品がみられ, 大正期の遺物が出土している。図示した遺物は2958で土師器焜炉である。箱形で、二重構造である。前方には方形の窓を有し、底部には四隅に脚を貼付する。内部構造は円形で上部に円孔がみられ、調整は回転ナデである。外部構造はたたら成形で、外面の口縁部から脚部は磨き調整, 底部外面はナデ調整, 内面は粗いハケ調整である。外面には2箇所墨書がみられる。

SK-513(遺物: 図308)

B区南西部で検出した土坑である。平面形態は不整形を呈し、全長1.22m、短径1.08m、深さ7cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(皿1, 鉢1, 合子1など), 磁器3点(皿1, 合子1など), 土師質土器3点(皿1, 小皿1など), 石製品石板1点がみられた。図示した遺物は2959で、肥前武雄産の陶器大皿である。内面から口縁部外面には白化粧土を施し、内面には陰刻と白象嵌の印刻文がみられる。

SK-514(遺物: 図309)

B区南部で検出した廃棄土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺2.31m、短辺1.07m、深さ61cm

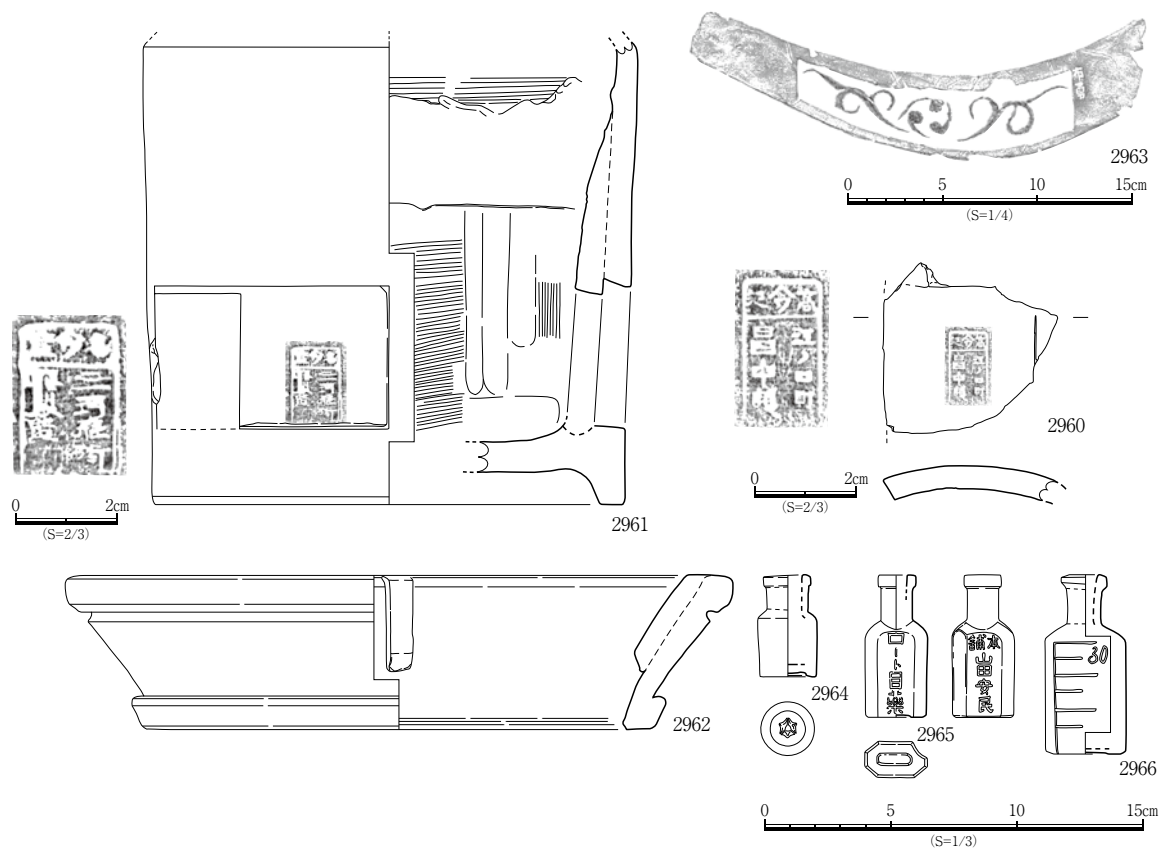


図309 SK-514・515出土遺物実測図

を測る。遺構内は遺物で満たされており埋土はない。出土遺物には陶器83点(碗1, 皿4, 蓋8, 鉢4, 挿鉢2, 鍋23など), 磁器段重1点, 近代磁器31点, 土師器14点(火鉢2, 焜炉2, 七輪3, 五徳4, 十能1など), ガラス製品8点(瓶7, 瓶蓋1)など大正期の遺物がみられた。図示した遺物は2960で土佐産とみられる陶器焜炉で, 円筒形を呈する。引戸の裏部分で, 外面はナデ調整で横方向の擦痕が残り, 方形枠に「江ノ口町」などの刻印がみられる。内面は粗いナデ調整である。

SK-515(遺物: 図309)

SK-514の南東で検出した廃棄土坑で, 南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ, 全長1.97m, 検出幅0.92m, 深さ81cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粗粒砂から中粒砂質シルトで, 15cm以下の円・角礫と陶磁器, ガラス製品を非常に多く含んでいた。表層には厚さ約1cmの炭化物層がみられた。出土遺物には陶器22点(碗1, 皿1, 蓋5, 鉢4, 鍋2, 急須3など), 近代磁器13点, 土師器8点(火鉢1, 七輪6, 五徳1), 軒平瓦1点, ガラス製品10点(薬瓶9, 蓋1)など大正期の遺物がみられた。図示した遺物は2961~2966である。2961は瀬戸・美濃産とみられる陶器焜炉で, 円筒形を呈し, 前方には矩形の窓と引戸が付く。内面は粗い横方向のハケ調整のち前方にのみ粘土板を貼付してナデ調整を行い, 窓をあける。外面は丁寧なナデ調整, 高台は横ナデ調整, 底部外面は無調整である。引戸はナデ調整で, 胴部外面の引戸で隠れる部分には方形枠に「三河」などの刻印がみられる。2962は陶器五徳である。内面から体部外面は回転ナデ調整で底部付近には回転削り調整を加え, 底部は横ナデ調整である。口縁部内面の3箇所には台形の突起を貼付する。内面には煤が付着する。2963は軒棧瓦である。中心飾りは三巴文で, 瓦当右側に「布勇」の刻印がみられる。2964~2966はガラス製品薬瓶である。型成形で両側面に型合わせの痕跡が残る。2964は明褐色のガラスで, 底部外面には型による陽刻の星形がみられる。口縁部内面は摩耗する。2965は青色のガラスで, 体部は八角形, 口縁部は円形を呈し, 胴部には型による陽刻の「ロート目薬」「本舗山田安民」の文字がみられる。2966

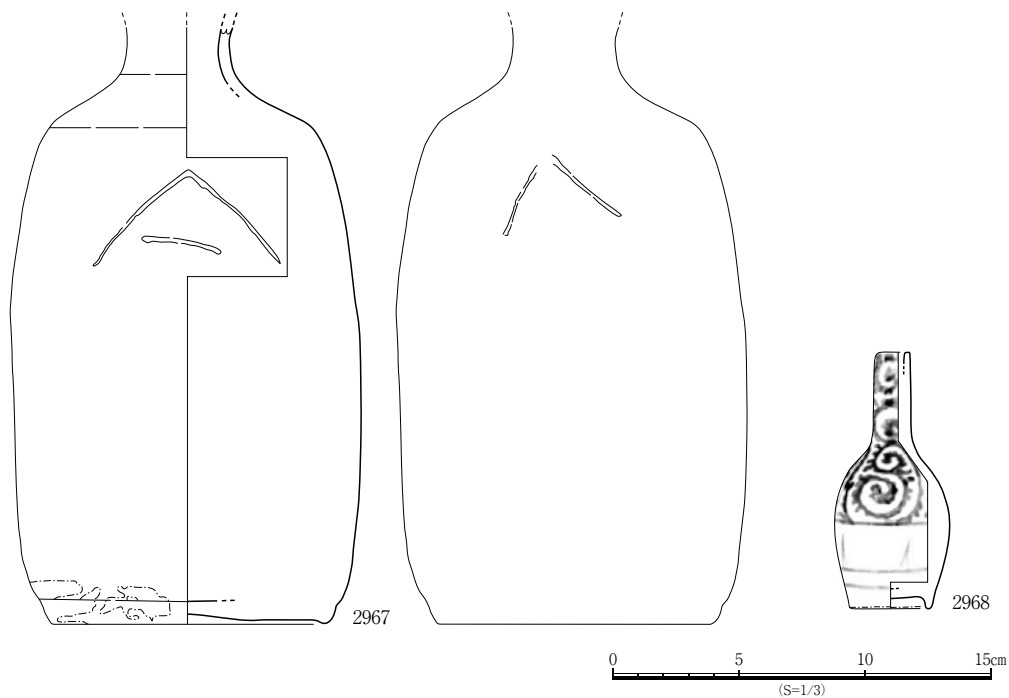


図310 SK-516出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (3) B-1区

は透明のガラスで、円筒形を呈し、胴部には型による陽刻の目盛と「30」の文字がみられる。

#### SK-516(遺物:図310)

B-1区南東隅で検出した土坑で、南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ、検出長1.75m、全幅1.85m、深さ60cmを測る。埋土はにぶい黄橙色砂で、中粒砂から粗粒砂とコンクリート片を含んでいた。出土遺物より明治期の遺構とみられる。図示した遺物は2967・2968である。2967は瀬戸・美濃産の陶器瓶で、外面に灰釉を施し底部は釉ハギする。胴部の2箇所釘彫がみられる。2968は肥前産の磁器染付小瓶で、口縁部内面から外面に透明釉を施す。外面には蜻唐草文と松葉文の染付がみられる。

#### SD-504(遺構:図255 遺物:図311)

B区西部で確認した南北溝跡で、区画溝であるSD-502に並行する。検出長6.73m、全幅56cm、深さ10cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は灰褐色シルトで、円礫を含んでいた。出土遺物には陶器39点(碗4、皿2、蓋2、火鉢1、瓶1、播鉢1など)、磁器26点(碗2、皿2、合子1、瓶1など)、近代磁器22点、土師器4点(火鉢1、焙烙3)、瓦質土器火鉢1点、軒平瓦1点など明治期の遺物がみられた。図示した遺物は2969・2970である。2969は能茶山窯の磁器蓋物で、全面に透明釉を施し、口縁部内面と暈付を釉ハギする。外面には圈線などの染付と高台内に「能茶山製」の銘がみられる。2970は金属製品匙で、柄部は断面方形、先端は薄く楕円形を呈するものとみられる。全面に金鍍金を施す。

#### SD-505(遺物:図311)

B区中央部で確認した東西溝跡で、西端は南北方向の区画溝であるSD-501に繋がり、東端はSD-506に繋がる。区画溝あるいは建物の基礎とみられる。基礎はSD-501と同様に溝内に丸太を数本並べて胴木とし木杭で留めている。胴木は溝内の北と南にあるが、南の胴木の上には20～40cm大の石灰岩を4段積み、最上部はコンクリートで固めていた。北側と南側の胴木の間には10cm大の石灰岩の割石が敷かれており、その上に現代のヒューム管が埋設されていた。北側の石積を崩してヒューム管を埋設した可能性が高い。検出長33.05m、掘方幅1.02m、掘方の深さ20cm、石垣幅65cm、石垣高80cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、植物片と木製品を多く含んでいた。出土遺物には陶器234点(碗11、皿2、蓋13、鉢17、播鉢8、鍋27、土瓶3、甕瓶1など)、磁器86点(碗5、皿8、蓋3、瓶4など)、近代磁器76点、土師質土器7点(白土器1、小皿1など)、土師器46点(火鉢6、焜炉2、焙烙7など)、瓦質土器火鉢1点、平瓦1点、石製品砥石1点、木製品漆器椀2点、金属製品、ガラス製品がみられた。基礎から出土した遺物は、大正期のもので、最終的な埋没は昭和期とみられる。図示した遺物は2971～2976である。2971は瀬戸・美濃産の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。内面には白化粧土による打刷毛目文、外面には白化粧土による文様がみられる。2972は陶器皿で、内外面に灰釉と鉄釉の掛け分けを行う。見込には型紙摺による鉄錆の花文がみられる。2973は陶器蓋で、全面にレモン色の釉を施し、かえり端部は釉ハギする。2974は瀬戸・美濃産の陶器甕瓶で、回転ナデ調整で口縁部を貼付する。口縁部内面から外面に灰釉を施す。2975は土師器十能で、筒状の把手を貼付する。杯部は内面が横ナデ調整、外面がナデ調整、把手は内外面ナデ調整である。2976は讃岐御厩系の瓦質土器焙烙で、粘土紐巻き上げ成形である。内面は横方向の板ナデ調整、口縁部は横ナデ調整、外面はナデ調整で指頭圧痕と木質の圧痕が残る。2977は土製品泥面子で、型成形である。上面には型による「憲」字がみられ、下面はナデ調整である。



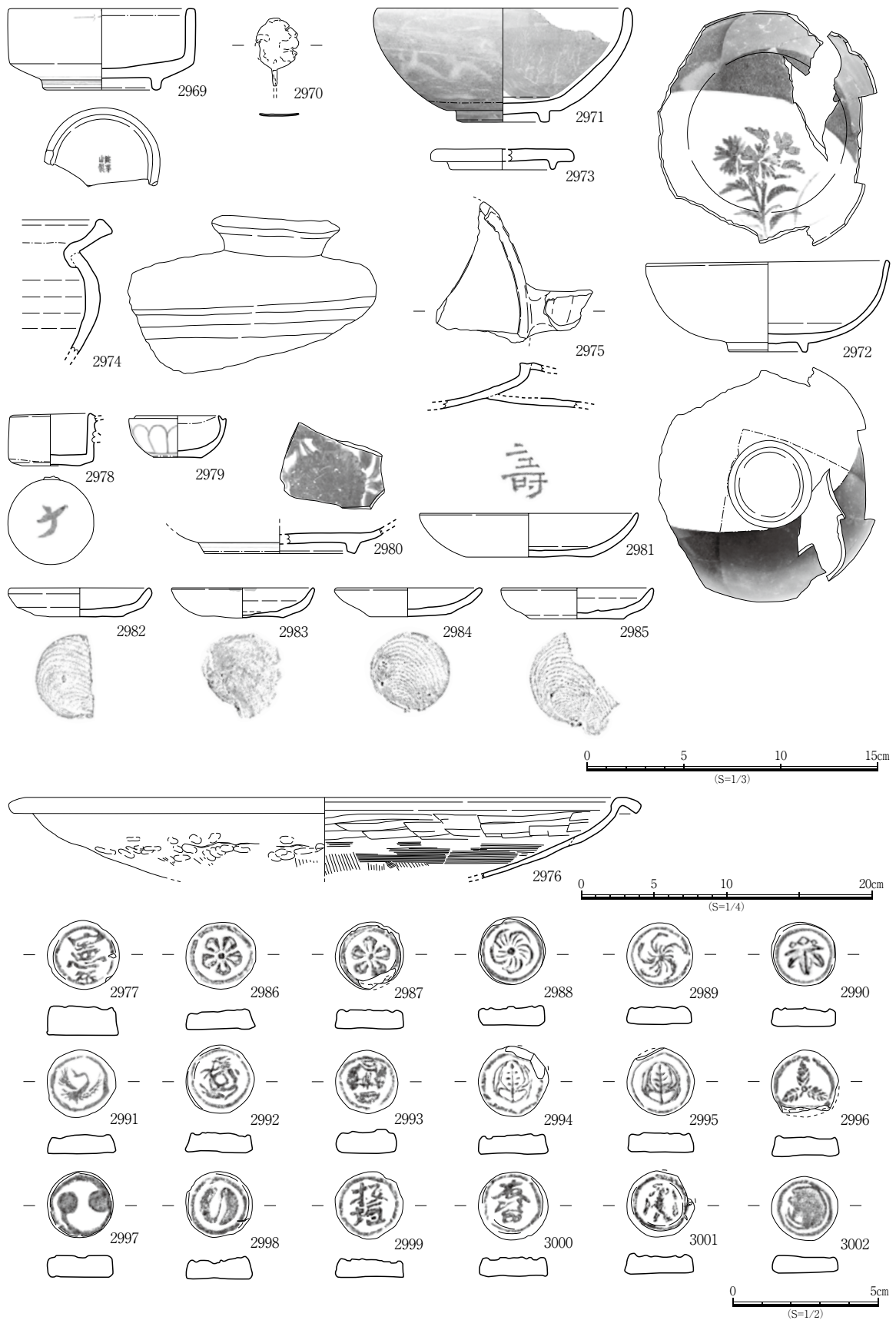


図311 SD-504・505・507出土遺物実測図



## SD-506

B区中央部で確認した南北溝跡で、SD-507に切られる。北端は東西方向の区画溝であるSD-505に繋がるものとみられる。構造はSD-505と同様で、浅い掘り込み内に胴木として丸太を数本並べて木杭で固定し、西肩部分はその上に20～60cm大の石灰岩を4段積み、最上部と石積間はコンクリートで固めていた。石積は東に面を有し、北端は西に折れて北に面を有するとみられるが、現代のヒューム管やコンクリートの枡が埋設されていたため不明瞭であった。検出長11.49m、検出幅2.26m、掘方の深さ35cm、石積高82cmを測る。掘方内の東側には胴木のみ一部残っており、当初は溝であり後に西のみ石積に作り替えたものとみられる。出土遺物より昭和期の遺構とみられる。

## SD-507(遺構：図312 遺物：図311)

SD-506の南で確認した東西溝跡で、現在の柳町の西の延長上に位置する。SD-506を切る。底面では江戸時代の溝跡を確認しており、また現代にはこの溝跡内に3～5cm大の礫を敷きヒューム管を埋設していた事から江戸時代から近代まで規模や性格を変えながら存続していた溝跡である。検出長23.73m、検出幅2.64m、深さ66cmを測る。埋土はにぶい黄

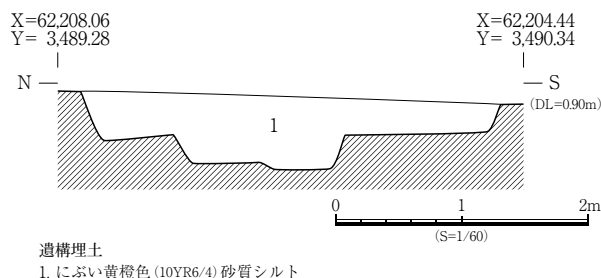


図312 SD-507

橙色砂質シルトで、多量の1～5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器258点(碗7, 皿12, 蓋10, 鉢14, 播鉢11, 甕5, 灯明受皿3, 鍋24, 土瓶3など), 磁器162点(碗13, 皿15, 蓋14, 紅皿3, 合子1, 瓶11など), 近代磁器63点, 土師質土器145点(白土器2, 小皿50など), 土師器22点(焜炉2, 焙烙1など), 瓦質土器火鉢1点, 瓦19点(軒丸瓦1, 軒平瓦3, 丸瓦4, 平瓦11), 石製品3点(硯1, 石筆2), 古銭2点, ガラス製品おはじき1点などがみられた。埋土からの出土遺物は攪乱の影響もあり近代から昭和期, 裏込からの出土遺物は大正期までの遺物がみられた。図示した遺物は2978～3002である。2978は陶器餌猪口で、把手は剥離する。内面から体部外面には灰釉を施し、底部外面は回転糸切り調整で、「ナ」字の墨書がみられる。2979は磁器染付合子で、全面に透明釉を施し、口縁端部と底部外面は釉ハギする。外面には半菊文の染付がみられる。2980は中国景德鎮窯系の青花皿で、内面から高台外面まで透明釉を施す。見込には花文、外面には圏線の染付がみられる。高台内は無釉で、放射状の皷痕が残る。2981は尾戸窯の白土器皿で、内面から体部外面は回転ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。見込は型押による陽刻の「寿」字文がみられる。2982～2985は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。2983は口縁端部に煤が付着する。2986～3002は土製品泥面子で、東端より纏まって出土している。型成形で、下面はナデ調整である。2986～2989は花文で、2986と2987, 2988と2989は同文である。2990は笹文か、2991は鶴文、2992は馬文か、2993は蟹文か、2994・2995は葉文か、2996は三ツ葉柏文、2997は二巴文、2998は「い」字文、2999は「板垣」か、3000は「友□□」字、3001・3002は摩耗するため文様不明である。

## SD-508

B区南西部で確認したコの字状を呈する溝跡あるいは建物基礎とみられ、南端は調査区外へ続く。SD-501・505と構造や軸方向が同じであり同時期に存在した可能性が高い。浅い掘方内に一辺15cmの建築材を転用した柄穴のある角材を胴木として2本敷き、その上に20～50cm大の石灰岩を2列に

並べて置いていた。コの字形内の北側中央部では井戸跡であるSE-501が確認されており、井戸に伴う施設の可能性がある。検出長(南北)5.16m, 全幅(東西)4.57m, 掘方幅0.72m, 深さ46cmを測る。出土遺物は陶器55点(碗7, 皿5, 蓋2, 鉢7, 播鉢1, 甕2, 鍋5など), 磁器32点(碗8, 皿6, 鉢1など), 近代磁器2点, 土師器火鉢1点, 瓦質土器3点(火鉢1など), 瓦9点(平瓦1, 棧瓦8), 石製品砥石2点, 鉄釘12点などがみられた。基礎埋土からの出土遺物は近代, 石積間からの出土遺物は近代から昭和期である。

SE-501 (遺構: 図313)

SD-508の内側で確認した井戸跡で、湧水が著しく底面までは調査できていない。掘方は楕円形を呈し、長径1.78m, 短径0.95mを測る。掘方から出土した遺物は陶器2点(碗1, 皿1), 磁器3点(小杯1, 細片2), 平瓦1点がみられ、江戸時代後期とみられる。井戸跡は掘方南部で検出し、素掘りとみられ、平面形態は楕円形で長径1.00m, 短径0.96mを測る。井戸内には方形に組んだ木筒を入れており、その上に円形の孔がある木蓋を乗せていた。埋土からの出土遺物は埋土1でみられ、陶器2点(皿1, 細片1), 近代陶器片1点, 近代磁器片2点, 銅製品釘1点で明治期のものであった。

SX-505

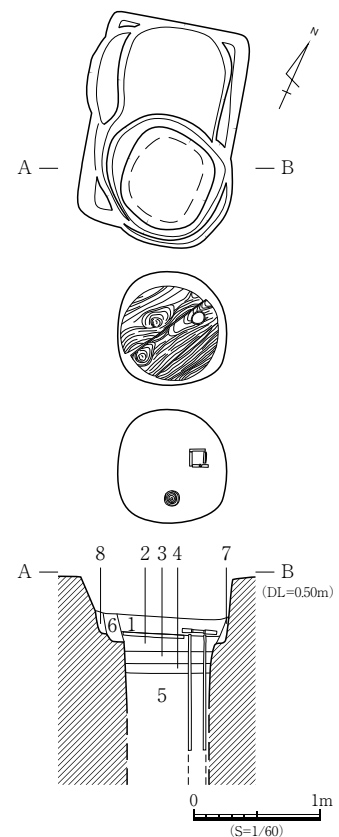
B区北部で確認した遺構で、不整形を呈し、全長5.15m, 全幅2.96m, 深さ52cmを測る。東端には石列がみられ、中央には東西方向から北へ湾曲する石組の溝があり、底面には平瓦が敷かれていた。また、溝跡の北側には隣接してレンガが方形に組み込まれた施設があった。石組の下から出土した遺物には陶器10点(碗1, 皿1, 播鉢2, 鍋蓋1など), 磁器5点(小杯1, 細片4), 近代磁器2点(皿1, 銚子1), 土師器片3点, 土師質土器片2点, ボタン1点がみられ、大正期の遺物が出土している。

P-502 (遺物: 図314)

B区北西部で確認したピットで、一部調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し、長径84cm, 検出幅43cm, 深さ50cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、中粒砂と少量の円礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器4点(鍋1, 土瓶1, 細片2), 磁器6点(碗1, 皿1, 細片4), 土師器4点(火鉢3, 焙烙1), ガラス片がみられた。図示した遺物は3003で土師器焜炉である。出窓を有する焜炉で、外面には赤彩を施す。調整は内外面とも横方向のナデ, 脚は横ナデ, 底部外面には板状圧痕が残る。窓下部には刻印がみられ、内面には煤が付着する。

P-503 (遺物: 図314)

P-502の東で確認したピットで、SK-507に切られ、SK-506を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径99cm, 短径76cm, 深さ34cmを測る。埋土は褐灰色粗粒砂質シルトで、0.5cm大の礫と1~3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器26点(碗9, 皿1, 猪口1, 鉢2, 播鉢1, 急須1など), 磁器10点(碗1, 火入1など), 近代磁器片1点, 土師質土器9点(皿1, 小皿3など), 瓦質土器10点(火鉢2など)がみられた。



- 遺構埋土
1. におい黄褐色 (10YR5/3) 砂質礫で、極粗粒砂が混じり0.5cm大の礫を多く含む
  2. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルトで、微粒砂が混じる
  3. 青灰色 (5PB5/1) 粘土質シルトで、0.3cm大の礫を含む
  4. 灰色 (N4/0) 砂質シルトで、粗粒砂を多く含む
  5. 明褐色 (5B4/1) 粗粒砂で、6cm大の玉砂利を敷いている
  6. 暗青灰色 (5Y4/1) 砂質礫で、極粗粒砂が混じり、0.5~3cm大の礫を含む(掘方)
  7. におい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルトで、1cm大の風化礫と2cm大の円礫を多く含む(掘方)
  8. におい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含む(掘方)

図313 SE-501

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

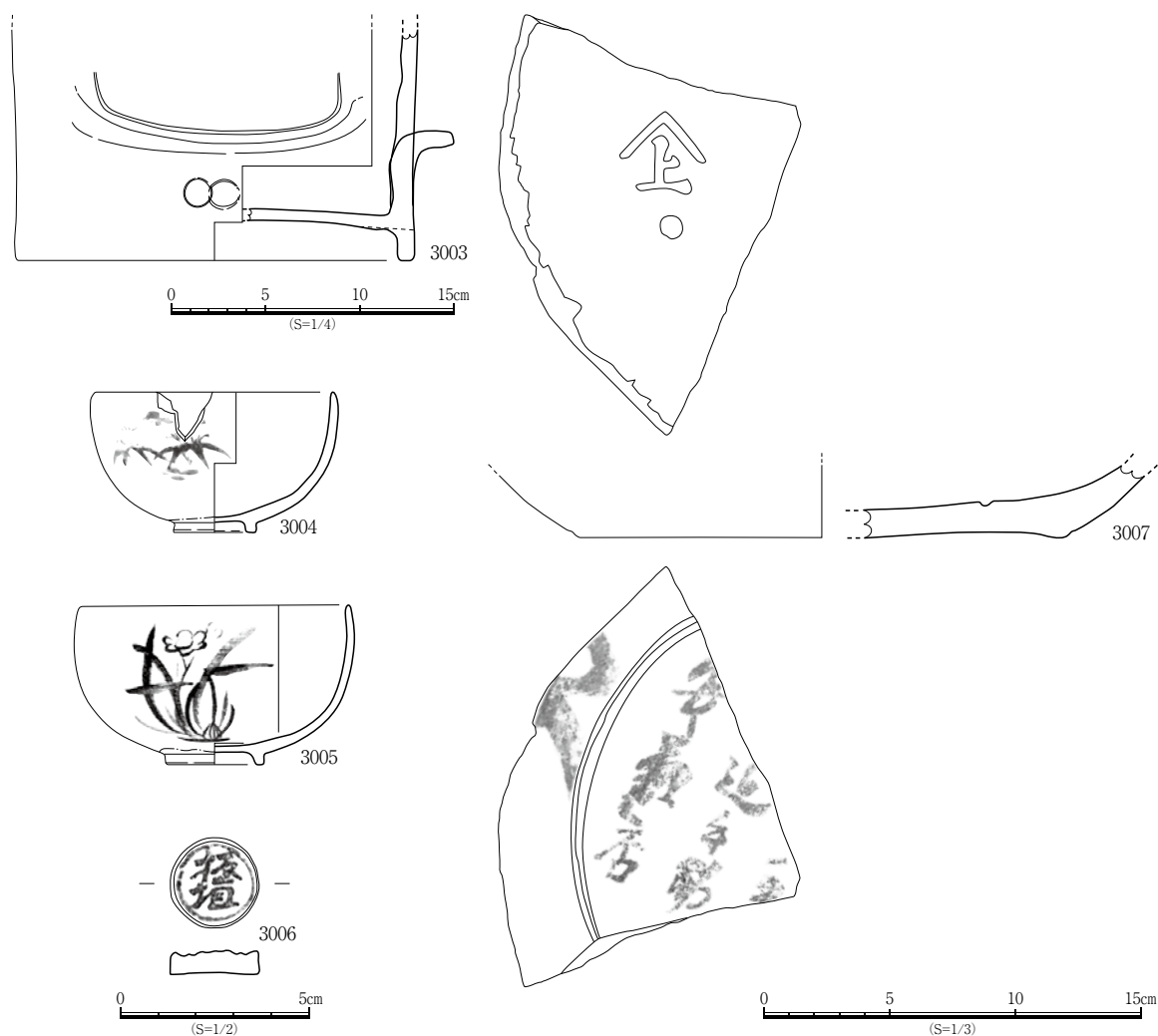


図314 P-502～505出土遺物実測図

図示した遺物は3004・3005である。3004は京都・信楽系の陶器半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には呉須と鉄錆による笹文がみられる。3005は京都産の陶器半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には呉須と鉄錆による草花文がみられる。

P-504(遺物: 図314)

B区北東部で確認したピットで、一部他のピットに切られる。平面形態は楕円形を呈し、長径56cm、短径38cm、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫とハンダ、炭化物を含んでいた。出土遺物には磁器皿1点、土製品泥面子1点、鉄釘2点がみられた。図示した遺物は3006で土製品泥面子である。型成形で、上面には「板垣」字、下面はナデ調整である。

P-505(遺物: 図314)

P-504の東で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、長径42cm、短径39cm、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、1～5cm大の礫とハンダ・炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片2点、近代陶器2点(鉢1, 火鉢1), 近代磁器2点(皿1, 銚子1), 軒平瓦1点、鉄釘1点がみられた。図示した遺物は3007で陶器鉢である。内面は鉄釉を施し、見込には刻印と目痕がみられる。外面は回転削り調整で、体部には文字の一部とみられる墨書、底部には「追手筋」「豊店」の墨書がみられる。

## P-506(遺物:図315)

B区西部で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.66m、深さ65cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、3cm以下の円礫と少量の10cm大の角礫を含んでいた。出土遺物には陶器20点(蓋2, 鉢4, 鍋2, 火鉢1など)、磁器2点(皿1, 小杯1)、近代磁器16点、土師質土器皿1点、土師器13点(火鉢2, 焜炉1, 七輪2など)、瓦質土器3点(火鉢2, 焜炉1)、瓦2点(軒平瓦1, 平瓦1)がみられた。図示した遺物は3008～3010である。3008は陶器火鉢で、肩部には1箇所円孔、2箇所にハート形の透かしがあく。回転ナデ調整で、外面体部下半と底部外面は回転削り調整を加える。口縁端部から体部外面には鉄釉を施し、肩部には型押による文様がみられる。3009は肥前産の青磁大皿とみられ、全面に青磁釉を施し、口鑄で、内面には片彫による雲文がみられる。3010は土師器焜炉で、円筒形を呈する。前方には楕円形の窓を有し、口縁部内面には3箇所に楕円形の突起、底部には脚を貼付する。調整は内部構造が回転ナデ、口縁部が横ナデ、外部構造は内面が横方向のハケ、外面には横方向のヘラナデによる文様がみられ、白色の釉を施す。

## P-507(遺物:図315)

P-506の東で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、長径66cm、短径61cm、深さ50cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、3cm以下の円礫と少量の10cm大の角礫を含んでいた。出土遺物には陶器20点(皿1, 蓋1, 片口鉢1, 甕1など)、磁器2点(碗1, 細片1)、近代陶器急須1点、近代磁器35点、青磁1点、土師質土器皿1点、土師器焜炉5点、瓦質土器焜炉1点、瓦2点がみられ、明治期の遺構である。図示した遺物は3011で、中国景德鎮窯系とみられる青磁染付小杯で、内面には透明釉、外面には青磁釉を施す。口鑄で、内面には櫛歯文と花文、外面には花文と雷文・圏線の染付がみられる。

## P-508(遺物:図315)

B区中央部で確認したピットで、平面形態は楕円形を呈し、長径67cm、短径52cm、深さ56cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器103点(皿1, 蓋2, 鉢3, 鍋9, 急須2, 七輪1など)、磁器8点(碗1, 皿2, 蓋1, 段重1など)、近代磁器9点、土師質土器杯1点、土師器60点(火鉢6, サナ3など)、瓦質土器火鉢1点、平瓦2点がみられ、大正期の遺構である。図示した遺物は3012～3015である。3012は陶器行平鍋で、把手と片口を貼付し鉄釉を施す。回転ナデ調整で、体部外面から底部外面は回転削り調整を加える。口縁部外面から体部外面には鉄釉を施し、飛鉋文がみられる。3013は播磨産の陶器焜炉で、円筒形を呈し、二重構造である。外部構造の窓は楕円形で、底部には3箇所に脚を貼付する。外部構造は回転ナデ調整で、底部外面は回転糸切り調整である。外部構造の口縁端部から脚部外面には透明釉を施し、脚外面には方形枠に「姫路」の刻印がみられる。内部構造には幅2cm、高さ8cmを測る方形の窓が付き、上部には4箇所に円孔があく。内部構造の調整は回転ナデで、上部内面には縦方向の櫛描文がみられる。口縁部内面には台形の突起を貼付する。突起はヘラで成形したものを粘土塊の上に貼付し、上面には透明釉を掛ける。3014は肥前有田産とみられる磁器色絵皿で、見込は波に麒麟文の染付、口縁部内面には朱・墨・緑・紫色の松竹梅文の上絵付、外面は宝文と圏線の染付、高台内は圏線の染付がみられる。3015は土師器サナで、径1.4cmの円孔が7箇所にあく。型成形とみられ上面には縞状の圧痕と一部に布目痕が残る。側面は無調整で、下面はナデ調整である。

## その他近代遺構出土遺物(遺物:図316)

3016は陶器の不明品で、中空で上下に1孔ずつ、側面に3段の円孔がみられ、計14孔があく。側面

3. 遺構と遺物 (3) B-1区

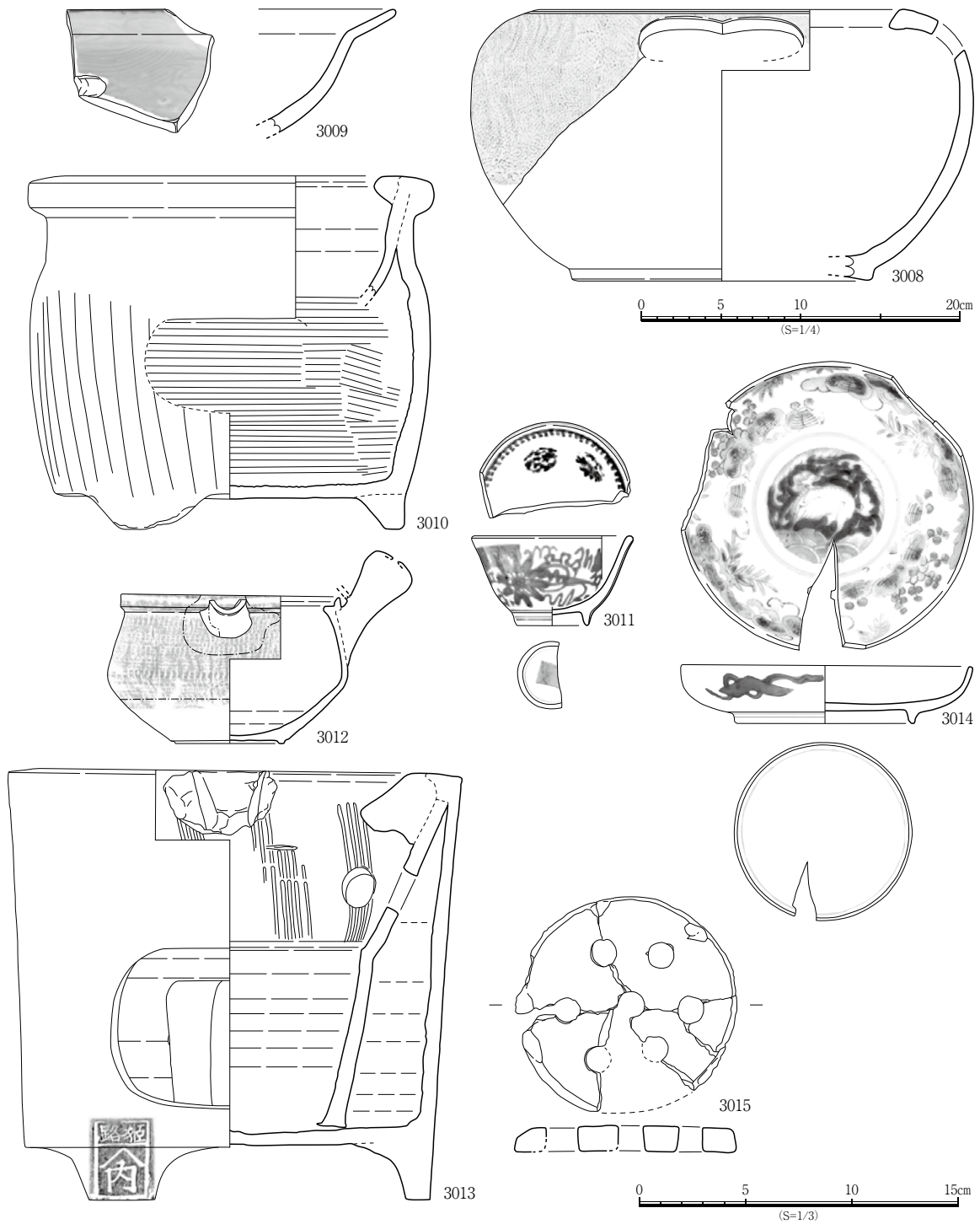


図315 P-506～508出土遺物実測図

には縞状の陰刻がみられる。B-1区南東部の大正期の遺構より出土した遺物で、同じ遺構より同様の物が複数個出土している。3017は磁器染付合子で、全面に透明釉を施し、口縁端部と畳付は釉ハギする。外面には梅樹文と萩文とみられる染付が描かれる。3018は肥前産の磁器染付瓶で、外面に透明釉を施し、畳付は釉ハギする。外面には草花文と圏線の染付と「找」「弘」とみられる釘彫が施される。3019は肥前産の磁器染付油壺で、口縁部内面から外面に透明釉を施し、外面に樹木文と蝶文

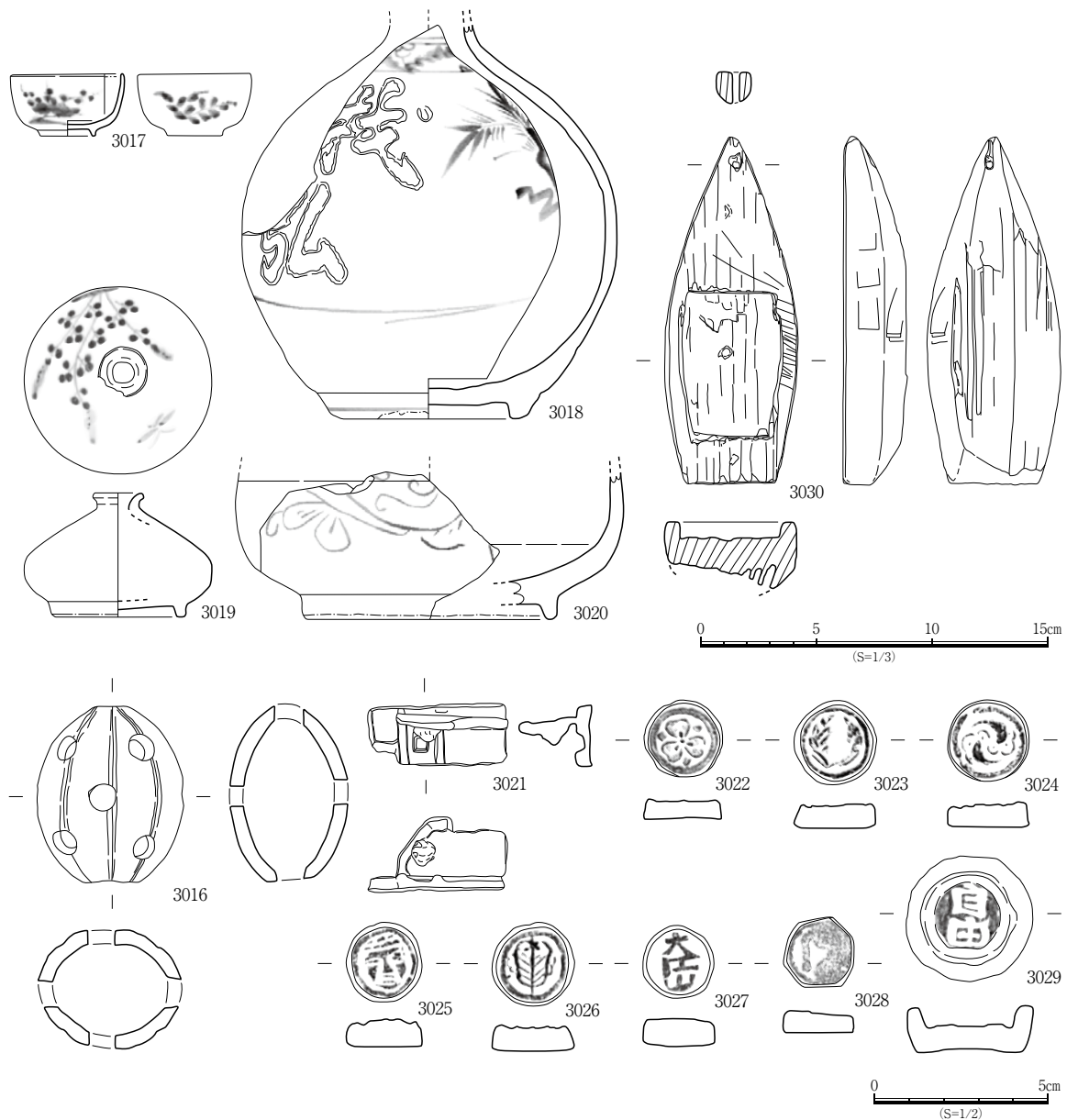


図316 その他近代遺構出土遺物実測図

の染付がみられる。3020は肥前産の青磁鉢で、全面に青磁釉を施し畳付は釉ハギする。外面には陰刻による草花文がみられる。3021は土製品ミニチュアで、箱庭道具の水場形とみられる。上部は型成形で、一部に透明釉および白色の釉が掛かる。下面はナデ調整である。3022～3028は泥面子である。型成形で、下面はナデ調整である。3022は花文、3023は草花文か、3024は大根文、3025は人面、3026は軍配文である。3027は周縁がなく、「大江山」の陽刻の文字がみられる。3028は六角形を呈し、文字とみられるが摩耗するため不明である。3029は泥面子型とみられ、内面は型成形、外面はナデ調整である。「自由」の文字の型である。3030は舟形木製品で、表面には僅かに赤彩が残る。船首には円孔が貫通し、上面には方形の彫込があり、中央には貫通しない円形の孔がみられる。



(4) B-2区

B-2区は調査地の南東部に位置し、17世紀には山内家、それ以降は南北に長い三つの屋敷地に分かれており、その北部の一部のみが今回の調査地になっている。三つの屋敷地の内、西の屋敷地は絵図によるとA区に位置するものとみられるが、A区には屋敷境の溝跡が確認されおらず、B区の南側のみをB-2区として報告し、B-1区とB-2区の屋敷境の溝跡はB-2区として報告した。また、B-2区として報告するのは三つの屋敷地に分かれている3・4面の時期のみであり、その前後の時期である1・2・5面の遺構はすべてB-1区として報告している。



図317 B-2区位置図

この時期の絵図である『高知郭中図』（1750年頃）、『高知御家中等籠図』（享和元年）、『高知郭中図』（幕末）には、東の屋敷地は18世紀半ばには「御用ヤシキ」、19世紀初頭には「御人賦所」、幕末には「引合場」と描かれており、藩の施設があったものとみられる。中央の屋敷地は18世紀半ばには「松下」、19世紀初頭には「松下左次兵衛」、幕末には「医学館」と描かれている。医学館は村田玄明が役職を務めた藩の医学学校である澤流館の可能性もある。西の屋敷地は18世紀半ばには「高屋所左衛門」、19世紀初頭には「尾崎三郎エ門」、幕末には「尾崎彦四郎」と描かれており武家屋敷として利用されていたものとみられる。

B-2区は調査面積も少なく、屋敷の縁辺部に位置するため建物跡の確認には至っていないものの、屋敷境の溝跡などが確認されている。

① 3面

18世紀前葉から後葉にかけての遺構である。屋敷地の縁辺部に当たるためB-1区に比べ検出された遺構は少ない。

SK-343

B-2区中央部で確認された土坑である。平面形態は不整隅丸方形を呈し、長辺1.67m、短辺1.38m、深さ28cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、4cm以下の円礫と植物片を多く含んでいた。出土遺物には陶器10点(碗1, 皿1, 火入1, 細片7), 磁器6点(碗2, 蕎麦猪口1, 細片3), 土師質土器6点(皿1, 小皿2, 細片3), 瓦5点(丸瓦1, 平瓦4)がみられた。

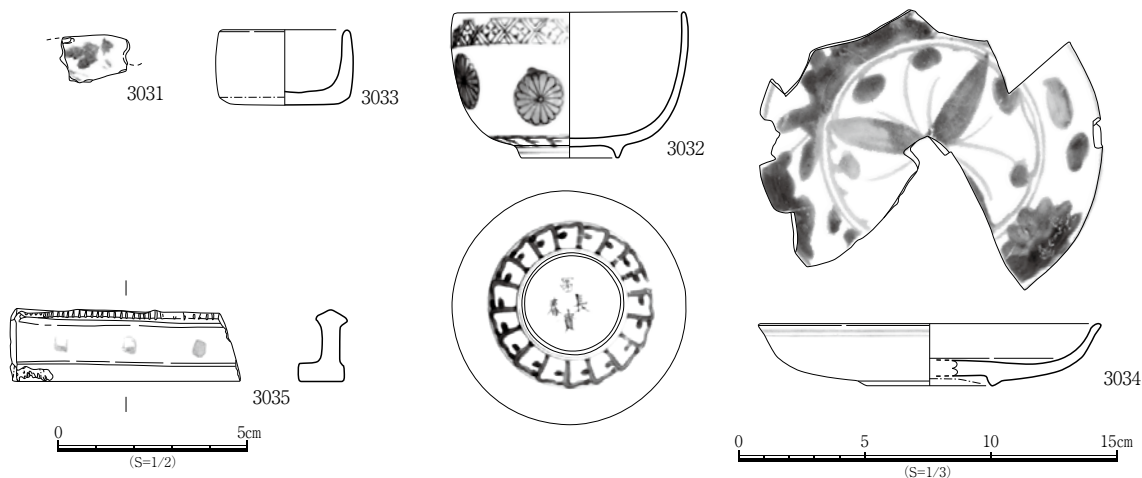


図318 SK-346～348出土遺物実測図

SK-344

SK-343の南で確認された土坑で、南は調査区外へ続く。平面形態は不整隅丸方形を呈し、検出長1.74m、全幅1.14m、深さ20cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで、1cm以下の円礫を少し含んでいた。出土遺物には陶器8点(碗3, 皿1, 播鉢1, 細片3), 磁器5点(碗2, 細片3)がみられた。

SK-345

SK-344の北東で確認された土坑で攪乱に切られる。平面形態は不整隅丸方形を呈し、検出長1.69m、検出幅1.18m、深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、多量の円礫と角礫、瓦片と木片を少し含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1, 鉢1), 磁器皿1点, 土師器火鉢2点がみられ、陶器色絵碗や練り込み手の土師器火鉢が出土している。

SK-346(遺物:図318)

B-2区北部で確認された土坑で、江戸時代後期の屋敷境の溝跡であるSD-426に切られる。平面形態は不整隅丸方形を呈するものとみられ、検出長1.19m、検出幅0.62m、深さ11cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器6点(向付1, 細片5), 磁器碗5点, 土師器片1点, 土師質土器小皿2点がみられた。図示した遺物は3031・3032である。3031は志野焼向付である。口縁部の破片で、口縁部は波状をなすものとみられ、円形の切り込みが入る。全面に長石釉を施し、内面には鉄錆による文様がみられる。3032は肥前有田産の磁器染付丸碗で、外面に菊文と蓮弁・四方禪文の染付、高台内には「富貴長春」の銘がみられる。

SK-347(遺構:図319 遺物:図318)

B-2区東部で確認した土坑である。平面形態は不整隅丸方形を呈し、長辺2.21m、短辺1.25m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器39点(碗4, 皿2, 猪口1, 瓶1, 鉢1, 播鉢4, 甕4, 鍋1, 飼育具1, 細片20), 磁器44点(碗4, 皿7, 猪口1, 瓶1, 鉢1, 細片30), 土師質土器9点(小皿1, 細片8), 瓦質土器片1点, 瓦4点(軒丸瓦1, 丸瓦1, 細片2), 土製品細片3点がみられた。図示した遺物は3033・3034である。3033は尾戸窯とみられる陶器餌猪口で、内面から体部外面に灰釉を施す。3034は肥前産の磁器染付皿で、見込には花卉文と圏線、内面は草花文、外面には圏線の染付がみられる。

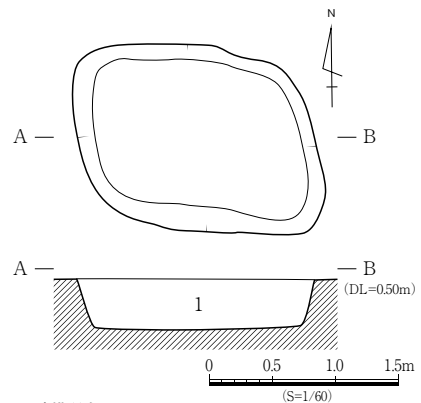


図319 SK-347

SK-348(遺物:図318)

B-2区東端で確認した土坑で、一部は調査区外へ続く。SD-315に切られる。平面形態は溝状を呈し、検出長6.00m、検出幅1.35m、深さ32cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5~5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器7点(鉢2, 播鉢1, ミニチュア1, 細片3), 磁器16点(碗2, 皿1, 細片13), 土師質土器9点(皿3, 細片6), 瓦質土器片5点がみられた。図示した遺物は3035で陶器ミニチュアである。箱庭道具とみられ、塀形を呈する。断面はL字状を呈し、屋根は刻目で表現する。屋根と窓は鉄錆を塗り、その後下面を除き透明釉を施す。

SD-313

B-2区西端で確認した東西溝跡で、SD-301に切られる。屋敷境の溝跡とみられ、江戸時代後期

3. 遺構と遺物 (4) B-2区

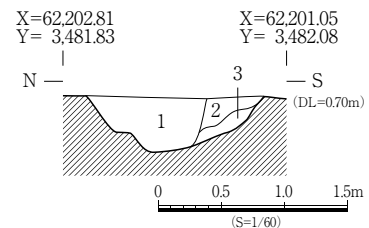
の東西方向の屋敷境の溝跡であるSD-426とほぼ同じ位置で検出された。また、東で確認したSD-314と繋がっていた可能性が高い。検出長8.21m、検出幅0.66m、深さ11cmを測る。北肩の一部では石列を確認しており、石組の溝跡であったものとみられる。石は40～50cm大の石灰岩またはチャートで、わずかに裏込とみられる割石も確認された。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器碗1点、磁器2点(碗1, 小杯1), 土師器片2点がみられた。

SD-314

B-2区中央部で確認した東西溝跡である。SD-313の延長上に位置し屋敷境の溝跡とみられる。全長12.22m、全幅1.26m、深さ25cmを測る。埋土は黄灰色シルト質細粒砂で、多量の0.5cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片3点、磁器3点(皿1, 細片2), 土師質土器小皿1点がみられた。

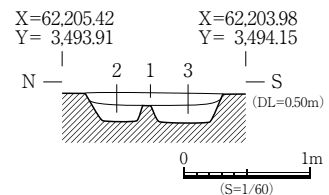
SD-315(遺構: 図320・321 遺物: 図322・323)

B-2区東部で確認したL字状を呈する溝跡で、両端は調査区外へ続く。東の屋敷地の北西部の屋敷境とみられる。検出長23.43m、検出幅1.97m、深さ63cmを測る。埋土は3層に分かれ、コーナー部分は3回の掘り直しの痕跡がみられる。出土遺物には陶器197点(碗36, 皿6, 蓋4, 小杯1, 猪口1, 瓶2, 鉢16, 播鉢3, 匣鉢1, 甕6, 仏花器1, 鍋5, 乗燭1, 人形1, 台1, 細片112), 磁器114点(碗15, 皿15, 蓋3, 小杯1, 猪口5, 蕎麦猪口2, 紅皿2, 瓶3, 鉢1, 細片67), 青花皿1点, 土師質土器119点(小皿42, 細片77), 土師器14点(火鉢2, 焜炉1, 焙烙2, 細片9), 瓦11点(軒丸瓦2, 丸瓦2, 平瓦1, 棧瓦1, 細片5), 土製品型1点, 金属製品1点がみられた。図示した遺物は3036～3070である。3036は陶器碗で、内面には灰釉を施す。高台内には「い」の墨書がみられる。3037は京都・信楽系の陶器半球形碗で、内面から高台付近まで灰釉を施し、外面には鉄錆による文様がみられる。3038は陶器半球形碗で、内面から高台付近まで光沢のある灰釉を施す。3039～3041は尾戸窯の陶器丸碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。3039は外面に丸彫による文様, 高台内に「廿四文」の墨書がみられる。3042は唐津系灰釉陶器皿で、内面から高台付近まで灰釉を施す。見込には砂目痕がみられる。3043は陶器皿で、内面から高台付近まで灰釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。見込には鉄錆による文様がみられる。3044は瀬戸・美濃産の陶器輪花皿で、長石釉と鉄釉の掛け分けを行う。口縁端部と見込には鉄錆による文様がみられる。3045は絵唐津大皿で、全面に灰釉を施し、見込には錆絵がみられる。3046は陶器合子蓋で、全面に灰釉を施し、口縁端部は釉ハギする。天井部外面には鉄錆による文様がみられる。3047は肥前産の陶器花瓶で、口縁部内面から体部外面は鉄釉, 体部外面から底部外面は白化粧土を刷毛塗り後に透明釉を施す。3048は陶器台で、体部に鏝が巡る。全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。3049は肥前産の磁器皿で、内面にコンニャク印判による菊花文がみられる。3050は磁器染付合子蓋で、全面に透明釉を施し、口縁端部は釉ハギする。天井部には紐状の摘を貼付し、外面には松文と圏線の染付を施す。3051は肥前系の磁器染付猪口で、外面に草花文の染付がみられる。3052は肥前産の磁器染付猪口で、外面に花文と圏線の染付がみられる。3053は中国景德鎮窯系の青花皿で、見込



- 遺構埋土
1. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂で、0.5～2cm大の礫と多量の炭化物を含む
  2. 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルトで、粗粒砂と5cm大の礫を多く含む
  3. 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトで、粗粒砂を多く含む

図320 SD-315



- 遺構埋土
1. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土で、2～8cm大の礫と炭化物を少し含む(SD-315)
  2. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と炭化物を多く含む(SD-316)
  3. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と炭化物を多く含む(SD-317)

図321 SD-315～317

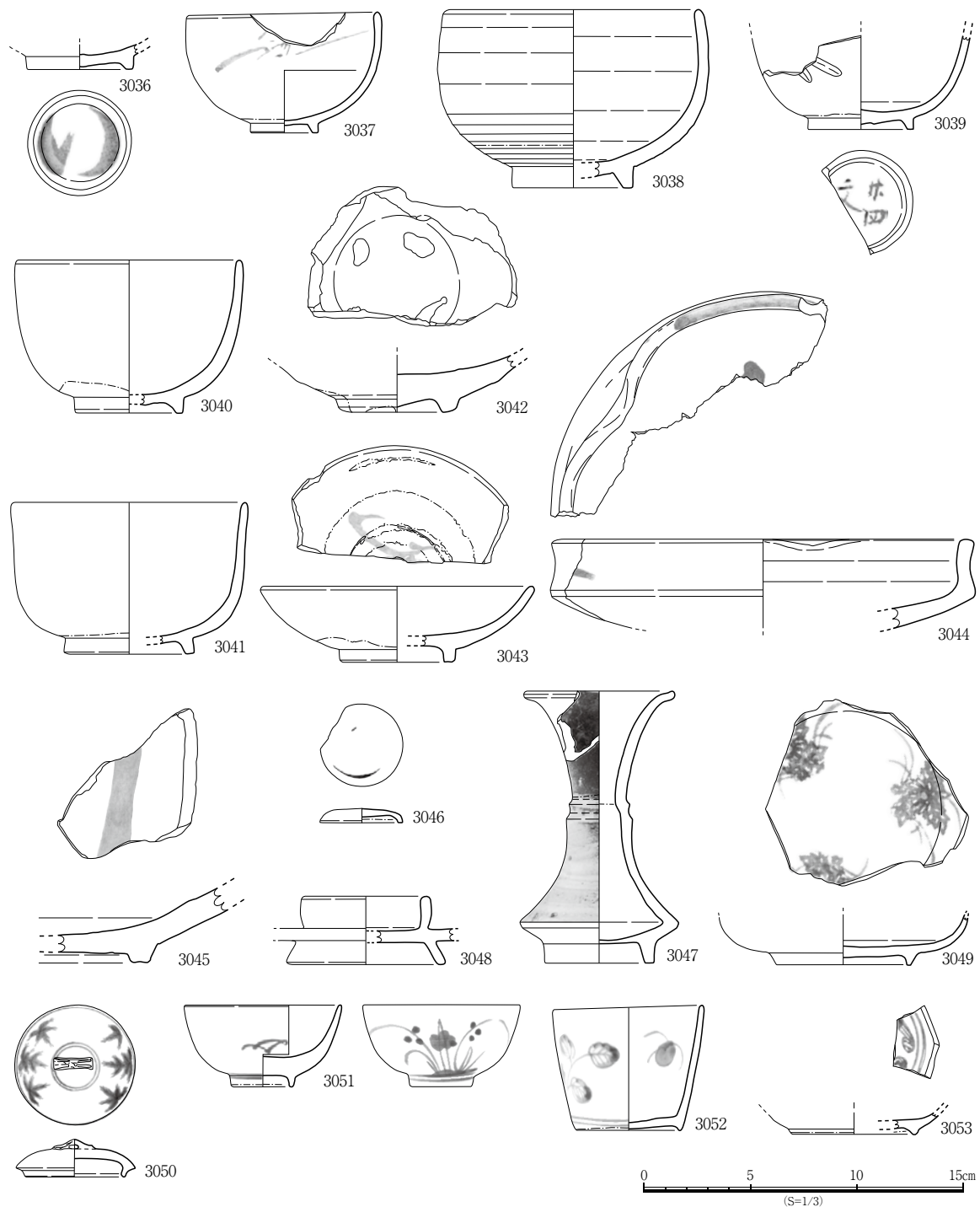


図322 SD-315出土遺物実測図

には玉取獅子文と圈線の染付がみられる。3054～3067は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。3058～3067は口縁部に煤が付着する。3068は軟質施釉陶器乗燭で、内面から体部外面に灰釉を施す。口縁部には帯状の粘土を貼付し、中央に径5mmの円孔をあける。3069は土製品人形で、尼とみられる。型成形で中実である。側面に型をあわせた痕跡が残る。下面を除き緑釉を施す。3070は土製品型である。内面は型成形で、松文の陰刻がみられる。外面はナデ調整である。

3. 遺構と遺物 (4) B-2区

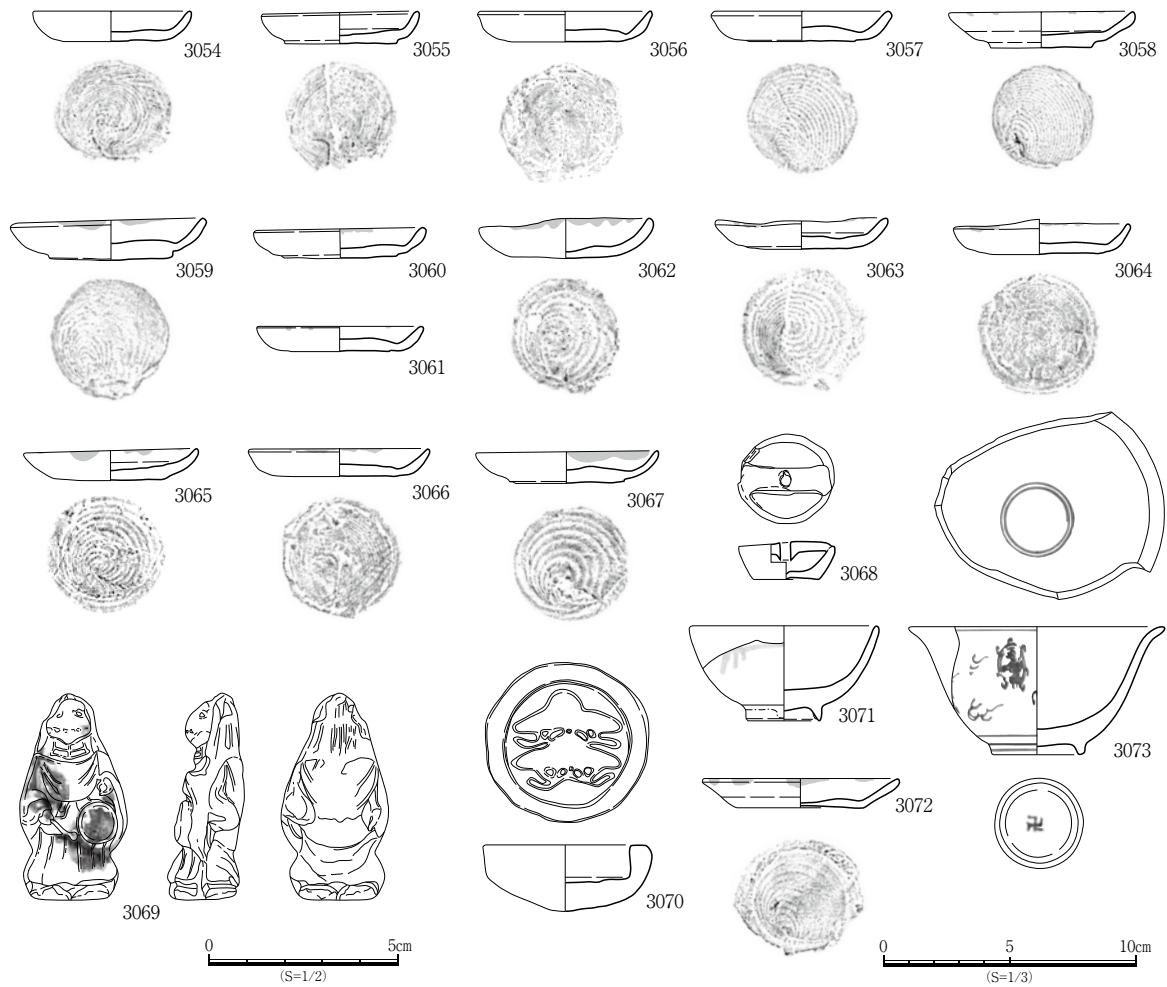


図323 SD-315～317出土遺物実測図

SD-316(遺構：図321 遺物：図323)

SD-315の底で確認した東西溝跡で、屋敷境の溝跡とみられる。検出長4.81m、検出幅0.32m、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片4点、磁器2点(猪口1、細片1)、土師質土器2点(小皿1、細片1)、土師器片2点、鉄釘1点がみられた。図示した遺物は3071・3072である。3071は肥前系の磁器染付猪口で、外面に笹文の染付がみられる。3072は土師質土器小皿で、回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部の一部に煤が付着する。

SD-317(遺構：図321 遺物：図323)

SD-316の南で確認した東西溝跡で、SD-315の底で検出した。SD-316と同様に屋敷境の溝跡とみられる。検出長4.81m、検出幅0.63m、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片3点、磁器5点(碗2、細片3)、須恵器片1点がみられた。図示した遺物は3073で肥前産の磁器染付小碗である。見込には二重圏線の染付、外面にはコンニャク印判による文様と雲文の染付、高台内は「卍」の染付がみられる。

SX-325(遺物：図324)

B-2区西部で確認した遺構である。平面形態は不整形を呈し、全長3.84m、全幅1.55m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、多量の円礫と少量の風化砂岩粒と炭化物を含んでいた。出

土遺物には陶器25点(碗4, 皿3, 鉢2, 播鉢2, 甕1, 細片13), 磁器13点(皿4, 小杯4, 細片5), 土師質土器8点(皿2, 小皿3, 細片3), 土師器14点(火鉢2, 焜炉1, 焙烙2, 細片9), 瓦11点(軒丸瓦2, 丸瓦2, 平瓦1, 棧瓦1, 細片5)がみられた。図示した遺物は3074で肥前産の白磁皿である。内面に陰刻による植物文がみられる。

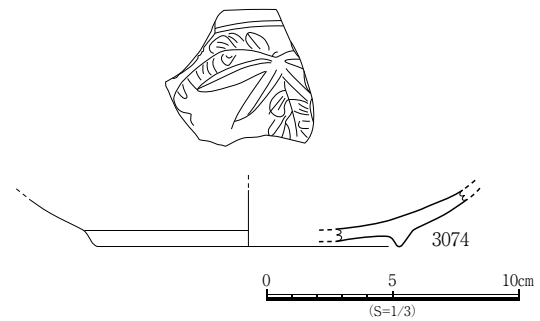
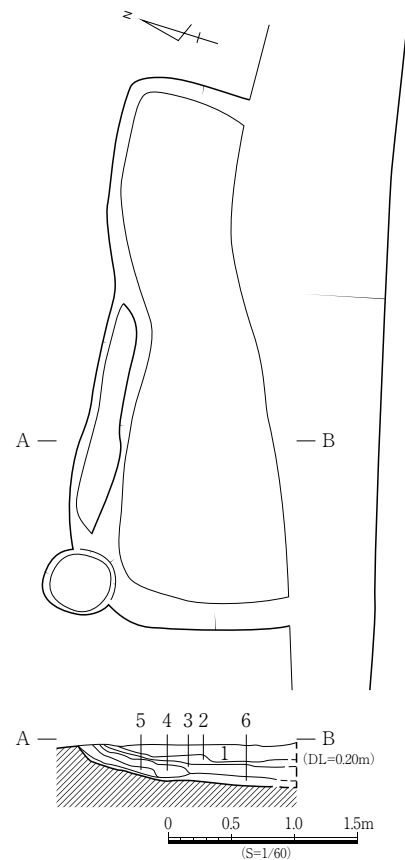


図324 SX-325出土遺物実測図

SX-326(遺構:図325 遺物:図326)

SX-325の南で確認した遺構で, 南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長4.21m, 検出幅1.76m, 深さ50cmを測る。埋土は6層に分かれ, 上層には少量の円礫と1cm大の焼土粒と炭化物, 下層には4cm大の焼土粒と多量の炭化物・炭化材・瓦片を含んでいた。出土遺物には陶器57点(碗10, 皿8, 蓋1, 鉢5, 播鉢3, 匣鉢1, 甕2, 細片27), 磁器45点(碗6, 皿8, 小杯4, 合子蓋1, 鉢3, 細片23), 土師質土器20点(皿1, 小皿4, 細片15), 土師器2点(焼塩壺1, 細片1), 瓦4点(平瓦1, その他1, 細片2), 金属製品2点(釘1, 把手1)がみられた。図示した遺物は3075~3086である。3075は肥前内野山窯の陶器皿で, 内面は銅緑釉, 外面には透明釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。釉ハギ部分には砂目痕が残る。3076も肥前内野山窯の陶器中皿で, 全面に透明釉を施し, 畳付は釉ハギする。畳付と見込には砂目痕が残る。3077は陶器鉢で, 内面から口縁部外面に灰釉を施したのち内面に白化粧土を刷毛塗りし, 透明釉を掛け, 一部に銅緑釉を流し掛けする。見込には砂目痕が残る。3078は肥前産の焼締陶器甕で, 肩部に浅い多条の沈線がみられ, 円形の浮文を貼付する。内面が格子状の叩き調整, 口縁部が横ナデ調整, 外面は回転ナデ調整である。3079は肥前産の磁器皿で, 全面に瑠璃釉を施す。内面には丸彫による縞文, 口縁端部は刻目状の文様がみられる。3080は肥前産とみられる白磁皿で, 全面に白磁釉を施し, 畳付は釉ハギする。3081は中国産の青磁大皿とみられ, 全面に青磁釉を施す。3082は磁器小杯で, 全面に白磁釉を施し, 畳付は釉ハギする。3083は肥前有田産の磁器色絵合子蓋で, 型成形である。内面には透明釉を施し, 口縁部は釉ハギする。外面は型押による陽刻の亀甲文と獅子文がみられ, 緑色の彩色を施す。3084は土師器焼塩壺で, 輪積成形である。内面は粗いナデ調整で, 指頭圧痕と布目痕が残る。外面はナデ調整で, 刻印がみられる。3085・3086は木製品漆器椀で, 3085は赤塗, 3086は黒塗である。



- 遺構埋土
1. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルトで, 中粒砂が混じり1~2cm大の円礫を含む
  2. 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘土質シルトで, 腐植を非常に多く含む
  3. 灰白色 (10YR7/1) シルトで, 粗粒砂が混じる
  4. 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘土質シルトで, 竹や木の皮等の腐植を非常に多く含む
  5. 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルトで, 粗粒砂が混じる
  6. 黒色 (5Y2/1) 粘土質シルトで, 腐植を多く含む

図325 SX-326

SX-327(遺物:図327)

SX-326の東で確認した遺構で, 南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長4.39m, 検出幅1.65m, 深さ28cmを測る。埋土は6層に分かれ, 下層には腐植を多く含んでいた。出土遺物に



3. 遺構と遺物 (4) B-2区

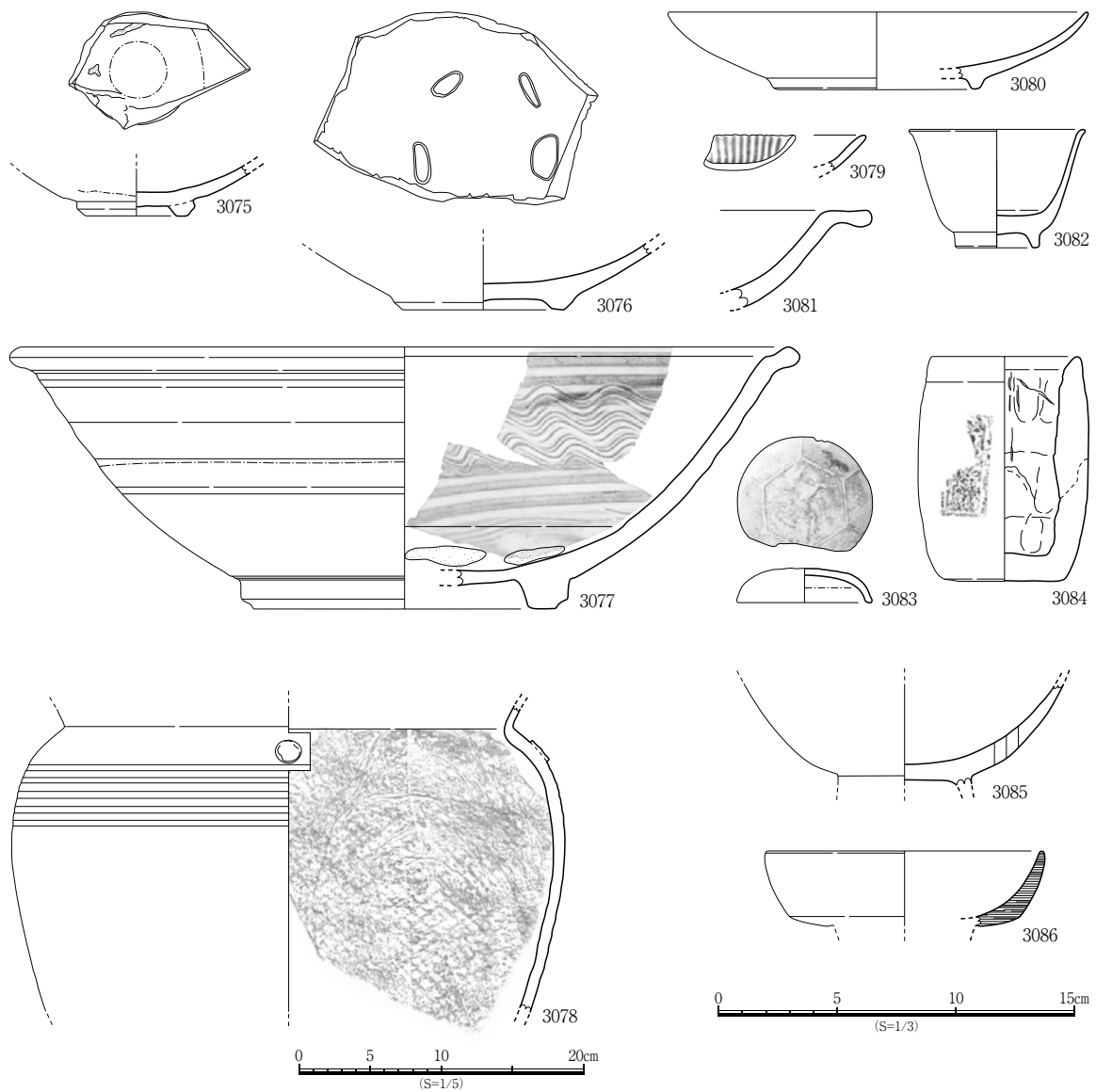


図326 SX-326出土遺物実測図

は陶器34点(碗2, 皿1, 蓋5, 鉢1, 播鉢1, 鍋8, 土瓶1, 細片15), 磁器17点(碗2, 皿3, 蓋1, 小杯2, 鉢1, 細片8), 土師質土器片2点, 土師器18点(火鉢3, 五徳4, 細片11), 瓦質土器火鉢1点, 瓦2点(軒丸瓦1, 平瓦1), 金属製品2点(釘1, 刀子1)がみられた。図示した遺物は3087~3091である。3087は肥前内野山窯の陶器皿で, 内面は銅緑釉, 外面は透明釉を施し, 見込は蛇ノ目釉ハギする。3088は肥前産の陶器鉢で, 全面に鉄釉を施し, 内面には一部銅緑釉が流れる。3089は肥前有田産の磁器染付大皿で, SD-201から出土した1060と同一個体とみられる。口縁部内面は青海波文の染付がみられる。3090は肥前産の磁器染付鉢で, 内面には草文と圏線, 外面には土坡に草文と圏線の染付がみられる。3091は木製品木筒で, 上部両端を切り, 下端は細く加工する。表面は「塩鯨(カ)六拾七(カ) 忠兵衛」, 裏面は「二月廿六日□□」の墨書がみられる。

SX-328(遺物: 図327)

B-2区東部で確認した遺構である。平面形態は不整形を呈し, 全長3.31m, 全幅3.28m, 深さ23cm

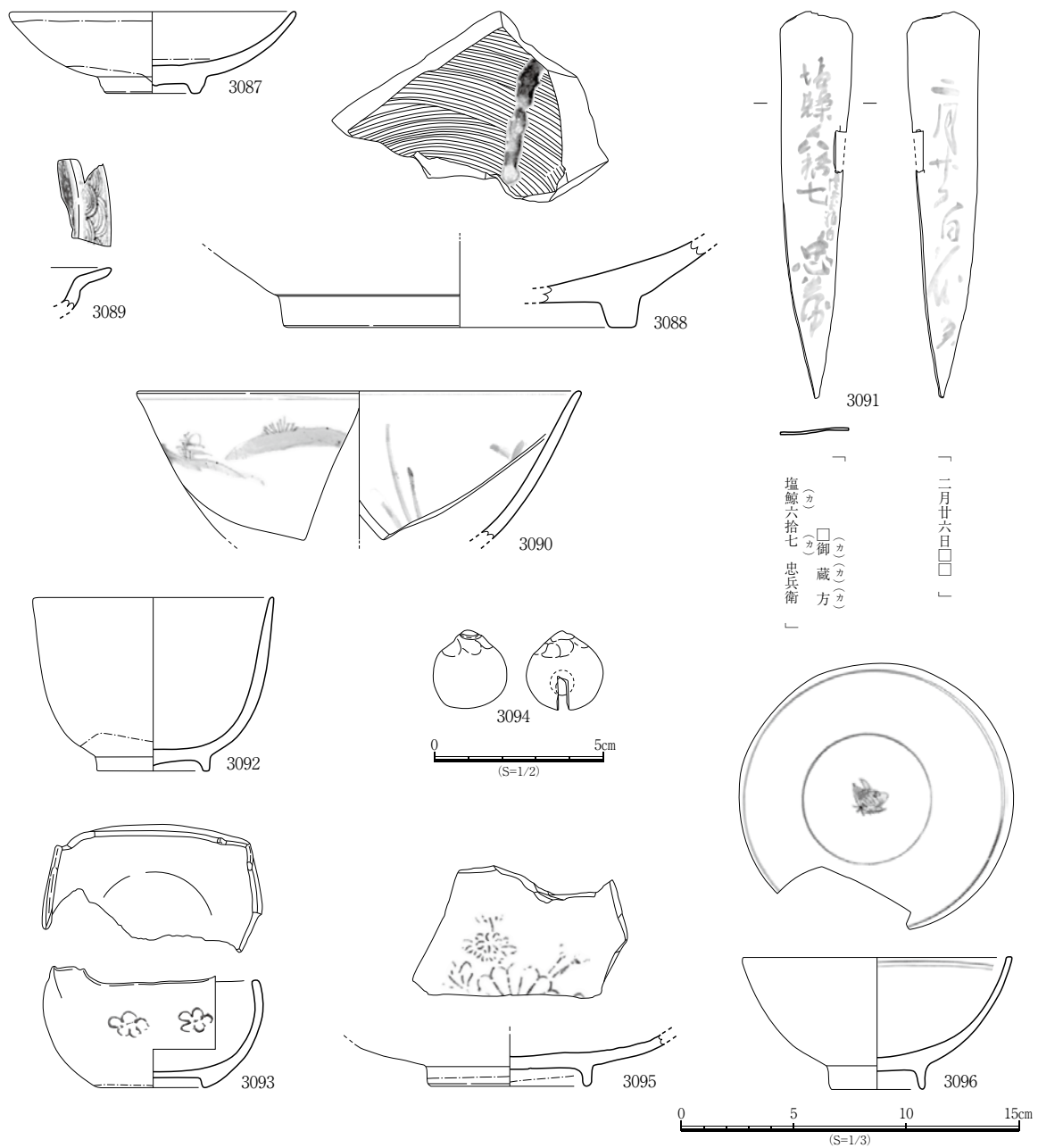


図327 SX-327・328, P-325出土遺物実測図

を測る。埋土は褐灰色シルト質中粒砂で、焼土と炭化物を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器99点(碗6, 皿1, 蓋1, 小杯1, 鉢3, 播鉢6, 甕8, 火鉢8, 細片65), 磁器138点(碗4, 皿6, 蓋6, 小杯1, 蕎麦猪口2, 瓶8, 紅皿1, 細片110), 土師質土器35点(杯2, 小皿8, 細片25), 土師器焙烙1点, 瓦片5点, 土製品鈴1点がみられた。図示した遺物は3092～3094である。3092は尾戸窯の陶器丸碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。3093は京都系または尾戸窯とみられる陶器鉢で、口縁部は方形を呈し、四隅が高くなる。内面から高台まで灰釉を施し、外面は鉄錆による花文がみられる。3094は土製品鈴で、上端はやや突出する。中には径8mmの玉があり、音が鳴る。外面はナデ調整である。

P-325(遺物: 図327)

B-2区中央部で確認したピットである。平面形態は楕円形を呈し、長径1.13m, 短径0.81m, 深さ

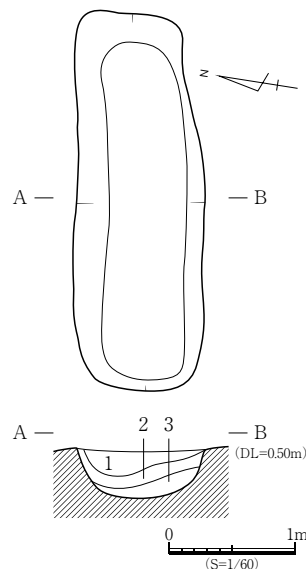
30cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1, 細片1), 磁器6点(碗3, 皿2, 細片1), 土師質土器杯1点, 土師器火鉢1点がみられた。図示した遺物は3095・3096である。3095は瀬戸・美濃産の陶器皿で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。見込には型紙摺による菊花文の錆絵がみられる。3096は肥前系の磁器鉄釉染付丸碗で、外面に鉄釉を施したのち、全面に透明釉を掛ける。見込には昆虫文、内面に圈線の染付がみられる。

② 4面

18世紀後葉から幕末にかけての遺構で、3面と同様に三つの屋敷地に分かれていたとされる時期である。中央部では遺構が多く検出されている。

SK-462(遺構: 図328 遺物: 図329)

B-2区西部で確認された土坑で、屋敷境とみられる2条の溝跡の間に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺3.24m、短辺0.90m、深さ45cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は3層に分かれる。出土遺物には陶器19点(碗5, 皿3, 猪口2, 鉢1, 灯明受皿1, 細片7), 磁器18点(碗9, 皿2, 蓋1, 猪口1, 瓶1, 細片4), 土師質土器小皿1点, 土師器十能1点, 瓦質土器火鉢2点, 丸瓦3点がみられた。図示した遺物は3097~3100である。3097は陶器丸碗で、全面に灰釉を施し、外面には金彩による文様がみられる。3098も陶器丸碗で、全面に灰釉を施し、畳付は釉ハギする。見込には目痕が残る。3099は磁器染付丸碗で、見込は不明文様と圈線の染付、外面は蓮弁文と蝶文の染付がみられる。3100は施釉土器胡麻煎の把手である。型成形で上下を接合する。上面には透明釉を施し、下面にはキラ粉と煤が付着する。



遺構埋土  
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、礫を非常に多く含む  
2. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、礫と植物片・木製品を多く含む  
3. 灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、礫を含む

図328 SK-462

SK-463(遺物: 図329)

B-2区東部で確認された土坑である。平面形態は不整隅丸方形を呈し、長辺1.88m、短辺1.20m、深さ9cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5~5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点, 磁器7点(皿1, 細片6), 土師質土器杯1点, 土製品鳩笛1点, 古銭1

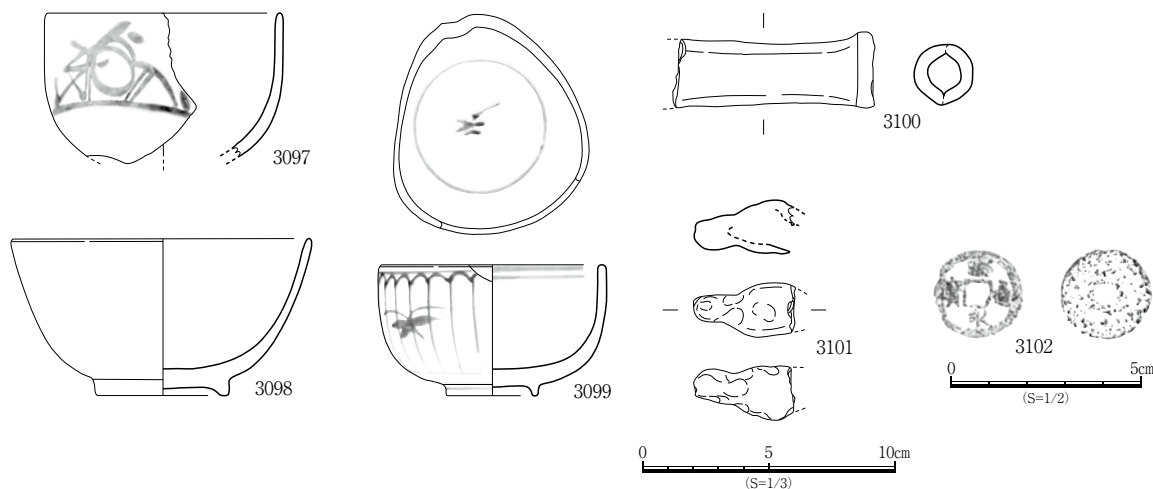
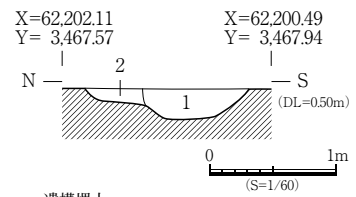


図329 SK-462・463出土遺物実測図

点がみられた。図示した遺物は3101・3102である。3101は土製品鳩笛で、上面に円孔がみられる。全面ナデ調整で、緑釉を施す。3102は寛永通寶で、新寛永である。

SD-426(遺構：図330 遺物：図331)

B-1区とB-2区の境となる屋敷境の東西溝跡である。SD-427を切り、西はSD-401，東はSD-507に切られる。検出長32.55m，検出幅0.96m，深さ38cmを測る。断面は舟底形を呈し，埋土は褐灰色砂質シルトで，8cm大の角礫を少し含んでいた。北肩には杭列がみら



- 遺構埋土
1. 褐灰色(10YR5/1)砂質シルトで、8cm大の角礫を少し含む(SD-426)
  2. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトで、0.5cm大の礫を少し含む(SD-427)

図330 SD-426・427

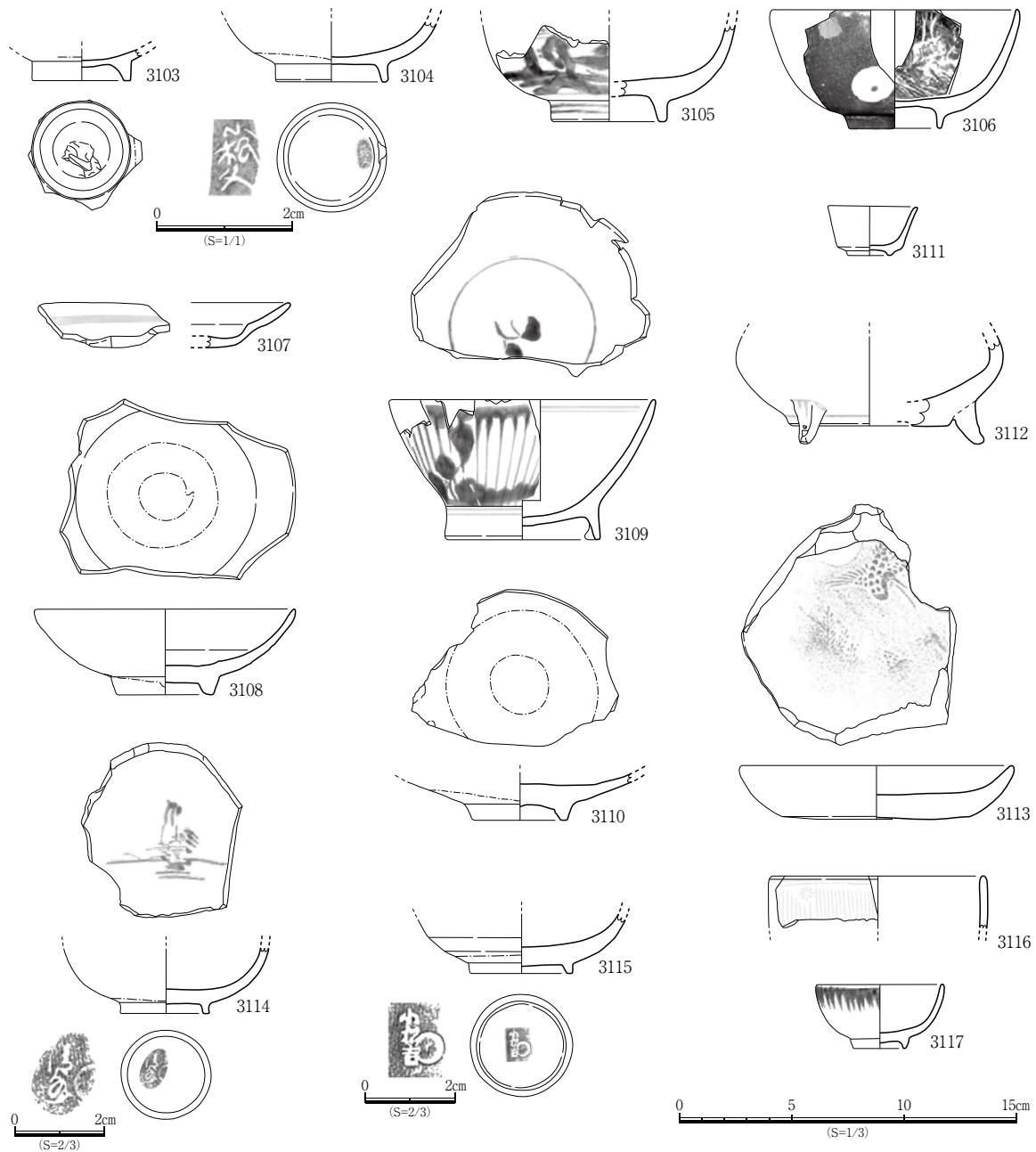


図331 SD-426・427出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物 (4) B-2区

れ、石列があった可能性が高い。出土遺物には陶器61点(碗13, 皿5, 小杯1, 猪口1, 鉢2, 播鉢1, 匣鉢1, 甕1, 灯明皿1, 鍋2, 細片33), 磁器38点(碗7, 皿6, 猪口2, 香炉1, 瓶1, 仏飯器1, 細片20), 土師質土器9点(皿3, 小皿1, 白土器1, 細片4), 土師器焼塩壺1点, 金属製品1点がみられた。図示した遺物は3103～3113である。3103は尾戸窯の陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。底部には焼成後の穿孔がみられる。3104は肥前産の京焼風陶器丸碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「小松吉」の刻印がみられる。3105は肥前産の陶胎染付丸碗で、全面に透明釉を施す。外面には風景文の染付がみられる。3106は肥前産の陶器碗で、全面に鉄釉を施し、内面には白化粧土の刷毛目文, 外面には白化粧土による丸文を描いたのち透明釉を施す。3107は絵唐津皿で、内面から底部付近まで灰釉を施し、内面には鉄錆による文様がみられる。3108は肥前内野山窯の陶器皿で、内面は銅緑釉, 外面は透明釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。3109は肥前系能茶山窯とみられる磁器染付広東碗で、見込に花文, 内面に圏線, 外面に蓮弁文と草文がみられる。3110は肥前産の白磁皿で、内面から高台付近まで白磁釉を施し、見込は蛇ノ目釉ハギする。3111は磁器猪口である。型打成形で、全面に白磁釉を施し、畳付は釉ハギする。3112は肥前産の青磁香炉で、底部には脚を貼付する。外面には青磁釉を施し、脚接地面を釉ハギ, 底部は蛇ノ目釉ハギする。外面と脚部には陰刻による文様がみられる。3113は尾戸窯の白土器皿で、回転ナデ調整を施したのち見込にはナデ調整を加える。底部外面は回転ヘラ切り調整である。見込には型押による陽刻の鶴亀文がみられる。

#### SD-427(遺構:図330 遺物:図331)

SD-426の北で確認した東西溝跡で、SD-426とSX-418に切られる。SD-426と同様に屋敷境の溝跡とみられる。検出長9.98m, 検出幅0.52m, 深さ13cmを測る。一部では石列が確認されており、若干の裏込もみられる。石は40～60cm大で、石材はチャート, 砂岩, 石灰岩が使用されていた。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、多量の0.5cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器26点(碗8, 皿2, 鉢1, 細片15), 磁器12点(碗2, 皿1, 小杯1, 猪口1, 瓶1, 細片6), 土師質土器3点(小皿1, 白土器1, 細片1), 土師器片1点がみられた。図示した遺物は3114～3117である。3114は肥前産の京焼風陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。見込には鷺文の染付, 高台内には「清水」の刻印がみられる。3115も肥前産の京焼風陶器碗で、内面から高台付近まで灰釉を施す。高台内には「小松吉」の刻印がみられる。3116は尾戸窯の陶器碗で、全面に透明釉を施し、外面には白象嵌による暦手文がみられる。3117は肥前産の磁器染付猪口で、全面に透明釉を施し、外面には雨降文の染付がみられる。

#### SD-428(遺構:図332 遺物:図333)

SD-426の南で確認した東西溝跡で、SD-426に並行しSD-429に繋がるものとみられる。SD-426と並行する屋敷境の溝跡とみられる。検出長21.40m, 検出幅0.62m, 深さ29cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、円礫を多く含んでいた。また、埋土中には10cm大の石灰岩等の割石が非常に多く含まれていた。出土遺物には陶器15点(碗2, 皿1, 火入1, 瓶1, 鉢2, 播鉢1, 壺1, 細片6), 磁器21点(碗5, 皿2, 小杯2, 杯1, 猪口1, 瓶1, 細片9), 土師質土器9点(皿1, 小皿3, 細片5)がみられた。図示した遺物は3118～3120である。3118は陶器丸碗で、全面に光沢のある灰釉を施し、畳付は釉ハギする。3119は瀬戸・美濃産とみられる陶器壺で、肩部の2箇所耳を貼付する。口縁部内面から外面には鉄釉を施す。3120は肥前産の磁器染付猪口で、外面に柳文の染付, 高台内に圏線と「大明年

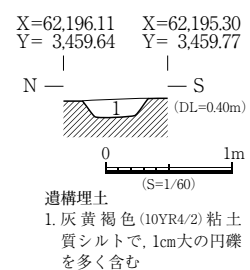


図332 SD-428

製」の銘がみられる。

SD-429(遺物：図333)

SD-428の東で確認した東西溝跡で、SD-428・436に繋がるものとみられる。SD-426と並行する屋敷境の溝跡とみられる。SD-435を切り、SD-431に切られる。検出長9.97m、検出幅0.77m、深さ23cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。東端では両肩に石列と杭列が確認されている。石列は20～40cm大の砂岩を用い、木杭も打たれていた。出土遺物には陶器26点(碗2, 皿1, 火入1, 瓶2, 鉢4, 播鉢1, 土瓶1, 細片14), 磁器37点(碗7, 皿3, 小杯2, 杯1, 猪口2, 紅皿1, 瓶1, 仏花瓶1, 細片19), 青花皿1点, 土師質土器23点(皿2, 小皿5, 蓋1, 細片15)がみられた。図示した遺物は3121～3124である。3121は瀬戸・美濃系の陶器角皿で、全面に透明釉を施す。3122は肥前産とみられる磁器紅皿である。型打成形で、外面に型押による縞文がみられる。全面に白磁釉を施し、畳付は釉ハギする。3123は肥前有田産の磁器変形皿で、隅丸方形を呈する。型打成形で、高台を貼付する。内面には型紙摺による文様がみられる。3124は中国漳州窯系の青花皿で、底部の一部が残存する。底部外面の一部を除き、透明釉を施し、見込には染付がみられる。

SD-430(遺物：図333)

B-2区西部で確認された南北溝跡で、南は調査区外へ続く。検出長7.71m、全幅0.32m、深さ17cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで、3cm以下の円礫を含んでいた。出土遺物には陶器6点(猪口1, 細片5), 磁器7点(碗3, 猪口1, 細片3), 土師質土器皿1点がみられた。図示した遺物は3125で陶器猪口

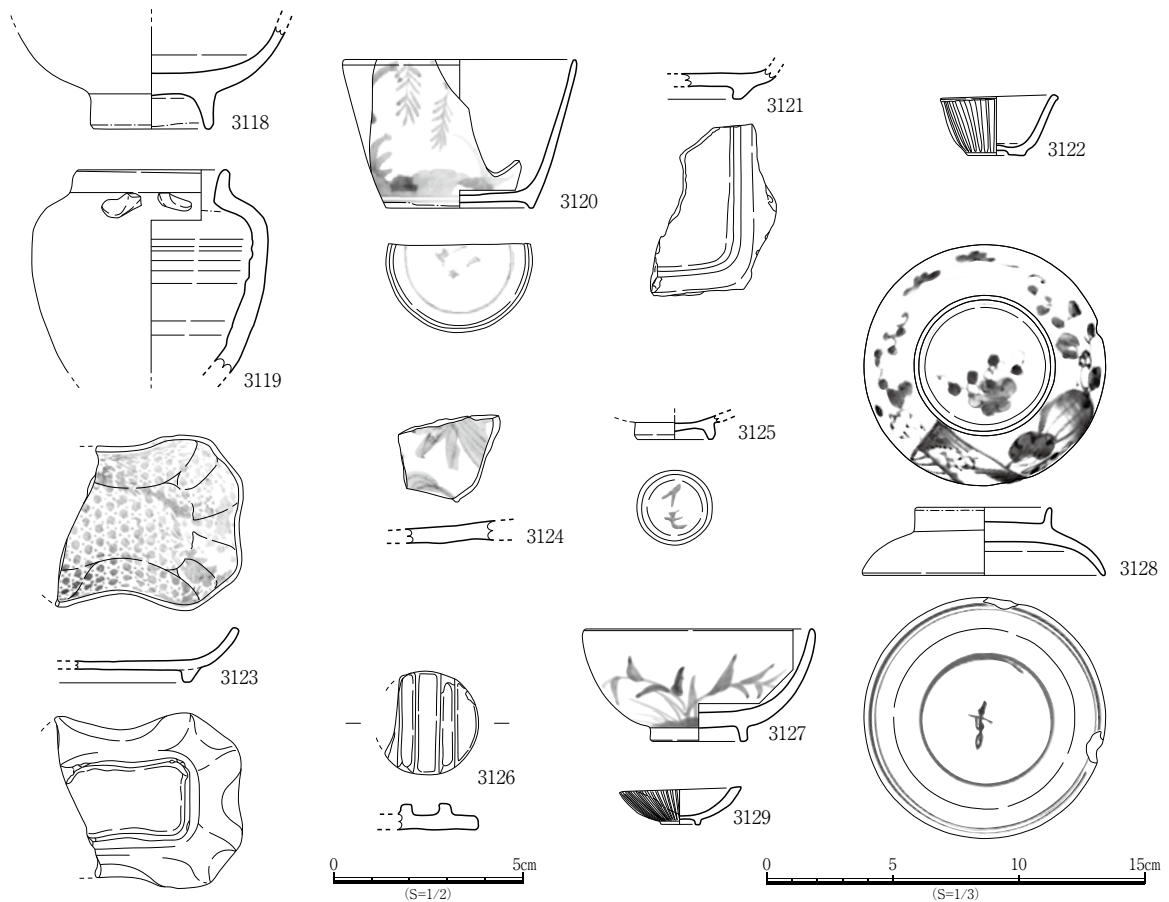


図333 SD-428～431出土遺物実測図



である。内面には灰釉を施し、底部外面は無釉である。高台内には「イモ」の墨書がみられる。

SD-431 (遺物: 図333)

B-2区中央部で確認されたL字状を呈する石組の溝跡で、南は調査区外へ続き、SD-429とP-428を切る。両肩には石列がみられ、一部には胴木や裏込も確認された。石は30～60cm大の石灰岩で僅かにチャートがみられた。検出長12.77m、全幅0.96m、石列間40cm、深さ27cmを測る。埋土は灰黄褐色中粒砂から細粒砂質シルトで、少量の2cm以下の円礫と多量の4cm以下の風化砂岩粒を含んでいた。出土遺物には陶器101点(碗7, 皿7, 瓶1, 鉢4, 播鉢1, 甕1, 灯明受皿2, 急須2, 人形1, ミニチュア2, 細片73), 磁器76点(碗9, 皿7, 紅皿3, 合子蓋2, 瓶7, 灯明受皿1, 細片47), 土師質土器12点(杯3, 小皿2, 細片7), 土師器14点(五徳1, 細片13), 瓦質土器7点(火鉢1, 細片6), 瓦14点(軒平瓦1, 丸瓦2, 平瓦11)がみられた。図示した遺物は3126～3129である。3126は陶器ミニチュアで、煮炊具の蓋形を呈する。型成形とみられ、天井部には把手が付く。上面と側面には透明釉を施し、下面はナデ調整で無釉である。3127は肥前産の磁器染付小丸碗で、外面に草花文の染付がみられる。3128は肥前系の磁器染付碗蓋で、内面は寿字と圏線、外面には花文と扇文・圏線、摘内には花文と圏線の染付がみられる。3129は肥前産の白磁紅皿で、菊花形を呈する。型打成形で、内面から体部外面に白磁釉を施す。

SD-432 (遺物: 図334)

B-2区中央部で確認された南北溝跡で、南は調査区外へ続き、北は攪乱に切られる。検出長4.09m、全幅0.57m、深さ12cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで、1cm以下の円礫を少し含んでいた。出

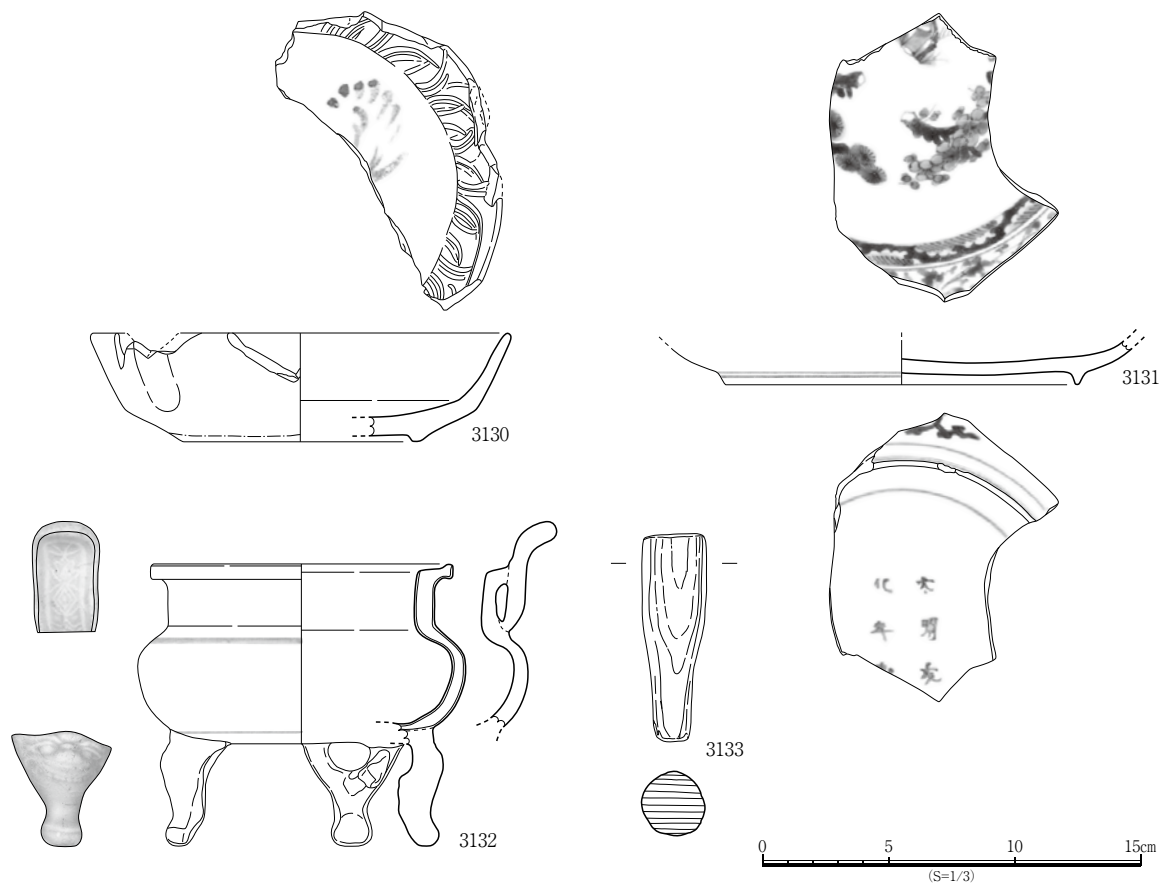


図334 SD-432出土遺物実測図

土遺物には陶器13点(碗1, 皿1, 瓶1, 鉢2, 壺2, 鍋1, 火鉢1, 餌鉢1, 細片3), 磁器32点(碗4, 皿9, 蓋2, 香炉1, 細片16), 土師質土器4点(皿3, 細片1), 瓦質土器鍋1, 瓦4点(平瓦3, 棧瓦1)がみられた。図示した遺物は3130～3133である。3130は陶器皿で, 口縁部にはV字形の切り込みがみられる。内面から高台まで銅緑釉を施し, 見込には鉄錆による草花文, 口縁部内面は陰刻による蓮弁文がみられる。3131は肥前有田産の磁器染付中皿で, 内面は花唐草文と環状の松竹梅文, 外面は唐草文の染付, 高台内は圏線の染付と「大明□化年製」の銘がみられる。3132は中国産とみられる青磁香炉または蓋物で, 口縁部に1箇所把手状のもの, 底部には3箇所に脚を貼付する。把手状のものには幾何学文の陽刻, 脚部には獣面の陽刻がみられる。全面に青磁釉を施し, 口縁部内面は釉ハギする。3133は木製品栓で, 先端は細く, 上面は平らに加工する。

SD-433(遺物: 図335)

B-2区中央部で確認された南北溝跡で, 南は調査区外へ続き, 北は攪乱に切られる。検出長3.28m, 全幅1.76m, 深さ27cmを測る。一部の肩で石が出土しており, 石組の溝であった可能性がある。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで, 0.5～4cm大の円礫を含んでいた。出土遺物には陶器26点(碗2, 鉢2, 播鉢2, 鍋3, 細片17), 磁器34点(碗6, 皿4, 蓋3, 小杯1, 紅皿1, 瓶1, 細片18), 土師質土器片2点, 土師器9点(火鉢3, サナ1, 細片5), 瓦7点(軒丸瓦1, 平瓦6)がみられた。図示した遺物は3134・3135である。3134は肥前産の磁器染付碗蓋で, 内面は環状の松竹梅文と圏線, 外面は風景文と圏線の染付がみられる。3135は平瓦で, 側面に「とく□」の刻印がみられる。

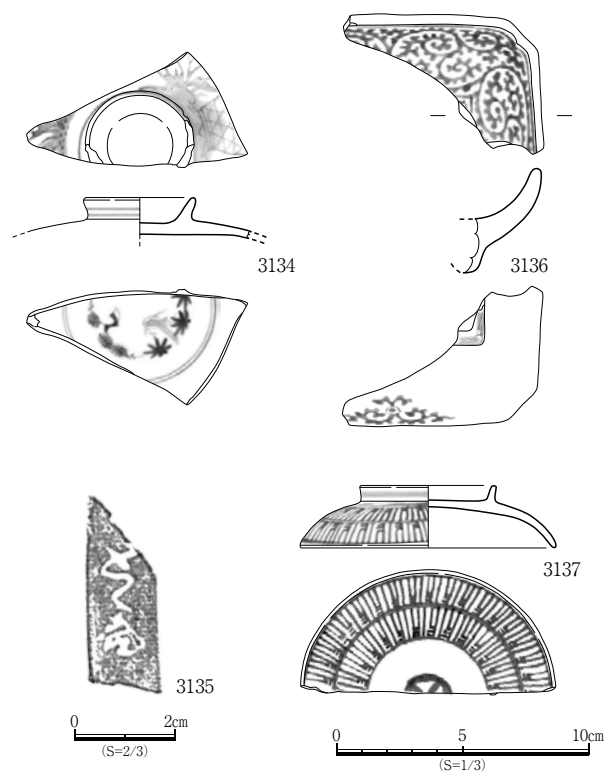


図335 SD-433・434出土遺物実測図

SD-434(遺物: 図335)

B-2区中央部で確認された南北溝跡で, 南は調査区外へ続き, SD-435に切られる。検出長3.74m, 全幅0.40m, 深さ10cmを測る。埋土は

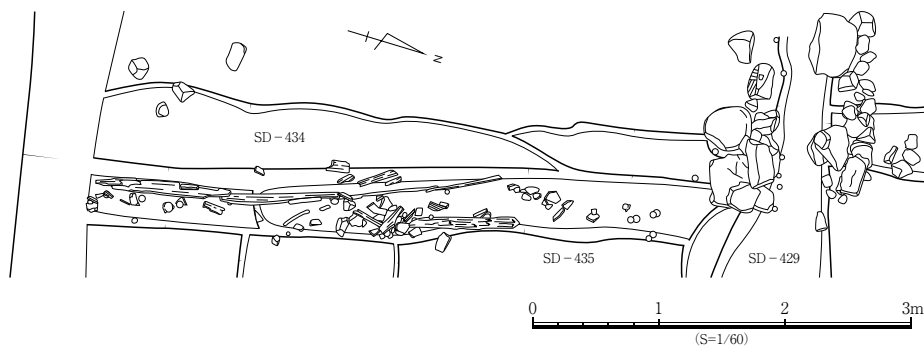
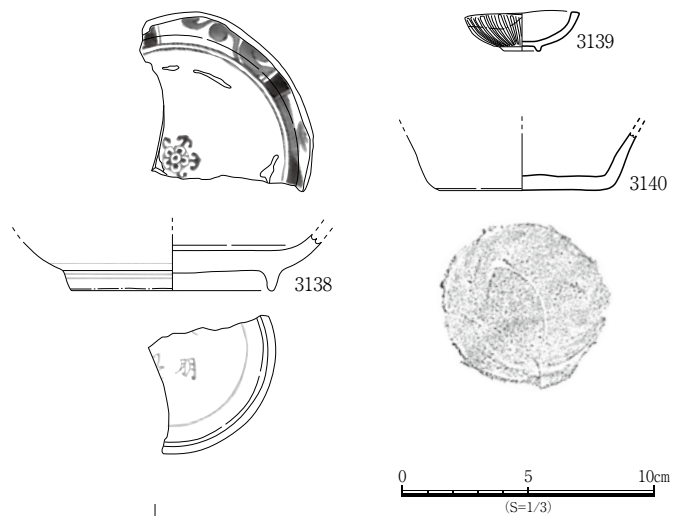


図336 SD-435遺物出土状態

3. 遺構と遺物 (4) B-2区

黄灰色シルト質細粒砂で、炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器18点(碗1, 鉢1, 人形1, 細片15), 磁器4点(皿1, 蓋1, 紅皿1, 細片1), 土師器2点(火鉢1, 細片1)がみられた。図示した遺物は3136・3137である。3136は肥前産の磁器染付角皿で、型打成形である。内面は蛸唐草文, 口縁部外面は唐草文, 高台に雷文帯の染付がみられる。3137は肥前系の磁器染付碗蓋で, 天井部内面には十字花文, 口縁部内外面には放射状文の染付がみられる。



SD-435(遺構:図336 遺物:図337)

B-2区中央部で確認した南北溝跡で, 南は調査区外へ続く。SD-434を切り, SD-429に切られる。検出長6.13m, 検出幅0.66m, 深さ15cmを測る。両肩には板材を立て杭で止めていた。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器29点(碗3, 皿2, 播鉢1, 土瓶1, 火鉢1, 細片21), 磁器34点(碗7, 皿8, 蓋2, 猪口1, 紅皿3, 細片13), 土師質土器6点(皿1, 小皿1, 細片4), 土師器8点(火鉢1, 鉢1, 細片6), 瓦22点(平瓦20, 細片2), 土製品ミニチュア1点, 骨片がみられた。図示した遺物は3138～3141である。3138は肥前産の磁器染付皿で, 見込は五弁花文, 口縁部内面は区画内に染付, 外面は圏線の染付, 高台内には銘がみられる。3139は肥前産の白磁紅皿で, 菊花形を呈する。型打成形で, 内面から口縁部外面に白磁釉を施す。3140は土師質土器杯で, 回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。3141は土製品ミニチュアで, 家屋形を呈する。全面型成形で, 背面には装飾は見られない。

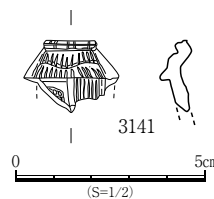


図337 SD-435出土遺物実測図

SD-436(遺構:図338 遺物:図339)

B-2区中央部で確認した石組の南北溝跡で, 南は調査区外へ続く。北はSD-507に切られる。東肩は石灰岩の石列が1段あり裏込もみられた。石は40～50cm大の石灰岩で, 裏込幅40cmを測る。西肩には石列はみられず, 杭列のみが確認されている。検出長7.36m, 検出幅1.85m, 深さ52cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は黄灰色シルト質砂で, 0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器57点(碗6, 皿3, 瓶1, 鉢7, 播鉢2, 鍋2, 土瓶3, 細片33), 磁器47点(碗8, 皿5, 蓋1, 小杯2, 瓶2, 鉢1, 仏飯器1, 細片27), 土師質土器12点(皿2, 小皿4, 白土器1, 細片5), 土師器2点(焜炉1, 焙烙1), 軒丸瓦1点がみられた。図示した遺物は3142～3147である。3142は京都・信楽系の陶器丸碗で, 内面から高台付近まで透明釉を施す。外面には朱色の上絵付による海老文がみられる。3143は肥前産の磁器染付小碗で, 見込には蝶文と圏線の染付と底部に焼成後の穿孔がみられる。3144は肥前有田産の磁器変形皿で, 扇形を呈するものと

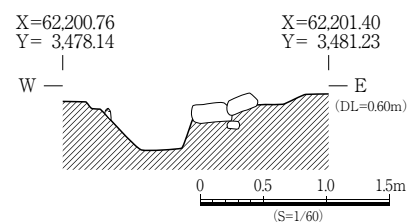


図338 SD-436

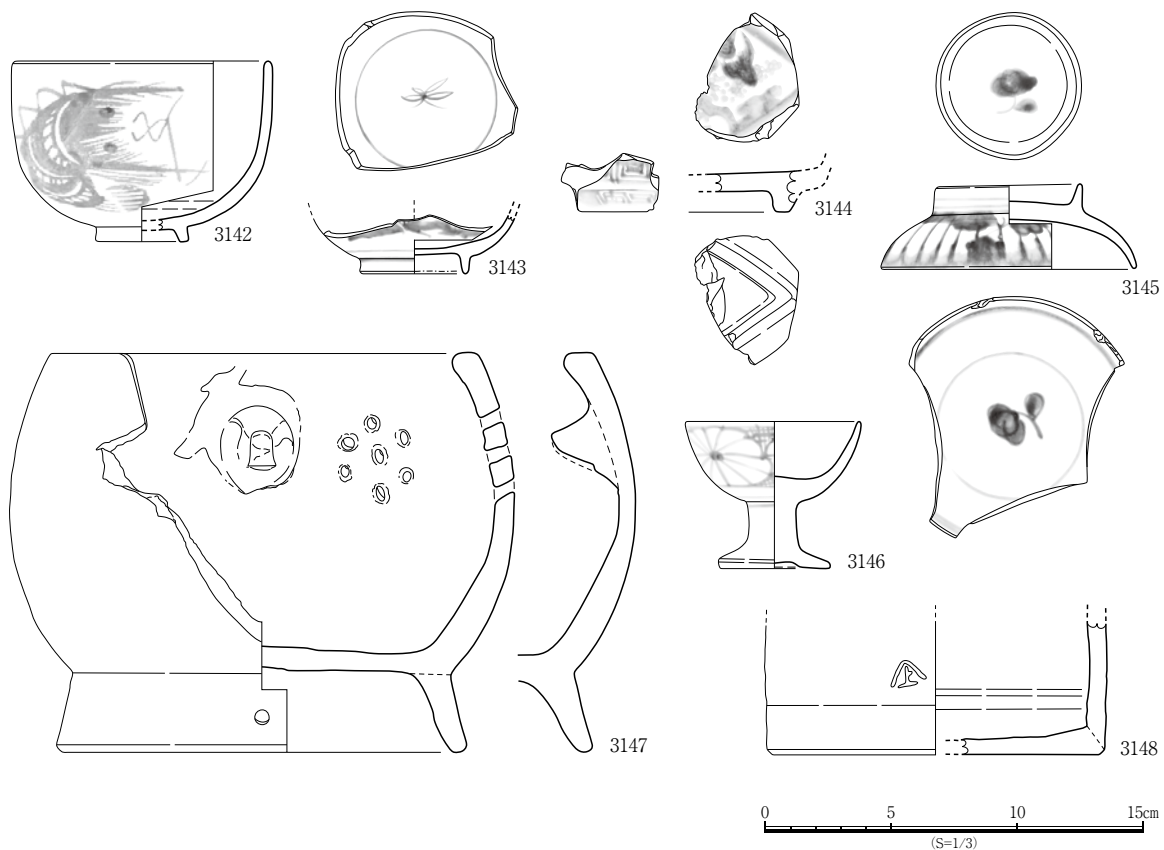


図339 SD-436・437出土遺物実測図

みられる。文様は型紙摺で、見込に風景文、外面に雷文帯がみられる。3145は肥前系の磁器染付広東碗蓋で、天井部内面に花文と圏線、外面は縞に花文か、摘内に花文の染付がみられる。3146は肥前産の磁器染付仏飯器で、杯部外面には格子地に菊花文の染付がみられる。3147は土師器焜炉で、円筒形を呈する。前方には切り込みの窓がみられ、口縁部内面に角状突起、底部には輪状の脚を貼付する。調整は内面がナデ、口縁部が横ナデ、外面は丁寧なナデ、脚部は横ナデである。底部外面は無調整で板状圧痕が残る。胴部には径5mmの孔が7箇所、高台には径6mmの孔が1箇所のみられる。

SD-437(遺物：図339)

SD-436の東で確認した南北溝跡で、南は調査区外へ続く。検出長5.73m、検出幅は0.75m、深さ11cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、0.5～5cm大の礫と多量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器23点(碗2、鉢2、播鉢5、匣鉢2、甕1、鍋1、細片10)、磁器12点(碗1、皿1、蓋1、小杯1、瓶2、水滴1、細片5)、土師質土器9点(小皿1、細片8)、土師器2点(鉢1、細片1)、瓦4点(軒丸瓦2、丸瓦1、棧瓦1)、貝がみられた。図示した遺物は3148で陶器匣鉢である。回転ナデ調整で、底部外面は無調整である。体部外面には刻書がみられる。

SX-419(遺物：図340)

B-2区西部で確認された遺構で、SD-428に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、長径4.40m、短径3.10m、深さ44cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器23点(碗9、皿1、火入1、鉢1、播鉢2、壺2、細片7)、磁器14点(皿5、小杯2、蕎麦猪口1、瓶1、鉢2、細片3)、白土器皿1点、土師器焙烙1点がみられた。図示した遺物は3149・3150である。3149は肥前産の

磁器染付鉢で、見込は牡丹の蕾文と圏線、内面は四方禳文、外面は牡丹文と圏線の染付がみられる。3150は尾戸窯の白土器皿で、底部内外面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整を施す。見込には型押による陽刻の鶴亀文、口縁部内面には「十」の墨書がみられる。

SX-420

B-2区西部で確認された遺構で、SX-421を切る。平面形態は不整形を呈し、検出長2.95m、検出幅2.62m、深さ27cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土で、1cm大の円礫、木片、骨片を含んでいた。埋土等の状況よりこの遺構は植栽痕の可能性もある。出土遺物には陶器10点(播鉢1, 人形1, 細片8), 磁器4点(碗1, 細片3), 土師質土器4点(皿2, 細片2), 瓦5点(丸瓦1, 平瓦4), 炭化米塊がみられた。

SX-421 (遺物: 図340)

B-2区西部で確認された遺構で、SX-420に切られ、南は調査区外へ続く。平面形態は不整楕円形を呈するものとみられ、検出長6.54m、検出幅2.24m、深さ13cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色シルトで3cm以下の円礫を含み、下層はにぶい黄褐色シルトで焼土粒を多く含んで

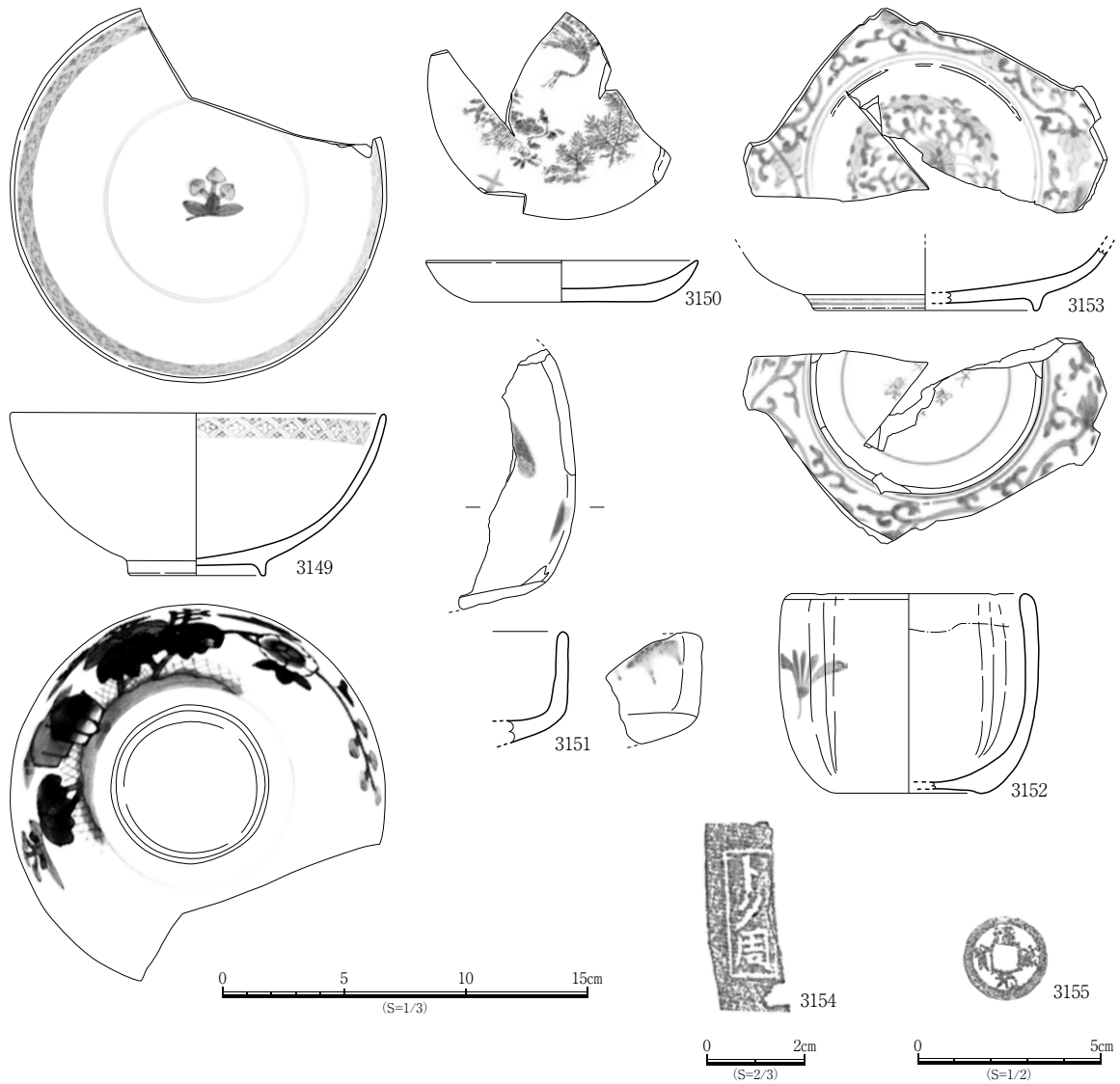


図340 SX-419・421・422出土遺物実測図



いた。出土遺物には陶器63点(碗4, 皿2, 蓋3, 向付1, 火入1, 鉢8, 壺2, 鍋1, 土瓶2, 細片39), 磁器70点(碗5, 皿12, 蓋1, 向付1, 蕎麦猪口1, 紅皿1, 香炉1, 火入1, 瓶4, 線香筒1, 細片42), 土師質土器6点(皿1, 小皿3, 細片2), 土師器3点(火鉢2, 細片1), 瓦質土器火鉢1点, 瓦7点(丸瓦4, 平瓦2, 棧瓦1), 石製品硯1点, 鉄釘1点がみられた。図示した遺物は3151～3153である。3151は瀬戸・美濃系の陶器向付で, 方形を呈するものとみられる。全面に灰釉を施し, 内面の一部には緑釉を掛ける。見込と口縁部外面には鉄鏽による文様がみられる。3152は京都系の陶器色絵火入または灰吹で, 稜花形を呈する。口縁部内面から高台付近まで灰釉を施し, 外面には緑色の上絵付による花文がみられる。口縁部内面には煤が付着する。3153は肥前有田産の磁器染付皿で, 内外面に菊唐草文と圏線の染付, 高台内に圏線の染付と「大明□□年製」の銘がみられる。

#### SX-422(遺物: 図340)

B-2区中央部で確認された遺構で, 南は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈し, 検出長2.54m, 全幅2.24m, 深さ76cmを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで, 1cm以下の円礫を含み, 底面には木削片の堆積がみられた。出土遺物には陶器375点(碗10, 皿13, 蓋6, 向付1, 火入3, 瓶5, 鉢17, 搗鉢18, 甕4, 灯明受皿2, 鍋8, 土瓶9, 火鉢1, 釜1, 餌鉢1, ハマ2, 細片274), 磁器215点(碗27, 皿28, 蓋5, 合子2, 猪口2, 紅皿2, 香炉1, 瓶4, 壺1, 細片143), 土師質土器15点(杯1, 小皿4, 白土器2, 細片8), 土師器27点(火鉢4, 焙烙2, 細片21), 瓦質土器10点(火鉢4, 細片6), 瓦21点(軒平瓦2, 丸瓦4, 平瓦13, 棧瓦2), 金属製品5点(古銭1, 煙管1, 釘2, 針金1)がみられた。図示した遺物は3154・3155である。3154は平瓦で, 側面に「トク周」の刻印がみられる。3155は銭貨で, 「□□元寶」の文字がみえる。

#### P-427(遺物: 図341)

B-2区西部で確認したピットで, SD-428に切られ, 調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し, 検出長76cm, 検出幅62cm, 深さ31cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで, 10cm大の石灰岩角礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器34点(皿2, 小皿7, 細片25), 軒平瓦2点, 土製品人形1点(猪形)がみられた。図示した遺物は3156で土師質土器小皿である。回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切り調整である。口縁部には煤が付着する。

#### P-428(遺物: 図341)

B-2区中央部で確認したピットで, SD-431に切られる。平面形態は楕円形を呈し, 検出長1.02m, 検出幅0.51m, 深さ27cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器3点(碗1, 灯明受皿1, 七輪1), 磁器4点(皿1, 小杯1, 細片2), 土師質土器3点(白土器1, 細片2)がみられた。図示した遺物は3157の尾戸窯の白土器皿で, 見込には型押による「寿」字文がみられる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。口縁部に煤が付着する。

#### P-429(遺物: 図341)

B-2区中央部で確認したピットで, 他のピットに切られる。平面形態は楕円形を呈し, 長径43cm, 短径40cm, 深さ51cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで, 1cm大の礫と少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器碗1点, 磁器3点(小杯1, 細片2)がみられた。図示した遺物は3158で陶器碗である。内面に白化粧土を刷毛塗りしたのち全面に灰釉を施す。

#### P-430(遺物: 図341)

B-2区東部で確認したピットである。平面形態は円形を呈し, 径18cm, 深さ14cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで, 多量の0.5cm大の礫と炭化物, 土器片を含んでいた。出土遺物は図示した3159の



3. 遺構と遺物 (4) B-2区

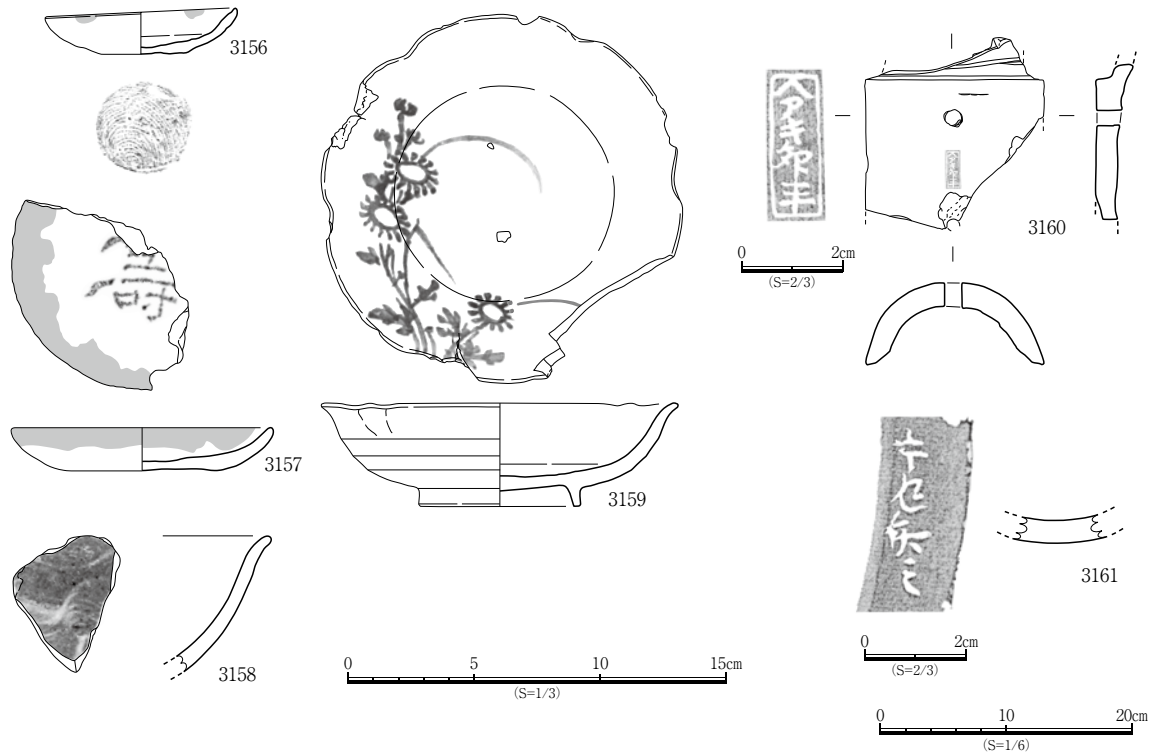


図341 P-427～432出土遺物実測図

みで、尾戸窯の陶器輪花皿で、全面に灰釉を施す。見込には鉄錆による文様がみられる。

P-431 (遺物：図341)

B-2区東部で確認したピットである。平面形態は円形を呈し、径50cm、深さ48cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多量の10cm大の礫と炭化物、土器片を含んでいた。出土遺物には陶器5点(皿1、播鉢1、細片3)、磁器片1点、丸瓦1点、土製品土錘1点がみられた。図示した遺物は3160で丸瓦である。凸面は直線方向のナデ調整を施し、キラ粉が付着する。凹面には絞り目とコビキBの痕跡が残る。凸面に径1.4cmの円孔と「アキ卯平」の刻印、玉縁には1条の沈線がみられる。

P-432 (遺物：図341)

B-2区東部で確認したピットで、一部は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し、検出長71cm、検出幅56cm、深さ17cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、炭化物と土器細片を含み、0.5cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には磁器片2点、土師質土器片1点、平瓦1点、犬骨がみられた。3161は平瓦で、側面に刻印がみられる。

## 第Ⅳ章 まとめ

### 1. 居住者について

#### (1) 山内家<sup>(1)</sup>

絵図において追手筋遺跡に最初に名前が見えるのは寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』で、B-1区には「山内左エ門佐」の名前が見える。山内左衛門佐は藩主山内家の分家で、初代から第3代までが名乗っている。元は安藤氏であったが、天正13(1587)年、山内一豊が長浜城主となった時に召し抱えられ山内氏と称した。慶長6(1601)年には初代山内左衛門佐が宿毛城主となり、6,000石が与えられている。元和元(1615)年には一国一城制により宿毛城を取り壊し、同年の大阪夏の陣の際には2代藩主山内忠義出陣のため留守居役を務めている。元禄4(1691)年『元禄十一年以前図』では「山内半左エ門」と記載されている。「半左衛門」は4代と6代が名乗っており、4代は在職期間が1698～1709年、6代は在職期間が1724～1744年であるので、『元禄十一年以前図』に描かれている「半左衛門」は4代とみられる。4代は幼名を「省太郎」といい、その後「半左衛門」「蔵人」と改めている。今回の調査ではB-1区のSD-215からは4代目の幼名である「省太郎」の墨書が残る木簡が、A-1区のSX-301からは4代目の「山内蔵人」の木簡が出土しており、家督を相続した元禄12(1699)年から山内蔵人が没する宝永6(1709)年の間に山内家がA区からB区へと移っていた可能性が高い。元文～延享年間(1740～1746)の絵図である『高知城郭図絵』では、A区に7代目の「山内源蔵」の名前が見える。19世紀の絵図ではA区に9代目とみられる「山内源蔵」、10代目の「山内太郎左衛門」、11代目の「山内主馬」の名前があり、幕末までA区には山内家が居住していたものとみられる。

表1 山内家系譜

代	氏名(前名)	相続など	没年	役職など
初代	可氏(左衛門佐)	慶長5(1600)年遠州掛川にて1,000石	寛永6(1629)年	宿毛城主、留守居役
2代	定氏(左衛門佐)	寛永7(1630)年御目見	正保3(1646)年	
3代	節氏(左衛門佐・源蔵)	正保4(1647)年相続	元禄11(1698)年	
4代	倫氏(省太郎・半左衛門・蔵人)	元禄12(1699)年相続	宝永6(1709)年	
5代	晴氏	宝永6(1709)年相続		
6代	郷俊(半左衛門)	享保9(1724)年相続	寛延2(1749)年	奉行職
7代	氏篤(源蔵)	寛延4(1751)年相続	天明7(1787)年	奉行職
8代	保氏	天明6(1786)年相続	享和2(1802)年	奉行職
9代	氏睦(源蔵)	享和2(1802)年相続	文化8(1811)年	奉行職
10代	氏固(太郎左衛門)	文化8(1811)年相続	文久元(1861)年	奉行職
11代	氏理(左衛門佐・主馬)	安政3(1856)年相続	明治21(1888)年	奉行職

#### (2) 百々家<sup>(2)</sup>

百々家の初代百々越前安行は近江の国の出身で、信長に仕えていた。信長の没後、山崎の戦の際には秀吉に仕え秀信の家老を勤め、7,000石を受けた。その後関ヶ原の戦いで破れ、慶長5(1600)年に岐阜城が落城すると秀信は高野山に入山し、百々越前安行も京都に蟄居したが、同年冬には初代藩主山内一豊に召し抱えられ土佐に入国する。入国後は7,000石を与えられ、慶長6(1601)年からは

## 1. 居住者について

表2 百々家系譜

代	氏名	相続など	没年	役職など
初代	越前安行	慶長5(1600)年召出	慶長14(1609)年	築城総奉行
2代	出雲直安	慶長15(1610)年相続	明暦2(1656)年	築城総奉行, 家老
3代	刑部安政	明暦元(1655)年相続	寛文8(1668)年	家老, 奉行職
4代	伊織安集	寛文8(1668)年相続	宝永6(1709)年	家老
5代	采女安英	元禄2(1689)年相続	元禄4(1691)年	家老

築城惣奉行として養嫡子である百々出雲直安とともに高知城築城の指揮を執った。百々家2代目の百々出雲直安は越前安行の甥にあたり、美濃に住み秀信に仕えていた。文禄元(1592)年に百々越前安行の養子となり、越前とともに高知城の築城に関わる。慶長15(1610)年に相続し、3,700石を与えられた。調査ではA区SX-201からは「土佐百々出雲の壺」の墨書がみられる木簡が出土しており、百々越前は現在の高知市越前町に居住していたとされるが、出雲は追手筋に居住していたとみられる。寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』ではA区に「百々伊織」の名前がみえる。百々伊織は4代目で寛文5(1668)年に相続し、3,700石を与えられた家老である。その後、元禄4(1691)年以前の『元禄二、三年間之図』では5代目の「百々采女屋敷」となっているが、元禄4(1691)年以降の『元禄十一年以前図』では「稽古屋敷」となっている。百々家は5代目采女安英で断絶しており、采女安英が亡くなった元禄4(1691)年以後にA区は「稽古屋敷」となったものとみられる。

### (3) 村田家<sup>3)</sup>

村田家の初代村田白庵玄怡は周防出身で、父は周防国岩国城主毛利氏の家臣である。幼少より曲直瀬元朔に医術を学び、寛永元(1624)年に江戸で2代藩主山内忠義に200石で召し抱えられ、後に100石を加増された。村田家は代々藩医として山内家に仕え、中でも白庵は医者の中では最も位階が高い法眼にまで昇進している。『寛永五年～万治二年図』には追手筋北側に「村田白庵」の名前がみえる。『寛文己酉高知絵図』と『元禄十一年以前図』には追手筋北側に村田家2代目の村田康庵の名前がみられる。2代目の村田康庵玄寿の父は村田三郎兵衛で、村田白庵の弟である。村田康庵は叔父である村田白庵の養子となり、後に医療術は白庵を超える名医と言われるまでになり、4代藩主山内豊昌の御側医として度々江戸へ随行し400石を与えられた。元文5(1740)年以降の絵図である『高知城郭図絵』には今回の調査地である追手筋南側に村田の名前がみられ、この時期までには追手筋北側から追手筋南側へと転居したことがわかる。天明4(1784)年の絵図である『御家中御侍屋敷附』には5代目「村田玄端(瑞か)」, 享和元(1801)年の絵図には「村田三兵衛」, その後の絵図には「村田玄明」

表3 村田家系譜

代	氏名(前名)	相続など	没年	役職など
初代	白菴玄怡	寛永元(1624)年江戸にて召出	慶安4(1651)年	法眼
2代	康菴玄壽	承応元(1652)年相続	宝永元(1704)年	法橋, 御側医
3代	白菴玄泉	宝永元(1704)年相続	享保4(1719)年	法橋, 御側医
4代	康菴玄壽	享保4(1719)年相続	延享5(1748)年	法橋, 御側医, 御小姓格
5代	玄瑞	寛延元(1748)年相続	寛政10(1798)年	御側医
6代	玄壽成澄(玄泉)	寛政11(1799)年相続	文化10(1813)年	御側医
7代	玄明成文	文化11(1814)年相続	明治2(1869)年	御側医, 澤流館頭取役, 医業糺役兼帯
8代	孫七郎悦成	明治2(1869)年相続	明治6(1873)年	御馬廻

の名前がみられ、幕末まで村田家がこの地に居住していたことがわかる。村田玄明は村田家7代目で、御側医であると同時に当時の医学機関である澤流館の頭取役や医業糺役を勤めた。<sup>4)</sup> 12代藩主豊資の時代に、土佐藩は藩校教授館に医学の指導機関及び統制機関として医学席を創設した。天保12(1841)年には医学席を医学館と改め、帯屋町に校舎を新築し、医業一切の監督権を認め医業の統制を行った。この時新築された校舎は、村田家の南の屋敷地であるB-2区に所在し、幕末の絵図である『高知郭中図』にも「医学館」の文字がみえる。弘化2(1845)年には医学館が「澤流館」と改められ、医学の発展や普及に力を入れている。医学館の頭取であった荒川伺敬が澤流館の頭取を勤め、その後萩野春文が代わり、弘化4(1847)年に荒川玄門と結城立道・村田玄明の三人が同時に頭取に

表4 絵図にみえる居住者の変遷

絵図(番号は図7に対応)	時期	A区	B区	B-2区	追手筋北側
1 寛永五年～万治二年図	不明 (1659～1793年か)	百々出雲 (2代)	山内左衛門佐	-	村田白庵
2 寛文己酉高知絵図	寛文9年 (1669年)	百々伊織 (4代)	山内左衛門佐	-	村田康庵
元禄二、三年間之図	元禄4年以前 (1691年以前)	百々采女屋敷 (5代)	山内半左衛門 (4代)	-	-
3 元禄十一年以前図	元禄4年以降 (1691年以降)	稽古屋敷	山内半左衛門	-	村田康庵
4 高知城郭図絵	元文～延享 (1740～1746年)	山内源蔵か (7代)	村田玄□	御人□ 松下左次兵衛 高屋平蔵□	-
延享三年之図	延享3年 (1746年)	山内源蔵	村田玄寿か (4代)	御人□□ 松下左次兵衛 高屋平蔵□	-
高知廓中図	寛延前後 (1750年頃)	山内源蔵 (7代)	村田康庵か (4代)	御用ヤシキ 松下弥□ 高屋所左衛門	-
高智御城下絵図	天明元年以前 (1781年以前)	山内源□	村田□□	引合□ 松下□ 尾崎□	-
5 御家中御侍屋敷附	天明4年 (1784年)	山内源蔵 (7代)	村田玄端 (5代)	引合場 松下庄左衛門 尾崎熊太郎	-
高知御家中等籠図	享和元年 (1801年)	山内源蔵 (9代)	村田三兵衛	御人賦所 松下左次兵衛 尾崎三郎エ門	-
天保元年高知之図	天保5年 (1835年)	馬場 山内太郎左衛門 (10代)	村田玄明 (7代)	人□ □学□ 尾崎□四郎	-
6 弘化年間旧郭中絵図	弘化年間 (1844～1847年)	山内太郎左衛門 (10代)	村田玄朔 (7代か)	引合場 澤流館 尾崎彦四郎	-
高知郭中図	幕末頃 (1860年頃)	山内主馬 (11代)	村田玄明 (7代)	引合場 医学館 尾崎彦四郎	-

## 2. 遺構について

任ぜられている。弘化年間の絵図である『弘化年間旧郭中絵図』には「澤流館」の文字もみえる。その後、安政6(1859)年頃には澤流館は会所と改称され廃止されたものとみられる。

### (4) B-2区の居住者について

17世紀の絵図では追手筋から帯屋町までが一つの屋敷地であったが、18世紀から幕末の絵図にはB区南東部は南北に長い三つの屋敷に分かれており、B-2区として報告している。B-2区東の屋敷地は18世紀の絵図には「御用ヤシキ」「引合場」「御人賦所」とみえる。「御人賦所」は藩の役所で、公務で人夫を使う時に申請をする所であり、藩の施設として使用されていたと考えられる。中央の屋敷地は、18世紀には「松下左次兵衛」「松下庄左衛門」など「松下家」の屋敷地とみられる。松下左次兵衛は松下家の分家とみられ、初代と2代・3代など複数人が名乗っている。<sup>(5)</sup> 絵図にみえるのは3代目と考えられ、3代目は左次右衛門や庄左衛門と名乗っている時期もある。また、松下左次兵衛の養女は村田家4代目村田康庵の妻となっており、村田家とは親戚関係にある。その後、弘化年間の絵図には「澤流館」、幕末の絵図には村田玄明が頭取を勤めた「医学館」の文字がみえ、19世紀中葉には藩の施設として使用されたものとみられる。西の屋敷地は18世紀前半まで「高屋平蔵□」「高屋所左衛門」の名前がみえ、「高屋家」の屋敷地、それ以降幕末までは「尾崎熊太郎」「尾崎三郎エ門」「尾崎彦四郎」の名前がみえ、「尾崎家」の屋敷地であったものとみられる。高屋家は300石の御馬廻で、中級武士である。<sup>(6)</sup> 絵図にみえる高屋所左衛門は5代目で、宝暦6(1755)年に江戸で新国平蔵を殺害した後、所左衛門も自害し、知行を召し上げられている。高屋家の後にこの屋敷地に入ったのが尾崎家とみられ、絵図にみえる尾崎熊太郎は分家の4代目で、後に尾崎三郎左衛門と名乗り、5代目が尾崎彦四郎である。<sup>(7)</sup>

## 2. 遺構について

江戸時代以前の遺構はA-2区と調査区南部で確認されている。検出された遺構はピットで、出土遺物より14～15世紀とみられる。調査区北部では江戸時代以前の遺構は検出されておらず、江戸時代に地形の高い調査区北部を削平し、整地したものとみられる。また、A-2区では江戸時代以前の水田土壌と考えられる層も確認されている。

今回の調査では絵図に描かれていた屋敷境とみられる溝跡が確認されたことから、屋敷境の西側の屋敷地をA区、東側の屋敷地をB区として報告している。17世紀に機能していたとみられる屋敷境の溝跡はSD-201である。両端は調査区外へ続き、検出長31.85m、幅7.78m、深さ1.13mを測る南北溝跡である。埋土中からは多量の遺物が出土しており、17世紀末から18世紀初頭には埋没したものとみられる。SD-201埋土の珪藻分析では、有機汚濁が進んだ非常に浅い滞水域もしくは湿潤地であり、雑排水が流れ込み、溝さらいをしなければ埋没が進む状態であったとされている。この事からSD-201は空堀状で生活排水が流れ込む様な状況であったことが窺える。山内家の屋敷跡で確認した東西溝跡であるSD-215は屋敷境の溝跡ではないものの、SD-201と同様の規模を測る。SD-215の南肩と東側は調査区外へ続き、検出長は46.41m、検出幅5.25m、深さ47.2cmを測る。西は屋敷境の溝跡であるSD-201に繋がり、切り合い関係はなく、同時に存在していた時期があるとみられる。出土遺物よりSD-201と同様に17世紀末から18世紀初頭には埋没したものと考えられる。屋敷地内に屋敷境の溝跡と同様の規模の溝跡がなぜ必要であったのかは明らかではないが、屋敷境の溝跡と繋がっていることや、大規模な溝跡であること、追手筋と並行に伸び条理

にも合っていることからすると藩の関与があった可能性は高いと思われる。18世紀になるとSD-201の埋土上にSD-301が造られている。検出長30.48m、全幅2.86m、深さ58cmを測り、SD-201に比べ、著しく規模が縮小している。この溝跡もSD-201と同様に雑排水が流れ込む様な状況であったことが自然化学分析の結果から明らかとなっている。江戸後期になるとSD-301とほぼ同じ位置にSD-401が造られる。SD-401はSD-301よりも更に規模を縮小し、検出長29.71m、全幅1.90m、深さ23cmを測る。また、形状も断面が逆台形となり、南部では石列を確認している。石列の内側には木杭が多数打ち込まれており、石を固定していたものとみられる。出土遺物よりSD-401は幕末に埋没したもののみられる。これらのことからA区とB区の境となる屋敷境は、水を湛えない空堀状の溝跡であり、江戸時代を通して徐々に規模を縮小しながら存続していたと考えられる。さらに、これらの溝跡の上層には昭和期にSD-501が造られている。SD-501はコンクリートで固められた溝跡で、埋土の上層からは昭和20年の空襲時の焼土と焼夷弾が出土しており、この時期に埋没したとみられる。この地は明治期からは小学校として機能しており、小学校内の排水溝である可能性が高いが、江戸時代の区画を踏襲しているものとみられる。

江戸時代の建物跡は前期から後期まで確認されている。いずれの建物跡も掘立柱建物跡である。江戸時代前期の建物跡としては百々家の屋敷地で確認されたSB-201と山内家の屋敷地で確認されたSB-202～204がある。これらの建物跡の柱穴の規模は小さく、大きくても90cm程度であり、周辺では瓦の出土が少なかったことより瓦葺きではなかった可能性が高い。山内家の屋敷地の北東部で確認したSK-210は径1.30m以上を測り、底面からは礎盤と径50cmを測る柱痕が出土しており柱穴とみられる。出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、この時期の他の建物跡の柱穴に比べるとSK-210は大型の柱穴である。また、SB-201の東側で検出された堀跡(SA-201～203)は屋敷境の溝跡に並行しており、屋敷地の東端に堀があったものとみられる。時期は異なるが、江戸後期のSX-414・415は村田家の屋敷地であるB-1区と、南の屋敷地であるB-2区の屋敷境の溝跡の北側に位置する廃棄土坑とみられ、この遺構からは木堀が出土している(写真図版53)。建物跡の壁または敷境の溝の側に設置した木堀とみられる。江戸時代中期とみられる建物跡は少なく、村田家の屋敷地北部で確認されたSB-301がある。この建物跡も規模が小さく、母屋ではないとみられる。村田家の屋敷地の北東部で確認したSA-301は3間を測る堀跡または柵列跡である。この堀跡の柱穴はSB-301の柱穴より規模が大きく、底面には礎盤が確認されており、建物跡の一部である可能性もある。江戸時代後期の建物跡は山内家の屋敷地であるA-2区で確認されたSB-401・402と、村田家の屋敷地で確認されたSB-403がある。SB-401・402は江戸時代前期・中期の屋敷地と同様の小規模な柱穴を有する建物跡である。SB-403は今回の調査で確認した建物跡で最も大きな柱穴を有する。柱穴は径約0.77～1.50mの楕円形または隅丸方形を呈し、すべての柱穴に40cm大の礎盤が確認された。南東隅の柱穴は特に規模が大きく、径51cmを測る柱が残存しており、深さは1.39mを測る。建物跡は調査区外に続くため建物跡の規模は不明であるが、大型の建物跡であると考えられる。今回の調査地の北西部は高知市教育委員会によって調査が行われているが、この調査では瓦が多量に出土しており、追手筋に近い箇所に母屋など大型の建物跡が存在した可能性が高い。

井戸跡はA区で1基、B区で5基が確認されている。井戸跡からの出土遺物は少ないため、検出された面より時期を推定しているものもある。B区で確認したSE-201・202は17世紀のものと考えられ、山内家の屋敷跡に位置する。SE-201は桶側を有し、SE-202は石組の井戸跡であった。18世紀の



## 2. 遺構について

井戸跡は3基がみられ、いずれもB区で確認しており、村田家の屋敷跡に位置する。SE-301は桶側を2段重ね、底面に玉砂利がみられた。この井戸跡は規模や桶側を有するなどSE-201と類似する。SE-302は石組で底面に玉砂利がみられた。この井戸跡は規模が小さい点や、ほぼ同じ大きさの石を垂直に積んでいることなどSE-202と似た構造となっている。SE-303は石組で桶側がみられた。この井戸跡の規模は大きく、石は大きさの異なるものを乱雑に配置するなど、他の石組の井戸跡とは大きく異なり、規模や桶側を有する点などはSE-201・301に似ている。19世紀とみられる井戸跡はA区で確認したSE-401で山内家の屋敷地に位置する。この井戸跡は桶側を有し底面には玉砂利がみられ、規模や桶側を有する点などSE-201・301に類似している。今回の調査で確認した井戸跡は時期が不明瞭なものも多いが、小型で石組のものと、大型で桶側を有するものと大きく二つのタイプに分かれる。同じ屋敷地内でもこの二つのタイプの井戸跡を使い分けている可能性がある。また、底面の標高は17・18世紀代の井戸跡が-1.00m以上であるのに対し、19世紀とみられる井戸跡は-1.20m、近代の井戸跡は底面までは調査ができていないが-1.70m以上を測り、徐々に深くなっている事が窺え、帯水域が下がっている可能性がある。

水に関する遺構には井戸の他に集水桶がある。井戸は地下水を汲み上げる施設で、集水桶は水路より水を引いて利用する上水施設であり、今回の調査で両方の施設を利用して生活用水を得ていることがわかった。SK-222とSK-232は集水桶を有する上水施設で、集水桶と集水桶の間を竹樋で繋ぎ、屋敷地内に水を廻していたと考えられる。集水桶には二方向に竹樋がつながり、竹樋から水が流れてきて溜まるともう一方の竹樋から流れていく構造になっている。また、上水桶には分水や水汲む用途もあったものとみられ、SK-232からは手桶とみられる小型の桶が出土している(写真図版24)。集水桶と竹樋との接合部には桶の外側に桶に沿う形に加工した孔の開いた継手とみられる板(2023・2396・2397)を設置し、孔に竹樋を通してある。この継手とみられる板の下からは石や木材が検出されており、沈下しない様にしていた可能性がある。SK-222から出土した集水桶と竹樋を繋ぐ継手(2023)とSK-232から出土した継手(2036)には円孔内に木栓が残っており、一時的に導水を止めていたか、あるいは集水桶の機能自体を止め、新たに別の地点に集水桶を設置したものと思われる。また、竹樋と竹樋の継手(2098・2158)は5点が出土している。継手は竹樋と竹樋を繋ぐためのもので、竹樋が外れないようにする役割や方向を変える役割があったとみられる。2158は側面と上方に円孔がみられ、上部に桶側が存在した可能性もある。竹樋はSD-207・210の様に溝跡から出土しているものもあり埋設されていたとみられる。集水桶は東京都汐留遺跡などの例をみると下部

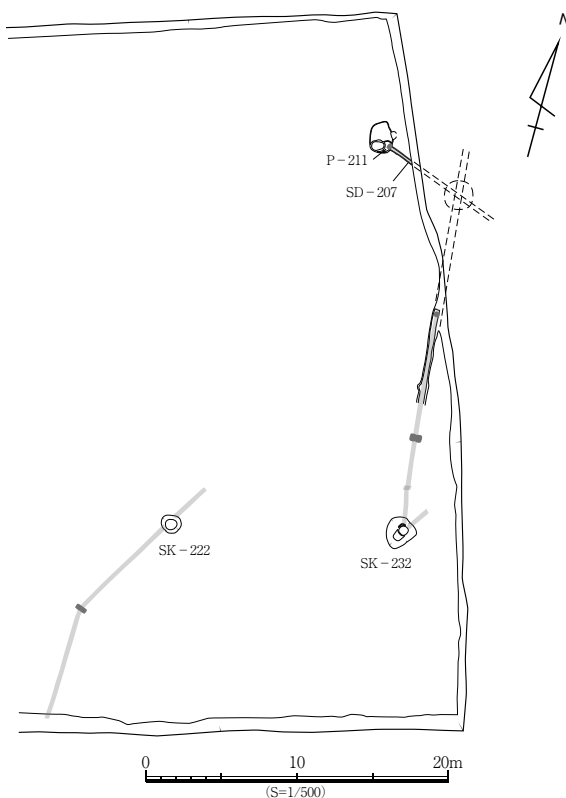


図342 集水桶位置図

は埋設され、上部は地表に出ており木蓋があったものがあることや、SK-232から小型の桶が出土していることなどから追手筋遺跡の集水桶も上部は地表に出ていた可能性が高い。集水桶は追手筋遺跡の他に、高知県内では高知市本町遺跡で集水桶と木樋が確認されており<sup>(8)</sup>、県内でも今後、類例が増えるものとみられる。全国的には17世紀に上水道の建設が盛んに行われ、17世紀末には江戸の六上水が完成し、市中に供給されたとされる。<sup>(9)</sup> SK-222・232の出土遺物からは17世紀に機能していたと考えられ、全国的な流れと同調するように上水施設が県内でも造られたものとみられる。

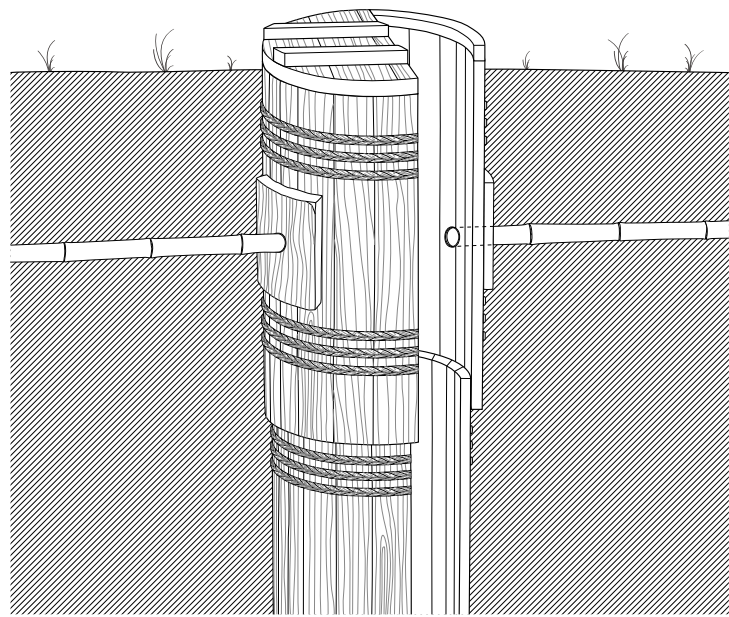


図343 集水桶復元図

### 3. 池跡について

発掘調査で確認された江戸時代の武家屋敷に伴う池跡は全国的には少ないものの、今回の調査では5箇所を確認した。5箇所の池跡はいずれも傾斜を持たせて石を積んでいることが特徴であり、庭園の歴史を牽引してきた京都風の池跡とは異なっている。江戸時代前期とみられる池跡はA-1区のSG-201とA-2区で確認されたSG-202がある。いずれも百々家の屋敷地であり、同時期に存在していた可能性が高く、二つの池跡が繋がっていた可能性もあるが調査区が離れているため確認できていない。SG-201・202が繋がっていたとすると、東西34m、南北16mを測る非常に大規模な池跡とみられる。SG-201は不正方形を呈し、北側は直線的に石が並んでいることから、北側に建物跡が存在した可能性が高い。また、コーナー部には60cm大の大型の石材を用いていることや州浜を有する点などは他の池跡とは異なり、より京都風の池跡に近いと考えられる。SG-202は一部のみの検出であるが、西端は石積が二重になっており、江戸後期に規模を小さく改修している。A区は江戸時代前期には百々家の屋敷地であったが、『元禄十一年以前図』では「稽古屋敷」となっており、その後18世紀には山内家の屋敷地になっている。SG-202は江戸前期に百々家が造り、その後、埋没することなく山内家の池として使用され、江戸時代後期には山内家により改修がなされたものとみられる。江戸時代中期の池跡はB-1区のSG-301がある。江戸時代後期の池跡であるSG-402の下層で確認されており、使用した石材はSG-402に再利用されたものとみられ大半は消失していた。削平された可能性もあり、SG-402よりも規模が小さくなっている。肩部には杭跡が多数残存しており、斜面部に石を配置して杭で固定していたものとみられる。また、杭列は北東部に位置する水利施設と考えられるSX-307～309の方向に続いていることから、これらの遺構はSG-301と一連の施設とみられる。さらにSX-307・308は溝跡であるSD-304・305へ繋がっており、導水路の可能性が高い。江戸時代後期の池跡は山内家の屋敷地であるA-2区のSG-401と村田家

#### 4. 陶磁器について

の屋敷地であるB-1区のSG-402がある。SG-401は江戸時代後期に改修したSG-202を切っており、山内家では江戸時代後期に池跡を作り替えている。SG-401は一部を確認したのみであり規模は不明である。SG-402は不整形を呈し、東西18.84m、南18.00m、深さ50～81cmを測る。一部の石は消失しているがほぼ全形が判明している池跡で、基底面の高さより当初はSD-410が導水路、SD-412が排水路であったとみられる。石積の下にハンダを敷いている箇所もあり、19世紀初頭頃に築造され、その後、規模を縮小し、水路を付け替えるなど何度も改修を繰り返しながら大正期に埋没したものとみられる。この池跡は傾斜を持たせて石を積んでいること以外にも特徴的な箇所がみられる。まず、一部で胴木を敷いていることである。地盤が緩い箇所では胴木を用いることがあるが、今回の調査で確認した池跡では、場所により胴木を使用していた。胴木の内側には杭を打ち固定していた。今回の調査で確認した石積を持つ溝跡にも胴木と杭を用いているものが多く見られ、地盤が緩かった可能性がある。また、この池跡に使用された石材も非常に特徴的である。北西部に用いられた石材には蛇紋岩がある。これらは通常、池には使用しない河原石で、赤褐色や緑色を呈し、池跡の最も要となる箇所に使用している。さらに小型の蛇紋岩を斜面に貼り付けているのも特徴的である。この蛇紋岩を配した部分が最も趣向を凝らした箇所であり、この池跡の最も重要な部分と思われる。この斜面部分の上端は一段高く整地し周囲には石積がみられ、飛石と考えられる石列(石5)もみられる。この平坦部分には東屋の様な施設があった可能性もある。この平坦部分にはP-409があり、底部に穿孔のある土師器壺を天地逆にして口縁部を埋設し、周囲の一部は漆喰で固められていた。この壺が何のために使用されたかは明らかではないが、この池跡が最も奇麗にみえる場所に設置していることから、この平場に設置されていたものと関係があると思われる。その他、この池跡は中島を有し、中島の周囲には密に杭が打たれ、意図的に据えられた石(石4)も確認されている。中島の北東で杭跡を検出しており、中島へ渡る橋があった可能性もある。また、杭跡の北側の石積にある大型で扁平な石(石2)は橋への踏石とも考えられる。この池跡は300石の中級武士の池跡としては大きい池跡であり、非常に趣向を凝らした特徴的な池跡であると言えよう。今回の調査で確認した池跡はいずれも小さな石を傾斜をもって積み上げており、庭園の歴史を牽引してきた京都のものとは異なっている。京都の池跡は大きな角礫を一段のみ置き、重ね積みを嫌うという特徴がある。高知では竹林寺で江戸時代の池跡がみられるが、この池跡は京都風の造りになっている。江戸時代前期の池跡であるSG-201や江戸時代後期の池跡であるSG-402など時期に関係なく、小さな石を傾斜をもって積み上げるという特徴がみられ、城下町と寺院で異なる工法を採用しているのは遺跡の性格による可能性が高いと思われる。江戸では200坪程度の町家でも小さな池跡が確認されており、土佐でも武家屋敷では規模に違いはあるが池跡は存在したのではないだろうか。高知市本町遺跡でも武家屋敷に伴う池跡が確認されており<sup>99</sup>、江戸時代の武家屋敷に伴う池跡が確認される事例は今後増えてくることが予想され、類例の増加を待ってさらに詳細な検討ができるであろう。

#### 4. 陶磁器について

中世以前の遺構は確認されていないが、堆積層や江戸時代の遺構などから古墳時代の土師器や須恵器(210・1159)、古代の土師器、須恵器(96・120・170・211・1160・2131)、緑釉陶器(2082)が少量ながら出土している。この時期の遺構は江戸時代に削平された可能性が高い。中世の出土遺物は、中世の遺

構が検出されているA-2区やA-1区・B区の南部で瓦質土器や青磁などが少量ではあるが出土している。出土遺物の時期より14～15世紀とみられ、続く16世紀の遺物はこの時期の遺構が確認されていないこともあり非常に少ない。

江戸時代の遺物は前期から後期まで出土している。江戸時代前期にはA区とB区共に家老が居住していたこともあり、特に高級品とみられるものが多く出土している。江戸時代前期には肥前産の遺物が多くを占めており、中でも絵唐津の出土が目立ち、大皿(1193・1387・2013・2270・3045)や向付(2044・2123・2124)の出土もみられる。肥前産陶器では播鉢(1032・2017)や甕(1258・2071)なども出土している。肥前産の磁器では初期伊万里(1039・1055・1111・1169・1170・1232・2002など)も多く、初期伊万里の大皿(1174)や、青磁大皿(1055・2075)、陽刻のある青磁鉢(2021)などA区・B区共に上手のものが出土している。この時期の肥前産色絵製品はA区で中皿(1028)、合子蓋(3083)、B区で中皿(2367)が出土している。江戸時代前期の瀬戸・美濃産の遺物は非常に少なく、志野焼や織部焼が少量みられた。志野焼は図示した遺物だけでも約20点は出土しており、その殆どが向付である。江戸時代後期の遺構からの出土であるが鼠志野(1350)も1点出土している。織部焼とみられる遺物は非常に少なく2点(1144・1194)で、いずれも百々家の屋敷地であるA区から出土している。その他国産品では、初期京焼の色絵皿(1190・1223)や丹波焼や備前焼の出土がみられる。貿易陶磁器では青花が最も多く、釉裏紅のある景德鎮窯系青花(1069)や青花大皿(200・1076・2822)などもみられ、五彩では碗(1230)、皿(1176・1334)、大皿(1077・1078)がみられ、いずれもA区から出土している。また、注目される遺物としては骨董的な遺物として、B区から出土した褐釉耳壺(2829)や、堆積層と屋敷境溝から出土した朝鮮産小壺(165・1080)があり、経済力の高さを窺わせる。江戸時代前期の遺物には高級品が多く、A・B区共に出土がみられるが、A区の方は調査面積が小さいにも関わらず若干多くみられる。特にA区の「土佐百々出雲の壺」と記された木簡が出土したSX-201や屋敷境の溝跡であるSD-201から多く出土している。

18世紀には家老である山内家がB区からA区へ移り、B区には中級武士である村田家や、松下家・高屋家・尾崎家が増えてきて幕末まで居住する。この時期には他の城下町遺跡と同様に、引き続き肥前産の遺物も多くを占めるが、瀬戸・美濃産の割合が増え、京都・信楽系や関西系も増加する。肥前有田産の磁器色絵製品には、碗(1248・1354・2284・2488・2552・2889・2917)、皿(1407)、大皿(2319)、望料碗蓋(2304・2464・2918)、段重(1411)、油壺(1333)、灰吹蓋(2628)、蓋物(2873)、蓋付小鉢(2888)、火入(2919)など器形も豊富で、A・B区とも多くの遺物が出土している。その他、肥前有田産の製品には揃えとみられる染付変形皿(2287・2302・2456・2879・2892など)が出土している。陶器では京都産の碗(2416・2563・2932)がB区で出土しているほか、京都系や京都・信楽系の色絵碗(2376・2476・2791など)は特にB区での出土が目立つ。A・B区ともに母屋と見られる建物は今回の調査地の北側の追手筋沿いにあったものと考えられ、今回の調査で出土した遺物が、これらの屋敷跡のすべてを反映しているとは限らないが、江戸中期から後期にかけての遺物には色絵製品が多くみられるものの、高級品は江戸時代前期に比べると少ない傾向にある。また、江戸後期には肥前産磁器大皿(95・160・176)などの饗応の器や髪油壺や灯明具といった高級品とされる油関連製品など経済力のある武家屋敷で出土するものがみられる。その他にも、紅皿や櫛払などの化粧道具、箱庭道具などの趣味の道具、泥面子や羽子板・飯事道具などの子供の遊び道具など生活必需品ではない遺物が非常に多く出土していることも農村部との違いを表していると言える。

## 5. 木簡について

出土した木簡の大半は荷札木簡が多くみられる。形状は短冊形や下部を細く加工したものが多い。下部を細く加工したものは、上部側面に切り込みを入れるものや上部に円孔がみられるものが多い。木簡にみられる墨書には片面に地名や人名、片面に物品とその量が記されている。地名がみられる木簡は衣笠村(1260)、布師田村(1268)、十市村(2090)、小川村(2407)、枝川村(2788)などがある。これらの地名は現在では、衣笠村は南国市稲生、布師田村は高知市布師田、十市村は南国市十市、小川村はいの町小川、枝川村はいの町枝川である。追手筋遺跡から最も離れた、いの町小川までは直線距離で24kmを測る。記された物品では「吉米」と「大豆」が多く、その他僅かに「小豆」、「しほ」、「かき」、「塩鯨」などの墨書がみられる。物品と地名が判明している木簡からは、枝川村と十市村から「吉米」、小川村から「大豆」が送られていることがわかる。これらの城下町以外の農村から運ばれてきたとみられる木簡は幅が小さく、物品やその量が記されているものも多くみられた。

人名が記された木簡は荷札木簡以外にもみられ、絵図に描かれた居住者の名前が記された木簡が出土している。「百々」と記された木簡は1点のみで1213である。1213は百々家の屋敷跡から出土し「土佐百々出雲の壺」と記されている。百々出雲がこの地へ移ってくる際に荷物に付けたものであろうか。「山内」に関する木簡は3点が出土している。これらの木簡については前述したが「山内省太郎様」と記された木簡(2139)はB区の17世紀の溝跡より出土しており、「山内蔵人」と記された木簡(1239)はA区の18世紀の遺構から出土している。絵図によると山内家は18世紀代にB区からA区に居住地を移している。「山内省太郎」は「山内蔵人」の幼名であり、「山内蔵人」の代にA区からB区に移った可能性が高い。また、1274には「蔵人様壺通 書状壺通 宝永四年 亥四月廿九日」の墨書がみられる。「蔵人」は1239と同一の人物であり、宝永4(1707)年に山内蔵人が書状を運んだものとみられる。宝永4年は宝永大地震があった年で、山内蔵人は地震後の対応に当たった人物でもある。この木簡には4月29日と記されており、宝永大地震は10月4日であるので、大地震以前に記されたものである。「村田」と記された木簡は2点が出土しており、いずれも村田家の屋敷跡から出土している。2356は「村田□(香カ)□庵□ 松山彦内殿 門田信平」の墨書がみられる。この木簡は18世紀の遺構より出土しているため、「香庵」は4代目村田康庵の可能性が高い。2475は「松平土佐守江戸かち橋御屋敷 村田康庵様 六月□ 志方源兵衛」と記された木簡である。江戸の土佐藩上屋敷にいる村田康庵に宛てたもので、関西の土佐藩お出入り商人である志方源兵衛が差出人である。村田康庵が江戸の上屋敷にいた事を示す貴重な資料であり、また、追手筋遺跡から出土していることから関西から江戸、土佐へと運ばれて来たものであるとみられる。この木簡は江戸後期の遺構から出土しているが、4代目村田康庵は延享5(1748)年に病死しており、没後に廃棄されたものと考えられる。

その他木簡に記された人物には「白井三郎兵衛」「渡辺小兵衛」「磯村彦左エ門」「稲毛友之兵進」「和田久太郎」「市原次兵衛」「岡八右衛門」「横山五郎右衛門」などがある。「白井三郎兵衛」の木簡(2107)はB区の山内氏屋敷跡より出土している。白井三郎兵衛は『幡多郡中士族年譜』によると宿毛にいる山内可氏の家臣で300石を与えられている。「和田久太郎」と記された木簡(2109)もB区SD-215より出土している。『郷士年譜』によると本川高野村の請受郷士で、天明3(1783)年に家督を継いでいる。「山内蔵人内 倉田□□(寿勇カ)」と記された木簡(1266)がA区の山内氏屋敷跡より出土している。『従定御供来ル御足軽抜年譜』には山内氏の家臣で騎馬格として倉田の名前がみられるが、山内蔵人とは時期的に大きな齟齬が生じるため異なる人物とみられる。「磯村彦左衛門」

が「渡辺小兵衛」に宛てた木簡(2389)が村田家の屋敷跡から出土している。「渡辺小兵衛」は一族で複数人が名乗っている。<sup>111</sup> 村田家4代目の村田康庵の妻の実父も渡辺小兵衛であり、渡辺家6代目の渡辺小兵衛の妻は村田康庵の二女であり村田家と渡辺家は親戚関係にある。また、渡辺家4代目渡辺小兵衛の妻はB-2区に居住していた松下左次兵衛直賢の二女であり、渡辺家と松下家も親戚関係にある。「磯村彦左衛門」は知行150石の御馬廻で、寛文10(1670)年に磯村家の家督を継いでいる。<sup>112</sup> 『刀減記』によると元禄16(1703)年に親族の各島八平が盗みに入り、実兄の各島三郎兵衛と共に自らの責任で八平を預かることを書面にて上役に伝えたが、同年、八平を監禁していた三郎兵衛宅から八平が逃げたので、責任をとって三郎兵衛と自害している。この事よりこの木簡は1670～1703年のものとみられる。2481は「寛保元年 稲毛友之(カ)兵進内」の墨書が記された木簡で、村田家の屋敷跡から出土している。稲毛家は村田と共に御側医であった家で、村田家から度々養子や妻を出しており村田家とは親戚関係にあった。稲毛家3代目清次兵衛直能は前名を友進といい、木簡に記された寛保元(1741)年の年代から「友之(カ)兵進」のことと思われる。友進の養子として村田康庵の孫である八郎左衛門が入っている。八郎左衛門は稲毛家とは折り合いが悪く、稲毛家は藩に養子解消の願いを出す、藩の反感を買い寛延2(1749)年に友進は200石の内50石を召上げられ、八郎左衛門は仁淀川以西に追放されている。<sup>113</sup> 今回の調査で出土した木簡に記された人物名で系譜が判明した人物は、居住者と親戚関係にある中級武士のものが多くみられ、親戚関係の名前が記された木簡は幅が広く規模が大きい傾向があった。また、県外の商人より送られた木簡も同様の規模であった。

#### 註

- (1) 宿毛市 1977『宿毛市史』
- (2) 高知県立図書館 2000『土佐國群書類従 第三巻』  
土佐山内家宝物資料館『御侍中先祖書系図牒』
- (3) (2)に同じ
- (4) 平尾道雄 1977『土佐医学史考』
- (5) 土佐山内家宝物資料館『御侍中先祖書系図牒』
- (6) (5)に同じ
- (7) (5)に同じ
- (8) 高知市教育委員会 2015『帯屋町遺跡 本町遺跡記者発表及び現地説明会資料』
- (9) 古泉弘 2001「上水道」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編
- (10) (8)に同じ
- (11) (5)に同じ
- (12) 高知市民図書館平尾文庫『刀減記』
- (13) (5)に同じ

#### 参考文献

- (公財)高知県埋蔵文化財センター 2014『弘人屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第140集  
 高知市教育委員会 2010『西弘小路遺跡』高知市文化財報告書第34集  
 高知市教育委員会 2011『史跡高知城跡・高知城跡』高知市文化財報告書第37集  
 東京都埋蔵文化財センター 1997『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第37集  
 東京都埋蔵文化財センター 2000『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第79集



## 5. 木簡について

東京都埋蔵文化財センター 2003『汐留遺跡Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第125集

東京都埋蔵文化財センター 2006『汐留遺跡Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第189集

東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡調査研究年報2』

高知県立図書館 2000『土佐國群書類従 第三巻』

寺石正路 1976『土佐名家系譜』

松岡司 2001『土佐藩家老物語』

依光貫之 2000「土佐藩の家老について」『土佐國群書類従 第三巻』

土佐山内家宝物資料館『御侍中先祖書系図牒』

# 付編1 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社  
松元美由紀・堀内誠示・辻 康男

## 1. はじめに

調査区で検出された池と溝の流況や水質および当時の水位の検討をするために行った珪藻分析と、遺構とその周辺に生育していた植物の情報を得るために行った池埋土に含まれる植物遺体の同定の結果について報告する。

## 2. 珪藻分析

### (1) 試料

分析試料は、屋敷地の池のSG-201下層、屋敷地の境の溝であるSD-201下層、SD-301下層上部および下部の4試料である。試料の時期は、SG-201とSD-201が17世紀代、SD-301が18世紀代である。

### (2) 分析方法

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石については、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類する。さらに淡水生種については塩分、pH、水の流動性の3適応性で分け、表に示す。

### (3) 結果

結果を表1、図1に示す。以下、結果の記載を試料毎に行う。

#### SG-201下層

本層準には多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。いずれも半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては普通～不良である。

検出された分類群は淡水生種を主とする組成であり、淡水生種以外は極低率に海水から汽水生種、

1. 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析

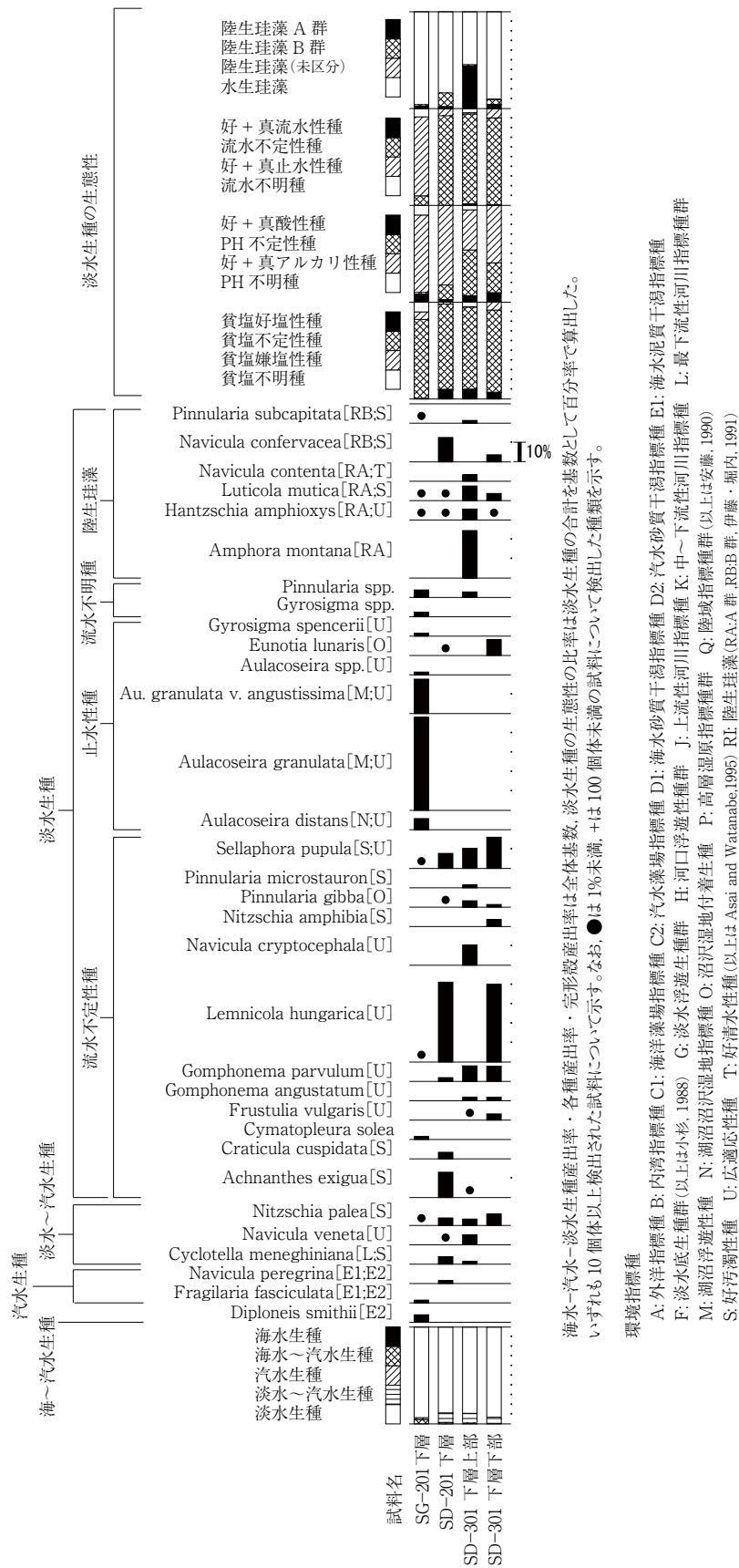


図1 主要珪藻化石群集



## 1. 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析

汽水生種および淡水から汽水生種を伴っている。3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)は、貧塩不定性, 好+真アルカリ性, 止水性が優占する。

特徴的に認められた種は、淡水生種で止水性種の *Aulacoseira distans*, *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira granulata* var. *angustissima* 等である。

### SD-201下層

本層準も比較的多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。いずれも半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては普通～不良である。

検出された分類群は淡水生種を主とする組成であり、淡水生種以外は低率に淡水から汽水生種、極低率に汽水生種を伴う種群で構成される。3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)は、貧塩不定性, 好+真アルカリ性, 流水不定性が優占する。

特徴的に認められた種は、淡水から汽水生種の *Nitzschia palea*, 淡水生種で流水不定性種の *Achnanthes exigua*, *Lemnicola hungarica*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の *Navicula confervacea* 等である。

### SD-301下層上部

本層準も比較的多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。いずれも半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては普通～不良である。

検出された分類群は淡水生種を主とする組成であり、淡水生種以外は低率に淡水から汽水生種、極低率に汽水生種を伴う種群で構成される。3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)は、貧塩不定性, pH不定性および好+真アルカリ性, 流水不定性および陸生珪藻が優占する。

特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Navicula cryptocephala*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の *Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Luticora mutica* 等である。

### SD-301下層下部

本層準も比較的多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。いずれも半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては普通～不良である。

検出された分類群は淡水生種を主とする組成であり、淡水生種以外は低率に淡水から汽水生種、極低率に汽水生種を伴う種群で構成される。3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)は、貧塩不定性, 好+真アルカリ性, 流水不定性が優占する。

特徴的に認められた種は、淡水から汽水生種の *Nitzschia palea*, 淡水生種で流水不定性種の *Lemnicola hungarica*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の *Navicula confervacea* 等である。

## (4) 考察

### ① 遺構の古環境

### SG-201下層

本層に特徴的に認められた止水性種の *Aulacoseira distans*, *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira granulata* var. *angustissima* 等は、浮遊性または臨時浮遊性種であり、富栄養水域の岸近くに認められることが多いとされる (Stoermer & Yang, 1968)。これらの種は、浮遊性のため、ある程度の水深のある池沼に優占的に認められる場合が多い種である。以上のような特徴種の生態性と認められた群集の構成から、本試料の堆積時は、ある程度の水深がある池沼の環境下にあったものと推定される。

## SD-201下層

本層に特徴的に認められた種は、淡水から汽水生種の*Nitzschia palea*、淡水生種で流水不定性種の*Achnanthes exigua*, *Lemnicola hungarica*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の*Navicula confervacea*等である。これらの生態性または生育環境は、まず、淡水～汽水生種とした*Nitzschia palea*は、好汚濁性種(Asai & Watanabe, 1995)とされ、特に人為的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。次に、流水不定性種とした*Achnanthes exigua*は、好汚濁性種(渡辺他, 1986; 渡辺他, 1988)とされる。同じく、流水不定性種の*Lemnicola hungarica*は、付着性で池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的であるが、中汚濁耐性種(小林ほか, 2006)とされ、水田からも特徴的に出現する(田中, 2002)。流水不定性種の*Sellaphora pupula*は、塩分に対する適応性、pHに対する適応性、流水に対する適応性はいずれも不定性であり、かなり広範な水域に認められることから広域頒布種と呼ばれる。また、汚濁した水域に特徴的に認められることから好汚濁性種にも位置付けられている(Asai & Watanabe, 1995)。他方、陸生珪藻の*Navicula confervacea*は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉, 1986)である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内, 1989; 1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占(70～80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。なお、本種は、塩類を豊富に含んだ水田等に爆発的に出現することが知られている。本種は、経験的には陸生珪藻の側面より、閉鎖的で高塩類の水域に優占種として認められることが多い種である。

以上のような特徴種の生態性と認められた群集の構成から、本試料の堆積時は、水の出入りが少ない有機汚濁が進んだ水域の環境下にあったものと推定される。

## SD-301下層上部

本試料に特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の*Navicula cryptocephala*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Luticora mutica*等である。これらの種の生態性または生育環境について概説する(前述していない種)と、流水不定性種の*Navicula cryptocephala*は、汎世界種(Lange-Bertalot, 2001)とされ、湖沼～河川に生育する汎布種、 $\alpha$ -低温性、 $\alpha$ ～ $\beta$ 中腐水性、 $\alpha$ ～富栄養、電解質の少ない～やや多い水域に広く認められる。大塚(1998)によれば、水底の砂上に多く生育するとされる。

本試料の堆積時については、以上の特徴種の中でも陸生珪藻が高率に認められたことから、溝内の水位が下がり、好气的環境下にあった可能性が高い。

## SD-301下層下部

本層に特徴的に認められた種は、淡水から汽水生種の*Nitzschia palea*、淡水生種で流水不定性種の*Lemnicola hungarica*, *Sellaphora pupula*, 陸生珪藻の*Navicula confervacea*等である。

本層に認められた群集は、以上の特徴種をはじめとして群集が前述のSD-201下層に近似している。よって、本層準の堆積時も水の出入りが少なく、やや有機汚濁が進んだ水域であったものと推定される。



## ② 小結

珪藻化石群集は、池と溝の埋土で大きく異なることが確認される。池では、浮遊性または臨時浮遊性種の止水性種の珪藻化石が多産しており、多産種の生態性から分析層準が、周辺からの有機物等が流れ込むような閉鎖水域を示唆する、ある程度の水深をもった滞水域であったと考えられる。後述する種実遺体分析結果をふまえると、池の水深は1m以内であったと推定される。このような分析結果は、遺構の形状や機能と極めて調和的である。これに対し、溝では、池で産出がわずかであった流水不定性種が優占もしくは多産する。また、溝では、陸生珪藻が池よりも多産傾向となる。珪藻化石の生態性と群集組成から、溝内は、有機汚濁が進んだ非常に浅い滞水域もしくは湿潤地であったと考えられる。なお、陸生珪藻の層位的変化から、SD-301では、埋没に伴い上層が乾燥傾向になったことが確認される。溝の分析結果から、人間活動の盛んな生活領域内に位置する屋敷地の境の溝では、雑排水が流れ込むような状況であったことが確認されるとともに、溝さらいなどをしないと埋没が進むような状況であったことが推定される。

## 3. 種実遺体分析

### (1) 試料

分析試料は、屋敷地の池埋土であるSG-402とSG-201上層より採取された土壌2点と、植栽栽痕の可能性のあるSX-420より出土した塊状炭化物1点である。分析試料の時期は、SG-402が19世紀、SG-201が17世紀、SX-420が19世紀である。

### (2) 分析方法

#### SG-402・SG-201

SG-201上層の土壌ブロック試料に確認される葉遺体は、写真記録後、表面に付着する砂泥を面相筆で慎重に除去する。また、葉遺体が確認されない端部を採取し、水洗対象とする(350cc)。クリーニング後の土壌ブロック試料をラップで包み、保管する。

土壌試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。大型植物遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、大型植物遺体等を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

#### SX-420

試料の状態を考慮し、分析は非破壊とする。塊状炭化物を双眼実体顕微鏡とマイクロスコープ(KEYENCE,VHX-1000)で観察する。また、塊状炭化物より脱落した炭化種実をピンセットで100個程度抽出する。炭化種実の同定は、現生標本を参考に実施し、結果を一覧表と図版で示す。分析後は、試料を容器に入れて保管する。

### (3) 結果

#### SG-402・SG-201

結果を表2、図版2に示す。裸子植物1分類群1個の葉と、被子植物29分類群97個の種実が同定され、栽培種のイネ、ヒョウタン類、ナスが確認された。以下に遺構別出土状況等を述べる。

表2 種実遺体分析結果

分類群	部位		状態	SG-402	SG-201 上層	備考
木本						
モミ属	葉	破片(先端部)		-	1	
アカメガシワ	種子	破片		-	2	
サンショウ亜属	種子	破片		-	2	
ノブドウ	種子	破片(背面)		-	1	
草本						
オモダカ科	種子	完形		-	1	
イボクサ	種子	完形		-	1	
イネ	胚乳	完形	炭化	-	1	基部欠損
〃	穎	破片(基部)	炭化	-	1	
〃	〃	破片(基部)		-	1	
〃	〃	破片		1	-	
オヒシバ	種子	完形		-	2	
ヌカスゲ類	果実	完形		-	1	
ホタルイ属	果実	完形		-	1	
カヤツリグサ属	果実	完形		-	1	
カヤツリグサ科	果実	完形		-	2	
イヌタデ近似種	果実	完形		-	1	
ポントクタデ近似種	果実	破片		-	1	
スベリヒユ	種子	完形		12	3	
〃	〃	破片		1	-	
ハコベ類	種子	完形		-	1	
ナデシコ科	種子	完形		19	4	
〃	〃	破片		1	-	
アカザ属	種子	完形		1	-	
ヒユ属	種子	完形		-	3	
タガラシ	果実	完形		-	1	
キケマン	種子	完形		-	1	
キジムシロ類	核	完形		16	-	表面粗面
〃	〃	破片		1	-	
カタバミ属	種子	完形		2	2	
〃	〃	破片		-	1	
エノキグサ	種子	破片		1	-	
ヒメミカンソウ	種子	完形		-	1	
ヒョウタン類	種子	破片		1	-	基部,毛残存
ヤエムグラ属	核	完形		1	-	
ナス	種子	破片		-	1	
タカサブロウ	果実	完形		-	2	
キク科	果実	完形		1	-	冠毛残存
不明				-	-	
不明A		完形	炭化	-	1	一部欠損
不明B		破片		-	1	
種実合計(不明を除く)				58	40	
種実以外(抽出同定対象外)				-	-	
炭化材				+	+	
骨貝類				1	-	
昆虫類				+	+	
高師小僧(褐鉄鉱)				-	+	
砂礫類				++	++	
分析量				60	350	容積(cc)
				114	704	湿重(g)

## SG-402

試料60cc(114g)より、栽培種のイネの穎の破片が1個、ヒョウタン類の種子の破片が1個と、草本8分類群(スベリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、キジムシロ類、カタバミ属、エノキグサ、ヤエムグラ属、キク科)56個の、計58個が同定された。種実以外では、炭化材、骨貝類、昆虫類、砂礫類が確認された。種実遺体群は草本のみの組成で、ナデシコ科が20個と最も多く、キジムシロ類(17個)、スベリヒユ(13個)

と次いで多く、明るく開けた、やや乾いた場所に生育する分類群から成る。

### SG-201上層

試料表面に確認される葉遺体は、双子葉類と考えられるが、同定ができなかった。最も状態が良好な葉遺体(図版2-1・2)には、残存長5cmの葉脈8本程度が放射状に配列し、脈間を連結する網状脈が確認されたが、同定根拠となる葉の先端や基部、葉縁などは確認されなかった。

土壌水洗では、試料350cc(704g)より、栽培種のイネの穎の破片、炭化した穎の破片、炭化した胚乳、ナスの種子の破片が各1個と、木本4分類群(針葉樹のモミ属、広葉樹のアカメガシワ、サンショウウ属、ノブドウ)6個、草本18分類群(オモダカ科、イボクサ、オヒシバ、ヌカスゲ類、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、ボントクタデ近似種、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、ヒユ属、タガラシ、キケマン、カタバミ属、ヒメミカンソウ、タカサブrou)30個、計40個が同定された。2個は同定ができなかった。種実以外では、炭化材、昆虫類、高師小僧(褐鉄鉱)、砂礫類が確認された。

大型植物遺体群は、人里草本主体の組成を示し、多産する分類群は認められない。草本は、オモダカ科、イボクサ、ホタルイ属、ボントクタデ近似種、タガラシ、タカサブrouなどの水湿地生植物と、オヒシバ、ヌカスゲ類、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、ヒユ属、キケマン、カタバミ属、ヒメミカンソウなどの、乾いた場所にも生育可能な中生植物が確認された。木本は、常緑高木のモミ属(モミ?)と、林縁等の明るく開けた場所を好んで生育する落葉高木のアカメガシワや落葉低木のサンショウウ属、落葉藤本のノブドウが確認された。

### SX-420

結果を表3、図版3に示す。塊状炭化物を構成する炭化種実は、全て栽培種のイネの胚乳(炭化米)に同定された。炭化米以外の植物は、単子葉類の炭化植物片(イネ科の稈の可能性)が確認された。

イネの胚乳は、炭化しており黒色、やや扁平な長楕円体を呈すが、焼き膨れや発泡個体が多く、状態不良である。塊状炭化物から脱落した胚乳100個(図版3-5)の重量は0.49gを量り、うち保存状態が良好な2個の計測値は、長さ4.7mm、幅1.9mm、厚さ1.6mmの長粒で極小型(図版3-6)と、長さ4.6mm、幅1.7mm、厚さ1.5mmの長粒で極々小型(図版3-6)であった(佐藤、1988の定義による)。他の状態不良な胚乳も細身が多く、長粒主体とみなされる。胚乳の基部一端には、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦隆条が確認され、種皮が残る「玄米」の状態も確認された(図版3-6・7)。なお、胚乳を包む穎(糊)は、全く確認されなかった。

多数の胚乳が密着した塊状炭化物の最大塊(図版3-1)は、大きさは15cm×7cm×6cmを測り、泥を含む重量は148.2gを量る。塊状炭化物の表面観察では、胚乳個々の向きは区々で、隣接する別個体の種皮が密着する。なお、イネ以外の種実や虫類等の混入物は認められなかった。

塊状炭化物最大塊の最大面(14cm×6cm)は平坦で、一端がやや湾曲する状態が確認された(図版3-1b上)。最大平坦面には、炭化植物片が炭化米塊と接し、薄膜状に長軸方向に配列している。編組は確認されない。炭化植物片は、幅1~2mm程度の線形で、表面に浅く細い長軸方向の平行脈が配列することから、同一の単子葉植物の茎か葉と考えられる。幅1~2mm程度の中空を呈す部分も確認されることから、イネ科の茎(稈)の可能性はある。

表3 塊状炭化物同定結果

図版番号	分類群・部位・状態	乾重(g)	大きさ(cm)	備考
1~3	イネ胚乳(多量塊状) ・単子葉類植物片	148.2	15cm×7cm×6cm	平坦面(14cm×6cm)に植物片が配列
-	イネ胚乳(多量塊状) ・単子葉類植物片	148.2	9cm×8cm×8cm	イネ:7×7×5cmに集中植物片配列
4	イネ胚乳(多量塊状)	0.2	1.8cm×1.1cm×0.7cm	新鮮な面にはイネ胚乳のみ確認
5	イネ胚乳(100個)	0.5	-	状態不良,長粒主体
5・6	イネ胚乳(1/100個)	<0.01	長さ4.7mm,幅1.9mm,厚さ1.6mm	長粒,極小型
5・7	イネ胚乳(1/100個)	<0.01	長さ4.6mm,幅1.7mm,厚さ1.5mm	長粒,極々小型
-	残渣 (塊状炭化物,イネ,単子葉類,泥等)	54.5	-	-
-	合計	351.6	-	-

## (4) 考察

## SG-402

SG-402と後述するSG-201は、ともに武家屋敷内に形成された池である。発掘調査地点は、高知城に近い城下町内に位置しており、近世に街場であった場所である。古代末～中世に本遺跡周辺では、河川堆積作用を間欠的に受けるような高燥な氾濫原が既に広がっていたことが、近傍の弘人屋敷跡の発掘調査結果と自然科学分析結果からうかがえる(宮里編, 2014)。

分析を行った池では、周囲の地表からの再堆積や、池底に沈積したと思われる泥がちな細粒堆積物で主に構成されている。これらの細粒堆積物に比べ、運搬能力が強い遠方からの物質を相対的に多く含むと考えられる洪水堆積物などの砂礫がちな粗粒堆積物の挟在は、遺構内において認められない。このような池埋土から抽出を行った種実や葉、小枝などの大型植物遺体(辻, 2000)については、風ないし重力が散布の起因となる場合、花粉化石より粒径や重量など大きい場合、親植物から移動距離が相対的に小さく、局地性が高くなる場合が多い(百原・南木, 1988)。水を媒質とする場合、流路内の河床堆積物や氾濫原の洪水堆積物といった粗粒堆積物では、長距離運搬されたものが多く含まれるものの、河川氾濫原においても、堆積環境が穏やかな細粒堆積物が累重する後背湿地的な場所では、局地性の高い大型植物遺体で構成されることが示されている(辻, 2000)。また、これまでの研究により、河川氾濫原上の大型植物遺体は、それらが含まれる碎屑物の粒度組成や堆積環境と共変動することが明らかにされている(百原・吉川, 1997;中嶋その他, 2004など)。上記のことから、今回の分析地点での大型植物遺体の運搬に関わる水の移動としては、流路内の河川流や氾濫原上の洪水流は想定されず、集水域が遺構周辺に限られる、雨水等に伴う地表流などの極弱い水流が支配的であったと考えられる。以上のことをふまえると、SG-402とSG-201に含まれる大型植物遺体は、局地性が高いものが多く含まれるとみなされる。

SG-402からは、栽培種のイネの穎、ヒョウタン類の種子が確認される。これらは、当時人間によって利用された植物と考えられる。栽培種を除いた種実遺体群は、人里草本のみの組成で、ナデシコ科、キジムシロ類、スベリヒユをはじめ、アカザ属、カタバミ属、エノキグサ、ヤエムグラ属、キク科など、明るく開けたやや乾いた草地環境に生育するものを主体とする。上記した発掘調査地点と分析地点

の状況をふまえると、これらは屋敷地内の草地に由来するものと考えられる。

なお、本遺構では、SG-201と異なり木本の大型植物遺体が検出されていない。SG-402の分析試料は、検出時に肉眼で植物遺体が認められた部分のみを選択的に取り上げられたものであり、採取された試料の量も非常に限れる。本遺構の大型植物遺体組成は、このような分析試料の採取段階の性状の影響を強く受けている可能性がある。従って、SG-402周囲に樹木が生育していたかどうかについて、今回の分析試料からは言及が難しい。

#### SG-201上層

SG-201上層からは、栽培種のイネの穎、胚乳と、ナスの種子が確認される。これらは、当時利用された植物質食料であり、イネの穎と胚乳は炭化していることから火を受けたとみなされる。栽培種を除いた大型植物遺体群は、人里草本主体の組成を示し、オモダカ科、イボクサ、ホタルイ属、ボントクタデ近似種、タガラシ、タカサブロウなどの水湿地生植物と、オヒシバ、ヌカスケ類、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、ヒユ属、キケマン、カタバミ属、ヒメミカンソウなどの、乾いた場所にも生育可能な中生植物が確認される。

発掘調査地点と分析地点の状況をふまえると、中生植物については、屋敷地内に生育していた草本とみなされる。水深の浅い(1m以内)水湿地に生育するオモダカ科やホタルイ属などの抽水性～湿生植物は、池内や池沿いの湿潤地に生育していたと考えられる。このような抽水性～湿生植物の産出は、上記した本遺構下層の粘土の珪藻分析結果とも調和的である。

木本は、常緑針葉樹で高木になるモミ属と、落葉広葉樹で高木になるアカメガシワ、低木のサンショウ亜属、藤本のノブドウが確認される。このうち、モミ属は、海岸近くの丘陵からブナ帯上部まで生育するモミである可能性が高い。

高知県下の花粉分析結果にもとづく植生史研究から、土佐湾沿岸の山地、丘陵では、6,000～5,000年前以降に針葉樹のツガ属、モミ属が伴い、カシ類、シイ類からなる照葉樹林が分布していたと考えられている(三宅, 2009)。本遺跡とその周辺遺跡では、花粉分析結果がほとんど得られておらず、具体的な花粉分析結果にもとづく古植生の変遷を議論することは難しい。そのようななか、分析地点の近傍に位置する弘人屋敷跡では、15世紀の流路埋土の花粉分析結果が得られている。この分析結果では、木本でマツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)、草本でイネ科が優占する草本主体の花粉分析結果が得られている(宮里編, 2014)。土佐湾沿岸域では、塚田松雄の完新世の花粉帯に関する研究(塚田, 1967・1981など)にもとづき、約3,000年前以降のヨモギ属、イネ科(栽培種のイネ属を含む)などの草本花粉を伴うマツ属の増加の主要因が、人間による照葉樹林の破壊とみなされている(三宅, 2009)。これらの研究にもとづくと、弘人屋敷跡で確認される15世紀のニヨウマツ類の花粉の優占については、人為的な森林植生破壊に起因する可能性が極めて高いと判断される。また、弘人屋敷跡の15世紀の流路の花粉化石群集からは、当該期に分析地点の流路周辺でまとまった林分が存在しておらず、草地が卓越していたことも推定されている(宮里編, 2014)。

なお、日本のニヨウマツ類の花粉には、アカマツのほか、クロマツとトカラ列島以内のリュウキュウマツが含まれる。本州島の内陸部では、11,700年前以降の完新世のうちで比較的新しい時期の場合、その多くがアカマツに由来するとされる(佐々木・高原, 2011)。本地域においてアカマツは、生育の適応範囲が広く、自然の生育地として、露岩地、尾根筋、表土の浅い土地などの乾燥しやすい貧栄養の場所もしくは湿地や滞水域周辺などの湿潤地といった、気候的に極相なすといった競争

力の強い広葉樹の生育に不適となる、このような両極端な環境条件の場所にも生育が可能である(沼田・岩瀬, 2002; 中村 監修・日本植木協会編, 2014)。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、アカマツは、崩壊地や伐採地など植生が破壊された領域において、初期段階に侵入して林分をなす二次林の代表的な樹種となる(沼田・岩瀬, 2002)。

弘人屋敷跡は、大きな空間スケールでは沿岸部の立地ともみなされるが、クロマツの生育が予想される当時の海岸線付近の砂丘や浜堤から7kmほど陸側に位置している。弘人屋敷跡では、調査区の堆積層の記載(宮里編, 2014)から、上流側の山地、丘陵からの土砂流出が卓越する河川の堆積作用を古代以降に受けていたことが確認される。これら海岸線からの距離と立地環境をふまえると、弘人屋敷跡での15世紀の流路埋土のマツ属複維管束亜属は、基本的にアカマツに由来すると解釈される。人間の植生攪乱で成立するアカマツ林は、単なる伐採の繰り返しや山焼きではなく、耕作地の肥糧や燃料材の採取を目的に、下草や落葉・落枝ないし樹木を、継続的かつ過剰に採取していくという、森林からの大きな養分収奪によって形成されることが述べられている(吉良, 2001)。このことから、弘人屋敷跡や追手筋遺跡が立地する高知平野をとりまく山地、丘陵では、15世紀には既に人間による森林資源の収奪が相当進行していたことが推察される。

上記のような中世段階の高知城下町周囲の森林植生、さらに近世段階に街場が広く形成されることをふまえると、17世紀に分析地点の近くには、モミが生育するような林分が存在していなかったと考えられる。当時の古植生と近傍の景観、庭園史研究から近世にモミが植栽として利用される事例もあること(飛田, 2002)、池埋土に含まれる大型植物遺体の局地性が高いと考えられることにもとづくと、モミ属については、屋敷地内に植栽に由来する可能性が示唆される。なお、分析地点は、高知城の立地する丘陵地から500～600m前後の近い位置に存在している。現在ここでは、モミなどの樹木が生育しているようである(四国森林管理局のホームページによる)。高知城が存在する丘陵地での近世の植生については、報告者の調査が不十分であるものの、当該期に樹木が存在した可能性はあると思われる。このことから、今回検出されたモミ属は、高知城が存在する丘陵からの再堆積を完全に否定できない。

アカメガシワ、サンショウ亜属、ノブドウは、林縁等の明るく開けた場所に生育する。なお、飛田(2002)を参照すると、アカメガシワ、サンショウ亜属、ノブドウについては、植栽樹としては一般的ではないようである。分析地点は、まとまった樹木が生育しにくい街場であるものの、これらの生育環境として大きく隔たっていない場所であり、さらに上記したように孤立的な林分領域が高知城に想定される。このような場所性と上記のような池埋土の堆積条件をふまえると、アカメガシワ、サンショウ亜属、ノブドウは、分析地点の近くに生育していた可能性がうかがえる。ただし、その由来を絞り込むことは、現段階において難しい。

#### SX-420

SX-420より出土した塊状炭化物は、全て栽培種のイネの胚乳(炭化米)で、穎(籾)は確認されなかった。また、塊状炭化物より脱落した炭化米の一部を観察した結果、長粒(佐藤, 1988)が多い傾向が得られた。

穀類のイネは、当時利用された植物質食糧と示唆され、長粒の系統に由来する可能性がある。出土塊状炭化物は、籾殻を取り去った(脱皮; だっぶ)後の胚乳(玄米)が多量密着した状態で火を受けたとみなされるが、炊飯前の生米の状態でも火を受けたのか、炊飯後の状態で火を受けたのかの区別は



困難であった。従って、この出土塊状炭化物が握り飯(おにぎり)に由来するものかどうかは、現段階の観察結果から断言できない。

なお、塊状炭化物表面には、イネ科の茎(稈)と考えられる単子葉植物の植物片が同一方向に配列する平坦面が確認された。植物片が米に接した状態で火を受けたとみなされ、容器(編組製品以外の)や敷藁等に由来する可能性が高い。

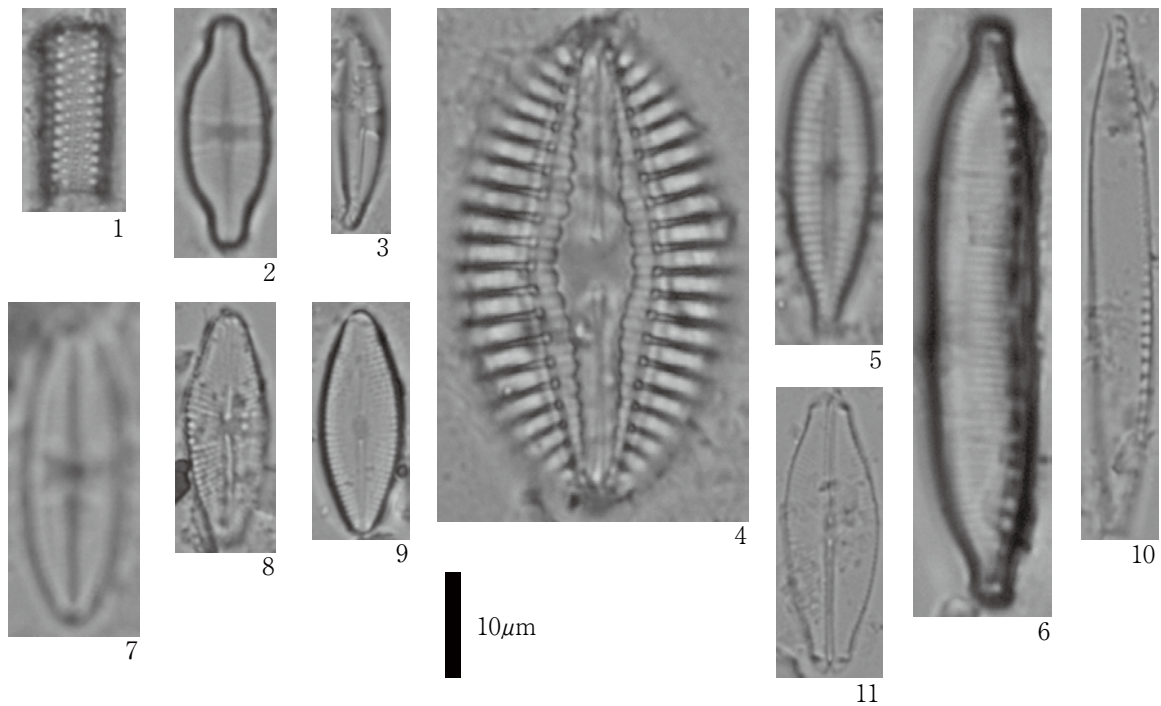
#### 引用文献

- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35 – 47.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras – 600044. 1 – 13, Plates: 401 – 621.
- Horst Lange – Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange – Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1, 219, p. 925.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937 – 1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen – Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131 – 809, 1 – 155, 274 – 349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961 – 1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 – 陸生珪藻の細分 – . 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23 – 44.
- 吉良竜夫, 2001, 森林の環境・森林と環境. 新思索社, 358p.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五, 2006, 小林 弘珪藻図鑑. 第1巻, 株式会社内田老鶴圃, 531p.
- 小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義 – わが国への導入とその展望 – . 植生史研究, 1, 9 – 44.
- Krammer, K. and H. Lange – Bertalot, 1985, Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, vol. 9, p. 250.
- Krammer, K. and H. Lange – Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa*, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange – Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa*, 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange – Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa*, 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange – Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, *Susswasser flora von*

Mitteleuropa,2(4):437p.

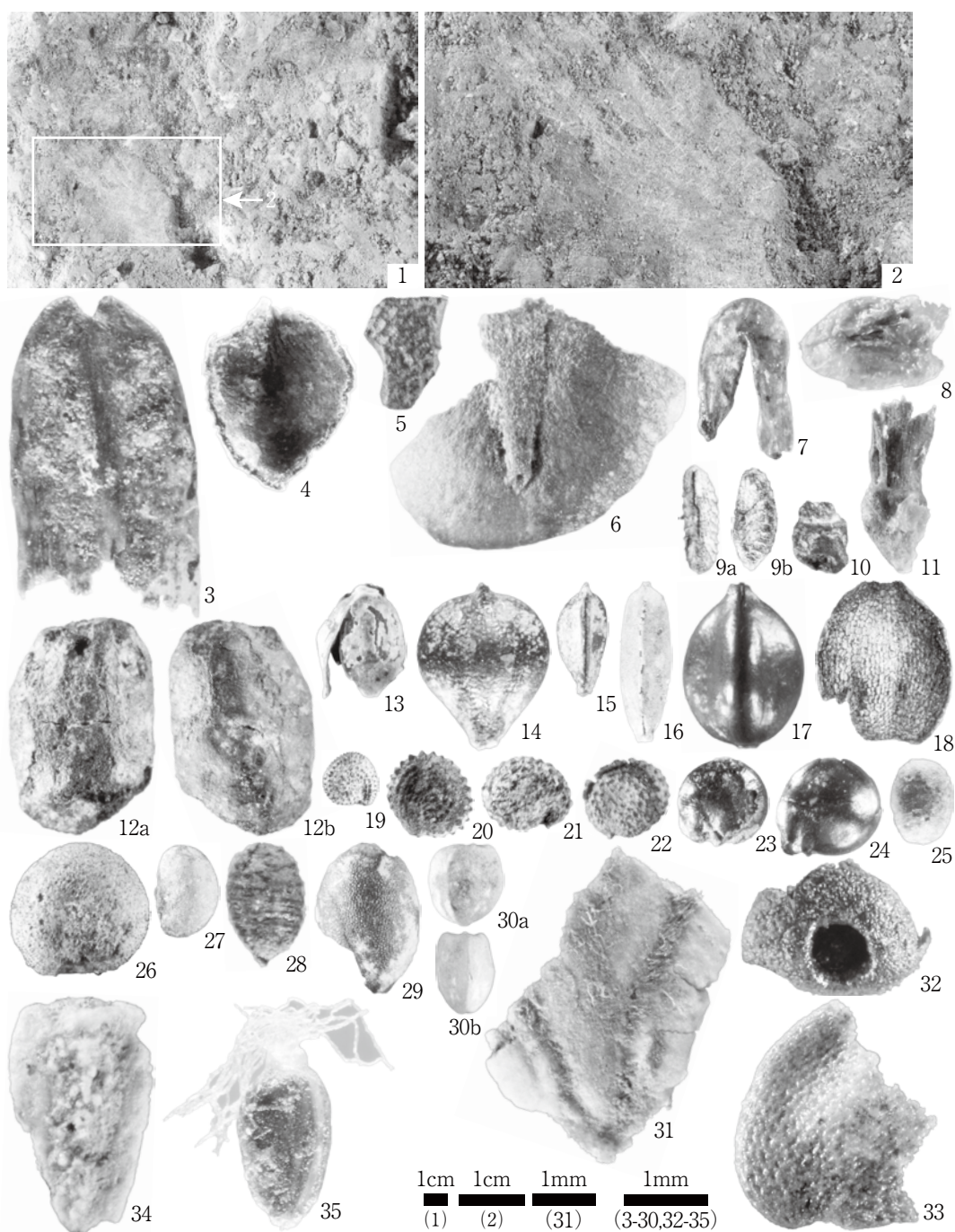
- 三宅 尚,2009,四国南部沿岸域の植生史.高知市総合調査 第1編「地域の自然」高知市総合調査受託研究成果報告書,高知市・国立大学法人 高知大学,278 - 295.
- 宮里 修編,2014,弘人屋敷跡.高知県・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,511p.
- 百原 新・吉川昌信,1997,蛇行河川内での大型植物化石群の堆積過程.植生史研究,5,15 - 27.
- 百原 新・南木睦彦,1988,大型植物化石群集のタフオノミー.植生史研究,3,13 - 23.
- 中村幸人監修・日本植木協会編,2014,植生景観とその管理.東京農業大学出版会,267p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.
- 中嶋雅宏・中山勝博・百原 新・塚腰 実,2004,中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動一岐阜県多治見市大洞地区の例一.地質学雑誌,110,204 - 221.
- 沼田 真・岩瀬 徹,2002,図説日本の植生(講談社学術文庫).講談社,320p
- 佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2 生業,雄山閣,97 - 111.
- 佐々木尚子・高原 光,2011,花粉化石と微粒炭からみた近畿地方のさまざまな里山の歴史.里と林の環境史,文一総合出版,19 - 36.
- Stoermer, E. F. and Yang, J. J., 1968, A preliminary report on the fossil diatom flora from Lake Huron sediments. Proc. 11th Conf. Great Lake Res., Internat. Assoc. Great Lakes Res. 257 - 267.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実 - 形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種 -.誠文堂新光社,272p.
- 田中正明,2002,日本淡水産動物植物プランクトン図鑑.名古屋大学出版会,584pp.
- 飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.
- 塚田松雄,1967,過去一万二千年間の日本植生史 I .植物学雑誌,80,323 - 336.
- 塚田松雄,1981,過去一万二千年間の日本植生史 II 新しい花粉帯.日本生態学会誌,30,201 - 205.
- 辻 誠一郎,2000,種実類:大型植物遺体.考古学と植物学,同成社,111 - 149.
- 渡辺仁治・根来健一郎・福島 博・小林 弘・浅井一視・後藤敏一・南雲 保・小林艶子・真山茂樹・伯耆晶子,1986,珪藻群集を生物指標とする陸水汚濁の定量的環境評価法の研究.日産科学振興財団研究報告書,139 - 167.
- 渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視,1988,珪藻群集による有機汚濁指数(DAI<sub>po</sub>)の止水域への適用.水質汚濁研究,11,765 - 773.

1. 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析



1. *Aulacoseira granulata* (Ehr.) Simonsen (A-1区SG-201下層)
2. *Achnanthes exigua* Grunow (A-1区SD-201下層)
3. *Amphora montana* Krasske (A-1区SD-301下層上部)
4. *Diploneis smithii* (Breb. ex W. Smith) Cleve (A-1区SG-201下層)
5. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (A-1区SD-201下層)
6. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (A-1区SD-301下層上部)
7. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson (A-1区SD-201下層)
8. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G. Mann (A-1区SD-301下層上部)
9. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (A-1区SD-201下層)
10. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (A-1区SD-201下層)
11. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (A-1区SD-301下層上部)

図版1 珪藻化石

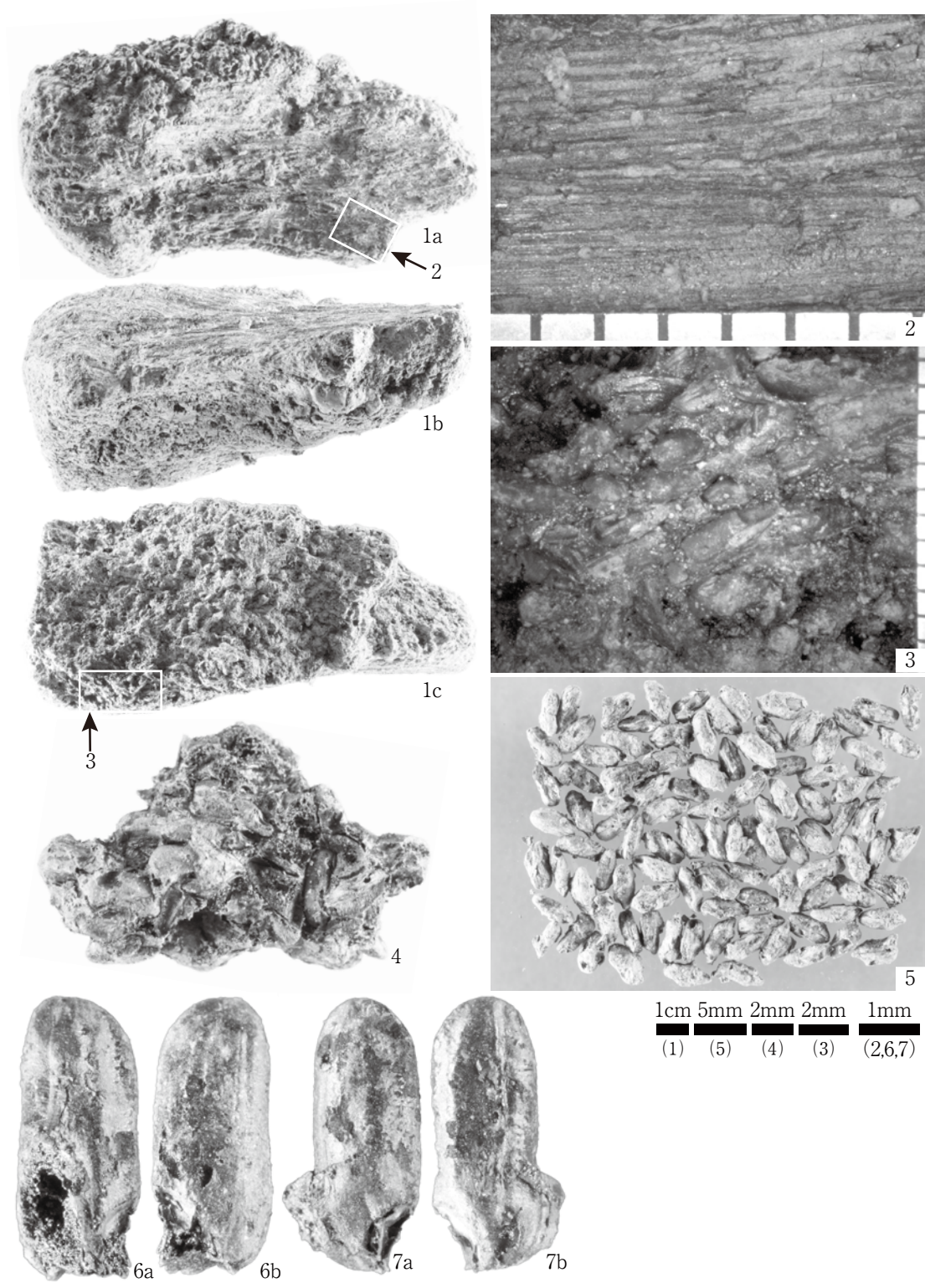


- |                            |                            |                              |
|----------------------------|----------------------------|------------------------------|
| 1. 不明(双子葉類) 葉 (SG-201 上層)  | 2. 不明(双子葉類) 葉 (SG-201 上層)  | 3. モミ属 葉 (SG-201 上層)         |
| 4. アカメガシワ 種子 (SG-201 上層)   | 5. サンショウ亜属 種子 (SG-201 上層)  | 6. ノブドウ 種子 (SG-201 上層)       |
| 7. オモダカ科 種子 (SG-201 上層)    | 8. イボクサ 種子 (SG-201 上層)     | 9. オヒシバ 種子 (SG-201 上層)       |
| 10. イネ 類(基部) (SG-201 上層)   | 11. イネ 類(基部) (SG-201 上層)   | 12. イネ 胚乳 (SG-201 上層)        |
| 13. ヌカスゲ類 果実 (SG-201 上層)   | 14. ホタルイ属 果実 (SG-201 上層)   | 15. カヤツリグサ属 果実 (SG-201 上層)   |
| 16. カヤツリグサ科 果実 (SG-201 上層) | 17. イスタデ近似種 果実 (SG-201 上層) | 18. ポントクタデ近似種 果実 (SG-201 上層) |
| 19. スベリヒユ 種子 (SG-402)      | 20. ハコベ類 種子 (SG-201 上層)    | 21. ナデシコ科 種子 (SG-402)        |
| 22. ナデシコ科 種子 (SG-201 上層)   | 23. アカザ属 種子 (SG-402)       | 24. ヒユ属 種子 (SG-201 上層)       |
| 25. タガラシ 果実 (SG-201 上層)    | 26. キケマン 種子 (SG-201 上層)    | 27. キジムシロ類 核 (SG-402)        |
| 28. カタバミ属 種子 (SG-402)      | 29. エノキグサ 種子 (SG-402)      | 30. ヒメミカンソウ 種子 (SG-201 上層)   |
| 31. ヒョウタン類 種子(基部) (SG-402) | 32. ヤエムグラ属 核 (SG-402)      | 33. ナス 種子 (SG-201 上層)        |
| 34. タカサブロウ 果実 (SG-201 上層)  | 35. キク科 果実 (SG-402)        |                              |

図版2 大型植物遺体



1. 追手筋遺跡の珪藻・種実遺体分析



- 1. 塊状炭化物(イネ胚乳・単子葉類) (SX-402)
- 2. 単子葉類 茎?(SX-402)
- 3. イネ 胚乳(多量密着) (SX-402)
- 4. 塊状炭化物(イネ胚乳) (SX-402)
- 5. イネ 胚乳(SX-402)
- 6. イネ 胚乳(SX-402)
- 7. イネ 胚乳(SX-402)

図版3 塊状炭化物

## 付編2 追手筋遺跡出土の動物遺存体

土佐市教育委員会 池田 研

### 1. 脊椎動物

出土した脊椎動物遺存体資料は発掘調査中に肉眼で確認したもので、同定作業に当っては丸山真史氏(東海大学)より御教示を賜った。同定結果は表1～6の通りである。

表1 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果1

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考
推定居住者：山内(B-1区)						
12		SD-212	17C頃	大型哺乳類	脛骨R	ニホンジカ若獣orオオカミ？
11		SD-213	17C頃	不明	骨幹部	
14		SD-215	17C頃	不明	骨幹部	
15				不明	骨幹部	
18				ニホンジカ	大腿骨L	
175	①②			ニホンジカ	①脛骨R ②脛骨L	
	③			ニホンジカ	③大腿骨R(小さい)	
	④			シカ科	指骨	小さい
	176			不明	骨幹部	両骨端切断除去？
177				カモ科	尺骨R	ヒドリガモ同大Bp9.56
178				不明	寛骨	
179				ニホンジカ	中足骨L	
180				不明	破片	
181				不明	肋骨？	
182	①			ニホンジカ？	脛骨R	遠位端分離
	②			カモ科	上腕骨R	ヒドリガモ同大GL80.91 Bp17.24 Bd12.92 SC6.51
183				ニホンジカ	大腿骨L	
184				不明	骨幹部	
185				ニホンジカ	脛骨R	
186				ニホンジカ？	脛骨L	
187	①			ニホンジカ	中足骨R	
	②			イヌ	大腿骨R	
188				ニホンジカ	上腕骨L	
189	①②			ニホンジカ	①中手骨L ②橈骨L	
190				ニホンジカ	大腿骨L	
191				ニホンジカ	橈骨R	
192				ニホンジカ	中足骨R	
173				不明	骨幹部	
174				ニホンジカ	上腕骨R	
218				SX-208	17C	ニホンジカ
219				ウマ	大腿骨L	SD27.42(参考値), イヌ咬痕
13		SX-211	17C頃	ウシorウマ？	骨幹部	
8		2面その他遺構	17C頃	不明	骨幹部	
208			17C	不明	骨幹部	
6		第Ⅲ-3層	17C頃	ニホンジカ	中手骨L	
7				不明	骨幹部	
推定居住者：山内(A-1区)						
36		SK-416	江戸後期	不明	骨幹部	
103		SK-420	江戸後期	不明	骨幹部	
164		SX-303	18Cか	ウ科	大腿骨L	Bd18.92, ウミウより大
104		SX-402	幕末	不明	破片	
44		SX-405	18C	ニホンジカ	寛骨L	
45				不明	骨幹部	
47				不明	骨幹部	
99				不明	骨幹部	



2. 追手筋遺跡出土の動物遺存体

表2 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果2

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考
推定居住者：山内(A-1区)						
46		SX-405	18C	キジ科	脛足根骨R	キジよりやや大(ニワトリの可能性あり)
48				イノシシ/ブタ	上腕骨L	
72		第Ⅲ-1層	江戸後期	不明	骨片	
図97		第Ⅲ-2層	幕末	骨製品	紀年名あり	
推定居住者：山内(A-2区)						
228		SG-401	江戸後期		不明	破片
推定居住者：村田(B-1区)						
22		SD-302	江戸後期	不明	破片	
205		SD-405	江戸後期	イノシシ/ブタ	第Ⅲ中足骨R	
119		SD-407	江戸後期	イノシシ/ブタ	脛骨R	
122		SD-409	江戸後期	不明	骨幹部	
88		SD-410	江戸後期	骨製品		
				ウシ	下顎第二臼歯	
89	①②			マクロ属	①②椎骨	体長70以上
117	①②			サメ類	①②椎骨	①椎体横径30.56
118				不明	破片	
215		ウシ	中足骨R	Bp47.7 SD25.43, イヌ咬痕		
121	①	SD-423	江戸後期	ニホンジカ	中手骨R	イヌ咬痕・刃物傷
	②			不明	骨幹部	
223		SG-301	18Cか	カモ科	脛足根骨L	Bd8.89
75		SG-402	江戸後期	ネズミザメ科	椎骨	
76				マクロ属?	椎骨	
77	①			サメ類	椎骨	椎体横径22.05 縦径22.06 厚13.03
	②					椎体横径22.93 縦径22.84 厚13.30
	③					椎体横径22.74 縦径22.52 厚13.06
105	①			ネズミザメ科	椎骨	
	②			マクロ属?	椎骨(尾椎)	体長100程度
106				イノシシ/ブタ	脛骨L	
107	①			不明	肋骨	
	②			ネズミザメ科	椎骨	計測不可
108				サメ類	椎骨	椎体横径19.39 縦径19.37 厚11.17
109	①			サメ類	椎骨	椎体横径25.19 縦径26.39 厚14.60
	②					椎体横径23.35 縦径23.44 厚13.74
110				不明	骨幹部	
112				不明	破片	
111						
201						
図2789				骨製品(髒)		
図2753				骨製品(髒)		
78		SK-230	江戸後期	不明	破片	
210		SK-306	18C	魚類	椎骨(腹椎)	
226	複数	SK-318	18C	ネズミ科	頭蓋骨+下顎骨LR	
204		SK-431	江戸後期	不明	骨幹部	
224		SK-439	江戸後期	不明	破片	
図2523		SK-446	江戸後期	不明	骨幹部	
39		SK-449	江戸後期	不明	骨幹部	
37		SK-456	江戸後期	ニホンジカ	中手骨L	
98		P-417	江戸後期	不明	骨幹部	
221		SX-309	18C	イノシシ/ブタ	下顎犬歯L	イノシシか?
222				ニホンジカ?	脛骨R	イヌ咬痕あり
200		SX-312	18C	ニホンジカ	踵骨L	
220	①~⑥	SX-314	18C	ニホンジカ	①④脛骨L ②⑥大腿骨L ③⑤中足骨L	
55	①	SX-317	江戸後期	ニホンジカ	中手骨L	
	②			イノシシ/ブタ	上腕骨L	
	③			不明		

表3 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果3

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考
推定居住者：村田(B-1区)						
100		SX-317	江戸後期	ニホンジカ	上腕骨R	
101				イノシシ/ブタ	下顎骨R	
217	①			ニホンジカ	肩甲骨L	
	②	不明	骨幹部			
216		SX-409	江戸後期	不明(シカ)	中手骨	
54		SX-411	江戸後期	ニホンジカ	脛骨R	
102				ニホンジカ	中足骨R	
51		SX-416	江戸後期	不明	骨幹部	
52				鳥類?	骨幹部	
113	①~③	SX-418	江戸後期	ニホンジカ	①脛骨R ②中手骨L ③距骨R	
167		3面遺構	江戸後期	イヌ	尺骨R	
202		3面遺構	18C	不明	骨幹部	
209		3面遺構	18C	ニホンジカ?	肩甲骨	
225	①②	3面遺構	18C	ニホンジカ	①上腕骨R ②脛骨L	
120		4面遺構	江戸後期	不明	破片	
207		4面遺構	江戸後期	ウマ	中足骨L	
3		第Ⅲ-1層	江戸後期	ウシ	下顎第一切歯L	
194				不明	破片	
195				ニホンジカ	中足骨L	
212				不明	骨幹部	
213				不明(シカ)	上腕骨R	
4		第Ⅲ-2層	18C頃	不明		
5				不明	骨幹部	
推定居住者：百々(A-1区)						
153	①~③	SD-204	17C	ニホンジカ	①肩甲骨R ②上腕骨R ③橈骨R	
27		SD-205	17~18C	ウサギ?	大腿骨R	
158		SG-201	17C	不明	骨幹部	
161				不明	破片	
159				ニホンジカ	大腿骨L	
160				ニホンジカ?	肩甲骨	
162				ニホンカワウソ	脛骨L	GL89.67 Bp21.96 Bd15.01 SD6.08
163		SK-202	17C	不明	骨幹部	
29・30		SX-201	17C	不明	骨幹部	
31				ネズミ科	下顎骨L	アカネズミ?
32				カモ科	上腕骨R	カルガモ同大
33				ネコ	大腿骨R	GL105.81 Bp20.45 Bd18.26 SD9.18
34	①②			イヌ	①尺骨L ②橈骨L	
35				ニホンジカ	上腕骨L	
166				ウシ	中足骨R	切断痕
推定居住者：百々(A-2区)						
227		SG-202		ニホンジカ	枝角	先端部、鋸切断
屋敷境の溝(A-1区)						
23	①~⑩	SD-201	17Cか	イヌ	①②下顎骨R ③尺骨R ④大腿骨L ⑤寛骨L ⑥~⑩椎骨	
24				不明	骨幹部	
25	①~⑯			イヌ	①上腕骨L ②上腕骨R ③肩甲骨L ④尺骨L ⑤尺骨R ⑥橈骨L ⑦ 橈骨R ⑧脛骨L ⑨大 腿骨L ⑩第Ⅱ中手骨L ⑪第Ⅲ中手骨L ⑫第 Ⅳ中手骨L ⑬第Ⅳ中 足骨L ⑭第Ⅱ中足骨R ⑮第Ⅲ中足骨R ⑯第 Ⅳ中足骨R	

2. 追手筋遺跡出土の動物遺存体

表4 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果4

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考	
屋敷境の溝(A-1区)							
25	①⑦	SD-201	17Cか	イヌ	①⑦第V中足骨R		
26				ニホンジカ	脛骨R		
125	①~④⑦			イヌ	①②下顎骨LR ③④肩甲骨LR ⑤⑥上腕骨LR ⑦⑧橈骨LR ⑨尺骨L ⑩⑪寛骨LR ⑫⑬大腿骨LR ⑭脛骨L ⑮⑯腓骨LR ⑰~⑳椎骨 ㉑~㉒肋骨 ㉓~㉔中手・中足骨		
126	① ②③			ニホンジカ	肩甲骨R		
				イヌ	②脛骨L ③脛骨R		
127				不明	肋骨		
128	① ②			イノシシ/ブタ	上顎第一後臼歯R 上顎第二後臼歯R	L14.32 B13.63 L19.22 B15.85	
129				ニホンジカ	中足骨R		
130				イヌ	上腕骨R		
131	① ②			ツキノワグマ	脛骨L	Bp48.52(参考値)	
				不明	肩甲骨		
132	①②			ニホンジカ	①脛骨L ②大腿骨L		
133				ニホンザル	脛骨L		
134				ニホンジカ	中足骨L		
135				イヌ	頭蓋骨		
136				ニホンジカ	脛骨R		
137	① ②			ニホンジカ	中手骨R		
				不明	骨幹部		
138				ニホンジカ	大腿骨R		
139				不明			
140				ニホンジカ?	上腕骨R		
141				イヌ	頭蓋骨		
142	①②			イヌ	①大腿骨R ②下顎骨R		
143				ニホンザル	上腕骨L		
144							
145				不明	破片		
146				イヌ	下顎骨R		
147				ニホンジカ	脛骨R		
148	①② ③			ニホンジカ	①中足骨R ②肩甲骨L		
				不明	骨幹部		
149		不明	骨幹部				
150		ニホンジカ	上腕骨R				
155		ネコ	下顎骨R				
151		SD-301	18C前半	不明	破片		
152				ネコ	肩甲骨R		
123		SD-401	江戸後期	ニホンジカ	大腿骨R		
図1321				骨製品	竹節状		
堆積層及び江戸時代その他遺構							
83		第Ⅲ-2層	17~18C	不明	骨幹部	A-1区	
56		SD-215	17Cか	ニホンジカ	脛骨L	B-1区	
73		SX-314	17~18C	ニホンジカ	脛骨L	B-1区	
9		SD-315	17~18C	不明	骨幹部	B-2区	
10		SD-435	17~18C	イノシシ/ブタ	肩甲骨R	B-2区 肩甲骨内側に浅い切傷複数(前肢取り外し?肉削ぎ?)	
49		SX-325	18C	ニホンジカ	橈骨・尺骨R	B-2区	
50				ニホンジカ	中手骨R	B-2区	
168	① ②	SX-326	18C	ニホンジカ	脛骨L	B-2区	
				不明	骨幹部	B-2区	
169	① ②			ニホンジカ	中足骨L	B-2区	
				シカ科	踵骨L	B-2区 小さい	

表5 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果5

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考		
堆積層及び江戸時代その他遺構								
170	①②	SX-326	18C	ニホンジカ	①脛骨R ②上腕骨R	B-2区 ②歯痕?		
171	①	SX-327	18C	ニホンジカ	中手骨L	B-2区		
171	②	SX-327	18C	シカ科	中足骨L	B-2区 ニホンジカと形態やや異なる。 ノロジカ?小さい。Bp20.79		
114		SX-420	江戸後期	ニホンジカ	大腿骨R			
43	①②	SX-421	江戸後期	ニホンジカ	①中足骨L ②脛骨R	B-2区		
79		2面遺構	17C頃	タイ科?	椎骨(尾椎)	B-2区		
172		4面遺構	江戸後期	不明	骨幹部	B-2区		
近代および時期不明の資料								
69		SB-502西	近代	イヌ	踵骨L	A-1区 GL44.08		
97				骨製品		A-1区		
20		SD-501	近代か	不明		A-1区		
21		SD-501	近代か	不明	骨幹部	A-1区		
67		SK-502	近代	不明	骨幹部	A-1区		
38		SK-504	近代	不明	骨幹部	A-1区 切断面あり 骨製品作成?		
59-60		SX-501	近代	不明	骨幹部	A-1区		
61				不明	大腿骨?	A-1区		
62-63				不明	骨幹部	A-1区		
64	①			イヌ	上腕骨L	A-1区		
	②			イノシシ/ブタ	橈骨R	A-1区 Bp33.47		
65	①②			鳥類?		A-1区		
66		SX-503	近代	不明	骨幹部	A-1区		
115		SX-504	近代	不明	破片	A-1区		
156		3面遺構	近代か	不明	寛骨?	A-1区		
53		5面遺構	近代	大型魚類	椎骨(尾椎)	A-1区		
70		第II層	近代	ニホンジカ	橈骨R			
71				ニホンジカ	脛骨L	A-1区		
95				不明	骨幹部	A-1区		
68		SD-505	近代	イノシシ/ブタ	第三中手骨L	B-1区		
96				不明	骨幹部	B-1区		
154				イノシシ/ブタ	脛骨L	B-1区		
203		SK-507	近代	ウシ	橈骨・尺骨	B-1区 切断面あり		
197		SK-508	近代	マグロ属	椎骨(尾椎)	B-1区 体長100以上		
40		SK-510	近代	不明	骨幹部	B-1区		
41	①②			不明	大腿骨	B-1区		
91		SK-511	近代	サメ類	椎骨	B-1区 椎体横径39.65 縦径37.68 厚29.94		
	①			サメ類	椎骨	B-1区		
92	②			マグロ属	椎骨	B-1区 体長100程度		
	①			カツオ/マグロ属	椎骨	B-1区 カツオ族		
93	②		サメ類	椎骨	B-1区 椎体横径22.81 縦径21.37 厚10.26			
28		SK-514	大正	ウシ	大腿骨L	B-1区 外側顆		
199		SX-505	近代	マグロ属	椎骨(尾椎)	B-1区 体長100以上		
16		5面遺構	近代	不明	骨幹部	B-1区		
17				ニホンジカ	中足骨LR不明	B-1区		
57	①②			イヌ?	①大腿骨L ②大腿骨R	B-1区 在来犬でなく、足の短いイヌ?		
58				ウシ	大腿骨L	B-1区		
90				骨製品?		B-1区		
94				サメ類	椎骨	B-1区 椎体横径25.07 縦径24.65 厚12.25		
196				マグロ属	椎骨(尾椎)	B-1区 体長120~140		
198				ニホンジカ	上腕骨L	B-1区		
206				不明	破片	B-1区		
211				ニホンジカ	距骨L	B-1区 GL141.89		
214				不明	肋骨	B-1区		
図79				第II層	近代	骨製品(和裁の籠)		B-1区 素材は牛馬骨
80						イヌ	橈骨R	B-1区
81	①②	タイ科?	椎骨(①尾椎②腹椎?)			B-1区 体長40~50?		
85		不明	破片			B-1区		

2. 追手筋遺跡出土の動物遺存体

表6 追手筋遺跡における脊椎動物同定結果6

資料番号	枝番	遺構名	時期	種名	部位	備考
近代および時期不明の資料						
193		第Ⅱ層	近代	ヒト	下顎第二大臼歯L	B-1区
82				タイ科?	椎骨(尾椎)	B-1区
84				不明	肋骨	B-1区
2		第Ⅱ層	近代	ネコ	大腿骨L	B-1区 GL116.74 Bp21.65 Bd19.19 SD10.69
116		SD-430	近代	ニホンジカ	脛骨L	B-2区
157		4面遺構	近代か	不明	骨幹部	B-2区
1		第Ⅰ層		不明鳥類?		
19	①②			不明	①下顎骨 ②椎骨	
86	①			不明		
	②			イノシシ	下顎第一切歯R	

表1～6 脊椎動物種名一覧

- 軟骨魚綱 chondrichthyes  
板鰓亜綱 Elasmobranchii  
板鰓亜綱の一種 Elasmobranchii order, fam., gen. et sp. indet  
ネズミザメ目 Lamniformes  
ネズミザメ科 Lamnidae  
ネズミザメ科の一種 Lamnidae gen. et sp. indet
- 硬骨魚綱 Osteichthyes  
スズキ目 Percidae  
タイ科 Sparidae  
タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet  
サバ科 Scombridae  
マグロ属の一種 Thunnus sp. indet
- 鳥綱 Aves  
キジ目 Galliformes  
キジ科 Phasiidae  
キジ科の一種 Phasiidae gen. et sp. indet  
カモ目 Anseriformes  
カモ科  
カモ科の一種 Anseriformes gen. et sp. indet  
カツオドリ目 Suliformes  
ウ科 Phalacrocoracidae  
ウ科の一種 Phalacrocoracidae gen. et sp. indet
- 哺乳綱 Mammalia  
霊長目 Primates  
オナガザル科 Cercopithecidae  
ニホンザル Macaca fuscata  
ヒト科 Hominidae  
ヒト Homo sapiense
- 食肉目 Carnivora  
クマ科 Ursidae  
ツキノワグマ Selenarctos thibetanus  
イヌ科 Canidae  
イヌ Canis familiaris  
ネコ科 Felidae  
ネコ Felis silvestris catus  
イタチ科 Mustelidae  
ニホンカワウソ Lutra nippon
- 奇蹄目 Perissodactyla  
ウマ Equus caballus
- 偶蹄目 Artiodactyla

- ウシ科 Bovidae
  - ウシ *Bos Taurus*
- イノシシ科 Suidae
  - イノシシ(もしくはブタ) *Sus scrofa*
- シカ科 Cervidae
  - ニホンジカ *Cervus nippon*
  - シカ科の一種 Cervidae gen. et sp. indet
- ウサギ目 Lagomorpha
  - ウサギ科 Leporidae
    - ウサギ科の一種 Leporidae gen. et sp. indet
- 齧歯目 Rodentia
  - ネズミ科 Muridae
    - ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet

今回出土した脊椎動物遺存体資料のうち近世に属するものを概観すると、ニホンジカの比率がもっとも高く、イヌやイノシシ(あるいはブタ)がそれに次いでいる。出土した資料の一部には解体痕が観察されるが、ニホンジカとイノシシは近世に食用とされた代表的な哺乳類であり、中世以降の西日本では前者が優越する傾向が見られることが指摘されている(丸山真史ほか2010)。高知城・城下町関連の既往の調査では弘人屋敷跡・西弘小路遺跡・御台所屋敷跡などで動物遺存体の出土例が報告されており、シカの比率が高く、イノシシがそれに続き、ウシ・ウマの出土量は微量である(植月学2014)。今回出土した資料の構成は、そうした調査の成果と基本的に合致した傾向を示している。

屋敷地別では村田家屋敷と山内家屋敷Aからの出土量が多く、ともにニホンジカが高い比率を占めている。また、村田家屋敷では他の屋敷地と比べて魚類が多く出土していることも特徴として挙げられる。百々家屋敷は出土量が限られているが、ニホンカワウソ・ネコ・ウサギ?など他の敷地では見られない種が含まれており、藩医であった百々家が薬の原料として利用していた可能性もある。

続いて種別では、ツキノワグマの脛骨が屋敷境の溝SD-201から出土しており、試掘(13-OS)調査出土の橈骨(高知市教育委員会)を含めると計2点が出土していることになる。ツキノワグマは京都の本多甲斐守邸宅跡(丸山・富岡直人・平尾政幸2007)など各地の近世遺跡で出土例があり、『松屋筆記』など文献史料からもクマ肉を扱う店が存在していたことが知られている。また、イヌについては他の種と出土状況が異なり、SD-201に分布が集中している。食用とされたものか、それとも狩猟用・愛玩用として飼育されていたものか明らかではないが、既往の調査では弘人屋敷跡で食用とされた可能性がある資料が出土しているのに対し、他の2遺跡では確認されておらず、地点的な偏りの存在が指摘されている(植月2014)。今回の出土資料についても、屋敷地内ではなく、屋敷境の溝に集中して廃棄されているのは興味深く、イヌを食用としていることへの罪悪感や、それが露見することへの忌避感の表れとも解釈できる。

一方、魚類についてはマグロ属など外洋性回遊魚の存在が目を引くが、肉眼による回収のみのため、中・小型種も含めた魚類全体の構成は不明である。

## 2. 貝類

出土した貝類資料は発掘調査中に肉眼で確認したもので、同定作業には現生標本と図鑑(吉良哲明1954・波部忠重1961)を利用し、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多数の方を原則として採用している。また、シジミ類についてはヤマトシジミを主体としているとみられる



2. 追手筋遺跡出土の動物遺存体

表7 追手筋遺跡における貝類同定結果

時期 調査区 出土地点	村田屋敷(B-1区)							山内屋敷 (17CはB区・その後A区)				百々屋敷 (A-1区)		屋敷境 溝・B-2 区他計	江戸 後期 B-2区 4面その 他遺構	近代 資料計
	計	18C		江戸後期			計	17C		江戸後期		計	17C			
		計	18C	計	江戸 後期	19C		19C	B区 計	A区 計	A-1					
			B-1区		B-1区	B-1区		A-1区								
SK-306	第Ⅲ-1 層	SG-402	SD-412	SX-405	SX-201											
ハガガイ	25	5		20	3	4	●	1	1	●	●					9
フネガイ科	●	●						●		●						
ベンケイガイ	1			1												
ヌリマカラガイ	1			1												
イサガイ(1)	1			1				1		1	1					2
アスマニシ	1	1														
イサガイ科								1		1						
ムナガイ	2			2												
マギキ																2
イワガキ	3	1		2		●		11	4	7	5	19	15	4		6
トマヤガイ	1	1														
ハマグリ	9	3		6	●	1		3	1	2	1	●	●	1		3
ホシジミ	3	1	1	2		1										1
コサマガイ	1			1										1		3
アサリ	2	●	●	2		2										1
アサガイ	2	2		●												4
シラオガイ																1
シオガイ	5 (合1)			5 (合1)		5 (合1)										
マスオガイ																2?
ムナササガイ																1
ナミマガシ																1?
シジミ類(3)	117 (合2)	87	85	30 (合2)	6	2	14	5		5	3			72	72	95
カワナ	3			3		3										
クロアワビ	1			1		1										
アワビ類	●	●		●										●		1
コシダカガンガラ	1			1												
キサゴ	2			2		1										4
サザエ(2)	18 (殻12) (蓋10)	3 (殻3) (蓋1)		15 (殻9) (蓋9)		4 (殻2) (蓋4)	1	9 (殻8) (蓋1)	7 (殻6) (蓋1)	2	●	1	1	6		10 (殻4) (蓋6) (棘1)
ヤコウガイ								1	1							
ウミナナ科	1	1	1													
スイショウガイ	1			1		1										
カタラガイ科	1			1		1										
アカシ	3	2		1				1	1							2
ミナリガイ	1			1												
ハイ	5			5	1	1		1	1					1	1	11
テンゲニシ	3			3		2		2 (殻2) (蓋1)	1	1 (殻1) (蓋1)	1 (殻1) (蓋1)	3 (殻2) (蓋2)	2 (殻1) (蓋2)			1
マカラガイ	2			2												

が一部にマシジミを含んでいる可能性があることから、「シジミ類」として一括表記している。同定結果は表7の通りである。

表7 貝類種名一覧

- 腹足綱 Gastropoda
- クロアワビ *Notohaliotis discus* (Reeve)
- アワビ属 *Haliotis* sp. indet
- コシダカガンガラ *Omphalius rusticum* (Gmelin)
- キサゴ *Umbonium* (*Suchium*) *costatum* (Kiener)
- サザエ *Turbo* (*Batillus*) *cornutus* Solander
- ウミナナ科 *Potamididae* gen. et sp. indet
- スイショウガイ *Laevistrombus canarium* (Linne)

タカラガイ科 Cypraeidae gen. et sp. indet  
 アカニシ *Rapana thomasi* (Crosse)  
 ミクリガイ *Siphonalia cassidariaeformis* (Reeve)  
 バイ *Babyronia japonica* (Reeve)  
 テングニシ *Pugilina (Hemifusus) ternatana* (Gmelin)  
 マクラガイ *Oliva mustelina* Lamarck  
 カワニナ *Semisulcospira bensoni* (Philippi)

二枚貝綱 Bivalvia

ハイガイ *Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis* Schenck et Reinhart  
 フネガイ科 Arcidae gen. et sp. indet  
 ベンケイガイ *Glycymeris (Veletuceta) albolineata* (Lischke)  
 ヌリマクラガイ *Botula silicula* (Lamarck)  
 イタヤガイ *Pecten (Notovola) albicans* (Schroeter)  
 アズマニシキ *Chlamys farreri nipponensis* Kuroda  
 イタヤガイ科 Pectinidae gen. et sp. indet  
 メンガイ *Spondylus squamosus* Schreibers  
 マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)  
 イワガキ *Crassostrea nippona* (Seki)  
 トマヤガイ *Cardita leana* Dunker  
 ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roeding)  
 オキシジミ *Cyclina orientalis* Sowerby  
 コタマガイ *Gomphina (Macridiscus) melanaegis* Roemer  
 アサリ *Tapes (Amygdala) japonica* (Deshayes)  
 アケガイ *Paphia vernicosa* (Gould)  
 シラオガイ *Circe scripta* (Linne)  
 シオヤガイ *Anomalodiscus squamosus* (Linne)  
 マスオガイ *Psammotaea elongate* (Lamarck)  
 ムラサキガイ *Soletellina diphos* (Linne)  
 ナミマガシワ *Anomia chinensis* Philippi  
 ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

今回の調査では30種以上、520個体の貝類が出土した。資料全体の種構成を概観すると、ヤマトシジミの56%を筆頭に、イワガキとサザエが各々8%、ハイガイが7%と続いており、試掘(13-OS)調査で出土した資料でもシジミ類は全体の65%を占めている(高知市教育委員会)。本資料には近代に属するものも含まれるが、近世から近代まで貝種構成に目立った時期的な変化は認められない。また、個々の構成貝種のうち、シジミ類はヤマトシジミを主体とするが、一部に淡水性種のマシジミが少量含まれている可能性がある。イタヤガイは確認可能であった4個体すべてが、右殻を用いた貝杓子に加工されていたほか、アカニシ・バイ・テングニシには殻口に調理痕とみられる抉り(池田2006)が観察された。また、SD-423出土のヌリマクラガイは、海底の石灰岩に穿った孔に生息していることが知られているが、同遺構からは多数の孔をもつ石灰岩が出土していることから、石灰岩とともに屋敷地に持ち込まれたと考えられる。

今回出土したこれらの貝類を生息域別に見ると、カワニナは淡水性種であり、汽水性種のヤマトシジミは河口部で捕獲が可能である。塩水性種については有棘型のサザエとヤコウガイを除くと、巨視的には近海で捕獲可能なものが大半であるが、礫物であるコシダカガンガラ、湾奥泥底干潟に生息するハイガイ・オキシジミ、水深10~50m程度の砂泥底に生息し、「バイかご」で混獲されることの多いミクリガイなど、微視的には生息環境が異なる種から構成されており、捕獲された漁場や漁法は多様であったと推測される。また食用・非食用の別では、食用種が大半を占めているが、非食

## 2. 追手筋遺跡出土の動物遺存体

用種であるタカラガイ科・ナミワガシワ・マクラガイや、食用とされていたとしても市場には流通していなかったと考えられるトマヤガイ・マスオガイ・スイショウガイなどが含まれるなど、商品としての選別が進んでいないことから、比較的単純な流通経路を経て水揚地から消費地に持込まれた可能性が高い。一方、屋敷地別では村田家屋敷からの出土資料が全体の42%ともっとも多く、その貝種構成はシジミ類(54%)が主体を占め、ハイガイ・サザエ・ハマグリと続く。他の屋敷地では出土量が少なく、貝種構成について論じるのには無理があるが、山内家屋敷A・Bではイワガキ(31%)・サザエ(25%)が主体を占め、シジミ類が続いており、百々家屋敷はイワガキ(83%)が主体を占め、テングニシが続く。

脊椎動物と同様に、当地域の近世遺跡で出土した貝類の報告例は多くないが、前述した弘人屋敷跡・西弘小路遺跡・御台所屋敷跡の3遺跡で出土した資料について見てみると、サザエ・ハイガイがそれら3つの遺跡すべてで、アワビ属・イワガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・オキシジミなどが2つの遺跡で出土している(植月2014)。そのうち、出土量のもっとも多い弘人屋敷跡ではヤマトシジミが27%、サザエが21%、イワガキ・ハマグリが各々14%、ハイガイが9%を占めていた。今回の調査で出土した資料はそれらと近似した内容を示しており、高知城・城下町の武家屋敷ではシジミ類を筆頭として、イワガキ・サザエ・ハマグリ・ハイガイなどが食材として多用されていた可能性が高いと考えられる。一方、これらの資料はいずれも武家の屋敷地で出土したものであり、町屋など異なる階層に関する資料の蓄積が進めば、地域全体の貝種構成や嗜好、階層差と食材の相関関係などについて検討することが可能になるものと期待される。加えて現代の高知において、地元産の水産物として食卓にのぼることの多いマガキ・イタヤガイ・アサリ・マガキガイ・ダンベイキサゴなどが、近世の資料にはほとんど含まれていないことについても、生態系や漁法、嗜好の変化といった観点から注目していく必要がある。

### 引用・参考文献

- 池田研 2006「大坂城跡(03-1・OKS99)出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址Ⅲ』pp.543-552
- 植月学 2014「弘人屋敷跡出土動物遺体について」：高知県文化財団埋蔵文化財センター編『弘人屋敷跡』pp.275-290
- 高知県教育委員会 1994『史跡 高知城跡 - 御台所屋敷跡発掘調査報告書 -』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会 2012『西弘小路遺跡』pp.168-170・175
- 吉良哲明 1954『原色日本貝類図鑑』保育社
- 波部忠重 1961『続原色日本貝類図鑑』保育社
- 丸山真史・池田研・宮本康治 2010「大坂城下町跡出土の動物遺存体 - 中央区高麗橋3丁目の調査から -」：大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館研究紀要 第8号』pp.35-47

# 付編3 追手筋遺跡における樹種同定

古環境研究所  
環境考古研究会  
(一部改変)

## 1. はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、追手筋遺跡より出土した木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。

## 2. 試料と方法

試料は、追手筋遺跡より出土した処理番号35～45の木製品11点である。試料の詳細を結果表に記す。

方法は次のとおりである。これらの木製品からあらかじめ採取された小片に対して、カミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柀目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 3. 結果

表1に結果を示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

### (1) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

(図版番号78・1085・1087・1088・1090・1091・1119・1121・1123・1124・1126・1127・1208・1370・2231・2352・2353・2354・2480・2786)

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数个複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の特徴よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

### (2) ブナ属 *Fagus* ブナ科

(図版番号1089・1125・1147・1371・2102・2103・2104・2133・2192・2419・2420・2807・2843・2844・3085)

横断面では、小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。放射断面では、道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。接線断面では、放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

3. 追手筋遺跡における樹種同定

表1 追手筋遺跡における木材同定結果

図版番号	器形	分類群	
		学名	和名
78	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1085	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1086	漆器椀	<i>Morus australis</i> Poirét	ヤマグワ
1087	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1088	漆器蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1089	漆器蓋	<i>Fagus</i>	ブナ属
1090	漆器蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1091	漆器蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1119	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1120	漆器椀	<i>Morus australis</i> Poirét	ヤマグワ
1121	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1122	漆器椀	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ
1123	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1124	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1125	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
1126	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1127	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1128	漆器椀	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
1130	漆器皿	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
1141	将棋駒	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
1147	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
1148	漆器調度品か	<i>Juglans</i>	クルミ属
1208	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1209	漆器合子蓋	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属
1370	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
1371	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2006	漆器椀	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ
2084	漆器椀	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
2085	漆器蓋	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
2102	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2103	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2104	漆器蓋	<i>Fagus</i>	ブナ属
2105	漆器匙	<i>Chamaecyparis</i>	ヒノキ属
2106	漆器折敷	<i>Podocarpus</i>	マキ属
2133	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2164	漆器椀	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
2192	漆器蓋	<i>Fagus</i>	ブナ属
2200	漆器刷毛	<i>Podocarpus</i>	マキ属
2231	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2352	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2353	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2354	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2369	漆器栓	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
2419	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2420	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2421	漆器蓋	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
2480	漆器蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2486	漆器櫛	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
2487	漆器柄杓	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
2745	漆器椀	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ
2752	漆器箱物	<i>Podocarpus</i>	マキ属
2786	漆器蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
2807	漆器蓋	<i>Fagus</i>	ブナ属
2843	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
2844	漆器蓋	<i>Fagus</i>	ブナ属
3085	漆器椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
3086	漆器椀	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ

以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で緻密、韌性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

(3) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 (図版番号1128・1130・2421・3086)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形状などに配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅で高さも高い。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

(4) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 (図版番号1122・2006・2745)

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性である。道管内にチロースが多数存在する。放射組織は、異性放射組織型で、2細胞幅である。

以上の特徴よりカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で韌性があり加工しやすく、建築材などに用いられる。

(5) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (図版番号2084・2085)

横断面では年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面では、道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

(6) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 (図版番号1141)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面の放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面の放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。



### 3. 追手筋遺跡における樹種同定

#### (7) マキ属 *Podocarpus* マキ科 (図版番号2106・2200・2752)

仮道管, 樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材で, 早材から晩材への移行はゆるやかで, 樹脂細胞が散在し多くみられる。放射柔細胞の分野壁孔は残存性が悪いが, ヒノキ型で1分野に1~2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で, 1~20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ, ナギがあり, 関東以西の本州, 四国, 九州, 沖縄に分布し, 暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で, 通常高さ20m, 径50~80cmである。材は耐朽性が強く, 耐水性も高い。建築, 器具, 桶, 箱, 水槽などに用いられる。

#### (8) ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 (図版番号1086・1120)

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が, 単独あるいは2~3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で, 小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが, 上下の縁辺部の1~3細胞ぐらゐは直立細胞である。異性放射組織型で, 1~6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道, 本州, 四国, 九州に分布する。落葉高木で, 通常高さ10~15m, 径30~40cmである。材は堅硬, 韌性に富み, 建築などに用いられる。

#### (9) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (図版番号2487)

仮道管, 樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では早材から晩材への移行はゆるやかで, 晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔は, ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面では放射組織は単列の同性放射組織型で, 1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州, 四国, 九州, 屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で, 通常高さ40m, 径1.5mに達する。材は木理通直, 肌目緻密で強靱, 耐朽性, 耐湿性ともに高い。良材であり, 建築など広く用いられる。

#### (10) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 (図版番号2105)

横断面, 放射断面, 接線断面共にヒノキ科の特徴を示し, 分野壁孔は1分野に2個存在するが, 分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。

#### (11) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 (図版番号2369)

仮道管, 樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で, 晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で, 1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で, 1~14細胞高ぐらゐである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州, 四国, 九州, 屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m, 径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で, 広く用いられる。

#### (12) クルミ属 *Juglans* クルミ科 (図版番号1148)

大型で丸い道管が, 単独あるいは2~数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて, 道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら, 短接線状に1列に並び, 網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが, ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。放射組織

は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく靱性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

(13) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 (図版番号2164)

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性である。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

(14) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 (図版番号2486)

横断面では、小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。放射断面では道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。接線断面では放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性が強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

(15) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 (図版番号1209)

横断面では小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。接線断面では放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

#### 4. 所見

同定の結果、追手筋遺跡の木製品は、トチノキ20点、ブナ属15点、ケヤキ4点、カツラ3点、クリ2点、カヤ1点、マキ属3点、ヤマグワ2点、ヒノキ1点、ヒノキ属1点、スギ1点、クルミ属1点、トネリコ属1点、ヤブツバキ1点、ヒサカキ属1点であった。

トチノキは最も多く同定され、漆器椀、漆器蓋に用いられている。木材は耐朽性・保存性は極めて低く、切削・加工は容易で柔らかい材である。主に刳物に用いられるが、漆器にも使用される例が多い。温帯域に谷沿いなどの湿潤地を好んで生育する落葉高木である。なお、高知県の高知城伝

### 3. 追手筋遺跡における樹種同定

下屋敷跡から出土した漆製品にもブナ属，トチノキが多い。なお，これらは流通によるとみられる。次いでブナ属が多く，漆器蓋，漆器椀に利用されている。材は強さ中庸，切削・加工も中庸であるが，弾性と従曲性に富む。なおブナ属は，縄文時代以降から現在まで木材の性状からも伝統的に木地に用いられる材であり，漆製品によく利用される。ブナは冷温帯落葉広葉樹林の代表的なブナ林を形成し，湿潤な気候下に生育する。ブナ属にはブナとイヌブナがあり，ブナは温帯上部の冷温帯の落葉広葉樹林の主要高木であり，イヌブナは温帯中間域の暖温帯落葉広葉樹林に分布する落葉高木である。ケヤキは，漆器椀，漆器小皿に利用されている。材は概して強く強靱で従曲性に富み，耐朽・保存性は高く水湿にもよく耐え，また高木になり大きな材がとれる。ケヤキはブナ属と同様に，縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられる材であり，刳物によく利用されるが，漆器椀では挽物が多い。温帯に分布する落葉広葉樹で，谷沿いなどの適潤な肥沃地に生育する。クリは漆器椀に利用されている。クリは重硬で保存性が良い材であり，柱材などの建築材として比較的良好に使われる樹木である。クリは温帯に広く分布し，暖温帯と冷温帯の中間域では，純林を形成することもあり，乾燥した台地や丘陵地を好み，二次林要素でもある。カヤは将棋駒に用いられている。カヤは堅硬で弾性が強く保存性が高い材であり，温帯に広く分布し，谷沿いなどやや湿潤なところに生育する。将棋駒の出土例は全国的に少ないが，カヤはスギに次いで多く，現代も将棋駒に利用されている。ヒノキは漆器柄杓に，ヒノキ属は漆器匙に用いられている。マキ属は，漆器折敷，漆器箱物，漆器刷毛に利用されている。材は耐朽性，保存性が高く水湿に強く，やや重硬で強靱な材であり，柱材などの建築部材によく利用され，また机や紡織具などにも広く利用される。マキ属は暖地の山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み，温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布し，極めて温暖な気候下に生育する常緑針葉樹である。カツラは，漆器椀に利用されている。材は軽軟均質で，耐朽・保存性は低いが，切削・加工が極めて容易である。水湿のある谷間等に生育する。ヤマグワは漆器椀に利用されている。材質はやや堅硬で靱性に富み，刳物によく用いられる。ヤマグワは，温帯に広く分布する落葉高木で，谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。ヒノキないしヒノキ属の木材は，材質は木理通直で大きな材が取れる良材であり，特に保存性が高い。温帯を中心に分布する常緑高木で，特に温帯中部に多い。ヒノキ材は古墳時代以降多用され，律令期以降に頻繁に流通する。スギは漆器栓に利用されている。木材は加工工作が容易な上，大きな材がとれる良材で，建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。高知県ではスギの同定例は少なく，同時期では高知城伝下屋敷跡の羽子板や下駄などの例があり，古墳時代では居徳遺跡群の剣形製品や舟形などの祭祀具の例がある。また，栓にスギを利用する例は多く見られるが，漆塗りの栓は極めて稀である。ただし，用材をヒノキとした例は福井県の朝倉氏遺跡などで見ることができる。スギは温帯に広く分布し，特に中間域の積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する針葉樹である。肥沃で湿潤な土壌を好む。クルミ属は，漆器調度品に利用されている。強さ中庸で保存性が低いが，狂いが少なく粘り気が強く切削・加工は容易である。柱などの建築材などの利用が多い。クルミ属は，温帯に広く分布し，沢沿いなどの適潤地に生育する。クリは，漆器蓋に利用されている。材は重硬で保存性が良い材で，柱材などの建築材として比較的良好に使われる樹木である。トネリコ属は，漆器椀に利用されている。材は概して強靱で堅硬な材である。従曲性が非常に大きく，割裂は容易である。トネリコ属は挽物としてよく利用されており，椀の報告例が多い。トネリコ属は，温帯を中心に広く分布し，沢沿いなどの湿原や水湿のある低地に生育し，ときには湿地林を形成する。ヤブツバキ

は漆器櫛に用いられている。材は強靱で、耐朽性が強く堅硬な良材であるが、櫛として利用された報告例は少ない。特に漆塗りの櫛でヤブツバキの報告例は有名なもので福井県の鳥浜貝塚(縄文時代)があるが極めて珍しい。ヤブツバキは海岸から河川の沿岸に多く分布する常緑高木で、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。ヒサカキ属は漆器蓋に用いられているが、漆器に利用されたヒサカキ属の報告例は極めて少ない。概して強さ中庸の材であり、林内、尾根筋、海岸等に自生する常緑の低木から小高木である。

一般的に椀に利用される木材は広葉樹材の中でも比較的硬いものが選定されることも多く、ブナ属、トチノキ、ケヤキなどのやや硬いが形が整えやすく、木目が美しく現れる材が好まれる。本遺跡においてもブナ属、トチノキ、ケヤキの利用が多く見られるが、他に多様な樹種が見られた。本遺跡で同定された樹種は中世から近世、また現代で漆製品に利用されてきた樹種であり、高知県の高知城伝下屋敷跡から出土した漆製品でもブナ属、トチノキ、クリが見られる。

また挽物や刳物にはブナ属、トチノキ、クリ、ケヤキなどの比較的硬めの木材が選ばれる傾向があり、硬めの材の方が形を整えやすく加工が容易であることに加えて狂いが少ないことに起因していると考えられる。折敷、箱物、刷毛にはマキ属を、調度品にはクルミ属、将棋駒にカヤが選定され利用されており、器種によって用材を選び利用されたと考えられる。なお、ヤブツバキ、ヒサカキ属の漆製品の例は少なく、特に漆塗りの櫛としてヤブツバキの報告例は極めて稀である。これらの漆製品は中世以降の出土であり、また城下町という当時の都市部であることから、流通によってもたらされたとみなされよう。

#### 参考文献

- 佐伯浩・原田浩 1985『針葉樹材の細胞』「木材の構造」文永堂出版 p.20 - 48.  
 佐伯浩・原田浩 1985『広葉樹材の細胞』「木材の構造」文永堂出版 p.49 - 100.  
 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣, p.296.  
 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学』雄山閣 p.449.  
 山田昌久 1993『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成』植生史研究特別第1号 植生史研究会 p.242.  
 鈴木三男, 能城修一 1991『越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹』, 朝倉氏遺跡資料館紀要1990, 福井県立朝倉氏遺跡資料館 p.15 - 22  
 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『高知城伝下屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集, p.345.  
 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『居徳遺跡群Ⅵ 四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集, p.445.



# 遺物觀察表



#### 遺物観察表凡例

1. 口径・器高・底径・最大径はcmで示している。
2. 重量の単位表記がないものはgで、1kg以上はkgで示している。
3. 口径・器高・底径・最大径の( )は残存値を表している。
4. 回転ナデ調整などの調整の文字は省略している。

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1	試掘 T4	陶器 向付	-	(1.2)	7.2	-	1/6	灰白色	長石釉	畳付は釉ハギ。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2	試掘 T4	青花 中皿	-	(1.8)	7.6	-	一部 残存	灰白色	透明釉 畳付と高台内 の一部は無釉	外面には粗い砂付着。見込に草花 文と圏線。	中国産 漳州窯系か
3	A-1区 I層	陶器 焜炉	-	(8.8)	12.6	-	2/3	浅黄橙色	外面に緑釉	円筒形。二重構造。前方に窓。底部 に脚を貼付。回転ナデ。底部外面 はナデで、「清山」の刻印。	-
4	A-1区 I層	陶器 サナ	18.8	10.3	20.5	-	1/2	におい 黄橙色	-	回転ナデ。底部外面は静止糸切 り。外面に円孔。	-
5	B区 I層	磁器 染付 端反碗	11.2	6.6	5.0	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に区画に波・兎文と圏線、内 面に濃地に雷文、見込に山・雲文 と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 19世紀
6	A-1区 I層	磁器 染付 皿	13.0	3.1	6.6	-	完存	灰白色	透明釉	内面に唐草文、見込に五弁花文の 染付。見込は蛇ノ目釉ハギ。畳付 は釉ハギ。	肥前産 18世紀
7	A-1区 I層	磁器 染付 碗蓋	9.4	3.3	-	摘径 4.0	7/8	灰白色	透明釉	外面に桜文と圏線、内面に四方禰 文と圏線の染付とコンニャク印 判の五弁花文。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
8	B-1区 I層	磁器 染付 蓋物蓋	7.7	2.3	笠径 8.6	摘径 1.2	完存	灰白色	透明釉	円形の摘。外面に宝文と草花文と 圏線の染付。かえりは釉ハギ。	肥前系 19世紀
9	B-1区 I層	磁器 染付 筆筒	-	(7.0)	4.8	-	底部 完存	灰白色	透明釉	上部に透かしあり。下部に濃地に 梅文の染付。畳付は釉ハギ。	関西系か 19世紀前半～中葉
10	B-1区 I層	青花 皿	-	(1.6)	6.9	-	1/3	白色	畳付を除き 透明釉	見込に宝文の染付。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
11	A-1区 I層	瓦質土器 焜炉	-	(8.2)	全幅 (14.6)	-	一部 残存	灰黄色	-	箱形。二重構造。内部構造は円形。 上面角部に円孔が貫通。側面に菊 花文の印刻。	-
12	B-1区 I層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.8	-	ほぼ 完存	におい 橙色	-	型成形。菊水文。下面はナデ。	-
13	A-1区 II層	陶器 碗	-	(4.4)	3.7	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による注連縄文。高台 付近から底部は削り出して無釉。	京都産
14	B-1区 II層	陶器 碗	-	(6.3)	5.4	-	底部 完存	浅黄色	灰釉	呉器手。畳付は釉ハギ。	-
15	B-1区 II層	陶器 碗	-	(1.6)	-	-	一部 残存	灰白色	檸檬色の釉	釉には光沢あり。	淡路 珉平焼か
16	A-1区 II層	陶器 蓋	-	(1.9)	-	摘径 5.6	1/2	淡黄色	外面は褐釉	内面は無釉。摘の4箇所に切り込 み。天井内面に六角「清」の印刻 銘。天井部内面に重ね焼痕。	京都産か 五代清 水六兵衛か 明治 後期～昭和初期か
17	B-1区 II層	陶器 折縁皿	11.0	2.4	6.3	-	1/4	灰白色	緑釉	口縁部内面に丸彫による縞文。見 込を円形に釉ハギ。高台内に重ね 焼痕。	瀬戸・美濃産 16世紀末～17世紀 初頭
18	B-1区 II層	陶器 皿	13.9	3.1	4.6	-	底部 完存	灰白色	透明釉	見込と畳付に4箇所の砂目痕。畳 付は釉ハギ。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
19	B-1区 II層	陶器 波縁皿	13.2	3.6	5.0	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目 痕。高台付近から底部は削り出 して無釉。	肥前産 1590～1610年代
20	B-1区 II層	陶器 皿	-	(3.2)	5.0	-	1/3	におい 赤褐色	鉄釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台付近 から底部は削り出して無釉。見込 と高台内に墨書。	能茶山窯 1820年代～幕末
21	B-1区 II層	陶器 輪花皿	13.7	3.9	9.0	-	3/4	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。型紙摺による文 様で、外面は草花文、内面は松竹 梅文。高台内に「安岡」の墨書。	明治期
22	B-1区 II層	陶器 皿	-	(1.7)	11.0	-	一部 残存	灰白色	黄色釉	内面は釉が著しく剥離。畳付は釉 ハギしない。	淡路 珉平焼か

遺物観察表2 堆積層出土遺物

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
23	B-1区 II層	陶器 向付	17.6	2.6	15.4	-	一部 残存	灰白色	長石釉	見込に上絵付の痕跡。全面に著しい貫入。畳付は釉ハギ。	美濃 志野焼か 16世紀末～17世紀 初頭
24	B区 II層	陶器 瓶	-	(4.7)	-	-	一部 残存	灰黄褐色	外面は灰釉 内面は無釉	外面は釘彫による「り」「橘」の文字。	-
25	B区 II層	陶胎染付 瓶	3.5	(18.5)	-	胴径 16.6	1/2	黄灰色	口縁部内面から 外面に光沢 のある灰釉	鶴首形。内面は回転ナデ。外面は半花文の染付か。肩部に「互」の釘彫。	-
26	A-1区 II層	陶器 小壺	5.4	4.0	4.5	胴径 7.8	4/5	浅黄橙色	内外面は鉄釉 口縁部は灰釉	回転ナデ。底部外面は回転糸切り。底部外面付近と底部内面は無釉。	-
27	B区 II層	陶器 壺	13.6	20.0	9.7	胴径 21.1	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	口縁部内面と 底部外面を除 き鉄釉	口縁端部は釉ハギ。口縁部内面は回転ナデで無釉。底部は削り出しで無釉。高台内に墨書。	-
28	B-1区 II層	陶器 鍋	-	(2.3)	11.2	-	1/8	にぶい 黄橙色	内面は灰釉	外面は回転削りで無釉。内面は回転ナデで施釉。底部に墨書。	-
29	B-1区 II層	陶器 火鉢	16.8	16.2	14.6	胴径 22.2	2/3	灰白色	口縁部内面か ら体部外面ま で灰釉	円筒形。外面は緑釉と白色釉を流し掛け。3箇所に脚。脚の内側に刺突痕。見込と底部外面に砂目痕。	瀬戸・美濃産
30	B区 II層	陶器 秉燭	-	5.9	3.8	-	一部 欠損	にぶい 橙色	脚部を除き 鉄釉	台付たんころ形。芯立は馬蹄形。脚部は回転ナデ。底部は回転糸切り。脚部に軸孔あり。	-
31	A-1区 II層	磁器 染付 丸碗	-	(3.1)	4.3	-	1/3	白色	透明釉	外面に濃地に象文、内面に麒麟文の染付。高台内に「太明成化年製」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1820～1860年代
32	B区 II層	磁器 染付 小丸碗	9.7	5.1	3.7	-	3/4	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による花文と松葉文。見込に鷲文と圏線の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀前半
33	B-1区 II層	磁器 染付 碗	-	(4.7)	4.4	-	1/2	白色	透明釉	外面は簾に草花文か、見込に宝文と圏線の染付。高台内は「サ」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
34	B-1区 II層	磁器 染付 丸碗	12.0	6.4	4.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に山水文・魚文・梅蘭文、内面に雷文、見込に龍文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 幕末
35	A-1区 II層	磁器 染付 皿	13.0	2.6	5.4	-	1/6	灰白色	透明釉	内面に染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1640～1650年代
36	B-1区 II層	磁器 色絵 輪花皿	9.4	2.8	3.7	-	2/3	灰白色	透明釉	小皿。見込は蛇ノ目釉ハギで、釉ハギ部分に墨色の梅文の上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産
37	B-1区 II層	磁器 鉄釉染付 皿	-	(2.0)	5.1	-	1/3	灰白色	外面は鉄釉 内面は透明釉	見込には丸に半菊文の染付。畳付は釉ハギ。	18世紀～19世紀
38	A-1区 II層	磁器 皿	-	(0.7)	6.8	-	1/5	灰白色	内面に白磁釉	外面は削り出しで無釉。底部に墨書。	-
39	B-1区 II層	磁器 中皿	20.4	5.1	6.8	21.0	1/4	灰白色	青磁釉	青磁。見込に陰刻による文様。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 17世紀前半
40	B区 II層	磁器 染付 皿	-	(4.3)	9.8	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線、見込に麒麟文の染付。高台内は銘と「大手筋深井」の白玉描。畳付は釉ハギ。	肥前産 19世紀前半～中葉
41	B-1区 II層	磁器 染付 輪花大皿	49.8	6.6	28.0	-	4/5	灰白色	透明釉	外面に宝文・鳥文・花文、内面に紗綾文。見込は花に窓、窓内に風景・人物・馬・鯉・鳥文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 江戸後期
42	B-1区 II層	磁器 色絵 小皿	10.4	2.2	5.8	-	4/5	白色	透明釉	見込に上絵付の痕跡のみ残る。「村田」字と松文。畳付は釉ハギ。	近代か
43	B-1区 II層	磁器 色絵 小皿	10.6	2.2	6.4	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	見込に上絵付の痕跡のみ残る。「村田」字と松文。畳付は釉ハギ。高台内に砂付着。	近代か
44	A-1区 II層	磁器 色絵 稜花皿	14.9	(3.3)	-	-	1/8	灰白色	全面に透明釉 口縁端部は 鉄釉	口鑄。外面に木と鳥文の染付と朱と緑色の上絵付、内面に桜花文の染付と朱と金・緑色の上絵付。	近代か

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
45	B-1区 II層	磁器 染付 合子蓋	5.9	1.9	笠径 6.7	-	完存	灰白色	透明釉	外面に斜格子文と花文・圏線の染付。口縁部は釉ハギ。	-
46	B-1区 II層	磁器 染付 蓋物蓋	9.0	2.3	笠径 10.4	-	2/3	白色	透明釉	天井部外面は蝶文と丸文、口縁部外面は雷文の染付。かえり部は釉ハギ。	肥前系
47	B-1区 II層	磁器 色絵 小杯	5.5	3.6	2.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に朱色の草花文と扇文・圏線、銘の上絵付。畳付は釉ハギ。	-
48	B-1区 II層	磁器 色絵 紅猪口	4.8	2.5	1.9	-	完存	白色	透明釉	外面に朱色の上絵付。文様または文字か。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀か
49	B区 II層	磁器 色絵 猪口	9.8	7.3	6.4	-	1/3	白色	透明釉	桶形。蛇ノ目凹形高台。外面に染付と朱・緑・墨色の風景文の上絵付。内面に四方禪文、見込に圏線。	肥前産 有田 18世紀後葉
50	B-1区 II層	磁器 紅皿	4.7	1.7	1.3	-	完存	白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。菊花形。高台付近から底部は無釉。	肥前産 18世紀
51	B-1区 II層	磁器 紅皿	5.9	1.6	2.2	-	完存	灰白色	内面から口縁 部外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。外面に型押による陽刻の蛸唐草文。	肥前産 19世紀
52	B-1区 II層	磁器 染付 瓶	1.9	(2.1)	-	-	肩部 完存	白色	透明釉	筒形。肩部外面に宝文の染付。内面は回転ナデで無釉。接合部で剥離。	肥前産 江戸後期
53	B-1区 II層	磁器 染付 小瓶	1.5	11.0	3.3	胴径 4.8	完存	灰白色	口縁部内面から 外面まで 透明釉	外面に草花文と土坡、草文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀末～19世紀 後半
54	B区 II層	磁器 染付 角鉢	13.2	5.2	7.2	-	底部 完存	白色	透明釉	型打成形。口縁部は輪花形。高台は凹形。外面は環珞文か、内面は区画文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系
55	B-1区 II層	磁器 染付 角鉢	14.0	8.1	7.8	-	底部 完存	灰白色	透明釉	型打成形。外面は区画文、口縁部内面に雷文、高台に櫛歯文、見込は牡丹文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半
56	B-1区 II層	磁器 染付 杯台	-	(9.2)	9.4	-	脚部 完存	灰白色	透明釉	杯部は多角形か。杯部外面に風景文、内面は丸文と雷文、脚部外面は宝文と櫛歯文の染付。	肥前産 幕末
57	B-1区 II層	磁器 ミニ チュア	2.2	1.1	0.8	-	完存	白色	内面と外面の 一部に白磁釉	鉢形。型打成形。外面は型押による菊弁状の文様。	-
58	B区 II層	磁器 ミニ チュア	全幅 5.6	3.1	全厚 3.6	-	完存	灰白色	外面は鉄釉 内面と底部は 無釉	囲炉裏形。型打成形。中空。全面に型による文様で、上面に五徳、側面と上面に木目、前面に引出し。	-
59	B-1区 II層	磁器 筆筒	(4.6)	9.5	4.9	胴径 5.1	3/4	白色	透明釉	箱形。上部に亀甲形の透かし。外面に銅板転写による文様。接地面は釉ハギ。	大正期
60	B-1区 II層	磁器 染付 文鎮	全長 5.2	全幅 5.2	全厚 4.2	-	完存	黄橙色	透明釉	玉形。外面は花唐草文の染付。底部は釉ハギ。	関西系か 19世紀か
61	B-1区 II層	土師器 焜炉	-	(1.4)	21.5	-	1/6	浅黄橙色	-	円筒形。回転ナデ。底部外面は回転削り。底部外面に墨書あり。底部内面に煤付着。	-
62	B-1区 II層	瓦 軒平瓦	全長 (7.7)	全幅 (18.0)	全高 (5.2)	-	1/2	浅黄橙色	-	中心飾りは三花文。瓦当右側に「とく□」の刻印。全面にキラ粉付着。やや酸化炎焼成。ナデ。	土佐産 徳王子か
63	A-1区 II層	瓦 軒平瓦	全長 (4.8)	全幅 (10.8)	全高 (4.8)	-	一部 残存	灰色	-	中心飾りは三巴文か。瓦当左側に「夜須三」の刻印。全面にキラ粉付着。ナデ。	土佐産 夜須
64	B-1区 II層	瓦 軒棧瓦	全長 (11.8)	全幅 (13.8)	顎下 部厚 2.8	瓦当 高 4.3	1/6	灰色	-	中心飾りは三巴文。瓦当左側に「中山竹」の刻印。	-
65	B区 II層	瓦 軒棧瓦	全長 (9.2)	全幅 (14.1)	顎下 部厚 2.3	瓦当 高 4.4	1/8	灰色	-	中心飾りは三巴文。瓦当右側に「御仕」の刻印。	-
66	B-1区 II層	土製品 人形	全長 (3.4)	全幅 4.0	全厚 1.8	-	一部 欠損	にぶい 黄橙色	-	型成形。天神様で台座付。側面に型をあわせた痕跡残る。下面に径3mmの孔、頸部まで貫通。	-

遺物観察表4 堆積層出土遺物

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
67	B-1区 II層	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.6	-	ほぼ 完存	橙色	-	型成形。蜻蛉文。下面はナデ。	-
68	B-1区 II層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。鶴文か。下面はナデ。摩耗 する。	-
69	B-1区 II層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	型成形。桐文。下面はナデ。摩耗す る。	-
70	B区 II層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	型成形。葛文か。下面はナデ。	-
71	B-1区 II層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.7	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	型成形。文様不明。下面はナデ。	-
72	B区 II層	土製品 泥面子	全長 (2.2)	全幅 2.4	全厚 0.5	-	一部 欠損	橙色	-	型成形。扇子文。下面はナデ。	-
73	II層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	ほぼ 完存	橙色	-	型成形。「や」字。下面はナデ。	-
74	B区 II層	土製品 泥面子	全長 (2.2)	全幅 2.6	全厚 0.7	-	一部 欠損	橙色	-	型成形。「や」字。下面はナデ。	-
75	B区 II層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。「仇」字か。下面はナデ。	-
76	B区 II層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	型成形。「板垣」字。下面はナデ。	-
77	B-1区 II層	石製品 不明	全長 17.0	全幅 28.1	全厚 16.8	重量 (11.40) kg	一部 残存	-	-	輪状。上面と外側は丁寧な加工で 平滑。内側と下面は粗い加工痕。 側面には「文□□」の刻書。	砂岩
78	A-1区 II層	木製品 漆器椀	-	(3.8)	-	-	1/2	-	外面は黒塗 内面は赤塗	平椀。外面には朱の丸に橘文か。	トチノキ
79	B区 II層	骨角製品 篋	全長 11.3	全幅 2.4	全厚 0.5	重量 (11.0)	完存	-	-	上端は厚く細く円孔があり、放射 状の陰刻文様。先端は薄く幅広。	-
80	B区 II層	金属製品 銭貨	銭径 2.30	孔径 0.70	銭厚 0.08	重量 1.46	完存	-	-	銅製。寛永通寶。	-
81	B-1区 II層	金属製品 匙または 耳搔	全長 (7.9)	全幅 0.5	全厚 0.2	重量 (4.2)	一部 欠損	-	-	銅製。先端は厚く丸い。柄は断面 は扁平。柄部に1条の溝。	-
82	A-1区 III-1層	陶器 碗	-	(1.4)	4.2	-	底部 3/4	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部外面は削り出 して無釉。見込に3mm大の小石が 付着。高台内に「父母」の墨書。	-
83	A-1区 III-1層	陶器 蓋物	-	(3.0)	7.1	-	底部 完存	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	外面底部付近から底部は削り出 して無釉。底部には「川添」の墨 書。見込の3箇所目痕。	京都系
84	A-1区 III-1層	陶器 鉢	38.0	15.6	20.2	-	1/4	灰白色	内面から底部 付近まで灰釉	水甕。外面に陰刻による文様で、 外面の一部に緑釉と鉄釉を流し 掛け。見込に1箇所の砂目痕。	瀬戸・美濃産 19世紀
85	A-1区 III-1層	磁器 染付 小碗	8.3	5.1	3.4	-	2/3	灰白色	透明釉	口鏝。見込に虫文の染付。畳付は 釉ハギ。	肥前産 1630～1650年代
86	A-1区 III-1層	磁器 色絵 小碗	8.7	5.2	3.4	-	1/3	灰白色	透明釉	外面には朱の丸に墨・緑色の草花 文と、区画間は朱色地に白抜き の唐草文。内面は朱色で蓮弁文か。	肥前産 有田
87	A-1区 III-1層	磁器 色絵 小碗	8.2	5.4	3.3	-	1/2	灰白色	透明釉	外面は染付と朱・緑色の草文・唐 草文。内面に墨弾きの雷文、見込 は松竹梅文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田
88	A-1区 III-1層	磁器 染付 広東碗	11.1	6.8	5.3	-	1/2	白色	透明釉	外面に雪輪文、内面に圏線。見込 に文様と圏線の染付。畳付は釉ハ ギ。	肥前系 江戸後期

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
89	A-1区 Ⅲ-1層	磁器 染付 小碗	8.4	5.2	3.6	-	完存	灰白色	透明釉	外面は葦に鳥文と圏線、内面は圏線。見込は鷲文の染付か。高台内には「サ」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
90	A-1区 Ⅲ-1層	磁器 色絵 鉢	-	(3.6)	14.0	-	一部 残存	灰白色	透明釉	二重高台。内外面に染付と朱・墨色の上絵付。内側の高台の畳付は釉ハギ。三ツ組鉢か。	肥前産 明治期 混入
91	A-1区 Ⅲ-1層	磁器 香炉	7.1	(5.0)	4.4	胴径 (5.0)	1/3	灰白色	口縁部内面から外面に青磁釉か	青磁。内面は回転ナデで無釉。円錐形の脚が1箇所に残る。	-
92	A-1区 Ⅲ-1層	土師器 焼炉	-	(125)	17.6	胴径 21.7	1/4	にぶい黄 橙色 金雲 母含む	-	円筒形。外面は横方向の磨き。内面は回転ナデ。見込に煤付着。脚部外側の1箇所は円孔。墨書あり。	-
93	A-1区 Ⅲ-2層	陶器 変形蓋	-	5.1	-	摘径 5.7	一部 残存	にぶい 橙色	外面は銅緑釉と白色釉 天井部 内面は灰釉	口縁部は多角形か。摘の4箇所に切り込み。天井部内面に六角「清」印刻銘。混入。	京都産か 五代清 水六兵衛印 明治 後期～昭和初期か
94	A-1区 Ⅲ-2層	磁器 染付 輪花皿	20.7	3.0	13.5	-	4/5	灰白色	透明釉	中皿。口縁部内面に型押による陽刻の文様、見込に竹に鳥文の染付。高台内は圏線と銘、目痕。	肥前産 有田 17世紀中葉～後葉
95	A-1区 Ⅲ-2層	磁器 染付 輪花皿	21.0	3.1	13.1	-	4/5	灰白色	透明釉	中皿。口縁部内面に型押による陽刻の文様、見込は竹に鳥文と圏線の染付。高台内は圏線と銘、目痕。	肥前産 有田 17世紀中葉～後葉
96	A-1区 Ⅲ-2層	須恵器 杯	-	(1.7)	10.4	-	1/4	灰色	-	内面から高台までは回転ナデ。底部はナデ。扁平な高台を貼付。	古代
97	A-1区 Ⅲ-2層	骨角製品 篋	全長 (109)	全幅 2.0	全厚 0.6	重量 (13.23)	一部 欠損	-	-	上端に円孔。断面は半円形で裏面は平ら。表面に「正」、裏面に「慶応元丑七月…」の刻書。	-
98	A-2区 Ⅲ-3層	土師質 土器 杯	-	(2.1)	6.8	-	底部 完存	浅黄色	-	外面は回転ナデ。内面は回転ナデとみられるが摩耗のため不明。円盤状高台で、底部は回転糸切り。	古代
99	B区 Ⅲ-1層	陶器 丸碗	10.3	5.4	4.9	-	4/5	浅黄橙色	内面から高台まで灰釉	外面は鉄錆による笹文。灰釉は厚く施釉。口縁部内外面の釉溜りは白く濁る。	尾戸窯 18世紀以降
100	B区 Ⅲ-1層	陶器 皿	-	(1.8)	5.9	-	1/3	灰白色	緑釉	見込と底部外面に重ね焼痕。	瀬戸・美濃産 16世紀末～17世紀 初頭
101	B区 Ⅲ-1層	陶器 急須蓋	7.3	1.9	3.2	摘径 1.3	一部 欠損	淡黄色	外面は透明釉	外面に錆絵と圏線、3箇所に緑釉による文様。内面は回転ナデで無釉。底部は回転糸切りで無釉。	江戸後期
102	B区 Ⅲ-1層	陶器 行平鍋蓋	-	(3.1)	-	摘径 5.2	1/2	灰色	外面に鉄釉 内面は鉄釉を 刷毛塗り	摘部は回転ナデで無釉。摘近くは鉄釉。口縁部外面は飛龍文で無釉。	-
103	B区 Ⅲ-1層	陶器 鉢	-	(4.9)	11.0	胴径 (12.0)	1/5	にぶい 黄橙色	胴部外面は 暗褐色釉	獣面の脚を貼付。脚は1箇所のみ残存し、9mm以上の穿孔あり。回転ナデ。底部外面は回転削り調整。	-
104	B区 Ⅲ-1層	陶器 土瓶	-	(8.8)	7.6	-	1/3	灰白色	外面は緑釉 のち透明釉 内面は無釉	回転ナデ。外面はイッチン描き。高台付近から底部は回転削りで無釉。底部に被熱の痕跡。	-
105	B区 Ⅲ-1層	陶器 鍋	全長 5.6	全幅 3.0	全厚 1.8	-	把手 完存	灰白色	灰釉	把手。上面は型押による文様。口縁端部は釉ハギ。	-
106	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 碗	8.2	5.7	4.4	-	2/3	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による菊花文と圏線の染付。内面は無文。高台は釉ハギ、砂付着。	肥前産 18世紀前半
107	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 小丸碗	-	(3.8)	3.2	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に9条の圏線、高台内に1条の圏線の染付。高台内に砂が付着、畳付は釉ハギ。	肥前産 1650年代
108	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 碗	11.6	5.6	4.2	-	4/5	灰白色	透明釉	外面に圏線と草文か、内面は口縁部に2条の圏線、見込は圏線と水に岩文の染付か。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀後半か
109	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 端反碗	9.2	4.7	3.3	-	底部 完存	灰白色	透明釉	小碗。内外面に木賊文の染付。高台内に銘あり。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 19世紀
110	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 中皿	19.1	3.2	12.3	-	1/6	灰白色	透明釉	外面に唐草文、内面は口縁部に山水文、見込に五弁花文の染付。高台内は圏線と銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀第2・3四半 期



遺物観察表6 堆積層出土遺物

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
111	B区 Ⅲ-1層	磁器 色絵 小皿	9.6	2.0	4.9	-	1/3	灰白色	透明釉	木型打込成形。見込に陰刻の寿字文と朱・墨・金色の上絵付。高台内は朱色の上絵付。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 19世紀中葉
112	B-1区 Ⅲ-1層	磁器 小判皿	12.8	1.7	8.0	-	1/6	灰白色	黄色釉	型打成形。見込に型押による陰刻の雲龍文。底部外面に目痕。	淡路 珉平焼
113	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 輪花杯	8.0	6.0	3.0	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に青海波文と竹文?と圏線。内面に3条の圏線の染付。高台端部を釉ハギする。	肥前産 19世紀前半
114	B-1区 Ⅲ-1層	磁器 染付 高杯か	-	(5.8)	7.5	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に舟文と圏線の染付。見込はナデによる調整で凹凸あり。畳付は釉ハギ。	肥前系か 19世紀か
115	B区 Ⅲ-1層	磁器 染付 油德利 土師質 土器	-	7.1	3.9	胴径 6.2	一部 欠損	灰白色	透明釉	口縁部は片口状。受部と把手を貼付。受部上に円孔。受部下にコバルトによる文様。底部外面は無釉。	明治期 混入
116	B区 Ⅲ-1層	土師質 小皿	6.8	1.3	4.0	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。灯明皿として使用か。口縁部の一部に煤付着。	-
117	B区 Ⅲ-1層	土師器 焜炉か	-	(6.8)	17.6	胴径 (188)	1/4	橙色 中 粒砂と赤 礫を含む	-	円筒形。脚は貼付。外面は丁寧なナデ。内面はハケ。底部外面はナデ。胴部外面に墨書あり。	-
118	B区 Ⅲ-1層	土師器 焜炉	13.0	16.1	13.4	胴径 14.4	一部 欠損	淡黄色 僅 かに金雲 母を含む	-	円筒形。白色系。二重構造。楕円形の窓。五角形の脚と口縁部内面に台形の突起を貼付。回転ナデ。	京都系 19世紀以降
119	B区 Ⅲ-1層	土師器 焙烙	15.0	2.9	15.2	-	1/4	橙色 金雲母を 含む	-	小型。回転ナデ。底部は無調整。	関西系 19世紀か
120	B区 Ⅲ-1層	須恵器 杯	14.6	3.9	10.4	-	1/4	灰白色 細粒砂を 含む	-	回転ナデ。底部外面は回転ヘラ切りか。高台を貼付。	古代
121	B区 Ⅲ-1層	瓦 軒平瓦	全長 (3.5)	全幅 (11.2)	全高 (5.3)	-	瓦当の 一部 残存	灰色	-	中心飾りは三花文か。瓦当右側には「とく平」とみられる刻印。	-
122	B区 Ⅲ-1層	土製品 人形	全長 3.8	全幅 2.8	全厚 2.2	-	完存	明黄褐色	透明釉と一部 に緑釉	団扇を持つ人物形。型成形。摩耗する。	-
123	B区 Ⅲ-1層	土製品 人形	全長 (4.1)	全幅 (5.7)	全厚 2.3	-	一部 欠損	浅黄橙色	-	馬形。型成形。キラ粉付着。	-
124	B区 Ⅲ-1層	土製品 人形または 火鉢脚	全長 (5.4)	全幅 (4.0)	全高 (4.2)	-	一部 残存	浅黄橙色	側面は緑釉	獣足形。手捻り成形。下面は無釉。	瀬戸・美濃系か
125	B区 Ⅲ-1層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	型成形。蜻蛉文。下面はナデ。	-
126	B区 Ⅲ-1層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.9	-	完存	浅黄褐色	-	型成形。鶴文。下面はナデ。	-
127	B区 Ⅲ-1層	木製品 木筒	全長 10.8	全幅 3.7	全厚 0.3	-	完存	-	-	両面墨書あり。短冊形。表は「天天……天天」。裏は薄いが「天……」か。柾目。	-
128	B区 Ⅲ-1層	金属製品 簪	全長 11.2	全幅 1.0	全厚 0.2	重量 2.66	完存	-	-	銅製。上端は薄く、やや広がる。先端は二股に分かれ細く丸くなる。著しく湾曲し変形。	-
129	B-1区 Ⅲ-1-1 層	陶器 碗	-	(4.8)	4.8	-	1/3	にぶい 黄色	内面から高台 付近まで灰釉	外面の一部に鉄錆による文様。高台から底部は無釉。	-
130	B-1区 Ⅲ-1-1 層	陶器 小丸碗	10.4	6.4	3.9	-	1/3	灰白色	薬灰釉	内外面は被熱のため白色。高台から底部は無釉。高台端部は砂付着。	福岡または萩産か 18世紀か
131	B-1区 Ⅲ-1-1 層	陶器 小皿	8.2	1.2	5.0	-	1/4	明赤褐色	内面から口縁 部外面まで 鉄釉	焼締。回転ナデで体部外面は回転削りを加える。口縁部に煤付着。	-
132	B-1区 Ⅲ-1-1 層	陶器 鉢	-	(12.5)	13.6	-	底部 完存	灰赤色 チャート を含む	体部内面から 外面底部付近 まで鉄釉	回転ナデ。底部付近は無釉で底部内面には指頭圧痕。底部外面は無調整で無釉。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
133	B-1区 Ⅲ-1-1層	陶器 足付ハマ	全長 7.0	全幅 7.0	全厚 1.5	孔径 2.4	1/2	灰色	-	足が2箇所に残存。中央に円孔。上 下面は回転糸切り。側面と足はナ デ。	-
134	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 丸碗	-	(5.4)	3.8	-	1/3	灰白色	透明釉	高台外面に2条の圏線と花文?高 台内に1条の圏線。高台の一部は 無文で砂付着。	肥前産 1650年代
135	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 碗	-	(5.2)	3.3	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に扇文と圏線。内面に圏線と 見込に松葉文の染付。畳付は釉ハ ギ。	瀬戸・美濃系
136	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 皿	13.3	3.1	7.3	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に唐草文と圏線。内面に矢羽 文の染付。高台内に銘と圏線。畳 付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
137	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 輪花皿	13.1	4.1	8.5	-	底部 完存	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。口縁部は口鏑。 見込に山水家屋文の染付。	19世紀
138	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 碗蓋	10.2	2.9	-	摘径 6.2	1/2	白色	透明釉	外面と口縁部内面に染付。天井部 内面に圏線とコンニャク印判に よる五弁花文。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
139	B-1区 Ⅲ-1-1層	磁器 染付 仏飯器	-	(6.2)	5.1	-	脚部 ほぼ 完存	灰白色	透明釉	大型。杯部外面に文様の一部と圏 線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産か
140	B-1区 Ⅲ-1-1層	青花 皿	-	(1.2)	6.3	-	1/5	灰白色	透明釉	見込に「博古□」の染付。高台外面 と高台内に圏線。畳付は無釉。釉 が厚く、高台内は釉が割れる。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前葉～中葉
141	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	6.5	1.2	4.8	-	1/3	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部の一部に煤付着。	-
142	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	7.1	1.1	5.1	-	2/3	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部の一部に煤付着。	-
143	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	7.2	1.2	5.0	-	ほぼ 完存	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部の一部に煤付着。	-
144	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	7.2	1.2	4.1	-	1/2	灰白色 細粒砂を 多く含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
145	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	7.0	1.1	4.6	-	2/3	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
146	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師質 土器 小皿	7.2	1.3	4.0	-	1/3 底部 完存	浅黄橙色 細粒砂を 多く含む	-	摩耗するため不明瞭だが回転ナ デとみられる。底部は回転糸切 り。	-
147	B-1区 Ⅲ-1-1層	土師器 焙烙	31.2	(4.7)	-	-	1/5	浅黄橙色 赤礫と金 雲母含む	-	口縁部は横ナデ。外面はナデ。内 面は回転ナデか。内面に煤付着。	関西系
148	B-1区 Ⅲ-2層	陶胎染付 碗	10.5	7.3	5.0	-	3/5	灰白色	透明釉	外面に松文と圏線の染付。畳付は 釉ハギで砂付着。	肥前系
149	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 筒形碗	8.7	6.1	5.0	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口鏑。外面は鉄錆による蕨文。高 台付近から底部は削り出しで無 釉。	京都系
150	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 碗	10.2	7.3	4.0	-	4/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面は鉄錆の注連縄文。見込に目 痕。高台付近から底部は削り出 しで無釉。	尾戸窯か
151	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 皿	14.9	5.0	6.2	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	絵唐津。波縁皿か。見込に鉄錆の 鳥文。高台付近から底部は削り 出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
152	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 皿	13.2	3.9	6.6	-	2/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	見込を蛇ノ目釉ハギ。高台から底 部は削り出しで無釉。高台の1箇 所に円孔。	-
153	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 灰吹	5.5	7.5	5.7	-	1/2	灰白色	体部内面から 外面まで灰釉	回転ナデ。底部は回転糸切り。外 面には指圧による凹みあり。見込 と底部は無釉。	-
154	B-1区 Ⅲ-2層	陶器 小壺	-	(2.2)	1.7	胴径 3.7	一部 欠損	におい 赤褐色	外面底部付近 まで鉄釉	回転ナデ。底部外面は回転糸切 り。肩部に2条の沈線。	-

遺物観察表8 堆積層出土遺物

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
155	B区 Ⅲ-2層	陶器 足付ハマ	全長 5.4	全幅 5.4	全厚 1.2	-	完存	灰白色	-	3箇所足を貼付。上下面は回転糸切り。側面と足はナデ。	-
156	B-1区 Ⅲ-2層	磁器 染付 小丸碗	9.6	5.6	4.0	-	1/2	灰白色	畳付を除き 透明釉	外面に梅文と圏線、高台内に不明の染付。	肥前産 18世紀
157	B区 Ⅲ-2層	磁器 染付 丸碗	11.2	7.4	4.7	-	1/4	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による文様と斜格子文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
158	B-1区 Ⅲ-2層	磁器 染付 小碗	8.7	5.0	3.5	-	1/3	灰白色	透明釉	折縁形。外面は草花文?と圏線の染付。口縁部内面に僅かに染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産か 18世紀か
159	B区 Ⅲ-2層	磁器 染付 皿	19.3	4.3	16.8	20.1	1/4	灰白色	透明釉	外面に竹文?と圏線、内面に圏線、見込に海浜風景文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	-
160	B区 Ⅲ-2層	磁器 染付 輪花大皿	29.5	4.9	15.6	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に七宝文、内面は雲龍文の染付。高台内には目痕が6箇所に残る。畳付は釉ハギ。白化粧土あり。	肥前産 志田窯 1820~1860年代
161	B区 Ⅲ-2層	磁器 色絵 小杯	8.3	4.2	3.2	-	1/3	灰白色	透明釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。内面は墨・緑色の青海波文と朱色の蝶文の上絵付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産
162	B-1区 Ⅲ-2層	磁器 染付 小瓶	1.4	6.8	2.7	胴径 4.0	完存	灰白色	口縁部内面から 外面まで 透明釉	胴部外面に梅文、裏側に笹文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 19世紀
163	B区 Ⅲ-2層	磁器 ミニ チュア	2.4	1.3	0.9	-	1/4	白色	白磁釉	白磁。鉢形。畳付は釉ハギ。	-
164	B-1区 Ⅲ-2層	青花 皿	-	(1.0)	8.6	-	1/5	灰白色	畳付を除き 透明釉	内外面に染付。高台内に放射状の匏痕。	中国産 景德鎮窯系
165	B-1区 Ⅲ-2層	白磁 小壺	-	(3.9)	4.7	胴径 9.7	1/2	灰白色	外面に白磁釉 内面も一部釉 が掛かる	畳付に2箇所の砂目痕。	朝鮮産 15世紀中葉~後葉
166	B区 Ⅲ-2層	軟質施釉 陶器 向付	-	(1.9)	-	-	一部 残存	灰白色	淡黄色釉	方形または多角形とみられる。内面の一部にわずかに濃緑色の釉が掛かる。	初期京焼または 関西系
167	B-1区 Ⅲ-2層	土師質 土器 皿	10.6	1.6	6.2	-	1/3 底部 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。器壁薄い。	-
168	B-1区 Ⅲ-2層	土師質 土器 皿	-	(0.8)	7.4	-	底部 のみ	灰白色	-	白土器。見込には型押による陽刻の高砂文。ナデ。	尾戸窯
169	B-1区 Ⅲ-2層	土師器 焙烙	26.6	5.5	26.2	-	1/8	橙色 金雲 母と長石 を含む	-	底部は型成形か。口縁部は横ナデ。口縁部に凹孔。底部付近は無調整。外面に煤付着。	関西系か
170	B区 Ⅲ-2層	須恵器 杯	-	(1.4)	8.2	-	1/4	灰白色	-	貼付高台。摩耗のため調整は不明。	古代
171	B-1区 Ⅲ-2層	瓦質土器 焙烙	-	(4.5)	-	-	1/9	灰白色 金雲母を 含む	-	粘土紐巻き上げ成形。内外面の口縁部は横ナデ。外面はナデで、指頭圧痕あり。内面はナデ。	讃岐産 御厩系 19世紀
172	B-1区 Ⅲ-2層	土製品 人形	全長 (4.3)	全幅 (3.9)	全厚 1.9	-	一部 欠損	灰黄色	-	天神様。型成形。中実。下面に凹孔。	-
173	B区 Ⅲ-2層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	浅黄橙色	-	型成形。「大日本」字。側面には刻目。下面はナデ。	近代 混入
174	B-1区 Ⅲ-2層	石製品 砥石か	全長 3.1	全幅 3.4	全厚 1.0	重量 23.7	ほぼ 完存	-	-	上面を除く5面に研磨痕あり。上面に鳥文の刻書。下面には直線状の使用痕あり。	粘板岩か
175	B-1区 Ⅲ-3層	磁器 染付 碗	-	(3.5)	4.0	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に圏線と網目文の染付。底部外面は回転削り。	肥前産 1650年代
176	B区 Ⅲ-3層	磁器 染付 中皿	-	(2.0)	13.0	-	底部 完存	灰白色	透明釉	口縁部内面は濃地に区画文、見込は菊花文、外面と高台内に圏線の染付。畳付は釉ハギ。目痕が残る。	肥前産 有田 1660~1680年代

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
177	B-1区 Ⅲ-3層	青磁 碗	-	(2.6)	5.5	-	1/2	灰白色	青磁釉	畳付は無釉。	中国産
178	B区 Ⅲ-3層	金属製品 銭貨	銭径 2.55	孔径 0.60	銭厚 0.08	重量 3.34	完存	-	-	銅製。寛永通寶。背面に「文」。	鑄造年代 1668～1683年
179	B区 Ⅲ-4層	陶器 波緑皿	-	(3.1)	-	-	1/5	にぶい 橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。	肥前産 1590～1610年代
180	B区 Ⅲ-4層	陶器 中皿	-	(3.4)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	内面は灰釉 外面は一部灰 釉が流れる	絵唐津。外面は回転ナデで、高台付 近から底部外面は削り出して無 釉。内面には鉄錆による老松文か。	肥前産 1590～1610年代
181	B-2区 Ⅲ-1層	陶器 色絵 半球形碗	9.2	(4.3)	-	-	1/4	灰白色	灰釉	外面に朱・緑色の笹文の上絵付。 被熱する。	京都・信楽系 18世紀後半か
182	B-2区 Ⅲ-1層	陶胎染付 広東碗	12.1	6.5	7.1	-	底部 完存	灰白色	白化粧土のち 透明釉	外面には螺子文、見込は五弁花文 と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 太白焼 19世紀
183	B-2区 Ⅲ-1層	陶器 丸碗	12.1	(7.1)	-	-	1/4	黄灰色	内面から底部 外面付近まで 灰釉	底部外面は回転削りて無釉。	19世紀か
184	B-2区 Ⅲ-1層	陶器 小皿	10.4	(1.5)	-	-	1/6	灰色	-	焼締。口縁部外面の一部に煤が付 着。回転ナデで、体部外面は回転 削りを加える。	-
185	B-2区 Ⅲ-1層	陶器 行平鍋	全長 9.2	全幅 4.3	全厚 3.3	-	完存	橙色	鉄釉	把手。断面は三角形で、端部は楕 円形。身部は鉄釉を刷毛塗り。	-
186	B-2区 Ⅲ-1層	磁器 染付 猪口	6.1	2.2	2.8	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に笹文の染付か。畳付は釉ハ ギ。	肥前系
187	B-2区 Ⅲ-1層	磁器 鉢	-	(4.3)	8.8	-	底部 完存	灰白色	青磁釉	青磁。蛇ノ目凹形高台で高台内を 蛇ノ目釉ハギ後、錆釉。内面に陰 刻による文様。見込は印花文。	肥前産 17世紀後半
188	B-2区 Ⅲ-1層	土師質 土器 小皿	8.1	1.4	4.2	-	2/3	にぶい 橙色 赤 礫を含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。内 面に煤が付着。	-
189	B-2区 Ⅲ-1層	金属製品 不明	全長 (9.4)	全幅 0.9	全厚 0.2	重量 (11.0)	一部 欠損	-	-	短冊形。上部に径3mmの円孔。全面 錆化。	-
190	B-2区 Ⅲ-1層	金属製品 飾り金具 か	全長 2.6	全幅 (2.3)	全厚 0.2	重量 (5.9)	一部 残存	-	-	銅製。板状で、隅丸方形。表面には 文様か。全面錆化。	-
191	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 碗	-	(4.0)	5.1	-	1/4	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	底部外面は無釉で、回転削り。高 台内に墨書。	尾戸窯
192	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 皿	13.3	3.6	4.6	-	2/3	灰白色	灰釉	絵唐津。内面に鉄錆による花文。 高台付近に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
193	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 大皿	-	(3.1)	11.0	-	1/3	黄灰色	外面は無釉 内面は灰釉	絵唐津。胎土目痕残る。外面は削 り出し。見込に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
194	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 蓋	4.2	1.2	笠径 5.0	摘径 1.3	完存	灰黄褐色	無釉	円形の摘。回転ナデ。底部は回転 糸切り。	-
195	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 鉢	16.2	6.6	10.2	-	2/3	橙色 細粒砂を 多く含む	-	脚を貼付。内面から口縁部外面は 回転ナデ。外面の体部から底部は 回転削り。底部外面に墨書。	-
196	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 火鉢	20.0	14.6	19.2	胴径 22.0	1/3	灰白色	体部外面は黄 褐色釉 底部 外面は鉄釉	脚を貼付。脚内側に銅釘。外面は 陰刻の草文。内面は鉄釉刷毛塗 り。底部内面は回転ナデで無釉。	-
197	B-2区 Ⅲ-2層	陶器 播鉢	-	(6.0)	-	-	1/8	赤褐色	-	片口部の一部が残る。内面に8条 単位の播目が4箇所。口縁部に2条 の沈線。回転ナデ。	-
198	B-2区 Ⅲ-2層	磁器 紅皿	4.7	1.3	1.6	-	完存	灰白色	白磁釉	白磁。型打成形。菊花形。高台付 近は無釉。	肥前産

遺物観察表10 A-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
199	B-2区 Ⅲ-2層	磁器 染付 段重	12.3	5.5	9.4	-	1/2	灰白色	透明釉	口縁部内面と壘付を釉ハギ。外面に扇文、高台付近に松葉文と圏線の染付。内面は無文。焼継痕あり。	肥前産 18世紀第4四半期～ 19世紀第1四半期
200	B-2区 Ⅲ-2層	青花 大皿	-	(2.1)	17.4	-	一部 残存	灰白色	壘付を除き 透明釉	外面に圏線。見込に草花文と圏線。高台に粗い砂付着。	中国産 景德鎮窯系
201	B-2区 Ⅲ-2層	瓦 軒平瓦	全長 (9.9)	全幅 (22.0)	全高 5.1	-	瓦当部 ほぼ 完存	灰白色 細粒砂を 多く含む	-	中心飾りは三巴文。瓦当左側に「□作」の刻印。	-
202	B-2区 Ⅲ-3層	陶器 皿	-	(2.0)	4.8	-	底部 完存	明赤褐色	灰釉	絵唐津。内面に鉄錆による草文。外面底部付近は回転ナデで無釉。胎土・釉は赤く発色。	肥前産 1590～1610年代
203	B-2区 Ⅲ-3層	陶器 皿	-	(2.7)	5.3	-	底部 完存	橙色	内面は灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外面は回転ナデか。被熱により器面荒れ、調整と釉は不明瞭。	肥前産 1590～1610年代
204	B-2区 Ⅲ-3層	陶器 皿	-	(1.9)	4.0	-	1/2	にぶい 橙色	灰釉 灰オリーブ色 に発色	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。体部外面は回転ナデ、高台付近から底部は回転ナデで無釉。	肥前産 1610～1630年代
205	B-2区 Ⅲ-3層	磁器 染付 皿	-	(1.9)	4.4	-	底部 完存	灰白色	透明釉	見込には舟文と笹文の染付。壘付は釉ハギで、砂付着。	肥前産 1630～1640年代
206	B-2区 Ⅲ-3層	磁器 染付 輪花皿	19.7	2.8	12.5	-	1/6	白色	透明釉	外面は唐草文と圏線、内面に牡丹文、見込は環状の松竹梅文、高台内は圏線の染付。壘付は釉ハギ。	肥前産 有田 1730～1760年代
207	B-2区 Ⅲ-3層	磁器 染付 大皿	-	(4.5)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面は波線、内面は草花文と圏線の染付。	-
208	B-2区 Ⅲ-3層	青花 皿	-	(2.4)	-	-	1/8	灰白色	外面は青磁釉 内面は透明釉	外面に陰刻または型押による文様。内面に染付。壘付は無釉。	中国産 景德鎮窯系 16世紀
209	B-2区 Ⅲ-4層	陶器 小皿	11.0	1.6	7.1	-	1/2	明赤褐色	内面から口縁 部外面は鉄釉	焼締。回転ナデで、底部外面には回転ナデを加える。	-
210	B-2区 Ⅳ層	須恵器 杯	-	(4.1)	-	-	1/8	青灰色	-	回転ナデ。底部外面は回転ナデ。著しく摩耗するため調整不明瞭。	6世紀
211	B-2区 Ⅳ層	須恵器 壺	-	(7.6)	12.6	-	底部 完存	灰白色	-	高台を貼付。回転ナデ。底部内面と高台内はナデ。高台付近は横ナデ。	古代
1001	A-1区 SA-201	石製品 石幢	全長 33.8	全幅 26.0	全厚 21.3	重量 27.50 kg	ほぼ 完存	-	-	断面は六角形で、六側面に陽刻の地蔵。上面と下面は平ら。	砂岩
1002	A-1区 SD-201 上層	陶器 碗	-	(2.8)	4.0	-	底部 完存	にぶい 黄橙色	外面は無釉 内面は鉄釉	唐津系陶器。体部外面は回転ナデ。外底は削り出して無釉。	肥前産 17世紀前半
1003	A-1区 SD-201 上層	陶器 碗	-	(4.7)	5.8	-	底部 完存	灰白色	高台付近まで 灰釉	高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 17世紀前半
1004	A-1区 SD-201 上層	陶器 丸碗	12.2	7.5	5.3	-	1/2	にぶい 黄橙色	灰釉	壘付は釉ハギ。	-
1005	A-1区 SD-201 上層	陶器 丸碗	11.6	6.7	5.2	-	1/3	浅黄橙色	灰釉	体部にロクロ目が顕著に残る。壘付は釉ハギで砂付着。	-
1006	A-1区 SD-201 上層	陶器 丸碗	9.9	6.7	4.0	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	京焼風。高台から底部は削り出して無釉。	-
1007	A-1区 SD-201 上層	陶器 丸碗	-	(5.1)	4.4	-	底部 完存	灰赤色	透明釉	外面は白化粧土による刷毛目文、内面は白化粧土による渦巻文。壘付は釉ハギで砂付着。	肥前産か 17世紀末～18世紀 前半
1008	A-1区 SD-201 上層	陶器 天目形碗	11.1	6.7	4.3	-	底部 完存	灰白色 黒色砂粒 含む	内面から高台 付近まで灰釉	体部中央から底部まで削り出し。一部高台内まで施釉。兜巾残る。壘付は砂目痕あり。	肥前産 内野山窯か 1610～1640年代
1009	A-1区 SD-201 上層	陶器 天目碗	11.4	7.1	4.2	-	1/2	灰黄色	内面から外面 体部下まで 鉄釉	高台付近から底部は削り出して無釉。	瀬戸・美濃産 17世紀前半



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1010	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	14.0	3.6	5.0	-	1/4	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による花文。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 17世紀前半
1011	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	10.4	3.3	4.9	-	1/2	橙色	内面から高台付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
1012	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	12.0	3.6	3.1	-	2/3	灰黄褐色	内面から口縁部外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に4箇所胎土目痕。体部は回転ナデ、体部から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
1013	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	-	(3.1)	4.3	-	1/2	灰黄褐色	内面から体部まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。高台脇に削り一段。高台から底部は削り出して無釉。	肥前産 1610～1630年代
1014	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	13.6	4.0	5.9	-	1/2	にぶい 橙色	内面から体部下半まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 1610～1630年代
1015	A-1区 SD-201 上層	陶器 菊花皿	-	(2.6)	-	-	1/5	灰白色	長石釉	畳付は釉ハギ。	志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1016	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	12.6	2.5	8.0	-	1/2	灰白色	内面から体部外面まで透明釉	口縁部内面に鉄錆による多重圏線。底部は回転削りて無釉。一部被熱。	美濃産か
1017	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿か	-	(3.5)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	透明釉 褐色釉	二彩手。口縁部に白化粧土による刷毛目文。	肥前産 武雄か 17世紀
1018	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿か	-	(3.3)	-	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	透明釉 一部 に濃緑色釉	二彩手。内面は白化粧土を刷毛塗り後、鉄錆による文様。	肥前産 武雄か 17世紀後半
1019	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿	-	(2.3)	-	-	一部 残存	赤褐色	高台付近は 灰釉 内面は透明釉	三島手。内面に印刻による白象嵌の蓮弁文。高台付近は回転ナデと削りて無釉。	肥前産 武雄 17世紀後半
1020	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿	27.2	(5.5)	-	-	1/4	にぶい 橙色	内面から体部下半まで灰釉	体部下半は無釉で削り。	肥前産 1590～1610年代
1021	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿	29.4	(5.6)	-	-	1/8	にぶい 黄橙色	灰釉	器面は粗れる。	肥前産 1590～1610年代
1022	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿か	-	(3.6)	8.4	-	1/5	灰黄褐色	内面に光沢のある灰釉	切高台。外面は削り出して無釉。一部灰釉が流れる。見込に砂目痕。	肥前産 1610～1640年代
1023	A-1区 SD-201 上層	陶器 皿	-	(5.8)	6.8	-	底部 完存	にぶい 橙色	透明釉	二彩手。見込は白化粧土を刷毛塗り後、鉄絵緑彩による蝦藻文、砂目痕あり。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 武雄 17世紀前半
1024	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿か	-	(8.2)	10.6	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	口縁部外面は 灰釉 内面は透明釉	二彩手。体部下半は回転ナデで無釉。内面は褐彩刷毛目文で、見込に1箇所の砂目痕。	肥前産 武雄 17世紀末
1025	A-1区 SD-201 上層	陶器 向付または波縁皿	-	(3.4)	6.0	-	底部 完存	褐灰色	内面から体部下半まで灰釉	唐津系灰釉陶器か。高台付近から底部は削り出して無釉。	-
1026	A-1区 SD-201 上層	陶器 大皿または鉢か	-	(6.6)	10.0	-	底部 完存	赤褐色	内面は透明釉	外面は鉄釉を刷毛塗り。内面は白化粧土を渦巻状に刷毛塗り後、施釉。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1027	A-1区 SD-201 上層	陶器 蓋物	2.1	(1.8)	-	-	1/4	灰白色	外面は灰釉 内面は部分的 に灰釉	外面に鉄錆による草花文。口縁部は釉ハギ。露胎部分はナデまたは指頭圧痕。	関西系または京都・ 信楽系か 江戸後期か
1028	A-1区 SD-201 上層	陶器 小瓶	-	(4.8)	4.9	胴径 5.9	1/3	暗灰黄色	体部外面は薬 灰釉 底部外面 と内面は無釉	高台付近から底部は削り出し。内面は回転ナデ。被熱する。	福岡産か 16世紀末～17世紀 初頭
1029	A-1区 SD-201 上層	陶器 瓶または德利	4.8	(7.3)	-	-	口縁部 完存	灰褐色	外面から口縁部内面に 自然釉	焼締。口縁部は片口状。全面に回転ナデ。	備前焼か
1030	A-1区 SD-201 上層	陶器 鉢	15.3	4.6	-	-	1/6	灰褐色	外面は一部に 薬灰釉 内面は鉄釉	外面は白化粧土を刷毛塗り後、一部施釉。被熱する。	肥前または福岡産 か
1031	A-1区 SD-201 上層	陶器 鉢または片口	13.6	(8.6)	16.2	-	1/4	黄灰色	口縁部内面から 外面に灰釉	二彩手。口縁部外面は白化粧土を刷毛塗り後、透明釉を施し一部緑彩。口縁部に煤付着。	肥前産 武雄 17世紀後半



遺物観察表12 A-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1032	A-1区 SD-201 上層	陶器 播鉢	26.4	(7.9)	-	-	1/8	褐色	口縁部に鉄釉	全面に回転ナデ。内面は11条単位の播目。	肥前産 17世紀前半
1033	A-1区 SD-201 上層	陶器 播鉢	30.4	(9.2)	-	-	1/4	灰白色	-	全面に回転ナデ。内面は6条単位の斜め方向の播目。播目は摩耗する。	備前焼 17世紀初頭
1034	A-1区 SD-201 上層	陶器 播鉢	30.6	(7.3)	-	-	1/8	浅黄色	-	焼締。全面に回転ナデ。内面は6条単位の粗い播目。	丹波焼
1035	A-1区 SD-201 上層	陶器 匣鉢	17.9	4.4	16.9	-	1/4	灰白色	-	焼締。回転ナデ。見込は刷毛状工具による同心円状の回転ナデ。底部は一部刷毛が残る。	-
1036	A-1区 SD-201 上層	陶器 壺	4.8	(3.2)	-	-	1/4	にぶい 橙色	-	焼締。全面に回転ナデ。	備前焼か
1037	A-1区 SD-201 上層	陶器 不明	全長 (3.9)	全幅 (1.5)	孔径 (0.2~ 0.5)	-	一部 残存	黄灰色	外面は鉄釉	煙管吸口状の形態。中空で、一端が細くなる。	-
1038	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 丸碗	10.2	(5.5)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に鳥・草文の染付。口縁部内面は圏線。	肥前産 1630~1640年代
1039	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 丸碗	11.9	(3.7)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に花唐草と圏線の染付。内面にわずかに染付。口縁部内面に釉が厚くかかる。	肥前産 1610~1630年代
1040	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 丸碗	10.6	(5.5)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	外面は土坡に薄文と圏線の染付。	肥前産 1640~1650年代
1041	A-1区 SD-201 上層	磁器 碗	10.5	7.2	4.4	-	3/4	灰白色	透明釉	白磁。口鏝。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1630~1650年代
1042	A-1区 SD-201 上層	磁器 丸碗	10.8	(5.6)	-	-	一部 残存	灰白色	口縁部内面から外面は鉄釉 内面は透明釉	釉掛け分け。	肥前産 1640~1650年代
1043	A-1区 SD-201 上層	磁器 丸碗	10.9	7.3	4.6	-	底部 完存	灰黄色	青磁釉	青磁。高台内に小碟が付着。畳付は釉ハギ。	肥前産 1630~1640年代
1044	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 丸碗	10.5	7.5	5.0	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に笹文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀前半
1045	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 碗	-	(2.6)	6.0	-	1/5	灰白色	透明釉	内面に圏線。畳付は釉ハギ。	肥前産 1610~1630年代
1046	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 丸碗	11.6	7.3	4.8	-	1/3	白色	透明釉	外面に花文と圏線の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1650~1670年代
1047	A-1区 SD-201 上層	磁器 丸碗	12.5	7.1	5.4	-	1/3	灰白色	青磁釉	青磁。外面に陰刻による花文。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀前半~中葉
1048	A-1区 SD-201 上層	磁器 青磁染付 天目形碗	-	(3.0)	4.2	-	底部 完存	灰白色	外面は青磁釉 内面は透明釉	内面は櫛文の染付か。見込に櫛文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1640~1650年代
1049	A-1区 SD-201 上層	磁器 青磁染付 天目形碗	-	(4.5)	3.8	-	1/2	灰白色	外面と高台内 は青磁釉 内面は透明釉	見込に圏線内に草花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1640~1650年代
1050	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 碗	-	(3.6)	3.7	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に網目文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1610~1630年代
1051	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 筒形碗	-	(3.6)	5.7	-	1/4	灰白色	透明釉	外面は草花文の染付か。畳付は釉ハギ。漆継の痕跡。	肥前産 1630~1650年代
1052	A-1区 SD-201 上層	磁器 皿	-	(3.8)	4.9	-	1/2	灰白色	白磁釉 明オリープ 灰色に発色	白磁。見込に4箇所、高台に3箇所の砂目痕。	肥前産 1610~1630年代
1053	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 皿	13.4	3.6	4.5	-	1/8	灰白色	透明釉	見込に花文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1610~1630年代

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1054	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 皿か	18.4	4.8	6.2	-	1/3	灰白色	透明釉	内外面に圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1640～1650年代
1055	A-1区 SD-201 上層	磁器 大皿	-	(3.2)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。波縁皿か。内面に陰刻による文様。	肥前産 17世紀
1056	A-1区 SD-201 上層	磁器 皿	-	(2.4)	10.0	-	1/5	灰白色	白磁釉	白磁か。見込は蛇ノ目釉ハギで一部鉄釉を施釉し、波状文の陰刻。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 有田か 1640～1650年代
1057	A-1区 SD-201 上層	磁器 中皿	-	(4.0)	14.2	-	1/2	灰白色	白磁釉	白磁。高台内に2箇所目の目痕。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1058	A-1区 SD-201 上層	磁器 色絵 中皿	-	(2.6)	10.8	-	1/3	灰白色	透明釉	内外面に色絵。見込は朱・墨色の雲・草花文・圏線の上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1640～1650年代
1059	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 大皿	-	(3.5)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	折縁形。内面に染付。	肥前産 17世紀前半
1060	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 大皿	25.5	(3.9)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	折縁形。外面に圏線。内面は青海波文と風景文の染付。	肥前産 有田 1630～1650年代
1061	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 大皿	30.6	(3.7)	-	-	1/8	灰白色	透明釉	折縁形。内面に唐草文?と圏線の染付。	肥前産 有田 1630～1640年代
1062	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 大皿	40.0	(6.5)	-	-	1/6	灰白色	透明釉	折縁形。内面に染付。口縁部内面に雪輪文と圏線の染付。見込に文様と圏線の染付。	肥前産 有田 1630～1640年代
1063	A-1区 SD-201 上層	磁器 三足大皿	27.0	6.8	5.8	-	底部 完存	白色	青磁釉	青磁。口鏝。内面は丸彫と陰刻による菊花文など、脚に菊花の陰刻。畳付に「午七月…」の墨書。	肥前産 1630～1650年代
1064	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 蓋	3.3	3.0	笠径 5.8	摘径 0.9	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	円形の摘。笠部内面から底部までは無釉で回転ナデか。底部は回転糸切りか。外面に松文の染付。	肥前産 1630～1640年代
1065	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 蓋物	9.5	4.0	5.0	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に染付。口縁部内面と畳付は釉ハギで、畳付には砂付着。	肥前系 18世紀か
1066	A-1区 SD-201 上層	磁器 小杯	5.4	3.5	2.1	-	2/3	灰白色	高台付近まで 白磁釉	白磁。外面に丸彫による稿文。高台から底部は削り出しで無釉。	肥前産 1630～1650年代
1067	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付 猪口	-	(2.0)	2.3	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に染付。内面に捻子文の染付。高台内は圏線と「青雅」とみられる銘。畳付は釉ハギ。	-
1068	A-1区 SD-201 上層	磁器 台	6.4	3.9	6.8	-	1/3	灰白色	白磁釉	体部には2箇所に透かし。底面は釉ハギ。	-
1069	A-1区 SD-201 上層	磁器 染付辰砂 碗	-	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面には草花文と圏線の染付、釉裏紅による花文。内面に圏線の染付。口縁端部は虫喰い。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
1070	A-1区 SD-201 上層	青花 碗	-	(1.8)	5.3	-	1/4	灰白色	畳付を除き 透明釉	外面に圏線、見込に草花文の染付か。高台内に放射状の鈷痕。	中国産 景德鎮窯系
1071	A-1区 SD-201 上層	青花 碗	-	(1.4)	5.3	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	見込に圏線と卸目状の染付。高台から底部は無釉。	中国産 漳州窯系か
1072	A-1区 SD-201 上層	青花 碗	12.5	(3.7)	-	-	1/6	灰白色	透明釉	外面に草花文とみられる文様と圏線、内面に圏線の染付。	中国産 17世紀か
1073	A-1区 SD-201 上層	青花 皿	-	(1.2)	6.7	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に2条の圏線、見込は虫文の染付か。畳付は無釉。高台内に輪状の釉が剥げた痕跡。被熱する。	中国産か 17世紀か
1074	A-1区 SD-201 上層	青花 皿	-	(2.4)	7.1	-	1/8	灰白色	内面から高台 外面まで 透明釉	見込に染付。高台内に放射状の鈷痕。高台から底部は削り出しで無釉。	中国産 景德鎮窯系 16世 紀末～17世紀初頭
1075	A-1区 SD-201 上層	青花 皿	13.2	4.5	6.0	-	1/6	灰白色	透明釉	碁笥底。外底に2条の圏線の染付。見込に陽刻による文様。外底周縁部は無釉。	中国産 景德鎮窯系 16世 紀末～17世紀初頭

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1076	A-1区 SD-201 上層	青花 大皿	-	(3.8)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	内外面に染付。	中国産 漳州窯系 17世紀前半
1077	A-1区 SD-201 上層	五彩 大皿	-	(4.4)	-	-	一部 残存	灰白色	内面と高台内 の一部に 透明釉	内面に朱色の格子文・草花文、緑色の丸文と草文の上絵付。底部は一部無釉で砂目痕。高台は無釉。	中国産 漳州窯系 17世紀前半
1078	A-1区 SD-201 上層	五彩 大皿	36.4	(6.2)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	内面に墨・緑色の草花文と朱色の圏線の上絵付。	中国産 漳州窯系 17世紀前半
1079	A-1区 SD-201 上層	白磁 小皿	9.0	2.0	5.0	-	1/2	灰白色	白磁釉	外面と口縁部内面に丸彫による文様、見込にスタンプによる花文。高台内は砂付着。畳付は釉ハギ。	中国産 16世紀か
1080	A-1区 SD-201 上層	白磁 小壺	6.4	7.4	4.4	胴径 9.8	底部 完存	灰白色	白磁釉	軟質白磁。畳付に5箇所砂目痕。	朝鮮産 15世紀中葉～後葉
1081	A-1区 SD-201 上層	土師器 火鉢	23.8	(9.4)	-	胴径 31.0	1/6	にぶい黄 橙色 チャ ート含む	-	口縁部外面に格子状の叩目または型押の痕跡。内面はナデ、外面は削り。口縁端部に煤付着。	-
1082	A-1区 SD-201 上層	土師器 茶釜	19.4	(9.7)	-	25.8	1/4	にぶい黄 橙色 金 雲母含む	-	口縁部と鋳部は横ナデ。内外面は横方向のナデ。内面には煤付着。	-
1083	A-1区 SD-201 上層	土師器 焼塩壺	5.5	7.7	4.6	胴径 5.7	2/3	にぶい 橙色 砂粒多い	-	輪積成形。口縁部は横ナデ。外面はナデで一部平坦な面あり。内面は粗いナデで布目圧痕あり。	関西産 17世紀
1084	A-1区 SD-201 上層	土師器 焼塩壺	6.6	10.6	5.2	胴径 7.9	3/4	浅黄褐色 中粒砂を 多く含む	-	輪積成形。外面に方形枠の刻印の一部が残る。内面は粗雑なナデ、外面は摩耗するため調整不明。	関西産 17世紀
1085	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器椀	-	(2.2)	-	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面には朱で萩と扇文。	トチノキ
1086	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器椀	11.3	6.0	5.6	-	ほぼ 完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	無文。著しく歪む。	ヤマグワ
1087	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器椀	12.4	9.4	6.4	-	一部 欠損	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱の桐文と萩文。内外面とも漆が一部剥離。著しく歪む。	トチノキ
1088	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器蓋	10.6	2.1	-	摘径 5.4	1/2	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面は朱で草花文。摘内には朱の文様あり。	トチノキ
1089	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器蓋	11.6	2.9	-	摘径 5.4	1/2	-	内外面とも 赤塗	無文。歪みや亀裂あり。	ブナ属
1090	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器蓋	10.8	4.1	-	摘径 5.8	1/2	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱の文様あり。	トチノキ
1091	A-1区 SD-201 上層	木製品 漆器蓋	10.7	(3.4)	-	-	3/5	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で萩と車輪?の文様か。	トチノキ
1092	A-1区 SD-201 上層	木製品 木筒	全長 18.0	全幅 2.1	全厚 0.3	-	ほぼ 完存	-	-	片面に「壺斗(カ)」とみられる墨書。上端の隅を切り、側面には切り込み。下部は尖る。	-
1093	A-1区 SD-201 上層	木製品 木筒または切匙	全長 14.1	全幅 3.1	全厚 0.3	-	完存か	-	-	両面墨書。上端を丸く、薄く加工。	-
1094	A-1区 SD-201 上層	木製品 下駄	全長 21.0	全幅 8.2	全厚 2.8	-	ほぼ 完存	-	-	差歯下駄。露卯タイプ。長方形で右足。	-
1095	A-1区 SD-201 上層	木製品 桶蓋	全長 (135)	全幅 (128)	全厚 0.5	-	1/2 中央部 欠損	-	-	片面に「納豆 □如寺」の墨書。□は真か。中央やや上寄りに皮の持ち手が一部残存。	-
1096	A-1区 SD-201 上層	木製品 切匙	全長 20.4	全幅 2.8	全厚 0.3	-	完存	-	-	刃部は面取りし、若干薄くなる。柄端部は隅を切る。板目か。	-
1097	A-1区 SD-201 上層	木製品 栓	全長 9.7	全幅 2.1	全厚 2.1	-	ほぼ 完存	-	-	上部径2.1cm、先端径0.6cm。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1098	A-1区 SD-201 上層	木製品 栓	全長 8.2	全幅 2.6	全厚 2.6	-	一部 欠損	-	-	上部径2.6cm, 先端径0.9cm。	-
1099	A-1区 SD-201 上層	金属製品 銭貨	銭径 2.30	孔径 0.65	銭厚 0.11	重量 1.13	2/3	-	-	永樂通寶か。銅製。	初鑄造年 1408年
1100	A-1区 SD-201 下層	陶器 小碗	5.9	3.1	2.9	-	2/3	オリープ 黒色	内面から体部 外面まで 藁灰釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。被熱する。	福岡または肥前産 か 16世紀末~17 世紀初頭
1101	A-1区 SD-201 下層	陶器 碗	-	(2.1)	3.6	-	1/4	灰白色	内面から外面 体部下半まで 長石釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。	美濃 志野焼 17世紀前葉か
1102	A-1区 SD-201 下層	陶器 波縁皿	15.9	(3.8)	-	-	1/3	灰白色	内面から外面 体部下半まで 透明釉	絵唐津。内面に鉄錆による文様。 高台付近は削りで無釉。	肥前産 1590~1610年代
1103	A-1区 SD-201 下層	陶器 皿	10.9	(2.5)	-	-	1/3	にぶい 黄橙色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込の1箇所 に胎土目痕。高台付近は削り で無釉。	肥前産 1590~1610年代
1104	A-1区 SD-201 下層	陶器 中皿	22.9	5.8	10.4	-	1/3	灰褐色	内面は灰釉で一 部緑釉 外面は 体部まで鉄釉	二彩手。内面は白化粧土を刷毛塗 り。体部下半は削り出して無 釉。	肥前産 武雄 17世紀中葉~後半
1105	A-1区 SD-201 下層	陶器 向付	-	(4.4)	9.5	-	2/3	灰黄色	長石釉	底部には脚が2箇所。口縁部の2箇 所に透かし。底部に砂目痕。内 面に錆。漆継の痕跡。	美濃 志野焼 16世紀末~17世紀 初頭
1106	A-1区 SD-201 下層	陶器 向付	16.2	5.0	9.5	-	1/3	黄灰色	長石釉	口縁部は波縁状で透かしあり。底 部には脚が1箇所, 砂目痕が1箇 所に残る。内面に錆。	美濃 志野焼 16世紀末~17世紀 初頭
1107	A-1区 SD-201 下層	陶器 向付	16.6	(3.3)	-	-	1/4	灰白色	長石釉	口縁部は波縁状でハート形の透 かしあり。内面に錆。	美濃 志野焼 16世紀末~17世紀 初頭
1108	A-1区 SD-201 下層	陶器 向付	-	3.4	-	-	一部 残存	灰白色	内面から脚部 中位まで 長石釉	角形の底部に円形の脚を貼付。内 面に染付。	志野織部か
1109	A-1区 SD-201 下層	陶器 小鉢	9.7	4.7	4.6	-	1/8	灰色	-	焼締。口縁部は片口。内面から体 部下までは回転ナデ。底部付近 から底部は回転削り。	備前系か
1110	A-1区 SD-201 下層	磁器 染付 碗	-	(4.5)	4.7	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に花文と圏線の染付。高台内 に方形枠に銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 1640~1650年代
1111	A-1区 SD-201 下層	磁器 染付 皿	13.7	3.4	5.4	-	底部 完存	灰白色	透明釉	内面に扇文の染付。畳付は釉ハギ で砂付着。	肥前産 1610~1630年代
1112	A-1区 SD-201 下層	磁器 小杯	-	(3.1)	2.1	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで 白磁釉	白磁。外面に丸彫による縞文。高 台から底部は削り出し。畳付と高 台内は無釉。	肥前産 1630~1660年代
1113	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 皿	10.5	3.6	6.0	-	1/2	にぶい 橙色	-	体部は回転ナデ, 見込はナデ。底 部は回転糸切り。灯明皿として使 用。口縁部内外面に煤付着。	-
1114	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 皿	10.8	3.4	6.3	-	ほぼ 完存	橙色	-	回転ナデのち見込はナデ。底部は 回転糸切りで板状圧痕残る。口縁 部内外面に煤付着。	-
1115	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 皿	11.0	3.5	6.7	-	3/4	にぶい 橙色	-	内外面は回転ナデのち見込はナ デ。底部は回転糸切りのち板状圧 痕。内外面にわずかに煤付着。	-
1116	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 皿	12.5	3.7	8.2	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	体部は回転ナデのち見込はナデ。 底部は回転糸切り。灯明皿として 使用。内外面に煤付着。	-
1117	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 皿	-	(1.1)	6.0	-	3/4	にぶい 橙色	-	外面は摩耗のため不明。内面は回 転ナデで, 部分的に金箔が残る。 底部に径6mmの円孔。	-
1118	A-1区 SD-201 下層	土師質 土器 小皿	9.6	2.6	4.7	-	2/3	にぶい 黄橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。	-
1119	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器 椀	-	(4.5)	-	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で丸に花文が5箇所あ り。	トチノキ

遺物観察表16 A-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1120	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	12.9	4.6	6.0	-	1/2	-	外面は黒塗 内面は赤塗	亀裂あり。	ヤマグワ
1121	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	11.3	4.0	5.9	-	1/2	-	内外面とも黒 塗の上に赤塗	大部分の赤塗は剥げ、黒塗が見え ている。見込に黒色の付着物がみ られる。	トチノキ
1122	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	11.4	(5.8)	-	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で花文。高台内に星形の 刻書あり。	カツラ
1123	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	-	(5.2)	-	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	高台内に「×」の刻書。	トチノキ
1124	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	10.7	3.8	5.8	-	4/5	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で花文。	トチノキ
1125	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	12.0	(5.0)	-	-	1/4	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で紅葉文。	ブナ属
1126	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	-	(5.7)	6.0	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	大きく歪む。	トチノキ
1127	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	-	(7.3)	(6.0)	-	体部 完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	高台内の扱りは浅い。漆の残存状 況が悪く、大きく歪む。外面に朱 の紅葉文。	17～18世紀前半 トチノキ
1128	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	13.4	7.1	6.6	-	2/3	-	内外面とも 黒塗	高台内の扱りが浅い。見込に黒色 の付着物あり。	17～18世紀前半 ケヤキ
1129	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器椀	12.7	9.1	5.6	-	1/4	-	内外面とも 黒塗	厚みがあり、特に底部が厚い。大 振りが高台が高く、高台内の扱 りが浅い。一部変形する。	17～18世紀前半
1130	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器皿	-	(1.6)	9.3	-	底部 完存	-	内外面とも 赤塗 高台内は黒塗	高台内に「I」の刻書。	ケヤキ
1131	A-1区 SD-201 下層	木製品 匙	全長 (8.1)	全幅 3.8	全厚 0.7	-	柄部 欠損	-	-	一木造り。匙部は緩いカーブ。	-
1132	A-1区 SD-201 下層	木製品 木筒	全長 (137)	全幅 2.2	全厚 0.5	-	一部 欠損	-	-	下部の片面は斜めに薄く加工。二 次加工品か。片面に「□□五斗入 □」の墨書。	-
1133	A-1区 SD-201 下層	木製品 木筒	全長 17.5	全幅 3.1	全厚 0.4	-	完存	-	-	両面墨書。下部先端は細く加工。 表「代□(物カ)つけ…」裏「志保 三斗入代□□□」の墨書。	-
1134	A-1区 SD-201 下層	木製品 木筒	全長 (145)	全幅 3.1	全厚 0.5	-	2/3	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 裏「□□(しほカ)九斗□(入カ)」 の墨書。	-
1135	A-1区 SD-201 下層	木製品 木筒	全長 (191)	全幅 (2.2)	全厚 0.5	-	2/3	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く加工。表「斗米(カ)」 裏「式斗三升入」の墨書。	-
1136	A-1区 SD-201 下層	木製品 木筒	全長 22.9	全幅 2.7	全厚 0.5	-	完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く仕上げる。表は一部表 面剥離。表「う□」の墨書。	-
1137	A-1区 SD-201 下層	木製品 下駄	全長 12.9	全幅 7.0	全厚 1.8	-	完存	-	-	連歯下駄。小型。楕円形。上面に 「小」の刻書。子供用。板目。	-
1138	A-1区 SD-201 下層	木製品 切匙	全長 (15.6)	全幅 3.2	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	刃部は薄く加工していない。板 目。	-
1139	A-1区 SD-201 下層	木製品 剝物	全長 (146)	全幅 (8.5)	全厚 3.0	-	1/2	-	-	一木造り。皿状で口縁部は真っ直 ぐ立ち上がる。底は反り、上げ底 状。	-
1140	A-1区 SD-201 下層	木製品 漆器櫛	全長 4.5	全幅 (8.6)	全厚 1.2	-	一部 欠損	-	黒塗	蒲鋒形。先端を細く加工。歯間が 粗く、解櫛か。	-
1141	A-1区 SD-201 下層	木製品 将棋駒	全長 3.0	全幅 2.9	全厚 1.0	-	完存	-	-	両面墨書あり。表は「銀」か。裏は 「□」。古将棋の表「銀将」、裏「銀将 成」か。	江戸時代前期か カヤ



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1142	A-1区 SD-202	陶器 皿	10.6	3.2	3.6	-	1/3	にぶい 黄橙色	内面から体部 まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込の2箇所 に胎土目痕。体部は回転ナデ、 体部下半から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
1143	A-1区 SD-202	土師器 焼塩壺	6.6	9.7	6.2	胴径 7.8	1/2	橙色 砂粒多く 含む	-	輪積成形。外面から底部はナデ か。外面に刻印。口縁部は横ナデ。 内面は粗雑なナデ。摩耗する。	関西産 17世紀
1144	A-1区 SD-203	陶器 向付	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	口縁部内面から 外面は美濃釉 内面は透明釉か	青織部。脚部剥離。内面は摩耗の ため不明瞭。	美濃産 17世紀前葉か
1145	A-1区 SD-203	陶器 壺	14.9	(2.6)	-	-	1/5	黄灰色	-	受口状。全面に回転ナデ。	備前焼
1146	A-1区 SD-203	軟質施釉 陶器 稜花皿	-	(2.1)	-	-	一部 残存	浅黄色	内面は透明釉 口縁端部は 緑釉	円形とみられる透かしあり。外面 下部は回転ナデで無釉か。掛け分 け。摩耗のため不明瞭。	初期京焼または 関西か
1147	A-1区 SD-204	木製品 漆器 椀	(14.1)	10.1	6.2	-	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	著しく歪む。	ブナ属
1148	A-1区 SD-204	木製品 漆器 調度品か	全長 (10.8)	全幅 (8.2)	全厚 0.8	-	一部 残存	-	外面は赤塗 内面は黒塗	外面には黒の菊花文。	クルミ属
1149	A-1区 SD-205	陶器 皿	-	(2.9)	6.4	-	1/4	橙色	内面から体部 まで灰釉	絵唐津。見込は鉄錆による文様。 胎土目痕。外面体部下は回転ナ デ。底部付近は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
1150	A-1区 SD-205	磁器 杯	8.6	5.5	3.7	-	1/2	白色	白磁釉	白磁。型打成形。内面は型押によ る陽刻の亀と宝文。畳付は釉ハ ギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 初頭
1151	A-1区 SG-201 上層	陶器 皿	-	(2.2)	3.7	-	底部 完存	明褐色	外面は無釉 内面は灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。 外面高台付近は回転ナデ。高台付 近から底部は削り出し。	肥前産 1610～1630年代
1152	A-1区 SG-201 上層	陶器 向付	-	(2.6)	11.0	-	1/6	灰白色	長石釉	見込に鉄錆による文様。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1153	A-1区 SG-201 上層	陶器 甕	13.0	(4.0)	-	-	1/6	黄灰色	-	焼締。全面に回転ナデ。頸部外面 に印刻による三巴文、肩部に陰刻 による斜線文。	-
1154	A-1区 SG-201 上層	磁器 染付 小丸碗	7.7	4.5	3.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に雨降文と圏線の染付。畳付 は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀前半
1155	A-1区 SG-201 上層	磁器 染付 丸碗	11.0	6.7	4.4	-	1/3	白色	透明釉	外面に圏線と染付。畳付は釉ハギ で砂付着。見込に付着物。	肥前産 17世紀中葉
1156	A-1区 SG-201 上層	磁器 染付 丸碗	9.6	7.3	4.4	-	4/5	灰白色	透明釉	外面に風景・松・蝶文・圏線の染 付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 17世紀
1157	A-1区 SG-201 上層	磁器 大皿か	-	(4.3)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。内面に陰刻による算木文。 高台内は蛇ノ目釉ハギ後錆釉。	肥前産 1650～1660年代
1158	A-1区 SG-201 上層	青花か 皿か	-	(4.5)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	口錆。外面に圏線と不明文様の染 付。内面に櫛歯文・蓮弁文・圏線 の染付。	中国産か 景德鎮窯系か 17世紀か
1159	A-1区 SG-201 上層	須恵器 杯	11.1	(3.9)	-	受皿 部 13.4	1/5	暗青灰色	-	内面から受部まで回転ナデ。外面 は回転削りか。	古墳時代
1160	A-1区 SG-201 上層	須恵器 壺	-	(5.6)	8.8	-	1/4	灰色	内面底に 自然釉	高台を貼付。回転ナデ後、外面体 部下半を回転削り、高台は横ナ デ、底部外面はナデ。	古代
1161	A-1区 SG-201 上層	木製品 鍬か	全長 (35.4)	全幅 7.5	全厚 1.6	-	一部 欠損	-	-	扁平で、先端は隅丸方形。柃目か。	-
1162	A-1区 SG-201 上層	金属製品 銭貨	錢径 2.30	孔径 0.70	錢厚 0.13	重量 2.36	完存	-	-	洪武通寶。銅製。	初製造年 1368年
1163	A-1区 SX-201 上層	陶器 皿	-	(2.9)	7.7	-	1/5	赤色	内面は緑釉と 透明釉	二彩手。外面は無釉で、高台付近 は回転ナデ、底部は削り出し。内 面は白化粧土と緑釉を刷毛塗り。	肥前産 武雄系 17世紀中葉



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1164	A-1区 SX-201 上層	陶器 大皿	29.2	(4.9)	-	-	一部 残存	灰白色	内外面に 銅緑釉	折縁形。	肥前産 17世紀後半頃
1165	A-1区 SX-201 上層	陶器 向付	-	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	長石釉	方形か。外面に鉄錆による格子 文、口縁端部に直線文。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1166	A-1区 SX-201 上層	陶器 鉢	-	(3.3)	14.0	-	1/6	橙色	内面は鉄釉 外面の一部に 鉄釉が流れる	内外面とも回転ナデ。底部は無調 整。被熱する。	肥前産 16世紀末～17世紀 初頭
1167	A-1区 SX-201 上層	陶器 播鉢	28.0	(5.0)	-	-	1/6	赤褐色	-	焼締。全面に回転ナデ。播目なし。 摩耗する。	備前焼 17世紀初頭
1168	A-1区 SX-201 上層	陶器 播鉢	31.4	(8.2)	-	-	1/8	灰白色	透明釉	焼締。全面に回転ナデ。口縁部外 面は2条の凹線で刻印あり。内面 に13条単位の播目。	備前焼 17世紀中葉
1169	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 碗	10.0	(4.0)	-	-	1/8	灰白色	透明釉	外面に圈線と二重方形枠に「福」 字の染付。内面は無文。	肥前産 1610～1630年代
1170	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 碗	11.5	7.4	5.1	-	1/6	灰白色	透明釉	外面に丸彫による篇文。口縁部外 面は染付、内面に2条の圈線。畳付 は釉ハギで砂付着。漆継。	肥前産 1610～1630年代
1171	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 皿	-	(1.3)	4.2	-	1/5	白色	透明釉	蛇ノ目高台。見込に蝶文。底部は 削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
1172	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 小皿	8.7	1.9	4.3	-	1/3	白色	透明釉	型打成形か。内面に篇文。口縁部 内面に渦巻文、見込に草花文の染 付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1620～1630年代
1173	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 皿	13.8	(2.0)	-	-	一部 残存	白色	透明釉	外面は1条の圈線の染付、内面に 圈線と葡萄文の染付か。	肥前産 17世紀前半
1174	A-1区 SX-201 上層	磁器 染付 大皿	-	(4.7)	13.7	-	1/8	灰白色	透明釉	内面に草花文の染付。底部と畳付 に砂付着。	肥前産 1610～1630年代
1175	A-1区 SX-201 上層	青花 碗	-	(1.4)	5.0	-	1/2	白色	透明釉	底部は饅頭心で、見込に染付あ り。高台内に放射状の鈎痕。畳付 は無釉。	中国産 景德鎮窯 系 16世紀後半～ 17世紀初頭
1176	A-1区 SX-201 上層	五彩 皿	21.9	(3.4)	-	-	1/8	灰色	透明釉	内面に朱・緑色の草花文の上絵 付。色絵は大半が色落ちする。	中国産 漳州窯系か
1177	A-1区 SX-201 上層	土師質 土器 杯	9.5	2.5	5.2	-	2/3	にぶい 橙色	-	全面に回転ナデ。底部は回転糸切 り。	-
1178	A-1区 SX-201 上層	土師器 焼塩壺	5.8	9.0	4.5	胴径 6.6	1/2	にぶい 黄橙色	-	輪積成形。内面と底部はナデ、口 縁部は横ナデ。外面は横方向のナ デ。底部に焼成後の穿孔。	関西産 17世紀
1179	A-1区 SX-201 上層	瓦 丸瓦	全長 26.5	筒部 幅 13.5	全高 6.9	-	4/5	灰白色	-	凸面はナデ、凹面にコビキBの痕 跡。	-
1180	A-1区 SX-201 中層	磁器 染付 皿	12.8	(3.3)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は無文。内面は帯線・圈線で 文様は不明。断面に漆継の痕跡。	肥前産 1610～1630年代
1181	A-1区 SX-201 下層	陶器 天目碗	11.7	(5.8)	-	-	1/4	灰白色	内面から高台 付近まで鉄釉	高台付近は回転削りで無釉。	美濃産 16世紀末
1182	A-1区 SX-201 下層	陶胎染付 碗	10.8	5.3	4.7	-	4/5	灰色	灰釉	朝顔形。外面に梅文の染付。畳付 は釉ハギ。	肥前産か 18世紀か
1183	A-1区 SX-201 下層	陶胎染付 碗	-	(3.1)	5.8	-	1/3	黄灰色	透明釉	筒形。外面に山水文の染付。畳付 は釉ハギ。体部外面から高台内ま で全面に煤付着。	肥前産 1610～1630年代
1184	A-1区 SX-201 下層	陶器 丸皿	12.0	(2.1)	-	-	1/5	灰白色	長石釉	-	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1185	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	14.2	(3.1)	-	-	1/6	灰白色	灰釉	口縁部が直立する。	肥前産 17世紀

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1186	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	15.9	(2.3)	-	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	鉄釉	器壁が薄く、口縁部は体部より屈曲して立ち上がる。	-
1187	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	-	(3.8)	4.6	-	1/3	灰黄色	灰釉	見込に砂目痕。高台から底部は削り出しで無釉。砂付着。	肥前産 1610～1630年代
1188	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	11.5	3.4	3.8	-	1/2	灰黄色	内面から口縁部外面まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と高台内に砂目痕。回転ナデのち底部は回転削り。口縁部に煤付着。	肥前産 17世紀前半
1189	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	12.7	3.4	7.4	-	1/5	灰白色	灰釉	輪花皿風で高台は断面三角形。高台内は輪状に釉が禿げる。重ね焼痕か。	瀬戸・美濃産か 17世紀か
1190	A-1区 SX-201 下層	軟質施釉 陶器 色絵皿	16.3	6.1	6.8	-	1/2	淡黄色	透明釉	口縁部は輪花状で、半円形の孔。外面に朱色の文様と「神」、内面は朱色の笹文と緑・黄色の上絵付。	初期京焼 17世紀初頭
1191	A-1区 SX-201 下層	陶器 皿	-	(3.6)	7.3	-	1/2	灰白色	内面は鉄釉 外面は無釉	回転ナデと高台付近から底部は削り出し。見込に砂目痕。兎巾が残る。	肥前産 1610～1630年代
1192	A-1区 SX-201 下層	陶器 大皿	-	(4.5)	9.8	-	1/3	橙色	内面から高台内まで被熱のため釉が白色	二彩手。見込に3箇所が目痕。見込に銅緑釉による文様。畳付は釉ハギ。	肥前産 武雄系 17世紀中葉
1193	A-1区 SX-201 下層	陶器 大皿	34.8	(3.3)	-	-	一部 残存	黄灰色	灰釉	絵唐津。内面に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
1194	A-1区 SX-201 下層	陶器 向付	-	(2.8)	(3.3)	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	外面に透明釉	型成形で内面に布目痕。口縁部は方形、高台は円形。外面に鉄錆と白化粧土による文様。	美濃 織部焼
1195	A-1区 SX-201 下層	陶器 鉢	-	(4.7)	7.4	-	1/2	黄灰色	内面から高台付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近から底部は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
1196	A-1区 SX-201 下層	陶器 播鉢	32.2	(7.0)	-	-	1/6	灰白色	-	焼締。全面に横方向のナデ。外面には指頭圧痕、内面に4条単位の播目。	丹波焼か 17世紀前葉～中葉
1197	A-1区 SX-201 下層	陶器 灰吹	12.2	(6.8)	-	胴径 17.1	1/5	褐灰色	外面は 自然釉か	焼締。回転ナデ。口縁端部には細かい割れが多数入る。	-
1198	A-1区 SX-201 下層	磁器 染付 小碗	7.9	(3.1)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に圏線と網目文の染付か。	肥前産 17世紀
1199	A-1区 SX-201 下層	磁器 染付 菊皿	14.4	3.6	6.1	-	1/4	灰白色	透明釉	型打成形。口縁部内面に型による陰刻の縞文。見込に染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1610～1630年代
1200	A-1区 SX-201 下層	磁器 染付 皿	-	(2.1)	-	-	一部 欠損	灰白色	透明釉	内外面に圏線と唐草文の染付。	肥前産 17世紀
1201	A-1区 SX-201 下層	磁器 染付 中皿	-	(2.9)	7.7	-	1/6	白色	透明釉 外面は釉が斑	見込に風景文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1630～1640年代
1202	A-1区 SX-201 下層	青花か 碗	10.6	(2.9)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に圏線と不明の文様の染付。	中国産
1203	A-1区 SX-201 下層	土師質 土器 杯	9.8	3.0	5.6	-	1/3	にぶい 黄色	-	灯明皿として使用。内外面は回転ナデで、全面に煤付着。底部は摩耗のため不明。	-
1204	A-1区 SX-201 下層	土師質 土器 皿	11.8	2.3	5.2	-	1/2	にぶい 橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部と見込に煤付着。	-
1205	A-1区 SX-201 下層	土師質 土器 皿	-	(1.6)	7.7	-	1/2	橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
1206	A-1区 SX-201 下層	土師質 土器 皿	9.3	2.3	4.8	-	2/3	浅黄橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
1207	A-1区 SX-201 下層	土師器 焼塩壺蓋	6.8	1.6	天井 径 5.4	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	口縁部内外面は横ナデ。天井部内面はナデ。天井部外面は摩耗のため不明。	関西産 17世紀

遺物観察表20 A-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1208	A-1区 SX-201 下層	木製品 漆器 椀	11.3	4.1	5.2	-	ほぼ 完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱で丸に桐文が3箇所にあ り。	トチノキ
1209	A-1区 SX-201 下層	木製品 漆器 合子蓋	7.4	1.6	天井 径 7.2	-	3/4	-	外面は赤塗 内面は黒塗	円筒形。木地は木目が非常に細か く密。漆膜は薄い。	ヒサカキ属
1210	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 (6.5)	全幅 2.0	全厚 0.2	-	1/3	-	-	両面墨書。短冊形。墨書は薄く解 読不可。	-
1211	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 (7.6)	全幅 1.8	全厚 0.2	-	完存か	-	-	両面墨書。短冊形。上端両隅を切 る。表「又左衛門口(分カ)」、裏「上 米三斗入」。	-
1212	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 (12.7)	全幅 2.9	全厚 0.3	-	2/3	-	-	両面墨書。短冊形。表「九兵衛殿 分」、裏「升(カ)二(カ)ツ」。	-
1213	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 17.2	全幅 2.5	全厚 0.6	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。短冊形。裏面は一部剥 離。表「土佐百々出雲の壺」。	-
1214	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 22.8	全幅 2.4	全厚 0.6	-	2/3	-	-	片面墨書。上部側面に切り込みあ り。若干反りあり。墨書は薄く解 読不可。	-
1215	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒	全長 (7.8)	全幅 2.1	全厚 0.3	-	1/2	-	-	両面墨書。上端隅を切り、上部に 切り込み、下部は細く加工。表は 不明、裏「上米三斗入」。	-
1216	A-1区 SX-201 下層	木製品 木筒 未製品か	全長 (11.7)	全幅 2.5	全厚 1.2	-	一部 欠損	-	-	上部側面に切り込み。下部は細 く、薄く加工。厚く粗野な作り。墨 書なし。木筒未成品か。柾目。	-
1217	A-1区 SX-201 下層	木製品 下駄	全長 13.0	全幅 7.4	全厚 2.5	-	完存	-	-	連歯下駄。長方形。径6mmの孔が3 箇所あり。子供用。	-
1218	A-1区 SX-201 下層	木製品 下駄	全長 17.2	全幅 9.1	全厚 2.2	-	ほぼ 完存	-	-	連歯下駄。長方形。歯は著しく擦 り減る。径5mmの円孔が3箇所あ り。板目。	-
1219	A-1区 SX-201 下層	金属製品 刀子	全長 15.8	全幅 1.8	全厚 0.6	重量 15.0	完存	-	-	刃部7.8cm、柄部7.9cm。刃部は鉄製 で先端は鋭く尖る。柄部は木製で 断面方形。	-
1220	A-1区 SX-201 下層	金属製品 毛抜き	全長 8.0	全幅 2.1	全厚 1.1	重量 11.2	完存	-	-	銅製品か。柄内側は平らで外側は 3面あり。先端部は平らで、幅1.1 cm、厚さ0.1cm。	-
1221	A-1区 SX-201 下層	金属製品 釣針	全長 2.5	全幅 0.5	全厚 0.1	重量 0.52	完存	-	-	銅製品。全面錆化。上部は平たく、 径3mmの円孔。先端は細く、鉤状に 曲がる。	-
1222	A-1区 SX-202	磁器 染付 鉢	23.7	(9.6)	-	-	3/5	白色	透明釉	菊花形。外面に草花文と雲文・圏 線、内面に草花文と圏線の染付。	肥前産 有田 17世紀末～18世紀 初頭
1223	A-1区 SX-203	軟質施釉 陶器 波縁皿	16.0	4.4	7.2	-	1/2	灰白色	透明釉	内面に緑釉と褐釉と鉄錆による 草花文。畳付は釉ハギ。	初期京焼 17世紀初頭
1224	A-1区 SX-203	陶器 向付	-	7.5	-	残存 幅 (10.2)	1/3	黄灰色	脚端部を除き 長石釉 大き な貫入が入る	隅丸方形。側面に鉄錆による文様 と円形浮文を2個づつ貼付。楕円 形の脚を貼付。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1225	A-1区 SX-203	陶器 建水	33.4	(3.8)	-	-	一部 残存	褐灰色	-	焼締。全面に回転ナデ。	備前焼
1226	A-1区 SX-203	陶器 播鉢	32.8	13.3	15.2	-	1/6	灰白色	-	焼締。口縁部は片口状で外面に凹 線2条。回転ナデ。底部外面は無調 整。内面に10条単位の播目。	備前焼 16世紀末
1227	A-1区 SX-203	磁器 染付 皿	14.5	3.1	5.9	-	3/4	灰白色	透明釉	内面に菊花と圏線の染付。畳付は 釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産 17世紀中葉
1228	A-1区 SX-203	磁器 染付 菊皿	-	(2.4)	8.2	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に圏線、内面に土坡に鳥と雲 文、高台内に圏線と「福」字の染 付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 有田 1660～1670年代
1229	A-1区 SX-203	土師器 フイゴの 羽口	全長 (7.5)	径 (9.2)	孔径 2.3	-	一部 残存	橙色	-	円筒形。外面はナデ。先端に鉄滓 が付着。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1230	A-1区 SX-206	五彩 小碗	-	(2.2)	4.2	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に朱色の圏線。見込に朱・ 緑?色の圏線と草花文の上絵付。 畳付は釉ハギ。	中国産 景德鎮窯系 16世 紀前半~中葉
1231	A-1区 P-201	土師器 焼塩壺	-	(8.3)	5.0	胴径 6.7	ほぼ 完存	にぶい橙 色 長石な どを含む	-	輪積成形。内面は粗いナデ。口縁 部は横ナデ。外面はナデで、指頭 圧痕が残る。著しく摩耗。	関西産 17世紀
1232	A-1区 P-202	磁器 染付碗	10.1	(6.2)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	外面に渦文と草文の染付。	肥前産 1610~1630年代
1233	A-1区 P-203	陶器 皿	-	(3.0)	7.0	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	内面は透明釉 で一部緑釉	二彩手。内面は白化粧土を刷毛塗 り。見込に砂目痕。外面は一部白 化粧土が流れ、底部は削り出し。	肥前産 武雄 17世紀後半
1234	A-1区 P-204	陶器 小皿	12.5	3.7	4.8	-	1/3	にぶい 黄橙色	外面は高台付 近まで透明釉 内面は銅緑釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。見込は蛇ノ目釉ハギで砂目 痕あり。	肥前産 内野山窯 18世紀前半
1235	A-1区 SK-301	磁器 染付 小碗	9.2	5.1	3.7	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	口縁部外面に雨降文の染付。畳付 は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
1236	A-1区 SK-301	磁器 染付猪口	9.7	7.2	5.7	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	桶形。外面にはコンニャク印判に よる鶴・松文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
1237	A-1区 SK-302	磁器 染付 小丸碗	7.6	4.3	3.0	-	2/3	灰白色	透明釉	口縁部外面に雨降文の染付。内面 は無文。施釉は斑があり、高台の 一部は露胎する。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
1238	A-1区 SK-302	磁器 染付 杯	7.7	5.3	3.4	-	3/4	白色	透明釉	端反形。外面に梅文と圏線の染 付。内面は無文。畳付は釉ハギで 砂付着。	肥前産 17世紀第 4 四半期~18世紀 第1 四半期
1239	A-1区 SK-303	磁器 染付 小碗	6.7	4.7	3.0	-	2/3	白色	透明釉	外面に菊弁状の染付。畳付は釉ハ ギでわずかに砂付着。	肥前産 1630~1650年代
1240	A-1区 SD-301	陶器 皿	-	(2.0)	4.7	-	底部 完存	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に4箇所の 胎土目痕。高台付近から底部は削 り出して無釉。	肥前系 1590~1610年代
1241	A-1区 SD-301	陶器 皿	-	(4.0)	6.9	-	底部 完存	にぶい 褐色	内面から高台 まで灰釉	見込に陰刻による文様。高台から 底部は削り出して無釉。被熱し釉 に光沢なし。	肥前産 17世紀後半
1242	A-1区 SD-301	陶器 中皿	20.8	6.8	7.7	-	底部 完存	灰白色	灰釉	見込に5箇所の砂目痕。畳付は釉 ハギ。	肥前産 内野山窯か 17世紀前半
1243	A-1区 SD-301	陶器 鉢	29.2	(7.5)	-	-	1/8	にぶい 黄橙色	外面体部下 半まで灰釉	体部下半は削り出して無釉。	肥前産
1244	A-1区 SD-301	陶器 鉢	-	(7.0)	-	-	一部 残存	灰褐色	外面は体部ま で鉄釉 内面は 褐釉と銅緑釉	折縁形。二彩手。内面は白化粧土 による波状の刷毛目文。外面体部 下半は回転ナデで無釉。	肥前産 武雄 18世紀
1245	A-1区 SD-301	陶器 播鉢	22.0	(6.8)	-	-	1/8	灰白色	-	焼締。全面に回転ナデ。口縁部は 片口状。内面の播目は10条単位。	備前焼か 17世紀か
1246	A-1区 SD-301	陶器 四耳壺	9.2	(25.1)	-	胴径 26.0	2/3	灰白色	口縁部内面は 鉄釉 外面下半 は灰釉と鉄釉	口縁部は玉縁状。肩部に2条の凹 線が巡り、紐状の耳を貼付。頸部 内面は回転ナデで無釉。	瀬戸・美濃産または 信楽焼か
1247	A-1区 SD-301	磁器 染付 小丸碗	10.0	(5.1)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付。	肥前産 18世紀前半
1248	A-1区 SD-301	磁器 色絵 小碗	-	(1.6)	4.0	-	1/4	灰白色	透明釉	内外面に緑色の上絵付。高台内に 圏線と銘の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀か
1249	A-1区 SD-301	磁器 染付 皿	14.1	4.1	8.5	-	1/2	白色	透明釉	口鏝。外面に唐草文と圏線、内面 に花唐草文、見込に五弁花文、高 台内に圏線と銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1670~1690年代
1250	A-1区 SD-301	青花 碗	-	(2.6)	4.4	-	3/4	白色	透明釉	外面に不明文様と圏線の染付。高 台内に圏線と「大明成化年製」銘。 畳付は無釉。	中国産
1251	A-1区 SD-301	青花 皿	-	(1.6)	4.2	-	一部 残存	白色	畳付を除き 透明釉	外面に圏線、見込に団龍文の染 付。	中国産 景德鎮窯系

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1252	A-1区 SD-301	土師器 火鉢	-	(5.8)	-	-	一部 残存	灰黄色 金雲母を 含む	-	回転ナデ。外面に沈線と印花文。	-
1253	A-1区 SD-301	木製品 木筒	全長 (9.4)	全幅 (2.0)	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。短冊形。「文(カ)文 (カ)」の墨書。	-
1254	A-1区 SD-301	木製品 下駄	全長 22.6	全幅 9.8	全厚 3.0	-	完存	-	-	連齒下駄。長方形。径1cmの孔が3 箇所あり。裏面に「へ」の刻印。指 の部分が摩耗する。	-
1255	A-1区 SD-301	木製品 箱物	全長 8.5	全幅 8.4	全厚 2.5	-	ほぼ 完存	-	-	桁状。底板に木釘で側板を留め る。底板に木釘6箇所か。	-
1256	A-1区 SX-301	陶器 火入	-	(6.2)	5.6	(108)	底部 完存	にぶい 赤褐色	外面は透明釉	外面は白化粧土を刷毛塗り。回転 ナデ後高台付近から底部は削り 出し。内面と底部外面は無釉。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
1257	A-1区 SX-301	陶器 鉢	-	(9.8)	13.0	-	1/3	赤褐色	外面下部は鉄 釉 口縁部内面 は緑釉と褐釉	二彩手。内面は櫛描文と白化粧土 による文様。体部外面は回転ナデ と回転削り。底部は無釉。	肥前産 武雄 18世紀か
1258	A-1区 SX-301	陶器 甕	31.0	(199)	-	胴径 35.7	-	にぶい 赤褐色	外面に鉄釉	回転ナデで、内面に格子状の叩目 が残る。口縁端部に浅い沈線が2 条、体部外面には沈線と波状文。	肥前産 17世紀後半
1259	A-1区 SX-301	土師器 焼塩壺蓋	6.9	1.7	天井 径 5.6	-	5/6	浅黄橙色 砂粒多く 含む	-	全面にナデまたは横ナデ。摩耗の ため調整不明。	関西産 17世紀
1260	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 12.3	全幅 2.1	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。若干の反りあり。「衣笠 村弥右衛門カタ(殿カ)」の墨書。	-
1261	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 (15.9)	全幅 3.1	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。短冊形。表「秋沢…」、裏 「小豆□□(代カ)」の墨書。	-
1262	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 19.8	全幅 4.5	全厚 0.5	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形。若干反る。判読 不可。	-
1263	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 (11.2)	全幅 2.2	全厚 0.4	-	2/3	-	-	両面墨書。短冊形。上部に径2mmの 孔。表「□(岩カ楠カ)目六左衛門 殿…」、裏「大豆(カ)三斗」の墨書。	-
1264	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 (12.8)	全幅 2.4	全厚 0.4	-	4/5	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 表「□(御カ)□□」、裏は「□(カ) □(カ)□(カ)」の墨書。	-
1265	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 22.9	全幅 3.1	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上端隅を切り、上部側 面に切り込み。表「□目六左衛門 殿」、裏「かき七十□入」の墨書。	-
1266	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 (15.7)	全幅 4.1	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。短冊形で上部に孔。上 部側面に切り込み。薄く反る。表 「山内蔵人内 倉田…」の墨書。	-
1267	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 10.8	全幅 2.6	全厚 0.3	-	完存	-	-	薄いが両面墨書。上部側面に切り 込み。下部は尖る。柁目。墨書は薄 いため解読は不可。	-
1268	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 12.5	全幅 2.2	全厚 0.4	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は尖る。表「布師田村」、裏「武 左衛門」の墨書。	-
1269	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 14.9	全幅 2.5	全厚 0.3	-	完存	-	-	片面墨書。上端は丸く加工。上部側 面に切り込み。下部は尖る。若干の 反りあり。「□□村出」の墨書。	-
1270	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 14.3	全幅 (3.3)	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 先端は尖る。表「□□村十助」、裏 「□(大カ)豆四斗入」の墨書。	-
1271	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 15.4	全幅 2.1	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面のみ墨書か。下部は尖り、薄 い。解読不可。	-
1272	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 22.2	全幅 6.8	全厚 1.1	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。短冊形。表「大原権(カ) 左(カ)衛門」の他、名前の列記か、裏 「…なへせき四□(斗カ)」の墨書。	-
1273	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 24.2	全幅 6.6	全厚 1.1	-	完存	-	-	片面墨書。短冊形。上部に径3mmの 孔。柁目。「□□(物カ)□□入」の 墨書。	-



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1274	A-1区 SX-301	木製品 木筒	全長 24.0	全幅 7.5	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。短冊形。四隅を丸く加工。「藏人様沓通 書状沓通 宝永四年 亥四月廿九日」の墨書。	-
1275	A-1区 SX-301	木製品 箱物	全長 23.9	全幅 7.4	全厚 0.4	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形。反りあり。10箇所に木釘。表「かみそ里入」の墨書。裏面には2箇所に花押。	-
1276	A-1区 SX-301	木製品 下駄	全長 24.5	全幅 8.3	全厚 3.3	-	完存	-	-	中折下駄。6箇所に2個単位の円孔あり。4箇所の円孔は裏面と側面へ貫通する。2箇所は貫通しない。	-
1277	A-1区 SX-301	木製品 蓋	全長 8.5	全幅 8.4	全厚 0.5	-	完存	-	-	若干湾曲。表面はやや剥離。柾目。桶または曲物蓋か。	-
1278	A-1区 SX-301	木製品 蓋または 桶底板	全長 (5.8)	全幅 12.0	全厚 0.8	-	1/2	-	-	側面に径0.5mmの円孔が3箇所あり。柾目。「支配」の墨書。	-
1279	A-1区 SX-302	土師質 土器 皿	11.7	1.7	7.2	-	1/2	灰白色	-	白土器か。口縁部は横ナデ。底部内外面はナデ。外面に墨書による梅文。	尾戸窯か
1280	A-1区 SX-302	石製品 硯	全長 8.7	全幅 5.3	全厚 1.4	重量 (847)	ほぼ 完存	-	-	表面は研磨。裏面は無調整。表面には墨付着。表面の墨書は解説不可。裏面「□□谷長茶佐」の墨書か。	安山岩系か
1281	A-1区 SK-401	金属製品 杓子	全長 9.5	全幅 9.1	全厚 0.2	重量 (352)	柄部 欠損	-	-	銅製。全面に錆化。	-
1282	A-1区 SK-403	磁器 碗	-	(3.0)	6.6	-	1/4	灰白色	青磁釉	外面は型押による籠状の文様。高台内側に砂付着。畳付は釉ハギ。	-
1283	A-1区 SK-405	陶器 碗	12.6	8.3	5.5	-	1/8	灰白色	灰釉	高台付近から底部は削り出して無釉。見込は3箇所に目痕が残り、やや酸化炎焼成で橙色。	尾戸窯
1284	A-1区 SK-405	陶器 碗	12.1	9.2	5.0	-	3/5	灰白色	灰釉	高台内は砂付着。畳付は釉ハギ。	19世紀か
1285	A-1区 SK-406	土師質 土器 皿	11.7	1.7	7.1	-	4/5	灰白色	-	白色系。口縁部は横ナデ。底部内外面はナデ。口縁部内外面に煤付着。内外面無文。	尾戸窯か
1286	A-1区 SK-407	陶器 鉢	-	(10.1)	13.8	-	底部 完存	淡黄色	外面高台付近までと高台内中央部に灰釉	筒形。内面は回転ナデで無釉。	-
1287	A-1区 SK-409	陶器 香炉	10.8	6.4	10.7	-	1/2	灰白色	口縁部内面から体部外面まで灰釉	内面は回転ナデで無釉。高台付近は回転削り。紐状の脚を貼付。底部外面は回転削りで無釉。	-
1288	A-1区 SK-409	磁器 染付 杯	9.2	6.3	4.1	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は文様と圏線の染付。高台内は鷹文か。畳付は釉ハギ。	-
1289	A-1区 SK-409	磁器 染付 猪口	9.4	6.6	5.6	-	2/3	白色	透明釉	筒形。外面に草花文・蜻唐草文、見込に五弁花文と圏線の染付、高台内に渦「福」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀中葉
1290	A-1区 SK-410	石製品 硯	全長 9.7	全幅 4.5	全厚 1.2	重量 (776)	一部 欠損	-	-	中央部は著しく摩耗。	安山岩系か
1291	A-1区 SK-411	磁器 染付 小丸碗	9.9	5.2	3.8	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面は区画に松竹梅文と圏線、高台内に方形枠に「福」字の銘。畳付は釉ハギ。高台内に砂が付着。	肥前産 18世紀前半～中葉
1292	A-1区 SK-411	磁器 染付 小丸碗	9.8	5.5	4.0	-	4/5	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による鶴・松文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。高台内側に砂付着。	肥前産 18世紀前半
1293	A-1区 SK-411	磁器 染付 猪口	-	(5.1)	4.0	-	底部 完存	灰白色	透明釉	筒形。外面に山水文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産か 18世紀後半か
1294	A-1区 SK-412	土師質 土器 皿	10.4	2.4	6.2	-	1/3 底部 完存	浅黄橙色	-	水挽成形。回転ナデ。底部外面は回転糸切り。	-
1295	A-1区 SK-414	磁器 染付 広東碗	11.1	(6.4)	-	-	1/2	灰白色	透明釉	外面は草花文の染付か。内面に圏線、見込に蝶文の染付。	肥前系 19世紀か



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1296	A-1区 SK-415	陶器 ミニ チュア	全長 (2.8)	(3.5)	全幅 (2.4)	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	底部外面を除 き鉄釉	鍋形。把手は貼付。把手上面に刻 目状の文様。底部外面は横方向の 削り。	-
1297	A-1区 SK-415	磁器 染付 合子蓋	5.7	1.0	天井 径 5.4	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	円筒形。天井部外面に山水風景文 の染付。口縁端部は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半～中葉
1298	A-1区 SK-415	瓦 軒平瓦	全長 (9.0)	全幅 (14.7)	顎下 部厚 1.8	瓦当 高 4.4	一部 残存	灰白色	-	瓦当右側に「トク周」の刻印。三花 文。	土佐産 徳王子
1299	A-1区 SK-415	金属製品 煙管 吸口	全長 6.0	全幅 1.1	全厚 1.0	重量 5.5	完存	銀色	-	真鍮製か。内部にわずかに木質が 残る。全面錆化。	-
1300	A-1区 SK-416	陶器 碗	9.7	6.1	4.3	-	-	灰白色	灰釉	口縁部は内湾し、大きく開く。畳 付は釉ハギ。坊主町窯跡出土資料 に酷似する。	肥前産 18世紀前半
1301	A-1区 SK-416	陶器 輪花皿	12.0	2.6	5.4	-	ほぼ 完存	灰白色	灰釉	畳付は釉ハギ。	-
1302	A-1区 SK-416	陶器 甕	-	(7.7)	-	-	一部 残存	灰色	灰釉	外面の一部は無釉。	-
1303	A-1区 SK-416	磁器 鉢か	-	(4.4)	9.8	-	1/3	灰白色	内外面は 青磁釉	青磁。内面に陰刻による文様。畳 付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1630～1650年代
1304	A-1区 SK-417	瓦 平瓦	全長 (14.8)	全幅 (9.6)	全高 1.8	-	一部 残存	灰白色	-	側面に「アキ榮」の刻印。	土佐産 安芸
1305	A-1区 SK-420	陶器 土瓶蓋	8.3	4.3	笠径 11.0	摘径 1.7	ほぼ 完存	浅黄橙色	笠部外面は 青緑釉	口縁部から内面は回転ナデで無 釉。	-
1306	A-1区 SD-401	陶器 碗	-	(5.6)	4.2	-	底部 完存	にぶい 黄橙色	内面から外面 体部下半まで 鉄釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。	肥前産 17世紀初頭
1307	A-1区 SD-401	陶器 碗	8.9	5.4	4.1	-	2/3	灰白色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	釉はやや緑色を帯び、貫入が入 る。高台付近から底部は削り出 して無釉。	-
1308	A-1区 SD-401	陶器 花生	-	(7.1)	8.6	-	1/6	灰白色	内面から体部 外面まで 透明釉	回転ナデ。体部の一部を指とヘラ で押し変形。外面は鉄錆による文 様と染付。底部は無調整で無釉。	-
1309	A-1区 SD-401	陶器 乗燭	3.5	1.6	2.5	-	完存	明赤褐色	透明釉	杯形。口縁部は板状の粘土を貼付 しナデ。径4mmの円孔。外面から底 部は摩耗のため調整不明。	-
1310	A-1区 SD-401	磁器 染付 小丸碗	7.7	4.3	3.6	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に草花文の染付。畳付は釉ハ ギで砂付着。	肥前産 波佐見か 18世紀
1311	A-1区 SD-401	磁器 染付 小丸碗	-	(3.8)	3.7	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に草花文の染付。畳付は釉ハ ギで砂付着。	肥前産か 18世紀
1312	A-1区 SD-401	磁器 染付 碗	-	(5.6)	3.7	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に斜格子文、口縁部内面に格 子文、見込に渦文の染付。畳付は 釉ハギ。	19世紀か
1313	A-1区 SD-401	磁器 染付 丸碗	9.0	5.3	3.8	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に蓮弁文と雷文帯の枠内に 宝文、口縁部内面に雷文帯、見込 に環状の松竹梅文と圏線の染付。	肥前産 幕末
1314	A-1区 SD-401	磁器 染付 端反碗	10.8	6.2	4.4	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は草花文、口縁部内面に帯 線、見込に文様の染付あり。高台 内に「サ」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1315	A-1区 SD-401	磁器 染付 皿	-	(2.2)	7.9	-	底部 2/3	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面に圏線、口縁 部内面に蜻唐草文、見込は松竹梅 文の染付。高台内に渦「福」の銘。	肥前系 江戸後期
1316	A-1区 SD-401	磁器 染付 小杯	6.8	5.0	3.3	-	4/5	白色	透明釉	外面に草花文・蝶文と圏線の染 付。高台内に「太明年□」銘あり。 畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1670～1690年代
1317	A-1区 SD-401	磁器 染付 瓶	-	(8.4)	-	胴径 14.8	1/2	灰白色	透明釉	肩部に扇文の染付か。	肥前系 19世紀か

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1318	A-1区 SD-401	瓦 軒棧瓦	全長 (5.8)	全幅 (6.2)	顎下 部厚 2.5	瓦当 高 4.4	一部 残存	灰色	-	瓦当右側に「アキ□」の刻印。文様不明。	土佐産 安芸
1319	A-1区 SD-401	瓦 平瓦	全長 (10.8)	全幅 (11.1)	全高 1.9	-	一部 残存	灰色	-	側面に枠内に刻印。	-
1320	A-1区 SD-401	土製品 人形	全長 (4.5)	全幅 4.5	全厚 2.9	-	一部 欠損	橙色 赤色風化 礫を含む	-	着物の女性か。型成形。底部に径1.2cm、深さ3cmの円孔。	-
1321	A-1区 SD-401	骨角製品 柄	全長 (8.1)	全幅 (2.5)	全厚 0.2	重量 11.47	一部 残存	-	-	中空で端部は肥厚。上部に陽刻による帯状の突帯文様。先端に沈線状の文様。	-
1322	A-1区 SD-402	陶器 碗	-	(1.9)	5.2	-	1/2	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	京焼風。高台内に「富」の刻印。高台付近から底部は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
1323	A-1区 SD-402	土師器 焼塩壺蓋	(3.8)	0.9	-	-	1/4	にぶい橙 色 金雲 母を含む	-	外面はナデ。内面は布目痕が残る。	関西産 江戸後期
1324	A-1区 SD-403	陶器 植木鉢	全長 (6.5)	全幅 (6.7)	全厚 (0.7)	-	1/3	橙色	-	外面は回転削りて墨書あり。内面は回転ナデ。	-
1325	A-1区 SX-401	磁器 染付 碗	-	(3.2)	4.3	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に福寿字と窓絵に海浜文。見込は丸に家屋・馬文の染付。高台内に「茶山」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1326	A-1区 SX-401	瓦 菊丸瓦か	全長 8.4	全幅 8.4	全厚 2.2	-	瓦当 ほぼ 完存	灰色	-	型成形。瓦当裏面はナデ。釘抜文。	-
1327	A-1区 SX-401	金属製品 煙管 雁首	全長 6.1	全高 1.8	火皿 径 1.5	重量 6.8	完存	-	-	銅製。羅字接続部径0.9cm。側面に接合部あり。全面に錆化。	-
1328	A-1区 SX-402	磁器 染付 蓋物	12.0	8.3	6.2	-	1/6	白色	透明釉	口縁部と底部外面は釉ハギ。外面は丸に花文の染付。底部外面は無釉。	-
1329	A-1区 SX-403	陶器 碗	-	(4.0)	5.7	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	灰釉	見込と畳付に砂目痕。	肥前産 17世紀前半
1330	A-1区 SX-403	陶胎染付 碗	11.8	7.4	5.6	-	1/4	黄灰色	白化粧土のち透明釉	外面に圈線と風景文の染付か。畳付は釉ハギで砂付着。	-
1331	A-1区 SX-403	陶器 皿	-	(2.2)	4.5	-	底部 完存	赤色	内面から外面体部下半まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。高台付近は回転ナデで無釉。底部は削り出し。畳付には糸切り痕。	肥前産 17世紀前半
1332	A-1区 SX-403	陶器 向付	-	(4.0)	-	-	一部 残存	浅黄橙色	透明釉	方形か。外面に鉄錆による文様。	織部焼か
1333	A-1区 SX-403	磁器 色絵 油壺	-	(5.2)	4.0	胴径 7.5	1/3	灰白色	外面は透明釉 内面は無釉	胴丸形。内面は回転ナデ。外面に蓮弁文・圈線の染付と朱色の蝶文の上絵付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 有田 18世紀後半～19世紀初頭
1334	A-1区 SX-403	五彩 皿	-	(1.3)	9.2	-	一部 残存	灰黄色	内面から外面高台内まで透明釉	見込に朱・黄・緑色の上絵付による文様。高台付近に粗い砂が付着。	中国産 漳州窯系 17世紀前半
1335	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 6.6	全幅 1.8	全厚 0.1	-	ほぼ 完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。解読不可。	-
1336	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 7.4	全幅 1.5	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。「知足山」の墨書。	-
1337	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 7.7	全幅 1.9	全厚 0.2	-	ほぼ 完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。解読不可。	-
1338	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 8.0	全幅 1.7	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。「知足山」の墨書。	-
1339	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 8.1	全幅 1.9	全厚 0.3	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径3mmの円孔。「出里」の墨書。	-

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1340	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 8.2	全幅 1.9	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。解説不可。	-
1341	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 8.2	全幅 (1.7)	全厚 0.2	-	一部 欠損	-	-	片面のみ墨書か。表裏が剥離するため不明。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。解説不可。	-
1342	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 7.2	全幅 1.7	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	片面のみ墨書。隅を切り、上部に径2mmの孔。孔には紐が残る。解説不可。	-
1343	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 7.7	全幅 1.7	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。孔には紐が残る。	-
1344	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 7.7	全幅 1.2	全厚 0.2	-	完存	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径2mmの円孔。孔には紐が残る。	-
1345	A-1区 SX-403	木製品 木筒	全長 8.1	全幅 1.8	全厚 0.2	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。四隅を切り、上部に径3mmの円孔。紐が残る。解説不可。	-
1346	A-1区 SX-404	陶器 火入	-	(3.8)	4.8	-	1/4	にぶい 赤褐色	体部外面は 透明釉	外面は白化粧土の波状刷毛目文。内面は回転ナデ、底部外面は削り出しで無釉。底部に墨書。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
1347	A-1区 SX-405	陶胎染付 広東碗	11.6	6.3	5.4	-	ほぼ 完存	灰白色	白化粧土のち 透明釉	外面に螺子文、口縁部内面に圏線、見込に五弁花文の染付。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 太白焼 19世紀
1348	A-1区 SX-405	陶器 碗	11.1	8.7	3.8	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による注連縄文。見込に3箇所目痕。高台付近から底部は削り出しで無釉。	-
1349	A-1区 SX-405	陶器 碗	-	(6.7)	5.8	-	1/4	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出しで無釉。高台内に墨書。	尾戸窯
1350	A-1区 SX-405	陶器 菊皿	-	(2.7)	-	-	一部 残存	灰白色	鉄釉のち 長石釉	鼠志野。白色と褐色に発色。口縁部内面に白色の2条の直線文。	美濃 志野焼 17世紀前半
1351	A-1区 SX-405	陶器 中皿	22.1	4.7	9.6	-	1/2	灰白色	高台を除き 灰釉	見込は蛇ノ目釉ハギのち鉄釉。内面は鉄錆による葛文。見込は鉄錆による松文で、高台は削り出し。	-
1352	A-1区 SX-405	陶器 油徳利	1.6	(9.3)	-	胴径 8.4	一部 残存	にぶい 橙色	口縁部内面から 外面に鉄釉	体部内面は回転ナデで無釉。受部に径7mmの円孔。円孔は把手とはややずれる。	-
1353	A-1区 SX-405	陶器 提子	12.8	(13.8)	-	胴径 11.4	底部 欠損	橙色	内面と外面中 位まで鉄釉	2箇所に釣手、1箇所に注口を貼付。外面体部下半は回転ナデと削り出しで無釉。受部は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1354	A-1区 SX-405	磁器 色絵 丸碗	7.8	5.7	3.4	-	-	灰白色	透明釉	外面に人物・牡丹・樹文の染付と朱・緑色の窓絵に草花文・圏線などの上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀中葉
1355	A-1区 SX-405	磁器 染付 丸碗	11.7	6.2	4.1	-	3/5	灰白色	透明釉	外面に丸文と圏線、内面に圏線、見込に五弁花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 波佐見 18世紀
1356	A-1区 SX-405	磁器 染付 端反碗	10.9	6.2	4.2	-	2/3	白色	透明釉	内外面に雲龍文と圏線、見込に火焰？と圏線の染付。高台内に二重方形枠の銘。	肥前系 19世紀
1357	A-1区 SX-405	磁器 染付 輪花皿	14.2	4.0	7.3	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	型打成形。蛇ノ目凹形高台。外面は土坡に草文、内面に海浜風景文の染付。高台内に「茶」の銘。	能茶山窯 1820年代～幕末
1358	A-1区 SX-405	磁器 色絵 紅猪口	6.7	3.2	2.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に鳥文とみられる染付。朱色で「京」「小町紅」などの上絵付。	肥前産 有田か
1359	A-1区 SX-405	磁器 染付 合子蓋	4.5	1.7	笠径 5.3	-	1/2	白色	透明釉	小型。天井部に紐状の摘を貼付。口縁端部は釉ハギ。外面に梅文の染付。内面は無文。	肥前系
1360	A-1区 SX-405	磁器 染付 蓋物蓋	6.5	2.9	笠径 7.6	-	1/2	白色	透明釉	天井部に紐状の摘を貼付。かえりには釉ハギ。外面に丸に梅文、短冊に萩文の染付。	肥前産 18世紀後半～19世紀前半
1361	A-1区 SX-405	土師質 土器 皿	11.3	1.8	7.7	-	1/4	灰白色	-	白土器。内外面は回転ナデ。底部はナデ。見込に型押で陽刻の高砂文。	尾戸窯

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1362	A-1区 SX-405	土師質 土器 皿	12.0	1.4	9.0	-	1/3	灰白色	-	白土器。見込に型押による陽刻の「寿」字文。内外面は回転ナデ。底部内外面はナデ。	尾戸窯
1363	A-1区 SX-405	軟質施釉 陶器 鉢	20.8	(5.7)	-	-	1/4	灰白色	外面は緑釉 内面は緑釉と 褐釉	型成形。内面に型押による陽刻文。	讃岐産 源内焼か
1364	A-1区 SX-405	瓦質土器 茶釜	-	(9.7)	-	24.4	1/8	灰白色	-	内面は回転ナデ。肩部に型押による陽刻文様と上下に突帯が2条。鍔上面に刻印。外面鍔下に煤附着。	-
1365	A-1区 SX-405	瓦 軒棧瓦	全長 (19.4)	全幅 (13.7)	顎下 部厚 2.2	瓦当 高 4.6	1/5	灰色	-	瓦当右側に「アキセ」とみられる刻印。文様不明。	土佐産 安芸
1366	A-1区 SX-405	瓦 平瓦	全長 (19.6)	全幅 (13.4)	全厚 1.6	-	1/6	灰白色	-	側面に「徳周」の刻印。	土佐産 徳王子
1367	A-1区 SX-405	瓦 棧瓦	全長 25.6	全幅 (18.2)	全高 1.6	-	2/3	灰色	-	側面に「□尾□」の刻印。	-
1368	A-1区 SX-405	土製品 人形	全長 (2.3)	全幅 2.4	全厚 1.4	-	ほぼ 完存	橙色	-	型成形。犬形。キラ粉附着。	-
1369	A-1区 SX-405	石製品 基石	全長 2.1	全幅 2.0	全厚 0.3	重量 2.3	完存	-	-	全面を研磨。黒色。	蛇文岩または粘板 岩か
1370	A-1区 SX-405	木製品 漆器椀	-	(3.0)	-	-	2/1	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面は金色の水鳥文。	江戸後期か トチノキ
1371	A-1区 SX-405	木製品 漆器椀	-	(5.4)	-	-	口縁部 1/6	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金色の丸に片喰文。	ブナ属
1372	A-1区 SX-405	木製品 羽子板	全長 (31.8)	全幅 12.3	全厚 (0.9)	-	柄部 欠損	-	-	僅かに朱色の彩色が残る。柃目か。	-
1373	A-1区 SX-405	金属製品 煙管 雁首	全長 4.1	全高 1.9	火皿 径 1.3	重量 10.1	完存	-	-	銅製。羅字接続部径9mm。全面錆化。	-
1374	A-1区 SX-406	陶器 色絵 半球形碗	9.4	5.8	3.0	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面は緑色の笹文の上絵付。高台内に墨書。高台付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系
1375	A-1区 SX-406	陶器 碗	-	(2.5)	4.9	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで 灰釉	高台付近から底部外面は削り出して無釉。高台内に墨書あり。	尾戸窯
1376	A-1区 SX-406	陶器 灯明受皿	10.7	2.1	2.9	-	完存	に おい 赤褐色	-	焼締。受部の3箇所に入り込み。回転ナデで底部外面は回転ヘラ削りを加える。口縁部に煤附着。	-
1377	A-1区 SX-406	磁器 染付 小丸碗	-	(4.2)	4.2	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に二重網目文、内面に菊花文の染付、高台内に方形枠に渦「福」の銘。高台内外面には砂附着。	肥前産 18世紀中葉
1378	A-1区 P-401	陶器 皿	-	(3.0)	4.4	-	底部 完存	に おい 黄褐色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近から底部は削り出して無釉。被熱する。	肥前産 17世紀前半
1379	A-1区 P-402	陶器 小皿	10.2	1.8	3.0	-	1/2	灰白色	-	焼締。回転ナデのち底部外面に回転削りを加える。口縁部内外面に煤附着。灯明皿として使用か。	-
1380	A-1区 P-403	磁器 染付 丸碗	9.6	4.9	3.8	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に網目文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 1630～1650年代
1381	A-1区 P-404	瓦 軒平瓦	全長 (8.5)	全幅 (12.8)	全高 5.2	-	一部 残存	灰色	-	三花文で型成形。瓦当右側に「片一力」の刻印。漆喰附着。表面は横方向のナデ、裏面はナデ。	土佐産 香美市 片地
1382	A-1区 SB-501	陶器 灯明受皿	9.9	1.6	4.0	-	1/4	褐灰色	-	焼締。受部の2箇所に入り込み。回転ナデで底部外面は回転ヘラ削りを加える。口縁部に重ね焼痕。	-
1383	A-1区 SB-501	磁器 染付 段重	7.4	3.1	4.9	-	1/2	灰白色	透明釉	小型。外面に蛸唐草文の染付。口縁端部と体部下端、畳付は釉ハギ。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1384	A-1区 SB-501	土師器 焼塩壺	5.5	8.5	5.4	胴径 6.3	一部 欠損	にぶい 橙色 砂粒を 多く含む	-	輪積成形。外面はナデ。口縁部内 外面は横ナデ。内面はナデで指頭 圧痕と布目痕が残る。	関西産 17世紀
1385	A-1区 SB-501	土師器 焼塩壺蓋	7.5	1.5	天井 径 6.7	-	3/5	にぶい 橙色 砂粒を 多く含む	-	天井部外面はナデで指頭圧痕。内 外面は横ナデ。天井部内面はナ デ。	関西産 17世紀
1386	A-1区 SB-502	陶器 皿	全長 2.8	全幅 3.8	全厚 0.3	-	一部 残存	橙色	内面は鉄釉	底部外面は回転ナデで墨書あり。	-
1387	A-1区 SB-502	陶器 皿	-	(2.6)	-	-	1/6	にぶい 橙色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	絵唐津。口縁部内面に鉄錆による 文様。外面の一部は回転ナデで無 釉。被熱し釉は光沢なし。	肥前産 1590～1610年代
1388	A-1区 SK-501	磁器 染付 瓶	-	(6.9)	-	-	肩部 1/3	灰白色	外面は透明釉	頸部に風景文と圏線、胴部に笹文 の染付。胴部に釘彫。内面は回転 ナデで無釉。	-
1389	A-1区 SK-501	土師器 焜炉か	-	(1.1)	12.6	-	底部 1/6	灰白色	-	回転ナデで外面体部下端は回転 削りを加える。底部外面はナデ で、「一皿」の墨書あり。	江戸後期
1390	A-1区 SK-501	瓦質土器 釜	-	(7.7)	-	22.8	1/5	灰白色	-	肩部は型成形で型による陽刻の 草文。ナデ。鏝の下と胴部には煤 が付着。外面は銀色に発色。	-
1391	A-1区 SK-501	瓦 棧瓦	全長 19.2	全幅 12.5	全高 1.5	-	一部 残存	灰白色	-	銀色に発色しキラ粉が付着。側面 に「キセ」とみられる刻印あり。	-
1392	A-1区 SK-502	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.4	全厚 0.8	-	完存	橙色	-	型成形。花文。下面はナデ。	-
1393	A-1区 SK-503	陶器 枕	全長 15.1	11.2	全幅 6.6	-	一部 欠損	灰白色	灰釉	やや小型。両側面に鉄錆による茄 子文。底部内外面はナデで無釉。 底部外面に「大黒」の墨書。	能茶山窯 1820年代～幕末
1394	A-1区 SK-503	磁器 合子蓋	5.1	3.2	-	摘径 1.6	完存	灰白色	白磁釉 摘は灰釉	型打成形。貝形の摘を貼付。内面 はナデ。外面は型による陽刻の海 浜文。口縁端部は釉ハギ、砂付着。	近代か
1395	A-1区 SK-503	土師器 鉢	-	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	-	全面に回転ナデ。外面に「口土佐」 の墨書あり。	-
1396	A-1区 SK-503	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。「自」の陽刻文。表面には キラ粉付着。下面はナデ。	-
1397	A-1区 SK-503	土製品 ミニ チュア	全長 (2.4)	全幅 (4.0)	全厚 (2.4)	-	一部 残存	灰黄色	上面に緑釉 背面は無釉	箱庭道具。橋形。背面はナデで、 「一〇」の墨書。	-
1398	A-1区 SK-504	瓦 平瓦	全長 (5.1)	全幅 (8.1)	全高 1.8	-	一部 残存	灰白色	-	側面に「中山林」の刻印。	-
1399	A-1区 SK-505	陶器 皿	全長 3.5	全幅 3.2	全厚 0.3	-	一部 残存	白色	内外面に 濃緑釉	型打成形。見込に型押による陰刻 の龍文。	淡路 珉平焼
1400	A-1区 SK-505	陶器 卸皿	10.0	2.6	4.1	-	1/2	灰白色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	見込に卸目。外面高台付近から底 部は削り出して無釉。	18～19世紀
1401	A-1区 SK-505	陶器 土瓶蓋	8.0	2.4	3.6	笠部 10.8	完存	灰白色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	リボン状の摘を貼付。外面は回転 ナデで無釉。底部は削り出して無 釉。	-
1402	A-1区 SK-505	陶器 蓋物蓋	(100)	1.9	-	-	2/3	灰白色	外面は鉄釉の ち透明釉 内面は透明釉	型打成形。外面に唐草文と花文の 陰刻。内面は花文の染付。外面に は3箇所目痕、内面には布目痕。	-
1403	A-1区 SK-505	陶器 鉢	19.8	8.3	8.2	-	3/5	暗灰黄色	内面から高台 付近まで鉄釉	口縁端部は釉ハギ。高台付近から 底部は削り出して無釉。蓋物か。	-
1404	A-1区 SK-505	陶器 土瓶	10.7	12.9	8.2	19.4	一部 欠損	灰白色	口縁部内面か ら体部外面 まで灰釉	外面体部から底部は削り、内面は回 転ナデ。体部外面に飛鉋文。口縁端 部は釉ハギ。内面と底部に煤付着。	-
1405	A-1区 SK-505	磁器 染付 端反碗	10.3	6.1	4.2	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に龍・宝・花文。口縁部内面は 雷文帯、見込に環状の松竹梅文と 圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 幕末



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1406	A-1区 SK-505	磁器 染付 端反碗	11.2	5.9	4.6	-	1/3	灰白色	透明釉	内外面に染付。口縁部は帯線。高台内には方形枠に「茶」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1407	A-1区 SK-505	磁器 色絵 稜花皿	10.6	2.3	6.0	-	1/2	灰白色	透明釉	外面と見込に染付。口縁部内面に朱色の四方襷文、墨色の七宝繫・斜格子文の上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 19世紀後半
1408	A-1区 SK-505	磁器 染付 皿	17.9	3.2	11.1	-	7/8	灰白色	透明釉	口箒。外面に唐草文と圏線、内面に草花文などの染付、高台内には圏線と銘、目痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
1409	A-1区 SK-505	磁器 皿	19.9	(3.6)	-	-	1/4	灰白色	青磁釉	青磁。折縁形。口縁部内面に花文、見込に圏線の陰刻。	肥前産 1630～1650年代
1410	A-1区 SK-505	磁器 染付 稜花大皿	47.6	6.6	28.8	-	2/3	白色	透明釉	外面に花唐草文と圏線、内面に松竹梅文と丸文・窓に朝顔文の染付。高台内は「忠」の銘と目痕。	肥前産
1411	A-1区 SK-505	磁器 色絵 段重	7.4	1.7	6.5	-	1/2	灰白色	透明釉	外面には朱・黄色による菊文、茶・緑色による波文の上絵付。口縁部内面と外面体部下端は釉ハギ。	肥前産 有田
1412	A-1区 SK-505	磁器 染付 段重	11.0	(6.5)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は区画内に花文と馬文の染付。口縁端部を釉ハギ。	肥前系
1413	A-1区 SK-505	磁器 染付 段重	14.7	6.6	11.5	-	3/5	灰白色	透明釉	外面は区画内に風景文と草花文の染付。口縁端部と畳付は釉ハギ。見込に2箇所の目痕。	肥前系
1414	A-1区 SK-505	磁器 染付 小瓶	1.4	9.4	3.1	胴径 4.3	完存	-	透明釉	鶴首形。外面に蛸唐草文と松葉文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀 前半
1415	A-1区 SK-505	磁器 染付 瓶	-	(17.4)	7.6	胴径 13.1	3/4	白色	外面は透明釉	辣韭形。外面に草花文と圏線の染付。内面は回転ナデで無釉。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀前半
1416	A-1区 SK-505	磁器 染付 鉢	17.5	(7.0)	-	-	3/4	灰白色	透明釉	外面に鳥・樹木文、内面に孔雀・牡丹・桜文の染付。2箇所に焼継痕。	19世紀
1417	A-1区 SK-505	磁器 染付 油壺	1.9	6.5	3.2	胴径 6.4	完存	灰白色	口縁部内面から外面は透明釉	小型。胴丸形。肩部外面に梅文と松葉文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀
1418	A-1区 SK-505	磁器 染付 油壺	1.9	7.6	3.7	胴径 7.8	ほぼ 完存	灰白色	口縁部内面から外面は透明釉	胴丸形。肩部外面に松竹梅文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀
1419	A-1区 SK-505	西洋陶器 稜花皿	20.0	2.2	11.1	-	4/5	灰白色	透明釉	銅板転写。コバルト。見込にイギリス庭園図。口縁部内面はワイルドローズパターン。高台内に銘。	イギリス産 ドーソン窯か 19世紀中葉
1420	A-1区 SK-505	土師器 火鉢	-	(4.2)	18.4	-	1/3	橙色 金雲母を 含む	-	円筒形。外面は丁寧な磨き。内面は回転ナデ。底部外面はナデで挟りが入る。底部に「ト齊」の刻印。	-
1421	A-1区 SK-505	土師器 焜炉	12.5	14.4	13.1	胴径 14.6	ほぼ 完存	浅黄橙色	-	円筒形で二重構造。白色系。内・外部構造とも回転ナデ。底部は回転削り。窓上部に印刻。煤付着。	京都系
1422	A-1区 SK-505	軟質施釉 陶器 皿	-	(1.3)	10.8	-	1/6	灰白色	緑釉	型成形。内面は型による籠状の陽刻文様。底部は削り出しで無釉。	-
1423	A-1区 SK-505	瓦質土器 火鉢	24.4	11.3	21.9	-	1/3	黄灰色	-	箱形。底部四隅に脚。外面は磨き、口縁部は横ナデ、体部内面はナデ。底部内面は粗雑な板ナデ。	-
1424	A-1区 SK-505	瓦質土器 焜炉	(9.0)	(4.3)	-	-	一部 残存	赤褐色	-	箱形。外面は丁寧な磨き。内面には粗い縦ハケまたはナデで指頭圧痕。上面には丸に八の刻印。	-
1425	A-1区 SK-505	瓦質土器 焜炉	21.8	18.2	-	-	3/4	明黄褐色	-	箱形。たたら成形。前方に方形の窓。扇形の把手。四隅に脚。外面は丁寧な磨き。内面は粗雑なハケ。	-
1426	A-1区 SK-505	瓦 軒棧瓦	全長 (205)	全幅 (240)	顎下 部厚 2.2	瓦当 高 4.6	1/2	灰白色	-	中心飾りは三巴文。瓦当左側に「中山林」の刻印。	-
1427	A-1区 SK-505	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。蜻蛉文。上面にキラ粉付着。下面はナデ。	-



遺物観察表30 A-1区

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1428	A-1区 SK-505	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.7	-	完存	灰褐色	-	型成形。花文。下面はナデ。被熱する。	-
1429	A-1区 SK-505	土製品 ミニ チュア	6.2	(2.1)	-	-	1/3	橙色 金雲母を 含む	-	播鉢形。全面に横ナデまたはナデ。内面に播目。	-
1430	A-1区 SD-501	磁器 染付 中皿	-	(3.7)	12.5	-	3/4	白色	透明釉	外面に圏線と染付の一部が残る。見込には花文の染付。高台内は圏線と銘の粹か。畳付は釉ハギ。	-
1431	A-1区 SD-501	磁器 染付 稜花皿	15.5	4.5	7.7	-	1/5	白色	透明釉	外面に龍文。内面に不明文様の染付。被熱する。2箇所に焼継痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
1432	A-1区 SD-501	磁器 染付 植木鉢	-	(5.7)	9.3	-	1/2	白色	外面は透明釉	脚は貼付。外面に風景文と蓮弁文。脚に唐草文の染付。回転ナデで内面と底部外面は無釉。	-
1433	A-1区 SD-501	瓦 鳥衾瓦	全長 32.7	全幅 14.8	全厚 1.6	瓦当 径 14.2	完存	灰白色	-	三巴文。瓦当下端に2条の沈線。瓦当裏と凹面、凸面はナデまたはヘラナデ。側面に漆喰が付着。	19世紀
1434	A-1区 SD-501	瓦 軒棧瓦	全長 (21.7)	全幅 (24.4)	全高 2.0	-	一部 残存	灰白色	-	三巴文。一部銀化。瓦当右側に「アキ□」の刻印あり。	土佐産 安芸
1435	A-1区 SD-503	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	裏面 一部 欠損	橙色	-	型成形。瓢箪文。下面はナデ。	-
1436	A-1区 SX-501	陶器 碗	-	(3.8)	3.1	-	1/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉貫入が入る	見込に上絵付の痕跡か。高台内に墨書。高台付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系
1437	A-1区 SX-501	陶器 碗	-	(2.4)	3.8	-	1/2	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「米」の墨書。	-
1438	A-1区 SX-501	陶器 碗	-	(2.3)	4.3	-	底部 完存	浅黄色	内面から高台付近まで灰釉	高台付近から底部外面は削り出し。見込に3箇所の目痕。高台内に墨書あり。	-
1439	A-1区 SX-501	陶器 碗か	-	(2.6)	5.1	-	底部 完存	浅黄橙色	内面から体部外面まで鉄釉	碁笥底風。底部は削り出して無釉。高台内に墨書。	-
1440	A-1区 SX-501	陶器 皿	13.0	5.4	4.3	-	1/2	にぶい 黄橙色	内面から高台付近まで鉄釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台内に「十皿」の墨書。高台付近から底部は削り出して無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1441	A-1区 SX-501	陶器 皿	20.9	3.2	8.0	-	1/3	黄灰色	内面から高台付近まで灰釉または透明釉	見込に錆絵。若干砂が付着。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に墨書あり。	尾戸窯
1442	A-1区 SX-501	陶器 蓋物蓋	-	(1.6)	-	-	一部 残存	灰白色	外面は褐色釉 内面は透明釉	方形。外面に唐草文の象嵌あり。1402と同じタイプ。	-
1443	A-1区 SX-501	陶器 蓋物	-	(3.0)	-	-	一部 残存	灰白色	口縁部内面を除き長石釉	外面に鉄錆による文様。金継。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1444	A-1区 SX-501	陶器 蓋物	9.3	4.4	5.1	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から体部外面まで灰釉	見込の3箇所に目痕。見込は貫入が入る。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に墨書。	-
1445	A-1区 SX-501	陶器 瓶	-	(1.3)	7.2	-	底部 4/5	にぶい 橙色	内面から高台付近まで鉄釉	見込の一部は無釉。高台付近から底部は削り出して無釉。底部に墨書。	-
1446	A-1区 SX-501	陶器 鉢	-	(4.0)	8.5	-	1/2	赤褐色	体部外面は 鉄釉	回転ナデで底部外面は回転削りを加える。内面と底部外面は無釉。底部外面に「御酒」の墨書。	-
1447	A-1区 SX-501	陶器 植木鉢	-	(10.1)	9.0	-	4/5	褐灰色	体部外面は 鉄釉	回転ナデで底部付近は削り。高台に挟り。底部の円孔は径1.1cm。外面は飛鉋文。内面に墨書。	肥前産 有田
1448	A-1区 SX-501	陶器 火鉢	-	(4.0)	12.5	-	底部 1/2	浅黄色	外面は緑釉	内面は回転ナデで無釉。底部外面は削り出し高台で無釉。高台内に墨書あり。	瀬戸・美濃産
1449	A-1区 SX-501	陶器 ミニ チュア	全長 4.0	2.3	全幅 (3.2)	-	屋根部 ほぼ 完存	明赤褐色	外面は透明釉	屋根形。型成形か。屋根に白色釉を施したモチーフ不明の貼付。前のみ庇付か。家屋部は別造か。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1450	A-1区 SX-501	磁器 染付 端反碗	10.8	6.0	4.6	-	1/2	白色	透明釉	外面に草花文、内面に多重圏線、見込に鷲文の染付。高台内に「茶」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1451	A-1区 SX-501	磁器 染付 小皿	9.3	2.5	4.9	-	完存	灰白色	透明釉	見込は蛇ノ目釉ハギし、○に十字文、口縁部内面に草文とみられる染付。畳付は釉ハギ。	18世紀か
1452	A-1区 SX-501	磁器 染付 小皿	9.8	2.5	5.6	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	内面に山水家屋文。高台内に「茶」の銘。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
1453	A-1区 SX-501	磁器 染付 皿	-	(2.4)	9.1	-	-	白色	透明釉	外面に圏線、内面に線描きの花文の染付、高台内に方形枠に「福」の銘と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1660～1680年代
1454	A-1区 SX-501	磁器 染付 角皿	20.1	4.1	12.7	-	2/3	白色	透明釉	外面に稲穂文と圏線、内面に斜格子内に花文と雲文、見込に海浜文の染付。高台内に「玩」の銘。	近代か
1455	A-1区 SX-501	磁器 鉢	14.5	5.6	7.2	-	1/3	白色	外面は鉄釉 内面は透明釉	内面に陽刻による算木文と「震」「巽」の文字。畳付は釉ハギ。	近代か
1456	A-1区 SX-501	磁器 染付 植木鉢	15.8	11.0	7.0	-	ほぼ 完存	灰白色	底部内外面を 除き透明釉	脚を貼付。底部外面は回転削りで、円孔。外面に陽刻の鶴文と雲文、口縁部内面に雲文の染付。	関西系 19世紀後半 明治期か
1457	A-1区 SX-501	土師器 火鉢か	-	(5.5)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデのち外面にナデを加える。外面に墨書あり。	-
1458	A-1区 SX-501	土師器 火鉢か	-	(5.7)	-	-	一部 残存	灰白色	-	回転ナデのち外面にナデを加える。外面に「天保」の墨書あり。	-
1459	A-1区 SX-501	土師器 焜炉か	-	(142)	2.0	胴径 20.0	1/2	にぶい 橙色	-	胴部の2箇所円孔と墨書。ナデで、外面胴部下半はヘラ磨き。脚部外面に「○」の刻印。	-
1460	A-1区 SX-501	瓦 軒平瓦	全長 (6.0)	全幅 (21.4)	平瓦 高17 ~19	瓦当 高 4.7	2/3	灰色	-	銀化する。藁文か。瓦当左側に「アキキ力」の刻印あり。	土佐産 安芸
1461	A-1区 SX-501	土製品 面型	全長 3.2	全幅 3.0	全厚 1.2	-	完存	にぶい 橙色	-	橘文の面子型。ナデ。	-
1462	A-1区 SX-502	磁器 小丸碗	9.8	5.7	3.3	-	1/3	白色	透明釉	外面にコンニャク印判による鶴文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
1463	A-1区 SX-503	磁器 染付 蓋物蓋	10.0	2.4	笠形 11.7	-	完存	灰白色	透明釉	段重蓋か。外面に染付と白化粧土による梅樹文。かえりは釉ハギ。	-
1464	A-1区 SX-504	陶器 急須蓋	4.4	2.2	笠径 6.3	摘径 1.0	ほぼ 完存	淡黄色	外面は銅緑釉 の文様のち 透明釉	内面は全面を墨で塗る。笠部内面から天井部は回転ナデ。天井部には「五藤」の墨書。	-
1465	A-1区 SX-504	陶器 火鉢	-	(15.8)	16.7	胴径 22.5	底部 完存	浅黄色	外面は銅緑釉 と灰釉 内面は 鉄釉刷毛塗り	円筒形。外面に陰刻による幾何学文。底部外面は削り。底部に貫通しない円孔と焼成後の穿孔。	-
1466	A-1区 SX-504	磁器 染付 大皿	-	(5.6)	20.0	-	1/8	灰白色	透明釉	内面に花唐草文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半～19世紀 初頭か
1467	A-1区 SX-504	瓦質土器 火鉢	23.0	18.0	21.0	27.9	3/4	灰白色	-	獣面の把手。口縁部と脚部外面は磨き。胴部外面は型押による陽刻の海浜風景文。高台内に朱で文字。	-
1468	A-1区 SX-504	瓦質土器 火鉢	-	6.6	22.1	-	1/4	にぶい 黄橙色	-	ナデまたは横ナデで、脚部外面は横方向の磨きで「前小」の刻書。	近代か
1469	A-1区 SX-504	瓦 軒棧瓦	全長 (17.5)	-	顎下 部厚 2.2	瓦当 高 4.5	1/6	灰白色	-	瓦当左側に「安□□」の刻印。	-
1470	A-1区 SX-504	瓦 軒棧瓦	全長 (4.0)	全幅 (7.9)	顎下 部厚 (2.1)	瓦当 高 4.5	一部 残存	灰色	-	瓦当右側に「アキセ」の刻印。	土佐産 安芸
1471	A-1区 SX-504	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	型成形。鶴文。下面はナデ。	-

遺物観察表32 A-2区

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1472	A-1区 SX-504	土製品 泥面子	全長 2.7	全幅 2.7	全厚 0.6	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。桔梗文でやや大型。上面はキラ粉が付着。下面はナデ。	-
1473	A-1区 SX-504	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.8	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。渡辺家の家紋か。下面はナデ。若干摩耗する。	-
1474	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札	全長 9.1	全幅 2.5	全厚 0.9	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形で上部に径2mmの円孔。表「追手筋」, 裏「正」の墨書。	-
1475	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札	全長 9.9	全幅 2.7	全厚 0.8	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形で上部に径4mmの円孔。表「追手筋尋常小学校」, 裏「岡崎重衛」の墨書。	-
1476	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札	全長 10.0	全幅 3.0	全厚 0.6	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形で上部に径4mmの円孔。板目。表「追手筋 校」, 裏「西川暁」の墨書。	-
1477	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札	全長 12.1	全幅 2.9	全厚 0.8	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形で上部に径3mmの円孔。表「追手筋尋常小学校」, 裏「名護山鶴□」の墨書。	-
1478	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札	全長 12.1	全幅 2.9	全厚 0.9	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形で上部に径2mmの円孔。表「追手筋尋常小学校」, 裏「前川榮」の墨書。	-
1479	A-1区 SX-504	木製品 木筒 名前札か	全長 15.1	全幅 (3.0)	全厚 1.0	-	2/3	-	-	片面墨書。短冊形で上部に径8mmの円孔。「三月 貳日」の墨書。	-
1480	A-1区 SX-504	木製品 木筒	全長 18.4	全幅 4.7	全厚 1.0	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。上部に径7mmの孔。「杵形大通西側 小屋敷ヲ除ク」の墨書。	-
1481	A-1区 SX-504	木製品 下駄	全長 16.9	全幅 7.3	全厚 2.3	-	ほぼ 完存	-	-	連歯。隅丸方形。径1.1cmの孔を後方から前方に斜めに穿つ。前孔は1cm。後歯の前側は半円形を抜く。	-
1482	A-1区 SX-504	木製品 刷毛	全長 (149)	全幅 10.3	全厚 1.2	-	ほぼ 完存	-	-	二枚の板を接合。柄に径6mmの円孔。片面に焼印。差し口は方形で幅7.8cm・厚み4mm・奥行2.4cmの孔。	-
1483	A-1区 P-501	陶器 碗	-	(4.3)	5.1	-	1/3	浅黄色	内面から高台付近まで灰釉	高台から底部は削り出しで無釉。見込に2箇所の目痕。高台内に墨書。	能茶山窯 1820年代～幕末
1484	A-1区 P-501	磁器 染付 蓋物	7.6	3.7	4.0	-	1/3	白色	透明釉	外面は宝文。口縁部内面と畳付は釉ハギ。口縁部から底部に焼継あり。	肥前産 19世紀～幕末
1485	A-2区 P-101	瓦質土器 釜	-	(4.0)	-	-	一部 残存	灰白色 砂粒を多く含む	-	小型。半円形の鏝を貼付。内外面は横ナデ。摩耗のため調整不明瞭。	-
1486	A-2区 SG-202	陶器 皿	10.4	1.9	6.8	-	1/3	灰白色	内面から高台付近まで透明釉	口縁部は隅切方形、高台は円形。口縁部内面に錆絵。高台付近から底部は削り出しで無釉。	-
1487	A-2区 SG-202	陶器 皿	11.7	2.4	6.0	-	1/5	灰白色	内面は鉄釉	回転ナデ。底部外面は回転糸切り。	美濃産
1488	A-2区 SG-202	陶器 波縁皿	14.8	(2.7)	-	-	一部 残存	橙色	内面から外面体部下半まで灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による文様。高台付近は回転ナデで無釉。	肥前産 1590～1610年代
1489	A-2区 SG-202	陶器 中皿	-	(2.9)	9.9	-	1/8	灰白色	灰釉	見込に鉄錆による文様。畳付は釉ハギ。	尾戸窯
1490	A-2区 SG-202	陶器 大皿	38.6	(3.1)	-	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	内面は白化粧土のち全面に灰釉	内面は白象嵌による圏線と蓮弁文・縞文。	肥前産
1491	A-2区 SG-202	陶器 向付	-	(4.3)	-	-	一部 残存	灰黄色	底部外面を除き長石釉	外面に鉄錆による文様。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀初頭
1492	A-2区 SG-202	陶器 向付	-	(2.6)	9.9	-	1/3	灰白色	長石釉	紐状の脚を貼付。見込に鉄錆による樹木文。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀初頭
1493	A-2区 SG-202	磁器 染付 小碗	-	(3.6)	4.5	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に圏線。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀後半

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
1494	A-2区 SG-202	磁器 皿	22.0	(3.1)	-	-	1/8	灰白色	白磁釉	白磁。折縁形。	肥前産か 17世紀後半か
1495	A-2区 SG-202	磁器 色絵 瓶	4.2	(11.8)	-	胴径 9.1	一部 残存	灰白色	口縁部内面から外面は白磁釉	辣蓼形。外面は朱色の上絵付による文様。	肥前産 有田 1650～1660年代
1496	A-2区 SG-202 裏込	陶器 碗	-	(3.2)	4.6	-	1/3	灰白色	灰釉	畳付は釉ハギ。	-
1497	A-2区 SG-202 裏込	陶器 碗	-	(2.9)	5.2	-	1/2	淡黄色	灰釉	畳付は釉ハギ。	-
1498	A-2区 SG-202 裏込	陶器 火入か	-	(5.8)	8.1	-	一部 残存	にぶい 橙色	体部内面から体部外面まで鉄釉	回転ナデ。底部外面は無調整か。底部内外面は無釉。	-
1499	A-2区 SG-202 裏込	磁器 染付 皿	-	(1.9)	-	-	1/3	灰白色	透明釉	見込に染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 17世紀前半
1500	A-2区 SG-202	石製品 石臼	全長 (22.6)	全幅 (14.0)	全厚 6.8	重量 (3.35) kg	1/2	-	-	下臼。上面に播目と中央に円孔。下面は加工痕が残る。下面は摩耗。	砂岩
1501	A-2区 P-301	瓦 鬼瓦	全長 (26.0)	全幅 (34.7)	全高 (19.4)	重量 (3.70) kg	一部 残存	灰白色	-	前面と下面は型成形。下面には焼成後の穿孔あり。内面はナデ。	-
1502	A-2区 SB-401	瓦器 椀	14.4	3.6	3.5	-	1/6	灰色	-	口縁部は横ナデ。体部外面はナデで指頭圧痕が残る。内面はナデのち渦巻状の暗文か。高台貼付。	-
1503	A-2区 SG-401	陶器 輪花皿	13.3	3.8	5.9	-	4/5	にぶい 黄橙色	透明釉	内外面は白化粧土による刷毛目文。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1504	A-2区 SG-401	陶器 甕	25.1	(18.5)	26.0	-	1/8	橙色	鉄釉	回転ナデ。	-
1505	A-2区 SG-401	磁器 染付 蓋物蓋	-	(2.6)	-	摘長 3.0	1/3	灰白色	透明釉	天井部に紐状の摘を貼付。かえりは釉ハギ。外面は笹文と圏線の染付。	-
1506	A-2区 SG-401	土師器 焙烙	30.0	7.7	-	31.9	ほぼ 完存	にぶい赤 褐色 金雲 母を含む	-	口縁端部に2箇所孔あり。内面は横方向のナデ。底部は型成形とみられ無調整か。外面に煤付着。	関西系 19世紀前半
1507	A-2区 P-405	土師器 竈	44.0	(6.8)	-	-	一部 残存	にぶい黄 橙色 金雲 母を含む	-	横ナデ。胴部は型成形か。口縁部外面に突帯を貼付し刺突による文様。	-
2001	B-1区 SK-203	磁器 輪花皿	14.7	(2.4)	-	-	1/8	灰白色	白磁釉	白磁。内面に丸彫による縞文が入る。	肥前産 1630～1640年代
2002	B-1区 SK-204	磁器 染付 皿	13.8	2.8	5.0	-	4/5	灰白色	透明釉	外面は圏線、内面は草花文、見込は花卉文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1610～1630年代
2003	B-1区 SK-205	土製品 人形	全長 (4.5)	全幅 (5.1)	全厚 2.2	-	一部 欠損	にぶい 黄橙色	-	天神様。型成形。下面に径1.3cmの円錐形の孔。	-
2004	B-1区 SK-211	陶器 碗	11.8	5.9	4.1	-	3/5	灰オリ ブ色	内面から体部下 半まで灰釉	唐津系灰釉陶器。口鏝。体部下半から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2005	B-1区 SK-211	陶器 波縁皿	14.8	5.4	5.6	-	1/2	灰黄色	内面から高台付 近まで灰釉	絵唐津。見込に鉄鏝の鳥文。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2006	B-1区 SK-211	木製品 漆器椀	-	(6.2)	6.5	-	底～体 部完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	高台内に「N」の刻書。漆膜の残存状況不良。	カツラ
2007	B-1区 SK-212	陶器 皿	13.5	3.8	4.8	-	3/5	緑灰色	外面は高台付 近まで透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギで釉ハギ部分に砂目痕。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
2008	B-1区 SK-212	陶器 変形皿	全長 (11.3)	3.4	全幅 (9.3)	-	一部 残存	灰黄色	透明釉	型打成形。口鏝。底部は楕円形。内外面に呉須と鉄鏝による植物文。底部は釉ハギで砂付着。	京都または 京都系か

遺物観察表34 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2009	B-1区 SK-212	陶器 香炉または火入	9.0	5.2	4.6	-	1/8	灰オリーブ色	口縁部内面から高台付近まで灰釉	高台内に「清水」の刻印。高台付近から底部は削り出して無釉。	-
2010	B-1区 SK-212	陶器 水注	12.4	15.8	8.4	-	一部 残存	灰白色	灰釉	瓢形。蓋と注口と把手が付く。壘付は釉ハギで砂付着。内面肩部は空気が入り膨らむ箇所あり。	-
2011	B-1区 SK-212	磁器 菊皿	15.2	5.5	7.6	-	1/2	灰白色	白磁釉	白磁。型打成形。壘付は釉ハギ。釉は光沢あり。	-
2012	B-1区 SK-212	土師質 土器 皿	11.6	2.1	6.0	-	1/4	灰白色	-	白色系。内外面は横方向のナデ。底部は回転削り。見込に型押による陽刻の「寿」字。	-
2013	B-1区 SK-215	陶器 大皿	38.5	11.0	10.7	-	1/5	灰白色	内面から体部外面まで灰釉	絵唐津。内面に錆絵。体部は回転ナデで無釉。見込に砂目痕。高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 17世紀前葉
2014	B-1区 SK-215	陶器 向付	-	(1.2)	6.7	-	2/3	灰白色	長石釉	紐状の脚を貼付。底部に重ね焼の痕跡。見込に鉄錆による舟文。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2015	B-1区 SK-215	陶器 向付	-	(5.1)	9.0	-	1/3	灰白色	長石釉	底部に紐状の脚を貼付。内面に鉄錆による草花文。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2016	B-1区 SK-216	土師器 フイゴの 羽口	全長 (8.8)	全幅 7.3	全厚 7.0	-	一部 残存	橙色 スサ含む	-	外面は板ナデ。先端に鉄滓付着。	-
2017	B-1区 SK-216	陶器 播鉢	28.0	(3.7)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	口縁部内面から外面は鉄釉	内面は回転ナデのち播目。	肥前産 17世紀前半
2018	B-1区 SK-219	陶器 皿	-	(2.0)	6.0	-	1/3	にぶい 橙色	灰釉か	唐津系灰釉陶器。被熱する。見込に砂目痕。全面に施釉後、壘付は釉ハギか。	肥前産 17世紀前半
2019	B-1区 SK-220	石製品 石臼	全長 31.3	全幅 21.2	全厚 6.0	重量 (503) kg	1/2	-	-	下臼。主溝は八分画の播目。中央に径約2.9cmの円孔が貫通。下面は粗雑な加工痕。	砂岩
2020	B-1区 SK-221	陶器 碗	-	(3.2)	3.8	-	1/4	灰白色	内面から体部外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。内外面は回転ナデ。高台付近から底部外面は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2021	B-1区 SK-221	磁器 鉢	21.0	9.1	11.3	-	1/3	灰白色	青磁釉 高台内蛇ノ目釉ハギのち錆釉	青磁。外面は陽刻の算木文か。内面は陽刻の唐草文、見込はスタンブによる花文と陰刻の花文。	肥前産 1650～1670年代
2022	B-1区 SK-222	陶器 皿	12.5	4.1	4.7	-	1/3	にぶい 黄橙色	内面から体部外面まで灰釉	絵唐津。口縁部内面に鉄錆による文様。高台付近から底部は回転削りで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2023	B-1区 SK-222	木製品 集水桶 継手か	全長 板345 栓7.3	全幅 板232 栓6.5	全厚 板74 栓5.7	孔径 80～ 8.1	完存	-	-	板状。上部に径8.3cmの円孔。断面は台形で若干湾曲する。背面から釘を打った形跡。外面に加工痕。	-
2024	B-1区 SK-222	木製品 集水桶 継手か	全長 29.5	全幅 10.9	全厚 2.1	-	2/3	-	-	板状。上部に径8.3cmの円孔。円孔右下に釘孔が2箇所あり。背面から釘を打った形跡。若干湾曲する。	-
2025	B-1区 SK-223	陶器 天目形碗	10.2	6.4	4.5	-	1/3	赤褐色	内面から高台付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近から底部は回転削りで無釉。被熱しており釉に光沢がない。	肥前産 1610～1630年代
2026	B-1区 SK-223	陶器 播鉢	-	(126)	-	-	1/5	褐灰色	-	内面に播目。縦方向のち斜方向に施す。回転ナデ。	備前焼 17世紀初頭
2027	B-1区 SK-223	土師質 土器 皿	10.2	2.6	4.7	-	1/3	灰色	-	内外面は回転ナデ。底部外面は回転系切り。	-
2028	B-1区 SK-224	陶器 向付	-	(3.4)	-	-	1/4	浅黄橙色	長石釉	施釉は厚い。内面に鉄錆による文様あり。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2029	B-1区 SK-225	陶器 丸碗	9.0	6.9	4.1	-	1/3	にぶい 橙色	内面から高台付近まで灰釉	外面に鉄錆による梅文。高台付近から底部は回転削りで無釉。	尾戸窯
2030	B-1区 SK-227	陶器 皿	12.2	3.6	3.9	-	1/2	灰白色	内面から高台まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と壘付の3箇所は砂目痕。釉の一部は高台内まで流れる。	肥前産 17世紀前葉



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2031	B-1区 SK-228	陶器 溝縁皿	11.8	2.9	4.1	-	1/4	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に輪状に砂が付着。畳付にも砂付着。畳付と高台内の一部に釉が流れる。	肥前産 17世紀前葉
2032	B-1区 SK-228	陶器 皿	-	(1.8)	5.5	-	底部 完存	灰白色	透明釉	見込に5箇所砂目痕。畳付を釉ハギ。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
2033	B-1区 SK-231	土師器 焼塩壺	-	(8.4)	5.2	胴径 6.2	1/2	橙色	-	輪積成形。外面はナデ。摩耗する。内面はナデで指頭圧痕あり。	-
2034	B-1区 SK-231	石製品 石臼	全長 18.8	全幅 9.8	全厚 6.5	重量 (208) kg	1/2	-	-	上臼。下面に8分割10条単位の楕目。中央に円孔。上面と側面に加工痕。	砂岩
2035	B-1区 SK-232	磁器 染付 輪花皿	14.2	4.0	5.7	-	1/4	白色	透明釉	外面は宝文と圏線、内面は区画内に花卉文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1630～1640年代
2036	B-1区 SK-232	木製品 集水桶 継手	全長 板335 栓7.6	全幅 板198 栓8.0	全厚 板4.5 栓8.0	孔径 10.3	一部 欠損	-	-	上部に1箇所、下部に2箇所の釘孔。中央の2孔は貫通。下部の右隅を切り取る。木質は著しく劣化。	-
2037	B-1区 SK-232	木製品 集水桶 継手	全長 40.3	全幅 21.5	全厚 7.6	孔径 6.5	ほぼ 完存	-	-	側面に×と直線の刻書。他の継手よりも円孔小さく、栓なし。内面は湾曲する。断面は台形状。	-
2038	B-1区 SK-232	木製品 継手	全長 18.0	全幅 26.2	全厚 13.2	-	完存	-	-	側面中央に両面より穿孔。円形で径6.3～9.2cm。下面は凹凸あり、加工痕なし。上面は未加工か。	-
2039	B-1区 SK-235	陶器 溝縁皿	13.1	3.1	4.0	-	3/4	にぶい 黄橙色	内面から口縁部 外面まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。外面は回転ナデで無釉。見込には砂目痕。底部は回転削りて無釉。	肥前産 17世紀前葉
2040	B-1区 SK-236	瓦 軒丸瓦	全長 14.0	全幅 8.1	全厚 2.5	-	瓦当部 1/2	灰色 細 粒砂と石 英を含む	-	三ツ葉柏文。凸面は縦方向のナデ。凹面はコビキBの痕跡が残り、ナデで布目痕が僅かに残る。	-
2041	B-1区 SK-238	陶器 波縁皿	14.6	5.0	4.6	-	1/3 底部 完存	にぶい 橙色	内面から高台 付近まで 灰釉	絵唐津。口鏑。内面は鉄錆による草花文。高台付近から底部外面は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2042	B-1区 SK-238	磁器 染付 皿	13.1	3.1	6.1	-	1/2	灰白色	透明釉	外面は梅文と圏線、内面は草花文の染付。呉須はにぶい青色に発色。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀
2043	B-1区 SK-239	土師質 土器 皿	10.7	3.2	5.8	-	完存	橙色	-	回転ナデのち底部内面にナデ。回転糸切りのち板状圧痕。灯明皿として使用か。口縁部に煤付着。	-
2044	B-1区 SD-208	陶器 向付か沓 茶碗か	21.0	(5.2)	-	21.6	1/6	灰色	灰釉	絵唐津。外面に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
2045	B-1区 SD-208	青花 碗	-	(1.9)	4.8	-	底部 完存	白色	畳付を除き 透明釉	見込に染付。高台の内外面に圏線の染付。高台内に鉋痕。	中国産 景德鎮窯系
2046	B-1区 SD-208	土製品 人形	全長 2.9	全幅 1.7	全厚 (3.3)	-	一部 欠損	橙色	-	馬形。型成形。下面に円孔。	-
2047	B-1区 SD-212	陶器 人形か	全長 (9.1)	全幅 (6.3)	全厚 (3.1)	-	一部 残存	灰白色	外面は灰釉	鳥の置物か。中空。外面はヘラナデと工具の刺突による羽の文様か。内面は無釉で粗いナデ。	尾戸窯
2048	B-1区 SD-213	磁器 染付 中皿	-	(2.3)	14.4	-	1/8	白色	外面は透明釉	外面は圏線。見込は菊文。高台内は銘？と圏線。畳付は釉ハギ。被熱する。	肥前産 有田 1660～1670年代
2049	B-1区 SD-213	磁器 香炉か	11.3	(7.1)	-	胴径 11.8	1/4	灰白色	頸部内面から 外面に青磁釉 内面は無釉	青磁。回転ナデ。外面は格子状、口縁部には刻目状の陰刻の文様。胴部外面に把手の剥離痕。	肥前産 17世紀後半か
2050	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	6.8	1.5	3.7	-	ほぼ 完存	橙色 細粒砂を 多く含む	-	小型。内外面は回転ナデ。口縁部にわずかに煤付着。底部は回転糸切り。	-
2051	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	6.9	1.4	4.4	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色 細粒 砂を含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部に煤付着。	-
2052	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	7.0	1.5	4.1	-	4/5	にぶい 橙色 細粒 砂を含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部に煤付着。	-



遺物観察表36 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2053	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	7.3	1.5	4.0	-	4/5	橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部にわずかに煤附着。	-
2054	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	7.4	1.4	4.3	-	4/5	橙色 細粒砂を 多く含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部の一部に煤附着。	-
2055	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	7.3	1.4	4.8	-	完存	橙色 細粒砂を 多く含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部に煤附着。	-
2056	B-1区 SD-213	土師質 土器 小皿	6.9	1.4	4.1	-	一部 欠損	橙色 細粒砂を 多く含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部に煤附着。	-
2057	B-1区 SD-213	石製品 茶白か	-	(2.7)	-	重量 (121.8)	一部 残存	-	-	下白か。浅い皿状。端部を細く加 工。全面を研磨。	砂岩か
2058	B-1区 SD-214	土師質 土器 小皿	7.1	1.5	4.3	-	完存	にぶい橙 色 細粒 砂を含む	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。口縁部の一部に煤附着。	-
2059	B-1区 SD-215 上層	陶器 天目碗	-	(5.5)	-	-	1/6	灰白色	鉄釉	-	瀬戸・美濃産 16末～17世紀か
2060	B-1区 SD-215 上層	陶器 碗	-	(3.3)	5.4	-	底部 完存	黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	高台外面中央から底部は削り出 しで無釉。	17世紀か
2061	B-1区 SD-215 上層	陶器 碗	11.4	6.5	4.2	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆の植物文。高台付近か ら体部は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀前半
2062	B-1区 SD-215 上層	陶器 碗	10.5	7.2	4.4	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	畳付は釉ハギ。被熱する。	肥前産か 17世紀
2063	B-1区 SD-215 上層	陶器 碗	-	(3.8)	4.3	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで鉄釉	高台から底部は削り出し。畳付に 砂附着。	肥前産
2064	B-1区 SD-215 上層	陶器 碗	-	(5.9)	4.8	-	1/3	褐灰色	透明釉	内外面に白化粧土による打刷毛 目文。畳付は釉ハギで砂附着。	肥前産 18世紀
2065	B-1区 SD-215 上層	陶器 皿	12.8	3.6	4.6	-	4/5	灰色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目 痕。体部は回転ナデで無釉。高台 付近から底部は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2066	B-1区 SD-215 上層	陶器 皿	-	(3.3)	5.8	-	底部 完存	にぶい 橙色	内面から体部 まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。 高台付近から体部は削り出しで 無釉。被熱する。	肥前産 1610～1630年代
2067	B-1区 SD-215 上層	陶器 皿	14.2	3.7	5.7	-	5/6	橙色	内面から体部 上半まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。 回転ナデのち体部下半から底部 は削り出しで無釉。被熱する。	肥前産 17世紀前半
2068	B-1区 SD-215 上層	陶器 皿	12.5	3.7	4.5	-	1/3	灰褐色	外面は灰釉 内面は透明釉 高台は無釉	内面は白化粧土の刷毛目文。高台 付近から底部は削り出し。	肥前産 武雄 1610～1630年代
2069	B-1区 SD-215 上層	陶器 蓋物蓋	4.7	1.6	-	摘長 1.5	完存	灰黄色	外面に銅緑釉	紐状の摘を貼付。内面は横方向の 削りで無釉。	-
2070	B-1区 SD-215 上層	陶器 壺	12.2	(8.0)	-	胴径 20.9	1/4	灰白色	外面に自然釉	焼締。全面回転ナデ。外面肩部に 櫛描の波状文。	備前焼
2071	B-1区 SD-215 上層	陶器 甕	29.6	(3.4)	-	-	一部 残存	にぶい 赤色	鉄釉	回転ナデ。口縁端部を釉ハギ。	肥前産 17世紀
2072	B-1区 SD-215 上層	陶器 茶入	-	(3.5)	4.6	-	底部 完存	黄灰色	外面に自然釉	焼締。回転ナデ。底部付近に一部 削り。底部外面は回転糸切りで、 ヘラ記号あり。	備前焼
2073	B-1区 SD-215 上層	磁器 染付 小碗	9.6	5.5	3.8	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に圏線と山水文の染付か。畳 付は釉ハギで砂附着。	肥前産 18世紀前半
2074	B-1区 SD-215 上層	磁器 染付 皿	14.5	3.3	5.7	-	1/3	白色	透明釉	外面は無文。見込は草花文の染 付。高台内に砂附着。畳付は釉ハ ギ。	肥前産 1630～1640年代

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 葉	調整・文様・特徴	備 考
2075	B-1区 SD-215 上層	磁器 三足大皿 か	-	(4.0)	5.8	-	1/6	灰白色	青磁釉	青磁。体部外面に陰刻の文様のある脚を貼付。内面に陰刻による文様。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1630～1650年代
2076	B-1区 SD-215 上層	磁器 染付 大皿	32.6	5.4	20.4	-	1/6	灰白色	透明釉	外面は花唐草と圏線、内面は青海波文と山水文、高台内に圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 17世紀後半
2077	B-1区 SD-215 上層	磁器 染付 瓶	1.5	(194)	-	胴径 9.6	1/3	白色	口縁内面から 外面に透明釉	鶴首形。外面は紅葉文と「福」字の染付。内面は回転ナデ。	肥前産 18世紀前半
2078	B-1区 SD-215 上層	白磁 皿	16.3	3.8	6.4	-	1/6	灰白色	内面から高台 外面まで 白磁釉	高台から底部は削り出しで無釉。	中国産 16世紀か
2079	B-1区 SD-215 上層	青花 皿	-	(1.3)	6.0	-	1/4	灰白色	内面から高台 外面まで 透明釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。見込と高台に僅かに染付が残る。底部は回転削りで無釉。	中国産 漳州窯系 16世紀 後半～17世紀初頭
2080	B-1区 SD-215 上層	土師器 焼塩壺	5.3	8.1	3.0	胴径 5.9	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	輪積成形。内面はナデ、指頭圧痕、絞りが残る。著しく摩耗するため調整不明瞭。	関西産 17世紀
2081	B-1区 SD-215 上層	土師器 焼塩壺	4.5	8.8	2.9	胴径 6.7	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	輪積成形。口縁部内面は横ナデ。内面はナデ、指頭圧痕残る。著しく摩耗するため調整不明瞭。	関西産 17世紀
2082	B-1区 SD-215 上層	緑釉陶器 皿	-	(2.2)	6.3	-	底部 完存	灰白色	外面と底部に わずかに緑釉	軟質。蛇ノ目高台。	古代
2083	B-1区 SD-215 上層	土製品 ミニ チュア	全長 3.4	全幅 3.6	全厚 1.1	-	完存	暗灰黄色	-	鍋蓋形。上面はナデ。キラ粉の付着あり。底部は無調整または型成形か。黒斑あり。	-
2084	B-1区 SD-215 上層	木製品 漆器椀	14.3	4.9	6.1	-	一部 欠損	-	外面は黒塗 内面は赤塗	高台内に「×」の刻書。漆が著しく剥げる。	クリ
2085	B-1区 SD-215 上層	木製品 漆器蓋	10.4	3.7	-	摘径 4.7	2/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	文様なし。摘内に「×」の刻書か。漆の残存状況不良。	クリ
2086	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 10.1	全幅 2.0	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	片面のみ墨書か。短冊形。「□□入」の墨書。	-
2087	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 8.9	全幅 1.8	全厚 0.2	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。短冊形。表「野地久(右衛門様カ)」の墨書。裏面は解説不可。	-
2088	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 11.9	全幅 1.1	全厚 0.4	-	一部 残存	-	-	片面墨書。短冊形で下部は隅を切り、両面を面取り。柁目。墨書は解説不可。	-
2089	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 7.5	全幅 2.0	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。下部は丸く仕上げる。表「野地久右衛門」、裏は解説不可。	-
2090	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 (115)	全幅 2.5	全厚 0.5	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。「十市村□□□(彦四郎カ)」、裏「吉米四斗」の墨書。	-
2091	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 (172)	全幅 3.3	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。表「横山五(郎衛門様カ)…」、裏「堺屋十郎兵衛…」の墨書。	-
2092	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 14.0	全幅 (1.4)	全厚 0.4	-	1/2	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。下部は細く加工。解説不可。	-
2093	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 15.9	全幅 2.2	全厚 0.4	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。下部は細く加工。柁目。表「さいケ(在家)与七郎」の墨書。	-
2094	B-1区 SD-215 上層	木製品 木筒	全長 (177)	全幅 2.8	全厚 0.6	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。下部は細く加工。表「川清(カ)右(カ)衛門殿送」の墨書。	-
2095	B-1区 SD-215 中層	陶器 碗	12.5	8.0	5.2	-	1/2	灰白色	灰釉	畳付は釉ハギ。一部被熱。	肥前産 16世紀末～17世紀 初頭
2096	B-1区 SD-215 中層	陶器 皿	-	(2.8)	5.6	-	底部 完存	にぶい 黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による草花文。高台から底部は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2097	B-1区 SD-215 中層	陶器 蓋	4.8	2.8	笠径 10.1	摘径 1.8	1/2	黄灰色	外面は鉄釉	円柱状の摘。笠部は水平に伸びる。回転ナデで底部は回転糸切り。笠部内面と底部は無釉。	-
2098	B-1区 SD-215 中層	磁器 蓋物蓋	6.1	(2.0)	笠径 7.6	-	摘欠損	白色	外面と天井部内面は透明釉	外面に型紙摺による桐文か。口縁部内面とかえりは無釉で回転ナデ。摘が欠損か。	肥前産 17世紀末～18世紀 初頭
2099	B-1区 SD-215 中層	磁器 大皿	-	(7.1)	-	-	一部 残存	にぶい 赤褐色	青磁釉	青磁。内面は陰刻の雷文と草花文か。高台内は蛇ノ目釉ハギのち錆釉。2160と同一個体か。	肥前産 1650～1660年代
2100	B-1区 SD-215 中層	土師質 土器 皿	10.2	(2.8)	5.0	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。内面に煤付着。	-
2101	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 椀	-	(6.8)	-	-	体部 1/4	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面は朱の紅葉流水文。	-
2102	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 椀	11.8	(8.0)	-	-	1/2	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱の紅葉流水文。漆膜の残存状況不良。	ブナ属
2103	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 椀	14.3	9.1	6.5	-	1/2	-	内外面とも 赤塗	無文。漆膜の残存状況悪。体部に歪みと変形。見込に剥離あり。	ブナ属
2104	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 蓋	10.6	(3.5)	-	-	ほぼ 完存	-	内外面とも 赤塗	無文。漆膜の残存状況不良。	ブナ属
2105	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 匙	全長 (126)	全幅 (108)	全厚 1.4	-	一部 欠損	-	匙部は赤塗 柄部は黒塗	匙部は卵形。頸部は意図的に凹ませる。匙部の裏面は一部黒塗が残る。	ヒノキ属
2106	B-1区 SD-215 中層	木製品 漆器 折敷	全長 29.4	全幅 29.7	全高 3.2	-	一側面 欠損	-	黒塗	床板裏側の周囲は若干面取り。側面は分離。周囲の木釘残る。榫目。	マキ属
2107	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 (106)	全幅 2.0	全厚 0.4	-	2/3	-	-	片面に「白井三郎兵衛」の墨書。短冊形。	-
2108	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 22.2	全幅 (2.0)	全厚 0.3	-	1/2	-	-	両面墨書。短冊形。上部に径2mmの円孔が1箇所。上端部は隅を切る。榫目。解読不可。	-
2109	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 (112)	全幅 2.3	全厚 0.2	-	一部 欠損か	-	-	両面墨書。上端隅を切り、下端を細く加工。反りあり。表「和田久太郎」、裏「少々」の墨書。	-
2110	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 14.6	全幅 2.0	全厚 0.4	-	完存	-	-	両面墨書。下部は若干細く加工。裏「吉米…」の墨書。	-
2111	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 18.9	全幅 3.1	全厚 0.5	-	完存	-	-	両面墨書。上部に円孔。下部は細く加工。表「市原次兵衛殿 岡八右衛門」、裏「方々御音信物…」の墨書。	-
2112	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 (132)	全幅 1.9	全厚 0.6	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み、頭部は丸く加工。下部は細く加工。裏は「□三斗」の墨書。	-
2113	B-1区 SD-215 中層	木製品 木簡	全長 12.8	全幅 39.6	全厚 1.0	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書で、名前を多数記載。裏面に「八月廿日」の墨書。上部に径3mmの孔。板目か。立札か。	-
2114	B-1区 SD-215 中層	木製品 下駄	全長 21.6	全幅 8.9	全厚 4.0	-	完存	-	-	長方形で連歯。爪先に1箇所円孔。踵に釘孔状の小さな孔が1箇所。後歯は擦り減る。	-
2115	B-1区 SD-215 中層	木製品 櫛	全長 4.5	全幅 (6.7)	全厚 0.7	-	一部 残存	-	-	解櫛か。歯間が粗い。	-
2116	B-1区 SD-215 下層	陶器 碗	-	(4.0)	4.4	-	底部 完存	灰白色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	絵唐津。外面に鉄錆による文様。見込に3箇所胎土目痕。体部下半から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2117	B-1区 SD-215 下層	陶器 碗	10.3	6.3	4.6	-	4/5	赤褐色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。被熱のため釉に光沢なし。	肥前産 1590～1610年代
2118	B-1区 SD-215 下層	陶器 碗	12.1	7.5	5.2	-	3/4	灰白色	内面から高台 付近まで 長石釉	見込に3箇所目痕。高台から底部は削り出して無釉。	瀬戸・美濃系 志野焼か

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2119	B-1区 SD-215 下層	陶器 皿	-	(3.9)	4.8	-	底部 完存	橙色	内面から高台 付近まで 透明釉	絵唐津。内面は鉄錆による草花 文。底部外面は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2120	B-1区 SD-215 下層	陶器 皿	-	(3.6)	5.3	-	底部 完存	にぶい 赤褐色	内面から高台 付近まで 透明釉	絵唐津。内面は鉄錆による花文。 高台付近から底部外面は削り出 して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2121	B-1区 SD-215 下層	陶器 皿	13.5	3.1	5.0	-	2/3	明赤褐色	内面から体部 外面まで灰釉	回転ナデで高台付近は削り出し。 畳付に糸切り痕。内面に錆絵。見込 は蛇ノ目釉ハギ。口縁部に煤付着。	肥前産 長崎 17世紀後半～18世 紀前半
2122	B-1区 SD-215 下層	陶器 大皿	29.4	(5.7)	-	-	1/8	浅黄色	内面は銅緑釉 外面は透明釉	内面の釉はムラあり。	肥前産か 内野山 窯か 17世紀後半 ～18世紀前半
2123	B-1区 SD-215 下層	陶器 向付	9.4	(4.8)	-	胴径 11.3	一部 残存	黄灰色	透明釉	絵唐津。不整形。口縁端部を折り 曲げる。外面に錆絵。口錆。	肥前産 1590～1610年代
2124	B-1区 SD-215 下層	陶器 向付	18.6	(4.8)	-	-	1/3	黄灰色	灰釉 口縁端部は 鉄釉	絵唐津。口縁端部を折り曲げる。 外面は錆絵。体部の2箇所を外 面から凹ませる。	肥前産 1590～1610年代
2125	B-1区 SD-215 下層	陶器 鉢	-	(7.7)	9.0	-	1/3	浅黄橙色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目 痕。体部下半から底部は削り出し で無釉。	肥前産 1590～1610年代
2126	B-1区 SD-215 下層	磁器 鉄釉染付 碗	-	(3.0)	4.9	-	1/2	灰白色	内面は透明釉 外面は高台付 近まで鉄釉	見込に菊花の染付。高台付近から 底部は削り出して無釉。畳付には 回転糸切り痕。	肥前産 1630～1640年代
2127	B-1区 SD-215 下層	磁器 碗	10.4	6.0	4.3	-	2/3	白色	白磁釉	白磁。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 17世紀後半～18前 半
2128	B-1区 SD-215 下層	磁器 皿	13.0	3.4	4.6	-	2/3	灰白色	内面から高台 付近まで 白磁釉	白磁。見込は蛇ノ目釉ハギで砂付 着。高台付近から底部は削り出し で無釉。高台内に砂目痕。	肥前産 波佐見か
2129	B-1区 SD-215 下層	磁器 色絵 大皿	-	(3.1)	12.8	-	1/6	灰白色	透明釉	内面は緑・黒色の斜格子文と土坡 に草花文の上絵付。高台内は圏線 の染付。畳付は釉ハギ。被熱する。	肥前産 有田 1640～1650年代
2130	B-1区 SD-215 下層	土師質 土器 皿	8.7	2.6	4.6	-	ほぼ 完存	橙色	-	回転ナデ。底部外面は回転糸切 り。摩耗のため調整は不明瞭。	-
2131	B-1区 SD-215 下層	須恵器 皿	16.8	2.5	14.7	-	1/2	灰白色	-	内外面は回転ナデ。見込は回転ナ デのちナデ。底部は回転ヘラ切 りのちナデ。	古代
2132	B-1区 SD-215 下層	瓦器 椀	13.6	(2.4)	-	-	1/8	灰白色	-	外面はナデで指頭圧痕。口縁部内 外面は横ナデ。内面はナデのち横 方向の暗文。外面に重ね焼痕。	14世紀初
2133	B-1区 SD-215 下層	木製品 漆器椀	12.2	4.7	5.5	-	ほぼ 完存	-	内外面とも 赤塗	無文で薄手。亀裂あり。	ブナ属
2134	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 10.7	全幅 2.5	全厚 0.4	-	完存か	-	-	両面墨書。短冊形。表「□□ □ (善カ)右エ門」,裏「大ツ(豆) □ 斗□升入」の墨書。	-
2135	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 (5.5)	全幅 (2.3)	全厚 0.1	-	一部 残存	-	-	片面墨書。下部先端を細く加工。 解読不可。	-
2136	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 14.3	全幅 2.2	全厚 0.2	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上端片隅を切り,下部は 斜めに加工。表「当□(邸カ)へ…」, 裏「大豆式斗三(五カ)升入」の墨書。	-
2137	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 (9.7)	全幅 2.8	全厚 0.4	-	1/2	-	-	両面墨書。上端を丸く加工。上部 側面に切り込み。表「(河田清右衛 門カ)」の墨書。	-
2138	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 14.6	全幅 2.4	全厚 0.4	-	完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く仕上げる。裏「(あ さカ)ひな兵衛」の墨書。	-
2139	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 (13.7)	全幅 3.5	全厚 0.5	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上部両端に切り込み。 下部を若干細く加工。表「山内省 太郎様」,裏「□□」の墨書。	-
2140	B-1区 SD-215 下層	木製品 木簡	全長 19.1	全幅 2.9	全厚 0.5	-	完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く加工。板目。表「河(カ) 清□(忠カ)右エ門殿」の墨書。	-

遺物観察表40 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2141	B-1区 SD-215 下層	木製品 木筒	全長 20.2	全幅 2.7	全厚 0.6	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く加工。頸部に幅3mmの 変色した2本線あり。解説不可。	-
2142	B-1区 SD-215 下層	木製品 栓か	全長 14.7	全幅 3.2	全厚 3.3	-	完存	-	-	上面と下面は平ら。上部に横方向 の径2mmの円孔が貫通。板目。	-
2143	B-1区 SD-215 下層	金属製品 煙管 吸口	全長 5.9	全幅 1.6	全厚 1.6	重量 11.4	完存	-	-	銅製か。金鍍金。全面錆化。	-
2144	B-1区 SD-215 下層	金属製品 小柄	全長 8.0	全幅 1.4	全厚 0.5	重量 13.2	一部 残存	-	-	銅製か。中空。断面は三角形。薄い 板状の金属を2枚合わせる。金鍍 金。	-
2145	B-1区 SE-202	青磁 碗	-	(2.4)	4.4	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 まで青磁釉	見込はスタンプによる人物文。底 部外面は削り出しでほぼ無釉。	中国産 16世紀か
2146	B-1区 SX-207	木製品 下駄	全長 22.1	全幅 9.0	全厚 1.4	-	完存	-	-	長方形。前歯は差歯で2箇所を木 釘で留める。後歯は連歯。著しく 摩耗する。左足か。	-
2147	B-1区 SX-208	陶器 波縁皿	15.8	(4.8)	-	-	1/3	にぶい 黄橙色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による文様。 高台付近は回転削りで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2148	B-1区 SX-208	陶器 菊皿	11.8	(2.5)	-	-	1/5	灰白色	長石釉	底部は欠損する。	美濃 志野焼 17世紀初頭
2149	B-1区 SX-208	木製品 下駄	全長 16.5	全幅 6.7	全厚 2.3	-	完存	-	-	連歯。長方形。径8mmの孔が3箇所 にあり。表面の踵部分に「×」の刻 書。子供用。	-
2150	B-1区 SX-208	木製品 下駄	全長 21.9	全幅 9.2	全厚 5.5	-	完存	-	-	削り下駄。長方形。	-
2151	B-1区 P-205	陶器 碗	10.6	(6.2)	-	-	1/5	にぶい 赤褐色	内面から外面 体部まで灰釉	唐津系灰釉陶器。口錆。外面体部 下半は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2152	B-1区 P-206	土師質 土器 皿	11.0	3.0	5.5	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2153	B-1区 P-206	土師質 土器 皿	10.6	3.0	5.6	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2154	B-1区 P-207	土師器 焼塩壺	-	(8.8)	3.8	胴径 7.1	3/5	にぶい 黄橙色 礫を含む	-	輪積成形。内面に指頭圧痕残る。 著しく摩耗するため調整不明。	-
2155	B-1区 P-208	土師質 土器 皿	10.0	3.0	6.0	-	4/5	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部には煤付着。灯明皿として使 用か。	-
2156	B-1区 P-209	陶器 向付	-	(2.9)	-	-	一部 残存	灰白色	長石釉	口縁部は波縁状で透かしあり。内 面は鉄錆による文様。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2157	B-1区 P-210	陶器 皿	-	(2.1)	5.3	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。 高台付近から底部は削り出しで 無釉。	肥前産 1610～1630年代
2158	B-1区 P-211	木製品 継手	全長 22.7	全幅 12.5	全厚 12.0	-	完存	-	-	直方形に加工。側面から上面にL 字状に孔。径6.3～6.8cmの円孔。長 側面には横方向の加工痕が残る。	-
2159	B-1区 P-212	陶器 皿	-	(1.8)	5.8	-	2/3	にぶい 赤褐色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に3箇所 の胎土目痕。高台付近から底部は削 り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2160	B-1区 P-213	磁器 大皿	(5.7)	13.7	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。内面は陰刻による雷文。 高台内は蛇ノ目袖ハギのち錆釉。 2099と同一個体か。	肥前産 1650～1660年代
2161	B-1区 P-214	陶器 向付	-	(3.0)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	透明釉	口縁端部に錆釉。	肥前産か 1590～1610年代 か
2162	B-1区 P-215	陶器 碗	-	(3.2)	4.3	-	底部 完存	灰黄色	内面から高台 まで鉄釉	高台から底部は削り出しで無釉。	肥前産か 17世紀か



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2163	B-1区 P-216	木製品 櫛	全長 3.8	全幅 9.2	全厚 0.8	-	1/2	-	-	梳櫛か。蒲鋒形で歯間が狭く、密。	-
2164	B-1区 P-217	木製品 漆器椀	15.4	4.7	6.7	-	1/3	-	内外面とも 赤塗	漆膜の残存状況不良。	トネリコ属
2165	B-1区 P-218	磁器 染付 中皿	-	(2.9)	6.5	-	1/4	灰白色	透明釉	見込は草花文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀か
2166	B-1区 P-219	黒色土器 椀	-	(4.3)	9.1	-	1/5	にぶい黄 橙色 小 礫を含む	-	炭素の付着は見られない。断面三角形の高台貼付。摩耗のため調整不明瞭。	古代
2167	B-1区 P-220	陶器 向付	15.7	5.0	7.0	-	1/4	灰白色	長石釉	口縁部は波縁状で透かしあり。脚は帯状の物を曲げて貼付。内面は鉄錆による文様。高台脇に砂目痕。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
2168	B-1区 P-221	金属製品 銭貨	銭径 2.5	孔径 0.6	銭厚 0.1	重量 2.5	完存	-	-	銅製。新寛永か。錆化。	-
2169	B-1区 P-222	陶器 丸皿	12.0	3.1	5.8	-	1/6	にぶい 赤褐色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込の1箇所 に砂目痕。体部外面は回転ナデ、 高台付近は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀前葉
2170	B-1区 P-223	陶器 波縁皿	14.4	4.9	4.7	-	底部 完存 1/4	灰赤色	内面から体部 外面まで灰釉	絵唐津。口縁端部に錆釉。見込は 鉄錆による花文。底部は削り出し で無釉。	肥前産 1590～1610年代
2171	B-1区 P-223	陶器 波縁皿	13.9	4.9	5.0	-	1/2	にぶい 黄褐色	内面から体部 外面まで灰釉	絵唐津。口縁端部に錆釉。見込は 鉄錆による花文。体部外面は回転 ナデ、底部は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
2172	B-1区 P-223	土師質 土器 皿	10.2	2.6	4.8	-	2/3	灰黄色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2173	B-1区 P-223	土師質 土器 皿	10.2	2.4	5.0	-	ほぼ 完存	灰白色	-	水挽成形。回転ナデ。底部は回転 糸切り。	-
2174	B-1区 P-224	陶器 皿	-	(3.3)	4.8	-	底部 完存	灰白色	外面は透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。外面は貫入 が入る。底部は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 18世紀前半
2175	B-1区 P-224	磁器 皿	13.4	(2.5)	-	-	1/4	灰白色	白磁釉	白磁。見込は蛇ノ目釉ハギ。	肥前産 17世紀か
2176	B-1区 P-224	青花 碗	-	(2.5)	5.2	-	1/2	白色	透明釉	内面に1条の圏線の染付。見込は 蛇ノ目釉ハギ。	中国産 漳州窯系 16世紀 末～17世紀前半
2177	B-1区 P-224	土師質 土器 杯	11.6	3.4	6.5	-	1/4	橙色 赤色風化 礫を含む	-	回転ナデのち見込にナデ。底部は 回転糸切りのち板状圧痕。内外面 の一部に煤付着。	-
2178	B-1区 P-224	土師質 土器 皿	11.0	2.9	5.5	-	2/3	にぶい橙 色 砂粒 を含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。摩 耗する。	-
2179	B-1区 P-225	陶器 皿	-	(2.5)	5.4	-	底部 完存	灰白色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と畳付に4 箇所の砂目痕。高台付近から底部 は回転削り方で無釉。	肥前産 1610～1630年代
2180	B-1区 P-226	土師器 椀	-	(2.1)	4.9	-	底部 完存	にぶい黄 橙色 砂 粒を含む	-	摩耗が著しく調整不明。高台は貼 付。	12世紀か
2181	B-1区 P-227	金属製品 匙	全長 (13.5)	全幅 (2.0)	全厚 (0.1)	重量 (3.6)	一部 欠損	-	-	銅製。平扁。両端が広がる。	-
2182	B-1区 SA-301	陶器 猪口	6.0	2.9	2.9	-	1/2	黄色	内面から高台 付近まで 透明釉	高台から削り出しで無釉。漆継の 痕跡。	-
2183	B-1区 SK-306	磁器 染付 小丸碗	10.3	5.2	4.1	-	2/3	灰白色	透明釉	外面は二重網目文、内面と見込に 菊花文の染付。高台内は渦「福」の 銘。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀前半
2184	B-1区 SK-306	磁器 染付 猪口	6.4	2.8	3.0	-	7/8	灰白色	透明釉	外面は雨降文の染付。畳付は釉ハ ギ。	肥前産 18世紀



遺物観察表42 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2185	B-1区 SK-306	土師質 土器 皿	10.0	2.3	5.4	-	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部に煤付着。灯明皿として使用か。	-
2186	B-1区 SK-306	土製品 人形	全長 (6.1)	全幅 (3.9)	全厚 (5.8)	-	-	灰白色	透明釉	座る人物。白色系。全面にナデで、指頭圧痕が残る。	-
2187	B-1区 SK-306	石製品 鋳型か	全長 (4.3)	全幅 4.1	全厚 1.4	重量 (42.0)	一部 残存	-	-	丁寧に研磨。上面に円形と台形、弧状の凹み。2429と組か。	泥岩
2188	B-1区 SK-307	陶器 鉢	22.3	12.5	9.7	-	1/5 底部 完存	灰色	内面は灰釉 外面体部下 から高台は鉄釉	体部は回転ナデ。口縁部外面に白化粧土の刷毛目文、口縁端部は釉ハギ。壘付から底部は削り出し。	肥前産 武雄系 17世紀後半～18世紀前半
2189	B-1区 SK-308	磁器 青磁染付 杯	9.9	5.0	3.8	-	1/5	灰白色	外面は青磁釉 内面と高台内 は透明釉	高台内は圏線の染付と「大明成化年製」銘。	肥前産 18世紀後半
2190	B-1区 SK-309	陶器 瓶	-	(15.3)	16.1	-	1/2	灰黄色	外面は鉄釉 内面の一部に 灰釉	人形徳利形。外面の一部を凹ませ人形貼付。外面に多条の沈線。	-
2191	B-1区 SK-309	磁器 染付 瓶	1.8	13.7	5.0	胴径 8.0	完存	灰白色	口縁部内面 から外面は 透明釉	御酒徳利。外面に「御神前」銘。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀か
2192	B-1区 SK-309	木製品 漆器蓋	12.6	2.8	-	摘径 5.3	一部 欠損	-	外面は黒塗 内面は赤塗	文様なし。	ブナ属
2193	B-1区 SK-309	木製品 木筒	全長 11.4	全幅 (2.0)	全厚 0.4	-	2/3	-	-	両面墨書。短冊形。下端の片隅を切る。裏「□(大カ)□(兵カ)八」の墨書。	-
2194	B-1区 SK-309	木製品 木筒	全長 (11.7)	全幅 2.5	全厚 0.5	-	2/3	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。表は解読不可、裏「□(酒カ)四斗」の墨書。	-
2195	B-1区 SK-309	木製品 木筒	全長 (11.8)	全幅 2.3	全厚 0.5	-	2/3	-	-	両面墨書。上端両隅を切り、上部側面に切り込み。柁目。解読不可。	-
2196	B-1区 SK-309	木製品 木筒	全長 16.8	全幅 2.4	全厚 0.4	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上端は尖らし、上部側面に切り込み。下部は細く加工。柁目。裏「吉米(四斗カ)」の墨書。	-
2197	B-1区 SK-311	陶器 茶入か	-	(5.7)	3.6	胴径 6.5	1/3	灰白色	外面は体部下 半まで鉄釉 内面は無釉	回転ナデ。内面と外面体部下半は無釉。底部は回転糸切り。	-
2198	B-1区 SK-312	陶器 ミニ チュア	6.2	3.4	2.7	-	9/10	灰白色	内面から体部 外面まで鉄釉	鍋形。飯事道具。把手と脚を貼付。体部外面から底部は削り出しで無釉。	-
2199	B-1区 SK-312	土師質 土器 小皿	7.5	1.8	4.4	-	完存	にぶい 橙色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部に煤付着。灯明皿として使用。	-
2200	B-1区 SK-312	木製品 漆器刷毛	全長 (4.7)	全幅 7.5	全厚 1.4	-	柄部 完存	-	表面は赤塗 裏面は黒塗	柄は断面が半円形で、表面に丸彫による縞文。先端は湾曲し、接着剤らしき物が付着。	マキ属
2201	B-1区 SK-313	木製品 羽子板	全長 (27.7)	全幅 10.4	全厚 1.0	-	柄部 欠損	-	-	柁目か。	-
2202	B-1区 SK-314	磁器 染付 小碗	-	(2.6)	4.1	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に網目文と圏線、見込に植物文の染付。壘付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
2203	B-1区 SK-315	陶器 丸碗	11.3	7.5	4.8	-	7/8	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	見込に4箇所目の目痕。高台付近から底部は削り出しで無釉。	尾戸窯
2204	B-1区 SK-316	磁器 染付 小杯	7.4	4.4	2.9	-	1/2	灰白色	ほぼ全面に 透明釉	外面に鉄錆による圏線とコンニャク印判による松文。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2205	B-1区 SK-316	青花 皿	13.9	3.0	7.7	-	一部 残存	灰白色	壘付を除き 透明釉	内外面に文様や圏線の染付。	中国産 景德鎮窯系
2206	B-1区 SK-316	金属製品 鏡	全長 6.0	全幅 8.7	全厚 0.4	重量 57.8	完存	-	-	銅製。隅切方形。背面に鈕が2箇所。竹と虎文、「天下一」の陽刻文。	-

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2207	B-1区 SK-316	金属製品 小柄	全長 (5.0)	全幅 1.1	全厚 0.4	重量 (222)	一部 残存	-	-	銅製。中空。断面は三角形。外面の 片面に打ち出しの笹文。	-
2208	B-1区 SK-316	金属製品 銭貨	銭径 2.45	孔径 0.70	銭厚 0.10	重量 2.01	完存	-	-	銅製。治平元寶か。篆書。	初鑄造年 1064年
2209	B-1区 SK-317	陶器 瓶	-	(206)	9.6	胴径 11.4	一部 欠損	赤褐色	-	焼締。外面は回転ナデ。底部は回 転削りで「◇」形の刻印あり。	-
2210	B-1区 SK-317	陶器 瓶	-	(214)	9.5	胴径 11.3	一部 欠損	灰黄色	-	焼締。回転ナデで、底部は回転削 り。底部に刻書。	-
2211	B-1区 SK-317	陶器 瓶	-	(257)	10.2	胴径 13.7	一部 欠損	褐色	胴部外面は 鉄釉 内面は無釉	焼締。回転ナデ。底部はナデで部 分的に釉と砂が付着。	-
2212	B-1区 SK-317	磁器 染付 猪口	8.3	5.3	4.9	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	桶形。外面に雨降文と土坡に草花文 と圏線、高台内に方形枠に渦「福」の 銘と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀後半
2213	B-1区 SK-317	磁器 火入	10.6	8.0	6.0	-	ほぼ 完存	灰白色	口縁部内面 から外面は 白磁釉	内面は回転ナデ。見込に輪状に砂 付着。畳付は釉ハギ。	-
2214	B-1区 SK-318	陶器 皿	12.0	3.6	4.4	-	ほぼ 完存	灰白色	外面は高台付 近まで透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台付近か ら底部は削り出して無釉。	肥前産 内野山窯 18世紀前半
2215	B-1区 SK-321	陶器 筒形碗	9.0	6.5	5.0	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口鏝。高台付近から底部は削り出 して無釉。	京都または京都系
2216	B-1区 SK-321	陶器 皿	-	(2.7)	3.5	-	底部 完存	灰白色	内面から口縁 部外面まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に4箇所 の胎土目痕。体部から高台付近は回 転ナデ。底部付近は回転削り。	肥前産 1590～1610年代
2217	B-1区 SK-321	陶器 播鉢	25.4	8.5	10.7	-	1/2	明赤褐色	-	焼締。回転ナデのち内面に垂直及 び斜方向の播目。見込は×状の播 目。底部は無調整。	備前焼 17世紀初頭
2218	B-1区 SK-321	木製品 切匙	全長 (17.7)	全幅 3.2	全厚 0.4	-	2/3	-	-	先端部を薄く加工。	-
2219	B-1区 SK-322	陶器 皿	16.2	4.3	5.6	-	1/2	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近から底 部は削り出して無釉。見込と畳付 に砂目痕。	肥前産 17世紀前半
2220	B-1区 SK-322	陶器 皿	-	(2.0)	4.6	-	底部 完存	灰白色	外面は透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギし、砂目痕が 4箇所。高台付近から底部は削り 出して無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
2221	B-1区 SK-322	磁器 小杯	-	(4.3)	2.6	-	底部 完存	灰白色	高台まで 白磁釉	白磁。外面に丸彫による縞文。高 台から底部は削り出し。高台内と 畳付は無釉。	肥前産 1630～1640年代
2222	B-1区 SK-323	陶胎染付 碗	11.7	(5.8)	-	-	1/6	灰色	透明釉	外面に山水文の染付。	肥前産 18世紀前半
2223	B-1区 SK-324	陶胎染付 碗	11.4	(6.0)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	陶胎染付。外面は丸文と亀文の染 付。高台付近は削り出して無釉。	-
2224	B-1区 SK-325	磁器 瓶	-	(3.7)	2.8	胴径 (4.7)	底部 完存	灰白色	胴部外面は 鉄釉	回転ナデで、外面体部下半は回転 削りを加える。底部は回転糸切 り。	-
2225	B-1区 SK-326	陶器 皿	-	(3.1)	4.4	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	見込に鉄鏝による草花文。高台か ら底部は削り出し。	京都系
2226	B-1区 SK-326	陶器 猪口	5.2	3.2	1.7	-	4/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄鏝による笹文。貫入が入 る。高台から底部は削り出して無 釉。	-
2227	B-1区 SK-326	陶器 水盤	20.4	5.2	9.2	-	1/5	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	見込に1箇所目の目痕。高台付近か ら底部は削り出して無釉。	-
2228	B-1区 SK-326	磁器 染付 碗蓋	9.3	2.5	-	摘径 4.0	1/2	白色	透明釉	望料形。外面に氷裂文・矢羽根文と 圏線、内面に五弁花文と圏線・帯線 に丸文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半

遺物観察表44 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2229	B-1区 SK-326	磁器 染付 碗蓋	10.0	2.7	-	摘径 4.1	1/3	灰白色	透明釉 貫入が入る	望料形。外面は波に兎文と圏線、 内面に四方禪文と環状の松竹梅 文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2230	B-1区 SK-326	磁器 染付 猪口	4.1	2.0	1.4	-	1/2	白色	透明釉	型打成形。外面は柳文の染付か。 壘付は釉ハギ。	-
2231	B-1区 SK-326	木製品 漆器 碗	-	(3.2)	-	-	一部 残存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金の丸文に片喰文。	トチノキ
2232	B-1区 SK-327	陶器 色絵 半球形碗	9.1	(3.8)	-	-	1/8	灰白色	灰釉	外面に朱・緑色の片喰文の上絵 付。	京都・信楽系 18世紀末～19世紀 初頭
2233	B-1区 SK-327	陶器 波緑皿	12.6	3.7	6.8	-	ほぼ 完存	灰白色	灰釉	壘付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産か
2234	B-1区 SK-327	磁器 染付 丸碗	11.4	6.3	4.4	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に梅文、内面は口縁部に四方 禪文、見込に2条の圏線の染付。壘 付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2235	B-1区 SK-327	磁器 染付 碗蓋か	8.8	3.2	3.1	-	3/4	灰白色	透明釉	外面に天地逆の梅樹と松文の染 付。内面は無文。壘付は釉ハギ。	肥前系 18世紀
2236	B-1区 SK-327	磁器 染付 碗蓋か	9.8	3.5	-	摘径 3.6	ほぼ 完存	白色	透明釉	外面に天地逆の松竹梅文と波文、 内面に文字と四方禪文の染付。摘 端部は釉ハギ。内面に砂付着。	肥前系 18世紀後半
2237	B-1区 SK-327	磁器 染付 瓶	2.7	(10.5)	-	胴径 7.2	1/3	灰白色	白磁釉	鶴首形。胴部外面に「御神□ (前カ)」銘。内面は回転ナデで無 釉。	肥前産 18世紀か
2238	B-1区 SK-327	土師器 火鉢	-	(13.2)	-	胴径 29.1	4/5	にぶい 褐色 チャ ート を含む	透明釉	円筒形。著しい摩耗のため調整 不明。内面の一部に叩目残る。脚 部は接合面に刻目を入れ貼付。	-
2239	B-1区 SK-328	陶器 碗	12.5	(6.5)	-	-	1/4	灰色	灰釉	-	-
2240	B-1区 SK-328	磁器 染付 小碗	7.4	4.9	3.0	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に笹文と圏線の染付。壘付は 釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀後半
2241	B-1区 SK-328	磁器 染付 丸碗	10.4	5.7	3.9	-	1/2	白色	透明釉	外面に帯線と圏線。内面は帯線と 圏線とコンニャク印判の五弁花 文。高台内は圏線。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2242	B-1区 SK-328	磁器 染付 小皿	9.4	2.8	4.8	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に松葉と圏線、内面に菊唐草 文と圏線の染付。見込はコンニャ ク印判の五弁花文。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2243	B-1区 SK-328	磁器 染付 碗蓋	10.1	3.3	-	摘径 4.6	-	灰白色	透明釉	望料形。外面に桜文、天井部内 面に桜文と圏線、口縁部内面は四 方禪文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2244	B-1区 SK-328	磁器 染付 碗蓋	10.2	3.5	-	摘径 5.1	4/5	白色	透明釉	望料形。外面と天井部内面に草花 文と圏線、口縁部内面に四方禪 文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2245	B-1区 SK-328	磁器 染付 猪口	4.2	3.0	2.6	-	1/2	灰白色	透明釉	桶形。外面に鋸歯文の染付。壘付 は釉ハギ。	-
2246	B-1区 SK-328	磁器 火入	-	(5.5)	6.8	-	底部 完存	灰白色	外面は青磁釉 内面の一部に 釉が流れる	青磁。回転ナデ。見込は無釉で輪 状に砂付着。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2247	B-1区 SK-328	土師器 焜炉	23.2	25.0	24.8	胴径 29.0	1/2	にぶい 黄 橙色 金雲 母を含む	-	円筒形。切り込みの窓を持ち、角 状突起と脚を貼付。口縁部に円 孔。脚部に刻印。胴部外面は磨き。	-
2248	B-1区 SK-329	陶器 半球形碗	9.3	5.8	3.3	-	ほぼ 完存	浅黄橙色	内面から高台 付近まで 灰釉	外面に鉄錆による萩文。高台付近 から底部は削り出して無釉。	京都系
2249	B-1区 SK-329	陶器 水注	6.2	(9.4)	-	胴径 9.7	1/3	浅黄橙色	外面は鉄釉	内面は回転ナデで無釉。	-
2250	B-1区 SK-329	磁器 皿	11.6	3.4	3.8	-	2/3	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	見込は蛇ノ目釉ハギし、砂付着。 内面の一部に鉄錆による文様。高 台から底部は削り出して無釉。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2251	B-1区 SK-330	陶器 色絵 半球形碗	-	(4.4)	2.6	-	1/6	灰白色	内面から高台付近まで透明釉または灰釉	外面に朱・緑色の上絵付による文様。高台から底部は削り出して無釉。一部被熱。	京都・信楽系
2252	B-1区 SK-330	陶器 碗	12.6	8.9	4.7	-	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	灰釉	呉器手。畳付は釉ハギ。	17世紀後半～18世紀前半
2253	B-1区 SK-330	陶器 輪花皿	11.2	2.3	4.5	-	1/3	灰白色	透明釉	見込に鉄錆と白化粧土による草花文。畳付は釉ハギ。	尾戸窯
2254	B-1区 SK-330	磁器 染付 丸碗	-	(4.2)	4.5	-	1/2	白色	透明釉	外面に草花文と梅文・圏線、高台内に圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2255	B-1区 SK-330	磁器 染付 丸碗	8.8	5.7	3.7	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に笹文、内面に四方禪文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2256	B-1区 SK-330	磁器 染付 望料碗	11.1	6.9	4.5	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は花唐草文と圏線、内面は口縁部に四方禪文、見込に草花文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2257	B-1区 SK-330	土師質 土器 小皿	7.4	1.2	5.2	-	1/2	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2258	B-1区 SK-330	木製品 木筒	全長 (15.2)	全幅 5.9	全厚 1.5	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。短冊形。側面を丸く加工。何かの転用か。表面は一部剥離。「渡辺…」の墨書。	-
2259	B-1区 SK-330	木製品 曲物蓋	全長 19.9	全幅 11.0	全厚 3.7	-	天井部 完存	-	-	楕円形。曲物は皮綴で、天井部とは木釘で接合。接合箇所は漆で強化か。天井部外面に墨書。	-
2260	B-1区 SK-331	磁器 染付 小丸碗	9.8	5.1	3.4	-	1/4	白色	透明釉	外面に「福」字と花文・圏線、内面に圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2261	B-1区 SK-331	磁器 青磁染付 丸碗	10.9	6.5	4.4	-	5/6	灰白色	外面は青磁釉 内面と高台内は透明釉	内面に四方禪文、見込に圏線の染付とコンニャク印判の五弁花文、高台内に渦「福」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2262	B-1区 SK-331	磁器 青磁染付 碗蓋	9.6	3.3	-	摘径 4.2	3/5	灰白色	外面は青磁釉 内面と摘内は透明釉	内面に四方禪文と圏線の染付、コンニャク印判の五弁花文。摘内に渦「福」の銘。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2263	B-1区 SK-331	磁器 染付 瓶	-	(8.2)	-	胴径 7.1	1/2	灰白色	外面は透明釉 内面に一部釉が流れる	外面に「御神前」銘の染付。内面は回転ナデで無釉。	肥前産 18世紀か
2264	B-1区 SK-331	土師質 土器 皿	11.4	1.7	7.4	-	1/5	灰白色	-	白土器。ナデ調整。口縁部は横ナデ。見込に型押による陽刻の「寿」字文。	尾戸窯
2265	B-1区 SK-331	土師器 焙烙	34.9	(7.4)	-	-	1/6	にぶい黄 橙色 金雲 母を含む	-	底部は型成形。内面から口縁部外面まで横方向のナデ。口縁端部に円孔。口縁部外面に煤附着。	関西系 18世紀後半
2266	B-1区 SK-331	瓦質土器 火鉢	22.0	9.8	21.6	胴径 24.6	1/4	灰白色	-	円筒形。円柱形の脚を貼付。内面から体部外面は回転ナデ、底部外面は無調整。	-
2267	B-1区 SK-331	土製品 人形	全長 (4.0)	全幅 (3.6)	全厚 (1.1)	-	1/3	浅黄橙色	-	型成形。僧侶。中空か。内面はナデ。	-
2268	B-1区 SK-331	土製品 人形	全長 (9.0)	全幅 5.9	全厚 (2.5)	-	1/2	にぶい 黄橙色	-	型成形。人物形。中空か。下面に径約6mmの円孔あり。背面は接合面で剥離。	-
2269	B-1区 SK-331	金属製品 不明	全長 (9.5)	全幅 1.3	全厚 0.2	重量 (2.9)	一部 欠損	-	-	銅製。断面は方形。棒状金具の上端は湾曲して輪状の金具と連結。	-
2270	B-1区 SK-332	陶器 大皿	34.2	(7.5)	-	-	1/4	にぶい 橙色	灰釉	絵唐津。外面の高台付近は回転削りて無釉。口縁端部は口錆。内面に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
2271	B-1区 SK-333	陶器 丸碗	10.0	5.9	4.3	-	1/2	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	京焼風。外面に山水文の染付。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「小松吉」の刻印。	肥前産 17世紀後半
2272	B-1区 SK-333	陶器 丸碗	11.2	6.7	5.0	-	2/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	京焼風。外面に染付で山水文か。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「清水」の刻印。	肥前産 17世紀後半

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2273	B-1区 SK-333	陶器 杉形碗	10.8	6.5	4.5	-	4/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に呉須と鉄錆による松文。高 台付近から底部は削り出しで無 釉。	京都系
2274	B-1区 SK-333	陶器 甕	34.4	(7.1)	-	-	1/6	にぶい 黄橙色	-	口縁部内部から外面は回転ナデ。 内面はナデ。口縁部上端に3条の 沈線。	丹波焼 18世紀
2275	B-1区 SK-333	磁器 染付 小丸碗	8.5	4.9	3.4	-	4/5	白色	透明釉	外面にコンニャク印判による五 弁花文と松葉文・圏線の染付。高 台内に圏線。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2276	B-1区 SK-333	磁器 染付 小丸碗	9.5	5.4	3.8	-	1/2	白色	透明釉	外面にコンニャク印判による鶴 文・松文と鳥文と圏線の染付。内面 に圏線。高台内に圏線の染付と銘。	肥前産 18世紀前半
2277	B-1区 SK-333	磁器 染付 丸碗	9.4	5.5	3.7	-	1/4	白色	透明釉	外面に雷文帯と十六弁八重菊文・ 菊葉文。高台外面に○×文の染 付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田か 18世紀
2278	B-1区 SK-333	磁器 染付 猪口	9.3	6.4	5.5	-	3/4	白色	透明釉	桶形。外面は草花文か。高台内に 圏線と「大明年製」銘か。畳付は釉 ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 初頭
2279	B-1区 SK-333	土師器 杯	5.3	4.6	4.2	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	手捏成形か。口縁部内外面は横ナ デ。その他はナデ。	-
2280	B-1区 SK-333	土師器 蓋	7.2	2.4	-	摘幅 1.4	1/2	にぶい 黄橙色	-	棒状の摘。口縁部内外面は横ナ デ。	-
2281	B-1区 SK-333	土製品 支脚か	-	(10.7)	8.2	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	全面ナデ。脚部は中実で直立。	-
2282	B-1区 SK-333	土師器 不明	全長 (3.7)	全幅 (2.6)	全厚 (0.5)	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	全面ナデ。片面に墨書あり。	-
2283	B-1区 SK-334	陶器 色絵 合子蓋	5.5	1.1	-	-	完形	灰白色	灰釉	天井部外面に朱・緑・白色の菖蒲 文の上絵付。口縁部内面は釉ハ ギ。一部被熱。	京都系
2284	B-1区 SK-334	磁器 色絵 碗	-	(3.2)	-	-	一部 残存	白色	透明釉	外面に朱色の上絵付。内面に四方 襷文の染付。被熱する。	肥前産 有田
2285	B-1区 SK-334	青花 皿	-	(1.4)	7.7	-	-	白色	透明釉	内面と見込に染付。高台に圏線の 染付。高台内に鈷痕。畳付は無 釉。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
2286	B-1区 SK-334	青花 皿	-	(1.8)	8.7	-	1/3	灰白色	透明釉	口縁部と見込に濃地に白抜文様 と草花文の染付。高台内に鈷痕と 圏線の染付。畳付は無釉。被熱。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
2287	B-1区 SK-334	磁器 変形皿	-	3.1	-	-	1/3	灰白色	透明釉	型打成形で扇形か。型紙摺で外面 に雷文帯。内面に唐草文。見込に風 景文。高台内に銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀第2～3四半 期
2288	B-1区 SK-334	瓦 鬼瓦か	全長 (114)	全幅 (128)	全厚 (3.6)	-	一部 残存	灰白色	-	型成形。凸面は型による隆起線状 の文様。キラ粉付着。凹面はナデ で刻目が残る。接合面で剥離。	-
2289	B-1区 SK-334	金属製品 鋏か	全長 (350)	全幅 (194)	全厚 (2.5)	重量 (152) kg	一部 残存	-	-	鉄製。くの字状。基部は扁平で、先 端は二股。先端の内側は更に二股 に分かれる。全面に著しく錆化。	-
2290	B-1区 SK-335	陶器 合子蓋	4.9	1.1	笠径 5.3	-	1/3	灰白色	灰釉	天井部外面に鉄錆による松文。口 縁部は釉ハギ。	-
2291	B-1区 SK-335	磁器 染付 腰折碗	-	(5.9)	4.8	-	1/4	黄灰色	透明釉	外面に松葉文と圏線。見込に2条 の圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2292	B-1区 SK-335	土師質 土器 小皿	-	(0.8)	4.5	-	底部 完存	にぶい 橙色	-	底部に径3mmの円孔。回転ナデ。底 部は回転糸切り。	-
2293	B-1区 SK-336	磁器 小杯	6.9	3.5	2.6	-	完存	灰白色	白磁釉	白磁。無文。畳付は釉ハギ。	肥前系か 18世紀
2294	B-1区 SK-336	土師質 土器 小皿	7.2	1.5	4.0	-	2/3	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部の一部に煤付着。	-



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2295	B-1区 SK-336	土師質 土器 小皿	7.1	1.4	4.4	-	完存	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部に煤付着。	-
2296	B-1区 SK-337	陶器 角皿	-	2.8	-	-	一部 残存	灰白色	長石釉	長石釉を厚く施釉。貫入が入る。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃系か
2297	B-1区 SK-338	陶器 色絵 碗	9.8	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に黄・緑・朱・青色または金彩による区画文の上絵付。被熱する。	京都系か
2298	B-1区 SK-338	陶器 端反碗	14.1	(6.4)	-	-	1/4	灰白色	灰釉	外面に白象嵌による暦文と印花文・圏線。	尾戸窯
2299	B-1区 SK-338	陶器 碗蓋	11.0	2.5	-	摘径 4.5	1/3	灰白色	透明釉	外面に鉄錆による梅樹文と白化粧土による上絵付の梅花文。摘端部は釉ハギ。	-
2300	B-1区 SK-338	陶器 碗蓋	12.2	3.0	-	摘径 4.7	3/4	灰白色	灰釉	外面に白象嵌による暦文と印花文。摘端部は釉ハギ。被熱のため器面粗れる。	尾戸窯
2301	B-1区 SK-338	陶器 人形	-	-	-	残存 長 (13.4)	一部 残存	にぶい 褐色	外面は鉄釉	焼締。獅子形か。表面と裏面に渦巻状の沈線。	-
2302	B-1区 SK-338	磁器 変形皿	-	3.3	-	-	1/3	灰白色	透明釉	型打成形で扇形。型紙摺で、外面に雷文帯、内面に唐草文、見込に風景文。高台内に銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀第2～3四半 期
2303	B-1区 SK-338	磁器 変形皿	(13.4) × (7.7)	2.9	(10.5) × 4.3	-	2/3	灰白色	透明釉	型打成形で扇形。型紙摺で、外面に雷文帯、内面に唐草文と風景文。高台内に「(奇玉宝)鼎之珍」銘。	肥前産 有田 18世紀第2～3四半 期
2304	B-1区 SK-338	磁器 色絵 碗蓋	10.6	2.8	-	摘径 4.6	1/3	灰白色	透明釉	望料形。外面は蓮弁文・圏線の染付と、金彩・墨色の窓絵。内面に四方禪文と圏線・松竹梅文の染付。	肥前産 有田 18世紀後半
2305	B-1区 SK-338	磁器 香炉または 火入	-	(4.1)	6.3	-	1/2	灰白色	外面は青磁釉	青磁。内面は無釉で回転ナデ。見込に砂付着。畳付は釉ハギ。	肥前産
2306	B-1区 SK-338	磁器 染付 仏飯器	5.8	5.5	2.7	-	1/2	灰白色	透明釉	杯部外面に斜格子文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	19世紀か
2307	B-1区 SK-338	土師質 土器 皿	10.8	1.7	7.8	-	1/3	灰白色	-	白土器。見込に型押による陽刻の高砂文。口縁部は横ナデ、底部はナデ。	尾戸窯
2308	B-1区 SK-338	軟質施釉 陶器 角皿か	-	(4.0)	-	-	一部 残存	灰白色	黄色釉	内面に型押による網目文。	-
2309	B-1区 SK-338	緑釉陶器 皿	-	(1.3)	7.5	-	1/5	灰色	緑釉	硬陶(須恵質)。蛇ノ目高台で畳付は釉ハギ。底部は削り出して高台内は無釉。	古代
2310	B-1区 SK-339	木製品 木筒	全長 20.5	全幅 2.4	全厚 0.9	-	完存	-	-	両面墨書。上部に円孔。下部は薄く加工。表「横山五郎衛門」、裏「たすま(カ)□(すカ)□」の墨書。	-
2311	B-1区 SK-340	土師質 土器 皿	11.0	2.2	5.8	-	1/3	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2312	B-1区 SK-341	陶胎染付 碗	-	(3.6)	5.0	-	1/2	黄灰色	透明釉	白化粧土のち外面に染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
2313	B-1区 SK-341	磁器 青磁染付 小丸碗	11.0	6.1	4.5	-	1/5	灰白色	外面と高台内 は青磁釉 内面は透明釉	内面に四方禪文と圏線の染付、コンニャク印判による五弁花文。高台内に渦「福」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2314	B-1区 SK-341	青花 小碗	7.9	4.5	3.6	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線。内面に圏線、見込に花文の染付。畳付は無釉。	中国産 景德鎮窯系か 17世紀前半
2315	B-1区 SK-341	木製品 桶蓋	全長 9.4	全幅 9.4	全厚 0.8	-	5/6	-	-	片面墨書。柾目。「上ノ」の墨書。	-
2316	B-1区 SK-341	木製品 桶蓋	全長 (6.7)	全幅 (11.0)	全厚 0.7	-	1/2	-	-	中央に墨書あり。柾目。墨書は解読不可。	-



遺物観察表48 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2317	B-1区 SK-341	木製品 桶蓋	全長 (8.4)	全幅 (7.0)	全厚 0.5	-	1/3	-	-	幅7mmの皮紐が残る。「進」の墨書。 柾目。	-
2318	B-1区 SK-341	木製品 桶蓋	全長 (116)	全幅 4.2	全厚 0.4	-	1/3	-	-	中央に皮紐が残る。「寿村」の墨書。 柾目。	-
2319	B-1区 SK-342	磁器 色絵 大皿か	-	(1.8)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	口鏝。内面には鉄鏝による唐草文 と墨・緑色の上絵付。	肥前産 有田
2320	B-1区 SD-302	陶器 甕	31.0	(27.2)	-	胴径 34.4	1/4	にぶい 黄橙色	外面は鉄釉 内面は鉄釉を 刷毛塗り	回転ナデのちナデ。口縁端部に沈 線3条。外面に多条の沈線。肩部に 焼成後の穿孔。	丹波焼 18世紀
2321	B-1区 SD-302	土製品 人形	全長 4.4	全幅 3.1	全厚 1.9	-	ほぼ 完存	橙色	-	型成形。天神様。底部に円孔。やや 摩耗する。全面にキラ粉付着。	-
2322	B-1区 SD-303	陶器 半球形 小碗	8.5	5.3	3.0	-	9/10	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄鏝による文様。高台から 底部は削り出しで無釉。	京都・信楽系
2323	B-1区 SD-303	陶器 色絵 鉢	20.1	6.2	5.9	-	1/6	にぶい 黄橙色	透明釉か 焼成不良のた め白色	内外面に朱・緑色の草花文と圏線 の上絵付。	中国産 漳州窯系か 17世紀前半
2324	B-1区 SD-303	磁器色絵 ミニ チュア	2.3	1.1	0.7	-	完存	灰白色	白磁釉	鉢形。外面には朱色の上絵付によ る文様。畳付は釉ハギ。	肥前産
2325	B-1区 SD-303	瓦 再加工品	全長 8.5	全幅 6.9	全厚 1.6	重量 115.0	完存	暗灰色	-	楕円形に加工。側面は摩耗。	-
2326	B-1区 SD-304	磁器 根付か	全長 5.8	全幅 2.3	全厚 2.3	重量 21.0	完存	灰白色	外面に白磁釉	白磁。寿老人。型成形か。中空。背 面に径5mmの円孔2つ。	-
2327	B-1区 SD-306	陶器 皿	12.7	3.1	4.8	-	1/3	灰黄色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に4箇所の 胎土目痕。高台から底部は削り出 し。	肥前産 1590～1610年代
2328	B-1区 SD-310	金属製品 銭貨	銭径 2.25	孔径 0.70	銭厚 0.11	重量 1.64	完存	-	-	銅製。寛永通寶ではない。摩耗す るため判読不可。	-
2329	B-1区 SE-303	陶器 皿	10.4	2.1	5.7	-	2/3	褐灰色	鉄釉か	底部に円錐形の脚を貼付。内外面 に煤付着。灯明皿か。	-
2330	B-1区 SE-303	青花 碗	12.8	4.7	6.0	-	完形	白色	透明釉	外面・内面・高台内に圏線、見込に 圏線と文字の染付。高台内に鈷痕 が残る。畳付は無釉。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前葉～中葉
2331	B-1区 SG-301 裏込	磁器 染付 小碗	9.4	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面は花文、内面は四方禪文の染 付。	肥前系 18世紀後半
2332	B-1区 SG-301 中層	磁器 染付 輪花皿	14.0	4.5	8.9	-	1/5	白色	透明釉	外面に唐草文、内面に濃地に波文 と桜文、見込に濃地に龍文の染付。 高台内に圏線と銘。畳付は釉ハギ。	肥前系
2333	B-1区 SG-301 中層	磁器 染付 小杯	7.3	5.6	3.5	-	3/4	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付。畳付 は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀
2334	B-1区 SG-301 下層	陶器 半球形 小碗	7.8	4.1	2.7	-	2/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄鏝による草花文。高台付 近から底部は削り出しで無釉。	京都系
2335	B-1区 SG-301 下層	陶器 稜花小皿	10.3	3.0	5.1	-	3/4	灰白色	灰釉	見込に白化粧土と鉄鏝による花 文。高台外面と畳付は釉ハギ。	尾戸窯
2336	B-1区 SG-301 下層	青花 皿	-	(1.0)	12.0	-	一部 残存	白色	透明釉	外面に圏線、見込には窓に風景文 の染付か。高台内に放射状の鈷 痕。畳付は釉ハギで砂付着。	中国産 景德鎮窯系
2337	B-1区 SG-301 下層	瓦 平瓦	全長 (8.0)	全幅 (6.5)	全高 1.9	-	一部 残存	暗灰色	-	側面に「安□友」の刻印。	土佐産 安芸か
2338	B-1区 SG-301 下層	土製品 人形	全長 (5.5)	全幅 (4.5)	全厚 (3.4)	-	一部 残存	灰白色	-	白色系。座る人物。全面ナデ。	-

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2339	B-1区 SX-304	陶器 碗	-	(2.2)	4.8	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	京焼風。高台内に「清水」の刻印。 高台付近から底部は削り出して 無釉。	肥前産 17世紀後半
2340	B-1区 SX-304	陶器 碗	11.7	5.7	4.0	-	底部 完存	黄灰色	透明釉	内外面に白化粧土の刷毛目文様。 見込には輪状に砂付着。高台内外 面に砂付着。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀か
2341	B-1区 SX-304	陶器 碗	11.1	(7.2)	-	-	2/3	灰白色	内面から外面 体部下半まで 透明釉	外面に鉄錆による印刻のクルス 文。	尾戸窯
2342	B-1区 SX-304	陶器 火入	8.1	4.9	4.6	10.2	3/5	におい 黄橙色	口縁部外面に 鉄釉 外面下 半に透明釉	内面は回転ナデで無釉。見込に輪 状の重ね焼痕。畳付は釉ハギ。	-
2343	B-1区 SX-304	陶胎染付 火入	11.2	7.3	4.8	-	1/3	灰黄褐色	口縁部内面か ら外面体部下 半まで透明釉	筒形。外面に白化粧土のち花文の 染付。内面は回転ナデで無釉。高台 付近から底部は削り出して無釉。	-
2344	B-1区 SX-304	陶器 小壺	2.3	(5.3)	-	胴径 5.4	一部 残存	灰白色	-	焼締。口縁部に上下2段に径4mmの 円孔(計4箇所)が対角にあり。	-
2345	B-1区 SX-304	陶器 人形	全長 (3.5)	全幅 (4.2)	全厚 (3.6)	-	一部 残存	灰色	灰釉	箱を持つ人物か。箱には縦に径4 mmの円孔が貫通。	尾戸窯か
2346	B-1区 SX-304	磁器 染付 碗	10.6	7.4	5.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に風景文と圏線の染付。畳付 は釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
2347	B-1区 SX-304	磁器 菊花形皿	14.0	4.7	7.6	-	1/6	白色	白磁釉	白磁。型打成形。内面に型押による 陽刻の菊花文。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
2348	B-1区 SX-304	磁器 菊花形 猪口	9.8	6.1	6.0	-	3/4	灰白色	白磁釉	白磁。型打成形。畳付は釉ハギ。	肥前産 1670～1690年代
2349	B-1区 SX-304	磁器 染付 蓋物	9.4	6.4	5.8	-	1/3	灰白色	透明釉	筒形。外面に花唐草文と圏線の染 付。口縁端部から口縁部内面・畳 付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2350	B-1区 SX-304	青花 皿	13.0	4.8	6.0	-	1/3	灰白色	畳付を除き 透明釉	内外面に圏線。見込は圏線と文 字。高台内に圏線と放射状の鈍 痕。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半～中葉
2351	B-1区 SX-304	土師器 鉢	6.6	4.4	7.4	-	1/3	灰黄褐色 金雲母を 含む	-	外面は横方向の磨き。内面は回転 ナデ。底部外面は磨き。	-
2352	B-1区 SX-304	木製品 漆器椀	-	(7.4)	6.3	-	底部か ら体部 完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に朱の丸に柘文が3箇所にあ り。内面の漆膜は状態不良。	トチノキ
2353	B-1区 SX-304	木製品 漆器椀	12.7	9.1	5.8	-	1/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金の丸に龍胆文。金色は色 褪せる。内面の漆膜は状態不良。	トチノキ
2354	B-1区 SX-304	木製品 漆器椀	-	(3.7)	4.8	-	3/4	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金の丸に巴文。	トチノキ
2355	B-1区 SX-304	木製品 木簡	全長 16.4	全幅 2.3	全厚 0.3	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。短冊形。墨書は解説不 可。	-
2356	B-1区 SX-304	木製品 木簡	全長 18.8	全幅 4.8	全厚 0.9	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形。上部に円孔。表 は記号と「村田□(香カ)庵□ 松 山彦内殿 門田信平」の墨書。	-
2357	B-1区 SX-304	木製品 不明	全長 42.6	全幅 (17.2)	全厚 2.9	-	一部 欠損	-	-	下端を除き側面を丸く加工。基部 には1.7×1.1cmの方形の孔あり。板 目。調度品飾りか。	-
2358	B-1区 SX-305	陶器 碗	11.6	7.6	5.1	-	1/6	灰白色	高台を除き 漆黒釉	拳骨茶碗。体部の数箇所を凹ま す。外面に長石釉を散らす。高台 は削り出し。畳付に刻印。	瀬戸・美濃産 18世紀後葉
2359	B-1区 SX-305	土製品 人形	全長 7.3	全幅 (4.7)	全厚 2.3	-	4/5	におい 黄橙色	-	大形。型成形。底部に円孔。	-
2360	B-1区 SX-306	陶器 大甕	-	(20.0)	30.5	-	1/4	灰白色	体部内面に 鉄釉	焼締。外面は横方向のナデ、底部 は無調整。内面はナデで、2箇所 に半円形の刻印。	備前焼

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2361	B-1区 SX-307	磁器 染付 小丸碗	10.0	5.5	4.1	-	1/2	白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付とコンニャク印判による菊花文。高台内に渦「福」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2362	B-1区 SX-307	磁器 染付 小丸碗	10.3	5.0	3.8	-	9/10	灰白色	透明釉	外面に丸文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2363	B-1区 SX-307	磁器 染付 小丸碗	10.2	5.8	3.8	-	2/3	白色	透明釉	外面に圏線の染付とコンニャク印判の鶴・松文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2364	B-1区 SX-307	磁器 青磁染付 望料碗	11.1	6.1	4.8	-	完存	灰白色	外面は青磁釉 内面と高台内 は透明釉	口縁部内面に四方襷文、見込に圏線と丸に草花文の染付。畳付は釉ハギで細かい砂付着。	肥前産 18世紀後半
2365	B-1区 SX-307	磁器 青磁染付 丸碗	11.0	6.9	4.1	-	1/2	灰白色	高台内を除き 青磁釉 高台 内は透明釉	内面は四方襷文の染付、見込は圏線とコンニャク印判の五弁花文。高台内は二重方形枠に渦「福」の銘。	肥前産 18世紀後半
2366	B-1区 SX-307	磁器 染付 広東碗	-	(2.9)	6.8	-	底部 完存	白色	透明釉	見込に圏線と花文・樹文、高台内に圏線の染付と銘。畳付は釉ハギ。	肥前系 1780年以降
2367	B-1区 SX-307	磁器 色絵 中皿	-	(3.9)	12.2	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に緑色の唐草文の上絵付。見込に陽刻による唐草文で緑色の上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1650年代
2368	B-1区 SX-307	磁器 染付 猪口	6.0	2.0	3.2	-	完存	灰白色	透明釉	外面に松文とみられる染付。畳付は釉ハギ。	肥前系
2369	B-1区 SX-307	木製品 漆器栓	全長 10.0	全幅 5.7	全厚 5.7	下端 面径 3.1	完存	-	下端部を除き 赤塗	側面を多角形に面取り。上端面に刻書あり。	スギ
2370	B-1区 SX-307	金属製品 火箸	全長 15.8	全幅 1.1	全厚 1.1	重量 16.8	1本は 一部 欠損	-	-	銅製か。2本。先端を細く加工。上端は肥厚し、断面は円形で上面は平ら。錆化する。	-
2371	B-1区 SX-308	陶器 皿	-	(2.0)	4.6	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 まで透明釉	見込と高台の4箇所に砂目痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
2372	B-1区 SX-308	陶器 線香筒	2.9	(10.5)	-	胴径 3.2	一部 残存	灰黄色	口縁部内面から 外面に透明釉 緑釉流し掛け	体部外面の1箇所に丸彫による文様。内面は回転ナデで無釉。	-
2373	B-1区 SX-308	磁器 染付 小丸碗	8.9	4.9	3.5	-	完存	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2374	B-1区 SX-308	磁器 三足香炉	11.0	8.7	6.0	-	ほぼ 完存	灰色	口縁部内面から 外面に 青磁釉	青磁か。脚を3箇所に貼付。脚部外面に陽刻による文様。内面は回転ナデで無釉。脚接地面は釉ハギ。	-
2375	B-1区 SX-309	陶器 碗	12.8	6.0	4.4	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで光沢 のある透明釉	内面に白化粧土による打刷毛目文。高台付近から底部は削り出しで無釉。	-
2376	B-1区 SX-309	陶器 色絵 半球形碗	8.8	6.6	3.6	-	3/5	灰白色 磁器質	内面から高台 付近まで灰釉	外面に墨・朱・緑色の花文と朱色で銘。	京都・信楽系
2377	B-1区 SX-309	陶器 皿	18.8	5.8	7.0	-	2/3	にぶい 赤褐色	内面は鉄釉 口縁部内面は その後透明釉	口縁部内面に白化粧土による刷毛目文。見込は蛇ノ目釉ハギ。底部外面は削り出しで無釉。	福岡産か 18世紀
2378	B-1区 SX-309	陶器 杯	9.4	6.4	4.7	-	7/8	赤灰色	透明釉	白化粧土による文様で、外面に花文、内面に打刷毛目文、見込に巻刷毛目文。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産
2379	B-1区 SX-309	陶器 灰吹か	-	(5.3)	5.8	-	底部 完存	灰白色	内面から外面 底部付近まで 鉄釉	七角形。体部外面は縦方向の削りで、下部は無釉。内面は回転ナデで無釉。底部は横方向の削りで無釉。	-
2380	B-1区 SX-309	陶器 瓶	2.5	19.4	8.9	胴径 13.1	3/5	灰黄褐色	口縁部内面から 外面は鉄釉	内面は回転ナデで無釉。底部外面は鉄釉の刷毛塗り。	-
2381	B-1区 SX-309	陶器 甕	-	(7.0)	14.8	-	1/4	赤褐色	-	焼締。外面は回転ナデ。内面は格子状の叩きのち横方向のナデ。底部は無調整。	肥前産
2382	B-1区 SX-309	陶器 花生	-	(7.1)	8.4	-	1/4	灰白色	底部外面を除 き灰釉	4箇所に脚を貼付。外面に鉄錆と呉須による亀文?と松文。底部は削り出しで無釉。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2383	B-1区 SX-309	陶器 ミニ チュア	0.7	(1.9)	-	-	一部 残存	黄灰色	口縁部内面から外面に鉄釉 内面は無釉	瓢箪形の小瓶。	-
2384	B-1区 SX-309	磁器 染付 望料碗	11.6	6.1	4.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に濃地に雪輪文と蓮弁文・圏線、内面に四方禪文、見込に源氏香文と圏線の染付。壘付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2385	B-1区 SX-309	磁器 染付 蓋物蓋	12.0	(32)	-	笠径 14.0	ほぼ 完存	白色	透明釉	陽刻の文様のある鈕状の摘を天井部に貼付。外面に蝶文・草花文・圏線の染付。口縁部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半か
2386	B-1区 SX-309	磁器 染付 銚子	10.5	(118)	14.2	-	1/5	灰白色	透明釉	蓋物。肩部に菊花形の釣手を貼付。外面に蜻唐草文と竹垣鉄線文の染付。	肥前産 有田 17世紀後半
2387	B-1区 SX-309	土師質 土器 小皿	6.0	1.0	3.6	-	1/2	橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。内外面に墨書あり。	-
2388	B-1区 SX-309	土師器 火入	10.4	9.6	10.2	-	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	練込手。口縁部内面から外面は横方向の磨き。内面は回転ナデのちナデ。底部は回転削り。	-
2389	B-1区 SX-309	木製品 木筒	全長 19.4	全幅 5.1	全厚 1.0	-	完存	-	-	四隅を切り上部両端に切り込み、上下に円孔。表「渡辺小兵衛様 磯村彦左エ門」、裏「土州…」の墨書。	-
2390	B-1区 SX-309	木製品 桶蓋	全長 11.9	全幅 11.9	全厚 0.6	-	完存	-	-	「寿村」の墨書。柾目。	-
2391	B-1区 SX-309	木製品 桶蓋	全長 (102)	全幅 16.7	全厚 0.8	-	3/5	-	-	墨書あり。屋号か。柾目。	-
2392	B-1区 SX-309	木製品 桶蓋	全長 (339)	全幅 (128)	全厚 2.4	-	一部 残存	-	-	「内」の刻書。5箇所にも釘が残る。一部炭化。	-
2393	B-1区 SX-309	金属製品 煙管 吸口	全長 6.9	全幅 0.9	全厚 0.8	重量 7.8	完存	-	-	銅製か。外面は金鍍金で、型による陰刻の文様。	-
2394	B-1区 SX-309	金属製品 蓋か	全長 7.1	全幅 6.4	全厚 0.1	重量 21.4	完存	-	-	銅製か。笠部と摘は別作りで接合。外面は金鍍金で陰刻の文様。器高3.1cm、摘径2.3cm。	-
2395	B-1区 SX-310	金属製品 刀子	全長 19.0	全幅 1.4	全厚 0.2	重量 19.5	ほぼ 完存	-	-	鉄製。柄は欠損。全面は著しく錆化。	-
2396	B-1区 SX-310	金属製品 鋏	全長 (144)	全幅 2.7	全厚 0.7	重量 26.9	ほぼ 完存	-	-	鉄製。先端は欠損。断面は柄が半円形、刃部は三角形。全面が著しく錆化。	-
2397	B-1区 SX-311	土師質 土器 小皿	8.8	2.2	4.5	-	完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部に煤付着。灯明皿として使用。	-
2398	B-1区 SX-311	木製品 下駄差歯	全長 8.5	全幅 13.0	全厚 1.7	-	完存	-	-	台形。上部に断面三角形の突起。下端部は小礫が押圧されて多く入り込む。	-
2399	B-1区 SX-312	陶器 碗	11.8	6.5	5.3	-	3/5	灰白色	内面から高台付近まで透明釉	京焼風。外面に松樹文の染付。高台付近から底部は削り出しで無釉。高台内に墨が付着。	肥前産 17世紀後半
2400	B-1区 SX-312	陶器 皿	-	(4.2)	6.3	-	1/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	内面に白化粧土による刷毛目文。見込は蛇ノ目釉ハギ。高台内に墨書。底部は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀
2401	B-1区 SX-312	石製品 茶臼	全長 (285)	全幅 (309)	全厚 (89)	重量 7.00 kg	1/2	-	-	下臼。上面に播目。中央部に孔。受部と側面は研磨。下面は加工痕残る。上面径21.0cm。	礫岩か
2402	B-1区 SX-314	陶器 甕	33.2	36.4	18.8	胴径 40.0	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	外面肩部に多条の沈線と1箇所に不遊環を貼付。口縁端部に4条の沈線。	丹波焼 18世紀前半～後半
2403	B-1区 SX-314	石製品 砥石	全長 47.9	全幅 24.8	全厚 5.2	重量 1.00 kg	完存	-	-	大型。一面のみ使用。側面は未加工。	砂岩
2404	B-1区 SX-314	石製品 五輪塔	全長 15.5	全幅 17.2	全厚 10.0	重量 3.70 kg	完存	-	-	水輪か。外面は細かい加工痕。底面は粗い加工痕が残り、他の面より風化していない。	砂岩

遺物観察表52 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2405	B-1区 SX-314	木製品 木筒	全長 (159)	全幅 2.1	全厚 0.6	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上部側面に切り込み。 下部は細く加工。柁目。表「○○ ○」,裏「×」の墨書。	-
2406	B-1区 SX-314	木製品 木筒	全長 18.3	全幅 2.2	全厚 0.4	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上端隅を切り,上部側面 に切り込み,下部は斜めに加工。柁 目。「□十三年(カ)大豆…」の墨書。	-
2407	B-1区 SX-314	木製品 木筒	全長 15.0	全幅 2.3	全厚 0.5	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部に切り込み。柁目。 表「小川村三良(郎)兵衛分」,裏「大 豆式斗三升入」の墨書。	-
2408	B-1区 SX-314	金属製品 銭貨	銭径 2.50	孔径 0.60	銭厚 0.16	重量 3.80	完存	-	-	銅製。正隆元寶。	初铸造年 1157年
2409	B-1区 SX-315	陶器 碗	12.0	7.3	4.8	-	1/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による文様。高台付近 から底部は削り出して無釉。	尾戸窯
2410	B-1区 SX-315	陶器 中皿	31.7	(6.8)	-	-	1/5	にぶい 橙色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	唐津系灰釉陶器。折縁形。体部下 半は削り出して無釉。	肥前産 17世紀
2411	B-1区 SX-315	陶器 鉢	-	(8.6)	6.3	-	1/2	灰白色	体部外面は 鉄釉	回転ナデ。体部内面に赤色の付着 物。底部は全面に付着物のため調 整不明。	-
2412	B-1区 SX-315	磁器 染付 小碗	8.3	3.9	3.4	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	内外面に網目文,見込には丸に菊 花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末
2413	B-1区 SX-315	青磁 皿	-	(1.7)	4.3	-	1/6	灰白色	内面から体部 外面まで 青磁釉	碁筈底。底部は削り出して無釉。	中国産 景德鎮窯系 16世紀中葉～後半
2414	B-1区 SX-315	土師質 土器 杯	9.7	3.8	4.7	-	1/3	灰白色	-	内外面は回転ナデ。底部は回転糸 切り。	-
2415	B-1区 SX-316	石製品 碁石	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 5.5	重量 4.14	完存	黒色	-	石材不明。	-
2416	B-1区 SX-317	陶器 丸碗	10.8	7.5	4.0	-	5/6	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面に呉須と鉄錆による草花文。 高台付近から底部は削り出して 無釉。	京都産 18世紀前半
2417	B-1区 SX-317	磁器 中皿	-	(3.1)	17.4	-	1/8	灰白色	青磁釉	青磁。見込に陽刻による雲龍文。 高台内は蛇ノ目釉ハギのち錆釉。	肥前産 有田 1650～1670年代
2418	B-1区 SX-317	白磁 中皿	25.9	4.6	13.1	-	1/5	白色	内面から高台 付近まで 白磁釉	底部は削り出して無釉。高台付近 に粗い砂付着。	中国産 16世紀末～17世紀 前半
2419	B-1区 SX-317	木製品 漆器碗	-	(4.2)	-	-	1/2	-	内外面とも 赤塗	大きく変形し,漆膜の残存状況不 良。	ブナ属
2420	B-1区 SX-317	木製品 漆器碗	-	(7.3)	6.2	-	1/2	-	内外面とも 赤塗	深碗。高台内に「×」の刻書。	ブナ属
2421	B-1区 SX-317	木製品 漆器蓋	11.9	(1.1)	-	-	口縁部 1/3	-	内外面とも 赤塗	-	ケヤキ
2422	B-1区 SX-317	木製品 木筒	全長 11.2	全幅 5.5	全厚 1.4	-	一部 欠損	-	-	両面墨書で同じ内容か。短冊形。 上部に径3mmの円孔。板目。	-
2423	B-1区 SX-318	陶器 丸碗	10.7	(5.2)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	外面に鉄錆と呉須による草花文。	京都・信楽系
2424	B-1区 SX-319	磁器 染付 端反碗	9.8	6.2	4.3	-	3/5	灰白色	透明釉	外面に風景文と圏線の染付。高台 内は「大明年製」の銘。畳付は釉ハ ギ。	肥前産 18世紀
2425	B-1区 SX-319	磁器 色絵 猪口	6.0	2.2	2.3	-	2/3	白色	透明釉	外面に朱色の羽子板文と羽文の 上絵付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田
2426	B-1区 SX-323	石製品 茶臼	全長 (173)	全幅 (124)	全厚 11.1	重量 250 kg	1/2	-	-	上白。側面に二重菱形の陽刻内に 方形の孔。上面は研磨,くぼみに 加工痕。下面に播目。	砂岩



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2427	B-1区 SX-324	磁器 染付 皿	12.8	3.3	7.3	-	1/3	灰白色	透明釉	外面は唐草文、内面は矢羽根文の染付とコンニャク印判の五弁花文か。高台内に銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半か
2428	B-1区 SX-324	磁器 水滴	全長 (9.0)	全幅 (5.2)	全厚 (3.3)	-	1/3	灰白色	透明釉	型打成形。注口の一部分が残存。外面に栗鼠と葡萄文の陽刻で呉須と鉄釉で彩色。内面はナデで無釉。	肥前産か 18世紀か
2429	B-1区 P-302	石製品 鑄型か	全長 (7.8)	全幅 4.1	全厚 1.2	重量 (57.0)	ほぼ 完存	-	-	上面には円形・台形・弧状の凹み。円形の凹みの底には円孔が貫通。2187と組か。	泥岩か
2430	B-1区 P-303	磁器 染付 小丸碗	9.6	5.5	4.2	-	1/2	白色	透明釉	外面に二重網目文の染付。高台内には銘。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀前半
2431	B-1区 P-304	陶器 色絵 筒形碗	-	(3.8)	5.6	-	1/4	にぶい 黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に上絵付の一部が残る。高台付近から底部は削り出して無釉。被熱する。	-
2432	B-1区 P-305	陶器 蓋物蓋	7.4	2.5	笠径 9.0	摘径 1.4	完存	灰白色	透明釉	外面に白化粧土と鉄錆による草花文。口縁部内面は釉ハギ。	-
2433	B-1区 P-306	磁器 輪花皿	23.0	(3.7)	-	-	1/6	灰白色	青磁釉	青磁。中皿。内面に陰刻による縞文。	肥前産 1630～1650年代
2434	B-1区 P-307	青花 皿	21.3	(2.1)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	内面に染付。	中国産
2435	B-1区 P-308	陶器 折縁皿	10.6	2.2	6.0	-	1/3	灰黄色	緑釉	内面に丸彫による縞文。見込は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 16世紀末～17世紀 初頭
2436	B-1区 P-309	金属製品 銭貨	銭径 2.35	孔径 0.65	銭厚 0.15	重量 3.70	完存	-	-	銅製。元祐通寶。	初鑄造年 1086年
2437	B-1区 P-310	磁器 染付 小丸碗	9.7	5.3	3.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に圏線の染付とコンニャク印判による松文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2438	B-1区 P-311	金属製品 銭貨	銭径 2.45	孔径 0.65	銭厚 0.12	重量 2.96	完存	-	-	銅製。弘治通寶。	初鑄造年 1503年
2439	B-1区 P-312	磁器 染付 六角皿	13.9	2.4	8.0	-	完存	灰白色	透明釉	ロクロ挽き後、型打成形。口縁部は輪花形。外面は宝文か、内面に人物・風景文などの染付。高台内に銘。	肥前産 1640～1650年代
2440	B-1区 P-313	陶器 色絵 皿	-	(1.4)	3.9	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	内面に朱・緑色の笹文の上絵付。見込に2箇所の目痕。高台から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系
2441	B-1区 P-314	陶器 色絵 半球形碗	8.9	5.6	3.5	-	2/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に朱・緑?色で笹文と草花文の上絵付。高台付近から底部は削り出し。	京都・信楽系
2442	B-1区 P-314	陶器 猪口	5.1	3.0	2.0	-	2/3	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面は鉄錆による渦文。高台付近から底部は削り出して釉ハギ。	-
2443	B-1区 P-314	磁器 染付 小丸碗	10.5	6.3	4.3	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に桜文と圏線、内面に四方襷文と圏線の染付。	肥前産 18世紀後半
2444	B-1区 P-315	磁器 染付 蓋物	7.4	3.3	3.8	-	完存	灰白色	透明釉	外面は格子に雷文・圏線の染付。畳付と口縁部内面は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2445	B-1区 P-316	陶器 皿	10.6	2.8	3.6	-	1/3	灰色	内面から体部 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に2箇所の胎土目痕。底部付近は回転ナデ、高台から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2446	B-1区 P-317	磁器 染付 皿	9.9	2.4	7.2	-	1/4	白色	透明釉	高台なし。外面と見込に宝文とみられる染付。口縁部内面は唐草文の染付か。底部は釉ハギ。	-
2447	B-1区 P-318	磁器 染付 変形皿	-	2.3	-	-	一部 残存	白色	透明釉	菊皿風。型打成形か。外面は染付の花文か。内面は宝文か。高台内に銘。畳付は釉ハギ。被熱する。	肥前産 18世紀 有田
2448	B-1区 P-319	陶器 小碗	8.4	6.3	4.2	-	3/4	灰白色	灰釉	稜花形。口錆。畳付は釉ハギ。	尾戸窯



遺物観察表54 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2449	B-1区 P-319	陶器 碗	11.7	8.1	4.6	-	1/3	浅黄色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による松文。高台から 底部は削り出して無釉。	尾戸窯
2450	B-1区 P-319	陶器 碗蓋	10.1	2.5	-	摘径 4.0	ほぼ 完存	灰白色	灰釉	外面に鉄錆による印花文と圏線。 摘端部は釉ハギ。	尾戸窯
2451	B-1区 P-319	磁器 染付 望料碗	11.9	7.0	5.0	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に桜文と唐草文?と圏線、内 面に四方禪文、見込に桜文と圏線 の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀後半
2452	B-1区 P-319	土師質 土器 小皿	7.5	1.6	4.9	-	完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部に煤付着。	-
2453	B-1区 P-320	陶器 多角形皿	-	(3.1)	-	-	1/3	灰白色	光沢のある 透明釉	外面の2箇所断面三角形の突 起。	-
2454	B-1区 P-320	磁器 染付 小鉢	10.0	6.5	5.5	-	1/3	灰白色	外面は青磁釉 内面は透明釉	口錆。口縁部内面に山文と樹文の 染付。見込に手描きの五弁花文 か。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1680~1700年代
2455	B-1区 P-321	陶器 角皿	-	3.0	-	-	一部 残存	灰白色	畳付を除き 長石釉か	高台を貼付する。	美濃 志野焼か
2456	B-1区 P-321	陶器 鉢	18.8	20.4	12.5	-	1/2	浅黄橙色	内面から体部 外面まで鉄釉	口縁部外面に3条の沈線。見込に2 箇所の砂目痕。高台付近から底部 は削り出して無釉。	-
2457	B-1区 P-321	磁器 染付 瓶	1.3	(6.3)	-	胴径 5.1	口縁部 完存	灰白色	口縁部内面 から外面に 透明釉	筒形。胴部外面は梅文か。肩部上 面は宝文の染付。内面は回転ナデ で無釉。	肥前産 18世紀後半~19世 紀初頭
2458	B-1区 P-321	瓦 平瓦	全長 (7.3)	全幅 (10.5)	全厚 1.6	-	一部 残存	灰白色	-	側面に「アカ」とみられる刻印。	-
2459	B-1区 P-321	金属製品 匙	全長 (5.2)	全幅 (1.9)	全厚 0.3	重量 (2.8)	一部 残存	-	-	銅製。匙部は扁平。柄部は断面方 形。全面に錆化。	-
2460	B-1区 P-322	陶器 柄杓	9.2	5.4	4.7	-	-	灰黄色	内面から高台 付近まで鉄釉	柄の部分は上面は平ら、径3mmの 円孔。見込に付着物。高台付近 から底部外面は削り出して無釉。	-
2461	B-1区 P-322	金属製品 飾り金具	全長 5.4	全幅 1.4	全厚 0.1	重量 (5.0)	一部 欠損	-	-	銅製。表面に打ち込みによる文様 の一部が残る。全面に錆化。木製 品を覆って釘で留めていたか。	-
2462	B-1区 P-322	金属製品 座金	全長 2.8	全幅 3.0	全厚 3.5	重量 8.8	完存	-	-	銅製。薄い板状で梅形。表面がや や凸になる。中央には棒状の金具 を折り曲げたものが接合される。	-
2463	B-1区 P-323	陶器 角皿	-	(1.3)	-	-	一部 残存	灰白色	光沢のある 透明釉	施釉は長石釉か。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃系か
2464	B-1区 P-323	磁器 色絵 碗蓋	10.3	2.6	-	摘径 4.2	-	白色	透明釉	望料形。外面に蓮弁文の染付と墨・ 金彩の上絵付。内面に松竹梅文と 四方禪文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 有田
2465	B-1区 P-324	青磁 鉢か	-	(5.0)	16.0	-	1/4	灰白色	青磁釉	内外面に陰刻による文様。高台内 には蛇ノ目釉ハギ。	中国産か 14世紀後半~15世 紀前半
2466	B-1区 SB-403	陶器 折縁皿	10.1	2.3	4.9	-	1/3	灰白色	緑釉	見込は釉ハギ。内面には丸彫によ る縞文。底部に輪状の重ね焼痕。	瀬戸・美濃産 16世紀末~17世紀 初頭
2467	B-1区 SK-425	磁器 合子蓋	5.0	(1.7)	笠径 6.3	-	1/2	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による文 様。口縁部は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2468	B-1区 SK-425	磁器 染付 小壺か	6.4	(5.3)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	蓋物。外面には雲形の窓に風景文 の染付。外面には把手がつくとみ られる。口縁部内面を釉ハギ。	肥前産か 19世紀
2469	B-1区 SK-426	磁器 染付 小碗	8.0	4.3	3.2	-	1/3	灰白色	透明釉	端反形。外面に圏線と方形枠・動 物・瓢箪内に文字、内面は圏線の染 付。見込に銘。畳付は釉ハギ。	19世紀
2470	B-1区 SK-426	土師器 焙烙	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色 金雲母を 含む	-	粘土紐成形。外面はナデと指頭圧 痕と葉状圧痕。口縁部は横ナデ、底 部は横ハケ。見込に豆の痕跡。	讃岐産 御厩系 19世紀

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2471	B-1区 SK-426	木製品 刷毛	全長 (15.4)	全幅 9.1	全厚 1.3	-	一部 欠損	-	外面は赤塗	2枚の板を糸で留めたラインが2 条。内側に炭化した附着物。刷毛の 毛または接着剤か。	-
2472	B-1区 SK-427	磁器 染付 蓋物蓋	11.7	4.0	笠径 13.2	摘長 4.4	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	天井部外面に紐状の摘を貼付。外 面に楼閣文と風景文の染付。口縁 部は釉ハギ。	肥前系
2473	B-1区 SK-427	瓦 軒平瓦	全長 (6.1)	全幅 (11.9)	顎下 部厚 1.6	瓦当 高 4.9	一部 残存	暗灰色	-	中心飾りは三花文。文様区内に 「片」の陽刻。	-
2474	B-1区 SK-428	陶器 人形	全長 (8.6)	全幅 (7.5)	全厚 (5.9)	-	一部 残存	灰白色	灰釉	袴を着た人物の上半身。中空。接 地面は釉ハギ。	尾戸窯
2475	B-1区 SK-428	木製品 木簡	全長 19.9	全幅 4.5	全厚 0.8	-	完存	-	-	片面墨書。短冊形。「松平土佐守江 戸かち橋御屋敷 村田康庵様… 志方源兵衛」の墨書。	-
2476	B-1区 SK-429	陶器 色絵 半球形碗	9.1	5.6	3.4	-	4/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に墨・緑色で梅文と笹文の上 絵付。高台付近から底部は削り出 して無釉。	京都・信楽系
2477	B-1区 SK-429	陶器 筒形碗	9.1	6.1	5.6	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口鏝。外面に鉄鏝による「若青□ □」の文字。高台付近から底部は 削り出して無釉。	-
2478	B-1区 SK-429	磁器 染付 杯	10.1	5.7	4.2	-	7/8	灰白色	透明釉	端反形。外面に鬚斗文の染付。量 付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2479	B-1区 SK-429	土師器 小壺	1.1	4.3	2.8	胴径 3.4	完存	にぶい 黄橙色	-	外面は回転ナデ。底部外面は横方 向の削り。	-
2480	B-1区 SK-429	木製品 漆器蓋	8.8	2.8	-	摘径 4.6	1/3	-	外面は黒塗 内面は赤塗	小型。外面には朱の丸に片喰文か。	トチノキ
2481	B-1区 SK-429	木製品 木簡	全長 21.2	全幅 4.7	全厚 0.7	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。上下片隅を丸く加工し 片側面に切り込み。裏面に刀子傷。 表「寛保元年 稲毛…」の墨書。	-
2482	B-1区 SK-429	木製品 木簡	全長 3.3	全幅 1.7	全厚 0.3	-	完存	-	-	短冊形。四隅を切る。片面に丸に 「宮」の墨印が2箇所あり。	-
2483	B-1区 SK-429	木製品 木簡	全長 3.2	全幅 1.6	全厚 0.3	-	完存	-	-	短冊形。四隅を切る。片面に丸に 「宮」の墨印が2箇所あり。	-
2484	B-1区 SK-429	木製品 木簡	全長 3.1	全幅 1.7	全厚 0.3	-	完存	-	-	短冊形。四隅を切る。片面に丸に 「宮」の墨印が2箇所あり。	-
2485	B-1区 SK-429	木製品 木簡	全長 3.2	全幅 1.6	全厚 0.3	-	完存	-	-	短冊形。四隅を切る。片面に丸に 「宮」の墨印が2箇所あり。	-
2486	B-1区 SK-429	木製品 漆器櫛	全長 9.7	全幅 (4.5)	全厚 0.7	-	4/5	-	黒塗	両面に朱の草花文(萩か)。一部歯 が欠損。歪みあり。	ヤブツバキ
2487	B-1区 SK-429	木製品 漆器柄杓	全長 (8.7)	全幅 9.0	全高 6.8	身分 径 9.0	底部 欠損	-	黒塗	杯部は曲物。柄と杯は柄の両横を 皮留めし、内側に木釘を差して固 定。柄の断面は四角、先端は円形。	ヒノキ
2488	B-1区 SK-430	磁器 色絵 小丸碗	-	(3.9)	4.0	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に朱色の蓮弁文と朱色と金 彩の斜格子文の上絵付。2箇所に 焼継痕。量付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀か
2489	B-1区 SK-430	木製品 木簡	全長 10.7	全幅 11.9	全厚 1.4	-	ほぼ 完存	-	-	方形。片面に墨書。解読不可。	-
2490	B-1区 SK-430	木製品 木簡	全長 (9.3)	全幅 (11.5)	1.2	-	一部 残存	-	-	方形。両面墨書。表は水電文と蛙 文・虫文とみられる墨書、裏は不 明。	-
2491	B-1区 SK-431	陶器 蓋物 または皿	-	(1.5)	5.0	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。高台内に「玄泉様江」の墨書。 「玄泉」は村田玄泉とみられる。	京都系
2492	B-1区 SK-431	磁器 染付 小丸碗	9.7	5.3	3.9	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に丸に「寿」字と「春風寿福」の文 字と圏線、内面に圏線、見込には丸に 「寿」字と圏線の染付。量付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2493	B-1区 SK-431	青花 皿	-	(1.1)	13.2	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に圏線, 見込に不明文様と圏線の染付。畳付は無釉。	中国産
2494	B-1区 SK-431	木製品 木筒	全長 11.0	全幅 (2.2)	全厚 0.5	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。短冊形。解読不可。上部に径3mmの円孔。	-
2495	B-1区 SK-431	木製品 桶蓋	全長 (103)	全幅 11.3	全厚 0.6	-	4/5	-	-	「寿」の墨書。柀目。若干反りあり。	-
2496	B-1区 SK-432	木製品 桶底板か	全長 13.8	全幅 13.5	全厚 0.9	-	完存	-	-	径5mmの円孔が1箇所あり。側面の上部が凹む。	-
2497	B-1区 SK-432	木製品 桶蓋	全長 13.3	全幅 13.3	全厚 1.4	-	4/5	-	-	片面墨書。「二月」の墨書。中央部に径3mmの円孔。柀目。	-
2498	B-1区 SK-433	陶器 鉢	24.4	12.0	14.0	-	1/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉 緑釉流し掛け	見込は楕円形に釉を掻き取り, 砂目痕が残る。底部外面は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃系
2499	B-1区 SK-433	磁器 染付 皿	13.9	4.0	8.3	-	7/8	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面は唐草文, 内面は丸文と雪輪文, 見込に花卉文の染付か。高台内に銘と砂目痕。	肥前産 18世紀後半
2500	B-1区 SK-433	土師質 土器 皿	11.5	1.9	8.5	-	3/4	灰白色	-	白土器。見込に型押しによる陽刻の鶴亀文。口縁部は横ナデ, 底部内外面はナデ。	尾戸窯
2501	B-1区 SK-433	木製品 木筒	全長 17.1	全幅 4.5	全厚 2.0	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形。上部に径2mmの円孔。両面とも「なるこ(カ)」の墨書。「な」は縁取りしている箇所あり。	-
2502	B-1区 SK-434 埋土1	磁器 染付 小碗	9.6	5.9	4.6	-	1/2	白色	透明釉	外面に牡丹唐草文, 見込に五弁花文, 高台内に圏線の染付と銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
2503	B-1区 SK-434 埋土1	磁器 染付 火入	10.2	7.4	7.3	-	1/2	灰白色	口縁部内面から 外面まで透明釉 内面は無釉	蛇ノ目凹形高台。外面に桐文と圏線の染付。内面は回転ナデで無釉。高台内は蛇ノ目釉ハギ。	18世紀後半以降
2504	B-1区 SK-434 埋土1	土製品 人形	全長 (6.4)	全幅 5.6	全厚 (3.0)	-	1/2	灰色	-	人物(親子)。型成形。中空。内面はナデ, 指頭圧痕残る。	-
2505	B-1区 SK-434 埋土2	陶器 色絵 小碗	9.3	5.1	4.0	-	1/2	灰黄色	内面から高台 まで透明釉	端反形。外面は朱・緑色で雲文と草花文, 内面は朱色で丸文と花文の上絵付。高台内に刻印。被熱する。	-
2506	B-1区 SK-435	磁器 ミニ チュア	2.3	1.2	1.1	-	1/2	灰白色	白磁釉	白磁。鉢形。畳付は釉ハギ。	肥前産
2507	B-1区 SK-436	金属製品 銭貨	銭径 2.45	孔径 0.60	銭厚 0.13	重量 2.55	完存	-	-	銅製。永樂通寶。	初鑄造年 1408年
2508	B-1区 SK-437	陶器 せんじ碗	10.6	(4.6)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	半筒形。外面に白化粧土と鉄錆による笹文。	京都系
2509	B-1区 SK-437	土製品 人形	全長 (4.4)	全幅 2.4	全厚 1.9	-	一部 欠損	にぶい 黄橙色	-	仏像。型成形。キラ粉付着。台座は六角形。下面に円孔。	-
2510	B-1区 SK-437	石製品 数珠玉	全長 2.0	全幅 2.0	全厚 2.0	重量 9.28	完存	灰白色 赤褐色	-	径4mmの円孔が貫通。	瑪瑙か
2511	B-1区 SK-438	陶器 播鉢	-	(5.4)	-	-	一部 残存	浅黄橙色	-	焼締。内面に6条単位の播目。全面に回転ナデ。	丹波焼 17世紀前半
2512	B-1区 SK-438	磁器 染付 碗蓋	9.7	3.5	-	摘径 4.0	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に草花・雪輪文, 内面に四方禪文の染付とコンニャク印判による五弁花文。摘内に銘。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2513	B-1区 SK-438	青花か 大皿	32.6	(5.4)	-	-	1/5	灰白色	透明釉	稜花皿。外面は花文, 内面は青海波文と牡丹文の染付か。	中国産 景德鎮窯系か
2514	B-1区 SK-438	土製品 人形	全長 (5.8)	全幅 4.4	全厚 (1.7)	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	着物を着た人物形。型成形。全面にキラ粉付着。下部より円錐状の孔をあける。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2515	B-1区 SK-439	陶胎染付 碗	12.1	5.5	3.8	-	1/2	にぶい 赤褐色	透明釉か	外面に松文の染付。見込は蛇ノ目 釉ハギ。畳付は釉ハギ。	-
2516	B-1区 SK-439	陶器 瓶	7.6	11.0	5.1	胴径 7.6	3/4	褐灰色	口縁部内面から 外面に鉄釉	花生か。被熱する。畳付は釉ハギ。	-
2517	B-1区 SK-444	陶胎染付 端反碗	12.2	6.8	5.6	-	ほぼ 完存	灰黄色	内面から高台 付近まで 透明釉	白化粧土。外面に宝尽くし文と圏 線の染付。高台付近から底部は削 り出して無釉。	19世紀前半
2518	B-1区 SK-444	陶器 碗	-	(5.9)	-	-	一部 残存	灰白色	鉄釉	外面には丸に「樂」の刻印。	-
2519	B-1区 SK-445	陶器 碗	-	(1.4)	4.0	-	1/2	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	見込の1箇所目目痕。高台内には 墨書。高台から底部は削り出して 無釉。	-
2520	B-1区 SK-445	陶器 碗	11.2	7.4	4.8	-	5/3	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による松?の文様。高 台から底部は削り出して無釉。	-
2521	B-1区 SK-445	土師器 焙烙	31.0	(5.9)	-	-	1/8	橙色	-	型成形か。内面から口縁部外面は 回転ナデ。底部外面は無調整。口 縁部外面に煤付着。	関西系
2522	B-1区 SK-445	軟質施釉 陶器 ミニチュア	5.6	1.4	3.4	-	1/4	灰白色	内外面の一部 に銅緑釉	型成形。皿形。外面は型による蓮 弁文。	-
2523	B-1区 SK-446	骨角製品 柄	全長 (8.2)	全幅 (0.6)	全厚 (0.4)	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	骨製品か。断面は矩形。表面は光 沢あり。	-
2524	B-1区 SK-447	陶器 色絵 小碗	9.2	4.9	3.4	-	ほぼ 完存	灰白色	底部付近まで 透明釉 高台は無釉	端反形。外面に墨・緑色で区画内に 鶴文と花文と雲文。内面に墨色の丸 文。見込に宝文の上絵付。被熱する。	-
2525	B-1区 SK-447	土製品 人形	全長 6.3	全幅 5.7	全厚 (1.9)	-	1/2	浅黄橙色	-	鶏形。型成形。中空。接合面で剥 離。下面に径8mmの円孔。	-
2526	B-1区 SK-448	磁器 菊皿	13.2	3.8	7.7	-	5/4	灰白色	白磁釉	白磁。型打成形。口鑄。蛇ノ目凹形 高台。高台内は蛇ノ目釉ハギで輪 状の砂目痕。	19世紀
2527	B-1区 SK-448	磁器 染付 皿	-	(1.9)	7.4	-	3/4	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。見込と高台内は 蛇ノ目釉ハギ。口縁部内面と見込 に二重格子文の染付。外面は無文。	19世紀か
2528	B-1区 SK-448	石製品 硯	全長 7.4	全幅 2.5	全厚 0.8	重量 30.3	ほぼ 完存	-	-	小型。使用痕あり。	砂岩か
2529	B-1区 SK-449	陶器 碗	-	(4.3)	5.2	-	底部 完存	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	見込は回転削りで釉ハギ。外面は 回転ナデ。高台付近から底部は削 り出して無釉。	-
2530	B-1区 SK-449	陶器 台付 灯明受皿	6.5	4.5	3.5	受部 径 7.3	ほぼ 完存	灰色	内面から底部 外面付近まで 鉄釉	外面底部付近は回転ナデ。底部は 回転糸切り。	-
2531	B-1区 SK-449	磁器 染付 輪花皿	13.7	3.9	8.1	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	型打成形。蛇ノ目凹形高台。口鑄。 内面は楼閣山水文の染付。	肥前系 19世紀
2532	B-1区 SK-450	陶器 碗蓋	12.1	3.0	-	摘径 4.7	ほぼ 完存	灰白色	灰釉 全面に細かい 貫入	摘端部は釉ハギ。天井部内面に目 痕が3箇所あり。	尾戸窯
2533	B-1区 SK-452	陶器 色絵 せんじ碗	10.2	(4.3)	-	-	一部 残存	灰白色	灰釉	半筒形。外面は朱・白・緑色で草花 文の上絵付か。	京都・信楽系
2534	B-1区 SK-454	陶器 小碗	9.3	6.1	4.3	-	5/6	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。	尾戸窯
2535	B-1区 SK-454	陶器 碗	-	(2.7)	5.0	-	1/4	灰白色	外面は鎔釉 内面は灰釉	外面に長石釉を散らす。畳付は釉 ハギで刻印あり。	瀬戸・美濃産 18世紀前半か
2536	B-1区 SK-454	陶器 瓶	3.0	(17.0)	-	胴径 12.6	胴部 ほぼ 完存	灰白色	口縁部内面から 外面まで 鉄釉	内面は回転ナデで無釉。	-

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2537	B-1区 SK-454	陶胎染付 鉢	16.7	7.3	8.3	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面と見込に草花文の染付。口 鏑。畳付は釉ハギ。	-
2538	B-1区 SK-454	陶器 描鉢	19.7	7.1	10.2	-	ほぼ 完存	赤橙色	-	回転ナデで口縁部外面顎下は回転 削り。口縁部外面に凹線。見込に櫛 描の「×」文。底部に板状圧痕。	-
2539	B-1区 SK-454	磁器 色絵 丸碗	8.4	(3.9)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に朱・緑・黄色の花文の上絵 付。	肥前産 有田
2540	B-1区 SK-454	磁器 染付 丸碗	8.5	5.5	3.1	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に松文と幾何学文、内面に四 方禪文、見込に五弁花文と圏線の 染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀中葉
2541	B-1区 SK-454	磁器 染付 丸碗	11.7	6.1	4.6	-	完存	白色	透明釉	外面に草花文、口縁部内面に四方 禪文、見込に草花文と圏線の染 付。畳付は釉ハギ。高台内に銘。	肥前産 18世紀後半
2542	B-1区 SK-454	磁器 染付 広東碗	11.7	6.3	6.6	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に植物文と圏線、内面に圏線 と帯線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 江戸後期
2543	B-1区 SK-454	磁器 染付 広東碗	11.8	6.3	6.3	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に草花文、見込に水に鷺文の 染付。高台内は二重方形枠に銘。 畳付は釉ハギ。	肥前系 19世紀
2544	B-1区 SK-454	磁器 染付 広東碗	12.2	6.4	6.1	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に風景文と圏線、内面に圏線、 見込に火焰宝珠文の染付。高台内 は「大明年智」銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 江戸後期
2545	B-1区 SK-454	磁器 染付 広東碗	12.7	7.0	7.3	-	1/2	白色	透明釉	外面に草花文と樹文、内面は圏線、 見込に文様不明の染付。高台内は 圏線と銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2546	B-1区 SK-454	磁器 鉄釉染付 碗	12.4	6.3	4.7	-	3/4	灰白色	外面は鉄釉 内面と高台内 は透明釉	外面にはロクロ目が顕著に残る。 見込は蕪文の染付。畳付は釉ハ ギ。	肥前系 砥部焼か 18世紀後半
2547	B-1区 SK-454	磁器 染付 皿	13.2	3.3	4.9	-	1/3	白色	透明釉	見込に梅文の染付。畳付は釉ハ ギ。	肥前産 1630～1640年代
2548	B-1区 SK-454	磁器 染付 蓋物	12.3	6.5	5.6	-	4/5	白色	透明釉	外面に区画内に草花文の染付。口 縁部内面と畳付は釉ハギ。	19世紀前半
2549	B-1区 SK-454	軟質施釉 陶器 蓋	6.2	0.6	-	-	3/4	浅黄橙色	外面は緑釉 内面は透明釉	摘は欠損。被熱か。	幕末か
2550	B-1区 SK-455	金属製品 釣金具	全長 5.2	全幅 3.9	全厚 0.3	重量 3.1	完存	-	-	銅製。上部は鉤状で先端は細く尖 る。	-
2551	B-1区 SK-456	陶器 碗	-	(5.3)	5.8	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。見込に目痕が3箇所あり。	-
2552	B-1区 SK-456	磁器 色絵 小碗	-	(2.8)	4.1	-	底部 完存	灰白色	透明釉	外面は緑・墨色の草花文の上絵 付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田か 18世紀末～19世紀 前半
2553	B-1区 SK-456	磁器 蛭手 小碗	8.6	4.5	3.8	-	1/2	灰白色	白磁釉	白磁。端反形。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産か 19世紀
2554	B-1区 SK-457	陶器 皿	-	(2.3)	4.6	-	1/2	にぶい 黄橙色	内面から体部 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目 痕。回転ナデで高台付近から底部 は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2555	B-1区 SK-458	土製品 人形	全長 (3.4)	全幅 3.5	全厚 1.8	-	一部 欠損	橙色	銅緑釉	天神様。型成形。中実。	-
2556	B-1区 SK-459	磁器 染付 皿	14.2	3.6	9.2	-	1/6	白色	透明釉	端反形。蛇ノ目凹形高台。外面に 唐草文と圏線、内面に草花文の染 付。高台内は蛇ノ目釉ハギ。	19世紀か
2557	B-1区 SK-460	磁器 染付 皿	-	(1.9)	4.9	-	1/2	灰白色	透明釉	内面に染付。畳付は釉ハギ。高台 内面は粗い砂付着。	肥前産 1610～1630年代
2558	B-1区 SK-461	陶器 溝縁皿	-	(2.1)	-	-	1/8	にぶい 黄橙色	内面から体部 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近は回転 ナデおよび回転削りで無釉。	肥前産 17世紀前半



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2559	B-1区 SK-461	陶器 皿	-	(1.9)	3.9	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込には砂目 痕。底部は無釉で砂が多量に付 着。	肥前産 17世紀前半
2560	B-1区 SK-461	陶器 播鉢	-	(5.2)	-	-	1/10	赤褐色	-	小型。内面は10条以上単位 の掃目。口縁部外面は2条の凹 線。全面に回転ナデ。	備前焼か 17世紀初頭か
2561	B-1区 SK-461	磁器 染付 皿	14.4	2.3	5.0	-	1/2	灰白色	透明釉	口縁部外面に2条の圏線、内 面に花卉文と圏線の染付。畳 付は釉ハギで砂付着。	肥前産 1610～1630年代
2562	B-1区 SD-404	陶器 碗	-	(2.4)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に型紙摺による鉄錆の丸 に葵文。	-
2563	B-1区 SD-404	陶器 半筒形碗	10.6	5.7	4.1	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面に鉄錆による草花文と2 条の沈線。	京都産 18世紀中葉
2564	B-1区 SD-404	陶器 丸碗	11.7	7.4	4.6	-	2/3	浅黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による松文。高台 付近から底部は削り出して無 釉。	尾戸窯
2565	B-1区 SD-404	陶器 丸碗	11.1	8.0	4.7	-	ほぼ 完存	灰色	透明釉	外面は白化粧土による波状刷 毛目文。内面は白化粧土によ る打刷毛目文。畳付は釉ハギ で砂付着。	肥前産 18世紀
2566	B-1区 SD-404	陶器 油壺	2.0	5.4	9.0	胴径 11.9	4/5	灰白色	口縁部内面から 外面は鉄釉 内面は無釉	扁平形。肩部外面に多条の沈 線。内面は回転ナデ。底部に 刻印。外面体部下半から底部 は鉄釉刷毛塗り。	-
2567	B-1区 SD-404	土製品 人形	全長 (2.6)	全幅 (2.0)	全厚 (1.5)	胴径 4.6	一部 残存	にぶい 橙色	-	狐形。型成形。	-
2568	B-1区 SD-406	陶器 トチン	-	(7.5)	8.0	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	焼締。胴部は横方向のハケ、 脚裾部はナデで指頭圧痕。底 部は横方向の削りで「村」の 墨書あり。	-
2569	B-1区 SD-406	磁器 染付 端反小碗	9.3	5.0	3.6	-	ほぼ 完存	白色	透明釉	外面に宝文・蝶文・鹿文など、 内面に丸繋ぎ文と圏線の染付。 見込に「成化年」銘。畳付は 釉ハギ。焼継痕あり。	肥前系 19世紀前半～中葉
2570	B-1区 SD-406	磁器 染付 蓋物	12.4	6.8	6.7	-	1/4	灰白色	底部外面を除 き透明釉	外面に梅文と波文?の染付。 脚を貼付。口縁部を釉ハギ。	肥前系 江戸後期
2571	B-1区 SD-406	磁器 餌猪口	4.9	2.0	4.3	-	ほぼ 完存	白色	内面から底部 外面付近まで 透明釉	輪状の把手を貼付。外面に菊 花文の染付。底部は削り出し で釉ハギ。	-
2572	B-1区 SD-406	瓦質土器 焜炉	15.5	15.9	11.8	-	3/4	灰白色	-	箱形。外部構造はたたら成形。 内外部前方に方形の窓。上部 に菊花の印花文。松毬形の 双耳。	-
2573	B-1区 SD-409	磁器 染付 碗蓋	10.1	(2.6)	-	-	ほぼ 完存	白色	透明釉	望料形。外面に菊花文と蝶文、 内面に五弁花文と圏線の染付。 口縁部に煤付着。被熱。	肥前産 18世紀か
2574	B-1区 SD-410 掘方	陶器 碗	-	(5.7)	5.4	-	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面は鉄錆の文様。見込に3 箇所の目痕。高台から底部は 削り出し。	尾戸窯 18世紀後半～19 世紀前葉
2575	B-1区 SD-410	陶器 瓶	2.5	13.4	7.2	胴径 8.8	ほぼ 完存	橙色	口縁部内面から 底部付近まで 鉄釉	回転ナデ。底部外面は削り 出して無釉、墨書あり。	-
2576	B-1区 SD-410 掘方	陶器 火鉢	-	6.8	14.9	-	底部 完存	灰白色	外面は濃緑釉 内面は鉄釉の 刷毛塗り	高台外面は雷文の印刻。底部 は削り出して無釉。2箇所に 径4mmの円孔。底部外面と 内面側面に砂目痕。	瀬戸・美濃産 19世紀
2577	B-1区 SD-410	陶器 植木鉢	11.2	9.2	5.1	13.5	1/5	橙色	口縁部内面から 体部外面は 鉄釉	底部中央に円孔。高台に弧状 の挟り。回転ナデ。外面に飛 鉋文。体部下と高台内に墨書。	-
2578	B-1区 SD-410	陶器 壺	10.5	15.1	8.1	胴径 18.1	ほぼ 完存	灰黄色	内面から体部 外面まで鉄釉	口縁部は釉ハギ。高台付近 から底部は削り出して無釉。	-
2579	B-1区 SD-410	陶器 行平鍋	16.2	10.2	7.0	-	ほぼ 完存	浅黄橙色	内面から底部 外面付近まで 鉄釉	片口と把手を貼付。外面に飛 鉋文。口縁部と外面底部付近 は削り出して無釉。外面の鉄 釉は刷毛塗り。	-
2580	B-1区 SD-410	磁器 染付 蓋物蓋	7.0	1.8	笠径 8.1	-	1/2	灰白色	透明釉	天井部は山水文の染付。かえ り部は釉ハギ。焼継痕あり。	-



遺物観察表60 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2581	B-1区 SD-410	磁器 色絵 段重 土師質 土器 皿	12.7	4.8	7.9	-	1/4	灰白色	透明釉	外面は窓と圏線の染付と朱・緑・黄色による窓絵・草花文の上絵付。口縁部と外面体部下半、畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀
2582	B-1区 SD-410	土師器 火鉢	11.0	2.3	5.6	-	2/3	灰白色	-	白色系で無文。底部内面は摩耗。回転ナデ。底部は回転削り。	尾戸窯か
2583	B-1区 SD-410	土師器 火鉢	14.5	8.5	14.8	胴径 15.9	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	円筒形。円柱状の脚を3箇所に貼付。回転ナデ。外面は型押による松文。底部外面は無調整。	-
2584	B-1区 SD-410	土製品 人形	全長 (2.9)	全幅 1.5	全厚 1.2	-	一部 欠損	にぶい 橙色	脚・顔は透明釉 服は白・青色 の釉	小型。目は黒色で着色。薪を背負い歩く人で二宮金次郎か。	-
2585	B-1区 SD-410	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.8	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。三ツ葉柏文。下面はナデ。摩耗する。	-
2586	B-1区 SD-410	土製品 泥面子	全長 3.6	全幅 3.7	全厚 0.9	-	ほぼ 完存	橙色	-	型成形。「大」字。大型。下面はナデ。	-
2587	B-1区 SD-411	土製品 人形	全長 2.2	全幅 3.0	全厚 1.7	-	完存	浅黄橙色	-	型成形。犬形。下面から後頭部にかけ孔が貫通。	-
2588	B-1区 SD-412	陶器 中皿	21.5	4.3	10.8	-	1/8	灰白色	透明釉	見込に鉄錆の菊花文。畳付は釉ハギ。	-
2589	B-1区 SD-412	陶器 皿	19.0	(1.5)	-	-	1/8	浅黄橙色	緑釉	底部外面の中央部凹む。外面に「霞晴山」の刻印。行灯皿か。	江戸後期
2590	B-1区 SD-412	陶器 色絵 蓋物蓋	5.6	(1.0)	-	-	1/4	灰白色	透明釉か 内面は無釉	摘は欠損。外面は黄・緑・墨・紫色の花文と圏線の上絵付。内面は回転ナデ。	-
2591	B-1区 SD-412	磁器 染付 碗蓋	8.0	2.0	-	摘径 2.9	1/2	白色	透明釉	外面に人物文、内面に雷文と圏線の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 1820～1860年代
2592	B-1区 SD-412	磁器 染付 合子	3.0	2.6	1.8	-	2/3	白色	透明釉	外面に草花文と櫛歯文の染付。口縁部外面と畳付は釉ハギ。	肥前系 19世紀
2593	B-1区 SD-412	磁器 染付 合子蓋	6.8	1.5	-	天井 径 6.8	7/8	白色	外面と天井部 内面に透明釉	天井部外面に福寿草と鳥文の染付。口縁部内面と口縁端部は釉ハギ。	肥前系 19世紀
2594	B-1区 SD-412	磁器 染付 段重	12.6	4.6	11.4	-	ほぼ 完存	白色	透明釉	外面に宝尽くし文に圏線の染付、高台内にも染付。口縁部と高台外面は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀 中葉
2595	B-1区 SD-412	土師器 焜炉	15.4	16.2	12.9	胴径 16.5	1/2	灰白色	-	円筒形。白色系。内部構造に突起。前方に楕円形の窓。口縁部外面に雷文帯の印刻、胴部上方に刻印。	-
2596	B-1区 SD-413	陶器 火鉢	-	(12.5)	-	-	1/3	灰白色	外面は透明釉	多角形か。脚は貼付。外面は錆絵。内面は無釉でナデ。底部外面に焼成前の穿孔あり。	-
2597	B-1区 SD-413	陶器 台付灯明 受皿	-	(4.7)	4.0	受部 径 7.0	4/5	灰色	内面から底部 付近まで鉄釉	受皿外面は回転ナデで無釉。底部外面は回転糸切り。墨書あり。	-
2598	B-1区 SD-413	陶器 餌鉢	-	3.2	-	-	1/3	橙色 4mm大の 礫を含む	内面から体部 外面は灰釉 黄色を帯びる	平面は不整楕円形。把手は貼付。底部は無釉で墨書あり。底部外面はヘラ切りか。	-
2599	B-1区 SD-413	陶器 ミニ チュア	2.4	3.1	2.2	胴径 4.2	ほぼ 完存	灰白色	緑釉	壺形。蓋物。把手欠損。蓋受部は釉ハギ。畳付は無釉で回転ナデ。	淡路 珉平焼か
2600	B-1区 SD-413	磁器 染付 小杯	-	(1.0)	3.5	-	底部 完存	白色	透明釉	外面に2条の圏線の染付。高台内に「サ」の銘。高台内外面に砂付着。畳付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2601	B-1区 SD-413	瓦 棧瓦	全長 (21.9)	全幅 (16.5)	全厚 1.9	-	一部 残存	灰色	-	一部銀化。側面に「アキ□」の刻印。	土佐産 安芸
2602	B-1区 SD-413	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	ほぼ 完存	浅黄橙色	-	型成形。「ユ」の型押。下面はナデ。	-

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2603	B-1区 SD-413	石製品 播石	全長 12.0	全幅 6.9	全厚 6.5	重量 855.6	一部 残存	-	-	円柱状。先端は丸く、敲打痕が残る。	砂岩
2604	B-1区 SD-413	石製品 基石	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.5	重量 (3.4)	裏面 の一部 欠損	-	-	黒色。円形に加工、研磨。	粘板岩か
2605	B-1区 SD-414	陶器 半球形碗	10.5	6.5	3.9	-	3/4 底部 完存	灰白色	内面から高台 付近まで透明 釉 光沢あり	外面に鉄錆と呉須による文様。高 台内に「ヨツ」の墨書。高台から底 部は削り出しで無釉。貫入が入る。	京都産
2606	B-1区 SD-414	陶器 小皿	9.1	2.4	4.5	-	ほぼ 完存	黄灰色	灰釉	内面は釉及び白化粧土・イッチン 描による花文。見込に3箇所の目 痕。底部外面は削り出しで無釉。	-
2607	B-1区 SD-414	陶器 色絵 蓋物蓋	全長 2.4	(0.6)	全幅 4.5	-	一部 残存	灰色	内面は無釉	内面は回転ナデ。外面は鉄錆による 花文に黄・緑・紫色で彩色。	-
2608	B-1区 SD-414	磁器染付 うがい 茶碗	-	(3.5)	4.2	-	底部 完存	灰白色	透明釉	内面に菊と蝶の染付。高台内に方 形枠に「茶山」の銘。畳付は釉ハ ギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2609	B-1区 SD-414	土師器 焜炉	16.0	(3.7)	(15.9)	-	1/4	灰白色	-	白色系。回転ナデ。外面に幾何学 文様の印刻。内面の1箇所に角錐 形の突起貼付。口縁部に煤附着。	-
2610	B-1区 SD-414	土師器 焙烙	-	(3.8)	-	-	口縁の 一部	灰白色	-	口縁部は横ナデ。体部外面はナ デ。内面に黒斑あり。	-
2611	B-1区 SD-414	金属製品 柄	全長 (8.8)	全幅 (2.4)	全厚 (1.9)	重量 24.0	一部 残存	-	-	銅製。基部は中空で2孔あり。先端 は平らで厚い。全面に錆化。	-
2612	B-1区 SD-417	陶器 鉢	-	(9.3)	-	-	一部 残存	浅黄色	灰釉 貫入が入る	外面に水鳥の足形の粘土を貼付。	-
2613	B-1区 SD-417	磁器 染付 瓶	1.7	(9.3)	-	-	頸部 完存	灰白色	口縁部内面か ら外面に 透明釉	鶴首形。外面に蜻唐草文の染付。 被熱する。	肥前産 18世紀末～19世紀 前半
2614	B-1区 SD-422	土製品 人形	全長 (4.7)	全幅 2.9	全厚 2.0	-	一部 欠損	灰白色	-	僧か。型成形。中実。下面に径5mm の円孔。	-
2615	B-1区 SD-422	石製品 硯	全長 (5.9)	全幅 4.0	全厚 1.1	重量 (380)	2/3	-	-	小型。二連の硯。下面に刻書あり。	砂岩か
2616	B-1区 SD-423	陶器 小碗	9.6	5.6	4.2	-	1/4	灰白色	透明釉 口縁部は緑釉 貫入が入る	外面に鉄錆による松文か。畳付は 釉ハギ。	-
2617	B-1区 SD-423	陶器 小碗	8.8	6.5	4.0	-	1/3	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	高台付近から底部は回転削り。	尾戸窯
2618	B-1区 SD-423	陶器 丸碗	10.6	7.3	5.1	-	1/5	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	口縁部内外面に釉垂れ。見込に3 箇所の目痕。高台内に墨書。高台 付近から底部は削り出しで無釉。	尾戸窯
2619	B-1区 SD-423	陶器 丸碗	10.9	7.4	5.2	-	4/5	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	施釉は白っぽく発色。見込に3箇 所の目痕。高台付近から底部は削 り出しで無釉。	尾戸窯
2620	B-1区 SD-423	陶器 丸碗	12.5	8.6	5.6	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉 釉は白く発色	見込に2箇所重ね焼痕あり。高台 付近から底部は削り出しで無釉。 細かい貫入が入る。	尾戸窯
2621	B-1区 SD-423	陶器 中皿	25.9	6.4	12.8	-	4/5	灰白色	透明釉 大き目の貫入 が入る	石皿。見込に呉須と鉄錆による文 様と6箇所に目痕。高台付近から 底部は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃産
2622	B-1区 SD-423	陶器 鉢	17.2	8.7	12.8	-	1/2	赤褐色 極細粒砂 を含む	口縁部外面の 一部に自然釉 が掛かる	回転ナデ。外面底部付近は回転削 り。底部は無調整。底部内面に指 頭圧痕。	-
2623	B-1区 SD-423	陶器 甕	16.4	13.9	12.1	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで鉄釉	口縁部外面に4条の沈線。見込に 砂目痕。高台から底部は削り出し で無釉。底部に焼成後の穿孔。	瀬戸・美濃系か
2624	B-1区 SD-423	陶器 火鉢	13.4	12.6	12.7	胴径 19.5	1/4	灰白色	外面は灰釉 その他は鉄釉 を刷毛塗り	底部の3箇所に半球形の脚と径2 mmの円孔。見込と底部外面に砂目 痕。外面に緑釉流し掛け。	瀬戸・美濃産

遺物観察表62 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2625	B-1区 SD-423	磁器 染付 小碗	-	(2.3)	3.8	-	1/3	白色	透明釉	外面に二重区画線内に樹文、見込に丸文の染付か。畳付は釉ハギ。焼継痕あり。	肥前産 19世紀
2626	B-1区 SD-423	磁器 染付 小広東碗	9.7	5.8	5.3	-	1/4	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による菊花文と圏線などの染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 18世紀前半
2627	B-1区 SD-423	磁器 染付 小広東碗	11.4	5.9	6.3	-	1/2	白色	透明釉	外面に稲束文・雀文と圏線、内面に圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
2628	B-1区 SD-423	磁器 色絵 灰吹蓋か	4.8	(1.4)	笠径 6.2	-	1/2	灰白色	透明釉	摘あり。外面に点繋ぎ文の染付と朱色の四方襷文の上絵付。笠部から口縁部内面は釉ハギ。被熱する。	肥前産 有田 18世紀後半
2629	B-1区 SD-423	磁器 ミニ チュア	2.4	1.2	0.7	-	完存	灰白色	白磁釉	白磁。鉢形。外面は型成形で型押による陰刻の花文。畳付は釉ハギ。飯事道具。	-
2630	B-1区 SD-423	青磁 大皿か	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	折縁形。内外面に陰刻による草花文と圏線。	中国産 14世紀後半～15世紀前半
2631	B-1区 SD-423	土師器 焜炉	15.5	19.0	11.5	胴径 13.6	ほぼ 完存	にぶい 橙色 細粒 砂を含む	-	前方に楕円形の窓。胴部に円孔。内面下部に突起が巡る。回転ナデで底部は回転削り。内面に櫛目文。	-
2632	B-1区 SD-424	陶器 不明	全長 (8.9)	全幅 (9.7)	全厚 (2.6)	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	硬質。焼締。型成形。端部は肥厚し方形をなし、受口状。外面は型による陽刻の蕨文。内面はナデ。	-
2633	B-1区 SD-425	陶器 丸碗	12.8	8.9	5.8	-	1/2	灰白色	灰釉 細かい貫入が入る	外面体部下半は回転削りで、顕著にロクロ目が残る。底部は削り出して無釉。	尾戸窯
2634	B-1区 SD-425	陶器 瓶	3.8	(11.1)	-	-	口縁部 ほぼ 完存	灰色	口縁部内面から外面に灰釉	外面に白化粧土による刷毛目文と鉄錆よる文様。内面の胴部付近は横ナデで無釉。	肥前産 武雄 17世紀後半～18世紀前半
2635	B-1区 SD-425	陶器 灯明受皿	8.8	1.9	3.6	-	一部 欠損	灰白色	内面から口縁部外面まで灰釉 貫入が入る	受部の1箇所に半円形の切り込み。外面から底部外面は削り出して無釉。	京都・信楽系
2636	B-1区 SD-425	陶器 カンテラ	3.6	3.5	3.8	胴径 6.4	1/3	灰黄色	内面から高台付近まで灰釉	側面に断面隅丸方形の口を貼付。口縁端部は釉ハギ。底部外面は削り出して無釉。	-
2637	B-1区 SD-425	陶器 鉢か	全長 (8.1)	全幅 (9.6)	-	-	一部 残存	にぶい 褐色	-	硬質。焼締。型成形。外面は型による櫛目地に蕨文の陽刻と鳥形の装飾品を貼付。内面はナデ。	-
2638	B-1区 SD-425	磁器 染付 筒形碗	-	(3.9)	3.4	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に花文と松葉文、見込に圏線の染付とコンニャク印判による五弁花文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2639	B-1区 SD-425	磁器 青磁染付 朝顔形碗	11.0	6.3	4.1	-	1/2	灰白色	外面は青磁釉 内面は透明釉	口縁部に四方襷文、見込に圏線の染付とコンニャク印判による五弁花文。畳付は釉ハギ。外面無文。	肥前産 18世紀後半
2640	B-1区 SD-425	磁器 染付 合子蓋	6.4	2.0	-	天井 径 6.8	完存	灰白色	外面と天井部 内面は透明釉	天井部外面は波千鳥文の染付。内面は回転ナデで無釉。口縁端部は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半～中葉
2641	B-1区 SD-425	磁器 染付 鉢	-	(3.0)	6.3	-	底部 完存	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面は圏線、見込は渦巻文の染付。高台内は無文で蛇ノ目釉ハギ。	肥前系 19世紀
2642	B-1区 SD-425	土師質 土器 皿	11.7	1.6	8.3	-	1/3	灰白色	-	白土器。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ。底部内面はナデの後、型押による陽刻の鶴亀文。	尾戸窯
2643	B-1区 SD-425	土師質 土器 皿	11.3	1.9	8.5	-	ほぼ 完存	灰白色	-	白土器。口縁部は横ナデ。底部外面はナデ。底部内面はナデの後、型押による陽刻の「寿」字文。	尾戸窯
2644	B-1区 SD-425	瓦 軒平瓦	全長 (156)	全幅 (22.1)	全高 4.7	-	瓦当部 ほぼ 完存	灰白色	-	三子葉文か。全面にキラ粉付着。瓦当右側に刻印あり。	-
2645	B-1区 SG-402 裏込	陶器 皿	-	(2.6)	3.8	-	底部 完存	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外面体部下半は回転ナデ、高台付近から底部は削り出して無釉。	肥前産 1590～1610年代
2646	B-1区 SG-402 裏込	陶器 小皿	9.4	2.2	4.1	-	5/6	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	見込に染付と白化粧土による花文。見込の3箇所に目痕。高台付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系か

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2647	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 蓋物蓋	9.4	(2.5)	笠径 11.0	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に格子地に鳥文の染付か。かえりは釉ハギ。	肥前系 19世紀前半～中葉
2648	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 猪口	7.9	6.1	5.5	-	完存	灰白色	透明釉	桶形。蛇ノ目凹形高台。外面に風景文、内面に雷文と圏線、見込に不明の染付。高台内は蛇ノ目釉ハギ。	肥前産 18世紀後末～19世紀前葉
2649	B-1区 SG-402 裏込	土師質 土器 皿	-	(1.1)	7.4	-	1/4	浅黄色	-	白土器。見込に型押による陽刻の鶴亀文。回転ナデで底部外面は回転削り。内外面に墨書。	尾戸窯
2650	B-1区 SG-402 裏込	土師器 甌または サナカ	-	(3.1)	8.2	-	1/5	橙色	-	回転ナデのちナデ。外面底部付近は強い横方向のナデ。底部と側面に4箇所円孔。	-
2651	B-1区 SG-402 裏込	陶器 土瓶 算盤玉形	7.5	12.6	7.6	胴径 18.5	1/2	灰色	口縁部内面から体部外面まで鉄釉	注口と花形の釣手・三足を貼付。注口内の円孔は径8mm。口縁端部は釉ハギ。底部付近に煤付着。	-
2652	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 小広東碗	10.6	5.9	5.6	-	1/2	白色	透明釉	外面に風景文、内面に圏線、見込に鷹文の染付か。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀前葉
2653	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 小碗	9.3	4.7	3.9	-	3/4	灰白色	光沢のある透明釉	端反形。外面と見込に陰刻と染付による梅樹文。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃系または 関西系か 19世紀か
2654	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 皿	-	(2.6)	7.1	-	1/2	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台で、高台内は釉ハギ。外面に圏線、見込に宝文、内面は区画内に染付。2箇所焼継痕。	肥前産 18世紀後半
2655	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 碗蓋	8.8	2.9	-	摘径 3.6	2/3	灰白色	透明釉	外面に四方禪文と窓絵、天井部内面は二重圏線内に風景文、内面に四方禪文の染付。摘内に銘。	肥前産 有田 1820～1860年代
2656	B-1区 SG-402 裏込	磁器 染付 塑料碗蓋	11.2	3.2	-	摘径 4.8	摘完存 2/3	灰白色	透明釉	外面に牡丹文、内面に四方禪文と環状の松竹梅文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2657	B-1区 SG-402 裏込	土製品 人形	全長 (4.5)	全幅 4.0	全厚 2.2	-	一部 欠損	浅黄橙色	-	台座に座る獅子形。型成形で貼り合わせ。顔は欠損。台座は六角形。下面に径3mmの円孔。	-
2658	B-1区 SG-402 裏込	金属製品 銭貨	銭径 2.3	孔径 0.6	銭厚 0.2	重量 2.6	完存	-	-	銅製。洪武通寶。裏文字は背面上に「浙」か。全面に錆化。	初製造年 1368年
2659	B-1区 SG-402 裏込	金属製品 銭貨	銭径 2.5	孔径 0.6	銭厚 0.2	重量 2.4	完存	-	-	銅製。寛永通寶。新寛永。	-
2660	B-1区 SG-402 裏込	土師器 火鉢	全長 (9.5)	(5.9)	全幅 (5.4)	全厚 (0.7)	一部 残存	にぶい 橙色 金雲 母を含む	-	方形。扁平な脚を1箇所貼付。外面は型押による格子目状の文様。内面は粗雑なナデ。	-
2661	B-1区 SG-402 裏込	瓦 軒棧瓦	全長 (14.0)	-	顎下 部厚 2.8	瓦当 高 4.7	1/6	灰白色	-	中心飾りは三巴文。瓦当左側に刻印。	-
2662	B-1区 SG-402 裏込	陶器 甕	31.4	(10.5)	-	-	1/5	灰白色	全面に鉄釉 のち一部に 透明釉	肩部外面に多条の沈線。	-
2663	B-1区 SG-402 裏込	磁器 紅皿か	5.7	1.6	3.3	-	4/5	白色	内面から口縁部外面まで白磁釉	白磁。型打成形。内面は型による菊花状の文様。高台内に「ス」の墨書。	肥前産
2664	B-1区 SG-402 上層	陶器 碗	6.2	5.0	3.2	-	一部 欠損	灰白色	外面は鉄釉か	全面に銅または鉄など金属が溶けた物が付着。	-
2665	B-1区 SG-402 上層	陶器 小皿	10.2	2.1	3.9	-	3/4	灰白色	内面から口縁端部まで灰釉	回転ナデで底部付近には回転削りを加える。外面は無釉。口縁部外面に煤付着。底部に墨書。	京都・信楽系か
2666	B-1区 SG-402 上層	陶器 小皿	6.7	2.7	3.9	-	一部 欠損	褐灰色	内面から高台付近まで灰釉	口縁部は方形で隅切り。見込に鉄錆と白化粘土による梅樹文。高台から底部は削り出しで無釉。	-
2667	B-1区 SG-402 上層	陶器 壺	10.4	2.7	-	摘径 4.2	1/3	灰白色	灰釉 細かい貫入が 入る	摘端部は釉ハギ。部分的に橙色に発色する。	尾戸窯
2668	B-1区 SG-402 上層	陶器 火入	-	(3.5)	9.0	-	底部 完存	浅黄橙色	-	回転ナデで、外面は回転削りを加える。外面には墨による文様か。	-

遺物観察表64 B-1区

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2669	B-1区 SG-402 上層	陶器 火入	-	(5.6)	9.7	胴径 10.0	1/2	灰黄色	外面は白化粧のち透明釉貫入が入る	回転ナデで、底部外面は回転削りを加える。底部内外面に墨書。	-
2670	B-1区 SG-402 上層	陶胎染付 火入	10.8	10.0	6.5	胴径 11.8	底部 完存	灰白色	口縁部内面から体部外面に透明釉	見込に輪状の粘土紐貼付。外面に白化粧土のち丸彫による菊花文と波千鳥文の染付。外面に「朱山」の刻印。	-
2671	B-1区 SG-402 上層	陶器 鉢	-	(6.6)	5.1	-	底部 完存	にぶい 橙色	内面から体部外面まで鉄釉	回転ナデ。底部外面は回転糸切り。	-
2672	B-1区 SG-402 上層	陶器 鉢	14.8	8.2	5.7	-	1/3	灰白色	内面から高台付近まで鉄釉	輪花形。内面に鉄錆による笹文。高台付近から底部は削り出して無釉。	尾戸窯
2673	B-1区 SG-402 上層	陶器 色絵 鉢	18.0	9.0	7.6	-	1/3	浅黄褐色	白色釉貫入が入る	輪花形。外面に朱・黄・墨色の梅文、内面に朱・緑・墨色の四方禪文と波文、見込に丸に果実文の上絵付。	関西系か 19世紀
2674	B-1区 SG-402 上層	陶器 鉢	17.1	7.4	8.0	-	1/2	灰黄色 黒色砂粒 多く含む	高台付近まで 灰釉 緑と白色 釉を掛け流し	体部は型成形で、底部に布目痕。高台は貼付。葉や虫形の貼付。体部に指圧による凹みが4箇所あり。	関西系 19世紀
2675	B-1区 SG-402 上層	陶器 鉢	20.0	7.0	8.5	-	完存	灰白色	内面から高台付近まで鉄釉	口縁部釉ハギ。高台付近から底部は回転削りで無釉。	-
2676	B-1区 SG-402 上層	陶器 播鉢	-	(5.4)	11.4	-	一部 残存	橙色 石英と長 石を含む	-	回転ナデのち見込にナデ。内面に密に播目を入れる。底部近くに横書きの墨書。	-
2677	B-1区 SG-402 上層	陶器 小壺	-	(2.7)	2.6	-	2/3	灰白色	-	焼締。外面に墨書。回転ナデ。底部は回転削り。	-
2678	B-1区 SG-402 上層	陶器 壺	8.0	6.0	4.3	胴径 8.4	1/2 底部 完存	赤色	内面から高台付近まで鉄釉	見込に砂付着。底部は削り出して無釉。	-
2679	B-1区 SG-402 上層	陶器 壺	9.9	12.1	6.5	胴径 12.5	完存	にぶい 赤褐色	内面から高台付近まで鉄釉	内面に付着物。高台付近から底部外面は削り出して無釉。高台内に墨書。	-
2680	B-1区 SG-402 上層	陶器 水注	5.9	12.6	6.4	-	ほぼ 完存	にぶい 赤褐色	内面から外面体部まで鉄釉	注口と把手を欠損。口縁部は釉ハギ。底部は削り出して無釉。	-
2681	B-1区 SG-402 上層	陶器 灯明受皿	10.7	2.0	4.9	受部 径 7.3	完存	灰白色	内面から口縁端部は鉄釉	受部に半円形の切り込み。回転ナデ、外面底部付近は回転削り。外面は無釉。底部に重ね焼痕。	京都・信楽系
2682	B-1区 SG-402 上層	陶器 台付灯明 受皿か	-	(5.6)	4.0	-	脚部 ほぼ 完存	褐灰色	脚部外面は鉄釉	中空。脚部下部は回転ナデで無釉。底部外面は回転糸切りで無釉。	-
2683	B-1区 SG-402 上層	陶器 七輪戸 か	全長 7.0	全幅 (7.2)	全厚 4.4	-	2/3	橙色 白色砂粒 多く含む	上面は鉄釉	外面に把手を貼付。側面と下面はナデ。下面に「イニ」の刻書あり。	近代か
2684	B-1区 SG-402 上層	陶器 ミニ チュア	-	(3.8)	3.6	胴径 4.2	口縁部 欠損	浅黄褐色	外面は自然釉	壺形。外面は回転ナデ。底部は回転糸切りで径4mmの孔。	-
2685	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 丸碗	-	(3.5)	4.5	-	1/2	灰白色	透明釉	小丸碗か。外面に格子状文様。内面に圏線。見込に宝文の染付。高台内には方形枠に「茶」の銘。豊付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2686	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 端反碗	11.8	6.7	5.0	-	1/4 底部 完存	灰白色	透明釉	外面に篇文と丸文と圏線。内面に圏線。見込に亀文の染付か。高台内には「茶」の銘。豊付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2687	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 輪花皿	10.1	2.7	5.5	-	4/5	灰白色	透明釉	型打成形。見込に楼閣山水文の染付。口錆。豊付は釉ハギ。	肥前系 19世紀
2688	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 輪花皿	9.7	2.4	5.4	-	3/4	白色	透明釉	型打成形。見込に海浜風景文の染付。高台内に「サ」銘。豊付は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2689	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 八角皿	9.4	2.1	3.7	-	底部 完存 3/4	白色	透明釉	型打成形。内外面は枠に染付。見込に宝文の染付。豊付は釉ハギ。	肥前系 18世紀末～19世紀 初頭
2690	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 皿	-	(2.4)	8.7	-	3/4	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。豊付と高台内は釉ハギ。内面に風景文の染付。高台内は方形枠に「茶」の銘。	能茶山窯 1820年代～幕末



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2691	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 皿	12.3	2.9	8.3	-	一部 欠損	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面に唐草文、 内面に草花文・蝶文の染付。	幕末
2692	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 稜花中皿	27.8	5.1	14.9	-	1/3	灰白色	透明釉 貫入あり	外面に雲文と圏線、内面に松樹文 と雲文と虹文の染付。高台内は銘 と圏線。目痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀 前半
2693	B-1区 SG-402 上層	磁器 色絵 小皿	9.4	1.9	5.4	-	1/3 底部 完存	白色	透明釉	木型打込成形。見込に陰刻の寿文 と朱・墨・黄・緑色で俳句と鯉文の 上絵付。高台内に朱で銘の上絵付。	瀬戸・美濃産 19世紀中葉
2694	B-1区 SG-402 上層	磁器 色絵 小皿	8.5	1.6	5.0	-	一部 欠損	灰白色	透明釉	木型打込成形。見込に陰刻の寿文 と朱・緑色で俳句と鯉文の上絵 付。高台内に朱で銘の上絵付。	瀬戸・美濃産 幕末～明治初
2695	B-1区 SG-402 上層	磁器 菊皿	-	(2.7)	8.5	-	底部 完存	浅黄橙色	内面から高台付 近まで灰色を帯 びた白磁釉	型打成形。蛇ノ目凹形高台。高台 内に「安岡」などの墨書。底部は削 り出して無釉。	近代
2696	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 大皿	-	(3.3)	17.2	-	1/6	灰白色	透明釉	内外面にコバルトによる染付。高 台内に圏線と「玩」の銘。2箇所 に褐色の焼継痕。畳付は釉ハギ。	近代
2697	B-1区 SG-402 上層	陶器 蓋物蓋	4.6	1.2	笠径 6.0	-	完存	灰白色	外面は灰釉	内面は削り出して無釉。内面全面 に煤付着。墨書がある可能性もあ るが不明瞭。陶器か。	-
2698	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 合子蓋	6.0	1.7	笠径 6.8	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に紅葉文の染付。かえりは釉 ハギ。	-
2699	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 段重蓋	11.8	3.1	笠径 13.2	-	完存	白色	透明釉	天井部に線描きの海浜山水文の 染付。口縁部は釉ハギ。	19世紀
2700	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 蓋物蓋	11.4	3.3	笠径 12.6	摘径 1.7	1/3	灰白色	透明釉	天井部外面に墨弾きの宝文か。外 面に草花文の染付。かえりは釉ハ ギ。	肥前産か 19世紀か
2701	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 杯	7.0	5.6	4.5	-	完存	白色	透明釉	筒型。外面に松樹文・草花文と圏 線、見込に五弁花文の染付。畳付 は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2702	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 杯	5.4	6.0	3.6	-	完存	灰白色	透明釉	筒型。小型で端反り。外面に花文 の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産か 18世紀か
2703	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 猪口	5.4	2.0	2.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に水裂地に菊花文の染付。畳 付は釉ハギ。	-
2704	B-1区 SG-402 上層	磁器 紅皿	4.3	1.1	1.2	-	完存	灰白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。外面に型押によ る陰刻の菊弁文。高台付近から底 部は無釉。	肥前産 19世紀
2705	B-1区 SG-402 上層	磁器 紅皿	4.7	1.3	1.6	-	完存	灰白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。外面に型押によ る陰刻の菊弁文。高台付近から底 部は無釉。	肥前産 19世紀
2706	B-1区 SG-402 上層	磁器 紅皿	4.9	1.6	1.4	-	完存	白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。外面に型押によ る陰刻の菊弁文。高台付近から底 部は無釉。	肥前産 19世紀
2707	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 蓋物	5.2	3.0	2.9	-	1/2	白色	透明釉	外面に鶴文と亀甲文の染付。口縁 部内面と畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀後半～19世 紀前半
2708	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 蓋物	7.7	2.1	8.7	-	1/2	灰白色	内面から体部 外面まで 透明釉	外面に濃地に丸文で福の染付。口 縁端部は釉ハギ。底部は削り出し て無釉。	-
2709	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 蓋物	16.0	(7.7)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に梅文と圏線の染付。口縁部 内面は釉ハギ。	-
2710	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 灰吹か	4.6	8.0	4.2	-	底部 完存 4/5	灰白色	外面のみ 透明釉	外面に草花文と松葉文の染付。内 面は回転ナデで無釉。畳付は釉ハ ギ。	肥前系 18世紀後半
2711	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 瓶	-	(8.6)	3.6	胴径 5.3	口縁部 欠損	白色	外面のみ 透明釉	外面に笹文・紅葉文・梅文と圏線 の染付。高台内に焼成後の穿孔あ り。畳付は釉ハギ。	-
2712	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 鉢	-	(2.7)	7.4	-	1/41	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。高台外面に○× 文と圏線、見込に草花文の染付。高 台内に方形枠に「茶」の銘。	能茶山窯 1820年代～幕末



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2713	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 鉢	16.0	7.6	8.3	-	1/3	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面に蝶文・蓮 弁文・櫛歯文、内面は雷文?・蝶文 の染付。高台内に銘。焼継痕あり。	肥前産 1820~1860年代
2714	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 植木鉢	-	(6.6)	14.0	-	一部 残存	灰白色	体部外面から 脚内側まで 透明釉	獣足形の脚。外面に染付。内面は 無釉で砂付着。底部外面は無釉 で、円孔と墨書あり。	関西系か 19世紀
2715	B-1区 SG-402 上層	磁器 色絵 仏飯器	6.3	6.2	4.6	-	脚完存 杯部 1/3	灰白色	内面から外面 脚裾部まで 透明釉	外面に朱色の草花文?と圏線と 青・緑・茶色の花文の上絵付。底部 は回転ナデで無釉。	肥前産 有田
2716	B-1区 SG-402 上層	磁器 鍋猪口	3.4	1.8	2.9	-	一部 欠損	浅黄色	内面から体部 外面まで灰釉	把手は紐状の粘土を丸めて貼付。 底部外面は回転糸切りで無釉。陶 器か。	-
2717	B-1区 SG-402 上層	磁器 染付 灯芯押え	全長 3.3	全幅 3.3	全厚 5.2	器台 部厚 0.6	完存	灰白色	底部外面を除 き透明釉	器台部はハート形で菊花状の陰 刻と染付、楕円形の孔。底部外面 はナデ。上部は斜め方向に伸びる。	江戸後期
2718	B-1区 SG-402 上層	西洋陶器 皿	-	(1.4)	12.6	-	一部 残存	灰白色	透明釉	銅板転写。内面は紫色の西洋風景 文のプリント。高台内には楕円の 中にアルファベットの刻印。	ヨーロッパ産 イギリスか 19世紀中葉
2719	B-1区 SG-402 上層	土師質 土器 皿	9.4	2.2	5.1	-	1/2	橙色	-	見込に径4mmの焼成前の穿孔。回 転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2720	B-1区 SG-402 上層	土師器 焜炉	全長 (8.4)	全幅 (7.0)	全厚 1.1	-	一部 残存	にぶい橙 色 金雲 母を含む	-	方形。引戸の裏側部分。横方向の 擦痕あり。製造地などの刻印あ り。	愛知県か 近代 大正期か
2721	B-1区 SG-402 上層	土師器 五徳	全長 (9.6)	全幅 (6.2)	全厚 2.0	-	一部 残存	灰白色	-	白色系。大型。器台部は回転ナデ。 上部はナデで内面には煤付着。	近代か
2722	B-1区 SG-402 上層	土師器 十能	全長 (7.1)	全幅 (4.3)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	-	把手と身は別作りで、回転ナデ。 把手は中空。接続部はナデ。下面 は煤付着。	-
2723	B-1区 SG-402 上層	土師器 焼塩壺	5.2	(5.6)	-	胴径 6.0	1/2	にぶい橙 色 石英な どを含む	-	口縁部内外面は横ナデ。外面は横 方向のナデ。内面は粗雑なナデと 指頭圧痕。	-
2724	B-1区 SG-402 上層	土師器 鋳型か	5.5	5.1	10.5	-	完存	橙色 スサを多 く含む	-	内面は半球形。丁寧なナデ。キラ 粉付着。外面から底部はナデ。口 縁の1箇所に「V」字状の切り込み。	-
2725	B-1区 SG-402 上層	施釉土器 蓋	3.2	1.4	1.4	笠径 3.2	3/4	灰白色	外面は黄色釉	手握ね成形か。かえりから底部は ナデ。円形の摘で摘径0.5cm。	-
2726	B-1区 SG-402 上層	瓦質土器 火鉢	19.3	14.4	-	-	3/4	灰白色	-	円筒形。二重構造。内部構造には 円形の透かし。外面は縄目文に浮 文と刺突文。脚は3足で獣足形。	-
2727	B-1区 SG-402 上層	瓦質土器 焜炉	-	(4.6)	-	胴径 19.6	一部 残存	灰白色	-	円筒形。内面ナデ。外面は磨きか。 外面脚部付近に方形枠に「太八 昂」の刻印あり。	-
2728	B-1区 SG-402 上層	瓦質土器 焜炉	-	(8.1)	14.8	胴径 15.4	1/4	灰黄色	-	円筒形。前方に扇形の窓。外面は 型押しによる文様。脚部外面は横方 向の磨き。内面は回転ナデ。	-
2729	B-1区 SG-402 上層	瓦質土器 焜炉	全長 (11.1)	(3.4)	全幅 (8.1)	-	一部 残存	灰褐色 赤 礫と金雲 母を含む	-	箱形。二重構造。外面は磨き。内面 は縦方向のハケ。口縁部内面はナ デ。上面に刻印あり。	-
2730	B-1区 SG-402 上層	瓦 軒平瓦	全長 (5.9)	全幅 (14.0)	全高 (4.7)	-	一部 残存	灰色	-	桶状文。瓦当右側に「アキ」刻印。	土佐産 安芸
2731	B-1区 SG-402 上層	瓦 軒平瓦	全長 (10.7)	全幅 (13.9)	全高 (3.5)	-	一部 残存	灰色	-	二巴文。瓦当左側に「布源」の刻 印。	土佐産 布師田
2732	B-1区 SG-402 上層	瓦 軒平瓦	全長 (6.5)	全幅 (14.0)	全高 (1.5)	-	一部 残存	灰色	-	三花文。瓦当左側に「とく」とみら れる刻印あり。漆喰付着。	土佐産か 徳王子か
2733	B-1区 SG-402 上層	土製品 鳩笛	全長 7.0	全幅 2.6	全厚 3.6	-	完存	灰白色	-	型成形。線刻による羽の表現が僅 かに残る。	-
2734	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.3	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 黄橙色	-	型成形。花文。下面はナデ。摩耗す る。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2735	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.7	-	一部 欠損	橙色	-	型成形。鶴文。下面はナデ。	-
2736	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	浅黄橙色	-	型成形。蝙蝠文。表面にはキラ粉 附着。下面はナデ。	-
2737	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.5	全幅 2.5	全厚 0.7	-	完存	橙色	-	型成形。三ツ葉柏文。下面はナデ。	-
2738	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.2	全厚 0.6	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。「鯛」字か。下面はナデ。	-
2739	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。「金」字。摩耗のため調整 不明。	-
2740	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.9	-	ほぼ 完存	灰黄色	-	型成形。「自」字。下面はナデ。	-
2741	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.2	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。「相原」字。下面はナデ。	-
2742	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。摩耗し文様不明。下面は ナデ。	-
2743	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	灰黄色	-	摩耗するため文様と調整不明。	-
2744	B-1区 SG-402 上層	土製品 泥面子	全長 4.2	全幅 4.2	全厚 0.9	-	完存	にぶい 橙色	-	大型。三巴文。型成形とみられる が摩耗するため不明瞭。下面はナ デ。	-
2745	B-1区 SG-402 上層	木製品 漆器碗	15.6	9.0	6.5	-	2/3	-	内外面とも 黒塗	高台内に刻書。著しく歪む。	カツラ
2746	B-1区 SG-402 上層	木製品 木筒	全長 (149)	全幅 2.8	全厚 0.6	-	一部 欠損	-	-	両面墨書。下部は細く加工する。 解読不可。	-
2747	B-1区 SG-402 上層	木製品 木筒	全長 18.3	全幅 2.5	全厚 0.9	-	完存	-	-	両面墨書。上部に円孔。下部は薄 く細く加工。表「横山五郎右衛門 殿…」裏「御進上…」の墨書。	-
2748	B-1区 SG-402 上層	木製品 木筒	全長 7.9	全幅 4.9	全厚 1.1	-	一部 欠損	-	-	方形。片面墨書。上面の両端が縁 状に高くなる。解読不可	-
2749	B-1区 SG-402 上層	木製品 漆器 連歯下駄	全長 21.3	全幅 8.6	全厚 2.6	-	ほぼ 完存	-	側面は黒塗	楕円形。前壺は径8mm。横緒孔は径 1.1cmで斜め方向に開く。後歯は花 形に削り抜く。踵側面に加工痕。	-
2750	B-1区 SG-402 上層	木製品 櫛	全長 3.3	全幅 (8.4)	全厚 1.0	-	1/2	-	-	半円形。断面三角形。歯間は広く、 歯は太い。解櫛か。	-
2751	B-1区 SG-402 上層	木製品 漆器箱物	全長 35.0	全幅 (246)	全厚 0.7	-	一部 欠損	-	外面は黒塗	鏡箱の底板か。前方後円形。端部は 斜に加工し側板の痕跡と9箇所 に木釘が残る。中央部に円孔が貫 通。	-
2752	B-1区 SG-402 上層	木製品 漆器箱物	全長 32.0	全幅 29.4	全厚 0.8	-	底板 一部 欠損	-	内外面とも 黒塗	底板のみ。隅丸方形。周囲に木釘 が残る。底板の裏面に枠内に「安 岡」の焼印あり。若干の反りあり。	マキ属
2753	B-1区 SG-402 上層	骨角製品 櫛払	全長 17.8	全幅 1.2	全厚 1.0	重量 22.3	完存	明黄褐色	-	断面は柄は楕円形。刷毛部は方 形。刷毛は消失。角か。	-
2754	B-1区 SG-402 上層	金属製品 杯形容器	7.1	5.9	5.6	重量 (436)	杯部 完存	-	-	銅製。釘状金具で把手を留める。 器壁厚さ1mm。外面は打ち込みの 花文と鳥文。	-
2755	B-1区 SG-402 上層	金属製品 把手か	全長 1.3	全幅 4.8	全厚 0.8	重量 12.5	完存	-	-	鉛製か。コの字状に屈曲。両端に 円孔が貫通。2方向に型合わせの 痕跡。	-
2756	B-1区 SG-402 上層	金属製品 座金か	全長 3.7	全幅 4.2	全厚 2.6	重量 (7.3)	ほぼ 完存	-	-	銅製。透かし多数あり。把手は扁 平。凸面は金鍍金。若干変形する。	-

遺物観察表68 B-1区

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2757	B-1区 SG-402 上層	金属製品 座金か	全長 3.0	全幅 3.0	全厚 0.5	重量 (22)	ほぼ 完存	-	-	銅製。中央に方形の孔。全面に錆化。	-
2758	B-1区 SG-402 上層	金属製品 座金か	全長 4.3	全幅 4.3	全厚 0.6	重量 (135)	ほぼ 完存	-	-	真鍮製か。凸面に花文等の陽刻文様。中央部に径4mmの円孔。口縁端部の2箇所に突起あり。	-
2759	B-1区 SG-402 上層	金属製品 飾り金具	全長 8.3	全幅 2.4	全厚 0.1	重量 155	完存	-	-	銅製。上部は波形。6箇所に釘孔。錆化。	-
2760	B-1区 SG-402 上層	金属製品 鉢	全長 18.0	全幅 3.5	全厚 1.1	重量 (530)	ほぼ 完存	-	-	鉄製。断面は柄部が楕円形、刃部が三角形。全面錆化。	-
2761	B-1区 SG-402 上層	金属製品 銭貨	銭径 2.85	孔径 0.65	銭厚 0.14	重量 4.57	完存	-	-	銅製。寛永通寶。波銭。	初鑄造年 1768年
2762	B-1区 SG-402 上層	金属製品 銭貨	銭径 3.10	-	銭厚 0.25	重量 13.85	完存	-	-	銅製。二銭。	明治8年鑄造
2763	B-1区 SG-402 上層	ガラス 製品 瓶	-	(3.7)	2.0	胴径 2.4	一部 欠損	透明 若干の気 泡が入る	-	体部は箱形、口縁部は筒状。葉瓶か。	-
2764	B-1区 SG-402 上層	ガラス 製品 瓶	1.2	8.6	3.6	胴径 3.4	ほぼ 完存	透明	-	胴部断面は楕円形で「榮保堂小松製」の陽刻。上部にコルク、中に透明の液体が残存。葉瓶か。	-
2765	B-1区 SG-402 下層	陶器 土瓶蓋	6.0	3.6	笠径 8.0	摘径 2.2	完存	淡黄色	外面は透明釉	天井部外面は鉄錆による花文と濃緑釉の丸文。口縁端部は釉ハギ。内面は回転ナデで無釉。	-
2766	B-1区 SG-402 下層	陶器 灰吹	-	(6.6)	5.3	-	底部 完存	浅黄橙色	口縁部内面から体部外面まで灰釉	外面は鉄錆による文様。内面は回転ナデで無釉。底部外面は削り出して無釉。「山」の墨書あり。	18世紀か
2767	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 望料碗	11.2	6.4	5.1	-	完存	灰白色	透明釉	外面は松竹梅文と蓮弁文・圏線、内面は四方禪文、見込は圏線と五弁花文の染付。	肥前産 18世紀後半
2768	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 菊皿	-	(2.4)	8.4	-	1/6	灰白色	透明釉	見込は丸文で濃地に墨弾きの雲文か。畳付は釉ハギ。	-
2769	B-1区 SG-402 下層	磁器 色絵 輪花皿	12.0	3.4	6.6	-	1/3	白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面は唐草文、内面は圏線の染付と朱・緑・黄・紫色の草花文と雲文の上絵付。	肥前産 1820～1860年代
2770	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 稜花皿	9.3	2.7	5.3	-	3/4	白色	透明釉	小皿。型打成形。内面は海浜風景文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系
2771	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 八角皿	9.5	1.8	4.0	-	1/2	灰白色	透明釉	小皿。外面は枠内に花文、内面は枠内に宝文、見込は花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀末～19世紀 初頭
2772	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 角皿	7.6	2.3	3.6	-	3/4	灰白色	透明釉	小皿。木型打込成形。内面は菊花文の陽刻。一部は具須で彩色。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 近代
2773	B-1区 SG-402 下層	磁器 輪花皿	8.2	2.4	4.4	-	1/3	灰白色	透明釉	小皿。型打成形。型による陽刻文様で口縁部に鳥・松竹梅文、見込に菊花文。高台内に陽刻の刻印。	近代
2774	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 蓋物蓋	11.4	3.5	笠径 12.4	摘径 1.5	1/2	灰白色	透明釉	天井部外面は花文、外面は素描きの雷文帯の染付。口縁部は釉ハギ。	19世紀か
2775	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 猪口	7.0	3.2	2.6	-	完存	灰白色	透明釉	外面に笹文の染付。畳付は釉ハギ。	19世紀か
2776	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 合子	6.2	3.5	3.3	-	1/2	白色	透明釉	外面は鶴文と松文の染付。口縁部内面と畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半～19世紀 前半
2777	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 蓋物	14.2	7.5	8.4	-	1/5	白色	透明釉	外面に花唐草文と圏線の染付。畳付と口縁部は釉ハギ。口縁部から底部にかけ焼継痕あり。	肥前産 有田 18世紀
2778	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 火入	9.5	6.4	7.8	-	2/5	白色	口縁部内面から外面まで透明釉	蛇ノ目凹形高台。外面に龍文の染付。内面から見込は回転ナデで無釉。底部は釉ハギ。焼継痕あり。	肥前産 19世紀

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2779	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 小瓶	-	(4.8)	3.7	胴径 2.8	1/2	淡橙色	外面体部下 半まで透明釉	外面に笹文・梅文の染付。高台付 近は回転ナデで無釉。高台から底 部は削り出して無釉。	瀬戸・美濃産か 19世紀
2780	B-1区 SG-402 下層	磁器 染付 油壺	2.0	7.1	3.7	胴径 7.3	完存	灰白色	口縁部内面か ら外面まで 透明釉	胴部に梅文と松文の染付。壺付は 釉ハギ。	肥前産
2781	B-1区 SG-402 下層	土師質 土器 皿	10.0	1.9	6.8	-	完存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切りで縁 には粘土塊が多数付着。	-
2782	B-1区 SG-402 下層	土師質 土器 皿	10.1	1.9	7.1	-	完存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切りで縁 には粘土塊が多数付着。	-
2783	B-1区 SG-402 下層	土師器 蓋	19.2	5.2	-	摘径 4.5	1/4	浅黄橙色 小礫を多 く含む	-	摘はナデ。天井部外面は無調整。 口縁部から内面は回転ナデ。	-
2784	B-1区 SG-402 下層	土製品 人形	全長 (3.8)	全幅 2.4	全厚 1.8	-	一部 欠損	灰白色	一部に緑釉	鳥を持つ人物形。型成形。中実。	-
2785	B-1区 SG-402 下層	土製品 芥子面	全長 2.0	全幅 1.6	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	鬼形。上面は型成形。下面はナデ。	-
2786	B-1区 SG-402 下層	木製品 漆器蓋	10.9	2.0	-	摘径 5.2	ほぼ 完存	-	内外面とも 黒塗	無文。	トチノキ
2787	B-1区 SG-402 下層	木製品 木筒	全長 8.9	全幅 5.5	全厚 0.7	-	完存	-	-	両面に「五百六十六」の墨書。短冊 形。片面には焼印で屋号。上部に 径8mmの円孔。柁目。反りあり。	-
2788	B-1区 SG-402 下層	木製品 木筒	全長 14.8	全幅 2.6	全厚 0.5	-	完存	-	-	両面墨書。短冊形。四隅を切り、上 部に径2mmの孔。表「枝川村 恵右 衛門代」、裏「吉米四斗」墨書。	-
2789	B-1区 SG-402 下層	骨角製品 櫛払	全長 (102)	全幅 1.1	全厚 (0.7)	重量 (8.6)	柄の一 部のみ 残存	-	-	断面形は下端が半円形、上端は隅 丸方形。柄の下端に垂直方向に可 動する突起が付く。	-
2790	B-1区 SX-408	陶胎染付 小碗	8.1	6.6	3.9	-	完存	灰白色	内面から底部 外面付近まで 透明釉	外面に笹文の染付。高台付近から 底部は削り出して無釉。被熱す る。	-
2791	B-1区 SX-408	陶器 色絵 半球形碗	8.9	5.2	3.7	-	1/2	灰白色	内面から底部 付近まで灰釉	小碗。外面に緑色の笹文の上絵 付。高台付近から底部は削り出 して無釉。被熱する。	京都・信楽系
2792	B-1区 SX-408	陶器 丸碗	11.8	7.6	5.0	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面に鉄錆による梅文。見込に1 箇所の目痕。高台から底部は削り 出して無釉。	-
2793	B-1区 SX-408	陶器 火入	9.2	7.1	7.0	-	1/3	灰白色	口縁部内面か ら体部外面 まで鉄釉	体部は多角形で高台は円形。回転 ナデで外面下部は削りで面取り。 底部外面は削り出して無釉。	-
2794	B-1区 SX-408	陶器 水注	6.1	10.1	5.4	-	ほぼ 完存	褐灰色	外面と底部は 鉄釉 内面は無釉	把手と注口を貼付。内面は回転ナ デで上半には赤色の付着物あり。 壺付は釉ハギ。	-
2795	B-1区 SX-408	陶器 土瓶	5.5	6.5	8.0	胴径 12.0	1/2	にぶい 黄橙色	外面体部下 半まで鉄釉 肩部 の一部に灰釉	肩部に山形の鈎手、底部に脚を貼 付。口縁部を釉ハギ。底部は削り 出して無釉。	-
2796	B-1区 SX-408	磁器 染付 広東碗	12.9	6.9	7.5	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に鳥文など、内面の文様は不 明、見込に鳥文と圏線の染付。壺 付は釉ハギ。	肥前系 江戸後期
2797	B-1区 SX-408	磁器 皿	-	(2.1)	4.2	-	1/2	灰白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。見込は蛇ノ目釉ハギで砂付 着。高台付近から底部は削り出 して無釉。	肥前産 17世紀後半
2798	B-1区 SX-408	磁器色絵 ミニ チュア	2.4	1.2	1.0	-	完存	白色	透明釉	鉢形。外面に朱色で上絵付の鞠文 か。壺付は釉ハギ。	-
2799	B-1区 SX-408	木製品 桶蓋	全長 (7.1)	全幅 13.0	全厚 0.7	-	1/2	-	-	墨書はあるが薄い。解読不可。柁 目。	-
2800	B-1区 SX-408	木製品 釣瓶	全長 6.0	全幅 27.1	全厚 2.7	-	完存	-	-	体部は断面方形で、中央に径3cm の円孔。端部は断面円形。下端は 著しく摩耗。	-

遺物観察表70 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2801	B-1区 SX-408	木製品 板状製品	全長 (232)	全幅 6.9	全厚 1.8	-	一部 欠損	-	-	用途不明。半円形の部分に十字の 墨書。	-
2802	B-1区 SX-408	木製品 不明	全長 10.7	全幅 10.6	全厚 1.0	-	完存	-	-	サナの様な形。中央の孔は径2cm。 周囲には径8mmの孔が8箇所。	-
2803	B-1区 SX-409	陶胎染付 火入	12.8	9.6	7.9	-	1/3	灰白色	体部内面から 体部外面まで 透明釉	回転ナデ。外面に笹文の染付。口 縁端部は釉ハギ。見込に重ね焼 痕。高台付近は削り出して無釉。	-
2804	B-1区 SX-409	陶器 片口鉢	21.0	11.6	9.2	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	内面から体部 外面に透明釉 外面は鉄釉	片口を貼付。内面から体部外面は 白化粧土による刷毛目文。高台か ら底部は削り出して無釉。	肥前産 武雄系 17世紀後半～18世 紀前半
2805	B-1区 SX-409	磁器 水滴または 置物	-	(6.7)	(5.7)	-	一部 残存	灰白色	外面は透明釉	茄子形。外面は型押の文様で一部 呉須塗り。内面はナデで、底部内 外面に布目痕。底部外面に墨書。	肥前産 有田
2806	B-1区 SX-409	瓦 軒棧瓦	全長 (202)	全幅 (137)	額下 部厚 1.8	瓦当 高 4.4	1/4	灰白色	-	中心飾りは三花文。瓦当左側に 「徳周」の刻印。	土佐産か 徳王子か
2807	B-1区 SX-409	木製品 漆器蓋	13.8	(2.3)	-	-	ほぼ 完存	-	内外面とも 黒塗	文様なし。器高低い。	ブナ属
2808	B-1区 SX-409	金属製品 煙管 吸口	全長 4.6	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 8.6	完存	-	-	銅製。外面には金鍍金が一部残 る。	-
2809	B-1区 SX-410	陶器 小壺	1.7	(2.9)	2.8	胴径 4.7	1/2	灰白色	外面は灰釉の ち一部緑釉 内面は一部鉄釉	口縁部内面は釉ハギ。内面は回転 ナデ。肩部に輪状の把手。体部下 半から底部は削り出して無釉。	-
2810	B-1区 SX-410	西洋陶器 稜花小皿	9.8	1.5	4.6	-	1/2	灰白色	透明釉	コバルト。銅板転写。内面に星文 と草文。見込は風景文。高台内に 刻印。刻印の上に銘。	オランダ産 レゴー社 19世紀中葉
2811	B-1区 SX-411	陶器 丸碗	-	(5.5)	-	-	1/4	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉 光沢あり	外面に鉄錆による文様。見込に1 箇所目痕。高台付近から底部は削 り出して無釉。	尾戸窯
2812	B-1区 SX-411	陶器 丸碗	11.8	7.7	5.8	-	2/3	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	外面に鉄錆による蕨文。見込に3 箇所の目痕。高台付近から底部は 削り出して無釉。	尾戸窯
2813	B-1区 SX-411	陶器 碗蓋	10.0	3.0	-	摘径 3.8	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	望料形。外面に鉄錆による草花 文。口縁部に煤付着。摘端部は釉 ハギ。	瀬戸・美濃系
2814	B-1区 SX-411	陶器 小壺	2.1	3.8	3.9	胴径 6.2	1/2	橙色	口縁部内面か ら体部外面ま で鉄釉	扁平形。回転ナデ。内面は無釉。底 部は削り出して無釉。	-
2815	B-1区 SX-411	陶器 水注	5.8	10.8	5.5	9.4	注口部 欠損	にぶい 橙色	外面と内面体 部下半は鉄釉	把手と注口は貼付。口縁部外面か ら体部内面は回転ナデで無釉。高台 は削り出して無釉。壺付は釉ハギ。	-
2816	B-1区 SX-411	磁器 染付 丸碗	8.5	5.7	3.4	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に稲束文と雀文、見込に雀文 の染付。壺付は釉ハギ。	肥前系 18世紀末～19世紀 前半
2817	B-1区 SX-411	磁器 青磁染付 朝顔形碗	11.5	6.2	4.6	-	1/3	灰白色	外面は青磁釉 内面と高台内 は透明釉	外面は無文。内面に花卉文の染 付。高台内に銘。高台端部は無釉 で、砂が付着。壺付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2818	B-1区 SX-411	磁器 染付 碗蓋	-	(2.1)	-	摘径 5.2	1/2	灰白色	透明釉	望料形。外面に花文、天井部内面 に草花文と圏線、口縁部内面に四 方襷文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産か 18世紀後半
2819	B-1区 SX-411	磁器 染付 蓋物蓋	8.9	2.9	笠径 10.0	摘長 3.3	完存	白色	透明釉	紐状の摘を貼付。外面に草花文と 蝶文の染付。内面は無文。口縁端 部は釉ハギ。	-
2820	B-1区 SX-411	磁器 染付 小瓶	1.5	7.4	3.1	胴径 4.1	完存	白色	透明釉	胴部に梅文と笹文の染付。壺付は 釉ハギで砂が付着。	肥前産 19世紀
2821	B-1区 SX-411	磁器 染付 小瓶	-	(9.4)	4.2	胴径 7.1	口縁部 欠損	灰白色	外面に透明釉	外面に蜻唐草文と松葉文の染付。 壺付は釉ハギで砂付着。	肥前産か 18世紀末～19世紀 前半
2822	B-1区 SX-411	青花 大皿	-	(2.4)	15.8	-	一部 残存	灰白色	壺付を除き 透明釉	外面に圏線、見込に草花文と圏線 の染付。高台に粗い砂付着。	中国産 漳州窯系



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2823	B-1区 SX-411	土師質 土器 皿	11.4	1.6	8.8	-	4/5	淡黄色	-	白土器。見込に型押による陽刻で「寿」字文。全面横方向のナデ。	尾戸窯
2824	B-1区 SX-411	土師器 火鉢	10.4	-	胴径 10.4	-	一部 残存	橙色 金雲 母と長石 を含む	-	練込手。外面から底部外面は丁寧な磨き。内面は回転ナデ。底部外面に「深草」の刻印。	京都産か
2825	B-1区 SX-411	土師器 焙烙	30.2	7.2	-	-	1/5	にぶい橙 色 金雲母 を含む	-	外型成形か。口縁部は横ナデ。内面は回転ナデ、底部外面は無調整。	関西系
2826	B-1区 SX-412	陶胎染付 碗	-	(4.3)	-	-	一部 残存	灰白色 磁器質	透明釉	外面に注連縄文の染付。	-
2827	B-1区 SX-412	陶器 碗	10.8	8.0	5.3	-	1/3	灰白色 磁器質	内面から高台 付近まで灰釉	腰張形。外面に注連縄文の染付。高台付近から底部は削り出して無釉。	尾戸窯
2828	B-1区 SX-412	陶器 火鉢	12.8	(9.2)	-	胴径 15.1	1/4	灰白色	外面は緑釉 内面は鉄釉を 刷毛塗り	小型。獣面の把手を貼付。外面は印刻による菊花文と雲文。	瀬戸・美濃系
2829	B-1区 SX-412	陶器 耳壺	11.3	(135)	-	-	1/4	黄灰色	口縁部内面から 外面に褐釉	肩部に耳を貼付し、スタンプによる蓮華王印が2箇所に残る。漆継痕あり。	中国産 14世紀
2830	B-1区 SX-414	陶器 小碗	9.1	5.4	3.0	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面に鉄錆による小杉文。高台付近から底部は削り出して無釉。	信楽系 18世紀後葉
2831	B-1区 SX-414	陶器 中皿	24.0	6.0	12.8	27.1	-	灰白色	内面から体部 外面まで 透明釉	石皿。見込に呉須と鉄錆による文様と目痕、釘彫による屋号。畳付と高台内に屋号や「魚」などの墨書。	瀬戸・美濃産
2832	B-1区 SX-414	陶器 乗燭	4.4	10.5	5.0	胴径 8.7	4/5	橙色	背面を除き 透明釉	型成形。雀形。蓋が付く構造。鍵穴状に開口。柄部は直立し、上部に円孔。前方に注口で内側に円孔。	軟質施釉陶器か
2833	B-1区 SX-414	陶器 乗燭	4.3	10.1	4.7	6.8	ほぼ 完存	褐灰色	口縁部を除き 鉄釉	把手付き瓶形。口縁部に切り込みと片口。受部に2箇所の円孔。畳付は釉ハギで砂付着。	-
2834	B-1区 SX-414	陶器 色絵 人形	全長 (8.7)	全幅 (12.1)	全厚 (6.5)	-	1/2	灰白色	外面は透明釉	型成形。巻物をみる二人の人物形。朱・緑色の上絵付で彩色。内面はナデで、指頭圧痕が残る。	-
2835	B-1区 SX-414	磁器 染付 端反碗	11.1	6.3	4.8	-	完存	白色	透明釉	外面と見込に風景文の染付。内面は墨弾きの雷文。畳付は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半～中葉
2836	B-1区 SX-414	磁器 染付 中皿	19.7	2.9	12.4	-	1/2	灰白色	透明釉	内外面と見込に宝文と圏線の染付。高台内中央に目痕が1箇所。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀後半
2837	B-1区 SX-414	磁器 染付 碗蓋	9.2	2.8	-	摘径 3.8	1/3	白色	透明釉	端反形。外面に雲龍文、内面に雲文と野菜文の染付。摘内に銘。摘端部は釉ハギ。焼継痕あり。	肥前系 19世紀前半～中葉
2838	B-1区 SX-414	磁器 染付 鉢	18.8	6.6	9.8	-	1/2	白色	透明釉	折縁形。蛇ノ目凹形高台。口縁部内面に花文と雪輪文、見込に海浜風景文の染付、高台内に銘。	肥前産 19世紀前半～中葉
2839	B-1区 SX-414	磁器 染付 油壺	2.2	8.8	4.4	胴径 9.2	完存	灰白色	口縁部内面 から外面は 透明釉	胴丸形。外面に松竹梅文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前系 18世紀
2840	B-1区 SX-414	磁器 ミニ チュア	2.2	1.0	1.0	-	完存	灰白色	白磁釉	白磁。型打成形。菊花形の鉢形。高台は釉ハギ。底部に砂と粘土が付着。	肥前産
2841	B-1区 SX-414	磁器 染付 碗	9.6	5.0	4.4	-	1/2	白色	透明釉	端反形。外面に靈芝文と圏線、内面と見込に靈芝文の染付。高台内は方形枠に銘。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 1820～1860年代
2842	B-1区 SX-414	土製品 基石形	全長 2.1	全幅 2.0	全長 0.6	-	完存	にぶい 橙色	-	全面にナデ。	-
2843	B-1区 SX-414	木製品 漆器 椀	-	(1.9)	-	-	高台と 口縁部 が欠損	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金の松文とみられる文様。平碗か。	ブナ属
2844	B-1区 SX-414	木製品 漆器 蓋	-	(2.9)	-	摘径 5.8	ほぼ 完存	-	外面は黒塗 内面は赤塗	外面に金の鶴松文。	ブナ属



遺物観察表72 B-1区

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2845	B-1区 SX-414	貝製品 杓子	全長 7.5	全幅 8.5	全厚 2.9	重量 16.80	ほぼ 完存	-	-	2孔が並列。右殻。	イタヤガイ
2846	B-1区 SX-414	金属製品 飾り金具	全長 17.8	全幅 1.6	全厚 0.5	重量 41.22	完存か	-	-	銅製。先端は宝珠形。表面に陰刻による亀甲文。裏面は両端が肥厚。上下に径1mmの孔あり。	-
2847	B-1区 SX-415	陶器 丸碗	10.7	(6.9)	-	-	1/3	灰白色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	外面に鉄錆による文様。高台付近は削り。	京都系
2848	B-1区 SX-415	陶器 輪花鉢	16.4	9.2	6.6	18.1	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口縁端部は内傾する。見込に2箇所 の目痕。高台付近から底部は削り 出しで無釉。	尾戸窯
2849	B-1区 SX-415	陶器 播鉢	21.9	7.2	10.3	-	7/8	灰赤色	-	片口風。回転ナデで、外面には回転 削りを加える。内面と見込に放射 状の播目。底部外面に板状圧痕。	-
2850	B-1区 SX-415	陶器 甕	18.0	22.5	11.2	21.9	1/4	にぶい 赤褐色	内面は灰釉と 鉄釉 外面は透明釉	二彩手。外面は白化粧土刷毛塗 り、鉄絵。底部外面は削り出し。底 部内面と高台に砂付着。	肥前産 武雄 18世紀
2851	B-1区 SX-415	陶器 甕	22.6	(132)	-	31.1	1/4	にぶい 黄橙色	外面は鉄釉 内面は灰釉	口縁端部は外傾する。外面は黒褐 色の釉を流し掛け。	-
2852	B-1区 SX-415	陶器 焜炉	20.5	17.3	18.3	胴径 17.3	5/6	灰白色	口縁部内面か ら体部外面は 灰釉	円筒形。切り込みの窓。口縁部に 角状の突起と円孔。脚を貼付。回 転ナデ。緑釉を流し掛け。	-
2853	B-1区 SX-415	磁器 染付 小広東碗	10.9	5.9	6.5	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に宝文と魚文、内面に圏線、 見込に小判文?の染付。2箇所に 焼継痕あり。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀後葉～19世 紀前葉
2854	B-1区 SX-415	磁器 染付 端反小碗	10.2	5.6	4.2	-	1/3	白色	透明釉	外面に薄文、内面に墨弾きの雲 文、見込に薄文と圏線の染付。焼 継痕あり。畳付は釉ハギ。	肥前産 19世紀
2855	B-1区 SX-415	磁器 染付 端反小碗	10.8	6.1	4.1	-	一部 残存	白色	透明釉	外面は丸に土農工商の図柄の染 付。内面に紗綾文、見込に麒麟文 の染付。焼継痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 19世紀
2856	B-1区 SX-415	磁器 染付 端反小碗	11.2	5.9	4.7	-	4/5	白色	透明釉	外面に圏線と牡丹文、内面に圏 線、見込に圏線と花文の染付。2箇 所に焼継痕。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀末～19世紀 前半
2857	B-1区 SX-415	磁器 染付 丸碗	11.8	6.3	5.0	-	1/2 底部 完存	白色	透明釉	外面に宝文、内面に四方襷文、見込 に花文の染付、高台内に銘。畳付は 釉ハギ。焼継痕と白玉描きあり。	肥前産 18世紀中葉～後半
2858	B-1区 SX-415	磁器 色絵 蓋物蓋	3.7	1.6	笠径 4.8	摘長 2.4	1/2	白色	透明釉	天井部に紐状の摘貼付。外面に朱 色で「康」、金色で「福寿」字の上絵 付。かえりは釉ハギ。	-
2859	B-1区 SX-415	磁器 餌鉢	全長 11.5	3.1	全幅 9.3	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から体部 外面まで灰釉	楕円形。側面に輪状の把手を2箇 所貼付。底部外面は無調整・無釉 で板状圧痕が残る。	-
2860	B-1区 SX-415	磁器 柄杓	7.7	5.3	4.6	-	7/8	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	内面に鉄錆による圏線。断面が半 円形の把手を貼付し、円孔が貫 通。高台付近は削り出しで無釉。	-
2861	B-1区 SX-415	瓦質土器 十能	全長 (129)	3.4	全幅 (118)	-	一部 残存	灰白色	-	筒状の把手貼付。把手上面に径5 mmの円孔。円孔周囲に方形に錆付 着。ナデで、底部外面は無調整。	-
2862	B-1区 SX-415	土製品 人形	全長 6.3	全幅 6.9	全厚 (2.2)	-	1/2	橙色	-	猫形。型成形で貼り合わせ。中空。 外面はキラ粉付着。内面はナデで 指頭圧痕。裏面剥離。	-
2863	B-1区 SX-415	土製品 碁石形	全長 2.0	全幅 2.0	全厚 0.6	-	完存	橙色	-	全面にナデ。	-
2864	B-1区 SX-415	石製品 硯	全長 14.9	全幅 4.6	全厚 (1.6)	重量 210	一部 欠損	-	-	矩形。中央部は使用により摩耗。 側面の一部に墨付着。裏面に「中 宮□」刻書。	砂岩か
2865	B-1区 SX-415	木製品 木筒	全長 10.6	全幅 6.8	全厚 0.8	-	一部 欠損	-	-	片面墨書。短冊形。中央部両端に 円形の釘孔。木釘が残る。「御沓御 守」の墨書。柾目。	-
2866	B-1区 SX-416	陶器 小碗	9.5	6.1	4.0	-	3/4	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口縁部内面に釉垂れ。高台付近か ら底部は削り出しで無釉。	尾戸窯

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2867	B-1区 SX-416	陶器 半球形碗	10.0	7.6	3.4	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで光沢 のある灰釉	口縁部外面に鉄錆による注連繩 文。高台付近から底部は削り出し で無釉。	京都・信楽系
2868	B-1区 SX-416	陶器 猪口	4.9	2.8	1.9	-	完存	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	高台付近から底部は削り出して 無釉。	京都・信楽系
2869	B-1区 SX-416	陶器 土瓶	8.4	14.7	9.0	胴径 24.0	一部 欠損	灰黄色	口縁部内面か ら体部外面ま で灰釉	算盤玉形。注口と半円形の釣手・ 脚を貼付。口縁部は釉ハギ。回転 ナデ。底部外面は煤付着。	-
2870	B-1区 SX-416	陶器 焜炉	15.2	(11.6)	-	胴径 12.8	1/3	橙色	-	体部の2箇所に径1.8cmの円孔。回 転ナデ。内面に縦方向の櫛描によ る文様。口縁部内面に煤付着。	-
2871	B-1区 SX-416	磁器 染付 合子蓋	6.2	1.4	天井 径 6.2	-	2/3	白色	透明釉	天井部外面に風景文の染付。口縁 部内面は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半～中葉 (幕末)
2872	B-1区 SX-416	磁器 合子	5.1	2.1	3.3	-	2/1	白色	底部外面を除 き白磁釉	白磁。型打成形。外面は型押によ る蓮弁と菊花の陽刻文。受部は釉 ハギ。	肥前産
2873	B-1区 SX-416	磁器 色絵 蓋物	9.1	5.0	4.3	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に蓮弁文と圏線の染付と朱・ 墨・緑色の草花文の上絵付。口縁 部内面と壘付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀後半
2874	B-1区 SX-416	磁器 染付 鉢	23.0	7.3	11.9	-	2/5	灰白色	透明釉	折縁形。蛇ノ目凹形高台。外面に 唐草文、内面に花文と雪輪文か、 見込に風景文?と松文の染付。	肥前系 18世紀後半
2875	B-1区 SX-416	磁器 仏飯器	7.0	5.0	3.5	-	1/4	灰白色	内面から脚部 裾部まで 透明釉	杯部外面はコンニャク印判による 花文。底部は削り出して無釉。	肥前産 18世紀前半
2876	B-1区 SX-416	軟質施釉 陶器 稜花鉢	19.1	(6.3)	-	-	1/4	にぶい 黄橙色	濃緑釉	内面に型押による文様で区画内 に草花文。	讃岐産 源内焼か
2877	B-1区 SX-416	土師質 土器 皿	11.7	1.8	8.4	-	完存	灰白色	-	白土器。全面に横方向のナデ。見 込は型押による陽刻の高砂文。	尾戸窯
2878	B-1区 SX-416	木製品 羽子板	全長 38.6	全幅 (7.2)	全厚 0.9	-	1/2	-	-	両面に朱色の彩色が僅かに残る。 板目か。	-
2879	B-1区 SX-417	磁器 変形皿	-	3.3	-	-	一部 残存	白色	透明釉	型打成形で扇型。型紙摺による文 様で、外面に雷文帯、口縁部内面 に唐草文、見込に海浜風景文。	肥前産 有田 18世紀第2～3四半 期
2880	B-1区 SX-417	磁器 染付 壺	7.4	(5.7)	-	胴径 12.5	1/5	灰白色	口縁部内面か ら外面に 透明釉	蓋物か。外面は区画内に草花文の 染付。内面は回転ナデで一部施 釉。被熱したか釉に光沢なし。	肥前産 17世紀末～18世紀 初頭
2881	B-1区 SX-417	土師器 火鉢	-	(7.9)	-	-	一部 残存	灰黄色 金雲母を 含む	-	箱形。粘土板を接合して成形。外 面はナデまたは無調整。内面から 口縁部は横方向のナデ。	-
2882	B-1区 SX-418	陶器 丸碗	-	(3.9)	5.0	-	1/2	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉	京焼風。高台内に「清水」の刻印。 高台付近から底部は削り出して 無釉。	肥前産 17世紀後半
2883	B-1区 SX-418	陶器 筒形碗	-	(4.4)	5.2	-	1/4	灰白色	内面から高台 付近まで 透明釉	外面に鉄錆による梅文。高台付近 から底部は削り出して無釉。	-
2884	B-1区 SX-418	陶器 皿	-	(1.3)	6.7	-	3/4	灰白色	長石釉	壘付は釉ハギ。	美濃 志野焼か
2885	B-1区 SX-418	陶器 火入	8.8	(3.1)	-	-	一部 残存	灰白色	口縁部内面か ら外面に灰釉	外面に赤銅色の上絵付による笹 文。内面は回転ナデで無釉。	京都・信楽系か
2886	B-1区 SX-418	陶器 瓶	-	(2.3)	3.7	-	底部 完存	にぶい 赤褐色	灰釉	碁笥底風。外面に鉄錆による文 様。壘付は釉ハギ。	-
2887	B-1区 SX-418	陶器 水滴	全長 (5.5)	全幅 10.9	全厚 (5.1)	-	一部 欠損	灰白色	下面を除き 鉄釉	馬形。型成形。1箇所に径5mmの円 孔。底面はナデで無釉、墨書あり。	-
2888	B-1区 SX-418	磁器 色絵蓋付 小鉢か	-	(2.7)	4.5	-	1/4	白色	透明釉	外面に染付と朱・緑・金色の上絵 付で櫛歯文。見込は円形に釉ハ ギ。壘付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀後半

遺物観察表74 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2889	B-1区 SX-418	磁器 色絵 小碗	8.0	4.0	2.9	-	1/5	白色	口縁部内面から外面に透明釉	外面は朱色の上絵付による文字。内面は墨・朱色の目出鯛文の上絵付か。見込は無釉。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 19世紀第1四半期
2890	B-1区 SX-418	磁器 染付 碗	-	(3.5)	6.7	-	1/3	白色	透明釉	大振り。内外面に染付。畳付は釉ハギ。焼継痕あり。	-
2891	B-1区 SX-418	磁器 染付 皿	13.0	3.0	7.2	-	1/2	灰白色	透明釉	くらわんか手。内面は菊唐草文の染付。見込は蛇ノ目釉ハギでコンニャク印判の五弁花文。	肥前産 18世紀後半
2892	B-1区 SX-418	磁器 変形皿	-	(2.0)	-	-	一部 残存	白色	透明釉	型打成形。扇型。高台は貼付。型紙摺による文様で内面は海浜文か。外面に雷文帯、高台内に銘。被熱。	肥前産 有田 18世紀第2~3四半期
2893	B-1区 SX-418	磁器 染付 壺	8.8	16.1	7.3	胴径 15.5	2/3	白色	透明釉	蓋物か。外面は葡萄文、口縁部外面は四方禪文の染付。内面の一部は無釉。口縁端部と畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1630~1640年代
2894	B-1区 SX-418	土製品 碁石形	全長 2.1	全幅 2.1	全厚 0.6	重量 2.6	完存	にぶい 褐色	-	全面にナデ。	-
2895	B-1区 P-406	土製品 人形	全長 4.5	全幅 3.4	全厚 1.9	-	完存	にぶい 橙色	-	天神様。型成形貼り合わせ。中実。台座は多角形。下面に円孔。キラ粉付着。	-
2896	B-1区 P-407	磁器 染付 皿	13.1	3.5	7.3	-	7/8	灰白色	透明釉	外面は唐草文、内面は矢羽根文の染付。見込はコンニャク印判による五弁花文。高台内は圏線と銘。	肥前系 18世紀後半
2897	B-1区 P-408	土師質 土器 杯	9.4	4.2	4.8	-	7/8	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。外面に煤付着。	-
2898	B-1区 P-408	土師質 土器 皿	10.0	2.0	5.7	-	ほぼ 完存	にぶい 黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2899	B-1区 P-408	土製品 人形	全長 (8.2)	全幅 (5.3)	全厚 (2.4)	-	一部 残存	にぶい 黄橙色	-	布袋様か。型成形で、貼り合わせ。中空。外面にキラ粉付着。内面はナデ。	-
2900	B-1区 P-409	陶器 壺	13.8	22.6	14.3	胴径 21.2	完存	明黄褐色	-	底部に焼成前の穿孔。外面は横方向のナデ。内面はナデ。体部内面から底部に煤付着。外面に漆喰付着。	-
2901	B-1区 P-410	瓦 平瓦	全長 (11.0)	全幅 (9.0)	全高 1.5	-	一部 残存	灰白色	-	側面に「御瓦師」とみられる刻印。	土佐産 安芸か
2902	B-1区 P-411	金属製品 銭貨	銭径 2.40	孔径 0.70	銭厚 0.11	重量 2.54	完存	-	-	銅製。元豊通寶。	初鑄造年 1078年
2903	B-1区 P-412	土師質 土器 皿	10.3	2.6	5.1	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部内外面に煤付着。灯明皿として使用か。	-
2904	B-1区 P-412	土師質 土器 小皿	7.8	2.0	3.6	-	4/5	明黄褐色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。見込に煤付着。	-
2905	B-1区 P-412	土師質 土器 小皿	8.2	1.9	3.9	-	7/8	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部に僅かに煤付着。	-
2906	B-1区 P-413	磁器 染付 碗蓋	9.2	2.8	-	摘径 3.5	完存	灰白色	透明釉	端反形。外面は濃地に四方禪文・風景文・草花文、内面は濃地に四方禪文と宝文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前系 19世紀前半
2907	B-1区 P-414	磁器 灰吹	6.0	(3.7)	-	-	1/3	灰白色	口縁部内面から外面に青磁釉	青磁。外面は丸彫の縞文。内面は回転ナデ。内面は無釉。	肥前産 18世紀
2908	B-1区 P-415	陶器 碗	-	(1.7)	4.5	-	底部 完存	灰黄色	内面から高台付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「スヒ」とみられる墨書。	-
2909	B-1区 P-416	磁器 染付 猪口	5.9	2.6	2.6	-	1/3	白色	透明釉	外面はコンニャク印判による桐文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
2910	B-1区 P-417	陶器 溝縁皿	13.2	3.5	4.7	-	1/3 底部 完存	橙色	内面から口縁部外面まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。体部外面は回転ナデ、底部は削り出して無釉。被熱か。	肥前産 17世紀前半

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2911	B-1区 P-417	磁器 染付 皿	13.7	3.5	5.0	-	4/5	灰白色	透明釉	口縁部内面に唐草文の染付。見込に蛇ノ目軸ハギでコンニャク印判による五弁花文。畳付は軸ハギ。	肥前産 18世紀後半
2912	B-1区 P-417	磁器 皿	21.5	(2.7)	-	-	一部 残存	白色	青磁釉	青磁。外面は無文。内面に陰刻による雷文帯と丸彫による菊弁文。	肥前産 1630～1650年代
2913	B-1区 P-417	土師質 土器 皿	11.6	2.1	8.1	-	完存	灰白色	-	白土器。見込は型押による陽刻の高砂文。口縁部は横ナデ。底部内外面はナデ。	尾戸窯
2914	B-1区 P-418	陶胎染付 瓶	-	(22.3)	7.0	胴径 15.5	3/4	褐灰色	口縁部内面から高台付近まで透明釉	外面は白化粧土のち松文の染付。胴部内面は回転ナデで無釉。	-
2915	B-1区 P-419	土師質 土器 小皿	6.7	1.9	4.4	-	4/5	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部内外面に煤付着。	-
2916	B-1区 P-420	磁器 染付 角皿	-	3.6	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に飛雲文と宝文・雷文帯、口縁部内面に宝文、見込に牡丹文の染付。畳付は軸ハギ。	肥前産 有田 18世紀後半
2917	B-1区 P-421	磁器 色絵 碗	-	(3.7)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	外面に圏線の染付と朱・墨色の上絵付による文様。内面に四方禪文の染付。被熱する。	肥前産 有田 18世紀後半
2918	B-1区 P-421	磁器 色絵 碗蓋	10.3	3.1	-	摘径 4.4	一部 残存	白色	透明釉	望料形。外面に染付と朱・緑・墨・金色の窓絵などの上絵付。内面に松竹梅文と四方禪文の染付。	肥前産 有田 18世紀
2919	B-1区 P-421	磁器 色絵 火入か	10.0	(7.2)	-	-	1/5	灰白色	口縁部内面から外面に透明釉	回転ナデ。外面に区画文の染付と朱色の上絵付で四方禪文。口縁部は朱色の上絵付。2628と揃いか。	肥前産 有田 18世紀後半
2920	B-1区 P-421	青花 瓶	4.4	(6.1)	-	-	口縁部 完存	白色	透明釉	外面に区画内に波文とみられる染付。被熱する。	中国産か 17世紀
2921	B-1区 P-422	土師質 土器 杯	11.8	3.0	6.4	-	2/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。外面に黒斑あり。	-
2922	B-1区 P-423	陶器 向付	-	(4.2)	-	-	一部 残存	灰黄色	透明釉	内外面に鉄錆による文様。	瀬戸・美濃産か 志野織部か 1630～1640年代か
2923	B-1区 P-424	陶器 台付灯明 皿	7.2	6.4	5.1	-	1/2	赤褐色	内面から底部付近まで鉄釉	脚部は中空で裾部の1箇所に三角形の孔。杯部と受部は傾く。底部は回転削りで無釉。	阿波産 大谷焼
2924	B-1区 P-424	磁器 染付 広東碗	11.5	6.4	6.6	-	一部 欠損	灰白色	透明釉	外面に草花文、口縁部内面に圏線、見込に火焰文と圏線の染付。畳付は軸ハギ。	肥前系 江戸後期
2925	B-1区 P-424	磁器 染付 仏飯器	7.8	8.5	4.7	-	1/2	灰白色	透明釉	杯部外面に蜻唐草文と圏線の染付。畳付は軸ハギ。	肥前系 18世紀末～19世紀 第1四半期
2926	B-1区 P-424	軟質施釉 陶器台付 灯明受皿	8.2	8.0	7.1	-	ほぼ 完存	橙色	杯部内面から脚裾部に透明釉	受部に半円形の切り込み。回転ナデ。脚部内面は横方向のヘラ削り。口縁部に煤付着。	-
2927	B-1区 P-425	磁器 染付 仏飯器	7.7	6.3	4.5	-	1/2 脚部 完存	灰白色	透明釉	外面に風景文の染付。脚部に2条の圏線の染付。畳付は軸ハギ。	肥前系 18世紀
2928	B-1区 P-425	磁器 染付 仏花瓶	8.5	(15.0)	-	胴径 7.7	1/2	灰白色	口縁部内面から外面に青磁釉	青磁。内面は回転ナデで無釉。2箇所に鳥形の双耳を貼付。	肥前産
2929	B-1区 P-426	陶器 小碗	9.2	5.5	4.4	-	1/2	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	高台付近から底部は削り出して無釉。	尾戸窯 19世紀
2930	B-1区 P-426	磁器 染付 小碗	9.5	4.7	4.1	-	3/4	灰白色	透明釉	内外面に靈芝文の染付。高台内に銘。焼継痕あり。畳付は軸ハギ。	瀬戸・美濃産 1820～1860年代
2931	B-1区 SK-506	陶器 色絵 半球形碗	9.3	5.6	3.0	-	2/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	外面に朱色の笹文と花文の上絵付。高台付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系
2932	B-1区 SK-506	陶器 碗	10.6	7.1	3.9	-	2/3	灰白色 磁器質	内面から高台付近まで灰釉	高台付近に丸彫による蓮弁状の文様。口縁部外面に呉須と鉄錆による草花文。見込に目痕。	京都産 18世紀中葉

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2933	B-1区 SK-507	陶器 碗	11.4	7.2	4.8	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から口縁 部外面まで灰 釉 外面は鉄釉	体部外面に3条の沈線と凹み。畳 付は釉ハギ。外面下半に長石釉を 散らす。	瀬戸・美濃産 18世紀
2934	B-1区 SK-507	陶器 碗	11.8	8.1	5.3	-	3/4	灰白色	内面から外面 体部下半まで 灰釉	外面に2段の沈線状の凹み。高台 付近から底部は削り出して無釉。 口縁部に鉄釉を流し掛け。	瀬戸・美濃産か
2935	B-1区 SK-507	磁器 染付 猪口	7.0	6.1	5.0	-	1/2	灰白色	透明釉	桶形。外面に花唐草文の染付。畳 付は釉ハギ。	肥前産 有田 1730～1750年代
2936	B-1区 SK-508	磁器 染付 稜花鉢	12.3	6.4	5.5	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	外面に区画内に雲龍文・宝文、内 面は雲文か、見込に宝文と圏線の 染付。高台内に銘。畳付は釉ハギ。	-
2937	B-1区 SK-508	磁器 色絵 八角鉢	12.8	6.2	5.7	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に窓絵の染付内に朱・緑・墨色 で上絵付。内面に染付と朱色の上 絵付。畳付は釉ハギ。焼継痕あり。	肥前産 有田
2938	B-1区 SK-509	青花 鉢	37.0	10.2	20.2	-	1/2	灰白色	畳付を除き 透明釉	折縁形。外面に花文と樹木文、内 面に花鳥と岩文の染付。高台内に 圏線と銘、放射状の鉋痕あり。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
2939	B-1区 SK-510	陶器 皿	9.9	1.9	4.1	-	2/3	灰白色	見込から口縁 部外面まで 灰釉	見込に目痕。口縁部外面に煤付 着。外面は回転ナデで無釉。底部 付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系
2940	B-1区 SK-510	陶器 皿	12.8	5.0	4.5	-	1/2	にぶい 赤褐色	内面から体部 外面まで 鉄釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台付近か ら底部は削り出して無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
2941	B-1区 SK-510	陶胎染付 釜形か	2.4	(2.1)	-	胴径 7.2	1/4	灰白色	透明釉	外面に白化粧土のち松文の染付。 口縁端部は釉ハギ。釜形または丁 子風炉の一部か。	肥前系 江戸後期か
2942	B-1区 SK-510	陶器 火入	-	(7.0)	8.3	10.2	底部 完存	暗灰色	体部外面は 鉄釉	回転ナデ。内面は無釉。見込に重 ね焼痕が残り、墨書あり。底部は 削り出して無釉。	-
2943	B-1区 SK-510	陶器 水盤	21.3	4.2	17.9	-	1/3	灰白色	御深井釉	底部外面は回転削りて脚は剥離。 内外面に型紙摺による鉄錆の花 文と菊花文の上絵付。	瀬戸・美濃産 御深井焼
2944	B-1区 SK-510	陶器 鉢	36.0	13.1	20.5	-	1/10	灰黄褐色	体部外面は鉄 釉を刷毛塗り 内面は灰釉	見込の1箇所に目痕が残る。底部 は削り出して無釉。外面の一部に 銅緑釉掛け流し。	瀬戸・美濃系か 19世紀
2945	B-1区 SK-510	陶器 播鉢	35.4	15.3	14.7	-	1/3	浅黄褐色	口縁端部から 高台付近まで 鉄釉	高台あり。回転ナデ。内面は13条 単位の播目。高台から底部は削り 出して無釉。	19世紀か
2946	B-1区 SK-510	陶器 台付灯明 受皿	-	(1.7)	4.0	-	2/3	橙色	体部外面は 鉄釉	回転ナデ。底部外面は回転糸切り で無釉。底部外面に墨書。	-
2947	B-1区 SK-510	磁器 染付 碗	10.5	6.1	3.9	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線、内面に口縁 部に雷文、見込に松竹梅の染付。 畳付は釉ハギで砂付着。	肥前産 幕末
2948	B-1区 SK-510	磁器 染付 輪花皿	-	(2.0)	6.1	-	1/4	灰白色	透明釉	外面は無文、内面と見込に染付。 焼継痕。高台内に白玉描。畳付は 釉ハギ。	肥前産か
2949	B-1区 SK-510	磁器 染付 小杯	6.5	3.8	2.7	-	4/5	白色	白磁釉	型打成形。外面に陽刻で尾長鶏？ と雲文。高台内は「幹山精製」の銘 で京都の加藤幹山。畳付は釉ハギ。	関西系か 19世紀後半か
2950	B-1区 SK-510	磁器 色絵 皿	9.3	2.0	4.7	-	3/4	白色	透明釉	木型打込成形。見込に陰刻の寿文 と亀文と俳句の上絵付。高台内は 文字の上絵付。畳付は釉ハギ。	瀬戸・美濃産 19世紀中葉
2951	B-1区 SK-510	青花 皿	-	(2.5)	12.6	-	1/6	灰白色	透明釉	外面に圏線、内面に唐草文の染付。 見込に菊文・葉文の陰刻文と花文 の染付。畳付に砂付着。焼継痕。	中国産 景德鎮窯系 17世紀前半
2952	B-1区 SK-510	瓦質土器 焜炉	-	(8.0)	-	-	一部 残存	灰色	-	箱型。二重構造。外面は丁寧な磨 き。内面は口縁部はナデ、体部は 粗い縦方向のハケ。上面に刻印。	-
2953	B-1区 SK-510	土製品 ミニ チュア	全長 6.2	全幅 4.1	全厚 2.7	-	一部 欠損	灰白色	透明釉と 部分的に緑釉	天神様の祠形。型成形で中空。前 面は型押、背面はナデ。	-
2954	B-1区 SK-510	金属製品 銭貨	銭長 径 4.90	孔径 0.50	銭厚 0.28	重量 19.6	完存	-	-	銅製。天保通寶。銭短径3.43cm。背 面は錆化するため不明。	初铸造年 1835年



図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2955	B-1区 SK-511	磁器 染付 蓋物蓋	11.4	3.2	笠径 13.3	筒長 4.5	完存	灰白色	透明釉	紐状の筒を貼付。外面に宝文と圏線の染付。口縁部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
2956	B-1区 SK-511	磁器 染付 瓶	-	(133)	10.9	胴径 11.3	4/5	灰白色	透明釉	外面に山水風景文と四方禰崩れの染付か。底部は回転削りで釉ハギ。墨書あり。	-
2957	B-1区 SK-511	瓦 軒棧瓦	全長 (36)	全幅 (160)	顎下 部厚 2.3	瓦当 高 4.5	一部 残存	灰白色	-	中心飾りは二巴文。瓦当左側に「蒲嘉」の刻印。	-
2958	B-1区 SK-512	土師器 焜炉	全長 21.6	18.1	全幅 22.2	胴径 20.3	-	灰白色	-	箱形。二重構造。方形の窓。たたら成形。外面は磨き、内面はハケ。外面の2箇所に墨書。	-
2959	B-1区 SK-513	陶器 大皿	-	(5.1)	-	-	一部 残存	赤褐色	内面から体部 外面まで透明 釉か	回転ナデ。内面は陰刻と印刻による白象嵌の文様。被熱する。外面体部下半は無釉。	肥前産 武雄 17世紀後半～18世紀前半
2960	B-1区 SK-514	陶器 焜炉	-	(6.8)	-	-	胴部 の一部	橙色	-	円筒形。引戸の裏部分。ナデで外面は横方向の擦痕残る。外面に「江ノ口町」などの刻印あり。	土佐産か 近代
2961	B-1区 SK-515	陶器 焜炉	-	(184)	18.5	胴径 19.3	1/2	橙色 金雲母を 含む	-	円筒形。引戸あり。外面はナデ、内面は粗い横ハケのち前方に粘土板貼付。高台は横ナデ。刻印あり。	瀬戸・美濃産か 近代
2962	B-1区 SK-515	陶器 五徳	25.0	6.2	18.0	-	1/3	にぶい黄 橙色 長 石を含む	-	回転ナデで、底部付近に回転削りを加える。底部は横ナデ。内面に煤付着。	-
2963	B-1区 SK-515	瓦 軒棧瓦	全長 26.4	全幅 (29.7)	顎下 部厚 2.4	瓦当 高 4.4	ほぼ 完存	灰白色	-	中心飾りは三巴文。瓦当右側に「布勇」の刻印。平瓦部に円孔あり。	土佐産 布師田
2964	B-1区 SK-515	ガラス 製品 薬瓶	1.6	4.1	2.0	胴径 2.3	完存	明褐色 気泡が 入る	-	型成形。両側面に型合わせの痕跡。底部外面に星形の陽刻。口縁部内面が摩耗。	-
2965	B-1区 SK-515	ガラス 製品 目薬瓶	1.5	5.7	2.2	胴径 2.5	完存	青色	-	型成形。八角形。両側面に型合わせの痕跡。正面に「ロート目薬」、背面に「本舗山田安民」の陽刻文字。	1909～1949年
2966	B-1区 SK-515	ガラス 製品 薬瓶	1.1	7.1	3.0	胴径 3.2	完存	透明 気泡が 入る	-	型成形。円筒形。両側面に型合わせの痕跡。正面には目盛と「30」の陽刻文字。	-
2967	B-1区 SK-516	陶器 瓶	-	(23.7)	10.8	胴径 13.9	口縁部 欠損	浅黄色	外面に灰釉	底部付近から底部は釉ハギ。胴部2箇所に釘彫。	瀬戸・美濃産 江戸後期
2968	B-1区 SK-516	磁器 染付 小瓶	1.3	10.2	3.1	胴径 4.6	完存	灰白色	口縁部内面 から外面に 透明釉	外面に蜻唐草文と松葉文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀末～19世紀
2969	B-1区 SD-504	磁器 染付 蓋物	9.6	4.2	5.8	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に圏線と文様の染付。高台内に「能茶山製」の銘。畳付と口縁端部は釉ハギ。	能茶山窯 1820年代～幕末
2970	B-1区 SD-504	金属製品 匙	全長 (3.5)	全幅 (2.2)	全厚 (0.1)	重量 (1.5)	一部 残存	-	-	基部の断面は長方形。先端は薄く楕円形か。全面を金鍍金。	-
2971	B-1区 SD-505	陶器 碗	12.8	5.9	4.3	-	1/3	にぶい 黄橙色	内面から体部 下半まで光沢 のある灰釉	外面に白化粧土の文様。内面に白化粧土の打刷毛目文。高台付近から底部は削り出して無釉。	瀬戸・美濃産 18世紀
2972	B-1区 SD-505	陶器 皿	12.5	4.7	4.1	-	3/4	灰白色	内外面に鉄釉 と灰釉の掛け 分け	見込に型紙摺による鉄錆の花文。高台付近から底部は削り出して無釉。	瀬戸・美濃系 または 京都系か
2973	B-1区 SD-505	陶器 蓋	5.2	1.1	笠径 7.4	-	1/6	灰白色	レモン色の釉	口縁端部は釉ハギ。	淡路 珉平焼か
2974	B-1区 SD-505	陶器 渡瓶	-	(8.2)	-	-	一部 残存	淡黄色	口縁部内面 から外面に 灰釉	回転ナデで、口縁部は貼付。	瀬戸・美濃産
2975	B-1区 SD-505	土師器 十能	-	(2.3)	-	-	一部 残存	橙色 金雲母を 含む	-	筒状の把手を貼付。把手内外面はナデ。杯部は内面が横ナデ、外面がナデ。	-
2976	B-1区 SD-505	瓦質土器 焙烙	41.2	(5.6)	-	-	1/5	にぶい黄 橙色 金雲 母を含む	-	粘土紐巻上成形。外面はナデで指頭圧痕と木質の圧痕残る。内面は横方向の板ナデ。口縁部は横ナデ。	讃岐産 御厩系 19世紀後半



遺物観察表78 B-1区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2977	B-1区 SD-505	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 1.0	-	完存	灰白色	-	型成形。「憲」字か。下面はナデ。	-
2978	B-1区 SD-507	陶器 餌猪口	4.1	2.7	4.3	-	把手を 除き 完存	灰白色	内面から体部 外面に灰釉	把手は剥離。底部は回転糸切り で、「ナ」の墨書。	-
2979	B-1区 SD-507	磁器 染付 合子	4.2	2.1	2.5	5.0	1/2	灰白色	透明釉	外面に半菊文の染付。口縁端部と 底部は釉ハギ。	-
2980	B-1区 SD-507	青花 皿	-	(1.4)	7.7	-	1/8	灰白色	高台内と畳付 を除き透明釉	高台内には放射状の匏痕。外面に 圏線、見込に花文の染付。畳付か ら底部は削り出し。	中国産 景德鎮窯系
2981	B-1区 SD-507	土師質 土器 皿	11.2	2.3	6.5	-	1/3	白色	-	白土器。見込は型押による陽刻の 「寿」字文。内外面は回転ナデ。底 部は回転ヘラ切り？のちナデ。	尾戸窯
2982	B-1区 SD-507	土師質 土器 小皿	7.1	1.5	4.5	-	1/2	にぶい 橙色	-	外面は回転ナデ。底部は回転糸切 り。	-
2983	B-1区 SD-507	土師質 土器 小皿	7.3	1.6	4.2	-	ほぼ 完存	にぶい 橙色 赤礫を含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口 縁部に僅かに煤付着。	-
2984	B-1区 SD-507	土師質 土器 小皿	7.4	1.5	4.0	-	2/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2985	B-1区 SD-507	土師質 土器 小皿	7.8	1.6	4.8	-	1/2	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
2986	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.4	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。花文。文様面にキラ粉付 着。下面はナデ。	-
2987	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 黄橙色	-	型成形。花文。文様面にキラ粉付 着。下面はナデ。	-
2988	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。花文。文様面にキラ粉付 着。下面はナデ。	-
2989	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色 小礫を含む	-	型成形。花文。文様面にキラ粉付 着。下面はナデ。	-
2990	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.7	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。笹文か。文様面にキラ粉 付着。下面はナデ。	-
2991	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。鶴文。下面はナデ。	-
2992	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。馬文か。文様面にキラ粉 付着。下面はナデ。	-
2993	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.1	全厚 0.8	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。小型。蟹文か。文様面にキ ラ粉付着。下面はナデ。	-
2994	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	型成形。葉文か。文様面にキラ粉 付着。下面はナデ。	-
2995	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.3	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	型成形。葉文か。文様面にキラ粉 付着。下面はナデ。	-
2996	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 (2.2)	全幅 2.3	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	型成形。三ツ葉柏文。文様面にキ ラ粉付着。下面はナデ。	-
2997	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。二巴文。文様面にキラ粉 付着。下面はナデ。摩耗する。	-
2998	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	完存	浅黄橙色	-	型成形。「い」字。下面はナデ。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
2999	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。やや小型。「板垣」字か。下面はナデ。	-
3000	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.4	全厚 0.7	-	完存	橙色	-	型成形。「友□□」字か。下面はナデ。	-
3001	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.7	-	一部 欠損	にぶい 橙色	-	型成形。文様不明。文様面にキラ粉付着。下面はナデ。	-
3002	B-1区 SD-507	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.3	全厚 0.6	-	完存	にぶい 橙色 赤礫を含む	-	型成形。摩耗が著しく文様不明。文様面にキラ粉付着。下面はナデ。	-
3003	B-1区 P-502	土師器 焜炉	-	(123)	20.8	胴径 21.6	7/8	浅黄橙色	-	前方に出窓と刻印。外面は赤彩。内外面は横方向のナデ。脚は横ナデ。底部に板状圧痕。煤付着。	江戸後期
3004	B-1区 P-503	陶器 半球形碗	9.4	5.6	3.2	-	2/3	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	外面は呉須と鉄錆による笹文。高台付近から底部は削り出して無釉。	京都・信楽系 18世紀後半
3005	B-1区 P-503	陶器 半球形碗	10.6	6.4	3.8	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	外面に呉須と鉄錆による草花文。高台から底部は削り出して無釉。	京都産
3006	B-1区 P-504	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.6	-	完存	にぶい 黄橙色	-	型成形。「板垣」字。下面はナデ。	-
3007	B-1区 P-505	陶器 鉢	-	(29)	19.2	-	1/4	灰白色	外面は無釉 内面は鉄釉	外面は回転削り。見込に刻印と目痕。体部外面と底部に「追手筋」「豊店」などの墨書。	-
3008	B-1区 P-506	陶器 火鉢	22.8	17.2	18.8	胴径 31.4	1/2	灰黄色	口縁端部から 体部外面は 鉄釉	肩部に透かし。外面は型押による文様。回転ナデで底部外面付近は回転削り。	19世紀
3009	B-1区 P-506	磁器 大皿か	-	(5.8)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。折縁形。口鑄。内面は片彫の雲文。	肥前産 1630～1650年代
3010	B-1区 P-506	土師器 焜炉	16.2	16.7	16.6	胴径 18.8	1/2	にぶい橙 色 砂粒を 多く含む	外面は白色釉	円筒形。二重構造。前方に楕円形の窓。口縁部に楕円形の突起。底部に脚を貼付。口縁部内面に煤付着。	-
3011	B-1区 P-507	青磁 染付 小杯	7.3	4.2	3.3	-	1/2	灰白色	内面は透明釉 外面は青磁釉	口鑄。外面は花文と雷文と圏線。内面は櫛歯文と花文の染付。畳付は釉ハギ。	中国産 景德鎮窯系か 19世紀か
3012	B-1区 P-508	陶器 行平鍋	10.2	9.1	5.1	-	ほぼ 完存	暗赤褐色	外面の一部及 び把手と片口 は鉄釉	小型。中空の把手と片口を貼付。体部に飛鉋文。回転ナデで、底部外面付近は回転削りを加える。	-
3013	B-1区 P-508	陶器 焜炉	17.5	20.4	19.2	胴径 20.3	ほぼ 完存	橙色	外面は透明釉	円筒型。二重構造。外部構造は楕円形の窓。内外構造とも回転ナデ。脚部に「姫路」の刻印。	播磨産
3014	B-1区 P-508	磁器 色絵 皿	13.5	2.7	8.2	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に宝文、見込に波に麒麟文の染付。高台内は圏線。内面に朱・墨・緑・紫色の松竹梅文の上絵付。	肥前産 有田か 近代
3015	B-1区 P-508	土師器 サナ	全長 (102)	全幅 10.5	全厚 1.2	-	4/5	にぶい 橙色 赤礫を含む	-	表面は縞状の圧痕残る。型成形の痕跡か。一部布目痕あり。側面は無調整。7箇所に径1.4cmの円孔。	-
3016	その他 近代遺構	陶器 不明	全長 5.1	全幅 4.2	全厚 3.4	-	完存	明黄褐色	無釉	中空。上下に1孔ずつ。側面に3段の計14孔あり。側面に縦方向の縞状陰刻。用途不明。	-
3017	その他 近代遺構	磁器 染付 合子	4.7	2.7	2.3	-	完存	白色	透明釉	外面に梅樹文と菖文?の染付。畳付と口縁部は釉ハギ。	-
3018	その他 近代遺構	磁器 染付 瓶	-	(17.1)	7.7	胴径 16.2	1/3	灰白色	外面に透明釉	外面に草花文・圏線の染付。釘彫で文字。内面は回転ナデで無釉。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
3019	その他 近代遺構	磁器 染付 油壺	2.0	5.4	5.5	胴径 8.1	ほぼ 完存	灰白色	口縁部内面から 外面に 透明釉	外面に樹木文と蝶文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 19世紀
3020	その他 近代遺構	磁器 鉢	-	(6.4)	10.6	-	1/4	灰白色	青磁釉	青磁。外面に陰刻による草花文。畳付は釉ハギ。	肥前産 1630～1650年代

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3021	その他 近代遺構	土製品 ミニ チュア	全長 2.2	全幅 4.1	全厚 1.8	-	完存	橙色	一部に透明釉 及び白色釉	箱庭道具の水場形か。上部は型成 形。下面是ナデ。	-
3022	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.2	全幅 2.2	全厚 0.5	-	完存	橙色	-	型成形。花文。下面是ナデ。	-
3023	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.7	-	完存	にぶい 橙色	-	草花文か。下面是ナデで、一部ハ ケ又は板状圧痕残る。	-
3024	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.7	-	完存	橙色	-	型成形。大根文。下面是ナデ。	-
3025	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.3	全幅 2.2	全厚 0.8	-	完存	にぶい 橙色	-	型成形。人面。下面是ナデ。	-
3026	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.4	全幅 2.4	全厚 0.8	-	完存	明黄褐色	-	型成形。軍配文。下面是ヘラナデ。	-
3027	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.1	全幅 2.1	全厚 0.8	-	完存	赤褐色	-	型成形。「大江山」の字で陽刻。周 縁なし。下面是ヘラナデ。	-
3028	その他 近代遺構	土製品 泥面子	全長 2.1	全幅 2.1	全厚 0.7	-	完存	浅黄橙色	-	六角形。型成形。文字か。周縁あ り。下面是ナデ。	-
3029	その他 近代遺構	土製品 型	3.7	3.7	内径 1.4	型内 部高 0.6	完存	浅黄橙色	-	泥面子の型か。「自由」の文字。外 面と底部はナデ。	-
3030	その他 近代遺構	木製品 舟形	全長 15.0	全幅 5.8	全厚 (2.9)	-	一部 欠損	-	-	表面に僅かに赤彩が残る。上面に 方形の彫込があり、中央に貫通し ない円孔。船首に貫通する円孔。	近代か
3031	B-2区 SK-346	陶器 向付	-	(1.9)	-	-	一部 残存	灰白色	長石釉	内面に鉄錆による文様。口縁部は 波状で円形の切り込みあり。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
3032	B-2区 SK-346	磁器 染付 丸碗	9.0	5.8	3.8	-	完存	灰白色	透明釉	外面に菊文・蓮弁・四方禪文の染 付。高台内は「富貴長春」の銘。量 付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀後半
3033	B-2区 SK-347	陶器 餌猪口	5.0	3.0	4.4	-	1/2	灰白色	内面から体部 外面に灰釉	底部外面は削り出して無釉。若干 比熱する。	尾戸窯か
3034	B-2区 SK-347	磁器 染付 皿	13.3	2.5	5.0	-	2/3	白色	透明釉	外面に圏線、内面に草花文、見込 に花卉文と圏線の染付。量付は釉 ハギで砂付着。	肥前産 1610～1630年代
3035	B-2区 SK-348	陶器 ミニ チュア	全長 (6.1)	全幅 1.9	全厚 1.2	-	一部 残存	灰白色	下面を除き 透明釉	塀形。箱庭道具。屋根と窓は錆絵。 下面是無釉。	-
3036	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 碗	-	(1.1)	4.9	-	底部 完存	灰白色	内面は灰釉	底部は削り出し。高台内には「い」 の墨書。	-
3037	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 半球形碗	8.9	5.7	3.2	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	外面には鉄錆による文様。高台付 近から底部外面は削り出して無 釉。	京都・信楽系
3038	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 半球形碗	11.8	8.4	5.7	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで光沢 のある灰釉	高台付近から底部外面は削り出 して無釉。	-
3039	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 丸碗	-	(4.4)	5.0	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉 貫入が入る	外面に丸彫による文様。高台付近 から底部外面は削り出して無釉。 高台内に「廿四文」の墨書。	尾戸窯
3040	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 丸碗	10.3	7.2	5.0	-	1/3	淡黄色	内面から高台 付近まで灰釉 貫入が入る	高台付近は回転ナデで無釉。底部 は削り出しの釉ハギ。酸化炎焼成 気味。	尾戸窯
3041	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 丸碗	10.8	7.2	5.4	-	1/2	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	口縁部内外面には釉が溜る。高台 付近は削り出して無釉。	尾戸窯
3042	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 皿	-	(2.7)	5.6	-	2/3	にぶい 橙色	内面から高台 付近まで灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に4箇所 の砂目痕。一部高台まで施釉。底部 は削り出して無釉。	肥前産 17世紀前葉

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3043	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 皿	12.6	3.6	5.1	-	1/3	橙色	内面から高台 付近まで灰釉	見込は蛇ノ目釉ハギで、鉄錆による文様あり。高台付近は削り出しで無釉。重ね焼痕残る。	18世紀か
3044	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 輪花皿	19.0	(4.2)	-	-	1/4	灰白色	長石釉と鉄釉 の掛け分け	口縁端部と見込に鉄錆による文様。	瀬戸・美濃産
3045	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 大皿	-	(3.5)	-	-	一部 残存	灰白色	灰釉	絵唐津。見込に錆。高台外面は一部無釉で、高台内は施釉。畳付は釉ハギ。	肥前産 1590～1610年代
3046	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 合子蓋	3.9	0.7	-	天井 径 3.8	5/6	灰黄色	灰釉	天井部外面は鉄錆による文様。口縁端部は釉ハギ。	-
3047	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 花瓶	6.8	12.8	5.1	胴径 7.4	2/3	灰色	口縁部内面から 体部外面まで鉄釉	体部外面は白化粧土を刷毛塗り後透明釉。体部内面は回転ナデで無釉。畳付は釉ハギ。被熱。	肥前産 18世紀
3048	B-2区 SD-315 埋土1	陶器 台	5.6	3.2	7.5	-	1/2	灰白色	灰釉	畳付は釉ハギ。	-
3049	B-2区 SD-315 埋土1	磁器 皿	-	(2.4)	6.3	-	底部 完存	白色	透明釉	外面は無文。内面はコンニャク印判による菊花文。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
3050	B-2区 SD-315 埋土1	磁器 染付 合子蓋	4.6	1.8	笠径 5.6	摘長 1.8	完存	白色	透明釉	紐状の摘を貼付。外面に松文と圏線の染付。内面は無文。口縁端部は釉ハギ。	-
3051	B-2区 SD-315 埋土1	磁器 染付 猪口	7.3	3.9	2.8	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に草花文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	肥前系 18世紀中葉～後半
3052	B-2区 SD-315 埋土1	磁器 染付 猪口	6.9	5.9	4.9	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	桶形。外面に花文と圏線の染付。内面は無文。畳付は釉ハギ。	肥前産 1740～1770年代
3053	B-2区 SD-315 埋土2	青花 皿	-	(1.1)	5.8	-	一部 残存	灰白色	畳付を除き 透明釉	見込に玉取獅子文と圏線の染付。漆継の痕跡あり。	中国産 景德鎮窯系 15世紀 後半～16世紀前半か
3054	B-2区 SD-315 埋土2	土師質 土器 小皿	6.2	1.2	4.2	-	2/3	橙色 赤礫を 含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
3055	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.2	1.3	4.5	-	ほぼ 完存	橙色 赤色風化 礫を含む	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
3056	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.8	1.2	4.2	-	1/5	灰白色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。若干摩耗する。	-
3057	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.9	1.2	4.3	-	1/5	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。若干摩耗する。	-
3058	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	7.3	1.5	4.1	-	完存	浅黄橙色 赤礫を 少し含む	-	回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭。口縁部に僅かに煤付着。底部は回転糸切り。	-
3059	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	7.4	1.7	4.9	-	ほぼ 完存	浅黄橙色 赤色風化 礫を含む	-	回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭。口縁部に僅かに煤付着。底部は回転糸切り。	-
3060	B-2区 SD-315 埋土2	土師質 土器 小皿	6.5	1.2	4.5	-	2/3	浅黄橙色	-	回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭。口縁部に僅かに煤付着。底部は回転糸切り。	-
3061	B-2区 SD-315 埋土2	土師質 土器 小皿	6.4	1.0	4.1	-	4/5	浅黄橙色 赤礫を 含む	-	回転ナデとみられるが摩耗するため不明瞭。口縁部に僅かに煤付着。底部は回転糸切り。	-
3062	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.7	1.6	4.4	-	完存	にぶい 橙色 赤礫を含む	-	回転ナデ。口縁部の一部に煤付着。底部は回転糸切り。摩耗する。	-
3063	B-2区 SD-315 埋土2	土師質 土器 小皿	6.8	1.3	4.6	-	ほぼ 完存	橙色	-	回転ナデ。口縁部の一部に煤付着。底部は回転糸切り。	-
3064	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.8	1.4	4.2	-	ほぼ 完存	浅黄橙色 赤色風化 礫を含む	-	回転ナデ。口縁部の一部に煤付着。底部は回転糸切り。摩耗する。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3065	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	6.9	1.3	4.5	-	4/5	浅黄橙色 赤礫を 含む	-	回転ナデ。口縁端部に僅かに煤付着。底部は回転糸切り。	-
3066	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	7.0	1.1	4.2	-	1/3	にぶい 橙色 赤礫を含む	-	回転ナデ。口縁端部に煤付着。底部は回転糸切り。	-
3067	B-2区 SD-315 埋土1	土師質 土器 小皿	7.1	1.3	4.6	-	7/8	にぶい 橙色	-	回転ナデ。口縁部の一部に煤付着。底部は回転糸切り。	-
3068	B-2区 SD-315 埋土1	軟質施釉 陶器 素燭	3.8	1.5	2.7	-	完存	灰黄色	内面から体部 外面は灰釉	タンコロ形。中央には径5mmの孔。外側より穿孔。底部は無釉で、摩擦のため不明瞭だがナデか。	-
3069	B-2区 SD-315 埋土2	土製品 人形	全長 5.5	全幅 2.8	全厚 1.9	-	完存	灰白色	下面を除き 緑釉	尼か。型成形。中実。型を合わせた痕跡が側面に残る。接地面は無釉。摩擦する。	-
3070	B-2区 SD-315 埋土1	土製品 型	6.3	2.6	内径 4.2	型内 部高 1.5	完存	橙色 赤 礫と金雲 母を含む	-	型成形。円形で底部内面に松文の陰刻。内面にキラ粉付着。口縁部から外面はナデ。	-
3071	B-2区 SD-316	磁器 染付 猪口	7.3	3.8	2.8	-	1/4	にぶい 黄橙色	透明釉	外面に笹文の染付。高台内側には砂付着。畳付は釉ハギ。	肥前系 18世紀中葉～後半
3072	B-2区 SD-316	土師質 土器 小皿	7.7	1.2	5.0	-	2/3	浅黄橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部に煤付着。灯明皿として使用。	-
3073	B-2区 SD-317	磁器 染付 小碗	10.0	5.1	3.4	-	1/4	灰白色	透明釉	外面にコンニャク印判による文様と雲文の染付。見込は圏線。高台内は「卍」の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
3074	B-2区 SX-325	磁器 皿	-	(2.3)	12.2	-	1/8	灰白色	透明釉	白磁。内面に陰刻による植物文。畳付は釉ハギ。	肥前産 17世紀後半か
3075	B-2区 SX-326	陶器 皿	-	(2.1)	4.3	-	底部 完存	灰白色	外面は透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギで砂付着。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
3076	B-2区 SX-326	陶器 中皿	-	(2.8)	6.8	-	2/3	灰白色	透明釉	見込と畳付に砂目痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
3077	B-2区 SX-326	陶器 鉢	32.3	11.1	12.8	-	1/5	赤褐色	灰釉のうち透明 釉で銅緑釉を 流し掛け	内面に白化粧土を刷毛塗り。見込に砂目痕。外面体部下半から底部は削り出して無釉。	-
3078	B-2区 SX-326	陶器 甕	-	(21.6)	-	胴径 38.8	1/5	暗赤褐色	-	焼締。浮文貼付。肩部に浅い沈線。外面は回転ナデ。内面は口縁部が横ナデ。頸部がナデ。胴部は叩き。	肥前産 17世紀後半か
3079	B-2区 SX-326	磁器 皿	-	(1.5)	-	-	一部 残存	白色	瑠璃釉	内面は丸彫による縞文。口縁端部は刻目状の文様。	肥前産 17世紀後半か
3080	B-2区 SX-326	磁器 皿	17.5	3.3	8.2	-	1/5	灰白色	白磁釉	白磁。畳付は釉ハギ。	肥前産か 17世紀前半か
3081	B-2区 SX-326	青磁 大皿か	-	(4.1)	-	-	一部 残存	灰白色	青磁釉	折縁形。	中国産か 14世紀後半～15世紀か
3082	B-2区 SX-326	磁器 小杯	7.3	5.0	3.5	-	1/2	白色	白磁釉	白磁。見込に僅かに砂付着。高台内にひび割れ。畳付は釉ハギで砂付着。	-
3083	B-2区 SX-326	磁器 色絵 合子蓋	5.6	1.4	-	-	4/5	灰白色	天井部内面に 透明釉	型打成形。外面に緑色の亀甲文と獅子文の陽刻文。口縁端部と口縁部内面は釉ハギ。被熱する。	肥前産 有田 17世紀後半
3084	B-2区 SX-326	土師器 焼塩壺	6.2	9.5	5.0	胴径 7.2	3/4	にぶい 橙色	-	輪積成形。外面はナデか。刻印あり。内面はナデ。指頭圧痕が顕著に残る。布目痕残る。	関西産 17世紀後葉～ 18世紀前葉か
3085	B-2区 SX-326	木製品 漆器 椀	-	4.3	-	-	4/5	-	内外面とも 赤塗	歪みや変形、ひび割れあり。漆の残存状況不良。	ブナ属
3086	B-2区 SX-326	木製品 漆器 椀	11.6	(3.2)	-	-	1/4	-	内外面とも 黒塗	平椀か。	ケヤキ



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3087	B-2区 SX-327	陶器 皿	12.5	3.6	4.0	-	1/2	灰白色	外面は透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台から底 部は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 18世紀後半
3088	B-2区 SX-327	陶器 鉢	-	(3.9)	15.3	-	1/4	明赤褐色	鉄釉	内面の一部に銅緑釉が流れる。畳 付は釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
3089	B-2区 SX-327	磁器 染付 大皿	-	(1.9)	-	-	一部 残存	灰白色	透明釉	口縁部内面に青海波文の染付。部 分的に赤褐色に発色。1060と同一 個体か。	肥前産 有田 1630～1650年代
3090	B-2区 SX-327	磁器 染付 鉢	19.6	(6.6)	-	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に土坡に草文と圏線, 内面に 草文と圏線の染付。	肥前産 17世紀後葉か
3091	B-2区 SX-327	木製品 木筒	全長 17.2	全幅 3.3	全厚 0.2	-	ほぼ 完存	-	-	両面墨書。上部は隅切りか。下部 は剣先。ひび割れと反りあり。	-
3092	B-2区 SX-328	陶器 丸碗	10.5	7.7	5.0	-	1/2	にぶい 橙色	内面から高台 付近まで灰釉 貫入が入る	高台付近から底部は削り出しで 無釉。	尾戸窯
3093	B-2区 SX-328	陶器 鉢	(9.7)	5.4	4.6	-	1/2	灰白色	灰釉	口縁部は方形, 高台は円形。外面 に鉄錆による花文。高台内は削り 出しで無釉。被熱する。	京都系または 尾戸窯か
3094	B-2区 SX-328	土製品 鈴	全長 2.3	全幅 2.2	全厚 2.3	-	完存	にぶい 橙色	-	中に径8mmの土玉あり。上部はや や突出する。全面にナデ。音が鳴 る。	-
3095	B-2区 P-325	陶器 皿	-	(2.3)	7.0	-	1/2	灰白色	畳付を除き 灰釉	見込に型紙摺による菊花文の錆 絵。畳付は無釉。	瀬戸・美濃産 18世紀前半～中葉
3096	B-2区 P-325	磁器 鉄釉染付 丸碗	11.7	5.9	4.1	-	4/5	灰白色	外面に鉄釉 のち全面に 透明釉	内面に圏線, 見込に昆虫文の染 付。畳付は釉ハギ。	肥前系 砥部焼か 18世紀後半
3097	B-2区 SK-462	陶器 丸碗	9.2	(5.7)	-	-	1/4	灰白色	灰釉	外面に金彩による文様。	-
3098	B-2区 SK-462	陶器 丸碗	11.8	6.3	5.2	-	3/4	灰白色	灰釉	見込の3箇所目目痕。畳付は釉ハ ギ。	-
3099	B-2区 SK-462	磁器 染付 丸碗	8.7	5.2	3.6	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に蓮弁文と蝶文, 内面に圏 線, 見込に不明の染付。畳付は釉 ハギ。	-
3100	B-2区 SK-462	施釉土器 胡麻煎	全長 (8.0)	全幅 3.0	全厚 2.3	-	一部 残存	にぶい 橙色	上面は透明釉	把手。型成形で上下を接合。下面 はキラ粉と煤が付着。	-
3101	B-2区 SK-463	土製品 鳩笛	全長 (4.1)	全幅 2.1	全厚 2.2	-	1/2	灰白色	緑釉	上面外側より穿孔。ナデの後, 施 釉。	-
3102	B-2区 SK-463	金属製品 銭貨	銭径 2.4	孔径 0.5	銭厚 0.2	重量 2.9	完存	-	-	銅製。新寛永。全面に鍍化。	-
3103	B-2区 SD-426	陶器 碗	-	(1.4)	4.4	-	底部 完存	浅黄橙色	内面から高台 付近まで灰釉	高台から底部は削り出しで無釉。 底部に焼成後の穿孔あり。	尾戸窯
3104	B-2区 SD-426	陶器 丸碗	-	(2.7)	4.9	-	底部 ほぼ 完存	灰白色	内面から高台 付近まで灰釉	京焼風。高台内に「小松吉」の刻 印。高台付近から底部は削り出し で無釉。	肥前産 17世紀後半
3105	B-2区 SD-426	陶胎染付 丸碗	-	(4.3)	5.0	-	1/3	黄灰色	透明釉	外面に風景文の染付。畳付は釉ハ ギで砂付着。	肥前産 17世紀末
3106	B-2区 SD-426	陶器 碗	10.9	5.3	4.1	-	1/3	灰赤色	鉄釉	外面に白化粧土の丸文で蛸手。内 面に白化粧土による刷毛目文。畳 付は釉ハギ。	肥前産 現川か 18世紀前半か
3107	B-2区 SD-426	陶器 皿	-	(2.0)	-	-	一部 残存	にぶい 橙色	内面から高台 付近まで灰釉	絵唐津。内面に鉄錆による文様。 外面下部は回転ナデで無釉。	肥前産 1590～1610年代
3108	B-2区 SD-426	陶器 皿	11.5	3.8	4.3	-	底部 完存	灰白色	外面は透明釉 内面は銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台から底 部は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半



図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3109	B-2区 SD-426	磁器 染付 広東碗	11.8	6.3	6.7	-	1/2	灰白色	透明釉	外面に蓮弁文に草文, 内面に圏線, 見込に花文の染付。畳付は釉ハギで砂付着。	能茶山窯か
3110	B-2区 SD-426	磁器 皿	-	(2.1)	4.2	-	底部 完存	灰白色	白磁釉	白磁。見込は蛇ノ目釉ハギ。高台から底部は削り出して無釉。砂付着。	肥前産 17世紀後半
3111	B-2区 SD-426	磁器 猪口	3.9	2.2	1.8	-	1/2	灰白色	内面から高台付近まで白磁釉	白磁。型打成形。畳付は釉ハギ。	-
3112	B-2区 SD-426	磁器 香炉	-	(4.8)	6.8	胴径 11.9	1/3	橙色	外面は青磁釉 内面は無釉	青磁。内面は回転ナデ。底部は蛇ノ目釉ハギ。脚は貼付で陰刻による文様。脚端部は釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
3113	B-2区 SD-426	土師質 土器 皿	12.0	2.4	8.3	-	2/3	灰白色	-	白土器。見込には型押による陽刻の鶴亀文。回転ナデのち見込はナデ。底部は回転ヘラ切り。	尾戸窯
3114	B-2区 SD-427	陶器 碗	-	(2.9)	4.0	-	底部 完存	灰白色	灰釉	京焼風。見込に鷲文の染付。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「清水」の刻印。	肥前産 17世紀後半
3115	B-2区 SD-427	陶器 碗	-	(2.7)	4.6	-	底部 完存	灰白色	内面から高台付近まで灰釉	京焼風。高台付近から底部は削り出して無釉。高台内に「小松吉」の刻印。	肥前産 17世紀後半
3116	B-2区 SD-427	陶器 碗	9.4	(2.3)	-	-	一部 残存	浅黄色	透明釉	外面に白象嵌による暦手文。	尾戸窯
3117	B-2区 SD-427	磁器 染付 猪口	5.6	2.9	2.2	-	2/3	灰白色	透明釉	外面に雨降文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
3118	B-2区 SD-428	陶器 丸碗	-	(4.1)	4.6	-	底部 完存	灰白色	光沢のある灰釉 全面に貫入が入る	畳付は釉ハギで砂付着。	-
3119	B-2区 SD-428	陶器 壺	5.8	(8.1)	-	胴径 9.4	口縁~ 肩部 完存	灰白色	口縁部内面から外面に鉄釉	肩部に2箇所の耳を貼付。胴部内面は回転ナデで無釉。ロクロ目が顕著に残る。被熱する。	瀬戸・美濃産か 17世紀後半~18世紀前半
3120	B-2区 SD-428	磁器 染付 猪口	9.2	5.9	5.8	-	1/2	白色	透明釉	桶形。外面に柳文の染付。内面は無文。高台内に圏線と「大明年製」の銘。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
3121	B-2区 SD-429	陶器 角皿	-	(1.2)	-	-	1/4	灰白色	透明釉 大きな貫入が入る	畳付に砂付着。	瀬戸・美濃系
3122	B-2区 SD-429	磁器 紅皿	4.4	2.4	2.3	-	1/2	白色	白磁釉	白磁。型打成形。外面に型押による縞文。畳付は釉ハギ。	肥前産か 17世紀後半~18世紀前半
3123	B-2区 SD-429	磁器 変形皿	(7.5)	2.7	(4.9)	-	2/3	灰白色	透明釉	型打成形。外面は無文。内面に型紙摺による文様。高台は貼付。畳付は釉ハギ。被熱する。	肥前産 有田 17世紀末~18世紀
3124	B-2区 SD-429	青花 皿	-	(0.9)	-	-	一部 残存	灰白色	外面は無釉 内面と外面の一部は透明釉	見込に染付。	中国産 漳州窯系 16世紀 ~17世紀初頭
3125	B-2区 SD-430	陶器 猪口	-	(1.0)	3.0	-	底部 完存	灰白色	内面は灰釉	外面は削り出して無釉。高台内に「イモ」の墨書。	-
3126	B-2区 SD-431	陶器 ミニ チュア	全長 (2.5)	全幅 2.7	全厚 0.7	-	3/4	にぶい 橙色	上面と側面は透明釉	蓋形。型成形か。煮炊具の蓋か。下面はナデ。	-
3127	B-2区 SD-431	磁器 染付 小丸碗	8.9	4.5	3.7	-	1/3	灰白色	透明釉	外面に草花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀
3128	B-2区 SD-431	磁器 染付 碗蓋	9.6	2.7	-	摘径 5.4	ほぼ 完存	白色	透明釉	外面に花・扇文と圏線, 内面に寿字と圏線, 摘内は花文と圏線の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前系
3129	B-2区 SD-431	磁器 紅皿	4.8	1.5	1.5	-	ほぼ 完存	灰白色	内面から体部 外面まで 白磁釉	白磁。型打成形。菊花形。高台付近から底部は無釉。	肥前産 19世紀
3130	B-2区 SD-432	陶器 皿	16.6	4.4	9.4	-	1/3	灰白色	内面から高台 まで銅緑釉	口縁部に切り込み。口縁部内面に陰刻の蓮弁文。見込に鉄錆による草花文。底部付近は削り出して無釉。	-

図版番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3131	B-2区 SD-432	磁器 染付 中皿	-	(1.7)	14.0	-	1/5	白色	透明釉	外面に唐草文, 内面に花唐草文と環状の松竹梅文の染付。高台内に銘と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 1750~1780年代
3132	B-2区 SD-432	青磁 香炉または蓋物	11.8	12.9	-	胴径 13.0	1/4	灰白色	青磁釉	口縁部に陽刻文がある把手状のものを貼付。脚は貼付で獸面の陽刻。口縁部内面は釉ハギ。被熱する。	中国産か 14世紀後半~15世紀前半か
3133	B-2区 SD-432	木製品 栓	全長 8.2	全幅 2.6	全厚 2.5	-	完存	-	-	先端を細く加工。板目。	-
3134	B-2区 SD-433	磁器 染付 碗蓋	-	(1.6)	-	摘径 4.3	1/3	白色	透明釉	外面に風景文と圏線, 内面に環状の松竹梅文と圏線の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
3135	B-2区 SD-433	瓦 平瓦	全長 (5.9)	全幅 (5.8)	全高 1.6	-	一部 残存	浅黄橙色	-	側面に「とく□」の刻印。	土佐産 徳王子か
3136	B-2区 SD-434	磁器 染付 角皿	(8.0)	4.1	-	-	1/4	白色	透明釉	型打成形。口縁部外面に唐草文か, 内面に蛸唐草文, 高台に雷文帯の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産
3137	B-2区 SD-434	磁器 染付 碗蓋	10.0	2.5	-	摘径 5.3	1/2	白色	透明釉	口縁部内外面に放射状文, 天井部内面には十字花文の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前系 19世紀
3138	B-2区 SD-435	磁器 染付 皿	-	(2.3)	8.1	-	1/4	灰白色	透明釉	外面に圏線, 口縁部内面に区画文, 見込に五弁花文の染付。高台内に銘。畳付は釉ハギ。重ね焼痕残る。	肥前産 17世紀後葉
3139	B-2区 SD-435	磁器 紅皿	4.0	1.6	1.4	-	完存	灰白色	内面から口縁部外面まで白磁釉	白磁。型打成形。菊花形。	肥前産 18世紀末~19世紀初頭か
3140	B-2区 SD-435	土師質 土器 杯	-	(2.3)	6.9	-	底部 完存	灰白色	-	水挽成形か。回転ナデ。底部は回転糸切り。	-
3141	B-2区 SD-435	土製品 ミニ チュア	全長 (1.9)	全幅 2.5	全厚 0.9	-	1/2	浅黄橙色	-	家屋形。型成形。全面にキラ粉付着。背面は装飾なし。	-
3142	B-2区 SD-436	陶器 丸碗	10.1	7.2	3.7	-	1/4	灰白色	内面から高台付近まで透明釉 貫入が入る	外面に朱色の海老文の上絵付。目の部分のみ灰色。高台付近は削り出しで無釉。	京都・信楽系
3143	B-2区 SD-436	磁器 染付 小碗	-	(2.3)	4.1	-	底部 完存	灰白色	透明釉	見込に紫文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。底部に焼成後外側より穿孔。	肥前産 18世紀
3144	B-2区 SD-436	磁器 変形皿	-	(2.3)	-	-	一部 残存	白色	透明釉	型打成形で扇形か。型紙摺で外面に雷文帯, 見込に風景文。高台は扇形か。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀第2~3四半期
3145	B-2区 SD-436	磁器 染付 広東碗蓋	10.1	3.4	-	摘径 5.9	摘完存 口縁部 1/4	白色	透明釉	摘内に花文, 外面は縞に花文か, 内面に花文と圏線の染付。摘端部は釉ハギ。	肥前系 18世紀後葉~19世紀
3146	B-2区 SD-436	磁器 染付 仏飯器	6.8	5.8	4.3	-	ほぼ 完存	灰白色	透明釉	杯部外面には格子地に菊花文の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半~19世紀初頭
3147	B-2区 SD-436	土師器 焜炉	16.8	15.9	16.2	胴径 20.0	1/2	にぶい 橙色	-	円筒形。切り込みの窓。角状突起と輪状の脚を貼付。胴部には円孔7箇所, 高台には円孔が1箇所あり。	-
3148	B-2区 SD-437	陶器 匣鉢	-	(5.3)	13.4	-	1/4	にぶい 橙色	-	回転ナデで底部外面は無調整。側面に刻書あり。	-
3149	B-2区 SX-419	磁器 染付 鉢	5.4	6.7	5.5	-	5/6	灰白色	透明釉	外面に牡丹文と圏線, 内面に四方禪文, 見込に牡丹の蕾文と圏線の染付。畳付は釉ハギ。	肥前産 18世紀後半
3150	B-2区 SX-419	土師質 土器 皿	11.2	1.7	7.5	-	1/2	灰白色	-	白土器。見込に型押による陽刻の鶴亀文。口縁部内面に墨書。口縁部は横ナデ。底部内外面はナデ。	尾戸窯
3151	B-2区 SX-421	陶器 向付	-	(4.6)	-	-	一部 残存	灰白色	灰釉 内面の一部に 緑釉	方形か。見込と口縁部外面に鉄錆による文様。	瀬戸・美濃系
3152	B-2区 SX-421	陶器色絵 火入または灰吹	9.6	8.3	6.4	-	1/4	にぶい 黄橙色 長石を含む	口縁部内面から高台付近まで灰釉	稜花形。外面に緑色の花文の上絵付。内面は回転ナデ。口縁部内面に煤付着。高台から底部は削り出し。	京都系

遺物観察表86 B-2区

図版 番号	地区 出土地点	器種 器形	口径	器高	底径	最大径	残存率	胎土	釉 薬	調整・文様・特徴	備 考
3153	B-2区 SX-421	磁器 染付 皿	-	(2.6)	9.1	-	1/2	灰白色	透明釉	内外面に菊唐草文と圏線, 高台内に圏線の染付と銘。見込に輪状の重ね焼痕。畳付は釉ハギ。	肥前産 有田 18世紀前半
3154	B-2区 SX-422	瓦 平瓦	全長 (5.8)	全幅 (7.3)	全高 1.7	-	一部 残存	灰白色	-	側面に「トク周」の刻印。	土佐産 徳王子
3155	B-2区 SX-422	金属製品 銭貨	銭径 2.30	孔径 0.90	銭厚 0.11	重量 2.95	完存	-	-	銅製。□□元寶。	-
3156	B-2区 P-427	土師質 土器 小皿	7.5	1.8	3.5	-	2/3	にぶい 橙色	-	回転ナデ。底部は回転糸切り。口縁部の一部に煤付着。	-
3157	B-2区 P-428	土師質 土器 皿	10.2	1.7	6.3	-	1/3	淡黄色	-	白土器。見込に型押による陽刻の「寿」字文。口縁部内外面に煤付着。著しく摩耗するため調整不明瞭。	尾戸窯
3158	B-2区 P-429	陶器 碗	-	(5.4)	-	-	一部 残存	灰黄色	灰釉	内面に白化粧土を刷毛塗り後, 全面に施釉。	-
3159	B-2区 P-430	陶器 輪花皿	14.1	4.0	6.9	-	1/3	灰白色	灰釉	見込に鉄錆による文様。高台内に僅かに砂付着。畳付は釉ハギ。	尾戸窯
3160	B-2区 P-431	瓦 丸瓦	全長 (15.7)	全幅 14.2	全高 3.0	-	1/3	灰白色	-	凸面はナデ, 凹面に絞目とコビキB。径1.4cmの円孔あり。玉縁部に1条の沈線。「アキ卯平」の刻印。	土佐産 安芸
3161	B-2区 P-432	瓦 平瓦	全長 (9.9)	全幅 (7.8)	全高 (1.8)	-	一部 残存	灰色	-	側面に刻印あり。文字は不明。	-

# 写真図版



高知城天守より追手筋遺跡を望む







調査前全景(東より)



B区中央部南壁セクション(北より)



図版2



B-1区北壁セクション(南より)



B-1区中央部北壁セクション(南東より)





A-1区中央部セクション(南より)



A-1区南壁セクション(北より)



図版4



A-1区西壁セクション(東より)



A-2区北壁セクション(南より)





A-1・B区2面遺構完掘状態(南西より)



A-1区2面南西部遺構完掘状態(南西より)





A-1区SB-201完掘状態(南より)



A-1区SB-201, SA-201～203完掘状態(北より)





A-1区SD-201 セクション(南より)



A-1区SD-205完掘状態(西上空より)



図版8



A-1区SD-205完掘状態(北より)



A-1区SG-201完掘状態(西上空より)





A-1区SG-201完掘状態(北西より)



A-1区SG-201完掘状態(北東上空より)



図版10



A-1区SG-201完掘状態(南西より)



A-1区SG-201西部完掘状態(北西より)





A-1区SG-201州浜検出状態(南より)



A-1区SG-201南部石積検出状態(北より)



図版12



A-1区SG-201 セクション(西より)



A-1区SX-201中央セクション(北西より)





A-1区SX-201遺物出土状態(北東より)



A-1区SX-301遺物出土状態(北東より)





A-1区4面遺構検出状態(南より)



A-1区SD-401石列検出状態(南より)





A-1区SE-401半裁状態(南より)



A-1区SB-501検出状態(西より)





A-1区SB-501検出状態(東より)



A-1区SD-501完掘状態(北より)





A-1区SD-501基礎検出状態(北より)



A-1区SD-501セクション(南より)





A-2区2面遺構完掘状態(東より)



A-2区SG-202西部石積検出状態(東より)





A-2区SG-202石積改修部検出状態(南より)



A-2区4面遺構完掘状態(東より)





A-2区SB-401完掘状態(東より)



B-1区2面南東部遺構完掘状態(西より)





B-1区SK-222集水桶完掘状態(西より)



B-1区SK-222集水桶と竹樋検出状態(南西より)





B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(東より)



B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(東より)





B-1区SK-232完掘状態(南西より)



B-1区SK-232集水桶継手(2036)検出状態(南より)



図版24



B-1区SK-232集水桶継手(2037)検出状態(南より)



B-1区SK-232桶側検出状態(南より)





B-1区SD-213～215完掘状態(西より)



B-1区SD-213・214セクション(西より)





B-1区SD-215完掘状態(東より)



B-1区SD-215完掘状態(東より)





B-1区SD-215完掘状態(西より)



B-1区SD-215東部セクション(西より)





B-1区SD-215西部セクション(東より)



B-1区SD-215杭列検出状態(北東より)





B-1区SE-201桶検出状態(北西より)



B-1区SE-202完掘状態(西より)





B区SX-213検出状態(北より)



B-1区3面北部遺構検出状態(西より)





B-1区3面北部遺構完掘状態(西より)



B-1区3面北部遺構完掘状態(南東より)





B区3面南東部遺構検出状態(北西より)



B区3面南東部遺構完掘状態(西より)





B-1区3面遺構検出状態(東より)



B区3面遺構完掘状態(東より)





B-1区SB-403完掘状態(南より)



B-1区SE-301半裁状態(南より)





B-1区SE-302石組検出状態(南東より)



B-1区SE-302半裁状態(南より)





B-1区SE-303石組検出状態(北より)



B-1区SG-301完掘状態(南より)





B-1区SG-301完掘状態(北より)



B-1区SX-307・308完掘状態(西より)





B-1区SX-307・308完掘状態(南より)



B区4面中央部遺構検出状態(南より)





B区4面東部遺構検出状態(東より)



B区4面南東部遺構完掘状態(西より)





B-1区4面北部遺構検出状態(西より)



B-1区4面南東部遺構検出状態(西より)





B-1区4面北部遺構検出状態(南東より)



B-1区4面北部遺構完掘状態(南東より)



図版42



B-1区SD-406完掘状態(南西より)



B-1区SD-410, SG-402完掘状態(西上空より)





B-1区SD-410完掘状態(北より)



B-1区SD-410石積検出状態(南西より)





B-1区SD-410, SG-402結合部完掘状態(東より)



B-1区SD-412完掘状態(西上空より)





B-1区SG-402完掘状態(東より)



B-1区SG-402完掘状態(南東より)





B-1区SG-402西部石積検出状態(西上空より)



B-1区SG-402西部石積検出状態(南より)





B-1区SG-402北西部石積検出状態(南東より)



B-1区SG-402北西部石積検出状態(南東より)





B-1区SG-402北西部石積検出状態(南より)



B-1区SG-402北西部石積検出状態(東より)





B-1区SG-402北東部石積検出状態(西より)



B-1区SG-402杭跡検出状態(南西より)





B-1区SD-412, SG-402結合部検出状態(西より)



B-1区SD-412, SG-402結合部完掘状態(南西より)





B-1区SG-402南部石積検出状態(北より)



B-1区SG-402南部石積検出状態(東より)





B-1区SX-409完掘状態(東より)



B-1区SX-414・415木材出土状態(東より)





B-1区SX-414木堀出土状態(南より)



B区SD-506完掘状態(北東より)



図版54



B-2区SD-315～317・507完掘状態(東より)



B-2区SD-315・436・507完掘状態(北西より)





A-1区木製品漆器碗(78)出土状態(第Ⅱ層より)



A-1区磁器皿(94)出土状態(第Ⅲ-2層より)



A-1区SA-201石製品石幢(1001)出土状態



A-1区SD-201磁器大皿(1063)と下駄出土状態



A-1区SD-201木製品漆器碗(1087)出土状態



A-1区SD-201木製品漆器蓋(1089)出土状態



A-1区SD-201木製品木簡(1133)出土状態



A-1区SD-201木製品漆器碗出土状態





A-1区SD-201土師質土器皿出土状態



A-1区SD-204木製品調度品(1148)出土状態



A-1区SD-205セクション(北より)



A-1区SX-201東部セクション(西より)



A-1区SX-201西部セクション(西より)



A-1区SX-201陶器皿(1190),下駄出土状態



A-1区SX-201陶器播鉢(1196)出土状態



A-1区SX-201木製品漆器碗(1208)出土状態





A-1区SK-301磁器碗(1235)・猪口(1236)出土状態



A-1区SD-301木製品曲物出土状態



A-1区SX-301セクション(南より)



A-1区SX-301木製品蓋(1275)出土状態



A-1区SX-301土師質土器皿出土状態



A-1区SX-301木製品籠出土状態



A-1区SK-407・408セクション(東より)



A-1区SK-416セクション(東より)





A-1区SK-416遺物(1300・1301・1303)出土状態



A-1区SD-401北部セクション(南より)



A-1区SE-401桶側出土状態(北より)



A-1区SX-403木製品木簡(1343)出土状態



A-1区SX-403木製品曲物出土状態



A-1区SX-405漆器碗(1371)出土状態



A-1区SX-406木製品枱出土状態



A-1区SX-504遺物出土状態(北より)





A-1区SK-505磁器大皿(1410)ほか出土状態



A-1区近代ピット石出土状態(南より)



A-2区SG-401完掘状態(南より)



A-2区SG-401 セクション(北より)



A-2区SG-401陶器皿(1503)出土状態



A-2区ピット土師質土器皿出土状態



B-1区SK-210柱根・礎板検出状態(南東より)



B-1区SK-210柱根検出状態(南より)





B-1区SK-211 セクション(東より)



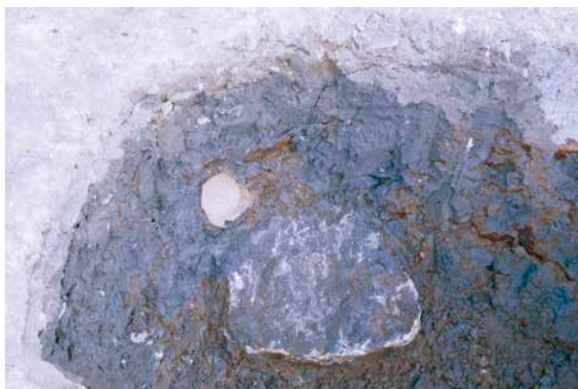
B-1区SK-212 セクション(南より)



B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(南より)



B-1区SK-222より伸びる竹樋検出状態(南より)



B-1区SK-222陶器皿(2022)出土状態



B-1区SK-222継手(2023)出土状態(南西より)



B-1区SK-227~229, SX-212完掘状態(北より)



B-1区SK-227陶器皿(2030)出土状態





B-1区SK-232掘方完掘状態(西より)



B-1区SK-232桶出土状態(南西より)



B-1区SK-232桶側出土状態(南より)



B-1区SK-232継手(2038)出土状態(南より)



B-1区SK-232継手(2036)出土状態(南より)



B-1区SD-208セクション(西より)



B-1区SD-210セクション(南より)



B-1区SD-210継手出土状態(南より)





B-1区SD-213土師質土器小皿出土状态



B-1区SD-215木製品木簡(2111)出土状态



B-1区SD-215木製品木簡(2113)出土状态



B-1区SD-215磁器大皿(2129)出土状态



B-1区SD-215木製品木簡(2139)出土状态



B-1区SD-215陶器甕(2070)出土状态



B-1区SD-215木製品曲物出土状态



B-1区SD-215漆器碗出土状态





B-1区SD-215木製品漆器碗出土状態



B-1区SD-215木製品籠出土状態



B-1区SD-215縄出土状態



B-1区SX-209・210セクション(南より)



B-1区SX-213木製品下駄(2146)出土状態



B-1区P-206土師質土器皿(2152・2153)出土状態



B-1区P-211継手と竹樋検出状態(南東より)



B-1区P-211継手(2158)出土状態





B-1区P-216木製品櫛(2163)出土状態



B-1区P-223陶器皿(2170・2171)出土状態



B-1区P-223土師質土器皿(2172・2173)出土状態



B-1区SK-309セクション(南より)



B-1区SK-327セクション(西より)



B-1区SK-330完掘状態(東より)



B-1区SK-330セクション(西より)



B-1区SK-330陶器碗, 曲物蓋(2259)出土状態





B-1区SK-330木製品曲物出土状態



B-1区SK-331セクション(東より)



B-1区SK-332陶器大皿(2270)出土状態



B-1区SK-339木製品木簡(2310)出土状態



B-1区SK-341完掘状態(北より)



B-1区SD-304セクション(南より)



B-1区SD-305セクション(南より)



B-1区SD-307蓆出土状態





B-1区SD-309セクション(南より)



B-1区SD-310セクション(南より)



B-1区SG-301セクション(東より)



B-1区SG-301, SX-310セクション(西より)



B-1区SX-304セクション(東より)



B-1区SE-301桶側検出状態(北より)



B-1区SX-309セクション(西より)



B-1区SX-309木製品木筒(2389)出土状態





B-1区SX-314セクション(西より)



B-1区SX-314陶器甕(2402)出土状態



B-1区SX-317土師質土器皿出土状態



B-1区SX-317木製品曲物出土状態



B-1区SX-320木製品御敷出土状態



B-1区SB-403南東隅柱穴検出状態(北より)



B-1区SB-403南東隅柱根検出状態(西より)



B-1区SB-403東側柱礎板検出状態(東より)





B-1区SB-403南妻柱礎板検出状態(南より)



B-1区SB-403西側柱礎板検出状態(東より)



B-1区SB-403西側柱礎板検出状態(南東より)



B-1区SK-427磁器蓋(2472)出土状態



B-1区SK-429木製品木簡(2481)出土状態



B-1区SK-429木製品(2482～2484)出土状態



B-1区SK-431木製品木簡・柄杓出土状態



B-1区SK-433木製品木簡(2501)出土状態





B-1区SK-454セクション(西より)



B-1区SK-455セクション(南より)



B-1区SD-405木製品継手出土状態(南より)



B-1区SD-406セクション(南より)



B-1区SD-408杭痕検出状態(東より)



B-1区SD-410東部石積検出状態(南より)



B-1区SD-410杭痕検出状態(北より)



B-1区SD-410セクション(南より)





B-1区SD-412完掘状態(北東より)



B-1区SD-413完掘状態(北より)



B-1区SD-414板出土状態(西より)



B-1区SD-423遺物(2624・2631)出土状態



B-1区SD-425完掘状態(北より)



B-1区SD-425セクション(南より)



B-1区SG-402掘方セクション(西より)



B-1区SG-402土師質土器小皿(2719)出土状態





B-1区SG-402木製品漆器蓋(2786)出土状態



B-1区SX-408セクション(南より)



B-1区SX-408木材出土状態(南より)



B-1区SX-411セクション(南より)



B-1区SX-414ソダ出土状態(北より)



B-1区SX-415セクション(東より)



B-1区SX-414木製品漆器蓋(2844)出土状態



B-1区P-407磁器皿(2896)出土状態





B-1区P-409陶器壺(2900)出土状態



B-1区P-412土師質土器(2903～2905)出土状態



B-1区P-424遺物出土状態



B-1区P-426遺物出土状態



B-1区SB-502,SD-501石列出土状態(南西より)



B-1区SD-505石列検出状態(西より)



B-1区SK-515セクション(北より)



B-1区SD-501基礎検出状態(西より)





B-1区SD-501焼夷弾出土状態



B-1区SD-505石列検出状態(北より)



B-1区SD-505石列完掘状態(北西より)



B-1区SD-507西部南面石列検出状態(北東より)



B-1区SD-508完掘状態(北より)



B-1区SE-501木蓋検出状態(北より)



B-1区SE-501木筒検出状態(北より)



B-1区P-506柱根出土状態(南より)



図版74



B-1区P-506陶器火鉢(3008)出土状態



B-2区SX-326完掘状態(東より)



B-2区SX-326木製品漆器椀(3085)出土状態



B-2区SX-327セクション(西より)



B-2区ピット埋桶検出状態(西より)



B-2区SK-462完掘状態(東より)



B-2区SK-462セクション(西より)



B-2区SD-426石列検出状態(南東より)





B-2区SD-428石検出状態(東より)



B-2区SD-432磁器(3132)出土状態



B-2区SD-435遺物出土状態



B-2区SD-436石検出状態(西より)



B-2区SD-436完掘状態(南より)



B-2区SD-436石列出土状態(西より)



B-2区SX-420炭化米出土状態



B-2区P-430陶器輪花皿(3159)出土状態



1190

軟質施釉陶器(色絵皿)



1393

陶器(枕)





磁器(鉢)



磁器(鉢)



磁器(鉢)



瓦(軒丸瓦)





2113

木製品(木簡)



陶器・磁器・土製品(ミニチュア)



土師器(焜炉)



土製品(泥面子)



陶器(枕·花瓶), 石製品(石幢), 木製品(集水桶継手)



陶器(壺), 磁器染付(輪花皿・大皿・文鎮), 陶胎染付(瓶)





陶器(皿), 磁器(色絵小皿・染付中皿・染付輪花大皿), 土師器(焜炉)



陶器(皿·四耳壺·甕), 磁器(染付瓶), 五彩(大皿), 木製品(箱物)



1402



1402



1408



1410



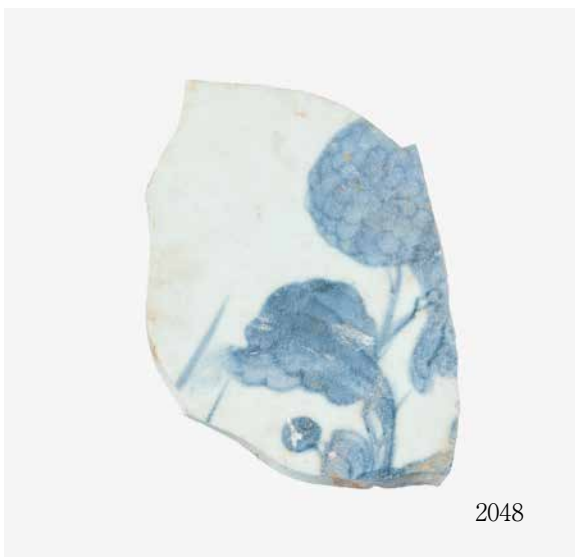
1419



1421

陶器(蓋物蓋), 磁器染付(皿·稜花大皿), 西洋陶器(稜花皿), 土師器(焜炉)





陶器(人形), 磁器染付(皿・中皿・三足香炉・植木鉢), 瓦質土器(焜炉)





陶器(碗·皿·波綠皿·甕), 磁器(三足香炉), 木製品(桶蓋)



陶器(小皿), 磁器染付(うがい茶碗・六角皿), 土師器(焙烙), 瓦質土器(焜炉), 木製品(木筒)



陶器(中皿・火鉢), 磁器(染付油壺), 土師質土器(皿), 木製品(木筒・漆器蓋物)



陶器(中皿・水注・秉燭), 土師質土器(皿), 木製品(木簡)





2844



2865



2877



2893



2900



2914

陶器(壺), 磁器(染付壺), 陶胎染付(瓶), 土師質土器(皿), 木製品(漆器椀蓋・木筒)



陶器(台付灯明皿・火鉢), 磁器(染付皿・色絵皿), 青花(瓶・鉢)



3049



3119



3128



3132



3142



3146

陶器(丸碗・壺), 磁器染付(皿・碗蓋・仏飯器), 青磁(香炉または蓋物)



陶器(丸碗・蓋), 磁器(染付小丸碗・染付角皿・色絵輪花皿・染付輪花杯・色絵猪口)





130



140



166



195



206



207

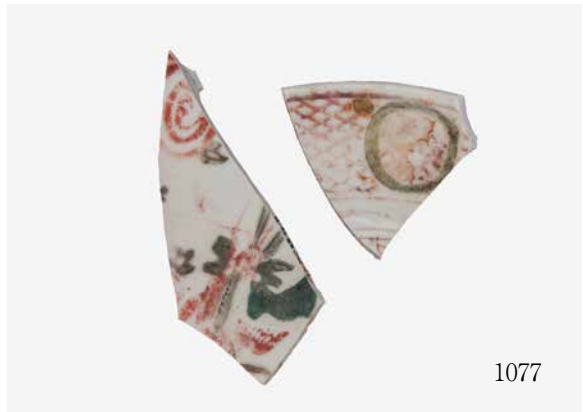


208



208

陶器(小丸碗・鉢), 磁器染付(輪花皿・大皿), 青花(皿), 軟質施釉陶器(向付)



陶器(天目碗), 磁器(染付碗·染付大皿·色絵皿·三足大皿), 青花(碗), 五彩(大皿)



1080



1084



1087



1091



1106



1127



1147



1170

陶器(向付), 磁器(染付碗), 白磁(小壺), 土師器(焼塩壺), 木製品漆器(椀・蓋)



陶器(碗), 磁器染付(碗・小丸碗・猪口), 土師質土器(皿), 石製品(硯)





1308



1320



1322



1371



1384



1404



1437



1444

陶器(碗·蓋物·花生·土瓶), 土師器(燒塩壺), 土製品(人形), 木製品(漆器碗)



2005



2022



2025



2026



2032



2038

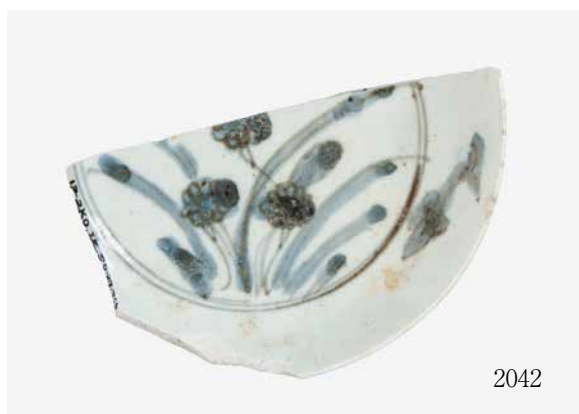


2041



2041

陶器(天目形碗・波縁皿・皿・播鉢), 磁器(染付中皿), 木製品(継手)



2042



2043



2079



2081



2118



2119

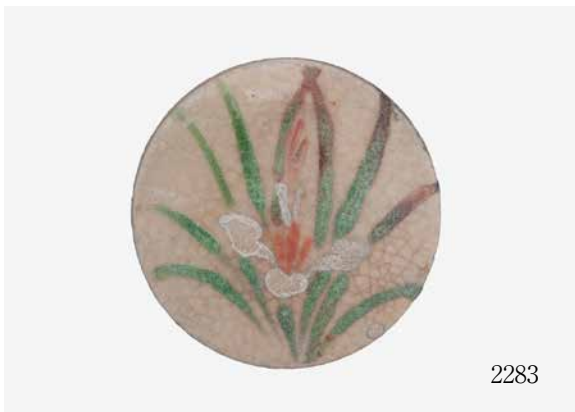


2129



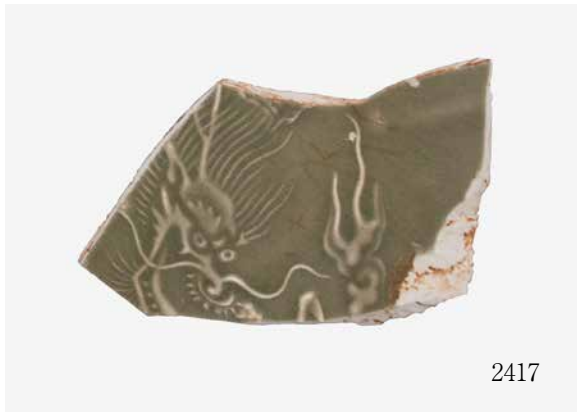
2145

陶器(碗・皿), 磁器(染付皿・色絵大皿), 青花(皿), 青磁(碗), 土師質土器(皿), 土師器(焼塩壺)



陶器(色絵半球形碗・皿・大皿・向付・合子蓋), 陶胎染付(碗), 土製品(人形), 木製品(継手)





陶器(筒形碗・人形), 磁器(中皿), 青磁(鉢), 土師器(火入), 木製品(漆器柄杓・桶蓋)



2491



2524



2535



2560



2589



2596



2619

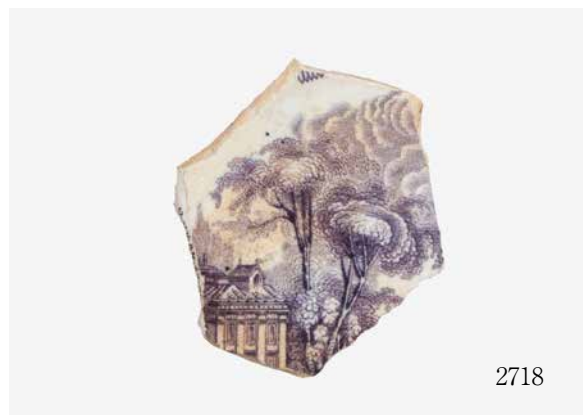
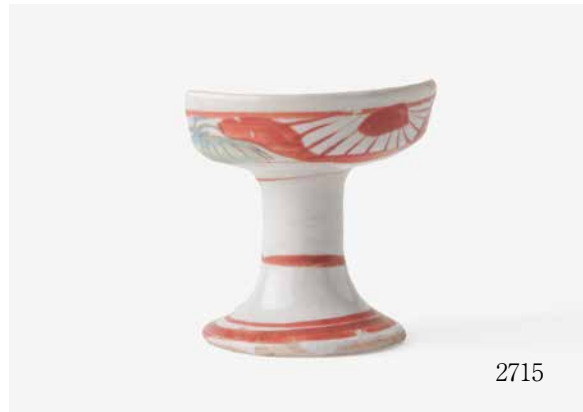


2636

陶器(碗・丸碗・色絵小碗・皿・皿または蓋物・挿鉢・火鉢・カンテラ)



陶器(碗・鉢・色絵鉢), 磁器染付(朝顔形碗・小広東碗・皿・碗蓋), 土製品(人形)



陶器(色絵鉢), 磁器(染付杯・色絵仏飯器・染付灯芯押え), 西洋陶器(皿), 土師器(火鉢・鑄型)





2810



2810



2829



2834



2845



2857



2857



2862

陶器(耳壺・色絵人形), 磁器(染付丸碗), 西洋陶器(稜花小皿), 土製品(人形), 貝製品(杓子)



2866



2867



2873



2876



2882



2919



2924



2953

陶器(丸碗・半球形碗), 磁器(染付広東碗・色絵蓋物), 軟質施釉陶器(稜花鉢), 土製品(ミニチュア)など



陶器(丸碗·半球形碗·皿·大皿·漉瓶), 磁器(染付丸碗), 金属製品(錢貨)



3041



3048



3051



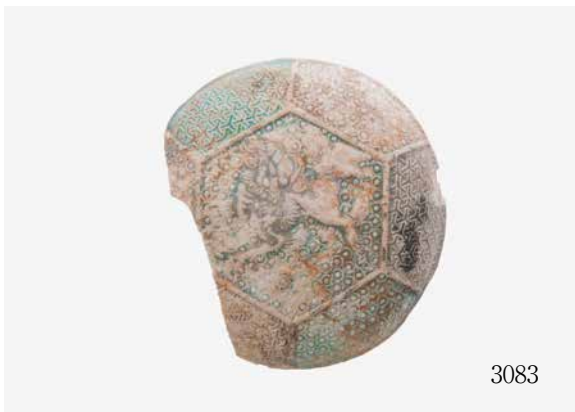
3052



3069



3073



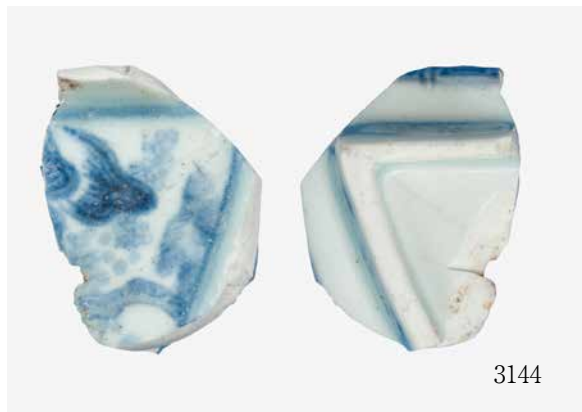
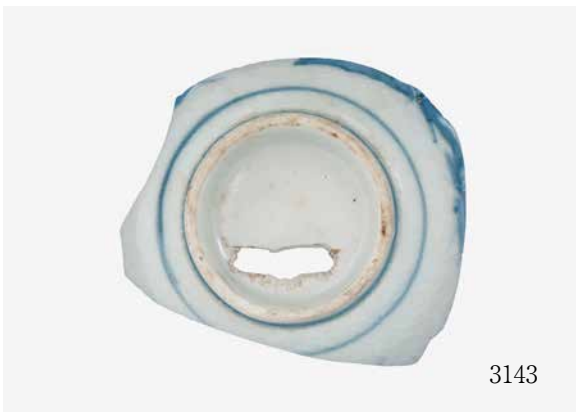
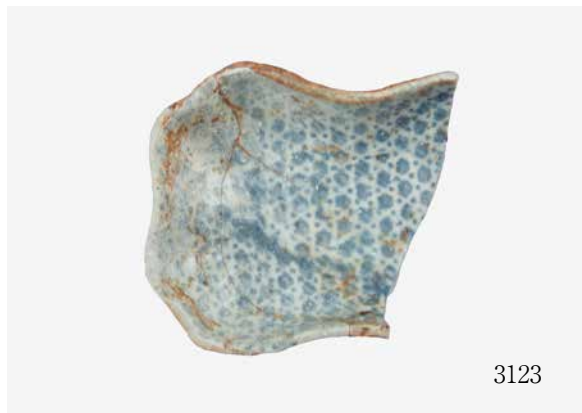
3083



3093

陶器(丸碗・鉢・台), 磁器(染付小碗・色絵合子蓋・染付猪口), 土製品(人形)

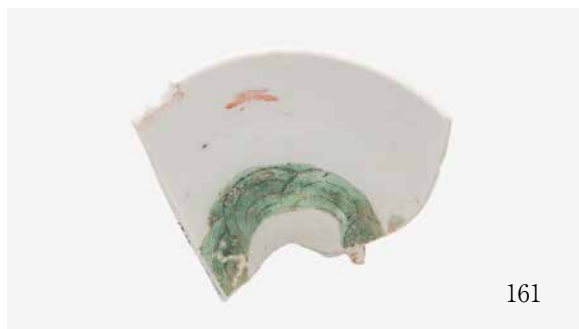




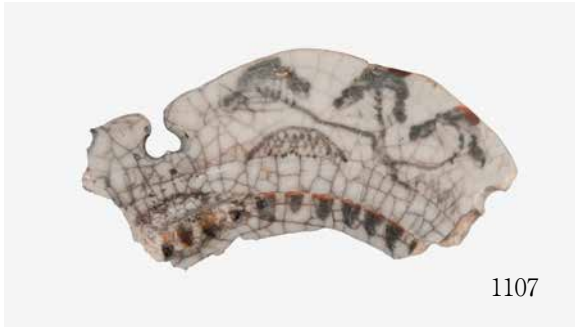
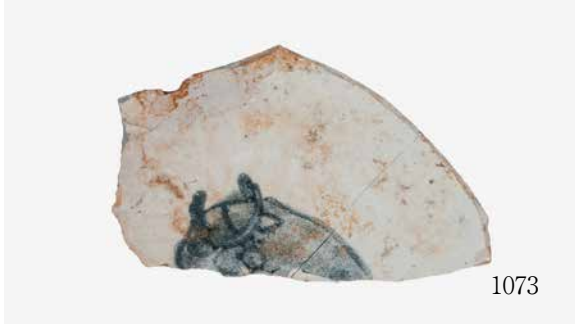
陶器(碗・丸碗), 磁器(染付小碗・変形皿), 土製品(鳩笛)



陶器(鉢), 磁器色絵(小碗), 青花(中皿), 土製品(人形), 木製品(椀), 骨角製品(篋), 金属製品(匙)など



陶器(色絵碗), 磁器(色絵小杯), 青花(大皿), 須恵器(杯), 瓦(軒平瓦), 土製品(人形), 金属製品(簪)など



陶器(波縁皿・向付), 磁器(染付辰砂碗), 青花(碗・皿・大皿), 白磁(小皿), 木製品漆器(椀・蓋)





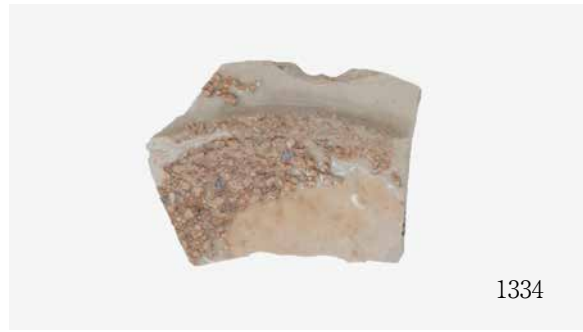
陶器(大皿·向付), 磁器染付(皿·小皿·大皿), 木製品(漆器碗·匙·剝物·櫛·将棋駒)



陶器(向付), 磁器染付(皿), 青花(碗), 五彩(皿), 土師器(焼塩壺蓋), 木製品漆器(椀), 金属製品(刀子)など



陶器(乗燭), 磁器(色絵碗), 青花(皿), 軟質施釉陶器(皿), 土師質土器(皿), 木製品(蓋), 骨角製品など



陶器(菊皿・灯明受皿), 磁器(色絵紅猪口), 五彩(皿), 土製品(人形), 石製品(基石), 木製品(漆器椀)など



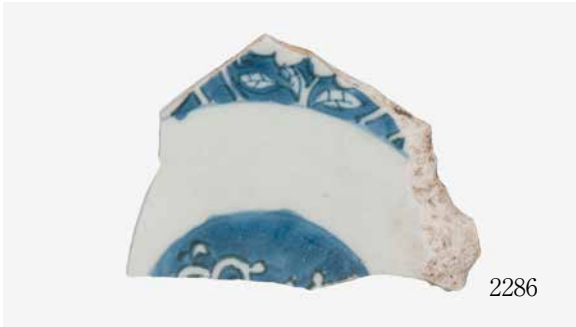
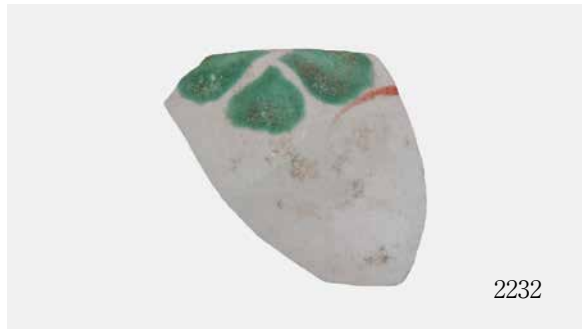


陶器(向付・蓋物), 磁器(染付皿・色絵稜花皿), 土師器(焙烙), 土製品(面型・ミニチュア)など

図版120



陶器(皿・溝縁皿・菊皿・向付), 磁器(染付皿・大皿), 木製品漆器(椀・折敷・匙), 金属製品(小柄)



陶器(色絵碗・色絵半球形碗・皿), 青花(皿), 土師質土器(皿), 石製品(鑄型), 木製品(曲物蓋・漆器刷毛)



磁器(色絵大皿・色絵碗蓋・根付), 青花(碗・小碗), 軟質施釉陶器(碗・角皿), 土製品(人形), 木製品(不明)

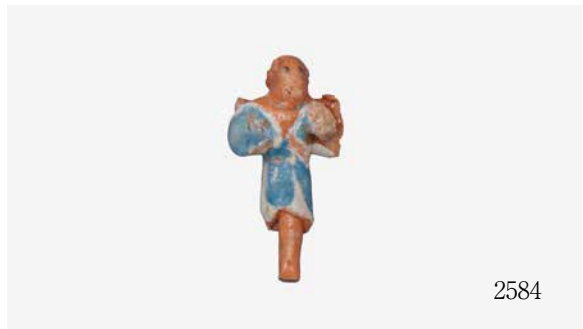




陶器(色絵皿), 磁器(色絵猪口), 青磁(皿), 石製品(茶臼・鋳型), 木製品(漆器栓), 金属製品(蓋)など



陶器(色絵碗), 磁器(色絵碗蓋), 青花(大皿), 土製品(人形), 石製品(数珠玉), 木製品(漆器櫛)など



陶器(碗・碗蓋・油壺), 磁器(色絵丸碗・染付碗蓋・色絵段重), 土製品(人形・泥面子・芥子面)



陶器(色絵蓋物蓋・鉢・灯明受皿・ミニチュア), 磁器(染付碗蓋・染付皿・染付合子蓋), 青磁(大皿)など





陶器(色絵碗), 磁器(色絵皿), 青花(碗), 土製品(人形), 骨角製品(櫛払), 金属製品(鋏)など



陶器(色絵碗・水盤), 磁器(色絵小碗・染付皿), 陶胎染付(釜形), 青花(皿), 土製品(人形)など



陶器(輪花皿), 磁器(染付合子), 青花(皿), 瓦質土器(焙烙), 土製品(ミニチュア・型)など

図版130



陶器(色絵火入または灰吹), 磁器(皿), 青花(皿), 軟質施釉陶器(乗燭), 土師質土器(小皿), 土製品(鈴・型)など





木製品(木簡)



木製品(木簡)



2107



2136



2138



2310



2355



2389



2475



2501

木製品(木簡)



木製品(木簡)





木製品(木簡)



木製品(木簡)



木製品(木簡)



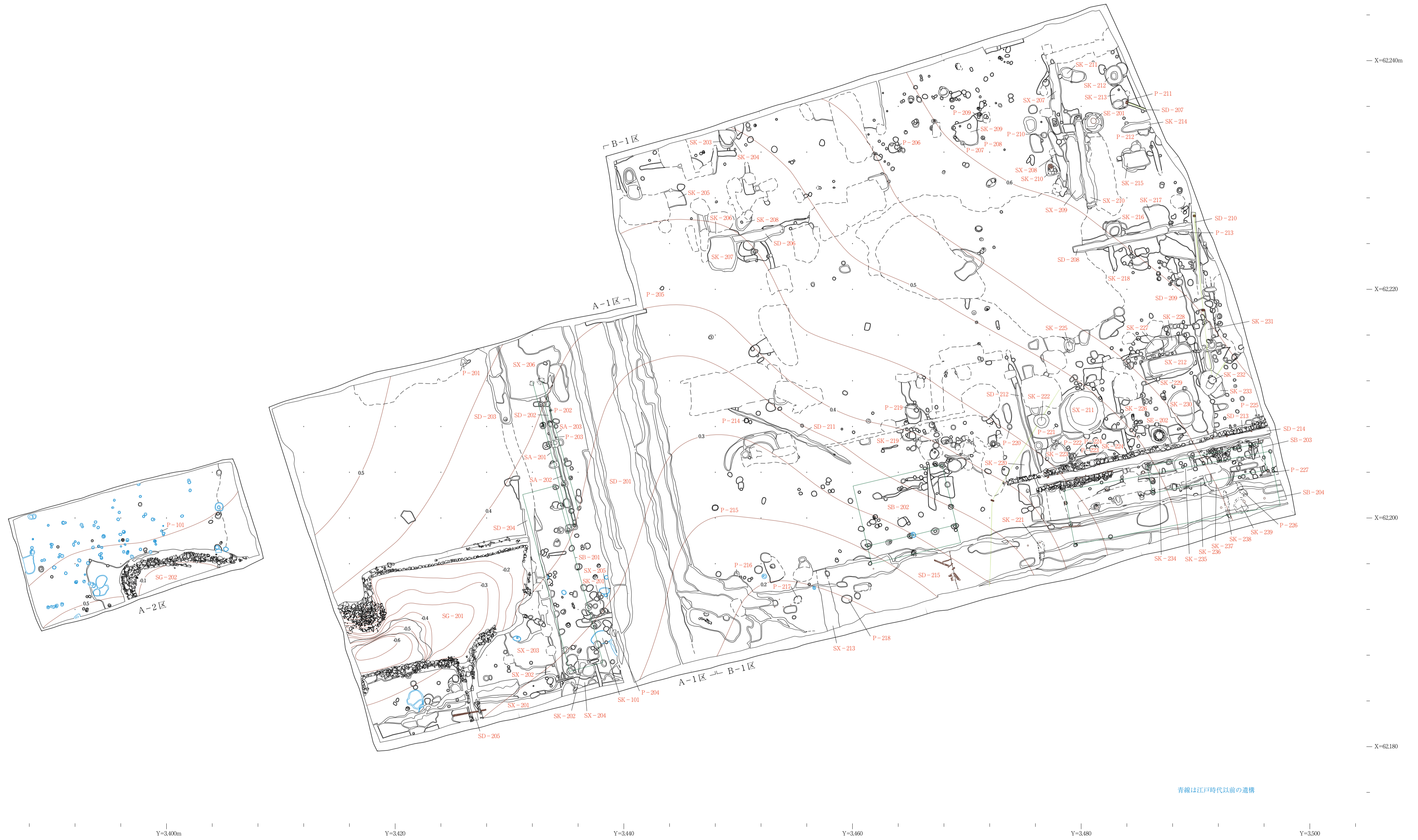
木製品(木簡)



## 報告書抄録

ふりがな		おおてすじいせき						
書名		追手筋遺跡						
副書名		新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第145集						
編著者名		徳平涼子						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2015年12月18日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおてすじいせき 追手筋遺跡	〒780-0841 高知県高知市 追手筋二丁目 1番12号	392014	000172	33° 33′ 39″	133° 32′ 14″	2013.8.5 ) 2014.2.6	3,600㎡	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
追手筋遺跡	武家屋敷	中世 近世	掘立柱建物跡 10棟 塀・柵列跡 4列 土坑 307基 溝跡 148条 井戸跡 7基 池跡 5基 上水施設 2基 性格不明遺構 149基	陶器 磁器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 青磁 白磁 青花	絵図に描かれた居住者の名前が書かれた木簡が出土。江戸時代の武家屋敷に伴う池跡や上水施設が確認されている。			
要約	<p>高知城跡追手門より伸びる追手筋に面した武家屋敷跡で、江戸時代の絵図によると概ね二つの屋敷が存在し、家老である山内家や百々家、藩医である村田家が居住していたとされる。</p> <p>調査で確認した遺構・遺物は江戸時代のものが大半を占めるが、一部では14～15世紀のピットや遺物が出土している。近世の遺物は江戸時代初頭から幕末までの陶磁器や木製品が多量に出土しており、中でも約200点を数える木簡の出土は県内最多である。木簡の多くは荷札木簡で、その中には「百々出雲」「山内蔵人」「村田」といった絵図に記載されていた名前が書かれた木簡もあり、絵図に書かれていた人物が実際に居住していたことも判明している。さらに、桶や竹樋を用いた江戸時代の上水施設が確認されたほか、全国的にも類例が少ない武家屋敷に伴う池跡が確認されている。</p>							

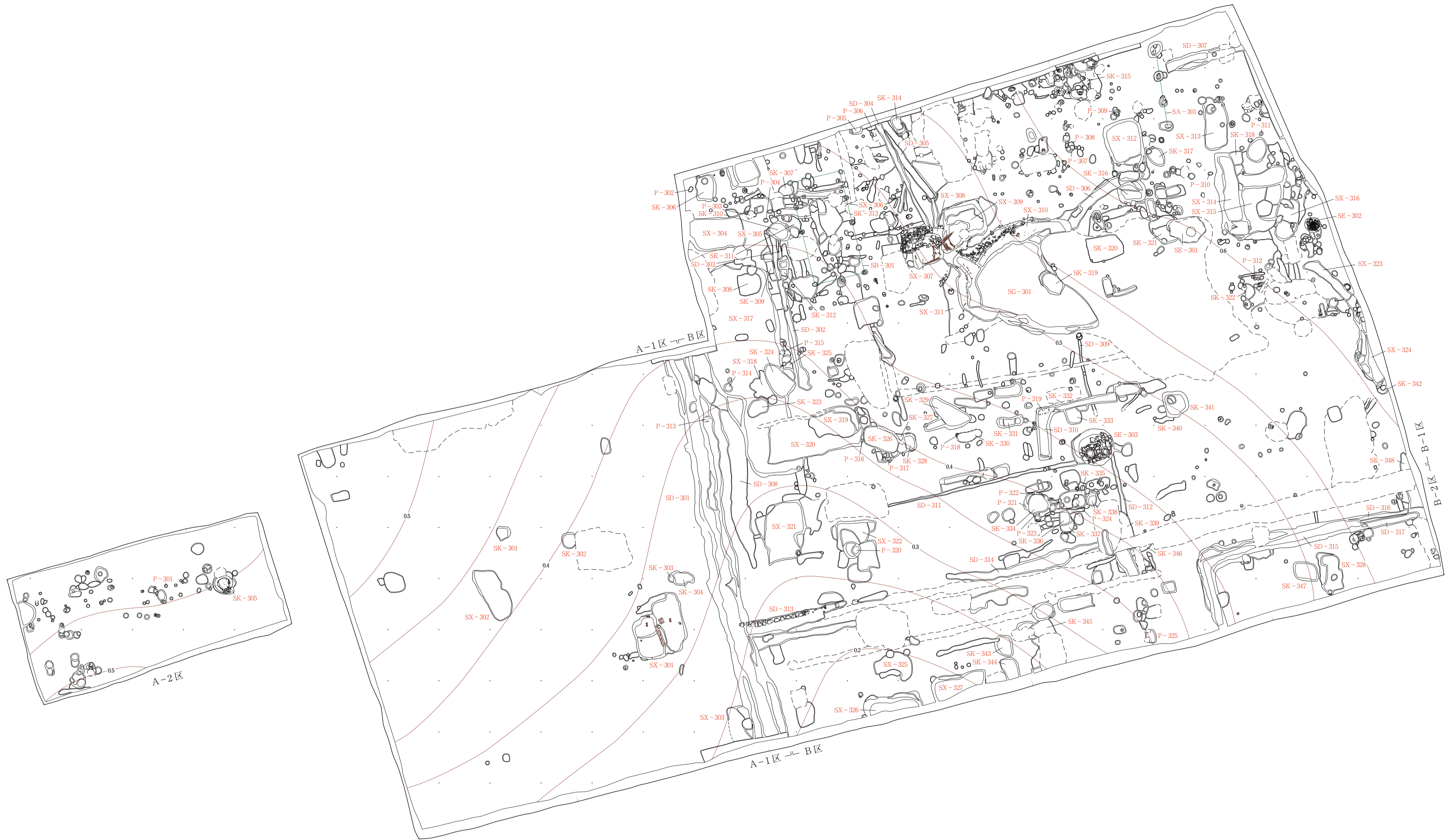




青線は江戸時代以前の遺構

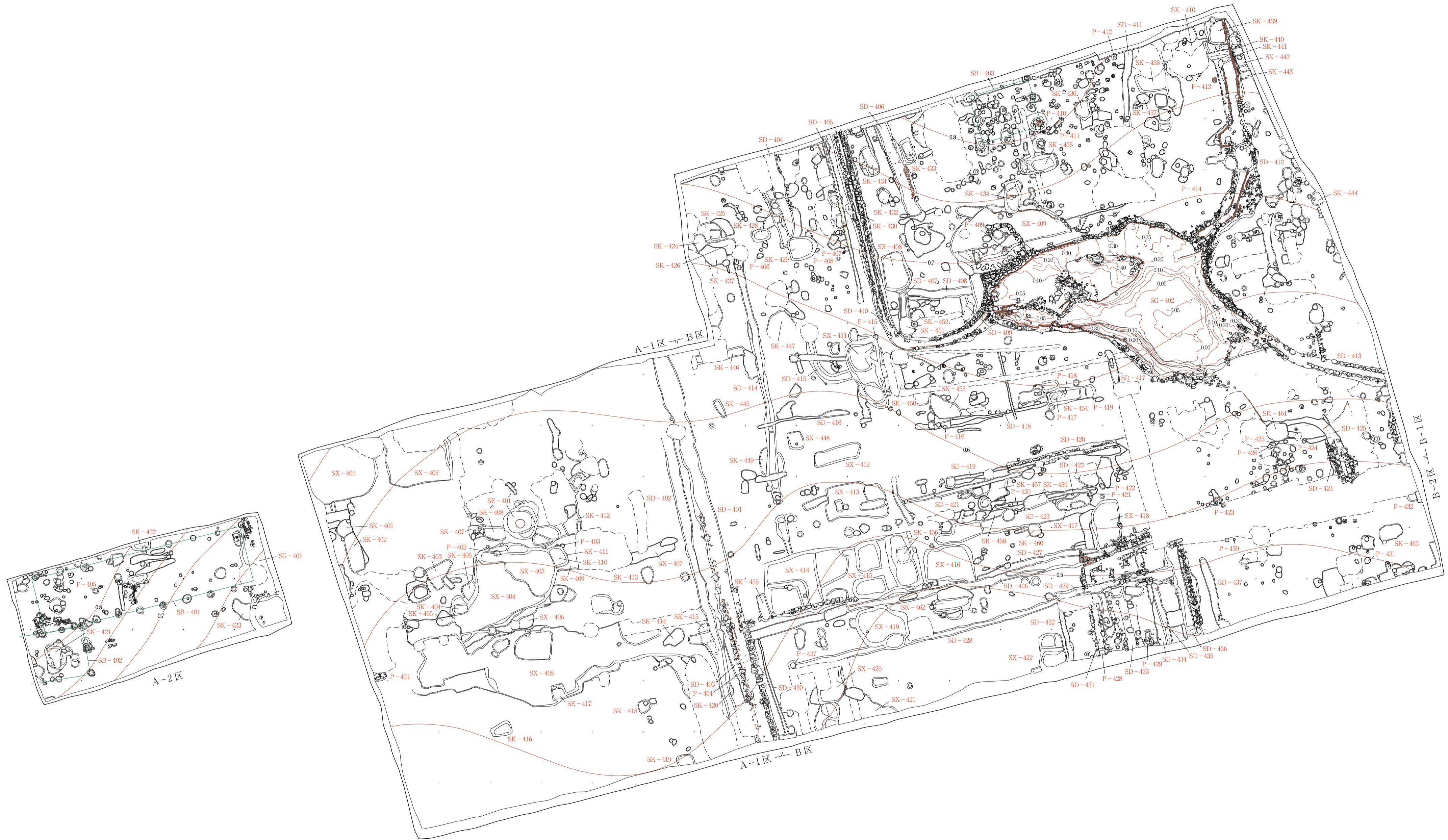
付図1 追手筋遺跡1・2面遺構平面図 (S=1/200)





付図2 追手筋遺跡3面遺構平面図 (S=1/200)





Y=3400m

Y=3420

Y=3440

Y=3460

Y=3480

Y=3500

X=62240m

X=62220

X=62200

X=62180

付图3 追手筋遺跡4面遺構平面図 (S=1/200)





付図4 追手筋遺跡5面遺構平面図 (S=1/200)



■ 改修時の石積

付図5 追手筋遺跡B-1区4面SG-402平面図 (S=1/80)

遺構埋土  
 I. 黄褐色 (10YR5/6) 砂礫で、瓦片を多く含む  
 II. 褐色 (10YR4/1) 粘土質シルトで、焼土と炭化物を多く含む (埋土層)

遺構埋土  
 1. にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトで、1-3cm大の礫を含む (石積層)  
 2. にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルトで、3-5cm大の礫を含む (石積層)  
 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土で、炭鉄がみられる  
 4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂質シルトで、2cm大の礫と炭化物を含む  
 5. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土で、炭鉄がみられ中粒砂を含む  
 6. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土で、炭鉄がみられ植物片を含む  
 7. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗粒砂質シルトで、2-5cm大の礫を含む

本書作成データ

システム：MacOS X (10.8.5)

ソフト：Adobe Photoshop®13.0.6, Adobe Illustrator®16.0.4, Adobe InDesign®8.0.2など

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times Italic

データ：すべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集

## 追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書

2015年12月18日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 (有)西村謄写堂

高知県高知市上町1丁目6-4

Tel. 088-822-0492(代)